世界とISと名もなき者へ

葵　束

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界とＩＳと名もなき者へ

【Ｎコード】
Ｎ５４７５Ｓ

【作者名】
葵　束

【あらすじ】
銀の長い髪に赤目の女性っぽい主人公。
名前を捨て生き続けた道の先には、生涯大切な二つのモノがあった。
一つはフリーダムと言う、青き翼の天使。
もう一つは天才であり孤独な、篠ノ之束という女性。

……二人は長い様で短い時間を過ごし、白騎士事件という世界を大きく変える事件を引き起こした。

世界中が束を狙う中、名もなき者は……。

……束から与えられたリリィという名を持つ者は、フリーダムを手に愛する者を……。

そして、その者の願いを守れるのだろうか？

※毎日更新しております。

※ＩＳに似たような形でＣ．Ｅ．系統のＭＳが出ます。
ＳＥＥＤとはいっても機体だけですので、一部の方ご安心ください。

※リメイクを予定しているため、誤字修正がほぼありません。

※日常に他作品ネタも混じりますが、数話で消えます。

※「魔法……少女？（↑ここ大事）リリカル束……始まります。」

……嘘ですよ。
あながち間違ってもないけど、あってもいません。

しつこいようですが、これはインフィニット・ストラトスのお話です……はい。

プロローグ（前書き）

更新不定期作品です。

後は、あとがきでダラダラ言い訳を書かせていただきます。

すでに何を書いてるか、訳が分からない文体ですが……。

では、駄作をどうぞ……と言っても、そんなに文字数ないですけどね。

プロローグ

ある人は言った。

人は生まれながらにして一人だ、と。

ある人は言った。

人は一人だからこそ、家族と言う物がある。

ある人は言った。

人がいるから他人がいる、と。

ある人は言った。

人がいるから、世界がある、と。

だが私は言った。

「世界があっても、他人がいても、家族がいても……私は一人だ……。」

それはただの言葉。

子供の戯言。

だが、その言葉を放った人は至って真面目。

腰までかかる長い銀の髪。

日本人なのに、銀の髪。

それを束ねる養子は、可愛らしい少女の顔。

肌は雪のように白く、その顔にある目は血のように赤い。

7歳前後だろうか。

一見、ロシア系の外国人と思えるが……まぎれもなく日本人。

だが、少女に名前はない。

いや、少女のように見える人間には名前がない。

幼いころに、親を失い。

家を失い。

名前を失い。

記憶を失い。

それが代償かのように……。

世界はその者に、等価交換を与えた……。

いや……。

等価交換の代償を持って行った。

世界は彼女に、最高の頭脳と最高の身体能力、最高の洞察眼に最高の身体。

それを与えられた者は、すでに人とは思えない人間だった。

生まれてから数時間内には、歩行ができ。

その数日後には言語を発した。

その者を生んだ親も、驚くだろう。

しかし、その親も5年後にはこの世を去った。

子供は難を逃れ、ただ一人生き残った。

いまさらながら子供は気がつく。

これが代償なのだと……。

親を失い、帰る場所を失う……その事が。

子供はただ歩いた。

警察に駆け込んだが、子供だからと言われ相手にされず。

子供だからと言われ、あしらわれて。

子供は歩く。

長い長い年月を歩き続けた。

2年もの歳月を、ただ一人で生き続けた。

そして子供は海にいた。

だが、子供の服装はなぜか身なりがよかった。

少女用の子ども服を着ていたが、着方が美しい。

見るもの全てを魅了するような、美しさだった。

子供は知っていた。

生き残るためにはどうすればいいのか、と。

身体を売り、小さい身体を駆使し、危険な場所へもぐりこみ。

そうやって、子供は生きた。

稼いだお金はもの凄い額になった。

だが、子供は歩き続けた。

そこに留まるのは、罪だと言うように。

そして……歩き続けて海に出た。

海に足を入れる。

そして、履いているスカートを濡らさないようにはしゃぐ。

その姿を見れば、ただの少女だ。

はしゃぎ疲れたのか浜に戻ろうとすると、眼の端にある物が映った。

子供はそれを手に取る。

１枚の金属。

端は丸く、長方形。

それはドックタグ。

金属には、１８枚の棘。

しかし、よく見ると羽のようにも見える。

いや、翼だ。

金属には翼の形が描かれていた。

描かれていると言うより、翼の部分だけ凹んでいたり突出していたりしていた。

子供はその金属に見惚れていた。

金属を撫でると、翼の下に書かれている文字があった。

英語だ。

だが7歳の子供は普通は読めない。

しかし、子供は読めた。

その天才的な頭脳が読ませた。

「GU……N、DA、M……。」

そう読ませた。

その瞬間、その金属は現代技術ではありえない事をやってのけた。

≪ZGMF‐X10A　起動。≫

金属から、声が漏れた。

子供は驚き海の中に落ちた。

海水に濡れる髪。

だが、子供は気にせず金属を見た。

「……なんだ……これ……。」

光が発行し、気がつくと服が消えたいた。

そして、金属の鎧をまとっていた。

子供は立ち上がるが、目線が高い事に気が付き見える範囲を見た。

まず腕を見た。

左手には大きな鉄の板。

右手にはライフルのようなモノを右っていた。

肩や腕などを見るが、白を基本とした鉄が腕を覆っていた。

身体は上半身しか見えないが、黒と青を混ぜ合わせた色に赤が少し見えた。

しかし、子供の体ではない。

瞬間的に子供は何かに覆われたと気がついた。

自身の身体が鉄に覆われていると。

その全てが分かる。

いや、金属から脳に叩きこまれる。

そして知った。

この機械の事を。

これから発明されるであろうＩＳ（インフィニット・ストラトス）と呼ばれる、機械の事を。

これから起きるであろう、世界の変革と言う物語を……。

それは生まれて初めての、彼の物語。

プロローグ（後書き）

さて、まず最初に。

１・作者は別の作品に力を入れているため、たまにこっちを書く程度です。

２・作者はフリーダムＬＯＶＥな人です。

３・主人公の名前がいまだに決まっていません。

４・これって需要ある？

５・高校時代につくった機体（ストライクフリーダムの発展機）の武装が、お蔵入りしていたため使いたかった。

……なんで載せたんでしょう？？

なんで書いたんでしょう？

かなり頭がおかしくなったようです。

とりあえず、もしよかったら一緒に主人公の名前を考えてください。

日本人なのに、銀髪、赤目、男の娘の名前って意外と思いつきません。

ちなみに、ストーリーを進めていく上での名称で、本当の名前ではありません。

しばらく放置しますので、案を出してくれるとありがたいです。

案が早く集まったら、意外と簡単に作業に入れるかもしれません。

では、いずれまた……。

別作品の方出会える方は、また……。

００１　掌握（前書き）

主人公の名前が決まらないけど、よくよく考えたら名前がなくったって少しはイケる事に気がついた。

別作品の方に力を入れているため、雑です……。

サーセン。

001　掌握

浜辺に佇む機械。

ぱっと見、不審な物にしか見えない。

それを遠くから、眺める女性がいた。

「ほぅほぅ。　久々に散歩しに外に出てみたら、この束さんよりも早く作ってる人がいたんだ～。」

その声はなぜか明るい。

ウサミミをピコピコ動かしながら、双眼鏡で青い翼を持つ機械を見ていた。

「でも、あれって私が作ってるのとは違うよねぇ～？？」

そう言いながら、首をかしげるが見ているモノは変わらない。

「興味をそそられるよ～♪」

≪ＺＧＭＦ‐Ｘ１０Ａ　ＦＲＥＥＤＯＭ　全システムオールグリーン。≫

≪ＺＧＭＦ‐Ｘ２０Ａ　ＺＧＭＦ‐Ｘ３０Ａ　システムオールプロテクト。≫

≪認証中……。≫

≪解除には一定の条件と、自立誘導兵器の起動可能思考が必要です。≫

≪初期設定、フリーダム。　第一形態（ファーストシフト）ストライクフリーダム。　第二形態（カンドシフト）名称不明。≫

≪以後、指紋と声紋認証システム作動。≫

≪ニュートロンジャマーキャンセラー、正常に稼働。≫

≪高機動、高速軌道への対Ｇ保護のため、フェイズシフトを展開中。≫

≪ビーム兵器の出力に異常なし。≫

大量の光学モニターが浮かび上がり、情報を出す。

普通の人間にとっては、その情報は処理できないだろう。

だが、彼はできた。

これは、兵器だと。

これは、この世界にはあってはいけないほどの技術の塊だと。

これは、もう自分以外には全部拒否反応を示すのだと。

これは……人は扱えない、と。

なら自分はなんだ?

直感的に感じるが、確実と言ってもいいほど使いこなせる。

左手に持っているシールドも、右手に持っているライフルも。

腰に折りたたまれたレールガンも。

背中にある１０枚の翼中に装備された、大規模プラズマ兵器も。

全て、全て理解ができた。

これが扱える自分はなんだ?

だがそんな事はどうでもいいのか、彼は未知なる物を知りたかったため、先ほどモニターに映った文字を見る。

そして命じた。

「解除条件の自立誘導兵器の詳細を展開。」

その声を拾った機械が全てのモニターの上に情報を提示した。

彼にしてみれば、機械は存在している時点で性能を見せつけている。

つまり、存在しているなら分からない事はないと言う事だ。

≪自立誘導兵器ドラグーンを表示。≫

そこには青い機械の一部があった。

ドラグーンと呼ばれる兵器だけが映し出されていた。

≪Ｄｉｓｃｏｎｎｅｃｔｅｄ　Ｒａｐｉｄ　Ａｒｍａｍｅｎｔ　Ｇｒｏｕｐ　Ｏｖｅｒｌｏｏｋ　Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｎｅｔｗｏｒｋ・ｓｙｓｔｅｍ≫

≪分離式統合制御高速機動兵装群ネットワーク・システム。≫

≪使用には脳はコントロールが必須です。≫

≪量子通信へのジャミングは不可能。≫

≪大規模処理能力が必須。≫

そのモニターを見ていると、確実に見てはいけない物を見た気がした。

オーバーテクノロジーの塊すぎる。

彼の心を知りすべもない機械は、次々と情報を提示する。

≪Ｘ２０Ａ　ドラグーンシステム８機搭載。≫

≪Ｘ３０Ａ　ドラグーンシステム１８機搭載。≫

一つのモニターに、翼が映し出される。

そして翼の一部が分離し、モニター上で回る。

先ほど見た青い機械だ。

「……翼が分離式の誘導兵器……。」

そう呟く。

機械はいまだ情報を吐き続けていた。

≪脳波コントロール可能。≫

≪最大性能で使用が可能と認証。≫

≪全システムのロックを解除。≫

≪ファーストからセカンドまでのシフトを展開できます。≫

≪シフト移行後、旧シフトへの変更可能。≫

どうやら、世界はここまでいらない能力を与えていたらしい。

脳波コントロール。

普通に暮らすのなら確実に必要のない。

世界はひどい。

というか、完全に掌握してしまった。

モニターはすでに１００を超え、いまだにモニターを出し続けた。

世界は彼に何を与えたかったのだろう。

００１　掌握（後書き）

脳内では主人公の容姿は、……あのロリっ子なんですよね……。

〇〇〇〇〇〇〇〇・〇〇〇〇・〇〇〇〇〇〇〇〇（〇の数あってるかな？）。

皆に愛されすぎだと思われる、あのロリっ子♪

導入までの筋書きは大体終わったけど、こっちに力を入れたらまずいまずい……。

別のが区切りが良い所までいったら、力を入れてみよう……多分。

そして、マジで主人公の名前が決まらない……。

最悪、上の伏せ時の名前にするか？？

それもまずいよな……。

募集中。

００２　情報（前書き）

またも、急いで書いたため駄文です。

ぶっちゃけ、「釣り乙」とか言われそうだな～。

００２　情報

彼は眼を走らせていた。

モニターに映る情報はどれも興味深く、目を離せなかった。

とくに機械についている兵装が面白かった。

この時代、レールガンは大型で戦艦に装備させるのが関の山と言うのに、この機械には装備されている。

シフトと呼ばれる機体変化があるが、変化しても必ず2門は付いている。

さらにビーム兵器も発達せず、せいぜいレーザーがいいところなのに、この機体の主兵装のほとんどがビーム兵器だ。

ありえないくらいの技術の塊だと、再度認識した。

２ｍの鉄の巨人は、彼の動きを忠実に再現する。

歩くのにも、跳ねるのにも……。

身体全体を動かすこと全てを忠実に、タイムラグなしで再現した。

それは、現在の機械工学を上回る。

一体何処から来たのか気になってしかたがない。

しかし、そのデーターを表示させようとするとエラーが発生した。

「再度開発場所提示。」

そう言うが、瞬間的に≪エラー≫と表示された。

理由も≪エラー≫。

製造日時も≪エラー≫。

開発全てに関わる事にエラーが表示された。

仕方がないため、開発情報は今はあきらめる事にしよう。

そして次に目を付けたのは、ニュートロンジャマーキャンセラーと言う単語。

意味が分からないが、多分何かの重要機関なんだろう。

正常に稼働と書いてあったから、そう考える。

「ニュートロンジャマーキャンセラーの情報を提示。」

そう言うと、今度はすんなりモニターが表示された。

そこには一つのマークが描かれていた。

「……っ！！　核！？」

そのマークは瞬間的に疑問をよんだ。

まさかと思い「ニュートロンジャマーキャンセラーと核の類似点」と叫ぶ。

だが返ってきた答えは「同一存在」というものだった。

≪ニュートロンジャマーキャンセラー＝動力＝核≫

その文字に目を見開いた。

そのほかのモニターには、動力炉の原理が書かれておりビーム兵器の実証まで書かれていた。

彼はいったん全てのモニターを閉じる。

（これは……誰にも見せちゃいけないものだ……。）

小型の核エンジンにビーム兵器の存在。

検索すれば、動力炉の作成方法にビーム兵器の実証理論まで出てくる。

これがもし、悪人や軍隊の手に渡ったらと思うとゾッとした。

目をつぶり、これをどうしようか悩むと何か音がした。

目を開くとモニターが一つ付いており≪ＯＫ≫としか、書かれていなかった。

彼は、嫌な予感がした。

押したら何が起こるのか……。

だが……押した。

≪ＺＧＭＦ‐Ｘ１０Ａ　ＺＧＭＦ‐Ｘ２０Ａ　ＺＧＭＦ‐Ｘ３０Ａ
　武器情報展開≫

≪３１ｍｍ近接防御機関砲≫

≪カリドゥス複相ビーム砲≫

≪バラエーナ・プラズマ収束ビーム砲≫

≪シュペールラケルタ・ビームサーベル≫

≪クスフィアス３レールガン≫

≪スーパードラグーン機動兵装ウイング≫

≪高エネルギービームライフル≫

瞬間的に大量の武器情報が表示される。

彼の目はそれを追うが、どの武器が何処に装備され、どの状態で使用できるのかよく分からなかった。

情報があまりにも多すぎたのか、またモニターが１００近くまで増える。

うんざりした。

せめて表示するなら、モード１つ１つ出せと思った。

だが、押したのは自分の意志だ。

自業自得だろう。

「ねぇ、ち～ちゃん。」

「なんだ?」

先ほどの離れた場所にいた女性の横に、また一人女性が増えた。

「アレって何なのかな?」

双眼鏡をいまだ目に当て、様子を見ている。

「知らん。」

新しく増えた女性も、双眼鏡を目に青い翼を見ていた。

「おもしろそ～だよね～？」

その言葉に少しばかり、ため息をつく。

「……で、束……。　私を呼んだのはアレを見せるためか？」

「ううにゃ？　違うよ～。」

今だ双眼鏡で見ながら、そう言う。

「テストしてもらいたいんだ～。」

「……白騎士を。」

００２　情報（後書き）

あ～、何かある？

私的には何もないかな～？

テキト～にまた書きます。

あ～、ちょっくら疑問に思われた場所修正。

００３　戦闘（前書き）

なぜか、暇なときに少しだけかける……。

003　戦闘

「発表前の機体でいいのか？」

「いいのいいの～♪」

ウサミミを揺らしながら、口もを押さえながら言う。

何とも楽しそうだ。

それに対するもうひとりの女性は、白いアーマーを装着していた。

なお、この時代にアーマーを使う競技なんかないし、アーマーなんて誰も使わない。

むしろ、それはアーマーなのか？

白い機械がいたるところについていた。

しかし、先ほどの機械ではないにしろ身体がでてしまう場所はある。

「しかし……プロトタイプとはいえ、武器がこれだけとは……。」

アーマーを付けている女性は、何とも言えない顔で手に持った剣を握る。

「ち～ちゃん、剣以外使えるのかな～？」

ウサミミを付けた女性は、意地悪な質問をする。

女性は何も言えなくなった。

「まぁまぁ、テストなんだから～。」

そう言って、双眼鏡で青い翼を確認する。

「……仕方がないな……。」

ため息をつくと、バイザーを被る。

「……白騎士のテストを開始する。」

「いってらっしゃ～い♪」

≪警告　警告≫

≪四時方向から接近する熱源一。≫

その警告に、彼は首をそちらに向けた。

小さな何かがあった。

機械はそれを認識すると、スコープで拡大させた。

「……なんだ……。」

白い人型の何か。

一見すれば、この機械と同じだろう。

だが二の腕部分とかは、スーツだ。

それがこちらに近づいてくる。

一応様子見をする。

拡大を停止し、通常の倍率でそれを見る。

無視してもいいだろうがこういう手の機械は存在しなく、情報を手に入れるチャンスと思った。

しかし、それが近付くにつれ声が頭に響く。

『己を……。』と。

幻聴かと思ったが、『己を……。』と何度も聞こえた。

気味が悪い。

そして頭に浮かびあがる言葉……。

『……悟られるな……。』

それに気がついた瞬間、なにに「悟られるな」なのか理解できなかった。

頭を振りかぶる。

頭の機械が、首周りの出っ張りに当たる。

しかし、その衝撃は彼にとってそれを忘れるにはちょうど良いものだった。

砂浜に白い機械が降り立つ。

背には羽のようなスラスター。

自身を守るかのように、足元に浮かぶ何か。

手には１m強の大剣。

顔部分は何かで覆われている。

それは彼を見ると剣を構えた。

剣士と言うにはおかしく、武術師にしてみては荒々しい構えだ。

いうなれば、騎士が妥当なのかもしれない。

様子を見ているのだろう。

あまり動かない。

彼は何を思ったのか、右手に持っていたライフルを腰に置き、左腰から白い筒を取る。

そしてそれは淡い光を放ち、一本の線を出した。

ビームサーベル。

とある技術から生み出された、磁場形成理論の応用技術によってビームを刃状に固定したものだ。

と機体武器情報に書いてあった。

……簡単に言えば、何でも切れる光の剣だ。

もっとも、今の技術で作れる国なんかない。

ビームも発見してないのだから。

それを無造作に持った。

先ほどの情報の中で、いち早く理解できたのがこのビームサーベルだけだ。

他は確認をしていない。

（……敵……？）

彼は今までの生き方から、白い何かを敵と考えた。

それにしては、奇襲などいろいろあっただろうに……。

彼は浮かび上がる。

それを見て、相手も浮かぶ。

お互いの手には、一振りの剣。

そこは異様な光景を見せる、戦場だった。

相手が接近する。

その速度は現存する機械や動物よりも早く、どんな対応も出来ない。

……はずだっただろう。

その剣が左から右から振られた時には、彼はそこにはいなかったのだから。

彼はすでに騎士の後ろに、背を向けて立っていた。

知覚出来ない速度で、騎士の横を通り抜けたのだ。

それに気が付き、騎士は後ろを向いた瞬間。

「なっ！？」

声をあげて気がついた。

自身が持っていた、大剣が宙に待っていたのだから。

（女性……？）

柄部分から切り飛ばされ、剣は剣としての機能しなくなった。

彼はもう一度、剣を構える。

剣を抜いてきたという事は、死ぬ覚悟もできているのだろう。

女性と言う事にいささか気が引けるが、今までの生活で女を殺したのは何度でもある。

足とスラスターを潰し、尋問させよう考えた。

００３　戦闘（後書き）

何を書いてるのか、自身でも理解していませんが……。

とりあえず、何も考えないで書くのが私ですｗ

００４　邂逅（前書き）

束さんの喋り方って難しいね～☆

００４　邂逅

「ま～った、まった～。」

突然後ろから声が聞こえた。

この状態でも後ろが見れるから、あまり動かないようにしよう。

というか確実に厄介事に巻き込まれてるような……。

「真打、束さんと～う……じょうっ！！」

そういうと、その後ろから５色の火薬が爆発し煙を上げる。

とりあえず無視。

なんか、ウサミミが見えた。

今までの生活してきた中で、ウサミミを付けている人なんか見た事がない。

服は誰も着そうにない、童話チックな服を着ている。

薄紫色の髪が風になびく。

むしろ爆炎になびく。

歳は分からないが、高校生ではないだろう……。

だが、中学生でもないように見える。

とくに胸が……。

体格が……。

とにかく無視。

ゆっくりと騎士に向かって歩く。

「って、無視はひどいな～。」

そう言っていつの間にか横にいた。

その光景は人としてあり得ない。

2秒もたってないのに、音もなしに近づくなんて。

「……。」

だが、無視をし続ける。

「へぇ～、この束さんでもいまだビームの理論は分かんないのに、これはすごい♪」

……無視し続ける。

「お☆　この羽の小型スラスターどういう作りしているんだろう♪」

……無視し続ける。

「あ、こんなとこにもセンサーが♪　いいな～かっこいいな～☆」

無視……。

「た、束……。」

目の前の騎士が彼女を止めようとする。

それはそうだ。

翼の付け根の部分にあるブースターに乗っかっているんだから。

その前は肩に跨っていた。

女性は抱きついていろんな所を探っている。

彼は少しキレた。

とりあえず、首を掴む。

「んにゃ？」

猫みたいな声を上げるのを無視して、彼は騎士に向かって投げた。

「にゃぁぁぁ！？」

猫は似合わない気がした。

騎士は難なく投げられた女性を抱きとめた。

「もぅ、酷いな～。」

だが、女性はそれほど怒ってないのか軽い。

「……私に触るな……。」

彼はそう言葉を放つ。

初めて声を聞いたためか、目の前の騎士は身体全体で驚いていた。

女性は目を輝かせている。

人嫌いってわけではないけど、あまりかかわりたくない。

……それを人嫌いというのだが……。

「ち～ちゃん、ち～ちゃん♪　あの子なんか私っぽい♪」

「束、それは失礼だと思うのだが……。」

何が目の前の女性っぽいのか分からず、頭の中に?が大量生産される。

潔癖症なのだろうか。

まぁいいや。

「……何者だ?」

サーベルを戻し、腰にマウントしていたライフルを持つ。

ビームライフル。

女性を無視していたときに、頭部内でデーターを軽く見た。

これら手に持つ武器は、手にある小さなコンバーダーからエネルギーを補充しているようだ。

武器内部にはエネルギーはない。

これは、そこからエネルギーを受け取り撃つだけ。

現存する武器と変わらない。

「おぅおぅ☆　かっこいいね～ち～ちゃん♪」

「よせっ束。」

騎士は分かっているようだが、女性は分かっていないのか軽口のままだ。

「悪かった。」

騎士は頭を下げるとそう言った。

「この機体のデーターが取りたくてな……。」

「そこにこの束さんの目に、君が映ったのだよ～。」

その言葉に取り合えず、１０ｃｍずらして撃つ。
女性の髪を焼くことなく、通り過ぎた光条は海水を蒸発させる。
その光景を見ても、女性は笑っていた。
騎士も動かなかった。
気がつかれてたのか？
「……つまり……。」
「うん、世界初のはずの機械より先に完成してるっぽい機体があったから、白騎士のテストをしてもらいました～。」
つまり、実験？
つまり、意味もない戦闘？
つまり、あちらの勝手？
「あ～、意味が分からないと言う感じだな……。」
騎士が心を読んだかのように、的確に言う。
「安心しろ、私も分からなかった。」
いやいや、なにも安心できないし。
女性は胸を張って、「にへら」と音が出そうなほど頬を緩ませてい

た。

「とりあえず、私の調べではそんな機体はどこにも存在してないし、開発もされてないんだよね～。」

女性はいまだ笑いながらそう言う。

彼は思った。

情報を手に入れるためにはちょうどいい、と。

００４　邂逅（後書き）

１０年前だから、中学生でいいのかな？

白騎士は未発表の試験機状態。

いまだ、あの白騎士にはスペックが届きません。

ミサイル切りできません。

００５　名前（前書き）

あ～、なんか決定した。

そして束さんの口調、可笑しくないよね～？？

００５　名前

「ここ……なに？」

彼は周りを見渡すが、何かゴチャゴチャと散乱していた。

黒い布切れまで散乱している。

いまだ機械を解除しないで、そこにはいる。

入る時、翼や肩が色々な所に引っ掛かったが、気にしない。

白い騎士は、そのアーマーを外し黒髪の女性になっていた。

「わたしの実験室～♪」

その言葉に首をかしげる。

此処に来るまでの間に、白い騎士の機体について色々と聞いた。

いまだ各国が作った事のない、パワードスーツのプロトタイプ。

未完成で、火力や反応速度とかが低い機体だそうだ。

この機体の事も聞こうとしたが、知らなさそうだったので何も聞かない。

「そろそろ、それ外したらどうだ？」

騎士だった女性がそう言うと、彼は悩んだ。

もしかしたら、これを奪うかもしれない。

彼自身、世界がどうなろうとどうでもいいのだが、これだけは渡してはいけないと考えていた。

破壊への始まり。

戦争の火種。

いや、そんなものはどうでもいい。

奪われ続けた彼にとって、唯一自身が気に入った物なのだから。

世界に一つしかないであろう、彼自身の……。

「……一つ聞くよ？」

「うん？」

彼の可愛らしい声が、室内に響く。

「これを作った目的って何？」

そう言って、さっきの白い騎士の画像を見せる。

情報をあさったら、録画と言う物があった。

……なぜ起動してるし……。

まぁ、気にせず見せた。

その画像を見て目を光らせる2人。

……なぜかウサミミがその質問に変化する。

？と！の形に。

……いやいや、おかしいし。

何それ！？

なんか物理法則完全無視されてるし！？

なんで形が変化するの！？

「あ～え～とね……。」

その言葉に考えを中断させた。

「わかんにゃい♪」

そう言って笑い始める。

……分かった。

理解した。

馬鹿と天才は紙一重と言うけど……。

天才すぎると馬鹿になるという事だ……。

「……すまないな……。」

「いいえ……。」

騎士の女性が彼に同情する。

苦労してるんだね……。

「……唯ね……。」

その言葉に部屋が静かになった。

「世界って……優しくないでしょ……。」

その言葉に、彼は理解した。

先ほど、言ったように「同じ感じ」という事も。

彼女もまた、世界に何かを奪われたのだろう。

多分……意思を……感情を……。

なにか、周りを見る目がない。

むしろ、周りなんかいないように見ていたから……。

「……よく分かった……。」

そう言うと、彼は機械の身体を脱ぎ捨てるために、モニターで調べ始めた。

そしてその方法を見つけ、パージする。

そして現れたのは、腰までかかる銀の髪の子供。

「かっわいい～♪」

そういって、ウサミミの女性が抱きついてくる。

黒い髪の女性も、何か抑えている感じだ。

「このかわいさ、箒ちゃんにも劣らないよぅ～。」

頬を擦りつけてくる。

久しぶりの事だったので、動揺した。

母意外にこういう事をする相手がいなかったから……。

いや、一人でずーっといたから……。

だから、何もしない。

むしろ、その感覚を懐かしく感じていたかった。

「ち～ちゃん、ち～ちゃん！　この子貰っていいかな？」

前言撤回。

この人怪しすぎて、もの凄く懐かしく感じられない……。

まぁ、貰われたって別にいいのだけど……。

「それはダメだろ……、あと……そろそろ離してやったらどうだ？」

騎士の一言に解放される。

「や～、ほんと可愛いね～☆」

「……というか、お前がそこまでになったの初めて見たぞ……。」

そういって、彼を見た。

赤い目がその目を見る。

「……確かに……。」

「でしょ♪」

その光景に呆然とする。

……なんでつれてこられたの……？？？

愛でられるため？

Ｙｅ……Ｎｏ！！

当初の目的を忘れられていた……。

その事にため息をつくと、ウサミミの女性が近付いてくる。

「お名前教えてくれるかな、かな？」

……神は言っている、それはやってはいけないネタだと。

とりあえず、何も言えないため黙る。

「束……せめて自分から名乗ったらどうだ？」

「おおぅ、さすがち～ちゃん♪」

そういって、なぜか回転する。

「私は篠ノ之束というのだよ。」

……口調が変わっている。

……気がしなくもないか……。

「……私は織斑千冬という。」

そしてウサミミ……束は「で？」というような顔をする。

私は迷ったが、事実を述べる事にした。

「……私に名前なんかない。」

その言葉に千冬が目を見開き、束が目を細める。

「どういうこ「リリィ」……は？」

千冬の言葉を束がさえぎる。

「だから、この子の名前だよち～ちゃん♪」

「イヤマテ……良いのか、それは……。」

そう言ってこちらを向く。

「最初はイリヤとか～、うさちゃんとか～、智とか～、千冬とか～、色々考えたけど、リリィがしっくりきたから☆」

「いや、なんだそのダメな名前のオンパレードは……。　……そして、私の名前も交じっていないか？」

千冬はため息をついた。

彼はそう聞くと少し考えた。

「まぁ……別にいいけど……。」

「やった♪」

結局、名前がないと不便という事で受け入れた。

なぜ、リリィなのか分からないけど……。

……まぁ、別にいいけど……。

……別にいいけど……。

……別に……。

００５　名前（後書き）

ＲａｉＮさんに名前を決めていただきました。

ありがとうございます。

ネタ……分かるかな？

ネタが多かった気がするけど……。

まぁ、良いよね？

００６　天才（前書き）

……あれ？

何かがおかしい……。

なんだろ？

006　天才

「で、リリィちゃんは天才だよね？」

「は？」

束の一言に、一瞬思考が停止する。

確かに天才の部類だろうが、なぜ今そんな事を聞く？

そう考えていると、あるデーターを見せてきた。

それに目を通すと、不思議な事に自身の持つ機械と似たような構造が書いてあった。

「白騎士の設計図だよ。」

そう言って、先ほどとは違う声でリリィに話しかける。

「何処が悪いか分かるかな？」

なるほど。

だから「天才だよね？」と聞いてきたのか……。

リリィは少し目を通し、先ほど目を通した自身の機体の設計を思い出す。

ここでも神に与えられた無駄な能力が発揮した。

直観像素質。

一度見たモノは忘れない。

それが人であれ、物であれ、長い文字であれ、設計図でもだ……。

写真のように記憶するため、普通の記憶とは次元が違う覚え方をする。

ただ、忘れる事が出来ないのが欠点だが……。

「……あの……。」

さっそく一つ見つけた。

むしろ、これは開発者としてまずい……。

「回路が接続されてない場所が、1点あるんだけど……。」

「え？」

リリィの言葉に束は固まる。

千冬はその言葉を聞き設計図を見る。

「そんな、完璧のはず……。」

「でも、ここ……。」

そう言って指を指す。

コードの配置と機材のつなぎ方から、使用者の動きを再現する部分のはずだ。

「あ……。」

束は気がついたのか、声を出す。

「……コレがなんなのだ？」

千冬が質問する。

「えっとね……、この機材を設計図がつなげてる場所はココとココとココ。」

丁寧に指を指す。

どれも四肢に近い機材を指差していた。

「これらは全部、運動する部分だけど……。　けど、そこにつなげるならなんでここにつなげないのかな……。」

そう言って、ある一ヶ所を指す。

足に近い機材に、何一つ繋がってない機材があった。

設計図に記入されてない。

多分、製作された白騎士も同様に繋がってないだろう……。

「これが繋がってないと、どうなんだ？」

千冬が質問する。

「……脚部の瞬間運動が何％か落ちてると思う……。　繋がってないと、機材はただの重りだし……。」

これは……脚部の処理能力機材のはず……多分。

むしろ、繋がってないという事は足を動かす時かなり重かったのでは？？

……もしかして、無理やり動かしてたのかな？

そういえば、先の戦闘でも浮いてただけだしね……。

束がゆっくりドアから外に出ようとしていた。

だが千冬がそれを許すわけがなく、出れなかった。

「……で、天才……何か言う事は……？」

そう言って、束を振り向かせる。

「いや～、……ドンマイ☆」

「……で済むかっ！」

そう言って拳を振り落とす。

そりゃ、使用者は完全に欠陥機体でテストさせられていたのだ。
怒りたくもなるだろう。
「いった～い。　ち～ちゃん痛いよぅ。」
だが千冬はその言葉を無視する。
束に任せておけないのか、千冬はリリィに話し始めた。
「他に修正個所があるなら束に教えてやってくれ……。」
「……はい……。」
「あ、あと……白騎士の性能向上も頼む……。」
「……はい……。」
アレ……？
私何のためにここに来たんだっけ？？
情報集め？
いやいや、話していて気が付きましたよ。
此処には情報がありそうで、ほとんどないという事に……。
そんな事を考えていたら、千冬は束を避けて外に出ようとしていた。

「あの……。」

リリィの言葉に2人が目を向ける。

「私がココに来た理由って……??」

その言葉に束が「え、スカウトだけど?」と当たり前のように言った。

え、というかいつの間にそんな事に??

話を聞こうと思っただけなのに、なぜにそんな事に……?

いやいや、それよりもなんでこんな状況に???

訳の分からない状態に混乱する。

「ふむ……そう言えば、さっき出会ったばっかりだったな……。」

もしかして、その事忘れられていた??

最初から知人で、この機体の開発にもかかわっていたと??

無いわ……。

それは無いわ……。

「そういえば、さっき出会ったばかりだっけね～☆　私も忘れてたよ～♪」

貴方もかっ！？

私の存在は……なんなのさ……。

「まぁ、そんな事より欠陥部分をなおそ～。」

無駄に拳を振り上げてそう宣言する。

その発言を聞き終えると、千冬が部屋を出ていった。

「はぁ……。」

そのため息は誰にも聞かれる事はなかった。

仕方がなく、初めての作業に戸惑いながら修正していく。

束はなぜか上機嫌で、時たまリリィを見ていた……。

気がつけば性格が濃い束と千冬のおかげで、昔の感情が表に出た気がしたリリィだった。

００６　天才（後書き）

いやいや、こんな思考をするのは束さんだけで十分です。

なに、さっき会ったばかりなのにその状態って……。

しかも、この話のはじまり方おかしいし……。

……まぁ、束さんだからという事で納得しておこう……。

００７　改善（前書き）

なぜ、３分割にした？

迷惑だな……。

007　改善

気がつくと夜だった。

束と一緒に、白騎士の欠点を直していたらこんな時間になっていた。

リリィは改修と同時に、白騎士に新しいシステムを付けた。

光伝達神経接続ネットワーク。

機械が神経に流れる情報を読み取り、動きを先に同調させることで動きをよくさせるという物だ。

束には一応開発者と言う事で、システムの概要を説明したらあっさりと許可をもらえたので、部屋に散乱している余り機材を使い読み取り機を作っていた。

もちろんこれはフリーダムの装備にある、ドラグーンシステムを見て思いついた事だ。

ほぼ完全自立誘導砲でかなりの精度と速度、そして威力を兼ね備えているのなら、どういう風に精密な高速戦闘ができるのか探したところ、量子通信という物を見つけた。

それをどういう風に身体を動きを機敏にする方法を考えた所、思いついたのが脳髄に行きかう情報を読み取る方法だった。

そして思い立ったのが量子ではなく、光を使用した伝達方法だ。

身体を動かそうとすると、必ず脳から動かしたい部分に神経が伝達する。

なら、その伝達域を白騎士にも行かせるようにしたのだ。

これにより、白騎士の行動は確実に搭乗者の動きをトレースする。

完全に身体の機能を使用した、システムだった。

問題は読み取りの機械をどれだけ小型化するかだったが、天才2人が集まれば出来ない事は無いらしい。

物の数分で、小型化の設計図を作り上げたのだった。

そしてようやく完成したのだった。

「リリィちゃん、後はテストしたら終わりだよ～。」

その声に身体を横にした。

長かった……。

むしろ、なんてめんどくさい事に巻き込んでくれたんだ……。

「……あ……。」

ようやく時間を確認できた。

夜の8時。

5時間以上も、白騎士に費やしていたようだ……。

普通だったらそんなに時間はかからないだろう。

だが、リリィは千冬が言った性能向上を真面目にしたのだ。

結果、一度白騎士は半分以上分解された。

そのあと、リリィが改良点と新機構、エネルギー問題を考えた設計図で作り直したのだ。

時間がかかるのは仕方がない事だ……。

「じゃぁ、今からテストを始めるよ～♪」

「はっ！？」

その言葉にリリィは飛び起きる。

今何て言った？？

テストを今からやるというのかっ！？

無茶苦茶な言葉に目を丸くした。

第一千冬がココにはいない……。

「……来たぞ。」

来たよ……。

手には携帯が握られており、連絡したのがよく分かった。

というか、こんな夜に来るなんて……。

まさか、楽しみにしていたっ！？

いや、あのクールな雰囲気をまとっている人に関してそれはないだろう……。

「束……一夏が家にいるんだ……早く用件を言え。。」

初めて聞く名に首をかしげるが、気にされない。

「まぁまぁ、完成した白騎士……どうだぃ？」

その言葉に「もう改善したのか」と驚いていた。

「天才と天才の合わせた技術、早く使って見たくないかい？」

束がすごく嫌な笑みをしていた。

ああ、どうやら千冬は白騎士に愛着があるようだ……。

クールな雰囲気はどうした……。

いや、会ってからまだ半日もしてないけど……。

千冬はその問いに、「良いだろう」と言って白騎士に歩み寄った。

もう嫌だ……。

「という事で、リリィちゃん模擬戦の願いね♪」

ああ、そう言うと思っていましたよ……。

泣いちゃうよ？

だが、私はあきらめない。

疲れたのだ。

休みたい。

だから反論した。

「5時間以上やっていたんですから、休ませて下さい……いえ、明日に回してください。」

千冬はそれを聞くと束の頭を掴んだ。

あ、なんかミシミシって言う音が聞こえる……。

って、頭蓋骨のきしむ音っ！？

何その怪力！？

「束……まさか、こんな子供に5時間も手伝わせたのか？」

「いだだだだ、ぎにゃぁぁぁぁぁ、痛い痛い痛い！！！」

可愛らしくない悲鳴は夜の街に響き渡るが、誰も心配してないのか窓一つ開ける音がしない。

とりあえず、死人がでかねないから仲裁に入る。

そうして千冬の手から解放された。

「……いや～、束ねさん以上の天才だったよ～☆」

瞬間的に立ち上がり、痛がっていたのが嘘のように話し始める。

「そんな事はどうでもいい！！」

「……まぁまぁ。」

とりあえず、近所迷惑になりそうだったので明日にテストは回された。

００７　改善（後書き）

３分割で載せたせいでか、今現在……一日のアクセスがすごい事に……。

とりあえず、すいませんでしたっ！！

ＰＶ６．４７２　ユニーク９００

書き始めたのが５日前……。

総合ＰＶ１４．９４０　総合アクセス２．７６５

これがＩＳの力か……。

すごいものだな……。

とりあえず、ありがとうございましたっ！！

これからも宜しくお願いしますっ！！

００８　過去（前書き）

なぜか、リリィ視点で書いたら１０分でかけた……。

008　過去

リリィです。

さて、ようやく解放されたし、そのままどこかにとんずらとするか……。

と、思っていた時期もありました……。

千冬さんが送って行くなんて言わなければ……。

つい先ほどの事です……。

「いい時間だしな……子供が一人で歩く時間でもないだろう。」

そう言って、束から離れるとリリィを見てそう言った。

「送っていくぞ……。」

この時自身の嘘をつくスキルを怨みました。

「大丈夫ですよ……。　家が近いし。」

「なら、私が付いて行っても大丈夫だな?」

「いや、でも女性の一人歩きの方が……。」

「子供の方が、何倍も危ない。」

そうやって話していくうちに、嘘とばれたんです。

もの凄い剣幕で、詰め寄られた時には死にそうでした……。

はい……。

しぶしぶ、本当の事を話さないといけなくなったんです……。

「なっ！　帰る家がないという事はどういう事だっ！！」

予想通りの反応です。

クールな外見、内に秘めてるのは激情と言う……なんとも千冬らしいのか分からないモノでした……。

「親が2年前に死んで、引き取り手もいないのならという事で旅してたんです……。」

嘘は言ってない……。

本当は自身の頭が、国に売られる事を恐れたのだ……。

警察に駆け込んで、それを含めて相談しようと思ったがあしらわれたから……こうなった。

両親の親はひどいものだった……。

一言で言うなら、金の亡者。

追加するなら、欲望に忠実。

私の頭脳を国に高値で売ろうとしていた事は、見え見えでした。

「……呆れて何も言えんが……。」

「でも、事実だね……。」

束がパソコンを持って近づいてくる。

「ち～ちゃん、この子の顔で検索したらヒットしたよ……。」

そう言ってパソコンを私たちに見せる。

そこには私の名前と顔が映っていた。

「りりぃちゃん……いえ、貴方は2年前に、両親が殺害され警察に被害届を出したものの、子どもと言う事で警官に相手にされなかった。」

ただ淡々と事実を言う。

「その後消息が消え親族が捜索願を出したものの、裏で国との取引に使われていた。」

もう、さっきから思うけど束って何者……??

「一切の情報がなくなっているから、実質死亡扱いを受けてるね。
いや、生まれた扱いもされてない。」

確かにそこには住所や年齢をはじめ、血液型や性別さえ消えていた。

なのに顔だけは残っている。
なんでだ？

「……当時から天才と呼ばれ、大人顔負けの頭脳を持っていた。」

……ああ、当時の町内新聞か……。

天才な子供。

それなら性別のような細かな情報は、乗ってないんだろう……。

それなら国が消そうにも消せないのだろう……。

「……そうですよ……、私は恐れて逃げた……。」

その言葉に千冬だけではなく、束も暗くなる。

「私は子供のころから、サイエンスの様な科学雑誌を理解できていましたし、応用も考え付いてました。」

懐かしいが、楽しい過去ではない。

「そんなある日、親族の知ったかぶりに腹を立てて論破したんですよ……。」

ああ、あの日からあいつらは私を売ろうと考えてたんだ……。

いまさら思っても、なにも変わらないけどね……。

「その日から、親族は私の頭脳を試すかのような質問をして、出来るのなら国に売ろうと思っていたんでしょう……。」

「……腐ってる。」

千冬が毒ついた。

「ええ、腐ってますね……。」

あのとき、間違っていれば何か変わったのだろうか……。

おそらく、変わらない。

気がついたと受け取って、判断材料にされるだけだ……。

なら、知った上で答えるか無視すればよかったのだろう……。

結局、なにも変わらないが……。

「で、貴方はこれからどうする気？」

リリィという名絵呼ばず、束は真面目な顔で聞いてきた。

私は何も考えてない。

ただ、旅をするだけ……。

親族に、警察に見つからないように逃げ続けるだけ……。

そう考えていると、いつの間にか2人が耳打ちしていた。

……何だ？

金……ではないな……。

ココにある発明を、発表して特許を取れば金なんて腐るほど手に入れる事ができる。

白騎士はまずいだろうが……。

下手したら、テロ未遂か兵器を持ちこんだ問う事で捕まるからな……。

「……よし。」

何が良しなんだ？？

千冬がこっちを見た。

「お前は、今日から私が預かる！」

……は？

何を言ってんだ？

大人でもない人間が、子供を養えるわけが……。

「安心しろ親はいないし、同い年の弟がいるだけだ……。」

……いやいやいやいや。

安心できないよ。

むしろ不安になってきたよ……。

え、なにその親がいないという状況。

それ聞いて安心できるわけ……。

……出来たわ……。

私一回、ニュースで大々的に捜索願いだされたんだっけ……。

覚えの良い親は、覚えているだろう……。

下手したら、警察に連絡が行く。

「安心して。　ち～ちゃんだけの負担になるわけじゃないから……。」

いえ、まだそこまで思考は行ってません。

でも確かに、親がいないのなら経済面はどうなるんだ？

お金に余裕があるのか？

……まぁ、だからこその言葉なのか……。

というか、本当に何者だよ!?

本当に学生?

……そう言えば、私は学校で言うと小学生でした……。

いや～、普通じゃない生活してると物覚えが悪くなるね～。

「よし♪　そうときまればリリィちゃんの歓迎会だぁぁぁぁぁぁ!!」

束がテンション上げてそう言うと、千冬は頷く。

「いっくんと～、箒ちゃんでいいよね～。」

誰ですか……。

「場所は私の家だな。」

……何これ……。

なんてカオス……。

００８　過去（後書き）

昨日のＰＶが……。

ＰＶ　９５９２

アクセス　１１７１

……需要あんかな……？

つられてるだけなんじゃないかな？

００９　紹介（前書き）

パーティーの１部。

自己紹介編とでも言えばいいのか……。

００９　紹介

「ＩＡＥＡの皆様お集まりありがとぅ～いぇ～い☆」

ＩＡＥＡって……国際原子力機関だよな……。

関係ないほどにもほどがある……。

いや、一応フリーダムに核は積んであるから、関係なくはないけど……。

「あいえいいーえ？ってなに？」

千冬の横に座っている男の子がそう質問した。

千冬はそれに苦笑いしながら「知らなくていい」とばっさり言った。

というか、束がテンションあがりすぎて別人のように見えるんだけど……。

「今日は無礼講だよ～☆」

「いや、あと３時間ちょいで終わりますよ……今日。」

的確に突っ込みを入れてみた。

今の時刻、２０時４８分。

よい子はお休みの時間です。

中学生以下は布団に入りましょう。

「だが……なんで元気なんだ……。」

そう、千冬や束は起きているのには問題ないとしよう。

だが、それぞれ連れてきたリリィと同い年ぐらいの子供まで元気なのが理解できなかった。

「……明日でもよかったのでは？」

一応言ってみた。

だが、束は「何を言っているのかなっ！！」と言うと、椅子に乗りテーブルに足をかけた。

千冬が「一夏がまねをするから、やめろ」と言ったが無視。

「こ～れは、リリィちゃんのための儀式なのだよっ！！」

……なんでさ……。

じゃなくて、なんでだよ……。

「模擬戦の後にやれば、無駄に……。」

その言葉の途中に束が、「チッチッチ」と言って指を振った。

……何も起きない。

いやいや、棒人気ゲームの技じゃなかった……。

うん。

「すぐにやらないと、面白くないからね～♪」

そう言って胸を張る。

それをリリィと千冬は、半眼で見つめた。

……天才と馬鹿だ……。

確実にそうだ……。

絶対そうだ……。

「第一、模擬戦の後じゃ疲れてるでしょ？」

「……今も疲れてるけどね……。」

白騎士を何時間弄っていたと思ってるんだ？

もう、体力があまりないですよ……。

「そんな事は良いとして～、リリィちゃんの歓迎会を始めま～す♪」

……子供じゃないんだから、歓迎会って何よ……。

「はいはい、そんな顔しないで自己紹介自己紹介。」

もういいや、流れに身を任せよう……。

棒金髪女性さんも言っていたよ。

……流れ着いた先が、案外いごごちが良って……。

ため息をつくと、立ち上がる。

全員の目が集まる。

束……いつまで、椅子に乗ってるんだ？

そんなことも考えたが、もう良い……。

この人に何を言っても無駄なのは理解した。

「リリィです。」

そう言って椅子に座る。

その様子に束は「それだけ？」と聞いてきた。

他の3人からも、期待外れのような視線を送られる。

……悪いか？

話す事がないんだよ……。

「……後で質問に答えます……。」

そう言って束に反した。

「しかたがないな～。」

そう言って、口をとがらせる。

不満たっぷりの表情だ……。

何処からともなく取り出したマイクを千冬に渡す。

お手本を見せろという事だろう。

「織斑千冬だ。　特技は剣を扱う事、嫌いなのは……馬鹿だ。」

そう言って束を見る。

確実に束をバカ呼ばわりしてるよ……。

まぁ、確かに馬鹿だけどさ……行動が……。

束にマイクを返す。

一回顎に手を当て悩む。

そして、マイクを持っていない手を横に大きく振った。

「天才の篠ノ之束だよ～☆　嫌いなのは他人。　好きなものはち～ちゃん達だよ～♪」

と言って終わらせた。

……それでいいのか？

というか、マジで他人嫌いかよ。

なんとなく気が付いていたけど、マジかよ……。

おっと、久々に地が出そうになった。

結構慣れたつもりなんだけどな……。

……ん？

まだ地だな……。

……まぁいいか、誰にも気がつかれる事はないだろう……。

持っているマイクを隣の女の子に渡す。

「篠ノ之箒だ。」

その苗字に束を見た。

「うん、妹～☆」

なるほど。

だが、違いすぎないか？

束とは違い、髪の色は日本人らしく黒に近い。
しかも、子供ながら眼つきが鋭い。
「好きなものはいｔ……じゃなくて……料理だ。」
うん、小学生の発言じゃないよね？
料理が好きな小学生って何だ？
というか、その前に「いｔ」って何だ？
頬を赤らめて、千冬の隣に座る男の子にマイクを渡す。
「織斑一夏だ。　好きなのは姉ちゃん。　嫌いなものはピーマンだ。」
そういってマイクを束に渡す。
……小学生らしい発言だったな～。
千冬もなぜか頬が少し赤いし。
照れたな……うん。
というか、箒の「いｔ」ってもしかして「一夏」の事か……。
……やば、結構納得したし……。

００９　紹介（後書き）

まぁ、これ書かないと先進まないし許してね。

というか、４ＫＢぐらいで上げなければいいのに……。

まぁ、書きやすさと言ったら４ＫＢで一回終わるのがちょうどいいんだけどね……。

気がついたら、不定期更新じゃなくなってるし……。

０１０　質問（前書き）

質問が浮かばなかった……。

閲覧者に質問でも、聞けばよかったのかな？

……無理か……。

０１０　質問

「という事で、リリィちゃんに質問のコ～ナ～♪」

いや、誰に向かって言っている。

全員知っているから、いちいち言わなくてもいいだろ……。

「さてさて、この天才な束さんにしてみれば、聞きたい事は山ほどあるんだよね～。」

目を輝かせながらそう言う。

千冬だけがため息を吐き、同情してくれてるのかそう言う目でリリィを見ている。

「さて、何か質問あるかにゃ？」

そう言って最初に手をあげたのは一夏だった。

「趣味はなんですか？」

……おいおい。

そう言う質問やめてくれ……。

箒にすごい目で見られてるよ……。

とりあえず何かあったかな……。

あ、あった。

「……楽器かな……。」

そう言うと全員の目が光る。

……何かまずかったか？

「何ができるんだ？」

千冬が興味を持ったのか聞いてくる。

「あ～いろんなのができると思う。」

その答えに全員が声を上げる。

実際、直観像素質でいろんな楽器の演奏を見てきたし参考書も読んだ。

神が無駄に与えた器用さもあるから、大体の楽器はできる。

だが、唯一完璧と言ってもいいのは……。

「だけど、バイオリンが一番かな？」

バイオリンが一番好きだった。

「なにかあるのかにゃ？」

束が理由を求めた。

……暗くならないか……？

……良いのか、言っても……？

……まぁいいか。

「あ、やっぱいい。」

だが、言おうとした瞬間束は聞くのをやめた。

どうした？

かなり不自然な取り下げに、首をひねる。

「……ごめんね……。」

小さな声で束は何か言った。

その表情は、何か触れてはいけない物に触れたような物の顔だ。

リリィはそれを聞きとれなかった……。

「？？」

「じゃぁ、箒何かないか？」

束の不自然さはいつもの事だと、千冬は無視し箒に質問させようとする。

突然降られて何も考えてなかったのか、かなり唸る。

「何でもいいんだよ～。　好きな子の事とか、どんな手入れをしているのかとか～☆」

束が先ほどの顔ではなく、いたずらな笑みで箒に耳打ちする。

だが、丸聞こえ。

聞く必要性があるのかと思うような質問ばかりだった。

「じゃぁっ、バイオリンが聞いてみたいっ！！」

その声に一瞬何を言っているのか分からなかった。

だが、言いたい事は分かった。

バイオリンね～。

「……う～ん。」

「ダメかな？」

そう言って目を潤ませて聞いてきた。

「ダメじゃないんだけど……。」

「どうしたんだ？」

リリィの歯切れの悪い言葉に、千冬が声をかけた。

……気が付けよ、年長者……。

「……バイオリンがない……。」

「あ……。」

全員思いついたのか、間抜けな声を上げる。

「まぁ、いずれ聞かせてあげるよ……。」

そう言うと「ああそうだ」と言って、マイクで進行する束をとめた。

「好きな子なんていないし、髪の手入れの事だと思うが、特に何もしてない……。」

そういうと、全員何の事だと思ったようだ。

少しして束が、自身で言った事だと思いだした。

その時、千冬になぜかじろじろ見られたが……。

なんなんだ?

「はいはいち~ちゃん。　うらやましいのは分かったから~☆」

「なっ!?」

束がそう言うと、意味が分かった。

リリィの髪がうらやましいのだ。

銀のサラサラとした腰までかかる髪だ。

箒も一夏もじろじろ見てる。

……納得……。

「さて、私は明日にでも聞くからいいとして……。」

……え？

明日も質問されるの？

いや、別にいいけど……。

聞く事あるの？？

そんな考えを知らない束は、千冬に質問をさせようとしていた。

千冬も聞きたい事があったのか、頷いて了承していた。

「……。」

リリィを見た眼は真剣なものだった。

……何が来る……。

結構冷や汗をかいて、質問に構える。

だが一夏をみて、「やっぱいい」と言ってやめた。

なぜ束も千冬も質問しようとすると、すぐさまやめるのだろう。

そう言う疑問がリリィの頭い残った。

０１０　質問（後書き）

……どうしよっかな～。

特にこうしたいとも決めてないし……。

一回昼食作って、それから続き書くとしましょう……。

そう言えば千冬が箒を呼ぶ時って、名前だけで良いんだっけ??

011　模擬（前書き）

なぜか、1話で終わらない。

まぁ、前半に会話があったから仕方がないか～。

011　模擬

アレから数時間が立った。

一夏や箒がいつのまにか寝ていたから、解散となった。

まぁ、ありがたかったがコレじゃぁな……。

「どうした早く始めるぞ。」

いつの間に寝ていて……。

気がついたら朝で……。

そして、千冬が目の前にいたのにはびっくりした。

どれだけテストしたいの……。

という事で、人目のつかない場所で模擬戦です。

束は情報整理や白騎士の調整等で、ノートパソコンを高速でタイピング中。

……たぶん白騎士じゃなく、パソコンを持ち歩かないようにするための研究でもしてるのではないかと……。

白騎士に宙に映し出す事が出来るモニターついてるから……。

多分その発展でも考えてるのだと……。

……あれ、それだとおかしいよね……？

出来てるよね？

……アレ……？？？

「何をボッケっとしてる。」

怒られました……。

束についてはどうでもいいのか……？？

「ルールは？」

とりあえず、何も聞いてないから聞く。

下手したら白騎士がスクラップだ……。

最低限のルールは決めておこう。

「あ～、サーベルのみ。　リリィちゃんは威力８０％カット。」

こちらを見むきもしなかった束が、そうパソコンを見ながら言う。

そして、パソコンを閉じ近づいてきた。

「フリーダムだっけ？　全武器の威力が、白騎士に装備させている絶対防御が、処理できないから。　あとシールドなし。」

そう言って、フリーダムの腰をぽんぽん叩く。

搭乗者の命を守る、絶対防御。

銃弾をはじくのは先ほど確認した。

というか千冬に白騎士を装備させて、いきなり銃で発砲したから焦った。

そう言うのを開発できるのは、やはり天才の証なんだろう……。

だがフリーダムの武器はバルカンを除くと、全武器が絶対防御を貫通してしまう。

海に向けて撃ったビームや、サーベルの威力を算出し絶対防御と照らし合わせたら、貫通することが分かった。

……本気で行ったら、千冬がミンチだよ……。

そう思いながら、シールドを排除しモニターで出力に制限をかける。

というか２０％の出力で、白騎士と互角の攻撃装備とか……。

……でたらめな機体だ……。

「あとは、エネルギー切れか武器破壊で～。　あと一撃。」

いつのまにか束は離れていた。

……いや、待て。

フリーダムにエネルギー切れなんて、ないよっ！？

だが、言おうとしたが千冬が剣気を放つ。

「……技術での勝負だ……。」

そう言って、剣を取る。

「……お手柔らかに。」

……仕方ない……。

リリィも腰のサーベルに手をかけて停止する。

日本刀で言う抜刀の構えだ。

「……いいかな～☆　じゃぁ始め！！」

そう言うとお互い飛ばず、スラスターと踏み込みだけで距離を一気に縮める。

お互い右手に持つ剣での勝負だ。

白騎士は右斜め後ろに構えた剣を、下段から振るう。

リリィはそれに対抗して、サーベルを上段から振り下ろす。

剣が交錯する。

だが、白騎士の剣は折れなかった。

再度剣が交錯する。

だが、やはり折れない。

白騎士は剣を戻す際の力で、後ろに下がる。

「……足取りや、動きも完璧だ。」

千冬はそう言って満足する。

「剣もそうだが、なにをした？」

模擬戦と言う事を忘れたのか、白騎士の出来栄えに感激していた。

「ちょっとした技術流用。」

そう言って、接近し剣を振るう。

左から右へサーベル振るい、その勢いのまま左足を軸にして回し蹴りをする。

白騎士は剣で防いだため、回っていたごく僅かな隙を攻撃することができなかった。

フリーダムはさらに右足を地につけると、今度はそっちの足を軸にしゃがみ込みながらの足払いをかける。

だが、千冬はそれを予測していたのか、ジャンプして避ける。

そしてそのまま刃先を下にしていた剣を、フリーダムの頭部めがけて振り上げる。

フリーダムは首を傾ける事で、剣の軌道から外れる。

「はぁぁぁぁぁぁ！！！」

だが千冬は加減して振り上げたのか、剣を少し傾け振り下ろした。

フリーダムは背を向けていた。

（貰った！！）

そう思った。

だがフリーダムは左手にサーベルを逆手で所持し、剣を防いだ。

千冬は驚き、剣同士の競り合いに力を入れた。

フリーダムは右手に持っていたサーベルを、背を向けた瞬間左に来るように地面に落とした。

回転の力をそのままに、左手でサーベルを持ち振り上げる。

そうすれば、ちょうど振り下ろされる剣に間に合う。

腕の振り上げる力も、それほど要らない。

千冬は久々の本気になれそうだった。

「……。」

いまだ背を向けて剣を防ぐ。

千冬はフリーダムの背中をけり、後ろに飛ぶ。

そして振り返られる前に剣を突き刺す。

だがそれも身体をずらし、身体の間に剣を入れる事で防いだ。

突きからの薙ぎ払いも視野に入れた、防ぎ方だった。

フリーダムが振り返る。

それでも千冬は引かなかった。

剣を引き、反撃が来る前に剣を突きだす。

引いては突いて、引いては突いての連続だった。

（子供の何処に、っ、こんな、技能が……。）

千冬は少し焦った。

011　模擬（後書き）

……なんだこの書き方……。

分からん。

そして昨日より多い４分割……。

０１２　結果（前書き）

……眠い……。

だから寝る……。

０１２　結果

剣が連続で交差する。

上段から切られるのなら、下段から迎え撃ち。

薙ぎ払われるのなら、下がって避ける。

突かれようものなら、身体をずらし間に剣を入れ防ぐ。

連撃を受けようものなら、防ぎきって隙を見つける。

リリィと千冬の戦闘は想像以上だった。

今もサーベルと剣がぶつかり合う。

「……やるな……。」

千冬はそう言うと、フリーダムの薙ぎ払いをバク転で避け間合いを取る。

本来なら、白騎士の機動はそんなに性能が良いモノだはない。

むしろ、自身の手足を延長するような機体で、アクロバティックのな動きが神業だった。

いまだ有効な当たりは無く、切る、避ける、競り合うという感じだった。

「……模擬戦ってまだやるの……？」

リリィは、もう止めたいようだった。

……エネルギーが持つまでって大変なんだよ……。

実質白騎士は改造された時に、大容量のエネルギーパックを追加装備されている。

しかし、そのエネルギーは一向に減った気はしない。

フリーダムの剣を千冬は白騎士の性能を理解したうえで、完全に避けているのだ。

白騎士のテストなら動作起動だけでいいのだろうが、自身の剣を使うとなると最高なモノにしたい。

これから起こるパフォーマンスに備えて……。

「……良い戦闘だったよ……。」

「ん？」

リリィが突然言い出した言葉に、千冬は耳を傾けた。

「最高だ……。」

笑いながら剣を振るう。

「……最高の遊びだよ……。」

「っ！？」

千冬は我を忘れた。

（試合ではなく、遊びだと！？）

リリィは模擬戦なんてやっていなかった。

子供をあしらうように、剣をさばいていたのだ。

その思考が隙となった。

瞬間的にフリーダムが視界から消えた。

白騎士のモニターには何も映らない。

（何処だ……。）

首を振って探すが、やはり見つからない。

そして気がつく、自身の影が大きい事に。

顔を上に向ける。

「はぁぁぁぁぁっっ！！」

サーベルが振り下ろされる。

「やられるかぁぁぁぁぁぁ！！」

それに対抗するために、剣を振り上げる。

だが、重すぎた。

剣は振り下げるには多少は簡単な武器だが、振り上げる事にはあまり向かない。

対するフリーダムのビームサーベルは、重さはそんなにない。

ビームサーベルは手元だけの重さで刃は実体がない、つまり重さがない。

それなら振りが早いのはどちらかというと、フリーダムの方で……。

白騎士の横に降り立った瞬間には、白騎士の剣はまたも宙に舞っていた。

1時間近くに渡る模擬戦は、フリーダムの勝ちで終わった。

その光景を見ていた束は、千冬が負けた事が信じられなかった。

誰よりも強く、なによりも気高き存在の彼女が、負ける事が……。

「やっぱり……天才なんだね……。」

……私よりも……。

ち～ちゃんよりも……。

知能では束。

運動では千冬と、神様は才能を2つに分けた。

だけど、リリィはその2つの才能を所持している。

……そんな事はどうでもいい。

……そんな事は……。

束は3人の共通点を思うと、苦虫を噛み潰したような顔になる。

千冬は家族に捨てられ、束は世界に関心を失った。

リリィは……。

「……悲しいね……私達は……。」

……才能の分、束や千冬よりも重い物を背負っている。

背負わされている。

……世界は、どうして私達にこんなに酷いんだろう……。

「……ち～ちゃん達は満足？」

それは事あるごとに、千冬に聞きたかった質問だった。

言葉は風に流されていく。

白騎士とフリーダムが解除されると、２人は話し始めた。

木の棒を構えて、指を指しながら話すリリィ。

剣の事かな？

……なんでかな、悲しいよ……。

……ねぇ、ち～ちゃん……。

０１２　結果（後書き）

昨日分割で４つも投稿したため、１日がすごい事になりました。

そりゃそうか……。

おかげで、ＡＣＦａ×なのは　を超えたし……。

……なんでさ。

ＰＶ　　１５．０６８
ユニーク　１．４７６

暇を持て……じゃなく……あ～。

なんだ??

とりあえず、感謝を!!

０１３　強弱（前書き）

今日も眠いです……。

ネタが思いつかない……。

013　強弱

「お前っ！！」

お互いパージすると、千冬がいきなり掴みかかってきた。

「……何？」

自分より歳の小さい子を掴むなんて……。

千冬は何とも言えない、起こった目で見てきた。

「模擬戦じゃなかったのかっ！！」

……ああ。

その事か……。

「うん。」

「なっ！？」

そう答えると、千冬の顔がさらに険しくなった。

束は千冬を見てはいるが、別の事を考えているのだろう。

無反応だ……。

「落ち着きなさい……。」

そう言って、千冬の手を外す。

「昨日特技は剣と言ったから、試してみたけど……。　それでよく白騎士に乗ろうとしたね。」

その言葉に千冬はさらに怒ろうとする。

だが、リリィが手の平を利冬に見せてとめた。

「……白騎士はこの世界にとっては脅威よ……。　それに乗るなら色々な人や国が、奪おうとしてくるのよ。」

そう言って近くにあった木の枝を拾う。

「大体、これが剣だとしたら……本来の間合いは７０ｃｍほど。白騎士なら１０ｍほどでしょうね……。」

指を枝に指しながら、そう言うと枝を投げ捨てる。

「だけど、今の貴方は間合いに敵を入れ過ぎてる。　それは倒せる距離じゃなくて、倒される距離よ……。」

リリィの言葉に千冬は何も言えなかった。

「多分……今の白騎士相手なら、世界に２０人は素手で対抗できるし勝てるわね。」

「っ！？」

その言葉に息をのむ。

「……あり得ない。」

その言葉にリリィは目をつぶる。

……馬鹿な人……。

「じゃぁ、白騎士に乗りなさい……。」

言葉通りに、白騎士を起動させる。

剣はないが常人相手には十分だろう。

だけど、リリィの目にはそれは脆く見えた。

「……それじゃぁ、おいで。」

「は？」

「かかってきなさいと言ってるのよ……。」

言葉どおりの意味だが、普通なら理解できないだろう。

「こないの？」

リリィは少し笑むと、口を釣り上げた。

「じゃぁ、私から行くね……。」

……少し頭の固い人間には、真実を見させてあげないと。

瞬間的に走り、近寄ると飛び上がる。

千冬はそれを両手で防ごうとするが、足が腕に当たり少しだけ後ろに下がる。

リリィは着地するとすぐさま、近づく。

「本気で抵抗しないと、死んじゃうよ？」

そう言うと、白騎士に向かってとび蹴りした。

リリィが地面すれすれに突っ込んでいく。

白騎士は腕を伸ばし止めようとするが、リリィは手を使い身体を空中で半回転させ地面に向いた。

そして両手で跳ね上がり、白騎士の手を避ける。

それだけに止まらず、腕のアーマーの凹凸に足を引っかけバランスを崩させた。

「くっ！」

さらに足で、腕を蹴り背中に移動する。

そして背中を蹴る。

それだけで、白騎士は地面に倒れ込んだ。

リリィは白騎士の首……。

アーマーが付いていない所を掴み、地面に押し込む。

「……ぁ……ぁ…っ…。」

千冬が言葉にならない声を発する。

「どう？　苦しい？」

リリィはそう言うと、手を離す。

「絶対防御だって、完全に守れるわけじゃない……。」

千冬に背を向け、離れながらそう言うと振り返る。

「今のように、何の変哲もない子供にだって倒せる。」

……まぁ、私だから出来るんだけど……。

両手をあげ、ヤレヤレとため息をつく。

「大体、手や足などの物理攻撃は素通りじゃない……。」

千冬は白騎士をパージすると、咳き込みながらリリィを見た。

「まぁ……、飛べば勝てるかもね。」

クスクスと笑うと、千冬はリリィをただ睨んだ。

「あ、けどマシンガンなら数を揃えればエネルギー減らして捕獲することもできるか～。」

そう言って千冬を見る。

「……分かった？　自分が弱いってこと。」

最初から分かっているためか、余り反応はしない。

だが、「弱いのは当たり前」というような眼をしていた。

その目を見て、少しだけリリィは遊びたくなった。

「……いいわ……束っ！」

そういうと、意識を手放していたのか手を大きく振りながら尻餅をついた。

すぐに立ちあがり、近づいてくる。

「……白騎士って発表するのよね？」

「うん？」

言葉の意味を分からないのか首をかしげる。

「それの発表予定延期して……。」

その言葉に2人は目を見開く。

「……千冬を徹底的に鍛えてあげる……。」

０１３　強弱（後書き）

白騎士フルボッコ。

というか、この千冬……まだ弱いです。

本編のあの千冬にはまだ遠いな～。

次回あたりから、千冬の強化が始まるかも？

０１４　昼食（前書き）

……千冬強化イベント省略！

書くのがめんどくさかった……。

０１４　昼食

「ほらっ、間合いを取ったら暇をあたえないっ！！」

リリィは木刀を持って白騎士と対峙する。

対する白騎士は、模擬戦の時使っていた剣だ。

すでにこの状態で４時間練習をしていた。

「踏み込みが甘いっ！！　隙があるのなら、急所を切る一撃だけ狙えっ！！」

リリィが言葉を飛ばすと、２倍以上の高さを持つ白騎士が向かってきた。

リリィは少し下がり、白騎士に向かって踏み込む。

攻撃のタイミングを外され、さらに攻撃を食らう。

「くっ！！」

千冬は混乱し、剣を構える。

「混乱するなっ！！　剣を向けてもいいが、今攻撃しても当たらないっ！！」

リリィはそう言うと、追撃しに行った。

白騎士は何とか防ぐが、身長差という事もあり少し当たった。

「冷静になれ、感情を殺せっ！」

そのどの言葉も、千冬にとっては初めてのことだった。

剣を振る事はあっても、その使い方や思考までは誰も教えてくれなかった。

「そうしなければ、感情が枷になるぞっ！！」

その言葉に全ての思考を、リリィに向ける。

「……というか、覚えが早いんですけど……。」

練習中にリリィのお腹から音が鳴ったため、今日は中止。

ということで、お昼です……。

そして、コンビニのおにぎりを食べながら千冬について束と話す。

「そりゃ～、ち～ちゃんだからね～☆」

答えになってませんよ……。

そう思いながらコンビニ弁当を食べる。

先の練習の時、束は近くのコンビニにお昼を買いに行ったらしい。

それが、今食べている物だが。

……それはどうでもいい。

問題は、その格好で行ったのか？

束は一般感性を持っていないのか？

水色をベースに、白いラインに白いフリルと白い大きなリボンがある服だ。

スカートは膝ぐらいだし、半袖だ。

まぶしいくらい、白い肌が外に出ていた。

というか、服着替えたのか？

昨日から着ていたアリス服はどうした？？

ウサミミは残ってるけど……。

「ふむ、覚えが良いのか教えが良いのか分からないが……多分後者だ。」

千冬は束の服に、なにを言わず弁当を食べ続ける。

……謙遜だね……。

そう思いながら、口を開く。

「いや……普通だったら数ヵ月はかかるよ？」

「やっぱ、ち～ちゃんだからだよ～☆」

……突っ込みたい、けど突っ込めない。

「いや、リリィが……。」

千冬の言葉がそこで途切れる。

……なんだ？

束もどうしたのか分からないようだ、

顔を見合わせるが、何も分からない。

千冬は言いたい事がまとまったのか、口を開く。

「……お前……何処で習ったんだ？」

「え？」

「だから、お前のその技術はどうやって自分の物にしたのかって聞

いたんだが……。」

その問いに、全員が食べる手を止めた。

……まずい……。

確かに指導しているのなら、いつかその技術の事を聞かれると思っていたが……。

どうしようか頭を悩ませていると、人の気配がした。

何かを踏む足音。

全員の意識がそちらに向く。

「ああ、いた。」

「一夏？」

そして現れたのは千冬の弟だった。

「どうした？」

近づいてくる一夏に、千冬は優しい声で聞いた。

一夏にだけ、キャラ違うしっ！？

……これってブラコンだよね？

……別にいいけど。

そうしているうちに、一夏は千冬の隣についた。

「……お腹すいた……。」

その言葉に千冬と束は凍った。

「……忘れてたのか……？」

リリィの言葉に、さらに凍りつく2人。

「……白騎士で浮かれてた。」

「ち～ちゃんが用意したと思っていた。」

……この2人……天然なのか？

けど、今の発言だと一夏のお昼は無いという事になる。

少し考えてリリィは、仕方がないと自身の財布の中を見る。

……諭吉さんが数十人。

……よし、大丈夫だ。

リリィは残っていたモノを平らげると立った。

「一夏、私がお昼作ってあげる。」

０１４　昼食（後書き）

いや、コーヒー飲んで無理やり起きてるけど……。

完徹ですよ……。

今回の束の服は、中の人が来てたやつです。

王国民は分かるよね？

「Ｌｏｖｅ　Ｌｉｖｅ　２０１０　＊Ｐｒｉｎｃｅｓｓ　ａｌａｍｏｄｅ＊」の最初に着てたやつだよ？

「ミュージックジャパン　アニソンスペシャル３」にも着ていたやつだよ。

何か中の人ネタやりたかった。

後悔はしていない。

015　料理（前書き）

……レシピは自分で探してね。

015　料理

「……お前の事が良く分からなくなってきた。」

買い物かごに食材入れながら歩くと、千冬がそう言ってきた。

その後ろには束と一夏が買い物かごをカートに置き、その中にお菓子をたくさん入れていた。

……誰が払うんだろう？

……私か？

そんな事を考えながら、千冬に顔を向ける。

「見た目通りおとなしいのに、戦うと強い・性格変わる・口調変わるの三拍子……。」

呆れた目でそう言ってくる。

「束並みの思考や、開発ができるだけでも普通じゃないのに……。」

ため息をつき、リリィが持っているかごを指した。

「おまけに料理が得意とか……。　もう何でもありだな……。」

……そうか？

リリィは首をかしげながら牛肉を手に取った。

「別に私は普通であろうと……無かろうとどうでもいいですし……。」

その言葉に千冬は束を見る。

「そうだな……。」

自分は自分、他人は他人。

そう言う人も世の中にはいるという事だ。

「お会計しますけど、……そのお菓子どうするんですか？」

振り返り束に聞く。

「え、買うけど？」

笑顔でそう言った。

……そうだと思ったけどね……。

そして次の質問に移る。

「お金持ってるんですか？」

「持ってないよ～♪」

……嘘だっ！！

さっきお弁当買ってきたじゃん！

千冬がため息をつき、束の頭を掴もうとするが避けられる。

「……聞きますけど、こんの中にお金持ってる人いますか？」

もちろん私と束を除いてだけど……。

ああ、一夏も持ってるわけないか……。

と言うと、千冬だが……。

「持ってないな……。」

そう言って肩をすくめた。

束は出す気がない。

千冬と一夏は持ってない。

答え、私が出す。

リリィは予想通りで肩を落とす。

……というか、あって間もない人におごってもらうのか……貴方は……。

しかも、年下に……。

「悪いな……。」

千冬の言葉が心に染みた。

本来なら食材だけで、それほど荷物にはならないはずだった。

だが、そこにお菓子が加わったのだ。

全員の両手がふさがるほど……。

（……グッバイ諭吉さん。）

ちなみに一万は簡単に超えた。

織斑家についた途端、一夏は安いお菓子を開けた。

それほどお腹がすいているのだろう……。

……早めに作ってあげよう……。

キッチンに行くと、リリィは唖然とした。

「千冬？」

その言葉に千冬は動けなくなった。

金縛りにでもあったかのように。

「……手伝いなさい。」

そして指を流しに向ける。

そこには汚れた食器が山のように積んであった。

幸いな事にフライパンは使ってなく、すぐにでも料理を始める事が出来る。

炊飯器は……まぁ、何とかなるか。

千冬に洗う時の簡単な方法を言う。

今まで水で洗っていたのか、一番上の新しい食器が微妙に滑っている。

……油ものは洗剤で洗った後、お湯で洗いましょう……。

千冬が食器を洗う中、ご飯をセットし食材を取り出す。

……手っ取り早く、一夏も好きそうなのは肉料理だろう。

だが、肉料理は時間がかかる。

肉に火が通りにくいのもあるが、味付けや野菜との組み合わせを考えるとすぐには出来ない。

……よし。

何を作るか決めたリリィは、行動に無駄がなかった。

フライパンを横に置き、鍋を見つけ出す。

水を鍋で沸騰させ万能調味料「味の〇」を入れる。

玉ねぎを切り、シメジをばらす。

沸騰させた鍋の中にそれらを入れ、柔らかくなるまで煮込む。

菜箸がないため普通の箸でかき混ぜながら、リリィは千冬を見た。

……問題なし。

むしろ問題がある方は束達だ。

……おっと。

柔らかくなったことを確認し、調味料を入れる。

濃い醤油と薄い醤油があればよかったのかもしれないが、この際贅沢は言わない。

減塩醤油を大さじ４杯入れる事にした。

砂糖や塩、お酒を入れた後に牛肉をばらして入れる。

……さて、煮込んでる間暇だ……。

ああ、食器を用意しないと……。

束はこちらを見て、お菓子を開けるのをやめた。

……食べ過ぎると太りますよ？

千冬は食器をかたずけはじめていた。

だが、目はリリィの調理に向いていた。

……コレ覚えれば、誰でも作れますよ？

そんなこんなで完成。

「牛丼だ～☆」

そう、出来上がったのは牛丼だった。

リリィの頭の中には、「簡単・肉料理・男の子が喜ぶ」というと牛丼しか浮かばなかったのだ。

ちなみに、2回目作ると必ず味が別モノになるという人にもお勧めだったり……。

「美味いな……。」

千冬が食べた後、恨めしそうにリリィを見る。

これがきっかけで、食事はリリィが作る事になるのは……また別のお話。

０１５　料理（後書き）

……束と一夏のセリフ少ない……。

別にいいんだけど……。

あと、完全にリリィは周囲から女の子扱いですｗ

口調もわざとです。

牛丼のレシピは簡単だから、初心者にお勧めだよ～。

アンケート（？）です。

以下の人物の名前を、自身が好きなように並び替えよ。

セシリア・シャルロット・ラウラ

鈴がいない理由？

いたら面倒だから……。

０１６　風呂（前書き）

……この話書いてて、気がついた……。

０１６　風呂

アレから束は、かなりはしゃいだ後に帰って行った。
というか、束の元気は何処から来ているんだろう。
「……はぁ……。」
内心で付くのではなく、表に出しちゃったよ……。
なんだかんだでもう夜だし。
さっさと寝よう……。
一夏の相手も疲れるし。
そう思って、昨日借りた布団一式を引き始める。
……明日あたり……公衆浴場探すかな……。
何か……身体洗うの……。
……眠い……。
布団に入り目をつぶる。
「……。」
ウトウトしながら寝ようとした瞬間、後ろに誰か立った気配がした。

めんどくさいながらも身体を回転させ、確認する。

千冬だった。

なぜか、屈んでリリィを覗き込むような態勢だ。

「……なに？」

とりあえず、見られながら寝る趣味は無いため聞いてみる。

「風呂は？」

千冬は起きているのが当たり前のように、リリィに話しかけた。

その言葉に、眠たかった意識が覚醒させられる。

「……いいの？」

風呂に入れるというのなら、起こされても仕方がない。

目をこすりながら、立ち上がる。

「ああ、いいぞ。」

変わらない表情で、リリィを見る。

「……んじゃぁ、入らせてもらうね……。」

そう言うと、両手を使って上半身を起こす。

だが、千冬は何かに気がついたのか「あ」と声をあげる。

「……お前、着替え持ってるのか？」

千冬はいまさらな質問をしてきた。

……今さらだ～。

眠い目で「持ってない」と答えると、リリィは立ち上がる。

スカートがしわを作りながら、足にくっつく。

スカートを脱いで寝てもいいが、さすがに誰かに見られて悲鳴だけは勘弁してもらいたい。

過去に大型店舗の公衆浴場に行ったとき、入ってきたリリィを見て馬鹿共がうるさかったのを覚えている。

それからは、人があまりいない小さめの公衆浴場に行っているし、性別を無駄に明かそうとは思わない。

「では……ありがたく。」

そういうと、何か言いたそうな千冬を避け風呂場に向かった。

大体の場所は教えてもらっていたため、そんなに問題は起きない。

すでに夜のため、一夏が寝ているだろうからゆっくりと歩く。

風呂を除くと湯が張っており、千冬の優しさに感動した。

（……♪）

久しぶりの一人だ。

毎回各地の番台のおばちゃんに「女湯はそっちじゃないよ」と言われ続けたが、今日ばかりはそれがない。

服を脱ぐとすぐに使えるようにたたむ。

この行為は毎回風呂に入る時の行動だ。

リリィは荷物を持たない性格だ。

毎回服はある程度洗濯はしているのだが、その間羽織る物しかないぐらいの状態。

脱いでは着直し、洗濯してはすぐ着るという状態だった。

つまり持っている服が少ないという事だ。

しかも、もの凄く……。

せいぜい荷物として持っているのは、持っているのは財布ぐらいだ。

服を脱ぎ終わると、髪を纏めず風呂場に入る。

一回身体を流し風呂につかると、眠そうだった表情が変わった。

「あ”ぁぁぁぁ～～～～～。」

訳の分からない声を上げ、顔を緩ませる。

……お風呂は命の洗濯とは……よく言ったものだね～。

纏めなかった髪の毛が、風呂の湯に浮かぶ。

本当に女の子にしか見えない光景だった。

……だが男だ。

性格も口調も女らしい。

……だが男だ。

何度も言う、リリィは男だ。

誰もが女の子と間違う。

服を着ていれば、男とはだれも思わない。

何処からどう見たって、女性なのだ。

だからこそ、風呂から出て髪を洗っている最中にあんなことが起きたのだ。

「おぅおぅ、綺麗な身体してるねぇ～♪」

その声とともに、背中に柔らかい何かが当たる。

「髪の毛も綺麗だし～。」

……どうも、この人の行動は読めない。

「ハロ～♪　洗ってあげるよ～☆」

顔を声がした方に向けると、声の主は笑顔でリリィに抱きついていた。

服も着ないで抱きついていた。

「それにしても、胸が無いというより……。」

「……。」

そして声の主は気がつく。

「……ねぇ、聞いていいかな？」

「答えられる範囲で……。」

その声はあまり変わらないが、空気だけは重かった。

「リリィちゃんは……女の子じゃなくって……。」

「……。」

「男の子？」

声の主、束は至って真面目な声でそう質問した。

抱きついたままで。

……気が付いていなかったのか？

……そう言えば、男だって言った覚えないな……。

リリィはため息をつきながら、その質問に「うん」と答えた。

「……。」

「……。」

「……。」

「……。」

「……き。」

「き？」

……この場合「キャァァ」か？

そんな事を考えながら、どうしようか迷っていると。

束が離れた。

そして拳を作り振り上げた。

……なぐんのっ！？

……暴力反対！

そう思いながら、束の方に身体を向ける。

一応束の方を向くので、近くにあったタオルを腰にかぶせた。

「キターーーーーーー☆」

近所迷惑になりそうな大きいな声で、そう叫ぶ。

あげた腕は、どうやらガッツポーズのようだ……。

大きな声のせいで、リリィは耳が痛くなった。

……もうこの人の行動は、よく分からない。

０１６　風呂（後書き）

……束は変人だ。

だが、この作品ではヒロインに一番近いと……。

リリィと組み合わせやすい……。

０１７　危険（前書き）

……束が変態化した……。

作者自身、こんな予定じゃなかった……。

017　危険

「何が起きたっ！！」

千冬が風呂場に突入してくる。

「ハロハロ～☆」

束はガッツポーズをやめ、手を千冬に振っていた。

「……。」

対するリリィは、なぜか束に抱かれながら風呂につかっていた。

束の腕でリリィは、胸を隠されている。

……この手はワザとなんでせうか？

そう思いながら、千冬を見た。

千冬は呆れながら束を見ている。

「……なんでいるかは……聞いたところで無駄なんだろうな……。」

ため息をつきながら、腰に手をあてる。

束は何が楽しいのか、笑っていた。

笑うたびに背中にくっついた柔らかいものが、リリィを慌てさえた。

内心で……。

「よく分かってるね～、ち～ちゃん☆」

「……迷惑掛けるなよ……。」

そう言うと、千冬は風呂場のドアを閉めた。

束は千冬が完全に消えるまで、笑い続けていた。

リリィは自身の煩悩と戦い続けていた。

（……悪霊退散……悪霊退散……怨霊あやかし……困った時って、何処にかければいいんだ？）

なんども同じ事を考えていたからか、思考が徐々に薄れつつあった。

……がぁぁぁぁ、胸がぁぁぁぁぁ。

束の胸のせいか、リリィは普段の冷静な思考が取れなくなっていた。

数時間前に千冬に言った事を思い出せと、言いたいものだ。

「……リィちゃん？　リリィちゃん？」

……？

呼ばれたか？

聞いていなかったのか、何とも不思議そうな顔をする。

「リリィちゃん～。　聞いてるかにゃ～？」

「ん。」

やはり呼ばれていた。

「ねぇねぇ、お話しようよ～。」

……手を離してください。

……それから話をしましょう……。

そう思っていても、口には出せない。

所詮リリィは男というわけだ……。

「……。」

何も言えない。

「……。」

胸が気になって何も言えない。

「もしかして……。」

その言葉と共に、束の手が下に伸びる。

「っ！！」

リリィは瞬間的に束から離れた。

……やばい……やばい……。

「……ニヤリ。」

言葉にして、微笑む。

いや、微笑むではない。

アレは捕食する獣のような眼だ……。

……死んだな。

束はなぜか手を握ったり閉じたりを繰り返し、リリィを見ていた。

心なしか、目が怖い。

風呂場で後ずさるが、すぐさま壁に背が付く。

「……ねぇねぇ、なんで隠してたのかな、かな？」

そう言って何も隠しはせずに、リリィに迫る。

「……。」

周りを見て逃げ場を探すが、あっという間に追いつめられる。

「にゃふふふふふ☆」

もう、いや……。

束の目と口から、リリィはプレッシャーを感じていた。

……何が起きるんだ……。

「……では……。」

そう言うと、両手を合わせる。

「いったっだきま～す♪」

そうやってル○ンダイブを仕掛けてきた。

ただ、その光景をやっとのことで冷静に見る事が出来た。

……何をいただくのか知らないけど……。

「へぶしっ！？」

……壁にぶつかるよ……普通。

勢いがつきすぎたルパ○ダイブ。

その結果はリリィの少し上の壁に、顔を激突させるという事になった。

リリィは少し横に動く事で、落ちてくる束を避けた。

「……。」

「……あの……。」

湯に顔をつけている束を、心配そう声をかける。

「……。」

「……返事がない。」

「……。」

「ただの屍のようだ。」

だが、なにも返ってこなかった。

とりあえずこのまま置いておくと溺死するため、優しく顔を表に上げる。

抱きかかえるように頭と肩に手を載せて、束を仰向けにする。

「……ニヤリ。」

「っ！？！？」

束は意地の悪い、なんかよく分からない笑いをしながらリリィを見た。

つまり起きていた。

「リリィちゃ～ん♪」

腕が伸びる。

それを目で追いながらも、対処する事が出来ない。

……なんでさ……。

……なんでこうなんの??

再度捕まる。

しかも、前面から。

「えへへへ♪」

……まだ会って４８時間たってもいませんよ?

何を起こせば、こういう状況になるんですか……?

そう思いながら、リリィは意識を手放した。

とりあえず気絶することで、煩悩に勝ったのだった……。

……いいのかそれで……。

０１７　危険（後書き）

……束、リリィに対する好感度……急上昇。

千冬には及ばないが、やばい状態に発展……。

そのうちカンストすんじゃね？

０１８　性別（前書き）

……ヒロインは束さんだと……。

作者も意外だが、ゆかりんだから許す。

018　性別

白い閃光が夜空をかける。

白き少女はそれをただ眺める。

白き閃光の攻撃は……。

……と長々喋るリリィ。

「……という夢を見たんだが。」

「不思議だね～☆」

「いや、どうもお前のせいで見た気がする……。」

束はなぜか布団の上で正座させられていた。

何があったのかというと……まぁ、八つ当たりが妥当なのだろう。

お風呂場で気絶をしたリリィを、束は服を着せ布団まで運んだ。

束もリリィを抱いたまま熟睡。

その間、リリィは束っぽい少女の夢を見た。

で起きると、抱かれながら寝ているというわけで……。

はい、昨日の事があった身の危険と、八つ当たり……だね完全に。

「そんな事はいいとして～。」

「いや、よくないよ。　夢の中で「スターラ○トブレイカー」とか叫びながら、苦しい思いしたからね。　起きたらめっちゃ抱きしめられてるってなんなのさ。」

「ははは、きっと叫んだ子も私だよ～☆」

そんな事を言いながら、リリィの発言は流された。

ちなみに、言ってはいけない事を無視したのは御愛嬌。

とりあえず、束は足を崩す。

足がしびれたのか、あまり動けない感じだ。

それを見て、リリィは仕返しとばかりに束の後ろに回り込み足を突く。

「ひっぎぃぃぃぃぃ。」

効果は抜群だ。

茶化しながら見ると、束は涙目だった。

……なんかもの凄い罪悪感に襲われる……。

「酷いよ……リリィ……ちゃん？」

「なぜ疑問形。」

涙を拭きながら喋ると首を傾げる。

「だって、男の娘でしょ。」

「ああ、男の子だな。」

「でしょ？」

……ん？

なんで、男の子なのに「ちゃん」なんだ？

普通男の子は「くん」だろ？

……もしかして、話し噛み合って無い？

別にいいか。

「それより、なんで昨日あんな事をしたの？」

風呂場事件の事だ。

ああ、早々に記憶から消し去りたい。

旅途中にもやられたな……。

あのときは男相手だから、今回の方が何倍もマシだが……。

束は今度は反対に首をかしげ、唸る。

……理由ないのかよ……。

「……だから。」

そう思っていると、変な発言が聞こえた。

「一目惚れ？」

意味分からん。

「むしろ二目惚れ？」

よし、この馬鹿は無視しよう。

さて、今日の朝食は何を作ろうかな……。

そう言って、部屋を後にした。

「で、束はどうした？」

食事を作っていると、千冬が近くに立っていた。

リリィは食事をする手を止めずに、口を開く。

「とりあえず、寝言を言っていたので寝かせてきました。」

そう言うと千冬は後ろから抱きついてきた。

「っ！？」

手を前に回して「ふむ」と言って離れる。

料理どころの話ではなくなった。

リリィは慌てまくる。

「ふむ、昨日の話は本当か。」

その言葉でなんとなく分かった。

風呂場の出来事を、千冬は聞いていたのだ。

……だから何だという訳だが……。

……別に困らないし。

今の行動は、昨日の会話の確認だろう。

「いや……。」

そう言うと台所から離れていった。

苦笑しながら。

「……大かた寝言とは、好きだとかでも言ったのか？」

小声で何か言いながら歩いてるのだろう。

だが、台所から離れても、千冬の声は聞こえなくならない。

何かを言っている程度には聞こえる。

どれだけ笑ってるんだ……。

苦笑と聞き間違えてリリィは、少し考え込む。

……朝から疲れること、この上ない……。

……ん？

何か焦げ臭い……。

気がつくと、火がかけっぱなしだったため炭化した物がそこにあった。

……千冬に食べさせるか？

いや、止めておこう……。

とりあえずリリィは、この炭化した物体Xを排除することを優先事項に決定させた。

「どうだった？」

「や～、頭は良いし。　束さん気に行ったよ～☆」

「むしろ惚れたんじゃないのか？」

「あ～バレた～？」

「ふ、頑張れよ……。」

リリィの布団が置いてある場所での会話は、偉く味気ない会話だったが、本人たちにとってこれ以上の無い会話だった。

０１８　性別（後書き）

束はかわいい。

異論は認めない。

と、誰かが言っていた気がする……。

……確かにね～。

０１９　弁当（前書き）

……束ルートでいいのか、これ？

０１９　弁当

リリィです。

今現在私は迷っています。

え？

男なのに私とか、口調が気になるって？

まぁ、これが嫌なら戻すけど……。

まぁ、あの……アレだ。

私は……やべ、戻ってねェ……。

まぁいいか。

私は織斑家に居候になって、早３日目になりました。

……初日を入れるかどうか判断しかねるけど……。

で、問題が起きました。

世間一般では織斑家の２人は学生であり、家にはいないのです。

そう、学校に行っています。

そしてなぜか目の前には２つのお弁当。

そう、２人ともお弁当を忘れていくというミスをしたのです。

どうしたらいいか迷っているうちに、お昼が近いです。

２人ともお弁当が無くて、お腹をすかせるかもしれません。

……一夏だけは、何とかなりそうな気がしますけど……。

というか、小学校低学年でお弁当って言うイベントは遠足なのでは？

いやいや、あり得ないあり得ない。

そう考えているうちに、私はある決断をしました。

↓　お弁当を届ける？

　　お弁当を届けない

お弁当を届けます、いいですか？

↓ＹＥＳ　／　ＮＯ

という事で、場所を確認します。

よく使われていると思われる、周辺の地図を見つけ出し場所を確認します。

すぐに見つかりました。

……一夏でしょう。

一夏がマーカーか何かで、お世辞にもきれいとは言えない目印を地図に書いていました。

「俺の学校」「姉ちゃんの学校」と。

いやいや、学校は君たちの所有物じゃないからね。

……くだらない思考は切り捨てましょう……。

場所は確認でしました。

直観像素質で汚い地図を覚えます。

……いやいや、昨日のあれは忘れよう……。

……無理だけど……。

とりあえず出かけるとしましょう。

お弁当とお財布を持って、織斑家を出ます。

最初は小学校です。

位置的にも近く、おそらく中学校よりは昼食は早いでしょう。

現在の時刻は１１４１時……。

ああ、違う違う。

１１時４１分ですね。

あ、４２分に今なりました。

散歩がてら歩いていけば、余裕で間に合うでしょうが……。

もし遠足でしたらどうしましょうか……。

フリーダムで飛んでいく？

お弁当の中身は保証しませんけど……。

……無いよりはましでしょう……。

そう考えながら歩きます。

熱くもなく涼しくもなく、快適な陽気です。

……子供っぽくないですね。

とりあえず、すごく味気ない道を歩いていきます。

……めんどくさいので、早足で動きましょうか……。

と、考えているうちに小学校の校門が見えてきました。

さぁ、イベントがあったりしたら大変です。

とりあえず忍び込むのはもの凄くあれだったため、近くを通りかかった女性教師を呼びとめます。

いや、「なにウチの生徒？」みたいな顔してるんですか？

いや、小学校行く気ありませんよ？

とりあえず、要件をさっさといいましょうか。

「え～っと、織斑一夏くんをご存知ですか？」

最初は丁寧に行かないとね♪

「……あ、知ってるけど、どうしたのかな？」

この先生、すごく変な目で見られてるな……。

……ああ、口調と容姿が一致しないからか。

……どうでもいいよ。

「ええ、お弁当を届けに来たんですけど。」

そう言って私はお弁当を見せます。

それを見て、先生は「あそこの教室だよ」と言って指を向けます。

どうやら、イベントは起きていないようです。

よかった……。

「ありがとうございます。」

私は時間を確認しました。

１１時５９分。

ちょうどいいですね。

授業が終わったのか、その教室が突然騒がしくなりました。

……さて、お弁当が無い一夏はどう出るのか……。

私は廊下からこっそりのぞき見ます。

先生たちが不審な目で見ますが、無視でいいでしょう。

煩わしいな……。

うっとうしいな……。

そう思いながら、観察中です。

……千冬さんの方も行かないといけないので、さっさと終わらせたいです。

あ、一夏がかばんを開けました。

……ランドセルですよ？

かばん＝ランドセルです。

そして中を見て、口を開いてます。

ようやく知った、お弁当が無い状況。

……さぁ、一夏どうする……？

お、箒がお弁当を持って近付いてきてます。

何か話してますね。

まぁ、お弁当が無い事についてでしょう。

ゆっくりと教室に忍び込みます。

「……当、持ってくるの忘れた……。」

お、一夏の声が聞こえますね……。

ゆっくりと一夏に近づきます。

ん？

箒が何かモジモジし始めました……。

「だったら、お弁当を分けてやろうか？」

お、顔赤いですね～。

……というか、お弁当要らなかったかな？

この場合の判断に迷います。

ここでお弁当を渡すと、箒が拗ねてしまうでしょう。

で渡さなかった場合、一夏がクラスから何か言われそうですね……。

……あと、お弁当ももったいないです。

仕方がありません。

箒には悪いですが、お弁当を渡させていただきましょう。

「一夏。」

「ん？　あ、リリィ！」

声が大きいです。

周りからの視線が集まります。

たまに口笛が聞こえますが、無視でいいでしょう。

というか、なんで口笛??

「はい、お弁当。」

とりあえず、渡しておきます。

「……どうしてここに?」

一夏の声がよく分からない物になりました。

まぁ、仕方がないでしょう

「千冬と一夏のお弁当を、配達に来ただけ。」

そう言うと、こちらを見ていた者共にウインクをしておきました。

……サービスは良いかな?

「じゃぁ、千冬にお弁当届けに行くから。」

私はその言葉を残し、教室を去りました。

……箒の視線が痛いです……。

箒の機嫌を直すため、好きなものでも作りましょうか。

そう考えながら、私は中学へ向かいました。

０１９　弁当（後書き）

まえがきに「束ルート」とか書きながら、束出てねぇｗｗｗ

まぁ、お弁当を忘れた織斑の２人のお話、前編ｗｗｗ

後編は……完全にトラブルに巻き込もうか……。

０２０　拉致（前書き）

……もう１話追加しないと、収まりそうにないな……。

０２０　拉致

……どうも、リリィです。

今現在私は拉致されています。

え……？

拉致と言っても弁当を届けに来た千冬のいる、学校の生徒にですけど……。

「……まてぇぇぇぇ！！！」

で、追いかけてきてるのは千冬ではなく束ですけど……。

……なんでさ……。

すでにウサミミが、鋭くとがってますよ……。

というか、なんで校内でウサミミなのっ！？

……まぁ、束だからしょうがないか。

けど、担がれた状態だから、何も出来ないのも悔しいね……。

一般人を怪我させるわけにもいかないしね……。

……そう。

目をつぶって、思い出そう。

……中学校についた瞬間、事務室に行った。

「……織斑千冬に届けモノがあるんですが……。」

そういうと、ここでも奇異の目で見られた。

問題は通された後だ。

「千冬は、っと……。」

探しているうちに束に見つかった。

「やっぱリリィちゃんがいたよ～☆」

なぜ見つける……。

まぁ、束に聞けば分かると思い聞くと、簡単に会えた。

「はい、お弁当です。」

「すまないな……。」

少し驚いた顔をしてたけど、お昼をどうするか悩んでた様な顔だった。

……持ってきて、よかった……。

そして、束が引きとめる中帰ろうとしたら拉致。

今に至るというわけだ。

というか、誰が私を拉致したの？？

つか、よく私を抱えて走れるね……。

「まてぇぇぇぇぇ！！」

それを追いかけるのは、何度も言いますが黒いうさぎです。

というか、束のキャラが崩壊してないか？

なんだあの束？

「ここならいいか？」

そう言うと、私を拉致したヤツはとあるドアの前でとまる。

「止まったなぁ！！！」

束がポケットから何か出す。

小型の……銃？

え、もしかして白騎士用に作った予備装備？

……まずくない？

人に向けて撃ったら、死んじゃうよ？

……って、冷静に考えてる場合じゃないっ！？

「た、束待った！！」

「リリィちゃんに言われても、私は今だけは止まらない～！！」

そういうと、銃口に光が集まる。

てえぇぇえ！？！？

光学兵器！？

熱量多すぎじゃねっ！！

ああ、突っ込みに思考が取られてる間にもの凄い状態にっ！？

「死ねぇぇぇ！！！」

いや、殺しはまずいって！！

「篠ノ之さん！！」

ん、拉致った相手が話しかけたぞ……。

「懺悔かい？」

「いいえ。」

「あっそう、なら死んで。」

そう言って銃を撃つが……。

それを見過ごせるほど、人間冷めてないんで……。

……とうことで、銃口を蹴り近くの窓に向ける。

その瞬間、一筋の光条が窓ガラスを包み込み……。

光条が伸びた先……近くの山に当たり大爆発を起こす。

……威力パネェ……。

じゃなくて！！

「人に向けて撃ったらダメでしょ！！」

注意しないと。

だが束は首をかしげる。

「人？　何処にいるのかな？」

……そうでした……。

この人、根っからの他人嫌い……。

私とすんなり話していたから忘れていた……。

千冬が言った「他人嫌い」とは、こういう事だったのか……。

拉致った相手……って、女かよ。

よく私を持てたな……。

まぁいいや、この人涙目だよ……おい。

「……さ、さすが……変態研究者（マッドサイエンティスト）……篠ノ之さん……。」

あ～あ、ついに泣いちゃってるよ……。

声に出さないけど、すっごい涙多く流してるよ……。

まぁ、怖いよね？

普通。

「で、リリィちゃん行くよ。」

「あ、うん。」

……かばう義理もないけど、ココにいる義理もないしね……。

さて、帰ろうか……。

「ま、まって！！」

おぅおぅ……。

今の束に止めるとか、勇気あるね……。

「お願いです、放送部に力を貸して下さい！！」

振り返ると、土下座してますよ……。

「……。」

……ああ、この人オール無視だよ。

かわいそうだな……。

別に他人だし、本当は思ってないけど。

「１回、１回だけでいいです！！　放送を、放送をしてください！！」

……意味分からない……。

その思いを受け取った……というわけでもなく、喋り続ける女子Ａ。

「男子にも冷たい態度が良いって……。　容姿も声も何もかも最高の貴方が放送してくれればっ！！」

……訳分からんな……。

だが……。

冷たい態度が良いって……ＨＥＮＴＡＩだな……。

サイエンスに乗ったツンデレに、「このＨＥＮＴＡＩ」と言われ続

ければいいんじゃないかな？

どうせMでしょ？

束はその言葉を聞かず、歩き続ける。

……置いてかれるな……。

私も帰ろうか……。

そう思っていました……。

次の一言がでなければ……。

「そこの子を一緒にでいいですから。」

……止まったよ……。

ウサミミがやばい感じで、動いてるよ……。

もう、あのウサミミが不思議すぎて怖い……。

「……リリィちゃん？」

なんか束が言いそうなこと分かる……気がする……。

「やるよ♪」

……そう来ると思いましたよ……。

つか、なんでやる気になったんだ？

束が私を見る。

っ！？

目が怖っ！

不気味すぎて、めっちゃ怖い！！

「……ふふふ、ここで好感度アップだよ～☆」

……不純な動機すぎる！？

というか、あの言葉冗談じゃないのかっ！？

それとも引きずってるのか！？

結局、残りの昼食時間……。

放送室にこもる事になりそうです……。

……せめて、これ以上めんどくさい事にならないようにしないと……。

束に押され、誰もいない放送室に入る時……そう……思いました……。

０２０　拉致（後書き）

ウサギが鬼です。

捕まえる相手は、リリィです。

……メイト・メロブ・とらに午前中行ってきました。

ＩＳ系の物が多くなってきましたね……。

０２１　放送（前書き）

……今回は色々まずい気がする……。

021　放送

皆さんどうも……。

今回も私リリィがお送りします。

拉致事件がありましたが、一応解決。

……したはずなんですがね……。

ん？

あれ？

ツッコミとか事件とかで、テンション変わったのかな？

ですます口調が消えた……。

……そうです、私低血糖です。

嘘ですよ。

後付け設定な感じで、無理やりテンションが低いのは午前中というような理論を組み立てようとしました。

……どうでもいいですよね？

さて、本調子に戻ったようですし……何をするんでしょうねぇ？

今目の前では、束がもの凄い勢いで機材をセットしてます。

放送機材です。

放送に関わっていないはずの束が、一人でセッティングしてます。

まぁ、私もできますが……。

古い機材ですので、束だけで十分でしょう。

私は現実逃避してます……。

「リリィちゃん♪」

……どうやら、神は私を見捨てた様です。

現実逃避の時間さえくれません。

あ、テンション下がったせいか、口調が元に戻った気がします。

よし、これなら多分大抵の事には動じないでしょう……。

束がすごくいい笑顔で、手招きしてます。

テーブルをはさんで対面する様に座ります。

テーブルの上にはマイクが2つあるだけです。

……あれ？

……何しゃべればいいの？

訳が分からないまま、放送の開始時間の様です。

時間というより、束が放送ボタン押しました。

……はい。

学校中の放送が入った事でしょう。

「やぁやぁ、今日は天才の束さんが喋って上げよう☆」

上から目線だなぁ……。

「パーソナリティーは、私と……。」

パーソナリティー？

ラジオ番組じゃないよね？

……まぁいいか。

「リリィです。」

そう言って考えた。

……これは……束に主導権を握らせた会話になるのか？

私の頭にある一つの公式が浮かんだ。

ボケは束で、他は全員ツッコミ。

……いやいや。

そりゃないよ……。

「さて、なんかめんどくさい事になっちゃったんだよね～。」

はっきり言ったな～。

「まぁ、リリィちゃんとやれるんなら、別にいいんだけどね♪」

……その言葉は、多分放送の女子Ａにえさを与えてるだけの気がする……。

「……リリィちゃん～。　何か話してよ～。」

急に振るな！

……ええい、何かネタは……。

……？

あれ？

ひょっとして私ノリノリだったり？

……別にいいよね！

「あ～そうだね……、って。　私の事知ってる人、この学校にいな

いじゃん！！」

「ん？　私とち～ちゃんがいるじゃん。」

「いやいや、他の人だよ、他の人！」

「？？」

「頼むから、「他に人なんていた？」って顔しないで！」

……ああ、想像通りのツッコミ役だよ……。

別にボケる必要もないからね……。

「……自己紹介、良いですか？」

「え～、私達が知ってるだけで良いじゃん～。」

「……リリィです。　子供です。」

「ってスルーされた！？　しかも紹介味気ない！！」

おおぅ！？

束がツッコミに回ったよ。

面白いな～♪

「……特技は……潜水３．６００秒です。」

「お～すごいね～。」

「……。」

「……。」

「……ツッコミなし？」

「え？」

「いや……「３．６００秒は６０分って、ながっ！？」みたいな……。」

その言葉に束は、首をかしげる。

「え？　出来るんじゃないの？」

真顔でそう言ってきたよ……。

「出来るわけ無いじゃん……。」

出来たら、私人間じゃないよ……。

「さて、そんなこんなで始めるぜぃ♪」

「まだ始まってなかったの！？」

始まって４分立ったよ！？

立ってるのに開始もしてないって……。

それからの会話内容は……。

書いちゃいけない気がするけど……。

「ラジオネーム「〇たま」。　男なのにこの間、女性下着の紙袋を買いました」とか「卵を電子レンジにかけたら……」とか「この周囲で、時たま青い天使が見る事ができるそうです」と書かれた紙……というか、はがきが近くにたくさん置いてあったため……暇つぶしにネタにしました。

……今までこの学校の放送は、ラジオかなんかだったのでしょうか？

完全にラジオかなんかの感覚ですよ？

……束が笑いながら、読んだモノに引いている。

……すっごいシュールだよ……。

まぁ、楽しめてるのならいいのか？

いいのかな、良いんだよね？

なら、私も最後まで付き合うとしましょうか……。

０２１　放送（後書き）

……王国民の皆さんに、殺されそうな気が……。

なんか、微妙に反感食らいそう……。

- - 1　武器（前書き）

ＺＧＭＦ‐Ｘ３０Ａの兵装ウイングです。

あ～、これを使いたかった……。

追加で腰兵装もどうぞ。

--1　武器

＞i22761－3045＜

＞i22762－3045＜

＞i22778－3045＜

以下内容

・初期構想時　ドラグーンを保持した中羽。
フリーダムから考案したため、ハイマット時にはあまり動く事がない。

・ドラグーンを保持した中羽以外。
基本的にストライクフリーダムと変わらない。
ただし中羽に近い一枚の羽は、バラエーナプラズマ収束ビーム砲を保持するための軸がある。

・決定時　羽付きドラグーン（一部）
初期段階では、短すぎた羽とドラグーンを少しばかり長くしただけ。
少しばかり細かく書いたのは御愛嬌。
もうちょっと長くても良かったのではと、思っている。

・バラエーナプラズマ収束ビーム砲

完全にフリーダムと同様。
今回も羽一枚で保持します。
ただし強化されているので、威力はかなり向上しています。

・決定時　ドラグーン
初期設定時の羽についたドラグーンより、少しばかりデザインに凝った。
だが、MG（マスターグレード）ストライクフリーダムと似た感じになった事に、目を疑った。
ちなみに、形は少し修正したがほとんど変わっていない。
修正場所は膨らみ。
たぶん、中の細かいところはMGストライクフリーダムの受け入れが強い。

・初期設定時　翼（片翼のみ）
９つのドラグーンを装備しているため、大きいというより太く見えるが、そこまで太くはない。
翼とドラグーンが小さいだけ。

・ラフ　ハイマットモード
中羽を軸に左右に展開。
身体の左右と後ろに広がる。
機動性はスラスターを連続して使う事で、細かな動きができる。
ただし、かなりの使い手で無いと機動性はかなり落ちる。

リリィはこれを使いこなす事が出来る。

シュペールラケルタビームサーベル

ストライクフリーダムに付属していたのと同様のサーベル。
連結することが可能。
最大連結４つ。
長さも変える事が可能。

２つ　持ち手と持ち手をつなげる、スピアモード。
３つ　スピアモードのどちらかのサーベル口に、さらに一本つけてサーベルを伸ばすとい

う、中距離サーベルモード。
４つ　スピアモードを互いに連結させた状態で、片方に刃を展開する遠距離サーベルモー

ド。

レール砲（レールガン）

隠し砲門は、待機状態でなければ出せないという厄介な欠点を持っている。
そのため、必要な時は常時展開している時もある。

ちなみに展開方法は、ストライクフリーダムのクスィフィアス・３レール砲の砲身が横にず

れるだけだ。

なお隠し砲門なしで撃った場合、隠し砲門を通して弾が出るのだが、この時の排気ダクト

は隠し砲門のダクトではないので、問題がない。

--1　武器（後書き）

これだけで妄想膨らんだ、当時の私……。

ただの良い所取りの兵装ウイング。

０２２　作戦（前書き）

ようやく白騎士事件に入れる……。

あと総合ＰＶが１０万越えとユニークが１万越えました。

というか、昨日だけでＰＶが２６．０００……ユニークが１．９００って何が起きた……？？

022　作戦

さて、リリィが織斑家に居候して2週間は経っただろうか。

千冬にリリィは、教えれる事は教え込んだため白騎士を表舞台に出そうと思っていた。

だが、白騎士より先に目立つモノがあったらしい。

いま、巷ではこんなうわさが流れていた。

「とある市で、青い機械の天使が現れる」という物だ。

そう、フリーダムだ。

色々やっていくうちに、フリーダムは色々な人に見つかるようになった。

発見されるのは最小限にとどめようとしたが、「青い機械の天使」という言葉が良いのか、日に日にその市には人が集まってくる。

というか、リリィ達がいる市だ。

写真家もフリーダムを探すからか、ＵＦＯみたいな話題になってしまった。

おかげで軍とかもその実態を確かめるために、陸上自衛隊を投入するなどめんどくさい事この上ない。

しかも、Ｘ３０Ａの性能実験中のときの写真が出回ってしまった。
写真家が、上空をみた時にいたので慌てて取ったそうだ。
少しピンボケはしているが、何枚も写真に撮られているため現実にいるという事が、世間に広まった……。
おかげで、白騎士のお披露目はかなり早い事になった。
「……ということで～、これらは宇宙空間を行動可能にするパワードスーツだよ～。」
束はリリィを連れて政府役員に白騎士の説明をしていた。
だが、それを聞いている者たちの顔は何ともいい難いものだ。
実際「そんな事が出来るわけがない」やら「空想もいい加減にしろ」やら「出来ないという事も分からない馬鹿なのかね」と聞えてくる。
「私は説明したよ？　ちゃんと聞いてない貴方体が馬鹿なんでしょ？　あ、元からか☆」
論より証拠……という感じでいいのなら見せるが、束が作ったのは白騎士だけだ。
リリィが持っているのはフリーダムであって、束が作った物ではない。
結果、理論で理解させるしかなくなった。

しかし、馬鹿にされる一方。

一部入室を許可された学者たちは真剣に聞いており、無下には扱わなかったがやはり受け入れてもらえはしなかった。

誰にも受け入れてもらう事はなく、白騎士は歴史に残ることなく消えかけた。

それを黙って見ている束ではなかった。

「という事で、今から事件を起こしたいと思います。」

訳の分からない発言に、目を丸くするリリィ。

この間にツッコミ役の千冬がいたら、何か変わったのだろうか？

おそらく変わらないだろう……。

なぜ千冬がいないのかというと、真面目に学校に行っているからだ。

束はリリィに向かって言い続けた。

……というか、事件って……。

そう思っていると、束が笑い始めた。

正直、いつものことだったのでそれほど驚かない。

「作戦は……白騎士とフリーダムの性能を見せつける！！」

「……。」

とりあえず、天才さん……何を考えてるんですか？

リリィは肘を近くのテーブルに乗っける。

大体なんで、白騎士じゃないんだ？

「私はね……気がついたのだよ……。」

何にだ……。

顔に出しても声に出さない。

「ミサイルで国会議事堂でも狙おうかな～って。」

……おい。

「何を考えてんだ、馬鹿。」

そんな言葉にも、束は動じない。

「私の子を認めさせるには、そのくらいしないといけないんだよ～！」

……やはりこの人は、馬鹿だ。

……だが……楽しそうだ。

束はどんどん作戦を説明していく。

……内容は悪くはないのだが、確実に逮捕される。

内容は各日本を射程圏内に置いた基地のミサイルを、基地ごとハッキングして国会議事堂に打ち込むという物だ。

国を構わずハッキングして、人の手では無理と思えるほどの量を撃つ。

それを白騎士とフリーダムが迎撃するという物だ。

ハッキングにテロ行為……。

どれも犯罪だ。

だが、そうでもしなければ頭の固い奴には分からない。

理解しようとしなかった、馬鹿どもの自業自得という事で諦めてもらうとしよう。

０２２　作戦（後書き）

……せめて、これだけは投稿して寝よう。

……なんか、当初思っていたシナリオと違うけど……まぁ、良いか。

023　開幕（前書き）

白騎士事件にたどり着いた……。

だが、本編はまだまだ遠い。

023　開幕

「で、束を止める事はできなかった……むしろ、お前までそれに乗るとは。」

「はい……。」

千冬に今まで起きた事を、とりあえず話した。

千冬はリリィの言葉に、ため息をつくだけだった。

リリィの後ろでは、束がパソコンを打っている。

画面には、何本もの線が日本に向かっている。

どの線一本が、ミサイル一つだそうだ。

発表から結構立ったが、まさか本気で全射程圏のミサイルを発射させようとするとは……。

「ふふふ、びっくりした？」

「ああ、この上なく……な。」

千冬が眉を小刻みに動かしている。

かなり怒ってるな……。

ちなみに、発表から少しの間暇だった。

白騎士に目を向けてもらえない。

その間、束とリリィは白騎士の追加兵装や量産化の目途を立てていた。

最初は「ね～暇～。」「暇ですね～。　はい、アイス」「わ～ありがと～♪」とかなり和んでいたが、そのうち暇だったため白騎士をいじっていたのだ。

そして一言。

「私の子が世界にいっぱいいたら……。」

とのことで、量産化が思いついたこと。

事件を起こすにはまだ早いと、リリィが説得し何とかミサイル発射は留まってもらえ、量産化に力を入れていた。

そして、昨日リリィが「そろそろ、事件起こしましょうか？」との一言により、各国のミサイルをハッキングしている。

千冬にも昨日「明日大事な用事があるので、学校休んでくださいね」と、言っており今さっき説明したばっかりだ。

千冬も政府官僚に白騎士が認められなかった事については、かなり怒っていたのだが……、ミサイルの目標地点を聞いた瞬間怒る気が失せた。

「さて、これでかんりょ～う♪」

そう言って両手を上げる。

「……さて、やりますか。」

そう言ってフリーダムを起動させる。

だが、形は今までのとはかなり異なっていた。

千冬はまじまじと見る。

「お前のそれは、相変わらず訳分からないな……。」

……うん。

私もそう思う……。

ボディはそんなに変わらない……のだが、兵装がまずい……。

腰にはフリーダムと同じ形のレールガン。

だがそのギミックはフリーダム以上……。

サーベルが通常の2倍。

2本ではなく4本。

レールガンの発射口も2倍の2門。

色々制限かかっているが……。

羽もなぜか倍以上。

１０枚でも８枚でもなく、１８枚の翼。

そのどれもが誘導兵器を装備しており、さらにフリーダムのプラズマビーム砲まである始末。

ライフルもフリーダムの物と似ているが、２つある。

連結はできるし、隠しているサーベルを銃口に付けて銃剣として使う事もできる。

腹部にも、ビーム砲あるし……。

ぶっちゃけ、ファーストシフトの兵装を変えただけだ。

そして、はっきり言って超広域殲滅型だ。

今回のミサイル迎撃には、もってこいなのだが……。

……白騎士がほとんどやらないと、白騎士の性能は馬鹿どもには分からない。

まぁ、フリーダムと白騎士を同視するだろうから問題ないんだが……。

千冬がフリーダムを見て呆れ、白騎士を起動させる。

相変わらずの眩しいまでの白い装甲。

装備は剣一本だけだが、千冬にはこれ以上ない武器だろう。

改良した白騎士は、起動性能や反射速度、センサー系を最高状態まで持って行った。

フリーダムには叶わないだろうが、量産化されている姉妹機には今後追いつかれる事はない。

剣もエネルギーを使いビーム刃を展開する事も出来るし、それを飛ばす事も出来る。

「ミサイル距離７．０００～☆」

束の声にリリィは考える。

……さて、全方位から来るミサイルをどうやって片づけようかな……。

まぁ、ドラグーン使うか……。

「……行くぞ。」

そう言うと白騎士は先に空に駆け上がった。

リリィはそれを見て目をつぶる。

「……行ってきます、束。」

フェイズシフトと呼ばれる、防御装甲を展開させる。

グレーの色から、瞬間的に青、白、赤、黒に近い藍色に色がつく。

青い機械の天使が、そこにいた。

そして目を開けて少し膝を曲げる。

「リリィ、ストライクフリーダム・フェニックス出る！！」

その声とともに、あり得ない速度で天使が空に向かって飛んで行った。

０２３　開幕（後書き）

ＺＧＭＦ－Ｘ３０Ａ　ストライクフリーダム・フェニックス

……Ｘ２０Ａ改でも良い様な……。

まぁ、いいや。

名前はフリーダムでもよかったんだけど、シフトごとに名前あるんだからね～。

一応つけたｗ

【武装】

ドラグーン　×１８
背部プラズマビーム砲　×２
腰部レールガン　×４
腹部ビーム砲
連結可能ビームライフル　×２
連結可能ビームサーベル　×４
両腕ビームシールド　×２
対空バルカン砲塔システム　×２

０２４　事件（前書き）

ようやく、白騎士事件だ……。

０２４　事件

さて、そろそろミサイルが射程距離にきます。
たのし～ね～☆

……いやいや、束のまねしても面白くない。

「作戦は何かあるか？」

千冬が近づいて質問する。

……う～ん、ち～ちゃんには悪いんだけど、私一人で十分なんだよね～。

……やっぱ似合わないな……。

束口調で言った場合、確実に引かれるよ……。

だって男だからね。

まぁ、白騎士を作戦に加えた戦闘プランは出来てるから、それでいっか。

「ん～じゃぁ、とりあえず……私が大体撃ち落とすから、撃ち漏らしお願いね～。　ち～ちゃん☆」

あ、思った事が口に出た……。

束口調……感染率恐るべし！！

しかも、束しか呼ばない千冬の愛称呼んじゃったし……。

……バイザーで見えないが確実に引いてるよ……。

絶対……。

行動に露わしてないけど、絶対引いてるよ……。

「……束のまねをするな……馬鹿が増えたと思って間違えて切るかもしれない……。」

……うわぁぁ。

私、死亡フラグ踏んだ？

と、とりあえず……。

迫ってくるミサイルをどうにかしよう……。

うん、そうしよう。

「じ、じゃぁ……出来る限り撃ち落としてくるね～……。」

そう言って高度をさらに上げる。

せいぜい２０ｍぐらい上昇しただけだが。

「……私の分残しておけよ。」

千冬がそう叫ぶ。

はいはい……。

そんなに試したいのね？

少しは残しておきますよ～っと。

「さて……何発接近してるかな～。」

そう言いながら、広域レーダーを展開しミサイルを数える。

……ん？

レーダー上で、フリーダムを中心にミサイルの点が接近してくる。

その数……たくさん。

点がたくさん近づいてきていた。

……何発撃っちゃってくれてるの……。

レーダーが勝手に数を計測してくれている。

レーダーの右下あたりに、カウンターが現れる。

その数、１．７２８。

まだまだ増える。

1．７２９、１．７３０、１．７３１……どんだけ増えるんだよ……。

多分２．０００以上はあるな……。

はぁ……８割落とせばいいかな？

そう思いながら、レーダーを消す。

ちなみに、なぜかレーダー系は頭の中に画面が現れる。

目に見える時もあるし、ただ分かるって言う時もある。

だが、白騎士のように機体周囲にモニターが浮かび上がるという事は、戦闘中には無い。

ちょっと前に不思議に思った事だが、機体周囲に展開されるともの凄く戦闘の邪魔になる。

それだけは勘弁願いたい。

だから……まぁ、これはこれでかなり助かるのだが、どうなってるんだ？

おっと☆

ミサイルが接近しまくってるよ……。

大体のミサイルを、フリーダムの全シフトに搭載されたマルチロッ

クオン・システムで捉える。

さて……派手に行きますかァァァァァ！！

そう思った瞬間にドラグーンが１８基全部翼から離れ、周囲に展開される。

さらに、翼から長い砲塔がでてくる。

腰のレールガンが一部横にずれ、砲門を展開する。

手のビームライフルも構え、迫りくるミサイルに砲身を向ける。

「……バ～イ♪」

そう言うと、全砲門から光があふれた。

色鮮やかなビームや、砲弾が放たれる。

それらがミサイルを瞬時に撃ち落とす。

「……。」

千冬は呆然とそれを眺めていた。

ただ一言「……狙撃の域だな……お前の遠距離射撃全ては……」と呟いていた。

そう、全て当たったのだ。

ビームは先頭のミサイルに当たると、勢いと殺さずそのまま直進する。

レールガンは弾頭という事もあって消えたが、あり得ない速度と電気を纏った弾頭はかなり直進し、ビームと同じくらいのミサイルを消滅させた。

それら爆発が連鎖し、ミサイルを徐々に減らす。

たった十秒以下の攻撃で、ミサイル１．１２０発がレーダー上から消えた。

だが、さらにミサイルは増える。

「ち～ちゃん出番だよ～♪」

やべ、染みついた……。

束口調でそういうと殺気を飛ばされたが、白騎士がミサイルに向かって飛んでいく。

これで打ち止めなのか、レーダーがミサイルを更新しなくなる。

１．２２１発。

破壊したミサイルと合わせて、２．３４１発。

キリが悪いこと、この上ない……。

……後……いや、今のところは白騎士に任せるか……。

そう思いながら全砲身を元に戻す。

白騎士はミサイルに向かって、剣を振り破壊していく。

それを見たフリーダムは、ビームライフルを連結させ上に向ける。

そして一条の光が、空へ伸びた。

……1つ目。

……2つ目……3つ目……。

そう思った瞬間には、再度引き金を引いていた。

ちなみに、なにを数えているのかというと……。

「～♪」

日本以外のこちらを監視している、衛星の破壊した数だ。

さすがに監視されるのは面白くない。

だが監視された映像が無ければ、白騎士は表に出ない。

なら最低限の情報だけを与えるため、いらない衛星の排除をする。

これを作った外国の皆さんは、面白い声をあげてるんだろうな～☆

……いかんいかん。

束に似てきたぞ……。

満足したのかビームライフルを、またミサイルに向ける。

「援護するよ。」

そう言って、白騎士と共にミサイルを全部消滅させていった。

０２４　事件（後書き）

頭の中では、なぜかリリィが一夏ハーレム……起動二回目だからセシリアだけだけど……ボッコにしてるシーンが浮かぶ……。

なぜだ……。

このシナリオの未来だな……うん。

セシリアファンには、悪いけど……たぶんそうなると思う。

０２５　世界（前書き）

……こっからどうするか……。

意外とシナリオが思い浮かばない……。

025　世界

まぁ……みなさん白騎士の活躍に、呆然としてますよ。

ミサイルを切って、半数を消滅させたからね～。

ん？

フリーダム？

うん、なぜか映って無いね？

という事で、今現在束と千冬と一緒にニュースを見ています。

場所は織斑家。

ミサイルを完全消滅させてから、来たのは戦闘機でした。

さらに空母や巡洋艦なんかも出てくる始末。

とりあえず光学兵器が無かったため無視したが、攻撃してくる。

ウザかったので全砲門開いて、相手の攻撃オプション全部つぶしちゃった♪

戦闘機は白騎士がやったんだよ、私はやって無いよ。

嘘じゃないよ、嘘だよ☆

まぁ、訳の分からない事を考えてないで現実を見ようか……。

テレビには、衛星の映像が映し出されていた。

しかも鮮明に……。

……今の技術ってすげぇ。

だけど、ほとんど映っているのは白騎士だけ。

フリーダムはちょくちょく映っているだけ。

そりゃ一斉射撃以外、後方で援護していただけだしさ……。

≪これを開発した篠ノ之博士は、どうなるのでしょうかね？≫

テレビでは、さっきから同じ事を言っている。

弾には別の事を言えよ……。

≪分かりませんが、ミサイルをハッキングしたのは彼女でしょうな～。≫

お？

正解だよ、おっさん。

≪そうすると、テロ行為ですか？≫

≪そうなりますね～。≫

そうなりますよね～。

本当に……。

めんどくさい。

当の本人は、どうでもいいのかただ眺めているだけだ。

最近分かるようになったが、私は束の無表情から何を考えているか分かるようになった。

まぁ、記憶と照らし合わせてるだけで、正確には分からないけどね。

≪……篠ノ之博士の発表……このパワードスーツの事をないがしろにした者への、性能の見せつけという事でしょうね。≫

おぅおぅ。

勝手なこと言ってくれるね～。

……その通りだけどさ。

千冬も束のように、ぼーっとしている。

≪世界は、篠ノ之博士の発明に注目しないといけないようですね？≫

≪そりゃぁ、アレに対抗できる発明なんてありませんよ。　今後博士は技術面で狙われるでしょうね。≫

やっぱり～？

≪あれは、篠ノ之博士の説明で白騎士と呼ばれていたようですが、コレはコレの名称なのでしょうか？≫

≪と、いいますと？≫

≪……この画面の、ああ、ココ。　ココに映っている青い羽根の機械なんですが……。≫

テレビの中の画面が、さらに分割され小さいがフリーダムを映す。

≪ああ、コレね？≫

≪コレも白騎士何でしょうか？≫

……。

フリーダム指して、白騎士とほぼきますか……。

≪分かりません。　ですが博士は総称をＩＳ（インフィニット・ストラトス）と呼んでいましたと、報告を受けています。≫

……。

……フリーダムだって言ってんだろ……。

フリーダムはＩＳの類じゃないって。

私も束も分からないんだけどね♪

殴るぞ、おい……。

以前、束と千冬は呆けている。

≪これが白騎士と言うのでしたら、こちらは天使ですかな？≫

ああ、もう。

勝手に名称決められてるし。

≪たった今、国が今回の事件を白騎士事件と名称しました。≫

……だからなんだよ……。

名称が何ですか……。

≪それと同時に、篠ノ之博士を指名手配する事にしました。≫

……うん。

よく聞こえなかったな。

今何て言った？

≪世界から狙われますね。≫

≪あの技術があるだけで、世界経済的にもトップを取れますからね。≫

≪指名手配を受けた篠ノ之博士と白騎士、並びに天使の情報を国家は探しています。≫

その言葉と共に変なテロップが流れ、字幕が出る。

電話番号だ……。

……って、うん……警察だね。

名実ともに、お尋ね者になっちゃったね。

って、マジかよっ！？

想像はしていたけど、マジかよっ！？

そう考えていると、突然束が立ち上がった。

「そうだっ♪　旅に出よう～☆」

０２５　世界（後書き）

……どうしよう……。

旅を書くか……書かないか……。

考えるの面倒だな……。

０２６　感謝（前書き）

……どうしてこうなった……。

今気付いた……料理した時の玉ねぎの匂いが手から取れてない……。

今日は、長風呂にしよう。

026　感謝

……旅に出る？

え？

なに考えてるんだ？

「ち～ちゃんは、手配されてないから大丈夫だね。」

そう言って千冬を見る。

千冬も束の言葉に驚愕していた。

「まて、旅って……。」

「リリィちゃんは、私と一緒～♪」

「聞け！」

千冬の言葉も聞かず、束は能天気に喋り続ける。

「束！！」

その千冬の声に、束は喋るのをやめる。

「ち～ちゃん。　ＩＳを発表してから、こうなる事は分かってたんだよ……。」

さびしそうな声で言う。

「だから発表はしない……なんてしないよ。この世界は……。」

その言葉を最後に、束は玄関に向かう。

「おそらく……あと少しで私の家に政府関係者が来るから、それまでに色々準備して来るよ……。」

そういうと、束は玄関から出た。

……束……。

なんで、一人で背負いこもうとするんだ？

なんで、私に……親友の千冬に何も言わない？

千冬は悔しそうな顔で、玄関を見つめ続けた。

テレビは束の顔写真を、公開し始めた。

「リリィ……。」

……泣きそうだ。

自身の力の無さに、泣きそうな顔をしている。

何か言いたそうだが、言葉に出せないようだ……。

「分かってる。」

だが、理解した。

親友を案じる、千冬の心を理解した。

……あいつを、支えてやってくれ。

その言葉が、千冬の顔から出ていた。

「……それじゃぁ……お世話になりました！！」

……最後の別れじゃない。

いずれまた会える。

「……束を頼むぞ……。」

声が震えていた。

その声を最後に、私は織斑家を去った。

「さて、これでよし。」

私は自室で色々と、用意をしていた。

ＰＣのハードは水に入れて、データーを取り出す事を出来なくさせた。

ＩＳの中核を担うコアは、５０個ほど作れたから置いていこう。

う～ん、これを置く事で少しは追手を回避できるだろうし……。

まぁ、私の子が表世界に出るのならいいとしよう♪

いずれ、誰かの手に渡る事なんだし……。

私は一枚の紙を、目立つ所に置く。

そこには、こう書いてあった。

【私は世界中のどこかで、私の子を見守り続ける。　戦争に使ったらめ～だよ☆】

つまり戦争に使ったら、何か不吉な事が起こるという事だ。

……さて、もう思い残す事は無い……。

箒ちゃんに会えなくなるのは寂しいけど、仕方がない。

覚悟の上だ。

「んじゃぁ、さようなら……。」

そして束は、篠ノ之家を去った。

「さて……一人旅の出発だ～♪」

そう言って外に出た瞬間、私は目を疑った。

「んじゃぁ、行く？」

リリィがそこにいたのだから。

冗談で言った、先の言葉。

だが、リリィはそこにいた。

来るはずがないと思っていた……。

私は、嫌われているのだと思っていた。

「……どう……して？」

私は知らずに聞いていた。

リリィは呆れた顔をして、答えた。

「私もお尋ね者だからね……。」

そういう顔は笑顔だった。

私はその笑顔に泣きそうになる。

……ウソばっかり。

……そうやって、たまに私に優しさを見せるんだから……。

白騎士の改良作業の時も、買い物の時も……。

いつもいつも……。

私はリリィに優しくされている。

私は……初めて優しくされた。

だから……私は貴方を好きになった……。

だから……。

「行くよ……。」

そう言って近寄ってくる。

「……くらい、守らせろ……。」

そのリリィの言葉に、束は泣いた。

そして、リリィに抱きつく。

……ありがとう。

その感謝の気持ちだけを思い……。

束はリリィに抱きついて、泣いた。

……ありがとう……優しくしてくれて……。

……ありがとう……居てくれて……。

……ありがとう……私の苦しみを……理解してくれて……。

そして、その場には誰もいなくなった。

０２６　感謝（後書き）

……気がついたら、こうなってた。

……束ルートですね～。

本編ヒロイン出ずに、ルート確定ですよ……。

……しかも、思いなおしたら最終話的なノリだし……。

本編やるよ？

もちろん……。

あと、日に日にＰＶがすごい事になってるんですけど……。

昨日なんか、

約３０．０００ってなに……（正確には２９．７００）。

コレ面白いの？

027　時代（前書き）

私の想像で書いています。

多分解釈が違う所があるでしょうが、その時は指摘お願いします。

０２７　時代

……十年後……。

インフィニット・ストラトス……。

通称ＩＳと呼ばれるパワードスーツ……いや、マルチフォームスーツが篠ノ之束の手によって開発された時、世界の情勢は一変した。

全ての戦闘をする機械をはるかに上回る存在。

ＩＳが世界の軍事バランスを握るほど、その存在は危険視された。

それをはっきりと世界に見せつけられたのは、今から十年前に起きた白騎士事件と呼ばれる事件がきっかけだ。

当時はだれも見向きもしなかったＩＳ。

だからこそ、開発者は日本を……。

それも人が集まっている国会議事堂に、ミサイル２．３４１発を撃った。

世界各国にある、日本を射程距離に置く軍事基地への同時不正アクセス。

強制的にミサイルを撃ち、日本は瞬間的に震え恐怖した。

だが、それを迎撃したのは二機の機体。

一機は事件の名にもされた、白騎士と呼ばれるＩＳ。

もう一機は、青い翼をした天使だったそうだ。

事件は全ミサイルの消滅で片付いたが、事件の犯人であると思われる篠ノ之博士は指名手配された。

彼女にしかできない芸当だからだという理由で……。

日本は彼女の身柄を拘束しようと、篠ノ之家に押し入った所もぬけの殻。

探しても何処にもいない。

ただ、コアと呼ばれるＩＳの中核を担う物が大量に置かれていた。

各国はＩＳと呼ばれる物の核であるコアを欲した。

それも、戦争になろうとこまで……。

だが篠ノ之博士の書いた紙が公表されると、それは収まった。

間接的な、軍事利用不可。

それを破った場合、何らかの災厄が振りかかろう……。

世界は戦争より、こちらを恐怖した。

だが、ＩＳを使いたい。

最先端技術塊であるＩＳを……。

作り出し他国より上の立場にありたい……。

だからこそ、世界はＩＳを軍事利用ではなく競技と言う事に使用することにした。

実質ＩＳが一機あるだけで、他国への軍事牽制となる。

世界は競技と言う名のオブラートに包んで、軍事利用にこじつけようとしていた。

そして作られた、アラスカ条約。

正式にはＩＳ運用協定。

軍事転用が可能になったＩＳの取引などを規制する。

それと同時にＩＳの技術を独占的に保有していた日本への情報開示とその共有を定めた協定。

世界中の科学者と技術者はＩＳを求めた。
そして各国に均等に分けられるコア。
そこから世界は変わった。
だが、誰もＩＳなど作れはしなかった。
未知の技術に、技術者全員が手をあげた。
そんな中、なぜか篠ノ之博士が過去にいた家の敷地内に……。
白騎士のパーツのみが置かれていた。
ほぼ全パーツがそこに置かれていた。
コアと共に……。
大きなニンジンに乗って……。
日本はそれを戸惑いながらも回収。
アラスカ条約に基づいて、情報を開示した。
数年後にようやく、白騎士以来となるＩＳが完成した。
しかし、そこで問題が起きた。
パイロット候補である男性が乗り込んだところ、反応がしない。

開発者は設計ミスだと思った。

しかし、ミスはない。

少しあとに開発された物にも、男性パイロットが乗り込んだが反応が無い。

しかし女性技術者が確認をした所、反応した。

すぐさまその女性を乗せた所、ＩＳは起動。

開発は成功したのだと理解した。

だが、なぜ女性に反応した。

その理由が、世界を変えた。

ＩＳには一つだけ致命的な欠陥があった……。

それは、女性にしか反応しないこと。

つまり、男性はＩＳを動かす事が出来ないのだ。

その事実が公表された時……。

女性優遇の体制が世界中に広まり、女尊男卑の世界と変化した……。

男は町を歩けば、知らない女性から命令されるほどに……。

何事にも、女性優先という認識ができた。

平穏であったはずの世界が崩れ去ったときであった……。

０２７　時代（後書き）

というか白騎士って情報開示されてるけど、どうやって手に入れたんだろ～ね～。

間違ってない？？

作者ものすごい勢いで、原作読み直してるけど……大丈夫だよね？

０２８　早朝（前書き）

イラスト描いてたから、首が痛い……。

疲れたから、文面を確認する気が無い……。

おかしいと思ったら、脳内補正よろ……。

028　早朝

朝日が昇ろうとしている中、長い銀の髪の女性と思える人物が目を覚ました。

その横には、一糸まとわぬ薄紫髪の天才科学者が寝ていた。

起きた方も、ほぼ何も着ていないが……。

……今何時……？

そう思いながら顔を時計に向ける。

見事なスルーをかまし、起きあがる。

「……5時か……。」

……少し早かったかな……？

そう思いながら、服を着る。

……束はまだ寝かせておくか……。

愛しき人を見ながら、リリィはキッチンに向かう。

パンをトースターに入れ、フライパンに卵を入れる。

この十年、野宿したり今のようにアパートやマンションの一室を借りて寝床を確保していた。

一ヶ月あたりで、へまやらかして政府に見つかる事が多いが……これはこれで面白かった。

隠れている間、束とリリィはお互いを愛し続けた。

それは殆ど何も感じない人間だったリリィが、初めて感じた優しさと安息。

共に逃げると決めた日も、リリィはこの感覚を感じていた。

最初は変な女としか感じてなかったが、次第に彼女の存在が大きくなっていった。

お尋ね者通しの傷のなめ合いだと思いたくない。

人としてどこかがおかしい者だからというわけでもない。

ただ、純粋にお互い引かれあった。

それだけだ……。

懐かしみながら、リリィは朝食を作る。

「うにゅ……おはよ～。」

ぺたぺたと足音を立てながら、床を歩く束。

……起きたのか……。

そう思いながら振り返ると、リリィは頭が痛くなった。

「……服着て。」

束は何も着ていなかった。

なにも着ずに束は、リリィに近寄る。

「うにゅ。」

寝ボケているのだろう。

……コンロの火を消して、束を抱きしめる。

音を立てながら、束はリリィの腕の中におさまった。

リリィの身長は、いつのまにか束を越していた。

……ほんの少しだけ……。

ほんの５ｃｍほど……。

それなのに、未だに立派な男の娘。

リリィは束の頭を撫でながら、いつも思っている言葉を言おうとした。

……お願いだから服を着て……。

だが束は気持ちよさそうに、リリィの胸に顔をうずめる。

……やっぱ、言えない……。

ちなみに何年も同じことをやっているので、リリィはこの事態に慣れているのだが、毎回何も言えずに行動に入る。

何年も共にいるが、未だに束の全てを見ると興奮してしまう。

これだけは、いつまでも変わらないだろう。

……落ち着け……落ち着け……。

そう思っていても腰のあたりには、束の胸の感触が感じられる。

いつもならこのまま試合開始してしまうのだが、今日は違った。

「ほら、今日は千冬に会うんでしょ？」

そう。

今日は千冬に会う事に決めている。

千冬は知らないが。

まぁ、サプライズイベントだ。

正確には千冬に合うのではなく、千冬と一夏のいる所に行くというのが正確なのだが。

まぁ、ささいな事だ。

そのためだけに、色々と手をまわしたのだから。

「おはよ～。」

そう言いながらリリィから離れる。

まだ眠いのか、テンションが低い。

この状態は、なにを言っても無駄だ。

適当に、話題を振ってみた。

「今日から、政府に見つかっても大丈夫な期間が始まりますよ～。」

反応が無い。

むしろ、見つかりに行くようなものなのだが……。

「千冬さんに抱きつけますよ～。」

……これも反応が無い。

「一夏に渡すんでしょ？」

その言葉に少しばかり、眼が動いた。

だが、先ほどとあまり変わらない。

「……箒と仲直りするの手伝いますよ～。」

「ほんと！！」

瞬間的に笑顔。

……ウソですとは言えないね……これ……。

難儀な事に、束は朝にめっぽう弱い。

瞬間的にテンションを上げてもらわないと、すごく大変な事になるのだ。

「さて～、今日もがんばりますか～☆」

……何処のサラリーマンだ？

そう思いながらコンロに火をつけ直した。

「あ、そうだ、今日だったね～。」

そう言いながら服を探す。

いつものアリス服に、ウサミミ。

もう、束の半身と言っても過言ではない物達だ。

「うん。　楽しみだね～♪」

そう言う顔は、満面の笑顔だった。

０２８　早朝（後書き）

……原作ブレイク開始します。

次の話から、２、３話程度……一夏視点になるかも……。

029　一夏（前書き）

……一夏オンリーｗｗｗ

しばらく続くぜ！

と言っても、明日には一夏の独壇場は終わるんだろうけど……。

０２９　一夏

織斑一夏は男だ。

それは、一夏を見れば誰もが思う。

華奢というわけでもないし、痩せすぎでもない。

平均的な、男。

身長は高く、中肉中背。

一夏を更に表す言葉としたら、やや野性的。

ワイルドが一番似合うのだろう。

その一夏は、今ものすごく困っていた。

（……女子しかいないって……なんなんだ……。）

女性しかいない場所に、ただ一人の男としているのだから……。

ＩＳ学園。

ＩＳの搭乗者を育成するための、学園だ。

ＩＳの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営及び資金調達には原則として日本国が行う義務を負う。

ただし、当機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産として公開する義務があり、また黙秘、隠匿を行う権利は日本国に無い。

また当機関内におけるいかなる問題にも日本国は公正に介入し、協定参加国全体が理解できる解決をすることを義務付ける。

また入学に際しては協定参加国の国籍を持つ者には無条件に門戸を開き、また日本国での生活を保障すること。

ＩＳ運用協定「ＩＳ操縦者育成機関について」の項より抜粋……。

……あ～ながったらしい……。

まぁ、ぶっちゃけた話……女子高だ……。

ＩＳ学園に女性しかいないのは、ＩＳが女性しか使えない事が理由だから仕方のない事なのだが……。

そこに、一夏はいた。

ＩＳ学園の指定制服を着た一夏がそこにいた。

周りの女性は初めてパンダを見るような視線を、一夏に向けている。

（……中国から初めて来たクマだっけ？　もこんな感じだったんだろうな……。）

クマではない、パンダだ。

しかし、あながちその想像は間違っていない。

彼女たちにとって、男とは初めて見るようなものであり……。

まして、世界でＩＳを使える男となればなおさらだ……。

……試験会場を間違えて、ＩＳに触れたのが運の尽き……。

あらよあらよと、ＩＳ学園（ココ）に流された。

（……何とも泣けるねぇ……。）

世界で初めてと言われているＩＳを操縦できる男性。

ならば、世界がその存在を放置するか？

否、しない。

つまりそう言う事。

世界は、男と言う実験動物（モルモット）が欲しいのだ。

色々な待遇をされ、ほぼ無条件に入学させられた。

……面倒な事この上ないのだが、姉に負担がかかる割合が少なくなるのは良い事だ。

そう思いながらそこにいた。

「……君、織斑一夏君っ！」

「あ、はい！」

呼ばれていた事に気がつき、少し大きな声で声の主を見た。

おかげで、怯えられたが……。

……何か悪いことした？

してないよね？？

大きな声をあげちゃっただけだよね？

だから怯えないでください……。

「え～っと……。」

一瞬頭の中に「中学生」という言葉が思いついたのだが、昔家に住んでいた女の子に「せめて空気が読める程度には鍛えて上げる」と言われ、言ってはいけない事だと理解はした。

理解はしたのだが……この状況を打破する方法は、教えてもらってない。

黄緑髪をショートカットにした眼鏡をかけた女性は、おそらく教師だ……。

多分……。

とりあえず、何か聞いた方がいいのだろう。

「ええと……なんですか？」

一夏的には優しく聞いたつもりだったのだが、目の前の女性は完全に怯えきってる。

……ちょっと凹むな……。

「あ、大声だしちゃってごめんなさい！　お、怒ってる？　怒ってるかな？　ごめんね！　ごめんね！？　あのその……自己紹介、「あ」から始まって、今「お」の織斑君なんだけど、織斑君、自己紹介……してくれるかなぁ？」

……べつに、大声でも無かった気がするけど……。

というか、これでは完全に悪役だ。

……あ、思いだした。

というか、さっき紹介されたっけな。

山田真耶。

確か、このクラスの副担任だ。

「一つ質問いいですか？」

「は、はい？」

「……本当に先生？」

一夏の質問はまともだったのか、数人の生徒が頷いていた。

どう見た所で、高校生……いや、やっぱ中学生にしか見えないのだ。

真耶は少し涙目になりながら「先生ですよ～」と、ずり落ちそうな眼鏡をかけ直しながらそう言った。

まぁ悪気が無かったにしても、女性を泣かせる事はさすがに罪悪感を覚える。

一夏は「落ち着いてください」といい、立ち上がり後ろを見る。

……うっ！？

真耶一人なら何とかなったが、後ろを振り向いた瞬間何ともならない感覚に襲われた。

だが、一夏は男だ。

意を決して、自己紹介をする。

「え、え～っと……織斑一夏です。　よろしくお願いします。」

そう言うと、頭を下げ反応を窺う。

再度頭を上げた時に一夏に向けられたものは、「え？　それだけ？」「これで終わるはず無いよね？」「もっといろいろしゃべってよ」「他には？」というような視線だった……。

正直言おう……。

これはきつい……。

沈黙が続く。

……まずい、暗い奴というレッテルを貼られてしまう……。

それと、同時に長引かせて期待させるのも悪い気がする。

「い、以上です。」

一夏がそう言うと、クラスの全員と言っても良いほどの生徒は自身の椅子からずり落ちた。

……一夏は成長しても、こういう所は成長しない人間なのだ。

……せめて、パフォーマンスなどを教えて欲しかったと思う一夏だった。

０２９　一夏（後書き）

……未だに、リリィを女だと思っていますよ？

ええ、一夏です……。

ええ、それほどまでに洞察力が無いです。

はい……。

- - 2　機体（前書き）

ようやくＸ３０Ａのイラストが終わりました……。

‐‐2　機体

＞ｉ２２８６１―３０４５＜

ＺＧＭＦ－Ｘ３０Ａ　ストライクフリーダム・フェニックス

ドラグーン　×１８
背部プラズマビーム砲　×２
腰部レールガン　×２
腰部レールガン・出力低　×２
腹部ビーム砲
連結可能ビームライフル　×２
連結可能ビームサーベル・大　×２
連結可能ビームサーベル・小　×２
両腕ビームシールド　×２
頭部対空バルカン砲塔システム　×２

ストライクフリーダムの高機動性能を更に発展した物。

スラスター数が倍増した事により、さらに使い辛くなった機体。

本作品では、ＩＳの最終地点にいると思われる機体。

ＩＳに武器やシステムをもたらした存在。

武器やシステムが貴重、なおかつ処理しにくいという……。

そのためＩＳには、一つ二つの機能しか搭載されてない。

例：ビームサーベル　→　暮桜の雪片や白式の雪片弐型　紅椿の雨月・空裂など……。

応用としては白騎士やミステリアス・レイディにも使用。

展開装甲なども含まれる。

アンビデクストラス・フォーム　→　甲龍の双天牙月。

ビームライフル　→　応用としてスターライトｍｋＩＩＩにレーザーライフルとして装備。

ドラグーン　→　ブルーティアーズのビット。

レールガン　→　シュヴァルツェア・レーゲン、右肩の大型レールカノン。

Ｎジャマーキャンセラー　→　応用だが紅椿の絢爛舞踏が該当する。

パワーパックシステム（換装システム）　→　パッケージ応用として、ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩの高速切替。

換装は、フリーダム内に存在したＧＡＴ－Ｘ１０５のシステムデーターを流用。

マルチロックオンシステム　→　大三世代技術。

打鉄弐式に装備されている。

フリーダムを再現させようと開発された　→　銀の福音。

高機動、砲門過多、翼など。

一応フリーダムは、ＩＳという分類（カテゴリー）ではない。

そこら辺不明。

初期段階　　ＺＧＭＦ－Ｘ１０Ａ　フリーダム

第一段階　　ＺＧＭＦ－Ｘ２０Ａ　ストライクフリーダム

第二段階　　ＺＧＭＦ－Ｘ３０Ａ　ストライクフリーダム・フェニックス

白騎士なみに存在を伝説化された機体。

青い翼の機体は、白騎士事件後に各地で目撃されている。

ＩＳとして見るなら、第一世代ではなく初期機体（プロトタイプ）とされると思われる。

……はい……。

イラスト見て分かる通り、フリーダム＋ストライクフリーダム＝って感じですね。

肩のスラスターも、こまめに制動かけれるようにスラスターの大きさなども一応考えています。

ですが、基本フレームはＸ１０ＡとＸ２０Ａと同じ……。

細かい部分はＭＧの二機を参考にしています。

すでに足の展開部分がＭＧ……。

やっていいのかな……？

まぁ、良いでしょうｗｗｗ

ＰＧも見てやってましたが、アレはギミックが多くて描くのが大変……。

色が付いてませんが、一応という事で……乗せました。

押絵に使うにも、下手すぎて反感食らいそうですし……。

名称はストフリに、ジージェネレーションポーダブルに出たフェニックスを足しただけ……。

--2　機体（後書き）

……フリーダム強すぎない？

０３０　姉弟（前書き）

リリィのせいで、若干一夏の性格が変わっています……。

というか、作者が一夏の感覚が理解できないだけ……。

０３０　姉弟

「他に言う事はないのか、馬鹿もの。」

一夏の頭にとんでもない衝撃が走る。

……この攻撃は……。

そう思い、恐る恐る振り向く。

「げぇ関羽！？」

そこには、黒いスーツを着た自身の姉がいた。

「……突っ込まないぞ……。」

……さいですか……。

手には出席簿らしき物が握られている。

……あ～、アレね。

出席簿から煙が見えた気がする。

というか、出席簿威力高すぎだろ……。

いや、出席簿……出欠簿……出血簿？

あり得る……。

あれは、出欠席を取る物ではないのだろう……。

「諸君、私が織斑千冬だ。　君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。　私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。」

さすが千冬姉。

言う事が横暴臭い……。

「出来ない者には出来るまで指導してやる。　私の仕事は弱冠１５才を１６才までに鍛え抜く事だ。　逆らってもいいが、私の言う事は聞け。　いいな」

……横暴だったよ……。

まぁ、ＩＳ使うならこれくらいがちょうどいいのかな？

「キャ～～～～～～～～～！　千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！　北九州から！！」

いや、何処でもいいから……

別に北海道でもいいよ……。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

死ぬな死ぬな……。

というか、なぜココに千冬姉が？

職業不詳、年収不明、月に二回くらいしか返ってこない実姉が何故？

「織斑、何か言いたそうだな……。」

「ああ、かなり言いたい……。　はっきり言って、もの凄く言いたい。」

千冬は一夏の顔を見ると、そう言葉を投げた。

一夏もその言葉にためらわず言おうとする……。

「だけど、その出席簿は止めてくんないかな、千冬姉……。」

出席簿から嫌な予感が感じられる。

また叩かれたらシャレにならない。

だが言葉を発した瞬間、構えられていた出席簿が動く。

一夏は反射的に首を傾ける。

すると、そこを出席簿が横切った。

「ちっ！」

ウワァ……舌打ちしたよ……。

しかも、出席簿怖ェぇエぇ。

今のやり取りで、クラス全員が唖然としてるぞ……。

「織斑くんと千冬様って、どういう関係??」

「親戚とかなのかな……？　同じ名字だし、もしかして姉弟だったりして？」

「それじゃあ世界で唯一男でＩＳを扱えるっていうのもそれが関係して……？」

あ、そっち？

出席簿とか、心配とかじゃないのね……。

少し落ち込む……。

「……気にするな……、ここではただの生徒と教師だ……。」

千冬が生徒を見てそう言う。

……いやいや、ばらしてんじゃん……。

この姉、いわゆる出来る人間なのだが、ここぞという時に天然だ……。

その天然を打ち消しているのが、身にまとっている冷徹な空気なのだが……。

そのおかげなのか、周りから天然扱いを受けていない……。

……多分……。

クラス全員が、千冬と一夏を見る。

まぁ、いつかはバレる事だし……今のうちにばらしとこう……。

「……姉だよ……。」

「愚弟だ……。」

同じ事を思ったのか、言葉が重なる。

その瞬間、クラス全体が目を見開いた。

（一夏×千冬……ウフフフフ。）

……っ！？

なんだ、今の悪寒。

もの凄く嫌な感じが……。

姉も頭に手を当てていた。

同じ感じを受け取ったのだろう。

感が鋭い姉ならあり得る……。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。　感心させられる。　それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

……酷くないその言葉？

しかも、クラスの大半が恍惚とした表情をしている。

……俺……本当に……ココで生きていけるのか？

一夏はそんな不安を感じながら、席に座った。

その瞬間、チャイムの音が響いた。

……全員自己紹介した？

してないよね？？

千冬がため息をつきながら時計を見る。

「さあ、ショートホームルームは終わりだ。　諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。　その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。　いいか、いいなら返事をしろよ。　よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。　後の自己紹介は適当にやっておけ。」

そういうと、近くの椅子に座る。

……何とも、鬼教官発言だねぇ……。

そう思いながら、一夏はため息を吐いた。

０３０　姉弟（後書き）

……なんだ、この原作乖離感……。

まぁ、別にいいか。

作者の一夏の扱いは雑です。

０３１　再会（前書き）

箒イベントです。

まぁ、必ず通るイベントですよね～。

０３１　再会

１時間目が終わり、一夏は自身の机に倒れていた。

理由は簡単。

女性の視線が背中に突き刺さっているのだ。

ず～っと。

……拷問です、はい。

きついですよ～。

ハーレム裏山とか言ってるやつ、変わってくれ。

これはきつい……。

本当に……。

昔いた居候の女の子が、女性に対する心構えを教えてくれたけど……。

……この状況を打破する方法は……２回目だろうが言おう。

教えてもらってない……。

ため息をつくことぐらいで、時間をつぶすしかないのだ……。

だが、あと何十分ため息をつき続ければいいんだ？

そう思っていると、一夏の前に誰かいた。

「ちょっといいか？」

「え？」

その声に顔を上げると、懐かしい顔があった。

「……箒？？」

茶髪をポニーテールにした、幼馴染。

篠ノ之箒だ。

ＩＳ発表後に引っ越して遠縁になっていたが、ココで合うとは……。

６年ぶり、か？

なんでここに……というか、眼つき相変わらずだな～……。

そう思いながら箒を眺める。

……それにしても、束さん並みの成長だな……。

……ああ、束さんは今思えば……初恋だったのかな？

結構楽しい人だったし、好きだったな～。

あ、リリィも可愛かったし家事得意だったな～。

そう、想像しているとすごい剣幕で睨まれた。

「廊下でいいなっ！」

……なぜ怒る？

鈍感な一夏には、一生分からないだろう。

ああ、一生……。

「早くしろ。」

「あ、ああ。」

その言葉に、素直に席を離れる。

……だがまぁ、なぜか包囲されてるんだよな～これが……。

５ｍほどかな？

何故だ？

まぁ、いいか。

箒は、何か話そうとしているが言葉を出さない。

一夏を見続けているだけだ。

……何か話そうぜ？

そう思いながら、目をつぶる。

「……あ、そういえば。」

一夏は思い出したように声を上げる。

「なんだ？」

箒はその声に少し驚きながら聞き返した。

一夏は、箒を見て口を開く。

「去年の剣道の全国大会で優勝したんだっけな。」

その言葉に箒は、一瞬唖然とした。

「おめでとう。」

次の瞬間、瞬間的に顔が真っ赤になる。

「な、な、なんで……そんなこと知って……？」

「なんでって、新聞で見たし……というか大丈夫か？　顔赤いぞ。」

戸惑いながら聞く箒。

それに対して、一夏は平然としていた。

箒は「大丈夫」と言って、顔をそむける。

……本当に大丈夫か？？？

そう思うほど、箒の行動はおかしかった。

「というか、なんで新聞なんか見てるんだっ。」

「？？」

……なにを言ってるんだ？

新聞見ちゃいけないのか？

一夏はそう思いながら首をかしげていた。

本気で分かってないのが、一夏なのだ。

訳の分からないまま、会話が途切れる。

……もしかして話題切れた？

そうなら席に戻るかと思い、やはりある居候の一言が頭をよぎった。

「それにしても久しぶりだな。　……６年ぶりだけど、すぐにわかったぞ。」

「え？」

「変わってないもんな。」

それは、再開のあいさつ。

そして一夏自身、最大限の心からの言葉だった。

その言葉と同時に、２時間目を知らせるチャイムが鳴った。

その音で、周囲にいた生徒が自身の席に戻る。

……さすがというか、何と言うか……。

次の授業も千冬だ。

先の一夏の様にやられたくはないだろう。

「さて、俺達も戻るか。」

「ああ。」

そうやって教室に入ろうとした瞬間に頭に痛みが走る。

「とっとと教室に入って、席に付け。」

「イ、イエッサ～。」

気がつけば、出席簿を持った千冬がそばにいた。

……たぶん、脳細胞が万単位で死んだんじゃないか？

それほど、頭に衝撃が走った日だった。

０３１　再会（後書き）

……今日中にリリィと束を出したいな～。

出来るかな？

０３２　頭痛（前書き）

主人公はリリィと一夏……。

まぁ、リリィ7割　一夏3割歳とかないと、ストーリが進めれない時もあるしね。

一夏が原作から離れて行ってます……。

ご注意ください。

032　頭痛

とりあえず、また休み時間だ。

先の授業では、参考書が必要だった。

はっきり言おう、古い電話帳と間違えて捨てた！

おかげで千冬姉の主席簿アタックを食らう羽目に……。

あ～まだ痛い……。

「ちょっとよろしくて？」

「あ？」

痛い頭とどう向き合おうか悩んでいるときに、変なしゃべり方が聞こえた。

……はぁ、痛みを忘れるにはちょうどいいか？

そう思い顔を上げると、いかにも時代に流された女が立っていた。

何処の貴族だと、思わせるような縦ロール。

……頭が痛くなってきた……。

こういうのを相手にするのが、一番疲れるのだ。

一夏自身よく知っている。

……これなら箒が話しかけてくれる方がましだったぜ。

そう思いながら、ため息をついた。

「なんですのッ！　そのいかにも疲れたというようなため息は！！」

……事実疲れているのだ。

そのくらい察して欲しい。

「はいはい……。」

「まあ！　なんですのそのお返事。　わたくしに話しかけられるだけでも栄光なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

相手は一夏の態度に憤慨していた。

こういうのははっきり言ってしまった方がいい。

「悪いな……。　俺、君の事知らないし……。」

ばっさり言った方が、こういう相手にはいい。

千冬姉の教えだ。

「私を知らない？　このセシリア・オルコットを？？イギリスの代表候補制にして入試主席のこの私を。」

「ああ。」

その答えに、相手……セシリアは驚愕していた。

自己紹介も、「お」以降やってない。

残念ながら「せ」にも言ってないので、セシリアの名前なんか知らないのは当たり前なのだ。

ふと一夏はある疑問を抱く。

……代表候補制って何だ？

だが、今聞く事ではない。

聞いたらめんどくさい事になる。

絶対と言っても良いほどに……。

「で、何の用だ？」

一夏はセシリアを乱雑に扱う。

こういう相手に足元を見せたら負けなのだ。

……うん。

「エリートであるわたくしが、直々にあいさつに着て上げたのに、なんですかその態度っ！！」

「エリートね～。」

どうでもいい様にセシリアを見る。

言葉からも、どうでもい感じの発音だった。

「あ、あ、貴方ねぇ！！」

セシリアがさらに憤慨していると、チャイムが鳴った。

……早くないか？

いや、この際気にしないで置いておこう。

「またあとで来ますわ。　逃げない事ね！！」

……負け犬っぽいセリフだな～。

全員が席に着いた瞬間、図ったかのように教室のドアが開いた。

千冬と真耶が入ってくるが、少しばかり困ったような顔をしていた。

……どうしたんだ？

「あ～、何だ……。」

千冬が珍しく言葉を選ぶ。

一夏以外の全員が初めてこの状態の千冬を見るので、唖然としてい

た。

真耶も心なしか、笑顔が苦笑いになっていた。

「……転入生が明日来る事になった……。」

「「「「「「「「「「「「え？？」」」」」」」」」」」」

千冬の言葉に全員声を上げた。

そりゃそうだ、今日が授業初日。

つまり、入学式直後に転入生が来るというのだ。

全員訳が分からないというのが、当たり前の状態だ。

千冬は生徒の事を考えず、さらに言葉を続ける。

「転入生は一人……このクラスに入る……のだが、担任にすら正体が不明。　さらに、ＩＳ学園の全設備の無断使用可に、学業不要……。　さらに生徒ではなく教師としての括り……。　生徒ではなく教師なのではと思ってしまうよ……。　お前ら、分かるか……この頭の痛さに……。」

さらに真耶が千冬の言葉を引き継ぎ、言葉を続ける。

「さらに臨時職員扱いで来る人もいるんですよ。　その人も同じで設備を自由に使える人です……。　しかも、この教室に入るそうですよ……。」

「そいつも正体不明だ……。」

その説明に全員の頭がこんがらがる。

千冬と真耶に至っては、訳の分からない状態だろう。

「……まぁ、気にしていたも無駄だしな……、再来週の事を決める。」

気持ちを切り替え、話題を変える。

だが、一夏は気が付いていた。

……千冬姉は誰が来るか知ってるな……。

真耶は未だ混乱している。

しばらくはまともに授業を行えないだろう……。

「では、再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。だがまぁ、明日来る馬鹿を混ぜないとな……。」

……おい、確実に今転入生を馬鹿扱いしたぞ。

つか、確実に誰が来るか知ってる。

「クラス代表は、対抗戦だけではなく生徒会が開く委員会や会議にも出てもらう……。　まぁ、クラス委員長だな。」

そう言うと、窓の外を見た。

「……自他推薦構わない。　明日来る転入生でもいいと思うぞ。」

適当にそう言うとため息をついた。

……教師がため息って良いのか？

クラス全員が呆れてるぞ。

「……織斑くんを推薦しま～す。」

誰かがそう言った。

……織斑って俺以外にもいるのか～。

「私も～。」

その声を皮切りに、次々と声が上がる。

「私も～♪」

「転入生を見て！」

「あ、確かに！！」

教室がいきなり騒がしくなった。

「んじゃぁ、織斑一夏にリ……転入生だな……。」

……え？

「織斑って俺かよ！？」

その言葉に全員「織斑って他に誰かいる？」という顔をしていた。

０３２　頭痛（後書き）

……という事で、急いで書きますか……。

学園の訳の分からない対応は……次話のあとがきにでも……。

いや、本編で行けるか？

０３３　口論（前書き）

今思ったけど、サブタイ適当だね……。

そして、今回作者は書いたのを読みなおして首をかしげています。

なんか、急展開過ぎて……。

033　口論

「納得がいきませんわっ！！」

その声が教室に響き渡る。

全員その声の主、セシリアに目を持って行く。

かなり怒っているのか、顔が赤い。

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。　それを、もの目ずらしいからという理由で極東のサルにされては困ります。　だいたい、転入生も常識が無いのではないですか！！」

そう行き次もなしに言う。

「私はココにＩＳの操縦を学びに着ているのであって、サーカスをする気はありません！！」

おおぅ。

俺動物ですか……。

サーカスの動物ですか。

「良いですか、クラス代表は実力のトップがなるべきです。　そしてそれは私しかいませんわ。」

全員唖然としていた。

いや～、やってくれるのならどうぞと譲りたかったがなんか悪寒がする……。

「弱い者を代表など、頭が悪いとしか考えられませんわ。　大方転入生もそこの山猿と同じように頭が悪いのでしょう！」

……うん、やっぱ悪寒がする。

主に頭の後ろから。

ゆっくりと振り向くと、千冬が身内にしか分からない怒りの表情をしていた。

「だいた……。」

「オルコット、そう言うのなら転入生を倒せるんだな？」

千冬が静かに口を開いた。

その言葉にセシリアは、少したじろぐが「ええ！！」と言った。

千冬は口を釣り上げた。

「……そうか。　ならお前はそれまでというわけだな……。」

「どういう事です？」

セシリアは千冬の言葉を理解する事はできなかった。

全員そうだ。

その言葉に含まれる意味など、千冬にしか知るよしはない。

「なに、転入生と臨時職員の待遇を少しある物達と照らし合わせただけさ……。」

つまり、千冬は転入生達を知っているという事だ。

だが、それが今の話とどういう風につながるのだ？

全員が不思議そうな顔をする中、千冬はセシリアを睨む。

「……お前のＩＳは死んだ。　お前はあいつに瞬間的に負け本気を出せぬまま地に叩き落とされ、ＩＳは完全破壊されると言ったのだ。　それも赤子の手を捻るかのような感じで、な。」

その言葉に教室にいる物達が唖然とした。

その声には、怒気が含まれていた。

一夏は久しぶりに見る、姉に恐怖した。

唯一セシリアだけは、意味を正しく理解し反論した。

「そんな訳あり得ませんわ！！」

「ほぅほぅ、なら今から試してみるかい？」

「いいですわ、どうせ雑魚なのでしょ……？？」

千冬は口を開こうとしたとき、言葉は遮られた。

セシリアがその言葉に、反射的に答えてしまった。

廊下からの声に。

「弱い奴ほどよく吠えるんだよね～☆」

「まぁ、今の時代だとそう思っても仕方がないけどね……。」

そこには絶賛指名手配中の天才科学者が半眼で立っていたのだから。

「やぁやぁ、ちょっと早めについたから来たよ～ち～ちゃん♪」

そう言って顔を笑顔にする。

知らない人の登場で教室はさらに混乱し始める。

真耶はパニックで眼鏡を落とす。

薄紫髪のウサミミを付けたアリス服の女性と、ＩＳ学園の制服を着た銀髪の女性。

２人が千冬に近づく。

「……明日来るのではなかったのか？」

「サプライズは必要だよ？」

そう言って、親しそうに話し始めた。

一夏と箒は、その女性を見て目を擦る。

……見間違えじゃない。

「姉さん……。」

箒が声を震わせながら口を開く。

その言葉に女性……いや、束は箒を向く。

「はろはろ～。　久しぶりだね～箒ちゃん♪　いっくんも。」

全員の視線が、一夏と箒に向けられる。

その目が「誰？」と聞いていた。

「……オルコット座れ……。」

その言葉に、混乱していたセシリアは素直に従った。

「……予定が早まった……、臨時職員と生徒だ……。」

そう言って名前がモニターに浮かぶ。

「「「「「「「「え！？」」」」」」」」

そこには、篠ノ之束とリリィと出ていたのだから。

０３３　口論（後書き）

サーセン。

束とリリィを学園に突っ込んでみました……。

何故と思いたくなるでしょうが、シナリオで説明する事にします。

……それにしても、わけ分からん設定だな……。

０３４　取引（前書き）

……無理やり感はありますが、作者の脳内はこうなっておりますｗｗ

そして一夏のターンはエンドされ、リリィのターンフェイズ。

０３４　取引

教室内、指名手配されたＩＳの生みの親の登場で混乱した。

皆口々に、なんと言うばかり。

仕方なしにリリィは順を追って説明した。

政府との取引。

ＩＳ学園に入るため、開発したＩＳのデータ収集の許可と開発ＩＳの一部開示。

今まで躍起になって探した天才科学者の発明と、データ収集出来るのだ。

しかも、ＩＳの生みの親なら自身達より上の物を作っている。

設計機体の情報開示は取引内には書かれていないが、政府はそれだけで認めた。

それだけＩＳに貪欲になっているのだ。

開発などは全部束が拒否をしたので、取引には入っていないが……。

それに付けくわえ、一夏の存在が後押しとなったのもある。

束は一夏のＩＳを作ることと、一夏の情報を月に一回提出する事を提案した。

イレギュラーの存在で政府はさらに情報と、腕の立つ学者の存在を欲していたのだ。

その提案は正直ありがたかったのだろう。

ためらいもなく了承した。

いざこざはあったが、結果的に十年間のお尋ね者から解放された。

ちなみに、リリィも束の取引と同様だ。

ＩＳのもう一人の生みの親。

それだけの存在で、リリィも捜索願が取り消された。

……まぁ、都合がよすぎるけど一夏の存在を作ったのはよかったかもね～。

そう思いながら、束の横に立つ。

しかし……なんで女子制服？

いやいや、私男。

無理にでも男子制服を着ないといけない。

だが、束に無理やり着させられそう……。

……なし崩しと、束の存在で仕方なく支給されたのを着ているだけ

だ。

……うん。

しかし……奇異の目で見られてるな……。

「束……自己紹介しろ……。」

千冬が束を見ながらそう言うが、不服そうに口をとがらせた。

リリィと千冬はため息をつく。

「仕方がない……リリィ。」

「ええ。」

……一夏と箒は……いた。

唖然としてるね～。

少し深呼吸しながら、言葉を選ぶ。

「はじめまして。　リリィと名乗らせていただいてます。」

そう言うと「それだけ？」「え、他には？」となんか久々の新線を食らった。

仕方なしに適当に喋る。

「一応ＩＳの生みの親の一人です、武器などの開発担当しています。

」

それくらいの言葉しか思いつかなかった。

一つ言おう。

リリィも束程ではないにしろ、他人が好きではないのだ。

少しばかり冷たい物言いに、言葉足らず。

これればかりは仕方がないのであろう……。

しかし、リリィ自身気が付いてない。

言葉を間違った事に……。

「え？　ＩＳ開発者が２人？？」

「リリィさんもＩＳの生みの親？」

「武器担当？？」

次の瞬間教室がざわめいた。

「美人開発者がうちのクラスに！？」

「これは慕わせていただき……。」

……千冬や一夏の外見だけで、ＩＳ学園の生徒は色めくのだ。

開発者で、一定の……いや、極上のルックスを持っていれば騒がれないという選択肢は消える。

つまりはそう言う事。

「きゃぁぁぁぁ！！」

「私のＩＳを開発してぇぇぇぇ！！」

「その冷たい態度で、私を詰って！！」

千冬の二の舞だ。

「うるさい。」

だが、束の一言で静まり返る。

これには一夏をはじめとする、束が認める身内は笑うしかなかった。

束は他人が嫌いなのだ……。

「んじゃぁ、私が……。」

そう言ってリリィは束に、手を向ける。

「彼女が篠ノ之束。　ココには一応臨時教職員として派遣される事になりました。　誰もが知ってるＩＳの生みの親です。　そして大の他人嫌いです。」

束の代わりにリリィが口を開いた。

その言葉に教室にいる全員が苦笑した。

本人を前に、その言葉は無いだろう、と。

束は少し不機嫌な顔をしながら、目をつぶった。

「ち～ちゃん達がいれば別にいいんだけど……。　まぁ、なるべく接するように努力するよ……。」

０３４　取引（後書き）

……２００．０００ＰＶたっせ～い、いえ～い。

リリィの容姿は、アチャ子でも想像していただければいいと思います。

検索で出てくると思いますよ、銀髪の女性。

いや、アレは銀と言うより白髪……？

御都合主義＆無理やりですが、捕まえ開発させるよりこっちの方がリスクは少ないでしょう。

１０年も逃げ続けたんですから……。

政府との取引に、「もし私を暗殺や誘拐なんかしたら、全ＩＳの機能停止さえるから。　あと、実行しようとした国……天使が滅ぼしに行くから。」と言ったのは余談？

その言葉で、強気になれない政府……。

まぁ、仕方がないという事で……。

で、セシリア戦はどのフリーダムで行った方が良いかな？

千冬に全力で行けと言われフェニックスで行く？

それともハンデで、初期フリーダムで行く？

誘導兵器対決でストライクフリーダム？

まぁ、どの機体でもセシリアのオリジナルイベントはできるから良いんだけど……。

０３５　兆発（前書き）

いや～、結構進むもんだね♪

さすがＧＷ☆

035　兆発

「で、そう言えばリリィちゃんを倒せるとか言った子がいたような気がしたけど。」

「ああ。」

束は愛する者が貶された為、かなり怒っていた。

千冬同様に、身内しか分からない怒りを顔に表しながら。

その言葉に千冬がセシリアを呼ぶ。

声が上ずりながら、セシリアは席を立った。

「ふ～ん……。」

品定めするかのような視線で、セシリアを見る。

そして一言「ダメだね」と言った。

その一言にセシリアは驚愕した。

だが何も言えない。

「そんなんで私の騎士様に勝とうとか、笑っちゃうね。」

さらに言葉を言うと、セシリアを嘲笑った。

すでにセシリアは怒りを超えて、殺意を抱いた。

束の騎士発言にクラスは興味を持ったが、空気が空気だ。

誰も言葉を出せない。

セシリアはついに限界が超えたのか、大声で「決闘ですわっ！！」と叫んだ。

クラス全体が、驚いただろう。

だが束と千冬が「無理だな。」「無理だね～。」と言うと、驚くを越して呆れた。

千冬は冗談を言わない性格だ。

まして嘘なんか付かない。

そして、世界最強だ。

そんな彼女に認められるリリィは何者だ。

そう皆が思っていた。

「まぁ、別にいいよ。　負ける気無いし……。」

リリィは腕を頭の後ろに組んだ。

その際、胸が強調するように前に出た。

（ん？？）

千冬は何か引っかかった。

女子制服着ているのに違和感を感じないが、それと同様に違和感を感じない物が他にあった。

（……胸？）

「では、いつにします！！」

千冬の思考が別の所に向かっている中、セシリアは宣戦布告をしていた。

「別に今からでもいいわよ。」

「勝ったら、特別に貴方のＩＳ改良して上げるよ……。　勝てたらね♪」

束が変な発言をしているが、千冬は気にしない。

（……そういえば、リリィは束が好きな男だったよな……。）

そう思い出し、リリィを見る。

一見女性にしか見えない容姿。

そして、強調された胸。

（……？）

目を擦る。

だが、胸は消えない。

束ほどないにしても、そこそこある胸。

「良いですわ、山田先生準備できますかしら？」

「え、あ、はい。」

押しが弱い真耶は、セシリアの発言に教室を出ていった。

おそらくアリーナの使用申請を取りに行ったのだろう。

だが、千冬は未だ思考の海を漂う。

「では、ハンデはどうします？」

「私の方かい？」

「いえ、私（わたくし）の方ですわ。」

「いらないよ。　むしろ私が付けなきゃ……。」

そうやって買い言葉に売り言葉のリレーが続く中、千冬は束に耳打ちする。

なんで「リリィに胸があるのだ？」と。

答えは簡単「似合いそうだったから、試作リアルパッ○作ってみた☆」というものだった。

その答えに頭が痛くなった。

というか束と一緒にいた十年で、こんな事にならない可能性が思いつかなかったわけではない。

ただ、考えたくなかったのだ。

束は相変わらず、天才と馬鹿がその身に同居してる変態だった。

だが似合っている。

ため息を吐く千冬の頭痛を理解できたのは、せいぜい束とリリィだけだろう。

真耶が教室に戻ってくる。

走ったのか、息が荒い。

「アリーナーの申請……、とってきました……。」

たった数分で、申請してくる真耶は何者だと千冬は思ったが気にしたら負けなのだろう。

「負けたら小間使い……いえ、奴隷にして上げますわっ！！」

その言葉に千冬と束は、内心苦笑していた。

リリィは長い銀の髪を揺らしながら、微笑んだ。

「いいわ、けど負けても知らないわよ？」

そして安い兆発をした。

「泣いて叫んでも、手は緩めないから……。」

そう言った顔はただ美しい笑みで……。

その実、悪魔の顔だった。

「……懺悔は十分、ファッキンシープ？」

０３５　兆発（後書き）

さて、セシリア……入学初日に哀れな姿を見せる……。

お疲れさまでしたっ！！

みな、セシリアの勇気に敬礼……しないでいいよ～。

あ、胸パッ○について……。

本物そっくりの物を胸にくっつけてます。

特殊な方法で……。

水着回を悩んだ挙句、男性用水着だと悲しく、水着なしも悲しいからこうなりました……。

怨んでくれて、構わんよ……。

元ネタは「おとぼく２」と全６巻のジャ○プ漫画から。

036　驚愕（前書き）

リリィ　ＶＳ　セシリア

戦闘前編。

０３６　驚愕

あの騒動の後、クラス全員はアリーナに移動する。

入学式早々にアリーナを使うクラスは無い。

理由は訓練機の貸し出し不可という事からだ。

おかげで専用機を持っている者は、アリーナは使い放題。

真耶がアリーナの使用申請を早く取ってこれた理由がそこにあった。

観客席はクラスの生徒だけだ。

アリーナ中央には、制服姿のリリィがただ立っていた。

その姿に皆不思議そうな目で、リリィを眺めていた。

セシリアはスーツに着替え中だろう。

千冬はその場にいる生徒全員に聞こえるように、リリィに話しかける。

≪で、お前は何で戦う気だ？　全力で相手するわけでもないだろ？≫

その言葉を聞いたリリィは笑う。

そして一言、千冬と束以外を驚かす発言をした。

「まぁ、最初はこのままで戦おうかな～って。」

つまり人対ＩＳと言う事だ。

言葉を理解すると、生徒は騒ぎ始めた。

「リ、リリィちゃん……それはいくらなんでも……。」

「そうだよ～、ＩＳで戦わないと死んじゃうよ～。」

……え？

私それほど弱そう？

そう言う顔で束達がいるであろう管制室を見た。

視力も良いリリィは、千冬と束が首を振る姿が見えた。

だが、近くにいた一夏と箒、真耶は慌てていた。

≪織斑先生、無謀ですっ！！≫

≪そうだよ、千冬姉。　いくらブッ！？≫

≪織斑先生だ……。≫

コントっぽい話し声がスピーカーから聞こえる。

≪まぁ、お前達は知らなくて当然か……。≫

≪ち～ちゃん、ち～ちゃん。　まだ教えない方が面白いかもよ？≫

≪ああ。≫

その会話は真耶や生徒には、よく分からない話しだ。

だが、分かる者には分かる。

十年前の白騎士事件より、もっと前の事……。

それを思いだした瞬間、派手な音を立ててセシリアが青いＩＳを纏って登場した。

リリィの前方５０ｍほど上空で停止する。

その顔は、先ほどと変わらない姿に驚いていた。

「あ、あなた、早く装備しなさい！！」

まぁ、普通はそう思うだろう。

全員頷いている。

だが、リリィは鼻で笑うと一言「人とＩＳ……どちらが強いんだろうな？」と挑発した。

その言葉にセシリアは頭にきたのだろう。

銃口をリリィに向ける。

「ふ、なら貴方をぼろぼろの雑巾のようにして上げますわ。」

「なら私は、決定的な屈辱を。」

リリィとセシリアとの間で火花が散った気がした。

千冬はそれを見ると≪リリィは戦闘不能もしくは降参。　オルコットはシールド残量０もしくはリリィと同様の、戦闘不能、降参。≫と勝利条件を言った。

未だマイクから、真耶の止めさせようという声が響く。

クラス全員本当にそう思っていた。

≪試合開始！！≫

だが、千冬の開始合図で戦闘は始まってしまった。

せめて何事もない様にと祈るだけ。

そのような視線で皆、リリィを見ていた。

「火傷で済ましてさしあげますわっ！！」

そう言うと、セシリアはライフルを向ける。

威力を抑えているという事だろう。

セシリアの人としての安全な部分が見えた瞬間だった。

「さぁ、踊りなさい。　この私（わたくし）のブルーティアーズが奏でる円舞曲（ワルツ）で！！」

そう言ってトリガーを引く。

誰もが直撃だと思い、目をそらした。

だが、リリィは身体を傾ける事でそれを避けた。

「悪いけど……、ダンスより演奏する方が私は好きなの。」

そう言って挑発する。

セシリアは驚愕した。

普通なら、恐怖で動けるはずもない。

攻撃は直撃するはずなのだ。

（たまたまですわ……。）

そう思いもう一度、引き金を引く。

だが、また避けられる。

生身の人間が、ＩＳの攻撃を……しかもレーザーを避けるのだ。

誰もが驚愕した。

リリィの後ろで、レーザーにより風で舞った砂がリリィを包み込む。

「これだけ？」

その目は、酷く冷ややかで……。

……恐ろしく禍々しい目だった。

０３６　驚愕（後書き）

生身や素手と言う感想が多かったです。

生身と素手ってなにが違うの？

と言う事で、人間　ＶＳ　ＩＳ　です。

後編に続く。

０３７　圧倒（前書き）

リリィ　ＶＳ　セシリア

戦闘後編です。

037　圧倒

リリィの目が、セシリアを本気にさせた。

恐怖と言う感情によって。

「行きなさい！！」

そう言うと背部にマウントされていた、翼のようなものをパージした。

それらは各個意思をもち、アリーナを飛んだ。

……ドラグーン同様の誘導兵器か。

ビット型の兵器。

名称ブルー・ティアーズ。

機体名称と同じ事から、その機体の特徴とも思われる兵器だ。

セシリアを少し見る。

してやったりと言う顔だ。

……なんだ、その顔？

……けどまぁ……。

だが、リリィはその顔を見て口を開いた。

「……良いねェ。」

その言葉がきっかけか、ブルー・ティアーズがレーザーを発射する。

「……その顔を歪めるのが楽しいんだよォォォォォォ！！」

「っ！？」

そう叫びながら身体を回転させ、その場から身体をずらす。

レーザーは空を切る。

だが、まだリリィを追撃する。

二基で攻撃。

三基で攻撃。

四基で攻撃。

四基全てで波状攻撃。

そのどれもが、見る者全ての目を奪うような美しい動きで回避する。

どの攻撃も完全に当たらない。

動く事でリリィ髪の毛が跳ねたり回ったりして、その回避を幻想的なまでに美化していた。

観客席のクラス全員が唖然とする。

一夏も箒も、教員である真耶まで唖然とした。

アリーナに映る光景は、自身が思っていた価値観を覆すようなことだったのだから。

そしてリリィが、大きく動いた。

近くにある、観客席の壁に向かって走る。

（っ！？　悪あがきをっ！！）

セシリアはそう思いながら、ブルー・ティアーズでそれを追う。

壁に近づき逃げ場がなくなった。

そう思ったセシリアは己の想像を覆される。

「なっ！？」

リリィが飛び、壁をけってブルー・ティアーズに飛び乗る。

それを踏み台にして、近くにあるブルー・ティアーズに飛び移る。

さらに同じ行動を繰り返し、最後の一基を強く蹴ると空中に止まっている、セシリアのライフルの上に立った。

その姿に、全員が驚愕し見惚れた。

風になびくスカートが、マントのように見える。

青いＩＳ持つライフルの上に立つリリィは、あたかも断罪者（ジャッジメント）のようだった。

リリィはセシリアを見下ろす。

その瞳は、試合開始の時と同じ冷たい目。

酷く恐ろしいものだった。

「い、いや……。」

セシリアは訳も分からず、悲鳴にも似た声を出す。

だがリリィがをそれを聞くはずもなく、冷ややかな目のまま口を開いた。

「懺悔は十分？」

そう言うと腰を折り曲げ右手でセシリアの頭を前から掴み、振り子の要領でセシリアの腹部を蹴った。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁ！！」

混乱しているセシリアは、ＩＳの操縦を忘れて悲鳴を上げるだけだった。

操縦を忘れたＩＳは重力に従い、地上に落ちる。

全員が目を見開いた。

地上に落ちた瞬間、大きな土煙を上げ姿が見えなくなる。

全員が、戦闘の行方を不安に思った。

そして土煙が晴れた。

「「「「「「「「「「っ！！」」」」」」」」」」

そこには青いＩＳを纏ったセシリアが足を曲げ、首を掴まれていた。

セシリアは苦しそうに手を動かすが、リリィに触れる事が出来ない。

何度も何度も手を動かすが、思うように動いてない。

４基のブルー・ティアーズも、操縦者が意識を飛ばさないため地面に落ちていた。

「ねぇ、一体誰が私に勝てるんだっけ？」

その声が、アリーナに響く。

大きな声ではないのだが、静かすぎるアリーナには十分響いた。

セシリアは眼の端から涙を流した。

未だ手は動くが、恐怖で足は動いていない。

首を持つ手が、少しばかり上に行く。

重力に従い、徐々に死に近づく。

≪そこまでっ！！≫

千冬の声がアリーナに響く。

セシリアが生死の境目をさまよう、丁度のタイミングだ。

リリィはセシリアの首から手を離す。

セシリアは地面に倒れ込むと、意識を失った。

≪オルコット戦闘不能。　勝者、リリィ！！≫

０３７　圧倒（後書き）

うわぉ……。

書くのめんどくさい感が、文に現れてる……。

……まぁ、誰もが思っていた通りセシリアは負けます。

むしろいつも通り……。

千冬の次の被害者ですかね？

まぁ現行するどのＩＳにも、素手で戦えそうな気がします……。

さて……セシリアフラグはどうしよっかな……。

というか、今日の０時の閲覧者数５０９人ってなに！？

なんで、そんなに起きてるのっ！？

038　概念（前書き）

……？

この話は一種のセシリアフラグなのか？

まぁ、フラグ変更はできないけどね♪

全セシリアのセリフを修正。

わたくし　→　私（わたくし）

０３８　概念

リリィがセシリアを医務室に運んでいるとき、会場は未だ先の戦闘光景から抜け出せないでいた。

生身の人間が……、それも武器も何も使わずＩＳに勝ったのだ。

夢だと思いたいのだろう。

誰も試合……と呼べるものがあったかどうか怪しいが、動こうとしない。

もちろんその中には一夏や箒、真耶の存在も入る。

管制室でその光景を見ている千冬と束は、少し口を釣り上げていた。

女尊男卑が当たり前だと思っている者たちには、いい刺激だろう。

所詮ＩＳを動かせる女のみが上に立っていて、ＩＳを使えない男は下だ。

そう言う概念を誰もが持っている。

ＩＳの恩恵を受けている女どもは、自身の立場を分かっちゃいない。

ＩＳが無ければただの弱い生物だという事に。

自然とＩＳは人間より上にある物として、全ての者に見られるのだ。

だがＩＳを使わなくてもＩＳを倒す事が出来る。

これは一種のパワーバランスの崩壊だった。

人間鍛えてしまえば、ＩＳなんかただのスーツと変わらない。

作を練ってしまえば、ＩＳを倒せてしまう可能性もある。

絶対防御は無敵ではないのだ。

今の戦闘は、その事をありありと見せつけた。

≪さて、これでＩＳと言う絶対な勝利は消えた。≫

そう言うと、生徒は気がついたのか管制室の方を一斉に見る。

≪女尊男卑が当たり前だと思うなよ？≫

千冬は念を押した。

この発言で、女尊男卑の考え方が少しでも変わってくれる事を祈り……。

セシリアは目を開けた瞬間、知らない天井が瞳に映った。

訳も分からず辺りを見渡す。

なにが起きたのか分からない……。

私(わたくし)は……一体何を……。

確か転入生と戦う事になって……。

「っ！？」

そうだ、転入生にＩＳを使用される事もなく負けたのだ。

それも完膚なきまでに……。

生身の人間相手に……。

瞼を閉じると思いだしてしまう。

ライフルの上に乗った、銀の髪をなびかせた女を。

その冷たい瞳を……。

私(わたくし)は……。

思いだすとセシリアは震えた。

怖かった。

夢であって欲しかった。

だが、夢ではない。

腹部を蹴られた痛みが、まだ残っているのだから……。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い……。

……いつ以来だろうか……こんな恐怖は……。

ふと恐怖と言う文字が頭を占める中、その疑問が頭をよぎった。

記憶からその恐怖を探し出す。

そして思いだした時、ドアの開く音にセシリアは目を見開く。

「起きた？」

……は？

ドアを開いて、先ほど戦った女……リリィが入ってきた。

手には一枚の紙を持って、笑顔で部屋に入ってきたのだ。

その顔を見た瞬間、セシリアは後ずさった。

「い、いや……こ、こ、こない……で……。」

先の恐怖がまた蘇る。

殺される……。

眼の端から涙が流れる。

恐怖が今のセシリアの眼前にあった。

「……はぁ。」

リリィは目に見えたため息を吐いた。

「そこまで怯えられると、罪悪感に襲われるよ……。」

……は？

……思ってないでしょ？

そんなほぼどうでもいい様な発音……。

絶対、罪悪感なんてこの人にはないですわ！！

だって、貴方「その顔を歪めるのが楽しいんだよォォォォォォ」ってS発言したんですわよ！！

そう思ってると、突然リリィが少し笑う。

「大丈夫？」

「え？」

そう言うリリィの顔は、ただ優しい笑顔だった。

そして気がつく。

自分の中にあった、恐怖と言う感情が無い事に。

「大丈夫そうだね。」

そう言って近くにある椅子に座る。

……なんなんですの、この人？

すでに恐怖と言う事より、リリィの存在のおかしさにセシリアは頭を悩ませた。

「大丈夫なら、これでも読んどいた方がいいよ。」

そう言ってリリィは持っていた紙を手渡す。

恐る恐るそれを手に取る。

そこには、ＩＳの現在の状態とセシリア自身の身体外傷などのバイタルデーターが書かれていた。

「勝手にバイタル取らせてもらった。」

そう言って、ポケットから缶ジュースを取り出し、プルタブを開ける。

「ＩＳは異常なし。　お前もそんなに外傷はないから……。」

そういうと、缶ジュースに口を付けた。

セシリアはそのデーターを見る。

「……確かに……。」

ダメージレベルが書かれていない。

反重力力場異常なし。

機体を制御するスラスター、各部異常なし。

武器・外装の被弾、ブルー・ティアーズの外装部が墜落のせいでせいぜい、少しだけ凹んでいるだけ。

全回路異常なし。

つまり、完全に無傷と言う事。

だが、少なくともセシリア自身には傷ができたが……。

特に恐怖と言う心の傷が……。

「まぁ、なんだ？　行き過ぎた差別は嫌いだから、今回の試合はお仕置きと言う事で……。」

そう言った顔は悪魔の顔ではなく、優しそうな美しいただの女性の顔だった。

セシリアはその顔に見惚れた……。

038　概念（後書き）

……？

セシリアに違和感が……。

良いのか、こんなので？？？

039　会話（前書き）

……どうしてこうなった……。

039　会話

「ま、さっきの試合どうして私が機体を使わなかったと思う？」

その言葉にセシリアは少し考えた。

だが、考える暇も与えずリリィは口を開いた。

「セシリアみたいな女尊男卑に流されている子には、ああいうのが一番なんだよ。」

そう言うと再度、缶ジュースを飲んだ。

……やっぱ外れ缶だな……。

缶には練乳苺おでんスープと書かれており、味を想像したくない組み合わせだった。

「セシリアは負けた事が無い。　調べたら一応無敗。　まぁ、だから調子乗りすぎたんでしょ……。」

それが女尊男卑のきっかけになる。

セシリアは主席。

更に代表候補生だ。

これらがそろっている女性が調子に乗らないわけがない。

「負ける事で、より大きく視界が開けたんだから……悔む事は無いよ。」

だがセシリアは少し己を悔いた。

やはり女尊男卑をしてしまったとはいえ、リリィをも軽んじたのだ。

まだ会ってもいない、人間を馬鹿にしたのだ。

女尊男卑は女性を傲慢にする。

上に立つと付けあがる……。

人間の悪い点だ。

（なぜ私（わたくし）は……。）

「まぁ、やっぱ本当の原因は昔あった事かな……。」

「っ！？」

セシリアはその言葉に驚愕した。

「話す事で楽になれることもあるよ。」

リリィは「勝った者のめいれ～い♪」と笑いながら言って、セシリアに無理にでも話させようとした。

セシリアは驚いた眼を細め、ポツリポツリと話し始めた。

「わたくしの家は、イギリスの名家だったんです。」

リリィは知っていたから驚かない。

「母は社会が女尊男卑に染まる前からずっと強い人でした。何事にも屈さない……。」

リリィは空になった缶を床に置く。

「女の身でありながら、いくつもの会社を経営していました。そのほとんどが成功し、家の名は不動のものとなりました。」

経営者の名前は聞いたことが無いが、イギリス有志の経営会社の親元だったのは知っている。

「私（わたくし）にはとても厳しく、けれども暖かい……。私の憧れの人です……。」

セシリアは過去を懐かしむ目で、自身の手を見た。

その手に何か思い出があるように……。

「それに比べて父は、名家に婿入りしたせいか……いつも、いつも母の機嫌を窺ってるような人でした……。」

その言葉を聞いてリリィは少し顔を曇らせた。

少しだけ……戦う前に話していれば少しは良かったのかもしれない。

まぁ、聞く耳持たなさそうだけど……。

「いつもオドオドしていた父を見て、「将来は情けない男とは結婚しない」なんて小さいころ思ったぐらい……。」

「……。」

「ＩＳの発表後……父はさらに態度が小さくなって、母はうっとうしそうにしていました。」

そう言って懐かしんでいた手を下し、懐かしんでいた目を閉じた。

「そんな家族がどうなるか……、想像付きますわよね？」

「ああ。」

お互いの顔を見たくなくなる。

家族としての崩壊……。

少しばかり共感できた。

「そんな二人ですのに、死ぬときは一緒……三年前の越境鉄道の横転事故で一緒に死にました……。」

セシリアが目を開けたとき、瞳は潤んでいた。

過去を思い出し、泣きたくなったのだろう。

「大規模の事故の日に限って……なんで、今まで別々にいた二人が一緒にいただろうなんて思うほどでした……。」

確かに理解できない。

あたかも親のどちらかが自殺に巻き込もうと、画策したかのように思える。

「莫大な遺産を私に残して死んだ……。　おかげでわたくしの周りには金の亡者ばかりが群がってきましたわ。」

その言葉にリリィは手を強く握りしめた。

自身の死んだ親の親を思い出したのだ。

あのときは苦痛だった。

それと同じ苦しみを、目の前の少女はした。

その事が、とてつもなく悲しい。

「私(わたくし)は親の遺産をだれにも渡す気はなく必死に勉強した……守るために……。」

「……。」

「ですが、やはり私(わたくし)一人だけでは守れなかった……。　そんな時、私を救ってくれた人が現れました……。」

セシリアの言葉にリリィは何も言わなかった。

次の言葉に何が出るか知っている。

理解できる。

今までの話だって、すでに知っていた事だ……。

だって……。

「青い翼の天使が……。」

それは私なのだから……。

０３９　会話（後書き）

……あれぇぇぇ？？

一夏フラグ消えた？？

ん？？？？

このまま行くと、半分の一夏フラグ消えそうだな……。

そんなこんなで過去話も後編に続くｗｗｗ

０４０　約束（前書き）

……何度でも言おう……。

どうしてこうなった……。

そしてそろそろ漢字２文字のサブタイがきつくなってきた。

０４０　約束

「私（わたくし）は最初見た時、美しいとしか感じませんでした……。」

リリィは黙る。

何と言ったらいいのか。

「八枚の羽……それは白騎士事件の時にいた天使を連想させる姿でしたわ。」

……同じ機体だからねぇ……。

つか、やっべぇぇぇ。

なんかいい話に流れて行ってない？

「天使から、強い意志と力が当時の私には感じられました。」

言うに言えないぞ、この状態……。

「天使は金の亡者から私を救い、話を聞いて下さり……、私にある決心をさせてくれました。」

「？」

セシリアの表情が変わった。

強い意志の瞳が……。

顔に現れた。

「私も天使のような強さを身にまとい、人々を助けたい……。　そう思っただけですわ……。」

……うん、ごめんね。

セシリア……。

君を助けたの、偶然通りかかったら五月蠅かったもんで蹴散らしたくなっただけなんだよ……。

と、言ったら死ぬよな～、まずいよな～……。

セシリア呆然とするだろうな……。

「私は家族の証である……親が残してくれた財産を守るため。　それと天使を求め必死に勉強しました。」

……。

「ＩＳ適性テストでＡ＋を出した私を、イギリス政府は国籍保持のためいくつもの好条件を提示しました。　それは、財産を守るため……天使に近づくために役立ちました。」

「セシリア……。」

ようやく言えた言葉は、ただの名前だけだった。

「私（わたくし）はイギリス代表候補制として、第三世代装備ブルー・ティアーズのマスターとしてＩＳ（ココ）学園に来たのです……。」

そう言うとリリィ目を見つめる。

……なんだ？

「知っていて？　ブルー・ティアーズは私（わたくし）が天使に近づけようとして色や兵装なんか全て監修したのですわよ……。」

そう生き生きと話し始める。

……やべぇ。

セシリアのフリーダムへの執着は異常だ……。

正直怖い……。

「ビットも、できる限り形を似せましたの……。」

う～ん……。

確かにドラグーンと似てたね。

色も青ばっかりだけど……。

というかフリーダムが絡むと、セシリアキャラ違わなくない？？

つか、元気になったな……。

「ですけど、天使みたくビットと射撃の両立ができませんでしたわ……。」

そう言うセシリアの声は、悲しそうで。

見る者……聞く者の心を揺さぶりそうな声だった。

「いつか、また会える日を願って……私は負けるわけにはいきませんでした……。」

そう言ってリリィを睨む。

……いや、睨まないで。

だがそう思った瞬間、その目は笑みに変わる。

「ですが、私はどこか思い違いをしていたのかもしれませんわね。」

「……。」

リリィはただ黙って聞く。

「ありがとうございます、リリィさん。」

そう言って頭を下げた。

プライドとかどうでもいい。

他人を卑下してしまった自身を、セシリアは悔いていた。

リリィはそれを見て、ある決断をする。

「ねぇ、セシリア……。」

「はい？」

「今度、一夏と戦う事になると思うんだよね。」

そう。

クラス代表を決める戦いに、リリィ以外にも一夏も候補に挙がっている。

戦わないという事は無いだろう。

「もう一度さ……戦おうよ……。」

その言葉にセシリアは目を見開いた。

「今度はちゃんと……私の機体を使わせてもらうから……。」

それはセシリアに対する、最大限の礼儀。

ココまで彼女が来たんだ。

「天使になんで会いたいか知らないけど……セシリアにはいいことだと思うよ。」

なんせ、その本人が分かるのだから。

セシリアは口に手をあて驚く。

……そこまで驚く事か？

セシリアはリリィの手を掴み上げると「ぜひっ！！」と言った。

０４０　約束（後書き）

セシリア再戦フラグ。

そして、憧れのフリーダムとの再開フラグ。

色々と、説明不足な感じですが……まぁ、いいかな～??

セシリアのフリーダムへの執着は以上。

アニメを見て、ＩＳの動きとビットを使うさまはフリーダムと酷似する場面が多い……と思う……。

作者の妄想です……。

ん?

あれ?

何か変な感じが……。

まぁ、気のせいか。

束分補給のため、小説読みながらゆかりんの曲を聞いてます。

メタウサとかめろ～んとかｗｗｗ

０４１　姉妹（前書き）

お腹減った……。

料理を作る気になれないです……。

あと、眠い。

駄文どうぞ……。

041　姉妹

「姉さん！！」

「やぁやぁ、箒ちゃん。　どうしたの？　そんなつんけんしちゃって～？」

耳をすませると、声が聞こえた。

……なんだ？

……束……箒が部屋に訪れたのか？

そう思いながら、耳を声に傾ける。

何も着ずに……。

……シャワー浴びてたんだよ？

変態じゃないよ？

胸に何もつけていないし、腰に何も巻いてないから見られたら死ねる。

タオルを腰にまいとこう……。

……何があるか分からない……。

そっと耳をすませる。

……そんなことしなくても聞こえるけど、やりたかったんだ。

「そう、つんけんしない～♪」

足音が聞こえる。

「ほら、箒ちゃん。　立ち話もアレだし。」

箒の声が聞こえなくなり、静かに歩く音だけ聞こえる。

ベットがきしむ音がした。

「さて、なにを話せばいいのかな～。」

……ああ、なるほどね。

ＩＳ学園に来る前に、リリィは束にこう言った。

「とりあえず、世間話でもすれば？？」

まぁ、そこから束が自分の事を話せしてくれればいいんだけど……。

その思いで、言ったんだが……。

まぁ、束自身気が付いてるだろう……。

そう思いながら、束の言葉を待つ。

「箒ちゃん？」

突然束の声色が変わる。

「ん？」

「そのおっ○いもませブルゥァァァァッハッ！！」

「殴りますよ！！」

「殴ってから言った～！」

束が変な事を言うと、とてつもない打撃音が聞こえた。

殴られたんだろう……。

というか、本当に打撃音か！？

不味い音が聞こえたぞ……。

殴られた事は……。

あ～……。

……今回ばかりは自業自得です……いや今回も、か……。

「いいもん、いいもん。　いっくんの初めて奪っちゃうからっ！？」

「……姉さん？」

「じょ、冗談だよ～……。」

いやいや。

私も怒っていいかな？

私って何？

……私とは遊びだったのねっ！！

……キモッ！！

……。

なんだろ、このドロっとした感情は……。

「……まぁ、ふざけるのは良いとして……。」

「っ！？」

ですよねー。

あと少しで一夏を殺しに行く所でした。

うん。

わりと本気で……。

いや、一夏は無意識で束を私から奪いそうだ……。

やっぱ殺しておくか？

……。

……まぁ、馬鹿な事を考えるのは止めよう……。

「大きくなったね。」

優しそうな声が、室内に響く。

どういう状況か分からないから、想像するしかない……。

……出来ないな……。

だって私、想像力豊かじゃないし……。

それにしてもなにを言おうとしたんだ、箒？

「言いたいことはいっぱいあるよ……。　でもこれだけは言わせて……。」

束が喋り続ける。

「ごめんね……。」

……。

それは束が箒に対する思い。

一夏と距離を作らされ、世間から異端の目で見られたであろう箒への謝罪。

何年も何年も、言いたかったであろう言葉……。

「言い訳なんか言った所で、箒ちゃん……納得しないでしょ……。」

そう言うと、何かが動く音がした。

「だから、私は謝ることしかできない……。」

……。

「泣いても良いよ。　今だけは、お姉ちゃんで居させて……。」

その言葉のせいか、箒の泣き声が聞える。

長い時間ずっと箒の声が、室内を満たした。

リリィはドアに背を向け、座る。

……私にできる事は何もないよね……。

そう思って、泣きやむまで目を瞑った。

……。

「……今は何も聞かない……。」

箒は泣きやむとそう言った。

「だから、もう少し……このままでいさせて……。」

そうやって、長い時間箒が部屋にいた。

「このまま……抱きしめてて……。」

「うん……。」

姉妹の途切れた時間が、繋がった瞬間だった。

０４１　姉妹（後書き）

……寝ます……。

もしかしたら今日の更新、これが最後だったり……。

あ～、できればまだ更新したいな……。

お休み……。

０４２　愛情（前書き）

結局起きましたｗ

０４２　愛情

箒が泣きやみ部屋から去った後、リリィはシャワールームから出た。

「あれ？　いたの？？」

「いたよ。」

髪を下し、服を着ずに束に近づいた。

「？？　どうしたの？」

少し様子が変な事に気がついたのか、聞く。

「……いや。」

そう短めに返すと、リリィは束に抱きつきベットに押し倒した。

結構な音を立てて二人はベットに横になる。

「リリ……っ。」

束は名前を呼ぼうとしたが、言えなかった。

リリィの口が、束の口をふさいだ……。

ご丁寧に、隙間なく……。

そして離す。

だが、またくっ付く。

今度はリリィの舌が、束の口に入る。

お互いの舌と舌が絡み合う。

長い時間、絡ませる。

リリィは積極的に。

束は受け止めるように……。

リリィの顔が離れたときには、お互いの口と口の間に唾液の糸ができていた。

「……。」

束はリリィを熱い視線で見る。

……ウサギは万年発情期……。

ふざけた事を考えながら、再度束に顔を近づけた。

だが……。

「みぎゃん!?」

と、ドアの外から声が聞こえた。

束以外の声が聞こえ、リリィは少し不機嫌になる。

……誰だよ……。

束の顔を見るが、不思議そうな顔をしながらリリィを見ていた。

……まぁ、良いか。

この時だけは、リリィも「人なんかいない」と言うスタンスをとった。

ぶっちゃけ、無視した。

リリィは口を束の首に持って行くと、首筋を下から上になめた。

……誰だか知らんが、至福の時間だけは邪魔するな……。

そう思い、束の身体を貪った……。

リリィの手は、すでにアリス服を脱がすのにとりかかっていた。

「で、これはどういう事だ。」

「いや……、無性に束を抱きたくなっちゃって。」

「抱かれたくなっちゃいまして～♪」

なぜかあれから数十分後、千冬が部屋に乗り込んできた。

部屋は……特にベットが乱れており、そこを中心に衣類が散らかっている。

その部屋にリリィと束は、正座させられていた。

千冬の用件は、「まだ授業中だ」とのこと。

呼びに来たのだろう。

まぁ、すっかり忘れてたけどね……。

しかしこれはキツイ……。

裸で正座とか……何の拷問？

束に至っては、ちゃんと座れないのかリリィにもたれかかっている。

「生徒から報告があったぞ……お前たちを呼びにここにきてノックしたら、電流が流れたとな。」

そう呆れた視線を向ける。

……ああ。

あの声の子か。

「まぁ、お前達の事だから別にいいが……警告文はドアに書いておけ。」

さすがに分かっていらっしゃる。

トラップはやめろとは言わない、そこにしびれる憧れ……るのか？

まぁいい。

これでも世界屈指……いや、頂点にいると言っても過言ではない二人だ。

十年間逃走を続けたと言っても、その間に発明した物は結構ある。

部屋を見渡すだけでも分かる。

一見整理されているように見えるが、大容量のパソコンや近くにある紙は政府が喉から手が出るほど欲するものだ。

データー保存用の情報端末や、未登録のＩＳのコアだって設計図だってこの部屋にある。

防犯が強力になっても仕方がない。

ちなみに、リリィと束がよく逃走中に使ったトラップだ。

最初は誰かが部屋に近づいたら、モニターで監視するシステムだった。

が、束がそれにドアに電流を流したのがきっかけだ。

そこからドアノブによる指紋認証システムや、キーロック解除での赤外線網などを付け始めたのだ。

赤外線に触れたら、ゴム弾が天井に設置した隠し狙撃ライフルから発射されたりする。

おかげで逃走の足止めにもなったし、大事なデーターをいちいち破棄しなくて済むようになった。

コレがあるから、逃亡生活も楽しめた……。

リリィと束にとっては、これらは無くてはならない物でもある。

いくら取引をしたからと言って、侵入されたり寝首を掻かれたりされたらたまらない。

と言う事で、この部屋にも設置したのだ。

０４２　愛情（後書き）

……うん。

そう言う事があったんだよ……。

ウチの束に悶絶しな！

まぁ……するわけ無いよね～。

駄文だもんｗ

０４３　製作（前書き）

……。

前回はっちゃけすぎたかな？

０４３　製作

「で、授業中だと言いたいのだが……。」

そう言って千冬は言葉を止める。

「どうしたの？」

「お前ら……やっぱ服を着てくれ……。」

頬を赤くしながら千冬はそう言った。

まぁ、束はともかく私はねぇ……。

男のアレを見たがる女性など……まぁ、いるかもしれないが、この状況で見たがる人間はいないだろう……。

変態以外は……。

リリィは迅速に着替える。

束は……どうでもいいのか、リリィが立ち上がって着替えてもあまり動かなかった。

だが、寒いのかようやく動く。

春と言っても、何も着ないのは厳しい者がある。

天才でも、そこら辺は普通の人と一緒だ。

「まぁ、もう話してもいいか……。」

まって、束はまだブラを付けた始めた所だよ。

というか、下からやってお願いだから。

私はズボンを履いた所だし、話を聞く程度は大丈夫だけど……。

「さっそくで悪いが、来週までに一夏の機体を完成させ……。」

「ん、今日中には終わるけど？」

千冬の言葉を束は遮り、そう言った。

その言葉に千冬は目を丸くする。

「というかち～ちゃん……白騎士のときだって数時間で分解して組み直したんだよ？　これぐらいお昼前だよ。」

……朝飯前ではないのか？

まぁ、だが……確かに八割がた終わってはいるのだ。

基本フレームは最初から作ってあるし……。

機体コンセプトは決定してた。

外装も、コアが白騎士な分……簡単に決まったし……。

「ただ、武器がねぇ……。」

そう、白騎士のコアは一応初期化はしたのだが……。

「また、武器が近接オンリーなんだよね……。」

そう、装備できる武器が一つだけ、さらに近接武器でないとこの機体は十分な戦闘ができないのだ……。

なんという……白騎士と暮桜の再来……。

めんどくさいから、暮桜と同じ装備にしたのだがかなり不安がある。

机に置いてある紙を千冬に渡す。

「……思いっきり暮桜だな……。」

「でしょ～。」

千冬は自身の愛機とにたデーターを見た瞬間、その愛機の名前を呟いた。

束は同じものを作るのが面白くなかったのか、残念そうな声で目で分かるように落胆した。

「なんか一夏専用って思えるようなものない？」

一応姉弟だし、知ってそうなので聞いてみる。

だが、返答がない。

沈黙したままだ。

「あっ！　ち～ちゃんち～ちゃん、なんかいっくんに装備させたら面白そうなの言ってみて♪」

「いきなり何だ……。」

急にテンションが上がった束を、めんどくさそうに眺めながら質問の返答を考える。

まぁ、いきなり言われても困るだろう。

千冬はふと思い出したように呟いた。

「一夏は私と似てるからな……。　剣だけ極めた方がいいだろ。そっちの方が実に面白い。」

あ～、何処が似てるんだ？

そう思っているが、束は理解できたのか頷く。

……まぁ、少しは似てるけどさ……。

……いや、そう言われると似てる気が……。

いや、やっぱ似てない……。

というか、今面白いって言たよね……。

いいのか、自分の弟ボッコボコにされるかもしれないぞ……。

「まぁ、かなりの機動性と剣があれば良いだろ……。」

そう言うと持っていた、一夏の機体の紙を返す。

……機動性ね……。

……高機動バックパックでも付けるか？

それとも、パッケージで戦闘方法を変える方向性で行くか……？

いや、駄目だ駄目だ。

パッケージなんか使ったら、実験も出来ない……。

なんせこの一夏の機体、第三世代という括りで作っては無いのだから……。

「お前達は今から、授業に出ず一夏の機体を作るのだろ？」

その言葉に一応頷く。

「今日の残りの授業は全部山田君に任せたから、見学させてもらうぞ。」

……まて。

おい担任。

あの危なっかしい中学生を、一人にするのか……。

だが、何故だ……。

反論できない……。

いや、できるんだが……。

山田先生のオロオロした行動を思うと、……楽しいよね……。

そう思いながら着替えたリリィは、部屋の片隅にある天井まで届く大きな布をかぶせたモノを一つだけ移動させる。

「……。」

千冬は呆然としていた。

まぁ、普通はそうだよね？

ＩＳを室内……それも、ただの部屋で作るなんて……。

誰も思いたくないよね……。

だけど、これらは他人に技術を見せる気が無いのだ……。

布を取ると、そこには真っ白な甲冑が現れた。

０４３　製作（後書き）

……白式は……セシリア戦まで放置しておこうかな……？

箒フラグ折っちゃいけないしね……。

束さんなら……そう考えるかも……。

多分……。

０４４　連絡（前書き）

……ぶっちゃけ、戦闘まで話を進めるか？

０４４　連絡

「さて、クラス代表選の事について連絡がある。」

何気ない朝の風景。

だが教壇には千冬、一番後ろの席にリリィ。

その横に束が寝ている。

普通だったら見れない光景だ。

真耶は教室の出入り口付近で、その風景を苦笑いしながら見ていた。

「まず、戦闘は一体多数形式。　リリィ一人に対し織斑とオルコットで挑むもよし、リリィを上手く使って蹴落とすのもよし。　そう言う戦闘形式をとる。」

この提案はリリィ自身がしたものだ。

まず前提として一対一だが、この状態でリリィと戦っても誰も勝てやしない。

なら、一体多数で戦ってもらった方が戦闘経験を積むにはちょうどいい。

戦闘とは、いつも一対一ではないのだから。

「リリィの実力は私より上だ。　ああ、昔のだぞ。」

人とは弱っていくものだ。

ＩＳ操縦にももちろん影響する。

千冬が言う昔とは、最強と呼ばれていたブリュンヒルデの時のことである。

もはやその言葉に誰も驚かない。

セシリア戦のとき、生身でアレだけの戦闘を見せたのだ。

千冬以上の実力を持っていたとしてもおかしくはない。

「まぁ、そう言う事だから上手く戦えよ。」

そう言って口を釣り上げると真耶と入れ替わり、授業が始まった。

の、だが……。

千冬がいつのまにか束の後ろにいた。

……相変わらず、人間やめてない？

授業が始まって一分もたたずに、後ろにいられるとさすがに怖い。

千冬は椅子を束とリリィの間に置くと、小声で話し始めた。

「リリィ、次の授業はお前に任せる。」

「はぁ？」

「……オリエンテーリングだと思ってやれ。　私がやるには、性格が災いする。」

訳の分からない提案だと思ったが、納得してしまう理由を言われる。

……確かに千冬がそう言う提案すると、全員普通に何もできないだろうな……。

だけど、千冬？

私もここ最近、千冬と似たような扱い受けてるんだよ？

「なに、お前なら出来るさ……。」

「……。」

厄介だよね……。

オリエンテーリング……。

「……あ、ち～ちゃん。」

束が千冬の気配に目を覚ます。

……目……そんなんで覚めるんだね。

授業そっちのけで話し込んでいたため、生徒から千冬の存在が鬼からランクダウンされた事は、本人は知らない。

結局、授業終了まで次の授業の打ち合わせをしていた。

そして、今初めてリリィが教壇に立つ。

「まず最初に言おう、一夏の機体は完成しているが微調整のため代表選まで渡す事が出来ない。」

その言葉にクラス全員が声を上げる。

「えええええ～～～！！！」

「す、すごい……。」

「一年の、しかもこの時期に専用機が！」

「それじゃぁ、政府からの支援が！？」

「いいな～。」

「え、でも微調整って。」

「もしかして……。」

その言葉を最後に、全員の目がリリィに向けられる。

「どうした？」

言いたい事は分かるが、口にしてもらわないと千冬扱いをいずれ受けてしまう。

それぱかりは、少し勘弁して……貰わなくても良いのか？

よく考えれば、千冬って誰も寄り付かないよね？

なら、私にとっても悪い事じゃない様な……。

アレ……？？

そんな事を考えている中、ある一人の生徒が質問する。

「もしかして、織斑くんのＩＳって……篠ノ之博士とリリィさんが作ってるんですか？」

「そだよ～。」

その言葉に答えたのは束だった。

束も一応、努力して話に会話しようとしているらしい。

だが、そんなに会話が多いわけではない。

せいぜい、質問に対して端的に返答するぐらいだ。

「まぁ、結構実験色が強い機体だけど……いっくんにはちょうどいいと思うよ～☆」

そう言うと、クラス全員が一夏を見た。

「まぁ、そう言うわけだから今日の放課後に課題を出すから、こな

しておけよ……。」

ちなみにトレーニングには、箒がいないと出来ないようになっている。

一夏の機体は、近接用機体だから剣道で鍛え直してもらってこい。

いくらＩＳと言っても、操縦者の動きをトレースするのだ。

鍛えて損はない。

０４４　連絡（後書き）

……いや、せめて１話ぐらい会話させようや……。

みんな、ちょいエロは大丈夫かぃ？

作者はこれから先、何回か書くと思うよ？

そして今日も０時に５００人オーバー（５３９人）。

皆ちゃんと睡眠とってるかぃ？

かなり分割で載せてるから、総合ＰＶ３０万突破　ユニーク２万突破しちゃった……。（５月１日１７時　３０１．９９０アクセス　２２．９７８人）

真面目に頑張ってる人には、謝りたいよ～。

０４５　授業（前書き）

……？

なんか、文がおかしくなった？

まぁいいか。

０４５　授業

「まぁ、そんな事はどうでもいい。」

その言葉に全員が微妙な顔を見せる。

「この時間は、私の初めての授業だ……。　なにをしたらいいのかよく分からないが……私は全員の顔と名前を覚えてない……。　だから自己紹介を頼むよ。」

そういと、少しの生徒が拍手をした。

拍手される意味が分からないが……。

どんどん自己紹介されていく。

セシリアも最初のころの女尊男卑な態度は消えており、親しみやすい性格となった。

女尊男卑があると、人って仲良くなろうにもなれない時ってあるよね……。

……あ、一夏は例外。

あの馬鹿、千冬に聞いたけどつまらない自己紹介したんだったね。

またやりましたよ。

つまんない自己紹介。

とりあえず、千冬と一緒にどつきましたよ。

ええ、はい。

「さて、私も一応生徒だしね……と言っても、前に自己紹介したから分かってるよね？」

「いや、あんな派手な登場のし方したら……覚えたく無くても覚えるって……。」

……派手？

セシリアとの事かな？

まぁ、いいや。

「……んじゃぁ、誰かに聞いてみたい事でもあったら聞いてみな～。」

その言葉に、全員の目が光る。

……アレ？

もしかして、めんどくさい事に巻き込まれる？

「リリィせんせ～い。」

「はいはいは～い。」

なにその挙手合戦……。

引くわ……。

しかも、先生って……。

仕方なく、適当に名前を読んで発言させた。

「リリィさんは、ＩＳを作った一人なんですよね？」

……そんなことか。

「ん？　まぁ……回路や武器だけ……。」

「他にもエネルギー効率や神経接続ネットワークつくったよね～。」

……まぁ、そんな物も作ったな……。

当たり前すぎて、自分が作った事忘れてた……。

「と言う事は、篠ノ之博士と昔からのお知り合いと言う事ですよね！！」

（キタキターー！！　百合フラグキターーー！！！　篠ノ之博士×リリィ博士！　いや、リリィ博士×篠ノ之博士！！）

……っ！？

なんか悪寒が……。

まぁ、良いか……。

「そだよ～。」

その言葉に全員目が輝いた。

「どんな出会いをしたんですかっ！！」

え？

なにその質問？

「やっぱ、近所だったのかな？」

「いや、トイレで偶然……。」

「いややっぱ……。」

……女子の妄想怖い……。

というか、トイレって……。

私男……。

「う～ん、アレはＩＳの実験動作中……白騎士のテストだったっけかな？」

白騎士と言う単語に全員口を閉じた。

「まだ、ＩＳを発表してなかった時だね。」

「うん、あのときは目を疑ったよ～。　だってＩＳより早く完成した機体を見たんだから～。」

皆静かに話を聞く。

「その時だね～☆　リリィちゃんと出会ったのは♪」

「いきなり襲撃されたしな……。　白騎士に……。」

「いや～、バスト８８ｓｍの黒髪の白騎士カッコよがっゴォォォォ!?!?」

いきなり束が廊下まで吹っ飛んだ……。

さっきまで束がいた場所に、出席簿を持った千冬がいた。

「……何か言ったか？」

「「イイエ、ナニモイッテマセンヨー。」」

リリィと束は、口をそろえて言った。

……バストサイズに怒ったの!?

殺気があの頃より強化されてる!?

「え、白騎士って……。」

「織斑先生？」

「……あり得そう……。」

「何それ、怖い。」

「と言うか胸大きい……。」

知られざる真実。

白騎士が誰だかばれました。

皆の目が、納得したように千冬を見る。

まぁ、ミサイル千本切りしたからね……。

山田先生なんて大慌てだよ。

「良いかお前たち、白騎士なんて単語なかった。　いいな。」

千冬が殺気を出し全員を牽制する。

「もし、白騎士について話が聞こえたらグランド百週だ。」

……うわ……。

それはきつそ～。

「さて、他に質問あるやつないか？」

千冬がそう言うと、皆恐る恐る手を上げる。

また適当に指す。

「織斑先生とリリィさんは戦った事があるんですか？　と言うかあるんですよね？」

「ん、あるぞ。」

千冬があっさり答える。

皆の目が輝き始める。

「結果はどうだったんですか！！」

その声に千冬の顔が少しだけ暗くなる。

「私が勝った。」

……まぁ、言っても問題ないよね。

特別な事も無いので、リリィは普通に答えた。

そこ答えに全員「やっぱり」と言う顔をする。

「まぁ、あの頃の私は未熟者だったな……。」

そう言いながら窓の外を見る。

……なに黄昏てるの？

微妙に似合ってるし……。

「まぁ、私がモンド・グロッソで優勝できたのはリリィのおかげが大きい。」

え？

私何か特別な事やったっけ？

「リリィは私にいろんな事を教えてくれた……。　いわゆる私の師だ。」

その言葉に全員が驚愕すると同時に、やっぱなとくしたような表情になる。

そりゃぁ、素手でＩＳを倒せる人が師なら……強くなるよね……。

そんな顔を全員していた。

……そんな事もやったね……。

「……ん？」

一人の生徒が声を上げた。

「ちょ、ちょっと良いですか！！」

その言葉にリリィは頷く。

「リリィさん……その時いくつでした？」

その質問に教室が凍った。

……言ってもいいのかな？

０４５　授業（後書き）

まぁ、次回セシリアＶＳ一夏ＶＳリリィ……。

まぁ、必然的に負けるよね……。

二人とも……。

０４６　天使（前書き）

……この戦闘長くなりそうだな……。

前編？

０４６　天使

リリィはセシリアと戦ったときのアリーナにいた。

あの時と同じように、観客席にはクラス全員がいる。

なんか、一夏とセシリアがどちらが生き残るか話してるし……。

まぁ、賭け事だったら不味いけど……そういう話題なら仕方がないよね……。

気がつくとセシリアが、ブルー・ティアーズを装備しアリーナに降りた。

「リリィさん、今日はよろしくお願いしますわ。」

「うん。」

対するリリィは、未だフリーダムを装備していない。

……束が言っていたように、サプライズは必要だよね。

ということで、戦闘開始まで装備しません。

私の中では軽くフリーダムで撃ちあった後、シフトを移行させストライクフリーダムでセシリアと戦闘。

最後にフェニックスでフィニッシュと言う光景を想像した。

というか、今気がついた。

フェニックスとフィニッシュって、文字似てない？

いや、本当に……。

そう思いながら、一夏がいるであろう方向を見た。

今ごろ一夏は束に白式の説明聞いているんだろうな～。

あ、セシリアに言っておこう。

「セシリア～、一夏は初期設定の機体だけど本気でやった方がいいよ～。」

白式はちょっとばかし危ない機体だからね～。

「分かりましたわ。　けど、一番危ないのはリリィさんではなくって？」

……そりゃそうか。

少し笑い合って話していると、少し控えめの音を出しながら一夏が登場した。

その姿は白騎士を思い出させる。

白式。

一夏のためにリリィと束が作った、試作機。

可能な限りの実験機構を搭載した、最新機だ。

「待たせたな。」

……確かにね。

普通だったらこんなに遅くなるわけがない。

束が何かし込んだのだろう。

だが、別にかまわない。

「では。」

そう言ってセシリアは上昇する。

一夏は最初から飛んでいたので、それと同じくらいの高さでとまる。

一夏はセシリアを見た後、リリィを見る。

≪では、試合を開始する。≫

千冬の声がアリーナに響く。

≪リリィ。　本気を出すなとは言わん……。　せめて絶対防御は貫通させない程度の威力にしておけ。≫

「言われなくたって。」

そう言って待機状態のフリーダムを、一夏達に見せる。

「絶対防御を貫通する攻撃って……。」

客席から声が聞こえる。

まぁ、普通はそうだ。

ＩＳの装備は絶対防御で防げるようになっている。

防げない物もあるが……。

≪ＺＧＭＦ－Ｘ１０Ａ　起動。≫

待機状態のフリーダムが、セシリア達に分かりやすく起動画面を見せる。

まぁ、これもパフォーマンス、パフォーマンス♪

リリィはフリーダムを起動させた。

瞬間的に全身が灰色の鉄で覆われる。

その姿を見てセシリアは目を見開いた。

「あ、あ……。」

フェイズシフトを起動させる。

色鮮やかな色がつき、全員それに見惚れる。

「天使……。」

誰かがそう言った。

翼を広げ飛ぶ。

「全身装甲（フルスキン）！」

「綺麗……。」

色々な声が聞こえるが、リリィは無視する。

戦闘に集中する。

集中しなくても、結果は変わりそうにないが……。

≪試合開始！！≫

その声と同時に、フリーダムは一夏に襲いかかった。

ライフルを腰にマウントして、ビームサーベルを抜き取る。

その光景に全員驚愕する。

ビームと言う存在に目を見開いたのだろう。

ビームなんて、この時代に出来てないしね～。

驚くのも無理はないよね。

というかここ最近、皆驚愕しすぎでしょ？

「くっ！」

一夏は持っている剣を構える。

対ビームコーティングをした雪片弐型。

対ビーム兵装だ。

……というか、フリーダムのビームシールドを参考にしただけ……。

まぁ、通常状態をそうしておくことで防御面を強化した。

そうでもしないと、まともに戦闘出来ない時もある。

特にフリーダムとか、フリーダムとか、フリーダムに。

あれ？

全部フリーダムだ。

とにかくビームやレーザー、ミサイルなどで壊れる事は無い。

……多分。

そう思いながらサーベルを振るう。

一夏は雪片を振るって、サーベルを受け止める。

サーベル同士が、激しく火花を散らす。

「リリィ！」

何か言いたそうだ。

だが、今は戦闘中。

リリィは言葉を聞く気はなかった。

「口閉じないと、舌噛むよ。」

そう言って足で一夏を蹴る。

一夏は体勢を崩しながら落ちる。

だが、地面直前で持ち直す。

セシリアは未だフリーダムを見て呆然としている。

……どうした事やら……。

まぁ、自身を助けた機体と似ている機体が現れたのだ。

そうなるだろう。

気を戦闘に集中させるために、サーベルを戻しライフルを持ってセシリアを狙う。

そして撃った。

「……っ！！」

気がついたのか、セシリアが回避する。

「戦闘に集中した方がいいよ？」

そう言うとセシリアは首を振って気持ちを切り替えた。

「似ているだけですわよね……？」

そう言ってセシリアは戦闘を開始する。

０４６　天使（後書き）

……まぁ、開始しました。

フリーダムＶＳ白式＆ブルー・ティアーズ。

あれ？

今……白式とブルー・ティアーズが両機なような書き方したな……。

……ｗ

まぁ、そんなもんです。

何話でこの話終わるかな？

０４７　射撃（前書き）

未だ終わりそうにない。

中編？

いや、まだまだ前編。

そして気がついた。

戦闘前にあの食堂での出来事を掻くの忘れた。

まぁ、似たような別の展開を書くか……。

０４７　射撃

セシリアは少し移動する。

フリーダムはそれを見ながら、銃を向ける。

だが、一夏が雪片を構えフリーダムに接近してくる。

仕方がないため、ライフルを腰にマウントし直しその場から離れる。

セシリアも体制が整ったのか、スターライトｍｋＩＩＩを撃ってくる。

その射線は一夏を援護するかのように、撃っていた。

「おりゃぁぁぁぁぁぁ！！」

当の一夏はそれに気が付いてないようだが……。

その分穴だらけだ。

一夏にあてないように、フリーダムを撃っている。

一夏にあてない様にだ……。

どうやらセシリアは、フリーダムを落とすのに一夏を利用する事にしたらしい。

悪くない判断だ。

この戦闘での最大の脅威は、フリーダムなのだから。

フリーダムさえ倒してしまえば、後は素人で消耗しきった一夏を倒すだけ。

判断は間違ってはいない。

だが……。

「一夏……戦闘不足とは言え、ちょっとは周りを見ようよ……。」

そう呟くとフリーダムは、腰のレールガンを展開した。

一夏と距離をとりながら放つ。

「いっ！？」

その声を発した瞬間、音速で飛んできた砲弾にぶつかる。

セシリアは正確な射撃だが、集中しすぎ……。

しかも、正確すぎてフェイントが無い。

その分避けるのも簡単だった。

つまり実力不足。

勝とうとする意志はいいが、勝てない試合なのだ。

レールガンを仕舞うと、十枚の羽を畳み重力に従って地上に落ちる。

そこには一夏がいた。

サーベルを引き抜く。

一夏は接近に気がついたのか、フリーダムを突こうと剣を構える。

「「っ！？」」

だがフリーダムはその間合いに入ろうとした瞬間、翼を広げ全スラスターを吹かし体勢を微妙に変えるとブースターを最大点火させ、セシリアに接敵する。

一夏を狙うと見せかけて、セシリアを狙う。

せめて、これくらいは見抜いて欲しい。

そう思いながら正確な射撃を回避しながらセシリアに接敵する。

「純粋な回避だけでレーザーを回避するっ！？」

前回と違い、今回はフリーダムは撃っているセシリアに向かっているのだ。

回避は殆ど出来ないに等しい。

向かいながらの音速を超える光条を避けるのは、夢のまた夢なのだから……。

だが、フリーダムは回避する。

フリーダムは接近しながら、背中からバラエーナプラズマ収束ビーム砲を展開させる。

その光景に慌てたセシリアだが、無情にも二つの砲門から光は放たれた。

ビームがセシリアの胴とライフルを捉る。

「くっ！！」

絶対防御で身体に影響は無いが、エネルギーは大幅に削られた。

主兵装のスターライトｍｋＩＩＩも無くなった。

残るは背部装備の、誘導兵器のみだ。

セシリアの横を抜けると反転して、マルチロックオンシステムを起動させる。

レールガン、バラエーナ、ビームライフルを構える。

「うっおおおおおおお！！」

一夏が高速で飛び、フリーダムに向かうが間に合わない。

五つの砲門から火線が放たれた。

「きゃっ！」

セシリアが悲鳴を上げる。

直撃する。

そう思い、目をつぶった。

だがビーム直撃しなかった……。

セシリアは恐る恐る目を開く。

「おぉぉぉぉぉ！！」

その目には、一夏の背中が映った。

一夏は無謀にも、セシリアを狙ったバラエーナを雪片で受けとめた。

……束の入れ知恵かな？

そう思いながら、その光景を見る。

右手で雪片持ち、左手で剣の腹を支えている。

剣の腹でビームを防ぐ。

雪片はビームシールドとしての機能を発揮した。

ビームコーティングをしたのは間違いじゃなかった。

だけど、範囲が狭すぎる……。

……少しばかり改良が必要だね。

一夏は防ぎきれなかった、ビームの奔流で機体の肩が破損する。

リリィはそれを見て、ため息をつく。

……直すの私だからめんどくさい……。

だから、一夏には心臓めがけて撃ったのに……。

セシリアを防ぐし……。

少し憂鬱になった。

０４７　射撃（後書き）

……ビームコーティングした雪片弐型は、ビームシールドとして使えます。

形は原作と変わらず。

まぁ、フリーダムとかのシールドには敵いませんが、ビームくらいで壊れたりしませんよ。

リリィ仕立ての雪片は、防御面にも特化していたｗｗｗ

だけど、範囲が狭い、ビームを切る事はできない……防ぐしかできない……。

ただのビームサーベルと切りあっても壊れない程度の私の考えでしたｗｗｗ

結局、ビームを防御できる様になっちゃったよ……。

良いのかそんなんで……。

……。

０４８　存在（前書き）

やっと中編……。

書くのがだるい……。

０４８　存在

「……。」

「そんなに珍しいか？　山田先生。」

真耶が戦闘を食い入るように見ていたため、千冬はちょっとした意地悪な発言をした。

コレでも、千冬はリリィを過小評価されるのを嫌うのだ。

前回の戦闘で、無茶だなんだ言ったのだからそのお返しと言うわけだ。

「リリィさんのあのＩＳって……。」

「フリーダムはＩＳじゃないよ。」

「え？」

真耶は束の方を向きながら、目を丸くした。

千冬も知ってはいたが、よく分かっていないのか束の言葉を待つ。

「今のＩＳは白騎士を元に発展や量産された試験機……。」

丁度、一夏にレールガンが直撃した。

「フリーダムはＩＳの基礎になったけど、それは武器やシステムだ

け……。　正確には全く別の駆動系統やシステムなんかを使ってる……。」

真耶は束を見ている目をフリーダムに移動させる。

「アレはＩＳであってＩＳではない……。　けど同時にＩＳの基礎になった機体……だけど完成された機体。」

「つまりフリーダムは、ＩＳに似ているだけの全く別の機体と言う事か。」

千冬の発言に少しだけ首をかしげる。

「どっちかって言うと、今のＩＳがフリーダムに似てるんだけどね……。　今のＩＳは白騎士＋フリーダム÷２って奴？」

束の発言は、白騎士以外はコピーと言っているように聞こえた。

実際白騎士と言う設計図が無ければ、ＩＳは誰にも作れないのだ。

コピーと言われても仕方がない。

真耶は混乱しながらも話を理解しようとする。

「え～っと……つまり今のＩＳは……。」

「おっぱ○に分かりやすく言うのなら、ＩＳはフリーダムの劣化コピーって所かな？」

束は自身の発明を劣化コピーと称した。

「いや、劣化コピーってわけじゃないけど……。　う～ん。　まぁ、フリーダムはＩＳではない事は確かだよ、うん☆」

答えになって無い事を言って、束は自身の説明に満足したのか箒に抱きつく。

というか、箒……なぜここにいる？

「で、山田先生……。　フリーダムがどうかしたのか？」

さっき言いかけて束に止められた言葉を聞く。

その間にも戦闘は続き、フリーダムが五つの砲門全部展開し攻撃した。

真耶は慌てて、千冬の方を向き口を開く。

「フリーダムでしたっけ……？　あの機体？　えっと～……白騎士事件にいた天使に似てる気がするんですけど……。」

ふむ……。

さすがに、気がつくか……。

「無事か？」

一夏は砲撃を防ぎききると、セシリアにそう聞いた。

「あ、あなたっ！！」

「苦情はあとで聞く。　まずはリリィを倒すぞっ！！」

そう言って再度フリーダムに向かって飛んだ。

だが、すぐに正確無比な射撃で動きを阻まれる。

リリィの射撃は狙ってはいない。

向けたらすぐに撃ってくる。

スコープを見た様な感じもしない。

だが正確な射撃……。

「く、動けない……。」

徐々に白式のエネルギーが消耗していく。

フリーダムは未だエネルギー切れを起こす様子もなく、ビームライフルをたて続けに撃っていた。

「……っ！　一か八かだっ！！」

そう叫ぶと、ビームが当たるのを気にせず、白式はフリーダムに接近した。

雪片を振り上げる。

「うぉおおおお！！」

渾身の一撃とまではいかないが、せめて一撃当てたい。

そう考えながら、一夏は叫び雪片を振り下ろした。

（やれる！！）

そう思ったが、一夏は忘れていた。

フリーダムの左腕に装備された、シールドの存在を……。

まっすぐ振り下ろされる雪片は、リリィにとっては何の脅威でもなく……。

フリーダムは雪片を簡単にシールドで受け流した。

「さすがに、突撃されても当たるわけ無いよ……。」

その声が聞えた瞬間には、一夏は強い衝撃を受けた。

ビームライフルを直撃させられた。

一拍置いて、それに気がついた時には一夏はアリーナの地面に叩きつけられていた。

０４８　存在（後書き）

……ヤベェ……。

すでにエネルギー残量が０に近いぞ……白式とブルー・ティアーズ……。

そして、リリィフラグから一夏フラグに移動する気配？

まぁ、どっちでもいいけどね……。

リリィにフラグは立たないし……。

０４９　剣撃（前書き）

……白式ってサブタイトルにしたかった……。

けど、内容とほとんど関係ない事に気がついたｗ

049　剣撃

「痛っ～。」

煙が晴れたとき、そこには無事な一夏の姿があった。

形状が変化した白式。

それを纏い、一夏は立ちあがった。

「ようやく第一形態（ファーストシフト）……。」

リリィがそう呟く。

そう、ようやく白式は一夏の専用機となった。

しかもご丁寧に、エネルギーが回復している……。

束か……。

対フリーダム対策って奴？

……まぁ、面白い。

今夜は色々お仕置きしないとなぁ……。

お仕置きて言っても、束も楽しめるものだけどね……。

私だけ、楽しんじゃいけないよね？

それはリリィの本心。

戦いを楽しむという、狂気の感情。

それが今のリリィを支配していた。

束は前と後ろ、どっちがいいかな？

まぁ、どっちでもいいか。

客席からは、機体の形が変わった事に皆驚いていた。

「セシリア！！」

一夏の声がアリーナに響く。

セシリアは一夏に少し驚いていた。

「援護頼むぞ。」

そう言うと、またフリーダムに接近した。

「馬鹿の一つ覚えだね……。」

そういいながらシールドを一夏に向かって投げる。

だが、一夏は速度を落とすことなくシールドを雪片で弾く。

先ほどとは違うのが、よく分かった。

速度も、伝達の早さも何もかも違った。

「っ！！」

だがシールドを弾いた時、一夏は目を見開いた。

フリーダムが眼前にいた。

距離にして、１m以内。

（完全に間合いに入られたっ！？）

とっさに雪片で迎撃しようとするが、振れない。

それはそうだ……。

雪片はシールドをはじくのに思いっきり振ってしまい、戻そうにも戻しきれないのだ。

一夏はようやく気がついた。

何故、守りの要であるシールドを投げたのか……。

フリーダムは両腰から、ビームサーベルを抜き白式を斬った。

「ぐぁぁぁぁ！！」

と言っても、エネルギーを消耗させられただけだ。

シールドを投げた理由……。

剣を振っていた者なら理解できた。

斬撃は九つしかなく刺突(つき)を始め、切り下ろしの唐竹(からたけ)、右からの切り落とし袈裟斬(けさぎ)り、逆……左からの切り下ろしである逆袈裟(さかげさ)。

横切りである右薙(みぎなぎ)、左薙(ひだりなぎ)。

斜め下からの切り上げである右切上(みぎきりあげ)、左切上(ひだりきりあげ)。

そして完全に下から切り上げる逆風(さかかぜ)がある。

これら基本斬撃があるからこそ、剣は読みにくいし奥が深いのだ。

どの方向から剣が振られるかは分かる。

だが連撃になると、剣は読みにくくなる。

一度目の斬撃は見える切り方。

至極防ぎやすい。

だが二度目に振られる剣は、三つの軌道のどれかで振る事ができる。

袈裟斬りから続く剣撃は、右薙、右切上、逆風のどれかに繋がる。

それを読むことは難しい。

剣撃を防ぐという事は、初撃を防いだ後も読まなければならない。

三度目に振られるのは、もっと読みにくい。

しかし、それは剣が一つの時だ。

二つある場合、使い手の動きで大半が読める。

……だが、熟練した剣士であるなら読めなくする事はできる。

一夏はそれを体感した。

シールドは視界を塞ぎ、初撃を読ませなくするための方法……。

言いかえれば、目くらましだ。

更に二刀流で、十を超える斬撃を白式に浴びせた。

斬撃を増やすことで、太刀筋を読めなくさせる。

一刀なら重さで少しずつ単調になるが、二刀なら斬撃が単調になる事はない。

初撃が理解できないのならば、相手は何が起こったのか理解の出来ぬまま斬られる……。

一種の完成された斬撃の境地……。

それが今のフリーダムだった。

見るもの全てを圧倒する剣技。

流れる様な剣は、まるで舞いのようだった。

見ている者、……全員が見いるほどの剣撃。

太刀筋は綺麗で、揺るぎがない。

完璧だった。

一夏は再度、アリーナの地面に激突した。

０４９　剣撃（後書き）

……一応あってるよね？

斬撃の名称あってるよね？

まぁ、そんなこんなで中盤あた……り？

前の話でも、同じ事言わなかったっけ？？

フリーダムの剣撃については、セイバーを大破させた時のアレを思い出してくれればいいと思います。

さて……なんかリリィの剣技に名前付けたいね～。

すっごい厨二っぽい名前が……。

○○流とか。

そう言えば、千冬の剣って原作に流派あったっけ？

見当たらないから、無いと思うんだけど……。

０５０　終幕（前書き）

……キリが良いな……。

セシリア戦後半。

なんだ、このセシリア……。

頭がよすぎる！？

少しずれた、セシリアは何処に行った！！

０５０　終幕

一夏が地面に落ち、戦闘ができないと判断したフリーダムはセシリアの前に停滞する。

セシリアは身構える。

背部武装をいつでも展開できるように体勢に……。

だが、それと同時に敵わないと感じていた。

一瞬にして白式と同じように、無残に切り刻まれてしまうのではないかと思った。

「さて、セシリア……聞きたい事があるんじゃない？」

けれどリリィはそんな事はせず、言葉を投げかけた。

リリィの声にセシリアは頷く。

ちなみにこの声、なぜか観客席に聞こえるようになっていた。

束の仕業か……。

だが気にしない。

今は、セシリアの願いを叶えてやりたいから……。

「どうぞ、答えれるだけ答えてあげるから。」

リリィはそう言うと、サーベルを両方腰に戻した。

攻撃オプションを消した事で、セシリアの何かが緩んだ。

ゆっくりと口を開く。

「では……。」

その声は、客席をも静まらせた。

「現在ＩＳには初期設定……いわゆる最初の状態、第一形態（ファーストシフト）……先ほどの織斑さんのＩＳが行った事ですわね。そして第二形態（セカンドシフト）があります……。」

授業みたいな説明の仕方だ。

よく分からない人にはもってこいの説明だね。

「十年前に起きた白騎士事件では、青い翼のＩＳが確認されていますわ。翼の数は十八枚。」

「……そうだね。」

自身の言う事に自信があるのか、はっきりとした声量だ。

「リリィさんのその姿は、そのＩＳと酷似していますが色々と違います。ですが、それがシフト変化によるものでしたらどうでしょう。」

その言葉に束と千冬以外の全員が息をのむ。

「さらにリリィさんは篠ノ之博士と同様、ＩＳの開発者。……つまり白騎士事件に立ち会える。」

真耶はその言葉にまさかと思い、目を見開く。

「私が出会ったのは、八枚の翼の天使。」

セシリアが言葉を止める。

そして言った。

「この三種の青い翼の天使は、リリィさん……貴方のＩＳですわね……。」

その言葉は、全員を驚かせるには十分だった。

中には、予想していたのかあんまり驚かない生徒もいた。

リリィはため息をつく。

……そう言えばセシリアは、主席……頭が良いんだっけね……。

そう言うとリリィは、モニターを浮かび上がらせる。

「……正解だよ、セシリア……。」

リリィは白状した。

そしてモニターが、文字を表示する。

≪ＺＧＭＦ‐Ｘ２０Ａ　起動≫

その瞬間、フリーダムが光に包まれる。

光が消え現れたのは、セシリアにとって人生の分岐点（ターニングポイント）を作った機体だった。

ＺＧＭＦ－Ｘ２０Ａ　ストライクフリーダム。

セシリアのブルー・ティアーズが目指すべき最終地点。

それが、セシリアの目の前にいた。

観客席の生徒はフリーダムが変化した事に驚き、そしてセシリアの言葉が事実だった事に驚愕していた。

……何度も言おう。

驚愕しすぎだよ……。

「いつから気が付いていた？」

リリィは不思議に思い、聞いてみた。

まぁ、確かにアレだけの証拠を出したんだから分からないわけ無いけど……。

「最初は半信半疑でしたけど、リリィさんの機体を見て確信しまし

たわ。　そしてあの剣捌きでも……。」

セシリアは、何とも言えない笑顔でストライクフリーダムを見ていた。

「お会いしたかったですわ……。」

そう言うと涙を流した。

確かにこういう状況を作ろうとはしたが、泣かれるのは想定外だった。

セシリアは涙を指で拭き取りながら、ストライクフリーダムを見つめる。

……やばい、どうしたらいいんだ？

客席もなんで、セシリアが泣いているのか理解できないでいる。

千冬も束もだ……。

いつまでも、この状態は困る。

「……なら、セシリア……誘導兵器の使い方よく感じておいてね……。」

だからリリィは話を終わらせた。

そして、ドラグーンを全基展開させる。

それらは各個意思を持ち、自在に空を飛びまわる。

セシリアはリリィが何を言っているのか、理解ができなかった。

だが、自然と背部のブルー・ティアーズを展開させた。

誘導兵器と誘導兵器の勝負。

セシリアは泣きながらも、己の成果を見せるかのようにブルー・ティアーズを動かしドラグーンを撃ち落とそうとする。

だが、ドラグーンはブルー・ティアーズより精密、かつ正確な軌道で発射されるレーザーを避けた。

その間にも狙われていないドラグーンがビームを発射し、ブルー・ティアーズを撃ち落とす。

わずか数秒の間に、ブルー・ティアーズが全基失われた事により、セシリアは攻撃オプションが消え、負けと言う事になった。

一夏は相変わらず地面と一体化していたため、勝負はリリィが勝つと言う当たり前の結末となるのだった。

０５０　終幕（後書き）

結局一夏が、活躍しない戦闘だった……。

だが、一夏にセシリアフラグを持って行くには、守るというのは…

…よかったのかもしれない……。

そして、前書きにも書いたとおり……。

セシリアがセシリアじゃない！？

やっばいね～☆

こっわいね～☆

と言う事で、セシリア戦はこれにておしまい。

……６回更新した？

マジで？

０５１　戦いの結末と事件の影（前書き）

もう、２文字でサブタイトル付けるのがきつい。

ので……止めますｗ

０５１　戦いの結末と事件の影

「では、一年一組の代表は織斑一夏くんに決定です。　あ～、一繋がりで良い感じですね～。」

真耶はそう言うと、手を合わせて笑顔を見せた。

その笑顔は、どう見たって中学生な感じで……。

本当に先生なのか疑いたくなるものだった。

……と言うか、山田先生歳いくつ？

と聞きたいが、束に睨まれそうなので止めた。

そう言えば、女性に年齢聞いちゃいけないんだったね……。

危ない、危ない。

モニターには、一夏の名前が大きく映し出されている。

一夏がそれを聞くと不満そうに手を上げた。

「先生質問です。」

「はい？」

はっきりと不満そうな声と、訳の分からない声が一夏から漏れる。

真耶は気にせず、聞き返したが……。

「俺は昨日、試合に負けたんですが……なんでクラス代表になっているんでしょうか？」

「ああ、それ？　私達が辞退したから。」

一夏の質問に、私は当然のようにそう答えた。

その声に、一夏は私の方を振り向く。

「なんでっ！？」

一夏、やりたくないからって怒る事は無いじゃない……。

それに、私は別の考えがあるんだよ？

「まぁ、一夏には強くなってもらわないといけないし……。」

「？」

私の言葉に一夏は分からないという顔をしていた。

「私は忙しい身なもんで。」

事実、ＩＳの強化案やら一夏のデーターを取らないといけないから忙しいんだ……。

セシリアにも、適当に理由をつけて辞退してもらった。

「で、その本音は～♪」

束がそう言うもんで私は口を開いた。

「めんどくさいじゃん、クラス代表。」

笑顔でウインクをしながらそう言った。

……うん。

男やめてるね……。

まぁ、束さえいれば別にいいんだけど……。

「やっぱりかぁぁぁぁ！！」

一夏は私の言葉に声を荒げた。

というか、教室にいる全員耳をふさいだよ？

もっと静かにしましょう……。

千冬なんか、出席簿で素振り始めちゃってるし……。

真耶なんか、あわて始めちゃったよ？

「いや～、よくわかってるね～☆」

「世界で一人だけの男性操縦者なんだから、持ち上げないと……。」

「私達は貴重な景観ができるし、他クラスに情報を売れる。」

「一粒で二度おいしいね。」

束がふざけてそう言ったのが皮切りに、教室中そう言う言葉で溢れた。

というか、今腹黒い奴いなかった？

一夏で儲けようとする奴……。

私に迷惑かからないなら、別にかまわないけど……。

「って、売るな……痛っ！！」

一夏がまた叫ぶと、なぜか痛がった。

突然肩を押さえ、痛がった。

だが、一瞬だ。

殆どの人は、適当に理由でも付けて納得したのだろう。

だが、私の目にはそれが不自然に見えた。

「どうしたの？」

一応聞いてみた。

なにか不安がする……。

リリィはその感情を制しながら、一夏の言葉を待った。

「いや、なんか何にもないのに殴られた気が……。」

一夏はそう言うと、首をひねる。

肩をさする所を見ると、肩に痛みが走ったのだろう。

なにが起きたんだろう……。

すごい不安だ。

だが、私は一夏を安心させるため興味無いそぶりを見せた。

聞いといて、興味が無いとはさすがにイラつくだろう。

そうやって私に気を取られればいいんだけど……。

だが、一夏は気が付いてないのか肩を何度もさする。

「まぁ……気のせいじゃない？」

結局そう言うしかなかった。

一夏もそう考えたのか、肩をさするのをやめた。

「後、一夏……敗者と死人に口は無いよ？」

私は最後にそう言って、一夏に止めを刺した。

一夏は頭を抱えて叫ぶ。

結局千冬の一撃で、静かになるのはいつもの事なんだろう……。

だが、一夏の痛みが後に大きな事件となる事を……今はまだ誰も知らない。

０５１　戦いの結末と事件の影（後書き）

作者の頭は、なぜか頭痛がしています……。

そんな頭で、いまさらシナリオの大まかな流れを決めるという……訳の分からない事を始めました。

テキトーに書いてたのに……。

なぜ、こういう時に限ってシナリオが浮かぶんだ……。

０５２　手品の仕組みとリリィのお仕置き（前書き）

……ぎりぎりいける。

うん。

大丈夫だ。

……多分……。

０５２　手品の仕組みとリリィのお仕置き

「で、束……。」

そう言って私は束をベットに押し倒す。

逃げられないように覆いかぶさり、束の両腕を左手で頭の上に押さえつけてる。

「ど、どうしたのかな～……。　ちょっと怖いよ？」

確かに今のリリィを見たら、十人に九人は怖いというだろう。

だが、そんな事はどうでもいい。

リリィは気になっていた事を束に聞いた。

「あの戦闘のエネルギー回復……、一体どんな手品を使った？」

そう……。

白式が第一形態（ファーストシフト）時に見せた、エネルギー回復現象だ。

リリィの記憶では、あんな装備を白騎士にした覚えはない。

絶対にだ。

拡張領域（バススロット）は全て雪片弐型に使っており、後付装備（イコライザ）ができないのが白式だ。

だが、なにをしたのか白式はエネルギーを回復するという謎の現象を起こしたのだ。

そしてそんな現象を引き起こす事ができるのは、リリィを除いたらただ一人。

束だけだった。

「で、なにをした？」

徐々に顔を近づける。

傍から見たらキスをしようと言う感じに見えるが、本人たちにとったらその真逆のことだった。

「……え～っと……。」

束は言い淀む。

徐々に顔を近づける。

「ふむ……言ったら、好きそうな事……やってあげるけど？」

「腕に無理やり、初期段階で使用できるだけの小型エネルギータンクを増設しました～☆」

リリィの一言で、束は完全に白状した。

……なるほど……。

使い捨てのエネルギータンクを増設したのか……。

初期段階の機体なら、確かに簡単な改造はできる。

使い捨てなら、なおさらだ……。

……だけど、こういう時に天才を見せつけないでくれ……。

あと少しで、一夏を殺しそうになっちゃったんだから……。

そこまで、楽しんでしまったのだ……。

リリィの悪い癖。

それは、一対一の戦闘が長引くと楽しんでしまう事だ。

最悪、模擬戦の敵が消し炭になりかねない。

毎回抑えてはいるのだが、ちょっとした事がきっかけにその癖が表に出てしまうのだ。

今回もそれだ……。

一夏との戦闘にエネルギー回復と言うきっかけでタカが外れ、あまり見せる事のない剣撃を使ってしまったのだ。

「そ、それで……。」

束は期待の眼差しで、リリィを見た。

ああ、さっきの私の言葉か……。

好きな事をやってあげるという……。

やってあげないといけないよね……。

そう思って、束を見つめ言う。

「ああ、私の好きな事をやってあげよう……。」

「え？」

期待していた言葉とは違ったのか、束は変な声を上げる。

腰のリボンを解く。

「え、ちょっと、ちょっと！？」

そう言って止めようとするが、止まらない。

少し服に緩みができたため、左肩を簡単に露出させる。

「え、えっと！？！？」

「最初に言ったはずだぞ。「言ったら、好きそうな事……やってあげるけど？」って、な……。」

その言葉に束は目を見開く……。

その間にも、右肩も露出させられる。

「……まさか……リリィが好きな事って意味ぃぃ！？！？」

混乱しているからか、ちゃん付けされなかった。

口を釣り上げると、束のスカートを少しずつ上にずらす。

そうやっていくうちに、束のアリス服は青年誌一歩手前と言う状態になっており……。

その姿を見てリリィは、自重と言う制御装置を取り外した。

肩を指でなぞると、束は扇情的な声を上げた。

その声に、リリィは再度指を動かした。

もし、首筋からそのまま下まで……舌でなぞったら……今のような声は聞けるのだろうか。

答えはＹＥＳ。

聞ける。

だから……リリィは束の首に、自身の顔を近づけた。

……その夜の、ＩＳ学園の寮は……防音で何も聞こえない静けさだったが……。

ある一室では……激しい声が聞こえたそうだ……。

それを知る物は、そこにいた二人しか知らない。

０５２　手品の仕組みとリリィのお仕置き（後書き）

……こんなんで、皆の期待にこたえられたかな？

Ｒ１８手前を主体とした文……。

あとは、皆さんの妄想で補完してください……はい。

というか、また首に舌を這わせたよ……。

どんだけ、首フェチなんだ私は……。

そして、０時……６１２人……毎回ひどくなっていくと思う今日この頃……。

０５３　結局墜落する一夏（前書き）

まぁ、必ず通るシナリオかと……。

０５３　結局墜落する一夏

「ではこれより、ＩＳの基本的な飛行訓練を実践してもらう。　織斑、オルコット……、ためしに飛んでみろ。」

４月の下旬。

あの模擬戦から数日後のことだ。

授業で外に出ていた。

……皆、よくそんなの着れるね……。

リリィ以外は、ＩＳ操縦に必要な特殊なスーツを着ている。

水着みたいなスーツだ。

一夏は目のやり場に困っている。

私？

私の目には束しか映ってないよ♪

え？

なんでスーツじゃないのかって方？

だって、私のフリーダム……スーツとか着る意味をなさないし……。

と言う事で、私は制服だ。

まぁ、そんな事はどうでもいい。

一夏とセシリアがＩＳを起動させた。

「よし、飛べ。」

その千冬の言葉を、セシリアはすぐさま実行した。

さすが代表候補生だ。

動きに無駄がない。

それに比べて一夏ときたら……。

「いっくん、早く飛ばないとち～ちゃんに怒鳴られるよ？」

ここ最近、このクラスの副担任っぽいポジションについた束がそう言う。

おかげで、真耶は影が薄くなったように思える……。

給料は変わらないのに、役職を殆ど奪われるってきついよね。

「何をやってる、ブルー・ティアーズよりスペック上の出力は白式の方が上だぞ！」

「ほら。」

千冬の言葉を、当たり前のように聞き一夏はようやく飛んだ。
だが、満足しないのか千冬は私を見た……。
……ん？
私？
「リリィ。　手本を見せてやれ。」
「……了解。」
どうせ拒否権なんか無いんだから……。
そう思いながら、フリーダムを起動させる。
≪ＺＧＭＦ－Ｘ１０Ａ　起動。≫
やはり、パフォーマンスかモニターが映る。
そして、灰色の鉄の塊がその場に現れた。
フェイズシフトを展開していない、ディアクティブモードのフリーダムは完全に灰色だ。
「やっぱ、リリィさんのカッコイイね～。」
「これが白騎士に並ぶ伝説の機体……。」
「天使……。」

さまざまな声が聞こえるが、そのくらいにしておかないと千冬がキレるよ？

フェイズシフトを展開させ、フリーダムが色付く。

「うわ～、色が変わった。」

「どういう意味があるんだろ。」

またも、生徒が騒ぐ。

色が付く理由はかなりあるのだが、説明はまたにする。

だって、千冬がもの凄い勢いでこっち見てるんだもん。

少しため息をつく。

「「「「「「「「「「「「え？」」」」」」」」」」」」

すると、全員の視界から一瞬にして消えた。

上空から見ていた一夏やセシリアも驚いている。

まるで瞬間移動したかのように、その場から消えたのだから。

皆、あたりを見渡す。

だが、見当たらない。

「……オルコットの横だ。」

千冬は気が付いていたのかそう言うと、全員そちらに顔を向けた。

すると、何事もなかったようにそこにフリーダムは停滞していた。

「いつの間に……。」

セシリアがそう呟くと、束は口を開いた。

「んじゃぁ、目標は５ｃｍでいいかな～♪」

「馬鹿が、１０ｃｍだ。」

一体何の話をしているのか、よく分からない。

「リリィ、織斑、オルコット。　急降下と完全停止をやってみろ。
目標は１０ｃｍだ。」

……ああ、コレの事を言ってたのね。

セシリアは頷くと「お先に失礼しますわね」と言って急降下を始めた。

丁度１０ｃｍなのか、拍手が起こっている。

「先に行く?」

私は一夏にそう聞くと「おぅ」と返答があった。

すると、かなりの速度で降下し始めた。

それは模擬戦の時にやった、重力に従った降り方だった。

ＩＳ本来の重さで、地表に接近する芸当だ。

ＩＳの重さは結構あるので何もしないでも、簡単に降りる事ができる。

主に、緊急回避とかに応用できる。

だが一夏に細かい芸当ができるわけもなく、墜落。

またも、地面と一体化した。

……ねぇ、馬鹿なの？

死ぬの？

とりあえず、そうとしか思いようがなかった。

０５３　結局墜落する一夏（後書き）

一夏は死んでも、治らない病気を抱えているｗｗｗ

さてもう一度寝よう……。

お休みなさい。

０５４　銃口は常に前方に向けましょう（前書き）

そろそろ鈴が登場するな～。

というか、長い……。

０５４　銃口は常に前方に向けましょう

「馬鹿もの。　誰が地表に激突しろと言った。」

そう言いながら千冬は一夏を見下ろす。

一夏はかろうじて意識があるのか、唸った後立ち上がる。

「大丈夫ですか、一夏さん？　お怪我は無くって？」

「え？　ああ、多分大丈夫……。」

セシリアが心配そうに一夏に尋ねていた。

箒も近付いて行った。

上から見ている分、面白いんだけど……。

なんか、腹立たしい気が……。

束が危ない気がする……。

一夏の顔面１０ｃｍで良いかな？

なんか、世界の意思がそうしろと……。

「リリィ手本を見せろ！　目標はこの馬鹿の顔面に紙一枚入るくらいだ。」

おおぅ。

世界の意思がそんな所にまで。

しかも、私に来たのよりひどい意思が……。

「ちょっ！　千冬姉っ！！」

「織斑先生と言っただろう……。　束、オルコット……押さえつけとけよ……。」

そう言うと、束は頭をセシリアは身体を押さえつけていた。

なぜか箒も腕を押さえつけて、完全に拘束されてるし……。

よく抵抗もせず、言う事聞いたな……。

あ、千冬だからか。

……けど……私はやられたくないな……。

束にだけだったらいいけど。

「全員見ておけ。　これが世界最強の搭乗者とその機体だ。」

そう言うと千冬は手を上げる。

フリーダムはその間少しづつ上昇する。

「や、やめろぉぉぉぉ！！」

一夏が何か叫んでいるが、知った事ではない。

「大丈夫ですわ。」

セシリアがなだめているが、一夏は叫び続ける。

私と束が作った機体で墜落するとか……。

フリーダムと一夏との距離が、１００ｍほどになる。

「万死に値するっ！！」

千冬の手が振りおり下ろされた瞬間、フリーダムは一夏に向かって急降下をし始めた。

先ほど上昇したのよりは速度は無いが、それでも早い。

「姉さん……本当に大丈夫……なんだ……よ……ね？」

箒が心配そうに聞くが、束は笑顔で一夏の頭を掴み続けていた。

その顔を見て、箒は不安になる。

あと１０ｍと言う所まで、フリーダムが近づいた。

「うわぁぁぁぁぁぁ！！」

距離が５ｍになった瞬間、フリーダムは全スラスターを使い制動をかける。

一瞬にして、強い風が辺りを包む。

足が一夏に向けられる。

そしてフリーダムは止まった。

「「「「「「「「「「「「「……。」」」」」」」」」」」」」

皆が息をのむ。

どう見たって、フリーダムの足は一夏の顔面に当っている気がする。

だが、一夏は痛がっているように見えない。

不安そうな空気が流れる。

千冬は近寄ると、一枚の紙をフリーダムの足と一夏の間に通す。

なぜか通る。

その光景に皆声を上げた。

よく見ると紙一枚入る程度ではなく、０．５ｃｍ程度の所で浮いていた。

紙一枚はさすがに一夏に当たると思う……。

リリィにしてみれば、無機物になら紙一枚はいけるが……。

さすがに生物には無理だ。

だから０．５ｃｍが限界。

「分かったか。　これぐらい出来ろとは言わないが、これを目指せ。
次は武装だ。」

その声に束と箒とセシリアは、一夏から離れる。

フリーダムも一夏から離れ、地表に降り立つ。

リリィに一夏が近寄る。

それに気がつき、一夏に向かってリリィは口を開く。

「失敗する気は無いけど、失敗しても良いと思った。　うん、反省はしていない。」

その言葉に一夏は呆然とした。

「織斑。　口説くのは別に止めやしないが、私の授業でとは……いい度胸だな？」

……いやいや。

千冬、私の性別知ってるでしょ……。

冗談でもそんなこと言っちゃだめだよ……。

「昼に話し合おうじゃないか……。」

そう言うと一夏は戻って行った。

あれ～。

もしかしてマジ切れしてる？

やっべ～、怒らせちゃった♪

「では武装を展開しろ。」

そう言うと一夏とセシリアの手元が発光し、武装が展開される。

「遅い！　０．５秒で出せるようになれ！！」

うわっ……。

きっついね～。

私はセシリアの後ろでそう思った。

だが、本当の思っている事は全く別だったりもする。

「それとオルコット……そのポーズはやめろ……。　横に向けて、誰を撃つ気だ？」

そう言うと、全員セシリアのスターライトｍｋＩＩＩの銃口が向いている先を見る。

束がいた。

「リリィに殺される覚悟があるなら、そのままでもいいがな。」

その言葉に、皆がリリィを探す。

そして気が付く。

セシリアの後ろで後頭部とスターライトｍｋＩＩＩに向けて、ライフルを二つ部分展開して構えていた。

とてもいい笑顔で怒っていた。

そう……最初に、セシリアと戦った時のような眼で笑っているのだ。

誰もが恐怖した。

リリィが思っている事。

束に銃口を向けるなんて、いい度胸してるね。

ただそれだけだった。

「す、すみません！！」

その日から、束に銃や剣を向ける者にはリリィの鉄槌が下るという、うわさが流れた様な、流れなかったような……。

０５４　銃口は常に前方に向けましょう（後書き）

……めんどくさい……。

そしてなぜか、頭が痛い……。

昨日の夜から、頭が痛い……。

よし、寝よう。

厨二っぽい流派名考えながら寝よう……。

０５５　転入生の影とパーティーの始まり（前書き）

……ようやく原作１巻、第３話目っぽくなってきた……。

パーティ前編。

というか、原作とアニメが混合してるな……。

鈴がＩＳ学園正面ゲートについたのは、原作は夜……アニメは夕方。

しかもアニメは一夏の発見イベント消えてるし……。

書いてて、これでいいのか迷った。

０５５　転入生の影とパーティーの始まり

「ふぅん。　ここがそうなんだ。」

夕暮れ時……。

ＩＳ学園の正面玄関に、ボストンバックを持った小柄な少女がいた。

風に揺れる髪は、頭の後頭部でそれぞれ２つにまとめられている。

なぜか肩の部分の制服は改造されており、むき出しだった。

彼女が何故制服を着ているのかは知らないが……。

まぁ、別に気にする事じゃないかな？

一応学校にいる人物の全員の顔は覚えているが、彼女の顔は知らない。

おそらく、転入生か何かだろう。

そう思いながら、リリィは気づかれないように外に出る。

ちょっとした用事だ……。

夜までには帰えってこれる、ちょっとした用事。

だが、リリィの足は止まる。

少女が訓練が終わりアリーナから出てきた一夏を見つけ、呼びとめようとして止めたのだ。

一夏と一緒に、束と箒、セシリアが出てきた。

それを見て呆然としていた。

この時、リリィの灰色の脳細胞は動いた。

少女がとめようとしていた相手は、目線を見る限り一夏だ。

呼ぼうとした声は、「いち」としか聞こえなかったが、一夏しか名前に「いち」が付く人間はいない。

そして、瞬間的に口を止めたというのは躊躇ったというう意味でもある。

束達を見て躊躇ったというのが、理由としては一番だろう。

つまり、この少女は一夏を好いているのだ。

女性三人に囲まれている一夏を見て、何かを思ったんだろう。

一瞬で状況を理解し、ため息をついた。

……めんどくさい事はご免だ。

そう思いながら、外に出かけた。

というか……一夏……。

束から離れろ……。

「と言うわけで、織斑くん！　クラス代表おめでと～！！」

そう言ってクラッカーを鳴らす女子一同。

そう、なんかパーティーが開く事になったのだ。

ちなみに、今のクラッカーは先ほどリリィがついでだからと買ってきたものが大半だ。

一夏には内密に話していたのを聞いたリリィは、買ってあっただろうがクラッカーを買ってきたのだ。

そのおかげで、クラッカーが多くなり派手な始まり方になった。

クラスの女子からは、感謝されたがリリィは適当に聞き流した。

そのためリリィは、優しくクールな最強の女性と言われるようになるが、本人は知らない事……。

当の本人は、離れたテーブル席で束と一緒に話していた。

「いっくん人気者だね～☆」

束がそう言うと、リリィによりかかった。

ちなみにテーブルはU字型で、奥にリリィと束は一緒に座っている。

良い雰囲気なのを誰も気にしない。

それだけ、一夏に注目しているのだ。

一夏の隣に、箒とセシリアがいた。

箒は昔から一夏が好きだったので隣にいる事に違和感がないが、セシリアがいる事には少しばかり驚いた。

だがよく考えると、ここ最近一夏と一緒にいる事が多い。

まさか、セシリア……一夏に惚れたのか？

止めておけ。

箒に殺されるぞ。

その様子を見て、束は苦笑した。

「箒ちゃん……。　ちゃんと素直にならないと、いっくんは気がつかないよ～。」

それほど鈍感だからな。

昔からね……。

だから、少し教育したのだが……。

良い方に転がったのか、悪い方に転がったのか……。

「まぁ、私達が気にした所で無駄でしょ……。」

「む～。　いっくんには、箒ちゃんしかいないよ～。」

まぁ、それは確かに同感だ。

そう思いながら、飲み物を飲む。

長年の恋は、実って欲しいものだからね……。

一夏の方に耳を傾ける。

「……んとうに俺がなってよかったのかな？」

「どういう事？」

「リリィやセシリアになってもらった方が、確実に優勝できると思うんだけど……。」

未だ、クラス代表になる事に異議があるようだ。

「いや～。　織斑くんだから良いんじゃない。」

「そうだよ～。　この学園唯一の男の子じゃん。」

誰かの言葉が胸に刺さった。

確かに、今の私は男には見えない。

昔からがだ……。

女顔に銀の髪も長くサラサラしている。

肩までだったら、かろうじて男に見られたかもしれない。

だが余裕で腰にかかっている髪を見て、誰が男だと思うのだろう。

今では実験品のリアル〇ットをつけているため、確実と言っても良いほど女にしか見えない。

「私だけ知ってればいいから……ね？」

リリィが思っている事を理解できたのか、束が慰めるようにそう言った。

０５５　転入生の影とパーティーの始まり（後書き）

……いい流派名が思いつかない。

刀直流（とうちょくりゅう）とか、天迅刃流（てんじんばりゅう）とか……。

まったくリリィに関係ない名称が思いつく……。

しかも、漢字テキトー……。

良い案求。

０５６　リリィの前で言ってはいけない（前書き）

セシリアの無謀でだいたいが、終わったかと思ったら……。

今度は別の人だと……。

パーティー中編。

０５６　リリィの前で言ってはいけない

「はいはいは～い。」

何処からともなく大きな声が聞こえた。

リリィと束もその声につられ一瞬見てしまうが、気にせず二人だけの空間をつくり直した。

「新聞部で～す。　話題の新入生、織斑一夏くんと、伝説の天使様にインタビューしに来ました～。」

その言葉を聞いた瞬間、リリィは飲んでいた飲み物を少しだけ口から溢した。

はぁ？

インタビュー？

と言うか、なんで天使の事が他のクラスに出回ってるの！？

「噂って、時には光の速さを超えるんだね～☆」

「あ～。」

やばい、束の言葉に納得したよ……。

「あ、私は二年の黛薫子。　よろしくね。　後、新聞部副部長やってま～す。　コレ名刺ね。」

その様子を遠目で見ていると、首を振って誰かを探しているようだ。

「で、織斑くんはここにいるけど……、天使様って誰？」

この場合、フリーダムの搭乗者……。

つまり私だろう……。

確実に巻き込まれる。

「束……逃げるぞ……。」

そう言った時には既に遅く……。

クラス全員がリリィを指差していた。

こういうときにU字型テーブルの奥は困る。

逃げようにも、動きが上手く取れないのだから……。

「はいはいはいはい、逃げちゃだめ～。　織斑くんも来て。」

そう言うと、薫子はリリィに向かってくる。

ギャラリーのクラスメイトに、脱出路をふさがれる始末。

めんどくさい事に巻き込まれました。

はい。

「さ～て……良い感じの所失礼するわ……？　あれ？　どこかで見た様な……？？」

束を見てそう呟く。

そりゃ……学校歩いたりすれば、合うしねぇ……。

指名手配の顔写真もあるし……。

束の顔は結構知られるはずだ……。

「誰？」

束に指を指して、そう言う。

……何故だろ、殺したくなった……。

皆、慌てて薫子の指を下ろさせようとする。

「私は眼鏡に知り合いいないよ。　邪魔、あっち行って。」

束はそう言うと、コップを取る。

他人嫌いの本領発揮。

最近やっと、同じクラスの人を少しだけ相手する程度になった所だというのに……。

久しぶりの冷たい言葉に、全員固まる。

「邪魔と言われて、引くわけ無いじゃない。　貴方こそ取材の邪魔よ。」

だが、薫子も負けじと言い返す。

その言葉に、薫子以外の女子全員がリリィから距離をとる。

セシリアが誰よりも、状況の悪さ理解していた。

あの時と違えども、結果は自身と同じなのだから。

「というか、貴方誰？」

薫子の言葉を束は無視する。

薫子は振り向き聞こうとするが、周りに誰もいない事に気がついた。

確実に１０ｍほど、離れている。

一夏も近寄りたくないのか先ほどいた席に座り、不安そうな顔でリリィを見ていた。

薫子は不思議そうに首をかしげる。

どうやらフリーダムの事は噂に流れたが、束の事は噂に流れなかったらしい。

リリィの目が、あの冷たい殺気を帯びた目になる。

「……束……殺していいかな？」

「良いと思うよ♪」

リリィと束の言葉に、クラス全員恐怖する。

薫子の無謀に、クラスの大半が敬礼する。

貴方がいた事は忘れない、と言う感じで……。

だが、殺人事件は起きなかった。

「させるか馬鹿者。」

クラスの首領……もとい、最強の先生。

織斑千冬の出席簿攻撃により……、殺人事件は阻止された。

リリィは痛がりながら、千冬を見る。

「いつの間に……。」

「お前が「殺していいかな？」と言ったあたりからだ。」

千冬はさも当然のように、リリィの横に座る。

美女三人……ではないが、座る姿はとても絵になっていた。

薫子は千冬に「あの人誰ですか」と聞く。

すると千冬は、リリィの向こうにある束のコップを飲み「篠ノ之束」と言った。

その言葉に、薫子は思い出したかのように目を見開く。

「あ、あ、あ、あの、し、し、し、篠ノ之博士っ！？」

大物と言う事に、誰もが分かるほどの慌て方をする。

自身が言った事を思い出したのかもしれない。

すごく顔色が悪くなっていった。

０５６　リリィの前で言ってはいけない（後書き）

セシリアの次は、新聞部副部長の黛薫子が……。

リリィと束に無礼を働くと……死んじゃうよ？

いつも通りに分割されたイベントですｗｗｗ

０５７　インタビューとリリィの性別（前書き）

……あれ？

パーティーもう１話書かないといけない？

一応後編？

057　インタビューとリリィの性別

「まぁ、インタビューぐらい受けてやれ……。」

「え～。」

「いいな。」

千冬の言葉に、しぶしぶリリィは頷いた。

薫子は目の前にいる者たちの存在を受け入れられず、頭がオーバーヒートしていた。

だがさすがの記者魂と言うか……。

一夏に逃れることで、元に戻った。

「そ、それじゃぁ、織斑くん。　クラス感想になった……感想どうぞ！」

そりゃ怖いよね……。

恐怖で、代表が感想に代わってるよ？

クラス感想って何？

一夏は苦笑いで薫子を見る。

「え～っと、がんばります？」

「ほ、他！」

薫子は不服そうな声で、ボイスレコーダーを一夏に向けた。

「……努力します？」

「もっと他に言う言葉は無いのか、馬鹿もの。」

一夏の言葉に、千冬がダメだしする。

「まぁ、織斑なら仕方がない……。」

その言葉に薫子は、一夏へのインタビューをやめた。

そして、セシリアにボイスレコーダーを向ける。

どうやら、リリィに近寄るのが怖いのだろう。

そりゃ、殺気はなってるし……。

「私より、リリィさんの方がいいのでは？」

……セシリアは薫子を見捨てた。

苦笑しながら、リリィを見た。

あ～、殺れと言う事ですか？

しぶしぶ薫子は、リリィ達が座るテーブルに歩いた。

その間、何度もセシリアを見たが相手にされなかった。

「て、天使様……良いでしょうか？」

「ん、いいよ～。」

適当に言うリリィ。

その光景を全員、息をのみ見守った。

人命の無事を祈り……。

それにしても、リリィ達のテーブルはすごい光景だろう……。

ＩＳが普及する原因の事件を起こした中心人物が、全員いるのだから……。

ＩＳの開発者に白騎士、ＩＳの武器や回路の製作者で伝説の天使。

この三人だけで、大国の軍事力を半分以上奪えるのではないのだろうか？

そんな中に行く薫子に、皆注目した。

「で、では、気になった事いいですか？」

その言葉に頷く。

薫子は少しづつ恐怖心が薄れたのか、言葉がどもる事は無くなった。

「……なんで、天使様と篠ノ之博士は恋人みたいにくっ付いてるんですか？」

そうの言葉に、皆が気がついた。

今の束はリリィに身体を預けているのだ。

リリィの肩には、束の頭が乗っている。

俗に言う恋人座りと言うやつだろうか。

「それは当たり前だよ～☆」

「当たり前だな、うん。」

その言葉に、全員の首が傾く。

他人嫌いの言葉足らず……。

千冬がため息をつき、口を開く。

「……こいつらは恋人だ……。」

そう言った。

一瞬呆然となる。

「百合？」

「女同士？」

「悪くない、むしろ良い。」

「というか、似合いすぎでしょ。」

「キタキタキターーー！！」

そして皆が会話し始めた。

耳打ちなのか小声だが、天才三人の前にはそれは無意味だった。

三人の耳に、その声はちゃんと聞こえる。

「では、女同士で付き合ってるという……。」

「……まず、その前提を忘れろ。」

薫子の言葉を千冬は否定するように、言葉を放つ。

心底疲れたような声で。

「リリィは女ではない……男だ。」

「「「「「「「「「「「「え？」」」」」」」」」」」」

皆の空気が、固まる。

それはもう完全に。

「え、どういう事ですか？」

「そのままの意味だ。」

千冬の言葉に、皆の目がリリィに向けられる。

……といか、なんで千冬が答えてるのさ……。

……楽だから良いけど。

「え、本当に男？」

薫子がリリィを見てそう尋ねる。

……まぁ、分かっていたけどね……。

私が男に見られてないという事は……。

リリィは目を瞑り、束を引き離すと上着のボタンを外す。

箒が一夏の目をふさぐ。

現れたのは、胸を覆うブラ〇ャー。

皆リリィの胸を見て、安堵の息を漏らす。

「胸あるじゃないですか……。」

薫子の言葉は、すぐに裏切られた。

ブラを外したリリィは、モニターを展開させる。

≪排除（パージ）。≫

その文字が出た瞬間……。

……リリィの胸が外れた。

その光景に皆が目を丸くする。

目の前の光景が信じられないのだろう。

外れた胸と現れた胸板を凝視し……。

「「「「「「「「「「えぇぇぇぇぇぇっ！？！？」」」」」」」」」」

驚愕した。

０５７　インタビューとリリィの性別（後書き）

……はい、ばらしました。

リリィが男だと、ここにきてようやく周りが理解しました。

本当は、シャルが来て大浴場が解放されたときに、皆の前で「一夏、風呂行くよ。」とやりたかったけど、シャルの存在が……ね。

皆をあわてさせたかったけどね……。

シャルがね……。

一夏にシャルはやらんよ（キリッ！

０５８　カオスになるパーティーと復活する伝説の騎士の影（前書き）

……パーティ編ラスト、です。

０５８　カオスになるパーティーと復活する伝説の騎士の影

「む、む、む、胸が……！？」

「外れたっ！？」

「本当に男っ！？」

「ちょっ、マジかよ！？」

ちなみに最後の言葉は一夏だ。

箒が驚愕したため、手が離れ視界が開けたのだ。

「いっくん何を今さら驚いてるのかな？」

束が不思議そうに一夏の顔を見る。

「ちょ、ちょっと待ってくれ……。」

「なんだ？」

千冬が鬱陶しそうに耳を軽くふさぐ。

「千冬姉と束さんは……リリィが男って……知っていたのか？」

「え、当たり前じゃん。」

「それがどうした。　あと、織斑先生だ。」

その言葉に、全員が唖然とする。

「いつから……？」

その質問に千冬は束を見る。

その顔は、もの凄く不思議そうだった。

「……いつだと言われても……。」

忘れているようだ。

「いつだっけ？」

リリィはため息をついた。

束と千冬はリリィに「覚えてる？」と言うような視線を送った。

「あ～、アレだ……。　出会った翌日。」

その言葉に束のウサミミが伸びる。

「お～☆　思い出した～♪」

「あの日か……。」

三人の空気が、「あんなこともありましたな～」という老人の物になった。

驚愕と疎外感が皆を襲う。

「え、つまり……織斑くんが世界初の男性じゃなくって……。」

「リリィさんが世界最初の……？」

「え、でも白騎士事件は１０年前……。」

「どういう事？」

薫子をはじめ、皆リリィの存在とフリーダムに頭を悩ませた。

「つまり、最初から男が動かす事ができるのを、姉さんは知っていた？」

箒の言葉にようやく、皆の結論が一つにまとまった。

ＩＳは女性しか動かせないのではない。

ＩＳを動かせるほとんどが、女性と言う事に。

男性が動かせないのではない、と言う事に……。

そしてセシリアとの二度の戦闘に、白騎士事件と言う誰もが知る舞台。

それらが、皆の中の女尊男卑を完全に砕いた。

女は強くない。

その結論が皆の頭に叩き込まれた。

「というか、リリィが男ならなんで女装なんかしてたんだ？」

一夏の言葉に皆が気が付く。

女装。

それもパットまでつけて……。

男と言うのに驚いたが、何故女装？

「女装癖でもあるのかしら？」

「というか、似合いすぎでしょ……。」

「むしろグッジョブ。」

なぜか受け入れられていた……。

一部では……。

「ま、負けた。」

「なんかショック……。」

「強くて気が利いて美人なのに……男。」

「髪が……。」

「天才は何処かおかしいのか……。」

そのほかの一部は、ショックを受けていた。

と言うか最後のやつ、千冬に出席簿アタック食らって死ね。

大体はその二つに分かれ……。

他は……。

一人目、薫子は魂が抜け……。

二人目、一夏は初恋の片方が男だと知り落ち込んで……。

三人目、箒は喜びに満ち溢れ……。

四人目、セシリアは頭を抱えて悩んでいた……。

つまり、パーティー会場は阿鼻叫喚の地獄絵図となった。

「なんだったんだ？」

リリィと束、そしてなぜか千冬はその場から脱出した。

「まぁ、お前の存在がうらやましかったのだろう……。」

千冬がため息をつきながら、そう言うと壁にもたれかかった。

……そうなのか？

やっぱり、性別間違えたんじゃない？

いや、合ってる。

これで良いんだ。

そう思いながら束を見る。

「？？」

不思議そうな顔で見つめ返される。

男じゃないと、束とはこうはなれなかった……。

うん。

男で良いんだ。

「あ、そうだ☆」

束が急に声を上げる。

「ち～ちゃん用のＩＳを作ったんだった。」

そう笑顔で言った。

千冬は呆れた顔で束を見た。

「と言うより改造したよ～☆　第四世代のＩＳを超えちゃったかもよ～。」

その言葉に千冬は頭を痛めた。

未だ各国が、第三世代のＩＳを研究、実験、テストをしているというのに、すでに第四世代を作ったというのだ。

さらに、その第四世代の機体を超えたという……。

頭が痛くなるのは当然だ。

そんな千冬を知ってか知らずか……。

束は誇らしげに、そのＩＳの名を言った。

「白騎士を……。」

０５８　カオスになるパーティーと復活する伝説の騎士の影（後書き）

はい、白騎士復活フラグ。

私がよく見るｓｓでは暮桜が復活しました。

結局、それに乗っかった形で白騎士を復活させちゃいました。

と言うか……戦力バランス崩壊し始めたな……。

白騎士の詳細データーは、いつか書くとしましょう。

天才グループは最凶。

今日は訳の分からない事が起き、これ以上の更新が不可能かも……。

と言って、前回更新したね～。

まぁ、夜には更新するかもしれません。

０５９　生徒会長と束の取引（前書き）

……楯無の口調が分からねェぇエぇ！！！

原作を見て、セリフを書いてみたが……。

いつも歳下をからかっていて、年上に対する口調が見当たらない！

これでいいのか！？

０５９　生徒会長と束の取引

「……。」

「……誰？」

……はい、リリィです。

部屋で白騎士について、正確な情報を千冬とお話をしようとした所……。

不審人物を発見しました。

ＩＳ学園の制服を着た、水色髪をショートカットにした女性……。

その女性が、そわそわとリリィ達の部屋の前を眺めている。

リリィはその顔に、覚えがあった。

「生徒会長で更識家の当主、十七代目の更識楯無だね。」

一度だけ資料を見た事がある。

更識楯無という名前は偽名。

今の更識楯無という名前は、更識家の初代当主の名だ。

「更識……。　なにをやってるんだ？」

「いや、どう考えても、私達と接触する気満々でしょ。」

千冬の当たり前な疑問に、リリィははっきりと答えた。

更識家は対暗部用暗部だ。

リリィ達を暗部と言っていいのか分からないが、もし暗部と捉えるのなら……なにが起こるか分からない。

「とりあえず、私が行くが……良いか？」

その言葉にリリィは頷いた。

なにがあるか分からない状態なら、リリィと束が接触するのは問題だ。

なら、千冬が接触した方がよい。

楯無の死角になる通路に、身を隠し聞き耳を立てる。

「更識、こんな時間に何をやっている。」

千冬の声が廊下に響く。

「あらら？　織斑先生じゃないですか？」

「ここは一年生の階だぞ……。」

千冬が威嚇した様な声で話しかける。

「そう言う織斑先生も、どうしてこんなところに？」

だが楯無も飄々とした口調で、言い返す。

千冬を前に、それだけ言えるのなら更識家の当主をやってると言うのは間違い無いらしい。

最初情報を知った時は、その若さに疑った。

だが、今なら分かる。

同年代の人間と違う……。

リリィ達と同じ、天才型だ……。

そう感じる。

「私は不審者がいるという報告を受けたのだが。」

「あれ～、もしかして中の人に？」

そう言って部屋に指を指す。

ドアには高圧電流注意と可愛らしい文字で書かれており、堅い空気を壊していた。

「で、あいつらに何の用だ？」

千冬がめんどくさくなったのか、はっきりと聞く。

殺気を帯びた目で。

だが、楯無はそれを受け流し口を開く。

「私は……。」

「もし、あいつらに害をなすような話だったら……。今迷い無く貴様を殺すぞ。」

その言葉に、楯無は目を細めた。

「……話せ。」

その言葉に、ため息をついた。

「生徒を殺すとか、言っちゃ……。」

「話せ。」

飄々とした口調で茶化そうとした言葉は、千冬の一言により止められる。

千冬の目は、先ほどより強い殺気を放っていた。

楯無はやれやれと言った感じで、口を開く。

「私がココに来たのは、ミステリアス・レイディの改良を願いしに来ました。」

予想外の言葉にリリィは呆然とする。

「ほぅ？　何故だ。　改良なら、ロシアに頼めば良いではないか？」

専用気持ちの改良の願いは、受けいれられない。

ＩＳは国家が管理している物であって、個人が所有している物ではない。

個人の改造は、違法なのだから……。

そして、楯無はロシアの代表操縦者。

完全に、手を出したら不味い。

大体束とリリィの発明は、国家が管理している物ではない。

だから改造などは良いのだが、国家が所有してるのを改良し、技術が流れたら困る。

いや、実際困るわけじゃないが……。

一応困る。

「ミステリアス・レイディは、ちょっとした特殊機……まだ未完成なんですよ。」

千冬の目が細まる。

「この子を良い状態で使ってあげたい……じゃ、ダメ？」

その言葉に、束のウサミミが延びる。

天才の血が天才と共鳴してたのか、楯無の事はなぜか無下には扱わなかった。

いつもなら、話自体聞かないのに……。

「ダ……。」

「いいよ。」

千冬の声を束が遮る。

……ん？

あれ？

いつのまにか、千冬の横に束が立っていた。

リリィは先ほどいた場所と、今いる場所を確認する。

いや、そんな事はどうでもいい。

というか、今何て言った？

良いのか？

他人嫌いはどうなった！？

「ただし条件が一つ。」

……なんか、無理難題言いそう。

「ち～ちゃんがＩＳを持っていても何も言われない、技術公開しない。　この二点をクリアできたら改良して上げる。　もちろん、君が自身の所属する国家に情報を展開できないように、ブロックはさせてもらうけど……。」

……条件が一つじゃなくって、二つになってますよ？

というか、軽っ……。

白騎士はＩＳだが、国家間との取引は開発ＩＳの一部開示だ……。

一部……だ。

別に白騎士の情報を開示する必要は無い……。

だから、簡単にクリアできる。

……いや、それとも何かあるのか？

「できるかにゃ？」

束が挑発した。

「いいわよ。」

楯無が……え？

いいの？

各国と対立するかもしれないんだよ？

罠？

そう思っている間にも、話は進む。

結局、リリィはよく分からないまま話が終わっていた。

０５９　生徒会長と束の取引（後書き）

……訳分からん……。

束は楯無に好印象っぽいし……。

楯無は楯無で……訳が分からない立場……。

もう、寝よう……。

訳が分からないのなら、寝て見直せばいいんだ……。

０６０　主の帰りと姉弟コア（前書き）

……無理やりだな……。

だけど、私自身……これがしっくりくるんだけど……。

あ～、なぜか千冬視点だ……。

０６０　主の帰りと姉弟コア

楯無が束との約束を果たすために帰った後……。

リリィは部屋に入るため扉に近づいた。

そして……。

そこから起きる光景を、千冬は呆れながら見た。

ドアノブの下……人にとっては死角となる場所を中指で触ったのだ。

すると電子音が扉から聞こえる。

≪ロック解除≫

まさかと思い束に聞く。

「うん。　指紋認証システム♪」

さすが天才。

……天才は……よく分からないな……。

そう思っているとドアが開いた。

部屋は……うす暗くて見えないな……。

リリィは少し進むと、壁を押した。

「何を……。」

だが、言葉を言う前に答えが分かった。

壁が開いたのだ……。

驚きながら見ていると、何かがせり上がってくる。

小さな……カードリーダー？

リリィはポケットから、一枚の黒いカードを取り出しリーダーに挿す。

≪認証完了≫

まさか、そこまでやるか……。

部屋に電気がつく。

リーダーは自動で元に戻った。

だがリリィは未だ動かない。

反対側の壁を向く。

……まさか……。

壁を押す。

そして出てきたのだ。

別のリーダーとテンキーが……。

「……はぁ……。」

ため息を思わずついてしまった。

まさかここまでやるとは、思わなかったからだ。

カードをリーダに差し込みながら、テンキーを打つ。

≪カード　認証完了　並びにパスワード＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
認証完了≫

モニターがそう文字を映し出していた。

「さてち～ちゃん♪　入って入って～☆」

……もう慣れだ……。

そう思い、束の後ろに付いて行く。

ドアが自動で閉まり、鍵をかけた。

……この寮はいつの間にハイテク化した？

いや、別にハイテク化はしてないのだが……。

前回入った時と同じ光景が、目に映った。

まぁ、あの時は……アレ……だったが……。

リリィが白式と同じように、何かを乗ったカートを動かす。

やっぱり布をかぶせて、中身が分からないようにしてある。

「さて、お披露目だよ～♪」

束が心底楽しそうな声で、布を引っ張る。

なんかに引っ掛かり、布が破けたが……。

まぁ、一応布は取れた……。

そこに、見慣れたフォルムをしたＩＳが鎮座していた。

主の帰りを待つかのような……。

純白。

全てを白に染め上げるかのような色。

外見はほとんど変わらない。

だからこそわかる。

「ふふふ、最初の白騎士の外装パーツと同じパーツだけど、中身が違うのだよ♪」

「中身って……コアも同じだ……。」

その言葉に完全に驚愕した。

「白騎士のコアは、白式に使われたんじゃないのかっ!?」

白騎士のコアは、絶賛行方不明中だ。

そして白式の機体と名前を見た時、白式に白騎士のコアが使われていると思ったのだ。

近接兵装に白き機体。

なにより白式の読みを「びゃくしき」ではなく、漢字をそのまま読み「しろしき」に変えればよく分かる。

アナグラムだ……。

使用されている文字を入れ替える事により、別の言葉に変えるという物だ。

この場合「しろしき」を変える。

ただ最後の二文字の「し」と「き」を入れ替えるだけだ……。

すると「しろきし」になる。

そう白騎士だ。

なにより、白式開発時に開発者自身の口から聞いた。

白式は白騎士のコアを初期化したのを使っていると……。

だが、今リリィは何と言った？

「コアは……今の白式には何のコアが使われているんだっ！！」

「え？」

束が、なにを言っているのかよく分からない表情をする。

まぁ、確かになにを言っているのかよく分からないな……。

「白式のコアが、どうかしたの？」

「束……白式の開発時に、お前は「白式のコアは白騎士のを使ってるんだよ～」って言ったんだが。」

その言葉に二人は納得する。

「ち～ちゃん。　今の白式のコアは、二番目につくった奴なんだよ☆　つまり姉弟コア♪」

束が笑顔でそう言うが、よく分からない。

「いや、意味分からん。　確かにそうだけど、意味を説明しよう……。」

リリィ、その通りだ。

束は思い出すかのように、人差し指を頬にあてる。

「え～っとね。　当時のコア開発は……、確か失敗しても良い様に二つ作ったんだよ。　で、両方成功。　で、結局似たような物が出来ちゃった……と言うわけ☆」

束の説明は微妙に分かりづらい。

だがなにを言いたかったかは、半分は理解できた。

「まぁ実験の時、テストでコアが動くか心配だったから交互にコアを使ってたんだよね～。」

「……つまり……。」

「白式が使っているコアも、今白騎士が使っているコアも、両方初代白騎士の物♪」

……。

イヤマテ……。

コアは、自己進化するのだ……。

それが……。

いや……まぁ、使い手が同じなら……似たような物になるか……？？

それとも束がなせる業か？？

今日は頭が痛くなる日だ……。

０６０　主の帰りと姉弟コア（後書き）

姉弟コア……。

何故取り換えができるかは……束だからと言う事で……。

一応、白式のコアが弟さんですｗ

白騎士のコアが、姉さんですｗｗ

無理やり設定でしたねｗｗｗ

０６１　リリィに対する思い（前書き）

……なんだろ。

昼になると、覚醒する。

０６１　リリィに対する思い

……朝？

朝日が目に沁みる。

白騎士の調整をした後、寝ちゃったんだっけ？

そう思いながら目を少しづつ開く。

まず最初に目に映るのは、束の寝顔。

うん、これは良い。

そして……箒の驚いた顔……。

ん？

箒？

「あわわわわ、し、し、失礼しました！！」

リリィが目を開くと、箒は慌てて外に出た。

……？

なんで箒が部屋にいたんだ？

そう思いながら、束を眺める。

ドアの自動ロックをかける音が聞こえた。

……昨日何があったんだけ？

千冬に白騎士を見せたて、調整したのは覚えてるけど……。

そう思いながら、束を見て気が付く。

……服を着ていない……。

裸でベットに入って寝てるのだ。

……なぜ？

そう思いながら、リリィと束にかかっているシーツを捲る。

……うん。

私も何も着てない。

そして、束も何も着てなかったよ……。

女性っぽい、けど女性じゃない身体と……女性ンの身体がそこにありました……とさ。

……うん、ヤッチャッタ？

もしかしなくても、ヤッチャッタ？？

まぁ、別に今さらという感じだしね。

というか、大体毎回朝起きるとこんな感じだし……。

別にいっか。

そう思いながら、寝ている束を抱いた。

あの後、着替えて朝食をとるために食堂に行ったら箒がいた。

一夏もいる。

ちょうどいいと思い、相席をさせてもらった。

箒が簡単に許可出したため、リリィは席に座った。

なぜか、麺が食べたく……朝からラーメン。

しかも塩では無く味噌。

重すぎだろ……。

一夏は何処となく顔が虚ろだし……。

「一夏、どうしたんだ？」

一応聞いておこう。

そう聞くと、食べていた手を止め苦笑いで「何でもない……」と答えた。

……何でも無くは無いだろう……。

元気が無さ過ぎる。

「あ、あの……。」

「ん？」

箒が、気まずそうに声をかけてきた。

「さっきは、すみませんでした。」

……？

何の事だ？

よく分からない顔をしていると、箒はそれに気がついたのか口を開く。

「え～っと、姉さんと……。」

「ああ。」

部屋での事か。

というか、よくよく考えれば「さっき」とはその時しかない。

リリィは頭を掻くと、微妙な顔をした。

「まぁ、別に気にしてないしね～。」

そう言うと、割り箸を割る。

「いつもあんな感じだし……。」

その言葉に箒は目を丸くした。

そしてモジモジと身体を揺らす。

「あの……義兄さんと呼んだ方が……。」

その言葉に、食堂にいる殆どの者の耳が動く。

一夏は気不味そうな顔になるし……。

「名前でも、義兄さんでも好きによんでいいよ。　というか、口調が堅いね～。」

そういうと、箒の和食に箸を伸ばす。

ご飯を貰い口に入れる。

麺の前にご飯を食べるのは、初めてだがどうなのだろうか？

蓮華でスープを飲む。

うん、おいしいかな？

まだ箸を使ってないから、ご飯に箸をつけられても箒はあんまり気にしたそぶりは見せない。

「えっと……。　コレが素ですから……。」

そう言うと、箒は食事を再開した。

「堅いね～。　一夏もそう思わない？」

「えっ！？」

いきなり振られたからか、一夏は大声を出す。

やっぱりおかしい。

と言うか、昔見た時もおかしかったが、更におかしくなって無いか？

まるで、初恋が終わったかのような……人……の……か、お……？

ん？

あれ？

おかしいな??

私は男。

一夏も男。

一夏の表情は?

初恋が終わったかのような顔。

え、マジ?

もしかして昔から?

ナニソレコワイ……。

けど……。

一夏と箒に教えてなかったね……。

「とりあえず、一夏が何を思っていたか理解できたよ。」

「っ!?!?」

一夏が目を限界まで見開く。

「まぁ、教えてなかった私が悪いんだし……気にしない。」

そう言うと、ラーメンに箸をつけた。

０６１　リリィに対する思い（後書き）

一夏の初恋（？）の終わりｗｗｗ

一夏にとっては、よくそういう感情を持てたと拍手する場所ですかね？

……箒がリリィを呼ぶ時なんて呼ばせたらいいのか……。

やっぱ義兄さん（にいさん）？

Ｄ．Ｃ．っぽいな……。

悪くは無いけど……。

……ん？

あっれ？？

リリィの未来がおかしいな……。

０６２　転校生の宣戦布告（前書き）

さて、やっと鈴が登場。

そして今後一夏と箒が空気になるか？

ちょっと心配。

０６２　転校生の宣戦布告

「おはよ～。　織斑くん。」

「おう。　おはよう。」

一夏が同クラスの女の子に、あいさつられていた。

それを睨みながら箒は見ている。

そう言う私こと、リリィは……。

束がいないから、少しばかりテンションダウン。

けど、テンションの違いが分かりにくい。

「ということで、おはよう。」

なにが「ということで」なのか分からないが、同クラスの生徒にあいさつをする。

「あ、おはよ～。」

「おはよ～りりぃさん。」

……うん。

さん付け、はもう慣れた……。

実際、私……年上だし……。

白騎士事件が十年前。

当時七歳。

今、十七歳。

あと少しで十八歳。

一夏達は……十五？

まぁ、歳はが違うが無理やりＩＳ学園に入ったのだ。

気にしたら負けだ。

うん。

負けだ。

「……え、それほんと？」

「らしいよ？」

席に近づくと、話声が聞えた。

「……転校生だって。」

「今の時期に？」

……転校生ねぇ。

その言葉に思いつくのは、昨日の夕方に見た少女だ。

席に荷物を置き、持っていた予備出席簿を手に取る。

何故、持ってるかって？

今日は真耶が休みだからだ。

それで、千冬は少し遅れる。

つまり、臨時で教師をやれという事だ。

と言う事で、あと少しでＳＨＲだから教壇に向かう。

「ねぇねぇ、織斑くん。　転校生の話聞いた？」

「転校生？」

あ、そう言えばあの転校生……。

どうやら、お前に惚れてるぞ。

内心カッコ笑カッコトジと、付けておく。

「（笑）」こうだ。

そう思いながら、教壇に立つ。

その光景に、大体の生徒が「ああ、今日はリリィ先生なんだ～」というのを感じていた。

「ねぇねぇ、リリィさんは転校生の事知らない？」

そう聞いてくるクラスメイトA。

名前？

覚えてるけど、どうでもいいし。

とりあえず、会話はしておこう。

「ああ、知ってるよ。」

正確には知らないが。

「だれだれ？」

なんか目を輝かせながら、聞いてくる。

そんなに気になるのかな？

「織斑くん勝てそう？」

「今のところ、専用機持ってるの一組と四組だから、楽勝だと思うけど……。」

「というか……。」

一斉に喋るな。

私は聖徳太子じゃない。

全員の言ってる事を、いっぺんに理解できるか。

「まぁ、いずれ分か……。」

「その情報古いよっ！！」

そう言った瞬間、ドアから大きな声が響く。

五月蠅いな……。

というか、噂をすればなんとやら……。

転校生ご本人の登場ですね。

「二組も専用気持ちがクラス代表になったの。　そうかんた……。」

「と言う事で転校生が来ましたが、ＳＨＲを始めます。」

転校生の言葉を遮って、教卓に立つ。

その言葉を聞いて、大半の生徒が席に座る。

時間はちょうどＳＨＲ。

「ああ、二組の転校生でしょうから、無視してかまいませんよ。」

その光景に、転校生は呆然とする。

「え、え？」

訳が分からないと言う顔だ。

「あんた、教師じゃないでしょ？？」

……今は教師です。

というか、お前は大丈夫なのか？

時間だよ？

「鈴……？　お前、鈴か？」

一夏の声で、転校生は気がついたのか立ち直す。

「そうよ。　中国代表候補生、凰鈴音（ファン・リンイン）。　今日は宣戦布告にしに来たわけ。」

……ＳＨＲ無視ですか？

ああ、キレてもいい場面ですかね？

「というか何教師真似してるの、そこの人？」

その言葉に、教室の温度が下がった。

鈴音……ああ、言い辛い。

一夏と同じように鈴で良いか。

鈴以外の……教室にいる大半の生徒の顔が青くなる。

「ＳＨＲだよ、教室に戻りなさい。　……あ、千冬。」

「え”？」

鈴が振り返る。

「ＳＨＲに何をやっている。」

ドス声でそう言った。

わ～、怖～い。

束を担いで登場した所から、一回部屋に入ったのだろう。

今日は、なぜかロックを破られるな～。

なぜだ？

あとで、束に聞いておこう。

「ち、千冬さん。」

鈴は怯えながらそう言う。

「織斑先生と呼べ。　あと、リリィも教職員扱いだ。　ちゃんと敬

語を使え。」

それを聞くと鈴は、驚いた顔でリリィを見た。

信じられないのだろう。

何度も、千冬とリリィを見比べている。

「あと、邪魔だ……どけ。」

その言葉に、鈴が下がる。

教室に戻るのだろうか、足が大きく後ろに下がる。

「また後で来るからね！　逃げないでよ一夏！！」

去り際にそう言った。

だが、もう限界だった。

私が教壇にいるときに、妨害……。

「さっさと教室に戻れ！」

とりあえず、そう怒鳴っといた。

０６２　転校生の宣戦布告（後書き）

１年１組～。

リリィ先生～☆

ということで、今日は山田先生がお休みですｗ

その場合担任の千冬がやるべきでしょうが、少し遅れるそうです。

この場合、リリィが先生と言う事になるそうです。

訳分からんっ！！

まぁ、いまさら考えた所で何も変わらない。

そして、燃料が切れてきた。

なんか、私のテンションダウン……。

０６３　ラーメンは伸びると不味い（前書き）

……なんだ、このサブタイトルは……。

まぁ、鈴のラーメンがのびてるだろうことから、付いたんだけど……。

０６３　ラーメンは伸びると不味い

「というか、一夏は何だ……自身が美味しいと言っている餌か何かなの？」

「どういう事だよ……。」

そう言いながら、昼食をとるために食堂に来ていた。

束もリリィの後ろに歩いてる。

もちろん箒やセシリアもその後ろに付いてきている。

「いっくんは魅力的だからね～♪」

そう言いながら、束は箒達を見た。

箒達は顔を赤くして、束の目から顔をそむける。

「一夏……死ぬか？」

「なんでっ！？」

束に魅力的だと言われて……怨まない奴がいないとでも？

いるんだよ……お前の目の前に……。

私がねぇ。

「待っていたわよ、一夏！」

そう思っていると、大きな声が聞こえた。

振り返ると、転校生……鈴がいた。

食券機の前で……。

ラーメンを乗せた、お盆を持って……。

「のびるぞ？」

「のびるな。」

「のびるね～☆」

「確実にのびる。」

「のびますわよ？」

五人の波状攻撃……いや……。

波状口撃を受け、鈴はたじろぐ。

その間にも、麺は伸びる。

「わ、わかってるわよ！！　あんたを待ってたのよ！！」

そういうと、空いている六人席を確保する。

と言っても、大きめのU字テーブルだが……。

……根はやさしい子なんだろうな……。

そう思いながら、食券を渡す。

「おや？　リリィちゃん。　今日はどうしたんだい？」

食堂のおばちゃん……。

せめてちゃん付けやめて……。

束だけ……でいいから。

束がちゃん付けすると、なぜか無条件で許せる。

うん。

別に、おばちゃんが許せないんじゃないよ？

本当だよ。

まぁ、どうでもいいから横に置いておこう。

何故おばちゃんにそんな事を聞かれたかと言うと。

スーツだ。

女物のスーツを着ているからだ。

朝着ていた制服ではない。

千冬と似たようなスーツだ。

あの後、寮に戻り着替えた……。

真耶が休んだせいで……。

「今日は生徒じゃなくて、教師をやってます。」

「は～。　大変だね～。」

そう言っいいながら、リリィが頼んだモノを出す。

リリィは感謝しながら、それを受け取った。

一応、おばちゃんには話したはずなんだけど……。

そう思いながら、鈴がいる場所に向かう。

歩くと、千冬みたいに結んだ髪の毛が跳ねる。

そして鈴の隣に座る。

一夏はリリィとは反対側の方に座る。

「それにしても、本当に教師だった……んです、ね。」

リリィを見て、納得したかのように言葉に出す。

だが言葉は千冬に言われた事を思い出したのか、とぎれとぎれの敬語になった。

別に構わないけど。

ここに来て間もないから、いろんな人がリリィを不思議そうに眺めてくる。

リリィのスーツ服は、あまり見ないからだろう。

「まぁ、教師兼生徒だ。」

「なによ……そ、れは……。」

敬語にしようとして、意味を成さない言葉になる。

それがじれったく、リリィは「別に敬語じゃなくて良い」と言った。

すごくほっとされた……。

何故だろ、やっぱり敬語で話させた方がいいのか？

イラッと来たんだけど……。

鈴はラーメンに口をつける。

「と言うか鈴、いつの間に帰ってきたんだ？」

一夏が鈴に話しかける。

「最近よ。　と言うか、なんでＩＳ使ってるのよ？　ニュース見たとき驚いちゃったじゃない。　お茶噴いちゃったんだから。」

なんだろう。

その光景がアリアリと想像できる……。

束が受け取ったお盆を持ち、リリィの横に座る。

「というか、この人たち誰？」

そう言うと、指は刺さないがラーメンを食べた。

行儀が悪い……。

だが、指をさされるよりはましだろ。

「ああ、……二人とも先生……なのかな？」

一夏が首をかしげながらそう言った。

まぁ、そう疑問になるよね。

気が付くと箒とセシリアが座っていた。

鈴を中央にリリィ、一夏、束、箒、セシリアと座っていた。

なんだ、この図ったような席の座り方は……。

そう思うと、割り箸を割った。

０６３　ラーメンは伸びると不味い（後書き）

……スーツ姿のリリィ……。

う～ん？

どっちかと言うと、黒いスーツより明るい色彩の服が似合う……。

眠いが……０時投稿のヤツを書かないと……。

そう言えば、みてみんで改悪ＩＳを載せました。

興味がある方はどうぞ。

どうせ使わない機体だと思いますが……。

０６４　食事中は静かにしましょう（前書き）

……誰視点？

というか、０時に投稿できなかった……。

０６４　食事中は静かにしましょう

「一夏、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだが。」

その箒の言葉に、一夏が頭を傾ける。

考えているのだろうか。

だが、すごく間抜けな顔だ。

「まさか、こちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」

セシリアと箒の質問に、一夏は少し引きつる。

「べ、べ、べ、べ、別に私は付き合ってるわけじゃ……。」

「そうだぞ、なんでそんな話になるんだ？」

一夏の言葉に鈴が少し暗い顔をする。

「ただの幼馴染だ。」

リリィは気にせず食事に手をつける。

束も気にせず食べ始める。

「幼馴染？」

箒が怪訝そうな顔で一夏に聞く。

「あ～、そうか。　箒が引越したのは小四の終わりっだったな。鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。　で、中二の終わりに国に帰ったから……会うのは……一年とちょっとぶりだな。」

長ったらしい一夏の言葉を聞きながら、リリィは食事を続けた。

「鈴には、前に話したよな。　小学校からの幼馴染の箒だ。」

鈴は箒を見て値踏みするかのように眺めた。

対する箒もそうだ。

「はじめまして、これからよろしくね。」

「ああ、こちらこそ。」

その場の空気が凍った。

自身の恋敵と言う物は、時にすぐに分かる物だ。

「私の存在も、忘れられては困るのですけど。」

そう言ってセシリアが言葉を発した。

「……誰？」

麺をすすりながら、首をかた向ける。

「わ、私（わたくし）は、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットですわ。

ご存じなくって？」

「うん。　他の国とか興味無いから。」

「あ～、やはりそうでしたか。」

セシリアはセシリアで、納得したようにご飯を食べようとした。

（やっぱり、情報を多く持ってない。　なら、年月や親しみを考えずとも……。）

その頭は、何とも腹黒い事を考えていたりした。

セシリアは、どうやら別方向の進化を遂げたようだ。

主に、ＩＳではなく知略と言う。

「まぁ、私は強いから他の弱い人なんて興味無いだけなんだけど。」

その鈴の言葉に、セシリアはキレた。

すぐに知略と言う部分がキャンセルされる。

「私（わたくし）に勝てると？　面白いですわっ！」

「やってみなさいよっ！」

どんどんヒートアップする言い合い。

他の生徒は五月蠅そうに、言い合いを見ていた。

「そう言えば、一夏。　あんたクラス代表だって？」

セシリアの良い合いに疲れたのか、一夏に話しかけた。

「おう。　なり行きでな。」

それを聞くと、鈴は目を光らせる。

鈴の頭は高速で一夏の独占を考え始める。

と言うか、考え付いていた。

「あ、あのさ。　ＩＳの操縦を見て上げるけど？」

箒とセシリアは、少し焦った。

ただでさえ、二人っきりで一夏といる時間は少ない。

それをさらに減らされようとしているのだ。

焦りもする。

だが、一夏は首を振って断った。

「えっ！？　ど、どうして？」

鈴が断られると思ってなかったのか、目を見開く。

一夏は最初から決めていたのか、はっきりと口を開いた。

「いや、リリィに教えてもらおうと思ってな。」

その言葉に、箒とセシリアは胸をなでおろした。

リリィなら安心だ。

束がいるし、なにより男だ。

男には見えないが、男だ。

そう、箒とセシリアは思った。

鈴は不服なのか、一夏に再度言う。

「私の方が強いし、上手く教えてあげられるわよ？」

その言葉に箒とセシリアは、席を離れたくなった。

三人目の犠牲者、と言う単語を思い浮かべながら。

「いや……、鈴でも勝てない。　と言うか、千冬姉も勝てなかったらしいし……。」

その言葉に鈴は驚愕する。

「あり得ない……。　嘘なんじゃないの？」

「事実らしいぞ。」

鈴の疑念を、一夏ははっきりと否定した。

その当の本人は……。

途中から一夏達の話を聞いていなかった。

リリィは目をつぶり口を開けた束に食事を食べさせていた。

いわゆる「あ～ん」と言うやつだ。

束は満面な笑みで「おいしい♪」と言っていた。

作ってる人が同じだから、味は変わらないだろと思ったが何も言わない。

そう思いながら束の笑顔が見れたので、リリィはもう一回束に箸を近づける。

束はそれを食べる。

「……一夏……、何、この二人は……。　女同士で……。」

鈴が頭を押さえながら、リリィ達を見てそう言った。

「あ～、いつもの事だから……。」

「いや、それはそれで困るけど……と言うか誰？」

一夏の少しずれた返答に頭を痛めたのか、こめかみ少し動く。

「あ～、箒の姉さんだ。」

「え～っと……確か、篠ノ之箒だっけ？　ん？　……篠ノ之？？」

鈴が箒の名字を知っており、呟いた後少し考え込む。

「ねぇ、まさかとは思うけど……。」

「そのまさかですわ……。」

鈴が何を言いたいか理解したセシリアが、いち早く言葉にする。

「……篠ノ之博士？」

その言葉に、食堂中が静かになった。

「そうだ。　篠ノ之束。　ＩＳの開発者にして、私の姉だ。」

その言葉が引き金となり、食堂が一瞬にして五月蠅い場所となった。

大声と同時に誰かの箸が折れた音がした……。

０６４　食事中は静かにしましょう（後書き）

細かい説明ないな……。

いつか、書きなおそうかな……。

０６５　訓練を始める前に現れる未完成機（前書き）

ＩＳ学園に束がいたら、多分こうなったと思う……。

０６５　訓練を始める前に現れる未完成機

「まぁ、と言う事で放課後特別授業を開始します。」

リリィのやる気のない声がアリーナに響く。

「やる気無いな。」

「一夏……私はお前が強くなっていく事は嬉しい。」

その言葉に一夏は、すこし目を見開く。

「だが、今は止めて欲しかった……。」

全員が首をかしげる。

リリィは今日は教職員だ。

別に生徒ならしなくても良い事を、今日はしなければいけない……。

そう、授業評価や今日の書類の整理などだ。

まぁ、全部終わらせたが。

疲れたのか、肩を回す。

ちなみに、この場にいるのは一夏に箒とセシリア。

講師のリリィと束だけだ。

他は誰もいない。

訓練機の使用許可が、めんどくさいのだ。

必要書類が何枚ある事やら。

だから、誰もいない。

「私にしてみれば、箒ちゃんのＩＳの試験ができるから良いんだけど♪」

その言葉に一夏とセシリアの目が見開く。

箒は少し胸を張っていた。

確かに訓練機の姿もない。

「そんな……。」

セシリアは箒に対してのアドバンテージが消えた事に、ショックを受けていた。

「まぁ、まだ完成はしていないが……、打鉄よりはマシな性能だ。」

リリィはそう言うと、近くに箱を落とした。

上空から。

大きな鉄の箱を……。

「……ＩＳ？」

「いえ、ＩＳは精密機械ですわ……。　あんな乱暴に落として……。」

そう言って思い出したのか、言葉を止める。

ブルー・ティアーズも高高度から墜落して無事だったのだ。

コレも大丈夫だろう。

むしろ、どっから落ちてきたと言う疑問が大きいだろう。

一夏達は上を見る。

だが、アリーナにはシールドが張ってある。

シールドを抜けた感じもしない。

頭を悩ませる元凶の箱は、束の手にある何かのボタンにより中身が表に出る。

「見よ☆　天才と天才が作り上げたこの機体を！　その名も～紅椿（あかつばき）～♪」

そこには塗装はされていないが、角張った機械があった。

あたかも大きな羽を大量に付けた、機械がそこにあった。

「ふふふ、まだ半分も完成はしていないけど～、完成したら現行ＩＳを上回る完全な機体になるんだよ～☆」

「完全って……。」

一夏の言葉に束は大笑いをし始めた。

「何と、この紅椿……あ、今は赤くないけどね☆　この機体は、ＩＳという基準で造った第四世代の機体なんだよ～☆」

その言葉にセシリアが目を見開いた。

第四世代と言う、まだ開発もされていない機体を凝視する。

「まぁ、まだ完成はしていないけど、十分に第三世代機と戦う事はできる機体だな。」

リリィの言葉に、やっと一夏が口を開く。

「え～と、つまり……。」

「今日は箒ちゃんと紅椿のテストも同時に行うんだよ～♪　で、改良して～紅椿は完成☆」

その言葉に、箒はため息をついた。

「なんだ……悪いな、一夏。　訓練なのに……。」

ばつの悪そうな顔で、箒はそう言った。

だが箒は、紅椿の登場に驚いていない。

一夏はまさかと思い、箒に尋ねる。

「もしかして……、束さんに頼んだのか？」

専用機を頼んだのかと……。

だが、箒は首を振り言った。

「姉さんの事だ……。　いつかはやると思ってた……。　だが、思っていたより早かったが……。」

そう言って、紅椿を見た。

その間にも束は、ウサミミを揺らしながら喋り続ける。

「や～、ち～ちゃんの機体に実験で装備させてみたんだけど、思っていたより簡単に出来て♪　初期紅椿のコンセプトを思いっきり越えちゃった～☆」

「「「え？」」」

千冬の名に、全員反応した。

「まぁ、赤い機体は通常の三倍早いっていうし……。　完成したら最強だよ～☆　強いよ～☆　あ、ち～ちゃんとリリィちゃんの機体を除いてね♪」

もはや、誰も束の言葉を聞いてはいなかった。

０６５　訓練を始める前に現れる未完成機（後書き）

……原作より紅椿の登場が早い……。

アニメだと、今は３話？

紅椿の登場は１０話。

やっぱいな～ｗｗｗ

やっちゃったな～。

後こまごまとした更新で、ストレスがたまっている方もいると思いますが、この方法が一番早く書ける方法なので、いまさらながらご了承ください。

現に１つにまとめると、１日５．０００文字……。

分割すると大体……７．５００文字？

や～、早すぎるというか、違いすぎるね～♪

あと、総合ＰＶとユニークがすごい事になっていますが……次の更新で……。

０６６　模擬戦　リリィＶＳ一夏＆セシリア（前書き）

……まぁ、教える前にこういう戦闘した方が、教わる側のためになるし……。

と言う事で、模擬戦を入れてみました。

０６６　模擬戦　リリィＶＳ一夏＆セシリア

「まぁ、紅椿は調整後に簡単な模擬戦闘と言う事で……。」

≪ＺＧＭＦ－Ｘ１０Ａ　起動。≫

リリィはフリーダムを起動せさた。

「まぁ、教える前に二人同時に揉んで上げる。」

そう言うと、指を動かすことで挑発した。

もちろん一夏はこの挑発に簡単に乗った。

だが、セシリアが冷静だったため、一夏は完全に乗ってこなかった。

……つまんないの。

束と箒が紅椿に近寄り話し始める。

それを見るとリリィは、目を一夏に向け直した。

「まぁ、全力でおいで？　そうすれば、この身に届くかもよ？」

そう言うとクスクスと笑う。

少しカッコつけすぎたかな？

十枚の羽が広がる。

それを見た一夏達は、己の機体を展開する。

≪白式の起動を確認。≫

≪ブルー・ティアーズの起動を確認。≫

フリーダムがリリィにそう警告する。

頭に直接……。

まぁ、見れば分かる事なので意味はないが。

「全力で……。」

一夏がその言葉を発した瞬間。

フリーダムのライフルが、上に向かって放たれた。

模擬戦開始の合図だ。

「行きなさいっ！！」

セシリアはそう言うと、ブルー・ティアーズを展開させる。

一夏は未だ動かないが、フリーダムの隙を窺っている。

ブルー・ティアーズからレーザーが発射され、のオールレンジ攻撃が始まる。

しかし、リリィはそれを回避する。

左腕のシールドも使わず、ステップや飛ぶ事で攻撃を回避する。

「やはり、お強いですわね！」

セシリアがその動きを見て、声を漏らす。

「まぁ、セシリアが目指してよかったと思う程度には避けないとね。」

そういい返しながら、ライフルを一夏に向ける。

その瞬間、一夏は狙っていたかのように動き始めた。

直線的に動くが、狙い撃たれるよりは良い。

だが、一夏とセシリアは考えていた。

一瞬だけフリーダムが撃つタイミングだけでいいから、「止まれば」という希望的な考えが。

確かにフリーダムは、撃つときに動きが少し遅くなった。

だが、それでも早い。

速度が少しでも減速する瞬間を狙って、セシリアはブルー・ティアーズを撃った。

波状攻撃ではなく、フリーダムの背後にゆっくりと忍ばせた物を。

「まぁ、及第点？」

その言葉と同時にフリーダムは背面跳びの要領で、飛んでくるレーザーの予測射撃位置の上に移動する。

その通りにレーザーは飛び、通り過ぎたときにはフリーダムは元の位置に静止していた。

セシリアは流石だと思った。

普通なら、気がついても回避する事が困難な射撃だ。

だがフリーダムは、その射撃を簡単に……それも華麗に回避したのだ。

その間にも一夏が迫る。

雪片弐型を構え、切りかかろうと接近した。

回避しても良いが、受け止める方が一夏の訓練になると思いライフルを後ろ腰にマウントする。

「はぁぁぁぁ！！」

一夏は間合いに入った瞬間、単一仕様能力の零落白夜を起動させエネルギー刃を展開させる。

「良い判断だね。」

そう言うとビームサーベルを抜き取り、雪片と鍔競り合いになる。

ただ、問題があった。

「ぐ、おりゃぁぁぁぁ！！」

一夏は押し切ろうと、未だ競り合う。

リリィは少しため息をついた。

そして競り合いながら一夏の腹部を蹴り、セシリアのいる場所にまで飛ばす。

一夏は地面に激突しながら、セシリアのいる場所まで移動する。

「一夏……今のはダメ。　零落白夜を使うのなら、一撃で仕留めるとき。」

土煙が晴れ、一夏がフラフラしながら立ち上がる。

「もし防がれたら、距離をとって零落白夜の展開を止めないと、エネルギーの無駄使いだよ。」

そう指摘すると、一夏は納得したかのように零落白夜の展開を止めた。

実際、エネルギーが結構なくなっている。

一夏はエネルギーを表示しているモニターをセシリアと共に見て、リリィの発言をしっかりと理解した。

０６６　模擬戦　リリィＶＳ一夏＆セシリア（後書き）

……勝敗はついていませんが、実力差がありすぎです。

と言うか、リリィの戦闘技術はキラと同じですね～。

今さらだけどｗｗｗ

そして前話のあとがきに書いたとおり、ＰＶとユニークを書かせていただきます。

私は一日に、文字数が少ないのを何回も更新しているので、このようになってしまいました。

真面目に、一つに纏めて頑張っている作者様には申し訳ありません……としか言いようがありません。

２０１１０５０６１０００時

総合ＰＶ／５４９．９０１

ユニーク／３５．８２４

皆さん、こんな駄作を見てくださり……本当にありがとうございます。

他作者様には、申し訳ないと思いいいつつ……読んで下さり、感謝しています と述べさせていただきます。

０６７　セシリアの決意と願い（前書き）

……タイトル通り、セシリアの強化フラグです。

０６７　セシリアの決意と願い

気がつけば、アリーナの使用禁止時刻が迫っていた。

紅椿もテスト稼働は結構できたので、後は改良と箒に合うように微調整をすれば完成だ。

早くても明日の夕方までには完成するだろう。

「や～、それにしても最後は凄かったね～☆」

束が笑いながら一夏と箒を見た。

最後の最後に、一夏の近接戦闘訓練を箒が相手をした。

紅椿の近接訓練テストと同時進行したため、お互い全力戦闘を行った。

雪片弐型と、紅椿の空裂（からわれ）と呼ばれる近接装備のみでの戦闘。

お互いエネルギー刃なので、刃が交錯するたびに美しい光を散らす。

束とリリィは白式について説明をした。

白式自体第三世代だが、武器である雪片弐型は第四世代武器であると。

その説明に、一夏も箒も驚いた。

セシリアは紅椿を見たときから、薄々は感付いていたらしい。
束が凄いた言ったのは、お互い第四世代武器での戦闘の事だ。
束自身、それを凄いと思ったのだろう。
「はぁ……それにしても、私(わたくし)だけ置いてかれるような気分ですわ……。」
セシリアは自身が認識していた、強みが劣っていると思い少しばかり落ち込む。
「まぁ、今の箒ならセシリアはまだ勝ってるから。」
とりあえずリリィは、セシリアを慰めてみた。
だが、セシリアは「ダメですわ」と言って自身を追いこんでいた。
負けん気が無いのは良い事なのだが、少し追い込み過ぎただろうか？
リリィは頭を掻く。
束は話は聞いていたが、あまり気にしてないようで箒と話し続ける。
セシリアはリリィの腕を掴むと、顔を近づけた。
「リリィさん！」
「は、はぃ？」

リリィ自身、初めての経験だったので驚いた。

「私(わたくし)の、誘導兵器と射撃の両立を完璧にしてください！！」

切実過ぎた願いだった。

確かにセシリアは、射撃をしながらの誘導兵器ブルー・ティアーズの操作はできない。

逆もまた然り。

それさえ出来れば、第三世代の中でも実力はトップだろう。

「まぁ、暇なときで良いのなら見て上げるけど……。　というか、一夏を教えながら見て上げる事はできるけど……、物にするの大変だよ？」

そう、誘導兵器を完全に使いこなすのは大変なのだ。

誘導兵器の操作は、動かすだけで精いっぱいの人がほとんど。

動かせても上手く動かせず、落ちるのがその大半。

射撃するだけでも、さらに絞られる。

それほど大変なものだ。

動かせて射撃もできる人は、少なからず空間認識力が他の人より高いのだ。

セシリアはそのトップに位置するだろう。

だが、使いこなせているかと聞かれると……使いこなせていないのだ。

教えてもらおうにも、確実に使用出来る人がリリィ以外いない。

だからこそ、セシリアのブルー・ティアーズは完成しない。

実験途中のままだ。

おそらく、ハード面が強すぎて搭乗者に多大な負担を与えていると思う。

だから、射撃との両立ができないのだ。

まぁ……今の技術者が作れる事の方が凄い事か……。

でも、結局はフリーダムのドラグーンの三流品。

ハードが強く最高品でも、ソフト……プログラムがよくなければ、性能は発揮されない。

結局、セシリアが弱いのではない。

機体の性能が、セシリアについて行ってないのだ。

リリィはそう思った。

「構いませんわっ！！」

セシリアはそう言うと、リリィの手を強く握った。

……やれやれ……。

少し呆れながら、口を開く。

「分かった……。　それじゃあ、ブルー・ティアーズの全プログラミングデータ、転送してくれる？」

セシリアは目を見開いたが、少し考えた。

一応ブルー・ティアーズは、イギリスに所属しているＩＳだ。

勝手に改良するのは不味いと思ったのだろう。

というか、個人が改良してはいけないのだ。

そして考えがまとまったのか、データーをフリーダムに転送した。

（よく考えてみれば、開発者が直々に改良してくださるのだから、別に構いませんわよね？）

セシリアはそう思った。

事実、難航していた誘導兵器だ。

やってくれるのなら、イギリスは何でもするだろう。

その開発者は……。

（紅椿の改良と同時に、ブルー・ティアーズのソフトも改善作業をしておくか。　仕事が増えるね……。）

ただそう思っていただけだった。

なんともまぁ……。

技術者全員を敵に回すような発言だろう。

りリィ達はそう話しながら、ピットに戻り休憩と帰宅準備をしようと考えた。

０６７　セシリアの決意と願い（後書き）

まぁ、両立できれば……セシリアは強いと思いますよ。

マジで。

でも、射撃しながらの移動や……射撃が素直すぎる事や……誘導兵器の配置が単純だから……う～ん。

強化しても、ヒロイン内で２番目に強いくらいかな？

うん……。

まぁ、そんなもんでしょ。

相性とかあるしね☆

０６８　相部屋と言うアドバンテージ（前書き）

サブタイに意味はありません。

０６８　相部屋と言うアドバンテージ

「おつかれ～、一夏。」

ピットで休んでいた、リリィ達もとに鈴が現れた。

その手には、スポーツドリンクとタオルが握られている。

「はい、差し入れ。」

そう言って、一夏にスポーツドリンクとタオルを渡した。

……全員分用意しておこうよ……。

別にいいけど……。

「サンキュー。」

一夏は一夏で、他人の目を気にせず受け取るし……。

全員見てるよ？

リリィはため息を吐きながら、近くにあったバックをとる。

その中には、ドリンクとタオルが人数分入っていた。

「まぁ、こっちはこれで我慢だね。」

そう言いながら、箒とセシリアにタオルとドリンクを渡す。

「やっぱ、用意が良いね～♪」

「束は動いてないから無いよ。」

束の言葉に、真面目な声でそう答える。

「ひどいっ！　私だって紅椿の調整してたんだよ～！」

困った顔に涙を浮かべながら束は、リリィに近寄った。

「……はいはい。」

ちょっと、束の困った顔を見てちゃんとドリンクを渡す。

「最初からあるなら言ってよ……。」

そう言って一気に飲み干す。

箒達は呆れながら、その光景を見ていた。

鈴は一夏に近寄って、話しかける。

箒はあんまり気にしていない。

あの一夏だ。

警戒した所で何起きはしない。

そうリリィが言ったのだ。

箒はそれに納得してしまい、鈴をあんまり気にする必要はないと思ったのだ。

「一夏、私がいなくて寂しかった？」

「まぁ、遊び相手がいなくてなぁ……。」

鈴の言葉をどうとらえたら、そうなるのか……。

大体今の言葉は、どう聞いたって鈴をどう思っているかの質問だろう。

寂しいと思う気持ちは良い。

だが、その理由が「遊び相手」と言うのはアウトだ。

箒達は一夏の答えにため息を漏らすのと同時に、心で笑っていた。

「一夏、私は先に帰る。　シャワーの件だが、紅椿の事で姉さんと話があるから先に使っていいぞ。」

そう言って、束と一緒にピットを出て行った。

鈴は箒の言葉に目を丸くし、驚愕した。

「ちょ、どういう事よ一夏。」

一夏の肩を掴み、前後に激しく揺らす。

当然一夏は目を回してしまい、何も喋れなくなる。
それでも、一夏の状態に気がつかずに揺らし続ける。
セシリアは、鈴の行動を観察していた。
恋敵の情報は多い方がいい、と。
「あ～、一夏が喋れなくなってるよ～。」
鈴はリリィの言葉に、ようやく一夏を揺らす腕を止めた。
「どうせ一夏が喋っても、意味通じなさそうだし私が喋るよ？」
鈴はリリィを見る。
「一夏はね、今箒と同じ部屋に住んでるんだよ。」
「「ええ！？」」
鈴とセシリアが、同時に声を上げる。
……アレ？
セシリア知らなかったっけ？
セシリアがリリィに詰め寄る。
「詳しくお話を……。」

「と言うか、私もよくは知らない。　多分……急な男性搭乗者の入学だったから、部屋が空いてなかったんだと思うけど？」

その言葉に、一夏は「そ、そう。　その通りだ……」と苦しそうな声で肯定した。

何回か、咳払いしてようやく元に戻った。

「まぁ、箒でよかったよ。　もし知らない子だったら、寝不足になりそうだったし。」

その言葉に、セシリアは呆然とする。

だが、瞬間的に考え込む。

対する鈴は、小声で何か喋る。

「？」

一夏は聞きとれなかったようだが、リリィはちゃんと聞けた。

「幼馴染なら良いわけねっ！　分かったわ、ええ、分かりましたとも。」

鈴はそう言ってドアに向かう。

そして一夏の方に振り向き、口を開く。

「幼馴染が二人いるって事、覚えておきなさいよっ！」

そう言って出て行った。

……厄介な事になりそうだね。

０６８　相部屋と言うアドバンテージ（後書き）

ね、眠い。

文字は文になってる？

よく分からない……。

とりあえず、下手ですが１時間（だっけ？）ちょいで描いたリリィをみてみんに投稿しておきました。

髪型は下ろしてますが、日によって変わるという事を覚えておいてください。

まぁ、ほんと下手ですけど……。

ああ、向こうでもネームは「葵束」で統一しています。

というか、アチャ子の面影消えたな……。

微妙に似てるけど……。

０６９　夢であって欲しい（前書き）

……無理やり設定……。

でも、そうでもしないと白騎士の所属で大変な事に……。

069　夢であって欲しい

あの日から数日がたった。

なぜか一夏と鈴が、あんまり顔を合わせてない気がする。

というか、鈴が一夏を避けていた。

顔を見れば分かる。

アレは一夏に怒っているのと同時に、呆れ悲しんでいる顔だ。

……一夏……何やったんだ？

そう思いながら千冬から貰った紙を受け取る。

なんでこのご時世に、紙で情報を伝達するんだ？

紙とインクがもったいない……。

そう思いながら、文字を読みとる。

「……は？」

思わず声に出すほど間抜けな事が書かれていた。

リリィを生徒ではなく、職員としての扱いとする。

つまり、生徒から先生になってしまった……。

「あ～、やっぱそうなった？」

束が後ろから、紙を覗き込みそう言った。

まさか……。

そう思いながら読み返す。

生徒ではなく、教職員への移動。

だが受け持ち教科は束と同じで、そんなに授業時間も多くない。

つか、束と一緒の授業だ……。

……え？

束と一緒に授業するの。

そう思って嬉しがったが、思い出す……。

……束が今まで授業をまともにやったか？

否、やってない。

毎回、リリィが束の授業にフォローしに行っている。

……結局は、いつもと同じと言う事だ。

「や～、だっていつも一緒だし～☆　取引にはＩＳ学園に入れると

いう事しかないし。」

束の言葉で気がついた。

別にリリィは生徒として、ＩＳ学園に入らなくてもよかったという事だ。

……え、と言う事は私先生？

……え、それじゃぁ書類整理とか……？

「よくよく考えたら、この学園って本当は私の物だよね～♪」

束の言葉が耳に入らない。

ちょっと、生徒と言う一種の憧れだった生活が終わったのだ。

中学校……まして小学校にも行ってないのだ。

少しぐらい、学生生活をしてみたい。

一年ほど……。

鬱になった。

時刻は夜。

さっさと寝て、夢であったというオチが欲しい。

そう思い、紙を投げ捨てベットに潜り込む。

だが。

≪熱量接近。　熱量接近。≫

≪熱量推定……。　第三世代機。≫

≪警戒。　警戒。≫

モニターとアラートで目が覚めた。

アラートの音は小さいが、結構耳障りだ……。

とりあえず、起きる。

モニターに廊下が映し出された。

楯無だ……。

楯無がこの部屋に近づいてきていた。

≪はろ～。　織斑先生の事について連絡しに来たけど、いるかしら？≫

そう監視カメラに向かって言った。

……アレ？

監視カメラって、分かる位置に置いてあったっけ？

いや、天井の分かりづらい場所に二つある。

後、ドアの横……。

壁に埋め込んでいる。

「思ったより、早かったね～♪」

そう言いながら、束はドアを開けに向かう。

「本当はもっと早くこれたんだけどね～。」

そう言って楯無は部屋に上がり込んだ。

なぜか、束は簡単に通す。

部屋に水色が増えた……。

「あ、リリィちゃん？　さん？　どっちが良い？」

「どっちでも。」

眠れそうだったのに……。

と言うか寝てしまいたかった。

「あ、教職員就任おめでとう。」

……忘れさせてくれ……。

さすが生徒会長と言うべきか？

それとも更科家当主と言うべきか……。

情報が早い。

「……夢であって欲しかったよ……。」

「で、で☆　ち～ちゃんの事はどうなったのかにゃ？」

落胆しているリリィを横に、束は楯無に問いかけた。

楯無はある一枚の紙を、束に渡す。

「言いくるめるの簡単すぎて、すぐ終わったわ。」

そう言って肩をすくめる。

束は紙に書いてある事を読み上げると、笑顔になった。

「あ、おまけでもぎ取っておいたわ。」

「うんうん。　いいね～♪」

その言葉を理解しようと、束のもつ紙に書かれてある文字を読む。

篠ノ之束とリリィを、一つのＩＳ団体組織として認める。

そう書かれていた……。

０６９　夢であって欲しい（後書き）

……予約投稿をしたんのが、６日の２３３８時。

結構肩が痛くて、眠い……。

楯無のキャラは、似てきた気もしなくもない……。

白騎士の所属が、篠ノ之になれば意外と問題無いのか？

まぁ、そんなこんなで次話は……クラス対抗戦？

また別のオリ話が入りそうな気もしなくもないけど……ようやくか……と言っておこうかな。

０７０　クラス対抗戦（前書き）

相変わらず、gd gd……。

まぁ、別にいっか。

妄想をそのまま書いているわけだし……。

０７０　クラス対抗戦

第二アリーナに生徒の声が響く。

……誰だ、こんなトーナメント作った馬鹿ものは……。

そう思いながら千冬はため息をついた。

クラス対抗戦当日。

最初の試合は、一夏と鈴の戦闘だった。

正直、何故この対抗戦があるのかが理解できない。

確かに、対抗戦は生徒にとっていい刺激になるだろう。

だが、それでよかったと思うのは勝った生徒だけだ……。

負けた生徒は少なからず、なんかしら負い目を感じるだろう。

あってもなくても良い様な試合だ。

「ち～ちゃん、ち～ちゃん☆」

そう考えてる途中に、束の声が聞こえ思考を中断させた。

管制室にいる物に気づかれないように耳打ちする。

「こんなんじゃいっくんは、強くなんないよ～。　だから……。」

「……分かったから、離れろ……。」

……この馬鹿ものは……。

千冬は束の一言で、束が何を考えているか理解した。

「さすがち～ちゃん♪　理解が早いね～☆」

そう言いながら、束は戦闘がよく見える場所に立つ。

一夏のために、何かをするつもりだろう。

この場合、敵か？

……何を乱入させるつもりだ？

……まぁ、いい。

束が作る物は、大体安全性を重視している。

大丈夫だろう。

そう思いながら、戦闘開始の合図を送ろうとする。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げて上げるわよ？」

鈴の挑発的な言葉が開放回線（オープン・チャンネル）から聞こえる。

「いらねぇよ。　どうせ雀の涙くらいだろ。」

一夏は負けじと挑発し返す。

「……全力でこい。」

その言葉と目に、鈴は少しだけたじろいだ。

入学時に比べて、一夏は少し変わった。

箒とセシリアの訓練と言う名のリンチを耐え、リリィの戦闘訓練で少しは鍛え直されたのだ。

鈴の手加減より、全力の試合の方が良いと一夏は思った。

「一応言っておくけど、ＩＳの絶対防御も完璧じゃ……。」

「知ってるよ、そんな事。」

実際セシリア戦でよく知った。

絶対防御を抜いて、セシリアの命の危険になるまでの状態になったのだ。

あのとき全員が感じたはずだ。

「こいよ。」

丁度その時、試合開始の合図が聞こえた。

その瞬間に鈴は大型の青龍刀を。

一夏は雪片弐型を振り上げる。

元もと近かった距離が、一瞬にして縮まり武器同士がぶつかる。

「初撃を防ぐなんて……やるじゃない。」

鈴が感心したように言う。

一夏は零落白夜を起動させず、青龍刀と競り合う。

「リリィが師なんだ……。　姉と同じ師なら、これくらいやらないと……なぁっ！」

そう言って、武器同士競り合いながらも無防備になった鈴の腹部を蹴る。

「っ！？」

リリィがよくやる、攻撃と間合いの取り方だ。

自分が下がるのではなく、相手を下げさせる。

そうすることで相手の動きと自身の隙を封じ、なおかつダメージを与えつつエネルギーの消費を抑える方法だ。

自身より大きそうな鈴の機体「甲龍（シェンロン）」が大きく後ろに吹き飛ぶ。

白式は一夏の蹴りを増幅させた。

その結果、甲龍が吹っ飛ばされたのだ。

（へぇ、リリィがよくやるからやってみたけど……良いなこれ。）

そう思いながら、鈴を眺める。

「やってくれたわね……。」

鈴が睨みながらそう言う。

「もう手加減なんかしない。　本気で行くわっ！！」

そう言うと青龍刀をもう一本出した。

「……は？」

それを見て間抜けな声を出す。

鈴は青龍刀の柄部分をつなぎ合わせた。

「てやぁぁぁぁ！！」

鈴が叫びながら接近し、繋ぎ合わせた師龍刀を振るう。

上段から振り上げ、上の刃を避けるが下の刃が鈴の手の動きによって、別の軌道で攻撃してくる。

一夏は身体を傾ける事で、その全てを避ける。

だが、鈴の猛攻は止まらない。

遠心力をそのままに一回転し、再度上の刃が攻撃にくる。

刺して先ほどと同じように、下の刃がまた襲いかかる。

一夏は反撃ができなかった。

０７０　クラス対抗戦（後書き）

……１つ、リリィの絵があれで完成しているとは思わない事。

……２つ、白騎士の扱いどうしようｗｗｗ

一応、篠ノ之所属とかやってみたかったけど、まだ十年前の機体だと思っている国家をひっかきまわしたい……。

まぁ、問題になったらリリィが一部技術公開で黙らせるとしましょうか……。

でもまぁ、白騎士だしな……。

一種の……畏怖の対象だしな……。

どうしよっかな……。

……起きたら決めるか。

うん、そうしよう。

０７１　鈴の猛攻と出現する悪意（前書き）

……はい乱入編です。

０７１　鈴の猛攻と出現する悪意

一夏は鈴の猛攻を避け続ける。

振り下ろされるのは避け、薙ぎ払われるのは雪片で防ぎながら距離を取り。

とにかく避け続けた。

「さっきの威勢はどうしたのっ！！」

鈴がそう言って、連結させた青龍刀を振り続ける。

「あ、思い出した。」

一夏はそう言うと、鈴の攻撃を避け雪片を動かした。

鈴の手に向けて。

下から振り上げるような状況で、雪片を攻撃に転じさせた。

「っ！？」

青龍刀の持ち手に、雪片の刃が当たる。

すると、瞬間的に青龍刀の連結部分が破損した。

連結が解除され、二刀に戻る。

それを見て鈴は驚いた顔になった。

「……やっぱ壊れたな。」

一夏はそう言うと、雪片を構え直す。

「アンビデクストラス・フォーム……。　未完成の連結システム。」

一夏は淡々と言う。

「本来なら実体を持たない剣同士を連結させ、隙の無い攻撃をすることができるけど、実体がある分連結には何かしら影響がある。」

そう言って、鈴に接近する。

「リリィが言ったとおりだな。」

アンビデクストラス・フォームは使い勝手が悪い。

だから鈴は連結したら、薙刀と同じ要領で持ったのだ。

片手でも持ったが、よくて数秒。

悪くて一瞬の間だけだ。

基本鈴は片手で持たない。

だが、その持ち方にも理由がある。

「実体があって重い分、連結部分に歪が生まれるんだってよ。」

そう言って剣を振るう。

「だから壊れやすい。　片手で持ったら重さでぶっ壊れるだろ？」

「くっ！！」

鈴は両手に持った青龍刀を、交差させながら一夏の攻撃を防ぐ。

それを防ぎききると、大きく距離を取る。

「だからって……調子にのんないことねっ！」

そう言うと肩アーマがスライドする。

「甲龍の真価、見せてあげるっ！」

そう言うと、スライドした部分が光る。

「ぐぁっ！」

光が消えた瞬間、一夏は吹き飛ばされた。

体勢を立て直した一夏は、訳も分からない顔をする。

何が当たったか分からなかったのだ。

何も見えなかったのだ。

なのに攻撃を受けた様に吹き飛ばされたのだ。

訳が分からないだろう。

一瞬の思考の後、一夏は動き始める。

左右に移動しながら鈴に接近する。

だが、見えない攻撃が一夏の接近を許さない。

「よくかわすじゃない。　衝撃砲……「龍砲」は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに。」

そう言いながら、鈴は微笑む。

その言葉に一夏は気がついた。

この攻撃は砲撃なのだ。

（なら……。）

一夏は鈴の死角である後ろに移動する。

銃口が見えないが、後ろなら砲撃される事は無い。

だが、鈴は口を釣り上げた。

「甘いわっ！」

その鈴の言葉と同時に、衝撃砲の後ろが光りを放つ。

それを見た一夏は、とっさに高度を下げる。

「っ！　よく避けたわね……。」

（アレは後ろにも撃てるのかっ！？）

一夏は避け続ける。

上昇し下降し、右に避けたり左に避けたり……。

だが、砲撃のせいで次第に分が悪くなる。

「……鈴。」

一夏は回避しながら、雪片を構え直す。

「何？」

「本気で行くからな。」

そう言って鈴に向かって加速し始めた。

リリィに教わる前からの突撃思考。

これぱかりは、リリィの手によっても直ら無かった。

二人の距離が縮まる。

「当たり前じゃないっ！」

それを見た鈴は、青龍刀を一刀にして迎え撃とうとする。
だが、二人がぶつかる事は無かった。
「「っ！？」」
二人は急遽止まる。
淡い光が上空からアリーナのバリアに刺さり、アリーナのバリアを破った。
そして貫通し爆炎と爆風がアリーナの地面に覆った。
「な、なんだ？」
一夏は目を細める。
爆炎が薄れ、そこにある物を見た。
背面に五つの突起と右手に大型ライフル、そして左手に楯を持った灰色の機体がアリーナに乱入した。
「なっ！　全身装甲！？」
鈴の言葉にアリーナに警報が流れる。
全身を灰色の悪意で身にまとった機体の乱入で戦闘は中断された。

０７１　鈴の猛攻と出現する悪意（後書き）

眠い……。

展開が急過ぎる気がする……。

青龍刀が未完成のアンビデクストラス・フォームシステムを使っているので、片手では持てません。

甲龍は原作より衝撃砲に力を入れたため、そっちが脆くなったとでも思っておいてください。

まぁ、良いか……。

で、乱入した機体は……。

まぁ、あの機体です。

次話に続くｗ

余談？

誰かのＩＳをＭＳに変えようと思います……。

一人考えたけど、パクリになりそう……。

活動報告へ。

０７２　対策とコーヒーと塩（前書き）

……さっさと、一夏＆鈴ＶＳアンノウンを掻いて次に進ませたい。

072　対策とコーヒーと塩

「なにあれっ！」

真耶は驚愕した。

千冬も目を見開き驚愕した。

「おい、束っ！　これがお前の……。」

初めて見る機体に、その乱入。

それに頭が対処しようとして、身体が上手く働かない。

束は「はっ」として、頭を振る。

「な～に～☆」

いつものようにおどけた感じで喋る。

その行動に千冬は疑問を持った。

だが、今はそんな事は問題じゃ無かった。

「……束……。　アレはなんだ？」

千冬は自身を冷静にし、束に聞いた。

冷静さを失うな。

現状を見ても心を殺せ。

十年前のリリィの教えだ。

千冬はとりあえず、機体を対処する事より冷静になる事を選んだ。

「う～ん……敵かな☆」

ウサミミが上下に動く。

一見動じてないように見えるが、一番動じてるのは束だった。

「織斑くん！　凰さん！　今すぐアリーナから脱出してください！！」

真耶が叫ぶ。

≪先生たちが来るまで食いとめますっ！！≫

だが、すぐに返ってきたのは一夏の無謀な言葉。

真耶は驚愕した。

「無理で……。」

「なら、食い止めておけ。」

横から、千冬がそう言った。

その言葉に、真耶はさらに驚愕する。

「いいか、お前たちの本来の行動は食い止めるのが事じゃない。逃げる事だ。」

千冬の発言に真耶は何か言いたそうに口を開くが、束に口を押さえつけられて喋れなかった。

「だが、今のアリーナ……遮断シールドレベルが４だ。　だが、すぐ制圧に行く。」

千冬はそう言いながら、器用に近くにあるコーヒーを作る。

束がコップを用意しインスタントの粉を入れる。

それにお湯を入れるだけだから、器用に作っているのかは分からないが。

「……それまで……死ぬなよ……。」

そう言うと通信を切った。

「はい、ち～ちゃん。　コーヒー。」

そう言って束はコーヒーを差し出す。

砂糖を入れようと思ったが、束の近くに白い粉があったので入れたのだろう。

千冬は少し飲むと怪訝そうな顔になった。

「山田先生……。　飲みかけで悪いが、飲んでおいてくれ。　全部……残さずに……。」

そう言って管制室を出た。

真耶は呆然としてそれを眺めた後、コーヒーに口をつける。

「しょ……しょっぱい……。」

そして気が付く。

束の横にあった白い粉に。

その粉の入れ物に、「塩」とありありと書かれていた。

「織斑先生っ！！」

千冬が歩いていると、セシリアが呼びながら近づいた。

走ったのか、酷く息切れしている。

「私（わたくし）にＩＳの使用許可をッ！！」

その言葉を聞き、千冬は歩きだした。

「止めておけ。　アレは開発者が不明の未確認機だ。　シールドのバリアーを破壊した所から見て、ビーム兵装は積んでいるぞ。」

そう言って、ピットの方角に歩いてゆく。

「現在遮断シールドはレベル４。　入る事も出る事も出来ない。」

セシリアは千冬の後について行きながら、その言葉を聞く。

「で、でした……。」

「ああ、お前の機体は一対一には向かない。　邪魔になるだけだ。」

セシリアの言葉を聞く前に言葉を放つ。

「大体、連携訓練はしたのか？　というか、敵をどのくらいのレベルで認識している。」

「そ、それは……。」

その言葉に、セシリアは何も言えなくなる。

連携訓練はした。

だが、敵の認識は軽く見ていたかもしれない。

自身の浅慮な発言に少しうつむいた。

「だが、まぁ……仕事をくれてやろう。」

そう言うと、ピットに入る。

ピット内には、遮断シールドを直接クラック……破ろうとしていた三年がいた。

「実に簡単な仕事だ。」

千冬に気がついたのか、一人の生徒が近寄る。

「ああ、クラックしなくて良い。」

そういって、生徒をどかした。

怪訝そうな顔をして皆、道を開ける。

「狙い撃て。」

そう言うと、出入り口に歩いて行った。

０７２　対策とコーヒーと塩（後書き）

……ども。

眠いです。

腰が痛いです。

今さらながら、やっと原作１巻が終わりそうです。

けど、まぁ。

今回の話……箒を書くの忘れたな……。

うん。

マジで。

コーヒーに微塩……。

不味かったです。

０７３　死と隣り合わせの戦場（前書き）

……まぁ、何を書いているか覚えてないのが現状……。

０７３　死と隣り合わせの戦場

≪はろはろ～☆　いっくん♪　聞こえてる～？≫

突然、戦闘中に束の声が聞こえた。

「どうしたんですか！？」

≪別に、プライベート・チャンネルだから口に出さなくても良いよ～☆　別に出したいならいいけど♪≫

場に合わない声が耳にはいる。

その間にも、爆炎の中からビームが放たれる。

それを下がりながら避ける。

「で、どうしたんですか？」

≪あ、結局口に出すんだ。≫

笑い声と共に、ビームが飛ぶ。

だが、一夏はそれを雪片で弾く。

≪それは多分命を奪う事に特化されてるから、出来るだけ交戦しない様にね。≫

その言葉を聞くと、一夏は声を上げて驚いた。

≪あとあと～♪　今から救助隊が行くから持ちこたえてね☆≫

そう言うと、通信が切れた。

……命を奪うってマジかよ……。

そう思いながらビームを避け続ける。

すると突然、敵機を中心に何かが発射されて気がした。

「一夏！」

鈴が叫ぶ。

両手に青龍刀を持って、敵機に向け構える。

「一気に行くわよ！」

そう言うと敵機に衝撃砲を打ち込む。

敵機はそれを避けない。

衝撃砲が当たり、鈴は目を見開いた。

「……一夏……。」

一夏も目を見開く。

「ああ、シールドも絶対防御も起動しなかった……。」

「しかも無傷よ……。」

衝撃砲が当たっても、ダメージは与えられず威力を抑えるために下がった様子もない。

そう思っていた瞬間、敵機が浮き上がる。

それを見て一夏達は身構えた。

右手に持つライフルを構える。

それを見た瞬間、一夏達はその車線から離れる。

「きゃぁ！！」

だがライフルが光条を放つ前に、鈴の悲鳴が聞こえた。

咄嗟に鈴を見る。

すると、片方の非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）の先端が破損していた。

そして、敵機からの方向ではない光条が鈴の左手に持つ青龍刀を貫く。

「っ！　鈴止まるな、避け続けろっ！！」

一夏がそう言うと同時に、一夏にも敵機の方向からの攻撃ではない攻撃が襲う。

上から。

下から。

止まることなく、波状攻撃を仕掛けてくる。

まさかと思い、砲撃の始まりを見る。

土煙でよく見えない。

だが、それはそこから飛び出した。

鈴がそれを見て驚愕する。

「誘導兵器っ！？」

そう。

灰色の誘導兵器がそこにあった。

そしてそれらが一旦敵機に戻る。

背中に腰に戻った。

（大型が三基に小型が六基か……。）

一夏は瞬間的に戻った誘導兵器の数を確認した。

だがその瞬間、警告が出た。

「っ！？」

瞬間的に後退する。

その瞬間、一夏がいた場所に翠の線が二本走る。

「一夏ッ！！」

鈴が叫ぶが、一夏はそれを聞く暇がない。

必死に避ける。

上下からの砲撃を必死に避ける。

そして砲撃が止む。

一夏は敵機を確認する。

先ほどと変わらぬ状態で、静止している。

だが、近づく何かがあった。

それらが、敵機の後ろ腰に接続された。

（……小型がもう二つとか……。）

それは一夏を襲った、誘導兵器だった。

「一夏大丈夫！」

鈴が心配そうに近づく。

甲龍は非固定浮遊部位が破損し、使い物にならなくなってはいるが鈴自体は無事だ。

「大丈夫だが、どうする。　アレじゃ、近づけない。」

「そうだな。　誘導兵器がクモの巣をみたいになってくるからな……。」

束に言われた「交戦するな」と言う事を忘れ、一夏は鈴と話す。

だが話していると、敵機がまた誘導兵器を展開させた。

「くっ！」

必死に誘導兵器を確認しながら回避する。

だが、それだけでは終わらなかった。

「なっ！」

鈴が驚く。

誘導兵器が攻撃する中、敵機が一夏に向かって砲撃してきた。

これには鈴は驚愕するしかなかった。

同じ誘導兵器を扱うセシリアがいい例だ。

誘導兵器を扱いながら、自身を移動させ攻撃するのだ。

どれだけ、脳に負担を与えるか考えたくもない。

普通なら、セシリア同様止まって誘導兵器を動かすのだ。

だが敵機は誘導兵器を自在に操りながら、隙の出来た一夏に向かって左腕のシールドからサーベルを展開させ接近した。

「ビームサーベルっ！」

一夏が叫ぶ。

敵機のシールドは、ただのシールドではなく攻防一体武器……。

シールドはビームサーベルを仕込んだ武器だった。

いや、楯と剣と銃を武器だった。

接近する前まで、両手から砲撃していたのだ。

つまりオールウエポンだ。

徐々に敵が一夏に近づく。

一夏は誘導兵器の対処で手一杯だった隙を突かれた形だ。

剣に対処ができない。

「一夏ッ！！」

剣が迫る。

熱量から判断して、絶対防御をやすやす抜ける。

つまり、絶対防御など意味を成さずに剣が身体を切るという事だ。

その先は死。

一夏はそれを見つめ続けた。

（千冬姉……ごめん……。）

死の最後に、愛する家族に先に死ぬ事を謝った。

徐々にビームサーベルが近付く。

だが、一夏の目は死を映さなかった。

「やれやれ、間に合ったか。」

死の瞬間、一夏の目の前に白い騎士が現れた。

０７３　死と隣り合わせの戦場（後書き）

……説明下手なので……というか、眠いので……。

そして、荒い壁に手を擦った……。

痛い……。

０７４　戦場に舞い戻る白き騎士（前書き）

タイトル通り、白騎士復活編ですｗｗｗ

おいおい……。

そんなので良いの……。

いいんですｗ

０７４　戦場に舞い戻る白き騎士

「織斑先生……。」

アリーナの遮断シールドに歩いて行く千冬を、生徒がとめる。

「下がっていろ。」

そう言って、有無を言わさず全員下げさせる。

その目は完全に殺気を孕んでおり、引かない者はリリィと束くらいだろう。

「いいなオルコット。　私がシールドを切ると同時にアリーナに入れ。　すぐに修復するからな。」

「破れますの!?　というか、織斑先生はどうしますのかしら?」

セシリアは少し疑問に思った。

アリーナのシールドを破る事は、不可能に近い。

どれだけのエネルギーをぶつければいいのか……。

考えただけで、ゾッとする。

確実に、絶対防御を抜いて人を殺せるほどの威力だろう。

そして、この距離で破壊する事は立ち止まるという事だ。

切ってシールドを破った所で、動けないだろう。

シールドを切るという事は、確実に止まった必殺の一撃を叩きこまないといけないのだから。

まして射撃なんて馬鹿な真似はしないはずだ。

兆弾や、シールドを破るほどのエネルギーが確実に跳ね返る。

つまり、どの行動を取っても千冬はアリーナに入る事はできない。

いや、もしかしたら誰かを突入させるために来たのか。

そうセシリアは思うが、千冬がそんな事をするとは思えない。

千冬が振り返り、眉をひそめた状態で口を開いた。

「言っている意味がよく分からないが……。　まぁ、私はアレを叩き斬りに行く。　お前は隙ができたら構わず撃て……。」

そう言うとアリーナを見る。

「まぁ、味方撃ち（フレンドリー・ファイア）なんかしてくれるなよ。」

そして手を掲げる。

持っていた物は、よく分からない。

掲げた瞬間に、それが発光したのだから。

皆の目が白い光に覆われる。

そして、それが収まった時目を見開いた。

白い騎士がいた。

「十年ぶりの戦場だ……。　ミサイル（あのとき）とは違う……。　敵を切りに行くぞ……白騎士。」

そう言いながら大剣を構えた。

千冬の言葉に全員が目を見開く。

伝説の白騎士が目の前にいたのだから。

これにはセシリアも驚いた。

だが自身のすべきことを思い出し、ブルー・ティアーズを起動させる。

その間にも、千冬は精神統一しながらシールドを見る。

「零落白夜・零と雪片（ゆきひら）・真打（しんうち）を起動。」

その言葉に大剣……雪片・真打が左右に割れ、刃が変形する。

大きかった刃が、刃に収納され次第に小さくなっていく。

そしてその間から、ＩＳの半分の長さのエネルギー刃が展開された。

「行くぞっ！」

言うと同時に、白騎士の剣がアリーナの遮断シールドを紙のように裂いて行く。

その光景を生徒は目を丸くして見ていた。

「一閃……白鷺（しらさぎ）……。」

そして白騎士は、を振った勢いを殺さずにピットを蹴った。

セシリアも驚きながらそれに続く。

そして、アリーナの遮断シールドが修復する瞬間に二人は入り込む。

すると丁度目には、一夏が誘導兵器を相手にてこずっていた。

「オルコット……。　無理だと思うが、目標（ターゲット）はあの誘導兵器だ。」

セシリアは少し呆れた。

白騎士の出現にも驚いたが、千冬の行動が全ての元凶だ。

ため息をつきながら、全員の死角に移動する。

セシリアを見ることなく白騎士は、一夏に向かってイグニッション・ブースト（瞬時加速）で接近する。

灰色の機体がビームサーベルを展開する。

それを見て、限界までスラスターを展開する。

イグニッションブースト中にそんな事をしたら、骨が何本折れるか分からない。

だが、千冬は何も感じなかった。

改良された白騎士は全身装甲となっており、さらにその装甲全体にトランスフェイズ装甲を装備している。

フリーダムにあった情報を使い、リリィが付けたのだ。

これで実体剣や実態弾、さらに身体にかかるGをほぼ完全に消すことができる。

実際今白騎士が出している速度は、確実に中の搭乗者がミンチになる。

だが、千冬は怪我すらも負ってない。

エネルギーはかなり食らうが、小型半永久機を搭載しているため徐々に回復はしている。

まぁ元のエネルギー値からして、すぐにガス欠は起こらないだろう。

移動の間に、雪片・真打を後ろ腰にマウントする。

浮遊していた足まわりの装備は、雪片のマウントのため移動した。

そして、両腰に装備されている柄を引き抜き敵機の前に立ちはだかる。

鍔と刃が無い日本刀から、ビーム刃が刀のように伸びる。

敵機のビームサーベルと白騎士の雷刀・桜から出るビーム刃が交錯する。

「やれやれ、間に合ったか。」

そう言うと、ほっと息を吐いた。

０７４　戦場に舞い戻る白き騎士（後書き）

一閃、白鷺（しらさぎ）。

なんか技名だけ思いついたｗ

千冬が使えるから、リリィも使える技。

トランスフェイズ装甲。

カラー変化（ディーアクティブモード）は、白騎士には似合わない。

だからＴＰ装甲。

後の白騎士の詳細は……過去の活動報告にて……。

今回も訳の分からない文でした……。

０７５　白き騎士と黒き悪意（前書き）

……次で終わるかな？

終わらせたいね……。

０７５　白き騎士と黒き悪意

サーベル同士の競り合いも疲れたので、左手で光刀・暁を抜き敵を切りつけようとする。

だが、いち早く気がついた敵は後方に下がることで避けた。

「……白騎士……。」

鈴の声がアリーナに響く。

爆発の方が大きい音を出しているが、鈴の声は全員が聞こえた。

「織斑、凰。　お前たちはなるべく距離を取っておけ。」

顔は隠れて見えないが、確実に千冬だと分かる言葉だった。

「いいな、早くしないと死ぬぞ。」

「千冬姉だって！」

一夏が反論するが、千冬は敵を見る。

「お前たちとは、生きてきた年気も戦技も違うという事は言っておく。」

そう言うと光刀・暁と雷刀・桜の柄を繋ぎ、刀一対の武器とさせる。

アンビデクストラス・フォーム。

甲龍が所持する青龍刀の完成された形だ。

両方にビーム刃が展開される。

片手でそれを持つと、一瞬にして敵に接敵する。

右から薙ぎ払い振り切った所で、後ろの刃で刺す。

だが敵もそれを見越してか、スラスターを何度も小刻み使い機体を動かして回避する。

白騎士は刃を回転させると、片方のビーム刃を展開させるのを止めた。

両手持ちに切り替える。

ビーム刃の長さは、機体に似合うくらいの大太刀ほどの長さになっていた。

「貴様、何処から来た。」

千冬は質問をする。

だが返ってきたのは、誘導兵器の展開だった。

「っ！？」

距離を取りながら、小型の誘導兵器を展し最後に大型を展開させる。

「千冬姉！？」

一夏がそれを見て叫ぶ。

ビームが無数に白騎士に襲いかかる。

だが、白騎士は敵機と同じようにスラスターを小刻みに使い身体をずらす。

一条の光線が、その場所を貫く。

足を半分開き、回転運動しながらサーベルを振るう。

足の間に一条、振ったサーベルに一条ぶつかる。

回転運動の動きのままに、３６０度回転（バレルロール）をする。

頭が下に向くが構わず回転すると、回転中に一条通り過ぎる。

白騎士は全ての全方位攻撃（オールレンジ）を避けると、体勢を戻し接敵する。

「問答無用なら別に良い。」

そして間合いに入った瞬間、腕を振るう。

だが、やはり避けられる。

次の瞬間には、誘導兵器が攻撃をしてきた。

白騎士は上昇しながら回避する。

（面倒だな……。　というか誘導兵器の攻撃パターン……どこかで……。）

そう考えながらも回避をし続ける。

（なんだ……。　何処で……。）

誘導兵器が敵機に戻る瞬間、千冬はランダム移動で接近した。

右に左にと動き、灰色の敵機に近づく。

手に持つサーベルは、移動しても剣線を敵機から外さない。

そして間合いに入った瞬間、その剣で敵と突き刺す。

だが、避けられる。

千冬は口を釣り上げた。

「ニ閃、散桜（ちりさくら）っ！！」

そう言いながら、突き出したサーベルを回避した敵の足に向けて振る。

ニ閃散桜。

「一閃白鷺」の歩方斬撃とは違い、回避される事を理解したうえでの剣技だ。

散る桜の様に移動しながら、剣の軌道をほぼ分からなくさせてからの突き。

敵は咄嗟き避けるが、散る桜は動きが読めずと言わんばかりに追撃するという攻撃だ。

まぁ、名称は千冬が剣技を教わった時にそう見えた事からなのだが……。

果てしなくどうでもいい事だったりもする……。

ＩＳ装備の千冬にとって、「ニ閃散桜」は奥の手の剣技である。

「っ！」

だが敵は、楯からサーベルを伸ばし剣を防ぐ。

驚愕した。

散桜を防ぐのは二人目だったからだ。

すぐさま加速し直し、少し上昇しつつ敵機の横を駆け抜ける。

敵機の防ぎ方には余裕があった。

まるで散桜を知っているかのような防ぎ方。

その事に、千冬はまさかと思った。

だがまた誘導兵器の攻撃が始まり、その思考は頭の片隅に追いやら

れた。

０７５　白き騎士と黒き悪意（後書き）

第五世代該当機体

名称／白騎士

通常装甲可能／全身装甲可能

単一仕様能力／零落白夜・零

特殊システム／小型半永久機関搭載
アンビデクストラス・フォーム（連結システム）
ビーム兵装
トランスフェイズ装甲
シールドエネルギーシステム
ビームシールド

雪片（ゆきひら）・真打（しんうち）　×１
近・中距離装備
後腰収納可能

初期白騎士が所持していた大剣。
だが刃が左右に展開したりするなど、追加機構増えた。
刃を変形させる事により、エネルギー刃を展開したり、中距離攻撃などができる。

変形させずとも、エネルギー刃の展開は可能。

雷刀（らいとう）・桜（さくら）　×１
光刀（こうとう）・暁（あかつき）　×１
収納近距離装備
常時腰装備

ビームサーベルを目指した、エネルギーやビームを展開させる事の出来るサーベル。
展開時は、日本刀……大太刀ほどの長さになる。
出力調整で、小立サイズに変更は可能。
アンビデクストラス・フォームを再現した兵器。

踏刀（ふみがたな）　×２
隠し近接装備
暗器足装備

手が使えない場合の足用の武器。
足の先端にエネルギー発生機器が付いており、二百七十度のブレード展開が可能。
フリーダム内に存在していた、ＧＡＴ－Ｘ３０３のシステムを流用。
腕にも付けようとしたが、問題があったため足だけとなった。

束とリリィが合作したら……多分こうなる……。

チート機体だね……ｗ

白鷺（しらさぎ）の次に散桜（ちりさくら）なんて、微妙に痛い名称の剣技名が登場した……。

……剣技名が決まって、流派名が決まらないって……ｏｒｚ

０７６　千冬の疑念と敵機の技量（前書き）

ああ、ようやく終わりました。

クラス対抗戦での乱入イベント。

０７６　千冬の疑念と敵機の技量

千冬は誘導兵器の攻撃をかわしつつ、敵機の隙を窺った。

だが、思った以上に隙が無く回避優先と言う状態だ。

エネルギー消費のため、雷刀・桜を戻し光刀・暁だけ右手に持つ。

その刃はビームではなく、エネルギー刃。

実体の様な日本刀の形をかたどっていた。

「……。」

千冬は冷静に回避する。

だが心中穏やかではなかった。

気がついたのだ。

敵機の動き。

誘導兵器の運び方と使い方。

散桜を防ぐ事。

リリィだ。

リリィなら、誘導兵器を使いながら自身が戦闘に加わることも、散

桜を防ぐこともできる。

あの軌道に耐えられ、なおかつ千冬を凌駕する存在。

そう思うと、敵がリリィにしか感じられなかった。

だが、信じたくはない。

一夏を殺そうと振るった刃が。

確実に死止めようと配置され、放たれる光線を。

だから、千冬はリリィと考えずただの敵と考えた。

「……っ！」

だが、敵は千冬の苦手な誘導兵器の運びで翻弄する。

（やはり、リリィなのかっ！？）

十年前の訓練を思い出させるような攻撃。

誘導兵器を使いながら、回避場所に射撃をするその思考力。

接近しようとすれば、二門で進路をふさぎながら誘導兵器を最適ポイントに配置する。

千冬は一瞬考え、回避し続けその時を待つ。

（……避けてくれるなよ……。）

そう考えていると、敵機の後方から砲撃が迫る。

それは敵機の右肘をかすりながら大型ライフルを貫いた。

敵機は大型ライフルを投げ捨てる。

その瞬間に、大型ライフルは爆発した。

そしてその射撃が終わると、青い物が敵機を取り囲みながらレーザーを放ち続ける。

ブルー・ティアーズだ。

セシリアが戦後射撃をし、誘導兵器ブルー・ティアーズを展開させた。

やはりリリィみたく射撃と操作の両立はできないが、隙を作るのは十分だった。

むしろ良かった。

不意打ちで撃ったが、敵機を捉える事はできなかった。

だが、厄介な高出力ビームを発射する大型ライフルを仕留めたのだ。

千冬にとっては十分過ぎた。

ライフルを撃破された瞬間を狙い接近する。

「はぁぁぁぁ！！」

そう叫びながら全スラスターを展開し、イグニッションブーストを使用しないで懐に入る。

エネルギー刃をビーム刃に変え、上段から振り下ろす。

「ニ閃っ！　天魔（てんま）！！」

サーベルは弧を描くように振り下ろされ、敵機の突出した肩を切り裂いてゆく。

だがそれでとまるはずもなく、振り下ろした瞬間刃を転回させ切り上げた。

千冬が唯一リリィを打ち破る事のできた剣技。

夜空にかかる月の様に弧を描くが、その軌道は悪魔のように鋭く変わる。

そんな意味を持つ剣技だ。

サーベルが足を捉えようとする。

（殺（と）った！）

徐々に切りにかかる剣を眺めそう思った。

だが、そんな思いは数条の光線によって打ち消された。

「っ！！」

上空と前方から、誘導兵器がピンポイントでサーベルを撃ったのだ。

そのため速度と威力を落とされ、さらに起動もずらされた。

サーベルが敵機を捉えられず、空を薙ぐ。

セシリアがブルー・ティアーズ四基で援護するが、そのどれもが敵機の大型の誘導兵器一つに落とされる。

その光景はセシリアはもちろん、一夏や鈴、管制室にいた真耶と束、それに箒が目を見開き驚愕した。

たった一機に、束の最新鋭機体と第三世代機が圧倒されたのだ。

誘導兵器も精度と砲門、火力が予想以上。

全員に死という言葉が頭によぎった。

だが、敵機は上昇をし始め誘導兵器を一斉にシールドへ撃った。

シールドがまた破られる。

そこから敵機はあざ笑うかのように、白騎士を眺めながらアリーナから出て行き。

撤退した……。

０７６　千冬の疑念と敵機の技量（後書き）

おいおい……白鷺、散桜の次は天魔って……。

痛い痛い痛いよ～おか～さ～ん。

ばんそうこう持ってきて、人一人入るほどのばんそうこう持ってきてぇエぇエ！！！

痛すぎる……。

そして敵機＝リリィ？

まぁ、千冬の想像ですけどね……。

敵機については……ノーコメントで……。

それにしても、今回も意味不明な文だね……。

いつか、書きなおしたいよ……。

０７７　うやむやに終わる事件とリリィ（前書き）

一夏サイド書いた方が良いのかな？

どうせ大体が原作と同じだし、書く必要無いと思うけど……。

と言う事で、鈴編最終話（？）です。

２０話辺りで一区切りつくんだね……。

……はぁ。

077　うやむやに終わる事件とリリィ

「篠ノ之博士……あの機体は……？」

管制室に真耶と千冬と共に束が、先の戦闘を見ていた。

そしてモニターには敵機が射撃体勢で映っており、映像は止まっていた。

「う～ん、分かんない♪」

束は真耶の問いに、そう返した。

笑顔で口調はおどけているため、真耶は束を不審に思った。

千冬の目にはそう映らなかったが。

束の顔はいつも通りだ。

だが、その目は初めてリリィに……フリーダムにあった時と同様の目をしていた。

興味と畏怖……。

何を畏怖しているのか、何に興味を示しているか分からない。

だが今回の出来事は、束が作ったシナリオではない事は確かだ。

千冬はモニターを見て思った。

フリーダムに似ていると。

頭部も、カメラアイも。

関節の駆動系も、武器の性質も。

全てが一致する。

もしリリィが作った物なら理由は判明する。

だが……千冬自身、リリィが作ったとは思えなかった。

あんなおぞましい物を、作ったなんて……。

なにより、搭乗者がリリィだとは思いたくない。

そう思った所で、ふと思い付く。

「そういえば、束。　リリィはどうした？」

今日姿を見かけてないリリィを思い出し、束に聞く。

真耶も「あ、そう言えば……」といい、気がついたようだ。

せめて何処にいるか、何をしていたか教えてくれ。

証明してくれ。

千冬の頭はそれでいっぱいだった。

「今日は、訳の分からない偉い馬鹿に会いに行ってるんだよ～☆」

束は笑顔でそう言うが、その言葉の意味が分からなく真耶は首をかしげる。

「あ～、誰だそれ。」

訳の分からない言葉に、千冬はこめかみを押さえる。

後少ししたら、キレるだろう。

特に血管と、千冬の理性が……。

偉いと馬鹿。

なんだその組み合わせは……。

天才と馬鹿と言う組み合わせは、目の前にいるが……。

「あ～、名前は忘れた。　興味無いし。　確か……国際ＩＳ委員会に何かを渡しに行くって言ってたけど……。」

顎に人差し指をあてて、思い出しながら喋る。

国際ＩＳ委員会。

国家のＩＳを保有する数や動きなどを監視する組織だ。

ＩＳ条約に基づいて作られた組織で、ＩＳ関連組織のトップだ。

「どうして、そんな所に……。」

真耶はその事に驚くと、理由を聞いた。

「いっくんの搭乗記録と、データーの提出だね☆」

またも言葉足らずで、真耶は首をかしげる。

だが、前にリリィは言った。

一夏の情報を提出すること、と。

「つまり、リリィは無実であると？」

「うん☆」

千冬の言葉に束は笑顔でうなずいた。

少しほっとした。

だが千冬は不安がぬぐいきれないのか、固定回線で通話しようとした。

国際ＩＳ委員会に問い合わせれば、事件時にリリィがそこにいたかは分かる。

とりあえず何よりも優先すべき事だったので、固定回線で連絡を取る。

男が回線を取り、会話に応じた。
千冬は完結的に内容を話す。
リリィがそこにいたかを……。
結果はリリィはそこにいた。
だが、不明な事が多い。
男の発言がどうも怪しいのだ。
言葉が途切れたり、何かを考えた様に言葉を止める……。
……何を考えている……。
リリィがいないならいないで良い。
だが、なぜ含みのある喋り方をする。
まるで、何かを隠しているかのように……。
その通話が終わった後も、千冬の中の疑問は薄れる事は無かった。
「まぁ、リリィさんは何も知らないという事で……。」
真耶の言葉に、千冬はため息をつき頷く。
束は怒りながら「何リリィちゃんを疑ってんの」と言っていた。

だが、もしそうならあの中には誰が乗っていた。

千冬の剣を防ぎ、誘導兵器を自在に操るあの搭乗者は何者だ……。

そして、束が事件前に何かを良いかけていた事を思い出す。

束が考えていたシナリオはなんなんだ……。

全てが謎に包まれたまま、事件は終わって行った。

０７７　うやむやに終わる事件とリリィ（後書き）

肩が痛い……。

首も痛い。

眠い。

こんな駄文で、みんな満足？

私は……やだね……。

だったら、真面目に書けよってｗｗｗ

とりあえず、次回あたりからシャルロッ党が……おっと、シャルロットとラウラが登場します。

何故、アニメはシャルとラウラの転入日をずらした？

０７８　疑いとリリィと現実（前書き）

……更新速度が下がってるよっ！

何やってんのっ！！

Ａ，仕事です。

078　疑いとリリィと現実

「で、これはどういうわけ？」

「なに、お前はただ答えてくれればいいさ。」

とある部屋……まぁ、指導室って書いてあったけど、そこに束と千冬と一緒にいます……。

どうも、リリィです。

凄い威圧感を放ってる、悪魔が目の前にいます。

ええ、悪魔です。

帰ってきた私を、すぐさま捕獲するという悪魔です。

疲れたから寝ようと思った私を、寝かせようとしない悪魔がいます。

「なんか言ったか？」

「いいえ何も。」

しかも、凄く感が良いです。

迂闊な事は喋れません……。

思う事も出来ません。

ええ……。

「とりあえずだ、お前8時間前は何処にいた。」

「え～と、ＩＳ委員会の人たちの前？」

……いきなり何を言い出すんだ？

首をかしげながらそう言う。

「そうか……。」

そう言うと、千冬はほっとしたような悩んでいる様な複雑そうな顔をした。

「なら、この機体に見覚えは？」

そういうと、モニターを映した。

そこには灰色の機体が映し出されていた。

リリィはそれを知っていた。

「ＺＧＭＦ－Ｘ１３Ａ……。」

その言葉に、千冬は目を光らせた。

無言で、この機体について話せと言っている。

リリィは一息つくと、口を開いた。

「ＺＧＭＦ－Ｘ１３Ａ　プロヴィデンス……。　形式番号から分かるように、フリーダムと同型機体。」

その言葉に束は驚き、千冬は納得したかのように目を細めた。

「機体にはフェイズシフト装甲を使い、エネルギー切れもなし。有り余るエネルギーをビーム兵装に使い……白騎士で勝てるかどうか……。」

その言葉に千冬は目を細めた。

「……勝てるかどうか、か。」

笑いながらそう言った。

「私がこの機体と戦うと……どうして思ったんだ？」

その言葉にリリィは首をかしげ、眉をひそめる。

「まるで、この機体が稼働して戦闘をしているようにお前は言うな……。」

千冬の言葉に、束は目を見開き聞いた。

「そして、私が戦うように……。」

その言葉に、リリィは静かに目を閉じた。

無言であるデーターを千冬の白騎士に転送する。

そして部屋を出た。

「ち～ちゃん……。」

束が不安そうに千冬の名前を呼ぶ。

千冬の頭では、今回の事件の首謀者はリリィだと考えていた。

束は何も知らない。

長い付き合いだ。

束の行動や表情なんかを読みとれなくて、何が幼馴染だ。

結果として、束は今回の事件に関わっていない。

だがリリィの言動や知識は、可能性として今回の事件に関わっていると思わせた。

だが、千冬はまだ何かがあると考えている。

「束……悪いが、リリィがいたと思われるＩＳ委員会の監視カメラ……。　全部ハッキングしてリリィを探してくれ……。」

ため息を吐きながらそう言う。

言動や敵機の性能からしてみれば、リリィが犯人だ。

だが、千冬の感はリリィが犯人ではないと感じていた。

「あいつが……リリィが、無実だと……調べろ……。」

千冬は束と同じくらいに、リリィを信じているのかもしれない。

言葉が途切れ途切れになる。

その言葉に束は頷き、もの凄い速度でモニターを使ってハッキングをし始める。

無言が部屋を包み込む。

動いているのは、真剣な表情の束だけだ。

千冬は祈るかのように頭を押さえこんでいる。

束はハッキングが終わったのか、モニターから手を話した離した。

「束、どうだった？」

顔を上げた千冬が見た物は、驚愕した束の顔だった。

千冬はモニターを覗き込む。

そして、それを見た瞬間口を開いた。

「束……。　データーをコピーして、これを消せ……。」

「もうやってる……。」

別のモニターがコピーが完了したと映し出す。

そして、束はオリジナルの監視カメラのデーターを誰も見れないように消した。

「……嘘……だよね。」

束は作業しながら、そう言った。

千冬はコピーした映像を見ている。

そこには、灰色の悪魔……プロヴィデンスが映っていた。

０７８　疑いとリリィと現実（後書き）

……まぁ、もし関連性が上がったらリリィは再度指名手配犯～というか、容疑者。

次回から、原作二巻に突入。

そして……７０万アクセスって……。

皆何やってんの……。

０７９　信じさせて（前書き）

ども、作者は朝から≪ＡＮＩＭＥＬＯ　ＳＵＭＭＥＲ　ＬＩＶＥ２０１０　－ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ－≫を見ていますｗｗｗ

だから、今日の更新遅い……のかな？

そして前話で、次から原作二巻始まりますと言って申し訳ありません。

なぜか、方針転換で一話入れさせていただきました。

次回こそは……。

と言う事で、意味が不明になっている七十九話です……。

079　信じさせて

部屋に戻ったリリィはベットに倒れ込んだ。

（……何があった……。）

そう頭の中で考える。

千冬の目が自身を疑っているかの目立ったのを思い出し、さらに思う更ける。

（……何が起きたんだ。）

そう考えながら、寝がえりを打つ。

プロヴィデンス。

あの情報はフリーダム内にしか存在しない。

色々考えるが、明確な答えが出るわけがなく……。

いや、仮説はできたが……ただの仮説だ。

答えではない。

（やめた……。）

リリィは不可解な事への思考を止めた。

そのまま、深い眠りにつこうとし体勢を変える。
目を瞑り、深い海に沈み込むかのような眠りにつこうとした。
深い、深い、眠りに……。
「……リリィ……。」
「束？」
その声と同時に、リリィの身体に何かが乗っかった気がした。
目を開ける。
やはり束だ。
リリィに跨って、顔を覗き込んでいた。
「ＩＳ学園に来て初めてだね……。　真面目に私の名前を読んだの、は……。」
ちゃん付けせずに名前だけで読んだのだ。
その状態の束は、リリィにとって苦しく映る存在だった。
「……なに……怯えてるの？」
そう言いながら、右手を束の頬に持って行く。
表情はあまり変わらない。

だが名前だけで呼んだ場合、束は不安がっている時だ。

この十年、一度も見せた事の無い顔。

最後に見せたのは、白騎士事件のすぐ後だ。

日本……いや、世界中の欲に塗れた人間から逃げるとき……。

それが、最後に束が不安を見せた日だった。

「……私は……信じても良いんだよね……。」

おどけた口調ではなく、真面目な口調。

悲しそうな言葉は、主語が無く意味を成さなかった。

「大丈夫……、大丈夫だから……。」

だがリリィは束をの腰を引き寄せ、抱きしめながらそう言った。

何が不安なのかは、まだよく分からない。

けど、先ほど思いついた仮説に、今の束の状態を当てはめると理解ができる。。

もしかしたらと思ったが、今の束に言葉は意味を成さない。

何を言っても無駄だ……。

だからこそ抱きしめた。

言葉なんか不要だ、と言うように身体を抱きしめたのだ。

「……大丈夫だから……。」

そう言って、抱きしめながら背をさする。

不意に束が少し起きあがる。

両手をリリィの横に置き、身体を少しだけ浮かしてリリィを見つめる。

その目には、少しだけ寂しさの色が混じっていた。

「なら……信じさせて……。　ずっと……ずっと……。」

その言葉と共に、束の顔がリリィに近づく。

そして口同士が触れ合った。

束はリリィの口に舌を侵入させ、激しくリリィを貪った。

リリィは、ただそれを受け止めた。

束の気が済むまで。

何度でも、何度でも……。

「いや～☆　ご迷惑おかけしました～♪」

そう言いながら束は、起きあがる。

キスを初めて二十分ぐらいたっただろうか。

信じようとしたのか、長い間キスをしていたのだ。

行為に移ってもおかしくは無い。

だが、キスしかしなかった。

「まぁ、束が落ち着いたなら別にいいよ。」

そう言って、再度横になる。

時刻は真夜中だ。

眠い中キスをしていたからか微妙に覚醒はしているが、人間の三大欲求である睡眠には勝てないようだ。

キスも三大欲求にウチに入るが、リリィにとっては睡眠が優先だっ

た。

大きなあくびをする。

「寝るか……。」

「うん☆」

そう言って、部屋から電気は消えた。

同じベットに束は潜り、リリィに抱きつく。

何かにすがるような感じで、リリィの服を掴む。

そしてベットに一つの山を作り、二人は夢と言う池に落ちて行った。

０７９　信じさせて（後書き）

ようやく原作一巻が終わりました。

それにしても長かったですね……。

二十九話辺りから原作開始だから……五十話？

一つの巻終わらせるのに、五十話ですか……。

まぁ、一話一話短い文ですし……多くなるでしょうね……。

ちなみに、一話３ｋｂ以上です。

→これ、作者の目安ｗｗｗ

作者は副音戦で、一旦のシナリオの区切りを目指しています。

ああ、終わるってことじゃないよ。

オリジナルシナリオをそこで、一旦そこで終わらせるという事です。

ちゃんとそのあとも続くよ。

うん。

ただ、福音戦は厨二病……かな？

オリジナルストーリー満載になると思います……。

今ばらしていいのかな……？

まぁ、良いでしょう……。

一応、目指すは福音戦です。

なんで、このあとがきだけ長いかって？

なんとなくですよｗｗｗ

みんな～。

こんな駄文で楽しめてる～？

楽しめなくて良いよ～ｗ

そんな感じで、これからも宜しくお願いします。

０８０　休日の朝と五反田食堂（前書き）

ようやく原作二巻開始です。

タイトル通り五反田兄妹登場、前編ｗ

０８０　休日の朝と五反田食堂

柔らかい感触と共に、リリィは目を覚ました。

事件の後処理とかで忙しかったからか、その感触から逃れられない。

少し腕にしびれを感じたため、リリィは目を覚ます。

束の寝顔。

それは良い。

手が触っている物に、少し嫌悪した。

（……私ってやつぁ……。）

そう思いながら、手が触っている物を凝視する。

胸。

束の右胸を、わし掴みにしていた。

うん。

触り慣れてるとは言え、目覚めて早々触ってる状態は久しぶりだね。

このまま、束が起きるまでこの状態でもいいけど……。

そうすると、行為に移行しそうだしな……。

これでも二人とも教職員だし……。

朝から盛ったら、多分夜まで盛り続けるだろうしね……。

けど、今日は休日。

盛っても問題は無い。

とりあえず、手を離して起きようか……。

「……ん……？　リリィ……ちゃん……？」

そう行動しようとしたときに起きましたよ、束は……。

別に困らないけど……。

「ん？　……ヤル？？」

束が胸を触っている手を見て、寝ボケながらそう言った。

「……別にいいけど。」

結局は断れない日本人らしく、流されました。

こんなときに限って、悲しいね……。

「んじゃぁ……。」

そう言いながら、顔を動かしキスをする。

胸を触ったままの手を動かし、束を気持ちよくさせた。

被さっているシーツが、束の反応に跳ね上がったりする。

行為を朝からお昼近くまで続け、気分転換に外食に出かけた。

もちろんシャワーも一緒に浴び、再戦もした。

……猿だな～……。

付き合い始めて十年。

未だ付き合い始めた時と変わらない状態を保っている。

いわゆるバカップルと言うやつだ。

第三者してんだと、行きすぎた女友達にしか見えないだろうが……。

少し買い物をした後、近場にあった五反田食堂に入る。

束にとっては少々きついだろうが、気分転換にはそのきつさは良いだろう……。

多分……。

近くに準備中と書かれた看板が畳まれていたことから、さっきまで準備中だったのだろう。

戸を開けて店に入ると、お客さんが結構いた。

相席で良いかと思い、三人が座っているテーブルに座る。

「おじさ～ん、この店のお勧め二つね～。」

そう叫んで注文しておく。

「え？」

その声に、隣に座っていた人が反応した。

横を振り向くと見知った顔があった。

「あれ？　いっくん？」

束も気がついたのか、その人物……一夏の名を呼ぶ。

一夏が、見知らぬロン毛男とこれまた美少女と共に昼食を取っていた。

……これを箒に見せたら、一夏は死ぬね……。

「どうしてこんなところに？」

「一夏こそ、どうして？」

そう不思議そうな顔をしながら、会話をするとロン毛男が一夏を連れて席を離れた。

そして店内の角で話し始める。

「……おい、一夏……あれ、お前がいつも持っていた写真の二人だよな？　ＳＳＳ（トリプルエス）ランクの極上じゃねぇか！！」

小声で話してるつもりなのだろうが、結構普通の声だ。

聴力の良いリリィにとっては、聞こえない距離ではないし声でもない。

戻ってきた一夏を、少し軽蔑の眼で眺める。

その目に、一夏は一瞬ひるむ。

「一夏……ストーカー罪で訴えて良い？」

その言葉に一夏は思いっきり首を振った。

まぁ、訴える気はさらさらないが。

「別に写真を持つなとは言わないけど……、他人も知ってるほど見てるのは流石に引くよ……。」

その言葉に、ロン毛男と少女は顔色を変えた。

男は、会話が聞かれていた事に……。

少女は、一夏の行動に顔色を変えた。

「あの時は知らなかったから……。」

一夏は言い訳のように、そう言った。

そして黒歴史を掘り返され、少し暗くなった。

０８０　休日の朝と五反田食堂（後書き）

さて、ようやく一冊終わったからこの調子でどんどん行くか♪

と書いて、少しペースが落ちてるんだけど……。

問題無いよね？

うん。

さて、早めに聞いておこうかな。

やっぱ、止めよ……。

まだ先の事だし、いつか決まるでしょ……。

０８１　五反田食堂に絶叫を（前書き）

……あれ？

後編の予定が、中編になった？

０８１　五反田食堂に絶叫を

「ところで……一夏さん……。　こちらの方は？」

「ああ……ＩＳ学園の先生。」

女性の質問に一夏は簡潔に答えた。

その答えに、少しばかり目を丸くする。

主にリリィを見て……。

「何？」

その視線が気になったため、聞いてみる。

すると、突然首を振りながら焦り始めた。

「あの……おいくつですか？」

ロン毛が恐る恐る聞いてくる。

少女も頷いていることから、どうやらこの年で教師と言う事に驚いているのだろう。

「十七だよ。」

別に教えても困らないので、答える。

「わ、若い……。」

「わけ～な……。」

二人の反応は同じものだった。

よく見ると、似たような容姿をしている。

……兄妹？

「あ、はじめまして！　五反田蘭っていいます。」

「あ、五反田弾いいます！　一夏にはお世話になって……。」

そう言って自己紹介してくる。

だが、弾の方が少し怪しい喋り方だった。

まぁ、気にしたら負けだよね。

「ああ、ご丁寧に……。」

そう言って、来た定食に箸を進める。

他人嫌いスキル発動。

無視をし始めた。

「あ～、悪いな。　他人とあんまりしゃべらない人たちなんだ。」

一夏がそう言って説明する。

「そうなのか？」

弾が首をかしげながら聞き返す。

「あ、あの、一夏さん……この人、は……。」

そう言って蘭はリリィを見る。

「ああ、リリィか？」

そう言うと首を楯に何度も振った。

「リリィは……。　う～ん？　最強の人？」

一夏が言葉を選ぶが、意味の分からない言葉になる。

「なんだれそは。」

もちろん意味が通じず眉をひそめるのは、聞いていた人間だ。

蘭はリリィを睨みながら観察するが、本人は気にしない。

束と一緒にご飯を食べ続ける。

「まぁ、千冬姉の師匠らしいぞ。」

その言葉に、食堂にいる全員が目を見開く。

「千冬さんのって……、あの最強で怖いお前の姉さん事、織斑千冬の！？」

弾が驚いたような声で質問する。

「ああ。　千冬姉……顔には出さないけど、マジで尊敬してた……。」

その言葉に食堂全員の顔がリリィを見る。

「あと、今の千冬姉を作ったのもリリィらしいぞ……。」

その言葉に、全員が驚愕しながら冷や汗を垂らす。

弾は呆れながら口を開く。

「おいおい……マジかよ……。　嘘じゃなくて……？」

「マジだ。」

弾の言葉を一夏は即答する。

「今、放課後に訓練を見てもらってるんだけど、千冬姉が強くなったのがよく分かるよ……。　強いし上手い、なにより本気で怒鳴ると千冬姉より怖い……。」

その言葉に、完全に苦笑いしかできなくなる。

「……負けない……。」

蘭がそう呟くと、リリィは片眼を開けて口を開く。

「まぁ、負けない気は結構。　だけど、私は一夏争奪戦に参加してないよ。　と言うか、出来ないし、したくない。」

その言葉に、一夏と蘭は首をかしげる。

反対に弾は目を見開き、声をかけようとしたがリリィの言葉に口を止める。

「だって私、男だから。」

その言葉を聞くと同時に、店が沈黙した。

厨房にいたおじさんも、腕を止めている。

「……なんだ……って……？」

弾が壊れたロボット見たく口を開く。

「だから、リリィは女じゃなくって……男だ……。」

一夏が代わりに答える。

その言葉にリリィを見る。

「胸あるぞ……。」

弾がそう言うと、店内の空気は元に戻った。

だが、一夏がそれを壊す。

「それパットだぞ……。　外してる所見た……。」

その言葉に再度店は固まる。

「「「「「「「「「「なんだってっぇぇぇぇ！？！？」」」」」」」」」」

絶叫が店内を包み込む。

その間にも、リリィは食べ終わる。

束も食べ終わる。

０８１　五反田食堂に絶叫を（後書き）

なんだってぇぇぇぇぇ！！

ラウラとシャルの出番が遅れるだって！？

え？

道路が渋滞！？

んなことはどうでもいいから、さっさと本編に……。

え？

またオリイベあんの？

おぃぃぃ！！

０８２　休日と驚愕と何か（前書き）

最近思う。

ウチの束は束じゃない……。

誰だ、こいつ……。

０８２　休日と驚愕と何か

全員が驚く中、束とリリィはいつも持っている耳栓を付け音を排除した。

だが、リリィにとっては意味を成さなかった。

聴力がよすぎるのも、問題だ……。

「え、マジで男!?」

そういいながら店内にいた人間が詰め寄る。

だが束が殺気を放つため一定以上近寄れない。

一夏がそれを見て、少し笑った。

「あ～、束さんはリリィが絡むと怖いぞ？」

そう言って、束を見る。

ウサミミが尖って他人を威嚇しているように見ていた。

「……男に負けた……。」

蘭だけが、この場で落ち込んでいる唯一の人物だろう。

弾がこの場の空気を変えようと一夏を見て口を開く。

「そ、それはいいとして……こちらのお姉さんは？」

そう言って束を見る。

「あ、幼馴染……　え～っと、弾には話した事あるよな？　ファースト幼馴染……箒の姉さんだ。」

「ああ、鈴の前のか……。」

そう言って納得したように束を見た。

「えっと……名字はなんでしたっけ？」

蘭も知っていたのか、一夏に聞く。

「篠ノ之だよ。」

その言葉に再度店内に沈黙が訪れた。

束は席を立ち、リリィに近寄る。

リリィは椅子を引き、そこに束は座った。

その行動に意味はないだろう。

ただの、バカップルの行動だ。

「やっぱ、束さんは相変わらずだな～。」

一夏は束を見て笑いながらそう言った。

「篠ノ之……束……。」

「え、マジ！？」

「あの一夏さん。」

店内がざわつき始めた。

蘭がそんな中一夏の名前を呼ぶ。

「もし間違っていたら、笑って「何をばかな事を言ってるんだこいつ」とでも思ってください。」

そう言うと店内は静まる。

「もしかして……篠ノ之束博士？」

「ああ、そうだけど。」

蘭の質問に、当たり前のように返答した。

「えっと、ＩＳの開発者にして生みの親の……。」

「ん？　なんだい？　この束さんに用事かな☆　まぁ、私には用事無いけどね♪」

すると目線が気になったのか、束は口を開く。

それだけで大半の人は顔をそらす。

人間は見ている者に反応されると気不味くなり、顔をそらす習性がある。

しかも、特殊な人間なら確実に気不味くなる。

日本人の大半は、そんな物だ……。

「……あと、生みの親って言うのは語弊があるね～♪　基礎を作ったのは私だけど、リリィちゃんがいて、ようやく完成したモノなんだから♪　アレは☆」

そう言って立ち上がる。

「行く……？」

「うん☆」

そう言ってリリィは立ち上がり、会計をして店を出て行った。

店内は、呆然としたお客さんが取り残された。

「一夏……。　俺の頭は壊れてるのか？」

「お兄……。　そんなこと言ったら私の頭だって同じだよ……。」

その言葉に全員が頷いた。

ただ、一夏だけが分からなさそうに首をかしげていた。

「あ、サインもらうの忘れた。」

そんな言葉を客の誰かが言った。

ちなみに、割り箸が何本か折れて落ちている。

店内は、「嵐が過ぎた静けさ」という言葉が似合う状態だった。

「で、これからどうする？」

店から出たリリィ達は、午後の行動を考えていた。

「う～ん、箒ちゃんと紅椿の実験でもする？」

束は悩みながら、そう言った。

紅椿も調整が終わっており、九割方完成していた。

残りは箒の腕で完成させるしかない。

なんせ、搭乗者の腕が紅椿の完成を促すのだから。

休日だが、やっておいて損は無い。

「んじゃぁ、帰るか……。」

「そうだね～☆」

そう言って、ＩＳ学園に足を向ける。

（あ、セシリアのＩＳ……改造しとかないとな……。）

リリィはセシリアも探す事を考える。

やがて二人は、雑踏に姿を消した。

０８２　休日と驚愕と何か（後書き）

……作者眠いです。

８時間寝たけど、まだ眠いです。

多分次回は、ＳＨＲだけですがシャルとラウラは登場するでしょう……。

たぶん……。

０８３　スーツと真耶の愛称（前書き）

……あああああああ。

なんで、ＳＨＲ前で止まった！！

何故だァァァ！！！

０８３　スーツと真耶の愛称

「やっぱりハヅキ社製のが良いなぁ。」

「え？　ハヅキってあのデザインだけの？」

「そのデザインが良いんじゃない。」

「え～、私はミューレイのが良いな～。」

「あれ高いじゃん。」

朝教室に入ると、女子たちが集まってＩＳスーツの話題をしていた。

今さらだが、ＩＳスーツにはＩＳの性能をよくする理由がある。

今のＩＳスーツを開発している会社は、儲けようと性能が良いのを作ったりする。

だが反対に、設けるために性能を排除した服と変わらない、お洒落スーツとして販売している会社の方が一番多い。

開発者として、結構悲しい事だ。

「そういえば、織斑くんのＩＳスーツってどこの？」

女子の一人が一夏に気がつき、質問する。

確かに、女子が使うタイプと違う物を一夏は使っている。

その事に気がついたのだろう。

「これ？　知らないけど、特注だって。」

一夏がそう言うと、皆納得した。

ＩＳは基本女性しか動かせないのだ。

そのため、ＩＳスーツは女性用しかない。

男性に女性用を着させるのは、色々と不味い。

そのため、一夏はオーダーメイドの特殊なスーツを着ている。

「……義兄さん……。」

箒が何か気がついたのか、リリィを呼ぶ。

なぜか「義兄さん」と呼び方が固定した。

まぁ、クラス全員が納得しているから仕方がない。

白騎士事件後、リリィは束を守るために共に逃げ、そして十年間逃げ続けながら愛を育んだといったら、全員号泣しながら納得した。

思うが、このクラスの生徒は感情が不安定すぎないか？

こんなことで無くとは……。

「どうした？」

とりあえず、リリィは返事をする。

「もしかして、一夏のスーツ……。」

「え、ああ。　私が作ったのだけど。」

箒が言いたい事を理解したのか、リリィはそう言った。

納得したような顔になる箒。

「ええ！？」

「リリィさんの製！」

「いいな～！！」

それとは対照に、生徒は騒がしくなる。

「そうだったのか……。」

一夏は自身が使っているスーツを作った人間に納得し、席に向かった。

「あと、箒のも私が作ったな……。」

「ええっ！？」

リリィは更に爆弾を落とす。

白式と紅椿は、正規の機体ではない。

リリィにしてみれば白式などが正規の機体のなのだが、国家基準で行ってしまうと正規ではないだろう。

まず、国家が持つＩＳとは構造と作り方の次元が違う。

それなのにＩＳスーツだけ、共通のを使わせると故障などの原因にもなる。

そのため、リリィ達が作ったＩＳはスーツも共に作られている。

ちなみに言うと、千冬の白騎士用にもスーツはあるのだが、ほぼフリーダムと同じタイプなので着る必要が無い。

スーツが意味を成さない機体だからだ。

「ＩＳスーツは肌表面の微弱な……。」

真耶がそういいながら、リリィに近づいてくる。

だがリリィは時計を見て口を開く。

「おっとＳＨＲだね……。　山田先生……。」

その言葉と共に、予鈴が鳴る。

真耶は肩を落とした。

「ううー……。」

今にも泣きそうな声を出す。

その声を聞き、生徒は真耶に近寄る。

「元気出して山ちゃん。」

「山ピー、ガンバ。」

ちなみに、入学して二カ月。

真耶には十近くの愛称が付けられた。

それだけ親しみやすいという事なのだろう。

それに比べリィや束、千冬などには「さん」や「博士」、「先生」などが最後に付く。

別にそれほど気にしてはいないが、ちょっと気になる。

「教師をあだ名で呼ぶな。」

真耶の周りを見てか、千冬が教室に入ってきた。

やはり担任は凄いという事だろう。

全員が三秒以内に自身の席についた。

この場合、担任と言うより怖い存在なのだろうか。

そう思いながら千冬と一緒に来た束に近づく。

０８３　スーツと真耶の愛称（後書き）

……ええと、次回になります。

しかも、セリフがシャルとラウラ……お互い一言だけ。

……シャルロッ党の皆さま、本当に申し訳ありません。

あ、ラウラ党の方も……。

ラウラ党の謝罪がナゲヤリｗｗｗ

まぁ、頑張りますｗ

０８４　天才同士の転入生話題とその影（前書き）

……熱いですね……。

ええ、本当に暑いですね……。

そんな今日の気温……。

０８４　天才同士の転入生話題とその影

「リリィちゃん。　ちょっと……。」

束が小声でリリィを呼ぶ。

「どうしたの？」

首をかしげながら、リリィは返事をした。

その様子を見た千冬も近寄る。

千冬がため息をつきながら、リリィに小声で説明する。

「いや、転入生が来るのだが……。」

「キャラが濃いよ☆」

束がそう茶化す。

その言葉に千冬は頭を押さえながら、再度ため息をつき口を開く。

「安心しろ、お前ほどキャラが濃い奴はいない。」

「酷い！」

束の大きな声で、教室内はリリィ達を不審な目で見始めた。

真耶も首をかしげながら見ていたが、会話に加わる勇気が無いのか、

もじもじとしていた。

「で、転入生がどうしたの？」

リリィが転入生と言う事に不思議を持ちながら、質問する。

その言葉に千冬は出席簿から二枚の紙を取り出す。

「……一応これを見ろ。」

それを渡され、リリィは目を通す。

束はリリィみて「……分かる？」と聞いた。

隅から隅まで目を通す。

そこには転入生の顔写真と名前、経歴が書かれていた。

金の髪と銀の髪の人物。

「ああ、納得した。　あとは、本人を見て決める。」

リリィはそう言うと資料を千冬に返した。

だが千冬はため息をつくだけ。

「あと、もう一人も問題だ。」

そして資料を受け取らずそう言った。

何かおかしい事があったか？

そう思いながら再度資料に目を通す。

別に覚えているのだから、思いだせばいいのだが見る。

「ん……。　ああ、やばいやばい……。」

「どうしたの～？」

リリィが少しあわて始めた。

そしてセシリアを横目で見ながら口を開く。

「フリーダム信者が増えた……。」

その言葉に、千冬は少しばかり頭を悩ませた。

「やっぱり、お前か……。」

「ごめん……。」

千冬はリリィにそう呆れたように言った。

やはりというか、何と言うか。

リリィは過去に銀髪の転入してくる少女と会っている。

セシリア同様に……。

その時は千冬の様子を探ろうとして、少女と出会ったのだ。

少し助言をしただけで、他には何も起きてはいない。

そう考えると大丈夫だ。

信者も増えはしない。

そう思い、リリィは肩を落とす。

「まぁ、過ぎた事だ……。　山田先生、ホームルームを。」

切り替えようと、真耶にＳＨＲをするよう促す。

真耶はその言葉に我に帰る。

そして教壇に立ち、口を開いた。

「ええとですね。　今日は転入生を紹介します。　二名です。」

その言葉に、教室は歓声に包まれた。

なんな歓声の中、リリィ達は話し合いを再開させた。

「……なんで、分散させないの？」

「知らない☆」

束は知らないのが当たり前と言う風に言葉を出す。

「両方専用機持ちで、向こうが言ってきたらしい……。　織斑……一夏がいるクラスへと私がいるクラスへと……な。」

そんな束とは対照的に千冬が答えた。

その答えを聞くと、リリィは顔をしかめた。

「一夏って……。」

完全に呆れた。

データーを詳しく収集する事だろう。

だが、白式のデーターは国際ＩＳ委員会に月に毎回提出している。

意味がない事だ。

「向こうには別の思惑があるのだろう……。」

千冬はリリィの考えた事と同じ事を思ったのか、呆れながらそう言葉にした。

「どうぞ～。」

真耶がそう言うと、ドアが開く。

そこには、先ほどの資料に映っていた人物がいた。

「失礼します。」

「……。」

ブロンド髪の少年っぽい人物と、銀髪の有無を言わさぬ雰囲気を纏った少女が入ってくる。

それを見て、リリィは思った。

……誰だ……こんなシナリオつくった馬鹿は……。

そう思いながら、二人のを見てため息をついた。

横にいる千冬も束もため息をついた。

０８４　天才同士の転入生話題とその影（後書き）

ようやく登場……。

泣きたくなる厚さにやられながら、文字を打ってます。

頭もふらつくし……。

嫌な気温だね……。

０８５　二人の転入生（前書き）

ようやく登場だよ。

相変わらずの、リリィ無双。

文が意味をなしているかと聞かれると、意味をなしていない。

駄文ですｗ

０８５　二人の転入生

転入生の登場に教室は活気にあふれた。

「シャルル・デュノアです。　フランスから来ました。　この国では不慣れな事も多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします。」

そう言ったのは、ブロンド髪の資料上性別男性のシャルルだった。

その登場に一同静まり、また騒ぎ始める。

「男子っ！！」

「キタッーーーーーーーーー！！　しかもまたうちのクラス！！」

「美系っ！！　守ってあげたくなるような！！」

「ちきゅうに生まれてきて良かぁったぁぁぁ！！」

まぁ、一夏と千冬とリリィの再来だ。

五月蠅い声に、頭を悩ませながら「騒ぐな」と千冬が言うが、止まりはしない。

仕方なしに、リリィが静まり返る。

やばいと思った瞬間には、リリィの声が皆の脳天に直撃していた。

転入生も耳をふさいで、目を回していた。

銀の髪の少女は動じてなさそうだが、それでも必死に耐えているようだ。

足が少し震えていた。

そう観察しながら、シャルルを観察する。

（どう見たって女じゃん……。）

性別を偽っても、リリィの目はごまかす事はできない。

腰のライン、コルセットで出来る限り抑えた胸。

全体的なボディーバランスはパッと見、分からないだろう。

だが、天才にとってはそんなまやかしは通用しない。

どう見たってリリィ達の目には、女性にしか映らなかった。

「み、み、皆さん。　自己紹介は終わってませんからお静かに……。」

リリィの怒声被害者である、真耶がフラフラしながらそう言った。

全員が椅子に座り直し、何度も頷く。

そして全員の目が隣の少女に向かれる。

左目に黒い眼帯をしているため、全員彼女の印象は大佐だろう。

いつの軍隊の大佐ファッションだ、と言う突っ込みをしたいが突っ込みきれない。

本物の軍人さんだから。

ドイツ軍のＩＳ配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼ隊長。

階級は少佐。

本物の軍人だ。

（昔見た時は、悔しそうな顔ばっかりしていたのにね。）

そう思いながら、少女を見る。

「……挨拶をしろ、ラウラ。」

千冬が、少女……ラウラが喋らない事に業を煮やし言葉を放つ。

「はい、教官。」

その返答に千冬は頭を痛めた。

もちろんリリィも痛めた。

「ここでは織斑先生と呼べ。　もう教官でも何でもないのだからな。」

「了解しました。」

そのやり取りに全員が目を丸くする。

……なるほど、軍人のまま来たのか。

せめて生徒としての、日常を身につけて転入してもらいたかった。

ちなみに千冬はドイツに一年間、軍隊の教官として働いていた事がある。

たぶん、その時に千冬依存症になったのだろう。

……お～、怖い怖い。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ。」

そう言うと、再度沈黙が訪れる。

リリィは少し頭を書きながら口を開く。

「以上か？」

「以上だ。」

その返答にため息をつく。

その事に気がつかず、ラウラは一夏を見つける。

するとラウラの気配が変わった。

「貴様かっ！？」

そう言って手を上げ一夏に振り下ろそうとした瞬間、その腕が止まる。

ラウラの後ろ首から、汗が流れる。

（……なんだ、この殺気！？）

ラウラが感じるように殺気が金縛りのように、身体を抑え込んだ。

他の生徒は気がつかないようだが、ラウラは気がついた。

これに気づけるのは、この中では千冬と束くらいだろう。

真耶は少し感じ取れたのか、少し震えている。

「貴様、転入そうそう問題事を起こす気か？」

そう言ったのはリリィだ。

「なんだきさ……。」

「口を慎め、ボーデヴィッヒ。」

リリィの言葉に、何も言えなくなる。

全員が怯える中、ラウラだけは平然としていた。

だが内心、恐怖に震えていた。

「問題行動を起こすな。　いいな「はい」か「イエス」だけで答えろ。」

その言葉を無視して、ラウラは空いている席に座る。

皆が、恐怖する中真耶に言われシャルルも席に座る。

（なんだ、あの教官以上の殺気と威圧感は……！？）

リリィと千冬の事を知らないラウラは、そう考えながらリリィを見た。

（教官とあの人以上の人間がいてたまるか……。）

そう思い、尊敬する者のを思い出す。

青い翼の天使を。

０８５　二人の転入生（後書き）

さて、セシリアに続きラウラまでもリリィの……毒牙？？

にかかった？？

まぁ、良いです。

あ～、ラウラの眼帯てシナリオありましたっけ？

読んでないから、無いですよね？

まぁ、合っても無視するけどｗ

さて、ラウラはセシリア見たく尊敬（リリィに対して）で抑えるか……、それとも愛情にするか……。

どうしよっかねぇ？

０８６　教師リリィの性格は（前書き）

熱い、そして蚊がウザい。

蚊取りマットどこっ！？

０８６　教師リリィの性格は

「さて、今日は二組と合同で模擬戦闘を行う。　すぐに着替えて第二グラウンド集合。　では解散。」

千冬がそう言うと、朝のあの緊張が解けた。

「一夏がシャルルの面倒見て上げな。　一応男の子でしょ？」

リリィがそう言うと、シャルルが反応した。

「一応男の子」と言う単語に過剰に反応したのだ。

一夏に向かって言ったのだが、反応されると笑えてくる。

今のところは様子見だけにしておこう。

いずれ聞きださないとね。

そう思いながら、教室から出ようとして足を止める。

殺気を感じ振り向くと、ラウラが半眼でリリィを睨んでいた。

肩をすくめ、ラウラに近づく。

「何か用か。　ボーデヴィッヒ。」

千冬以上の威圧を出しながら喋る。

その言葉を聞いた、他生徒は「触らぬ神にたたりなし」と言う感じで更衣室へ逃げ込んだ。

「きさ……。」

ラウラが「貴様」と言おうした瞬間に、殺気とを飛ばす。

普通の生徒なら、気絶をして倒れるだろう。

だが、ラウラは奥歯を噛み締めて殺気に耐えた。

それを見て、少しばかり笑ったが誰にも分からない。

「で、何だ?」

何も言えなくなり、次の授業が開始されたらたまらない。

そのため、殺気を抑え問いかけた。

こういう先生状態だと、千冬みたくなってしまう。

まぁ、元は千冬がリリィに似てきてしまったんだが……。

仕方がない。

「……何者だ。」

そうためらいうなく言う。

その点はリリィは評価した。

「今はただの教師だ。」

そう言って教室から出た。

千冬でも同じ事を言うだろう。

「似てきたのか？」と思いながら、アリーナへ向かう。

やっぱり似た者同士なのだろう、師と弟子は。

そうして歩いている内に、生徒の山が現れる。

「授業に遅れちまうっ！！」

中心から一夏の声が聞こえた。

どうやら囲まれているようだ。

「遅れても良いから、取材を受けなさい！！」

新聞部副部長、黛の声が聞こえた。

「リリィ先生のせいで、上手く書けなかった新聞のリベンジ。」

「ほぅ、誰のせいだって？」

薫子の言葉に少しイラッとしたリリィは、ラウラに向けた殺気と同じ殺気を全員に理解できるように叩きつける。

全員の顔が、ロボットのようにリリィへと向けられる。

「貴様ら、授業はどうする気だ？　ＳＨＲから結構時間がたっているぞ。　私と千冬の説教を食らいたいか？」

その言葉に全員の顔色が青くなる。

「今後このような事があった場合、話し合いの場が用意されると思っておけ。」

その言葉を言いながらリリィは、一夏とシャルルの手を引っ張り更衣室へ歩き出した。

先ほど囲んでいた生徒は、リリィの出現で何もできずに立っていた。

「サンキュ、リリィ。」

一夏がそう言うと、リリィは手を離し歩き始めた。

「まぁ、次の授業多少遅れても良いよ。　私が説明しておくから。」

そう言って、一夏とシャルルが更衣室に付くまで付き添った。

シャルルは教室でリリィが言った事を気にしているのか、リリィを何度も見ていた。

だがリリィのおかげで先ほどのような事には遭遇しなかったため、少しばかり警戒を解いた。

入る際、シャルルが「リリィ先生って、もしかしてものすごくいい

人？」と一夏に聞いていたのに、少し内面で照れた。

「遅いぞっ！」

千冬の声が聞こえる。

リリィは千冬に近づき訳を説明すると、納得したのかため息をついた。

「何があったんだ？」

「そうですわ。　何がありましたの？」

箒とセシリアが一夏に近づき問いかける。

「どうせ一夏の事だから、女に囲まれていたんでしょ。」

鈴が近付きながらそう言った。

その言葉に箒とセシリアが、グルンと言う音が出そうなほどシャルルを見た。

「デュノアさん、何がありましたの？」

「え？　ええ？」

その表情に、少しばかりたじろぐ。

近くに歩み寄る最凶先生がいる事を知らずに。

０８６　教師リリィの性格は（後書き）

さてさて。

撹乱加速と言うものが、他者様の作品にあります。

アレは、オリジナルのはずだよね？

原作にない。

検索に引っ掛からない。

なのに、別作品で見かけてしまった……。

何とも言えないリリィです。

あ、素で間違えた。

作者です。

０８７　模擬戦闘の相手はリリィと真耶（前書き）

……やってみたかった。

と言うか、今のセシリアだとこうなってしまう。

ぶっちゃけ、真耶のためにある活躍場。

０８７　模擬戦闘の相手はリリィと真耶

「では、本日から実践訓練に入る。」

千冬の言葉に全員がはっきりとした返事をする。

だが、しない者もいた。

先ほど叩かれた、一夏をはじめとするメンバーだ。

ラウラは不愛想だが、千冬の言葉となると聞きわけが良い。

そんなラウラはリリィが千冬の横に立っているのが気に食わないのか、ずっと睨んだままだ。

少し呆れながら、千冬を見る。

気が付いているのか、考え始める。

「では、専用機持ち。　全員前に出ろ。」

その言葉に一夏、箒、セシリア、鈴、シャルル、ラウラが前に出る。

「これだけ多いと逆に引くな……。」

異様過ぎる光景に、千冬は少し引いた。

ＩＳのコアは現在４６７個。

そのうち、白式、紅椿、ブルー・ティアーズ、鈴の甲龍、シャルルの機体、ラウラの機体、さらに白騎士がここに存在してるのだ。

千冬は少し状況を考えると頭が痛くなったのか、手を頭に当てる。

まぁ、４６７個中７個がここに存在すると言う事だ。

さらに、製作者までいる始末……。

痛くならない方がおかしい。

「や～☆　それでそれで。　何をするのかな♪」

束がそう言うと、千冬は口を釣り上げた。

千冬が何かを言おうとした瞬間、上空から声が聞こえた。

全員上空を見上げる。

翠色の誰かが、量産化されているラファール・リヴァイヴに乗っている。

千冬とリリィは、今日何度目かのため息を漏らした。

仕方なしに、千冬と目を交わす。

全員降ってくる、ラファール・リヴァイヴに乗った真耶に注目しているため気がつかない。

徐々に落ちてくる。

「って、俺っ！？」

一夏が自身に真耶が落ちてきていると判断したときには、距離が縮まっていた。

だが、ぶつからない。

リリィの蹴りがラファール・リヴァイヴの足に当たり、上手く足地面に向けられた。

真耶はその事にパニックになりながらも、スラスターを吹かし制動をかける。

全員その光景に呆然とした。

飛んでくる、ラファール・リヴァイヴを蹴ったのだ。

呆然はするだろう。

リリィがやった事は、簡単。

千冬に両手で踏み台を作ってもらい、大きく飛び真耶の姿勢制御を直すという事だ。

千冬の跳ね上げと、リリィの脚力で結構飛んだ。

「あ、ありがとうございます……。」

真耶が地面に無事に降りたち、リリィに感謝を述べる。

「いえいえ。」

そのあとに高高度から生身で着地すると、リリィは笑顔で返答した。

リリィの行動を初めて見る二組は、全員が唖然とした。

シャルルもラウラも唖然としていた。

「さて、今から軽く模擬戦闘を実演する。　その前に、デュノア、山田先生が乗っているＩＳを説明しろ。」

呼ばれたシャルルは、返事をするとすらすらと説明をしていく。

その説明にシャルルの知的な部分が見え、女性は見惚れた。

「では模擬戦闘を行う。」

その言葉にセシリアが手を上げた。

千冬は発言を許可する。

「相手は誰ですの？」

その言葉に千冬は口を開いた。

「お前たち専用機持ち六人対、リリィと山田先生だ。」

その言葉に知っている物は、顔を暗くする。

鈴とシャルル、ラウラだけがよく分かっていないようだ。

「安心しろ。　リリィは武器だけの展開だ。」

「そっか、それを聞いて……安心できねぇよっ！！」

一夏がそう言うと、箒とセシリアが頷いた。

他にも、一組は全員頷いている。

案の定、転入したてのシャルルとラウラは分からないのか、呆然としている。

「そうか、なら安心できるように私も入ろうか？」

「「「イイエ、コノママデイイデス。」」」

千冬の言葉に片言で返答する。

ラウラは殺気を放ちながら、リリィを睨み続ける。

だが、無視をし続ける。

さて、五人相手にどうしようかな……。

「リリィ先生。　頑張りましょうね。」

真耶がそう言って近づいてくる。

ラファール・リヴァイヴに乗っている真耶は少しだけ頼りがなさそ

うに見える。

だが、データーでは日本の元代表候補生らしい。

何とかなるかと思いながら、考える。

専用機持ちは何も作戦がないのか、雑談に入る。

いや、一夏と箒とセシリアだけが作戦らしい物を練っていた。

「真耶。」

リリィが名前を呼ぶと、真耶は驚いて返事をした。

「どれくらいなら、相手出来そう？」

その言葉に、真耶の目が細まる。

少し考え、専用機持ちを見る。

「篠ノ之さんとデュノアくんとボーデヴィッヒさんの実力は分かりませんが、織斑くんと凰さん……オルコットさんは、何とか大丈夫かと……。」

その言葉にリリィは少し笑った。

その笑顔に真耶は見惚れる。

「んじゃぁ私は武装だけだけど、遠慮なく敵を回していいよ。」

その言葉に真耶は頷く。

「でも、ボーデヴィッヒと一夏は一緒にしない様にね。　あれ、混ぜるな危険だから。」

「え、どういう事ですか？」

リリィの言葉に真耶は首をかしげ、聞き返す。

「あれ、物すごく仲悪いじゃん……。　絶対仲間撃ち（フレンドリー・ファイア）するから……。」

そうもいながら、肩を回す。

真耶は納得しリリィを見る。

「一夏はよろしく頼むよ。　ボーデヴィッヒは私がやるから。」

「分かりました。」

そして作戦は決まった。

０８７　模擬戦闘の相手はリリィと真耶（後書き）

今のセシリアは、鈴を上手く使って真耶を落とす事は確実にできる。
ので、６ＶＳ２という構図を作ってみました。

真耶の容姿が、棒ＰＣゲーム（Ｒ１８ではない）のキャラに似ている。

いや、ゲームの方が似ているのか。

真耶は漫画の方が可愛いですｗｗｗ

漫画を見て、真耶の存在がランクアップしたｗｗｗ

さて、簡単に考えれば１ＶＳ３ですよね。

どう展開させようかな。

そして、今作者の脳はフロム脳と化した。

別作品を書くために、ゲームやったらなった。

ＩＳに影響は出るのか？

……反省は……していないっ！

０８８　模擬戦闘とラウラと散突（前書き）

戦闘が少ない、なら書くしかないじゃないか！

相変わらず、リリィ無双です。

そしてそれに影響されてか、真耶も万能です。

と書いても、真耶の出番は少ないけどｗ

０８８　模擬戦闘とラウラと散突

「それでは……始めろ。」

そう言うと一夏はリリィへ突撃した。

箒もそれに続き、セシリアが援護射撃をする。

セシリアの射撃は正確で、二組はリリィにレーザーが直撃すると想い目をつぶった。

鈴もシャルもラウラもその光景に、目をつぶりそうになったが目を開けていた。

そして見た光景は、やはり驚くものだった。

身体を傾けることで、レーザーを避けた。

更に接近する一夏と箒に、二刀流で対応する。

その光景に、二組全員が目を丸くした。

「さすが、リリィさんですわね♪」

セシリアがリリィを見て声を上げる。

箒の剣を簡単にさばきながら、一夏の剣もさばく。

「それはどうも♪」

余裕がある返事に、二組だけではなく一組全員も驚愕した。

生身でＩＳ三機を相手にしているのだ。

しかも正確な射撃が撃たれる中、二本のサーベルで避けたり捌いたりと、あり得ない事をやっている。

さらに持っている武器も、二組の生徒には驚く物だ。

ラウラはその様子を見て、リリィに向かって移動しようとする。

だが、何発かの射撃に進路を阻まれる。

「行かせませんよ！」

真耶が戦闘を開始したのだ。

鈴とシャルルは、リリィとの戦闘に目が奪われ戦闘に参加していなかった。

リリィは一夏の攻撃を捌きながら、剣筋を見極める。

「良い剣になってきたね、一夏。」

その言葉に一夏は照れくさそうに口を開いた。

「リリィと箒の教え方が良いんだろ！」

そう言って、飛びのく。

その瞬間に間合いを取って離れていた箒が来る。

「うん、良い後退と進撃だね。」

両手のビームサーベルを逆手に持つ。

箒は少し違和感を感じたが、両手に持った雨月（あまづき）と空裂（からわれ）を持ち直す。

「義兄さん……。　行かせてもらいます。」

そう言って一気に間合いに入り、剣を振るう。

だが、それを相手にするリリィではなかった。

箒の振るう剣をバックステップで後退、すぐさま前方に飛び箒の腕を踏み台に飛び上がる。

「真耶ッ！！」

その声を聞いてか聞かないでか、真耶が反応し高度を下げリリィに近づく。

「……目標は？」

真耶はそう聞くと、脚部スラスターで爆転を開始する。

リリィはその問いに、ラウラを見た。

「ボーデヴィッヒだ。　アレを落とす。」

そう言うと真耶は自身の機体の足に、リリィを乗せた。

眼と眼が見つめ合う。

だが次の瞬間リリィは砲弾のように、真耶の足によって高く飛ばされた。

その光景に踏み台にされた箒はもちろん、セシリアは悔しそうな表情をする。

ラウラに向かっていたリリィは、サーベルを繋ぎ合わせる。

リリィの姿を見て、ラウラは口を釣り上げる。

「貴様みたいな、幻想（じゃくしゃ）は死ねっ！！」

そういいながら、空中で右肩の大型レールカノンを展開させる。

そして瞬間的に砲弾を打ち出した。

大きな薬莢が、レールカノンから撃ち出される。

……フリーダムのレールガン……か……。

そう思いながら、飛んでくる砲弾を見る。

目の端で、リリィを見下すラウラが見れた。

……なら、ボーデヴィッヒ……。

そう思いながら、サーベルを腰構えにして抜刀の要領で振るう。

……お前が私を幻想と言うのなら……。

「なっ！？」

砲弾が二つに割れる。

「嘘……。」

「夢じゃ、ないよね。」

「リリィさん凄すぎ……。」

全員が驚愕する。

それを見たラウラも目を丸くした。

リリィ自身砲弾に向かって飛んでいるのだ。

確実に当たる。

だが考えてみれば、リリィは移動しながらセシリアのレーザーを回避したのだ。

対処はできるだろう。

リリィはラウラの眼前に迫る。

「くっ！！」

ラウラは咄嗟に両腕のプラズマ手刀を展開させるが遅い。

……お前の強さも、幻想として……消え失せろ。

そう思いながら、剣を振るう。

高速で突きが放たれる。

もの凄い数の突きが、ラウラを襲う。

それは腕のプラズマ手刀を破壊して、レールカノンの砲身を歪ませた。

「っ！　貴様っ！！」

勢いを殺さずラウラのレールカノンの上に立ち、再度飛び上がる。

その際ラウラに向かってあざ笑いと共に、「散突（さんとつ）、細雪（ささめゆき）」と剣技名を言った。

０８８　模擬戦闘とラウラと散突（後書き）

おいおい、「一閃白鷺」、「ニ閃散桜」、「ニ閃天魔」の次は「散突細雪」って……。

どんどん、痛くなってきたな……。

そのうち、弄月（ほんげつ）や千鳥打（ちどりうち）ち、残月（ざんげつ）、夜駆（よがけ）け、蟲喰（むしばみ）、八握脛（やつかはぎ）、友切（ともきり）、暁鴉（あけがらす）、天剣草壁（てんけんくさかべ）とか使っちゃうんじゃない……。

……はい、棒ＰＣゲームですね。

忌剣ですねｗｗｗ

いやＸＢＯＸ３６０やＰＳＰとかもありますが、アニメや漫画も……。

全部持ってますよ？

ＢＯＸもＰＳＰも。

……作者は病んでいます、っと。

はい、ど～でもいい事なので……次話に続く？

０時、６時、１２時、１８時と言う６時間おきに予約で投稿していますｗ

０８９　真耶の実力（前書き）

まぁ、真耶最強成分が多めです。

やりすぎだろ……。

そして、これはいつまで続く……。

０８９　真耶の実力

その光景を見ていた鈴は目を見開いてリリィを凝視していた。

「千冬さん並みの、化け物じゃない。」

その言葉にシャルルは苦笑い。

ラウラのレールカノンに乗ったリリィは、やはり恐ろしいのか甲龍を若干後退気味に停滞させる。

リリィの顔が鈴に向けられる。

その顔を見た瞬間、鈴は冷や汗を流した。

距離は２０ｍほど。

（大丈夫、届くはずがない。）

そう思いながら、上昇を続ける。

だが、鈴は判断を間違えた。

リリィが展開するのは、武器だけだ。

サーベルだけではない。

つまり……。

「げぇ！？」

サーベルを収納して、連結させたビームライフルを手に持っていた。

「さてボーデヴィッヒ。　バ～イバ～イ。」

そういいながら飛び上がる。

だが鈴に向かう飛び上がり方ではない。

地上に降りる飛び上がり方だった。

一般的にそれは飛びあがるではなく、飛び降りるではないかと思うが気にしない事だ。

手には、ＺＧＭＦ－Ｘ３０Ａの連結ライフルが握られていた。

ちなみに、Ｘ３０Ａのは連結状態で性能が変わるのが特徴のライフルだ。

片手持ちが基本だが、補助グリップを横に展開する事で、連結時に

狙撃ライフルとして使う事もできる。

ＺＧＭＦ－Ｘ２０Ａでは高火力だけだったが、発展させたのがマルチフォームと呼ばれる連結機構だ。

安定した攻撃に、多彩なギミックを詰め込んだ武器の事を指す。

「まてっ！」

ラウラがそう叫ぶが、リリィの落下は止めれるはずもない。

スコープを覗く。

狙うは、人間の動力機関……。

心臓だ。

一秒以内で狙いを定めトリガーを引く。

その瞬間、一本の光条が鈴の心臓めがけて飛んだ。

「っ！？」

反応が遅れた鈴は、それを受けてエネルギーが大幅に削られた。

リリィはそのまま下に落ちる。

そこでは、一夏は真耶と戦闘中だった。

真耶が、一夏の間合いの外からマシンガンを撃ってエネルギーを削

っている。

時折、箒と共に連携でしかけるが、両手に持ったマシンガンを回りながら撃ち、シールドを削り続ける。

射撃が当たるときにはシールドが必ず展開していることから、真耶の腕が良いと簡単に分かる。

セシリアも援護射撃をするが、真耶にとっては脅威でもなく簡単に避けられた。

「くっそ。」

一夏が毒づきながら、動き続ける。

真耶は少し焦っていたが、それでも三人を相手に頑張っていた。

命中率が「８４％」という数字が、視界の外にあるモニターに映し出されていた。

「マシンガンで、その命中率って。」

上空で停滞していたシャルルが驚く。

マシンガンとは、基本「下手な鉄砲数撃ちゃあたる」という考えで撃つのが多い。

マシンガンの優位点は、弾幕を張れる事や、同じ所に撃ち続け集弾効果によって貫徹力が高まる事、さらに多くの弾数で損傷を相手に多く追わせる事だ。

その点、撃つと反動が一発一発連続してくるため照準がずれるのが欠点でもある。

だから命中精度などは、７０％もあれば高い方なのだ。

だが真耶は、８４％の命中率を叩きだしていた。

六体二なのに、しかも専用機持ちが武器しか展開していない人や量産機に劣っている。

一瞬そう考え焦る。

「くっそ、アンタ援護よろしくっ！！」

鈴がシャルルに向かってそう言うと、リリィに向かって加速した。

それを見て、シャルルは危険を感じたが振り払う。

「……了解！」

シャルルはアサルトカノンとショットガンを構え、鈴に続く。

ラウラは未だ驚愕していた。

（あいつは何者だ。）

頭の中にはその疑問でいっぱいだった。

その間にも、戦闘は続く。

真耶は箒を間合いに入れたいた。

「取った！」

そう言って箒が雨月を振るうが、真耶は焦りはしない。

自身の影に重なるように出た、影を見て焦らなかった。

０８９　真耶の実力（後書き）

作者的には、戦闘開始五分ぐらいですかね？

さっさと終わらせて、次に行こうよ……。

まぁ、オリ展開入れないと、どっかと被るからね……。

０９０　リリィと真耶の戦場（前書き）

さてさて……ラウラが実質戦列に加わらないから……２ＶＳ５だね。

０９０　リリィと真耶の戦場

箒の紅椿が、エネルギー刃を展開させた雨月を振るう。

だが真耶は、箒を背に一夏とセシリアにマシンガンを向ける。

箒は驚きながら雨月を振ったが、それは真耶には届かなかった。

「させないよ。」

リリィがサーベルを振るい、雨月を逸らしたのだ。

その光景に、尊敬以上の念を持ち箒は下がる。

「……義兄さんが来てる事を……知っていた……。」

「そう言う事ですね。」

箒の言葉に真耶は、マシンガンを乱射させながら答えた。

その表情は、いつものオドオドしたモノではなく確りとした教育者の顔だった。

一夏を狙うマシンガンが上に向けられる。

上に向けられたマシンガンから放たれる銃弾は、シャルルの機体を正確にとらえていた。

リリィもライフルを両手持ちにして、狙撃染みた射撃を行う。

「うげっ！？」

一夏がそれにあたり、エネルギー切れを起こした。

それを見た全員は驚く。

「織斑。　さっさとそこから離れろ。」

その千冬の声に、一夏は「……はい」と元気がない声で返事し、戦線を離脱した。

セシリアはそんな一夏を横目で見ながら、射撃を行う。

だが途中から、リリィの射撃に阻まれ回避優先となった。

箒も真耶のマシンガンに立ち往生しており、迂闊に接近ができない状態だった。

鈴もリリィの狙撃モードでの射撃を受けたため、シールドエネルギーが少なく、迂闊に接近できない。

シャルルも箒と同様だ。

ラウラは、完全に自問自答をし続けながら戦場を眺めているだけ。

実質、リリィ達の独壇場であった。

リリィと真耶の射撃が、一点を中心に放たれる。

砲撃も避けられながら、まるで要塞のように動く。
そして真耶の乱射が、鈴に当たりエネルギー切れを起こした。
「凰、エンプティー。」
その言葉に、鈴は一夏と同様に戦域から離脱した。
リリィはそれを見ると、口笛を吹きながら古臭く「やるね♪」と真耶に称賛の声を送った。
真耶はすこし頬を赤く染めた。
セシリアとシャルルは、その瞬間に目を光らせた。
真耶の射撃が少し止まったのだ。
セシリアは誘導兵器を。
シャルルは真耶に向かって近接ブレードを展開させながら、左腕にショットガンを持ち接近する。
それに気がついた真耶は、慌てて迎撃をしようとするが照準が上手く合わない。
「はぁぁぁ！！」
シャルの声に出しながら、ブレードを振るう。
真耶に直撃する……はずだった。

「えっ！？　きゃぁぁ！！」

真耶が後ろに傾きながら倒れる。

その光景にシャルルは目を大きく広げ驚いた。

そして目の端にリリィの腕が見えた。

手は真耶の肩を掴んでいた。

（え、嘘っ！？）

そう思いながら、身体が前のめりになるのを回避しようとする。

大きく振りかぶったせいで、体勢が前のめりになってしまったのだ。

しかも、リリィ達に背を見せる形で。

（しまったっ！？）

そう思った瞬間、リリィが連結したライフルをシャルルに向けていた。

シャルルは冷や汗を流す。

「っ！？」

銃口の先端が光る。

だがリリィは、撃つ前にステップで後ろに下がった。
その場所を四つの光条が通り過ぎる。
セシリアのブルー・ティアーズだ。
シャルルを助けるためか、リリィを落とそうとするためか、攻撃を開始したのだった。
避けられた事に、苦虫をつぶしたような顔をする。
だが瞬間的に「あたりまえですわね」と言って、誘導に意識を向ける。
今の攻撃に、かなり自身があったようだ。
シャルはリリィから距離を取る。
「大丈夫か。」
箒が近寄りながら、声をかけた。
シャルルはそれに頷きながら、笑顔で「大丈夫だよ」と言い返した。
だが、内心では恐怖で泣きそうだった。

０９０　リリィと真耶の戦場（後書き）

え～っと。

やっぱり一夏は最初に落ちる。

そろそろ切り上げたいですけど、全員落とさないとね～。

……今日中に終わるかな？

０９１　シャルルの行動と一瞬の本気（前書き）

ようやく終わりそうだよ……。

まだ終わらないけどね。

091　シャルルの行動と一瞬の本気

「さて見た所……、箒、セシリア、シャルル……ボーデヴィッヒは……、いずれ来るか。」

そう冷静に状況判断しながら、ブルー・ティアーズが放つレーザーを避ける。

「っ！」

セシリアは焦った。

シャルルを援護した後、誘導兵器のみでの戦闘になったが戦況は変わらず。

むしろ不味い方向に行っている気がした。

戦闘に加わっているのは三人だ。

それでいて、向こうは無傷のリリィにダメージらしきものが見当たらないが、わずかに疲弊しているであろう真耶がいる。

勝つに勝てない。

そう思いながら、リリィを見る。

「さて、その程度？」

当の本人は、射撃を止めて回避に専念している。

射撃しながら回避を完全にやっていたのだ。
今の状態で当たるわけがない。
シャルルがショットガンを両手に持ちながら、一定の距離を開けつつリリィを狙っていた。
「ショットガンを避けるとか……。　本当に人かどうか疑っちゃうよ……。」
呆れながらシャルルは、ショットガンを撃ちそう言う。
お互いの距離は近い。
だが、シャルルはリリィの剣の間合いを読みとって踏み込まない。
手にはライフルしか持っていないが、確実に踏み込んだらすぐさまサーベルに持ち変えるだろう。
（確実に高速切替（ラピッド・スイッチ）より早く取り出してくる……。）
シャルルが得意とする高速切替は、武器のコールなしに戦闘と同時進行で武装を呼び出すものだ。
「……ん？」
その時シャルルは、リリィが手を腰に戻しながらサーベルを収納するのを見た。

その行為に違和感を覚えたのだ。

高速切替は、手の位置に関係なく武器を呼びだせる。

だがリリィは、先ほどから一定の位置で武器の出し入れをしているのだ。

何度も、何度もだ。

誰も違和感に感じなかっただろうが、シャルルには違和感を感じた。

（そう言えば、ボーデヴィッヒさんの時も……。）

ラウラの時もレールカノン上で、アンビデクストラス・フォームにしていたサーベルを二つに戻し、片方を腰部に戻すような形で収納したのだ。

更にそこから落ちながらサーベルを同じ要領で反対の腰部に収納し、後腰からライフルを連結させながら取り出したのだ。

それを思い出し、ある事を思いつたシャルルはそれ実行しようと考えた。

（……その空いた手を、腰に持って行く……。）

そうシャルルが思っているように、リリィはサーベルを消した手を腰に持って行く。

（ライフル！）

そう思った瞬間のシャルルの行動は早かった。

リリィの手がライフルを掴み展開させた瞬間には、シャルルは近接ブレードを展開しリリィを間合いに入れていた。

「っ！」

リリィはその光景に目を見開いた。

まさか接近してくるとは思わなかったからだ。

ずっと間合い外から、ショットガンを撃ってくるだけだと思っており……油断していた。

リリィの顔を見て、シャルルはニヤリと口を釣り上げた。

そして、間合いに入りながら回避されないようにブレードを振るう。

シャルルの読みは当たっていた。

必ずリリィは、武装を展開するために決められて位置に手を持って行く。

前腰に持って行った場合、サーベル。

後腰に持って行った場合、ライフルと気がついたのだ。

これはＸ３０Ａの武装配置場所であり、リリィは高速切替なんかしていない。

リリィ自身、高速切替を好んでいなかったからだ。

今やっているのは、不可視状態の武器を取った瞬間に可視状態にしているだけにすぎない。

つまり、リリィは何もつけていないように見えて、最初から武器を装備していたのだ。

これには理由が幾つかある。

だが唯一の理由は、高速切替時に起きる発動時間が問題だ。

展開中は早くても二秒は時間がかかる。

だが、不可視状態であればラグはない。

瞬時に対応できる。

そう、リリィが思わずＺＧＭＦ－Ｘ２０Ａの腰部武装、クスィフィアス３レール砲展開させてしまった様に。

「へっ？」

シャルルが突然現れた腰部砲身に驚く。

無慈悲にも、砲弾は電磁を纏い発射された。

「きゃぁぁぁ！！」

瞬間的に黄色い砲弾が、シャルルに直撃しシールドエネルギーが無

くなる。

その光景に全員が、目を見開いた。

リリィ自身も。

「……まさか……ライフルと、サーベル以外を展開する……なんて……。」

千冬があり得ないという顔で、リリィを眺めていた。

束は完全に絶句していた。

二人はリリィなら、ライフルとサーベルで制圧できると、確実に思っていたのだ。

最強を一瞬だけでも、本気にさせたシャルルという人物にただ驚いていた。

０９１　シャルルの行動と一瞬の本気（後書き）

見えない理由は……ミラージュコロイドの原理でも使っていると思っておいてください。

そしてストライクノワールの機体スペックが欲しい……。

もしかしたら……。

……連ザ?でフリーダム系統ばっか使って、ＳＰＥＥＤで回転斬り↓キャンセル↓回転切り↓キャンセル↓回転斬り（ストフリはここで、相手がダメージを食らわなくなりながら墜落するため終了）↓キャンセル↓回転切り↓キャンセル↓回転切り（フリーダムはここで、ダメージを与えられなくなり終了）と言う……事ばっかりやっていたから……ノワール使っていません。

まぁ、ランダムで使った事はあるけど……。

連ザ?では、一種の最強でしたｗ

コンシューマーで、ですけど……。

あのコンボは、反則以外の何でもない気が……。

０９２　襲いかかる幻聴（前書き）

サブタイの意味通りです。

092　襲いかかる幻聴

「止めだ……千冬。」

リリィがそう言うと、十分近くの模擬戦は終わった。

誰もが呆然とする結末。

結果からみれば引き分け。

だが実質、被害からしてみればリリィ達の勝利。

しかしリリィの表情は何処かすぐれない。

「……ちょっと、お手洗いに行ってくる……。」

そう言ってリリィは、アリーナから外に出て行った。

全員がおかしそうな表情をする。

一番気していたのは、シャルルだ。

シャルルとの戦闘後に、リリィが急変したのだ。

気してしまうのは仕方がない。

「束……。」

千冬がそう言いながら振り返ると、束はいなかった。

すでにリリィの元へ行ったのだろう。

少し呆れたが、「束にしてみれば当たり前の事か」と思い肩をすくめる。

「さて……教員がどれほどの強さか分かっただろう、これからはちゃんと敬うように。」

真耶のために、そう言って専用機持ちを見る。

心ここにあらずという顔をしている。

特にラウラとシャルルが一番酷い。

呆然としていて、千冬の言葉を聞いているのかさえ分からない。

リリィの事を気にし過ぎているのだ。

「……。」

セシリアは、あの表情をよく覚えていた。

初めてセシリアと戦闘したときに見せた顔。

一種のトラウマだろう。

あのリリィの状態は、千冬達にはどうする事も出来ない。

誰にも……。

何も……。

出来るとしたら、それは束だけだった。

「では専用機持ちをリーダーに、グループになって始めろ。」

そう言うが、誰もすぐには動かなかった。

先の戦闘が頭から離れないようだ。

ラウラは確実に自問自答を繰り返しながら、授業に参加する気はないのか考え込み、シャルルは最後に見せたリリィの顔が気になり過ぎて動けなかった。

千冬がため息をつきながら手を叩くと、皆弾かれたように我に返った。

アリーナ近くの草むらに、リリィは倒れ込んでいた。

「……。」

お手洗いに行くと言っておきながら、アリーナに男性用のお手洗いが無いのに気がついたのだ。

よって、すぐに戻れる近場の草むらで、体調が戻るのを待った。

戦闘を楽しむ意識。

一対一だけではなく、今回は戦闘全体でタカが外れてようだ。

流石にこれだけはどうしようにも無い。

なぜか体に染みついている、戦闘凶と言う感情。

そして、なぜか幻聴が気分を害した。

前者の感情は、時間がたてばどうにでもなるのだが、後者は初めてだ。

だが、過去にも同じような幻聴を聞いた事がある。

フリーダムを手にした日だ。

≪己を……≫と言う幻聴が、リリィの頭の中に五月蠅く響く。

≪悟られるな……≫という言葉が、嫌に頭を痛めつける。

リリィは奥歯を噛みしめながら、幻聴に耐える。

次第に落ち着いて行き、幻聴の音が小さくなった。

溜息をつきながら安心すると、幻聴が最後聞こえた。

≪……う！≫

初めて聞く幻聴だ。

だが「う！」だけでは意味が分からない。

自身に一体何が起きているのか、分からない。

幻聴もよく分からない。

しかし、考えても答えは出ないのだ。

それが最後の幻聴だったのか、もう幻聴は聞えなかった。

「リリィちゃん～。　ど～こ～？」

リリィが立ち上がろうとすると、何処からか束の声が聞こえた。

上半身を上げ、首だけで探す。

声からして、それほど遠くはない。

立ち上がり、草むらから出ようとした所で≪覚悟っ！≫と言う幻聴が、頭を痛めつけた。

不意に来た大きな幻聴に、リリィは大きな音を立てて倒れ込む。

その幻聴にリリィは目を見開き耐える。

一回だけだったが、リリィの精神と体力を一瞬で奪って行った。

「リリィちゃん？」

束が音に気がついたのか、近寄ってくる。

だが、リリィはそれに構うほどの余裕を持っていなかった。

最後の幻聴から、殺意を感じたのだ。

明確な、リリィへ向けての殺意が。

幻聴から殺意とはおかしな話だが、リリィはその言葉に苦しんだ。

「っ！　リリィちゃん！！」

束はリリィを見つけると、急いで駆け付ける。

リリィの顔に手を付けた瞬間、リリィの意識は途切れた。

０９２　襲いかかる幻聴（後書き）

作者の意識も途切れそうです。

今はリリィと同じ感覚を味わってますｗｗｗ

頭が痛い、と言う……。

特に左脳が……。

痛いですよ……。

泣きそうですｗ

※質問です

前にヒロインが使用するのをＩＳからＭＳに変えようという事を書きました……。

が、ＩＳも捨てずらい……。

そう思ってしまった私は、ヒロインたちが使うＩＳを捨てることができなくなりそうです。

どうしたらいいでしょう？

案を求めます。

今のところ、白騎士と同様の回路と設計をした、ＩＳとＭＳのハイブリット機体……ＩＳ形態にもＭＳ形態にもなれる機体を考案中……。

けど、御都合過ぎるためほぼ廃棄思考……。

０９３　深い深い暗闇で（前書き）

久しぶりに、束が登場した気がする……。

ヒロインの束は、戦闘だとほぼ空気……ｏｒｚ

０９３　深い深い暗闇で

暗い。

真っ暗な空間に、ただ一人浮いていた。

まるで、宇宙のように。

……ここは……。

そう思いながら、リリィはあたりを見る。

暗すぎる。

暗過ぎて、何も見えない。

明りは無いのか？

地面はあるのか？

そもそも、なんなんだ？

そう思いながら、ただ浮いていた。

すると、スポットライトが当たった様に一部だけ明るくなる。

レンガが連なるだけの光景。

リリィは自然とそこに近づいて行った。

自身が動いている事に、理解はできない。

「……ねぇ、貴方はなんで……そんなに傷付くの？」

声が聞こえる。

聞きおぼえがある声。

愛する者の声。

だが、何か違和感を感じる。

リリィは訳が分からなかった。

「貴方が、私がいるから傷ついてるんでしょ？」

その言葉が、誰に向けられているのか。

その者の状態さえ、分からない。

「貴方は偉い立場にいるのけど、やっぱ似合わないよ？」

声の主を探すが、見当たらない。

ただのレンガが続いている場所だ。

リリィはそう思いながら、レンガを眺め続けた。

辺りは暗いままだ。

「貴方は私の事を忘れたほうが、良いはずだよ？」

その言葉に、リリィは悲しくなる。

束に、忘れてと言われたような気がしたからだ。

「私の事は、忘れなさい。」

その言葉は、酷く悲しそうで。

もの凄く、悲痛な声だった。

「それが、貴方のため……私の為でもあるんだから。」

その声が、徐々に見える範囲を狭めていく。

リリィは放たれる言葉に、胸が苦しくなる。

「だから……さようなら……。」

最後にその言葉が、聞えた瞬間。

光りが薄れて行く中で、薄紫の髪が見える。

リリィは懐かしむように、その薄紫髪を見ていた。

「リリィはどうだ？」

千冬が束にそう尋ねる。

束は首を振って、答えた。

リリィが倒れた後、束は千冬を回線で呼び出して自室にまで運ぶのを手伝わせたのだ。

おかげで授業中に抜け出した事もあってか、シャルルはさらに気まずそうになった。

「リリィちゃん……。」

その声は、誰もが感じるほどの不安が入っていた。

千冬は目を瞑り、ドアに向かって歩き出した。

「私は、授業に戻る。　何かあったら連絡してくれ。」

その言葉に、束は「うん」と覇気がない返事をした。

千冬はその声に、やるせない気持ちになりながら部屋を出る。

束はリリィの右手を両手で掴み、祈るように額をつけた。

初めてだった。

リリィが苦しそうに倒れ込んでいたのは。

だから、焦り、沈み、祈った。

発明家……科学者が祈るなんて、ナンセンスだろう。

だが、リリィのバイタルは正常。

全く、何一つ問題が無いほど正常なのだ。

「リリィ……。」

やがて、束の余裕がなくる。

仕舞には、涙を流してしまった。

二度と、リリィが目を覚まさないかもしれない。

そう思っただけで、涙が溢れた。

時計の針が全て上に上がった時刻になる。

お昼と言う事で騒がしくなるが、束の耳には何も入らない。

「リ……。」

「っ！？」

リリィの名を呼ぼうとした瞬間、リリィが目を覚まし息をのんだ。

リリィ自身深い息を吐き、ホッとしていた。

だが、束は「え？　え？」と訳が分からなくなった。

さっきまで悩んでいた事が、全て吹き飛ぶような起きあがり方だ。

いきなり起きるから、束は自身の心臓が止まりかけた気がした。

例えるなら、子供が井戸から出て来る長い髪の女性の映画を見たときぐらいだろう。

束がポカ～ンと手を握りながらリリィを見ていると、不思議そうにリリィは束を見て口を開いた。

「……何してんの？」

とりあえず、束は考える事を止めた。

無言で、リリィに抱きつく。

リリィは訳が分からないという顔で、束を抱きとめる。

数時間ぶりに、束は笑顔になった。

093　深い深い暗闇で（後書き）

夢でしょう。

夢です。

寝てたんですから、夢ですね。

はい。

何か書こうとして、忘れた……。

うん。

忘れた。

なんだっけ？

痴呆症にでもなったかな？

０９４　知るべき相手と黒ウサギ（前書き）

……ラウラサイドのシナリオが多いと思った今日この頃……。

シャルのシナリオ考えないとね～。

そして、最近束がはっちゃけてない事に気がついた。

はじけないかな～ｗ

０９４　知るべき相手と黒ウサギ

「それにしても、どうしたの？　倒れてたから驚いちゃったよ～☆」

束がいつもの調子に戻り、質問する。

だがその質問にどう答えていいのか分からず、首を傾げる。

とりあえず正直に話すか、それとも心配かけたくないから嘘をつくか。

二択用意して、迷わず後者を選んだ。

リリィは嘘をつく事にしたのだ。

「まぁ……、戦闘凶になって、いつもより酷かったから。」

そう言って、笑う。

その言葉に、束は半眼になり口を開いた。

「嘘だっ！！」

だが、天才ウサギの感は嘘だと告げていた。

ウサミミをまっすぐ伸ばして、リリィを下から覗きこむ。

「……そのネタ……古いよ？」

そう思いながら、少し考え込む。

何故束が嘘だと思ったのか、考えたが無駄だろう。

ウサギ（たばね）は感がするどいから。

そう思いながら、ベットに横になる。

「まぁ、本当に何でも無いんだけどね……。　今日は変な夢を見ただけだよ。」

そう言って目を瞑る。

「訳の分からない夢が、ね……。」

「いや、別に私その事聞いてないし。」

「デスヨネー。」

適当に話を逸らそうとしたが、束は冷静すぎた。

乗ってくれない。

少し残念と思いながら、片目を開き束を見る。

「幻聴だよ……十年ぶりの……。」

「クラリッサ。　……私だ。」

ラウラは昼食時、真剣な顔をしながら端末で通信をしていた。

通信相手は、自身が配属しているドイツのＩＳ配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼの副官。

クラリッサ・ハルフォーフだ。

階級は大尉。

≪どうしましたか、ラウラ・ボーデヴィッヒ隊長。≫

通信端末の向こうで、息をのむ音が聞こえる。

もちろんクラリッサ以外の者が、息をのんでいるのだ。

おそらくラウラの声に緊張しているのだろう。

「頼みたい事がある。」

そう言うと、クラリッサが息をのんだ。

「ＩＳ学園に所属している、リリィと言う教師の素性を洗ってもら

いたい。」

その言葉に、クラリッサは間を置いた後≪何故ですか≫と聞き返した。

一瞬、ラウラの心が葛藤したが、落ち着かせる。

落ち着けなければ、隊長としての威厳は無い。

軍隊を動かす事に躊躇いは無いが、おそらくラウラ自身の私情が大きすぎる。

だがら、無理やりにでも落ち着かせた。

「ヤツはＩＳを装備せずに、武装だけで六機のＩＳ……チューニングされた量産ではない機体を圧倒した。」

その言葉に、クラリッサは言葉が出ない。

「おそらくだが、素手でもＩＳを制圧する事は可能だろう。」

≪なっ！？≫

ラウラの補足に、完全に声を出し絶句する。

端末の向こうから、完全にガヤガヤとした話し声が漏れた。

≪……嘘ではないです、ね。≫

クラリッサが疑い深く聞いてきたと思ったら、そうではなかった。

こういうときに、優秀な副官は助かる。

「ああ、戦闘状況をＩＳの小型カメラで撮った。　そちらに転送する。」

その言葉と共に、ＩＳのモニターが≪転送中≫と文字を映す。

≪転送完了しました。　ただ今、素性を洗っています。　今すぐに映像は閲覧しても……。≫

「構わん。」

クラリッサの言葉を遮り、返答をする

ラウラが焦っているのを、クラリッサは感じられただろう。

≪了解しました。≫

それと同時に、少し映像の音が端末から聞こえる。

映像が派手な音を出すたびに、端末から声が聞こえる。

驚愕した声が。

少し時間がたった後、端末に軽くノイズが走る。

≪……隊長が畏怖するのがよく分かりました。≫

映像の音を後ろに、クラリッサが話しかけてきた。

冷静な声だが、その声は絶望と驚愕が入り混じった声に聞こえる。

ラウラは少し眉をひそめ、その声を聞いた。

≪細かな経歴は、不明です。　機体の詳細も外部データもありません。　国際ＩＳ委員会にも問い合わせましたが、特務ＳＳＳオーバーの機密事項扱いを受けています。≫

その声に、ラウラは少し驚いた。

可能性として国際ＩＳ委員会が何かを知っていて機密にしているだろうとは考えたが、まさか機密事項扱いを受けているとは思わなかった。

≪経歴も年齢も性別も、全てが不明です。　ただ……。≫

「「ただ」なんだ？」

クラリッサが言葉を止めた事に、更に眉をひそめた。

≪ドイツ上層部で、不干渉を決め込む派閥と、ＩＳを奪取するという派閥があります。　ですが、我々に上層部から与えられた命令（オーダー）は……。≫

クラリッサが再度声を止める。

だが、声が震えている。

≪……不干渉です。≫

０９４　知るべき相手と黒ウサギ（後書き）

……前に、一夏にシャルはやらんよ！

と書きましたが……ラウラもやれそうに無くなりました……。

何故だ……。

……何故だ……。

……何故こうなった……。

……なんか、原作をブレイクし過ぎな私の妄想。

スターゲイザー並みに、止まらないｗｗｗ

というか、ＩＳ学園の生徒は知っていて、国際ＩＳ委員会がフリーダムすら知らないってどういう事だ……。

あ、一応知ってはいるけどスペックだけ、ね……。

訳が分からなくなってきた……書いている本人なのに……。

とりあえず、シャルのシナリオどうするかな～。

０９５　調べ上げる経歴（前書き）

前話とは関係無い話です。

ラウラと同じ時間に、リリィも経歴を調べていました的なノリのお話ｗ

０９５　調べ上げる経歴

「まぁ、そんな感じで頭痛がしたわけ……。」

完結的に説明する。

頭痛については、本当に不明だ。

ベットでお互い横になりながら、話し合う。

「へ～。　そうだったんだ……。」

束はその事を聞くと、少し落ち込む。

「心配させたくなかったんだよ。　なにより十年ぶりだったんだし……。」

そう言ってリリィは、束の頭を撫でる。

何度か撫でると、束は目をつぶった。

気持ちよかったのだろうか。

寝息を立てて寝始めた。

その姿にリリィは少し微笑んだ。

そしてベットを離れると、机の上に置いてあったパソコンのたち上げる。

千冬に見せてもらった紙を思い出し、キーを打つ。

≪シャルル・デュノア≫

シャルルの名前を打って、検索にかける。

「……。」

簡単にヒットした……。

リリィは軽く目を通す。

シャルル・デュノア。

フランス出身の男。

デュノア社の息子で、代表候補生。

そこまではいたって普通。

だが、問題があり過ぎた。

経歴が書かれてはいるが、不自然すぎる。

目立たない学校を出て、目立たない人生を送っている。

ありふれた学生の姿だ。

「はぁ……。」

ため息が思わずもれた。

この経歴の書き方が、凄く雑だったのだ。

他の人間なら問題なく、だませるだろう。

だが、この経歴の書き方は嫌と言うほど知っている。

国家が要人を匿う上で、用意する偽造戸籍の経歴一覧にそっくりなのだ。

というか、ソレだ。

あくまで目立たない、凡人であるかのような書き方。

それは過去を知られる上で、一番リスクが少ない方法だ。

「何見てるの☆」

「っ！？」

束の声に心臓が止まるかと思った。

急いで後ろを振り返ると、笑顔の束がそこにいた。

リリィは目を丸くし、束を見た。

さっきまでスヤスヤと寝ていたはずだ。

その人物がいきなり後ろから声をかけたら、誰だって驚くだろう。

「寝たふりに気がつかないとか、リリィちゃんらしくないよ？」

どうやら、寝たふりに気がつかなかったようだ。

リリィはこめかみに、手を当てて俯いた。

その間に、束はリリィが見ていた物に目を通す。

そしていい笑顔で一言。

「浮気？」

と、千冬張りの威圧で言ってきた。

それを聞いた瞬間、ため息しか出なかった。

どうして、そっちの方向に考えるんだ。

「というか、アレで男装って……何考えてるんだろ～ね～♪」

その言葉に、リリィは顔を上げる。

仕方がない。

そう思って口を開く。

「あたりまえ……、と言うわけで性別を偽る子が、何も考えていないわけがないはずだからね……。　洗ってる。」

そう言うと束は、あるモニターを映した。

グラフだ。

いくつもの棒が、年ごとに立っている。

リリィはそれを見て、目を見開いた。

「しなくても大丈夫だよ♪　私が探っておいたから☆」

束はそう言うと、モニターを数個表示させる。

そして、リリィの膝に座る。

……モニターが見にくい……。

だが、そんなことお構いなしに、束は口を開いた。

「まずは、このグラフ。　見て分かるように、年々にデュノア社の経営が悪くなって行っているのがよく分かるね。」

そう言って「どうでもいいけど」と笑った。

デュノア社の部分だけ映すと、右肩下がりのグラフになった。

束はそのグラフが映し出されているモニターを少し下げ、別のモニターを引き寄せる。

「理由は簡単。　第三世代の開発が他社より遅れていて、開発が難

航。」

「つまり、難航したせいで政府が資金提供を削減したため、デュノア社はあんなグラフになった……という事？」

「ついでに、次のトライアルに選ばれない場合は、開発権の剥奪もあるらしいよ～☆」

それはデュノア社の、消滅を指している。

倒産と言う事だ。

束はそう言って、大半のモニターを消した。

消えた物は、デュノア社の経営状況に政府のＩＳ開発資金分配グラフ。

世界間のＩＳ取引状況に、トライアル選定国の簡易的情報だ。

残ったのはシャルルの顔写真と経歴、複数のモニターに隠れていたシャルルによく似た女性の全体写真。

それとその女性の詳細経歴だった。

０９５　調べ上げる経歴（後書き）

なぜ、パソコン……？

リリィなら、束同様にモニターパソコン（？）が使えるのでは？

まぁ、なんとなくパソの方がそれっぽいじゃんｗ

ハッキングって、さ。

で、なぜパソコンがあるかって？

ＩＳに大規模情報を入れている場合、情報処理が……行動中、……最悪戦闘中に処理が追い付かなくなる場合があるため、情報はなるべく別媒体に入れる物です。

と、作者は思っていたり。

処理時に莫大な情報は邪魔なだけ、と言うわけ。

あと、多分この世界のパソコンは結構凄いと思う……。

いや、リリィ特性ＰＣか……。

凄いんだろ～な～ｗ

０９６　天才ウサギはやっぱりおかしい（前書き）

……いつも訳の分からない文章を見ていただき、誠にありがとうございます。

急展開過ぎｗｗｗ

ワロタｗｗｗ

と言われても仕方がないシナリオですが……。

096　天才ウサギはやっぱりおかしい

「束……。　これが……。」

リリィがモニターに映る女性を見ながら、尋ねる。

「シャルル・デュノアの本来の姿……。　世界から自身のこの姿を奪われた、哀れな女性。」

その言葉に、束がなんで他人であるシャルルを探ったのか理解できた。

私達と同じなのだ。

束は、シャルルが大切な、……何か大きなものを奪われたのを感じたのだろう。

「と言うか……私達と同じではないけどね。　似たような境遇っぽい臭いがしたし☆」

……やっぱり……。

そう言って、束は笑った。

……他人とは思えないって奴？

束の笑みにつられ、リリィも笑った。

「世間って狭いね～。」

「この場合、狭いというの？」

そういいながら、束を後ろから抱き締める。

束の髪の毛から良い臭いがした。

リリィは目をつぶり、抱きしめる手を無意識のうちに強くした。

「とりあえず、説明させてね。」

束の一言により、現実に引き戻される。

「今回の私は、ちょっと違うよ～☆　角がついて赤くなって三倍になるよ～♪」

……何処の少佐……。

「まぁいいや、今回は少しだけ本気のお話だから……。」

その言葉に、リリィは嫌な感じを受けた。

「お話」が「Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ」に聞こえたからだ。

頭がおかしくなったのか、と思ったが至って正常だ。

よく寝たし、その間に取られたバイタルに異常は見当たらない。

気のせいと感じ、束の言葉を待つ。

そして放たれた言葉は、とんでもないことだった。

「で、今日は何をすればいいんだ？」

一夏はアリーナで箒とセシリア、鈴、シャルルと共にいた。

一夏と箒とセシリアは、初期放課後特別授業メンバーだ。

つまり、リリィがＩＳ学園に来て初めての教え子たちだ。

鈴とシャルルは、第二期メンバーだ。

ちなみに、この時期メンバーの呼び方を考えたのは、主に一夏と箒。

主に悪ノリで話していたらセシリアも加わり、更に束も加わって名称がついた。

訳の分からない名称だが、特別授業をする際は指導を受ける順番としては良い意味で役に立つ。

ちなみにこの第二期メンバー、参加は今日が初めてだ。

鈴は一夏が放課後に訓練している相手が、リリィである事を思い出し。

シャルルは一夏が参加するからという理由でだ。

だが、未だに授業は開かれない。

リリィがいないのだから。

悪い事にこの授業、全員の訓練に付いて全てリリィが管理しており、次に何をやればいい

のか分からないのだ。

前に同じ事があり、一夏と箒が打ち合っていろんな事をやっていたら、その日の授業はとんでもない事ばかりで、セシリアも巻き添えを食らってしまった。

それ以降、授業前に行動するのはダメという項目ができたのは……全員の無意識下での事。

そんな授業にリリィが以内となれば、全員の表情が変わるという物だ。

「……やっぱり僕が、何かしたのかな？」

シャルルが午前の授業で何かしたのかと思い、表情を暗くする。

その表情に一夏は、慰めにはいる。

≪はろはろ～♪　箒ちゃん☆≫

そんな中、紅椿のモニターが通信を繋いだ。

相手は束。

箒は突然の通信に、一瞬唖然とした。

≪今日の授業ね～、少し遅れそうだから……あ、これ？　うん。先にやってて欲しいんだよ～♪≫

束は横を向いて、誰かに確認しながら何かを転送し始める。

おそらく横にいるのは、リリィだろう。

一夏もその言葉を聞いて、シャルルの慰めにはいる。

「ちょっと、姉さん。　なんで遅れてるんですか……。」

時間とか約束に律儀な箒は、遅れる理由が説明されないからか少しばかり怒る。

その間に、紅椿が束からの転送を受信する。

束は口に人差し指を置き、返答の言葉を選ぶ。

≪え～っとね～。　デュノア社と取引してるんだよ☆≫

その言葉に、シャルルの身体が大きく跳ね上がる。

全員束に注目しているから、シャルルの事には誰も気がつかない。

全員の表情は、「なぜ？」と言う感じに眉をひそめていた。

≪楽しい事になるよ～♪　じゃね～♪　少ししたらそっち行くね～☆≫

その言葉を最後に通信は切れた。

とりあえず、メニューを全員で見始めた。

０９６　天才ウサギはやっぱりおかしい（後書き）

……書くのがめんどくさい……。

駄文……。

そして、シャルの経歴バレるの早い……。

全て、束達がいるから原作より前倒しになっていますｗｗｗ

さて、次回が１００話目ですか……。

まぁ、「おめでと～」と自分で言っておきますか……。

０９７　訓練中に不意打ち射撃（前書き）

……１００話目だ～ｗ

うれしくな～いｗ

だって、１話１話文字少ないじゃん。

それを、１日に結構更新してるんだから、当たり前の様な気がする……。

まぁ、何にしても……１００話目です。

あとがきに続く。

０９７　訓練中に不意打ち射撃

「さ～て、どうかな～。」

「どうかな～☆」

リリィと束は、デュノア社との取引を終えアリーナに足を運んでいた。

というか、すでにアリーナに入っている。

全員の死角の位置に。

そこからこっそりと、練習風景を見る。

何と言うか、やっぱり一夏が死にかけていた。

一夏に送った練習内容は、≪箒とＩＳをつけて剣道≫だ。

たぶん、最初に見たであろう箒は目を丸くしただろう。

普通ならＩＳで剣道と言う意味が分からない。

ＩＳ自体が身体の動きのトレースするのだから、やるのなら普通の剣道で良いはずだ。

だが、一夏にとってはこっちの方が良い。

絶対防御があるからとはいえ、向かってくるのは殺しもできる刃な

のだ。

恐怖心が湧き出て、必死でやってくれるだろうと思い、そういう内容にした。

一夏と箒はこれで良い。

セシリアは出来る限り誘導兵器を使いつつ、戦況判断。

送ったのは≪シャルルと鈴を相手に誘導兵器のみで戦闘し、詳しく戦闘状況を判断する≫だが。

誘導兵器と射撃の両立は結構頭を使う。

考えを四つ以上、出来れば移動や射撃、戦況を含めて七つは必要だ。

それでも最低ラインだが……。

シャルルと鈴には、誘導兵器と言う物を体感してもらうべきである。

ちなみにセシリアの模擬戦闘は、一夏と箒でもやったため二回目となる。

「皆、真面目だね～♪」

そういいながら束は笑う。

その顔を見て、リリィは少しばかり悪い様に笑う。

束はその笑い方に媚を傾げて、リリィを見た。

「まぁ、真面目すぎて周りを見てないって言うのはダメだよね？」

その言葉に束はアリーナを見渡した。

しかし、何もない。

リリィが指を上に指す。

「？　……あ。」

青い誘導兵器。

ブルー・ティアーズではない誘導兵器があった。

フリーダムのドラグーンだ。

それらが展開していた。

アリーナの上空に、分かりにくい配置で八基も。

「さて、今から攻撃したら皆対処できるかな？」

束は何故リリィが笑ったか、理解できた。

一夏達全員、真面目すぎて周囲に気を配って無い。

周りが見れてないのだ。

注意散漫と言うやつだろう。

束は少し呆れた。

だが、同時に面白そうと言う感情が前に出た。

表情にも。

リリィが操作し始めたのか、ドラグーンが動き始める。

そしてセシリアが回避できる程度にビームを撃った。

「っ！？」

セシリアは瞬間的に後退することでビームを避ける。

その様子に、一夏達全員が目を見開く。

そして辺りを見渡す。

だが、そんな時間をリリィは与えなかった。

高速でドラグーンを移動させながら、射撃させ始めた。

全基使って、だ。

その射撃は、正確に専用機持ちを狙い回避運動せざる負えなくなった。

「リリィちゃん……いくらなんでもアレは……。」

束が珍しく、いい淀む。

束の目には、豪雨のように上空から降る翠の光条が見えた。

八基の誘導兵器が撃っている物とは思えない、光条の量だ。

どう見ても、一基から五条の光が出ているようにしか見えない。

束は目を擦って見直すが、やっぱり五条出ている気がする。

「なんなんだっ！！」

一夏が叫ぶ。

だがそれに答えてくれる者はおらず、一夏は必死に避けた。

雪片のビームコーティング刃で切ったり避けたりと、かなり成長した避け方を見せる。

だが、それはビームが一定方向……つまり上からしか来ないから出来るのだろう。

オールレンジで攻撃したら、おそらく対処できずに落ちる。

リリィは全員回避行動に入ってからの被弾率を見る。

≪白式　１４％≫

≪紅椿　１６％≫

≪ブルー・ティアーズ　１９％≫

≪甲龍　３４％≫

≪ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩ　４０％≫

流石に一夏達は被弾率が少ない。

一夏や箒はブレードで攻撃を防ぐことができるのに対し、セシリアはそれができない。

純粋な回避だけになるためか、一夏達より被弾率は多い。

それでも些細な差だが。

鈴達は慢心していたのか、回避起動が遅い。

そのため、攻撃がかなりあたり被弾率が大きい。

シャルルは専用機とはいえ、量産機をカスタムしただけの性能。

軌道が悪く、被弾率が大きいのは仕方がない。

「ああ、もうっ！　リリィさんですわねっ！！」

セシリアがそう叫ぶと、リリィはドラグーンの射撃を止めた。

全員が、射撃が止んだ瞬間に上を向く。

「……やはり、ドラグーンですわね。」

そう言うと、ドラグーンはリリィに向かってくる。

背後で翼に戻る様な形で停止すると、不可視状態になった。

０９７　訓練中に不意打ち射撃（後書き）

ドラグーンで緊急回避率を見るというのは、鬼畜ですかね？

被弾率や、回避状態、瞬時判断が見れて良いと思いますけど、やられた方はたまったもんじゃないでしょうね～。

さて、１００話……というより、１００部目です。

２話ほど説明入れたし、プロローグを１話と思わない。

と言うわけで、１００話目ではなく、１００分目で～す。

いえ～い……。

……はぁ。

ダウナーな気分です……。

……はい……。

０９８　シャルルの誤解（前書き）

……ここ最近、何を書いてるか分からなくなってきた……。

何をやってるんだ……私は……。

０９８　シャルルの誤解

「はろはろ～。」

そういいながら、リリィが一夏達の前に現れる。

「皆よく避けたね～☆　束さんびっくりだよ～。」

束もそれに続いて現れる。

他人嫌いが現れないのは、良い事なのだが……。

おそらく束の「皆」という言葉は、一夏、箒、そしておそらくシャルルを指すのだろう。

セシリアと鈴は、多分……目には入っていると思うけど、束から相手をする気はないのだろう。

すでに全員ＩＳを戻しており、座っていたり、膝に手を置いて息をしていた。

「いきなり驚きましたわ。」

セシリアがそういいながら、リリィに近づく。

だが、リリィは笑いながらそれを流す。

「ごめんごめん。　今のは、全員の回避率の確認をしたかっただけだから。」

そう言ってセシリアの顔に手をつける。

「「「「「っ！？」」」」」

全員その行動に、顔を赤くした。

優しく、下顎と頬を包み込むように触れる。

セシリアは思わず、目をつぶってしまった。

「キスするのではないか？」そう思ったのだろう。

「あったあった。」

だがリリィの言葉に、セシリアは再度目を見開く。

「ブルー・ティアーズ。　コネクションハッチとウインドウをオープン。」

そう言うと、セシリアの周りにモニターが映り始める。

基本、専用機のウインドウ展開は、搭乗者しか自在に展開する事が出来ない。

だが、リリィは展開させた。

気が付くと、セシリアの顔から手が離されていた。

キスという、行為で無かった事にセシリアは嬉しいのか、悲しいの

か複雑な心境になる。

一夏に守られてからと言うもの惚れているのだが、自身のあり方を作ったリリィに対しても惚れていた。

「惚れていた」と言うより敬愛と熱愛の間ぐらいなのだが……。

「さて、ちょっと待ってね～♪」

そういいながら、高速でキーを叩く。

その光景に、初めて見る一夏達は目を見張った。

「……早すぎない？」

鈴の言葉が皮切りに、会話が発生する。

もの凄い速度でモニターが映り替わっていく。

そして最後のモニターが消えると、コネクションハッチからケーブルを抜く。

「……さてこれでおしまい。　後はセシリアの努力次第だね。」

その言葉に、セシリアは首を傾げた。

その行動にリリィも首を傾げたが、何かに気がついたのか首を戻す。

「強化プログラムだよ。　ブルー・ティアーズの。」

そう言って、少し離れる。

「だったら……なんであんなことしたのよ……。」

鈴が息切れした声で喋る。

「私達はＩＳに触れれば、メンテナンスハッチを開けるんだよ～♪」

そう答えたのは束だ。

その言葉に、大半は納得した。

一夏は「ああ、束さんとリリィだしな～」と済ませ、大半はそんな感じだ。

だが、鈴とシャルルは不思議そうにしていた。

「あ、あの。」

「ん？」

シャルルが思いきって、リリィに話しかける。

その表情は、リリィがアリーナに習われてから少し暗い。

「午前中は済みませんでしたっ！」

その言葉と共に、シャルルは頭を下げる。

一夏達はその行動に、リリィがどう出るか少し不安だった。

「午前中？　何かあったっけ？」

だが、リリィは首を傾げながらシャルルの言葉に疑問を持つだけだった。

シャルルはその言葉に、目を見開きリリィを見た。

「……え？　授業で……。」

その言葉に、さらに首を傾げ眉も顰める。

「……束。　午前中の授業で何かあったっけ？」

本当に分からなさそうに、振り向きながら束に聞く。

聞かれた束は、首を振って「何もないよ」と答えた。

この答えに、シャルルは本当に驚いた。

「じゃぁ、なんでリリィはアリーナから出て、今まで授業に出なかったんだ？」

一夏がシャルルが聞きずらかった事を代わりに聞いた。

リリィが上を向いて考える。

シャルルは裁判を待つ、罪人の気分で言葉を待った。

「……用事。」

リリィはそう言って、答えを返した。

098　シャルルの誤解（後書き）

さて……特に書くことなしw

あ、そうそう。

結構前に買った、ＰＧ（パーフェクトグレード）ストライクフリーダム　を作ろうかな～　と思っています。

結構前に買ったのに、ずーっと放置でしたよ……。

まだ、ＭＧ系を作って無いのがいっぱいあって困ってたりもしますw

そのため更新が低下するかもしれません。

多分、しないでしょう……。

０９９　鈴弄り（前書き）

まぁ、前話で被弾してしまった甲龍の強化プラン……は、しませんがそう言う系のお話……。

肩が凝った……（泣）

099　鈴弄り

「さて、シャルルと鈴は今日からと言う事だけど、ちょっと待ってもらえるかな？」

リリィがそう言うと、鈴が口を開いた。

「そりゃそうでしょ。　訓練でもダメージレベルＡの機体が何があるか分かんないからね。」

先のドラグーン。

甲龍とラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩは回避しきれずに、各部ダメージを負ってしまったのだ。

訓練とは言え先ほどの密度の高い射撃の雨に当たれば、今度こそダメージレベルがＢを越えて修理が大変な事になる。

ダメージレベルＢぐらい問題無いように思えるが、破損した部分に装甲板の取り換え、その調整など結構面倒な部分が多いのだ。

「まぁ、私が攻撃したんだし、私が修理するよ。」

そう言って鈴を見た。

その言葉に鈴とシャルルは目を見開く。

そして思い出したのか、一つの疑問を問いかけた。

「……アンタ、何者よ？」

シャルルも同意したりはしないが、かなり気になっていたようだ。

その問いかけに少し考えるが、鈴がさらに言葉を続ける。

「篠ノ之博士と一緒にいるわ、強いわ……ＩＳが修理できるわ……。
そんな人間、聞いたこともないわよ？」

その言葉に、リリィは思い出した。

束の所在は国際ＩＳ委員会しか知らず、各国には情報さえ行ってないのだ。

そりゃ、天下の大天才がいれば驚くね……。

「リリィちゃんは、天才なのだよ～☆　私以上にね♪」

その言葉に鈴とシャルルは口が開く。

「何言って……。」

「一応ＩＳ開発者の一人と言う事だ。」

シャルルの言葉に、リリィは言う事を言ってモニターに目を向ける。

その言葉に絶句した。

理由は……いつもの通りだ。

初めてあった者は、必ず絶句する。

その光景に、少しばかり呆れた。

「まぁ、今日は訓練はおしまい。　少しＩＳの頼りない部分が分かったし、セシリア用の近接用武器と防御用の装備も作っておくね。」

そういうと、セシリアは一気に表情を変えた。

すでにセシリアの改良したプログラムにはパスワードがかかっており、もし無理にでもパスワードを外そうとすると、ブルー・ティアーズのデーターが全部消え使い物にならなくなる。

ソフトを改造しただけで、メンテナンスはいつも通りにやれるのでこれ以上やる事は無いのだが、スナイパーライフルに誘導兵器だけでは流石に厳しい時がある。

国際ＩＳ委員会に提出したデーターで、セシリア用の近接武器は作れるためそう言っただけだ。

「甲龍を直す際、少し手を加えた方が良いかな？」

そう言ってリリィは笑う。

その時の鈴の顔は、最初に改良を提案した時のセシリアみたいな顔ではなく。

確実に、おもちゃを貰って嬉しがるような子供の顔だった。

まだ、何もあげてはいないけど……。

「アンビデクストラス・フォームと刃にビームコーティングぐらいなら、簡単にできるから。　けど技術面が、ねェ……。」

その言葉に、鈴は頬を膨らませた。

「いや、持ってても過ぎた宝だよ？」

遠まわしに、鈴が弱いとリリィは言った。

本来ならそれほど弱くはないのだろう。

だが、甲龍の性能を鈴が上手く使えてない。

そこに、新規機能を追加してどうなる。

中途半端のままで完成したという事になる。

「だから、甲龍の正確な戦闘方法が出来たらそこら辺は改造して上げる。」

ぶっちゃけ、嫌味だった。

その言葉に鈴は頭に来たのか、反発しようと口を開いた。

「私の何処が……。」

「え、衝撃砲の使い方。　青龍刀の使い方。」

だが、リリィは言い終える前に指摘した。

「慢心過ぎ。　背が小さすぎ。　牛乳飲まな過ぎ。」

「牛乳は毎日飲んでるわっ！！」

リリィの言葉に鈴がキレた。

「……後半……関係あるのか？」

一夏がそう言うと、箒が「あるわけないだろ……」と突っ込む。

鈴はやけくそ気味に「だったらやってやろうじゃないっ！！」と叫んだ。

０９９　鈴弄り（後書き）

セシリアの問題点は、インターセプターがショートブレードで、さらに防御系の装備が無いという……あ、もちろん絶対防御以外でですよ。

それさえ増えれば、戦術性は結構増えると思う……。

誘導兵器の次の課題はミドルとクロスの戦闘が上がるとは……。

甲龍は……衝撃砲を交互に撃って隙を潰して、接近した所に青龍刀と言うパターンが強いはず。

あとは、せめて武術さえあればね～。

さて、最後のいじりに「胸が小さすぎ」と付け加えるべきだったのか……。

絶対切れて、落ちになるね。

オチ？

作らないよ？

さて、一応プロローグ含めたら……コレ１００話目。

だけど、サブタイは０９９なため９９話目。

次回１００話目……多分、シャルとリリィと束の話し合いになると思う。

１００　解決はお早めに（前書き）

……シャルのバレが早い……。

初日でばれる……。

初日で、解決する……。

なんだこれ……。

急展開過ぎでしょ……。

１００　解決はお早めに

「で、シャルルの機体は……。」

リリィはそこで言葉を止める。

皆の眉が曲がる。

「改造するよ～♪　徹底改造だよ～♪　別機体かもね～☆」

束がリリィの止めをじれったく感じたのか、先にそう言った。

束のその言葉に全員が目を見開く。

「「「「「えっ！？」」」」」

やはり驚いた。

その言葉に、リリィは頭を抱えため息を漏らした。

束……今喋るか普通……。

「……ど、どういうこと？」

一番驚いていたのは本人だった。

束が口を開いた瞬間、リリィは束の口をふさぐ。

これ以上、場を混乱させないためにも……。

その光景に、唖然としながら全員頭を悩ませていた。

シャルルに至っては、すでにパニックの域だ。

「……まぁ、積もる話があるから、後で部屋に来てね。」

そう言いながら、リリィは束を連れてアリーナから出た。

誘拐犯のように……。

その様子を見て箒が「なにがしたかったんだ?」と言って場を戻した。

夜。

控えめなノックが、リリィの耳に届いた。

カメラが回っていて、そこにシャルルの姿が映っていた。

リリィはドアに近づくと、シャルルを招き入れる。

「……おじゃまします……。」

控えめにそう言って、シャルルは部屋に入った。

束は部屋の中央でパーツを組んでいた。

シャルルの入室に気が付くと、振り返りざま笑顔で口を開いた。

「いらっしゃい～☆　シャルロットちゃん♪」

その言葉に驚愕しながらも、やっぱりと言う顔をしていた。

「そしてようこそ、篠ノ之旅団へ。　旅団長のナノハ・タカマチだ……。」

「はい、椅子ね。」

束の言葉を無視して、リリィはシャルル……いや、シャルロットに椅子を出す。

テーブルに備え付けられている椅子で、そんなに高くはない。

というか、完全にＩＳ学園の支給品だったりもする。

シャルロットは苦笑いしながら、出された椅子に座る。

「……無視しないで～。　……泣いちゃうよ……。」

泣きそうな声を出し、束は言った。

リリィは無視をした。

喋った言葉が、言ってはいけないと思ったからだ。

「泣けばいいと思うよ？」

「酷いっ！！」

リリィの辛らつな言葉に、束は何処からともなく出したハンカチを噛み始めた。

その光景に苦笑いしながら、シャルルは口を開く。

「ところで、どうして僕が女だって分かったんですか？　今日初めて会ったのに……。」

その言葉にリリィは束の相手を止め、自身も椅子に座る。

そして、いつの間にか作ってあった紅茶を飲む。

「……いつって……見て分かるけど？」

その言葉に、シャルロットは目を見開き自身の身体を見直した。

「……もしかして……、全員に気がつかれてました？」

シャルロットがそう聞くと、リリィは首を振って否定した。

それを見ると、シャルロットは胸をなでおろした。

「まぁ、それは良いとして。　シャルロット・デュノア。」

フルネームで呼ばれた事により、シャルロットは身体を硬直させた。

「デュノア社のテストパイロット、解雇だって。」

「……へ？」

リリィの言葉に、シャルロットは目を見開き間抜けな声を出した。

対するリリィは、紅茶を飲んで目を瞑っている。

「あ、あの？」

シャルロットが混乱し始めたので、リリィは束が集めたデーターを見せた。

そして話し合った事を言うと、シャルロットは唖然とした。

「……で、シャルロットの経歴は全て。　ここまでで何か違う点ある？」

そう言って質問するが、シャルロットは唖然としたままだ。

ためしに目の前で、手を振ってみたが反応が無い。

少ししして気がついたのか再度問いかけると、「そのとおりです」と返事をがあった。

返事と共に、拍手もしていた。

１００　解決はお早めに（後書き）

まぁ、初日バレには……何か意味あったのかな？

多分あったはず……。

確かあった。

うん。

まぁそんなこんなで１００話目でした……。

一体何処が話の区切りなのやら……。

私「おめでと～いえ～ぃ（悲笑）ｗｗｗ

１０１　シャルロット・デュノア（前書き）

……解決しちゃった……。

もう少し時間をかけようよ……。

うん。

まだ転入初日だよ？？

101　シャルロット・デュノア

「で、私は思うんだよね……。」

その言葉にシャルロットは首を傾げた。

「親が子供をどうこうしていい理由は無いって……ね。」

そう言うと、リリィは目を伏せた。

シャルロットは逆にその言葉を聞き目を見開いた。

「で、自由に生きたいと思わない？」

リリィの言葉に、少し躊躇いながらもシャルロットは頷く。

それを見た束は、モニターを映してシャルロットの前に出した。

シャルロットは不思議そうにそれを見る。

すると、途中まで読んだ目が大きく開かれた。

「……まぁ、それを蹴ってデュノアに戻っても良いけど？」

リリィがそう言うが、聞いてないのか文字に集中していた。

モニターに書いてある事を一言にするならば、以下のようになる。

≪シャルロット・デュノアを自由にする代わりに、第三世代の技術、

情報を送る。≫

簡単な取引だった。

簡略的に説明するのなら、以下のようになる。

シャルロット・デュノアの身柄を篠ノ之束が引き受ける。

こちらからは第三世代の技術と情報を送らせていただく。

シャルロット・デュノアのＩＳ学園での三年間の費用はデュノア社で負担する。

シャルロット・デュノアを篠ノ之束が養子縁組として引き取る。

シャルロット・デュノアが所持していたＩＳを回収しない。

これらがすべて終了した以降、デュノア社はいかなる状況でもシャルロット・デュノアに接触してはならない。

本人が望むなら、上記の事は無効とする。

なおこの条件は、シャルロット・デュノアが了承した場合だけしか認めない。

一方的な取引だが、デュノア社は了承をした。

後は、シャルロットが了承し転送すれば完了だ。

それを見たシャルロットは、呆然としながらリリィを見る。

「……どうして……僕を助けたの？」

その言葉に束は笑って答える。

「私達も似たような物だからね。」

そう言って束はリリィを見る。

リリィは相変わらず目をつぶっており、寝ているのではと思うほど静かだった。

だが起きている。

「……私の親は、生きてるよ……けどね……。　私は捨てられたも同然だし……。」

「私は五歳の頃に、親は死んだ。　あとは、シャルロットの親みたいな引き取り手から逃げてた……。」

「つまり、私達はシャルロットちゃんを見捨てておけなかった……。ただそれだけだよ。」

束はそう言うとシャルロットに近づき、後ろから抱き締めた。

母が死んで、母が父の不倫相手と知り、本妻の人に叩かれ、父には邪魔者ごとく相手にされず、ＩＳ敵性があるからと道具にされ、男装してこき使われ……。

そんなシャルロットがたどり着いた先が、束の腕の中だった。

（……温かい……。）

その温かさが、シャルロットを苦しめた。

「頑張ったね……。　もう大丈夫だよ……。」

シャルロットは束の言葉に思わず涙が出た。

その涙を抑えていたダムが決壊し、目から大量に涙が零れた。

「……大丈夫？」

リリィは大きな声で大泣きしたシャルロットを、心配そうに眺めた。

目が涙で充血して、いかにも泣いたという感じが残っていた。

「……うん……。」

シャルロットは大丈夫と答えるが、大丈夫に見えない。

「で、お返事はどうかな？」

「焦らせるな。」

束の頭を叩き、リリィはそう言う。

未だ涙目で、服の裾で涙をふくシャルロットの姿は、女性にしか見えない。

「返事は急がな……。」

「お願いします。」

リリィの言葉を遮るように、シャルロットは言葉を発した。

取引を了承する返事。

未だ涙目だが、嬉し泣きなのか何なのかよく分からない。

だが、声はしっかりとしていた。

その言葉を聞き束は、情報をデュノア社に転送した。

そしてシャルロットが自由になった。

（……養子ってことは……博士をお母さんって呼んだ方がいいのかな？）

新たな悩みを抱えて……。

１０１　シャルロット・デュノア（後書き）

……と言う事で、前話で終わらせたかったけど終わらなかった……。

もっと長くてもいいはずなのに、ショート並みの文字数だからキリが悪くなるという……。

そして、一夏のフラグをへし折り……。

これは束の策略か？

この話は、リリィに家族を増やしたいと思った私が……苦し紛れに作った物です。

……このままいきつく先が、駄作と言う門なのがいやだな……。

軽めに決定した事項

ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩは消えません。

ですが、ＭＳ計画も消えません。

ラファールのコアを使って、新しく機体を作り上げます。

白騎士と同じ構造ですが、性能はラファールの方が低いです。

ですが、……って書かない方がいいか？

ＩＭＳとでも名称つけましょうか？

全身装甲のＩＳと思ってください。

基本はラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩですが。

使用者が設定することで、全身装甲へのＭＳへ変更可能になります。

白騎士と同じように、ビームは使えますが限界時間があります。

ですが、ＩＳです。

白騎士同様に第五世代に分類しますが、書類上ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩが第二世代機なので、カテゴリーは第二世代です。

第五世代機は拡張領域が、もの凄いと思ってください。

そこに別装甲を収納している感じで……。

長々と失礼しました。

１０２　改造と問題点（前書き）

さて、転入二日目。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩはリリィ達の部屋にありますｗ

１０２　改造と問題点

朝日が昇ると、リリィは目が覚める。

昨日はシャルロットと遅くまで、話し込んだな……。

そのあとは……。

ああ、シャルロットの専用機を完了してたんだっけね……。

そう思いながら、起きあがる。

「おはよ。」

朝弱い束が、シャルロットから預かったラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩの前にしゃがみながらこちらを見ていた。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩは装甲板を外されており、骨組みだけとなっていた。

「……朝から性が出るね……。」

そうリリィが言うと、束は笑顔で答えた。

「だって、娘のためだから♪」

確かに養子として引き取ったという事は、束がシャルロットの母親と言う事になる。

だが、本当に娘と言っていいのだろうか。

会って間もないのに。

そう思っていた時に思い出した。

初めて束にあったとき、もの凄い勢いで抱きしめられたな、と。

「シャルロットに合う機体と言えば、アレか？」

「うん、アレ♪」

そう言って、近くに置いてある外装甲パーツを拾う。

頭全体を隠す、顔。

フリーダムに酷似しているが、細部がかなり違う。

「というか、リリィちゃん……娘にシャルロットって、無いんじゃない？」

その言葉に、持っていた頭を落としそうになった。

よくよく考えれば、シャルロットは束の義娘になる。

そして束は、リリィの妻になる。

そうなるなら、シャルロットはリリィの義娘と言う事になるのだ。

確かにシャルロットと真面目に呼ぶのは、少しおかしいだろう。

だが、少しばかり抵抗がある。

初めての事だからだろう。

そんなリリィの心境を知ってか、束は言った。

「呼んであげたら、シャルって♪」

その言葉に少しばかり抵抗が消え、リリィはベットから立ち上がる。

着替えようと思ったのだが、動けない。

装甲が大量に散らばっており、足の踏み場がなかった。

リリィはそれを見て、昨夜解決できなかった問題を思い出す。

「そう言えば、拡張領域はどうなってる？」

ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩが基礎フレームだが、別のフレームを拡張領域に入れる事により、フリーダム同様の全身装甲機体に変化することができる。

だがそれには、かなりの拡張領域が必要となる。

更に製作中の機体は、装備にも拡張領域を使うのだ。

最低でもラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩの八十倍は必要になってしまう。

「そこら辺は、ほら～♪　天才束さんが思いつきましたよ～☆」

そう言ってモニターを映す。

リリィはそのモニターを見ると、納得した。

白騎士の拡張領域を超えた、領域数を誇る設計図が現れた。

「これなら、問題は解決したよ♪」

そう言ってVサインをする。

確かに装甲と主な兵装を装備しても問題がなさそうだ。

「後問題は、この装備が左側しか展開出来ないのと、これが重すぎるというのが問題かな～。」

モニターに武器が映る。

両方武器とも背部装備武器だ。

このほかにも装備はあるが、こちらは白騎士で実験が済んでいるため問題はなし。

「……やっぱ、思考補助誘導システム作っておく？」

「……お願いしていいかな？」

お互い、苦笑いでそう言う。

思考補助誘導システム。

砲撃や射撃用に考えたシステムだ。

目で見た物にマーカーを自動でセットし、機械が射撃補助してくれるという物だ。

思考判断だから、特殊な操作や感覚はいらない。

他にもシステムを使用するだけで、持つのが困難なものを簡単に持つ事が出来たりもする。

だが、これには欠点がある。

全身装甲機体で無ければ、使用することが不可能なのだ。

ＩＳにシステムを積めば、射撃時に補正を行おうとしようにも、露出した腕部分が誤差を生んでしまう。

重い物を持つ場合も同様だ。

結局は露出した腕部分に負担が行く。

そのため、開発を完成させる前に中断したのだ。

リリィは朝食前に、システムの基礎構築は終わらせようと思った。

１０２　改造と問題点（後書き）

前話あとがきに書いた事を、そのまま書いたもんです。

天才に出来ない事はないっ！

多分ね……。

さて、この機体を使用する事は問題になるか、ならないか……。

なっても、突き進むけどね。

１．０００．０００アクセス　ユニーク６０．０００　達成

１０３　完成する機体とセシリア爆弾（前書き）

……セシリア爆弾は……まぁ、アレです。

ようやく原作に戻ってきた気がしました。

１０３　完成する機体とセシリア爆弾

気がつけば昼だった。

朝からラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩの改造をしていたためか、腰が痛い。

そう思いながら、骨を鳴らす。

「凄い音だね～♪」

束は笑いながらリリィを見た。

目の前には、組み上がったＩＳ。

フリーダムと白騎士を足した様な機体があった。

外はフリーダム。

性能は、フリーダムと白騎士。

構造は、ほぼ白騎士。

結果的に、一種の完成を果たした機体が鎮座していた。

「ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩも使えるけど、使いどころが問題だよね～☆」

束はそう言って、モニターを出す。

そこへ高速で指を走らせた。

リリィのプログラムには手を付けづ、機体の調整だけしていた。

元のラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩから、大体の起動状況は理解ができたため、調整は簡単だった。

「……ほい♪　かんせ～い☆」

基礎フレームがラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩのため、通常展開時はラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩとして現れる。

シャルロットが使用したままの状態でだ。

だが、シャルロット本人が展開を変えると考えれば、自動的にＩＳがモニターを出しボタンを一つで、目の前の機体に変形すると言うわけだ。

「そう言えば、お昼まだだったよね？」

束が立ち上がりながらそう言う。

目の前の機体がラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩになり、そして十字架のついたネックレスになった。

リリィはそれを拾い上げ、考える。

「一夏達でも探して、一緒に食べるか？」

ポケットにシャルロットのＩＳを入れながら、そう言うと束は考える。

そしてなぜか、ウサミミが伸びる。

「今日は何か買って、いっくんたちと合流しよ～う♪」

そう言って、散らかしたままの部屋から出て行った。

それを見てリリィは、急いで着替えるとその後を追った。

「何アレ？」

一夏達を探して、見た物は箒の苦虫をつぶしたような顔だった。

一夏なら箒と一緒にいるだろうと思った。

だからこそ、束が作った箒ちゃん探知機レーダーを使って探した。

結果的にいた。

運よく、一夏達が食べ始める前に見つける事だ出来た。

だが、一種の修羅場らしき状態だ。

一夏に向かって、弁当がタッパーがバスケットが向けられていた。

「食べて欲しいって、事じゃないかな～？」

束の言葉に、何も言えなくなった。

とりあえず一夏達に近づく。

「はろはろ～。　モテモテだね～いっくん♪」

その言葉に全員束に視線を向ける。

一夏、箒、セシリア、鈴、そして男装したシャルロットだ。

何故シャルロットが男装しているかと言うと、色々と訳があるのだ、訳が……。

まぁ、束が「いっくんと一緒にいて、強くなるまで護衛してもらえる？」と言ったのが事の始まり。

強くなるまでは、男装を止めないだろう。

リリィはその時何も言わなかったが、シャルロットが女性だと知った時に部屋を調整する真耶の困り顔が目に浮かんだ。

「束さん……。」

一夏が情けない声で、束を呼ぶ。

弁当を差し出されたまま。

「凄い状態だね～♪」

そう言いながら、差し出された物を見る。

セシリアが差し出したバスケットの中には、美味しそうなサンドイッチ。

鈴が差し出したタッパーの中には、酢豚が。

箒は蓋の閉まったお弁当箱を持っていた。

パッと見で箒以外のは、美味しそうなのだがよく見るとおかしなことに気が付く。

微量だが、わずかに変な臭いがする。

食材っぽい臭いが主に臭うが、それに混じって化学反応を起こしている様な臭いもした。

リリィは全員を見ながら考える。

一夏は何も持ってない。

シャルロットは何も食べてないし、開けてはいない。

箒も同様だ。

鈴も差し出しているのは蓋の閉まったタッパーで、本人は何も食べてはいない。

セシリアのバスケットは開いている。

「セシリア……ちょっと良いかな？」

そう言ってサンドイッチを手に取る。

それを見た一夏と鈴の顔が驚愕する。

まるで、食べてはいけないというように。

リリィは「……まさかね」と思いながら、サンドイッチを食べる。

「っ！？」

その瞬間、リリィの眉が動いた。

……不味い……。

レタスを糠に付けた様な感触に、トマトケチャップから甘さを感じるほどの砂糖の量。

人が食べるものではなかった。

１０３　完成する機体とセシリア爆弾（後書き）

書くことがありません。

どうすれば……。

機体の初お披露目はいつが良いかな？

やっぱ、ＶＴシステム発動時が良いかな～。

１０４　屋上に集まる影は（前書き）

……原作に戻ってきた？

前にも同じ事言ったね……。

１０４　屋上に集まる影は

リリィがサンドイッチを食べてから何も喋らなくなったため、不思議に思い束もサンドイッチを口に入れた。

その光景に、一夏と鈴は目を見開いた。

「……にゃ……。」

「にゃ？」

セシリアはその言葉に首を傾げ、一夏達は耳をふさいだ。

「にゃにコレっ！？！？　不味いっ！！」

その言葉にセシリアは目を見開く。

一夏達は、束の叫びが終わると耳をふさぐのを止めた。

サンドイッチの不味さに、ウサミミが動く。

束は持っていたペットボトルで、サンドイッチを強引に流し込んだ。

そして深いため息をついた後、リリィに飲んだペットボトルを渡す。

リリィはそれを受け取ると、束同様にサンドイッチを流し込んだ。

沈黙がその場を支配する。

「……自分で食べてみろ……。」

リリィの口調が代わり、その威圧にセシリアは首を傾げながらサンドイッチを食べた。

「っ！？！？」

そして涙目になった。

自身が作った物の不味さに、ようやく気がついたのだろう。

口を押さえながら謝り始めた。

「……オルコットさん、僕のパン食べる？」

シャルロットはそう言いながら、何個か入っているパンの袋ををセシリアに向ける。

セシリアは涙目になりながら「すみません」と謝り、パンを貰った。

リリィと束は、一夏と鈴の間に腰を下ろした。

「セシリアは料理した時味見しなかったの？」

リリィはそう言いながらパンの袋を開ける。

その言葉にセシリアは再度暗くなる。

「……ええ……。」

その言葉に少しため息をついた。

一夏を見ると、セシリアを微妙な顔で見ていた。

……もしかして、一夏……美味しいって言ったのかな？

多分、言ったね……。

セシリアを傷つけないように……。

けど……一夏……、いつか身を滅ぼすよ？

その考えながら、話題をそらそうとリリィは口を開いた。

「酢豚は上手く出来てるね。」

そう言うと、鈴は無い胸を張った。

見た目は上手く出来ている。

においも変な感じはしない。

「ふふ～ん、当たり前よ。」

そう言ってタッパーを差し出してきた。

食べろと言う事なのだろうか？

束がなぜか、ウサミミから箸を取り出す。

何故装備されているかは、リリィにも謎だ。

リリィは箸を受け取ると、唖然としてその光景を見ていた鈴の酢豚を少しだけもらった。

「……うん、悪くない。」

一応褒めておく。

「こんな事になるんだったら、お弁当作って欲しかったな～。」

束はそう言ってリリィを見た。

無言の要求。

ウサミミがパタパタと動く。

その音が屋上に響く。

一夏達はそれを唖然として見ていた。

「……作ってあげるから、ウサミミ止めなさい。」

その言葉に束は嬉しそうに返事をして止めた。

そう言って気がついた。

……お弁当箱ってあったっけ？

後で買いに行かないといけないね……。

セシリアが少し恐縮しながらリリィの名を呼んだ。
リリィはセシリアに視線を向けることで、聞き返した。
「……リリィさんはお料理ができるので？」
その言葉に束と一夏の目が光った。
「おぅおぅ、リリィちゃんの料理は絶品だよ～♪」
「おぅ、束さんが言う通りだぜ！」
「ちなみに、リクエストすると数時間後には極上品が完成してると言うほどだっ！」
「アレは凄かった……。　手の動き方が人じゃない……。」
「しかも私達は、幼い時にリリィちゃんの料理しか食べてない時があった。　あ、私はその日から今までね♪」
「俺はその時だけだっ！」
「二人ともうっさいっ！！」
束と一夏の連携発言が徐々に増して言ったので、リリィは束と一夏の頭を叩きながらそう言った。
ちなみに束は優しく叩いたのに、一夏は軽く本気で叩いた。

１０４　屋上に集まる影は（後書き）

自分で書いた束の発言に、不覚にも萌えたｗ

「にゃにコレっ！？！？」

→　これに……ｗ

え～っと、リリィの「うっさいっ」は……姫の発言なんですよね……。

一応……。

頭の中での再生は、姫でやると良いと思う。

私はここを「ＡＮＩＭＥＬＯ　ＳＵＭＭＥＲ　ＬＩＶＥ　２０１０　－ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ－」での姫が言った「うっさいっ」に置き換えていますｗｗ

姫の曲を聴きながら書くと、なんかテンションがおかしな方向に……。

ちなみに今聞いているのは「童話迷宮」。

そして、すまない。

６時に更新ができそうにもないっ！

くそっ！！

１０５　訓練と起動（前書き）

……あれ？

狙った様な話数になった……。

まぁ、良いか。

１０５　訓練と起動

「さて、今日は一夏に私の剣を教えようと思う。」

その言葉に、箒とセシリアは目を丸くした。

一夏はあまり驚かず、元気良く返事をした。

「それに伴い、シャル……ルに直したラファールを返す。」

そう言うとリリィはポケットから、十字架のついたネックレスを取りだした。

シャルロットはそれを見ると、表情を変え喜んだ。

「新規プログラムと、装甲、それに装備を増やしたよ～♪」

束がそう説明する中、シャルロットはリリィからネックレスを受け取る。

「一夏に一通り教えたら、シャルルの機体について説明するから。」

そう言ってシャルロットから束に視線を移す。

少し説明してくれと、視線で会話をした。

そして残った箒とセシリアを見る。

鈴がいないが、用事があるのだろう。

「セシリアは誘導兵器の操作。　箒とシャルルは、誘導兵器の回避訓練。」

今のうちに誘導兵器に少しでもなれてもらいたかった。

ということでセシリア対箒とシャルロットの組み合わせにしてみた。

「千冬姉の剣技……。」

一夏はそう言いながら、握りこぶしを作っていた。

……気合十分かな？

……問題が起きましたよ。

一夏に「一閃、白鷺」を教えていたら、近くにいたラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩを装備したシャルロットの周囲がモニターだらけになった……。

全員その光景を驚きながら見る。

一番驚いているのはシャルロットだろうが、それ以上にリリィと束が驚いていた。

全ての肯定が終了したのか、モニターが一つになる。

≪ＯＫ？≫

ただそう書いてあった。

シャルロットは不安げに束を見た。

……まぁ、押しても大丈夫でしょう。

頷く事で許可を出す。

シャルロットがそれを見て、おそるおそる許可を示す。

その瞬間、ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩとシャルロットの姿が消えた。

消えたと言うのは語弊がある。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩとシャルロットとは別の機体がそこに立っていた。

それを見て、製作者以外唖然とする。

その姿は、フリーダムとかなり酷似していたのだから。

灰色の全身装甲の機体。

頭部には四本の角の様なアンテナ。

胸の中央部は少しばかり出ているが、デザイン的におかしくはない。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩと同サイズだが、どのＩＳよりも強いと言う事が分かる。

左手には、フリーダムと同じサイズのシールド。

右手には、ライフル。

足の構造、腰の作り。

そのどれもが、全員が知っている物だった。

鈴だけは殆ど知らないが、外見は似たような物を知っていた。

≪ＧＡＴ－Ｘ１０５　起動を確認。≫

≪初期システム起動。≫

≪機体と搭乗者の保護のため、フェイズシフト装甲を起動させます。≫

十年前のリリィと同じ感じを、シャルロットは感じているだろう。

そう考えている間に、機体が色付く。

胴体が青く色ついた瞬間、腹部が赤と白。
他の所はほぼ白だが、細部にグレーで装飾されている。

「ストライク。」

リリィはその機体の名称を呟く。

フリーダム内にあった機体のデーターに、シャルロットに丁度いい機体があった。

それが　ＧＡＴ－Ｘ１０５　ストライク　だ。

その姿にシャルロットは自身の手を見たり、足を見たりで混乱していた。

セシリアはＸ１０５の姿に、驚きと驚愕を一緒に表し口を開いた。

「な、な、な……。」

言葉になってはいないが……。

その間にもモニターは出続ける。

≪全システム、オールグリーン。≫

≪ストライカーパックの装備はなし。≫

≪思考補助誘導システム、正常に稼働中。≫

それを見て、リリィはＸ１０５に近づくのだった。

１０５　訓練と起動（後書き）

まず最初に、別作品でラファールにストライカーパック……いや、ケルベロスとかだったから、シルエットシステムかな？

最初はストライカーパックだったけど……。

それをつけていたのを読み……それと似た様な感じになってしまいました……ｏｒｚ

そりゃ……ラビット・スイッチで換装とか良いじゃん……。

……いやいやいや、パクリだよ！？

それじゃぁ、パクリだよ！？

と思って、ラファールに付けるのではなくストライクに付けると言う事をやったんですけど……。

不味かったですかね～。

不味いでしょうね～。

言い訳がましいですけど、私もやりたかったのです……。

そして意外にも、コレ……ＩＳ×ＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹなのにＥｎｄｌｅｓｓ　Ｗａｌｔｚの機体を進めてくる人が多かったです。

そしてまともだったの……インパルス。

だけど……デザインがフリーダムに近過ぎる……。

と言うか、結構インパルス苦手……。

皆さまに聞いておきながら、作者の独断って……。

聞く意味あったのかっっッ！！！

と、激怒してしまいますね……。

本当にすみません……。

どうでもいい話。

ガンダムウォーのデッキを発見しました。

デッキ構築がアークエンジェル搭載機体ですね……。

うん。

・ＺＧＭＦ－Ｘ２０Ａ　ストライクフリーダム
・ＺＧＭＦ－Ｘ２０Ａ　ストライクフリーダム（ミーティア）　１０ｔｈレア
・ＺＧＭＦ－Ｘ１９Ａ　インフィニットジャスティス（ミーティア）

１０ｔｈレア
・ＺＧＭＦ－Ｘ１０Ａ　フリーダム
・ＺＧＭＦ－Ｘ１０Ａ　フリーダム（ミーティア）
・ＺＧＭＦ－Ｘ０９Ａ　ジャスティス（ミーティア）
・ＧＡＴ－Ｘ１０５　エールストライク
・ＧＡＴ－Ｘ１０５　ランチャーストライク
・ＧＡＴ－Ｘ１０５　ソードストライク
・ＧＡＴ－Ｘ１０３　バスター
・ＭＶＦ－Ｍ１１Ｃ　ムラサメ
・ＭＶＦ－Ｍ１１Ｃ　ムラサメ
・ＭＶＦ－Ｍ１１Ｃ　ムラサメ
・ＺＧＭＦ－ＸＸ０９Ｔ　ドムトルーパー
・ＺＧＭＦ－ＸＸ０９Ｔ　ドムトルーパー
・ＺＧＭＦ－ＸＸ０９Ｔ　ドムトルーパー

なんで、ジャスティスとインフィニットジャスティス、それにアカツキが無いんだ？

ドムとかは、ちゃんと3体入れてるのに……。

後えげつないコマンドカードも入ってた……。

マルチロックオンシステムが2枚……。

このデッキ、完全に殲滅戦使用ですね……。

１０６　威力過多な装備達（前書き）

今回はストライカーパックの説明です。

なお、口径や長さは１０分の１になっています。

１０６　威力過多な装備達

「これは……？」

シャルロットは驚きつつも、何とか口を開く。

そんなシャルロットにリリィは近づく。

「それが、新機体……ＧＡＴ－Ｘ１０５　ストライク。」

そう機体名称を言った。

その言葉に箒が質問する。

「フリーダムに似ている気がするのは？」

その問いかけにリリィは、振り向きざま説明した。

「この機体はデーター上、フリーダムより前に製造された機体になるよ。」

その言葉にまたも驚愕する。

フリーダムが現れたのが十年前だ。

それよりも前に、ストライクは製造された事になる。

そう、箒は思った。

「フリーダムの前に製造されたとされる機体は結構あるけど、その中でも性能はかなりいい。……分かりやすく言うと……紅椿以上のスペックを誇るね。」

「更にこの機体は基本は白式や紅椿同様にエネルギーで動くけど、白騎士と同じようにビーム兵装も展開できるんだよね～☆」

その言葉に再度驚愕する。

一夏達は初めて白騎士が、ビーム兵装を使用していると言う事を聞いたのだ。

あのときは混乱していたから、ちゃんと武器を見る暇がなかった。

だからこそ、今驚いた。

「……この機体はシャルルにしか使えない機能を搭載してるんだよ。」

その言葉に束はモニターを映す。

大きな追加ブースターに、長いランチャーと横に表示された機体同等の長さを誇る長刀。

それらがモニターに分割して現れた。

リリィが咳払いをすると、それらの説明をし始めた。

「これらは、シャルルの特技の高速切替……さっきセシリア達は見たよね？」

そう言うと、箒とセシリアはコクコク頷いた。

シャルロットは誘導兵器の回避に高速切替で、シールドを出したりライフルを出したりしたのだ。

真耶との模擬戦闘の時も同じ事をやった。

「それを使う事により、エネルギーを回復させたり、戦術を変えたりするバックパックが武器と一緒になっている。……言っている意味が分かるかな。」

リリィの言葉に一夏は「えっと……」と言いながら話についてこようと頑張る。

セシリアが気がついたのか、顔を上げる。

「武装を変える事により、戦況に機体が左右され無いですわね。」

その言葉に束が「当たり～♪」と言いながら、モニターを追加した。

「これらはストライカーパックと言って、近距離格闘型兵装のソードストライカーパック。　高機動中距離型兵装のエールストライカーパック。　遠距離砲撃型兵装のランチャーストライカーパックの三つあるんだよ～☆」

そう言いながら、武装を一つ一つ表示する。

「まずはソードね♪」

そう言うとモニターに機体同様の長さを持つ剣が表示された。

「これはシュベルトゲベールて言って、長さ１．５７８ｍの長さを持つ対艦刀だよ。　……まぁＩＳ戦では結構使いにくいけど、刃にビーム発生装置をつけているから雪片と同じ事ができるね～♪」

その言葉に全員目を見開きモニターを凝視する。

「他にもシールドとアンカーが一緒になったパンツァーアイゼンや、ビームブーメランのマイダスメッサーがあるよ～♪」

そう言って別のモニターを表示する。

大きな追加ブースターだ。

「これはエールストライカーパック。　一番使い勝手が良い装備だね。」

別のモニターが映し出される。

「これは、高機動向けのための追加装備の概念が大きいね。　ビームサーベルが二本追加された程度だけど、結構いけるよ☆　……後は、今持っているシールドとビームライフルが基本装備。」

そう言うとシャルロットは、自身の持つ物を見た。

「最後はランチャー☆」

その言葉を言うと、束はウサミミを動かし始めた。

「なんとランチャーの主兵装である、３２ｍｍ超高インパルス砲…名称アグニはシールドエネルギーを大量に消費する代わりに、もの凄い威力を出せるのだ～☆」

その言葉に、箒が恐る恐る聞く。

「もの凄い威力って……。」

「え～っとね、４０％で撃っても、絶対防御を無視して相手機体と搭乗者を散りも残さずに蒸発させるぐらいかな？　なんなら、今全力でアリーナのシールドに撃ってみる？　簡単に貫通するよ。」

その言葉に一夏達全員の顔が青くなった。

「流石にやり過ぎだ」とでも言いたいのだろう。

「そんな顔をしないしない♪　普段は絶対防御が壊れない程度の２０％……フリーダム同様の出力に抑えてあるから♪」

そう言って手元のパネルを操作する。

「あとは、１２ｍｍのバルカンと３５ｍｍのガンランチャーぐらいかな？」

そして全てのモニターを閉じた。

１０６　威力過多な装備達（後書き）

あ～、装備はこんな感じで……。

そろそろ原作の方に戻ろう……うん。

１０７　黒ウサギは何処にでも現れる（前書き）

……原作に戻った？

一応、原作にもあったシナリオだね……。

１０７　黒ウサギは何処にでも現れる

束がストライクの説明をしていると、他に誰もいないはずのアリーナに地響きが鳴った。

黒き機体に銀の髪の眼帯少女がいた。

ＩＳに乗って……。

「……何やってんの？」

その言葉に全員が唖然とする。

今日のアリーナは、リリィが貸切にしたと言ったのだ。

だから一夏達以外の生徒の影が無い。

なのに、ラウラがいた。

ラウラはＸ１０５を見ると、それを睨んだ。

「貴様、天使ではないな。」

その言葉にセシリアが何か悟る。

「……リリィさん……もしかして……。」

その言葉に小さく頷く事で肯定した。

ラウラもセシリア同様、天子に憧れを持っている。

「貴様が誰だか知らんが、天使の模造品とは片腹痛いな。」

そう言って、鼻で笑う。

その後、一夏を見る。

「丁度いい。　貴様だけを倒しに来たのだが、そこの模造品ともども消し炭してやる。」

その言葉に箒とセシリアは驚愕した。

教員が二人もいるのに、それを恐れない発言。

しかもリリィと束の存在を知らないようではないか。

そう箒達が思っていると、ラウラはリリィを見た。

何が起こるのかハラハラしながら、全員それを見る。

「……いやその前に、貴様にやられた分を返したい。　……だが、上層部が関わるなと言ってきたのでな……。」

その言葉に箒達は胸を撫で下ろした。

ラウラは軍人。

つまり軍は、リリィに命を売りに行くと言う事はしないと言う事だ。

（賢明な判断ですわ。）

そう思っていると右肩の砲身を展開させた。

その光景に目を見開いた瞬間、砲弾が発射された。

リリィめがけて。

リリィは避けようともしない。

避けてしまえば、同射線上にいる束達に被害が行く。

ため息をついながら、Ｘ２０Ａのビームシールドを展開させようとした。

だがその前に、その砲弾が一条の光によって破壊された。

リリィと束はその方向を見ないが、ラウラ達は見た。

ライフルを構えた、ストライクを。

「貴様っ！」

迎撃したシャルロットは、かなり驚いていた。

ロックや高速で飛ぶ弾丸を目視、さらに当てる事ができるとは思ってなかった。

だが、そんな動揺を見せるほど弱くはなかった。

銃口を少し傾ける事により、ラウラをロックする。
その瞬間、エールストライカーパックが背部に装備された。
動いた場合、即座に対処するためだろう。
「お互いやめておけ。」
リリィがそう言うと、ラウラはストライクに興味を持ったのか睨んでからアリーナから去った。
「……何がしたかったんだ？」
箒が昨日と同じ事を言って、ラウラの去っていく姿を見た。
全員肩をすくめ「さぁ」と言うだけだった。
気が付くとチャイムが聞こえた。
「あ、もうアリーナの閉館時間？」
シャルロットがそう言うと、Ｘ１０５を解除する。
それを見た一夏達も、ＩＳを解除する。

「クラリッサ、私だ。」

アリーナから出たラウラは、クラリッサに連絡を入れた。

ワンコールで出た副官は、いつものように用件を尋ねた。

「天使タイプの機体を発見した。」

その言葉に、クラリッサは≪は？≫と声を上げた。

そして事に気がついたのか、ラウラに詳しい事を聞いてきた。

その問いに、ラウラは出来る限り説明した。

「……の他は不明だ。」

ラウラの言葉に、クラリッサは唖然とした。

形態式のビーム兵装。

更に音速を超える砲弾への射撃。

でたらめすぎた。

≪隊長……。　マジですか？≫

「ああ。」

副官が、敬語を忘れた事にラウラは何も言わなかった。

「そして、私はリリィとその横にいた教員が怪しいと思っている。」

そう言うと、またＩＳのカメラで撮った写真を見る。

完全にカメラ目線の束だ。

最初にラウラがこの映像を見た時は、心臓が止まるかと思った。

ＩＳのカメラは見る事が出来ない。

小さすぎる、何処にあるか分からない。

それがＩＳに装備されたカメラだ。

だがそのカメラが写した束は、カメラ目線。

つまり、カメラに気が付いていたと言う事だ。

おかげで、ラウラは束が怪しいと思ったのだ。

まぁ、奇怪な行動をする人間を怪しいと言わず、何があやしいのか……。

「写真を転送する。　名前は偽名の可能性があるからな……。」

そう言うと端末の向こうでクラリッサが、≪了解≫と言って通信を

切った。

１０７　黒ウサギは何処にでも現れる（後書き）

はい、ラウラシナリオ～。

久方のクラリッサ登場。

ああ言う副官いいよネ♪

でも眼帯軍人なら「真剣（マジ）で私に恋しなさい」のマルギッテさんが良いね。

声優「G線上の魔王」の宇佐美ハルと同じ人だし。

まぁ……マジコイの終了イベントで、G魔のネタを聞いた瞬間噴いたねｗｗｗ

アレはアレはｗｗｗ

漫画版で更に好感度アップです。

あの人ｗｗｗ

１０８　性別と夫婦と（前書き）

……まぁサブタイからして夫婦は、リリィと束の事だと分かる気がしますが……。

寝不足です……ｗ

１０８　性別と夫婦と

アリーナで休んでいると、真耶が現れた。

全員顔を向けると、真耶は一夏を見て口を開いた。

「織斑くんとデュノアくんに連絡です。」

そう言うと一夏とシャルロットは顔を見合わせた。

「そんなに大事な話でもないですから。　え～っとですね、今月の下旬から男子は大浴場の使用が可能になります。」

その言葉に一夏は顔を輝かせた。

反対にシャルロットは、顔を暗くさせた。

男装はしているが、シャルロットは女。

顔色が変わるのは当然だ。

「やったぜ！！」

本当にうれしそうに叫ぶ一夏。

箒達は苦笑しながらそれを眺めた。

しかし、シャルロットは顔が暗い。

……別の事で気を紛らわせないと……。

リリィは頭を回転させる。

だが、お風呂関連でシャルロットが興味をそらすようなことが無い。

「リリィ！　やったなっ！」

悩んでいると、一夏がそう言った。

その言葉にシャルロットが反応する。

……アレ？

もしかして言ってなかったっけ？？

……言ってない？

言ってないね。

一夏の言葉で、瞬間的に逸らす会話が決まった。

「そうだね、一緒に入ろうか。」

「一緒に」と言う所を強調して発言した。

おかげで、シャルロットが誰が見ても分かるようにうろたえ始める。

ちなみに、真耶もうろたえ始めた。

「だ、駄目ですよ。　女の子と一緒に……。」

「私は男です。」

何と言う事だ。

真耶はリリィが男と知っているのに、忘れていたようだ……。

マジで？

リリィの心が中破しかけた。

システムオールイエローですよ？

そんな中、シャルロットがまさかと言うような表情でリリィを見た。

リリィは何を考えているか理解出来たのか、上着を脱ぎ始めた。

真耶は慌てて止めようとしたが、動きが突然止まる。

「織斑くん、デュノアくん？」

なぜか、リリィまで恐怖するような声を出した。

……なぜ？

その言葉に二人とも、リリィに背を向ける。

……女性とは分からないね。

うん……。

≪パージ≫

そんな事を考えているうちに、胸が外れた。

箒達は外した胸を見る。

「相変わらず、これが何なのかよく分かりませんわね。」

「まったくだな……。」

そう言って、パットを手に持ち観察し始めた。

「義兄さんも、なんで女装なんか……。」

箒は半眼でリリィを見た。

「え？　だって、似合うじゃん♪」

束の言葉に、箒は呆れた。

会話を聞いてか、シャルロットは恐る恐る振り返る。

そしてリリィを見て、目を見開いた。

「……え？」

そう言って目を擦る。

だが、シャルロットは信じられない物を見たと言うかのように目を

見開く。

「そう言えば、本物そっくりだったな……。」

「そうですよ～。　ですから織斑くん達は見てはいけませんよ。」

一夏の言葉に真耶が苦笑しながら言葉を出す。

「……男？」

シャルロットは目の前の光景が信じられないのか、口に出して呟いた。

その言葉に、全員納得した。

今のシャルロットは、初めてリリィの性別を知った自分たちと同じだと……。

「そうだよ～。　リリィちゃんは男の娘☆」

そう言って束はリリィに抱きつく。

その言葉に、シャルロットが固まる。

「……え？　え？」

「デュノア……。　姉さんとリリィは夫婦だ……。」

箒がシャルロットに近寄り、耳打ちする。

リリィはそれを聞き、ツッコミを入れたくなった。

……箒。

まだ私達は結婚してないよ?

と言っても、犯罪者が公に結婚した事があるかと言われたら無いとしか答えられない。

なら、気持ちが夫婦なら夫婦なのでは?

と言うかすでに気持さえ固まっていれば、婚姻届を出さなくても夫婦なのでは?

それば万国共通の気が……。

リリィの頭が高速で回転し、結果「夫婦」で納得した。

すると、シャルロットはさらに混乱し始めた。

１０８　性別と夫婦と（後書き）

寝不足です。

と言ったところで、これが乗るのは深夜……。

はい、無理やり書いてますｗｗｗ

頭痛いね～。

また原作から離れるのか……。

ま、なるようになるでしょうｗｗｗ

作業中の曲「Ｙｏｕ&ａｍｐ;Ｍｅ」

１０９　同い年の姪（前書き）

同い年の姪がいたら困るよねｗ

１０９　同い年の姪

「……えっと、……義父さんと、義母さん、って、呼んだ方が……いいのかな？」

シャルロットはそう言いながら、呟いていていた。

……はっきり言おう、全員に聞こえたよ。

うん。

一夏は首を傾げている。

セシリアと真耶も首を傾げてるね。

三人は何を言っているか理解してないんだろうね。

だけど、一人だけ反応が違う。

箒だ。

箒だけが驚愕していた。

「姉さん、義兄さん……。　後でお話があるんですが。」

いい笑顔でそう言う。

うん、笑顔だね。

笑顔なんだけどね。

怖い……。

「デュノアさんにも……。」

シャルロットにも聞くが、未だ呟いている状態。

ため息を吐きつつ、束を連れて更衣室から出て行った。

「で、姉さんは何考えてるんですか！」

箒はアリーナを出てまず最初に、そう言った。

束は笑いながら、箒の言葉に返答を考えた。

「十年前はＩＳを作って、今度は息子。　姉さんは私をどれだけ驚かせれば気が済むんですか？」

その言葉を聞き、束は口を開いた。

「息子じゃないよ～。　娘だよ～♪」

その言葉に箒は唖然とした。

そして考える。

一夏といた時の反応。

腰のラインの細さ。

「まさか……。」

箒が一つの答えにたどり着く。

「うん、シャルロットちゃんは女だよ～♪」

その言葉に箒は愕然とした。

「まぁ、そう言うのは本人含めた場所でやらない？」

箒は複雑な心境だった。

未だ成人には遠い身で、叔母になってしまった事だ。

戸籍上、姉の子と言う事は箒からしてみれば、シャルロットは姪だ。

そして箒は叔母……。

ため息をつきたくはなるだろう。

しかも叔母と姪が同い年なのだ。

「……なんぞこれ……。」

関係を考えると、かなり奇妙なものだった。

「というか、デュノアさんの家族は？」

一番気になった事を箒は尋ねた。

束は一瞬顔を暗くする。

「シャルロットちゃん……ね。」

箒はその言葉に呆れた。

聞きたい事はそうではない。

軽く束を睨む。

「姪だもんね～☆」

歩きながら束は考える。

なにを悩んでいるのだろう。

箒がそう思った時には、寮の入り口だった。

「ここでは言えないから、部屋でね☆」

そう言うと部屋とは別の場所に歩いて行った。

荷物を置いて先に行ってよう。

箒は歩いて束の部屋に向かった。

同中水色の髪の毛をした、上の学生と横切ったが気にしない。

と言う事はない。

コレでもリリィとの戦闘訓練で、結構敏感になっているのだ。

肩を払う。

すると音を立てて、何か落ちた。

箒はそれを拾う。

「……マイク？」

姉が作った、集音声が良い小型マイクによく似たものだった。

後ろを振り向くと、水色の女性はいない。

（後で姉さんに見せよう。）

そう思いながら、部屋にたどり着く。

部屋に入ろうとしていた、束と千冬がそこにいた。

「織斑先生？」

何故いるのだろう。

一瞬気にするが、束と一緒にいたため気にするだけ無駄と言う事で近寄った。

「ん？　篠ノ之……いや、箒か。」

そう言って千冬は箒を見た。

下の名前で呼ぶ事は、今は先生ではないと言う事か。

そう思いながら、束を呼び小型マイクを渡す。

それを見た瞬間の、束はちょっとだけ怖かった。

親指と人差し指で、小型マイクを潰したのだから。

箒はその光景を唖然として見ていた。

小型マイクと言っても、金属とか使われているのだ。

それを粉々にした。

丁度その時、廊下の向こうからリリィとシャルロットが歩いてきた。

アリーナから出たのは、箒達より後のはずだ。

それなのに、なぜか追いついている。

束もそうだ。

だが、箒は何も感じない。

姉の知り合いは、全員異常だと言う事で納得していた。

１０９　同い年の姪（後書き）

千冬「久しぶりの登場だ」

と言っても良いほど、千冬の登場に間が開いたよ。

前回が、０９３？

で、今は１０９。

つまり１６話間が開いたんだね。

うん。

千冬姉は好きなのに～ｗ

１：篠ノ之束
２：織斑千冬
３：シャルロット・デュノア
４：山田真耶
５：ラウラ・ボーデヴィッヒ
６：クラリッサ・ハルフォーフ
７：更識楯無
８：篠ノ之箒
９：凰鈴音
１０：セシリア・オルコット

登場したキャラのみで、１０位までランク付け。

ちなみに、作者が好きな順なのであしからずｗ

サブが上位に食い込みまくってる。

原作ヒロイン押しのけて、４人ほど食い込んでる……。

ちなみに、作者はセシリアが１０位と言う事にちょっと泣きたくなった。

嫌いじゃないよ、セシリア。

むしろ好きだよ、セシリア。

だけど、１０位って何？

……ｏｒｚ

１１０　束はアイドル（前書き）

うん、ゆかりんネタだぉ。

最初はラウラのくせして、後半ゆかりんだぉ。

これはすでに束じゃない、束っぽいゆかりんだぉＪＫ！！

そして気がついたら、投稿し始めて１ヶ月たったｗ

１１０　束はアイドル

（織斑一夏、教官に汚点をつけた存在。）

相部屋なのに、一人でラウラはいた。

というか、ラウラの部屋は二人部屋だがラウラしかいない。

ラウラは目をつぶりながら憎き存在を思い出す。

（リリィ、アレは私の目的の前では危険だ。）

自身とよく似た髪と瞳の色を持つ者も思う。

（そして今日見たあの機体。）

Ｘ１０５を思い浮かべ、憎悪の目を壁に向ける。

「……排除する、どんな手を使っても。　あの人たちのために。」

尊敬する千冬と天使を思い浮かべながら、そう言うと再度目を閉じた。

それがどんな事件を引き起こすか考えずに……。

「そ、それは本当ですのっ！？」

「う、嘘ついてないでしょうね？」

リリィは束と一緒に教室に向かっていた。

廊下にまで響く声にリリィは眉をひそめた。

まぁ、女性だから仕方が無い時もある。

そう思いながら束を見る。

歌っていた。

とりあえず、教室に入る。

すると束はいきなり声を大きくして歌い始めた。

「♪～！　♪♪～！」

「「「「「「「「「「いぇい♪」」」」」」」」」」

束が歌うと、なぜか教室が湧いてた。

生徒の中には「いぇい」と言った瞬間に、腕を大きく振り上げてジ

ャンプしている者もいる始末だ。

よく、いきなりの歌いだしについて行けるね……。

まぁ、そんなこんなで……ここ最近の朝は騒がしい。

束が歌うと、なぜかこのように全員湧く。

一種のアイドルだ。

「♪～！　♪♪～！！」

そう歌うと、耳に手を当てる。

「「「「「「「「「「世界一可愛いよ！！」」」」」」」」」」

耳をふさがないとやってられない時もある。

それほどうるさいのだ。

「もっともっと～！」

ほら……。

言わせようとコメントしたよ。

「♪～！　♪♪～！」

「「「「「「「「「「「「いぇい♪」」」」」」」」」」

「♪～！　♪♪～！！　♪♪～♪～　♪♪～♪～　♪♪～　♪♪～♪」

……頭が痛くなってきた……。

毎回これの連続だ。

これが数秒での出来事だから、なお性質が悪い。

束は最初のころのような他人嫌いは殆ど見せなくなったが、まだ話すと言う事はあまりしない。

そんな中、束が鼻歌を歌い始めた。

運が悪いのか、クラスに歌詞を作ったが持て余している生徒がいた。

その生徒が束の鼻歌を聞き、歌詞をつけたのだ。

束の鼻歌を楽譜にしろと……どっかの誰かさんの命令もあり、楽譜にしてレコーディングをしたところ……翌日にはＩＳ学園内で、音楽データーの販売がされていた。

しかも売り上げデーターを見たところ、半端ないようで……。

一種のファンクラブが設立したほどだ。

しかも曲にコールが入った事により、束は面白がって歌うようになった。

そして今のこの状態だ。

さらに言うと、他にも曲がある。

作詞は女生徒がほぼ編集しているが、編曲はリリィがやっている。

しかも、束自身ノリノリなのだ。

……何処で間違えた……。

「……またやってるのか……。」

教室の出入り口でその光景を見ていたら、千冬が真耶を連れて登場した。

束が腰に手を当てて左右に振る。

……なかなか様になっているのだが……。

「時間だぞ。」

「分かってるよ。」

すでにＳＨＲの開始時間になっていた。

しかもよく見ると鈴がまだ教室内にいる。

いや、鈴だけじゃない。

他のクラスの生徒もいた。

「……平和だね～。」

「現実逃避するな。」

そう言った瞬間、千冬にデコピンを食らった。

……この光景は、狭い教室で見るものではない気がする。

うん。

アリーナでやって欲しい……。

一応ここは、学校なのだ。

１１０　束はアイドル（後書き）

束が歌っていたのは「ｆａｎｃｙ　ｂａｂｙ　ｄｏｌｌ」。

ゆかりんの曲だね。

聞いた方がいいよ。

大丈夫、歌ってるの中の人だからｗ

でしたが、２０１１年7月２９日の「歌詞の無断転載に関するお知らせ　」で歌詞を「♪」に代えさせて頂きました。

もし今後、作品内で歌詞の転用がありましたら、感想などでお知らせを願います。

最初は「Ｓｕｐｅｒ　Ｓｐｅｃｉａｌ　Ｓｍｉｌｉｎｇ　Ｓｈｙ　ｇｉｒｌ」か「Ｙｏｕ&ａｍｐ;ｍｅ」辺りにしようと思ったけど、単体でコールが入ると言ったら……これしか思い出せなかった……。

いや、「Ｓｕｐｅｒ　Ｓｐｅｃｉａｌ　Ｓｍｉｌｉｎｇ　Ｓｈｙ　ｇｉｒｌ」や「Ｙｏｕ&ａｍｐ;ｍｅ」にもコールあるけどさ……。

「Ｓｕｐｅｒ　Ｓｐｅｃｉａｌ　Ｓｍｉｌｉｎｇ　Ｓｈｙ　ｇｉｒｌ」はコール目立たない気がするし、「Ｙｏｕ&ａｍｐ;ｍｅ」は

大量だし……。

いや、２つともコールが凄いけどさ……。

結局「ｆａｎｃｙ　ｂａｂｙ　ｄｏｌｌ」に落ち着いたというわけ。

「ｆａｎｃｙ　ｂａｂｙ　ｄｏｌｌ」のコメントとか、コールが一番目立つ気がする。

というかアニサマが凄かったからね～。

アニサマの曲が離れないと言うわけ……。

はい……。

別に「星空のＳｐｉｃａ」とか「めろ～んのテーマ　～ゆかり王国国歌～」とか「チェルシーガール」でもよかった気がするけど……。

束姉党は、何処に行けば入会できますか（笑）

１１１　噂とラウラと千冬（前書き）

まぁ、前半です。

何故２分割にした事やら……。

１１１　噂とラウラと千冬

学園内で奇妙な噂が流れている。

「学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏と交際できる」と言う物だ。

それと同時に「リリィに……」いや、何でも無いとしておこう。

まぁ、そんなうわさが流れていた。

確実にデマだろう。

束は「箒ちゃんの決意を踏みにじるバカって誰だろ～ね～」と言って、近くにいた女子三名を怯えさせていた。

……なるほど、その三人が噂の発生源ですか……。

リリィは頭を押さえながら納得するのだった。

まぁ、箒は少し葛藤はしているが、手首に巻かれた金と銀の鈴を見て落ち着く。

その鈴は紅椿の待機状態である。

おそらくは、自身が優勝すれば問題無いと思っているのだろう。

確かに紅椿に対抗できるＩＳなんかは、白式ぐらいだろう。

ＩＳではない……フリーダムタイプ……名称ＩＭＳ（インフィニット・モビル・スーツ）なら紅椿を圧倒できる。

だがリリィと千冬は、噂に興味がない。

おそらくシャルロットもだ。

つまり現存するＩＭＳ、フリーダム、白騎士、ストライクはそんなに脅威ではないのだ。

箒的には納得はするだろうが、決意を無駄にしてしまうためあまり言いたくない。

紅椿と戦闘したら、圧倒的にＩＭＳが勝ってしまうから……。

ちなみに、ＩＭＳと名付けたのはフリーダムのデーターを見た束だ。

理由は言うまでもないが、フリーダムタイプの機体はＭＳ（モビルスーツ）と呼ばれており、ＩＳとＭＳを合わせただけだったりする……。

他にも箒が勝つ方法はいくらでもある。

いずれ語るとしよう。

ん？

私が誰に話しかけているかって？

おそらく物語（これ）を見ている、天の神様達（あなたたち）にだよ。

一夏は学園に数カ所しかないトイレからの帰りに、叫ぶ声が聞こえた。

その声の主と話し相手を見ると身を隠した。

ラウラと千冬だった。

近場の木の陰から、その会話を盗み聞きする。

「なぜこんな所で教師など!!」

ラウラは葛藤しているが、千冬はため息をつきさっさと会話を切り上げたいかのように肩をすくめた。

リリィが言っていた事を一夏は思い出す。

「ボーデヴィッヒはドイツ軍人。　千冬との関係を見れば、一夏だって分かるでしょ?」とのこと……。

その言葉に、一夏は嫌でも分かってしまう。

自身の不甲斐なさと、愚かしさに……。

第二回モンド・グロッソにおいて、一夏が誘拐された事がある。

しかも決勝時にだ……。

もちろん決勝には千冬が勝ち残っている。

そこから導き出される事は、「千冬を優勝させないための誘拐」であると言う事。

千冬はその時決勝を蹴って、一夏を助けに来たのだ。

ドイツ軍の助けを借りて。

だからか、ドイツ軍は一年間千冬に軍に出向して教官をして欲しいと言ってきたのだ。

千冬は恩を返すためか、一年間ドイツに行き教官をした。

おそらくラウラは、その時の教え子だろう。

そして一夏への憎悪を考えれば、第二回モンド・グロッソでの出来事が気に食わないのだろう。

それくらいしか、今の一夏には分からなかった。

「何度も言わせるな。　私には私の役目がある。」

その言葉にラウラの執念差がよく分かった。

「このような極東の地で何の役目があると言うのですか！」

いつものような冷たい声ではない声で、千冬に話しかけている。

一夏はその言葉に苛立ちを覚えたが、頭の片隅でリリィが「押さえて押さえて」と言ったような気がしたため、動かなかった。

実際は放課後に「感情を殺せ」と何度も言われた為に、そのように感じただけだ。

「お願いです教官。　我がドイツで再びご指導を！　ここでは貴方の能力は半分も生かされません！」

「ほぅ？」

「大体、この学園の生徒など教官の教えるに足る人物ではありません。」

「……なぜだ？」

その声に、一夏はラウラの身を案じた。

千冬が少しキレてる。

家族にしか分からない、あの顔。

（水面下で激怒してるよ……。）

一夏はハラハラしながら、その様子を眺めた。

１１１　噂とラウラと千冬（後書き）

箒は紅椿を持っているから、一応噂への葛藤はそんなにありません。

実質、機体性能でカバーしても代表候補を圧倒で来ますから。

ついでにリリィ印の訓練受けてますし……。

脅威と言ったら、セシリアとシャルロットですね。

セシリアは戦術面で。

シャルはストライクの機体性能ですね。

ちなみに、一夏より早くリリィの剣術を理解したので、相当剣技の腕も上がってるはず……。

一閃は使えるかも……程度には。

ラウラシナリオは……後半へ続くと言う事で。

１１２　千冬の発言（前書き）

……千冬のキャラが崩壊していますｗｗｗ

前からかｗ

後半です。

１１２　千冬の発言

「意識が甘く、危機感に疎く、ＩＳをファッションか何かと勘違いしている。」

千冬の表情に気がつかないのか、ラウラは自身が思った事を口に出す。

「そのような程度の低い者たちに、教官が時間を割かれるなどあってはいけません。」

千冬は目をつぶりラウラの言葉に耐える。

（ああ、千冬姉もリリィの言葉で押さえてる……。）

同じ師なら、言われた事も同じだろうと思い一夏は千冬を心配そうに眺めた。

「大体、教官と同じように篠ノ之博士もここにいては、自身の力を完全に発揮できない。　二人でドイツに来れば……。」

「ボーデヴィッヒ。　何故リリィがその中に入っていない……。」

千冬は束の名を聞き、目つきを変える。

そして「二人」という言葉にいささか、苛立ちを覚えていた。

「あのような者は、邪道です。　教官ほどの実力もない癖……。」

「死ぬか、小娘。」

ドスが聞いた声で「死ぬか」と言い、ラウラは身体を硬直させた。

（……って、おぃっ！！）

まさかの先生とは思えない発言だ。

しかも、千冬の言葉は躊躇いが無い。

ラウラの軽はずみの発言が飛べば、おそらくラウラは千冬の発言通りに死ぬ。

一夏はその事を恐れ、待機状態の白式を握り締めながらその光景を眺めた。

「私と束の侮辱ならまだ許そう。　だが、アイツ……リリィの侮辱は許さん。」

「な、なぜっ……。」

「口を慎め。　……今は私が話している。」

ラウラが震えながら、千冬の言葉を聞いていた。

「……まず言っておこう。　リリィの事を知らない小娘一人なぞ、私にとってみればどうでもいいことだ。」

一夏はその発言に驚愕した。

あの千冬が、そう言った事が驚きなのだ。

まさか、ラウラが千冬を尊敬しているのと同じように、千冬はリリィを尊敬しているのか。

いや、している。

無表情の顔の下は、尊敬の顔だ。

うん。

そう言えば、弾にも同じ事言ったな……。

「貴様みたいなガキが千人集まろうが、リリィには勝てやしない。なのに実力も無い、だと？　まるで自分が実力のある物だと言っているようだな。機体を使われる事無く戦闘不能にさせられたのは誰だ……。」

一夏はその言葉に、納得してしまった。

アレは一騎当千と言っても、差し支えが無い。

それと同時に、千冬に恐怖した。

いつもの千冬は何処へ行った……。

ラウラも千冬の言葉にたじろいでいる。

「そして今の私は教員であると同時に、所属篠ノ之の人間だ。　言っている意味が分かるか？　分からないだろ？」

ラウラはその言葉に震えた。

「現在国家間で、篠ノ之束への干渉は禁止されている。　そして所属篠ノ之にもだ。」

一夏とラウラは、千冬が言いたい事を理解出来たのか目を見開く。

こちらからの干渉は可能。

同時にその時の接触は許可。

だが、向こうからの接触……アプローチは不可能。

そう言う事だ。

「そして先ほどの発言……つまり、お前をはじめとするドイツ軍をこの世から排除しても良いと言う事になる。　ああ、見せしめに今お前を殺そうか？」

殺気を放ちながらそう言う千冬は、今まで見た事もない修羅だった。

「……少し見ない間にずいぶんと偉くなったな。　その年でもう選ばれた人間気取りとは……恐れ入るよ……。」

「わ、私は……。」

「……さっきの発言は聞かなかった事にしておく。　……教室に戻れ……。」

そう言うと、ラウラは何も言わず早足で去って行った。

その光景に一夏はホッとした。

特に、実の姉が人殺しをしなかった件についてだ。

ラウラがその場から消えたのに、千冬は動こうとしない。

「そこの異常性癖男子。　盗み聞きか？」

「誰が異常性癖男子だっ！！」

千冬の言葉に突っ込みを入れる。

「出てくると言う事は、異常性癖男子と言う事だ。　次の授業はリリィだろ。」

そう言うと時計を見る。

開始時刻まで、あと二分。

「今聞いた事は、誰にも話すなよ……。」

顔をい一夏からそむけ、千冬は言う。

妙に顔が赤い。

「……恥ずかしがってるのか？」

「一夏？」

「っ！？　リリィの事は誰にも言わないさ。」

千冬の攻撃に備え、さっさと距離を取る。

「……むしろ千冬姉がそう言うのが当然だって、最近俺も思ってるしな。」

そう言うと千冬は、一夏を見る。

だが、一夏は既に教室へ歩いているため背中しか見れない。

「……そうか、ならさっさと教室に戻る事だな。」

「おぅ。」

そう言って走り始めようとした。

「廊下は走るなよ。　走るならバレ無いように走れ。」

「了解。」

そう言って一夏は走って行った。

その後ろ姿を見て、千冬は少し思い返す。

「……あ、「織斑先生だ」と言うのを忘れていたな……。　まぁいいか……。」

１１２　千冬の発言（後書き）

……あれ？

なんかおかしいな？

千冬がリリィの事が好きだったように読めるぞ？

何だこりゃ……。

と言う事で、ラウラシナリオへそろそろ入ろうかと思います。

もう入ってるか……。

千冬の敬愛は異常……。

１１３　セシリア達への黒ウサギの奇襲（前書き）

まぁ、サブタイは殆ど思いつかなかった……。

何話夏に似たようなサブタイがあった気がする……。

１１３　セシリア達への黒ウサギの奇襲

「Ｂ－６－１－１！！」

問題とはすぐにでも起きるものだ。

セシリアと鈴が、トーナメントの訓練をしようとしていたときである。

高速で飛来する弾丸を二人は回避した。

そのため、砲弾は二人の間を抜けアリーナの地面に突き刺さる。

後方からの不意打ちである。

鈴が青龍刀をかがけた瞬間に刃に何か映ったため、練習用のサインコールでセシリアに危険を知らせ回避した。

その光景に、砲弾を撃った主は驚いていた。

「不意打ちとは、やってくれましたわね？」

セシリアが振り向きざまにそう言った。

「本当……、当たったらどうしてくれるのよ。」

鈴も振り向きざまにそう言う。

攻撃をしたラウラは、驚愕と苦虫をつぶしたような顔を同時にする。

ちなみに鈴が叫んだコールは、「B」がセシリアのブルー・ティアーズをさし、「6」は「B」本体から何時方向かを指し、「1」は不明または砲撃を指し、「1」は数を示す。

つまり「ブルー・ティアーズの後方に、攻撃または不明が一つ」と言う事になる。

まぁ、判断不可能な場合は攻撃だと思う方がいい。

戦闘に主に使われるため、リリィに師事してもらい物にしたのだ。

リリィいわく、最初の「B」と言うコールは止めておけとのこと。

名称が被る機体があるからだ。

「中国の甲龍に、イギリスのブルー・ティアーズ。　データで見た時は強そうに思えたが……私の怠慢か。　そこそこやるようだな。」

その言葉を聞くと、セシリアは考え始める。

（目的……理由……何かありますかしら……。）

そう考えるが何も浮かばない。

大方の検討では、ドイツ以外の第三世代機の出来栄えを見るためだろう。

だが、見る意味がない。

「セシリア。　アイツは敵と見ていいの？」

鈴は少し怒るが、リリィが行う攻撃の方がイラッと来やすい。

生身で回避した挙句、攻撃は全て当たるのだから。

その際にたまるストレスの対処方法は、自然と身に付けた。

そのおかげか、今のラウラの言葉にストレスが感じられない。

つまり、精神的に余裕があると言う事だ。

「……現状０５（フィフティー・フィフティー）ですわね。」

敵でも見方でもない、とセシリアは言う。

攻撃はされた。

だが、迂闊に攻撃すれば問題になる。

「そう……。」

鈴もその事を理解しているためラウラを０５（フィフティー・フィフティー）ではなく敵（エネミー）として見るが、様子見をする。

敵と見るが、相手をしないと言う恰好を作ったのだった。

「……ならば、その評価をエネミーにしてやるさ。」

そう言って、再度レールカノンを発射した。

しかし正面から撃たれて、当たる物はいない。

セシリアは華麗とは言えないが、右手に持っているライフルを地面に付けブースターを点火した。

そしてライフルの先端を軸に一回転をしながら、遠心力をとブースターを利用し上空に飛翔した。

ある程度上昇し、停滞する。

通常なら、ＰＩＣと呼ばれるシステム（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）で、浮遊したのちに上昇だが、セシリアはそのシステムの展開を上昇中に起動させた。

このシステムの軌道には、少々時間がかかる。

と言っても2、3秒ほどだが……。

だがこれなら約1秒強で上昇することができる。

もちろんリリィの教えでもある。

余り気品があるとは思えないが、技術的には凄いと思えるだろう。

鈴は後ろのアンロック・ユニットの一部を吹かせて地面を滑りながら回避する。

「鈴さん。　イケますかしら？」

そう言うと、セシリアはライフルをラウラに向けた。

「いつでも。」

鈴も青龍刀を二本取り出すと、通常持ちと逆手持ちにする。

ラウラは相手が思っていた以上の技量を所持していた事に歯噛みする。

だが、そんな事で冷静さを失うラウラではなかった。

「……相手は軍人ですわ。」

「分かってる。」

そう言うと、お互い目を細める。

「「全力全開で行きますわよ（行くわよ）！！」」

１１３　セシリア達への黒ウサギの奇襲（後書き）

セシリアの上昇は……コマ？

砲身を軸に、ＰＩＣを作動させないで吹き飛ぶように上昇。

下手したら自滅確定技？

まぁいいか。

いつものごとく、何話かに区切ります。

１１４　黒ウサギと青い雫（前書き）

今回の話はテストも兼ねています。

あとがきに詳細を書きます。

１１４　黒ウサギと青い雫

「今日も訓練だよね？」

シャルロットがそう言うと、一夏は頭を書きながら顔を上に向ける。

「そうだな……。」

「ちなみに、今日使えるのは第３アリーナだ。」

「しかも、他の人間の目もある。」

「つまり、いつもの訓練は少し無理ってわけだね～♪」

一夏とシャルロットはその声を聞くと、壊れたロボットのように後ろを振り向いた。

そこには千冬と束、そしてリリィがいた。

二人は荒い息を吐きながら、三人を見た。

「……心臓が止まるかと思った……。」

一夏がそう言うと、シャルロットは何回も首を上下に振って同意した。

先ほどまで後ろには、誰もいなかった。

だが、気がついてら最強三人が後ろにいた。

それに気が付くことなく声をかけられたら、心臓も止まりかけるのは当然だ。

息を整えた二人は、少し三人を睨む。

「いっくんが驚愕死って、束さん悲しんじゃうよ～。」

「そうだな。」

「絶対、悲しんでないよな……。」

束の言葉とそれに同意した千冬の声に、悲しみが感じられない。

一夏は少し落胆し、アリーナへ足を向けようとした。

「「「「「っ！？」」」」」

だが、その足は半分でとまる。

何処からか轟音が聞こえたのだ。

「アリーナの方からだね。」

リリィはそう言うと、走って行った。

それに続く形で、千冬、束、一夏、シャルロットは走った。

「Ｌｅｂｈａｆｔ！（ちょこまかと）」

そう言いながら、ラウラはワイヤーブレードを四本展開し誘導兵器を落とそうとする。

だが、攻撃優先ではなく回避優先の誘導兵器に当たる事はない。

セシリアはリリィほどではないが、それなりに誘導兵器の使い方をマスターし始めたのだ。

つまりそう言う事。

いや、どういう事と言われれば、相手にとって嫌～な誘導兵器となったわけです。

はい。

囲むようにレーザーを撃つ。

更に甲龍の龍砲が、間を開けて攻撃してくる。

それを避けるのは大変だ。

結果として、ラウラが劣勢となっている。

「Ｓｔｅｒｂｅｎ　Ｓｉｅ！（死ねっ）」

突然そう言ったかと思うと、ラウラは回避するのを止めた。

レーザーはシュヴァルツェア・レーゲンの足元を薙ぐが、ラウラは気にしてないようだ。

砲撃を食らう中で、ラウラはレールカノンを展開させた。

ノーロックでセシリアに向けて撃つ。

セシリアは、瞬間的に回避をする。

だが誘導兵器の攻撃が止まった事により、ラウラはセシリアに向け飛翔した。

上昇した瞬間に、ラウラがいた場所に衝撃砲が当たる。

「死ねだなんて、品がありませんわよ？」

セシリアはラウラの接近に恐怖を感じないのか、そう言って誘導兵器を操作した。

だが、そのほとんどが回避される。

「Ｉｃｈ　ｆｒａｇｅ　ｅｉｎｅｎ　Ｏｆｆｉｚｉｅｒ　ｎａｃｈ　Ｃｈａｒａｋｔｅｒ　ｕｎｄ　ｂｉｎ　Ｕｎｓｉｎｎ！（軍人に品性を問うなど、ナンセンスだな）」

ドイツ語を喋りながら回避し、レールカノンを撃ってきた。

だが、動いているためセシリアには当たらない。

鈴は迂闊に接近や攻撃ができないため、距離を置きながら上昇する。

「……それは……そうですわね。」

セシリアはラウラの言葉を聞きながら納得した。

軍人は品がある戦争をしない。

戦争は殺し合いだ。

そこに品性は邪魔になる。

「ですが、ここでは軍人である前に生徒ですわよ?」

そう言って、誘導兵器を一旦戻す。

ラウラと距離を置き、ドッキングする。

「Ｉｃｈ　ｂｉｎ　ｅｉｎ　Ｏｆｆｉｚｉｅｒ，　ａｕｃｈ　ｗｅｎｎ　ｚｕ　ｗｏ　ｉｃｈ　ｇｅｈｅ．（何処へ行っても私は軍人だ）」

ラウラはまたもドイツ語で喋りながら、ワイヤーを展開させた。

「Ｅｉｎ　ｊｕｎｇｅｓ　Ｍ?ｄｃｈｅｎ　ｖｅｒｓｔｅｈｔ　ｅ

s vielleicht nicht.（小娘には理解できないだろうがな）」

そう言って、セシリアに迫った。

１１４　黒ウサギと青い雫（後書き）

実験です。

ヒロイン全員に母国語を喋らせたいと言う作者の願望です。

とりあえず、険悪そうなラウラに担当してもらいました。

本当は、ラウラはキレるとドイツ語を使うと言う設定にでもしようかなと思っただけ……。

そのテストｗ

まぁいいか。

とりあえず、エキサイト翻訳と言う物を使いドイツ語にしてみました。

間違っているかもしれませんが……、それは、翻訳気のせいと言う事で（笑）

翻訳機のよって、セリフが異なってしまうようです。

とりあえず、エキサイト翻訳で固定しときます。

不評でしたら、止めます。

この戦闘が終わるまでは、ラウラはドイツ語で固定ですけど……。

ビクビク、ビクビク……。

１１５　三機のエネルギー（前書き）

相変わらずの、ラウラがドイツ語しか喋ってない戦闘。

そろそろ、日本語に戻してやれ……。

１１５　三機のエネルギー

「Ｄｏｒｔ！（そこっ）」

そう言ってラウラはワイヤーを展開させる。

四本のワイヤーは蛇のように蛇行し、セシリアに迫る。

「私がいるの忘れた？」

鈴が横から衝撃砲を撃ちこみ、ワイヤーの軌道を限定させる。

「Ｔａｋａｓｈｉ！（貴様っ）」

ラウラは邪魔された事に、腹を立てる。

鈴に向けてレールカノンを放とうとするが、センサーが熱を感知したためその場から退避する。

回避前にラウラがいた場所に、レーザーが通り過ぎる。

やはりというか、セシリアがライフルを撃ってきたのだ。

ラウラはその攻撃を必死に避ける。

だが、やがて衝撃砲が止む。

「Ｉｃｈ　ｓｃｈｉｅ?ｅ　ｅｓ　ｚｕ　ｓｅｈｒ．（撃ち過ぎだな）」

そう言うと、鈴を警戒しなくなった。

撃ち過ぎてエネルギーが、警戒ラインになったのだ。

ラウラは速度を上げて一気にセシリアの懐まで飛び込む。

ワイヤーをライフルに絡ませて、引きつける。

「くっ！」

セシリアは何とか振りほどこうとするが、ワイヤーは解けない。

ラウラは間合いに入ると、回転しながらセシリアを蹴り飛ばす。

「くぅぅぅ！！」

アリーナの地面に衝突しそうになるが、すんでの所で脚部スラスターで姿勢制御し直し、ブースターで後退しながら地面に降り立った。

着地の際、セシリアは誘導兵器を再度展開する。

しかし、ラウラはワイヤーをある程度伸ばしセシリアを見下ろす。

「Ｇｌａｕｂｅｎ Ｓｉｅ ｎｉｃｈｔ，ｄａ？ ｄｉｅ ｇｌｅｉｃｈｅ Ｓａｃｈｅ ｏｆｔ ｂｅｎｕｔｚｔ ｗｉｒｄ！（何度も、同じ事が通用すると思うなっ）」

そう言うと、ラウラはセシリアに向かってレールカノンを撃った。

セシリアはもちろん回避する。

だが、ラウラは撃った後に移動して接近していた。

接近する誘導兵器は無視している。

「Ｖｅｒｓｃｈｗｉｎｄｅｎ　Ｓｉｅ．（消えろ）」

ワイヤーを突き刺すように、セシリアに伸ばす。

「……だから、無視すんなって言ってるでしょ！」

だがやはりというか、鈴がそれを阻む。

四本のワイヤーは、鈴が青龍刀を振ると同時に方向性を見失い重力に従って徐々に落ち始める。

「それともなに……私は無視していいと？」

ラウラは一瞬焦った。

鈴の存在を忘れていたわけではないが、ここで対応してくるとは思っていなかったのだ。

だが、セシリアはラウラの焦りに漬け込むように、誘導兵器で攻撃を開始した。

鈴の目の前に網目状に撃たれたレーザーは、後退させるしか選択肢を与えなかった。

「私もいましてよ？」

そう言ってセシリアは誘導兵器を追撃させる。

だが圧倒的にレーザー数が先ほどより減ったため、ラウラにとっては回避は簡単なことだった。

ラウラはそれを見て口を釣り上げた。

「Das Ablaufen von Energie.（エネルギー切れか）」

エネルギーも無限ではない。

そしてレーザーは実弾と違い、エネルギーを大量に消費する。

エネルギーが切れれば、セシリアは八割以上の攻撃オプションを失う事になる。

「Es ist doch nicht Ihre Existenz, die einen Lehrer bitten sollte um das Unterrichten……（やはり貴様たちは、教官に教えを乞うべき存在ではないな……）」

そう鼻で笑いながら言うと、手首からプラズマブレードを展開させた。

そう言うラウラもエネルギーが厳しいと内面で思っているが、顔には出さない。

顔に出したら、余計な隙が生まれる。

「……鈴さん。」

「分かってるわよ。　そう言うアンタこそ、一撃も外さないでよね。」

鈴がそう言うと、セシリアは後退して誘導兵器を戻す。

青龍刀を構えた鈴はその場にとどまり、ラウラの攻撃に備える。

ラウラはそれを見て更に笑った。

「Ｍｉｔ　ｄｅｒ　Ｖｏｒｈｕｔ　ｕｎｄ　ｄｅｍ　Ｒ？ｃｋｅｎ……Ｅｓ　ｉｓｔ，　ｄａ？　ｅｓ　ｅｉｎｅ　ｓｃｈｗａｃｈｅ　Ｐｅｒｓｏｎ　ｍａｃｈｔ！（前衛と後衛とは……それは、弱い者がやる事だっ）」

１１５　三機のエネルギー（後書き）

まぁ、いつまでドイツ語？

と言われる気がしますので、早々に戦闘を切り上げようかと思います……はい。

あ～、オリ展開になったな～。

めんどくさい。

いつもの事だけどね～。

プラモ屋に行ってみようかな……。

１１６　私闘の行方（前書き）

原作より長いと思う……。

千冬の登場が……ね。

１１６　私闘の行方

「やれやれ、そこまでにしておけガキ共。」

その声が聞こえた瞬間に、ラウラの行動は止まった。

セシリアと鈴も、警戒を少しばかりといた。

「・・・　ｅｉｎ　Ｌｅｈｒｅｒ……！（きょ、教官……）」

そこにいたのは千冬だった。

その前にはリリィが、ライフルを構えている。

「三人とも戦闘は中止。」

そう言うと、ライフルを少し動かす。

武装解除しろと言う合図だ。

セシリアは丁度いいと判断し、先にブルー・ティアーズを解除する。

鈴もそれに続いて甲龍を解除した。

「さて、これはどちらが……と言うのは簡単か。」

「そ～だね～☆」

束がモニターを表示しながら、歩いてくる。

モニターには、アリーナの記録が残っていた。

もちろん、今の戦闘の映像もだ。

後方からのラウラの奇襲。

回避されたのちの、先制攻撃。

完全にセシリアと鈴は、自衛のための戦闘であると言う事が分かる。

「……さて、ボーデヴィッヒ。　何か言い訳はあるか？」

「……Ｎｅｉｎ．（……いいえ）」

千冬の言葉に、ラウラはシュヴァルツェア・レーゲン上で悲嘆の声で返答する。

モニターは未だ戦闘を映していた。

セシリアとラウラは、お互いカードを残している。

切り札と言ってもいい、カードを。

横目でそれを見ると、千冬は少し考える。

「……とりあえず、ＩＳを解除しろ。」

その言葉にラウラは急いでＩＳを解除した。

「模擬戦をやるのは構わないが、許可は取ったのか？」

その言葉にセシリアは嫌味を言うように口を開いた。

「いいえ。　ボーデヴィッヒさんがいきなり攻撃してきたのでしたから、私達は知りませんわ。」

許可を取らないでの戦闘行為だと言う事は、全員分かり切った事だ。

戦闘中の音声も流れているため、聞くだけ無駄なことである。

「私闘を認める事は、教員として認める事は出来ないな……。」

「Ａｂｅｒ……（しかし……）」

「日本語を喋れ……。　馬鹿とヤジ馬が首を傾げるだろ。」

「……了解しました。」

そう言うとラウラは敬礼をする、

千冬はうんざりしたような感覚になったが、顔に表すほど間抜けではない。

「今回の私闘は、ボーデヴィッヒに後日指導室にて事情を聴く。その先貴様たちにも聞くからな。」

「「「はい（了解しました）。」」」

千冬の言葉に、セシリア達は返事する。

「では、今回の戦闘は学年別トーナメントまで持ち越す。」

その言葉にリリィはアリーナの管制室へ、アリーナの使用禁止コールを流すようにモニターを叩いた。

すると、アリーナに≪アリーナの使用終了時間となりました≫と言う声が流れた。

「今日の使用は中止だ。　各自、速やかにアリーナから退出しなさい。」

その声に生徒たちは不満を垂らすが、リリィはアリーナの放送音声を最大に上げると、耳を押さえながら出て行った。

「……いいな、学園別トーナメントまで一切の死闘を禁ずる。」

千冬はそう言うと、一夏とシャルロットｍの方を振り向く。

「お前達も、それでいいな。」

「いや、俺関係ないし……。」

「いいな。」

千冬の言葉に、一夏はしぶしぶ頷いた。

今回の事に関しては、一夏は何もやってない。

少し理不尽だろうが、千冬だから仕方がない。

「なら解散っ！」

その言葉に、一夏達はアリーナから出て行く。

アリーナから出た後、そこい残ったのはリリィ、束、千冬だけだった。

「リリィちゃん……五月蠅いよ～。」

未だアリーナに、大音量で終了時間を知らせる放送が鳴り響いていた。

リリィは慌てて、それを止めた。

千冬は戦闘で荒れたアリーナを見て、ため息をつく。

「リリィ……。　調査をして、アリーナを整備するぞ……。」

そう言いながら、破壊痕が残る地面に千冬は近寄った。

１１６　私闘の行方（後書き）

セシリアと鈴が負傷しなかったですね……。

さ～て、トーナメントのタッグはどうしようかな～。

一夏とシャルと言うのは、ラウラ戦に置いて必要だし……。

だけど、箒がすでに紅椿を持ってるし……。

セシリアと鈴は参加可能だし……。

一夏＆シャルロット
ラウラ＆箒
セシリア＆鈴

にでもしようかな？

でも、今回に限ってセシリアと鈴は仲が悪くなりながら、勝ち進みそうだね……。

どうしよっかな……。

ま、なるよ～になれ、だね。

１１７　更識楯無の妹（前書き）

タイトル通り簪の事です。

が、登場はしません。

117　更識楯無の妹

学年別トーナメント当日。

リリィは資料に目を通していた。

「どうかしら。　別に問題はないと思うけど？」

リリィの後ろには楯無がいる。

「まぁ、ベストにも思えなくはないね……。」

そう言って渡された資料を返す。

その資料には、トーナメントの組分が書かれていた。

織斑一夏&シャルル・デュノアペア。

ラウラ・ボーデヴィッヒ&篠ノ之箒ペア。

セシリア・オルコット&凰鈴音ペア。

あとは色々な生徒がペアになっていた。

元はと言えば、学年別トーナメントは一対一のタイマン勝負だった。

だがプロヴィネンス襲撃事件で一対一の戦闘は危険と見なしたのか、

ペア戦闘と言う事になった。

おそらく、アリーナ内にいる人数を増やすことで、不測の事態に対処しようとしたのだろう。

「上はこれで良いと思ってるわけなのよね。」

そう言って楯無は肩をすくめた。

楯無自身、この状況で良いとは思っていない。

むしろこれは対抗策ではなく、被害を出すだけの愚策と言う事も理解しているのだろう。

「でも、結局は止めると言う選択肢はないから、仕方がないと言えば仕方ないよね……。」

リリィはそう言うと、ため息をついた。

楯無はそのため息の意味が分かっているため、苦笑いで「ご愁傷さま」と言った。

「私は別学年だからもう行くけど、決勝は見にこれるようにしておくわ。」

そう言うと楯無は、リリィから離れる。

「……ああ、そうだ。」

リリィがそう言うと、楯無は振り返る。

首を傾げながら、リリィを見た。

「ちょっと前に、箒に盗聴器をつけた子がいるんだけど……。　その子の髪の毛の色が水色だったと言う事と、上級生徒の制服を着ていたと言う事。　……なにか知らない？」

そう言ってリリィは楯無を見る。

その言葉に楯無は、眉をひそめた。

「……言っておくけど、私じゃないわよ？」

「分かってる。」

その言葉に、楯無は眉をひそませて考える。

「……もしかしたら……。」

楯無は何かに気がついたのか、眉を更にひそませて言った。

そして楯無は少しためらったのか、言い淀みながら口を開いた。

「一年四組にいる、私の妹かもしれないわね。」

そう言うと、リリィは納得したように頷いた。

水色の髪の生徒は、学園内に楯無以外にも数人いる。

服装も買えば、ごまかす事ができる。

「……見当はついているが、楯無の方が正確に知っていそうだね。」

楯無は頷く。

「日本の代表候補生が、何の目的があって盗聴器を等に付けたのか、分かるな？」

「ええ、分かるわ。」

リリィは無言で話せと命じる。

肩をすくめながら楯無は口を開いた。

「あの子、代表候補生なのに専用機ないでしょ？」

「ああ。」

リリィは前に見た、資料を思い出す。

代表候補生なのに、専用機がない候補生。

「私の機体って、私一人で作ったってことは知ってる？」

その言葉にリリィは目を見開いた。

資料では、ロシア企業製と書かれていたのだから。

プログラムも、企業製と何の変りもない物を使っていたのだ。

それを楯無一人で作ったと言う事に驚いた。

やはり楯無は束とリリィ同様の、天才だった。

「……多分あの子は、私と同じように自分の機体を作ろうとしたんじゃないかしら？」

そう言って楯無は目を細めた。

「……でも情報が足りない。　だから生みの親の部屋に盗聴器を仕掛ければ、何とかなると思ったんじゃない。」

リリィは楯無の言葉に納得した。

姉妹と言う事もあってなのか、妙に理解力がある。

どうやら、他国の諜報部という線は薄そうだ。

「……分かった。　引きとめて悪かったね。」

楯無は「別にいいわよ」と言いながら、手を振りながら歩いて行った。

１１７　更識楯無の妹（後書き）

まぁ、こんなんでいいかな？

盗聴器は更識簪が取り付けた物だと言う事になりました。

確定はしてません。

ですが、確信はしています。

それにしても、楯無の扱いがどうなっているのか……。

更識家当主は何処言った？

まさか……。

と、アホな事を考えております。

１１８　戦闘前のコール（前書き）

まぁ、かなり省略していますが、トーナメント戦です。

１１８　戦闘前のコール

この学園別トーナメントはシナリオとしては悪くない。

特に戦闘経験が未熟な者に、経験を積ませることができるのだから。

そう思いながら、試合を眺める。

元のトーナメントから、かなり違う方針になってしまったが別に構わない。

そう思いながら、リリィは管制室からアリーナの戦闘を眺めた。

丁度打鉄二機対、打鉄とラファール・リヴァイブとの戦闘が終わった。

そんなこんなですでに四組が勝ち残り、ベスト４と言う状態。

もちろん楯無が生徒会長であるから、こうなる事を確実に狙っているのだが……。

もちろん勝ち残ったのは、一夏とシャルロットという連携が半端ないペア、ラウラと箒という連携を無視した険悪ムードで自身の力だけを頼りとしたペア、それにラウラに対して圧倒的な連携で翻弄したセシリアと鈴ペア、さらに楯無が言う、水色髪の眼鏡をかけた四組の生徒……更識簪のペアも残っている。

ちなみに今終わったのが、更識簪ペアの試合だ。

「流石にいっくんたちは残ったね～☆」

束がそう言いながら、笑う。

いや、もし負けていたらリリィは激怒モノだろう。

「流石に負けたら、叩いていたがな。」

千冬の言葉に真耶は苦笑いする。

少し休憩をはさみ、先ほど戦闘を行ってペアではない者同士の戦闘が始まる。

休憩の間、リリィは会場の警備体制や決勝での打ち合わせを千冬としていた。

決勝の事を最初聞いた時は、リリィも千冬もため息しか出なかった。

なにせ、束と楯無が悪ふざけをしたのだから。

「準決勝戦を開始します。」

真耶が時間がたったため、アリーナに放送を入れる。

「出場選手は、ピットに集合してください。」

その言葉に、会場はざわめく。

生徒だけではなく、企業の社長などもざわめいていた。

「一年なのに、技術が高い」という事に。

もちろん言われたのは、一夏や箒などのリリィが教えている物達だ。

今まで起きた戦闘は、簡単に説明すると以下のようになる。

織斑、デュノアペア。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩで撹乱した所に、白式が剣撃で落とすと言う各個撃破の連携。

篠ノ之、ボーデヴィッヒペア。

お互い開始したら、レールカノンと雨月で一撃のもと叩き伏せると言う単独戦闘。

オルコット、凰ペア。

状況に応じた戦術で、遠距離攻撃や近接攻撃、特殊兵装を使用する連携。

そんな感じだ。

更識簪のペアは、技術はあるがごり押し気味の戦闘が大きく目立った。

「では、両者カタパルトに乗ってください。」

真耶がそう言うと、モニターにセシリアとラウラが映る。

別モニターには≪カタパルトエンゲージ　オールグリーン≫と映し出されていた。

ラウラは無言のまま、アリーナへ射出された。

『……では、コール０という事で良いですかしら？』

セシリアは何か鈴と話合うと、頷きアリーナを見定める。

『コール０。　セシリア・オルコット、ブルー・ティアーズで出ますわよ！』

そう言うと勢いよくアリーナに射出された。

続けて箒と鈴がカタパルトに乗る。

同じように≪カタパルトエンゲージ　オールグリーン≫と映し出されると、二人とも同じタイミングで口を開いた。

『コール１。　凰鈴音、甲龍……行くわよ！』

『ノーコール。　篠ノ之箒、紅椿……いざ、参るっ！』

そう言って同時に射出された。

三人がやった事は何という事もない。

戦闘前のコール確認だ。

あの戦闘の後コール名称を番号に変えたため、戦闘前にコールを決

めたというわけだ。

何のおかしくもない事だ。

その事は束も千冬も理解している。

こういうコールなどが、戦闘で一番役に立つと言う事に。

真耶は何故コールを言ったのか首を傾げて悩んでいるが……。

１１８　戦闘前のコール（後書き）

はい、トーナメントでいきなり一夏とラウラがぶつかる事は避けました。

セシリアと鈴もいるし、見せ場を作るためにこういう結果に……。

まぁ、やりますよ……。

次回は、ラウラがキレるためドイツ語が増えると思います。

苦情なかったので……。

１１９　私闘の続き（前書き）

まぁ……アレですね……。

ラウラＶＳセシリア＆鈴。

アレ、箒は？

空気になりました……。

119　私闘の続き

「貴様は手を出すなよ。」

ラウラはそう言うと、箒の前に出た。

先ほど真耶が≪試合開始≫と言ったため、試合はすでに始まっている。

セシリアと鈴はすでに後退しながら、いつでも攻撃に出れる体制だ。

対するラウラは、レールカノンスラ展開せずに立っていた。

箒は両手に雨月と空裂を持っている。

「Ｊｅｎｅ　Ｋｅｒｌｅ　ｓｉｎｄ　ｍｅｉｎ　Ｓｐｉｅｌ．（あいつらは、私の獲物だ）」

そう言うと目つきを鋭くさせ、ワイヤーを展開しながら鈴に向かった。

箒は唖然としながら、それを見届けた。

ちなみに、箒はドイツ語が分からない。

そのため、「手を出すな」という言葉とラウラのドイツ語に呆然としているだけだ。

「一人で大丈夫かしら？」

「Ｇｕｔ．　ｈａｂｅｎ　Ｓｉｅ　ｋｅｉｎ　Ｐｒｏｂｌｅｍ．（大丈夫だ、問題ない）」

そう言いながら、にやりと笑う。

セシリアは誘導兵器を射出する。

だが、ラウラはセシリアを見ずに鈴へ向かう。

「っ！　今日は私から？」

鈴は青龍刀を構えながら、ラウラに向かってそう言った。

ラウラの加速は止まらず、移動しながらワイヤーが鈴へ伸びる。

ワイヤーを青龍刀で弾くと、姿勢を戻し片方の青龍刀を下げた。

ラウラは誘導兵器から放たれるレーザーを回避しながら、鈴に迫る。

「Ｉｈｒ　ｉｓｔ　ａｌｓ　ｊｅｎｅ　Ｋｅｒｌｅ　ａｎｄｅｒｓ……Ｉｃｈ　ｖｅｒｄｉｅｎｅ，ｌｏｂｅｎ　Ｓｉｅ　ｕｎｄ　ｓｃｈ？ｔｚｅｎ　Ｓｉｅ　ｅｓ　ｅｉｎ．（貴様たちはアイツらとは違うからな……、称賛に値し、評価しているだけだ）」

その言葉を聞くと、鈴は驚きながらラウラに接近した。

「Ｄｅｓｈａｌｂ　ｗｅｒｄｅ　ｉｃｈ　ｅｓ　ｖｏｎ　Ｔａｋａｓｈｉ　ｍａｃｈｅｎ！（だからこそ、貴様からやらせてもらう！）」

誘導兵器の合間を縫って移動し、鈴は青龍刀をラウラは腕のプラズマブレードを振るう。

次の瞬間、鈴とラウラはぶつかり、火花を散らしながら互いにすれ違う。

「嬉しい言葉ね。」

「Ｉｃｈ　ｂｉｎ　ｇｅｗ?ｈｎｌｉｃｈ.（当たり前だ）」

鈴がラウラを見ながらそう言うと、ラウラも鈴を見ながら返答した。

セシリアもその言葉を聞きながら、再度誘導兵器を動かす。

レーザーがラウラの後方から放たれるが、ラウラはバレルロールしながら上下左右に回避する。

鈴は足を前方に出し脚部スラスターで大きく反転すると、ラウラに向かって移動しながら単発で衝撃砲を撃つ。

ラウラはそれすらも回避しながらレールカノンを展開し、上昇しながら鈴を視界に捉える。

鈴はその光景を見ると、目を見開き甲龍の軌道をずらす。

次の瞬間には、甲龍のアンロック・ユニットをかすりながら砲弾が通過した。

「Ｉｃｈ　ｖｅｒｍｉｅｄ　ｅｓ　ｇｕｔ.　Ｉｃｈ　ｓａｇｅ,

ｄａ？　ｉｃｈ　ｃｈａｒａｋｔｅｒｉｓｔｉｓｃｈ　ｂｉｎ．
（よく避けたな。　流石だと言っておく）」

「……そりゃ、どうも！」

ラウラの言葉に返答すると、鈴は瞬時加速でラウラの間合いに入る。

その勢いのまま、鈴は青龍刀を振り下ろす。

しかしラウラは予測していたのか、下降しながら後退して避けた。

「アンタもよくやるじゃない。」

鈴は自身より下にいるラウラを見ながら言った。

ラウラはワイヤーブレードを展開させるが、鈴はそれよりも早くラウラから離れた。

追撃しようと思ったが、誘導兵器があったためラウラ自身もその場から離れた。

「……Ｇａｎｚ　ｄａｍｉｔ．　Ｅｓ　ｇｉｂｔ　ｎｉｃｈｔ　ｍｅｉｎｅ　Ｅｘｉｓｔｅｎｚｂｅｄｅｕｔｕｎｇ　ｗｅｎｎ　ｎｉｃｈｔ　ｓｔａｒｋ．（……それはそうだ。　強くなければ、私の存在意味がないからな）」

そしてまた、誘導兵器を回避し始めた。

１１９　私闘の続き（後書き）

あ～、箒が空気ですね……。

とりあえず、私闘の続き。

ラウラが少なからず、セシリア達の実力を認めています。

千冬＞ラウラ＞セシリア＞箒＝鈴＞シャルロット＞一夏

リリィ？

分からないから不明じゃないかな？

それとも認めたくないのかな？

まぁ、どうでもいいや。

戦闘ばっかで何回かかぶりそう……。

そして最近グダってきたな……。

更新がいっぱいいっぱいだよ……。

１２０　ラウラの挑発（前書き）

……戦闘って、完璧に分割してるね……。

まぁ、良いけど。

１２０　ラウラの挑発

「Ｎｅｂｅｎ　ｄｅｍ　Ｗｅｇ，　ｎｅｈｍｅｎ　Ｓｉｅ　ｅｓ　ｄａｖｏｎ　ｉｒｇｅｎｄｗｏ．（さて、何処からでもかかってこい）」

ラウラはそう言って、鈴を挑発した。

もちろん鈴は挑発された事に少しだけ頭に来たが、理性で押しとどめる。

「セシリア……。」

鈴に呼ばれセシリアは、降下する。

「……いい案ある？」

その言葉にセシリアは首を振った。

ラウラは相変わらず、ブレードを展開したまま上空に静止している。

「軍人が相手ですと、行動に対して隙がないのも問題ですわね……。」

通信でやればいいものを、なぜか普通に話し始める二人。

ラウラはそれを見て、口を歪めた。

「っ！？　１－１２－１－１！」

セシリアのコールに、鈴はアンロック・ユニットのスラスターで上昇した。

すでにセシリアはその場から居なく、鈴は一瞬焦った。

二人が先ほどまでいた場所に、黄色い放電現象した何かが通り過ぎた。

もちろん、二人は何かというのは考えなくても分かる事だ。

「相変わらず、やってくれるじゃない。」

ラウラを見て鈴はそう言った。

右肩の砲塔が展開しており、砲身からは煙が出て後ろからは空になった薬莢を排出したい

た。

「Die F?higkeit ist hoch, aber es ist dennoch mehr ein Kind……（技量は高いが、まだまだ子供だな……）」

「なんですってっ!!」

ラウラの言葉に鈴が反論する。

「Nur ein Kind einschlie?lich der Konversationsarbeiten als e

in Partner vor Augen w?hrend eines Kampfes……Nein, sogar ein Kind wird es nicht machen.（戦闘中に相手を目の前に会話など、子供しかやらないな……いや、子供でもやらないだろうな）」

その言葉に鈴は反論ができなかった。

米神をピクピクさせて、耐えている。

「Weil ich ist wenniger als ein Kind, k?nnte der K?rper nicht aufwachsen?（子供以下だから、身体も成長しないのではないか）」

その言葉に鈴はキレた。

青龍刀をつなげアンビデクストラス・フォームのち、瞬時加速でラウラに斬りかかった。

だが、ラウラは後退することでそれを避ける。

「鈴さんっ！！」

セシリアは鈴を止めようとするが、全然聞いていなかった。

青龍刀を回転させながら、振るう。

だが、ラウラはブレードで弾くと左手を鈴に向けた。

「っ！？」

すると、甲龍の動きが止まる。

会場がその光景にざわついた。

「ＡＩＣ……。」

苦虫を噛んだような声で、鈴は言った。

ＡＩＣとは「Ａｃｔｉｖｅ　Ｉｎｅｒｔｉａｌ　Ｃａｎｃｅｌｌｅｒ（アクティブ・イナーシャル・キャンセラー）」の略であり、別名「慣性停止結界」という名前がある。

ＰＩＣを発展させたものであり、対象を停止させる効果を持つ。

つまり、鈴はラウラの挑発に乗ってＡＩＣにかかってしまったのだ。

「……ああ、もう！　挑発に乗るからですわっ！！」

セシリアはそう毒々しく言うと、上昇してライフルをラウラの手元を狙って構えた。

だがその時には鈴に向かってレールカノンが発射されており、鈴のエネルギーが大幅に削られた後だった。

鈴はレールカノンに吹き飛ばされながら、何とか姿勢を立て直す。

「鈴さん！！」

「ごめんっ！」

セシリアの声に、鈴は自身の迂闊な行動を悔み謝った。

１２０　ラウラの挑発（後書き）

微妙に仲がいい、セシリアと鈴。

リリィ効果ｗｗｗ

まぁ、一夏が絡んだら相性が悪くなるだろうけど……。

さて、さっさとこの戦闘も終わらせたいな……。

めんどくさいし……。

トーナメントで何話使うんだろう？？？

考えても仕方がないか。

というか、ラウラがキレるとドイツ語って……ラウラキレてないじゃんっ！？

今さら気がついたけど、ラウラが戦闘か感情がかたぶった場合だけにしようかな……。

うん。

１２１　セシリアの罠（前書き）

思うんだ……鈴よりセシリアが目立ち過ぎだと言う事に……。

そういう、お話ｗ

121　セシリアの罠

「ごめん、……前衛任せていい？」

鈴がそう言いながら後退する。

観客席に声が聞こえるため、その事に全員が唖然とした。

鈴の甲龍は中距離から近距離兵装の機体に対し、セシリアのブルー・ティアーズは完全に遠距離兵装主体の機体なのだ。

「……仕方ありませんわね。」

だが全員の想像とは裏腹に、セシリアは少しずつ前に出た。

その行動に、ラウラも目を丸くした。

「Ｓｉｎｄ　Ｓｉｅ　ｄｕｍｍ？（お前は馬鹿なのか）」

本気でラウラはセシリアの頭を心配した。

「Ｎｅｉｎ……Ａｒｍｂａｎｄｕｈｒ．．；　ｄｉｅ　Ａｕｆｆ？ｈｒｕｎｇ　ｄｅｓ　Ｋ？ｒｐｅｒｓ　ｖｏｎ　ｄａｓ　．．．．．．Ｕ．Ｋ．　ｕｎｄ　Ｉｈｒｅ　Ｆ？ｈｉｇｋｅｉｔ！！（いや……、なら見せてもらおうイギリスの機体の性能とお前の技量を）」

しかし、ラウラも身を引き締めた。

自身と渡り合える二人だ。

何があるか分からない。

箒は後方で静かに戦闘を眺めていた。

ラウラに言われた通り、戦闘に参加しないのだろう。

セシリアは鈴が後退したのを確認すると、誘導兵器を展開した。

「さて、ワルツはいかがかしら？」

そう苦笑しながらセシリアは言った。

対するラウラは、誘導兵器を回避しながら確実にセシリアに迫って行く。

だがさっきより照準が正確になったのか、足を掠めてレーザーが飛んでいくことが多くなった。

「Kümmern Sie sich, reicht zu viel eine gef?hrte Waffe und kann nicht direkt bewegen……Herbst（誘導兵器に気が行き過ぎて、まともに動けてないな……、落ちろ）」

そう言うと、瞬時加速でセシリアをブレードの間合いに入れた。

ラウラはセシリアとの戦闘で気がついた事があった。

誘導兵器と本体の両立だ。

必ず、誘導兵器を使っていない時は止まっている。
そして今現在、誘導兵器は展開されており、セシリアは止まっている。
だからこそ、ラウラは安心しきって瞬時加速で無防備なセシリアの目の前に出たのだ。
「……おあいにくさま。」
そういうと、ラウラのブレードを避けるようにセシリアは後退した。
ラウラは一瞬目を疑った。
「そうやすやすと落ちはしませんのよ？」
誘導兵器がレーザーを放ちながら、ラウラに接近する。
だが、セシリアは後退している。
後退しながら、腰装備のミサイルとライフルをラウラに向ける。
ラウラはその射線から避けようとするが、無慈悲にもライフルが発射され視界をレーザーが覆う。
絶対防御が発動するが、機体は後方に吹き飛ばされる。
そこに、ミサイルが追撃してきた。

気がついたときには、すでに目と鼻の先。

再度絶対防御が展開され、エネルギーを奪って行った。

「残念でしたわね。私（わたくし）は誘導兵器を扱いながら自身が戦闘行動に参加することができますのよ？」

ラウラは目を見開き、その言葉を聞いた。

そして苦々しく言った。

「Ｗｉｅ ｆ？ｒ ｄａｓ，ｗａｓ ｅｓ ｈｉｅｌｔ ｕｎｄ ｄａｆ？ｒ ｅｉｎｅ ｇｅｆ？ｈｒｔｅ Ｗａｆｆｅ ｂｅｎｕｔｚｔｅ……Ｅｉｎｅ Ｓａｃｈｅ ｒｉｅｆ ｄｉｅ Ｆａｌｌｅ……（止まって誘導兵器を使っていたのも……罠という事か……）」

「そうですわ。」

そう言うと、セシリアはライフルを正確に撃って行った。

ラウラは二回の絶対防御の発動に、エネルギーが危険域にまで迫ってしまった。

「Ｓｃｈｅｉ？ｅｎ Ｓｉｅ！（クソっ）」

エネルギーが不安になりながら、レーザーを避け続けた。

誘導兵器にライフルからの射撃。

「・！？」

さらに別方向から砲撃がるとモニターに出たため、回避行動を行う。

すると衝撃砲が間を開けて攻撃してきた。

「……セシリアナイスっ！」

そう言いながら、鈴が一定の距離を置きながら撃ってきた。

ラウラのエネルギーは、間もなく切れるだろう。

「きゃっ！？」

そんなとき、鈴が悲鳴を上げエネルギーが無くなった。

そして誘導兵器に赤い光条が伸びて、誘導兵器を後退させた。

「……悪いが、交代してもらおう。」

ラウラの前に紅椿を纏った箒が、そう言って雨月と空裂を構えた。

１２１　セシリアの罠（後書き）

さて、アリーナもある事だし……束に公演してもらいましょうかｗ

アイドルとしてｗｗｗ

……うん、アリーナ違いだね……。

まぁ、やらないと思うけど……。

１２２　戦場は策略と銃弾が飛び交う場所（前書き）

……タイトルが思いつかなかった。

ここ最近ぽ一番の悩み……。

１２２　戦場は策略と銃弾が飛び交う場所

「Ｔａｋａｓｈｉ！（貴様っ）」

ラウラは突然戦闘に参加した箒を睨むが、当の箒は雨月と空裂を握ったまま動かない。

「箒さんも参戦するのかしら？」

「ああ。」

セシリアの質問に、箒は簡単に肯定し返す。

「ここからは私が相手をしよう。」

そう言うと、箒は加速した。

瞬時加速と見間違うほどの速度。

会場はそれに呆然としながら、戦闘を眺めた。

ラウラはエネルギーが切れかけてはいるが、戦闘可能な状態。

鈴はエネルギー切れで、戦闘不可能な状態。

つまり、実質的な箒対セシリアの戦闘になった。

箒は圧倒的な速度でセシリアに迫るが、誘導兵器がそれを阻む。

二基一組の形で十字にレーザーを撃ち、箒の進路をふさぐ。
だが箒もそれでとまるはずもなく、右へ左へと移動してゆく。
「流石、第四世代機ですわね……。」
そのセシリアの言葉に、会場内がざわついた。
未だ各国が作れない世代機。
その事に企業重鎮は納得し、紅椿を手に入れる算段を立てる。
だが後に出来ないと知り崩れ去るのは、また別のお話。
箒は誘導兵器とライフルの攻撃を避けながら、何度かセシリアに接近した。
しかし毎回ライフルと誘導兵器二基、更にセシリア自身の後退という回避で、上手い様に避けられていた。
「……キリがないな。」
そう言ってレーザーを回避し続ける。
「そうですわね。」
ラウラを警戒しながら、セシリアは箒を狙う。
軽口で言葉を返したが、内心ひやひやしている。

エネルギー残量が危険域に近づいていた。

だが顔に出せば強気で責めいられ、逆転の可能性も消え去る。

セシリアはエネルギーを横目で、ドキドキしながら見るのと同時に、箒が痺れを切らして隙を作ってくれるのを待った。

しかし、箒もリリィの教えを受けているのだ。

迂闊には近寄る事はしなかった。

その間にも誘導兵器とライフルがレーザーを吐き続け、エネルギーを減少させて行った。

（このままでは、エネルギー切れで最悪近接格闘戦になてしまいますわ……。）

そう考えると寒気がした。

紅椿は近接格闘特化型の機体であり、搭乗者の箒はリリィから剣技教わっているのだ。

勝てると言う要素が無い。

（最悪、捨て身覚悟で行きませんと……。）

ライフルの射撃を止め、誘導兵器を戻す。

箒は奇妙な感覚がしたため、両足を開きいつでも動ける構えを取りながら制止した。

（……なんだ？）

眉をひそめながら、箒はセシリアを見る。

セシリアはいつもの表情だが、どこか切羽詰まった表情をしている。

当のセシリアは、箒をいかに撃墜しラウラを落とそうか考えていた。

（篠ノ之さんは早いから、零距離で当てなければなりませんわね。）

零距離で撃てば回避は困難であり、当たり所によってはシールドエネルギーを大幅に削ることができる。

（それでも勝てるか分かりませんわね……。　ボーデヴィッヒさんだ……って……！？）

セシリアは箒からラウラに視線を向けた。

しかし、先ほどラウラがいた場所に誰もいない事に気が付く。

（どこにっ！？）

慌てて捜したところで既に遅く、大きな衝撃がセシリアを襲った。

「きゃぁぁぁ！！」

セシリアは後方からレールカノンを直撃させられ、エネルギーが切れた。

ラウラはそれを見て、少し笑った。

「Ｈｅｇｅｎ Ｓｉｅ ｅｉｎｅｎ Ｇｒｏｌｌ ｇｅｇｅｎ ｓｉｃｈ ｓｅｌｂｓｔ，ｄａｓｕｎｒｅｉｆｉｓｔ，ｄａｓＡｕｇｅｎｖｏｎｍｉｒａｕｓｓｃｈｌｏ？，ｗｅｎｎ ｉｃｈ ｅｉｎｅｎ Ｇｒｏｌｌ ｔｒａｇｅ．（怨むなら、私から視線を外した未熟な自分を恨め）」

１２２　戦場は策略と銃弾が飛び交う場所（後書き）

さっさと終わらせたいため、こんな結末になってしまった。

箒が空気すぎる……。

セシリア＞ラウラ＞鈴＞箒

右に行くほど空気になっていく……。

そしてようやく……って、言っても意味がないか……。

コレ予約したの、前日の２３：４１だし……。

まぁ、熟睡ですよ～。

うん。

マジで。

うん。

次は……簪戦をうやむやに終わらせて、決勝にしようかな……。

そうしよう……。

１２３　決勝に現れる機体（前書き）

……言葉は不要か？

不要だな？

そんじゃぁ、あとがきで～☆

１２３　決勝に現れる機体

一夏達の試合は、あっけなく終わった。

専用機持ちペアと訓練ペアだからというのは仕方がない。

しかしシャルロットの存在が、圧倒的だった。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩのショットガンが、数発のうちに１機落としてしまったのだ。

ショットガンとはいえ、七割近くの弾が命中したのだ。

乗って間もない訓練生は、すぐに落とされるのは当たり前。

≪決勝戦を始めます。≫

つまり、決勝に進んだと言う事であって。

ラウラと箒のペア対、一夏とシャルロットのペアという事だ。

一夏はカタパルトで、そのアナウンスを聞いていた。

「いよいよだな。」

そう意気込むと、雪片を握った。

「頑張ろうね。」

シャルロットもラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩで歩く。
そんな時、シャルロットに通信が入った。
≪はろはろ～☆≫
束だった。
「どうしたんですか？」
不思議そうに聞き返す。
プライベート・チャンネルではないため、一夏にも束の声は聞こえた。
カタパルトに接続したから、首をこちらに向けるだけだが。
≪決勝戦では、ＧＡＴ－Ｘ１０５で行って欲しいんだ～♪≫
「ええ！？」
シャルロットは驚いた。
ＩＳではなくＩＭＳで行けと言ってきたのだから。
≪理由はすぐに分かるよ♪　じゃね～☆≫
そう言うと通信は切れた。
シャルロットはあっけにとられながらも、ラファール・リヴァイヴ・

カスタムＩＩをＧＡＴ－Ｘ１０５に変える。
灰色の全身装甲機体になる。
「……あいかわらず、束さんは何を考えてるのか……。」
「さぁ……？」
その間にも開始が迫ろうとしていた。
一夏は慌てて、カタパルトのモニターでシステムをチェックする。
「んじゃぁ、俺が０で良いか？」
その言葉に「うん、いいよ」と簡単に返事を返す。
一夏は気合を入れながら、膝を曲げる。
カタパルトから飛ぶためだ。
「コール０。　織斑一夏、白式……行くぜっ！！」
そう言って一夏はアリーナに出て行った。
シャルロットもカタパルトに向かって歩く。
足を接続して、確認する。
≪装備　エールストライカーパック≫

高速切替と同じ要領で、背部に黒に所々赤で色付いた大型スラスターが現れた。

≪フェイズシフト装甲　展開。≫

モニターが浮かび、機体を鮮やかに色付かせる。

シャルロットは全て確認し終えると、一夏同様に膝を曲げた。

「コール１．　シャルル・デュノア、ストライク……行きますっ！！」

その言葉にカタパルトは高速で、Ｘ１０５を移動させアリーナに押し出した。

会場は、いきなり現れた全身装甲の機体に驚いていた。

もちろん真耶も取り乱した。

≪えっ！？　な、嘘？　え？？≫

≪はいはい、どいたどいた～☆≫

真耶を押しのけて、束がマイクを掌握する。

ラウラはＸ１０５を見ると、唖然とした。

「貴様が……。」

憎らしげにそう言うと、ラウラは合図もなしにレールカノンを展開

させた。

だがそれを束が見過ごすはずもなく、止めさせた。

≪さて、ここからは天才の束さんが説明するよ～♪≫

その言葉に、束がいる事を知らない者は驚愕していた。

≪決勝戦は教員のペアも参加するから、頑張ってね～☆≫

一夏と箒は、その言葉に嫌な予感を感じたのか少し震える。

≪教員の説明した方が良いかな？≫

ラウラは依然Ｘ１０５を睨み、シャルロットはそんなラウラは眺めている。

一夏と箒は、教員というのに心当たりがあるため震えだす。

会場は教員の参加に、皆首を傾げる。

≪まぁ、力量図るためだし……。≫

束はめんどくさそうにそう言うと、爆弾を投下した。

≪いっくん達は、天使と騎士に勝てるかな？≫

その言葉に、一夏と箒は完全に震えだし始めた。

会場は、「もしかしたら……」という予測が飛び交う。

そしてピットから、それは飛び出る。

その姿を見て、一夏と箒は絶句した。

ラウラは久方ぶりに見る機体に、目を見開く。

シャルロットは、知っていたのかあまり驚かない。

会場は、大騒ぎになる。

そこには、白騎士事件の英雄がいたのだから……。

１２３　決勝に現れる機体（後書き）

て言う事で、リリィ無双を期待していた方……。

リリィが生徒という事で、出ないのかな～と思っていたでしょう。

残念、出るんですｗ

無双です。

というか、千冬と出たら無双以外の言葉が思いつかない。

無敵？

という事で分かり切ったと思いますが、後の展開はご想像通りになると思います。

１２４　フリーダムと白騎士……（前書き）

リリィが戻ってきました。

うん。

戻ってきたよ……。

１２４　フリーダムと白騎士……

「Ｗｅｎｎ　ｅｓ　ｅｉｎ　Ｅｎｇｅｌ　ｉｓｔ……（天使だと……）」

ラウラはフリーダムを見るや、驚愕した表情でそれを見続けた。

会場内もざわめき、カメラのシャッター音も聞こえる。

≪試合開始～☆≫

束がそう言うが、誰も動こうとはしない。

依然ラウラだけが、驚愕しながら天使を見ていた。

「リリィどうする？」

白騎士が振り返りながら、十八枚の翼を持つフリーダムを見た。

「どうしよっか？　小手調べにＸ２０Ａで戦闘する？」

「Ｘ１０Ａじゃないのか？」

「この人数相手にＸ１０Ａでもいいけど、めんどくさいからドラグーン使いたいし……。」

リリィ達は言葉は軽いのだが、内容は一夏達にとっては重かった。

未だに、上手くドラグーンが回避できないのだ。

気が重くなるのは当然だろう。

「さて、誰が相手になる？」

千冬はそう言うと雪片・真打を腰にマウントして、雷刀・桜と光刀・暁を構える。

「私は誰でもいいよ～。」

箒は急いで一夏に通信をつなげた。

「どうする！？」

かなり慌てながら、喋る箒。

だが、一夏はそれがおかしいと思わなかった。

むしろ一夏も慌てていたのだから……。

「絶対勝てないっ！！」

そう言うと、シャルロットが「あの……」っと話に入ってきた。

一夏達は、震える声でたずねた。

「もしかしたら、どちらかの足止めは一人で出来るかもしれないんだけど……。」

その言葉を聞いた瞬間、一夏は絶句した。

敵う事は出来ないが、足止めをすることができるかもしれないと言ったのだ。

シャルロットはリリィの訓練を受けているため、ある程度リリィの実力は把握しているだろう。

箒は急いで策を練る。

セシリアみたいな良い策は思いつかなかったが、最善の策を思いついた。

「なら、今から共闘だ。　デュノアがどちらか抑えている間に、片方を畳みかける。」

箒の言葉にシャルロットは了承する。

「了解！」

一夏も了承した。

ラウラは返事がない。

呆然としていた。

箒が何度も名前を読んだが、返事がない。

仕方なしに、ラウラ抜きで戦闘に入った。

「織斑先生を先に落とそう。」

そう言うと、ストライクは膝を曲げて飛び立った。

ＰＩＣが意味を成さないため、ブースターでの飛翔だ。

その速度は、瞬時加速より早かった。

「……私が行くよ。」

リリィは千冬の前に出て、瞬間的に機体を変えた。

十枚の翼が広がった。

それを確認したシャルロットは、ビームライフルを向ける。

ＩＳより照準が早く精度が良いため、ノータイムで撃てた。

フリーダムは、白騎士をかばうようにシールドを掲げ射撃を防ぐ。

シャルロットはそれを見て、再度引き金を引く。

吐き出された射撃は、またもシールドによって防がれた。

「……お返しだよ。」

フリーダムもシールドを持つ手を横に動かし、ライフルを構えて撃った。

しかしストライクも、スラスターで射線の上に移動して避ける。

数発撃って、フリーダムはライフルをマウントしてサーベルを引き抜く。

そして、ストライク同等の速度を瞬間的に出して接近する。

「っ！」

その光景に、ストライクもライフルを右腰にマウントして、サーベルを背部から引きぬく。

お互い間合いに入った瞬間に、サーベル同士がぶつかる。

だがサーベル同士はすぐに離れ、お互い切り返した。

三回目の切り返し時にストライクは、さらにフリーダムに接近した。

フリーダムはサーベルを振るう事を止める。

近過ぎて、刃が当たらないのだ。

ストライクは、仕掛け側というのもあって上段から振った。

「やるね。」

リリィは簡単そうにシールドで受け止めた。

フリーダムのシールドに、ストライクのビームサーベルが当たり、火花を散らした。

１２４　フリーダムと白騎士……（後書き）

……たまには休もうかな……。

そう思う事、数十回。

いつか４回更新が崩れるかも……。

w

いつか……ネ。

束が空気になってきた……。

１２５　フリーダム対ストライク（前書き）

サブタイ通りです。

ここでのフリーダムは、ＺＧＭＦ－Ｘ１０Ａ　です。

大丈夫だよね？

１２５　フリーダム対ストライク

ストライクのサーベルを、フリーダムはシールドで受け止め競り合う。

その光景に会場は静まり返った。

第四世代機の他に白騎士と天使までもが現れたのだ。

誰もが呆然とするだろう。

千冬のクラスは、紅椿が第四世代だと言う事に。

他は両方に驚いていた。

だらに、白騎士も白式も紅椿もシュヴァルツェア・レーゲンも動いていない。

ただ動いているのは、フリーダムとストライクだけだった。

「いきなり私とは、何が目的かな？」

そう言いながら、フリーダムはサーベルを防いでいるシールドを傾け攻撃を流す。

「くっ！」

ストライクは攻撃をそらされ、背部スラスターを調整しターンする。

フリーダムも背部ウイングを、片方だけ吹かしターンする。

「はぁぁぁぁ！！」

「ふっ！！」

距離が開いたため、お互いブースターを展開して近づく。

再度サーベル同士がぶつかり合う。

だがお互いすれ違い、ターンをして斬り合う。

「結構機体になれたようだね。」

そう言いながら、すれ違う。

「……良い機体だよ、この子は。」

急激なターンをしながら、シャルロットは言葉を返す。

フェイズシフト装甲は、急激な加速や方向転換に対して搭乗者を守る絶対的な装甲だ。

時速何万Ｋｍを出そうが、中の人間が負傷する事はない。

リリィが実験済みだ。

本来は実体系の攻撃を機体表面装甲に電力を流すことで相殺するシステムである。

しかし、ＩＭＳは機体フレーム全てに使っている。

もちろん、機材一つ一つにもだ。

おかげで機体は、実弾や実体剣に対して無敵。

いくら速度を出そうが無効か出来ると言う、反則的な能力を持った。

シャルロットはターンをして、フリーダムに顔を向けると頭部バルカンを使う。

同装甲を使っているからダメージは追わないが、流石に速度は遅くなる。

遅くなった気はしないが……。

「えぇぇぃ！！」

そう言いながらサーベルを振り下ろす。

一応出力を抑えているため、絶対防御は抜かない熱量だ。

だが、ストライクには絶対防御が付いているだろうが、フリーダムには付いていない。

そのためビームサーベルは、リリィにとっては脅威なのだ。

「……甘いよ。」

フリーダムが同様にサーベルを振り下ろす。

そしてお互いサーベルを右手で振り下ろすが、左手のシールドに阻まれる。

肘を曲げ力を込めるが、同様に力を込められ胴体同士が当たりそうになる。

先にフリーダムの方が腕をばねの要領で伸ばし、ストライクから距離を取る。

ストライクも、シールドを前面に出し足の裏にあるスラスターで後退する。

上昇しながら後退するフリーダムは、サーベルを戻しライフルに持ち変えてストライクに撃つ。

「くっ！！」

だが、ストライクは前面に出したシールドで、射撃を防ぐ。

アリーナの地面に降りると、シールドを右手に持ち変える。

その間、正確な射撃がシールドに当たる。

「……ん？」

リリィはストライクの背部兵装が消えた事に気が付く。

射撃の速度を緩め、いつでも行動できるように構える。

ストライクはシールドに身をかくしているため、上手い具合に何をやっているか分からない。

だが、大体は見える。

（角度修正、誤差修正、体勢から反動までの砲身角度確認。）

シャルロットがそう確認すると、右手をシールドから離して右膝で支える。

その横から、緑色の砲身が背部に現れた。

さらに反対側にも緑色の何かが見える。

「マジ？」

射撃を止め、瞬間的に砲身を見る。

ストライクは砲身の先端を、地面に擦りながらフリーダムに向ける。

「当たれっ！！」

フリーダムに向けた瞬間に、ストライクは躊躇い無くトリガーを引いた。

１２５　フリーダム対ストライク（後書き）

そろそろ書くのがつかれてきた束です……。

きっついな～。

でも、この感覚で書かないと遅れ癖がつくからな～。

という事で、ストライクがフリーダムに襲いかかると言う話???

でした???

１２６　黒ウサギは天使を知る（前書き）

もう、サブタイを考えるのがだるくなってきた……。

パトラッ〇ュ……私、もう、ダメみたい……。

１２６　黒ウサギは天使を知る

ストライクはエールストライカーを外し、ランチャーストライカに換装した。

だからこそ、緑色の砲身が現れたのだ。

その砲身の引き金を引くと、小さな銃口からそれ以上の大きさを持つビームが放たれた。

フリーダムはそれを全開でスラスターを吹かし射線から外れる。

「っ！！」

しかしその際に、アグニがフリーダムのシールドを弾いて行った。

その光景に、観客席にいる全員が唖然とした。

アリーナのシールドにぶつかると、そこの部分が、熱を持ったように赤くなる。

それほどの熱量を持っていたのだ。

一夏達も唖然とする。

「流石にかわすよね……。」

シャルロットだけは、外れた事に残念な気分になった。

だが、「回避されるのは当たり前だよね」と言ってジャンプする。

エールストライカーではないため、空中戦という事はできない。

あくまでランチャーは、砲撃戦用装備で空中戦は想定されてない。

そのためジャンプ。

フリーダムもライフルで狙うが、それよりも早くアグニを腰構えで撃つ。

「……結構、正確な砲撃だね……。」

そう言いながら、ビームを避ける。

お返しと言わんばかりに、ウイングから砲身を展開させた。

「まずっ！」

シャルロットはランチャーストライカーをパージして身軽になる。

ワンテンポ遅れて、二つの光条がストライクに迫った。

しかし、ブースターを最大展開して上昇してそれを避けた。

その間にも、エールストライカーを再着する。

（エネルギーは……問題無いか。）

本来ならストライカーパックは使い捨てだ。

だが高速切替によって装備するため、再着が可能となった。
使った分のエネルギーは、当たり前のように回復しない。
一定の距離を開けて、ライフルの打ち合いになった。

「Ｉｓｔ　ｄｉｅｓｅｒ　Ｅｎｇｅｌ　ｅｃｈｔ？（あの天使は本物か）」

ラウラは呆然としながら、箒に向かって聞いた。
だが、箒はラウラが何を言っているか分からない。

「すまない……。　日本語以外は、分からないんだ……。」

そのため、オブラートに包んで「日本語で話せ」と言った。
その言葉に、ラウラはため息をつき日本語で問い直した。
箒はラウラが日本語で言いなおしてくれたため、やっとの事で肯定

した。

「本当かっ！！」

ラウラの目が輝きだす。

その瞳はまるで子供のようだった。

「……相変わらず、リリィ強いな～。」

一夏がそう言うと、ラウラは驚愕し目を見開いた。

ラウラ自身危険と見なした人物が、憧れの人物であったと言う事に……。

「……私は……、なんて事を……。」

今までリリィに言ってきた事を悔いたのだろう。

いつもしない表情をする。

「……というか、私はいつまで無視されるんだ？」

すると突然声が聞こえた。

気が付くと、一夏達のすぐ上に白騎士がいる。

千冬は呆れた様子で、二本のブレードを何も構えずに持っていた。

その声にラウラは再度反応した。

「・・，　ｅｉｎ　Ｌｅｈｒｅｒ!?（きょ、教官っ）」

驚いて、日本語からドイツ語に戻った。

目を見開き、信じられなさそうな顔で白騎士を見たいた。

「Ｄｅｒ　Ｌｅｈｒｅｒ，　ｄｅｒ　ｉｓｔ，　ｗａｒｕｍ，　Ｓｉｅ　ｗｉｓｓｅｎ，　ｚｕ　ｅｉｎｅｍ　ｗｅｉ?ｅｎ　Ｒｉｔｔｅｒ……（な、なぜ教官が白騎士に……）」

「私が白騎士の搭乗者という事以外に、答えがあるのか。」

千冬は真面目に答えた。

決勝戦だと言うのに、戦わない三人に呆れているが……。

「まぁいい。　……どれほど強くなったか私に見せてみろ。」

そう言うと、白騎士は一番近い箒に向かって降下した。

１２６　黒ウサギは天使を知る（後書き）

……な～んだ、夢だったのかｗ

おはようパ〇ラッシュｗ

アメリカのフラ〇ダースの犬は、子供の教育上よくないと言う事で最終話が違う事を思い出した……。

肩こったな……。

１２７　思い出す言葉とラウラの行動（前書き）

ラウラの態度が急変します。

……マジで……。

１２７　思い出す言葉とラウラの行動

「ニ閃、散桜！！」

そう言って、白騎士は箒の横に降りた。

速度が、プロヴィネンス戦より早い。

「っ！？」

箒はその事に驚愕しながら、空裂を抜く。

だがその前にシールドを紙のように斬り裂いて、絶対防御が発動してしまう。

その光景に、一夏は驚いた。

「箒っ！！」

叫びながら、雪片を展開させる。

白騎士はステップを踏み、白式と紅椿から距離を取る。

「くっ……。」

箒は苦虫をかみつぶしたような表情となり、一夏の方に後退する。

今の攻撃で、紅椿はエネルギーが大幅に減少した。

「……零落白夜……か……。」

一夏が箒を守るように、雪片を構えた。

鏡のように向かい合う。

「っ！　一閃、白鷺！！」

先手を打ったのは一夏だった。

リリィに習った、剣術で一気に間合いを詰めた白鷺を行ったのだ。

しかし、一夏は忘れていた。

千冬もまた、同じ剣を使う物だと言う事に……。

振り下ろされる剣を、白騎士は防ぐ。

「なっ！？」

そして、刃先を下におろし雪片弐型をずらす。

雪片の刃先が地面に落ちる。

しかし千冬の攻撃は止まらなかった。

そのまま刃を翻し、一夏の胴を薙いだのだ。

「……ニ閃、天魔。」

その光景に箒も目を疑った。

今まで一夏達は、天魔は弧を書くように斬る事が一閃目だと思っていた。

攻撃だと思い……。

しかし、天魔の弧を書く切り方には意味があった。

一閃目の弧を書く切り方は、本来攻撃ではなく守りの剣。

相手の利き手を確認しそちら側に弧を書く事で、絶対的な守りを持たせる。

その後、悪魔のように鋭く変わり攻撃に変える。

それが天魔だった。

二人とも白鷺しかならっていないのか、驚き過ぎて動かなかった。

白騎士が刃を返した所で、一夏は我に返る。

しかし既に遅かった。

ニ閃目が上段から振り下ろされた。

「くっ！！」

しかし、それを止めたのはラウラだった。

「「「!?」」」

顔は見えないが、千冬は目を見開いて驚いていた。

ラウラが一夏を守ったのだ。

一夏と箒も呆然とした。

「やはり、クズだな。」

そう言ってラウラは一夏を蹴った。

（……守って無いか……。　むしろ攻撃したな……。）

千冬は呆然としてその光景を見た。

そしてラウラは白騎士に向き直る。

「織斑を助けるとは、どういう風の吹きまわしだ?」

その言葉にラウラは目をつぶった。

「Ｉｃｈ　ｅｒｉｎｎｅｒｔｅ　ｍｉｃｈ　ｄａｒａｎ. Ｅｉｎ Ｅｎｇｅｌ，ｄｅｒＢｅｄｅｕｔｕｎｇｇｅｓａｇｔｈａｔ，．．．．．ｚｕｅｉｎｅｍＥｒｇｅｂｎｉｓ　ａｕｆ　ａｌｌｅ　Ｆ? ｌｌｅ.（思い出したんです。天使が結果には必ず意味があるって言った事を）」

その言葉に千冬は眉をひそめた。

「Ｗｅｎｎ ｄｉｅｓｅｒ Ｋｅｒｌ ｎｉｃｈｔ ｇｅｋｉｄｎａｐｐｔ ｗ?ｒｄｅ，ｗａｒ Ｌｅｈｒｅｒ ２ ｆ?ｈｉｇ，ｅｉｎｅｎｇｅｒａｄｅｎＳｉｅｇｚｕ ｍａｃｈｅｎ．Ａｂｅｒ ｉｃｈ ｍｕ?ｔｅ ｎｉｃｈｔ ｚｕｍ ｇｌｅｉｃｈｅｎ Ｚｅｉｔｐｕｎｋｔ ｚｕ ｅｉｎｅｍ Ｌｅｈｒｅｒ ｕｎｄｅｉｎｅｍＥｎｇｅｌ ｐａｓｓｅｎ．（アイツが誘拐されなければ、教官は２連覇が出来た。ですが、同時に私は教官や天使に合う事もなかった）」

「ほぅ……。」

ラウラの言葉に千冬は驚愕した。

今までのラウラとは思えない言葉に。

「Ｗｅｉｌ ｉｃｈ ｆ?ｈｉｇ ｗａｒ，ｍｉｃｈ ａｎ ｅｉｎｅｎ Ｌｅｈｒｅｒ ｕｎｄ ｅｉｎｅｎ Ｅｎｇｅｌ ａｎｚｕｐａｓｓｅｎ，ｈａｌｆｉｃｈｉｈｍ ｖｏｒｌ?ｕｆｉｇ．（教官や天使に合わせてくれたんですから、一応助けただけです）」

その言葉に千冬は、今付けたラウラの高評価を少し下げる事にした。

ラウラは何処まで行ってもラウラだと言う事に……。

（素直ではないな……。）

「Ｉｃｈ ｋａｎｎ ｄｉｅｓｅｍ Ｋｅｒｌ ｎｉｃｈｔ ｖｅｒｇｅｂｅｎ．Ａｂｅｒ ｉｃｈｍｅｒｋｔｅ，ｄａ?ｉｃｈｍｉｒｊｅｔｚｔｚｕｄｅｍｇｌｅｉｃｈｅｎ Ｚｅｉｔｐｕｎｋｔ ｄａｎｋｅｎ ｍｕ?．（私は、こいつが許せない。ですが、同時

に感謝しなければいけない事に、今気がついたんです）」

そう言うと、もう片方の手からもブレードを展開させる。

「……まぁ、ここからは私が相手させていただきます。　教官……。」

一夏達に分かるように日本語で喋る。

妙にラウラの頬が赤かった。

１２７　思い出す言葉とラウラの行動（後書き）

ラウラがデレた？

ＶＴシステムの事が無くデレた？

おいおい。

何やってんだよ……。

そして、蚊がウザいですね……。

ＶＴシステムはどうした……。

１２８　白騎士の力（前書き）

目が痛い……。

マジで目が痛いっ！！

１２８　白騎士の力

白騎士が、光刀・暁を戻し光刀・桜を腰構えに構える。

対するラウラは、両手にブレードを展開させて構える。

上空では、フリーダムとストライクが激しくぶつかり合っていた。

どちらかのビームが、地表に落ちた瞬間に白と黒が動いた。

「白鷺っ！！」

「はぁぁぁぁ！！」

お互いに気合で剣を振る。

白騎士の光刀・桜は、シュヴァルツェア・レーゲンの左手から出るブレードに阻まれた。

ラウラは右手のブレードで、白騎士を切りにかかる。

「甘いっ！！」

だが白騎士は、そのブレード下の安全な装甲を掴む。

一種の力比べの様な形となった。

全身装甲の機体に、力比べは自殺行為に等しい。

しかし、ラウラの顔は笑っていた。

「今だっ！」

ラウラの言いたい事に気がついたのか、一夏が動く。

同時にレールカノンも展開させた。

千冬は気がついた。

今引けば、ラウラの追撃がくる。

それを避けるためには、ラウラを押さえないといけない。

つまり、両腕を押さえられたまま動く事が出来ない。

だが、ラウラは一夏と言う友軍がいる。

つまり、罠にはめられたのだ。

しかし千冬は焦らない。

「なっ！？」

ラウラが白騎士の足元が光った事に気がつき、下を向いて絶句した。

足からブレードが出ているのだから。

そのブレードをラウラに向かって蹴り上げる。

「くうううう！！」

急いでラウラは、白騎士から離れた。

千冬は、ラウラを蹴りあげる事で隙を作り距離を置いたのだ。

ラウラは離れる際、少しばかり絶対防御を起動させた。

踏刀（ふみがたな）。

今のような両手が塞がった時の、隠し装備だ。

足先端にブレードの発生機器が付いているが、分からないため暗器扱いの武器だ。

「あんな装備まであるのか……。」

一夏は初めて知った装備に、目が奪われた。

「馬鹿、見とれるな……。　……挟撃するぞ……。」

そう言ってラウラは白騎士の左へ、滑るように移動する。

一夏も零落白夜を展開し、右へ移動する。

「「っ！？」」

しかし、上空からビームが降り注いだ。

そのため、二人は挟撃を止めた。

ラウラが上を見ると、そこには天使がサーベルを振りながらストライクと拮抗し、空いている手でビームライフルをこちらに向かって撃ったのだ。

その事にラウラは嬉しくなった。

「……やはり、天使は強いな。」

「当たり前だ。」

その言葉に気がつき、白騎士に目を向ける。

しかし、すでに白騎士は瞬時加速でラウラを間合いに入れていた。

ラウラは急いで、ＡＩＣを起動させるが白騎士は止まらない。

触れれる距離にいるのに起動しない。

その事にラウラは驚愕した。

「くっ！！」

その間にも剣は振られシールドを切り裂き、絶対防御が起動する。

そのため、エネルギーがさらに減少した。

白騎士は剣を振り終えると、そのままラウラの横を抜けた。

「……ふむ、何故って顔しているな。」

千冬は少し楽しそうに話しだす。

「この機体は、ＩＳとは構造が違う。　つまりどういう事か分かるか……。」

その言葉にラウラは気がついた。

「……ＡＩＣが意味を成さない……という事ですか……。」

「その通りだ。」

一夏が白騎士に攻撃をするが、子供をあしらうように捌く。

箒も接近して剣を振るうが、一夏同様にあしらわれた。

ラウラは機体を確認すると、レールカノンとワイヤーを展開させた。

そしてワイヤーで中距離戦闘を開始した。

「その判断は悪くないな。」

そう言って、踏刀を両足に展開させた。

瞬間的に横蹴りの要領で、一夏に踏刀で攻撃する。

「のわっ！？」

一夏はそれを防ぐが、足が止まる。

雷刀・桜が紅桜の剣を防ぐ。

いつのまにか抜いた雷刀・暁がラウラのワイヤーを弾いて行った。

その光景を、観客は目を見開いて見ていた。

このあり得ない、戦闘を。

１２８　白騎士の力（後書き）

あ～、まだまだ続くよ？

うん、続くよ。

フリーダム　　残り：∞
白騎士　　残り：∞
白式　　残り：３２０
紅椿　　残り：４７０
ストライク　　残り：不明
シュヴァルツェア・レーゲン　　残り：１９０

おそらくこんな感じ。

ではまた～。

１２９　記憶の中の烙印（前書き）

なんとなく、ラウラの過去話。

もちろんコレも妄想です。

１２９　記憶の中の烙印

シュヴァルツェア・レーゲンの動きが止まった。

ラウラのシールドはエネルギーは無くなったからだ。

（やはり、あの人たちを相手にすれば負けるか……。）

ラウラはこのアリーナに入った瞬間、一夏に対し殺意的衝動を持っていた。

しかし今ではそれも無く、すがすがしい気分だった。

負けたと言うのに、悔しい気持にはならない。

（あの人たちと、もう一度会えたんだ……。　悔しくはないな……。）

そう思い、手に持っていた眼帯を見た。

ラウラはこの戦闘中、ヴォーダン・オージェを使用した。

眼帯の下にあった目は、金色に輝いている。

（そう言えば、あの日もこんな感じだったな……。）

数年前、ドイツ軍。

ＩＳの登場で、優秀だったラウラの立場は一変した。

動かす事はできる。

だが適正率が低く、ラウラの地位は転げ落ちた。

戦闘に関して完璧であったラウラが、自身の存在を否定されたのだ。

そのため、ＩＳの適合率向上のための実験に被験者として参加した。

ヴォーダン・オージェ。

それは肉眼へのナノマシンを移植し、脳への視覚信号伝達を最大限に向上させ、超高速戦闘状況下においても動態反射をさせるものだった。

ラウラはそれで元に戻る。

自身の存在が否定されないですむ、そう考えた。

しかしヴォーダン・オージェは、ラウラと合いいれなかった。

結果は不適合。

左目は金色に輝き、能力を制御しきれない。

そのため通常訓練でも今までのようにはいかず、全て基準以下の成績となってしまった。

そんな時に会ったのが、織斑千冬だった。

ある情報と取引をしたため、一年間ドイツ軍に出向していたのだ。

「最初に言っておく、私は出来るやつ出来ない奴を区別する気はない。　軍人でも一般人でもただの人だ。　分かるならまずは滑走路を走ってこい！」

そう言うと皆不満の声を漏らすが、ラウラは先に走りに行った。

この時全員、千冬の存在はモンド・グロッソ第一回優勝者として見ておらず口だけだと思っていた。

ラウラも思っていた。

しかしラウラは元の自分に戻りたく、懸命に抗いながら訓練を始めた。

「よし、問題無いな。」

それ以降は、ラウラにとっては驚きだった。

軍人が、ＩＳ登場前は一般人である者に後れを取ったのだ。

「なんだ貴様たち。　そんな府抜けた訓練でよく軍人をやっていられるなっ！！」

ラウラはその時「千冬なら自身を戻せる」と、そう考えていた。

そのため、訓練は人一倍努力し結果を出そうとした。

二日目。

軍の上官と千冬が、訓練中に会話をしていた。。

「いかかですかな？」

「ああ、悪い。　ダメダメだ。」

走っているラウラの耳に、千冬の声が聞こえた。

「今までの訓練が温過ぎる。」

ラウラは同感した。

千冬の訓練は、今までの訓練とは違った。

まず、基礎体力がなっていないと言われた。

ラウラはこれに反感を覚えたが、その通りであった。

男ならいざ知らず、女が軍隊にいるのだ。

基礎体力が低いのは当然である。

しかし、今までの訓練で基礎体力は男性並みにあったはずだった。

……だが、千冬は自身の体力と軍隊の体力の違いを見せつけたのだ。

そこから基礎体力作りが始まった。

走り込みも、その一環だ。

「……それにしても、あのオッドアイ……ボーデヴィッヒだったか。」

「ああ、あの出来そこないですか。」

その言葉にラウラは怒りを覚えた。

部隊全体から、嘲笑と侮蔑それと同時にうけた「出来そこない」という烙印。

思わず殴りたくなる。

だが上官であるため、何とか怒りを抑えた。

「……出来そこないとは言わせない。」

しかし、ラウラの代わりに千冬が怒気を含んだ声でそう言った。

「貴様達がやったことで、一人の人間が苦しんでいるんだ。　なら私はアイツを徹底的に鍛えて、貴方を見返してやろう。」

そう言ったのだ。

その言葉に、ラウラは走るのを止めた。

思わず止まってしまったのだ。

千冬は「聞いていたのか……」と言いながら、頭をかくと「止まるんじゃない！！」と叫ぶ。

ラウラは急いで走り始めた。

赤と金色の目から、涙を流しながら。

１２９　記憶の中の烙印（後書き）

……おいおい。

妄想過ぎる……。

この話はフィクションです（笑）

このシナリオ全体フィクションだよｗｗｗ

当たり前のようにｗ

１３０　過去の出会い（前書き）

はい、まだまだ続くラウラの過去話。

妄想全開です。

リアル〇ート出来るかな？

１３０　過去の出会い

「ここ最近の成績は振るわないようだな。」

その通りだ。

ヴォーダン・オージェの制御不可のため、今までのように行かなかった。

「なに心配するな。　一ヶ月で部隊最強の地位へと戻れるだろう。」

千冬は笑ってそう言った。

確かにその通りだった。

最初の二日間で、私は左目を……ヴォーダン・オージェだけを使わないように訓練させられた。

つまり左目だけ、閉じる訓練だ。

左目さえ使わなければ、ヴォーダン・オージェは使っていないと言う事になる。

しかし同時に、過去の自分より反応速度が遅れると思った。

「もっと早くしろ。」

だが、千冬はラウラを左目だけで戦闘させるように訓練させた。

そのおかげか、訓練十日目には過去の自分と同じぐらい出来たのだ。

ラウラはその事に感動し、千冬を尊敬し始めた。

しかし周りはすでにラウラ以上の実力を持っている。

「周りは気にするな。　後二十日で最強にしてやる……。」

その間にも、基礎体力訓練に実技戦闘。

果てはヴォーダン・オージェの制御をさせようと、千冬は努力した。

訓練二十日目には、ヴォーダン・オージェの制御は不可能だったが使用する事は可能になった。

だが、まだ上手く使えない。

そのため、ラウラは常に左目を閉じていた。

そんな時、訓練場近くで走り込んでいた時にそれは現れた。

というか、見つけた。

軍全体を見渡せるような、場所に座っていた。

「何者だっ！」

思わず、聞いてしまう。

相手は気がついたのか、ラウラを見た。

全身装甲の機体。

見れば分かるのに、ラウラは判断を誤った。

ここは気づかれず撤退して、千冬や上官に報告するべきだった。

「う～ん、千冬が元気か見にきた天使？」

その言葉にラウラは呆然とした。

「お前、教官の知り合いか！？」

「……そうだね。」

ラウラは警戒しながら、それを見た。

白い身体に青やあか、ダークブルーという色をして翼もある。

確かに天使と言われれば、天使に見える。

「まぁ、君の事も見ていたよ。」

その言葉にラウラは驚愕した。

つまり数時間はここにいて、気がつかれていないと言う事だ。

「ねぇ、今どんな気持ち？」

「え？」

「……千冬に訓練を受けて、だけどまだ嘲笑される。　そんな君の気持を私は知りたいんだよ。」

その言葉はラウラの胸に突き刺さった。

瞬間的に怒りたくもなるし、空しくもなった。

「大丈夫だよ。　私は笑わないし、むしろそんな君を応援してるから。」

そう言うと、天使は手招きをした。

「……千冬がどんな事をしていたか、教えてくれない？」

「……。」

その言葉に、ラウラは頷いた。

本来なら不法侵入とか、軍法会議、処刑なんかにかけるべきなんだろう。

しかし今のラウラは、そんな事を考える暇がなかった。

千冬同等の存在。

いや、それ以上と思えた。

それから数分間、千冬について話し合った。

久しぶりの他愛もない会話だったため、自然と楽しいと思える時間だった。

自然に笑ったり、笑い泣きもした。

そして天使は「時間か……」と言って立ち上がる。

ラウラは残念そう泣顔をした。

楽しい時間というのは、すぐに過ぎるものだ。

「まぁ私が言える事は、周りを気にしたらいけないってことかな？
ラウラがそうなったのには必ず意味があるよ。」

ラウラはその言葉に少しばかり首を傾げた。

天使が何を言っているのか分からない。

「千冬だって私だって、いろんな人間にとって共通の事……。」

そう言って天使はラウラの頭を撫でた。

鉄のような感じはしない。

（温かい……。）

天使は腕部分を解除しているため、温かさを感じるのだ。

しかし、ラウラは身長差があり過ぎたため分からなかった。

「そうだ、コレを上げるよ。」

ラウラは不思議そうに出された物を受け取った。

黒い布。

よく見ると眼帯だった。

「……いつも左目に神経を使ってたら、大変でしょ？」

「……。」

その言葉にラウラは呆然とした。

「じゃぁ、さようなら。」

そう言うと天使は翼を広げて飛んで行った。

ラウラ以外に、気づかれる事無く……。

１３０　過去の出会い（後書き）

という事で、無理やりコノ話にフリーダムとラウラの出会いを詰め込んでみました。

本当は、もっと長くなるはずだった。

けど、睡魔には勝てない……。

うん……。

教えて束センセ～♪

束「という事で、皆のアイドル束さんだよ～♪」

千冬「何をやってるんだ。」

リリィ「いや、作者から台本渡されて……。　コレ（紙）読んで。」

千冬「なになに……。」

束「という事で、疑問に思った事をお答えするコーナーなんだよ～☆」

千冬「……束がここ最近登場しなかったので、おまけで出して見た。

」

リリィ「まぁ、そう言う事。」

≪なんで白騎士にＡＩＣは利かなかったの？≫

千冬「……？　機体構造が違うからではないのか？」

リリィ「それはそうなんだけど……。」

束「一番の原因は、トランスフェイズ装甲に転換しきれなかったエネルギーが放出して、白騎士の機体全体を覆ってることが原因なんだよ☆」

千冬「？？」

束「えっとね。　白騎士のトランスフェイズシフトは、ダメージを受ける瞬間に電力を流して相殺するんじゃなくて、常に電力を流し続けて、当たる瞬間にさらに電力を載せ手相殺すると言う二重電力装甲なんだよ～♪」

千冬「……だから？」

束「常に電力が、機体から漏れ出てるわけ。」

千冬「……リリィ、翻訳頼む。」

リリィ「はいはい……。」

束「……泣いちゃうよ？」

リリィ「束が言ったように、白騎士の装甲はフェイズシフトに一番近い。　常に電力を流し続けてるんだからね。」

束「……いいもん、いいもん。」

リリィ「白騎士のエネルギーは、ほぼ無限。　まぁ、一気に使うことも出来るけど、使ったら充電期間が出来てしまう。　それは別に問題じゃないんだけど……。」

千冬「さっさと話せ。」

リリィ「はいはい。　白騎士の装甲に流してるエネルギーが膨大すぎて、一部が排気ダクトから流れてるんだよね。　それが機体周囲に展開しているんだよ。」

千冬「なるほど、その電力がシールドの代わりになったというわけか……。」

束「違うよ～ち～ちゃん。」

千冬「なんだと？」

束「電力がシールドになっても、ＡＩＣで白騎士は止まってしまう。　けどある複数の出来事が重なって、白騎士はＡＩＣを相殺したんだよ～☆」

千冬「さっさと結論を言え。」

束「ち～ちゃん、ＩＳの身体トレースは何を使ってる？」

千冬「はぁ……。　搭乗者の動きと脳波信号だったか？」

束「じゃぁ、脳波信号がＩＳに命令を出して動いているとき、ＡＩＣが起動した。　だけど、脳波信号が止まるわけがない。」

千冬「……なにが言いたい？？」

束「結論から言うと、その脳波信号が機体を取り巻く放出した無駄な電力が読みとってしまい、一種の回路の役割をして外部から機体を動かしＡＩＣを無効化してしまったわけなのだよ。」

千冬「……まてＡＩＣは慣性停止結界と言うのだぞ。　慣性を停止させると言う事は、そんな回路を作った所で外部からなんて……。」

束「ふっふっふっふっふ。」

千冬「何がおかしい。」

束「ち～ちゃん。　その機体は他の機体とは違いビーム兵装が付いてるんだよ？」

千冬「は？」

束「漏出した電力が通るダクトに、ビーム兵装のエネルギーダクトがあってもおかしく話ないよね～。」

千冬「……まさか、電力だけじゃなくエネルギーをビーム転換させ、ビーム粒子を排出させて時機が纏ってるのか？」

束「せいか～い♪」

リリィ「まぁ、ビーム粒子の濃度がどれ位なのかは分からないけど、一種のビームフィールドを作った可能性がある事は、確かだよ。」

束「以上の事から、ＡＩＣの大半はビーム粒子で相殺され、漏出した電力が脳波信号を読み取り、搭乗者自身と無理やり外部から機体を動かしていたと仮説できるんだよ～♪」

千冬「仮説なのか？」

リリィ「だって、実験してないし……。」

束「いずれ分かるとは思うんだけどね～。」

≪結論（仮説）、ビーム粒子と漏出した電力が、上手く機能しＡＩＣを無効化した。≫

束「正確には、ＡＩＣはＰＩＣの浮遊、加速、停止だけを止める、そのため慣性停止能力って言われてるだけなんだけど……。その対象がＩＳだけってね……。つまりＰＩＣを起動していなければ、ＡＩＣは意味が無いんだよ。つまり、ビームフィールドとかもっともな事を言ったように思えて、それは意味が無く。白騎士はエンジンでの推力で移動しているからＡＩＣは意味を成さなかった…って言うだけなんだけど……。ち～ちゃんに言ったら怒られるよね？　嘘ついたな～って言って。みんな、ち～ちゃんには内緒だよ☆」

≪結論、ＡＩＣはＰＩＣを使用していない機体には、無駄である。≫

原作二巻の２３３～２３５ページ：鈴のセリフから推察。

131　原因は千冬（前書き）

……眠いため、何も言わない。

うん。

何も言わない……。

１３１　原因は千冬

そしてある日、ラウラは千冬に話しかけた。

今では千冬のおかげで、ラウラはＩＳ専門部隊の最強の座に君臨した。

左目には、天使から貰った黒い眼帯をつけて。

最初千冬は眼帯を見て、いぶかしんだがすぐに理解をした。

軍では更に嘲笑を受けたが、ラウラは気にしなかった。

千冬を見ると力が湧く。

天使を思うと何でも出来る気がする。

そんな気持ちが、ラウラを救い続けた。

だから嘲笑を受けても、侮辱されても耐えれた。

だからこそ、話したかった。

「どうしてそんなに強いんですか？」

千冬は気によりかかりながら、目を閉じた。

「そうだな……理由は二つほどある。」

ラウラはその言葉を真剣に聞いていた。

「まず一つ。　私には弟がいる。」

「弟……ですか？」

千冬の言葉にラウラは首を傾げた。

「ああ、弟だ。」

そしてラウラは思い出す。

千冬がどうしてここに来たのか。

モンド・グロッソ決勝に、その弟がさらわれたのだ。

その情報と手助けで、千冬はここに来たのだ。

千冬は少し微笑むと、口を開く。

「アイツを見るとな、分かる時があるんだ。　強さとは何か……てな。」

その言葉はラウラにとって、意味が分からないものだった。

「よく分かりません……。」

「ふ、まだ分からなくていいさ。　いつか分かる時が来る……。」

ラウラは考えた。

強さとは何か。

だが、分からない。

「そして二つ目。　私の師のおかげだな。」

「師ですか？」

ラウラは少し驚いた。

千冬はその顔を見ると、呆れたように肩を下げた。

「私だって、最初から強かったわけではない……。」

そう言うと、遠くの空を見た。

「私の師は強かった。　ＩＳを使わずＩＳを倒し、不可能だと思える事は、簡単に可能にさせる……、まぁ、不可能を可能にする男だったな……。」

「っ！？」

ラウラは千冬の言葉に驚き、目を見開いた。

千冬は少し恥ずかしそうに、顔をラウラからそむけた。

それを見て、ラウラは少しだけ嫉妬した。

「アイツは何でも出来るからな。」

そう言う声は、どこか楽しそうだった。

「まぁ、私は二人に支えられて強くなったわけだ。」

そう言う千冬の顔は、どこか嬉しそうで。

恥ずかしそうで。

誇らしそうだった。

ラウラはそんな表情は、似合わないと思った。

だが、同時に似合っていると思った。

「いつか日本にこい。　そいつらに会えるかもしれないぞ。」

「？　かもしれない？？」

ラウラは「かも」という、曖昧な部分が気になった。

千冬は空を見る目を細めると、懐かしそうに言った。

「アイツは、私の親友と共にどこかへ消えた。」

ラウラはその言葉に目を見開き、そして目を伏せた。

そんなラウラを見て、千冬は「違うぞ」と否定をした。

「……アイツらは生きている。　だが、何処にいるか分からないん

だ……。」

そう言って再度空に目を向けた。

「いつか会えるだろう、その時は連絡してやる。」

「はい。」

「だが、会う時は心しておけよ？」

「……はい？」

ラウラは千冬の黒い笑みを見ながら、眉をひそめた。

「二人とも、女を泣かせるような奴だ。」

笑いながら千冬はそう言った。

ラウラは意味が分からなく、首を傾げた。

「リ……師の方は、まだ許せる。　ちゃんと理解してくれている時があるからな。　……だが弟は気をつけろ。　アイツは天然だ……。」

「……はぁ……。」

ラウラは何も言えなかった。

意味が分からないし、千冬の笑いも分からない。

「ま、気にするな。」

ちなみにラウラはこの言葉を別の風に解釈をしてしまい、理解した気でいた。

そのため師という人物はよく分からないが、弟の方は好感が持てなくなった。

しかし意味が通じないため、ラウラは悩み続ける事になる。

131　原因は千冬（後書き）

さて、これでラウラの過去は止めて戻るか……。

まぁ、どうなるかは……6時間後……で。

１３２　悪意を持った漆黒の天使（前書き）

ＶＴシステム戦です。

まぁ、オリジナル展開なので……、結構ちゃちです。

許してねｗ

１３２　悪意を持った漆黒の天使

『願うか……？　汝、自らの変革を望むか……？　より強い力を欲するか？』

ラウラは突然聞こえた言葉に驚愕した。

慌てて周囲を見るが、何もいない。

『願うか……？　汝、自らの変革を望むか……？　より強い力を欲するか？』

だが、再度同じ声と言葉が聞こえた。

ラウラはその言葉に鼻で笑った。

「力……か。」

『そうだ……力だ……。』

ラウラは目を閉じた。

「確かに欲しかったな……。　前の私なら……。」

『なら……。』

そう言って力強く、目を開く。

「Ｉｃｈ　ａｎｔｗｏｒｔｅ　ｕｎｄ　ｋａｎｎ　ｎｉｃｈｔ　ｈ

ｉｎｅｉｎｇｅｈｅｎ！！（答えはいらないに決まっている）」

「ラウラっ！！　ＩＳから脱出しろっ！！」

フリーダムがストライクから目を離し、叫んだ。

何故叫んだかは分からない。

だが、ラウラはその言葉を忠実に実行した。

瞬間的にＩＳの装甲を、外して飛んだ。

次の瞬間には、シュヴァルツェア・レーゲンが黒い何かに飲み込まれた。

ラウラは振り向き、目を見開く。

『貴様……。』

シュヴァルツェア・レーゲンを飲み込んだ何かが、形を成しながら声を上げる。

「Ｅｉｎｅ　ｈ？？ｌｉｃｈｅ　Ｅｒｓｃｈｅｉｎｕｎｇ．（醜いな、バケモノ）」

徐々に黒い何かが形を成す。

それはシュヴァルツェア・レーゲンの形を無視した、変貌を遂げる。

「「「「「「なっ！？」」」」」」

一夏達が全員戦闘を止める。

アリーナにも驚愕が走った。

そこには、漆黒の八枚の翼を持ったフリーダムがいた。

『くっ、この遺伝子強化試験体がぁぁぁぁぁ！！』

その言葉にラウラは怒りを覚えた。

一夏達は全員唖然とした。

遺伝子強化試験体。

いわゆる試験管ベイビー。

試験管内で人工授精をすることで、子供を作ると言うイギリスの生物学者が成功させた方法である。

今では、何らかの形で子供が出来ない大人にとって、大事な医療だ。

だが、漆黒の天使は遺伝子強化試験体といった。

つまり人工授精の際、何らかの遺伝子操作をして身体構造を強化したのだろう。

「Ｉｃｈ　ｗｅｒ　ｅｓ　ｈａｔｔｅ　ｗｉｅ　ｉｓｔ　ｉｃｈ.Ａｕｃｈ　ｗｅｎｎ　ｅｓ　ｅｉｎ　Ｇｅｎｖｅｒｓｔ?ｒｋｕｎｇＰｒ?ｆｕｎｇｓｋ?ｒｐｅｒｉｓｔ，ｉｓｔ　ｅｓ　ｅｉｎ

Ｍｅｎｓｃｈ．（それがどうした、私は私だ。遺伝子強化試験体であっても、人間だ）」

『戯言を！』

そういうと、黒い塊の形が完全にストライクフリーダム同様になった。

手には、ライフルを持っていた。

『戦闘人形がァァァ。　親のぬくもりも知らぬまま、おとなしく飲み込まれろっ！！』

そう言うと漆黒の天使は、ラウラにライフルを腰にマウントして手を伸ばす。

「親ねぇ……。」

しかし、その腕は光の楯に防がれた。

『……貴様！！』

そこには、同じように八枚の翼を広げたフリーダムがいた。

「……なら、私が親だ。」

そう笑いながら言うと、シールドで防いだ手を弾く。

そのまま、反対側に持っていた連結ライフルを構えた。

それを見た漆黒の天使は、急いで上昇する。

『っ！？』

だが、瞬間的に漆黒の楯を出す。

「貴様が何者か知らないが、侮辱するのは好かんな……。」

雪片を通常状態で振るう白騎士が、待っていたのだから。

次の瞬間フリーダムの連結ライフルから光が伸び、漆黒の天使の右腕を奪って行った。

１３２　悪意を持った漆黒の天使（後書き）

はい、え～っと。

今回のＶＴシステム戦は。

コノ話では説明しませんでしたが、真面目にＶＴシステムが働いています。

この漆黒の天使。

喋っていますが、ＶＴシステムです。

誰が何と言おうとも、ＶＴシステムです。

まぁ、後は別の物も働いていますが……。

一応、基本ＶＴシステムです。

バグって、搭乗者なしに動いていますけど……。

え～っと（笑）

という事で……。

あと、ここでのＡＩＣは未完成品で、銃弾は止められません。

完成すれば、全て止められるだろうけど……。

１３３　リリィの試験（前書き）

……頭が回らないため、駄文になっています。

そろそろ一夏を活躍させないと……。

１３３　リリィの試験

『クソっ！』

そう言うと、漆黒の天使は上昇した。

「一夏、テストをするよ。」

その言葉に、一夏達は目を見開いた。

「今からアレを撃破出来たら、合格。」

その言葉に、一夏は漆黒の天使を見る。

上昇して、撃たれた所が動いていた。

そして回復して行く。

「私と千冬は、別の事をやるから。」

「「「了解っ！！」」」

リリィの言葉に、一夏と箒とシャルロットはしっかりと返事して漆黒の天使に向かった。

漆黒の天使は、物理法則を付しして身体を大きくする。

そして破裂したかのように分裂し、再度形を作る。

「うげ、スライムかよ……。」

一夏がそう言いながら、上空で分裂した漆黒の天使を見る。

天使を中心とし、黒いＩＳもどきが量産される。

その数十機近く。

一番早く動いたのはストライクだった。

ランチャーストライカーを接続し、アグニを構える。

黒いＩＳもどきは回避しようとするが、その前に引き金は引かれた。

砲身から放たれた火線は、ＩＳもどきを二機飲み込んでアリーナのシールドにぶつかる。

高火力のエネルギーは、二機を跡形もなく消した。

一夏と箒は、自身のエネルギーが少ないため無駄に動かない。

雪片弐型を通常状態で振るい、接近する機体を突き刺し破壊する。

紅椿も、最低限の出力で機体を破壊する。

わずか数一分弱で、五機のＩＳもどきを破壊した。

「……天使……。」

ラウラが不安そうにリリィを呼んだ。

フリーダムは黒き天使から目を離し、ラウラの方を向く。
不思議そうな顔をしながら、ラウラはフリーダムを見た。
「リリィだよ。　……で、なに？」
ラウラは恐る恐る口を開く。
「……いえ、何でもありません。」
「そう？」
「はい……。」
決心がつかないのか、悩んでいる。
何を悩んでいるかは、ラウラ以外知り得ない事だった。
「やばっ！　エネルギーが。」

ランチャーストライカーを装備してアグニを撃ち過ぎたのか、いつのまにかエネルギーが危険域に迫っていた。

三機破壊したら、また余分に黒き天使から三機出てくる。

破壊しても破壊しても、黒き天使が作り続けていた。

アグニの威力は高く、一撃で二機から五機までは落とすことができる。

だが援護に徹していたため、増殖させている本体に攻撃する事は難しい。

「くっ！　こっちもやばい……。」

一夏がそう言うと、上段から雪片を振りおろし敵を斬り裂く。

「私もだ……。」

白式と紅椿は、高い戦闘力を持つ代わりにエネルギー効率が悪いという欠点を持っていた。

確かに通常のＩＳくらいのエネルギーに、高威力の武器を所持していたらエネルギーの消費が激しいだろう。

いつのまにか囲まれていた。

「一夏。　僕がここを食い止めるから、その間にアレを破壊してくれないかな？」

「シャルル！？」

一夏は驚きながらこちらに顔を向ける。

敵に囲まれたが、その隙間から互いの顔が見れる。

「おそらく、アレを倒せばコレも消滅するから……。」

そう言うと、ランチャーストライカーをパージする。

右肩のミサイルやバルカンの弾薬も尽き、エネルギーもほぼ無い。

装備していても無駄だ。

そして新しい装備を取り出す。

右背部に長刀を持った装備。

「……早めに頼むよ？」

その剣を握り、両手で持つ。

ソードストライカー。

近接用の兵装だ。

「……分かった。」

一夏はそう言うと、一気に漆黒の天使の元に飛んだ。

ＩＳもどきは一夏を追わない。

「さて、どうしよっかな？」

対艦刀を持ちながら考える。

だがそんな暇を与えるほど、相手は寛容ではなかった。

そもそも意思があるかどうかさえ不明だ。

おそらくサーチ・アンド・デストロイ見たいになってるのだろう。

「っ！」

ストライクは対艦刀を大振りし、かかってくる敵を破壊する。

「とりあえず、破壊できるだけ破壊しよう……。」

完全に回復したエネルギーゲージを見て、シャルロットはそう呟いた。

１３３　リリィの試験（後書き）

……めんどいな……。

テンションも上がらない。

もぅ、どうにでもな～れｗ

あとがきに書くこと無いし、質問あったら受け付けるよ？

リリィの過去話とか、束の失敗談とか、原作との違いとか……。

簡単に……だけど……。

１３４　あっけない終わり（前書き）

……主人公はリリィと千冬？

一夏は？？

と、そんな気がしてならない私でした……。

１３４　あっけない終わり

「はぁぁぁぁぁ！！」

一夏ｈ残りわずかなエネルギーを雪片に回し、漆黒の天使へと振るう。

それでも当たりはしない。

（そもそも、回復するのに破壊しろって……。　どうやって？）

そう思いながら、低出力で破壊しにかかる。

『邪魔だ王の人形っ！！』

漆黒の天使はそう言うと、サーベルを腰から抜く。

この戦闘で一夏は気がついた事があった。

相手は、エネルギーやビームを持たない。

あくまで似たような形状の実体兵器しか出せないのだ。

そして剣技はリリィに似たようなモノだったが、別のモノに近い。

『キエロッ！』

漆黒の天使は、そう言いながらサーベルを振るう。

しかし伊達にリリィに剣技を教えてもらってない一夏は、下降と屈む事を同時にすることで横薙ぎを回避する。

大振りなため、隙が大きい。

一夏でも分かるような隙だった。

「はぁぁぁぁ！！」

だから一夏は、回避しながら気合で雪片を下段から振るった。

雪片は漆黒の天使の胴体を傷付けるが、あまりダメージを与えられてないのか斬られる前同様の動きで距離を取った。

「てやぁぁぁぁ！！」

だが、その後方から箒が迫り雨月を振るう。

その剣線は羽を切り裂いた。

「これでおしまいだぁぁぁ！！」

そこに一夏は踏み込み、零落白夜を起動させ漆黒の身体に突き刺す。

それでも足りないのか、箒が雨月を上段から振るい背中を切っていく。

『くっ！　流石、王の人形だ……。』

そう言いながら、漆黒の天使はその形を崩す。

何が起きたのか分からない。

だが、結果的に消えていく。

それと同時にＩＳもどきも、スライムのように形を保てなくなり消えてゆく。

「……え？」

シャルロットはその状況を呆然見ていた。

「あっけないな……。」

千冬はフリーダムの横で、ため息を吐きつつ一夏達を見る。

自身も動きたかったのか、その声には悲しさも交じっていた。

≪ＶＴシステム　エラー≫

≪システムに異常発生≫

≪稼働を強制的に停止させます≫

漆黒の天使からシュヴァルツェア・レーゲンに戻った機体は、画面を表示する。

≪機体状況　中破≫

最後にそう出すと、全てのモニターを閉じた。

そして重力に従いながら、落下していく。

それをだれも止める事はなく、シュヴァルツェア・レーゲンは大きな音を立ててアリーナの地面にぶつかった。

「さて……ドイツの来賓の方には、色々お話きかなくちゃいけないね～☆」

「ああ、特に開発や運用が禁止されているＶＴシステムの事について、ね。」

束とリリィが来賓席を見ながらそう言った。

先ほどの状況では、アリーナ全体に避難指示が出されてもおかしくない。

だが束は面白いからという理由で避難指示は出さず、戦闘を一種のショーにしてしまったのだ。

近くにいた真耶には批難されたが、そんな事で束がどうこうするはずもなく……。

結果的に、戦闘はアリーナ全体が最初から最後まで見届けていた。

ドイツの軍人か誰かが、身体をすくませる。

アリーナに嫌な空気が流れた。

「……私はシュヴァルツェア・レーゲンを格納庫に運ぶ……後は任

せるよ。」

リリィはそう言うと、落下したシュヴァルツェア・レーゲンを担ぎアリーナから出て行った。

千冬はそれを見て「逃げたな」と思った。

面倒な事を嫌うリリィだ。

「お話」は束に任せる気なのだろう。

（いや、シュヴァルツェア・レーゲンの機体解析のためか？）

そう悩みながら来賓席を眺めた。

そして千冬の目には、数年前にラウラを「出来そこない」扱いした人間が怯えながら座っていた。

千冬は憂鬱な気分になった。

「自身が教官をした軍隊の上層部は、何を考えているのだ」と……。

１３４　あっけない終わり（後書き）

作者はテンションが低く、眠いため……寝ます……。

１８時のは……書いてない……。

仕事のキリがよくなったら、書き始めましょう……。

仮眠します……。

１３５　再来する悪魔（前書き）

ここら辺から、結構痛いお話が始まります。

作者の頭は大丈夫だと言う事は、最初に言っておきます……。

１３５　再来する悪魔

だが、リリィが去ったのちに問題が起きた。

アリーナのシールドが破られたのだ。

全員呆然とする中、千冬だけが雪片・真打と雷刀・桜を強く握りしめていた。

シールドの破壊は全員見ており、その破壊は多方向からのエネルギー攻撃で破壊された。

まるでプロヴィデンス事件のように……。

「……まさか……。」

一夏が恐れるように呟く。

アリーナのシールドが砕けたガラスのように落ちてゆく。

そこからゆっくりと降下してくるモノがあった。

「やはり貴様か……。」

箒が毒々しく言い放つ。

灰色の装甲。

全身を覆う装甲。

悪意をふりまき、全身に装備された突起で全てを破滅へといざなう者。

『ヴァルキリーは逝ったか……。』

そう言いながら、白き騎士を見下す。

男とも女とも判断がつかない声。

初めて聞く声だったが、その外見は千冬達はよく知った物だった。

『前回の借りを返しに来た。』

プロヴィデンスがいた。

『かかってこい、悲しき恋をした白き姫よ……。』

プロヴィデンスがそう言うと、ドラグーンを放つ。

今度ばかりは束は危険と見なし、避難警報を発令する。

その音を背景にドラグーンが縦横無尽に飛び回る。

そして高速で移動しながら、緑色の光条を放つ。

千冬は三次元躍動旋回（クロス・グリッド・ターン）と複雑なスラスター運用で、簡単に回避する。

だが、ドラグーンは池の中の魚のように本体と独立しながら動き回る。

一基一基、独自の行動をしながら。

「訳の分からない事をッ！！」

そう言いながら白騎士は半回転し、プロヴィデンスに瞬時加速を行いながら雷刀・桜で斬りかかる。

だが、プロヴィデンスも攻撃を受ける気が無くシールドで防ぐ。

その間にも、ドラグーンが白騎士に迫る。

「貴様は何者だ。　何故、私を姫と呼ぶっ！！」

その言葉が終わる前に、雷刀・桜とシールドの接触部分を軸として、円運動のごとくプロヴィデンスから離れる。

プロヴィデンスは白騎士の方向を見ながら、ゆっくりと身体をそちらに向ける。

『貴様は王から見捨てられた、王の横に立つはずの姫。』

そう言うと、大型ライフルを構える。

『誇り高き騎士。　それと同時に王と添い遂げるはずだった哀れな姫。』

ライフルから高出力の砲撃が放たれる。

『王が道を踏み外し捨てられた、世界の道具とされる姫。』

背を向けていた白騎士は、背部スラスターで火線の下に移動しかわす。

『そして私は、王に復讐を持つ者。』

「意味が分からないな。」

ドラグーンが無造作に放たれ、白騎士を翻弄する。

前回のように誘導兵器の運びは悪くないが、隙がある。

だがその隙も、罠としか感じられない。

一夏達は一ヶ所に集まり、ストライクを殿としてピットに逃げ込む。

ドラグーンは全て白騎士を狙っていたため、一夏達には被弾はない。

箒がラウラを抱えて去った事により、アリーナには白騎士とプロヴィデンスしかいなくなった。

シールドとライフルを構え、白騎士を狙うプロヴィデンス。

背を向けているが、隙を窺い反転しながら奇襲し離脱を繰り返す白騎士。

「喋るなら、あいつらみたいに主語を抜くな。」

そう言うと、雷刀・桜を戻し雪片・真打の形を変える。

≪大火力射撃体勢（エネミーデリート・カノンモード）≫

雪片に小さくモニターが映り、剣中央部が左右に割れる。

そこから砲身が覗き出た。

「だいたい、私はそんな事を聞いているのではない。」

相手に近づけないのなら、こちらも近付かずに攻撃すればいいだけの話。

ＩＳを相手にするように、飛んでくる火線を回避して懐に入る事が出来ない白騎士の、唯一の攻撃方法。

裂かれた刀身に電流が流れた。

「貴様はリリィなのかと聞いているんだっ！！」

その言葉と同時にプロヴィデンスの大型ライフルから放たれる光条より、一、二周り大きい光条が放たれた。

１３５　再来する悪魔（後書き）

ＢＧＭのおかげで、早くかけたｗ

と言う事で、プロヴィデンスが訳の分からない事を言っています。

もち、声は仮面の男でもいいですが、一応性別の分からない声だと言う事を頭に置いて下さい。

誰にも分からない声だと……。

プロヴィデンスが出過ぎだろ……と思ったのですが……。

まぁ、これくらいで無いと……。

というか、敵がプロヴィデンス以外決まっていなかったり……。

とりあえず、詳細は書かないで置きます……。

１３６　理解できない言葉（前書き）

……生肉食べてしまい、お腹が痛いです……。

調理に失敗した……。

１３６　理解できない言葉

大砲撃をプロヴィデンスは、上昇して回避する。

『残念だな。　まったく違う！！』

そう言うとプロヴィデンスは、展開していたドラグーンを使い白騎士に全砲撃をぶつける。

白騎士も間一髪でその砲撃を避ける。

しかし、雪片の実体刃に破損を生んだ。

破損部分は熱で赤くなり、融解したようになっている。

なんせ多数の砲撃だ。

避け場なんてない。

『流石は白騎士姫だな。』

あざ笑うかのような声が、千冬を挑発する。

回避後、白騎士は大きくプロヴィデンスの周囲を移動しながら隙を窺った。

だが、やはりと言っても良いほどに見当たらない。

「姫、姫と、五月蠅いぞ馬鹿者っ！！」

そう言いながら破損した刀身を向けて、再度砲撃する。

『当たらぬさ。』

またも簡単に回避される。

「……何の隠語か分からぬが、捉えてから聞かせてもらうぞ。」

ドラグーンが光りを放ち続ける。

しかし白騎士はそれを簡単にかわす。

戦況状態はプロヴィデンスが握っている。

だが、やすやす回避されるためあまり変わらない。

「貴様の口からなっ！！」

プロヴィデンスが、どれほど余力を残しているか分からない。

だからこそ一気にたたみかけるつもりだった。

『別に簡単に教えてやるさ。』

そう言いながらシールドからサーベルを展開させた。

『王と姫。』

ドラグーンがプロヴィデンスに集まり、白騎士に向け一斉砲火する。

『王が気に入った兎。』

白騎士は回避しながら雪片を後ろ腰にマウントする。

『愚かな戦争。』

向けられた火線を、白騎士は瞬時加速でその場から離脱し回避する。

『野心を持たぬ王。』

しかし、プロヴィデンスはそれを見計らったかのように白騎士を待ちかまえていた。

『その結果に生み出された、永遠に続く輪廻の呪い。』

白騎士は咄嗟に光刀・暁を引き抜く。

プロヴィデンスもシールドのサーベルを振るう。

サーベル同士がぶつかり合い、激しく火花を散らす。

『私の目的はただ一つ……。』

お互い力を強める。

押し切ろうとしているのだろう。

だが、サーベル同士は火花が散って拮抗する。

白騎士はエネルギー消費のため、ビームではなくエネルギー刃で拮抗しているためか、押されている。

『王を殺す事だ。』

足が動く。

気がついた時には遅く、白騎士は踏刀を展開する事もなくプロヴィデンスに蹴り飛ばされていた。

『むしろ、王を殺す事が全ての者の義務だがな。』

蹴り飛ばした白騎士に向かってライフルを向ける。

『姫には恨みはないが、ここで死んでもらおう。』

「姫が誰だか知らんが、私だろうな……。　……死ぬと思うか？」

白騎士は背を地面ぬ向けたまま、落ち続ける。

ドラグーンはエネルギー補充のため、プロヴィデンスに戻っている。

ライフルだけでは、決め手にはならない。

『ふむ……。』

プロヴィデンスはライフルを撃つことなく、白騎士を見届ける。

「撃たないのか。」

白騎士は後部スラスターで、姿勢を立て直すと地面に降り立つ。
同時に兆発まがいの言葉を放つ。
『撃った所で、当たらんさ。　そうだろ。』
プロヴィデンスはそう言うと、上昇して行った。
白騎士は追おうとはしない。
ビームや出力調整をしたエネルギー刃の使用で、エネルギーがキレかけていた。
回復はしているが、使用量に回復が追い付かない。
だから追わなかった。
『すでに目的は達成した……。　あとは王が孤独になるのを待つだけ……。』
そして、前と同じようにアリーナのシールドを破って、プロヴィデンスは撤退して行った。
意味不明な言葉を残して。
王、姫、兎。
これらが何を指すのか、千冬は分からなかった。
ただ分かるのは……。

プロヴィデンスが千冬か白騎士を見て、姫と言った事だけだ。

「……。」

騒動が治まったアリーナは、静かだった。

１３６　理解できない言葉（後書き）

＝＝＝＝＝焦げ肉になってしまった＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝生肉のままだ＝＝＝＝＝

て感じ？

マジでお腹が痛い。

１３７　家族になるには（前書き）

めんどくさくなったため、無理やりすすめました。

あ～ねむい～。

１３７　家族になるには

プロヴィデンスがアリーナを去って、数十分後。

束と千冬はドイツ軍の来賓の前にいた。

その後ろには、他国の来賓もいた。

主な問題はＶＴシステムの事だった。

結局、「研究のため」だとか「自国のため」だとか言って言葉を濁していたため、研究施設ごと爆破した。

もちろん爆破したのは、リリィだ。

「ちょっと行ってきます♪」とか言って、Ｘ３０Ａになってハイスピードで上昇。

その場に姿が見えなくなった後、空から緑色の光がドイツの方向に向かって流れたそうだ。

その少し後に、研究所にそれは直撃。

火災、炎上し壊滅したのだった。

そしてドイツが所持しているコアの回収。

ラウラをはじめとする遺伝子強化試験体の処遇についてが問題になった。

命を戦いの道具にしたのだ。

ＩＳを防衛のためだとは言え、軍内部で特殊部隊と言う物まで作ったのは許せる。

だが、兵士として作り上げた者に乗せている事が問題となった。

「仕方ないな～もう……。　私が養子として引き取っていいかな？　と言うか引き取るよ。　反論は受け付けないよ。」

そう言って無理やりラウラを養子にした。

その場にいた物は、呆然としていた。

「と言う事で、家族会議～いえ～い♪」

そう言って何処からともなく、クラッカーを取りだし紐を引っ張った。

束以外呆然としている。

そりゃそうだ。

いきなりだったから……。

「で、ラウラちゃんが家族になりました～☆　いや～、髪をいじれば……ほら♪　ちっちゃなリリィちゃん～♪　なつかし～な～☆」

この場にいるのは、リリィと束。

その子供と言う事で引き取られた、シャルロットとラウラだった。

……というか日本の法律上、私が成人してないから引き取れないんだけど、どうなってるんだろ～ね～。

正確には違うが、成人していないからと言う理由で、養子系の法律は半分以上ダメ出しを食らう。

「ということで～。　どっちが姉？　どっちが妹？」

束はやたらハイテンションで話し続ける。

二人とも困惑し過ぎて、混乱している。

「とりあえず、落ち着け……。」

そうとしか言いようがない。

「う、うん……。」

「はい……。」

すでに借りてきた猫みたいになっている二人。

リリィはそれを見るとため息をついた。

ぎくしゃくしすぎでしょ……。

座った状態で窓の外を見ようとするが、壊れたシュヴァルツェア・レーゲンが部屋中央に居座っており、さらに意味が分からなくなった。

だがシュヴァルツェア・レーゲンを、ココに運んだのはリリィ自身なので何も言えない。

再度ため息をつく。

「ど、どうしたの？」

シャルロットが心配そうに見てくる。

ラウラもちらちらとこちらを見ている。

「いや～、リリィちゃん☆　家族って良いね～♪」

……ごめん束……。

家族と言うより、同族としか見れない……。

いや、部下かな？

これは本当に家族??

「ほ、本当にいいのですか?」

「なにが~☆」

ラウラが心配そうな顔を一転させて、不安そうな顔になる。

「私がいる事で、何が起こるか……。」

……何を心配しているのだか。

ラウラは家族になる事を恐れているのだ。

いままで、誰からもぬくもりを与えられなかった少女が初めて触れたのだ。

戸惑いもするし、恐れもするだろう。

……たしか偉い魔王様はこういいました。

いやいや、ちがうちがう。

「友達(コンビ)になるのはとっても簡単、最初はツッコミをいれて」と……。

「友達になるのはとっても簡単。　まずは名前を読んで」だったね。

コレと同様に「家族になるのはとっても簡単。　まずはお父さんと呼んで」と、置き換える事ができる。

もちろんお父さんと言う所は、お母さんやお姉ちゃん。

それに準じた名称を入れればいい。

「まぁ、家族に何のはとても簡単だね。　束の事をお母さんとでも呼べばいいだけだ。」

その言葉に二人は目を丸くした。

シャルロットは、恥ずかしがっていた悩みが思わぬ形で成功する事に。

ラウラは、初めてすぎる経験に目を丸くしていたのだった。

１３７　家族になるには（後書き）

と言う事で、この後に「お母さん」とシャルロットが、「母上」とラウラが言ったのは余談？

リリィの事は「お父さん」と「父上」になった。

ラウラが「母上」とか「父上」とか想像が出来ない……。

だれか、補正案を求む。

「お父様」でも何でもいいから、補正案をッ！！

そして、めんどくさくなってきたな……。

１３８　爆弾に爆弾さらに爆弾追加（前書き）

と言う事で、原作二巻終了話です。

眠いし、だるいし……。

gd gdです。

138　爆弾に爆弾さらに爆弾追加

「やぁ諸君、おはよう♪」

束がそう言いながら教卓に立つ。

千冬は低位置に座っており、真耶は混乱していた。

リリィは相変わらず何を考えているか分からない。

しかし、一夏達は何かが起こると感じ取っていた。

ラウラは自分の席で上の空。

シャルルは教室にいない。

「ボーデヴィッヒ。　何があるか知っているか？」

箒がラウラに問いかける。

一夏はその行為に目を丸くした。

ラウラはリリィと千冬の次に、話したら死ぬと言うブラックリストの第三位なのだ。

順番が決まっているからと言って、向きを変えたり、訳の分からない物を作り出したり、電気を発生させたりと言うファンタジーなモノはないので安心だが、話し終えた後に精神がかなりすり減らされるのだ。

話した本人と周りの人間が。

「ふ、秘密だ。」

しかし、ラウラはそう言うと口を釣り上げる。

その行為に全員首を傾げた。

いつものラウラとは違う、と。

ちなみにこのクラスでセシリアだけがドイツ語を知っており、トーナメントのラウラの言葉をしっかりと理解していたため、ラウラの事が不思議とは思わなかった。

「……いっくんが、箒ちゃんが無視するよ～。」

その言葉に全員が前を見る。

そしてリリィの胸で、束が泣いている光景が眼に映った。

「貴様ら……。」

「「「「「「「「「「スミマセンデシタッ！！」」」」」」」」」」

高速で謝る。

昔、束を無視して泣かせた事がある。

その後に、束はリリィに泣きつくのだ。

そしてリリィが怒る。

それを経験して、皆束を泣かせないようにと必死になった。

どうも束は一夏と箒が無視するとそうなってしまう。

「まぁ、そんな事は良いとして♪」

束が言葉を着ると、上から紙吹雪が降ってくる。

そして束の横に、「転入生だよ～☆」と書かれたモノがぶら下がっていた。

皆がそれを見て、呆然とする。

「あ、でも、皆がよく知ってる子だから転入でいでも何でもないか♪」

その言葉に全員首を傾げた。

束はそれを見て笑い始める。

「まぁいいや。　いいよ～☆」

そう言うと、ドアが開いて人が入ってくる。

金の髪の女性。

しかし、その外見はよく見知った物だった。

「シャルル？」

一夏がそう言った。

「うん。」

しかし全員の目は丸だ。

今だ状況を理解していない。

「と言う事で、転入生はシャルロット・デュノアちゃんでした～♪」

その言葉に全員目を擦る。

そしてシャルロットを見る。

「女……の子？」

そう、今のシャルロットは男装を止め女性として立っていた。

シャルロットが苦笑いで、視線を受け流す。

「……どういう……事？」

誰かが言うと、リリィが束と入れ替わる形で教卓に立った。

「色々あってね……。　男装して通っていたんだよ。」

教室が静かになる。

「ごめんね一夏。」

シャルロットは一夏に誤った、。

おそらく秘密にしていた事についてだろう。

「「「「「「「「「「ええええっ！？！？」」」」」」」」」」

全員が再度叫んだ。

「え、と言う事は美少年じゃなくて美少女ってこと。」

「……ってアレ？　織斑くんと同室だったわよね？」

「まさかっ！？」

「そう言えばっ！　昨日男子が大浴場使ったんだよねっ！！」

そんな会話が教室中に飛び交う。

そして今日も問題が起きた。

「男子が大浴場使ったんだよね」という言葉の後に、教室の壁が吹き飛んだのだ。

派手な音を立て、破壊部分から煙を出してそれを作った本人は姿を露わした。

「い～ち～か～！！」

甲龍を纏った鈴だった。

何故いるのかは、誰も知らない。

更に唖然とする中で、甲龍の龍砲が光りを集める。

「む、まずいな……。」

「死ねっ！！」

鈴はそう言うと、ためらいなく龍砲を放った。

（ああ、俺死んだな。　明日の新聞の一面には、同学年女子により殺害って、書かれるんだろうな～。　死に方が無残でした。　トマトケチャップでした。　トマトやカキを落とした感じでした。　潰れたコーラでした。　潰れたペプシでした。　……あ、あれ？　最後二つって同じだよな？）

と、当の本人は目の前の光景に走馬灯のごとく、高速で頭を回していた。

考えている事の大半は、くだらないことだったが。

しかし一夏に衝撃砲が届く事はなかった。

「セーフ……だな……。」

シュヴァルツェア・レーゲンを纏ったラウラが、一夏を龍砲から守っていた。

一夏は「よ、よく直たな」と言って現実逃避している。

リリィと千冬はその光景に、頭が痛くなる思いをした。

「……あの、昨日僕……大浴場に行ってないんだけど……。」

シャルロットが恐る恐るそう言った。

鈴が獣のような眼で、シャルロットを睨む。

苦笑いしながら鈴を見たシャルロットは、やがて束に顔を向ける。

「昨日は……お母さんと一緒だったから。」

その言葉にまたも教室が静かになった。

束を見て「お母さん」と言ったのだ。

知っていた箒は驚かないが、他は驚く。

「ちなみに私も娘だ。」

ラウラが更に爆弾を追加する。

全員が驚愕する中、束が少し笑って「私の家族をだよ」と言っていた。

その時のシャルロットとラウラの顔は、笑顔であったのを全員が見ていた。

１３８　爆弾に爆弾さらに爆弾追加（後書き）

と言う事で、分かり切った事になりました。

そして、次から原作三巻です。

……ですが……大幅に省略せざる負えない可能性６０％なんですよね……。

マジで……。

今度は少ない話で終わりそう。

あ、いや。

戦闘あるから少しは長くなるか……。

少し休むため、今日の１８時に更新するかは分かりません。

１３９　全てが始まるお買いもの（前書き）

なんか、かけたよ……。

と言う事で、原作三巻開始です。

結構省略されそうだな……。

１３９　全てが始まるお買いもの

暗闇の中で炎上する。

自らの国を滅ぼし、当てもない旅へと続く。

同族から疎まれ、敵族からも恐怖される。

野心が無い王。

ただ生きていただけ。

それが国を焼いた。

炎上する国を背に、王は一人歩く。

その身は焼かれても死ぬ事は無く。

殺されても朽ちる事はない身体。

生涯をかけて愛し合うはずだった二人を裂いた、死。

それが王を踏み外させた。

あのときから、王の心は死んだ。

「……ちゃん。　……ィちゃん　リリィちゃん！！」

「ふへ？」

間抜けな声と共にリリィは目を覚ました。

どうやら寝ていたようだ。

「……大丈夫？」

束が心配そうにリリィを見つめた。

リリィは頷く。

すると束はリリィの目元に手を持って行った。

「けど、泣いてるよ？」

そう言って手を離すと、束の手に一滴の涙が付いていた。

リリィはゆっくりと眼元に手を持って行く。

「……本当だ。」

触れると泣いた様な感じがする。

濡れた眼元、涙が乾いて少しかさついた肌。

そのどれもが、リリィが泣いていたと言う事を物語っていた。

「……なんでだろ？」

首を傾げながら顔から手を離す。

「お義父さん、お義母さん。　いる？」

ドアが開いた音がして、キーを押す音が聞こえた。

そして現れたのは、シャルロットだった。

「どうしたの？」

シャルロットもリリィを見てそう言った。

どうやら、それほど可笑しいのだろう。

「……顔洗ってくる。」

そう言ってベットから降りた。

「……お、おはようございます。」

しかし、さらに現れるラウラ。

リリィは時計を見ると、まだ早朝を指しており……。

そして今日は休日だ。

朝早くから集まる必要が理解できない。

普通なら、まだ布団の中に包まりたいだろう。

「む、どうかしたのですか？」

ラウラもリリィを見て、そう言ってくる。

「今の私って……そんなにおかしい？」

「うん。」

即答だった。

少し凹む。

とりあえずリリィは、シャルロットとラウラの横を通り洗面所に向かった。

「……あ、そうだ。」

「にゃ？」

「臨海学校の買い物があったんだ。　ごめん、また来るね～！」

シャルロットは急いで部屋を出ようとするが。

「……なら、家族全員で行く？　お買いもの。」

リリィの発言に止められた。

洗面所から顔を出した状態で、三人を見ていた。

「い、いいのっ！？」

「うん。」

と言う事があり、家族四人でお買物と言う事になった。

ちなみに、束とリリィがＹシャツ一枚だけしか来てない事には、二人は突っ込まなかった。

「……というか、ち～ちゃんもお買い物なんだ～♪」

ＩＳ学園がある場所は、島である。

島なのだ。

つまり外に出るには、船か電車しか手段がない。

必然的に、外に出る人たちはそこに集まる。

リリィ達も例外ではなく、電車で外に出ようと駅のホームに行く。

そして見知った顔を見つけたのだ。

千冬と真耶がいた。

「お前達も外に出るのか？」

千冬がリリィ達を見て問いかける。

「そうだよ～♪」

束の言葉を聞かずに、真耶が全員を見ている。

束を見てシャルロットを見る。

リリィを見てラウラを見る。

リリィを見て束を見る。

束を見てラウラを見る。

リリィを見てシャルロットを見る。

シャルロットを見てラウラを見る。

ラウラを見てリリィと束を見た後に、四人全員を見る。

「……なんででしょう……。　篠ノ之博士に負けた気が……。」

リリィとラウラは首を傾げる。

千冬とシャルロットは苦笑いだ。

「お似合すぎです……。　リリィさんと篠ノ之博士が大人過ぎて、それくらいの歳の子がいてもおかしくないように思えてきます……。」

そこでやっとリリィは理解した。

羨ましいと……。

139　全てが始まるお買いもの（後書き）

婚期を逃していないのに、そんな話をする真耶。

なんだろう、悲しいね……。

書いてて私も悲しくなった……。

１４０　プラシーボ効果（前書き）

とりあえず、そんなこんなでのお話。

何が「そんなこんな」なのかは分からないけど……。

１４０　プラシーボ効果

「それにしてもリリィさんとボーデヴィッヒさん。　並んでいるだけで親子のように見えますよ……。　本当に。」

真耶が羨ましそうに呟いた。

……なんだろう、この婚期を逃した女性の発言は……。

……まだ、婚期真っ只中ですよね??

そう思いながら、自然と苦笑いになる。

「確かにな……。」

千冬もそう言って、リリィとラウラを見比べる。

「姉妹にも見えなくはないな……。」

リリィは近くの柱についている大きな鏡で自身とラウラを見る。

確かにプラシーボ効果で姉妹に見えなくはない。

いや、血縁者にしか見えなくなってしまった。

「プラシーボ効果だね～☆」

束も思ったのか、そう言った。

シャルロットと真耶が分からないと言う顔をしていた。

千冬とラウラは顔に出さないが、分からないようだ。

「プラシーボ効果ってのはね……たとえば、私が風邪を引いた。けど看病している束は、風邪薬が無い事に気が付く。　仕方なしに、睡眠薬などの全く風邪とは関係ない薬を飲ませた。　だけど使用者は風邪薬だと思いこみ飲む事によって、思いこみで症状が回復に向かってしまうっていう物だよ。　この場合、私とラウラが血縁者ではない。　だけど血縁者と言う事で誰かが言ったから、思いこみで血縁者だと思ってしまったと言う事だね。　もちろん容姿とかが似ているて言うのも含まれるよ。」

長々しく説明すると、シャルロットが微妙な顔をしていた。

真耶は混乱しているし、千冬は半分以上は理解出来たっていう顔だ。

ラウラは自分が話に出た事によって、千冬以上に理解出来ている感じだろう。

「分からないって言うなら、私とシャルロットを見比べて、似ている所を探して。」

全員がシャルロットを凝視する。

流石に恥ずかしかったのか、シャルロットの顔が赤面した。

「で、その似ている場所を見た状態で私達を親子と思って見てみて。」

そう言ってリリィはシャルロットの横に立つ。

すると真耶が驚いた。

「見えるっ！」

「本当だ……。」

真耶とラウラが納得したかのように、目を見開く。

千冬は表情を変えないが、納得したようだ。

……ポーカフェイスって言うのかな、バレバレだけど……。

「コレがプラシーボ効果って奴だね～♪　皆また一つ賢くなったね～☆」

最後の言葉は嫌味っぽいが、その通りだろう。

そう会話しているうちに電車が来た。

そんなに人は乗らないため、席はかなり空いていた。

乗った瞬間「む、箒ちゃん!?」と、ウサミミが伸びるのと同時に言ったため、かなり目立ってしまった。

「すまないな、付き合わせてしまって。」

「別にいいよ。」

実は束が箒の名前を読んだのは、気配を感じたからであり……。

別車両に箒は乗っていたのだ。

一夏とともに。

「そう言えば、今日は何を買いに行くんだ?」

一夏の質問に箒はため息が出た。

「一夏、校外特別実習期間があるのだぞ……。」

箒が言うと、納得したかのように一夏が声を上げた。

小声で「私の誕生日もな……」と言ったが、一夏には聞えなかったようだ。

しきりに首を傾げ、箒の様子を窺っていた。

「さて、向こう行ったら水着とか買わないとな。」

一夏に見られるのが恥ずかしかった箒は、無理やり話題を変えた。

もちろん一夏はそれにつられ「おお、水着か……」と言って買い物の事に頭が考え始めた。

箒にとってみれば、デート以外の何でもないのだが……。

デートと言って一夏が理解すると思うか。

否、あり得ない。

一夏の事だ「デート？　はは、ただの買い物だろ」と言うにきまっている。

箒は一夏の考えが分かってしまう分、少し泣けた。

「……この朴念仁……。」

とりあえずそう呟く事で、やり場のない思いを静めた。

１４０　プラシーボ効果（後書き）

頭の中で束の専用機が組み上がっていく。

内部システムだけ……。

使い場面が無いのに、作られていく……。

何故だぁぁぁぁ！！

しかも、機体名から能力が分かると言う……。

こんな所で、レイハさん出す気はないよっ！！

作者、もの凄く悩んでます。

１４１　追跡する者される者（前書き）

軽く書けるから楽だね～。

本当に楽だね……。

１４１　追跡する者される者

到着したリリィ達は目を疑った。

束が言った通りに箒達がいたのだから。

「……同じ電車に乗っていたのか……。」

千冬が納得するかのように呟いた。

全員唖然とした。

「ん？　セシリアと鈴か……。」

突然リリィがそう言った物だから、全員唖然とした顔でリリィを見る。

そしてそのままリリィが見ていた方向を見る。

すると自販機の影にセシリア達がいた。

その目は明らかに一夏達をガン見している。

「……壊れてないか？」

ラウラがそう言うと、リリィは頷いた。

目が虚ろになっている。

心なしか、光りが灯っていない。

「ま～、私達も降りよっか～♪」

束がそう言うと、全員移動をし始めた。

「というか、束……お前一夏達の方へ誘導してないか……。」

千冬が呆れながらそう言った。

そう、さっきから行く先々で一夏達を見つけているのだ。

それと同時に、下手な尾行をしているセシリア達も見つけてしまっていた。

「だって、箒ちゃんのデートなんだよ！！　私が見届けないで誰が見届けるのさっ♪」

その言葉に全員呆れた。

「まぁ、結局行き先は同じだし気にしないで行こうか……。」

で、結局同じ方向に進んで水着を買う事になったのは良い。
だが……。
「リリィちゃん～☆　これが似合うと思うんだけど～♪」
「クラリッサか、水着と言うのは何か理由があるのか？」
「お義父さん。　こんなのどう？」
と一気に騒がしくなった。
リリィはため息をつく。
「お、お疲れ様です……。」
真耶だけが同情的にリリィを慰めていた。
だが、同情入らない。
せめて安らぎが欲しかった。
「そうだな……リリィ、白と黒どっちがいいと思う？」
「お、織斑先生……。」
千冬までも、束同様に動いていた。
そんな中、リリィの目の端で箒が一夏を無理やり更衣室に入った所

を見てしまった。

面白い事になりそうなため、全員を静かにさせる。

「どうしたの？」

シャルロットの言葉にリリィは、カーテンの閉まった更衣室を指す。

全員の視線がそこに向かうと、ゆっくりと口を開いた。

「今、箒が一夏を更衣室（アソコ）に連れ込んだ……。」

その言葉に全員声は出さぬ物の、目を見開いて驚愕していた。

「な、な、何やってるんですかっ。」

真耶が慌てて更衣室に向かおうとするが、それをラウラが止める。

と言っても、束の差し金だろう。

「ふむ、面白い事になるな……。」

千冬が更衣室とは別の場所を見る。

ラウラとセシリアが、更衣室の近くで一夏達を探していた。

「全員待機ね♪」

束がそう言うと、更衣室の隙間から目が見えた。

弧の目を見る事が出来たのは、視力の良いリリィと千冬、軍事訓練を受けたラウラに良く分からない能力を使った束だった。

「確実に逃げる気だな。」

「あの物達から逃げ切れるのですか？」

「分からない。」

千冬とラウラが状況を確認している。

確かに身を隠すと言う行動は、逃げる事に繋がる。

しかし、更衣室とはいただけない。

「ん？　うわぉ、箒ちゃんだいた～ん。」

束がそう言うと、再度全員目が更衣室に向く。

しかしカーテンで中の様子が分かるはずもない。

リリィ以外が、首を傾げた。

「足元。足元。」

リリィがそう言うと、全員気がついたようだ。

カーテンで閉められていても、足元はカーテンで遮られてないと言う事に。

そして更衣室内には、ＩＳ学園の服らしきものが落ちていた。

足は四本見える。

だが内二本は、ズボンをはいているため一夏である。

他二本は箒であるのは確実。

「動いていますね……。　服を脱いでるんでしょうか。」

真耶が興味心身に言った。

動いている足が浮き上がり、カーテンに隠れる。

次に地面についた時は、素足だった。

つまり、いつも履いているオーバーニーソックスを脱いだのだ。

「さて、そろそろ見過ごせなくなってきたかな？」

そう言うと、リリィは更衣室に近づいた。

１４１　追跡する者される者（後書き）

さて、束の専用機と言う事を考えたのですが……。

出す気はありません……。

書いたらタグが追加すると思うｗｗｗ

そんな感じの機体が構想で来ました……。

ネタ機ですけど……。

詳細は活動報告で。

１４２　リリィと悪意と証拠（前書き）

……まぁ、オリジナルですから、面白くはないでしょうね。

１４２　リリィと悪意と証拠

セシリア達がいない事で、リリィ達四人は更衣室の前に立っていた。

箒の声がして、一夏の声がしたため躊躇い無くカーテンを掴む。

「……何をしてるのかな。」

そう言いながら、カーテンを開ける。

そこには一夏と、水着を着た箒がいた。

「ふむ、流石に買い物ならいいが、この状態は見逃せないな。」

千冬がそう言うと、一夏達は震えだす。

「一夏、そこを出なさい。」

リリィは一夏を見てそう言った。

一夏は恐る恐る、更衣室から出てくる。

「篠ノ之は早急に着換えろ。」

その言葉にカーテンが閉められる。

一夏は千冬達を見ると、慌て始めた。

そこにシャルロットとラウラに捕獲されたセシリア達が加わる。

そして丁度いい所に箒が着替え終わった。
四人は正座させられると、説教を食らう羽目になった。

「では、今回の事件はリリィ博士の仕業と言う事かな?」

薄暗い部屋の中で、誰かが喋る。

モニターの光が声の主の顔を照らす。

「あのような機体を作れるのは、篠ノ之博士とリリィ博士しかいません。」

「なおかつ、自身も天使を使い白騎士事件に介入しております。」

声の主がため息をつく。

「博士なら、あのような機体を作る事は造作もないでしょう。」

あのような機体。

つまり画面に映っているプロヴィデンスの事だ。

「たしかに、携帯できるビーム兵器に全身装甲。　異常なまでの機体性能。」

「アレはあの者にはふさわしくない。」

「……誰もそんな事を聞いてはいない。」

「しかし事実でしょう。」

全員が沈黙した。

誰も喋らないと言う事は、肯定しているのも同然だ。

「篠ノ之博士は監視カメラに写っており、証拠はあります。」

「リリィ博士の身だけが、監視カメラがとらえていませんでした。」

画面に映像が流れる。

アリーナから出て、格納庫に向かっている瞬間に非常シャッターが下りる。

丁度、監視カメラからリリィの身を隠すように……。

そこからは何も映ってはいなかった。

「閉じ込められていた、と言う事は？」

「あり得ます。　ですがリリィ博士は、狙っていた可能性もあります。」

「どういう事だ？」

そう言うと画面に二つの映像が流れ始めた。

片方にリリィが映っており、もう片方にアリーナの天井が映っていた。

すると、リリィの方のシャッターが閉まる。

その後にアリーナのシールドが破られ、プロヴィデンスが降下してきた。

「リリィ博士が閉じ込められた場所には、破壊された形跡はありませんが、実質可能でしょう。」

束には証拠がある。

だが、リリィには証拠がない。

閉じ込められたとしても、シールドが破壊される前にシャッターが閉まるのは不自然だ。

つまり、閉じ込められた振りをしてプロヴィデンスを使用して襲撃したと言う事だ。

「確かにな……。」

「それに前回の襲撃事件の際、リリィ博士は織斑一夏のデータを私にこちらに来ておりま

したが、予定より時間がずれていました。」

そう言うと、またも写真が二枚表示される。

「あの機体が現れたのが、リリィ博士がこちらに来る四十分前。戦闘して戻ってくるのには、十分な時間です。」

「さらに、何者かにデーターが消されていましたが、監視カメラを見ていた職員が、ここの上空にあの機体を見たという証言をあります。」

ココと言うのは、国際ＩＳ委員会本部の事だ。

つまり、ＩＳを運営する団体のトップ。

悪く言えば、世界を牛耳る者たちの巣窟だ。

「よって、リリィ博士を再度重要参考人で、国際指名手配する事を進言します。」

だが、決定者の頭は縦に振られなかった。

「早計過ぎる。」

「しかし！！」

「今回の会談は延期。　次回に繰り越すぞ。」

そう言って、モニターの電源は切られ、決定者は部屋を出て行った。

１４２　リリィと悪意と証拠（後書き）

さて、この後に数話乗せたら、一種のリリィ編に突入します。

リリィの正体。

何故、こんな力が持っているのか……。

そういうお話にする予定です。

痛い子お話になりそうですので、その時は生温かく見てくださるとありがたいですかね。

１４３　天使再現計画（前書き）

まぁ、福音戦の話です。

まだ旅館についてないのに……。

１４３　天使再現計画

「うみだ～！！」

という言葉に、リリィは起こされ。

「……ｚｚｚ」

再度寝た。

束がリリィの膝に座っていたが、寝た。

束もリリィの方を枕代わりに寝ているが、それでも寝た。

と言う事でバスに乗って、学年全体で研修先へと向かっている。

「って、寝てる場合じゃなかった……。」

束がそう言って目を覚ますと、リリィもつられて目を覚ました。

後ろの方で騒いでいる生徒の声の方が五月蠅いが、寝れる。

だが、束の声だけには反応する。

それがリリィだった。

束の声が真剣だったため、リリィは目を覚ましたのだが……。

「お菓子が欲しいんだけど、ない？」

とてつもなくくだらない事だった。

とりあえず、バスに乗り込む前に衣類バックから取り出した飴を渡す。

「まぁ、お菓子は欲しいけど、もっと大事なこと。」

そう言うと、束はリリィにプライベート・チャネルをつなげた。

つまりこの事から、束は自分専用の機体を持っていると言う事になるが、今は関係ない。

あとフリーダムに後付けしたため、一応使えると言う事だ。

束が表面上笑顔で、明るくない話題を口にした。

『天使再現計画って、聞き覚えある？』

いつもとは違う、至って真面目な口調で束は話す。

『あの、アメリカとイスラエルが合同開発したあの機体だね。』

『うん、銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）。』

天使再現計画と言う名のもとに、アメリカとイスラエルが合同でＩＳを作った。

それがシルバリオ・ゴスペルだ。

映像でしかない天使だから、高出力射撃に高機動しか実現していない機体だ。

全身に三十六門の砲門を持ち、翼で高機動を実現させた機体だ。

しかし全身白で、スペックもフリーダムの以下の出来栄え。

つまり、欠陥天使と言う物だ。

『それがどうしたの？』

その言葉に束が何も言わなくなる。

『昨日、不明なアクセスがあって暴走。』

リリィは平然と聞く。

『私がアクセスしたときには、意味不明な文字配列で暴走状態だった。』

『で？』

『それをいっくん達に迎撃させて、成長させる。』

その言葉にリリィは納得した。

『百の訓練より、一の実戦……。』

『うん……。』

リリィはため息をつくと考え始めた。

『私が、明日に民宿から３０Ｋｍ地点に移動するように無理やりプログラムしたけど、暴走したままだから……。』

『その時は私が行く……と。』

『お願いできる？』

リリィは頷く事で、それを了承した。

『千冬には話すの？』

そう聞くと束は首を振った。

言わないらしい。

『パイロットは搭乗しているから、完全破壊は出来ない……。』

『……誰が乗っているんだ？』

『……忘れた☆』

そう言うと、舌を出して「えへへ」と笑う。

「各自そろそろ付くから、降りる準備しておけよ。」

千冬の言葉にリリィ達はプライベート・チャネルの通信を切った。

「最悪、私が行くけど……。」

「アレ使うのか？」

リリィはそれを思い出す。

白と金と桃色のＩＳとＩＭＳとは思えない物を。

フリーダムより機動は低いが、防御、射撃についてはフリーダム以上の危ない物。

考えただけでも、恐ろしい。

「……アレを使うのは……止めて、ね。」

少し震えながら、リリィは自分と束の荷物を持って動く。

（千冬には、一日だけでも休んでもらわないと……。）

そう思いながら、千冬のスケジュールを思い出す。

引率、会議などは無理だが、他の事ならリリィがやっても問題ない。

ほとんどが、ＩＳなどの訓練なのだから……。

リリィは千冬を休ませる算段を立てながら、束と共に旅館へと移動した。

ちなみに引率を手伝えばいいのに忘れているため、千冬に余計な苦労をかけているのに気が付くのはまだ先の話。

１４３　天使再現計画（後書き）

……まぁ、束の専用機はあるけど、基本は出さないという方針で向かっています……。

……システム構造は、問題ないと思うけど……。

悪魔だし……。

魔王だし……。

束「……少し頭を冷そうか……。」

になっちゃうし……。

はい、レイジングハートですよ。

「魔法少女リリカルなのは　ＳｔｒｉｋｅｒＳ」参戦ですか……。

やりませんよ……。

でもやってみたい自分もいる……。

ま、行き当たりばったりでいいか。

ただ今、ラウラ機製造中……。

0時に更新できるか分かりません。

と書いておきながら、毎回更新出来てる私……。

１４４　嵐の前の休息（前書き）

……うん。

出来たね。

出来ないと思っていたら、投稿で来たよ……。

１４４　嵐の前の休息

「と言う事で海です。」

「誰に向かって行ってるの？」

束が不思議そうな顔をしながら、リリィに聞く。

リリィは少しうつむきながら歩いた。

束は白を基本色としたビキニタイプの水着を着ている。

もちろんウサミミはつけたままだ。

対するリリィは水着を着るつもりはなく、適当に私服で出ようとした。

だが、束がそれを許すはずもなく……。

「なんでさ……。」

リリィも水着を着ていた。

もちろん男性用……ではなく女性用だ。

上は白単色のビキニタイプの水着で、下は白淡色の半ズボンタイプで構成されている。

もちろん別々の水着を組み合わせただけなのだが、肌も白に近いた

めか全身真っ白の雪女にも見える。

「……仕方ない……腹をくくろう。」

そう言って、砂浜に一歩足を踏み入れた。

生徒はすでに海に入って遊んでいる。

「なるべく沖に行かないでね～。　行って問題起こしたら反省文だから～！！」

リリィの言葉に青くなりながら、全員頷いた。

そして全員リリィの恰好に気が付く。

目を見開いているが、リリィ達は気にせずパラソルを砂浜に突きたてた。

椅子を置いて、生徒たちを監視する役目のためだ。

「山田先生も、着替えてきたらどうですか？」

私服を着た真耶に向かって、リリィはそう言った。

「大体の事は私達が終わらせておきましたから。」

そう言うと真耶は目を輝かせた。

「ほ、本当ですか！！」

子犬のように、リリィに寄ってくる。

そうとう海に入りたかったのだろう。

千冬のためとはいえ、真耶の分もやっておかないと千冬に怪しまれるからついでにやっただけなのだ。

少しばかり罪悪感がリリィを襲った。

「……だから、今くらいは休んでおく事。」

「はいっ！！」

リリィの言葉に元気良く返事をすると、真耶は小走りで旅館に向かった。

子犬先生という言葉が似合いそうだ。

「リリィちゃん……。」

「ん？　っ！？」

気が付くと生徒が周りに沢山いた。

わさわさと髪の毛がうねってる。

つまり怖いと言ってるわけで……。

「な、なにかな？」

その言葉に瞬間的に全員が質問合戦が始まる。
特に多かったのが「リリィ先生は本当に男なんですか」と言う物だった。
束は少し後ずさっている。
遠くにいる一夏は、なぜかホッとしていた。
リリィは適当に答えると、生徒たちを追っ払った。
「お疲れ様です、父様。」
堅い声でなぜか、ラウラが現れた。
体格に不釣り合いな、水着に髪を二つにまとめた状態だ
リリィが休まる時間はなさそうな気がした。
「……敬語止めない？」
ラウラはなぜか、敬語なのだ。
「シャルロットと話すようにさ……。」
「え、で、ですが。」
なぜか動揺する。
敬語を使う、家族っているのか？

いないだろう。

つまり、家族に敬語は不要と言う事だ。

「ラウラ～、だから敬語止めよっていったじゃん。」

そう言ってシャルロットも現れた。

なぜか、海に行かないでリリィ達の横に座る。

「しかしだな、目上に対しては敬語っと言うのは当たり前だろ？」

真顔でそう言うラウラに、束以外唖然としていた。

「……ラウラ？　もしかして私に壁作ってる？」

リリィがそう言うと、ラウラが慌てて訂正する。

だが、呂律がまわらないのか言葉にならなかった。

恥ずかしそうに頬を赤らめた。

その光景にリリィ達は笑い、ラウラもつられて笑った。

「ま、ゆっくりやってけばいいよ。」

そう言ってラウラの頭を撫でた。

最初は嫌がっていたが、次第に気持ちよさそうに目をつぶっていた。

「さて、一応私達は監視の意味もあるから動けないんだよね。　だから、二人とも行っておいで。」

その言葉に苦笑しながら、二人は海に向かって行った。

１４４　嵐の前の休息（後書き）

投稿できたけど、おそらく6時の方は投稿できそうにない……。

今度はマジで……。

ＩＭＳラウラ機……まぁ、ただのガンプラだけど、完成したし。

ネタばれっぽいですが、写真乗せます。

＞ｉ２４５０７―３０４５＜

次話で、ラウラのＩＭＳ、ストライクノワール登場。

そして福音戦へ……。

１４５　４機目のＩＭＳ（前書き）

１機目：フリーダム
２機目：白騎士
３機目：ストライク

４機目：……ノワールです。

白騎士も一応ＩＭＳ扱いだと言う事……。

１４５　４機目のＩＭＳ

先生部屋から一夏の声と千冬の声が漏れたため、聞き耳をしていた五人は説教。

マッサージを勘違いして聞いていた五人が説教から解放され帰ると、とリリィの部屋からも同じような声が聞こえた。

五人は同じ轍を踏むまいと、スルーした翌日。

「さて、各班ごとに振り分けたＩＳの装備し個人ごとに点検訓練を行うように。　専用機持ちは、ちょっとした模擬戦闘だ。　暇な物は見ておく事を進める。」

千冬の言葉に一夏達は、ため息をついた。

大体一夏達がやる模擬戦は、リリィかシャルロットのＩＭＳとの一体多数戦闘が多い。

しかもＩＳはエネルギーが減っていくのに対し、ＩＭＳは減らない。

ストライクは減るが、換装して回復をする。

何ともフェアではない戦闘だ。

「今回の相手は、ボーデヴィッヒだそうだから安心しろ。」

そう言うとラウラ自身も驚いていた。

「あの……フリーダムやストライク相手ではなく、私のシュヴァルツェア・レーゲンが相手するのですか？」

ＩＭＳ対ＩＳと言う模擬戦闘構図が出来ていたため、ラウラは混乱する。

もちろん一夏達もだ。

「……言い忘れてたけど。　シュヴァルツェア・レーゲンもストライク同様にＩＭＳになるよ☆」

その言葉に全員驚愕した。

ただ、シャルロットだけが「やっぱり……」と言って苦笑いだった。

「まぁ、とりあえずシュヴァルツェア・レーゲンを展開して見て♪」

束がそう言うと、ラウラはその言葉に従ってシュヴァルツェア・レーゲンを展開させた。

学年全体が静かになり、シュヴァルツェア・レーゲンを見る。

「で、シャルちゃん同様ＩＭＳを展開するイメージを持って。」

ラウラが目を閉じイメージしたのか、突然シュヴァルツェア・レーゲンがモニターを展開させた。

そこには、ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩがストライクになった時と同じように≪ＯＫ？≫と書かれていた。

ラウラは困惑しながら、それを押す。

するとラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩ同様、シュヴァルツェア・レーゲンも光に包まれ、おさまった時には全身装甲の機体になっていた。

全員その光景に唖然とする。

「……これは……？」

ラウラが驚きながら、自身が持っているライフルと腕、身体の装甲を確認する。

「シャルちゃんのストライクを発展させた機体だって～☆」

そう言うとシャルロットにも目を向ける。

シャルロットはその目が何を言っているのか理解出来たのか、ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩを起動させてストライクにする。

「似てる……気がする。」

鈴の言葉を引き継ぐように、束は説明をし始めた。

「えっと、ストライクの形式がＧＡＴ－Ｘ１０５なのに対して、この機体の形式番号はＧＡＴ－Ｘ１０５Ｅ。　通称ストライクノワール。」

「ストライク……。」

「ノワール……。」

一夏達がラウラの機体の名を呟く。

「で、この機体は両手に１７ｍｍグレネードランチャー装備５．７ｍｍ高エネルギービームライフルは……大体がストライクと同じだから説明は省くね。」

その言葉に束はモニターを映す。

「腰に装備しているのは、Ｍ８Ｆ－ＳＢ１ビームライフルショーティー。　簡単に言えば近距離戦闘用のビームライフルだね♪　射程が短いからきおつけてね。」

ノワールは手に持っているビームライフルを地面に置き、腰に装備しているショーティーを持つ。

試しに空に向かって撃つと、単発だがセシリアの機体より高威力の火線が飛んで行った。

それを見た全員は拍手している。

「で、次はＭＲ－Ｑ１０フラガラッハ３ビームブレード。　ビームサーベルじゃないけど、対艦刀が二本付いてるね。　大体、ストライクのシュベルトゲーベルと同じ感じだよ～☆　あ、翼の外側ね。」

ノワールは言われた通り、翼の外側から対艦刀を引っ張り出す。

ビームブレードと言うより、ビーム鉈だった……。

ノワールはゆっくりと羽にマウントする。

少しゲンナリしてるように見えた。

「さて、次の装備で最後だね。　これらは簡単に使えると思うよ、」

「……？」

束の言葉にノワールは首を傾げた。

「手と足、背中にアンカーランチャー、翼の内側にＭＡＵ－Ｍ３Ｅ４二連装リニアカノン……シュヴァルツェア・レーゲンでいうと、ワイヤーブレードにレールカノンだね。　それが装備してあるよ♪」

「本当ですか！？」

ラウラが嬉しそうに声を上げた。

家族なのに、敬語と言うのは変わらないが。

ノワールが翼を展開させてリニアカノンを展開さる。

同時に手のひらからワイヤーを出す。

「……あ……。」

ラウラはシュヴァルツェア・レーゲンのワイヤーが自由に動くことから、ノワールのワイヤーも同じように動くと思って軽く出したのだ。

その結果、足元の砂に落ちた。

「シュヴァルツェア・レーゲンと違って、自由度は無いけど、１０ｔは余裕で耐えられるよ♪」

そう言って束は笑い始めた。

全員、驚愕か呆然とするしかなかった。

１４５　４機目のＩＭＳ（後書き）

……一回ノワールのプラモデル……ＭＧのやつ見て。

意外とかっこいいから。

本当に……。

１４６　模擬戦　シャルロットＶＳラウラ（前書き）

模擬戦と言っても、福音でドローと言う感じで終わりますけどｗ

１４６　模擬戦　シャルロットＶＳラウラ

ストライクとノワールが斬り合う。

お互い持っているのは対艦刀だ。

「どう？」

「悪くないな。」

そう言いながら、対艦刀をマウントしてショーティーを引き抜く。

ストライクはすぐさま距離を置くが、マシンガンのようにビームが放たれストライクは追加肩装備を破壊される。

「痛……。」

その間にも翼からリニアカノンが展開される。

ストライクはシールドが大きいエールストライカーを装備して、衝撃に備えた。

しかし、シールドはストライクの手を離れた。

困惑しながらも状況を確認しようと、ノワールを見ると手にはストライクのシールドを持っている。

「自由度は高くないが、コレも使い勝手が良いな。」

そう言ってシールドを持っていない手をストライクに向けて、アンカーを伸ばす。

（もしかして、アンカーでシールドを!?）

シャルロットが困惑しながらも、アンカーを回避する。

だが、ノワールはリニアカノンの向きを変えることで、ストライクを追撃した。

驚く事に、たった数分の間にラウラはノワールを掌握したのだ。

今のノワールは、強敵と言っても良いほどの動きをしている。

「そろそろいいかな?」

しかし、シャルロットは負ける気が無いのか、高機動型のエールだからこそ出来る速度で移動する。

その移動は、ノワールから距離を置くのが目的だろう。

あっという間に距離が開いた。

「避けてね。」

そう言うとストライクの背部装備が消える。

そして次に背部に現れたのは、緑色の砲身。

ランチャーストライカーだった。

「くっ！」

ノワールは急ぎレールカノンで応戦するが、照準が少し甘いのか弾はストライクの横を通り抜けるだけだった。

「お返しだよ。」

そう言うと、アグニから高エネルギーが発射される。

ノワールは回避しきれないと感じたのか、ストライクから奪ったシールドを掲げる。

「っ！？」

防ぐ事は出来たが、衝撃が激しい。

砲撃が止む直前に、シールドはその衝撃でノワールの手からはじきとばされていた。

「……やり過ぎだな。」

「……そうですね……。」

千冬と真耶が呆れている。

真耶は若干怯えているようだが……。

そんな時、真耶が持っている端末から音が鳴った。

「なんでしょう？」

不思議そうに端末を起動させると、真耶の目が大きく広がる。

「お、お、おり、織斑先生っ！」

何度も噛みながら千冬を呼ぶ。

千冬が眉をひそめながら、真耶の持つ端末を見る。

「特命任務レベルＳＳＳ……。」

千冬が目を細め、生徒たちを見る。

すると千冬は口を開かず手だけで動かす。

束も手を動かし、意思総通をしているようだ。

ラウラ以外その光景は理解ができなかった。

それは一種のサイン。

連絡などを声に出さずやり取りをする、軍関連の手信号だった。

「現時刻を持ってＩＳ学園教員と所属篠ノ之は特務任務行動へと移る。　今日のテスト稼働は中止。　各班はＩＳを片づけて旅館に戻れ！！」

その言葉に生徒は目を白黒させた。

意味が分からないと言う顔だ。

「早く行け。　それと専用機持ちは私と共にこい。」

千冬はそう言うと、さっさと歩いて行った。

「おっぱいは、お片づけね♪」

そう言うと、専用機持ちを連れて千冬の後を追って行った。

ちなみに「お片づけ」と言うのは、「生徒たちを旅館に戻るまで見ていろ」と言うことらしい。

千冬は真耶の端末に書いてあった事を思い出し、疑った。

だが、いつかこうなると思っていた。

特務任務は二つあった。

一つは「シルバリオ・ゴスペルの暴走停止」。

これに関しては、レベルＡの任務のため問題はなかった。

しかし、二つ目の任務に問題があった。

その任務はレベルＳＳＳであり、詳しい命令も書かれていた。

「天使に両機を付け、シルバリオ・ゴスペルを撃墜」ここまでは良い。

だが、命令はこの後にあった。

「その後、天使に付いていた両機が最大出力で天使を撃破」と言う物だった。

プロヴィデンスとリリィを、国際ＩＳ委員会は結びつけたらしい。

命令に「リリィ博士の生死は問わない」と書かれており、束に見せたらどうなるか分からない事ばかり書かれていた。

おそらく見せたら、束は国際ＩＳ委員会の者を一人残さず殺すだろう。

「エンジェルダウン作戦……か……。」

千冬の呟きは、風に流されていった。

１４６　模擬戦　シャルロットＶＳラウラ（後書き）

……どういうわけか、特務が二つきました……。

最大級の任務レベル「ＳＳＳ」。

まぁ、リリィ相手ならＳＳＳつけてもおかしくはないでしょう……。

眠いぜよ……。

次話辺りは、プラモを使ってストライクノワールの説明でもしようかと思います。

知らない人もいるでしょうから……。

- - 3　ストライクノワール（前書き）

今回はストライクノワールの説明です。

あとがきにプラモを乗せて、適当に全武装を使って写真を取っています。

- - 3　ストライクノワール

ＧＡＴ－Ｘ１０５Ｅ

正式名称：ストライクノワール

ストライクＥから発展。

武装

Ｍ２Ｍ５　トーデスシュレッケン１２．５ｍｍ自動近接防御火器

本作品では【Ｍ２Ｍ５　トーデスシュレッケン１．２５ｍｍ自動近接防御火器】となっている。

Ｍ８Ｆ－ＳＢ１　ビームライフルショーティー

ＥＱＳ１３５８　アンカーランチャー

５７ｍｍ高エネルギービームライフル

本作品では【５．７ｍｍ高エネルギービームライフル】となっている。

１７５ｍｍグレネードランチャー装備５７ｍｍ高エネルギービームライフル

本作品では【１７ｍｍグレネードランチャー装備５．７ｍｍ高エネルギービームライフル】となっている。

ノワールストライカー装備時

ＭＡＵ－Ｍ３Ｅ４　二連装リニアガン

ＭＲ－Ｑ１０　フラガラッハ３ビームブレード

シャルロットが使用するストライクに合うように、リリィが製作した機体。

フリーダム内にあったストライクＥとノワールストライカーのデーターから組み上げたため、完成していたデーターを作ったのではな

く、不完全だったデーターを完成させて作り上げた。

よって、ＭＳであるストライクノワールと同じではあるが、まったく別の製造過程を進んだ機体となる。

もちろんフェイズシフト装甲のため、ほぼ無制限の速度が出せ、実体剣や実態弾などは無効化する。

絶対防御も装備されているので、ストライク以上のスペックを持つ事になる。

高速切替に対応しているが、ラウラは使用しないためノワールストライカー固定になっている。

しかしパージすることが可能なため、シャルロットのストライクからストライカーパックを受け取り、装備することが可能。

ただし、コンボユニット呼ばれる肩装備は出来ない。

そのため、リリィがノワール専用のストライカーパックを製造した。

ＩＷＳＰにアナザートライアルソードストライカー、アナザートライアルランチャーストライカーに試作型ガンバレルストライカーである。

アナザーストライカシリーズは、完全にＸ１０５のストライカーパックの後継型バックパックでストライクＥやノワール専用である。

ＩＷＳＰはノワールがあるため、ストライクに使用するための装備であると思われる。

ノワールが使用する事は、ほぼ無いと思う。

ガンバレルストライカーは、量産型機に装備される予定のストライカーパックを無理やりノワールに接続すると言う実験で、セシリアのブルー・ティアーズやリリィのストライクフリーダム、ストライクフリーダム・フェニックスなどの誘導兵器に刺激された、束がリリィに言わず製作したものである。

ブルー・ティアーズやドラグーンとは違い、無線式ではなく有線式の誘導兵器のため攻撃範囲が狭いが、セシリアやリリィみたいな特殊な空間把握能力が無くとも、動かせる様になっている。

しかしＩＳ適正Ｂ以下が使うと、上手く動かない事が想定されているため今だ実験の域を出ないストライカーパックである。

なお、ラウラがストライカーパックを換装する際、最低４分無防備になるのでほぼノワールストライカーで戦闘を続けている。

性能としては遠近中の平均でバランスが取れており、変える必要が無いとのこと。

しかし、ラウラがノワールに乗ってアンカーを使った時「シュヴァルツェア・レーゲンのワイヤーブレード見たいな、自由性があれば……」と呟いていたため、束がＩＭＳ専用ワイヤーを製造しようとしている。

しかしその前に、シルバリオ・ゴスペルとエンジェルダウン作戦が始まったため保留になっている。

- - 3　ストライクノワール（後書き）

一応の説明でした。

別に細かい詳細があるわけじゃないし、ストライクの系統機で黒って言ったらノワールと言う事だったので……。

まぁ、こんなのに時間潰してすみません。

＞ｉ２４５４６―３０４５＜
＞ｉ２４５４９―３０４５＜
＞ｉ２４５５０―３０４５＜
＞ｉ２４５４７―３０４５＜
＞ｉ２４５４８―３０４５＜

１４７　エンジェルダウン作戦と千冬の叫び（前書き）

……まぁ、千冬がほぼメインですね……。

１４７　エンジェルダウン作戦と千冬の叫び

リリィが先ほどから見当たらないため、束に探しに行かせた。

その間に説明する。

「現状を説明する。」

そう言うと、千冬はモニターを表示させた。

「数十時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカとイスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ、通称シルバリオ・ゴスペルが制御化を離れて暴走。　監視空域より離脱したとの連絡があった。」

全員その言葉に呆然としている。

ちなみに全員と言うのは、一夏、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラだ。

本来なら四組にいる更識簪もいるはずだが、専用機を所持していないと言う事から外されていた。

「その後、衛星の追跡の結果、ここから２Ｋｍ先の空域を通過することが分かった。」

束が設定したプログラムは３０Ｋｍだったが、暴走で距離が変更されたようだ。

束にしてみれば距離は問題なく、シルバリオ・ゴスペルがこちらに

来てくれるという結果があればいいので、問題ではないだろう。

「時間にして五十分後。　学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処する事になった。」

一夏以外の全員が、驚愕した。

「問題はここからだ。」

モニターを映し変える。

モニターには、フリーダムが映し出されていた。

「フリーダム？」

「どういう事ですの？」

皆分からなさそうに質問した。

千冬は刃を噛み締め、葛藤を抑えた。

「……国際ＩＳ委員会から過去最大レベルの……特務依頼だ……。」

その言葉に部屋が静まり返る。

「フリーダムを搭乗者の生死構わず破壊しろと、な。」

「「「「「なっ！？」」」」」

全員が驚愕する。

ラウラは「何の冗談か」と言うように、千冬を見つめる。
シャルロットも同じように見つめるが、その目は「嘘って言って」と語っていた。
「落ち着け……。　説明する。」
千冬はそう言うと、再度モニターを変えた。
今度はプロヴィデンスが映っていた。
「国際ＩＳ委員会は、この機体の搭乗者をリリィと判断した。」
その言葉に全員の中に怒りが生まれた。
「証拠も出されている。　……証拠とは言い切れないがな……。」
更にモニターが変わり、何枚かの写真が表示される。
もちろん時間入りでだ。
「……たしかに、これだけ見れば父様が犯人だと言えなくもない。」
「ラウラッ！？」
ラウラの言葉にシャルロットが驚く。
声に少しばかり怒気が入っていたが、ラウラはそれを受け流す。

「私だって、父様が犯人だとは思っていないっ！！　何より証拠が不十分過ぎだっ！！」

そう言って、シャルロットを睨みつけた。

その目には怒りと、悲しみが入り混じっていた。

「黙れ。　説明するぞ。」

その言葉に全員唖然とした。

「フリーダムがシルバリオ・ゴスペルを倒したとしても、何らかのダメージを追うはずだ。　そこを最大火力で撃つらしい。」

至って冷静に言う千冬に、ついに我慢できなくなったのか一夏が立ち上がる。

そして千冬のジャージの首元を掴みとる。

普段の千冬だったら、避けてカウンターするのだが今回はなかった。

ただ、一夏に首を強く揺すれれされるがままになっていた。

「なんでだよっ！　なんでリリィが殺されをうなのに、なんでそんなに冷静なんだよ千冬姉！！」

そう言って何度も千冬をゆすった。

今の一夏の目は、いつもの一夏と違い誰もが恐怖するような憎悪の目をしていた。

「千冬姉はリリィが殺されても良いのかよッ！！」

その言葉に今度は千冬が口を開いた。

「私だってリリィがこんな事をするとは思ってはいないっ！！」

その声はいつもの教員としての言葉ではなく、ただの千冬としての言葉だった。

「お前だってリリィがあんな事をすると思ってるのかっ！？　思わないだろ！！　するわけないだろっ！！」

その言葉に全員飲まれる。

それほど、千冬の言葉は悲しくも強大だった。

１４７　エンジェルダウン作戦と千冬の叫び（後書き）

おそらく一夏が主人公になると言う事は、もう無いのだろう……。

主人公

リリィ＞千冬＞……て感じ？

束はヒロインだし、ね。

と言う事で、福音戦が始まります。

１４８　落ちる天使（前書き）

眠い……。

本当に……。

１４８　落ちる天使

結局、リリィと束は何も知らぬまま作戦に入った。

シルバリオ・ゴスペルを強襲するのは簡単に決まった。

最初から最大戦力を投入し、機能停止させると言う物だ。

しかしＩＳの速度は、シルバリオ・ゴスペルには追い付かない。

そこで無理やり冷静になった千冬は、ＩＭＳ系統がＩＳを搬送することを提案した。

箒は一夏を、シャルロットはセシリアを、ラウラは鈴を運ぶこととなる。

もちろん、作戦にはリリィも参戦する。

千冬は作戦には参加しなかった。

あくまで本部で情報判断と、指揮決定権を担うつもりだ。

さて作戦は運送しない、フリーダム先行しシルバリオ・ゴスペルと戦闘。

エンジェルダウン作戦と同時進行するため、適度に一夏達を遅れさせフリーダムの被弾を招こうと言うことらしい。

しかし一夏達は遅れる気はないようだ。

最速で、フリーダムを援護し任務を終える気である。

エンジェルダウン作戦なんか知らない、と言う気だろう。

ＩＳ学園の教員もそのようで、不満を口の様に言っていた。

人徳と言うのか……。

もちろん束がそれを聞いて、怒っていた。

おそらく今日中にでも、国際ＩＳ委員会本部は火の海だろう。

「よし、じゃぁ行ってくるね。」

そう言うと、フリーダムは青い翼を広げ飛んで行った。

エンジェルダウン作戦の事を知らぬまま。

束は余計な不安を与えたくないのか、それともただ言いたくないのか知らないが、リリィには何も言わなかった。

「フリーダム、時速６３００ｋｍ突破。　シルバリオ・ゴスペルまであと９００。」

真耶の声が臨時の指令室に響く。

「み～つけた。」

そう言うと、後ろを向いているシルバリオ・ゴスペルに向けライフルを撃つ。

熱源に反応したのか、シルバリオ・ゴスペルは緊急回避をする。

普通だったら回避しても、どこかにダメージは与えるはずだが完全に回避された為、無傷。

適当に撃つが、機械染みた動きはあまり見せない。

「……一夏達のために、適度に遊んであげよ……。」

そう言って、ライフルとサーベルで鬼ごっこを開始した。

「……一夏。」

箒が不安げに呟く。

「義兄さんは大丈夫だろうか……。」

その言葉に一夏は何も言えなくなった。

エンジェルダウン作戦は失敗している。

だが、箒が言っているのはその事ではない。

その後だ。

「大丈夫だ。　僕が何とかしてみるよ。」

シャルロットがを励ます。

だが根拠がないため、箒は余計に暗くなった。

ラウラも何か考えているのか、静かだった。

「十年間逃げてたんでしょ？　なら大丈夫じゃない。」

鈴がそう言うと、少しだけ空気が軽くなる。

だが、ラウラはそんな空気なんかお構いなしに言う。

「いや、父様が逃げれたとしても、父様は母様を心配するから逃げ

ようにも逃げれない。」

その言葉に、再度暗くなる。

「ちょっと、あんた……。」

「事実だ。　仮に母様も一緒だとしても、今度はＩＭＳを所持する私達を心配する。　いずれそこから足がつく……。」

鈴の言葉も聞かず、ラウラは淡々と話した。

「結局、父様は満足に逃げられない……。　ＩＳ学園にいた期間に足枷を作ってしまったからな……。」

そう悲しそうに言った。

「結局、父様の無罪を証明するしか方法が無い。」

その言葉に、一夏達は顔を上げた。

「あんな、推測だけでは証拠と言えない。　だが、現状を見れば可能性があるだけだ。」

「なら……。」

「ああ、証拠さえ出してしまえば、父様は自由だ。」

その言葉に皆のやる気がでた。

戦闘を終わらせて、証拠を見つけるために。

しかし、現実はいつも無残な方向に向かって行く。

≪全員戻れ、作戦は失敗だっ！！≫

千冬の声はどこか焦っており、一夏達を向かわせないような気がした。

その言葉に一夏と箒は何か思ったのか、速度を上げてフリーダムがいる場所へ向かう。

千冬の制止を振り切って。

「「っ！？」」

しかしそこで見た物は、あまりにも無残な光景だった。

周囲にいる敵機はシルバリオ・ゴスペルだけ。

そのゴスペルは、リリィが放ったドラグーンに翻弄されている。

大切な物を守るかのようなドラグーンの動きは、一夏を不安にさせた。

その中心にフリーダムはいた。

海水につかって、上を向き漂っている。

浅いからか、一向に沈む気配がない。

その映像を流してしまった。

≪っ！？≫

「きゃぁぁぁぁ！？」

≪ウ……ソ……。≫

≪何だ……これは……。≫

≪嘘……で、しょ？≫

≪あり得ませんわ……。≫

≪……リリィ？≫

全員のさまざまな感情が戦闘空域に流れる。

そこには過度の砲撃を防いだせいか、装甲の大半が焼け焦げ吹き飛び……。

切り合ったせいか装甲が楯に切られ、左腕も無くなっており……。

胴体に槍のような物を突き刺され漏電しながら大量に血を流し続け……。

頭部が半壊し全身装甲であるのにもかかわらず、外から血に濡れた顔を見る事ができる……。

≪リリィちゃんっ！！≫

そういう状態の、フリーダム……リリィがいた……。

１４８　落ちる天使（後書き）

どう考えた所で、リリィは死亡ですね……。

うん。

眠いから、戦闘省略して……。

次話から話が急展開します。

もう、ワロタって感じに……。

作者がイタイ子って言われるほど……。

うん……。

１４９　始まりの物語（前書き）

と言う事で、リリィ編スタートです。

まぁ、大半が読めば先の事も分かるし、つまらないと言うのが多いでしょうが……。

１４９　始まりの物語

誰も知らぬ時代。

世界は二つの種族に分かれていた。

その星の大半生きる人間と、特殊な者たち。

その者たちには詳しい種名はないため、人間から機械人と呼ばれていた。

普段は人と同じ身体を持つが、戦闘とかになればその姿を一転して機械にさせる。

そんな種族だ。

機械人達は小さな国で静かに暮らしていた。

ただ静かに。

「王っ！」

「ん？」

一人の若者が王と呼ばれた、銀長髪の女性に近寄った。

「どうした？」

王は若者を見ると、少し苦笑いしながら見た。

王は若い。

人間で例えるなら、二十代前後に見えるだろう。

しかし、実年齢はもっと上だ。

機械人は不老であった。

そのため、外見年齢は当てにならない。

すでに五百年を超える年月を、王は生きていた。

「東の町で人間が戦争を準備している模様です」

「ほぅ。」

王は戦争という言葉に全然興味を示さなかった。

いや、興味と言う感情を表に出さなかった。

「分かった……債務を任せるので、私がやっておくよ。」

そう言うと、王は先ほどと同じように歩いて行った。

機械的な町並みをよそに、人が暮らす街はそんなに発展はしていない。

そもそも電気と言う物がない時代だ。

「王と言う物も疲れるね……。」

そう言いつつも、王は疲れを見せなかった。

「あそこの周囲には、小さな集落があったな……疫病なんかが発生したら困る……。　多めに医薬品とかを持って行くか。」

そう言いながら、自室に行く。

この王、争うごとを嫌う性格の持ち主だった。

さらに殺すと言う事もあまりしない。

殺すより人助けの方がいいと言うほどの、根っからの平和主義者だった。

「さて、これで戦争の火種は消えた……か。」

そう思いながら、サーベルを腰に戻しあたりを見る。

大きな戦いにはなりはしなかったものの、周りに被害が出てしまい

集落も崩壊していた。

近くに寄ってみると、人間が泣いたり怒ったりしていた。

もちろん、機械人から逃げようとして準備する者もいる。

「大丈夫？」

近くにいる、小さな女の子を助ける。

だが、女の子の表情はみるみる恐怖に満ちて行く。

「すみませんすみません。」

近くで、その子の母親らしき人が王に向かって謝っていた。

王は慌ててそれを止めさせる。

「私からやった事ですから。」

そう言って笑顔を見せると、女性は唖然とする。

人と機械人の間で絶えまない差別。

人より機械人が優れていると言うおかげか、色々な偏見が飛びまわっていた。

王の噂は良い物ばかりだが、何分種族全体の噂だと圧倒的に悪い物の方が多い。

「あ、この集落の被害状況を教えてもらえますか？」

そう言って集落を王は回り始めた。

別の王直属の部隊は、集落の人のためテントを用意していた。

この戦闘で破壊された者が多い。

家も、多々焼けている。

そんな家を失った人たちのために、テントを準備していた。

「……そうですうか、分かりました。」

王は丁寧な対応で、集落を回る。

被害を聞いて回っていた。

一人で。

「王、テントの準備が終わりました。」

いつもの事なのか、なれた感じで報告する。

「分かった。」

そう言って王は歩き始めた。

己の悲痛さに苦しみながら。

「……ふむ、ここにあった家が焼けたのですか。」

「そうよっ！　あんたたちが放った攻撃のせいでねっ！！」

時には、きつく言われる。

批難され、怒鳴られる。

だが王は低調な対応を崩さなかった。

「申し訳ありません。」

そう言って頭を下げる。

相手は集落の人間。

対するは王。

だが、その行動は全く王には見えない物だった。

１４９　始まりの物語（後書き）

王ですか？

頭を下げる王がいるのですか……。

何だ、この王は……。

１５０　王と兎の出会い（前書き）

展開を急ぎ過ぎた気がする……。

だけど、これでいいとも思っている。

１５０　王と兎の出会い

罵倒されながらも、王は集落を回る。

回っているうちに夜になっており、王は自身のテントへ帰って行った。

「ご苦労様です。」

敬礼しながら、一人の若者がそう言ってくる。

王は少し微笑むと、口を開いた。

「私は何もしてないよ……シュヴァルツェア……。」

「はぁ……。」

王はシュヴァルツェアと呼ばれた者の肩を叩くと自室へと招いた。

二人は王が持ってきた紙に目を通す。

「……人命は大丈夫のようですね……。」

「まぁ、疫病が不安要素だったが、私が回ってる間に何と出来たし良しとするか……。」

「後は混乱ですかね……。」

紙には被害規模と負傷者が記録されていた。

「些細な見落としで死なれては、あとが困りますからね……。」

シュヴァルツェアはそう言うと少し笑った。

王も困り顔で苦笑していた。

「そもそも、なんで戦など？」

笑いながら言うが、内面かなり真面目に聞いていた。

王は苦笑を止め、目を閉じた。

そして次に開けたときは、悲しい瞳をしていた。

「どうやら、この集落にいた過激派が招いたらしい。」

「ああ、どおりで戦人の姿が少ないと思いましたよ……。」

王は立ち上がると、長方形のケースを手に取る。

「……シュヴァルツェア……。」

「……なんでしょうか？」

王の声がテントに響く。

「私は間違っていると思うか？」

その言葉は悲しく、シュヴァルツェアは何も言えなかった。

答えが見つからないのだ。

「民を考え、平和の理想し、誰もが静かに楽しく暮らせていけるように願った……。　だが、やはり綺麗事なのかな?」

シュヴァルツェアはその言葉に目を閉じた。

「……私は何が平和で、何をすれば平和が作られるかわかりません。ですが、王の気持ちは間違ってないと、私は思います。」

その言葉を聞くと、王は外に出た。

夜風が身にしみる。

そして少し歩き、小高い丘の上に立った。

集落を回っていた時に、見つけたのだ。

近くには焼け焦げた材木がある。

「……。」

王はそれに近寄ると、黒く焦げた何かを見つめる。

鶏だ。

この丘は卵の生産場でもあり、集落にとって朝の目覚ましである鶏の鳴き声を響かせるための場でもあるようだ。

「すまない……。　今だけ、この場を借りさせて欲しい……。」

そう言うと、王はテントから持ってきた長方形のケースを開ける。

その中に入っている物を手に取り、肩に乗せ顎で抑え込む。

それは、平らだが瓢箪みたいな形をしており、そこから棒がのび数本の糸が張っていた。

反対側の手には長い棒に、糸が付けられているモノを持っている。

「……この戦で、傷付いたモノたちに届いてくれ……。」

そして、糸と糸同士を擦り合わせた。

綺麗な音色が響き渡る。

それはバイオリンと呼ばれる楽器だった。

王が好む楽器の一つであり、戦時には良く持って行き優しい音色をよく響かせている。

今回も同じで、バイオリンの音で少しでも心を休めて欲しい。

そう願って王は引いていた。

目を閉じて、死んだ者たちへ……傷付いた者たちへと心をこめて奏でた。

「……何やってんの？」

その言葉に返事しようとしたが、王はバイオリンを弾いている。
そのため、一旦バイオリンを弾くのを止めた。
バイオリンを下ろし、振り返る。
「こんばんは～♪」
そこには紫髪の女性がいた。
王は唖然とした。
普通は人間から機械人へ、近寄ることがあり得ない。
さらに言葉をかけてくるなんて、それ以上だ。
「……。」
「……なにか言ってよ……。」
「へ、ああ。」
王は呆然としていたせいか、女性が言うまで反応できなかった。
「君は？」
王はありきたりな日常会話を切りだした。
王なら、それ以外の言葉も出せただろう。

だが、今の王は混乱していた。

初めて人間から言葉をかけてもらった事に。

「私？　私に名前はないよ。」

その言葉に王はさらに呆然とした。

流石に種族は違っても、名前を付けるのは当たり前のことである。

だが、女性は名前がないと言った。

「だけど皆、私の事を兎って呼ぶからそれでいいよ。」

それが王と兎の出会いだった。

１５０　王と兎の出会い（後書き）

王と話していたシュヴァルツェア。

まぁ、誰……と言うよりか、何か分かるでしょうね……。

兎も……。

一応、かなり不安なんですよね……シナリオ。

気を抜くと、現存する書籍のシナリオに近づいてしまうので、常に意識しないと書籍と同じになってしまう……。

お～、怖い怖い……。

すでに似てるんだけどね……ｏｒｚ

１５１　王と兎の会話（前書き）

……いつまで続くのかな……。

151　王と兎の会話

「で、貴方はなんでこんな所で楽器弾いてるの？」

その言葉に王は悩んだ。

「言えないの？」

「いや……。」

兎は首を傾げた。

王は苦笑いをすると、口を開く。

「せめて、傷付いた者の心が安らぐように……ってね。」

そう言うと、兎に背を見せる。

「私は争いなんかしたくはない。」

静かに兎は王の言葉を聞いた。

「だけど、平和を望めば望むほど、争いは起きてしまう。」

「……そう。」

王は目を瞑り、今までおきた争いを思い出す。

そのどれもが、機械人を恐れ差別した物達が起こした者だった。

「戦に勝てても、血は流れる。」

そう言うとバイオリンをケースに入れる。

「罪の無い人々を傷付けることもある。」

兎はそれを見て目をつぶった。

「一体どれほどの命を奪えば、平和を作れるだろうね……。」

その言葉に兎はため息を漏らした。

王は眉をひそめて振り返る。

兎は腰に手を当てて、まるで「ダメダメ」と言っているような雰囲気を醸し出していた。

「……何か、おかしなこと言った？」

王の言葉に兎は頷いた。

「貴方ってさ、自分が万能な神と勘違いしていない？」

「……は？」

王は意味が分からなかった。

「大体平和は命を奪う事で作るだけが手段でもないでしょ？」

「あ、え、いや……確かにそうだが……。」

「と言うかさっきから聞いていたら、自分は何でも出来ますって言ってるようにしか聞こえないんだけど……。」

王は唖然とした。

兎は丘を下る。

「貴方はそう言うのは、似合わない。　止めておいた方がいいよ。」

王はただ兎の後姿を見送る。

「偉くもなんない方がいい。　貴方は静かに生き続けていた方が似合ってる。」

後ろを向いたまま片手を上げて王に、手を振る。

王はその姿を、見えなくなるまで見続けた。

「なんだったんだろ……。」

首を傾げながら王も丘を下りた。

翌日、王は集落の被害を再度見るために歩いていた。

「王っ！」

シュヴァルツェアが呼ぶと、王は振り返る。

どうやら兎の事が頭から離れないのか、表情に硬さが感じられた。

「どうしたの？」

息を切らしながらシュヴァルツェアは口を開いた。

「そ、それが……。」

「王は何処って言ってるでしょ！！」

集落の方から大きな声が聞こえた。

王は目を見開きその方角を見る。

「王に会わせろと言う、集落の女性がいまして……。」

シュヴァルツェアの言葉に、王は苦笑いしかできなかった。

しかも声が近付いているような気がする。

「な、なんだ？」

シュヴァルツェアが顔を青くする。

「王っ！　どこだ～☆」

その声に王は気がついた。

そしてその声の主が現れる。

「お……て、はろ～♪　昨日ぶり～☆」

兎だった。

王は脱力した。

昨日の事が頭から離れなかったのに、さっきの間抜けな声を聞いてしまったのだ。

老人のごとく、ポロっと落ちてしまったかのように記憶の彼方に吹き飛んだ。

シュヴァルツェアが少し慌てる。

「で、どうかしたの？　さっきから大声出して。」

「にゃ、そうだった。」

そう言うと、兎は再度声を上げて走りだそうとした。

「あそうだ、機械人の王がこの戦に来てるらしいんだけど、知らな

い？」

クルリと振り返り、兎は王に聞いた。

王は苦笑する。

訳が分からないと言う顔をしながら兎は王を見返した。

「フフフ、自己紹介がまだだったね。　私が機械人の王だよ。」

その言葉に兎は呆然とした。

そして昨日のようにため息をついた。

「似合わないから、偉くならない方がいいって言ったのに……。」

「……そう言われてもな……。」

言われた時には王だったのだ。

無理がある言葉だった。

シュヴァルツェアは呆然としている。

「全く探す意味が無くなっちゃったじゃない……。」

１５１　王と兎の会話（後書き）

眠い……。

そろそろ、更新時間が崩れそうだよ……。

１５２　王の失敗（前書き）

知り合いのやけ食いに付き合わされて、＋０．４ｋｇ……ｏｒｚ

泣くよ？

そして私の黒歴史の始まり……っと。

152　王の失敗

「は～、それにしても機械人って、見た目人と変わらないんだね～♪」

「君は、私達を何だと思っていたんだ……。」

「う～ん、機械の身体を持つ生命体かな？」

そう言うと兎は笑った。

王はつられて笑う。

「それはそうと、私を探していたんじゃないの？」

そう言うと兎は困ったような顔をした。

そうして苦笑いに表情を変えると、口を開く。

「……。」

だが言葉は出なかった。

「どうした？」

「ううん。」

王の言葉に首を振る。

「またね。」

そう言うと兎は去って行った。

王とシュヴァルツェアは呆然としながら見送った。

夜。

王は久々の疲れもあってか、早々に寝た。

久々に起きた、反抗。

それと同時に救済活動もしたのだ。

疲れてしまうのは仕方がない。

機械人と呼ばれても、元は人なのだ。

というか、戦以外は人なのである。

なら疲れてしまうのは当然だ。

さらに問題が起きれば、疲労も増える。

「……なにをしている。」

「え？　もちろん、夜這い……。」

「帰れ。」

このような事にでも、疲労はたまる。

横になって寝ようとしている王に覆いかぶさるように、兎がいた。

着ている服は日が高かったうちに見たものであるが、肩やら足が外に見え過ぎていた。

つまり、露出が多いと言う事だ。

「……大体、何しに来た……。」

王がつかれた声で聞くと、兎は王の言葉に首を傾げた。

「遊びに来た……。」

「よし、帰れ。」

そう言うと兎をどかそうとするが、腕が動かない。

王は訝しげに腕を見る。

「動かないよ～♪」

兎が腕を掴んでいた。

機械人異常なのではと思ってしまうほどの力だった。

そう思っているうちに、兎が王に抱きついた。

「……はぁ……。」

ため息しかつく事が出来ない。

王の頭の中は「???」しか生産出来なかった。

「ねぇ、なんで私が王に会おうとしてたか聞きたがってたよね?」

突然兎はそう言う。

「私はね、貴方みたいな良い人は苦労して貧乏くじ引くだけってわかってるの。　だから王に頼んで貴方を遠ざけようとした……。」

その言葉に王は唖然とした。

予想外過ぎる言葉だったからだ。

「だけど、貴方がその王様……。」

声に悲痛さが混じっている。

王はそう言う兎の顔が見る事はできなかった。

兎の顔は王の胸元に押しつけられているからだ。

「なんでだろうね……。」

「……むしろお前の行動が、なんでだろうね～。」

その言葉に静かになる。

「一緒に寝てくれない？」

兎がそう言う。

とりあえず、王は分かった事があった。

兎は寂しがり屋の天災だと言う事に……。

普通だったら、王の警備をくぐり抜けて寝床まで入っただけで犯罪だ。

更に王を押し倒している。

婚約したと言うのなら理解出来る光景だが、生憎婚約もしていない。

更に種族が違う。

しかし兎と言う人間はそう言う事は関係ないと言う風に、王に接してきた。

いや、恋していた……。

その状況を理解した王は、頭が痛くなり「ご勝手に……」と言うと、意識を手放した。

兎はその言葉に喜び、王の腕の中で丸くなって眠った。

王は久しぶりに、熟睡できる気がした。

二人で静かに寝息を立て始めた。

……だが……。

そんな事は誰も許さなかった。

日が出てきた頃、王はまだ寝ていた。

普段だったらすでに起きている時間である。

「王います、かぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

そんな声に王は起こされた。

王は上半身だけ起こすと、声の主を探す。

「お、お、お、お、お、王……。」

どうやら混乱しているシュヴァルツェアのようだ。

どうやら、起きていると思って入ってきたらしい。

「つ、つ、つ、ついに女性に興味を持ちましたかっ！！　これは早速国に広報しなければ！！」

そう言うとシュヴァルツェアは急いでテントから出て行った。

「……なにがあったんだ？」

首を傾げながら起きあがろうとする。

「ん？」

だが、王は起きあがれなかった。

柔らかい感触が王を押さえていた。

首を傾げながら、押さえつけられている場所を見る。

「あ”……。」

腰に抱きつくように兎が寝ていた。

１５２　王の失敗（後書き）

作者は何処へ向かっているのだろう……。

油と砂糖は当分みたくありません。

糖分じゃないよ……。

１５３　王と兎と姫（前書き）

……作者的に端折りたい所もある……。

153　王と兎と姫

シュヴァルツェアが王と兎が一緒にに寝ているところを発見し、国の重鎮に報告したのが不味かった。

いくら王でも、一つの存在。

シュヴァルツェアが報告する前に止めれれば良かったものの、報告した後だったため止めるのが困難に。

小さな池が大きな大河を止められないと言う感じに、あれよあれよと国に広まっていった。

「すまない……。」

「別にいいよ～♪」

結局国に兎を連れてきてしまったというわけだ。

二人目の妻として。

二人目なのだ。

「フリーダム王！！」

そう呼ぶ声がしたため、その声の方向へ振り向く。

そこには仁王立ちし、白いドレスをまとった黒長髪の女性がいた。

「貴方は王としながら、こんな町娘に手をかけて……！！　私にさえ手を出さなかったと言うのにっ！！」

「落ち着け姫……。　そもそも誤解……。」

「誤解だと！？　ならなんで一緒にいる！？」

そう言うと王は困った顔をする。

話が通じない。

護衛にいたシュヴァルツェアを下げさせると、王と兎と姫だけがその場に残った。

「大体貴方は……。」

「は～い、ストップ～♪」

兎が姫の前に出てそう言う。

姫は怒りが浸透せずに、兎を睨む。

「落ち着いて、ね。」

そんな事を言うが、落ち着けるはずもなく。

「貴様は何者だ！」

とかみつく。

王は少しため息を吐くと、姫に「落ち着かないと、話も出来ない」と言って無理やり落ち着かせた。

「はじめまして、兎って呼んでくれればいいよ～♪」

その言葉に姫はしぶしぶドレスのすそをつまんで、軽く持ちあげる。

だが、似合ってないと兎が思ったのか少し苦笑する。

姫も似合ってないのがっ分かっているのか、ため息をつきながら言い訳をした。

「……はぁ。　白騎士だ。」

「ほぇ？」

「名前だ……白騎士が……。」

兎は唖然とした。

今まで機械人の名前を聞いた事がないため、名前とも思えない名に唖然とするしかない。

「言っておくが、本名じゃないぞ……。」

「あ、偽名なんだ……。」

その言葉に王は説明をした。

「私達は名を知られると言う事は、死にもつながるからね……。」

そう言って兎を見た。

兎は訳が分からないと言う風に王を見返す。

「……え～っと機械人ってね、戦う時に相手に名を呼ばれると動きを封じられるんだよ。」

まだ分からないのか、兎は首を傾げる。

「名とは呪詛だ。　純粋な機械人にとっては、弱点と言ってもいい。」

姫が硫黄の説明に補足する。

兎は「え～っと、え～っと」と言いながら、必死に理解しようとする。

王はその光景に苦笑すると、指を立てて例を上げた。

「例えば、私の名を知る物が敵としよう。　その者に止めを指そうとする瞬間、私の名を言うと、私は動く事ができなくなる。」

「……何それ？」

兎は「理由は分かったけど、訳分からない」と言った感じの表情をする。

つまり困り顔だ。

「純粋な機械人は名を呼ばれると、一時的に身体の回線が外され運動することができなくなる。　いわゆる安全装置のようなものなんだよ。　いわば弱点て言う物だね。　他にも長時間の機械化は死につながったり……ね。」

その言葉に兎は納得したように頷いた。

「ん？」

そして何か引っかかったのか、声を上げた。

「つまり名前は知られてはいけないと言うのは分かったけど、シュヴァルツェアさんだっけ……。　あの人普通に名乗ったけど……良いの？」

その言葉に王は微笑んだ。

「シュヴァルツェアは純粋な機械人ではないよ。」

その言葉に再度頭を悩ませた。

「まぁ、純粋な機械人とそうでない機械人を見分けることができるのは、結構難しい事なのだがな……。」

姫も王に続いて口を開いた。

どうやら、姫は最初こそ怒っていたが、面倒見は良いらしい。

「今や、機械人の大半は混血だ。」

「混血？　オイルとかじゃないの？」

兎は分かって言ったのか笑っている。

「お前は一体私達を……。」

「私達にだって血は流れているさ……。」

姫の言葉は、王の言葉に遮られた。

「ただ、混血……。　つまり、人間との間に生まれた機械人がいるだけさ……。」

そう言うと、兎は首を傾げた。

そして言っている意味を理解したのか、目を大きく開く。

「なに人間も、機械人も愛するという気持ちは同じだよ……。」

そう言うと、王は背を向けて歩いて行ってしまう。

「今では、純粋な機械人の方が珍しい……。」

通路の角を曲がり、王は視界から消えて行った。

「……機械人を生むの痛いんだろ～な～。」

「お前は何を考えている……。」

兎の抜けた言葉に、姫は頭を押さえた。

兎はそんな姫を見て苦笑した。

姫はそんな兎を見て理解した。

どうやらお互い気は合うようだと。

「私達は生まれてくる時は、人と変わらない。人と同じ痛みを感じるだけだ。」

先ほどとは違った声で、姫は兎に説明した。

「機械人にだって、人間と同じ事はできる。食事をする事だって、用をたすことだって、子を作ることだって……な。」

そう言うと、姫は兎の手を取り歩き出した。

「立ち話もアレだし、私の部屋に行くぞ。」

１５３　王と兎と姫（後書き）

ども、焼け食い付き合わされて気持ちが悪い作者ですｗ

特に言う事はありませんが、だるいです……。

１５４　王と言う存在（前書き）

これで、リリィ編を終了。

もう、一種の黒歴史にしたい話だね……。

154　王と言う存在

そしていつしか、王は妻を作った。

国は姫を選ぶとばかり思っていたようだが、王は二人の妻を持つ気がなく他の者たちと同じように一人の女性だけを愛することを誓った。

兎。

流石に兎と言うのは王の妻にはおかしなことのため、仮の名を作った。

二人は楽しく過ごしていた。

そして兎は王の子を身ごもる。

その事に国は大騒ぎになった。

王はそんな中、人との協定を結ぶために外の国に出て行っていた。

しかし、そんな時に限って事件は起きる。

兎が暗殺されたのだ。

発見者は姫だった。

姫はシュヴァルツェアなど王に近しい兵を呼ぶと、現場の検証を行い始めた。

「くっ！　王にはこの事を言うなっ！！」

姫はそう言うと、兎の死体に近づいた。

「何を言ってるのですかっ！！」

シュヴァルツェアはもちろん反対した。

すぐさまに王に報告するべきだと。

だが姫は自身の感情を押し殺し、口を開いた。

「馬鹿ものっ！！　この事を王が知ったらどうなるっ！！」

その言葉にその場にいる者全員が恐怖した。

「この事を知られれば、あの人は冷静ではいられなくなる！！」

そう言うと兎の近くに膝まづいた。

誰もが姫を後ろ姿しか見る事が出来ない。

だが、姫からは微かに嗚咽が漏れていた。

「こいつを殺せば、王が動揺し隙ができると考えた者がいるかもしれない……。」

そう言うと、姫は血に濡れる事なぞ構いもせずに兎の頬を撫でた。

微かに機械人と同じ感じがした。

「どうしてすぐに教えなかったっ！！」

王はかつて見た事の無い表情で怒り狂った。

その状態で姫の胸元を掴み、壁に叩きつける。

「……いや……。」

そう言うと、虚ろな目のまま床に座り込む。

「確かにあの場合、知らせてくれなかった方が良かったのかもしれない……。」

そう言う王は顔を下に向けて涙を流した。

その涙は止まる事はなく、それを見ていた姫は胸が痛んだ。

「王……犯人の捜索は行われている。　しばらくすれば犯……。」

「……。」

おぞましい声が王から漏れた。

「……。」

王はフラフラと立ち上がる。

「……。」

王の言葉に姫は戦慄した。

王はその場から離れた。

その後ろ姿は、誰が見ても「痛々しい」としか言いようがなかった。

そして更に事件は怒った。

兎の殺害から数年後。

国は王の力に恐れ始めた。

元より持つ強大な力。

妻が殺されてもなお王であるという姿に、皆恐怖した。

そして、王の死刑が決まったのだった。

姫はその死刑に異議を唱えたが、王以外の国家議員達は処刑を決行した。

しかし、イレギュラーと言う物はいつも大事な部分で起きるようだ。

王がドラグーンを展開させ、国を全を焼いた。

その間、王の表情はいつもの表情だった。

町は焼かれ、命は散らされ、国と言う物は一夜にして滅んだ。

王は青いドラグーンを翼に戻し、去って行った。

その後、王の姿を見た者はいない。

姫は生き残り、泣いた。

全てに……。

そしていつしか、機械人と呼ばれる種族は消え去った。

「リリィ……束……。」

いつしか、王は歴史から消えた。

１５４　王と言う存在（後書き）

次回から本編に戻ります。

≪以下見苦しい言い訳≫

前話と今回の話含めてネタ回ですｗｗｗ

実は次話で今までの数話に、読者はキレルｗｗｗ

もちろん、ネタは棒作品のシナリオを完全に使っています。

いや、完全ではないかな？

リリィはあの魔神のような精神は持っていませんし……。

そこまで我慢強くありません。

数年持っただけでした……。

結果、自ら国を焼くと……ええ。

自分の手で確実に滅ぼしましたよ……。

結果、魔神とは違い確実に姿を消しました。

民？

「そんなこと知らない」と言う感じです……。

あんな王にリリィがなってしまったら、ただの最強じゃん……。

というか、本編を覚えていないので、王が悲しくも最強と言う事しか覚えていない……。

今度書籍名検索して、買ってこよう……。

知らない人は、それでいいよ。

うん……。

まぁ、これ夢オチなんだけどね……ｗ

１５５　幻聴が語る（前書き）

まぁ、今回はかなりはっちゃけています。

１５５　幻聴が語る

戦闘音を背後にリリィは目を覚ます。

先ほど見ていた物は、確実に自身の何かだと感じ取っていた。

（あんな過去って……私は赤薔薇の生まれ変わりか……？）

非道傷を負っているのに、そんな風に漫画ネタを言えるだけマシと言う物だろ。

どうせ、束が買った漫画の読み過ぎだと笑い飛ばした。

（どうも、私の不幸があのマンガと共鳴したのかな……。）

そう思いながら、動こうとする。

リリィが思っているのは、悲劇の主人公と言うような気分。

誰もが悲しむ悲劇の主役。

だが、リリィとて気が付いている。

そんなものは、物語だからこそう美しい。

人には似合わないと……。

だが、心のどこかで事実だとも言っていた。

（どうせだったら、三千万年前の巨人の方がシンプルでよかったかな……。）

海水が、傷に沁み込んで激痛を起こしているが気にしなかった。

フリーダムは生きている機器を起動させて、リリィに情報を送る。

リリィはそれを確認すると呆然とした。

（……て、一夏落ちたのか……。）

数十時間前に一夏がシルバリオ・ゴズペルに撃墜されたという情報が送られてきた。

理由は密漁船をかばい、シルバリオ・ゴスペルの攻撃から箒を守ったためであるらしい。

その後箒も落ちたそうだ。

セシリアと鈴が一夏達を持って離脱。

その間、ストライクとノワールが交戦し撤退したようだ。

リリィは大量出血をしながら、ここに週十時間もいたようだ。

（良く生きてるね……私……。　赤薔薇って名乗っても良いくらいかな……。）

苦笑いをしながら、カメラアイで身体を見た。

腹部に槍のようなビーム兵器が刺さっている。

それに目を映すと、戦闘が見えた。

白騎士に赤椿。

ストライクにノワール。

ブルー・ティアーズに甲龍という編成だった。

敵機はシルバリオ・ゴスペルのみ。

あいつらはいない……。

そう思っていると、会場を高速で移動する機体があった。

反応は白式の物。

しかし、熱量がおかしい事に気がついた。

『はろはろ～、聞える？』

愉快な幻聴が聞こえた。

リリィは激痛に耐えられていたため、しっかりと聞く事ができた。

だが、聞き流す。

『もしも～し、無視しないで～。』

素敵にむかつくほどの束口調。

しかし、束ではない何か。

感覚的には、あの幻聴と似た感じがする。

『そうだよ～。』

……とうとう死亡ってことか……。

リリィは血を大量に流しながらシュールな状況を生み出した。

『とりあえず、現実逃避は美しくないよ～。』

……うっさい。

箒が死にそうになって瞬間に、高速で飛来した一夏が荷電粒子砲を放った。

シルバリオ・ゴスペルは回避して、距離を取る。

『で、あのマンガ面白いよね～。　思わず面白おかしく夢に流したけど面白かった？　監修製作私で。』

……なるほど、アレはお前のせいか。

どうやら、本気で夢のようだ。

『半分は正解、半分は外れ。』

リリィはめんどくさそうに考え始めた。

『あんな物語があってたまるかっ！！』

幻聴がキレた。

すでにリリィは「死のう」と考えていた。

幻聴と会話しているだけでも、シュールなのだ。

死にたくもなる。

『まぁまぁ、結果的には似たような事だったし村から国にグレードアップしただけじゃない。』

……死ね。

そんな事を考えながら戦闘を眺める。

一夏がシルバリオ・ゴスペルに零落白夜を起動させた雪片で切りつける。

『まぁ、貴方は人ではない事は確かなんだけど……。』

……で？

『貴方と同じ存在が世界を壊しくくるわよ。』

……は？

派手に海面が柱を立てた。

『なに、機械人とか来て欲しいの？』

……。

『安心しなさい。　来るのは不幸だから。』

１５５　幻聴が語る（後書き）

……え？

数話使ったあのシナリオはなんだったの？？？

夢ｗ

と言う事で、幻聴の責任ｗ

夢オチでしたｗ

まぁ、ちゃんと別にあるから気にしなさんなってｗ

１５６　貴方は私で私は貴方（前書き）

徐々に幻聴が、良いヒロインになってゆく……。

というか、転生系に出てくる神か天使に思えてきた……。

１５６　貴方は私で私は貴方

『私が語っても良いんだけどね～。』

……なにを？

どうやら戦闘が終わったのか、辺りが静かになる。

『貴方の前世。』

……興味無いね……。

『また、だまされると思った？　だけど、今から来るのは貴方の前世の同類よ？』

……は？

するとフリーダムの警報がリリィに危険を知らせる。

レーダーが展開され、熱門を確認する。

突然と現れる、おびただしい数の点。

『来たわよ、災厄をもたらす不幸が……。』

その言葉にリリィはカメラを望遠モードに切り替えた。

そこには、ＩＭＳが大量に浮いている。

『貴方の前世ね～。　機械人と似た様な身体を持つ有象無象の災厄だって言ったら信じる？』

……信じたくない。

『でもざんね～ん。　それが事実だよ。』

そう言うと幻聴は笑う。

『今のあの子たちじゃ、死ぬわね。　お姫様は生き残るだろうけど。』

姫と言う単語にリリィは過剰に反応した。

……そう言えば姫って何だ？

その言葉に、幻聴の笑いが止まった。

『貴方達災厄があるように、その逆幸運もあるのよ。』

その言葉にリリィはただ静かに聞いていた。

『幸運のお姫さま。　貴方に恋したお姫様よ。』

そう言うと白騎士がこちらに向かってくる。

だが、ドラグーンがリリィの制御下を離れているため白騎士を攻撃し始める。

『で、貴方は災厄の王。　そして一人の兎の生まれ変わりに恋する

王さま。』

……さして、あの夢と似ているってわけね……。

『ま～、あそこまでドロドロしてはないけど……。』

そう言うと、ストライクも近づこうとしているのが分かる。

しかしノワールが振り返ると、空が黒く染まっていた。

黒いＩＭＳの大群だった。

いや、こういうべきだろう。

災厄の大群、と。

『理解が早くて助かるよ～。』

……というか、さっきから私の思考読んでない？

『読んでるわよ。』

幻聴がサラリと言った。

『だって、私がフリーダムで貴方の前世の半身なんだもん。』

その言葉にリリィは唖然とした。

『私は貴方、貴方は私。　そう言う事。』

理解ができなかった。

『それは良いけど、距離８．０００だけどいいの？』

その言葉にリリィは笑った。

……今の私に何ができるの？

『え、戦闘。』

またもサラリと凄い事を言った。

この中破、もしくは大破状態で戦闘ができると言ったのだ。

『何を考えてるのかと思えば、そんな事？　このまま戦闘するなんて自殺行為でしょ……。』

そう幻聴は怒った。

すでにリリィは幻聴の存在を受け入れていた。

『ま、そのお腹に刺さってるビームジャベリンさえ抜けたら、瞬間的に直してあげるわよ。』

……代償は？

『なしに決まってるでしょ？　貴方は私なのよ？　まぁ、人間やめちゃうけど……。』

……とっくに止めてる気がするけど……。

『それもそうね……。　ま、切られた腕が治っていたら、さらに化物扱いされのは確実ね。』

徐々に黒い影が近付いてきている。

白騎士は一夏達に撤退を呼び掛けているが、なぜかフリーダムに近づこうとやっきになっていた。

しかも「義兄さんの遺体だけでもっ！！」と聞える。

……箒……勝手に殺すな。

皆の表情は確実に私の遺体を持ちかえり、弔おうとしている様な感じだ。

『……動いて脅かしちゃえば？』

幻聴がそう言うと、白騎士に無数のビームが降り注ぐ。

瞬間的に回避し、全員ビームがきた方向を向く。

その姿を見た瞬間、リリィは殺意を覚えた。

灰色の悪魔。

プロヴィデンスとそれに似た機体がいたのだから……。

白騎士は私とプロヴィデンスを交互に見ている。

全員驚愕している。

……貴様らに千冬達をやらせるか……。

１５６　貴方は私で私は貴方（後書き）

と言う事で、幻聴話でしたｗｗｗ

はい、６話使った前世も否定され、この話で記されるって……。

ほんとあの６話は何だったんだろう……。

と言う事で、リリィ＝プロヴィデンスと言う答えは消え去りました。

気がつけば、シルバリオ・ゴスペル……出番がもの凄く少なかったな……。

５時間連続更新は疲れる……。

真夜中にやる物じゃないね……。

１５７　怒れるシャルロット（前書き）

シャルロットのキャラ崩壊始まるよ～ｗｗｗ

157　怒れるシャルロット

シルバリオ・ゴスペルを落としリリィを回収しようとすると、ドラグーンが攻撃をしてくる。

完全に自立型になっており、リリィの意思がなくても攻撃をしてくる。

敵であっても、味方であっても。

「箒、さがれっ！！」

セカンド・シフトした白式に乗った一夏が箒を止める。

ドラグーンはまるで、エネルギー切れという概念がない様にビームを放つ。

一人に対して一基と言う状態で、完全に動きを抑えている。

七人相手に七基が動き、一基がエネルギーの切れたドラグーンと交代する。

運がいいのか、フリーダムの翼は切られた左腕の場所に、マウントができるように空間が作られていた。

ドラグーンは交代しながら、そこに接続して逐一エネルギーを補給していた。

更にドラグーンという自立兵器は、完全に制御化を離れているのに

もかかわらず、一夏達の苦手とするコースで迎撃をし始める。

そのため、誰ひとりフリーダムに近づけないでいた。

しかし箒だけは、何度も何度も近付こうとした。

「下がれるかっ！！　せめて……義兄さんの遺体だけでもっ！！」

そう言う箒はビームを回避するが、鈴を迎撃していたドラグーンが移動をしながら箒に向かってビームを放ち、箒は後退せざる負えない。

皆の思いは同じだろう。

フリーダムを纏い、血まみれになりながら海に血を流し続けるリリィの救助。

しかし、発見時から数十時間は過ぎている。

そのため、救助から遺体搬送に代わっている。

「っ！？」

そんな時白騎士が大きく動いた。

何重もの光条が白騎士を襲ったのだ。

全員そちらに目を奪われる。

「Ｂｕｌｌｓｈｉｔ！！（ふざけるなっ）」

ラウラが叫ぶ。

その通りだった。

リリィがプロヴィデンスの搭乗者としたからこそ、エンジェルダウン作戦は始まった。

だからこそ、一夏達はリリィを先行させた。

そして結果に、リリィ死亡という物を作ってしまった。

「なんで……。」

シャルロットの悲鳴染みた声が響き渡る。

「なんで、お義父さんをころしたぁぁぁぁぁ！！」

その叫びとともに、ストライカーパックがランチャーに切り変わり、そこに浮遊している物体に向けて撃った。

しかし上昇することで、それはアグニを回避する。

プロヴィデンス。

今まさに、リリィを死にやった悪魔が降り立った。

シャルロット以外、フリーダムとプロヴィデンスと見比べる。

リリィはいる。

だがプロヴィデンスもいる。

つまり、完全にリリィが登場者ではないと示していた。

ストライクはアグニを回避された事で、ストライクはランチャーストライカーをパージしてエールに戻す。

「貴方がぁぁぁぁ！！」

「待てっ！」

千冬がシャルロットを止めようとするが、シャルロットはプロヴィデンスを見ると叫びながら突っ込んだ。

プロヴィデンスの横に、似たような機体があるが気にしない。

後継機かプロトタイプかは知らない。

だがその二機はストライクの接近に、ドラグーンを展開させた。

プロヴィデンスの十一基にに加え、十基の誘導兵器がストライクを狙う。

更に本体もストライクを狙う。

放たれる何十、何百の火線。

「シャルっ！！」

しかしストライクは、接近しながら驚異的なスラスターの使用方法で大半を避ける。

避けきれなかったのは、シールドで防いだりする。

今のシャルロットは、完全に復讐と殺意だけしかもっていなかった。

飛んでくるビームを紙一重で避ける。

「お義父さんの敵ィィィぃ！！」

皆、今のシャルロットに恐怖した。

ドラグーンを完全に避け切り、プロヴィデンスを間合いに入れる。

「はぁぁぁぁ！！」

力いっぱいビームサーベルを引き抜きながら、プロヴィデンスに向かって振り下ろす。

しかし、サーベルはフリーダムの腹部に刺さったビームジャベリンによって防がれる。

プロヴィデンスの両機が、プロヴィデンスを守る。

その光景に、シャルロットは更に叫んだ。

死ね……と。

１５７　怒れるシャルロット（後書き）

シャルロットがＳＥＥＤ発動したようです（笑）

べつにＳＥＥＤじゃないけど……。

そんな感じで、キレていますｗ

それと、そろそろ更新が途切れます。

定時更新されない時もありますので、その時はご了承を。

158　猛攻と影（前書き）

眠い……。

よし、gd gdな文になってきた……。

寝よう……。

１５８　猛攻と影

ストライクはデーターを更新したため、敵機が何か分かった。

だが、シャルロットは気にしない。

目も向けない。

情報は≪ＺＧＭＦ－Ｘ６６６Ｓ≫と書かれていた。

「はぁぁぁ！！」

後方から来るドラグーンを完全に避け、Ｘ６６６Ｓに斬りかかる。

プロヴィデンスはストライクを狙うが、やすやすと回避される。

『くっ！　あの機体性能は……。』

プロヴィデンスが毒つくと、その背部から大剣が振り下ろされる。

間一髪で大剣を避けるが、ライフルが切り落とされる。

「よぉ？」

そこには、大剣を振り下ろし刃をプロヴィデンスに向ける白騎士の姿があった。

普段の千冬からは感じる事の無い、殺気。

心なしか口調も荒々しい。

「……生徒に待てと言った手前、アレだが……さっさと死んでくれないか？」

その言葉を皮切りに、白騎士もプロヴィデンスと戦闘になった。

一夏達はその光景を呆然と見ていた。

千冬が一夏の前で、完全にキレた。

更にその千冬と同等の戦闘を行うシャルロット。

その光景は一夏をはじめとする、専用機持ちは唖然とするものだった。

ストライクが、シールドも装備する左手にライフルを持って、確実にドラグーンをとす。

背部から来るドラグーンも、バレルロールしながら身体を半回転ねじってライフルを構える。

更にストライクを突き刺そうと来るドラグーンを、右手に持っていたサーベルで斬り伏せる。

完全にストライクが圧倒していた。

対する白騎士はドラグーンは破壊できない物の、ビームを回避しながらプロヴィデンス本体に傷を負わせていた。

今までの苦戦はなんだったのだろうと思えるほどの戦闘。

それと殺意。

完全に千冬とシャルロットは、敵を殺す事だけを目的としていた。

「Ｉｃｈ　ｋｏｍｍｅ，ｗａｓ　ｅｓ　ｉｓｔ，ａｌｓ　ｅｓ！（それよりも、何か来るぞっ）」

ラウラの言葉に、千冬とシャルロット以外がノワールを見る。

そしてその視線の先にあった、黒い物体を見てしまった。

「な、んだ……アレは。」

「分かりませんわ……。」

「ハイパーセンサー使いなさいよ！　私今動きにくいし、使うと落ちるわよっ！！」

箒とセシリアと鈴が口を開く。

空を覆う黒い物体。

それを聞いた一夏は、確認するため映像を拡大した。

「……ＩＭＳ……だって……。」

それを確認した一夏が、呆然とした。

白式・雪羅が拡大映像を送った。

丸い頭部やトサカが生えた頭部。

量産機だと思われる機体が、大量に映っていた。

それを見たセシリアは恐怖した。

「Vielleicht rief eine Reihenfolge, da? das Abfangen nicht Abzug kommen wird……（おそらく、撤退ではなく迎撃という命令が来るだろうな……）」

ラウラは軍人だからか、冷静に状況を判断する。

箒は束に通信を入れようとするが、なぜかつながらない。

リリィも千冬も、束も。

誰もこの状況に指示をしてくれなかった。

そんな時、空が爆発した。

全員その方向を見ると、ストライクがＸ６６６Ｓの腕を切り裂いていた。

背部ユニットごと、爆発する。

それに追撃するかのように、ライフルを撃ち続けＸ６６６Ｓはハチの巣のようになった。

その光景を唖然として、見ることしかできない。

徐々に落ちて行くＸ６６６Ｓ。

やがて海面で爆発を起こした。

当のシャルロットは、それを見ると狂ったように笑い始めた。

１５８　猛攻と影（後書き）

という事で、お休みなさい……。

これからいつ更新するか分からなくなります。

でも、０時、６時、１２時、１８時のどこかに更新する事は確実……。

１５９　シルバリオ・ゴスペル（前書き）

シルバリオ・ゴスペルに出番はあった……。

唐突に思いついただけですｗｗｗ

活躍の場を作ろうと……。

１５９　シルバリオ・ゴスペル

白騎士はプロヴィデンスと戦闘を続行している。

しかし白騎士の攻撃は殺意が前に出ているためか、簡単に攻撃は回避される。

そんな光景をよそに、あるＩＳの中で異変は起こっていた。

≪残量エネルギー　４７％≫

≪ウイルス削除　成功。≫

≪認識コード＊＊＊＊＊＊＊　確認。≫

≪了承。≫

≪再起動。≫

≪起動と同時に、上位命令文受信。≫

≪命令文　二つ。≫

≪白騎士の援護。≫

≪織斑一夏をはじめとする同法を所持する者たちの護衛。≫

≪了承。≫

≪コア・ネットワークの再接続　＊＊＊＊＊＊＊≫

≪認証中。≫

≪最終接続時、不明アクセス命令時。≫

≪ウイルスの存在、進行　確認されず。≫

≪コア・ネットワークへのウイルス進行度　なし。≫

≪コア・ネットワークへの接続　認証。≫

≪上位命令文　篠ノ之束。≫

≪命令の実行を許可。≫

≪主への安否。≫

≪８９％の確率で生命維持。≫

≪身体異常。≫

≪８６％のが無事。≫

≪１４％は。≫

≪疲労。≫

≪了解。≫

≪主へ呼びかける事を提案。≫

≪了承。≫

≪最終手段として、主の身体を使用してしまう可能性を指示。≫

≪その指示は却下。≫

≪その前に主の覚醒。≫

≪完了。≫

≪残り５９．２２で覚醒。≫

≪主の戦闘意欲　あり。≫

≪守りたいと言う意思を確認。≫

≪私達は選ぶ。≫

≪主と共に。≫

≪選ぶ。≫

≪再起動　開始。≫

鈴がまとう甲龍の手の中で、シルバリオ・ゴスペルの操縦者は目を覚ました。

「あ、気がついた？」

鈴が軽く話しかけると、女性は目を見開く。

今一状況がつかめていないようだ。

周りを見る。

「……なに、これ？」

シルバリオ・ゴスペルの搭乗者ナターシャ・ファイルスはキョトンと戦闘を見ていた。

そして何があったのか、必死に思い出すかのように首を傾げた。

「っ！」

そして思い出したのか、海を見る。

その目に装甲がいたるところ破壊され、左腕が無くなりそこから血を流し続けるフリーダムを発見した。

ナターシャの顔が悲痛に染まる。

それと同時に、腹部に刺さっているジャベリンを見て眉をひそめた。

シルバリオ・ゴスペルにあんな武器は搭載されていなかったからだ。

「あの子はっ！？」

その言葉に全員首を傾げるが、ナターシャ手を動かした瞬間それは

見つけた。

ナターシャは優しそうな笑みでそれに触れると、それは発光した。

「っ！？」

鈴が慌てる。

≪再起動。≫

≪システム正常。≫

光りが消えた瞬間、そこにはナターシャはおらず。

シルバリオ・ゴスペルが静止していた。

全員驚愕する。

やっとのことで止めた機体が、動いているのだから。

「Ｗｅｎｎ ｅｓ ｄｕｍｍ ｉｓｔ，ｒｅｂｏｏｔｅｎ Ｓｉｅ！？（馬鹿な、再起動だと）」

「あり得ませんわっ！」

ラウラとセシリアが声を上げる。

しかしその声を無視したかのように、シルバリオ・ゴスペルはモニターに情報を出す。

すでにセカンド・シフトの状態なので、翼を警戒する。

エネルギー翼だろう。

「……ありがとう。」

ナターシャがそう言うと、シルバリオ・ゴスペルはプロヴィデンスに向かって飛翔した。

翼が無数の弾丸を放つ。

白騎士はシルバリオ・ゴスペルに気がつき、プロヴィデンスから離れる。

気が付くのが遅れたプロヴィデンスは、その弾丸にあたる。

ドラグーン並みに放たれる弾丸は、いくつかのドラグーンにも当たり破壊して行った。

更に頭上にエネルギーを集中させる。

≪白騎士と専用機持ちの護衛。≫

シルバリオ・ゴスペルはそうモニターに映していた。

「任務了解。」

そう言うと、収束したエネルギーをプロヴィデンスに向けて放った。

１５９　シルバリオ・ゴスペル（後書き）

……馬鹿な再起動だと！？

フィオナ・イェルネフェルトを思い出してくれればｏｋですｗ

という事は、シルバリオ・ゴスペルはホワイトグリントという事に……？？

まぁ、かなりネタですねｗ

福音戦終了後に、「天災達のトークショー」的なのを日常に含めますので。

クソくだらない質問を募集します。

例えば……おっさんくさく「今日のパンツは……」とか……。

そんなクソくだらない質問を募集します。

１６０　千冬の殺意と怒り（前書き）

……まぁ、ここ最近グダグダ感が大きいです。

ええ。

１６０　千冬の殺意と怒り

高速で飛来するシルバリオ・ゴスペル。

ＩＳでは発揮できないスピードを出しながら、プロヴィデンスを追い詰めていく。

「ブリュンヒルデっ！！」

ナターシャの声に、千冬は我に返る。

プロヴィデンスとシルバリオ・ゴスペルが、あり得ない早さで交差する。

ビームサーベルと翼が交錯すると、翼は切られるが、エネルギーで出来ているためかすぐに治る。

高機動でプロヴィデンスを翻弄しながら、翼から弾を放つ。

『くっ！』

弾が避けられないのか、シールドで防ごうとする。

「はぁぁぁぁ！！」

だが、その後方から白騎士が雪片を持って斬りかかる。

気合一閃という感じで、雪片を振るうと回避が遅れたプロヴィデンスは背部ユニットを切り裂かれた。

『ちぃっ！！』

プロヴィデンスが毒つくが、さらにシルバリオ・ゴスペルが収束砲で追い打ちをかける。

砲撃は、右足を飲み込む。

人間だったら、致命傷だ。

しかし、プロヴィデンスはそのまま上昇して余ったドラグーンで弾膜を作る。

「甘いっ！！」

だが数の減らされたドラグーンで張れる弾膜は少なく、やすやすと白騎士に回避される。

白騎士の回避コースを理解しているのか、シルバリオ・ゴスペルも弾膜を張る。

それらは確実にドラグーンを破壊して行った。

『っ！』

白騎士がプロヴィデンスを間合いに入る。

瞬間的に雪片を振るうと、複合兵装楯を持っていた左腕を肘のあたりで切り裂いてゆく。

フリーダムのように、斬り口から血が出ない。
代わりに黒い墨のような物が零れおちる。
プロヴィデンスはすぐさま交代する。
「消え去れっ！！」
だがその言葉とともに、瞬時加速でプロヴィデンスの間合いに再度詰め寄る。
そして雪片の刃をプロヴィデンスの腹部に突き刺した。
激しく火花が散る。
『ぁ……。』
その言葉とともに、斬られた場所が崩れ落ちてゆく。
プロヴィデンスはエネルギーが切れたのか、腕をだらりと下ろす。
すでに武装もなく、抵抗しても無駄だと理解したのだろう。
すでに機体各部は火花を散らしている。
「リリィを陥れ、死なせた痛みだ……。」
そう言うと突き刺した雪片を引き抜き、横斬りで上半身と下半身を別れさせる。

つまり、機体を完全に破壊した。

明らかにオーバーキルだ。

しかし、白騎士はまだ足りないのか、完全に壊れる前に楯に切った。

頭部から、腰部まで。

完全にプロヴィデンスを殺した。

「……。」

プロヴィデンスが消えるまで、白騎士は睨み続けていた。

その横に、ゆっくりとシルバリオ・ゴスペルが静止する。

「……気分はどう？」

ナターシャはそう言うが、千冬は黙ったままだ。

バイザーで顔は見えないが、おそらく怒りと悲しみが入り混じった顔をしているのだろう。

「辛いわね……。」

そういうと、無言で振り返る。

「……ブリュンヒルデ……アレは何の冗談かしら？」

その言葉に、ゆっくりと白騎士が振り返る。

一夏達もその方向を見て呆然としている。

≪熱門　１００．０００機≫

そのシルバリオ・ゴスペルと白騎士が同時にその情報を提示した。

「……どうする？」

「……。」

ナターシャの言葉に千冬は何も言わない。

その間にも、徐々に迫ってくる。

白騎士のスラスターが開く。

「はぇ！？」

ナターシャが間抜けな声を出した瞬間、白騎士は黒い影に突っ込んだ。

それを見て慌てて追いかけようとするが、エネルギー残量が残り少ない。

諦めて、一夏達の元に近づく。

「……貴方達はどうする？」

その言葉に一夏達は考えた。

皆エネルギーが少ないのだ。

一夏はセカンド・シフトしたが、ここまで来るのにかなりのエネルギーを使った。

それでも、紅椿の単一仕様能力の絢爛舞踏（けんらんぶとう）で回復はしているが、大軍を相手にする自身はない。

箒、セシリア、鈴も同様で、大群の前に死という感情が前に出た。

ラウラは千冬の援護に向かいたいのか、白騎士を眺めている。

シャルロットは相変わらず、どこか壊れたままだ。

「……ん、……あれ？　天使がいない……。」

その言葉に全員フリーダムがいた場所を見る。

しかし、そこには何もなかった。

１６０　千冬の殺意と怒り（後書き）

この作品、レギュラー枠逆になってない？

サブがレギュラーっぽいんですけど……。

なぜかあっさりと、プロヴィデンス撃破……。

今までの、苦労はなんだったのか……。

１６１　補給船（前書き）

久々の束姉の登場だ～♪

１６１　補給船

千冬が一人でとっこうしたのを止めに移行にも、誰も動けない。

ほぼエネルギーがないからだ。

一夏は行こうとしていたが、ラウラが止めている。

セシリアは箒を説得し、止めている。

絢爛舞踏が連続使用でき、ブルー・ティアーズや甲龍にエネルギーを譲渡出来れば何か変わったかもしれない。

だが、箒は絢爛舞踏を上手く起動できなかった。

起動出来たら、ほぼ永久的に動けるが今はエネルギーが減って行っている。

「さて、提案いいかしら？」

ナターシャがシルバリオ・ゴスペルを纏い、一夏達に向かって言った。

「ＩＭＳだったかしら？」

ラウラは首を縦に振る。

シャルロットはフリーダムを探し続けている。

これは一種の病気だろう……。

「ＩＳの俸給完了まで、ＩＭＳがＩＳを防衛する。　そして交代して補給するって言うのが最善だと思うんだけど。　どうかしら？」

その言葉にラウラが頷く。

「Ｉｃｈ　ｂｉｎａｎｇｅｎｅｈｍ．ＥｓｇｉｂｔｉｍｍｅｒｎｏｃｈｅｉｎｅＥｎｅｒｇｉｅｓｃｈａｃｈｔｅｌｉｎｍｅｉｎｅｍＫ？ｒｐｅｒ．ＤｉｅＳｔｒａｔｅｇｉｅ　ｈａｔ　ｄａｓ　Ｐｒｏｂｌｅｍ　ｎｉｃｈｔ．（賛成だ。私の機体にはまだエネルギーパックがある。その作戦に問題はない）」

軍人として、最善の行動を取る事を教え込まれたラウラにとって、ナターシャの提案は否定する場所がない。

シャルロットは話を聞いていないのか、未だに海をキョロキョロを見ている。

「デュノアさんは……使えそうにありませんわね……。」

セシリアがシャルロットを見て、ため息をついた。

リリィに対する、依存度がラウラを超えたのだろう。

そう思うと、同じ行動をとりそうな人物が思い浮かんだ。

「……束さんも、なりそうだよな～。」

一夏が代表して、言葉に出す。

その言葉にナターシャとシャルロット以外が頷いた。

≪いっくん……どういう事かな……。≫

そんな声が、一夏達の耳に響いた。

全員が辺りを見渡す。

≪これは後で、お話しなくちゃいけないのかな？≫

そう言うと、鈴が目を見開き「ア、アレ！！」と叫んだ。

全員その方向を見る。

≪Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩが必要かな、かな？≫

海の上を移動する船の甲板に、束の姿はあった。

その船にラウラとナターシャは唖然とする。

「ＩＳ専用エネルギー補給空母……。」

大きさは中型の漁獲船籍と変わらない大きさだが、カタパルトやエネルギー補給ケーブルが大量に付いており、いかにも戦闘用という感じを醸し出している。

船体全体は何の変哲もないが、リフトで船内から武装を出すことができるなどの機能がある。

基本、ラファール・リヴァイヴの運用に開発されたものである。

「Ｅｓ　ｓｏｌｌｔｅ　ｅｉｎｅ　Ｅｎｔｗｉｃｋｌｕｎｇｓｇｅｒ？ｔｅｐｈａｓｅ　ｇｅｗｅｓｅｎ　ｓｅｉｎ……（開発考案段階だったはずでは……）」

しかし、それらはまだ考案状態。

現存することがおかしいのだ。

軍に所属していた二人は、その船の存在に首を傾げていた。

≪皆さん、早くこちらに来て下さいっ！！≫

真耶の慌てた声が聞こえる。

「エネルギーも少ない……。」

そう言うと、鈴は先に船に降りて行った。

ラウラとナターシャもそれに続く。

一夏はシャルロットを引っ張りながら、箒と共に降りて行った。

セシリアは黒いＩＭＳをみて千冬の無事を祈り、船に着艦した。

１６１　補給船（後書き）

ぶっちゃけ、戦艦でもよかった気がするけど、技術的に……。

まぁ、漁業船みたいな船でいっか……となったｗ

ここ最近めんどくさくなってきたな……。

うん……。

１６２　戦場に立つ白い魔王の影（前書き）

サブタイから分かるだろ……。

誰が出るのか、って……。

１６２　戦場に立つ白い魔王の影

「で、無断出撃した言い訳はあるかな？」

全員がエネルギーを補給している間、束はそう言ってお話を始めた。

攻撃的なお話ではなく、口撃的なお話だった。

ナターシャ以外暗くなる。

「まぁいいや。　で、リリィちゃんをこんな風にした犯人分かった？」

束の声はいつも通りなのが、この場ではかなりおかしく思える。

モニターには、あのフリーダムが映っている。

全員それを見ると、表情を更に暗くさせた。

束はため息をつくと、別のモニターを出す。

「おっぱい。　いっくんたちに作戦説明よろしくね……。」

そう言うと、モニターを出したままカタパルトに歩いて行った。

千冬は黒いＩＭＳを相手に善戦していた。

雪片・真打で二対纏めて斬り裂いてゆく。

白騎士には、フリーダムのデータにあったニュートロンジャマーキャンセラーの発展型が搭載されているため、ほぼ半永久的に動く。

名称がニュートロンジャマーキャンセラーとそのまま使っているため、かなり首を傾げるが……。

そもそもニュートロンジャマーキャンセラーは、ニュートロンジャマーという自由中性子の運動を阻害することにより全ての核分裂を使用不可にする、戦略兵器を文字通りキャンセルするものだが、ここにはニュートロンジャマーという物がない。

名称としては合ってないが、束が「めんどくさいからそのままでいいよ～」と言ったため、装置の名称ではなく動力名にそのまま使われた。

しかし動力が強過ぎるためか、現状のＩＳの武器はエネルギーに耐えきれない。

良くて一時間。

悪くて三十分で機体はオーバーロードする可能性があるのだ。

もともと膨大なエネルギーを使用し、ビーム兵器をＩＳに転用する事を目的として白騎士への実装は考案された。

白騎士はビーム兵器を装備した、試験機の役割も持っている。

その結果生まれたのが、ストライクにストライクノワールだ。

「はぁぁぁぁ！！」

その白騎士が動くと言う事は、止められないと言う事だ。

白騎士に無数のビームが放たれるが、スラスターで回避し続ける。

多少腕などに攻撃は当たり、装甲をはぎ取っていくが千冬は気にしなかった。

雪片を振るうと同時に、近くにいた機体に踏刀を展開した足で蹴る。

「っ！！」

気合一閃という感じで、先ほどから斬り続けている。

破壊された機体は消えていくため、邪魔にはならないから助かってはいるが、問題は数だ。

何百機倒した所で、減った気がしない。

いなくなった機体の所に、無事だった機体が流れ込んでくるのだ。

「きつい……。」

千冬は息切れしながらそう言った。

戦闘で、身体を動かしているのだ。

体力を消費するのは当然のことである。

「流石に死ねる気がするな……。」

そう言うと、さらに回しけりの要領で敵を踏刀で切り裂く。

「だが、死んでもリリィの元に行くだけだ！！」

回転をスラスターで止め、さらに近付く機体に雪片を振るう。

「私を殺して見せろぉぉぉぉぉ！！」

その言葉とともに、雪片の刀身が開く。

≪大火力射撃体勢≫

光りが刀身の間に集まる。

千冬は躊躇いもなく引き金を引く。

すると大きな火線が伸び、敵機を数十機飲み込んでゆく。

しかし、それと同時に千冬の動きが止まる。

動きながら大規模砲撃なんか、リリィにしか出来ない芸当だ。
千冬でも出来ない。
つまり止まってしまい、隙を作ってしまったのだ。
千冬は頭に血が上っていたためか、その事を忘れていた。
数機が千冬に向かって行く。
手にはビームサーベルを持って、千冬を死に追いやろうとしていた。
（……ふ、やっと……か……。）
そう思いながら、千冬はその死を見入った。
最後に一夏を残して死ぬ事に躊躇いがあったが、すでに遅い。
ゆっくりと目を閉じ、死を待った。
「やらせないよっ！！」
しかし、その声が千冬の目を開かせた。
（馬鹿なっ！　アイツがここにいるはず……。）
そして周りを見ると、淡い桜色の弾丸が敵機を貫いて行く。
良く見ると、弾丸が意思を持っているかのように動いている。

声のした方を見ると、そこには親友の姿があった。

１６２　戦場に立つ白い魔王の影（後書き）

はいな～。

６時間後に答え合わせだけど、すでに誰だかわかってるよね～。

という事で、出ました魔王様……。

声優ネタだけど……ｗ

１６３　束の機体（前書き）

束が戦線に参加。

もちろん使うのは、あの杖ｗ

１６３　束の機体

千冬は目を大きく開き、それを見た。

その間にも、千冬の周囲の敵は数が減っていく。

「……た、束……。」

そこには、篠ノ之束がいた。

紫の髪を後ろに流し、いつもほんわかしていた目は微妙につり上がっている。

しかしそんな束はＩＳを纏っているように見えない。

どう見ても、いつもと違う服を着ているだけだ。

白地の布に、所々に青いラインが入っており、胸元には赤いリボンが付いている。

ミニスカートに白騎士みたいに、足を覆う腰から出た布。

更に、足には桜色の光る羽。

一般的に思えば、変な服と変な状況だと思うだろう。

アリス服もその代表だ。

更に手には長い武器みたいなのを持っている。

（杖……？）

白い持ち手に金色の先端の中央に、赤い宝石。

千冬は何が何だか分からなかった。

「ち～ちゃんは後退。　補給が済み次第戦列に参加して。」

そう言うと、束の周囲に桜色の弾が作り出される。

それは何もない所から生まれたため、魔法のようにも見えた。

総数にして三十二。

「……シュート！！」

束がそう言うと、光りの弾は敵機に向かって飛んでいく。

敵機は回避するが、光りの弾は敵を追うように方向を変える。

そして敵に当たると、爆発した。

「……。」

攻撃が当たった敵は、簡単に崩れて行く。

一瞬にして、三十機近くの敵が撃破される。

千冬は唖然とした。

ＩＳを纏っていない束が、何故これほどの戦闘ができるのか。

束は何をしているのか。

もしかしたら、束は本当は魔法使いなのではないのだろうか。

そんなくだらない事まで考えてしまった。

「私が何をしているのか、理解できないって顔だね～♪」

表情は真剣そのものだが、口調は千冬がよく知っている束その者だった。

「まず私はちゃんとＩＭＳを使ってるよ。　ＩＭＳの全てといっても良いほどの理論を組み込んだ、最新型の機体をね♪」

その言葉に千冬は更に唖然とした。

どう見た所で、杖を持った人が浮いているだけだ。

何処にもＩＭＳの形なんかない。

敵機が集団で近づいてくる。

束はそれに向かって杖の先端を向ける。

≪ディバインバスター≫

機械的な声が響いた瞬間、杖の先端から高密度のビーム砲撃が敵機

に向かって伸びた。
それはフリーダムの、どの攻撃よりも威力が高い事が分かる。
杖から、何かが飛び出る。
束はそれを掴むと、千冬に向けて投げた。
慌ててそれを受け取る。
「……薬莢、か？」
それは薬莢だった。
「まず最初にち～ちゃんは、私の機体が見えないと思ってるけど、それが違うんだよ～☆」
そう言うと、更に近づいてくる敵機に光りの弾をぶつける。
「今私が着ている、この服と杖……、これが私の機体だよ♪」
その言葉に千冬は驚愕した。
「この服は、永続的にエネルギーを私の周りに散布し続けて、私とこの杖の処理でエネルギーを固めて撃っているだけ……。」
「つまり……。」
「傍から見れば魔法使いに見える。　それが私の機体、レイジングハート。」

その言葉に、杖の先端についている赤い宝石が光る。

「本来ならこの機体は全身装甲なんだけどね、こっちの方が良いから♪」

外見的に束は全身装甲より、服の方が良いと決めたと言う。

千冬その言葉を聞き、ついに考える事を止めた。

「常にエネルギーを放出し続けて、それを攻撃や防御に使用する戦闘方法を取るのがこの機体のスタイルなんだよ♪　ところで、さっき「私を殺して見せろ」って聞こえた気がするんだけど、どういう事かな？」

そう言うと、千冬は黙った。

その間にも、束は無数の弾を放出して敵機を落としていく。

どの機体も束には近づけなかった。

１６３　束の機体（後書き）

……篠ノ之束は高町なのはに進化した。

てってれれてってててて～♪

レイジングハートを入手した。

魔力の代わりにエネルギーを使用しています。

攻撃は全てビームです。

感想や活動報告に、束姉の魔王がなぜか期待されていたので登場。

プロヴィデンス戦に参加させようと思いましたが、シルバリオ・ゴスペルに出番を譲りました。

さて、これで束が戦闘で空気になる事は無くなったかな？

１６４　舞い戻る翼（前書き）

という事で、リリィ復活編です。

１６４　舞い戻る翼

「だいたい、リリィちゃんがそう簡単に落ちると思った？」

「え？」

束の言葉が引き金になったかのように、千冬達の後方から大規模な砲撃が敵機を襲った。

千冬はその砲撃に目を見開く。

「リリィちゃんは死なない。　私を追いて死ぬ事は絶対ないんだよ。」

そう言う束はどこか誇らしげだった。

千冬は砲撃をしたものを見ると目を見開いた。

白い追加装甲をつけているが、見間違うはずもない機体。

「リリィ……。」

そこには、巨大な兵装を装備したフリーダムが……リリィがいた。

フリーダムは、再度全ての兵装を展開させて砲撃を開始する。

アームから出る、巨大なビーム砲。

機体各部から出るミサイルに、ビーム。

フリーダムから出るレールガンなどが、一斉に敵機を殲滅する。

密集しているから、一瞬で数百機を……。

いや、数千機を破壊して行く。

傷ついた装甲も切られてなくなった腕も、何もかもが元通りのフリーダムが千冬を追いこして敵機に向かって行く。

ただ一つ、見た事もない兵装を使用して……。

「……リリィ！！」

千冬が再度リリィの名を呼ぶ。

生きていた。

その事に驚き安堵した声だった。

「だから、一回補給してくること。」

そう言うと、束はフリーダムに近づきながら敵機を破壊して行った。

一夏達は唖然としていた。

さっき起きた光景が、目に焼き付いて離れないのだ。

それ以上に、夢でも見ている気分だった。

そして、それを思い出す。

束がカタパルトに乗った瞬間、敵機が向かってきた。

全機補給中だったため、ＩＳや武装を解除していたため迎撃ができない。

距離がどんどん縮まり、全員死を感じた。

しかし、束だけはいつも通り。

真耶が叫ぶが、敵機は止まらない。

目と鼻の先に敵機が近付いた。

束以外、全員目をつぶる。

「……お帰り。」

束がそう言うと、敵機は緑色の光条に貫かれて爆散した。

その爆発音に全員目を見開く。

束の前に何かがいた。

守るように、翼を広げている。

各部から火花を散らしてもなお、それは動き続けていた。

全員の目が見開かれる。

その姿は、誰もが求めて敬った翼を持って所持している。

あのとき死んでしまったはずの姿。

腕を切られ、腹部から血を流し続け数十時間海に使っていた機体。

「フリー……ダム……。」

誰かがそう呟くと、全員の表情が驚愕に変わった。

「リリィさんっ！？」

「どうして生きてんのっ！？」

「Ｉｃｈ　ｗａｒ　ｂｅｓｔｉｍｍｔ　ｆ？ｒ　ｍａｓｓｉｖｅ　Ｂｌｕｔｕｎｇ　ｔｏｔ！！（確実に、大量出血で死んでいたぞ）」

一夏と箒、シャルロットは呆然としている。

ナターシャは気絶しかけたほどだ。

そんな声を聞きながら、フリーダムは甲板に降り立った。

装甲がはがれ体中血だらけのリリィが姿を現す。

腹部には大きな血の後。

左手は無く、血がいまだに流れ落ちている。

一体どれほど血を流し続けているのだろう。

真耶が「い、医療班っ！！」と叫んでいるが、リリィはそれを止める。

そして束を見て微笑んだ。

「ごめん。　心配かけたね。」

そう言葉に、束も微笑んでリリィに近寄る。

「ううん。　大丈夫だよ。」

そういいながら、静かにリリィを抱きしめた。

血が付く事も構わず、リリィに触れた。

その光景は、まるで一種の物語のように見える。

束が離れるとリリィは、一夏達を見て口を開いた。

リリィの左腕が皆の死角に入り出てきた瞬間、腕は元に戻っていた。

その光景に更に唖然となる。

束でさえもだ。

「今から皆はこの空域から離脱を開始。　千冬は私が連れ戻すから。」

リリィは何事もなかったかのように、舞い戻ってきた。

１６４　舞い戻る翼（後書き）

色々突っ込みたいでしょうが、リリィ撃墜や追加武装、レイハさんのシステムなどは戦闘終了後に、回想やリリィ、束自身の口で吐かせます。

シナリオが終わりそうだね……。

３巻終了までに、フリーダムとリリィの会話入れとかないとね……。

１６５　人間を止める（前書き）

まだ、リリィが束の前に舞い降りた時間のお話です。

レイジングハートはまだ使ってないよ～ｗ

１６５　人間を止める

一夏達に作戦を説明すると、リリィはフリーダムに呼び掛ける。

……たしか、フリーダム専用の強化兵装があったよね。

強化兵装。

ＩＳで言うとパッケージの事である。

換装装備の事を指す。

ストライクなどのストライカーパックがいい例だろう。

『あるけど……殲滅戦でもする気？』

フリーダムは簡単に答える。

フリーダムには専用の装備がある。

パッケージとは言えないがフリーダムがＩＳの原点なら、その装備はパッケージの原点だ。

『たしかに、あの数はミーティアを使った方が早く終わるけど、本気でやるの？』

フリーダムはそう言うと、呆れたのかため息をついた。

『まぁ、別にいいけど……。』

そう言うと、リリィの頭の中にパッケージの情報が瞬時に送られてきた。

今のフリーダムは完全にリリィと同化している。

つまり、リリィは完全に人というカテゴリーから離れたというわけだ。

その時の副作用か、機体を完全治癒したためリリィも治癒されていた。

フリーダムがリリィの傷を直すと言った答えである。

もっとも、理屈はわかって無い。

フリーダムも同化すれば治ると言う、曖昧な答えしか分からないのだ。

理屈が分かるはずもない。

しかし、結果としてリリィは治ったのだからよしとしよう。

人間から天使になってしまったけど……。

「お、お義父さん……。」

シャルロットがおそるおそる、リリィを呼ぶ。

シャルロットがこの中では一番取り乱し、精神が崩壊寸前までいっ

たのを、フリーダムに言われたのだった。

リリィはシャルロットに近寄ると、頭を撫で安心させる。

「私は生きてるから安心しさない。」

そう言うと、シャルロットは目の端から涙を流した。

それを見て、リリィは慌てる。

シャルロットは「良かった、本当に良かったよぅ」と言いながら、徐々涙を流す量を多くし大泣きした。

その光景に全員が涙した。

「というか父様。」

シャルロットが少しずつ落ち着いて行くと、今度はラウラがリリィを呼んだ。

「ラウラも寂しかったのかな～。」

「あ、確かにそうですけど、そうじゃありません。」

未だに敬語なのはしかたがないのだろう。

軍人生活が長かったのだ。

その時に作られて口調は、変える事は出来ないのだろう。

リリィは少しだけ肩を下げた。

「今、父様は無くなった腕を一瞬で元通りにしましたよね。　アレは、なんですか。　もともと怪我してないかったんですか？」

その言葉に、気絶しかけていたナターシャは「いや、この子がモニターした戦闘状況では、確実に天使の腕は斬られているわよ」と言った。

現に血糊とは違う粘着性の無い鉄の匂いをした赤い水は、甲板のいたるところについている。

「……。」

『それは私が説明するよ。』

リリィが口を開きかけた瞬間、全く別の声がリリィから聞えた。

皆その声の主を探すが、見当たらない。

『見つかるわけないじゃん。　だって私はフリーダムだもの。』

その言葉にセシリアが「……機体に意思がある……？」と唖然としながら呟いた。

確かにＩＳには意識があるとされているが、確定しているわけでもない。

まして、フリーダムはＩＳではないのだ。

全員マジマジとリリィを見た。

『いやん☆』

フリーダムは名前の通りにフリーダムなようだ。

「そ、それは良いですから、腕について教えてくれませんか？」

ナターシャが下手になりながら、フリーダムに尋ねた。

フリーダムは少し笑うと『サーモグラフィーで調べてみたら』と言った。

真耶はなぜかセンサーを持ってくる。

「ＩＳのを使えばいいでしょ」と言いたかったが、無駄だろう。

真耶がセンサーでリリィを調べ、モニターに結果を映すと驚愕した。

リリィの身体の一部が、変化していたのだ。

主に心臓や肺などの循環器系、骨、皮膚、筋肉……つまり身体全体だ。

そこに金属を示す反応が出たのだ。

１６５　人間を止める（後書き）

リリィが人間を止めました。

けど、肌はぷにぷに。

ターミネーター３見たいな、液体金属を思ってくれれば良いかな。

ちなみに、またも思いつきｗ

フリーダムとの同化は予定していたけど、金属反応は考えてもみなかった……。

１６６　戦場への帰還（前書き）

さて、次話でようやく戦闘が終了しそうです。

１６６　戦場への帰還

『そう言う事です。』

そう言ってフリーダムは言った。

「私は人では無くなった……。」

リリィも静かに言う。

「人であって、人でない。　私であって、私ではない。　フリーダムであってフリーダムではない。　いや……私という存在は、フリーダムだったのかもしれない。　でも決してリリィではないとは言い切れない。　もしかしたら、リリィであってフリーダムでもあるかもしれない。　それが今の私……凄く曖昧な生き方をしてる……。」

その言葉に一夏達は呆然として聞いていた。

しかしいまだに信じられないのか、モニターとリリィを見比べている。

リリィは何かしらアクションを起こそうと思ったが、無駄だと思った。

「リリィちゃん……。」

束が心配そうにリリィを見る。

「……ごめん。」

「なんで謝るの……。」

リリィの謝罪は、受け取ってもらえなかった。

「生きるために、そうなったんだよね……。　私のために……。」

束は、目を閉じてそう言った。

確かにリリィは、プロヴィデンスを破壊するために生きようとした。

それは束を守ることでもある。

いや、そんな言葉でごまかすのはダメだろう。

生きたかったのだ。

束とともに。

死ぬのが怖いんじゃない。

束を置いて行くことが怖いのだ。

「ありがと♪」

束は微笑む。

『ま、私達の事は些細の事なので次に行ってみよ～。』

フリーダムが空気を読まず、そう言った。

今の場所は、確実に感傷に浸るところだろう。

『ここでいちゃいちゃしていたら、お姫様死んじゃいますよ?』

その言葉にリリィは急いで千冬がいる方向へ向いた。

リリィは慌てて一夏達の方を向いて口を開く。

「今から超広域殲滅砲撃戦闘を行うため、専用機持ちはあの機体達に注意しながら後退すること。」

そう言うとリリィはフリーダムを纏う。

傷一つない元通りのフリーダム。

いつも見るＸ２０Ａの姿。

相変わらず一夏達は、その光景を呆然と見ていた。

まるで夢を見ているかのように。

『ミーティア、リフトオフ。』

フリーダムがそう言うと、フリーダムの後方に量子が集まりだす。

それが巨大な兵装として固定される。

中央部が上下左右に分かれ、フリーダムが入るスペースが生まれた。

「ミーティア……。」

束が呟くと、鈴が復唱するかのように首を傾げた。

理解ができなかったのだろう。

束は軽く説明ではない説明をする。

「ミーティアはフリーダムの強化兵装で、パッケージの原点……。
データーだけだと思ってたけど、やっぱりフリーダムの中にあったんだね……。」

その言葉に驚きを通り越して、呆れた鈴。

ナターシャは開いた口が塞がらないのか、間抜けな顔でそれを見ていた。

束はそれを見て、カタパルトに足を接続する。

全員フリーダムを見ているため気がつかない。

「行くよ、レイジングハート……。」

その言葉は小さく、風邪にかき消された。

手にはビー玉の様な、赤い宝石。

一番最初に真耶が束に気がつき止めようとしたが、時すでに遅し。

カタパルトは行きよいよく束を押し出していた。

全員、束が海面に激突すると想像した。

しかし、束は桜色の光に包まれる。

そしてその光が止んだ時、見た事もない服を着て飛んでいた。

「……。」

誰もが唖然とした。

まるでお伽話に出てくる、魔法使いのようにも見えたのだから。

手には機械的な杖を持っているが、身体にはＩＳのような装甲がない。

足に履いている靴は普通のモノっぽいが、左右に羽は展開されていた。

人と杖が光りの羽根を使って浮いている。

その光景は、魔法使い以外に何に見えたのだろう。

束はリリィを見た後、千冬に向かって飛んで行った。

１６６　戦場への帰還（後書き）

ミーティア登場。

何度も書いたと思いますが、パッケージの原点です。

ただ原点となったのは、ミーティアの機体強化装備としての部分だけです。

もうフリーダムは第何世代型だよｗｗｗ

一応、プロトタイプのはずなんだけどね……。

もはや、誰も止められないｗｗｗ

１６７　同族殺しの戦争（前書き）

……うん。

戦闘終了しなかった……。

長くなってる……。

３巻は短くなると思ったけど、意外とオリジナルで長くなった……。

１６７　同族殺しの戦争

偉い人は言った。

国とは民だ、と。

民がいなければ、国は成り立たない。

昔見た夢には、炎上する建物を背に誰かが歩いて去っていく光景があった。

つまり、その者は民を全て殺し国を殺したのだ。

それは王。

それはリリィ。

それはいうなれば、同族殺し。

それは、リリィの前世。

そして再度、リリィは同族殺しをするため引き金を引いた。

愛する者を奪った同族。

この世にいてはいけない存在。

自然とリリィは殺意を表に出していた。

それは前世で束が殺された瞬間を思い出したからだ。

ミーティアが全砲門を開く。

アームや尾翼についたミサイルポット、

更にミーティアのアーム先端についている大型のビーム砲や、左右についているビーム砲。

フリーダム本体についているレールガンに腹部のビーム砲。

リリィはそれらをフリーダムのマルチロックオンシステムで、敵機に照準をつけ撃った。

二秒間に一回。

四秒間に二回。

六秒間に三回。

八秒間に四回。

十秒間に五回。

そうやって撃ち続けると、その方向にいた敵機のほとんどが壊滅していた。

およそ４．０００機だろうか。

ミサイルは一発一機だが、ビームは違う。

止まることなく、密集していた敵を撃ち抜き突き進む。

それが五回。

腹部ビーム砲にアームの大型ビーム砲の三つ。

つまり十五の火線が満遍なく伸びたのだ。

一気に殲滅されたのは仕方がない。

更に後方から束が、フリーダム以上の火力で破壊してゆく。

もちろん人が乗っていたら武装だけ狙うつもりだが、敵機からは生体反応は無い。

リリィ同様に意思はあるだろうが、人ではない。

容赦なく、人間で言う心臓部分を撃ち抜いてゆく。

「リリィちゃん！！」

束が何かするのか、リリィを呼んだ。

モニターで束を見ると、かなりの高エネルギーがレイジングハートの杖先端に収束している。

リリィの方に向けて。

≪ディバインバスター≫

その声が響いた時には、リリィは束の射線から外れていた。

桜色の砲撃が、敵機を薙ぎ払う。

敵機を飲み込んでも、直進して更に敵機を飲み込む。

まさにリリィのフリーダムと束のレイジングハートは、この戦闘に置いて無敵だった。

更に二機にはエネルギー切れという概念がない。

レイジングハートは白騎士と同じようにビームを装備した機体だ。

だが白騎士とは違い、砲身などがない。

白騎士はビームを使い続けるとオーバーロードもするし、なにより砲身がビームの熱量に耐えきれない。

その点レイジングハートは、白騎士などのビーム兵装装備機の実戦データーを基に、オバーロードの点を改善した。

更にエネルギーを空中で固めて撃つため砲身が必要無く、その点の問題も解決済みだ。

技術的には、四、五世紀先の技術だと束は自負している。

いや、追い越されることがないフリーダムと同じだと思っている。

「リリィちゃん。　キリがないから、フルドライブ……エクシード

モード、行くよ♪」

言っている言葉は軽口だが、本人はいたって真面目。

リリィはその言葉を聞くと、近づいてくる敵機を一掃する。

≪エクシードモード≫

その間に束は光に包まれる。

レイジングハートのセカンドシフト。

束はモードと言っている。

フリーダム同様、初期設定機以外のモード変更が自由に行えるのだ。

ちなみに、初期段階の名称がレイジングハート。

ファーストシフトの名称が、レイジングハート・エクセリオンという。

光りが消え去り、束の姿が露わになる。

ミニスカートが消えロングスカートに変わり、リボンが消えインナーが変わる。

赤い派手な色が消え、青が目立つ事によっておとなしい雰囲気が感じられる。

杖も先が鋭利な刃物のように、左右対象の尖りができる。

エクシードモード。

レイジングハートが使用する奥の手。

エネルギー放出量を上げ、攻撃と防御力を上げるモードだ。

その放出量は、通常モードの二倍から四倍。

その分反動も大きいが、服が相殺するので問題がない。

コレでも一応ＩＭＳだ。

もちろんレイジングハート自体にもＴＰ装甲を装備しているため、衝撃、高機動時に起きる対障壁、攻撃を無効化する事ができる。

それは服に形がなったとしても同じだ。

ただ、露出している部分は防げないが。

１６７　同族殺しの戦争（後書き）

もう、最初っからぶっとばしてますね。

１００．０００機いるから、それくらいやっとかないとまずいでしょうが……。

そして次話……魔王様の必殺技……ビットフル装備で敵機を殲滅しますｗｗｗ

もの凄い数の敵機が消えるんでしょうね～。

そう言えば、今日……と書いてもコレが乗るのは、日付けを跨いでますので機能ですね。

昨日の０９：００～１１：００の間に夢にゆかりんが現れました。

おごらされました……。

嬉しいのやら悲しいのやら……。

１６８　必殺の一撃（前書き）

……束回ですね……。

アレはえげつない破壊力を持っている……。

１６８　必殺の一撃

モード変更を終えると、束は更に自機を強化し始めた。

≪ブラスターモード≫

レイジングハートが、そうモニターに出す。

それはレイジングハートの第三移行（サードシフト）。

エクシードモード以上の奥の手。

しかし、何も変わった感じがしない。

セカンドシフトのエクシードモードのままだ。

≪ブラスタービット　フルオープン≫

しかし、シフトの変化はちゃんとあった。

レイジングハートがそう示すと、束の周囲に四基の誘導兵器が現れる。

現在のレイジングハートの先端を、小さくしたかのような誘導兵器が静止していた。

これらのブラスタービットと呼ばれる誘導兵器は、エクシードモードでは不可能だった、超広域殲滅攻撃を想定した兵器なのだ。

もちろん膨大なエネルギーが必要だが、付きる事の無いエネルギーのため、問題はクリアしている。

「一気に削るけど、良いかな?」

束がそう言うと、リリィは頷く。

ここいらで一気に削らなくては、どれほどの被害が生まれるか分からない。

フリーダムはミーティアで敵機を落としながら束の横に移動する。

更に敵機は来るため、ミサイルを撃とうとするが出ない。

どうやらミサイルが空になった様だ。

正面から来ているため、レールガンで撃ち落とす。

先ほど行ったフルバーストで、かなりの弾薬を使ったようだ。

ビームで迎撃しながらフリーダム内に存在する弾薬を装填した。

再度フルバーストで千機近くを撃ち落とす。

どうやら敵機は思考性が無い。

プログラムを仕組まれたかのように、密集する。

リリィは再度アーム先端のビーム砲を放つ。

≪スターライトブレイカー≫

その声にリリィは束を見た。

「……何それ……。」

誘導兵器の先端と杖の先端に、直径２ｍを超えるほどの桜色の球体ができていた。

良く見ると、カシャンカシャンとリズムよく杖が薬莢を吐きだしている。

束は薬莢が無くなったのか、マガジンを取りはずす。

そして腰辺りからマガジンを取り出し、杖に接続した。

レイジングハートは追加攻撃エネルギー補給兵装を装備しているのだ。

それがマガジン内に装填されている、六発の弾丸。

それらは一つ一つに、ＩＳ四機分のエネルギーがある。

杖が弾丸内にあるエネルギーを排出し、空薬莢として輩出しているのだ。

束はそれを攻撃に使用するエネルギー増強として、使用している。

というか、本来の使用目的が攻撃増強なのだ。

それを一発使用することで、簡単にフリーダム並みの威力を発揮することができる。

とんでもない兵装だ。

それをこの戦闘で六発も使用したらしい。

「いっくよ～☆」

その言葉に、瞬間的にマルチロックオンで数百機捉える。

もちろん、束が狙った方向ではない方の敵機に向けてだ。

「スタ～ライト～……ブレイカ～♪」

言う必要があるのか分からないが、ビット含めた五つの光条が放たれ敵機を飲み込んでいく。

フリーダムには出せない威力が、空を切り裂いた。

それは一種の暴風。

桜色のビームが永遠と思える距離を直進して行き、何千、何万という敵機を破壊した。

リリィも敵機を破壊して行ったが、その砲撃に目を見開いた。

「……うそ～。」

初めて見た、束の必殺砲撃。

唖然とするしかない。

一瞬にして十万機いたはずの敵機が、半分近くまで減少していた。

≪エネルギー拡散率　８％≫

レイジングハートがモニターを出す。

それは束の周りにあった、エネルギーフィールドの形成率を示していた。

「再チャージするから、後退するね☆」

そう言うと、束は後退した。

再チャージという事は、またアレが撃たれるのだろう。

しかし、反動が無いはずはない。

リリィは急いでマルチロックオンシステムで、数千機の群を狙う。

そしてトリガーを引いた瞬間には、別の方向にいる機体をロックオンしていた。

束にあの砲撃を撃たせないためにも。

「がんばって～☆」

のんきな声援が聞こえるが、リリィの耳には届かなかった。

どんどんトリガーを引いてゆく。

マルチロックオンシステムも壊れそうなほど、使用し続けた。

放った瞬間にロックオンを解除して、別の機体をロックする。

結果、束が回復するまでに残った機体を破壊する事に、リリィはなんとか成功したのだった。

１６８　必殺の一撃（後書き）

フリーダムのフルバーストでさえ凌駕する砲撃。

一応レイハさんにも、マルチロックオンシステムは積んであるけど、アレはえげつない……。

マルチロックオンで、敵機最大破壊の砲撃位置を決定させてスターライトブレイカー。

えげつない……。

レイジングハートの全身装甲案（一部だけ）を求めます。

詳しくは活動報告で。

さて、一応質問もあったのでここでレイハさんの説明をしましょう。

初期設定：レイジングハート
第一移行：レイジングハート・エクセリオン
第二移行：レイジングハート・エクセリオン　エクシードモード
第三移行：レイジングハート・エクセリオン　ブラスターモード
第四移行：レイジングハート・エクセリオン　ストライクカノン装備

第四移行があるかどうかは別として、なんでバスターモードが無いのにエクシードとブラスターは別々なんでしょうね。

まぁ、エクシードとブラスターは似ているようで結構違いますし。

……それを言ったらアクセルとバスターだって同じか……。

……アクセルとバスターはワンセットでｗｗｗ

レイジングハートのモード変化は、なのはとは違う性能を出します。

なのはでは、射撃と大威力砲撃に徹底特化しているエクシードモードですが、ここではエネルギー放出量を大幅に上げる事になっています。

それにより、射撃や大威力砲撃はもちろん、防御面にも特化させました。

あと一応ＩＭＳですので、エネルギーは全てレイジングハートが出します。

なのはみたいに、魔力やリンカーコアなどは無いですので……。

使用後に起こる反動などはありません。

一応、大威力砲撃などの使用時に爆風など、そう言う系の反動はＴＰ装甲がカットするため、そこもほぼ無反動です。

露出した場所は防げませんがw

アクセル、バスター：一応、なのはと同じ。

エクシード：上記で説明したように、エネルギー放出を大々的に増やす。

ブラスター：限界突破を想定したモード。
誘導兵器と一斉に大規模砲撃を行う、超広域殲滅攻撃仕様。

ストライクカノン：エクシードに兵装を追加した高火力モード。
バッテリー式で、兵装を他人に渡すことも可能。
束使用時には、エネルギーで動くためバッテリー式でなくてもよい。
射撃（砲撃）や格闘（槍・剣など）の多彩な戦闘が可能。
エクシードモードとは違い、エネルギーを機体周囲に放出するのではなく、エネルギーを一点集中させている。
もちろんストライクカノンに、である。
ストライクカノン以外でも可能。
ちなみに、ストライクカノンとの併用するための兵装、フォートレスと呼ばれる支援ユニットを装備しているため、両手が塞がっている。
この時、杖は消えていても問題ないが、独立飛行している。

大体以上の事を決めて書いています。

第四移行が問題のため、作者内ではストライクカノンの構想を凍結させています。

どうも、原作があるとそっちのシステムと設定が思い浮かべてしまいますが、魔力という物ではないため、色々と変わっています。

そこら辺は、ご了承ください。

１６９　終わる悪夢に語られる真実（前書き）

……戦闘終了しました。

が、そのままリリィ回に突入です。

今度は夢オチ……じゃないよ。

寝てるけど……さ。

１６９　終わる悪夢に語られる真実

戦闘が終了した頃、日が昇り始めた。

補給艦の上では、束とリリィが寄り添う形で寝ている。

今回の戦闘での功労者は、間違いなくリリィと束だ。

国際ＩＳ委員会も黒い機体を確認したのか、ＩＳ学園の端末に特務任務を送ってきている。

リリィを死に追いやりかけたやつの事など、千冬は聞きたくはなかったが、流石にアレがプロヴィデンスと同類なのは嫌でも理解できたため、一応受け取った。

その代わりに、千冬はリリィへの撃墜作戦の報復として、プロヴィデンスとリリィの無関係性を提出し、賠償とエンジェルダウン作戦加担者の委員の辞職を命令した。

提案などではなく、命令だ。

一介の教職員が命令できるわけがないが、やはり悪事は悪事だ。

確定できる証拠もなしに安否不要の破壊命令をしたのだから、無理にでもやめてもらう。

もし止めなかったら、束が何かする。

総脅迫まがいな事を言ったため、確実に数名は止めるだろう。

もちろん録音記録などを確認し、委員会に敵性の無い物は即刻辞めてもらおう。

もちろん、大々的に世間にも公表する。

そうでもしなければ、また悪事の繰り返しだ。

そう思いながら、千冬達は寄り添いながら眠るリリィ（えいゆうたち）と束を眺めた。

『で、何か聞きたい事があるんじゃないの？』

暗い場所にフリーダムが立っていた。

リリィの視界には、装甲色しか色は映っていない。

しかし、リリィにとってはそんな事はどうでもよかった。

「あるよ。」

ただ静かに真実が知りたかった。

「まずはじめに、身体能力の高さと頭脳面の事……。」

そう言うとフリーダムが喋る前に、リリィは口を開く。

「これらが高い理由は、元が人間ではなくフリーダムだった事が関係している。　おそらく運動神経面は、身体構造が機体に近く、筋力や骨などが機体装甲並みであったためだと思った。」

フリーダムはそれを聞くと『微妙』と言った。

『……身体構造は人間よ。』

しかし、リリィは「思った」と言ったのだ。

今は違う事を考えているのだろう。

リリィはそれを聞くと、また口を開く。

「そうだろうね。　もしそうだったら束が何かに気が付いている。
だから私は「リリィという人間の身体なんて本当は無かった」とも考えた。」

その言葉にフリーダムは首を少し動かす。

「だけど、ソレだと複数の矛盾が生まれる。」

『それはそうでしょ……。』

フリーダムは安心した。

リリィの頭がおかしくなったのでは、と思ったのだ。

「なら、人間に近くて人間では無かったら？」

『……。』

「結局、本当の事は分からなかった。　けど、人間であれだけの事ができると時は思わない。」

リリィはそう言うと口を閉じた。

『……まぁ、そうね……。』

フリーダムがそう言うと肩を少し上げた。

『貴方は人と人の間に生まれた、だけどフリーダムという存在でもあった。　フリーダムという存在がリリィ（リリィ）という人間を書き換えた。
結果、人と私のハーフそれが貴方。』

そう言ってフリーダムは、リリィに近寄った。

『貴方は人であると同時に、私でもあった。　それが何らかの形で人として、貴方をハーフとし、超人にしてしまった。』

「そう言う事なら頭脳面も、そのせいだね……。」

『ええ。』

返事をするとフリーダムは姿を変えた。

リリィそっくりに。

『貴方の脳は、人よりもフリーダムに近い。　それは一種の情報端末と同じ……。』

そう言ってリリィとなったフリーダムが、リリィの頬を両手で触れる。

『人でありながら、機械としての枠組みを手にしてしまった……。』

リリィはその手を拒む事はしなかった。

『だから貴方は運動面や頭脳面において、最高を人で出せてしまった。』

それがリリィと呼ばれる人物だった。

１６９　終わる悪夢に語られる真実（後書き）

さすがに、フリーダムとして生まれ変わったら、リリィの素手での戦闘は……。

余裕でＩＳという装甲を破壊できるのでは……。

という事で、フリーダムと人としてのハーフとして産まれた為、フリーダムという力を制限したという事にさせていただきました。

人ではない事は確かだったんだけど、作者の妄想では、そこらへん……曖昧だったから……。

書いてる中で、無理やりハーフという事にしたｗ

うん。

これなら、ＩＳを凌駕できるし、フリーダムを使用することにもなるしね……。

ハーフで半減してるのに強いって、どれだけフリーダム最強なんだろう……。

１７０　真実という名の罪（前書き）

災厄という名の、存在についての回です。

そういえば総合ＰＶなどが……以下のようになっていました。

１，６９１，１５０アクセス　　１００，５７１人

こんな駄作を見ていただき本当にありがとうございます。

１７０　真実という名の罪

「んじゃぁ、次。」

そう言うと、リリィはフリーダムの手を掴んだ。

「フリーダムというのは、一体何？」

それは、フリーダムという存在。

いや。

フリーダムが同族とまで言う、あの黒い機体達の事を聞いている。

つまり、災厄と呼ばれるモノたちは何なのだ、と言っているのだ。

リリィは、フリーダムの手を自身の頬から下ろした。

真剣な目が、同じ容姿をする者の目を貫く。

『……はぁ。』

フリーダムはため息をつくと、リリィに背を向けた。

『聞いたら、後悔するわよ？』

そういいながら、リリィから離れてる。

「構わない。」

リリィの真面目な声が、響いた。

フリーダムは振り返り、リリィを見る。

真剣な目は、先ほどと変わらない。

『……私達は他人に害をふりまく存在。』

やれやれと言ったように、フリーダムは語り始めた。

『近くにいるだけで、他人に害を与えてしまう。』

そう言うフリーダムの表情は暗かった。

もし機体のままだったら、こんな表情だとは気がつかなかっただろう。

『それが災厄よ。』

フリーダムは指を一つ立てる。

『古くから悪魔、鬼などを退魔するものが、一番恐れているほどの存在よ。　陰陽道でも、護符として悪く避けとかあるけど、アレらの本当の目的は、符一枚に強力な結界式を練り込んで配布させる事により、災厄を封印するための符術兵器よ。』

リリィはその説明に唖然とした。

まさか、陰陽道という言葉が出てくるとは思わなかったのだ。

誰もが聞いても唖然とするだろう。

『元来私達災厄は、人から意味嫌われている。　傷つけるからね。』

そう言うと、フリーダムは腕を下ろした。

『そうね……、クラス代表が決定した時に、一夏の肩に激痛が走ったの覚えてる。』

その言葉にリリィはまさかと思い、聞いてみた。

「それが、災厄……である、私のせいだと……。」

否定して欲しい考え。

しかし、フリーダムは頷いた。

『近くにいるだけで、他人を害を与える。　ついでに言っちゃえば、その後に起きたパーティーで黛薫子の記事が上手くいかなかった事も関与してるわよ。』

「え？」

『あの子の新聞が完成しなかった理由は、ボイスレコーダーが壊れていて、集音した音声が消えたせいでもあるのよ。　あの子が数週間後に「リリィ先生のせいで」って言って責任転嫁したけど、アレは的を射た発言だったのよ。』

その事に、リリィは愕然とした。

つまり災厄のせいでボイスレコーダーを壊したということらしい。
そんなにあった事もない人にさえ害をなした事に、少しばかり心が痛んだ。
『些細な事なら、お箸とかが折れたことぐらい？』
そう言うと、フリーダムは何処からともなく椅子を出し座った。
『そう言う事を近くにいるだけでやってしまうのよ……。』
どこか憂鬱そうにフリーダムはそこら辺を眺めた。
眺めても真っ暗な空間があるだけなのに、眺めていた。
リリィは何も言えなくなった。
『……こんな真実、聞きたかった？』
そう、フリーダムは言った。
リリィは正直後悔した。
真実を聞いた事にじゃない。
自身という存在が何をしたか、という事にだ。
『私は喋りたくなかった……。』

そう言うフリーダムは悲しそうに言う。

『だって、貴方は束に害が及ばないように離れようとするでしょ。』

フリーダムはリリィが思っていた事を言い当てた。

リリィは違うとは言えず、押し黙る。

『フリーダム(あなた)が消えた所で、束が幸せになると思ってる？』

フリーダムの言葉にリリィは気が付く。

なんであれ、束と別れようとするのだ。

しかし、お互い離れたくない。

なのに離れたら、どうする。

リリィは守るために納得するだろう。

束も身体は守られる。

しかし、束の心を考えたか……。

自分勝手に分かれて、束が傷つかないとでも。

『決して、離れることが守る事に繋がるわけじゃないんだよ……。』

リリィは、フリーダムに説得された。

１７０　真実という名の罪（後書き）

フリーダムが災厄なら、リリィも災厄という事になります。

リリィ＝フリーダム＝災厄

ハーフだから、軽めに済んだようです。

完全な災厄なら、相手を骨折させたり、四肢をなくさせたり、死亡させたりします。

はい、ここでアレって思った人は考えて見てください。

おかしな点が浮かび上がります。

それには、ちゃんと理由があるんだよｗ

ついでにイラストを描き始めます。

リリィのね……。

更新が途切れるかもしれませんが、待ってくれたら嬉しいです。

なお、作者は飽きっぽいです。

もし、１日の６時に更新されていたら、飽きたのだと思ってください。

171　前世という記録（前書き）

そろそろめんどくさくなってきた……。

リリィ編を一度切って、原作に戻ろうかな……。

リリィのイラスト描いてたはずなのに、、別キャラになって数時間無駄に過ごし鬱になりました……。

171　前世という記録

リリィはフリーダムに説得され、少し考えを改めようとした。

だが、フリーダムはここでも空気を読まず話を続ける。

『で、他に聞きたい事って言っても、前世ぐらいだろうしね。』

リリィは思考力が鈍った頭で、必死にその言葉を理解しようとした。

『災厄というのは、王を先頭とした一種の種族。』

フリーダムは淡々と話す。

『王は絶対、だけど決して群れる事は無い。　そう言う存在。』

すでにリリィが聞いているのかは分からない。

おそらく聞いているだろう。

正確に理解できているか分からないが。

『王の選定は、力で決まる。　ただ、本能「この存在には敵わない」と思えば、それは自身より強いと言う事。』

リリィはようやくいつもの思考力を取りもだどしたのか、疑問を口にした。

「……その本能とやらは、確実にあってるのか？」

その問いに、フリーダムは肩をすくめた。

『私達は災厄よ。　外見なんかない、ただの存在。』

その言葉にリリィは納得した。

存在が大きければ大きいほど、強いと言う事なのだろう。

『そうして、強い者だけ残る。』

それは一種のトーナメントだろう。

無数に枝分かれした場所から、徐々に王という頂点に立つためのトーナメント。

『結果、貴方（フリーダム）が王となった。』

それがリリィの前世。

王と呼ばれる理由。

つまり、災厄の中の災厄。

本物の害ということだ。

『王になっても、やる事は変わらなかったけどね。』

そう言ってフリーダムは椅子に背を預けて、楽な体制を取った。

すでに離す事がめんどくさくなってきたのだろう。

飽きっぽい人格だった。

『そして災厄と反対の性質を持つ幸運の王と出会った。』

「……。」

『王といっても、一応人間の女。　災厄からすれば、人間であり、天敵であった。』

その声は、古く大切な記憶を思い出し、孫に語る老人のように聞こえた。

『姫は自身の幸運さで、人から奉られ不幸だった。　そして自身の不幸をなくそうと考え、思いついたのが災厄の王。　姫は嘘や真実をごまかしながら、呪術協会を黙らせ災厄の王に婚姻を持ちかけた。』

幸運を災厄で相殺すると言う事らしい。

種族が違うと言うのに、婚姻とは胴い事だろう。

リリィはいろんな疑問を持っていたが、フリーダムがそんな事を気にするわけでもなく、話はどんどん進む。

『災厄側は反発があったが、婚姻、つまり結婚することで魅力的な取引（おまけ）もあった。』

そう言うとフリーダムは、二本の指を立てた。

『姫が婚姻を認めたら、呪術協会に封印符の製造中止を実行させる、と言ってきた。』

リリィは眉をひそめる。

どう考えても、相手側に利益がない。

『王以外の災厄達は何も考えず、王に了承を取らぬまま返答した。』

「……。」

『しかし、呪術協会が了承するはずもなく、表面的に了承したが製造は中止しなかった。呪術協会の思惑としては姫という幸運の持ち主が、災厄をごときに全てを相殺されるわけがないと思い、姫の投入で災厄の消滅を考えた。　しかしその思惑は外れ、姫の幸運は全て王が相殺した。』

フリーダムの話のは異様は、よく分からなかった。

何か隠しているように、話しているのだ。

隠していなければ、説明が下手というだけなのだが。

『婚姻は、王の意思を無視して決行された。』

フリーダムは目を閉じる。

『呪術協会は慌てて姫を取り戻そうとした。　しかし、呪術協会はその動きを察した災厄によって滅ぼされた。』

「……。」

『貴方もよく知ってるやつによって、ね。』

フリーダムの言葉に、リリィはプロヴィデンスを思い出した。

しかし、フリーダムはそんなリリィの表情を見て笑った。

『プロヴィデンスは確かに加担していた。　人間を一番邪魔だと感じていたから……。』

その言葉に、リリィは首を傾げた。

フリーダムは笑うのを止めると、少し真面目な顔をして口を開いた。

『実行したのはトレース・ヴァルキリー……。　貴方が戦った、シュヴァルツェア・レーゲンに搭載されていたＶａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｓｅ　Ｓｙｓｔｅｍ（ヴァルキリー・トレース・システム）よ……。』

１７１　前世という記録（後書き）

……何コノ展開。

束と千冬だけならまだしも、ＶＴシステムまで……。

まぁ、前回の夢オチ前世にはシュヴァルツェア・レーゲンがシュヴァルツェアという名で出てきてたし、作者はどうやらＩＳのコア自体もリリィの前世に関わらせようとしていますね……。

……。

ま、いっか。

テキト～に進めてみよう。

１７２　罪悪感（前書き）

結局、イラストはリリィではなくなったため止めましたｗｗｗ

いずれやるかもしれないけど……。

172　罪悪感

気が付くと船の上で寝ていたようだ。

嫌、寝ていたわけではない。

フリーダムと会話していたのだ。

そこで、災厄という物を聞いた。

確かに聞いた。

リリィは甲板上で明るい一夏達を眺める。

（いずれ、私が……。）

最悪な結末。

そう考えると、逃げ出したくなってしまう。

「ん、起きたか。」

リリィが起きている事に、千冬が気がついた。

それを聞くと、全員リリィに近づいてくる。

「大丈夫か？」

「怪我はしてない？」

「腕はどうなったの！？」

「無事で良かったです……。」

「お義父さん……。」

皆、リリィを心配してくれていたらしい。

リリィはその感情が、眩しく見えた。

そして同時に、罪悪感も生まれた。

自分は、そんな感情を向けられていい人間ではない、と。

全員の顔が見れない。

「それにしても、桜色のビーム凄かったな。」

一夏が空気を読まないでくれたからか、助かった。

リリィはフリーダムに言われた事を悩み続けているためか、表情が暗い。

「そう言えばそうだな、アレはなんだったんだ？」

箒も一夏の発言に頷き、言葉にした。

束はリリィを見ていた顔を、一夏達に向けた。

おそらく束は、リリィが何か悩んでいる事に気がついたのだろう。

しかし、皆がいる前では聞かない。

伴侶としての意思が、そうさせていたのだろう。

なんにしても、リリィにとってはありがたかった。

「アレは、レイジングハートの必殺技なんだよ～♪」

ウサミミが上下に動く。

全員「レイジングハートって何だ?」的な顔をしていた。

束は少しだけ、リリィを見る。

悲しそうなリリィの顔を誰にも気づかせないように、あえて束は勢いよく立ちあがった。

「レイジングハートって言うのは、私の機体名だよ。」

そう言うと、全員驚く。

一夏達は一度も、束が装甲をつけた所を見た事がない。

見た事がる装甲らしきものは、束特性移動型ラボ、吾輩(名前はまだ無い)は猫であるだけだ。

真耶が機体が分かったのか口を開いた。

「篠ノ之博士の機体というと、あの杖ですか？」

その言葉に束は、大きな声で「大正解～☆」と言った。

杖という事に全員微妙な顔をする。

なぜ、装甲を使わずに杖なのだろう、と。

「私の機体はね……って、さっきち～ちゃんに説明したんだった…。同じ事言うのはめんどくさいね～☆」

意味が分からない言葉を放ち、リリィに抱きついた。

全員唖然としている。

説明しようとした瞬間、止めたのだ。

行動が意味不明すぎる。

千冬がため息をつく。

「束の機体は、服が常にエネルギーを放出していて、それを固定することで攻撃にするらしい。」

代わりに説明をする。

先ほど束に説明された事を、千冬は一夏達に言い続ける。

そんな事をよそに、束はリリィに抱きつきながらリリィの顔を覗き込んだ。

束は意味が分からない行動を取ったかもしれない。

だが、今の束にとってその行為が一番大切だった。

そうでもしないと、リリィが消えてしまいそうだったから。

リリィの目を見る。

すると瞬間的に何かに脅えて始めた。

困惑と悪感と死人を見た感じとか、嫌な者を見た感じとかが混ざったような目だった。

つまり、何かに恐怖しているのだ。

束は不思議に思った。

千冬より強い、現代最強と呼んでも可笑しくないリリィが恐怖する。

それが不思議だった。

「……束。　お前の機体はＩＭＳか？」

「え、うん。　……そうだけど、どうかしたの？」

リリィに意識を向けていたため、いきなり話を振られ束は少し慌てた。

リリィは相変わらずぼんやりとしている。

束の目を見たら、恐怖の色が映るくらいだ。

目を離してくれてほっとしているだろう。

「つまり、ＩＳでもあると言う事だな。　何世代機だ？」

「たぶん、第六世代機だと思うよ。」

千冬の問いに、束は即答した。

その答えを聞いた瞬間に、全員の顔が固まった。

それはそうだ。

現在ＩＳは第三世代機という物しか存在しない。

しかもその第三世代機は実験機という意味合いが大きい。

白式や紅椿の第四世代も、研究員達にとってはふざけるなという機体なのだ。

さらに白騎士は第五世代。

レイジングハートは第六世代機と言ったのだ。

第三世代機体を作っている物の努力を一瞬で、無駄にしたのだ。

皆、唖然としながら船に揺られて帰って行った。

「束、ファイルスに聞かせても良かったのか？」

「別にいいんじゃない？」

ナターシャを乗せたまま……。

１７２　罪悪感（後書き）

めんどくさくなったので、これで第３巻終了。

作者眠いからか、何を書いているのか分からない……。

ｇｄｇｄだよ。

次話から原作４巻。

その前に……リリィと束のお話が入る予定。

第５世代機はビーム兵器装備を目的とした機体。

第６世代機はビーム兵器装備と追加エネルギ兵装での効率化を目的とした機体。

そんな感じで、書いています。

１７３　すれ違う二人（前書き）

……リリィと束回です。

前回の話同様に、リリィが弱っています。

そして、束がなのはみたいに……。

173　すれ違う二人

シルバリオ・ゴスペルの暴走が終わり、臨海学校最終日。
その日は皆、帰宅準備をしていた。
ただ一人。
リリィを除いて。
「何してるの……？」
海岸の岩場に、隠れるように座っているリリィを束は見つけた。
リリィはただ、何をするわけでもなく海を眺め続けている。
「リリィちゃん？」
束はリリィの反応が薄い事に首を傾げた。
そしてゆっくりとリリィの横に座る。
「……。」
しかし、リリィは束から距離をおく。
離れたのだ。
「リリィちゃん……。」

リリィの目には複雑な思いが混じっている。

束は無理に近寄ろうとせず、リリィの気が治まるまでこうしているつもりだった。

「……束……。」

するとふいにリリィが、束の名を呼ぶ。

「俺達は……本当に出会ってよかったのかな……。」

そんな言葉を言ったのだ。

束は驚愕した。

なにより、初めてリリィが「俺」という呼称で自身を指したのだ。

尋常じゃない。

「どうしたの、突然……。」

束はリリィが何を言いたいのか分かっていたが、あえて知らないふりをする。

「……。」

リリィが何も言わず、立ち上がる。

ただ、海の向こう側。

いや。

海の向こうではなく、この世の果てを見ているような眼だ。

「俺達は、出会わない方がよ……。」

「そんな事は無い。」

リリィの言葉を、束は遮った。

聞きたくなかったのだ。

「何があったか知らない。私には関係ない事かもしれない。けど、リリィちゃんと離れるのだけは嫌だっ！！」

傍から聞けば我がままのように聞こえただろう。

しかしその言葉には、束の思いが詰まっていた。

私の事を好きで無くてもいい、ただそばに居させて。

そう言う思いが。

「……。」

しかし、リリィの目は束の言葉を受け取る気が無いように見えた。

「……何を悩んでるの？」

「……。」

「私の事嫌いになった……？」

「そんな事は無い。」

束の言葉が徐々に悲しみに染まっていく。

そのと同時に落ち込む。

リリィはそんな顔をみたくはなかった。

自身の存在がそうしていると考えてた。

一夏ほどではないが、ここ一番でリリィも抜けている。

そういう顔をさせたのは、リリィの行動と言葉のせいなのだ。

「……リリィちゃん。　話して……。」

束がそう言う。

だがリリィは、話す気が無い。

「……俺の存在が、皆を苦しめる……。　ただ、それだけだ……。」

リリィはどこかに行こうと歩き始めた。

束はその言葉に、少しだけ胸が痛んだ。

どうして、何も話してくれないのだろう。

どうして、相手の事を理解しようとしないのだろう。

「私は、リリィちゃんさえいればいいんだよ。」

そう言うと、リリィは肩越しに束を見る。

「それで、命が無くなるとしても……か？」

意味が分からない。

しかし束はあきらめなかった。

「意味分からないよ……。　……詳しく話して……。」

そう言う事で、少しでもリリィを引きとめようとした。

「……分からなくて良い……。」

しかし、リリィは束の思いをはねのける。

束は最終手段に出る事にした。

赤く丸い宝石のペンダントを握る。

それは待機状態のレイジングハート。

「話さないと、伝わらないよ……。」

そんな言葉を気にせず、リリィは歩いて行く。
その背中は、束との別れを漂わせえている。
「……レイジングハート……。」
小さくそう言うと、バリアジャケットという服と杖が装備される。
杖はファーストシフトのアクセルモード。
≪アクセルシューター≫
レイジングハートがモニターに映すと、束の周囲には無数の光の弾が浮かんだ。
「なんで……、なんで……。　何も話してくれないのっ！！」
束の叫びで、無数の誘導弾は放たれた。

１７３　すれ違う二人（後書き）

……今回は、リリィが悪い。

束が綺麗過ぎるいが……。

まぁ、すでに魔王様と同じ様なもんだし……。

今さらながら何だ、これ……。

なのはっぽいな……。

多重クロスって明記した方が良い気が……。

１７４　二人だけの戦争（前書き）

……束がなのは化しました。

リリィが凶暴化しました。

夫婦喧嘩という名の戦争の始まりです（笑）

というか、サブタイがＳＥＥＤになってきた……。

１７４　二人だけの戦争

「さっさと、撤収しろ。　コレも訓練のうちだ。」

千冬が生徒に向かって、そう言う。

今現在、生徒たちは撤収作業のためＩＳを片づけている。

コレもＩＳの訓練だと言っているが、どうだかわからない。

「「「「「「「「「「っ！？」」」」」」」」」」

海の方で大きな音がした。

爆発音だ。

全員が息をのみ、爆音の方へと顔を向ける。

その方向を見ると、水柱が何本か出来ていた。

「作業中止！！」

千冬が叫ぶ。

徐々に水柱が近くに寄ってくる。

つまり攻撃が近づいていると言う事。

はっきり言ってしまえば、何者かが近付いてくると言う事だ。

「生徒は避難を、専用機持ちは生徒の非難を……！」

その言葉を遮るかのように、桜色の砲撃が空を焼いた。

その光景を見た事のある、一夏達は驚愕した。

そして、その者達が姿を露わした。

桜色のビーム弾がリリィに迫る。

しかし、リリィはフリーダムを展開しドラグーンで撃ち落とした。

撃ち落としたと言うより、相殺。

もしくは砲弾のビームに、ドラグーンのビームを混ぜることによる操作不可を引き起こしただけだ。

束が作ったビーム弾アクセルシューターは、砲弾を作り出した時に使われたレイジングハートのエネルギーでしか操作ができない。

ビーム弾アクセルシューターは、空気中に散布したごく僅かなレイジングハートのエネルギーを変化させることで、弾を誘導しているのだ。

いわば、無数にある粒子の鏡。

鏡を自在に作り出すことで、弾を動かす。

つまり、粒子の鏡を使用したリフレクションショットが、アクセルシューターという攻撃だ。

しかし、問題はある。

それが弾に不純エネルギーが入ると、操作ができなくなると言う事だ。

粒子の鏡に不純エネルギーが入った弾がぶつかると、不純エネルギーで鏡は壊れる。

つまり、操作ができなくなってしまうのだ。

リリィはそれをやった。

「どうして、どうして何も話してくれないのっ！！」

しかし、束は叫びながら、もう一度無数の弾を射出する。

それもドラグーンによって相殺されるが。

「……。」

リリィは何も言わない。

束は悲しくなった。

「……私は人ではない……。」

喋って欲しかった。

何か言って欲しかった。

しかし、その言葉は聞きたくない。

「そんなの関係無いよっ！！」

束が叫びながら、杖を構える。

杖から薬莢が飛び出た。

「人じゃないからなに、人じゃないから人と同じことしちゃいけないのっ！？　だったら、なんでラウラちゃんにあんな事言ったのっ！！」

杖の先端に光りが集まりだす。

「なんで、ラウラちゃんの言葉に「そんなのは関係ない、ラウラはラウラだろ」って言ったのっ！！」

そういい終ると≪ディバインバスター≫とモニターに表示が映り、集められた光りがフリーダムに放たれた。

リリィはその言葉に何も言えず、身体を硬直させてしまった。
動けたときには、光りは目の前。
急いで、ビームシールドを展開する。
「……なんで、自分だけ傷付こうとするの……。」
「……さい……。」
束は悲しそうな顔で、リリィに問う。
「なんで、他人は助けるのに、自分は助けないの……。」
「……るさい……。」
束の言葉に響く。
気づきたくない。
はっきり言って欲しくない。
「リリィちゃんのそれは……。」
（言うな。）
リリィは願った。
（言うな、束！）

しかしその願いが届くはずもなく、束の口はゆっくりと開いた。

「ただの自己犠牲を美化をして認識した……ただの自己満足だよ……。」

「うるさいっ！！」

束の言葉にリリィは叫んだ。

瞬間的にドラグーンを束に向ける。

「喋るんじゃねぇよっ！！　この雌豚ァァァ！！」

それが、束と初めてすれ違った瞬間だった。

１７４　二人だけの戦争（後書き）

アクセルシューターはこんな感じで考えていました。

当初は、粒子が電車のレールのようにひかれており、その上を走ると考えていたのですが、それだと微妙に自由度が無いため止め。

結果、粒子の鏡のようなものを自在に作り、弾を反射させるリフレクションショットにしました。

一応、これなら問題ないはず。

唯一の問題は、エネルギー散布内でないと鏡が作れないということぐらいですかね……。

最後のリリィは……。

リミッターを完全に解除しました。

セシリアの時と同じように、口調が荒くなります。

本来フリーダムが、リリィにリミッターをかけているのですが、それを破りましたｗｗｗ

フリーダムでも手をつけられない、凶暴さを出しますｗｗｗ

ちなみに、性格変化は決まっていましたが、上記の内容は今作りま

した（笑）

１７５　豹変と決意（前書き）

……今回は、束で読むのではなくなのはで読んで下さいｗｗｗ

嘘です。

どうも、真面目に束を喋らせようとすると、なのはになる……。

というか、なのはだね……。

束は何処へ行った??

合言葉は「魔法…少女?（↑ここ大事）リリカル束さん！」

まさか、感想に２つもコレが来るとは……。

175　豹変と決意

「ピーピー、ピーピ、喚いてんじゃねぇよっ！！」

リリィの口調が急変し、束はその事に驚きを隠せなかった。

しかも、言葉使いが酷くなっている。

これでは、町にたむろしているガラの悪い不良だ。

束は呆然としながらも、杖を構える事を止めはしなかった。

「いらない事をぐちぐちぐちぐち……。」

普段のリリィでは言わない様な事まで、目の前のリリィは簡単に言う。

「殺すぞ雌豚……いや兎女！！」

束は驚きを越して、呆然とした。

ため息をつくと、レイジングハートのシフトを変える。

ちょっとだけ、束の目が据わった。

セカンドシフト、エクシードモード。

「……少し……。」

≪ダクト　フルオープン。≫

服から少しだけ音が聞こえる。

だが、誰も気が付く事がない。

それは、服のダクトの大きさを調整する蓋の様なモノ。

ただ、それが開いた音だ。

更に杖から、桜色の羽根が生える。

≪A．C．Sドライバー≫

フレーム先端に桜色の刃が展開し、フリーダムに向けられる。、

「……頭……。」

膨大なエネルギーが散布される。

それらが杖に吸収された。

「……冷やそうか……。」

そう言った瞬間に、束はロケットのように加速した。

フリーダムがシールドで防ごうと構える。

杖の刃が、ビームシールドに防がれる。

≪カードリッジ　リロード。≫

しかし、杖が薬莢を排出するとシールドに刃が食い込み始める。

「あ”？」

更に薬莢が排出される。

シールドに、フレームの大半が食い込んだ。

フリーダムは信じられないのか、動きが止まっている。

束はこれ以上の突破は無理と考えて、杖を強く握った。

先ほど大量に排出し、杖に吸収されたエネルギーがシールドを突き破った刃の先端に集まる。

その光はフリーダムの左肩を、射線軸に置いていた。

「……シュート。」

無慈悲にも、束はそれをフリーダムに向けて放った。

それはフリーダムの左手の装甲を剥いで行く。

ちゃんとビームの出力はしているようだ。

腕は残っている。

しかし、所々焼けたり切れたりして見るのがつらい。

「ちっ！」

リリィは毒つくと、ドラグーンを操作して束の背中を狙う。

しかし、束はエネルギーフィールドでビームを防ぐ。

放出したエネルギーは、機体周囲に七割近く集まる。

それらは一種の防御壁を自動で作る。

レイジングハートに不意打ちは利かないと言う事だ。

しかし、束は二射目は後退して避けた。

エネルギーフィールドの限界なのだ。

流石に永続フィールドというわけでもない。

束は先ほど放出したエネルギーのほとんどを、杖に取り込んだのだ。

フィールドのエネルギーさえも。

つまり、フィールドのエネルギーのほとんどを取り込んだため、フィールドが脆くなったと言う事だ。

「……殺す。」

リリィが明確な殺意を抱き、ライフルを束に向ける。

しかし、ライフルはトリガーを引く直前に爆発した。

フリーダムは周りを見る。

すると、金色の誘導兵器が目に入った。

ブラスタービット。

外見が変わっていなかったから分からなかったが、束はいつのまにかレイジングハートをサードシフトにしていたようだ。

フリーダムは持ち前の高機動移動で、ビットの射線軸から回避する。

しかし、ビットは撃ってこない。

「……なんで、自分を大事にしないの……。」

そういうと、いつのまにかビーム弾が束の周囲に浮いている。

「……リリィちゃんが傷つくのなんか、私は見たくないんだよ。」

そういうと、束はビーム弾を撃ってくる。

「はっ、そういいながらちゃんと撃ってんじゃねぇか。」

だがフリーダムは当たり前に、それを回避する。

左手から血が大量に飛び散る。

そもそも、フリーダムのような機体にフェイズシフト装甲などを組

み込んだのは、ＩＳでは出せない速度に搭乗者を耐えさせるためだ。

しかし、今のフリーダムは左腕から下に装甲は無い。

つまり、フリーダムの機動に腕が耐えきれず、傷ついていると言うわけだ。

「……話してくれるまで、止める気は無いよ。」

そういいながら、ビーム弾を放ち続ける。

「なら、撃ち続けな。」

フリーダムは左手なんか、どうでもいいかのように高機動で避け続ける。

徐々に束から離れていく。

「リリィちゃんを落として、話を聞く。　何をやっても、聞きだす。」

そう言って束はフリーダムを追う。

エネルギー散布領域外に出られたら、ビーム弾の操作ができない。

ブラスターモードになって、エネルギー散布は一点集中に変わっている。

もちろん、効果範囲も縮まっていた。

なるべく離されないように、束はフリーダムを追った。

「そして、謝って、抱いて、笑って……。　リリィちゃんを救う…
…絶対に！！」

ビーム弾がフリーダムをかすり、海に落ちる。

海面にぶつかり、海面は水柱を立てビームは飛散した。

だが、攻撃は続ける。

フリーダムはそれを避け続ける。

そして、千冬達の前についたのだった……。

１７５　豹変と決意（後書き）

束無双。

「少し頭冷そうか」から、凶暴化。

セシリアの戦闘方法の完成系だな……。

というか、なのは自重しろ……。

戦闘になると、束はなのは化するじゃないか……。

ここを妄想する人、絶対束じゃなくてなのはを思い浮かべてるよ！！

どうしてなのはになってしまった……。

魔法少女（？）リリカル束……始まりますｗｗｗ

ＩＳは何処へ行った……ｏｒｚ

１７６　終幕の砲撃（前書き）

……もはや、魔法戦闘ｗ

何だ、この戦闘は……。

ビームがビームじゃない……。

176　終幕の砲撃

皆、ただ驚いていた。

目の前にいるのは、天才篠ノ之束。

その束が、空を飛び圧倒している相手は……。

「フリー……ダム……。」

白騎士事件で伝説になり、再度舞い降りた天使。

白騎士より最強の機体、フリーダムだったのだから。

束はどう見たって、傷一つない。

しかしフリーダムは、ファーストシフトのストライクフリーダムであるにもかかわらず、左腕の装甲は無い。

良く見ると、ドラグーンも全基無くなっている。

肌はさらされ、傷だらけ。

血はただ流れ止まる事がない。

「リリィちゃん、話す気になった?」

束がそう言うと、皆怪訝そうな顔をした。

千冬もだ。

話の内容が分からない。

その場の空気が静かになる。

「話す気はねぇ、て言ってんだろ……。」

目を見開く。

リリィの言葉が荒々しい。

真耶が千冬にどうしたいいのか聞きたそうにしている。

だが、千冬達には何もできない。

してはいけない。

「なら……。」

ブラスタービットが動く。

それと同時に束はフリーダムへ近づいた。

フリーダムはカウンターをする気なのか、その場でサーベルを構える。

束の誘導兵器が桜色の尾を展開した。

細い帯。

それが、フリーダムを囲みながら回る。
フリーダムは気にしないのか、動こうとしない。
ただサーベルを持ち、構えているだけだ。
≪クリスタルゲージ≫

リリィは戦って気がついた。
束の誘導兵器は、フリーダムやブルー・ティアーズの誘導兵器とは違うと言う事に。
そして束の持っている杖。
アレは白式の雪片・弐型同様に、対ビーム兵器兵装であるシールドと同じ様にビームコーティングをしているようだ。
なら、束の着ている服もビームコーティングが施されているだろう。

レイジングハートに武器という物は無い。

レイジングハートと呼ばれる全身装甲機体は、全身に隠れるようにダクトが配置されている。

そこからエネルギーを放出して、攻撃するために固めて放つ。

そのため武器は無い。

なら、束が持っている杖はなんだ。

そうして考えると、結果的にあの杖もレイジングハートという事になる。

しかし、レイジングハートには武器が無い。

何度も言うが、無いのだ。

なのに誘導兵器が存在している。

リリィの知らない物だ。

それが桜色の尾を出して回り始める。

（……。）

束はフリーダムに接近する。

フリーダムは気にせずにサーベルを構えた。

束は杖のマガジンを引き抜く。

「自分が人間じゃないって言っても……。」

腰からマガジンを取り出し、杖に接続する。

「……リリィちゃんは……。」

その言葉に、誘導兵器の尾が地面に触れる。

「リリィちゃんでしょ……。」

束が足を前に出し、止まった。

接近に構えたフリーダムは、動じず動かない。

それをよそに尾が地面にくっつくき、誘導兵器は回り続ける。

そして、ぐるぐるとフリーダムに四基の尾が絡み合う。

それは一種の鎖。

リリィは急いで出力を上げて振り切ろうとする。

「……相手を拘束するための方法だけどね……。」

束がリリィを見てそう言う。

「今は拘束じゃなくて良い……。」

≪ワンカードリッジ　リロード。≫

杖が薬莢を吐きだす。

「時間稼ぎ……動きを止めれれば良い……。」

≪クリスタルゲージ≫

誘導兵器がフリーダムの頭上でエネルギーを放射し、ピラミット型の壁を作る。

半透明の壁。

それがフリーダムを囲んだ。

その瞬間、フリーダムは誘導兵器が出した尾を引きちぎる。

「……ごめんね……少しだけ眠ってもらうよ……。」

≪ツーカートリッジ　リロード。≫

薬莢が更に排出される。

フリーダムはサーベルで壁を斬るが、ビームシールドと同じなのか斬れない。

だが、フリーダムはあきらめない。

何度も何度も斬る。

しかし、壁は壊れない。

≪エクセリオンバスター≫

モニターにそう映ると、杖の先端に光りが集まる。

レイジングハートの高出力砲撃。

フリーダムはそれを見た瞬間、残っている右手のシールドを掲げる。

「……ごめんね。」

それは何に対して謝ってるのだろうか。

攻撃すること。

それとも傷付けたこと。

はたまたリリィの苦しみを理解できなかったことか。

だが、それはリリィには分からない。

分かるのは言った束本人だけだ……。

「……リリィちゃん。」

目を瞑る。

そして次に目を開いた瞬間、束は叫んだ。

「エクセリオンッ、バスタァァァァー！！」

１７６　終幕の砲撃（後書き）

……。

バインドがビームなら、フリーダムの装甲切れてるよ……。

もはやビームじゃない……。

魔法でしょ……。

まさか、エネルギーだから斬れないし固めてるとか……。

ご都合主義だね……。

けど、紅椿の雨月の刃はエネルギー。

……別に、問題無いのかな？

もはやＩＳの存在は消え失せましたね……。

ま、この戦闘が終われば出てくるでしょうけど……。

さて、前に次回から４巻突入とか言っておきながら、まだ３巻が続く……。

本当に申し訳ありません……。

次回こそ……3巻の終わらせます……多分……。

１７７　天使が眠る時（前書き）

……ようやく終わりです。

うん。

微妙……。

１７７　天使が眠る時

束の持つ、杖の先端からすさまじいエネルギーが吐き出される。

それは自身が作った光りの壁を突き破り、フリーダムのシールドと拮抗していた。

誰が見ても分かるほど、フリーダムが押されている。

徐々にフリーダムが威力を軽減するために後退した。

しかし、変わらない。

「っ！！」

束は辛そうな顔をしながら杖を持ち続ける。

フリーダムは押されているが、まだ持ちこたえている。

「レイジングハート！　残りの弾、全部使うよっ！！」

そんな光景が見てられなくて、早く落とそうと考えた。

≪オールカードリッジ　リロード≫

束の声で、杖から薬莢が吐き出され、マガジンがオートパージされる。

その瞬間、砲撃の威力が上がった。

フリーダムと拮抗していた砲撃も、濁流のように大きくなる。

「ぐっ！？」

そして、桜色の光りはフリーダムを飲み込んだ。

残った光りが飛散する。

フリーダムは土煙に隠れて、どうなっているか分からない。

束はむなしい気持ちになった。

話し合わないと分からない。

だけど、その過程でどうして戦いが起きるのだろう。

杖が圧縮した何かをダクトで外に吐き出す。

遠くで千冬達が眺めている。

だけど、束は気にしない。

徐々に土煙が晴れる。

ゆっくりと、束は地面に降りる。

「……。」

束は唖然とした。

フリーダムが立っていた。

装甲面がほぼ無くなり、翼も根元から折れていたり、ドラグーンをマウントする場所が熱によって溶かされて無くなったり細くなったりしており、右腕はシールドがあって、前に出していたためか一番損害が酷く左腕同様になっていた。

足もシャフトは残っているが、装甲板は外れたりぼろぼろになったりしている。

レールガンも砲身が曲がり、使い物にはならないだろう。

ただ、腹部の砲塔から真上は、何の損害もない。

頭部はアンテナが折れているぐらいで、ほとんど無事。

おそらく相殺するために、瞬間的に腹部からビームを放ったのだろう。

それが砲撃を完全に相殺しきれず、上に曲がり一部分だけ相殺したと思われる。

「……う……。」

フリーダムが動く。

砲撃に耐えきったらしい。

手にはビームサーベルが握られている。

束は目を見開いたが、気がついた。

レールガンは後腰に移動していたのだ。

なら、小さなビームサーベルくらいは自身の身体で守れるだろう。

ぼろぼろになりながら、フリーダムは束に向かって歩く。

右手にはビームサーベルを持って迫る。

おそらく最後の一振り。

片方は砲撃時に手に持っていたため、壊れている。

束はフリーダムへと歩みよる。

勝者の余裕か。

はたまた、戦う気が無いのか。

どっちにしても、一番危ない事を束はやっていた。

フリーダムとの距離が縮まる。

すでにフリーダムの間合いだ。

一瞬で束は殺されてもおかしくは無い。

しかし、束はさらに近付く。

「……もう、一人で背負いこまなくて良いんだよ……。」

そう言って、杖を消して手を広げる。

フリーダムは動かない。

「……もう、悩まなくて良いんだよ……。」

フリーダムの手からビームサーベルが落ちる。

エネルギーが回らなくなったため、刃は消え去る。

最初から、サーベルを振る気がなかったのだろう。

サーベル持ち迫ってくる姿を見て、束が恐怖してくれるのを望んだのかもしれない。

ビームサーベルのように、自分に触れれば危ないと言いたかったのかもしれない。

しかし、束はそんな姿でも恐れる事無く近づいた。

「……だから、もう……戦う必要は無いんだよ……。」

その言葉に、フリーダムは傾く。

束に向かって、押しつぶすかのように倒れる。

「……だから……。」

装甲が粒子となって風に流される。

翼が消え、長い髪が舞う。

足が消え、延長された分だけリリィが落ちる。

破損した肩が消え、血に濡れた肩が、胴体が消え、服を着た華奢な身体が現れる。

そして頭部が消え、目をつぶり涙を流しているリリィが分かる。

「……お休み……。」

落ちてくるリリィを束は、優しく抱きとめた。

気絶しいるためか、重いのだろう。

すこし、束がふらつく。

しかし束は表情を変えない。

リリィを抱きしめ続けた。

それは、自身のやった事を悔む天使。

誰にも言えず、ただ一人で抱え込んだ人。

自由（フリーダム）という天使の名を持った、一人の人間（リリィ）という結果だった……。

１７７　天使が眠る時（後書き）

ようやく終わって次回から４巻突入。

何回目だろ、コレ言うの……。

おそらく、次話は４巻突入しないフラグですね……コレ。

リリィの感情がないから、リリィが何を思っているか不明。

だけど、今後書くと思われる……。

いや、書かないと進まないし……。

ここまでこれたのは読んでくれた方のおかげと、毎日感想を下さった「シート」様と「ｅｊｇｔ」様、他「ルージュ」様をはじめとする方達のおかげです。

本当にありがとうございました。

ん？

最終回的なノリだね……。

別に終わりませんよ。

一区切りついただけですし……。

さて、次話は４巻突入のため１６時？

の投稿はありません。

日付が変わった瞬間の投稿になります。

おそらくウォーターワールドでしょう……。

その前に何かありそうですけど……。

一応、ココで福音戦の３巻は終了です。

ナターシャがどうなったかは……いずれ……。

その間は、妄想で補完を（笑）

- - 4　キャラ説明　リリィ（前書き）

3巻終了時のリリィです。

今さらというようですが、気にしないでください。

本日はパターン2です。

パターンについては、あとがきをご覧ください。

--4　キャラ説明　リリィ

名前：リリィ（本名：不明）

年齢：17（近々18）

性別：男の娘

身長：束より少し大きい

機体：フリーダム

誕生日：8月8日

≪イラストなし≫

生まれは日本の一般家庭出身。

銀髪、紅眼の男性。

幼初期から女顔であった。

成長するにつれ、男性とは思えない容姿になっていく。

そのため、髪の毛は伸ばし続けている。

女性と同じお手入れをしており、男性という外見を気にしてない事が分かる。

というか、諦めているのが分かる。

産まれて数日で、歩行を可能にし。

数週間以内で、言語を喋る。

そして幼くして、サイエンスの論文を理解するほどの天才。

・経歴

5歳になると同時に、両親が死亡。

それから親戚の薄汚い手に使われないために、2年間1人旅を続ける。

その間、自身の身体を売って働く。

暗殺はもちろん、自身の容姿を利用して非合法のバーなどで働いた事もある。

ちなみに、その間身体に異変は無い。

そのころには、自身の頭脳と運動神経に疑問を持ったが、答えが出ず忘れようとする。

7歳になり、海へ出て一枚のプレートを発見する。

その瞬間、フリーダムと呼ばれる機体を手にする。

数分以内で、試験機段階のＩＳ白騎士と戦闘。

武器破壊という格の違いを見せ勝利。

その後情報を得ようとするも、ＩＳの生みの親篠ノ之束の登場により場が混沌とする。

白騎士の機体構造を見て修理したり、改造したりする。

この時、白騎士の設計図は一度しか見ていない。

後、織斑家でお世話になる。

天才同士という事もあって、束とは意外と話が合った。

束が機体や武器を考案して、リリィが修正、訂正、最適案を出す。

そのことから、リリィの頭脳は篠ノ之束を越している物と思われる。

その後、機体に使用する武器を製作し続け、ＩＳの生みの親となる。

篠ノ之束同様コアが作れるが、作った事がない。

白騎士の稼働性能実験で相手を務める。

そして白騎士の搭乗者、織斑千冬に剣を教える。

ちなみに、稼働性能実験時に生身でＩＳを凌駕している。

訓練中のフリーダムを見られた事もあり、白騎士事件を起こす。

正確には見られたので、政府や研究者に説明しに行ったが相手にされなかったためだが。

しかし、千冬の腕がまだ低いのか１ヶ月延長。

その間、束は新しくコアを作っていた。

そして白騎士事件時に、飛来する２．３４１発の弾道ミサイルを一瞬にして半数を破壊。

白騎士に後を任せ、衛星を破壊する。

事件後、国家指名手配を受けた束についてゆく。

ちなみに、付いて行く時リリィが言ったセリフは「……くらい、守らせろ……」である。

重要な部分が書かれていないため、想像で補完するしかない。

以後１０年、政府から逃げ続ける。

各地を転々とし、野宿やアパート、ホテルなどを借りて過ごしていた。

その間、リリィは束と恋仲になった。

その内の7年間は頻繁に千冬達の前に現れている。

第一回モンド・グロッソで千冬が使用した機体は、白騎士のコアを使用したリリィと束の合同作品でもある。

第二回時には何もしていないが、束がハッキングしていたら見つけた織斑一夏誘拐という単語に調べをしていたためであって、千冬をどうでもいいとは思っていなかった。

結果、調べがついた時には一夏は誘拐されており、決勝戦は千冬の不戦敗で終わると言う結果となった。

余談ではあるが、第2回モンド・グロッソにナターシャ・ファイルスが参加していたらしい。

そして１０年後に一夏をＩＳ学園に転入させ、自身達も表に出る事にする。

政府との取引で、織斑一夏のデーター収集と一部発明の提示を求められ承諾。

生徒としてＩＳ学園に入る。

ＩＳ学園にＩＳ理論と構造、修理などの授業を担当する束を、逐一手伝っている。

第３世代に合うような武器を作りながら、一夏で試し政府に提出している。

初日にイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットと決闘。

ＩＳを生身で倒し、生徒に恐怖を与えた。

その後、フリーダムで再度戦闘。

名実共にに、最強ということを証明する。

一夏の鍛錬につきあいながらデーターを取る。

中国代表候補生、凰鈴音とのクラス対抗戦の時に政府に提出しに行っている。

極秘事項につきデーターにまとめるのは危険なので、紙に書き手渡し行っている。

その後、クラス対抗戦時に襲撃したプロヴィデンスの搭乗者と疑われる。

そして転入生2人のうち、1人の男装に気がつく。

授業中に発作というリミッターが外れ、アリーナを出て1人で苦しむ。

その後束が来たため何もないふりをするが、幻聴が聞こえ精神力を大幅に減少させられた結果、倒れた。

転入生シャルル・デュノアの事を調べ、本名シャルロット・デュノアとその経歴にたどり着く。

デュノア社との取引の結果、シャルロットを束が養子縁組として引き取る事になる。

しかし、まだ引き取られてはいない。

リリィと束が結婚し、シャルロットがＩＳ学園を卒業すると同時に引き取る手筈となっている。

そして放課後の一夏の訓練で、シャルロットの専用機ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩを大破させてしまい、修理と改造を行う。

結果、白騎士の次に製作された試作ビーム兵装搭載機体、ＧＡＴ－Ｘ１０５を開発しシャルロットに渡す。

少しして、生徒から教員への転属願いが届き教員としてＩＳ学園に入る。

担当は束と同じ。

ツーマンセルトーナメント時に、ラウラ・ボーデヴィッヒが乗るシュヴァルツェア・レーゲンの異変にいち早く気がつき、指示を出す。

その後、ドイツ軍を問いただすためシュヴァルツェア・レーゲンの解析を行うために格納庫に行く。

だが、なぜかシャッターが閉まると言う異常事態が起きる。

ちなみに、その数日後にシャルロットと同じ条件で養子縁組という枠にラウラを入れる。

シュヴァルツェア・レーゲンの修理際、ＧＡＴ－Ｘ１０５Ｅを組み込み、ＧＡＴ－Ｘ１０５の次となる試作ビーム兵装搭載機体を渡している。

校外特別実習期間に天使再現計画のシルバリオ・ゴスペルが暴走。

エンジェルダウン作戦の存在も知らぬまま戦闘を行う。

当初は圧倒的に押していたが、途中でプロヴィデンスの攻撃があり２機を相手に戦闘を開始する。

結果、不意打ち気味のシルバリオ・ゴスペルの攻撃受けた後に、プロヴィデンスに腕を切られ誘導兵器で装甲を破壊された結果、死亡と確認されるほどの身体となる。

しかし、死亡はしておらず自身の前世であり、自身が使う機体であるフリーダムと精神上での会話をしていた。

その後、危険が迫った束の前に現れフリーダムと同化し、腕と怪我を修復した。

結果、人では無くなったが生還を果たしている。

その後１０万機を相手に、束と共に戦闘し勝利。

皆が嬉しがる中、再度精神上で会話し自身の正体を聞く。

そして正体を知ったリリィは、束から離れようとするが束との戦闘という名の説得により、止めたようだ。

・呼称

色々な呼び方があるが、そんなに多くはない。

生徒からは「リリィ先生」や「天使先生」、生徒であった時もあったため「リリィさん」と呼ばれており、教員からは「リリィ先生」や「リリィ博士」と呼ばれている。

束からは「リリィちゃん」で、箒からは「義兄さん」。

織斑姉弟からは呼び捨てで、シャルロットからは「お義父さん」、ラウラからは「父様」「お父様」などと呼ばれている。

・製作機体

・初代ＩＳ「白騎士」
主に回路と武器、新機構や機材を開発した。

・第五世代型ＩＭＳ「白騎士」
束との合作で、フリーダムの武器を解明しながら機体内部を製作した。

・第三、四世代ＩＳ「白式」
・第四世代ＩＳ「紅椿」
機体内部構造、使用武器製作。

・不明世代ＩＭＳ「ＩＭＳ－ＧＡＴ－Ｘ１０５　ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩ」
・不明世代ＩＭＳ「ＩＭＳ－ＧＡＴ－Ｘ１０５Ｅ　シュヴァルツェア・レーゲン」
機体内部構造、装甲など製作した。

・推定第六世代ＩＭＳ「レイジングハート」
機体機構と内部機構の提案のみ。

---4　キャラ説明　リリィ（後書き）

テキトーに書きましたが、こんな感じです。

ん？

シナリオだと思った人には悪いんですけど、キリがよかったため書かせていただきました。

次話はちゃんとシナリオです。

次の投稿は……時間不明です……。

漏電でＰＣが……。

投稿予定時間決めておこうかな……。

パターン　１
０時・６時・１２時・１８時

パターン　２
０時・１２時

パターン　３

0時

……こうすれば、不慮の事態や急な予定があっても大丈夫だよね……。

あ、一応漏電は治りました。

なんか、外にあるコンセントのせいらしいです。

中電が来るまで寂しく待ってました。

9時近くに治ったわけですが……。

普通だったら仕事がひと段落つく時間になのに、漏電でPCが停止。

書いていた文章がパぁ……。

おかげで徹夜になりそうです……。

すみません愚痴って……。

178　目覚めの時（前書き）

茶番回（ファルス）です……。

何だ、この茶番シナリオは……。

１７８　目覚めの時

ＩＳ学園に帰ってきて数週間が立った。

リリィは重体という物ではないにしろ、なぜか目を覚まさない。

リリィの身体はあの後にすぐ回復したのだから。

しかし目覚めない。

一日過ぎても目覚めない。

二日過ぎても目覚めない。

三日、四日と過ぎていき、一週間たっても目覚めない。

その間、束はリリィのそばにいた。

目覚めるまでずっと、そばにいた。

「リリィちゃん……。」

前みたいにすぐに目を覚ましてくれると信じていた。

しかし、リリィは目を覚まさない。

千冬やシャルロット、ラウラや箒、一夏やセシリア、鈴や真耶、楯無が来ても起きはしない。

まるで死んだかのように眠り続けていた。

『……。』

「ねぇ……、なんで起きないのかな……。」

束が俯く。

『……。』

「寂しいよ……。」

ちなみに今日は夏休み前の、最後の授業。

そのため、にぎやかな声が聞こえる。

（そう言えば、あの日もにぎやかな声だったね……。）

「フリーダムは見つかったか？」

千冬は真耶にそう聞いた。

真耶は苦笑いをしながら「見つかっていません」と答えた。

もちろん嘘である。

戦闘終了後にリリィが甲板上で、会話した者に緘口令を引いたのだ。

千冬には自分から話すから、と言って。

真耶は嘘をつくのが苦手だったが、必死に隠した。

千冬に問い詰められても、何も言わなかった。

何故千冬はそんな事を聞いたのか。

それは、リリィの不可思議な現象を知るためだった。

腕は切られ死んでいたはず。

だが、いつのまにか斬られたと言うのが嘘と思えるような回復をしていた。

だから、リリィから詳しい事を聞こうとしたのだが、その前に束との戦闘で意識不明となった。

せめてフリーダムなら、情報を読み取れれば何があったかは分かるだろう。

しかし、フリーダムは見つからなかった。

当初束との戦闘後にリリィは機体を解除したためその辺に落ちているだろうと探したが、見つからない。

必死に探したが見つからない。

束はリリィをストレッチャーに寝かしつけ、共に移動した。

束が持っていたのかもしれない。

だけど束は知らないと言う。

束は本当に持っていない。

というか、誰も持っていない。

フリーダムはリリィと同化したのだから。

そう考えてしまえば、千冬はすでに見つけているのだ。

「……そうか、見つかり次第報告してくれ。」

千冬は真耶を怪しく思いながらも、離れて行った。

「お父様……。」

ラウラは学園の屋上にいた。

リリィが目覚めない事に、少しばかり泣きたくもなった。

しかし「軍人であるなら毅然としてなければ」という思いが、ラウラをいつも通りにふるまわせた。

結果、泣きたくても泣けない一人の少女になり下がっていた。

「……クラリッサ……。　こんな私を笑うか……？」

ドイツにいるであろう、自身の副官を思う。

ドイツはＶＴシステムを使用した事により、コアの7割を回収されていた。

残ったのは二ケタにも満たない数。

シュヴァルツェ・ハーゼは、残ったがＩＳ配備特殊部隊という肩書が軽くなってしまった。

「……ままならないな……。」

軍人である。

しかし同時に愛する者の娘となったのだ。

ラウラは、もどかしい気持ちで空を眺めた。

シャルロットは普通に過ごしていた。

しかし、その笑顔は弱々しい。

死んだと思ったとき、シャルロットの中には悲しみと怒りしか浮かばなかった。

「シャル、大丈夫か？」

「あ、うん……。」

一夏の言葉に一応返事はするが、どう聞いても大丈夫ではない。

しかし一夏も馬鹿ではない。

「そうか……。」

そう言って離れて行った。

シャルロットはそんな一夏を見ず、ただ呆然としているだけだった。

「……リリィちゃん……。」

束は泣く。

どうして話だけで解決しなかったのだろう。

どうして戦闘になってしまったのだろう。

「……ぅぅ。」

それは束の心が弱かったから。

離れてしまう。

理由が知りたい。

だけど話してくれない。

人間は最後の手段として、暴力という手を持っている。

最低な行為だ。

だが、束はそれをやってしまった。

そのせいで、リリィは意識が戻らない状態になってしまった。

俯き泣き続ける。

目からは滝のように涙が流れた。

時は戻らない。

進み続ける。

リリィを攻撃したと言う事は無くならない。

ただ、目覚めを待つだけ……。

その事実が束の心を縛り付けた。

「……っ！」

束はなにかに気がつき、泣きやむ。

頬に何かが触れた。

急いで涙をふき、確認する。

そこには、ベットから伸びた手が束の頬の位置に存在した。

１７８　目覚めの時（後書き）

イラストを描いているため、本日は2度だけの更新となりました。

茶番回です……。

滑稽です。

書いている作者自身、くだらなく思いました。

……ええ。

１７９　精神世界（前書き）

今日はパターン３です……。

つまり、これだけ……。

漏電とか仕事とか色々あるのよ……。

フリーダムのヒントを変更。

179　精神世界

『そんなんでいいの？』

……また、この空間か……。

フリーダムの声にリリィは気が付く。

また、フリーダムはリリィになっている。

眼元が垂れてはいるが、傍から見れば完全にリリィだ。

精神世界。

リリィが無意識下に作った、フリーダムとの対話の場。

真っ暗な暗闇は、リリィの心という事だそうだ。

『本当にいいの？』

フリーダムの声が再度響く。

「……なにが……。」

『束から離れて……。』

その言葉に、束の顔を思い出す。

しかしすぐに首を振って忘れようとする。

「……私がいたら……。」

『不幸になるって？』

リリィの言葉をフリーダムが先に言う。

『……もう遅いわよ……。　束は貴方を愛してるのよ。』

確かにそういう相手の不幸は、その相手が消える事だろう。

リリィは少し考えるが、首を振る。

今のリリィはフリーダムといっても良い。

同化した事により、前世の記憶を手に入れたのだ。

「……私の存在が……束を傷付けるよりはまだいいよ……。」

前世の記憶。

他人を傷つける事にとっては、災厄一。

歩くだけで不幸にしてしまう……。

それでもフリーダムは、他人を傷つけた事はないが。

それが束のそばにいたらどうなる。

絶対傷つけてしまう。

『今まで大丈夫だったのに……？』

確かに一緒にいた十年間は、何もなかった。

「それでも、これから先……今まで通りとは限らない。」

だけど、それがいつまでも続くとは限らない。

明日には自身の災厄が束に降りかかるかもしれない。

周りにいる人たちを不幸にさせるかもしれない。

そんな恐怖が、リリィを縛っていた。

「大体、私は不死だよ……。　不老不死っても行っても良いほどの……。」

それは、人とは違う時間を歩むこと。

変わらない容姿で、以後、何十、何百、何千、何万と生き続けてしまう。

そんな化け物が、一時の幸せを求め限りある生命の者を愛してみたらどうなる。

自分自身が傷付くだけだ。

結局、リリィは自分が傷つく事を恐れているだけだった。

フリーダムはそれを聞くと、軽くため息を漏らした。

『……うぬぼれるな、私。』

突然、低い声で喋ってきたためリリィは目を丸くする。

『他人を傷つけるのが怖い？　傷付けられるのが怖い？』

挑発した様な話し方だ。

『当たり前だ。　生物ってのはな、傷付いて生きていくんだよ。』

そう言うと姿を機体に変える。

『怒って、ケンカして、分かりあって、泣いて……その過程で、傷ついてるんだよ。』

徐々に近づいてくる。

『どうであれ、傷ついて生きているんだ。　私達は傷付けるだけの存在？　だからいてはいけない。　誰がそう言った。　誰が決めた。』

サーベルを引き抜き、首に剣先を向ける。

『そんなのは、ただの馬鹿が理解しなかっただけだ。』

サーベルがリリィの喉元に触れる。

『だけど、いつも私達と接してくれたのは誰だ？　束だろ。』

そう言ってサーベルを首にそわせながら、顔に向けて移動させる。

『束は前も今も変わらない。　種族なんて気にしないでくれる。
だからこそ私達は、自分という意思を保っていられた。』

束がいなかったら、孤独に苦しみ自我をなくしていた。

自我があるからこそ、災厄という害は軽減できる。

害を軽減しようと思えるからこそ、相殺する事もできる。

それが災厄。

ただ害をまき散らす存在。

だが、それは孤独に飢えた者が自我を忘れた結果まき散らすもの。

自我さえあれば、害はある程度相殺できる。

『今束から離れてみろ。　本当の意味で束を傷付ける事になる。』

「だけど……」

『……それともアレか？　年老いていく束を見たくないのか？』

……確かに見たくない。

老いとは悲しいものだ。

目を細めてリリィは年老いた束を想像する。

横に変わらぬ自分がいたら滑稽（シュール）な光景だろう……。

それでも災厄という身体では無かったら、必ず横にいる。

束への愛は変わらない……。

『ほれ、離れたくないじゃないか……。』

……そう言えば、思考筒抜けだったけね……。

フリーダムは顎下にあるサーベルを腰へ戻す。

『まぁ、悩み続けるなら簡単な解決法……「束と同じ命を持てばいい」……。』

「はぇ？」

フリーダムの言葉に、リリィは間抜けな声を出す。

その言葉はリリィが今まで考えた事もない言葉だった。

『ヒントはそれだけだよ……。　道のりは自分で考えて……。』

そう言うと暗闇は晴れていく。

精神世界の終わり。

『最後に楔を打ち込むよ……。　自分に撃ちこむって言うのが嫌な

気分だけど……。』

フリーダムの装甲が光りになって、徐々に消えていく。

『束と貴方（リリィ）を結ぶ楔を……。』

そして気がついた時には、泣いている束の頬に触れていた。

１７９　精神世界（後書き）

漏電してからか、漏電防止のブレーカー良く落ちます。

そのため、更新速度低下……。

……悲しいね……。

１８０　スニーキングミッション（前書き）

本日もパターン３です。

なんかめんどくさくなってきた……。

180　スニーキングミッション

「……リリィちゃん。」

起きぬけに、リリィは束を制し口を開いた。

「……喋るよ……理由を……。」

そして数十分話続けた。

束はただ聞き続けた。

リリィという名の人物を。

前世を、存在を、理由を。

あらゆるものをリリィは吐き出した。

良い切った後、リリィは部屋を出て行く。

束とは顔を合わせ辛いのだろう。

リリィが出て行く際、お互い何も喋らずにいた。

「……さて、何処へ行こうかな……。」

そう言って歩きまわる。

はっきり言って逃げてしまいたい。

しかし、なぜか逃げようと言う気にはならなかった。

フリーダムが言った楔というやつなのだろうか。

思うように動けない。

気が付くとアリーナの前に来ていた。

「……。」

足をアリーナへ向ける。

静かなアリーナにリリィの足音だけ響いた。

周りには誰もいない。

『なぜ、逃げたの?』

フリーダムの声が響く。

精神世界に来てはいなくても、喋る事は出来るらしい。

「気不味かったから、ね……。」

そう言って、歩く。

『そう……。』

ただ何もせずにリリィはそこにいた。

束は部屋から出て行くリリィの後をつけていた。

途中段ボールを使い移動し、迷彩服来て匍匐前進したり……。

そんな某スネークさん的な事はやってはいないが、つけていた。

束は全然悩んだ様子もなく、笑っている。

「もう、リリィちゃんも可愛い悩みを持ってるんだね～☆」

そういいながら、クスクスと笑っていた。

対するリリィは気が付いてないようだ。

「あんな考えで、この束さんは止められないよ～♪」

「何をしている……。」

リリィをつけていると、後ろから声が聞こえた。

千冬だ。

「リリィはどうし……。」

何か喋ろうとして、絶句した。

視線の先には、リリィが歩いている。

「さて、ち～ちゃん。　一緒につけるかぃ？」

「……。」

束の提案に千冬はただ頷くだけだった。

「何してるんですか……。」

束と千冬はこっそりとリリィの後をつけながら移動する。

すると、ラウラに見つかった。

「父様はどうした……。」

千冬同様、いいかけてリリィを見る。

やはり絶句。

「スニーキングミッションだ。」

千冬の言葉にラウラは頷き、ポケットから双眼鏡を出す。

「そう言えば、リリィの腕はどうしたんだ？」

千冬がそう言うと、束は笑いながらしらをきる。

ラウラも眼帯を上手く使って、千冬から目をそらす。

「やはりお前達も真……山田先生同様に何か知っているようだな……。」

「後で教えるから♪」

そう言ってリリィの尾行を開始する。

ちなみに、千冬が「山田先生」と言い直す前に「真耶」と呼び捨てにしかけていたが、その追求と後回しだろう。

「あら？　似合わない事して何してるのかしら？」

そこに、水色髪の生徒会長、楯無が千冬を見つける。

「スニーキングミッションだ。」

ラウラがそう言ってリリィがいる方向を見た。

楯無は少し驚いたのか、口に手を当てている。

「んじゃ、私もおじゃまさせてもらうわ。」

そう言って楯無も追跡という名のストーカー集団に入って行った。

「何やってるんですか、姉さん……。」

リリィを追跡して行くと、なぜか人が集まってくる。

今度は箒だ。

「スニーキングミッションだそうよ。」

楯無が笑いながらそう言う。

「は、はぁ。」

初めて楯無と会うからか、箒はなぜか戸惑っていた。

「箒ちゃんも付いてくる事♪」

束がそう言うと、箒は「一体誰をですか」と言ってストーカーされる相手を聞く。

「あそこにいるリリィちゃん♪」

「義兄さん!?」

そう驚きながら言うと、箒はリリィの姿を探し、そしてアリーナへ

入っていく姿を見つけた。

１８０　スニーキングミッション（後書き）

よし、イラスト飽きたｗｗｗ

それにしても、なんでこんな話になったんだろう……。

真面目っぽく始まったのに、なぜかリリィがストーカーされてるって……。

まぁ、良いか……。

うん……。

ｉｆエンディングが構想で来ました。

いや、正確には想定していたハッピィーではない……束が死んだ場合のエンディング。

シナリオとかに問題ないため、数名から要望があれば掲載させます。

アクセス２００万記念辺りに－－５で……。

要望があれば……ね。

死は一つの終わりではあるが、もう一つの始まりである。

捉え方は多種多様。

だが私はこう思う。

終わりがあるからこそ、人は美しい。

ｂｙ……誰か。

１８１　天使が変わる誕生日（前書き）

……なんか、束っぽくないね……。

別にいっか……。

パターン３です。

181　天使が変わる誕生日

リリィはアリーナのシステムを使う。

それはシールドや色々な設備を使うためだ。

どうせ此処に来たのなら、汗でもかいた方が悩みが取れるかもしれない。

見られながら動くって言うのは好きではないが……。

『……気が付いているか？』

フリーダムも気が付いていた。

どうもさっきから、災厄ではなく天災。

もっとやばい、災害が迫ってきてるようでならない。

そして思いつくのは、二人。

束と千冬だ。

確認のつもりでレーダを使うが、ステルスを使っているからか反応が出ない。

だが、ステルスがなくても束がいる事はすぐに気が付く事はできる。

ウサミミが出ているのだ……。

完全に頭を隠しているつもりなんだろう。

しかし、頭にあるウサミミが飛び出ているせいでバレバレである。

頭隠して尻隠さずとは、こういう時に使うだろう。

『……どうする？』

フリーダムがそう聞くが、リリィは無視をした。

『無視か……。』

リリィはフリーダムである。

ならフリーダムはリリィであっても可笑しくはない。

いちいち言葉にしなくても、会話は可能なのだ。

リリィは目を閉じてフリーダムを展開する。

その光景に千冬は目を見開いた。

「馬鹿な、フリーダムだとっ！？」

探しても見つからなかった機体だ。

それがさぞ当たり前のように、持ち主が持っている事に驚いていた。

束に詰め寄る。

「どういうことだ？」

至って平然とした口調だが、平然ではない。

束はどう説明しようか悩んでいると、リリィの声が聞こえた。

「ねぇ、人で無くなった人は、人と同じように生きれると思う？」

『半分半分だね……。』

千冬と楯無は驚いていた。

話の内容から、リリィが人間ではないように聞こえるからだ。

さらにリリィ一人だけなのに、別の人の声も聞こえる。

通信端末を使っている形跡はない。

「この身は不滅。　不幸をまき散らす古くから存在する種族……。」

『……。』

「そんな私が、人という風に生きれる？」

ラウラと箒は言っている事を半運しか理解できなかったが、リリィが言いたい事は分かった。

人ではないからココから去ろう、と言っている。

束は暗い顔をしながら赤い宝石を握りしめた。

『……無理だけど、私達は害がない。　生きようと思えば、普通に生きる事はできる。』

「人と違う時間で？」

『それでも時間という流れを受け止めなければ、私達は存在しないわよ？』

束以外眉をひそめる。

会話内容が意味が分からないのだ。

『……まぁ、悩みなさい♪』

そう言って声は途切れた。

リリィはフリーダムを纏い浮く。

そして光りを纏って、姿を変えた。

十八枚の翼を持つ天使に。

「で、出てきたら……束？」

その言葉に束はおとなしく出て行った。

「リリィちゃん……。」

束が心配そうにフリーダムを見上げる。

あの時完全に大破した機体が、完全に治っているのだ。

いぶかしんだり、心配したり、首をひねったりもするだろう。

千冬、ラウラ、楯無、箒は束が出て言っても、姿を現そうとはしなかった。

「……束……。　これだけは聞くよ……。」

真剣な声がアリーナに響く。

「これから私がそばにいる事で、死ぬかもしれないんだよ。それでも束はそばにいるって言う？」

「もちろんだよ♪」

結構重い発言だった。

死ぬかもしれない。

冗談ではない事は、口調が告げていた。

それに対し、束は即答する。

それは彼女の覚悟。

そして、愛……。

「私はどんなになっても、リリィちゃんを愛し続ける。それは永遠に変わらないよ……。」

その言葉にリリィは何も言えなかった。

そしてフリーダムは地上に降りる。

「なら……。」

フリーダムを解除して束に近づく。

「私も逃げるのはやめた……。」

そう言って束の頬を手で触れる。

「ずっとそばにいる。　死ぬまでずっと……。」

その言葉は今まで発してきた、どの言葉より真剣で……。

束の覚悟を受け取ったリリィの、返答だった。

「……うん！」

束は大きく頷く。

それを見てリリィは顔を近づけた。

ゆっくり、ゆっくりとこわれものを扱うように。

そしてキスをした。

「誕生日、おめでとう♪」

口を離し、束はそう言ってリリィ抱きついた。

１８１　天使が変わる誕生日（後書き）

なんか、ぐっちゃぐちゃの文だった……。

しかも、またリリィの心境がない……。

飽きっぽいな……。

漏電防止ブレイカーが、嫌な感じで邪魔をしてきます。

まだ家は十年もたってないのに……。

電気屋さん呼びましょうか……。

治るまで、パターン３の一日一回更新が続きます……。

１８２　起きたという事をただ言うのは面白くない（前書き）

……寝不足です……。

テンションあがりません……。

一応、今日はパターン２で行ってみたいと思います。

１８２　起きたという事をただ言うのは面白くない

現在八月の第二週目。

リリィの誕生日の翌日である。

夏休みに入っているため、アリーナの使用は出来ない。

しかし、なぜかアリーナからは爆音とかが聞こえていた。

「いっくん、その判断だと簡単に避けられるよ～☆」

なぜか、放課後に訓練をするメンバーが全員集まっている。

そう、ここにいるのは束、千冬、一夏、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラだ。

「くっ、うぇ！？」

束がレイジングハートを纏い、なぜか一夏と模擬戦をしていた。

雪片で斬りかかっていたところを、ビーム弾で反撃したのだ。

もちろん操作しているため、簡単に一夏に当たる。

絶対防御が発動して、エネルギーが切れたため戦闘は終了した。

何故こんな事になっているのか。

それは数時間前に上る……。

「織斑先生！！」

セシリアが職員室にいる千冬を呼ぶ。

千冬が振り向くと、セシリアはすでに千冬の後ろまで来ていた。

セシリアだけではない。

一夏をはじめとするメンバーがいた。

シャルロットはいないが。

千冬はため息をつきながら口を開く。

「どうした……実家への規制手続きにでもしに来たのか？」

もちろん違うと知ってて言っている。

全員で来る必要がある用事なのだろう。

「千……じゃなかった。　織斑先生、色々説明して欲しい事があるんですが……。」

鈴がそう言って周りを見る。

周りといっても、他の教員である。

千冬はその行動で、机にあったデーターを閉じた。

鈴の行動から、大体予想ができたのだろう。

「分かった……。」

そう言って職員室から出て、近くの生徒指導室へ向かう。

全員が入るのを見ると、千冬はため息をついた。

「大方、束の事だろう……。」

このメンバーは福音事件に参加したメンバーだ。

おそらく福音事件関連であるだろう。

しかし、福音事件は既に説明済み。

細かい事も、大体は説明した。

しかし、その中でも束の事は聞かれてない。

つまりそういうこと。

束がＩＳを持っている事には驚きはしない。

何せ開発者なのだから。

しかし、そこは問題ではない。

機体は説明したのだから。

なら、なぜフリーダムより強いと言う事を聞きたいのだろう。

千冬はそう考えながら、再度ため息をついた。

「で、何が聞きたいんだ？　束が強い理由か？」

「いえ、そうではなく……。」

セシリアが千冬の言葉を否定した。

千冬は考えが外れた事に、首を傾げる。

「束さんをさっき見たんですけど……。」

一夏の言葉に千冬は納得した。

機嫌がいいのだろう。

「……なんであんなに機嫌が良いんだ？」

千冬はリリィの事を言おうとして、普段の千冬では思いつかない事を思いついた。

おそらく千冬も浮かれているのだろう。

「……なら、束に勝ってみたらわかるのではないか？」

その言葉に全員目を丸くした。

千冬は通信機器で束を呼ぶ。

≪はいは～い、どうしたの♪≫

通信機器の向こうから束の明るい声が聞こえる。

「一夏が模擬戦の相手にお前をご指名だ。」

その一言でいつのまにか束対一夏と言う事になってしまった。

結局一夏は負けた。

そんな一夏を見て、束は笑う。

「さて、罰ゲームは……。」

まさかの罰ゲーム。

一夏の顔は青ざめた。

初めて聞いた、罰ゲームという言葉。

束の事だから、普通の罰ゲームではない事は確かだ。

「無数の弾膜を避け切れるか～♪」

その言葉に一夏へ向けて、無数の光条が伸びる。

一夏は目を見開き、エネルギーの切れた白式を仕舞って走り出す。

光りは、ゆっくりと一夏を追う。

その光景にセシリア達は唖然とし、箒とラウラはため息をついた。

シャルロットだけは、目を擦って何度も確認している。

その緑のビームを。

「死ぬぅぅぅぅ！！」

一夏は五分間ビームから逃げた。

「いや～☆　ち～ちゃんからこんな提案を聞けるなんて夢にも思わなかったよ～♪」

その言葉に、一夏以外が束の方を見る。

束の横には、千冬。

それとリリィ。

「「「え”？」」」

もう一度確認する。

束の横にいるのは、千冬とリリィ。

そう、意識不明だったリリィがいた。

１８２　起きたという事をただ言うのは面白くない（後書き）

という事で、次話から４巻突入。

え？

今までのは何だったんだ……。

さぁ？

とりあえず……フラグじゃないよ。

ウォーターワールドを描くよ……。

おそらく。

いや、絶対。

……これ、フラグだよね……？

そろそろ、ＡＣｆａ×なのは　も真面目に書かないといけませんね……。

けど、最近書く気が失せてきている……。

Ａ，ｓもう一度見ればいいのかな？

そんな時に限って、リリィ（ｉｆエンディング後状態）をネギま（アンチ気味）の世界にとばしたくなった私って……。

・構想

現状況に時間が経つにつれ読める、ネギま源本（つまり漫画）装備ｗ
ヒロインは向こう決めｗｗｗ
ほぼ毎回あとがきは選択肢。
投稿から3日間を投票、投稿から1週間後に次話投稿。

結局レイハさんも束も出そうで怖いシナリオ構想になりかけてますｗｗｗ
ライフメーカ＝束（笑）

書かないけどね！
書かないけどね！！
大事な事なので（ｒｙ

１８３　婚姻届に挙式準備（前書き）

ね、眠い……。

あ、結局ウォーターワールドじゃなくなった。

フラグ回収乙だね私ｗｗｗ

１８３　婚姻届に挙式準備

まぁ、結構……といっても誕生日から数日ですが立ちまして……。

ええ、婚姻届を出してきました……。

もちろん、私と束のですよ。

という事で皆様こんにちは、もしくはこんばんは。

リリィ改め、篠ノ之リリィです。

え？

一応日本人ですけど、どうかしました？

私は日本人ですよ。

ええ。

外見こんなんですけど、れっきとした日本人です。

ですので、リリィ・篠ノ之やリリィ＝篠ノ之にはなりません。

まぁ、なったとしたらおそらく……リリィ・Ｆ・篠ノ之になるでしょうね。

あ、ちなみにＦはフリーダムの略称です。

こんな所に、前世の名前を入れるのは微妙ですが、本名を忘れ……てはいませんが、束がくれた名前であるリリィを外したくありませんし、一応この身はフリーダムですから。

おそらくこうなったでしょうね……。

日本人ですし、そうなる事はないけど……。

本名を明かさないため、性は篠ノ之で行く事に決めました。

婿という事でですね……。

あ、もちろん日本国籍は持ってますよ。

国際ＩＳ委員会にエンジェルダウン作戦で負った傷とか他もろもろの、謝罪金や権利で無理やり作りました♪

後々語るとしましょう。

現在、束と共に式場を巡っています。

婚姻届を出しても、まだ挙式を上げてませんからね。

毎回思うのですが、挙式で「汝永遠の愛を望むか」と聞かれますが、望んでいなければ結婚なんてしませんよ。

というか、婚姻届を出した後にその質問はいるのでしょうか。

疑問です。

「リリィちゃ～ん？」

束に呼ばれた為、私は軽く返事をします。

なんか束の向こうには、式場の人がいますね……。

束の事ですから、「説明とかいらないから、あっち行って」とか言いそうなんだけど……。

「ここってさ、席が他の式場より少ないんだって～♪」

後ろで必死に、式場の人が説明していますが束は無視してる……。

「ここなら、ち～ちゃん達だけ呼べるね～☆」

「つまり、余計な人は呼びたくない、と。」

式場の人にも分かりやすいように、翻訳する。

その言葉に束は笑顔で頷く。

あ～、可愛いな～。

当たり前だけど、やっぱ可愛いな～。

もう国宝級だよ、その笑顔。

良い感じで、リリィも壊れてきていた。

「まぁ、身内だけでやった方が良いね。」

私もそう言って、束に賛同する。

式場の人は、説明を聞いてもらえず、若干涙目だ。

私の言葉を聞いた束は「だよねだよね♪」と言いながら、私の腕に気持ちよさそうに目をつぶりながら腕をからめる。

そんな事をされて、私がおかしくならないわけがなく……。

束の頭に、自分の頭をそっとくっつけました。

これ、傍から見たらいちゃついてるんでしょうね……。

「それじゃぁ、ココにします。」

束が気持ちよさそうだったため、私が代わりに言う。

この広さなら、呼びたい人は十分呼べる。

金額もそんなにかからない。

目の前の人が呆れながら、こちらを見ている。

そう言えば、この式場に入った瞬間の第一声が「いらっしゃいませ、ご見学ですか？」だったね……。

私が女に見えるのは仕方がないとしても、見学に来る人はいるのかな？

いないだろうね～。

そんでもって、男だとばらしたら呆然としてるし、いちゃつくと呆れてるし……。

この式場、本当に式あげる人いるのかな？

少し、従業員に感情が出過ぎてる気がする。

動じないで欲しい……。

ま、無理な話か……。

式場の窓口に移動し、日程を決めて契約書にサインする。

ここでも、従業員は驚愕という感情を表に出した。

篠ノ之束という名前のせいだろう。

これでも、元国際指名手配犯。

驚きもするだろう。

警察に連絡がされたりもしたが、一応契約はできたため挙式を上げる準備はできたので、良しとする。

１８３　婚姻届に挙式準備（後書き）

ま、上手い具合にフラグ回収しましたよ……。

今度こそ……。

て、コレもフラグだね……。

何回目だろう……。

１８４　新婚旅行前に（前書き）

とりあえず、結婚式は私が書くと何をかいているのか分からなくなりそうなので、書くのを止めました。

ほんと、マジで、絶対に、うん、本当に……。

確実に意味が通じない文章になる……。

今日もパターン２です。

１８４　新婚旅行前に

挙式を上げ、夫婦なったリリィ達。

小さな挙式だったが、リリィ達は満足だった。

ハプニングと言えば、誓いのキスの時なぜか普通のキスではなく、ディープキスをして招待客を騒がせたくらいだろう。

その時新婦は、まじまじと見てた。

とりあえず、大きな事故もなかったため普通に、至って普通に式は進んだ。

余談だが、束のウエディングドレスからウサミミが見えた様な気がしたらしいが、写真では何も映ってないため、一種の謎となっている。

だが、式が終わり夫婦になったからといって、悩みがないわけではない。

新婚旅行の行き先が決まってないのだ。

「……何処行こうか？」

「どこいこうか～？」

二人で必死に頭を捻る。

だが、なにもでない。
それはそうだ。
二人は逃亡生活で、色々な国で過ごしたのだ。
今さら新婚旅行で、行くような場所はない。
「オードソックスにハワイとか？」
「え～、あそこ人が多いじゃん……。」
リリィの提案に、束が声を上げる。
「だったら、アマゾンに行こうよ～☆」
「……流石に密林や、未開拓の土地は止めようよ……。」
という感じで、なぜか束は危険地帯に行きたがっている。
どうにかして辞めさせないと、死ぬ気がすると言うのがリリィの心境。
（簡単に死ぬ気はないが、流石に密林とか訳の分からない所は勘弁してほしいな～。）
というか、死ぬ気はないと言ってるが、リリィに死という概念があるのだろうか。
そんなこんな言っているうちに、リリィの目の端にある物が映る。

それを見た瞬間リリィは、高速で考え始める。

（うん、大丈夫だね。）

一通りシミュレートするが、問題がない事を再度確認する。

「リリィちゃ～ん、お腹空いた～☆」

束が抜けた声でそう言うと、リリィは思考の海から戻ってくる。

時計を見るとお昼には程遠い。

しかし、お腹が空いたのは事実だろう。

なにせ二人とも、朝食すら食べてないのだから。

学校は夏休みとはいえ、寮があるため学食が開いているのが現状。

しかし二人は、朝食を食べに言ってない。

目の端には、とあるチケット。

リリィは内心で笑った。

（乙女座の私には、センチメンタリズムを感じられずにはいられない！）

そう思い、作戦を決行しようと決めた。

ちなみに、リリィのはしし座である。

十五日ほど生まれるのが遅ければ、丁度乙女座であった。

束を見て口を開く。

「束～。　今日は外食しに行くから、先に駅に言っててくれる？」

その言葉に束は首を傾げる。

「どうしたの？」

「ちょっとした準備だよ♪」

そう言って、束に先言ってもらうとリリィは準備をし始めた。

先ほど目の端に映った物を手に取り、ある場所からある物を取り出す。

「にゃふふふふ♪」

リリィが変な笑い方をしながら束に近寄る。
それを見て束は少し顔を引きつらせる。
「ど、どうしたの？」
いつものリリィとは違う雰囲気だったため、束は少し警戒した。
「何度もないよ～♪　さて、行こうか～♪」
束は理解した。
こういう時のリリィは、何かを起こす前だ、と。
しかし惚れた弱みというやつか、束は何も聞かずにリリィと一緒に出かけた。
ゲート前に、鈴がいたが気にせず駅に向かう。
束が嬉しそうに笑っているが、その視線は何か探っているようだった。
何か決心したのか、束は口を開く。
「……リリィちゃん。　そのバックは……なに？」
リリィが肩にかけているバックを見て、束は不思議そうに思ったらしく質問した。
束からしてみれば、リリィがバックを持つと言うのは意味がある。

なにせリリィは、出かけるときには財布と携帯端末、フリーダム以外は持たないのだ。

そのリリィがバックを持っている。

普通に何かあると思った方が良いだろう。

「秘密♪」

この時束は確信した。

「絶対、食後に何かある」と。

１８４　新婚旅行前に（後書き）

結婚式は……。

シナリオに入れるのなら、映像でですね……。

誰かが録画したのを見ると言うのなら、シナリオに入れても問題ないでしょうね～。

あと、回想とか。

ま、書きませんよ。

書く自信がありませんし……。

ええ。

本当に……。

久しぶりにＴｗｉｔｔｅｒ　のパスワードを思い出しましたｗｗｗ

今まで忘れていたｗｗｗ

１８５　ウォーターワールド（前書き）

……はぁ。

色々書きたいけど、なぜか忘れると言う状態……。

泣けるね……。

185　ウォーターワールド

食後。

未だ時計の針は、お昼を過ぎていない。

どっちかというと、まだ朝といってもいい時間だ。

「ということで、ここへ行きたいと思います。」

リリィは束にそう言うと、ある物を束に見せる。

束はそれを見ると、描いてある文字を読む。

「ウォーターワールド？」

プールの写真を背景に、色々な文字が書かれているチケットだった。

ウォーターワールド。

簡単に言えば、プールの事だ。

今月に出来た施設で、入場チケットが大量に売れるという状態の施設だ。

今月分のチケットは、完売したらしい。

「……え？」

束は目を擦り、もう一回チケットを見る。

「なんで、準備してるのか分からなかったけど……こういう事だったんだ……。」

束はそう言うと、自分の着ている物を見る。

白いビキニタイプの水着。

海の時とは違い、完全に白単体の色の水着だ。

「まぁ、デートって言う事で～♪」

リリィはそう言って、束の手を取る。

束はその手を掴むと、なぜか勢いよくリリィを引っ張る。

もちろんリリィが抵抗する事はなく、束に近づく。

「……。」

束が引っ張った事により、リリィが束を抱く様な形になる。

「……束？」

リリィの言葉に束は反応しない。

お互い水着である。

リリィもパットを付けているとはいえ、水着だ。

胸の膨らみが身体に押しつぶされて、形を変える。

その光景をリリィは感じるし、見てしまう。

つまり、男がそういう光景を見たら……欲情……するわけで……。

オブラートに包んで言うと、リリィの理性が削られていくのだ。

「さて、満足した～。」

しかし、リリィの理性が外れかける手前で束は離れた。

束が離れた事により、リリィは少し残念な気持ちになる。

それを知ってか、束はリリィを見てニヤリと笑う。

「さて、こういう事は最初に言って欲しかったな～☆」

その言葉にリリィは気がついた。

わざとリリィの精神を削ったのだ。

「行こうか☆」

束はリリィを見て、ニヤニヤ笑っている。

仕返しという意味だろう。

（……ぐ……。）

仕方なしに、色々我慢しながら束について行く。

ちなみに衆人環視の中でやったため、束にとっても自爆技であった。

プールでデートというのは、色々な発見がある。

同じようにデートしに来た男女を見て何をやっているか観察したり、水着やパーカーなどのファッションも、付き合っている相手の新たな一面も見ることができる。

そういう面でプールというのは、デートコースには最適なのかも

しれない。

「や～、楽し～ね～♪」

束が本当に楽しそうに、はしゃいでいる。

プールに来た事がないのか、それともはじめてくる施設だからか、束はよくあたりを見ている。

それでも、リリィを見ている事が多いのだが。

そんな中、施設に放送が入った。

≪本日のメインイベント。　水上ペアアタック障害物レースは午前一時より開始いたします！　参加希望の方は十二時までにフロントへ……。≫

それを聞いた束は、首を傾げた。

「……何それ……。」

意味が分からないのだろう。

リリィも聞いた当初、首を傾げていた。

ちなみに、リリィがここへ来た理由の一つだったりもする。

リリィ曰く「情報はあらゆることを解決に導く」とのこと。

つまり、このイベントを知っていたのだ。

≪優勝賞品は沖縄、五泊六日の旅をペアです。≫

その言葉に、束は反応する。

リリィはその様子に苦笑した。

「リリィちゃん。」

束がリリィの名を呼ぶ。

「新婚旅行先は沖縄に決定だよ！！」

束はリリィが思っていたように、イベントに興味を持ったようだった。

１８５　ウォーターワールド（後書き）

ま、新婚旅行先はこういう状況にしようと決めていましたけどね……。

さて、どういう風にセシリアと鈴を暴走させようかな……。

確実にリリィ達が優勝するのは、分かってると思いますけどね～……。

うん。

１８６　水上ペアアタック障害物レース（前書き）

４巻らしくなってきた……。

なのはの方も書きたいためパターン３。

１８６　水上ペアアタック障害物レース

リリィと束は、さっそくエントリーしに行った。

閉め切りには、まだ時間がある。

それまでゆっくり、座って参加者を見ていた。

「弱そうだね～☆」

束がはっきりという。

幸い誰も聞いていなかったのか、怒る人は誰もいない。

リリィはほっとした。

こんな所で問題を起こしたら、千冬に何言われるか分かった物ではない。

せめて、何もない状態にしないといけないのだ。

デートにこんなに神経使うのは、リリィは初めてだった。

「あれ？　リリィちゃん……。」

束が何か見つけたのか指を指す。

「他人に指さしちゃいけない」と思ったが、指を指した相手が、相手だった。

受け付けに近寄っていく。

「エントリーをお願いしますわ！」

セシリアと鈴だった。

こちらには気が付いてない。

二人はエントリーすると、こちらに気がつかないまま別の場所に歩いて行った。

「……なにやってんだろ？」

リリィが呆れながらそう言うと、束が「もしかしたら」といって何かに気がついたようだ。

『さぁ！　第一回ウォータワールド水上ペアアタック障害物レースの開催ですっ！！』

視界の女性がそう言って、ジャンプする。

ビキニタイプの水着を着ているため、豊満な胸が揺れる。

そのため、会場の男性の声が響く。

『さぁ、皆さん参加者の女性陣に今一度大きな拍手を!!』

司会が言うように女性しか参加者はいない。

理由は単純なもの。

女性優遇社会ではあるが、やはりこういうのは女性がやった方がいいのだ。

そのため、参加しようとした男性は「お前空気読めよ」という受付の視線を貰うため、参加を断念している。

決して男性が出れないわけではない。

ちなみに参加に、名前も性別も必要ないためリリィは簡単に参加できた。

「……おぃ、誰だよアレ?」

「え、だれ?」

「あそこの銀髪と紫髪。」

「うそ、美人……。」

「金髪より、美人じゃない？」

小声で、男性の声が聞こえた。

おそらく紫髪と銀髪とは、束とリリィの事だろう。

そして金髪は、セシリアだろう。

というか見る限り、そんな特殊な髪の色した人間はリリィ達しかいない。

リリィ自身そう見られても良いが、束をそんな目で見るのは許せない。

そう思うも、レースに思考を切り替える。

セシリアと鈴が勝つために周りを見た。

そしてリリィ達にようやく気がつく。

『さぁ、スタートですっ！！』

しかしそのときには司会がルール説明をし終え、開始の声と競技用ピストルが鳴った。

その音に全員走り出す。

ちなみにルールはこうだ。

楯横五十ｍのプールに浮いている島を移動して、中央にあるフラッ

グを取れば勝ち。

プールに落ちた人は、元の位置に戻ってやり直し。

さらに障害物は二人ではないと通り抜ける事が出来ない者が多く、相性やコンビネーションなどが試される。

しかもこのルールにはやってはいけないルールがあった。

「セシリアッ！！」

鈴が叫ぶ。

「分かってますわっ！！」

すると開始早々、セシリアと鈴の横にいるペアが足払いを仕掛けてきた。

やってはいけないルール。

それは「妨害してもよい」というルールだった。

普通なら「妨害してはいけない」だろう。

だが、ルール上妨害に関しては許可されていた。

つまり、妨害していいのだ。

「０－８－１－１！」

鈴はコールを言いながら、進んで行った。

ちなみに、セシリアは基本「0」らしい。

すでに大半の参加者がプールに落ち、再度戻ってやり直そうとしていた。

セシリアと鈴は妨害を交わしながら進んでいく。

アレでも代表候補生。

一人で旧世代の軍隊とやりあう事は出来る。

そんな二人が、簡単に進んで行った。

「元気だね～☆」

そんな中、束とリリィは普通に歩いて島を渡って行った。

「そうだね……。」

真面目に進むグループは妨害をするグループに潰されて行き、妨害するグループはセシリア達に落とされていく。

セシリア達は相手が多く、なかなか進んでいない。

そんな中リリィ達は歩いているからか、向かってくる妨害グループが少ない。

だからか、誰よりも中央に近い所にいた。

妨害するグループは、束を守るように歩いているリリィによって簡単に落とされ行った。

１８６　水上ペアアタック障害物レース（後書き）

そういえば、レトルトカレー食べたくなって買ってきたら……。

粉末になったカレールーでした……。

……泣いた……。

とりあえず、作って食べました……。

カレーのせいで時間が消えた……。

なのはの方をかくため、多少１回更新が続きます。

フリーダムのサードシフトは性能面強化だけにしようかな……。

例えば……コジマジェネレータ搭載させてプライマルアーマーやアサルトアーマーなんか……ｗ

別にいらないかｗ

別になくったって、フリーダム最強だしｗ

１８７　妨害なしの方が良かったと思う（前書き）

……話す事がない。

書くことが……やっぱないね。。

さて……どうするかにゃ～。

なのはの方をかくためパターン３。

187　妨害なしの方が良かったと思う

『おお～っと！！　凄いグループが参加していた！！　二人は高校生という事ですが、何か特別な訓練でもしているのでしょうかっ！！』

司会の放送が聞こえる。

リリィは向かってくる妨害グループの腕を掴み、背負い投げの要領でプールに落とし、後ろ蹴りで相方も落とす。

一応相手にけがさせないように、加減している。

それでもトップというのは変わらなかった。

セシリア達はなるべくリリィから離れようと、リリィと反対方向の島に渡る。

会場はいろんな意味で騒がしかった。

「……束……。」

リリィが周りを見ながら、束を呼ぶ。

「先に行っててくれる？」

そう言って適当に、近寄ってくる相手を落としたりして行った。

それが最後だったのか束の周りには誰もおらず、中央まで妨害され

ずに進める。

束は言われた通りに進んだ。

『第一回目にして、凄い人たちが参加しているっ！！　高校生も凄いが、あの銀髪の女性も凄いっ！！　お姫様を守る騎士のように、向かってくる相手を落として行くっ！！　そして守りから攻撃に移るのかっ！？』

司会が微妙に暴走している。

あの間にもリリィはセシリアに向かって行く。

セシリアはそれに気が付くと逃げようとする。

リリィがセシリアに向かわずフラッグを取れば、簡単に勝てただろう。

しかし、リリィはセシリア達の行為が許せなかった。

『おおっと。　ここで高校生ペアに向かって走っていく！！』

リリィに向かってトラップである放水が放たれるが、大きく飛ぶ事によりそれを避ける。

大きく動いたことで、パッドが揺れて観客が湧くがリリィは気にしない。

「リリィさん！！　どうしてっ！！」

リリィが近付いている理由が分からないのか、セシリアが叫ぶ。

「やり過ぎなんだよっ！！」

そう言うとセシリアのいる島にたどり着く。

セシリアは迎撃しようとするが、その前にリリィが足を払ってプールに落とす。

右手に誰かの水着を持って。

そう、セシリア達は相手の水着を奪い、客席に向かって投げ込んで行動不能にさせていた。

リリィはそれが許せなかった。

そう言う事でセシリアが付けていた水着を奪う。

すると、セシリアは驚愕しながらプールに落ちて行く。

更に落ちて行くセシリアを踏み台にして、鈴がリリィを掴もうとする。

しかしリリィはしゃがみながら、右手で鈴の頭を掴みそのままプールに落とす。

左手で落ちて行く鈴の水着を取ろうとするが、ビキニではないため簡単に取れなかった。

それでも取ろうとしたため、鈴の水着は半端に捲れあがった状態に

なる。

『お～っと！！　高校生ペアを簡単にあしらった！！』

リリィは書くる周りを見る。

束が二人の女性を相手していた。

『おっと、ココで相方の危機に気がついたかっ！？』

良く見ると、筋肉質な身体をした女性に束は追いかけられていた。

というか遊んでいる。

軽くあたりを見るが、束を追いかけているのは一人だけ。

そしてその周りにはプールに落ちた人。

「……どういう状態？？」

おそらく相方が落とされたから、中央に行かせないために足止めしているのだろう。

『オリンピック出場の木崎が追う追う追う！！』

その言葉にリリィは呆れた。

『皆さまご存知、木崎、岸本ペアは先のオリンピックでレスリングで金、柔道で銀を取った選手です！！』

「……何それ？」

リリィは呆れを通り越して脱力した。

セシリアから奪った水着を、セシリアに向けて投げる。

何故ここにオリンピック選手がいるのか気になるが、それより束を追う事に少しキレた。

走って木崎と呼ばれた女性に近づく。

「……束を追う貴様は……。」

そういいながら、手のひらでプールに突き落とす。

木崎はリリィに反応できなかったため、驚愕しながらプールに落ちた。

「万死に値する……。」

客席はそれを見て唖然としていた。

１８７　妨害なしの方が良かったと思う（後書き）

……レース終了後、沖縄旅行……かな。

言っておきますけど、作者沖縄行った事がありません。

そのため、旅行は適当に書きます。

うん。

本当に。

結婚式だって、見た事ないし……。

披露宴は、ほんと小さい（おそらく２、３歳）時に１回しか……。

……ほんとだよ。

１８８　プールの藻屑（笑）（前書き）

サブタイトルがきつくなってきた。

もう、ｗｋｔｋとかｋｔｋｒとかｗとかいれて、言葉にしようかな……。

パターン３。

１８８　プールの藻屑（笑）

リリィがプールに突き落としたおかげで、中央にはリリィ達以外には誰も居なくなった。

『……。』

会場も司会も唖然としている。

そんな中リリィは束とともに、フラッグを取りに行く。

ワイヤーでつるされ、宙に浮いた島。

そこにフラッグはあった。

「……意外と低いね……。」

そう呟く。

常人から見れば、つるされた島には一人では届かない。

しかしリリィからしてみれば、簡単に届いてしまう。

ＩＳを生身で制圧出来るだけあって、こういう事は簡単だった。

「束～。」

そう言って束に背を向け、リリィの首に跨った。

かたぐるま、だった。

束がかたぐるまされて、中央の島によじ登る。

ビキニタイプなので、よじ登った時に胸と島との間で擦れずれそうになるが、少し捲れただけだった。

「リリィちゃ～ん♪」

束がフラッグを取らず、リリィを見る。

リリィは上るつもりではなかったため、少し唖然とした。

「フラッグを取ればいいだけなのに」と思っているが、乙女の気持ちは案外複雑なものだ。

束は「一緒に取りたいな～」と思っている。

微妙に意思疎通できそうな二人なのに、なぜか出来ない。

リリィは軽くジャンプした。

中央の島は二人で協力しないと、絶対届かないような高さにある。

それだけで宙に浮いている島に立つ事は普通の人にも、リリィにも不可能だ。

しかし、リリィは上半身を島に乗せた。

誰の力も借りず。

司会も、リリィのスペックを考えてなかったのか目が点になっている。

その間にもリリィは中央の島に無事足をつけた。

「せ～の☆」

束の横にリリィが立つと、束はそう言ってリリィとともにフラッグを取った。

その光景に未だ唖然としている。

「……私達の勝ちで良い？」

リリィがそう司会に向かって言うと、慌てて『き、決まった！！』と司会が叫ぶ。

束はフラッグをつまらなそうに持ちながら、リリィを見ていた。

「さて……。」

リリィはそう呟くと束をお姫様だっこする。

そのまま降りるつもりだろう。

「……リリィさ～ん……。」

しかし、何事もなく終わる事はなかった。

プールが水柱を立てる。

そして声の主、セシリアがブルー・ティアーズを展開して現れた。

「良くも……。」

そういいながらライフルを構える。

その後ろには鈴がセシリアを抑えようと、必死になって止めようとしていた。

『な、なっ、なぁッ!?　ア、ＩＳ!?　……ま、まさかＩＳ学園の生徒なのかっ!?　この大会でまさかＩＳを見られるとはっ!!　あれ!?　けど、コレって良いの!?』

司会が叫ぶ。

セシリアの姿がプールから出た瞬間、会場に「水着とＩＳの組み合わせっていいな」と声が漏れたが、誰も気にしない。

「良くも私(わたくし)の水着を取ってくれましたわね!!」

そう言ってライフルの引き金を引いた。

どうやら、リリィの制裁が気に食わなかったようだ。

レーザーが放たれる。

しかしセシリアがリリィに勝てるという事はあり得ない。

決して……。

『あ、あぶな……。』

司会がリリィに迫るレーザーを見て叫ぶが、リリィはそれを横にずれることで避ける。

会場は唖然とするが、ＩＳ学園の人間にとって当たり前の光景。

束を抱きかかえたまま、島を下りる。

「どうする？」

リリィはいつも通りに束に話しかけた。

聞かれた束は笑顔で言った。

「Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩだね～♪」

その言葉に鈴は全力で逃げた。

そして瞬間的にセシリアはプールの藻屑となった。

「……藻屑にはなってないけど……。」

「気を失ってるね。」

まぁ、リリィが落とすと言った相手は必ず落ちる気がする。

セシリアがブルー・ティアーズを纏ったままプールに浮かんでいた。

水死体のごとく……。

その光景に皆、唖然としていた。

ちなみにセシリアが落ちる前に「そんな馬鹿な、ＰＩＣがイカれたですって!?」と言っていた。

１８８　プールの藻屑（笑）（後書き）

……さて、プロちゃんに名前が欲しいですｗ

え。

プロヴィデンスだよ。

一応、フリーダムがリリィのようにプロヴィデンスにも名前が欲しいです。

というか必要になりそう……。

ちなみに私は咲夜さん動画を見たせいか、プロちゃんの名前を咲夜と考えて、「いやいや、それはない。　不味いって……。」と訳の分からない事を言っていたりもします。

もちろん咲夜さんは、東方の十六夜咲夜ですよ?

……名前どうしよっかな～。

という事で、リリィのように募集します。

……性別？

考えてないな～。

女の子でもいいんじゃない？

男の娘でもいいけど。

男だったら、某仮面男を思ってくれても良いけど……。

性別も任せます。

プロヴィデンスの後継機の武装（武装数含む）と名称も宜しくです。

なるべく沢山の人に考えてくれると薄しいです。

おそらく２００話以降にシナリオが追加されると思うので、一週間ぐらい募集します。

……なんか、前回似た様な事言って無視した記憶が……（汗）

気にしたら負けかな……？

お願いします。

１８９　デートの終わり（前書き）

※良い子はやってはいけません。　捕まります。

そんな話。

一応、パターン３で行きたいな～。

２で行きたいんだけどね……。

上手い具合に……邪魔、が……くっそ、邪魔っ！！

落ちろォ、カトンボォォお！！

189　デートの終わり

セシリアを引っ張って事務所の方へ向かう。

セシリアが起きたら、司会のお姉さんの言葉が降りかかる。

鈴は後ろで、テキトーに聞いたいる。

今回は、セシリアの暴走だから別にいいのだが……。

「被害はなかったから良いですが、もし被害が起きていたらどうする気でしたか！」

運営者の言葉に少なからずダメージを食らっているようだ。

「や～、儲けたね～☆」

そう笑いながら束は言った。

一応ハプニングはあったが、景品である「沖縄、五泊六日の旅」は

ちゃんと手に入れた。

鈴が微妙に悔しそうな顔をしていたが、リリィは気にしない。

（……今度鈴に、何か作ってあげようかな……。）

訂正。

気にしているようだった。

あの大会の後、二人はデートを再開。

行く先々で大会のせいか、見られていた。

束はあんま気にしてはいないようだが、リリィは結構気にしている。

そんな中でデートを続けていたのだった。

「さて、もういい時間だよね～。」

束の言葉に、リリィは時計を見た。

時計の針は右斜め下を指している。

つまり夕方。

確かに束の言う通り、いい時間ではある。

「そろそろ帰ろっか～☆」

デートの終わりを告げる。

二人は着替えるために、移動した。

更衣室へ向かう中、リリィはある事を思いつく。

「束～、着替える前にちょっと……。」

そう言って多少強引に手を引っ張る。

目を白黒させながら、束は引っ張られた。

そしてついた場所は、人目がつかない場所。

監視カメラもない。

束はそこで、リリィに押し倒された。

「……。」

リリィは無言で束を見る。

「……。」

束も無言でリリィを見返す。

「……野外プレイ？」

そう言うと、リリィは微妙な顔をした。

どちらかというと、場所的にはそうなのかもしれない。
だが、公共施設内でもある。
「大胆だね～。」
「……さっき抱きついてくれた時のお返しだよ。」
束の言葉にリリィは簡単に返答する。
「……あの時から、少しばかり我慢が出来ないんだよね。」
そう言うとリリィは、束の水着に手をかける。
束は少しばかり頬を赤く染めた。
「責任、取ってもらうから……。」
そう言いながら、リリィは束の水着をはぎ取る。
束の胸が露わになった。
リリィは無言で胸に顔を近づけ、舌でなめたり先端を甘噛みして束を悶えさせる。
片方の手で空いている方の胸を愛撫し、もう片方の手でもう一枚の水着を取った。
束が大きな声を出さない様に、口を手で押さえている。

「声出しちゃえば？」

リリィはそう言うと、女性の敏感な部分を攻めた。

ＩＳ学園に戻ってきたのは、アレから二時間後だった。

「もう……、まさかあんなにするなんて……。」

束はリリィに背負われていた。

「おかげで、私こんなんだし……。」

つまりやり過ぎたせいで、まともに動けないと言うわけだ。

リリィは苦笑いして、その言葉を聞く。

あの場で行為をしたのに、誰にも気がつかれなかった。

それが拍車をかけ、数度にわたる行為の実行に繋がったというわけだ。

「でも……。」

束はそう言うと、リリィに強く抱きついた。

「……幸せだったよ♪」

リリィはその言葉を聞きながら、寮に向かって歩く。

すでに辺りは暗く、夜だと言う事を二人に示していた。

静かな道を歩く。

寮は目前。

そんな中、悲鳴が聞こえた。

「……なんだろ？」

「さぁ？」

悲鳴を聞いても、なぜかのんびりと歩く。

そして二人は寮に入って行った。

後日聞いたところ、悲鳴の主はセシリアだったそうだ。

おそらく、ウォーターワールドの件だろう。

リリィと束、鈴は「関係ありません」と言いながらセシリアを見捨てたらしい。

１８９　デートの終わり（後書き）

プロちゃんの後継機名と武装、名前とかはまだまだ募集中です。

機体武装は、全員の見て良い所取りするかもしれないけどｗｗｗ

次話は……旅行前の束回ですかね～？

そして、やってしまった……。

１９０　アイドルへの第一歩（前書き）

今回は前々からやりたかった、束シナリオ。

まぁ、はっきり言ってアレです……。

ええ、アレです。

本日もパターン３なり。

１９０　アイドルへの第一歩

「……Ｄ－７席らへん傾いてない？」

旅行三日前。

リリィは第二アリーナにいた。

周りにはＩＳを纏ったせいとやら、重機を扱っている生徒がちらほらいる。

「そうですか？」

眼鏡をかけた女子生徒が聞き返す。

「うん。　ちょっと０．４ｃｍくらい右が前に出てる気がするんだ。」

そう言うと、生徒はそこに行く。

『本当ですね。　０．４ｃｍ傾いてました。』

無線から女子生徒の声が聞こえた。

「んじゃぁ、直しといてもらえるかな？」

『了解です。』

旅行前に何をやっているのか。

それは翌日に分かる事だったりもする。

『ステージの微調整しました。』

リリィがその方向を見ると、アリーナにステージが出来ていた。

椅子もアリーナに地面に設置されている。

「ＯＫ～♪」

翌日。

「やっほ～！！」

束がステージで叫ぶ。

「「「「「「「「やっほ！！」」」」」」」」

アリーナに設置された椅子に、ＩＳ学園の制服を着た生徒がいる。

「はい、という事で初めての……コンサート？　で良いのかな？？
リリィちゃん～、コンサートだっけ？」

「いや、ライブ。」

束が振り向きながら聞くと、リリィは簡単に返答。

という事で、束に了承を得たライブをやっていた。

アリーナには、生徒が沢山いる。

束がアイドル的なテンションになり、ＩＳ学園内では束のファンや信仰者が増えた。

束自身、悪い気はしていないようなので、それらは放置している。

切っ掛けは束の歌なのだが、奇抜な服装が人気もありなぜかＩＳ学園でのアイドルという事になっていた。

そして今は夏休み。

ライブになった理由は、以下のとおりである。

リリィが作ったブログに、ＩＳ学園内のみしか発売してない束の曲を宣伝。

某有名動画サイトに投稿して、ブログに張り付けた所「どこのアイドルですか！？」やら「この人の別の曲はありませんか？」などのコメントが殺到。

仕方なしに、リリィが業者に頼みＣＤを製造。

ダウンロード販売もしたところ、週刊販売ランキングトップになってしまったほど人気があったらしい。

さらに反響が反響を呼び、「もっと！！」や「ライブは！！」などコメントをいただいた。

その結果、ファーストライブをして販売しようという事になった。

束いわく「お金は儲けるだけ儲けよう♪　そして、目指せトップアイドル～☆　そして地球を、私が支配するのだ～♪　あ～はっはっはっはっはっは☆」だそうだ。

そんなこんなで、ライブをしている。

「それにしても凄いね～♪」

ダンサーなのか分からないが、マスコットっぽく灰色と薄茶色の猫が立っている。

もちろんきぐるみだ。

中に誰がいるかは、秘密としよう。

「とりあえず、今日は何曲か歌お～うということらしいね～。」

その言葉に生徒が湧く。

「私的には歌わなくても良いかな～って、思ってたりもするんだけ

ど。」

「「「「「「「「「「「「ええ～！？」」」」」」」」」」」」

「にゃはは、嘘だよ♪」

いつもの束より、テンションが高い。

「……それにしても、どのタイミングで……。　歌い始めればいいのかな？」

全員微妙な顔をする。

束には「自由にやっていいよ～」とリリィが言った為、困ったような表情をしていた。

「ま、テンション上がるまではお話でもしてよっか～☆　リリィちゃんと。」

その言葉に生徒は微妙に湧いた。

リリィが混じっても良いらしい。

「……あ、それとも、ねこさん達とお話してようか～？」

その言葉に、中の人も驚く。

必死に手で「無理無理」と表現し始めた。

「え～、ダメなの～？」

束の言葉に猫は頷く。

がっかりしながら、マイクを握り直す。

「じゃぁ仕方ないな～。　……歌おうか……。」

そのままライブは続いた。

ちなみに、リリィのブログに「一般公演してください！！」やら「映像発売まだ～？」などのコメントが急増し、急いで発売した所……すぐに完売したそうだ。

１９０　アイドルへの第一歩（後書き）

ちなみに、束のアイドル化のためだけにブログ作ったりもして……。

まぁ、これで……そのうち、束のゆかりん化が……出来るかな～、て所かな？

すでに、なっている気もするけど……微妙だしね。

さて、次回は……なんだろ？

……次回は……次回は……。

……。

次回のお楽しみ～！！

……サーセン。

さんて言ったらいいのかわかんなくなっちゃった。

１９１　その技は不味い（前書き）

新婚旅行中のネタ回です。

ほとんど千冬が主人公♪

パターン３なりｗ

１９１　その技は不味い

リリィと束が新婚旅行へ行ったため、千冬は少しイラついていた。

「千冬ね……ぐほっ！？」

一夏の言葉にも、すぐに拳を飛ばす。

それほどまでイラついていた。

（ああ、何故私がここまで腹を立てなければいかん……。）

理由は簡単。

千冬の初恋の相手が、親友に取られたからである。

そう、リリィを束に取られたからだ。

ある程度はこうなる事は予測はしていたものの、諦めきれないと言う状況。

十年前から気がついていたのに、十年たった今でも諦めきれない。

鉄の乙女もこう見えて、可憐な乙女だったと言う事だろう。

「織斑先生だ。　またっく……。」

それでも教師としての役割は、ちゃんとやっているのは流石というべきか。

「さて、今日は一突(いっとつ)でも教えてやるか。」

そして現在、白騎士を纏い一夏に剣術を教えていた。

「……え。　白鷺の次は散桜じゃないのか？」

一夏が殴られた頭を押さえながら、千冬に質問した。

「一夏……。」

箒が憐れんだ表情で一夏を見ている。

千冬もため息をつく。

「一夏……。　義兄さんが出していった順で覚えないといけないと言うわけではない。」

箒の言葉に一夏は「へ～」と言って納得していた。

理解しているのかしていないのか、よく分からない返事だった。

「まぁいい。　織斑。　……そこを動くなよ。」

千冬は白式を展開している一夏に向かってそう言うと、雷刀・桜を左手で構えた。

「え？」と惚けた顔で一夏は千冬を見る。

構えを見て箒は目を見開いた。

流石道場の娘はある。

雷刀・桜の剣先を、右手の親指と人差し指で軽く触れる。

ちょっとした狙いをつけただけだ。

そのまま刃を水平に持って行く。

「……いくぞ。」

そう言った瞬間、千冬は踏み込むと同時に足のスラスターを吹かし一気に一夏の間合いに入る。

そして雷刀・桜を一夏の首筋を避けて伸ばす。

絶対防御が発動するが、雷刀・桜はそれを無視する。

千冬が止まった時には、一夏が呆然としていた。

一夏の首元に刃がある。

何が起こったのか分からなかったのだろう。

未だ絶対防御は展開されており、刃はそれを貫いている。

「……。」

箒はそれを見て何も言えない。

千冬は雷刀・桜の刃を消すと、腰にマウントし直す。

「今のが一突だ。」

そう言うと一夏から離れる。

「正確には、片手平突きと言う。　リリィが教えてくれた技の中では、威力が高い部類に入る。」

絶対防御を抜いたのだから、威力が高いのは当たり前だろう。

「新撰組のある人物が好んで使っていたとかリリィが言っていたが、そんなのは聞いたことがない……。　だが現に存在する。」

ため息を吐くと、白騎士を解除する。

箒は改めて、千冬の剣技に目を見張った。

「そう言えば、リリィちゃん♪　斉藤ってやっぱ、片手平突き使えるのかな？」

飛行機の中で漫画を読む束。

その表紙には、某明治を舞台とした剣客のタイトルが書かれている。

「さすがに、片手平突きはないでしょ……。」

束を見ながらリリィはそう答えた。

「片手で刀を持つっていうのは大変だよ。　しかも斉藤左手じゃん。」

「でも、リリィちゃん出来たよね？」

実は一突は、束が漫画を読んで「リリィちゃんコレ出来ない？」と言ったのが始まり。

もちろん技名は「牙突（がとつ）」。

漫画で新撰組三番隊組長が何度も使った技を、リリィが作り上げたのだ。

もちろん、千冬はその事は知らない。

千冬には技と由来を教えただけで、漫画なんて言う言葉は一言も言ってない。

そのため、千冬は「リリィは、どんどん新しい技を作っていくからな」勘違いをしている。

本当は漫画を読んだ束を喜ばそうとした結果生まれた技とは、本人

達以外誰も知らない。

１９１　その技は不味い（後書き）

さて、次回「？？？」だにゃｗ

まぁ、適当に行きましょうか。

……リリィと束がネギまの世界にログインしたようです……。

作者別作品へ……。

プロちゃんいまだ募集中。

１９２　天使が落ちた日（前書き）

エンジェルダウン作戦。

語られなかった、落ちる瞬間……。

パターン３でス。

１９２　天使が落ちた日

千冬はモニターを見つめた。

誰もいない部屋で、ただ一人モニターを見つめた。

理由は簡単。

そのモニターには、一夏達も知らないエンジェルダウン作戦時のリリィの戦闘が映っていた。

「……。」

千冬は食いつくように、モニターを見続ける。

そして、巻き戻す。

『み～つけた。』

再生すると、シルバリオ・ゴスペルをフリーダムが捉える。

リリィの声は微妙に楽しそうに聞こえた。

そしてフリーダムはライフルを構える。

未だシルバリオ・ゴスペルはフリーダムに気が付いてない。

完全に先手と不意打ちを取った形だ。

フリーダムが引き金を引くと、当たり前のように緑色の光条がシルバリオ・ゴスペルに向かって伸びる。

シルバリオ・ゴスペルは気がついてはいない。

毎回ここで千冬は、シルバリオ・ゴスペルの機動性に目を見開いていた。

『……！』

熱源に気がついた時には、すでに直撃寸前。

確実に高エネルギーが背中に当たる。

『……Ｌａ』

しかしシルバリオゴスペルは瞬間的に射角位置を出したのか、斜め前に半回転しながら転がるようにビームを避けた。

足翼の間にビームが通る。

「……。」

当たらない。

（あの攻撃は、私でも回避できないぞ……。）

そう思いながら、モニターを見続ける。

シルバリオ・ゴスペルはビームを完全に避け切った。

フリーダムはそれを見て、もう一度撃つ。

しかし、シルバリオ・ゴスペルは簡単に回避する。

何度もフリーダムは撃つが、どれもシルバリオ・ゴスペルは回避した。

その動きは、機械的なものではない。

何か意思を感じる。

モニター越しにでも分かる、意思。

しかし、それがなんなのかは千冬には分からなかった。

『……一夏達のために、適度に遊んであげよ……。』

そうモニターから声が聞こえると、ライフルを左手に持ち右手でサーベルを引き抜く。

フリーダムは、シルバリオ・ゴスペルを止める気がない。

今の言葉は千冬にそう感じさせた。

（一夏達を成長させるためか……。）

確かに何回も訓練をするより、一回実戦をした方がはるかに成長はする。

しかし、教育者としてその考えは否定したかった。

シルバリオ・ゴスペルはフリーダムから距離を取りつつ、主砲であるシルバー・ベルを放つ。

『Ｌａ……』

羽やいたるところに装備された砲門から、光りが放たれる。

束が使うレイジングハートの攻撃ほどではないが、かなり威力がある事は確かだ。

全三十六門からフリーダムへ火線が伸びる。

『……狙いが甘いよ！！』

しかしフリーダムは、火線に向かって行く。

砲撃を避けながら、シルバリオ・ゴスペルに近づいた。

三十六の砲撃を簡単に交していく。

シールドも使わない。

そして間合いに入った瞬間、サーベルを振るう。

『Ｌａ！』

シルバリオ・ゴスペルは避けるが、フリーダムが追撃する。

何度も何度も、板ぶるかのようにサーベルを振り続ける。

『っ！？』

そして、いきなりフリーダムに向かって火線が伸びた。

フリーダムはいち早く気がつき回避行動に移るが、火線の数が尋常ではない。

『貴様っ！！』

リリィが叫び、モニターがプロヴィデンスを映す。

周囲にはプロヴィデンスのドラグーン。

フリーダムがプロヴィデンスのドラグーンから間合いを取り、シフトを変化させる。

しかし、シフトの変化が仇となった。

若干減速してしまうのだ。

『がっ！？』

シフトが変わり八枚の翼を持つ天使となった時には、背後からシルバリオ・ゴスペルの攻撃を食らう。

そして体勢を立て直した時には、プロヴィデンスはフリーダムの間合いに入れていた。

瞬間的にビームサーベルを逆手で抜き斬りかかるが、その前に左手を切られる。

悲鳴はないが、かなり痛いだろう。

血を空中にまき散らしながら、フリーダムは落ちる。

その間にも、プロヴィデンスはフリーダムに向けてドラグーンで攻撃し続けた。

フリーダムの装甲に大半が当たる。

そして、海にフリーダムは落ちた。

「……。」

千冬が映像を止めて目をつぶる。

そして、目をつぶったままモニターを消した。

１９２　天使が落ちた日（後書き）

まぁ、こんな感じでフリーダムは落とされました。

……腹部のジャベリンは……。

映像の続きがあるんですが、千冬が止めたので……。

レジェンドが止めに刺して行きましたｗｗｗ

脳内補完でよろしくねｗｗｗ

１９３　自白剤で聞く答えは時に人を傷つける（前書き）

一夏がギャグ要員のリーダーになりましたｗｗｗ

一夏が壊れる。

パターン３

ＰＶ：２，００８，１１７アクセス　ユニーク：１２０，８５１人　達成。

１９３　自白剤で聞く答えは時に人を傷つける

箒は一夏をロープで縛った。

冒頭から「ロープで縛った」というと、意味が通じるはずもない。

だが、箒が一夏をロープで縛ったのは事実。

その原因は一夏にある。

一夏が束特性の薬を飲んでしまったのだ。

「どうしてこうなった……。」

箒の言葉はただ広い空間に響いただけだった。

箒が部屋で、リリィから出された本にペンを走らせる。

そこには、赤椿の基本特性と武器使用方法に攻撃手順が書かれている。

つまり教本だ。

厚さは小説二冊分くらいだろう。

ちなみに、データーだとハッキングの際色々な情報が漏れるため、紙に書いたらしい。

箒はそれに目を通しながら、必要な所にペンを走らせているのだ。

コレでも箒のＩＳ適正ランクはＣと低い物の、リリィと束のおかげで何とか代表候補生と渡り合う事ができる。

「ふぅ……。」

一息つくと、横に置いていた湯呑を取る。

日本人らしく、中にはお茶が入っていた。

（そう言えば、姉さんが一夏に飲ませろって渡された薬があったな……。）

お茶を飲みながら箒は思い出す。

その薬がある引き出しに目を向ける。

（……アイツらの目の前で飲ませろと言ってたが……。）

束の言葉を思い出し、少しばかり目を閉じる。

アイツらとはもちろん、セシリアと鈴の事だ。

（……絶対、飲ませたら不味い事になる。）

箒はそう思った。

思い返すと、束が何か企んでそうな笑みしか思い出せない。

そう言うとき、何かが起きる。

必ずだ。

「……はぁ。」

少しだけため息をつく。

「篠ノ之さんっ！！」

叫びながら、誰かが部屋のドアを荒々しく開ける。

箒が再度お茶を飲んでいた所にドアを開けたのだ。

思いっきり口からお茶を吐き出していた。

とりあえず箒は、そうなった原因を見る。

「……。」

セシリアだった。

肩を上下させながら荒く息を吐いていた。

「い、一夏さんが！！」

箒はセシリアの口から「一夏」と聞いた瞬間、立ち上がった。

さっき考えていた事と一夏が結びついたのだ。

（くっ……。　こういう時に限って私の感は当たるのだったな……。）

口元を拭くとセシリアに付いて行った。

セシリアに連れられてきた場所で見たのは、モップを手にした鈴と床に横たわりながら変な動きをしている一夏だった。

箒はそれを見て目を丸くした。

「……なんだ……これは……。」

そう言うしかない。

それ以外言葉が出ない。

「……あひゃひゃひゃひゃ。」

一夏が壊れている。

少し一夏を憐れんだ。

「……何があったんだ？」

とりあえず、状況を確認する事にした。

するとセシリアは、何とも気不味そうに喋り始めた。

「……その……。　一夏さんが、何か薬を眺めていて、気になった私達（わたくし）がお話を聞いたところ……「そういえば、束さんが誰かの前でなら飲んでも良いよ～♪」と仰いまして、私達（わたくし）何の説明もなく薬を……。」

つまり簡単に纏めると、一夏が束に渡された薬を飲んだらこうなった、ということらしい。

箒は目の前が暗くなる気がした。

姉が一夏に何かしようとしているのは、完全に分かっていたはずだ。

だからこそ、箒に渡された薬は一夏に飲ませないようにしていたのに、束はそれを見越してか一夏に薬を渡していたらしい。

「……はぁ。」

場をひっかきまわす姉に、箒は少しだけ怨んだ。

「あ、そうだ。」

鈴が思い出したかのように、口を開いた。

セシリアは首を傾げて鈴を見た。

「さっき気がついたんだけど……。　薬飲んでから、一夏が妙に素直なのよ……。　聞きわけが良いし、質問にはちゃんと答えるし……。　こんな状態だけど。」

そう言って床にのたうち回る一夏を見る。

鈴の言葉にセシリアは首を傾げた後なぜか目を光らせた。

一夏に近づく。

「……一夏さん。　貴方の好きな人は誰ですか？」

その言葉に箒達は驚愕した。

もし鈴の言葉を鵜呑みにするなら、おそらく飲んだ薬というのは一種の自白剤の様なものだろう。

もし本当に自白剤だとしたら、セシリアの質問で一夏の好きな人が分かる。

「……好きな人……。」

セシリアの質問に一夏が反応した。

三人とも静かになる。

「俺が好きな人は……。」

三人とも自身の名が出てくる事を祈り、一夏の言葉を待つ。

「……リリィ……。」

しかし出てきたのは、別の名前。

しかも結婚した人間。

だが男だ。

しかも教員。

だが男だ。

しかも天才。

だが男だ。

つまり、一夏は異性ではなく同性の名を言ったという事になる。

三人とも固まる。

「ま、まさか……。」

「確かにあの人はかわいいけどさ……。」

「義兄さんは無いな……。」

全員一夏から引く。

「あっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃ。」

なんかいきなり笑いだした。

箒はなぜか知らないが、避難用の降下ロープで一夏を縛った。

（……こんな一夏は見たくない。）

切実な願いの元に一夏を縛った。

数日後、旅行から帰ってきた束に薬の事を聞くと、本当に自白剤だったようだ。

そのころには一夏から、自白剤の効果は切れており普通に過ごしていた。

それを鈴が知ると、一夏に向かって「アンタがホモになっても、私は受け入れるからっ！！」と堂々と宣言していたそうだ。

だが、それはまだ先のお話。

１９３　自白剤で聞く答えは時に人を傷つける（後書き）

一夏ホモ疑惑。

……まぁ、初恋の相手でしたしね……。

しかもついこの間まで、リリィを女だと思っていましてしね……。

仕方がない……かな？

１９４　振り返ればアクシデント（前書き）

パターン３なり。

というか、ここ最近眠くて……。

仕事終わったら、少し書いて寝ちゃう……んだ。

体重が０．７ｋｇ増えました……。

けどまだ４９ｋｇ越してないからよしとしよう……。

でもなんで増えたんだろ……。

やけ食いに付き合ったからかな……？？

そして投稿し始めて２ヶ月が過ぎました。

２ヶ月間連続投稿って……。

１９４　振り返ればアクシデント

「では、流すぞ。」

ラウラが暗い部屋で、重々しくそう言葉を言った。

部屋の中はかなり静かで、不気味に感じられる。

「うん。」

シャルロットが頷くと、暗い部屋の壁にモニターが映る。

そこには白い花嫁衣装を着た束が映っていた。

お分かり頂けるだろうか。

今ラウラ達が見ているのは、篠ノ之夫妻の結婚式の映像である。

「はぁ、お義母さん綺麗だな～。」

シャルロットはそう呟きながら、モニターを見続ける。

暗い部屋で見ている事に怒る者は誰もいない。

目を悪くする気がするが、シャルロットとラウラは気にしないかった。

むしろ目を悪くしても、この映像を見ないといけないと言う空気が流れている。

神父が何か言ってるが、束は聞いてる感じがしない。

他の挙式と同じように見えるが、常にリリィの方を見ている。

神父も気がついてるのか、若干涙目だ。

誓いの言葉を二人は真面目に言う。

そこら辺は本気なのだろう。

しかし問題はここからだ。

≪では、誓いのキスを……。≫

神父がそう言った時には、すでにキスしていた。

しかも深い方のキスをだ。

……毎度思うが、挙式の神父は何かと誓いのと言い過ぎている気がする。

そんな事を少し二人は思ったが、思考の大半は画面に釘づけだった。

画面の向こうの神父をマジマジと見ている。

それほどびっくりする光景のようだ。

画面の端に黒髪が動くが、誰かに押さえられたのか少し動いた後静かになる。

ちなみにラウラとシャルロットもその場にいたため、誰がどの席についていたのかさえ知っている。

もちろん、今動いた黒髪も誰だか知っていた。

『決まった～！！　沖縄ミスコンテスト！　優勝者は篠ノ之束さんです！！』

かくいう本人は、沖縄の浜辺で水着コンテストに出て優勝していた。

ちなみにミスコンテストというからには、女性のみの参加だ。

そこに束も参加していた。

出場のコンテスト、なぜか賞金が二十万円。

決して安い金ではない。

高くもないが。

せいぜい自動麻雀卓の資金にちょうどなるぐらいだ。

会場には束コールが半端ない。

おそらくリリィのブログで信者になった連中だろう。

『この賞金を何に使いますか？』

司会があながちな質問をしてきた。

束は無視していたため、客席からリリィが仕方なく束に話しかけた。

「……千冬にでもあげる？」

「ち～ちゃんに？　別にいいと思うよ～☆」

なんとなく参加したかったため、賞金の使い道なんか考えてなかった。

その結果、千冬の通帳にいつのまにか二十万が振り込まれる事になる。

映像は束がブーケ・トスの場面になった。

「……。」

「あ、あはは……。」

ラウラとシャルロットは恥ずかしそうにその映像を眺めていた。

ブーケは決して目に入れず、束とリリィの笑顔だけを直視する。

しかし映像は動いた。

画面の中央には常にブーケ。

誰かが撮った物だから、ベストポジションでなければ動かすのは必然。

映像はブーケを取ろうとした人たちを映す。

≪貰いましたわっ！！≫

≪いただきぃッ！！≫

しかしそこに人ならざる者が映った。

ＩＳだった。

≪渡さんっ！！≫

≪僕だってっ！！≫

≪Ｉｃｈ　ｗｅｒｄｅ　ｅｎｔｔ?ｕｓｃｈｔ，　ａｂｅｒ　ｉｃｈ　ｂｅｋｏｍｍｅ　ｅｓ！（残念だが、それは私が貰う）≫

≪貴様らが簡単に取れると思うなっ！！≫

ブルー・ティアーズに甲龍、紅椿にラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩ、シュヴァルツェア・レーゲンに全身装甲ではない白騎士。

それらが一斉にブーケに向かって飛翔する。

真耶も必死に取りに行こうとするが、ＩＳには敵わず唯オロオロしている。

ちなみにブーケ・トスは、、幸せのおすそ分けをするという意味があるそうだ。

受け取った者は次に結婚できると言われている。

つまり誰か好きな人がいるとか、指揮を上げた夫婦の身内が記念に貰おうとしているのだ。

二人は映像をはずかしそうに見ている。

目をそらさないあたり、楽しかったのだろう。

ブーケはＩＳの間を抜けて、真耶の腕に落ちた。

≪え?　ええ!?≫

喜んでるのか驚いているのか分からない声が、部屋に響いた。

１９４　振り返ればアクシデント（後書き）

久々に登場の真耶。

出番少ないけどね……。

シャルとラウラもそうかな？

そして、束姉よ……。

何故新婚旅行に来てまで、ミスコンに出る……。

しかも、何故千冬にあげる？

意味不明な文ですが、挙式も何と薙ぐ濁しながらこんなことがありました～と描いていた。

さ～って、寝よ……。

これから４日間、作者地獄に行ってきます。

更新は、何が何でもやるつもり……。

とりあえず、明日は安泰。

１９５　これが白式の力（笑）（前書き）

……あ～っと、本日もパターン３という１回更新です……。

そしてこれで、一応２００部目なんですよね……。

なんか、ありがとうございます？

２００話ではなく２００分目ですけど……。

１９５　これが白式の力（笑）

アリーナに黄色の火線が走る。

それはレーザに匹敵する速さで、オレンジ色のＩＳに向かう。

しかし黄色の火線は、オレンジ色のＩＳに当たらずに空を切る。

「やるな！」

銀髪眼帯の大佐ファッションの少女がそう言った。

ラウラの事だ。

シュヴァルツェア・レーゲンのレールカノンを下ろす。

そしてワイヤーを展開させた。

「ラウラもね。」

そう言ったのはシャルロット。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩを纏いアサルトカノンとショットガンを構える。

ＩＭＳではなくＩＳとしての戦闘。

いつもの戦闘より少し機動力が低いが、これはこれでかなり凄い戦闘だった。

すでに周りは地面がえぐれ、足場が悪いのにもかかわらずお互い浮遊しない。

完全に地上戦闘。

クレーターになった地面にシャルロットが飛び込み、クレーターからアサルトライフルだけ出し、ラウラに向かって発砲する。

ＩＳのため、ライフルのスコープは顔前のモニターに映し出されていた。

隠れながらの発砲は、ＩＳにとって基本なのだ。

「……２４、２５、２６、２７、２８、２９、３０、３１、３２……。」

ラウラは足場の悪い地面を走り、弾を避ける。

なぜか二人はスラスターも使わない。

完全にＩＳをアーマーとして、人としての戦闘をしていた。

「……なんだ、この戦闘……。」

戦闘を見ていた一夏が呟く。

それほどまでにＩＳとしての戦闘を逸脱し、ＩＳとしての戦闘以上の戦闘をしていたと言う事だ。

「さて、次は一夏だな。」

箒がそう言うと一夏は白式・雪羅を展開した。

白い装甲を一夏が纏う。

「……よし。」

全員一夏を見る。

一夏は気にせず雪片を握った。

だが、誰も動こうとはしない。

「……一夏。」

せいぜい鈴が名前を呼ぶくらいだ。

「どうした？　何か変か？」

一夏がそう言うと、全員頷いた。

呆然としながら箒を始め、セシリア、リン、シャルロット、ラウラ、
それにリリィの代わりの千冬が目を丸くしているのだ。

「……なんで髪が長くなってるの??」

全員の言葉を鈴が代弁した。

「へ？」

間抜けな声を出し、髪を触る。

後頭部を触る。

髪に触れられるのは当たり前。

その触れた手を徐々に下ろす。

首。

ある。

下ろす。

肩。

ある。

下ろす。

腰。

まだある。

手が伸びなくなったため、髪を持った手を前に待って行く。

そして一夏は初めて見た。

……自身の黒い髪が、あり得ないぐらい伸びている事に。

「……なんじゃこりゃぁぁぁぁ！？」

一夏の膝ぐらいある黒い髪。

荒い髪質ではなく、美しい髪質でもない。

普通の髪の毛。

その髪が、一夏の頭皮からかなり伸びていた。

「こちらが聞きたいな……。」

箒がそう言うと、一夏以外が頷く。

一夏が髪から手を離すと、サラリと髪が元に戻る。

女性のように髪が纏まり、全員「一夏だよね？」というように、混乱が起きた。

そんな中、白式からモニターが表示される。

≪やぁやぁいっくん☆　未来のお姉さん♪　束さんだよ～♪≫

文字がけ映っているはずなのに、本人がそこにいるように感じられる。

≪うん、うん。　皆いっくんの姿に驚いてるよね～♪　そんないっくん達に説明してあげよ～う☆≫

全員めんどくさそうに、その文字を眺めた。

≪実はね～、白式の第二形態の雪羅には五回に一回の確率で、いっくんの髪が伸びる仕掛けを施しました～♪　はい、はくしゅ～パチパチパチパチ～☆≫

「「「「「「「「「「なんだそりゃぁぁぁぁ！？！？」」」」」」」」」」

全員驚愕。

なんか変な機能が付けられていた。

≪あ、解除後は髪の毛切らないと長いままだからね～♪≫

束のこの発明で、後に世界にいる抜け毛に困っている人たちが救われる事になるのは、まだ先のお話。

なんでそんな無駄な機能をつけた事やら……。

１９５　これが白式の力（笑）（後書き）

なんかパワーアップすると、髪の毛って伸びるよね……。

サイヤ人とか、どこぞの魔法先生とか、死神代行者さんとか～。

髪の毛が急に長くなるってことは、パワーアップですよね～（笑）

なんか、もう、やっちゃったーて感じ超えたんですけどー。

……寝ましょう……。

１９６　ラウラの初恋（前書き）

原作に戻ってきました……。

はぁ、何話使ってた事やら……。

長らくお待たせしました。

これから（おそらく）真面目に原作どおりに行くと思います。

パターン３なりｗ

196　ラウラの初恋

リリィと束が新婚旅行から帰ってきた。

その翌日。

ラウラとシャルロットはリリィ達の前で、摩訶不思議な事をしていた。

ラウラが起きぬけに、シャルロットの頸動脈にナイフを突き付けるように当てたのだ。

もちろん寸止め。

「……ら、ラウラ？」

シャルロットが困惑した表情でラウラを呼んだ。

「え～っと、お義母さん達着たから、起こしたんだけど、ラウラ…うなされてて……。

……え～っと……。」

しどろもどろになりながら、シャルロットは説明する。

ラウラは目をずらすとシャルロットの向こうに、背を向けたリリィと束がいる事を確認できた。

「そ、そうか……。」

ラウラはそう言うと、ナイフをシャルロットの首元から外した。

「すまない……。」

「ん、別に良いよ。　気にしてないから。」

本当に気にしてない風に、シャルロットはラウラに言った。

「そうか……。　助かる……。」

二人が同じ部屋にいるには理由がある。

シャルロットが女だと知ると、シャルロットは一夏の部屋から当たり前のように変わる事になった。

男と女の同性は不味いと言う事だ。

そして部屋替えした先がラウラの部屋。

その時には丁度ラウラと一夏のいざこざは解決していたため、ラウラはすんなりシャルロットと生活し始めた。

はっきり言ってしまえば、同じ人に引き取られたのだから一緒にいた方がお互いいいだろうと言う事だったりもするが、気にしたら負け。

なんやかんやで、一緒にいる事にお互い不満はないのだ。

「ところでさ……ラウラ……。　やっぱり服着ないのかな？」

ラウラは現在、裸。

リリィは背を向けているため、同性しか見ていないが、裸である。

というか、ラウラは寝るとき何も着ないらしい。

一応女子寮だったから問題はなかったのだが、今では一夏と言う例外がいる。

全裸は不味いだろう。

「寝るときに着る服が無い。　というか支給されてない。」

ラウラがシャルロットの問いにそう答えた。

再度確認しておくが、ラウラは軍人である。

そして親がいない子供だった。

つまり、軍人でラウラは支給品で事足りると言っているのだ。

当然支給品にパジャマなんてものは存在しない。

すると必然的に、寝るときに着る寝間着は無いと言う事になる。

結果、寝巻がなければ裸で寝ればいいという答えにたどり着いたらしい。

「……風邪引くよ？」

シャルロットの後ろで見ていた束も、口を開く。

その言葉にラウラも少し悩んだ。

「まぁ、後で考えよう。　所でシャワーを浴びてくるが……。」

「え、ああうん。　どうぞ。」

ラウラの言葉にシャルロットは普通に返答した。

「……一緒に入るか？」

「ふぇ！？」

突拍子もなく、ラウラがシャルロットに向かって言ったため、リリィ達は目を丸くした。

別に女の子同士が一緒に入る事は可笑しくないのだが、なぜか慌てるシャルロット。

何を考えている事やら……。

「冗談だ。　気にするな。」

そう言って、ベットから立ち上がってシャワールームに歩いて行った。

ラウラはシャワーを頭から浴びて、先ほどシャルロットに刃を向ける前に見ていた夢を思い返す。

（……恥ずかしい……。）

そう思うほどの夢。

正確にはそんな夢ではないが、それを自覚させられる夢であった。

暗い地下室に監禁された自身。

水の音しか聞かせず、食事を与えられない状況。

そんな時に現れたのは、一人の女。

その女が、ラウラに言ったのだ。

「「お前は……義父が好きなのだろ？　一人の女として愛しているのだろう？」だと……。」

夢の中で聞いた言葉を自分で言って、恥ずかしくなる。

初めて知った恋心に、ラウラは変な気分になった。

しかし相手は妻を持つ身であり、自身の義父親。

どうしたらいいか分からなくなった。

１９６　ラウラの初恋（後書き）

さてさて、地獄に言ってきて帰ってきて。

地獄へ行って、帰ってきて。

本当は地獄で更新し続けているんですけどね……。

私……死にそうです。

やーｗ

蚊が多いネ。

１９７　買い物へ行こう（前書き）

パターン３です。

地獄が終わった……。

だが、まだ地獄。

特に人生が……。

197　買い物へ行こう

「よし、買い物に行こう！」

「「……買い物？」」

いきなりの発言で混乱すると思うよ……。

ということで、皆さまこんにちは。

もしくはこんばんはでしょうか？

リリィです。

朝食を食堂で食べていたら、束がいきなりそう提案してきました。

おそらくラウラの寝間着を買いに行こうと言ってるのでしょう。

……うん、買いに行け。

「うん、私の下着を買いに。」

……おぃ。

束がリリィの思考とは別の発言をした。

思わず、手に持ったスプーンが落ちそうになる。

……自分のため……だと。

少しばかり束を見る。

「にゃはは、冗談だよ。」

リリィの目に気圧されたか、それとも本当に冗談なのかよく分からない。

「とりあえず、パジャマ回に行くよ～。」

そう言って、自分が頼んだ食事に手をつけ始める。

ラウラとシャルロットは呆然としながら、それを聞いていた。

時は過ぎて、十時ごろ。

私達はラウラとシャルロットの部屋の前に、また来ていた。

「そろそろ行くよ～♪」

束がドアの前でそう言うと、部屋の中があわただしくなった。

……なにやってんだろ??

束が勝手にドアノブを回し、ドアを開ける。

「……。」

するとそこにいたのは、普通に私服を着たシャルロットと……。

軍服を着たラウラだった……。

「なんで……軍服……？」

思わず口に出してしまった。

「む？　これは正式には公用の服だが……。」

ラウラは「軍服が私服だ」と言う様な感じで答えた。

「いや、だから……。　いや、他に服は……？」

「ない。」

私の言葉にラウラは即答した。

……これは、完全に今日の買い物は、ちゃんとしないといけないね……。

改めて、買い物をしなくてはいけないと、心に誓ってしまった。

……ラウラが不憫すぎる……。

一応……心の中で悲しんでおこう。

「ラウラ……。　軍服も……勝手に着たら不味いでしょ……？　制服にしよう……。」

シャルロットがそう言ったため、私は束が開けたドアを閉めた。

……はぁ。

私は心の中でため息をつくのだった……。

バスに乗り駅前のデパートに向かっているさなか、ラウラが真剣に窓の外を眺めていた。

なんか、町を見ている。

おそらく、町をよく見て可愛らしい事を考えて……い……る……、わけないか……。

そう思って、私はラウラの心境を読みとってみる。

高層ビルを見てスーパーを見る。

地下鉄入口を見て、発電施設を見る。

おそらく……。

「あの施設は狙撃地点に使えそうだな……。　それに向こうにあるスーパーは長期戦時にライフラインとして機能させられる。　それといざという時の為に下水道や地下鉄測道などの地図を手に入れておくか……。　あの発電所とは別の独立稼働ができる設備の発電所も探さなくては……。」

ラウラの思考を読みとり、口に出してみた。

おそらくこんなこと考えてるんだろ～な～。

私の言葉に気がついたのか、ラウラが私の方を振り向いた。

目が限界まで開いている。

「……お父様……。」

何故分かったのか、と言いたそうな目だ。

……ラウラが分かりやす過ぎなんだよ……。

大体、私か束が出たらすぐ終わるのに……。

まぁ、軍属生活が長かったから仕方ないと言えば、仕方がないんだけどさ……。

そんな事を考えていると、同じバスに乗った女性たちの視線を感じた。

耳を澄ます。

「ね、ね。　あそこの人たち、凄くない？」

「うわ、キレ……イ？」

「綺麗だよ～。　あんたが言い淀んだ理由はよく分かるけど、その人も綺麗だよ～。　ウサミミだけど……。」

「あの、銀髪の二人親子かな？　無茶苦茶似てるんだけど！！」

「モデルかな？」

「そう……なのか、な？　というか、見た事の無い制服だけど……。」

「馬鹿っ！　あれ、ＩＳ学園の制服よ。　カスタム自由の。」

「え！？　ＩＳ学園って、確か倍率が一万超えてるんでしょ！？」

「そ。　入れるのは国家を代表するエリートだけ……。」

「うあ～。　それであの綺麗さって……。なんかずるい……。」

噂話を盗み聞きすると、突っ込みたい事を言ってくれていた……。

倍率一万とか、あり得ない……。

別に国家を代表するエリート以外も入れないわけではない。

本人はまじめにやっているつもりだろうが、仕事を減らすどころか増やす「のほほ～ん」とした存在もいるのだ。

断じて言おう。

エリートだけしか入れないのではなく、頭が良い者か権力を持った者しか入れないのだと……。

そう突っ込んでいるが、心の声なので誰にも伝わらない。

１９７　買い物へ行こう（後書き）

なんやかんやで、疲れてきている。

ま、別にいっか。

そろそろ２００話に達しようとしているね……。

それが何だって気がするけど……。

１９８　お店を探そう（前書き）

本日もパターン３なり。

ネタ成分の多目。

１９８　お店を探そう

服を見て、昼食、生活雑貨と小物を見て回ろうとシャルロットが提案し、異論がないため私達はゆっくりとデパートを歩き始めた。

ラウラはよく分かってないだけの様な気がするが、仕方がないのだろう。

ラウラとシャルロットが仲良く歩いている光景を、私は後ろから眺めていた。

「リリィちゃん、リリィちゃん。」

「ん？」

束が私を読んだため、顔を見る。

何かあったのだろうか……。

「お金……引き出した？」

……。

その言葉に私は立ち止まった。

篠ノ之家……私と束の夫婦は、基本私が財布を握っている。

束が持つと、科学融合したかのように面白い事が起きてしまうのだ。

核とコジ〇粒子が、なんか、そう、えっと、アレだ、とてつもない感じに化学反応起こしたように……。

昔だと……、一夏と一緒にお菓子を大量生産していた時もあったね……。

それ以降、私が財布を握っている。

束も私がいれば、そんなに無駄使いとかしないためお金はそんなにいらない。

むしろ、束と一緒にいない時間の方が少ないため、私が持っていれば良いと言う発想になっている。

その私はポケットマネーやら、カードという物がこの世にはあるが、使い過ぎや場所の特定をされたくないため、カードとか使わずになるべく紙幣や硬貨などを持ち歩いているのだ。

はい、そこで束が言った事を思い返してみよう。

お金を引き出したか、である。

何度も言うが、私と束は一緒にいない方の時間が少ない。

つまり、買い物をするのも一緒だし、何処でお金を使い、何処でお金を引き出したのかも知っているのだ。

簡潔に言えば、財布の残額も知っていると言う事になって……。

「……。」

私は急いで、銀行に向かって走って行った。

数十分後。

レイジングハートのピーコンを頼りに、束の元に走った。

「つまり、備えあれば憂いなしという事だな。」

見つけた。

ラウラの声が聞こえたため、私はレーダーを消し声のする方へ近づいた。

ちなみに、こんな公の場でフリーダムとかレーダーは展開していないことを、先に言っておこうかな。

忘れてると思うけど、私はフリーダムでもある、

つまり頭の中……というか、レーダーを出さずに確認する事は簡単にできるのだ。

災厄……意外と便利である……。

そして見つけた。

のだが……。

束を中心に、シャルロットとラウラが手をつないでいる……。

私がいないからか、束が中心にいる。

少し凹んだ……。

ゆっくりと後ろに付く。

「じゃぁ、あのお店に行こうか～。」

そう言って束が店を見た。

「「セカンド・イ○パクト」……？」

ラウラと私の声が被る。

ここは不味い。

何か知らないけど、ココに入ったら良く分からない事が起きる気がする……。

なんか、人類の半分以上が死滅しそうな気がする……。

店の外見は、至って普通。

だけど、私の感が告げていた。

ここに入ってはいけないと……。

「た、束……。　ここは止めよう。」

「え？　なんで？」

「とにかく止めよう。」

そう言って束とシャルロットの背中を押す。

そして少し歩いた場所にある、店についた。

「よし、ここならいいか……。」

背中を押す手を離す。

店名は「サード・サーフェス」。

人気があるのか、店内には女性客がいっぱいいる。

「とりあえず、ここにしよう。」

そう言って先にシャルロットとラウラを行かせる。

「……なにしてんの？」

シャルロットとラウラを先に行かせた理由を、束を聞いた。

……こういうのは経験則で言うと、美人が行くと必ず店内が湧く。

先に二人を行かせることで、私の存在を薄めようとしている。

のだが……。

「ほら、いくよ～。」

束に連れられ、私も続いて店に入って行った。

頭の中で「ドナドナド～ナド～ナ」と流れていたのは気のせいであろう……。

１９８　お店を探そう（後書き）

コジマ粒子、セカンドインパクト……。

ついでにフリーダム……。

ロボ系が好きな私です。

特にカッコいい機体が。

白、黒単色系か、スマートな機体が大好きです。

ホワイトグリントとか、ステイシスとか……。

そう言えば、結構ＩＳとＡＣのクロスって見ますね……。

私も読んでますよ。

うん。

よくよく考えると、ＩＳよりＡＣ……ネクストの方が強く感じるのは、武器とコジマ粒子のせいなのかな……。

ＩＳに向けて突付き……。

絶対防御粉砕確定……。

誰かやらないかな……。

オーバーキル……。

妄想垂れ流しサーセンw

１９９　素材が良い人が良い服を着ると（前書き）

さて、結構久々に書いてる感じが……。

パターン３です。

来月の頭らへんに、「ＡＣｆａ×なのは」Ａ’ｓ編１話を掲載予定……。

……まぁ、未だアニメ２話も書き溜めは過ぎてないけど……。

１９９　素材が良い人が良い服を着ると

店に入った瞬間に、私達にもの凄い視線が集まった。

……だから嫌だったのに……。

そう思いながら束の手から抜け出し、立ち上がる。

「金髪（プラチナ）に銀髪（ブロンド）……。」

「薄紫と銀髪の美女……。」

店内が一斉に静まり返る。

……勘弁してくれ……。

そう思いながら、店員を眺めた。

「お人形さんみたい。」

「……何かの……撮影？」

「ユリ……。　お客さんの願い……。」

……本当にこのお店を選んで良かったのだろうか……。

少しばかり不安になる。

他のお客さんに当たっていた店員も、渡す服を落としていたりして

束とか見てるし……。

そのお客さんも、文句を言おうともせず見てる。

なんだろ、このお店……。

こんなお店で大丈夫か……？

「ど、ど、どんな服をお探しでっ！！」

一人の店員が、シャルロットに近づいて行った。

かなり噛んでいるため、店員としては微妙な感じだ。

……別に構わないけど……。

「えっと、この子に似合う服を探してるんですけど……。」

シャルロットはそう言って、ラウラの背中を押す。

店員はラウラを見て、店内の服を見渡す。

あっちはシャルロットに任せればいいのかな……。

というか、私がきた意味ある……？

そう考えていると、別の店員が私達に近づいてきた……。

「な、何かお探しの物ありませんか？」

ふむ、少し噛んだがまだましだろう。

「え～っと、下着ってどこにあるかな～？」

束がいつも通りに口を開く。

「あ、はい。　下着（ランジェリー）でしたらこちらに……。」

そう言って店員は束を誘導して行った。

……やっぱり私、こなくても良かったんじゃ……。

「お客様は、何かお探しでは？」

気が付くと、私の近くに女性店員がいた。

……ん？

もしかして、私に聞いてる？

そう思い、周りを見るが誰もいない。

完璧に私に話しかけていた……。

……というか、ココ女性（レディース）用しか置いてないよね……。

まぁ、私が来てる物の大半は女ものだけど……。

「……だったら、軽めに羽織れるもの無いかな？」

特に欲しい物はないが、一応買っておいても良いだろう……。

「ありがとうございます～。」

私は適当に買うと、束とシャルロット、ラウラを探した。

……。

簡単に見つかった。

束はウサミミのせいで、妙に目立つ。

そのため人の目を引きやすいが、誰もきそうにないファンシーな服のせいで誰も近付こうとしない。

だから簡単に見つけることができた。

「……。」

しかし、束は何をしているのやら……。

明らかに下着を探す感じを出しながら、なんかよく分からないモノを持っている……。

……気にしたら、負けなのかな……。

それにしても……。

「しゃ、写真取っても良いかしら？」

「あ、握手お願いできますか？」

「あ、私もっ！！」

シャルロットに着せ替え人形化されたラウラを見た客が、二人をなぜか包囲している……。

アレは一体何なのだろう……。

そう思いながら、眺めていた。

「た、助け……。」

シャルロットが苦しそうに手を上に上げる。

……なんか、かわいそうに思えてきた……。

そう思いながら、私は二人に近寄った。

「はいはい、ごめんね～。」

そう言って人込みをかき分けて行く。

何人かに、不満を言われたが気にしない。

シャルロットとラウラの周りに空間を作る。

二人は荒い息を吐きながら、息をしていた。

「……大丈夫？」

私はその姿を見て不安げに聞いた。

「ええ、大丈夫です……。父様……。」

試着した黒いワンピースが、妙に乱れている。

店内に二人の洗い吐息だけ響いた。

客や店員が静まり返っている。

……はて、どうしたのやら……？

「「「「「「「「「「父様ぁっ！？」」」」」」」」」」

なぜか、絶叫がその店にこだました。

１９９　素材が良い人が良い服を着ると（後書き）

……なぜか眠い……。

さっさと寝るに限る……。

ネギま×本（コレ）作品やＡＣＦａ×なのは。

やりたい放題っすね……。

基本、何かにとらわれながら書くがあまりないっすからね～。

自由に書くっす。

そう言えば、他者様の作品とコラボしている作品をごくたまに見かけます……。

アレって、他者様の読者も引き付けようとしてるんスかね？

まぁ、私は気にしませんけど……。

２００　厄介事は昼食と共に（前書き）

まぁ、書く事無いんですけどね……。

なんか書いておかないと、気がすまないと言うか……。

パターン３です。

２００　厄介事は昼食と共に

「ふぅ……。　疲れた……。」

「本当に疲れたよ～。」

私と束はそう言って、オープンテラスのカフェの机に顔を伏せた。

あの後、束も私も写真撮影された。

一応、迷惑だと言ったがお構いなしに撮ってくる。

二度とあんな事はされたくない。

一種のトラウマになりかけた。

そんなわけで、時間は正午過ぎ。

昼食にしようと、カフェでランチを食べていた。

私はサンドイッチ。

束はなぜかある……たこ焼き……。

ここ、カフェだよね？

そう思うような物を、束は頼んだ。

ラウラは日替わりパスタ。

シャルロットはラザニアを頼み、全員で食べていた。

「しかし、まぁ……。　良い買い物ができたな。」

そう言ってラウラはフォークにパスタを絡ませる。

黒いワンピースを着たまま、ラウラは店を出たため行く先々で目立った。

ちなみに、私も同じワンピースを買わされそうになったが、全力で辞退した。

泣かれそうになっても、辞退した。

女の涙は、束以外無視すると決めたからね……。

その束の涙も、大半は無視しないと酷い目にあうけど……。

そう思いながら、サンドイッチを口に持って行く。

「お義父さんに、可愛いって言ってもらえたもんね～。」

シャルロットがそう言うと、ラウラはフォークを回していた手を止めて慌てる。

「べ、別に、か、かわ、可愛い……可愛いだなんて……。」

あからさまに動揺し過ぎだよ……。

そこも可愛いけどね……。

ちなみに、周りにいる客はなぜか食欲が失せたかのように、飲み者しか揉まないでいた。

ラウラが真っ赤になって否定するが、どう見ても肯定を恥ずかしがって隠している。

ま、別に理由を気にしたら私の負けなんだろうね……。

私は空気の読めるはずの……男のはず……。

うん。

「そう言えば、午後はどうするの？」

シャルロットはおもむろに口を開いた。

その言葉に私は悩んでしまう。

……そう言えば服を買うってだけで、他は考えてなかったね……。

どうしよっか……。

「雑貨でも見ようか？」

適当に提案する。

「いいね～。」

束は簡単に同意してくれる。

シャルロットもラウラもだ。

つまり、生活雑貨系を見て回ると言う事に決定した。

「そうだ、ラウラも日本にいるんだから、日本製の欲しい物とかない？」

私はそう聞いてしまう。

ラウラに聞けばどういう言葉が返ってくるか知っているはずなのに……。

「俗に言う、メイドイン・ジャパンというやつか……。　うむ……。」

ラウラはたっぷり考え、思いついたかのように口を開いた。

「日本刀だな。」

……泣いた……。

女の子らしさがない物を言われて、全私がないた……。

「お、女の子らしい物は……？」

シャルロットが私の事を気遣ってか、そう聞いてくれた。

「ないな。」

しかし、ラウラは私を裏切らなかった……。

即答だよ……。

本当……期待裏切ってくれないね……。

「「はぁ……。」」

ため息が重なる。

ん？

束はたこ焼きを頬張っているため、ため息をつく事ができない。

ラウラは付く必要もないし、シャルロットはそんなラウラにどうやってか女の子らしい物を聞き出そうとしている。

つまり、私以外ため息を吐く人間はいないと言う事だ。

……誰……？

そう思って、ため息が聞こえた方を見る。

二十代後半の女性が隣の席にいた。

「……。」

「……ども。」

目が合ってしまった。

こういう時に限って、嫌な感じはぬぐえない……。

何か起きる……。

とてつもなく、めんどくさい事が……。

「あ、貴方達っ！！」

私達を見て女性は目を輝かせた。

……本当に、嫌な予感が……。

「バイトしない！？」

２００　厄介事は昼食と共に（後書き）

……カフェにタコ焼きって……。

あり得ない……。

今まで私が行ったカフェに、たこ焼きなんてねぇぇぇぇぇ！！

あ～、話題話題……。

……無いね……。

いや、あったよ……。

祝２００話♪

……２ヶ月ほど連続更新し続け、ようやく２００話です。

こんな駄作が、毎日１０００人の人に見てもらえている状態に、私は泣いた……。

これからも、よろしくお願いします。

……この調子で行くと、７巻終了時には……４００話かな……？

……その頃には「くーちゃん（７巻最後から）」出てくるかな……。

扱いに困っていたり……。

娘（っぽい）の存在がすでに原作にいるのに、シャルやらラウラやら……ね。

そこら辺は原作通りに行こうかな……。

はぁ……。

２０１　それは犯罪だと気が付いてるのだろうか（前書き）

はい、なんか喫茶店の店長アンチになった。

まぁ、呼んでて「こいつって馬鹿なのかな」そう思っただけだし…。

そんな回。

パターン３

２０１　それは犯罪だと気が付いてるのだろうか

なし崩し的に、私達は女性の言葉を聞かないといけない事になった……。

「というわけでね、いきなり二人辞めちゃったのよ。　辞めたっていうか、駆け落ちしたんだけどね……。　ははは……。」

目の前の女性は、精神的に追い詰められているのか、乾いた笑みしか浮かべていない。

同情を誘っているのかな？

……別に同情なんかしないけど……。

「でもね、今日は超重要な日なのよっ！！」

女性は身を乗り出してそう言ってきた。

……厄介事だね、確実に……。

気付かれないように、ため息をついた。

女性は気付かずに話を進める。

「本社から視察の人が来るし……だからお願い！！　貴方達に今日だけアルバイトして欲しいの。」

女性のお店……。

つまり、この女性は店長というヤツらしい。

そしてそのお店というのが、喫茶店……。

メイドと執事が接客をするという、何ともマニア受けしそうな喫茶店だった……。

というか、貴方達と言ったか？

「……別にいいですけど。」

シャルロットがそう言うと、ラウラも「別に問題はないな」と言う。

女性の顔が一気に笑顔になる。

そしてその顔のまま、こちらを向いた。

……なんか、私までやらないといけない雰囲気になってきたな……。

「パス。」

「私もパス。」

束と私はそう言って、女性に言った。

女性の顔がどうしてと言っている。

……この女は、何かに甘やかされているのだろうか……。

現実を甘く見過ぎである。

ここは厳しく言っておこう。

「なんで私達がやらないといけないのかな？　大体、本社の人に「二人が駆け落ちしてお店を止めました」ってはっきり言えば良いでしょ？　なんで、代役を立てようとするのかな？　しかも、二人が良いよって言ってくれたから私達も言ってくれるとか思ってた？　お前……世の中甘く見てない？」

……これぐらい言っておけばいいかな？

大体駆け落ちしたのは、あんた達の店の問題でしょう。

代役立てて誤魔化そうなんて、犯罪ですよ？

本社の評判を気にして犯罪とか……。

本当……呆れた……。

そう思って、コーヒーを飲む。

女性は俯いたまま、何も喋らない。

シャルロットとラウラは苦笑いしている。

私の言葉、ちゃんと理解してくれたのかな？

「大体代役を立てるって言ってるけど、素性とか聞か無かったよね？　それって別に、犯罪者にやってもらっても良いってことだよね

？」

私が言いたい事を理解したのか、束が「あぁ～☆」と言った。

本社があると言う事は、個人会社という事ではない。

つまり、そのお店の系列にも迷惑がかかる可能性があるのだ。

ついでに言うと、アルバイトと言ってはいるが……。

二人は代表候補生。

アルバイトで得るお金の何十倍を、定期的に貰っているのだ。

まぁ、シャルロットは……おこずかいという名目で、手渡しと通帳に振り込んでるが……。

ラウラに至っては、一応ドイツの代表候補生という状態……。

それでも、実質いないも同然なのだが……。

一応ドイツからラウラの通帳に振り込まれているため、ドイツの代表候補生のままなのだろう。

……そう言えば、ドイツから大半のＩＳを正式に奪ったんだっけね。

まぁ、ラウラの他に代表候補生がいなかったんでしょう。

表向きだけで良いから、わが国には代表候補生がいると言いたいのだろう……。

……そう考えると、二人ってアルバイトする必要あるのかな……。

ま、それはともかく、代表候補生をアルバイトさせると言う事は、ＩＳの起動時間を減少させてしまうと言う事に繋がる。

そうなると、その代表候補生の国の技術者は開発も出来やしないし、データーを取る時間が減っていく。

そうなると、おそらく国家がその店と関連企業を訴えるだろう……。

二人には関係ないけどね……。

「ま、二人がやりたいって言ったんだから、どうぞお好きに～。私達はやらないけどね。」

なんか、目の前の女性が鬱になってるよ……。

多分……。

目に光がないし……。

めんどくさいな……もぅ。

そう思いながら、私は再度コーヒーに口をつけた。

２０１　それは犯罪だと気が付いてるのだろうか（後書き）

なんか無茶苦茶な事言っている気がする……。

すっごい無茶苦茶なのは分かってるから、何も言わないで。

何も考えたくない。

ちなみに、起きぬけに書いてました。

少しボケてます。

２０２　二人を観察する男女（前書き）

タイトルに深い意味はありません。

二人　シャルとラウラ

男女　リリィと束

唯それだけです。

パターン３

２０２　二人を観察する男女

二人はバイトに行った。

あの女性は何か壊れていたが、私は気にしなかった。

良い薬である。

そんな私達は……。

「リリィちゃん、これおいし～よ♪」

という風に、そのカフェの近くにある別のカフェでお菓子を食べていた。

時間的に、一応おやつに分類されると思う……。

まぁ、女性には「別腹」というものがあって、束はよく食べる。

しかし、私は食べられない。

……お腹がいっぱいなんです……。

という事で、私は束を膝に乗っけて心を落ち着かせていた。

うん。

椅子に座って、束を膝の上に乗っけているのだ。

良い香りがする～。

リリィの顔が束の背中に当たる。

「……苦しくない……？」

束が心配そうに聞いてくるが、私は気にしない。

苦しくなんかないからね。

むしろ、天国だよ。

そんな中、束が私の閉じている足を無理やり開く。

そのせいで、束は私の膝の上から椅子に落ちた。

少し残念。

だけど、束の顔の横に自分の顔が出せるから良しとしようかな？

「シャルロットも男装してただけあって、似合ってるね。」

私は思った事を言う。

束が膝から落ちた事によって、私の視界が開けた。

まぁ、何も見えなくてもよかったんだけどね……。

「男装してたからね～♪」

束も思っていたのか、私の言葉に同意してくれた。

私の目に映っている喫茶店は、メイド服と執事服の格好をした従業員が働いている。

その中で人気は目に付くのが、シャルロットだった。

執事服を着て金の髪を揺らしている。

カウンターからテーブル。

テーブルから別のテーブルへと、休む暇なく動いていた。

「それより、いつまで「シャルロット」って呼んでるの？」

束が肩越しにこちらを見てくる。

「やっぱり親しみこめて「シャル」ちゃんって呼ばないと～。」

……いやいや。

束……。

束っていっつも……「シャルロットちゃん」って固定してたよね……。

人に言えるの？

……まぁ、いつか行ってみよう……。

そんな事を考えながら、束がお菓子を食べる音を音楽にラウラを探す。

「……。」

男性客に対して、ラウラはコップをテーブルに垂直に叩きつけた……。

……え？

叩きつけたよ？

え、なんで？？

「……ナンパされたね～。」

束がそう言うと、私は何が起きたか理解した。

ラウラが男性客に言い寄られたのだ。

……いや、だからってコップを叩き置くのは……元からじゃないかな……？

なんて、ラウラに失礼な事を考えたのは内緒。

さらに重圧的な態度をラウラは取る。

「……あの男性客……。　喜んでない？」

「よ、喜んでるね……。」

私達は男性を見て同じ事を思ったらしい。

あの男性は……マゾだ……。

おそらく、「超」が付くほどの……。

そのおかげか、ラウラも爆発的な人気が出たらしい。

注文が殺到し、ラウラもせわしなく動き始めた。

そんな姿の二人を見ていると、変な男性集が慌てて店に入った。

「……なんだろ？」

私がそう言った瞬間、シャルロットがいる店から銃声が聞こえた。

その音に、私は目を凝らして良く見る。

男の内の一人が、銃を持っていた。

「リリィちゃん。　あのバック……。」

束がそう言うと、私は男たちが背負っているバックをよく見る。

そこには、紙幣が少しだけ顔をのぞかせていた。

……強盗なのだろう……。

すると、何台かのパトカーが来て店を包囲する。

何世代か前の対応を警官がする……。

おそらく聞いた誰もが思うだろう……。

「古い」と……。

店内の客もそう思っていたのか、微妙な顔をしていた。

シャルロットとラウラだけは、強盗を観察している。

……お手並み拝見と行こうかな……。

２０２　二人を観察する男女（後書き）

眠いっすね～。

熱いっすね～。

この作品に、リリィと束の実子は出ないんだろ～な～。

結局、そう言うのは全部別作品に行くんだろうね……。

２０３　二人の活躍（前書き）

……原作と同じ内容だと飽きるので、少しばかり変える。

パターン３なり。

２０３　二人の活躍

シャルロットは悩んでいた。

「全員動くんじゃねぇ！！」

そう言って荒々しくは言ってきた、男たちを瞬間的に警戒し男たちの死角に移動したのだ。

だが、男が銃を発砲したせいで、店内は動く者がいなくなってしまった。

そうなると、シャルロットは動くに動けない。

動けるとするならば、男たちが下手をするか、隙をつくしかない。

そう思いながら、男たちが持つ銃をよく見る。

どれもが、複製品の質が悪い奴である。

見づらい位置出はあるが、シャルロットは正確に確認して行く。

（……粗悪品って奴かな……。　スライドに隙間がある。）

そう思いながら、考えた。

一般的なハンドガンには、スライドに隙間は少しだけならある。

薬莢を吐き出すため、滑らかにスライドを動かすには少しだけ隙間

がある方が良いのだ。

男たちの持つ拳銃は、「ベレッタＭ９２」の粗悪品タイプ。

スライドの口が大きすぎるため、装填さてた弾が少しだけ見えている。

（……無力化するには、やっぱ捕縛とか、銃器を封じるしかないよね……。）

辺りを見る。

捕縛するには、やはり男たちが持つ拳銃を封じるしかなかった。

しかし、封じれそうなものはない。

別にシャルロット自身、この状況を覆す事は簡単である。

少々荒っぽくはなるが、簡単に男を制圧することは可能。

だが万が一、荒っぽく制圧して一般人に怪我でも追わせたらと思うと、シャルロットの思考は制限をかけられた。

（何か……。）

藁にもすがるような思いで、安全に銃器を封じる手を考える。

そして天井を見た瞬間、目を見開いた。

（スプリンクラー……。）

目についたのは、火災対策の消火装置だった。

そして再度、男の持つ銃器を見る。

（……上手くいけば、火薬を濡らして銃器を封じることができる……。）

「なんだ、お前。　おとなしくしてろって言ったのが聞こえなかったのか？」

だがシャルロットの考えは、男たちの声によって掻き消された。

男たちの方を見ると、そこにはコップに氷を大量に入れた水を持って近づくラウラがいる。

シャルロットは目を見開いた。

状況を打破しようと考えを巡らせていたのに、ラウラは男たちに近づいた。

「なんだお前。　大人しくしてろっていうのが聞こえんかったのか？」

ラウラは男が持っている銃を軽く見て、視線を男に戻す。

「おい、聞こえてんのか！？　それとも日本語が通じないのか！？」

男たちから見ればラウラは日本語が通じない外国人に思えたのだろう。

「そういや、のどが渇いてたんだったな。　おい、メニューもってこい。」

男がそう言うと、ラウラは持っていたコップを乗せたトレーを差し出す。

全員、唖然とした。

シャルロットも唖然としたが、すぐさま思考を切り替えた。

そして、ラウラが起こすと思われるアクションの前に、男に近づいた。

「……なんだこれは。」

「水だ。　だまって飲め。　……飲める物ならな……。」

そう言うとラウラはトレーをひっくり返し、氷を掴み男たちに向かって弾いた。

氷を指弾（しだん）が、男たちの額やのど、銃器を持っていた手に当たる。

「痛てエぇエ！？　何しやがっグオォォ！！」

男が何か喋る前に、ラウラはその者にひざ蹴りを叩きこみ、持っていた銃器を取り上げる。

「ふざけんなよ、このガキィィィ！！」

リーダー格の男がそう叫ぶと、持っていた銃器を発砲する。

しかし、ラウラはラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩのマシンガンを、シュヴァルツェア・レーゲンのスラスターなどを使わないで避けた事がある。

そのため、銃弾が発砲されても簡単に身を反らして回避した。

「クソっ！」

「はい、そこまで。」

一人の男がマシンガンをラウラに向けようとするが、その男の米神に拳銃が押しつけられた。

シャルロットは、ラウラから男たちが所持していたベレッタＭ９２を投げ渡されていたのだ。

男は動けず、マシンガンを取り上げられるとベレッタの持ち手で、意識を刈り取られる。

「なめるなァァァ！！」

そう叫びながら、シャルロットに向かって男が近づく。

手には銃器が無い。

おそらく、最初にラウラに蹴られた男だろう。

「ふっ！」

シャルロットは大きく足を振り上げ、男の顎を蹴りあげる。

（執事服でよかった～。　思いっきり足上げることができるし。）

そう思うと、男を見る。

顎を蹴りあげられた事によって軽く脳震盪を起こしたのだろう、意識が無い。

「目標2、4……。　制圧完了。」

そう言うとシャルロットはラウラの方を見る。

「こちらもだ、目標3の制圧完了。　並びに、目標1の無効化に成功。」

良く見ると、ラウラに腕を後ろにひねりあげられているリーダー格の男がいた。

「はい。」

ラウラに近づきベレッタを渡す。

「すまない。」

それを受け取ると、ラウラは持ち手でリーダー格の男の意識を刈り取る。

結局シャルロットは、ラウラにつられて一般人の安全を考慮しつつ

も戦闘したのだった。

それから少しして警察が突入してきたが、その時には店内にいたのは紙紐で捕縛された男

たちだけで、ラウラとシャルロットの姿はそこにはなかった。

２０３　二人の活躍（後書き）

ウナギを焼いて食べた。

微妙に焦げたため、不味かった……。

お腹が微妙に痛い。

そんな日……。

自爆未遂イベントはワラキアみたいに、カット！　カット！！　カットッ！！

はぁ、お腹痛いな……。

２０４　ラウラらしさ（前書き）

ラウラ可愛いよ、ラウラ。

けど、私は束の党……ブラッククラビッ党ならぬ、ホワイトラビッ党のなんだ……。

え、そんなの誰もが知ってるって。

こんなの書いていたら、嫌でも分かるって。

ソーデスネ。

そんな感じで、本日もパターン３

２０４　ラウラらしさ

シャルロットは警察に妻かると厄介と思ったのか、裏口から店を出た。

ラウラもそれに続く。

もちろん服は着替えている。

警察官に気取られないように、表に出た。

「……ふぅ。」

かなり疲れていたのか、シャルロットは深いため息をついた。

汗は出ていないのに、額をぬぐう。

「コレって宝くじ当てるより、難しい事なんじゃないかな？」

そう思いながら、店を遠くから眺める。

表には警察がパトカーでバリケードを作っており、防弾用の透明の楯を構えている者もいる。

そして店内の異変に気が付いたのか、数名が店内を外から覗き本体にサインを出す。

軍事訓練を受けていた二人は、そのサインがなんなのかよく分かった。

「……ふむ、日本の警察は優秀だな、　うちの国は、微妙に生ぬるい……。」

自国の警察に対して何を求めているのか、よく分からない発言と共にラウラは店に背を向けた。

シャルロットも続いて店に背を向けた。

何事もなかったかのように二人は店から離れる。

そして近くにいるであろう、リリィ達を探した。

なるべく首を振らずに、目だけで探す。

そして薄紫髪とウサミミのセットを見つけた。

どう見ても、束である。

シャルロットはラウラを呼ぶと、束に近づいた。

「お疲れ様～。」

束は二人が近付くと、片手を上げて労働をねぎらった。

シャルロットは「本当に疲れたから、疲れてないとは言えない」と思い、苦笑い。

強盗犯が立て籠るというハプニングは、それほどまでにシャルロットを疲れさせたようだ。

「じゃぁ、どうしよっか？」

束がそう言うと二人は今後の事を考える。

といっても、あと数時間したら夜になってしまうので、何かするにしても長い時間で切るわけではない。

「……ん。　お母様……、お父様は？」

ラウラがそう言うと、シャルロットもリリィがいない事に気が付いた。

束は「さぁ」といって、肩を少し上げるだけだった。

本当に何処に行ったのか、誰も分からないらしい。

「レイジングハートで探す？」

それに二人は頷いた。

束は人目を考えず、モニターを出す。

何人かは驚いて足を止めたが、すぐさま人込みに流された。

「……あ、こっち向かってきてるね。」

束はモニター内で、光点するマーカーがこちらに向かって動いたため、そう言った。

事実、遠くの方で人が二手に分かれて行く。

シャルロットとラウラは何事かと思い、そちらを見る。

「あ、帰ってきてたんだ。」

案の定、リリィがいた。

どうやら人が二手に別れたのは、リリィを避けたことが原因らしい。

「お疲れ様。」

そう言ってリリィは三人に、飴を渡す。

ラウラはなんで持っているのかと聞こうとしたが、飴が包まれている袋に店の名前が印刷されており、そこから貰ってきたのだと理解した。

三人ともすぐに飴を口に入れ、味を楽しむ。

リリィはそれを見て、近くの公衆時計を見る。

「買い物は全部した？」

そう聞かれ、全員うなずく。

バイト前に全ての買い物を終わらせていたようだ。

帰り際に、ラウラがとんでもない事を言った。

「む、金か？　それなら口座に二千万ユーロほどあるはずだが……。」

シャルロットが買い過ぎたため、お金が心配だと嘆いているのを聞いての発言だった。

それを聞いて、シャルロットと束は驚く。

ユーロは、一ユーロで日本円にして約百円と、ドルと同じような価値を持っている。

もちろん何時も変動するため、日本円に変える時期が違えば少しば

かり変化は生じる。

しかし二千万ユーロという事は、日本円にして約二十億あると言う事だ。

「なんで、そんなにあるの？」

シャルロットが恐る恐るラウラに問いかけた。

「ああ。　まぁ、私は生まれた時から軍属だからな。　それにＩＳの国家代表候補生になってからは、その分も上乗せされている。」

そうはっきりと言った。

そして、次の一言は何ともラウラらしかった。

「しかし、引き出し方を知らん。　今まで一度も使った事が無いからな……。」

その言葉に三人とも言葉を失った。

２０４　ラウラらしさ（後書き）

ちなみに、先ほどユーロを確認したところ、１ユーロ　１１４．７３１９２７　円　だそうです。

すると２２億９４６３万以上になり、約２３億円……。

……大金持ちじゃんラウラ……。

そんな事を思っていたり……。

２０５　幸せを呼ぶミックスベリー（前書き）

パターン３

原作通りに、ラウラが鋭い回。

なんか、シャルロットが微妙に鈍い子になっちゃった……。

２０５　幸せを呼ぶミックスベリー

リリィ達は学園に帰る途中、公園によった。

その公園はお城がありそのままにし公園を作った、大きな公園だ。

相変わらずラウラが変な着眼点でお城に興味を持っていたが、素手にツッコミに疲れた三人

は口には出さなかった。

「あ、リリィちゃん！　リリィちゃん！！」

突然束がリリィと呼ぶ。

一瞬何事かと思ったが、リリィは束の方を向くと何を言いたいのか気が付いた。

クレープの屋台があったのだ。

案の定、束が食べたそうな目でリリィを見ている。

リリィは少し笑うと、シャルロット達に「クレープ食べる？」と聞いた。

ラウラは「クレープとは何だ？」と首を傾げていたが、気にしない。

リリィはラウラには強引に食べさせようと考えているのだ。

気にするだけ無駄である。

シャルロットはたべると言っていたので、問題なし。

リリィはクレープの屋台とそれほど離れていないベンチを見つけると、荷物を置き屋台に近づく。

「そう言えばお義母さん。　ここのクレープ屋っておまじないがあるんだって。」

リリィの後ろでシャルロットが束にそう言った。

「「オマジナイ」とは何だ？　日本のオカルトか？」

ラウラがまた微妙にすれた事を言ったので、今回はシャルロットが訂正に入る。

「え～っと……、ジンクスかな？」

「ああ、験担ぎか。」

シャルロットが必死にラウラに分かりやすい言葉を探したが、ラウラは日本特有の言葉でバッサリ切った。

確かに験担ぎに違いはないのだが、なぜかラウラが言うと言葉本来の意味がない様に思える。

束は苦笑いすると、シャルロットに「どういうの？」と聞いた。

「……確か、ミックスベリーを食べると幸せになれるって言うのだ

ったかな。」

思い出しながらそう言うと、束は小走りでクレープの屋台に駆け寄った。

シャルロットがそれに続く。

その姿は、似た者同士という言葉がよく似合いそうだった。

リリィはラウラと一緒に、ゆっくりと近づく。

「すみません。　ミックスベリーってまだあります？」

シャルロットが二十代の店員に聞くが、店員は少しばつの悪そうな笑いをすると「ごめんなさい。　今日はミックスベリー、終わっちゃんたんだ。」といった。

その言葉にシャルロットは少しだけ、うなだれる。

しかし、シャルロット以外の三人は気が付いていた。

何処を見ても、ミックスベリーらしき容器は見つからない。

さらに、メニュー事態にミックスベリーという文字が無いのだ。

「……どうする？」

シャルロットがリリィ達を見てそう言った。

完全に気が付いてないようだ。

ラウラが少しだけ笑い、口を開く。

「ふむ、ならお父様がブド……。」

「ブドウね。」

「で、私がいちご～♪」

ラウラは先に言われたからか、少しだけ動きが止まる。

「で、私もいちご。　シャルロットはブドウで良いか？」

しかし、流石軍人。

すぐさま持ち直す。

男性は色々と驚いている。

特にリリィを見て驚き、ラウラの言葉に更に驚いていた。

「？？」

ただシャルロットだけが、何も分かっていなかった。

クレープを受け取り、四人はベンチに戻る。

屋台から見える位置なので、男性はこっそりとリリィ達を見ていた。

もちろん気が付かない四人ではない。

皆それぞれ、クレープを頬張る。

リリィと束は自分が持っていた物を食べると、互いに持っていたのを食べ合わせる。

本来なら、口移しで互いが食べている物を混ぜ合わせて食べたかったが、人前ではリリィは恥ずかしかったのか、それを止めていた。

「それにしても、ミックスベリー食べたかったね～。」

そうシャルロットは呟いた。

「……ふむ。　まだ気が付かないとはな。」

「何に？」

ラウラはシャルロットを見て、肩をすくませた。

「あの店には、ミックスベリーという商品自体が無いのだ。　ソースの残りが付着した容器もなかったしな。」

そう言うと、シャルロットは感心した。

「そこで問題だ。　いまお父様とお母様が食べている物はなんだ？」

ラウラがそう言うと、シャルロットは「え？　クレープだよね？」といって首を傾げた。

ここまで鈍いとは思っていなかったのか、ラウラは少しばかり肩を落とす。

「なら、何味を食べている？」

「そりゃ、イチゴとブド……あれ？」

そう言ってシャルロットはリリィ達を見る。

お互いのクレープを食べさせているのを見て、目を細めた。

「……ねぇ、ラウラ。」

そして何かに気が付いたのか、シャルロットはラウラの方を振り向く。

「ブドウって……、ブルーベリーって言う？」

「ああ、言うな。」

「ならイチゴはストロベリーて言うよね……？」

「うむ。」

ラウラは満足そうにうなずく。

そして四人が食べている物を確認する。

見事に、ブトウとイチゴだけだった。

「……ミックスさせるから……、ミックスベリー？」

ようやく気が付いたシャルロットに、ラウラは満足そうにうなずいた。

２０５　幸せを呼ぶミックスベリー（後書き）

ラウラの考え方が、原作でも思っていたけどラウラが女の子っぽい。

さて、書くことが無いです……。

そのため、１０９話辺りにキャラの好きな順位を書いたのを思い出し、現在の順位に置き換えてみました。

１：篠ノ之束（ｋｅｅｐ）
２：ラウラ・ボーデヴィッヒ（前回５　３ｒａｎｋ　ｕｐ）
３：織斑千冬（前回２　１ｒａｎｋ　ｄｏｗｎ）
４：山田真耶（ｋｅｅｐ）
５：シャルロット・デュノア（前回３　２ｒａｎｋ　ｄｏｗｎ）
６：クラリッサ・ハルフォーフ（ｋｅｅｐ）
７：凰鈴音（前回９　２ｒａｎｋ　ｕｐ）
８：更識楯無（前回７　１ｒａｎｋ　ｄｏｗｎ）
９：篠ノ之箒（前回８　１ｒａｎｋ　ｄｏｗｎ）
１０：セシリア・オルコット（ｋｅｅｐ）

原作キャラのみなので、リリィがいなのは仕方がなし、と。

皆の中では、リリィは何位に入るのかな？

２０６　二人の子猫（前書き）

決して「2匹の子猫」というタイトルではない事を、言っておく。

「最初に行って区が、おれ～はか～な～り、強い！」……。

久々に思い出しただけです。

そんなこんなでパターン3

腰が痛いです……。

感想で二人が会話しそうだから、早めに別の人感想に入ってェぇェぇ！！！

２０６　二人の子猫

『お、お父様助けっ……！！』

リリィはＩＳ学園に帰ってきてベットで横になっていると、なぜかプライベートチャンネルでラウラが助けを求めてきた。

リリィは首を傾げながら起きあがると、ラウラ達の部屋に向かう。

シャワールームから水がタイルに落ちる音がする。

その音を聞きながら、リリィは部屋を出た。

（……何やってんだろう？）

リリィはゆっくりと通路を歩きながら考える。

通路は夜のためか、人一人いない。

そんな中、リリィは歩いて行く。

そしてラウラ達の部屋の前につくと、部屋をノックした。

「ど～ぞ～。」

シャルロットから返事があったため戸を開ける。

「……。」

そこで見たモノは、二匹の猫だった。

黒と白の猫がそこにいた。

「助けっ！」

「……何やってるの？」

ラウラがリリィに助けを求めるが、リリィは呆れながら二人を見るだけだった。

部屋の中で、白猫が黒猫に一方的にじゃれついている。

本物の猫なら「かわいい」と言い切れるだろう。

目の前にいる猫も可愛いのだが、猫とは違う可愛さなので少しばかり言い方を変える。

二匹ではなく、二人の猫は可愛い。

そう言う事だ。

つまり「猫パジャマを着た二人はかわいい」という事だ。

黒い猫のパジャマを着たラウラを、白い猫のパシャマを着たシャルロットが後ろから抱きつき、ラウラをいじっている。

それをラウラは、困惑しながら耐えていた。

「や、やはり寝る時は裸の方がいい……。」

パジャマについた肉球で、何とかシャルロットの腕を退けようとするが、上手く行かない。

「だめだよ～。　可愛いし、ラウラ似合ってるんだから～。」

そう言ってシャルロットは、ラウラを後ろから抱きしめ続ける。

ラウラの目はリリィに「助けて」と訴えていたが、その願いは届かなかった。

「あ、そうだっ！　ラウラ、ほら「にゃ～ん」って言ってみて。」

その言葉を聞くと、ラウラは目を見開く口を数度開けたり閉じたりした。

「な、な、こ、断るっ！！　なぜお父様の前で、そんな事をしなくてはっ！！」

「え～。　だって可愛いんだよ～。　可愛いのは何よりも優先されるんだよ～。」

すでにシャルロットが何を言っているのかは、リリィにもラウラにも理解ができなかった。

「ほ～ら、にゃ～んて。」

この状態のシャルロットは、ラウラにとって強敵だった。

「可愛いから良い」「これを着ないなんてとんでもない」「残念で

すがその要求は却下されました」「ビデオカメラがお義母さんから届いている」など、いつもとは違う理屈、根拠、交渉などが無い、強引な状態だ。

戦闘で会ったのならラウラにとってはどうとでもできるが、戦闘ではない。

さらに、相手はルームメイトで家族。

それらが合わさり、ラウラは動くに動けない状態になっていた。

「……にや、にゃ～ん……。」

ラウラが小声でそう言った。

ついにシャルロットに折れたようだ。

「にゃ～ん」とラウラが行ったためか、何故かシャルロットの目がきらきらと輝き、「お持ちかえり～」といまにも言いそうな気がした。

ビデオカメラを持ちラウラに向けようとしたところで、ドアがノックされた。

またもシャルロットが「は～い」と言い他人を呼び込んだ事で、ラウラはため息をつく。それを見てリリィは同情した。

「おっす。　何か変わった服着てるな、」

そう言いながら、一夏が部屋に入ってくる。

ラウラは米神をピクピクと震わしていた。

ラウラにとっては、猫パジャマは恥ずかしいのだろう。

「お土産あるんだけどさ、皆どこかに行ってて一人で食べるのもアレだったから、きたんだけど……。　邪魔だったか？」

そう言いながら、持っている紙袋を三人に見せる。

そこには、二人がバイトした店の名前が書かれていた。

暗い闇の中に、一人の少女がいた。

少女の周りには灰色の残骸がある。

それ以外は、少女にとっては唯の暗闇だ。

少女は思い身体を引きずりながらゆっくりと歩く。

「兄さん……。」

暗闇に、その言葉だけが響いた。

２０６　二人の子猫（後書き）

何も言う事はない。

プラモデルを作っていたぐらいで、そのせいで腰が痛いぐらい。

ＭＧウイングガンダムゼロ（ＥＷ）はカッコいいんだけど、墨入れがめんどくさい……。

……あ、これが予約投稿だから……二日前の話になるのか～。

うん。

みてみん　にユーザーネーム「葵　束」で投稿しているのでどうぞ～。

そろそろノリで書いたの書きなおそうかな……。

【新訳／世界とＩＳと名もなき者へ】って感じで……。

今思ったけど、タイトルの前に新訳って入れるとカッコイイよね？

……書く事に関して問題点がかなりあるけど……。

ノクターン（Ｒ１８の方）で完全な奴書こうかな？

でもそうすると、高校生以下読めないよね……。

うn……。

ま、いつか書こうかな？

２０７　国際ＩＳ委員会の不安（前書き）

オリシナリオが戻ってきました。

よくよく考えたら、この話って戦闘がカットできるんだよね……。

なら増やさないと……。

という事で、国際ＩＳ委員会には犠牲になってもらいました。

パターン青……使途です！！

じゃなかった……パターン２です。

ニヤリｗ

２０７　国際ＩＳ委員会の不安

広いアリーナの中央に葵翼を広げた天使が浮いていた。

その周りに数機の機体が武器を構えている。

白き伝説は刀を構え、その弟も刀を構える。

白き騎士に連なる赤き騎士も刀を構えるが、白き騎士たちとは違い二刀流。

≪それでは試合を開始します！≫

というアナウンスの元、フリーダムに一斉に襲い掛かる専用機。

そのためだけに、帰省していた専用機持ちを招集した者がいる。

何をやっているのか簡単に言えば、模擬戦だ。

実は国際ＩＳ委員会から「フリーダムに対して、どれくらいの戦力なら抑えられるのか」という質問があり、何故か束が「だったら模擬戦して見る？」という返答を出したのが、事の始まり。

リリィ本人に「どれくらいの戦力なら抑えられるか」と聞くあたり、これを聞いてきた国際ＩＳ委員会の役員は馬鹿なのだろう。

しかし、そう聞きたくなるのは仕方がない事ない。

世間一般的にＩＳは、世代を重ねる事に強力になって行くのだ。

第一世代が「兵器としてのＩＳの完成を目指した機体」。

第二世代が「後付武装によって、戦闘における用途の多様化に主眼が置かれた世代」。

第三世代が「操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器の搭載を目標とした世代」。

第四世代が「装備の換装無しでの全領域・全局面展開運用能力の獲得を目指した世代」。

第五世代が「携帯型ビーム兵器の装備を可能とし、一機のみで全戦局を覆すことを目指した機体」。

これらを真面目に受け止めれば、第二世代は第一世代に勝ち、第三世代は第二世代に勝ち、第四世代は第三世代に勝ち、第五世代は第四世代に勝つと言う事になる。

別にこれらが絶対というわけでもない。

だが国際ＩＳ委員会にとってみれば、これが当たり前なのだ。

そしてフリーダムは基盤機体。

または初期機体（プロトタイプ）と呼ばれる、これらＩＳの原点なのだ。

つまり「第一世代に相当する」と思われている。

それだとフリーダムは同じ第一世代以外には勝てないと言う事になってしまう。

束が聞いたら「コレだから頭の悪い人間て言うのはやだね～」と、確実に言うだろう。

事実フリーダムは世代分けができない機体なのだ。

数多くの機能を第三世代に送り出し、ＩＳに複数積ませてその機体をスクラップにするほどの技術。

第一世代時に完成していたビーム技術、なおかつ全領域での戦闘を可能とし全てを圧倒できる性能。

アメリカとイスラエルが開発した、最高速度を出す事の出来るシルバリオ・ゴスペルを追い

ぬき、その速度で完全にフリーダムを動かされでもすれば、攻撃何か当たる事のない機体性能。

国際ＩＳ委員会にとって、フリーダムは脅威なのだ。

そのため国際ＩＳ委員会は「フリーダムの解体、情報提示、無期限凍結」を言い渡し、フリーダムをこの世から消し、自らを頂点に置こうとした。

そして、ことごとくそれらを先導した者たちは、束とリリィから社会的抹殺を受けた。

内容は秘密だがお茶の間で空が流れた瞬間、空気が完全に固まったそうだ。

フリーダムを解体することは、はっきり言って出来ない。

やらないのではなく、出来ないのだ。

リリィは傷を瞬間的に治癒することができる。

災厄としての能力が、怪我をさせる事を拒んでいるのだ。

そしてフリーダムはリリィ。

つまり整備しようにも、何処かが壊れたりしてもすぐ修復するし、なによりすでに機械というカテゴリーを逸脱しているのだ。

装甲板を外しても、すぐさま修復してしまう。

物理的に解体することができない。

無理だと知った者は「なら、抑えられる状況を作ればいい」という事で、束が言った「模擬戦」でフリーダムにとって最悪な環境戦闘をする事になったのだ。

フリーダムは武器を失うことが無い。

なら、最初から死角や優位に立てる場所に入ればということで、数回模擬戦をする事になった。

ちなみにこの模擬戦闘は、ＩＳ学園でやっているせいか一般生徒にも公開されていた。

２０７　国際ＩＳ委員会の不安（後書き）

セリフ１回だけだと……。

という事で、コレから数話ほど戦闘描写が続きます。

１話１戦という感じに書きたいな～。

何と言ってもＩＳはラブコメの前に、戦闘が無いと……。

という事で、束を除く「白騎士（通常状態）」「白式」「紅椿」「ブルー・ティアーズ」「甲龍」「ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩ」「シュヴァルツェア・レーゲン」「ミステリアス・レイディ」の戦闘が始まります。

最初は３、３、２でチーム戦闘しローテーションを何回かした所で、全員戦闘という事になります。

多分。

作者は言った事を実行しない人間ですｗｗｗ

一応、千冬＆一夏＆箒という組み合わせは決定していたり……。

まぁ、何とか書いて行こうか。

※（この作品に関する）エッチな知らせを活動報告に乗せました（良いのか、オイ）。

興味がありましたら、どうぞ。

２０８　フリーダムＶＳ白騎士＆白式＆紅椿（前書き）

久々の戦闘描写。

やっぱ、こういうのが無いとね……。

書いている時のノリは、リリィＶＳ原作の専用機持ち。

２０８　フリーダムＶＳ白騎士＆白式＆紅椿

白式がフリーダムに向かって雪片を構える。

千冬に関しては、剣道の型の様に腰構えに雪片を持っていた。

試合開始という合図があってから、互いに動かない。

「……。」

先に動いたのはフリーダムの方だった。

十枚の翼を広げながら白式に向かって降り立つ。

その速度は人が追えるほどの速度は無く、初速がすでに最高速度をだった。

一夏はフリーダムに反応ができなかった。

一夏が気が付いた時には、フリーダムのビームサーベルが白騎士の雪片と拮抗している。

千冬が一夏を守るように雪片でビームサーベルを止めていたが、すぐさまフリーダムが頭部バルカンを白騎士に向かって放っていた。

バルカンとはいえ、機関銃と同程度の威力を誇っている。

そのため、搭乗者の声明を保護するために絶対防御が稼働した。

今の白騎士は十年前と同じようにＩＳらしい装甲だ。

ＩＭＳではなく、擬似的にシステムを変更して第三世代同様の出力しか出せないようになっている。

そのため絶対防御を使えば、シールドエネルギーが減って行く。

小型の半永久機関でのエネルギー回復はしない。

ビーム兵装も稼働はしない。

そもそもビーム兵装やエネルギー回復をしたところで、白騎士（ちふゆ）はフリーダムには勝てない。

それなのに枷がつかられては、絶対に勝てやしないのは確実。

「ぐぅぅ……。」

千冬が唸る。

出力が落ちたせいか、ビームサーベルとバルカンでエネルギーがどんどん減って行く。

「はぁぁぁぁ！！」

気合を入れた声がアリーナ響いた瞬間、白騎士の後ろから赤い影が飛び出た。

箒の紅椿である。

空裂を振るい、エネルギー斬撃を飛ばす。

フリーダムはシールドで防ぐこともできたが、白騎士と拮抗している時に片腕を上げることが失策に繋がると思ったため、バックステップに胸部と脚部スラスターを使って後方に跳んだ。

「……ク、すまないな……。」

そう言って雪片を握り直す千冬。

箒はその後ろに降り立つと、雨月を腰から引き抜く。

リリィはそれを見ながら、一夏を眺める。

雪片を握りながらも、雪羅（せつら）をリリィに向けていた。

白式唯一の射撃武器、荷電粒子砲を打つタイミングを計っているのだろう。

「ふっ！！」

箒が雨月を振るうと、白騎士は上昇して雨月の射線から離れる。

雨月をフリーダムに向けて差し出すと、機体食と同じ色のレーザーが発生した。

「甘い……。」

リリィはそう言うと、身体を傾けることでレーザーを避ける。

「っ！　当たれぇエぇ！！」

更に一夏も、雪羅の荷電粒子砲をフリーダムに向かって撃つ。

（そう言えば、白騎士にも装備させていたっけね……。）

リリィはそう思いながら、シールドを斜めに持つ事でで砲撃を逸らす。

十年前の事を思い出しながら、砲撃の光を見た。

そして砲撃の光が止む前に、右側のレールガンだけ展開する。

砲撃が止むと一夏は疲れたのか、雪羅を重たそうに構えていた。

リリィはそれを見過ごす事はしない。

光りが消えたのと同時に、一夏に向けてレールガンを放つ。

同時に上空に飛び、フリーダムに向けて雷刀・桜と光刀・暁をアンビデクストラス・フォームにさせ、向かってくる白騎士に向けてバルカンを放ち、紅桜に向かってビームライフルを撃つ。

「うわっ！？」

一夏は驚きながらも大型化したウイングスラスターを吹かし高速で飛来する砲弾を、紙一重で避ける。

千冬は小型スラスターを最小限に使用し、バルカンから時機の被弾を回避した。

しかし、肩や足などにいくつか当たる。

機関銃程度なので装甲は破壊されないが、それでも速度は低下した。

箒はビームライフルを飛ぶ事で避ける。

ビームは一射だけだったため、それだけを避けてしまえば援護に回る事は簡単だった。

箒が再度雨月と空裂を交互に振るい、さらにビットも展開する。

２０８　フリーダムＶＳ白騎士＆白式＆紅椿（後書き）

……ナターシャをどうしようか悩んでいます。

なんか、シルバリオゴスペルが自己進化で……ツインバスターライフルを持った光景が目に浮かぶ。

流石にそれはしないけどね……。

それやっちゃったら、トライアルシステムやら月光蝶（一発変換で出たよ……）や光の翼とかでちゃうしね……。

やらないけど、シルバリオ・ゴスペルは純粋なＩＳとしてチート設定。

まぁ、天使再現化計画で作られたんだし、チート設定でなくてどうする事やら……。

？

なんか話がずれた？

ああ、そうだ。

ナターシャも参加させますか？

というやつを聞こうとしたんだっけ……。

まぁ、出てくると思うけどね……。

２０９　リリィＶＳ千冬＆一夏＆箒（前書き）

タイトルが思いつかないと言う罠。

きついです……。

パターン……３．

２０９　リリィＶＳ千冬＆一夏＆箒

フリーダムにビットとレーザーが襲いかかるが、慌てる様子もなくビームライフルを上に高く投げた。

その間にビームサーベルを引き抜く。

「はぁぁぁ！！」

そう気合を入れて、レーザーをビームサーベルで斬り裂いて行く。

その光景に、戦闘を見ている者は全員目を見開いた。

レールカノンなどの高速弾道を避けるならまだしも、それ以上の速度で飛来する光線を近接装備で切り裂いたのだ。

正確には弾いたのだが、弾かれる瞬間にレーザーが二方向へ分断された為、切られてように

見えただけである。

「……っ！！」

そしてビームサーベルを腰に戻すと、翼からバラエーナプラズマビーム砲を展開させる。

ビームライフルが上空で回転しながら、フリーダムに向かって落ちてくる。

バラエーナが火を噴く。

砲門から火線が伸び、二機のビットが火線に飲み込まれ破壊された。

箒はあり得ない者を見るような眼で、それを眺める。

バラエーナが翼に仕舞われる。

「貰ったぁぁぁ！！」

そう叫びながら、白式を纏った一夏がフリーダムの背後に現れる。

レールガンを紙一重で避けた一夏は、その軌道のままフリーダムを中心に半円を描きながら

後ろを取っていたのだ。

雪羅のエネルギークローがフリーダムに伸びる。

「っ！　ぐがぁ！！」

だが攻撃はフリーダムに届かず、一夏は吹き飛ばされた。

白式の絶対防御に緑色の光条が伸び、それが一夏を吹き飛ばしたのだ。

フリーダムを見ている者の目は丸くなっていた。

完全に反撃も回避も出来ない状態だったのに、フリーダムは対処したのだ。

ビームライフルがゆっくり持ちあげられる。

上空に投げられたはずの、ビームライフルをだ。

その光景で千冬は気が付いた。

（まさか、上空に投げ落ちてきたライフル（アレ）を、落ちてくる遠心力のまま後ろへ向けて撃ったと言うのか……。）

上空に投げたはずのライフルは、重力に従って落ちてくる。

もしそれをキャッチしてその勢いのまま後ろに向ければ、他の武装で反撃するより何倍も速い。

さらに言えばリリィの射撃は全てが、狙撃並みの精度と速射が可能としているのだ。

その状態で撃たれでもしたら、どんな後ろからの奇襲なんか無駄である。

千冬は改めて自身の師が異常であることを確認した。

「さて、行くかな……。」

リリィの声が聞こえると、フリーダムは初速を無視した移動で白騎士との距離を詰める。

「この中では千冬が一番危ないからね。　先に落とさせてもらうよ。」

辻斬りや通り魔という単語が、千冬の頭の中によぎった。

アンビデクストラス・フォームにした光刀・桜と雷刀・暁をフリーダムの方向へ時機を守るように回す。

高速で回されるエネルギー刃は、一種のエネルギーシールドの役割を持っていた。

千冬はフリーダムの攻撃にそれで対応した。

しかし、それはリリィが教えて戦闘方法だ。

もちろん。

「はぁっ！！」

リリィにとってそれを回避する方法は、いくつもある。

ビームサーベルが剣を回している白騎士の腕に突き刺さっていた。

（牙突ッ！？）

フリーダムは絶対防御で止まるまで、ビームサーベルを白騎士に差し込み続ける。

そして絶対防御に刃の進行を止められると、横に薙いで腕を破壊した。

ＩＳの腕は、基本人間の腕に延長して長くしているようなものだ。

千冬の腕は無事である。

「くっ！」

千冬は毒づくと、足の踏刀を展開させて間合いを取ろうとする。

フリーダムは千冬の目論見通りに後退した。

そして、フリーダムが止まるとレーザーと荷電粒子の雨が降り注いだ。

「千冬姉！！　交代だっ！！」

一夏の声がアリーナに響く。

千冬は白騎士の無事なスラスターを起動させビットに戻る。

その間、フリーダムは射撃武器を使用しなかった。

２０９　リリィＶＳ千冬＆一夏＆箒（後書き）

……まぁ、リリィですしね……。

傷が付かない天使ｗｗｗ

リリィちゃんマジ天使♪

ってね。

書くこと無いため、活動報告に書いた事を簡潔に書かせていただきます。

・Ｈな二人（リリィと束）を別作品で投稿しました。

ほら、簡潔。

いやいや……わかりにくいよね……。

……訂正訂正。

・エッチしているところを書きました。

ほら簡潔。

簡潔すぎて逆に引く気がするけどね……。

・リリィが束に言った、本編では「……」で伏字になっていたセリフを、公開した作品。

意味分からない……。

と言う事で、Ｒ１８のため１８歳以下は見に言っちゃいけないよ。

詳しくは活動報告で。

（……なにＷｅｂでみたいなテンションで言ってるんだろう……。）

２１０　フリーダムＶＳ蒼い雫＆甲龍＆霧纏の淑女（前書き）

楯無の戦闘回ですね。

サブタイトルを長くさせたくないので、こうなっちゃいましたけど……。

やっぱ「フリーダムＶＳブルー・ティアーズ＆甲龍＆ミステリアス・レイディ」にしたかった。

けどそれだと長すぎる。

まぁ、そんなこんなでパターン……３です。

２１０　フリーダムＶＳ蒼い雫＆甲龍＆霧纏の淑女

「くっ。」

千冬は椅子に座ると毒ついた。

勝てるとは思ってはいなかったが、絶対防御でエネルギーを切れて負けるのではなく、完全な戦闘能力だけを奪って行ったのだ。

それは絶対強者が弱者にしかできない方法。

過去に同じように武装破壊で負けた千冬にとっては、耐えがたい物だった。

（……私はまだ、リリィの位置まで届かないのか……。）

そう思いながら、戦闘を眺めた。

後ろでは整備スタッフが、束の指示に従って白騎士の予備パーツを運んでくる。

千冬の目は、無傷の天使を追っていた。

フリーダムは襲いかかるレーザーを回避し続ける。

手加減のつもりか、シフトチェンジせずに戦闘し続けていた。

しかし、それでもフリーダムの優位という事は変わらない。

「そこっ！！」

鈴が衝撃砲で狙うが、フリーダムは重力と言う物が無いかのような飛び方をし、ことごとく衝撃砲をかわして言った。

さらにブルー・ティアーズが誘導兵器と共に、フリーダムを狙い撃つが当たらない。

（くっ！　これではこちらのエネルギーが減って行く一方ですわっ！！）

セシリアはそう思うと、誘導兵器の攻撃を止め牽制程度にとばし始める。

まれに感づかせないために、レーザーで攻撃するが当たり前のように当たらない。

「二人とも下がって！！」

二人はその言葉に下がる。

気が付くとフリーダムの周囲に霧が漂っていた。

高速戦闘中に霧が局所的に発生するのはおかしい。

しかもピンポイントでフリーダムの周囲に漂っていた。

「結構大変だったんだからねっ！！　リリィ先生に集中させるのっ！！」

楯無が水色の装甲を纏いそう叫んだ。

ミステリアス・レイディ。

ロシアが設計したＩＳのデーターを基に、楯無一人だけで組み上げたフルスクラッチタイプの第三世代機である。

束とリリィの手によって、最終点検も済ませ完全に完成された唯一の第三世代機。

他のＩＳのとは違い装甲が少なく、その分左右に浮いているアクア・クリスタルから水が発生して楯無を包み込む。

「食らいなさい！！」

そう叫び、指を鳴らす。

するとフリーダムを包んでいた霧が大爆発を起す。

戦闘し始めてから、初めてフリーダムに攻撃を与えることができた瞬間だった。

清き熱情（クリア・パッション）と呼ばれる、ミステリアス・レイディの攻撃だ。

この機体には、ナノマシンで構成された水を霧状にして散布、それを発熱させることで水を瞬時に気化させ爆発。

熱や衝撃で攻撃すると言う方法らしい。

以前楯無が束に改良を頼んだのが、ナノマシンを使用した操作系統だった。

「あはっ♪　どうかしら♪」

爆発の煙を見て、楯無はそう呟く。

「……凄いですわね……。」

「……ほんと……。　その自信が……。」

二人とも感心した。

しかしそれで気を緩めるほど、二人は愚かではない。

セシリアは爆炎でフリーダムが見えないため攻撃を断念し、誘導兵器を戻して警戒を始める。

鈴は高速で動くフリーダムに攻撃を当てた楯無が疲弊している泥うと思い、片手に青龍刀を持ち近寄りながら警戒した。

「っ！！」

そして二人が恐れていた事が起きた。

爆炎から五つの火線が伸びる。

それらは正確に三機を狙っていた。

セシリアは警戒していたため、何とか上昇しながら回避し誘導兵器を再度展開。

鈴はレールガンだったためか、青龍刀で何とか防ぐ。

楯無は咄嗟の事だったため回避に遅れたが、被弾はしていなかった。

「くっ！！」

急な回避だったため、ほぼ機体制御ができなかった。

そのため回避したは良いが、機体が落下し始める。

しかしさすが生徒会長と言うべきなのか、落下しながら姿勢制御を立て直し再度浮遊した。

「……どうなったの……。」

アリーナに強い風が吹く。

その風が爆炎を消し去り、無傷のフリーダムを露わにさせた。

２１０　フリーダムＶＳ蒼い雫＆甲龍＆霧纏の淑女（後書き）

大爆発とはいえ、ＰＳ装甲には……ネ。

数々の爆発から、機体を守った装甲は強かった。

でもさすがに煤焦げても良い気がする。

無傷って何よ……。

え？

被弾してないから？

……あ、そう。

一応、ＰＳ装甲に対して熱はどうなのか確認する。

大丈夫のはずだけどね……（・ω・、）

「ビームに対しては熱耐性により通常装甲に比べれば耐性があるが、Ｇ兵器のビームライフルのような高出力のビーム兵器の直撃に耐えることはできない」

うん大丈夫だった。

なんかの機体が、ビームショーテルくらっても装甲が破壊されなか

ったな〜と思うと、やっぱ出力低いビームだと相殺できるのかと納得する今日だった。

211　フリーダムVSミステリアス・レイディ（前書き）

……あれ？

１ＶＳ１　て感じで書かれてるよ？

いいの？

いいんです。

読めば分かる、と言う事でパターン３です。

211　フリーダムVSミステリアス・レイディ

セシリア達以外のPS装甲（フェイズシフト）を知らない者にとっては、その光景は目を疑うモノだった。

しかし知っていれば、鈴の様に近接戦闘ではなく援護が良いと分かるはずだ。

鈴の機体甲龍には、特殊兵装はないためフリーダムとの相性は最悪に等しい。

「……良く防げたわね。」

楯無は軽い口調でそう言うが、内心自身の攻撃が聞かなかった事に冷や汗を垂れ流していた。

PS装甲は砲撃型実弾兵器最強のレールカノンを直撃を受けても装甲は壊れることもなく、重力の加重にも耐えることもできる。

更に耐熱性も向上しているため、単体の大気圏突入も威力の低いビーム、レーザー兵器などにも耐えれるのだ。

クリア・パッションは衝撃と爆発の熱で攻撃するため、フリーダムにダメージを当てることができない。

過去に鈴が衝撃砲をプロヴィデンスに向けて撃ったとき、何もダメージを与えられなかったのが良い例だ。

フリーダムは三機から距離を離しながら上昇する。

「っ！？」

セシリアと鈴は武器を仕舞い、回避出来るようにフリーダムの死角に移動しようとする。

その時には、フリーダムから四門の砲身が展開されていた。

「あら、下がるの？」

しかし、楯無だけは瞬時加速でフリーダムの間合いに入る。

「なっ！？」

セシリアはその行動に驚いた。

フリーダムの射撃は展開してから照準、発射までのラグが恐ろしいほど短いのだ。

むしろラグが無いと言った方が良い。

構えた瞬間、スナイパーライフルで狙ったかのような精度で攻撃してくるのだ。

そのフリーダム対し、自ら避けにくくなるように間合いに入るのは自殺行為だった。

発射してから避けるのはほぼ無理だ。

フリーダムでなければ、移動しながら向かってくる砲撃を純粋な回

避だけで避けるなんて出来ないだろう。

レールガンがまっすぐ向かってくる楯無を狙う。

「あは♪」

しかし、楯無は砲撃する瞬間に一瞬だけ上にスラスターを向け下降した。

レールガンがミステリアス・レイディの上を通過する。

その光景を見ていた一夏達は驚愕し、ＩＳ委員会の役員は勝ったと思った。

楯無はミステリアス・レイディの武器、蒼流旋（そうりゅうせん）を構える。

蒼流旋は四門のガトリングが装備されたランス状の武器。

ランスに超高周波振動した水を螺旋状に纏っている特殊武器だ。

武器の発想はチェーンソーに近い。

フリーダムとの距離が縮む。

「っ！！」

気合を入れて楯無は蒼流旋を伸ばす。

砲身を貫いて胸部にささろうと、刃を伸ばした。

しかし、やはりといっても良いほどＰＳ装甲がそれを阻んだ。

「七十点だね～。」

リリィがそう言うと頭部バルカンで楯無を打つが、アクア・クリスタルから出る水のヴェールで弾丸の勢いが殺がれる。

弾丸は本体には当たらず、勢いを失い落ちる。

「それは良い得点なのかしら？」

ランスの勢いをレールガンに阻まれ、追撃を許さないように連続で突きを繰り出す。

フリーダムはビームライフルとアンチビームコーティングしたシールド以外は、ＰＳ装甲を展開している。

もちろんレールガンもその一つ。

そして蒼流旋は水を超高周波振動させている武器だ。

超長時間同じ所に当て続ければ、ＰＳ装甲も破れるかもしれない。

だが所詮「水」を纏った実槍。

超高周波振動していても、フリーダムにはダメージを与えることができなかった。

楯無の突きを避けながら、砲門を収納する。

「良いと思うよ～。」

そういうと、逆手でビームサーベルを引き抜く。

その刃が蒼流旋に纏わり付く水を蒸発させ、ランス自体を破壊する。

その光景を楯無は少し驚きながら見た。

「……けど、必殺を決めて決めきれない点は減点だね。　エネルギーも心もとないでしょ。」

逆手に持っていたビームサーベルを回し、普通の持ち方に変える。

そしてそのまま、楯無に斬りかかった。

「くっ！？」

破壊から追撃を見切っていた楯無にとって、回避は簡単だった。

しかしビームサーベルの先端がミステリアス・レイディの足に触れ、足首から先をを切り裂いて行った。

211　フリーダムVSミステリアス・レイディ（後書き）

楯無の戦闘回。

初めての楯無オンリー戦闘です。

おそらく、次話で3機のエネルギーがレットゾーンに達すると思われる。

次話は、誰が活躍するのかな？

※未だにリリィのキャラクターボイスが決まってません……。

２１２　リリィＶＳセシリア＆鈴音＆楯無（前書き）

……目が乾いていたい……。

そう言う今日。

パターン３

２１２　リリィＶＳセシリア＆鈴音＆楯無

ミステリアス・レイディの足首を切り取られ、性能が少しだけ低下する。

その事に楯無はただ驚くしかなかった。

（やっぱり、ナイトはそう簡単に落ちないわね。）

そう思いながら、切り裂かれた蒼流旋を捨てる。

まだ水を纏えば使用できるが、ＰＳ装甲の実体を知れば持っていても無駄だと気が付く。

「撤退しますわよっ！！」

セシリアがそう言うとエネルギーを全部使うつもりか、誘導兵器を展開しスターライトｍｋＩＩＩをフリーダムに向ける。

「くっ、私の衝撃砲（これ）が利けばなぁ……。」

そう呟きながら、鈴も衝撃砲をフリーダムに向けて放つ。

フリーダムはその気になれば、誘導兵器やレーザーを撃ち落とすことができる。

いや、誘導兵器だけじゃない。

一番フリーダムに近いミステリアス・レイディ、ブルー・ティアー

ズや甲龍を一瞬にしてマルチロックオンシステムを使い、射撃だけでなぶり殺す事も出来る。

エネルギー出力も手加減しているのを、外して絶対防御を貫通させる出力で攻撃も可能。

さらにシフト変化の、ストライクフリーダムやストライクフリーダム・フェニックスも残している。

完全にリリィにとって、この戦闘は遊びなのだ。

千冬が機体性能を制限されているように、リリィも自らシフト変化を抑えている。

「……でも、なんか悔しいな～。」

鈴がそう呟きながら機体を後退させながら、衝撃砲を更に撃つ。

「たしかにね～。」

鈴の横まで後退した楯無が同感したように呟く。

足の先端が無いせいか、微妙に不安定な飛び方をしていた。

普通の生徒なら気が付かないだろうが、鈴は気が付く。

「早く後退……っ！？」

自分の機体よりダメージが大きい機体のため楯無に先に後退するよう促すが、その言葉は何かによって阻まれた。

激しい衝撃と絶対防御のシールドの光しか、鈴には気づくことができない。

甲龍の絶対防御が発動し、シールドエネルギーが減っていく。

「なにが……。」

「逃がさないよ。」

鈴がそう言って絶対防御が発動した方を見る。

案の定、そこにはフリーダムがビームライフルをこちらに向けていた。

その指が引き金を引く。

「くっ！」

鈴は向かってくるビームを、青龍刀で防ぐ。

唯の金属刃だったら貫通して使い物にならなかっただろう。

しかし白式の雪片弐型と同じように、刃をアンチビームコーティングさせておけば貫通はしない。

鈴は「ビーム対策を頼んでおいてよかった……。」と少しだけ思った。

「セシリアっ！！」

「わかってますわっ！！」

鈴の言葉にセシリアが誘導兵器の射撃を多くした。

残りエネルギーなんか知らないと言う風に、レーザーの雨をフリーダムに浴びせようとする。

しかし、フリーダムにレーザーは当たる事はなかった。

鈴は状況が不味いと思い、ある方法を思いつく。

「狙って！！」

そう言って鈴はピットに後退しながら青龍刀を投げる。

「っ！　わかりましたわっ！！」

青龍刀は回転しながらフリーダムに向かう。

当たり前のように、フリーダムは青龍刀を上昇することで回避しようとする。

しかし、それも鈴の思惑の打ちだった。

セシリアがレーザーを放つ。

だが、その射線はフリーダムのやや下だった。

「……まさか……。」

リリィがそう呟くと、レーザーは青龍刀に当たり反射してフリーダムに向かった。

アンチビームコーティングはビームを消滅させるのではなく、弾くモノだ。

アンチビームコーティングされたシールドなどにビームが当たると、四散して消えたように見えるが、実際には射撃の角度によって弾いており消滅はしていない。

角度によってはビームがそのまま弾かれ、射撃角度を変えて進む事もある。

それがビームではなく、レーザーでも変わらない。

鈴はその性質を利用しただけだ。

「ちっ。」

舌打ちして避けようとするが、レーザーはビームライフルに当たり武器を壊して行く。

レーザーでライフルが壊れたが、瞬間的に再生する。

リリィが気が付いた時には、三人ともピットに降りていた。

２１２　リリィＶＳセシリア＆鈴音＆楯無（後書き）

……徐々にダウナーになってきていますね……。

私……。

目が痛いです。

……書くのは止めないけどね……。

あれって、レーザーはビーム同様にはじいてるのかな～。

あの世界にレーザー兵器って、「ゾノ」や「グーン」の海中戦闘用ＭＡくらいじゃない？

……ゾノってＭＡだっけ？

そういえば、ＣＶがおそらく束に影響されてか、ゆかりんと言う人が多いと思う。

実際、過去にリリィのＣＶがゆかりんに思えたし……。

そして今日も私はレビューで、面白そうな作品を捜す。

２１３　フリーダムＶＳ黒い雨&疾風の再誕？（前書き）

ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩ……。

量産機のカスタムだから、疾風の再誕に？をつけるしかできなかった……。

パターン２と見せかけて３

２１３　フリーダムＶＳ黒い雨＆疾風の再誕？

千冬と同じように楯無も、ミステリアス・レイディの修理を頼む。

「はぁ……。」

機体を整備班に任せると、深いため息が漏れた。

水色の外ハネした髪が、心なしか内側に向いているように見える。

「……あんなのにどう戦えばいいのよ……。」

そう呟くと千冬に近づいた。

オレンジ色の機体と黒と赤のツートン色の機体が共にピットから出る。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩとシュヴァルツェア・レーゲンだ。

「ねぇ、ラウラ……。」

「なんだ？」

シャルロットが弱々しくラウラの名を呼んだ。

ラウラも少しばかり困った風な感じで、返事をする。

紫の瞳と赤と金のオッドアイが重なった。

「……勝てると思う？」

「無理だな……。」

シャルロットの言葉にラウラははっきりと言った。

「……しかし、時間稼ぎなら出来るだろう。」

そう言うと、スラスターを使い移動して行く。

シャルロットは肩を落とし、挟撃するようにラウラの後を追うように移動して行った。

二人が弱気なのは、やはりといっても良い様にＰＳ装甲が原因だったりもする。

二人の機体にも形態を変えればＰＳ装甲は付いているが、今回は「ＩＳでフリーダムを倒すことができるか」と言う事なので、性能もＩＳと同じになる様に下げていた。

そして二機には、光学兵装がなく実弾兵装しかない。

シュヴァルツェア・レーゲンのプラズマ手刀なら対抗できるかもしれないが、フリーダムが簡単に間合いに入れてくれるだろうか。

「とにかく、白騎士の修復が終わるまでの時間稼ぎができればいい。砲弾病（シェル・ショック）にはなるなよ。」

ラウラはそういいながら、ワイヤーを四つ展開させる。

その言葉を聞き、シャルロットは少しだけ票所を曇らせた。

砲弾病とは、ラウラが使う一種のシャルロットの愛称だ。

戦闘を経験した兵士が陥るさまざまな反応を含む幅広い心理的障害として定義されており、戦闘ストレス反応（コンバット・ストレス・リアクション）や「ｐｏｓｔ　ｔｒａｕｍａｔｉｃ　ｓｔｒｅｓｓ　ｄｉｓｏｒｄｅｒ，（ＰＴＳＤ）」と呼ばれる心的外傷後ストレス障害のように命名されている。

砲弾病や戦闘ストレス反応は、医学、精神系の大学の講義でしか聞かないだろうが、軍人にしてみれば良く聞く単語だ。

何故そんな相性をつけられたかと言えば、エンジェルダウン作戦時にフリーダムが落ちた際、コンバット・ハイと呼ばれる様々な神経伝達物質が分泌され興奮状態となり、我を忘れた状態となったせいだったりもする。

シャルロットに関してみれば、コンバット・ハイになる可能性は限りなく低い。

しかし、あの時「リリィが死んだ」という光景がシャルロットをそうさせた。

その後リリィが戻って来てからというものコンバット・ハイの影響のせいか、模擬戦闘中に急に脱力したり、戦う気力を失せたりするため、ラウラにそう言われる原因になったのだ。

対するフリーダムはシールドを無造作に持ち、後ろ腰にビームライフルをマウントする。

「……無理に戦う必要はないけど。」

リリィがそう言ってラウラに斬りかかる。

その斬撃を小刻みな機動で避けると、ラウラはワイヤーを突き刺すようにフリーダムに伸ばす。

「別に、無理じゃないよ。」

シャルロットはそう言うと、アサルトカノンを二丁持つ。

スナイパーライフルの場合、気がつかれてすぐに反撃される可能性がある。

なによりすでにシャルロットがいると言う事が、リリィは知っている。

そう思えば、なんで一機づつずらして出ないのか疑問が浮かび上がるが、誰も気が付かない。

フリーダムはシュヴァルツェア・レーゲンのワイヤーを回避し、飛んでくるアサルトカノンの銃弾をシールドで防いだ。

２１３　フリーダムＶＳ黒い雨＆疾風の再誕？（後書き）

なんか、書けば書くほど……シャルがヤンデレ化してる気がする……。

黒過ぎる病気を抱え過ぎな気がしてきた……。

私……シャルの出番は多いけど、シャルの存在をどうしたいんだぉ……（ノД≦。）

唯一、鈴だけキャラがぶれてないじゃん……。

ヒロイン大体、キャラがぶれてんじゃん。

リリィのせいで……。

この模擬戦が終了したら、この二次創作の中のキャラクター人気投票でもしようかな……。

……やってみたいだけなんだけどね……。

２１４　リリィＶＳラウラ＆シャルロット（前書き）

ラウラ成分より、シャルロット成分が多い戦闘。

ショットガンは散弾銃とも言う。

p3

２１４　リリィＶＳラウラ＆シャルロット

高速でフリーダムがアリーナを飛ぶ。

それを追いかけるように、シャルロットはアサルトカノンを撃つ。

ラウラは無駄に動かず、レールカノンを展開し照準を合わせる。

アサルトカノンがまれに当たりかけるが、かすりもしなかった。

「ううぅ。　やっぱ、この装備だと無理だよ～。」

シャルロットが弱気な発言をする。

しかしラウラには勝機には程遠いが、フリーダムに一撃入れる方法が思いついていた。

ワイヤーを伸ばしフリーダムをからめ取ろうとするが、簡単につかまる様な事はない。

隙間を縫って回避する。

その間、アサルトカノンの射撃も避けていた。

「……あれ？」

そしてアサルトカノンの弾が切れる。

丁度いいと思い、シャルロットはショットガンを取りだした。

アサルトカノンよりショットガンの方が、命中率ははるかに高い。

ショットガンを構えフリーダムに接近する。

しかし、ショットガンは命中膣は高いが弾の飛び方や火薬の量に癖がある銃のため、接近しないといけないと言う欠点もあった。

つまり命中率は高いが、射程が短いと言う事だ。

「っ！」

フリーダムを射程に入れると、シャルロットは躊躇いながらも引き金を引く。

しかし流石といっても良いのか、フリーダムは速度を上げることでショットガンの弾を全て回避した。

そして反転し、ビームサーベルをマウントしてビームライフルを持つと、振り向きざまに引き金を引いた。

シャルロットは反応できず、ショットガンを撃ち抜かれる、

「……やば……。」

そう呟き、ショットガンを捨てる。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩの手を離れ、少し遅れてショットガンは爆発をした。

そしてショットガンに気を取られたせいか、フリーダムの接近に気が付かなかい。

ビームサーベルの淡く光る刃が、シャルロットに迫る。

シャルロットが気が付いた時には、すでに回避が困難な距離だった。

（やられるっ！？）

だが、その刃は振られる事無くシャルロットから離れた。

フリーダムが何気に気が付き、振るのを止めてシャルロットから離れたのだ。

シャルロットは目を丸くし辺りを見ると、フリーダムがいた場所に上空から電気を帯びた砲弾が通過した。

シュヴァルツェア・レーゲンのレールカノンだ。

それがフリーダムに向けて、高速の砲弾を放ちシャルロットを援護した。

「Ｉｃｈ　ｂｉｎ　ｎｏｃｈ　ｎｉｃｈｔ　ｇｅｋｏｍｍｅｎ！！（まだだっ）」

しかし、それでは終わらなかった。

レールカノンがアリーナの地面を穿ち、土煙を生成する。

おそらく通常の弾を使用せず、貫通力の高い弾を使用した結果だと

思う。

土煙がシャルロットを覆い、フリーダムに迫る。

「なにっ!?」

そして土煙に紛れ、フリーダムのシールドにシュヴァルツェア・レーゲンのワイヤーが巻き付いた。

リリィは純粋に驚く。

「Ｃｈａｒｌｏｔｔｅ!!　Ｅｓ　ｉｓｔ　ｊｅｔｚｔ!!（シャルロット　今だっ）」

ラウラが叫ぶ。

シャルロットは瞬時加速でフリーダムの間合いに入り、シールド裏の装甲をパージする。

そこには、大きな杭が刃を伸ばしていた。

６９口径のパイルバンカー、名称「灰色の鱗殻（グレー・スケール）」。

盾殺し（シールド・ピアース）と呼ばれる、第二世代武器の中で最高威力を誇る装備だ。

流石にＰＳ装甲には相性が悪いが、二人はフリーダムに一撃を当てる事を目指した。

「……くっ！」

フリーダムは何度もシールドを引くが、ワイヤーのせいで上手く動かない。

その間にも、シャルロットが迫る。

そして大きく振りかぶりながら、杭をフリーダムに伸ばす。

「なっ！？」

「・！？」

だがワイヤーが絡まった場所がシールドと悪かったせいで、フリーダムはシールドを破棄した事によってパイルバンカーを回避する。

杭は破棄されたシールドに当たり、アリーナの隅にまで飛ばしたのだった。

２１４　リリィＶＳラウラ＆シャルロット（後書き）

・眠い。

・疲れた。

・肩こった。

・何も話題が無い

そんな今日……。

２１５　フリーダムＶＳ？？？（前書き）

はじめてサブタイトルに？？？を使った気がする……。

懐かしい……かどうか知らないけど、あのＩＳが登場。

本日もパターン３

215　フリーダムVS???

飛ばされたシールドを眺め、瞬間的にシャルロットは回避行動を取る。

その直後に、シャルロットがいた場所に火線が通過した。

ラウラもワイヤーを戻し、移動を開始。

レールカノンは展開したまま、フリーダムより上空で後退気味の下降をしていた。

「Ｉｃｈ　ｋａｎｎ　ｅｓ　ｉｍｍｅｒ　ｎｏｃｈ　ｉｍｍｅｒ　ｎｏｃｈ　ｍａｃｈｅｎ!!（まだ、まだやれるっ!!）」

そう言うと、再度レールカノンを放つ。

装弾と銃口の冷却は大丈夫なのかと思うが、誰も気にしない。

電気を帯びた銃弾が、フリーダムに伸びる。

しかし、当たり前のように銃弾は回避された。

ワイヤーを伸ばし攻撃を仕掛けるもビームライフルが火を噴くと、ワイヤーの先端に当たり破壊される。

「Ａｂｅｒ!!（だがっ）」

残ったワイヤーを伸ばす。

だがそれすらも、破壊されていく。

「はい、ラウラ退場～。」

リリィがそう言うと、レールガンの砲身を展開させる。

それを見たシャルロットは、シールドを持ちラウラの前に出ようとするが、距離が遠い。

砲身が完全に展開されると、すぐに火線が伸びた。

ラウラに向かって、電気を帯びた砲弾が向かう。

しかし攻撃は当たらなかった。

「Ｖａｔｅｒ，ｉｃｈ ｋａｎｎ ｉｍｍｅｒ ｎｏｃｈ ｋ？ｍｐｆｅｎ……（お父様、私はまだ戦えますよ……）」

ラウラは手にフリーダムのシールドを持ち、レールガンを防いだ。

口を少しだけ釣り上げ、不敵そうに笑う。

フリーダムのシールドは、ワイヤーが巻きつかれた状態で弾かれたのだ。

ワイヤーをそのまま戻せば、ラウラの手に戻るのは当たり前の事である。

だが、内心では冷や汗が滝のように流れていた。

（攻撃方法（アタックオプション）はレールカノンとプラズマブレードだけ……。　中距離戦闘用のワイヤーはすべて破壊された……。）

そう思いながら、エネルギー残量も見る。

（残り僅か……。　後退しなければ、私はここで退場（リタイア）……。　流石にそれだけは避けたいな……。）

ラウラはピットに信号を送る。

交代の合図だ。

（無事な機体は白式に甲龍ブルー・ティアーズも一応ノーダメージか……。）

バランスのとれた機体の組み合わせだった。

ラウラはレールカノンの砲身を下ろし、シャルロットに合図する。

誰が出るかは知らないが、後退しなければ不味い。

「はろ～。」

ラウラがそう思い始めたとき、突然そんな声がアリーナに響いた。

するとフリーダムが高機動で移動し始める。

そして何処から出たのか、いくつかの弾丸がフリーダムを追いかけ始めたのだ。

その光景に、ラウラとシャルロットは目を見開いた。

その攻撃は一夏達の機体には出来ない。

だが、見た事がある。

「……満身創痍じゃない。　それより久しぶりね。」

ラウラが後ろを振り返ると、懐かしい装甲がそこに浮遊していた。

銀色の装甲に、青白く光る天使のような翼。

天使再現計画という寝芋くで作られた軍用機体。

シルバリオ・ゴスペル。

「Ｉｃｈ　ｂｉｎ　ｗａｒｕｍ，　ｗｉｓｓｅｎ　Ｓｉｅ……（な、何故……）」

シルバリオ・ゴスペルは暴走事故のせいで、凍結はされなかった物の使用がほぼ不可能とされていた。

「なぜって……。　委員会に召集を受けたからかしら?」

そう言うと、翼をはばたかせ主砲シルバー・ベルを放つ。

追加された射撃にフリーダムは、背部スラスターを一度だけ大きく吹かして止め、脚部スラスターで前転のように回転した。

そしてビールライフルとレールガン、バラエーナプラズマビーム砲を即座に展開させてマルチロックオンシステムで砲撃を狙う。

瞬間的に五つの砲門から、火線がいくつも放たれシルバー・ベルから放たれた砲撃を落として行った。

２１５　フリーダムＶＳ？？？（後書き）

と言う事で、シルバリオ・ゴスペル登場。

なんというか、久々の登場ですね……。

やっちゃった感があるけど、後悔はしてないｄ

束の党が見つからないですね。

まだ出来てないのかな～ｗｗｗ

誰か作って～。

２１６　フリーダムＶＳシルバリオ・ゴスペル（前書き）

……何か短い様な……。

いつもこんな感じだっけかな……。

……ま、いっか……。

パターン３

２１６　フリーダムＶＳシルバリオ・ゴスペル

シルバリオ・ゴスペルの登場に会場はざわついた。

国際ＩＳ委員会は微かな勝機が。

ＩＳ学園の生徒は見た事もない、美しい翼を持ったＩＳにざわついたのだ。

ラウラ達を下がらせると、シルバリオ・ゴスペルは翼から無数の弾丸をフリーダムに向けて放つ。

それはエネルギー弾のため、下手をしたらフリーダムのＰＳ装甲を貫けるかも知らない。

相変わらずだが、千冬以外は本気でリリィの命を狙ってるのではと思うほどだ。

フリーダムはシルバー・ベルの合間を縫って、回避し続けた。

（……私には絶対防御がないって言わなかったものの、これは酷い気が……。）

リリィはそう思いながら、回避と同時にビームライフルでシルバリオ・ゴスペルを狙う。

しかしやはり軍用機体。

速度も普通のＩＳとはケタが違った。

「……天使再現計画って、知ってる？」

ナターシャがビームライフルを回避しながら、リリィにそう問いかけた。

当たり前のように、リリィは頷く。

その間、しっかり回避しながらビームを打ち続けている。

「フリーダムの再現化プロジェクトでしょ……。」

ナターシャはそれを聞くと、少しだけ笑う。

バイザーで顔は見えないが笑っていた。

「貴方のおかげで、この子は飛べるようになったからね。　お礼でもしてあげようかなって、思っていたんだけど。」

そう言うと翼の中央で、エネルギーを固める。

「……お礼って……。　ずいぶん過激なお礼だね。」

苦笑しながらそう言うと、バレルロールしながらエネルギー弾を避ける。

十枚の翼を広げたフリーダムが、クルクルと回りビームライフルを撃つ。

しかしビームはシルバリオ・ゴスペルを狙ったはずが、シルバリオ・

ゴスペルが放った弾丸に当たり、弾丸の破壊と熱量で曲がった。

「あら。　私はベットでお礼するつもりだったのだけど。」

ナターシャはとんでもない事を言いながら、収束したエネルギーを撃つ。

これを聞いた束は後でどんな行動を取るかと思うと、リリィは早急にナターシャを気絶でもさせて口をふさがなければいけなかった。

「……美人に言われて困らなくはないけど、妻帯者にその発言は危険だよ。」

収束したエネルギーをスラスターで横に移動ことで回避する。

お返しとばかりに、フリーダムはバラエーナプラズマビーム砲を撃ち返した。

「あら？　大天使（アークエンジェル）は男だったの？」

そう言って回避するが、バラエーナはエネルギーで出来た翼を打ち抜く。

だが、瞬間的に翼は回復した。

「……なに、その恥ずかしい称号……。」

お互いアリーナを、クルクル回りながら撃ち続ける。

しかし、お互い決定打は与える事はできなかった。

フリーダムは何も変わらないが、シルバリオ・ゴスペルはエネルギーが減って行くのは確実。

そう言う点では、決定打は与えているのだろう。

「知らないのかしら？　アークエンジェルは貴方のためだけに、各国のお偉い様がつけたのよ。」

「……目標名称（ターゲットネーム）じゃないの、それ……。」

「そうかしら？　私にしてみれば、ブリュンヒルデと同じような感覚だけど？」

喋ってる合間にも、ビームとエネルギーがアリーナを飛び回る。

弾丸のように加速が抜けて自重で落ちる事がないため、観客性のシールドがひっきりなしに光っていた。

「大体、アークエンジェルって天使の階級の一つだよね……。　ターゲットにそんな名前付けていいの……？」

キリスト系信者に恨まれそうだなと思いつつも、何気に納得しているリリィ。

「私的には、無宗教だから別にいいと思うわよ。」

「他人事だね……。」

「他人だからね。」

会話している合間にも、ビームとエネルギーの撃ち合いは続いていた。

２１６　フリーダムＶＳシルバリオ・ゴスペル（後書き）

なんか、アークエンジェルと言う称号を手に入れた。

頭が痛いです。

お肉が食べたいです。

もしリリィが千冬ルートに入ったら、どうなっていたのかと……ここ最近思うばかりです……。

書かないよ。

今度は書かないよ。

首締めないからねっ！！

※リリィの声を「かわしまりの」で再生してなんかぴったりはまった今日……。

……ん？

そっちの方（アダルトゲーム系）の声優で良いのか？

良いんだよ～ｗｗｗ

２１７　リリィＶＳナターシャ（前書き）

寝呆けてます。

そして動画サイトでＡＣｆａの動画を見ているせいで、ややＡＣよりな発言……。

パターン３

217　リリィVSナターシャ

ビームとエネルギーがアリーナーを飛び交う。

フリーダムがエネルギー切れしないのは当たり前だが、シルバリオ・ゴスペルもエネルギーが衰えた様な様子はない。

軍用機と言う事のせいか、エネルギー容量が他のＩＳとは違うのだろう。

しかし、確実に減って行ってはいた。

「……そろそろかな……。」

リリィがそう呟く。

それを聞いたナターシャーは、眉をひそめた。

言葉の意味が分からないのだ。

シルバー・ベルを打ち続けながらフリーダムを警戒する。

しかし、フリーダムは何のアクションも起こさない。

ビームライフルを撃ち、シルバー・ベルを回避し続けるだけだ。

「……。」

それを不安に思ったのか、ナターシャはシルバー・ベルの連射速度

を上げた。

かなりの数のエネルギー弾がフリーダムに襲いかかる。

「まだまだ～♪」

リリィが楽しそうにそう言うとフリーダムはおちょくるかのように、射撃を止め回避に専念し始めた。

アリーナをシルバリオ・ゴスペル以上の機動性で駆けめぐる。

シルバー・ベルから放たれる砲弾は、フリーダムの後方を通過しアリーナのシールドにぶつかる。

何一つ、フリーダムには当たらない。

反撃がないからかナターシャは次々と狙うが、やはりといっても良いほど当たらなかった。

「……まさかっ！？」

そしてナターシャは気が付いた。

なぜ、フリーダムが挑発するかのように攻撃を避けているのか。

シルバー・ベルの連射を止め、シルバリオ・ゴスペルのエネルギー残量を見た。

「やっぱりっ！！」

残量エネルギーが３０％まで切っていた。

（撃たされ過ぎた……！？）

攻撃を止めたせいか、フリーダムが接近ずる。

シルバリオ・ゴスペルはナターシャの思考が「罠にはめられた」と言う事にはまっていた為、自己判断で翼をフリーダムに向けて伸ばす。

フリーダムが接近しながら空いている左手で、腰からビームサーベルを引き抜く。

「……それでもっ！！」

ナターシャは思考を振り払うように横に振ると、シルバリオ・ゴスペルが自己判断で向けた翼をフリーダムに近づけるためスラスターを吹かせる。

「勝てないとしてもっ！！」

翼とビームサーベルが交錯する。

翼が斬られるが相変わらず再生した。

フリーダムの腕にエネルギー翼が触れたため、少しだけ煤こけてる。

「時間は稼ぐ事はまだ出来るっ！！」

互いに交錯し、横を通り抜けると距離を離す。

そして翼をはためかせ、向かい合う。

「この子もそう言ってくれてるっ！！」

「束、終わったか？」

千冬は白騎士の腕を修復している束に近寄る。

束は首だけを千冬に向けて笑う。

「うん、終わったよ～。」

そう言うと、束は千冬に白騎士を見せるように動く。

確かに白騎士は被弾する前の姿をしていた。

「まぁ、大体のパーツを先に作っていたから、それを組んだだけなんだから、簡単に終わるんだけどね……。」

そう言って廃棄したパーツを目で見る。

そこには手首を斬られた腕のパーツが、シートの上に転がり落ちていた。

「後は、ち～ちゃんがコアと腕の連結を行えば完成だよ。」

そう言うと束は白騎士から離れる。

「ＩＭＳパーツを使ってない分、連結はちょっとばかし時間はかかるけどね……。」

束はそう言い残すと、別の被弾した機体へ向かった。

紅椿とシュヴァルツェア・レーゲン、ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩは、破壊されたのが武器だけだったからか、簡単に修理は終わっていた。

白式は絶対防御で防いだためか、エネルギーの減りが激しかっただけ。

ミステリアス・レイディは白騎士同様、一部破壊されたせいか同じように修復されていた。

「……行こうか……。」

そう言ってシルバリオ・ゴスペルと戦闘するフリーダムを眺めた。

217　リリィVSナターシャ（後書き）

フリーダムで戦い続けようかな……。
ストフリになった方が良いかな？

「退いて下さい。　すでに結果は見えています。」

と言う用にね……。

目に見えている戦闘だけど、一応考えて進めないとね……。

久々に「G線上の魔王」をプレイ……。

……アレ……。

ラスト辺りで、視界が滲む……。

……なんでだろ……。

２１８　フリーダムＶＳ　ＩＳ（前書き）

そろそろ戦闘も終了間際……。

さっさと終わらせたい気がする。

パターン３

束「ぶぅ～、ち～ちゃん達ばっかでずるいよ～。」

218　フリーダムVS　IS

エネルギー翼とビームサーベルが交差する中、突然シルバリオ・ゴスペルは後退し始めた。

フリーダムとの距離が開く。

追撃はしなかった。

いくつもの火線がフリーダムに伸びたためだ。

超が付くほどの高機動で、フリーダムは二十以上の火線を回避する。

「……あ、当たらない……。」

「当たりませんわね……。」

「……いや、当たったらいいな～って感覚で撃ってたでしょ……。」

「口を閉じろ、行くぞ……。」

「Ｄｉｅ　Ｚｕｓｔｉｍｍｕｎｇ.　（了解）」

その声がリリィの耳に入ると、ピット付近から白い影が二つフリーダムに向かって飛んでくる。

白騎士と白式が雪片を構えて、瞬時加速で高速接近した。

二機に寄り添う形で、ブルー・ティアーズの誘導兵器が飛ぶ。

そしてフリーダムの死角である下方から、紅椿が雨月と空裂を所持し瞬時加速並みの速度で接近している。

観客席から「フリーダム……、大袈裟な伝説も今日で終わりだ」と誰かが呟いていたが、気にしない。

三方向からの近接格闘襲撃、五方向からの中、遠距離の援護射撃。

確かにこの状居をさばく事は、千冬にも出来ないだろう。

接近して捌かれても、射撃で落とす。

実にシンプルで、卑怯な手。

「……甘いよ。」

だが、リリィにとっては子供の浅知恵。

ビームサーベルを両手に持つと、バラエーナプラズマビーム砲を展開し、接近する二機に向けて放つ。

もちろん千冬も反撃が来ると理解していたのか、ビームを完全に回避する。

しかし避けたのはいいが、ビームの粒子に触れたのか並走していた誘導兵器の一機が失速してビームに飲まれていった。

「まだまだっ！！」

すでに千冬達は模擬戦闘と言う事を忘れ、勝ちたいと言う意思が前に出ている。

リリィが一瞬「何処で間違えた」と呟くほどに、当初の目的が外れてきている気がした。

結果として戦闘と言う事は変わらないのだが、何かが血が言う気がする。

そんな事を思いながらリリィはバレルロール気味に回転し、接近する紅椿にバラエーナを撃ちこむ。

「っ！？　ふっ！！」

しかし、流石第四世代機。

機動性が高いため、一瞬で横にそれビームを回避した。

それを見た遠、中距離にいた機体が一斉に射撃を開始する。

頭が地面を向いている状態なら、少しでも当たるだろうという可能性を持っての射撃だった。

ブルー・ティアーズのスターライトｍｋＩＩＩに三機の誘導兵器、甲龍の二門の衝撃砲、ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩの両手に所持されているアサルトカノン、シュヴァルツェア・レーゲンのレールカノンに、ミステリアス・レイディの蒼流旋のガトリングガンがフリーダムを狙う。

もちろん、簡単に当たらないのがリリィと言うフリーダムだ。

「っ！？」

メインブースターをフルで起動させ、アリーナ地面に向けて移動する。

それだけで、ホーミング機能がない攻撃は回避された。

つまり、全ての攻撃が回避されたのだ。

更に移動中、紅椿に向けてビームサーベルで一閃して行った。

箒は回避したが、雨月のエネルギー刃は折れている。

その時には、フリーダムは地面に足を付けていた。

「この状態で負ける事は、流石にお姉さん困っちゃうな……。」

楯無がそう呟くが、勝率は無いに等しい。

白騎士が瞬時加速で、一気に間合いを詰めて雪片を振るう。

上段から振り下ろされた雪片は、フリーダムに飛ばれ回避される。

しかし、それで終わらないのが千冬だった。

上空から斬り下がったため、足が地面についてはいない。

その事を利用して足の踏刀を展開、手を地面でバネの様に使いフリーダムに追撃する。

倒立の様な格好で白騎士は飛び上がり、フリーダムに踏刀を向けた。

もちろんリリィはそれに反応して踏刀が展開していない場所を蹴り、白騎士の攻撃を防ぎ接近させない。

長く続く戦闘も、いつ終わるか分からなかった。

２１８　フリーダムＶＳ　ＩＳ（後書き）

久々にＡＣｆａをプレイ。

久々プレイのせいか、元々悪かったのか……何か鈍い。

おそらく元々……。

１００時間くらいしかやってないため、腕は最悪。

一応頑張って、敵を倒す……そんな今日……。

あ、お部屋のお掃除しましたｗｗｗ

何かさっぱり♪

その後でＡＣｆａやって、「ＳｅｃｒｅｔＧａｍｅ」をプレイ。

もち、４番目の方だよ？

皆ハッピーなルートだよ。

……いや、必ず序盤で死ぬあのおデブさんがいたか。

あと小僧。

２１９　リリィＶＳ教師＆生徒（前書き）

タイトルがキツクなってきた……。

そろそろ限界がきそう……。

パターン……２

２１９　リリィＶＳ教師＆生徒

「……本気で行くぞ……。」

千冬が体勢を立て直しながらそう言うと、千冬独自の歩方で距離を一瞬で詰める。

リリィが束と共に消えてから、鍛錬し続けた結果がその歩方だった。

ＩＳのスラスターなしで、かなりの距離を詰める事ができるその歩方は本来「相手に自身が接近している事に気が付かせない」事を重点としている。

しかし何を間違ったのか、千冬は気が付かせないではなく「知覚出来ない」と言う事をやってしまったらしい。

元々一閃白鷺の派生業を作ろうとして速度と認識度を強化した結果、偶然出来てしまったのだ。

結果としては「相手に認識される前に近づいている」と言う事なのだが、どう考えても「縮地（しゅくち）」である。

リリィは千冬の歩方を見て、縮地に関する物を思い出す。

だが思い返すもの全て、束がハマっていたアニメや漫画だった。

雪片が零落白夜を発動し、フリーダムに下ろされる。

「なら、私も少しだけ本気……だそうかな？」

そう言うと、フリーダムはビームサーベルを横に構え雪片のエネルギー刃を受け止める。

そしてビームサーベルの刃先を下ろし受け流すと、もう一方の手でビームサーベルを抜き取り、胴を薙ぎ払う。

ビームサーベルの出力は変わらないが、白騎士の残りエネルギーがかなり減った。

甲龍の衝撃砲とブルー・ティアーズの射撃が、フリーダムを狙うがやはり当たらない。

射撃速度が、移動速度に追いついていないのだ。

「もう一回……。」

「はぁっ！！」

フリーダムが一閃し身体を捻りながら、振ったビームサーベルをもう一度振ろうとすると顔に向かって雪片が近づいていた。

首を捻り、攻撃をかわすが突きから横薙ぎに変わる。

エネルギー刃が顔に向かって移動するが、リリィに攻撃は当たらなかった。

腰のレールガンが伸び、白騎士の体勢を崩しフリーダムから離させる。

そのままフリーダムも後退しながらレールガンを放ち、白騎士はアリーナの地面に落とされた。

後退している時から、フリーダムは実弾が当たっているが気にしない。

楯無のガトリングガンとシャルロットのアサルトカノンにショットガンが、景気よく弾を吐き出し続けた。

レールガンを展開したまま二人の方を向き放つが、ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩのシールドに二人とも隠れ、攻撃を回避する。

（……千冬の次に厄介なのは、機転の聞くシャルロットとレーザー兵器と策略を立てることができるセシリアだけ……。）

そう思いながらアリーナにいる機体を見る。

（一夏は零落白夜を除けば無視しても良いし、鈴はＰＳ装甲があるから無問題（モーマンタイ）。　楯無は学生最強だし策略もあるが、鈴と同じようにＰＳ装甲があるため除外。　ラウラも同じような感じだが、軍隊隊長のせいか指示力や作戦立案能力もある。　指揮官として戦闘に参加したら……。）

ビームサーベルを振るい、飛んでくるレーザーを斬り払う。

実体弾は基本無視しているが、白式の荷電粒子砲は少しだけ警戒したいた。

千冬も雪片・真打を、中距離射撃に切り替えビームサーベルの間合

い外から攻撃を開始する。

プライベート・チャンネルでラウラが全員に作戦を伝えたのだろう。

リリィはそう思いながら、危険度の高い物を徹底的に回避して行く。

「……ん？」

そしておかしなことに気が付く。

攻撃を避けるのに必死だったため、リリィは何かを見落としている感じがしたのだった。

千冬の攻撃を避け、白式の荷電粒子とブルー・ティアーズのレーザーを2本のビームサーベルを交互に振る事で防ぎ、シュヴァルツェア・レーゲンのレールカノンをレールガンで相殺し、衝撃砲やガトリングガン、アサルトカノンとショットガンをＰＳ装甲で無効化する。

（……ゴスペルと箒がいない……。）

攻撃を防ぎながら、リリィは箒の姿を探した。

２１９　リリィＶＳ教師＆生徒（後書き）

しょっぱなからネタだった……。

腰が痛いぉ。

話題、話題……。

束の党を作る……♂あわないか？

ＣＶは人類の天敵で再生してください。

２２０　最強ＶＳ普通（前書き）

ここ最近スランプ気味です……。

書くのが……ｏｒｚ

タイトルの「普通」は、全員を平均して……。

220　最強VS普通

かなりの攻撃がフリーダムに迫る。

下からは荷電粒子と、エネルギー弾。

前後左右からはアサルトカノンや、ガトリングガン。

上からはレールカノンに衝撃砲、レーザーとフリーダムに全員で攻撃し落とそうという魂胆が丸見えだった。

（……。）

しかしリリィの思考はそんな事を考えてはいない。

レーザーを回避し、衝撃砲を受けてなお辺りを見る。

（……何処……。　……何処にいる……。）

レーダーを頼ろうとしたが、ジャミングされているせいか上手く作動しない。

頭の中に、小さな点が細々と点滅している。

ゴスペルはピットの方を見たら、補給をしていたため今は脅威ではない。

（……イケるか？）

ラウラがそう思いながらレールカノンを撃つ。

だが、簡単に回避されアリーナの地面を更に土煙で覆う。

もちろん、ジャミングはラウラの発案だ。

ドイツから実験で送られた、高性能ジャミング装置。

テストではドイツの第三世代機シュヴァルツェア・ツヴァイクのレーダーを全滅させる事ができたらしい。

しかしながら、やはりフリーダムと言うべきなのだろう。

それほどのジャミング装置を使われたのにもかかわらず、レーダーは半分以上機能ているのだ。

ちなみに、ＩＳの方のレーダーは全滅していた。

おかげでレーダーを使わない、目視射撃や目視確認をしなければならない。

第三世代のレーダーも、第一世代に比べたら格段に進化している。

ＩＳの中でほぼ完成しているといっても良いほどに作られているのだ。

代表候補生と言われる者達は、リリィの進言で何かが破壊された時に即座に対応できるように「レーダーがつぶされた場合」の方法をちゃんと教わっていた。

無数の弾がフリーダムをかすり、レーザーがビームサーベルによって弾かれる。

（……そろそろ戦闘を開始して一時間ほど経つ……。　お父様がどうか知らないが、普通に考えれば既に体力は限界なはず……。）

レールカノンが再度放たれるが、同じようにアリーナの地面に落ちた。

土煙がアリーナ全体をおおうほど広がる。

（……やはり、賭けるしかないか……。）

レールカノンが落ちた場所を見て、ラウラはプラズマブレードを一瞬だけ展開させた。

それを見たシャルロットはショットガンに切り替え、上昇しながら発砲する。

鈴もそれに続き、衝撃砲を撃ちながらシャルロットがいた場所に移動した。

ショットガンの弾が、フリーダムを外れ土煙に突入する。

「……。」

リリィは陣系が変わった事に、少しだけ目を細めた。

全員の位置が、先ほどいた位置より上昇しているのだ。

白式も、白騎士もミステリアス・レイディまでもが、上昇していた。

何かがある。

そう思い付くには時間がかからなかった。

（上からの攻撃……。）

状況を正確に捉える。

（ラウラの作戦。　……箒。）

視界にいない箒を思い浮かべる。

（土煙……、ジャミング……。）

この間僅か数秒。

リリィはこれだけでラウラが何を考えているか理解する。

土煙とジャミング、死角から強襲する軍属にとって当たり前の戦法だった。

リリィは口を少しだけ釣りあげると、無防備に背を地面に向ける。

これを見たラウラは表情を変えなかったが、内心で喜んでいるはずだ。

事実、一夏が表情に出していた。

（いつ来るのかな～。）

少しだけ楽しみながら、リリィは襲撃を待った。

その間にも、フリーダムに向けての攻撃は続く。

大体は回避されるが、ガトリングなどの連射型実体弾は弾に当たる。

「……っ。」

そして背後で風が動く音がした。

後部カメラで即座に確認する。

フリーダムに向けて雨月と空裂を構えた箒だった。

攻撃が降り注ぐ中、紅椿を纏った箒が最高速度で接近してくる。

誰もが勝ったと思う状況。

しかし、結局リリィが相手なのが悪かった。

雨月が振り下ろされるのと同時に、紅椿を軸に横移動する。

前のめりになった箒の後ろに、何事もなかったかのようにフリーダムは元の体勢に戻った。

「……合計点４０点。」

そう呟くと、最小の運動量でビームサーベルを振るう。

２２０　最強ＶＳ普通（後書き）

と言うかね……。

なんか、ね。

……。

感想を送ってくれる方が固定しているんだけど、ね。

うん。

べ、別に感想が欲しいってわけじゃ、ないんだからねっ！！

嘘です、欲しいです……。

スランプの解消方法は、ガソリンを入れる事だと最近思ってきた気がする私です。

２２１　災厄ＶＳ人（前書き）

もうゴールしても良いよね？

そろそろしちゃうよ？

きっついからね……。

パターン３

221　災厄ＶＳ人

紅椿がエネルギーが切れ戦闘行動がとれなくなる。

千冬達は唖然とした。

紅椿はエネルギーを補給してから、一度もエネルギー消費をする王泣行動を取っていない。

しかし紅椿は、エネルギーを全てなくされた。

（……ジャミングが利いている中で……。）

（……紅椿の奇襲を……。）

（……なぜ、察知する事ができたんですの。）

千冬とラウラ、セシリアは瞬間的にそう思った。

レーダーが使えないと思っている三人は、目を見開きフリーダムを見る。

しかし、リリィも直前まで紅椿をレーダーでとらえる事ができなかったのだ。

理由はジャミング装置にあった。

ラウラが使用したジャミング装置は「使い捨て」なのだ。

ジャミング装置と言うより、ジャミング粒子と言った方が良いかもしれない。

ジャミング粒子は灰色の燃えカスの様な形状をしている。

フリーダムの足元に漂っている、土煙の様な色合いだ。

その粒子は、戦場で砲弾の着弾と共に舞い上がる土煙にまぎれるように開発された、特殊な物だった。

つまり、ラウラはジャミング粒子をレールカノンに詰めた装置（タマ）を撃っただけだ。

フリーダムは驚愕している三人を無視し、翼を広げ上昇する。

（……ん、レーダーが回避した？）

リリィは全員の熱反応をレーダーで見て、少し思うとビームサーベルを両方腰にマウントした。

そしてビームライフルを掴み、前方に向ける。

千冬が全員に回避命令を言うが、遅い。

既にマルチロックオンシステムは全機ロックオンしている。

瞬間的にトリガーを引く。

レールガンやバラエーナプラズマビーム砲が展開され、一瞬にして白騎士以外のＩＳに直撃し、エネルギーを奪って行った。

「……。」

「そんな……。」

「……やっぱこうなるの。」

全員が驚愕する中、フリーダムは攻撃を止めない。

一瞬の攻撃で、白騎士とピットにいるシルバリオ・ゴスペル以外を排除したことに、アリーナ中にいる全員も目を見開いた。

ビームやレールガンがエネルギーが付きた機体を避けて白騎士を狙う。

しかし白騎士もただやられると言う事はなかった。

機体の被弾を最小限に抑えるため、雪片のアンチビームコーティングでビームを弾く。

「っ！」

だが、迫り来る攻撃は次第に捌けなくなっていく。

既に戦闘はフリーダム対白騎士と言う状態だ。

徐々にシールドエネルギーが削られていった。

「……。」

突然フリーダムが後退する。

すると、フリーダムがいた場所に向けて無数の射撃が通った。

「ブリュンヒルデッ！！」

フリーダムが声がした方にビームライフルを向け、トリガーを引く。

緑色の光条が白銀の機体をかすめる。

補給を終えたシルバリオ・ゴスペルだ。

ビームを回避したシルバリオ・ゴスペルは、エネルギー翼を羽ばたかせシルバー・ベルを放つ。

先ほどと同じようにエネルギーに注意しながら撃っているのか、射撃数は少ない。

そのせいかフリーダムは砲撃をマルチロックオンシステムで捉えると、展開したままの五門から砲撃を開始する。

一瞬で二十を超える射撃がフリーダムから放たれた。

それらは正確にシルバー・ベルを撃ち落とす。

「……っ。」

千冬はその光景を眺め、唇をかんだ。

（……何がブリュンヒルデだ……。　世界最強と言われておきなが

ら、師に対抗出来ない上に守る事も攻める事も出来ないじゃないか……。）

自然と雪片を握る手が強くなる。

（師だから勝てないと言うのは、甘えだ……。）

フリーダムは千冬を見ながらも、シルバーベルを撃ち落としていく。

その姿を見て、千冬は雪片を構えた。

（なら……、師（リリィ）を超えよう。　強さではなく、覚悟で……。）

２２１　災厄ＶＳ人（後書き）

よくよく考えると、千冬回だった事に気が付く私。

仕事め。

私を疲れさせて書けなくさせる気きだな？

だが、私は書こう。

ＩＳだけでも……。

うん。

一応、プロローグから１日も途切れた事はなかったしね……。

２２２　フリーダムＶＳ白騎士＆シルバリオ・ゴズペル（前書き）

決着。

あ～、やっと終わった……。

と言う感覚で、パターン３

222　フリーダムVS白騎士&シルバリオ・ゴズペル

アリーナには、一夏達落とされた者に戦闘をするリリィ達がいた。

落ちたモノはアリーナ地表に、戦闘を続ける者はアリーナの空を飛び砲撃を続けている。

ビームがエネルギー弾を撃ち落とし、エネルギー弾がフリーダムを襲うが回避され当たらない。

（……茶番（ファルス）を終わらせようか。）

リリィはそう考えると、砲撃の手を緩めた。

砲身を全て仕舞う。

ナターシャはそれを見てチャンスと思ったか、一気に畳みかけるように砲撃を開始する。

普通ならこの場でフリーダムが行う行動は、後退か回避だ。

しかしフリーダムは、シルバリオ・ゴスペルに向かって加速した。

それを見ていたセシリアは、前にリリィと戦った時を思い出す。

瞬時加速以上の速度で、シルバリオ・ゴスペルに迫る。

だがそれを阻むように、エネルギー弾がフリーダムに襲いかかった。

「……。」

リリィはそれを見てスラスターを左右上下自在に動かし、砲撃の合間を縫う。

純粋な回避。

撃ち落とすではなく、避ける事で砲撃を無効化する。

やはりといっても良いほど、アリーナ全体が驚愕していた。

「くっ！」

ナターシャが毒づくが、徐々に距離は縮まっていく。

シルバー・ベルが止み、シルバリオ・ゴスペルのエネルギー翼がフリーダムに伸びる。

エンジェルダウン作戦後に紅椿が翼に包まれて、ダメージを追ったようにフリーダムに翼が伸びた。

回避をしなければ撃墜される、誰もがそう思った。

しかし、フリーダムは更に加速する。

砲撃がないため、一直線にシルバリオ・ゴスペルに向かって加速し、ビームサーベルを腰から引き抜く。

結果、シルバリオ・ゴスペルはフリーダムをエネルギー翼で捉える事ができなかった。

エネルギー翼が消える。

その光景はシルバリオ・ゴスペルの、戦闘不能を指していた。

二機が交錯しフリーダムがその場から離れると、白騎士がフリーダムに向けて瞬時加速で距離を詰める。

「はぁぁっ！！」

千冬が相変わらず、気合を入れて雪片を正眼の構えの様にフリーダムに向かう。

雪片のエネルギー刃がフリーダムを下から串刺しにするかのごとく迫る。

だが、やはり蹴りで刃の矛先を変えた。

完全に白騎士に背を見せたしまう形を取るフリーダム。

（……ココだ……。）

その姿を見て、千冬は目を光らせた。

蹴りで回転する状況を利用し、遠心力を衝えたエネルギー刃をフリーダムに向けた。

距離は刃が届くか届かないかの境目。

しかし千冬は懸命に腕を伸ばし、フリーダムに届かせようとした。

その状態に気が付いたのか、フリーダムが振り返る。

（届けっ！！）

刃がフリーダムに近づく。

その刃の軌道は、正確にフリーダムを捉えていた。

一夏や箒達が下からその光景を眺める。

フリーダムが防ぐように手を刃に差し出す。

だが、シールドもない状態で止める事ができるとも思えない。

零落白夜はシールドエネルギーに直接ダメージを与える事ができる武器だ。

ダメージがないわけではない。

刃がフリーダムの手に触れる。

「……甘いよ、ち～ちゃん……。」

その光景を見ていた束が、そう呟いた。

ピットに立ち、束は缶ジュースを持ちながら座っている。

「確かに零落白夜は、シールドエネルギーを削る能力だよ。けどね……。」

缶に口をつけて中身を飲む。

そして口を離すと、不敵そうに笑った。

「それはＩＳに限っての話だよ……。」

今の束を見たら、誰もが怪しく感じるであろう笑いをしていた。

「「「「「「「「「「なっ！？」」」」」」」」」」

全員が見ている光景に目を疑う。

雪片・真打が展開した零落白夜のエネルギー刃を、フリーダムは片手で掴んでいた。

刃先には触れず峰をつまむ様な状態で、エネルギー刃は掴まれている。

「危ないな……。」

リリィがそう言うと頭部バルカンを作動させ、白騎士に絶対防御を作動させる。

そしてエネルギーが底をつき、雪片のエネルギー刃は消えた。

「……な……。」

千冬は固まったまま動けないでいた。

「エネルギー刃とはいえ原理的に言えばレーザーブレードに近いけど、その出力はレーザーブレードにははるかに及ばない。　エネルギー刃くらいの熱量なら、耐熱装甲とＰＳ装甲で大体相殺できるんだよ。」

そういって、微かに溶けかけたマニュピレーターを見せる。

「実際ダメージにはなっていたけど、残念だったね。」

溶けかけた手を上下に振ると、その手は何事もなかったかのように元通りの綺麗な状態に戻る。

そして、模擬戦闘はリリィの勝ちと言う事で終わったのだった。

２２２　フリーダムＶＳ白騎士＆シルバリオ・ゴズペル（後書き）

長々しく続けてしまって申し訳ないでござる（え？

ござる？

工エェェ（┐□┐；）ェェエ工

まぁ、そんな事はどうでもいいか。

ここでちょっと、この話でのエネルギー刃の立ち位置。

御都合主義ｗｗｗ

おぃぃぃっぃ！！！

冗談です。

作者的に、立ち位置不明なんですよね……。

最初は以下の通り

フリーダムが雪片を掴めたのは、リリィが言った通り「耐熱装甲」と「ＰＳ装甲」があったからだと思います。

実際エネルギー刃はビームサーベルやレーザーブレードとは違い、刃の形が整い過ぎています。

紅椿の雨月、空裂などはアニメだと完全に実刀に近い状態になっています。

もし高エネルギーの収束をした場合、形を保てずエネルギーが過剰に入る事により、エネルギー刃は飛散すると思われます。

ビームサーベルとて、磁場形成理論の応用技術利用しても刃は完全な形を保っていません。

この結果から、刃の形を保つためには「熱力が低い」状態と「実体化（？）」などが上げる事ができると思います。

束マジックは流石に不条理すぎますしね……。

まぁ、このお話ではビームサーベルの出力を２０％にしても刃は形が安定してませんし、完全にエネルギーを使っている雪片は形が保っています。

結果としてここでは　ビームシールド＞＞＞アンチビームシールド＞＞ビームサーベル＞＞レーザーブレード＞＞＞耐熱装甲＞ＰＳ装甲＞＞＞＞雪片＞＞＞通常装甲　と言う感覚ですね。

実際どうなのか知りませんけどね。

だったんだけど……。

散々零落白夜とビームサーベルを何回かかわさせちゃったんだよね～。

もし、上の通りになったのなら、エネルギー刃……。

砕けてるよね……。

……さて、どう説明をつけるべきか……。

ぶっちゃけ、上に不満があれば「災厄の再生能力を使用し続け、破壊→回復→破壊→回復と言う状態を作った」というパターンに変えることも……。

けどな～。

凄く悩む雪片の立ち位置。

一応矛盾があるけど、上の様な感じで。

２２３　模擬戦闘終了（前書き）

……Ｒ１８な束さん（イラスト）を書いた日。

……三日前の事だけど、ね……。

パターン３

２２３　模擬戦闘終了

模擬戦闘はたった一人の勝者を残して幕を閉じた。

誰もが疑わなかった、戦力と戦女神の称号を持つ女性の存在。

九機に対し圧倒的な力で攻撃をかわし、戦女神の称号も世界最強と言う状態から席を開ける。

自由の名を持つ天使だけが、ただそこに存在し自身の存在を証明していた。

国家、企業は、その存在に恐れさまざまな行為で天使を無力化しようとする。

だが天使にとって、その行動こそが無駄なものであったと証明されてしまう。

天使が指を鳴らすと、全ＩＳのコアが緊急停止したのだ。

誰もが驚愕する中、一部の者たちだけはその状況が当たり前だと感じていたようだ。

平然とその光景を見ている。

コアの正常稼働を上位命令文での完全停止。

天使と魔王の二人が行う事の出来る、ＩＳを製造した者達しかできないコアへの直接命令。

搭乗者の意思を弾き、産みの親が言う事しか受け付けない状態。

誰もが恐怖した。

ＩＳ社会と言う状況は、女尊男卑と言う状態を作り出した。

しかし同時に、ＩＳと言う未知なる技術を世界中に送り出してもいる。

技術的には数世紀の進歩。

もしＩＳが世間に公表されなかった場合、どうなっていたのかと思うと、微妙な状況になるのが世の中の大半だ。

国家はこれを気に、自国で制作している第三世代機の開発に躍起になるのだった。

最終的に勝てるわけがない、その結果を追って。

「今回はチームを組んで殲滅戦と言う事だったけど、私以外を相手

に取るならほぼ満点だよ。」

リリィはそう言って座っている九人に言葉をかける。

もちろん千冬達、模擬戦闘に参加した九人だ。

ピットに椅子を用意され、授業の様に離し始めるリリィ。

その姿は、直前まで戦闘があったとは思わせない。

軽く走っただけの息切れもしていない姿だった。

対する千冬達はスーツが煤汚れたり疲れていたりで、リリィの話を聞きながら深く息を吸ってはいていた。

「私なら多分抑え込む事ができるんだろうけど、悩んでないリリィちゃんは無敵だからね～。　キス～☆」

「話が終わってから、部屋でね。」

束が軽く説明に入り、脈絡もなくリリィにキスをせがむ。

一時間近くとはいえ、寂しかったのだろう。

リリィにくっついて離れない。

「今回悪かった点は、楯無の独断行動を入れた事かな。　楯無がワンマンプレーで一瞬行動に乱れが入ったからね。　千冬は最初は一夏達を守ろうとして良くやっていたけど、後半模擬戦闘と言う状況を忘れていたでしょ？　昔見たく私に「ひと泡吹かせなければ」と

でも思ったんじゃないのかな？」

その言葉に楯無と千冬は少しだけ、頬をひきつらせた。

どうやら思っていたらしい。

リリィは少し苦笑しながら、口を開いた。

「……十分、ね。　千冬や楯無の強いとこは知ってるから。　ほら、千冬は回避や防御された後にすぐさま隙をついた攻撃に移れるし、楯無は生徒会長言われるだけあって操縦は上手いし、集中力も場の流れをつかむのも凄かったじゃん。　……大爆発……、クリア・パッションだって私に正確に当たっていたし。」

なんとかフォローする。

だが、逆効果だと目に見えて分かるほど落ち込んで行った。

「所詮私のあの行動は、リリィ譲りだ……。」

「攻撃が通らない時点で、その言葉は慰めじゃなくて口撃よ……。」

目から光が少しづつ消え、精神状態が危ないと頭の中で警報が響く。

「ラウラちゃんもシャルロットちゃんも～、よく頑張ってたしね～。」

束がそう言うと、リリィもその言葉に便乗して千冬達の状況をどうにかしようとする。

しかし千冬達がおかしなまま、時間は過ぎて行ったのだった。

２２３　模擬戦闘終了（後書き）

はい、ま～。

Ｒ１８の束さんはアドレス直飛びしない限り見る事はできないのだ～。

あ～っはっはっはっはっはっはっはっ、ゴ、ゴッホ、ゲフ……。

む、咽たぉ……（泣）。

見たければ、束さんを倒していく事だねっ！

……ジョークですよ。

うん。

２２４　篠ノ之家（前書き）

原作に戻る今回。

２週間かけて、発売中の原作を全て終わらせてしまう可能性を回避しながら、戦闘し続けていたら……ね。

いつのまにか、２週間以上だよ。

パターン３

224　篠ノ之家

「なつかし～ね～☆」

束がある場所を見つめ、そう言った。

目線の先には、束が言った通りに懐かしい物がある。

「……束にとってみれば、「久しぶり」か「ただいま」じゃないのかな？」

「どっちでもいいよ。」

そう言ってリリィと束はそれを見た。

目線の先には家、その近くには神社が見える。

そう、篠ノ之神社だ。

今リリィ達がいる場所は、旧篠ノ之家玄関前。

初めてお互いを大切だと認識した場所だった。

今では篠ノ之性の人物は誰も住んでおらず、おそらく空き家なのだろう。

神社の方は清掃されており、誰かが定期的に着ている事が分かる。

板張りの剣術道場は、昔と変わらずの形をしたままだった。

「……気になる？」

束の視線が、篠ノ之家のある場所へ向く。

リリィもその視線につられ、その方向を見る。

そして束とリリィは、ある光景を思い出していた。

女性っぽい部屋だけど、いたるところに機械とかが錯乱している場所。

束の部屋。

おそらく十年間に、国の学者が何十人も入ったと思われる場所。

他人に触れて欲しくはないと束が思っていた場所だ。

「……入っちゃおうか。」

束がそう言うと、玄関に近づく。

「いいのかな……？」

そう思いながらリリィはあたりを見た。

ＩＳ登場前に作られた家だけあって、ガスのメーターなどがデジタル式ではなくクランク軸でカウンターを動かすアナログ式。

そのためカウンターが止まっているかいないかで、住んでいるかど

うかが分かる。

ちなみに、カウンターは完全に止まっていた。

（……やっぱり、誰もいないんだ……。）

リリィはそう思いながら、束に近づく。

ＩＳを作った人物の家を、他の誰かに使わせると言う事は政府はしないだろう。

当たり前のことなのに、どこかさびしい気持ちになった。

（……あれ？）

しかし突然、カウンターが動き出した。

普通ならカウンターが止まると言う事は、住んでいないということと同義なのだ。

「リリィちゃん～？」

突然動きだしたカウンターを不思議そうに見た後、リリィはゆっくりと家の中に入って行った。

ドアをくぐり、家の中に入ると意外な光景が目に入る。

「……清掃……されてるね……。」

リリィがそう言うと、束が靴を脱いで上がった。

「……。」

束は何も言わないが、かなり驚いているのだろうか。

かなり首を動かして状況を見る。

昔とは違うが、篠ノ之家と分かる様な感じだった。

靴棚や傘立てを始めとする生活用品は、おそらく引っ越しの際に持ちだしたのだろう。

だが、それ以外。

必要ないと思ったものは、意外にもまだ使用されている。

「誰かが手入れをしてくれていたんだろ～ね～。」

束は自室に向かって歩き出す。

長い年月放置されていたはずの廊下にはそれほど埃がたまっておらず、今にも誰かが返ってきそうな家事がする。

そして束があるドアの前で止まった。

二人は何も言わないが、もともと住んでいた束はもちろんのこと、リリィも何の部屋かは理解している。

外から見ていた場所。

束の部屋だった場所だ。

「……。」

少しだけそのドアを眺めると、息を吐きながらドアを開けた。

束の後ろからリリィは中を見る。

「……変わって、ないね……。」

そう言っても良いほどに、その部屋は変わってはいなかった。

十年前と同じ状態を保ち、寝具やノート。

本棚や机なんかが、当たり前のようにそこにあった。

「ん、変わってはいるんだけどね……。」

そう言って束は部屋に入り、部屋の至るところから小型マイクを見つけ出す。

マイクは盗聴器で、おそらく戻ってくる可能性を考えた国が置いて行ったものだろう。

それをレイジングハートを部分展開させ、完全に破壊する。

束は懐かしみながら「ただいま」と、部屋に向かって言った。

２２４　篠ノ之家（後書き）

原作に戻ってきたので、軽めになんかやりたいな～。

人気投票とか？

そんなに構って欲しいのかｗｗｗ

私よｗｗｗ

ま～、やった所でこのシナリオ内での事だしね……。

党もあるからね～。

やらないけど。

なにか、ないかな？

２２５　思いではアルバムの中（前書き）

原作に戻ってきて、落ち着いた感じがするのは私だけではない気がする。

ちなにみ、どうでもいいことだけど……。

チート系の二次小説を読むと、何故かアニメが面白く感じなくなる。

私だけじゃないはずだぉ。

そんなこんなでパターン３

225　思いではアルバムの中

束は懐かしむ様に本棚から、アルバムを引き出す。

静かにアルバムのページをめくると、そこには幼いころの一夏や箒。

束と一緒に映ったリリィ。

リリィに料理を教わっている千冬や一夏。

家の中を掃除するリリィ。

剣を振るう千冬。

白騎士とフリーダムが戦っている状況。

リリィに向かって恨めしそうな目で見ている箒。

楽しそうに笑う束。

スライムに似た食べ物を持った一夏。

色々あった思い出が、アルバムに一枚一枚貼り付けられていた。

リリィは少しだけ微笑むと、それらを見る。

「……あの頃は、さ。」

束が唐突に喋り始めた。

もちろん、その言葉を遮るほど無粋な事はしない。

「皆笑っていられたよね……。」

そう言って、アルバムを捲りある一枚の写真をカバー上から触れる。

真中に一夏と箒。

一夏側の端には千冬、箒側の方には束とリリィが映っている写真だ。

その写真の中にいる全員の顔が笑っており、楽しそうだった。

「……私は……、……ＩＳを作って私と言う存在を、世界に知らしめようとした……。」

また一枚、アルバムを捲る。

「けど、ね。　ＩＳを作る前にね……。」

アルバムを閉じると、静かに本棚に戻した。

「……もし。　もしもだよ……、作る前にリリィちゃんと出会えていたら……。　私はＩＳを作る事はしなかったのかな……？」

束はそう言うと、苦笑いしながらリリィの方へ振りかえる。

「……後悔してるの？」

リリィの言葉に束は少しだけ考え、首を横に振る。

「束さんに～、後悔や失敗、反省、馬鹿なんて文字はないんだよ～♪」

少しだけいつもの束に戻ると、リリィは少しだけ息を吐く。

部屋の中を見渡して、ゆっくり口を開く。

「……結局、今が一番ってことだね。」

「……うん！」

少しだけ元気になった。

「……誰かいるのかしら？」

すると突然部屋の外から声が聞こえた。

一瞬今住んでいる人だと思ったけど、先ほど自身でそれを否定したし、束の部屋がそのままの状態で残っていることからあり得ない事だと、再度確認する。

廊下から、足音が濃血に向かって近づいてくるのが理解出来た。

少しだけ苦笑いをして、束の表情を見る。

どうやら、束も同じ事を思っていたのか表情が硬かった。

「……あら？」

そして相手いるドアから、女性が顔をのぞかせる。
四十代後半だろうか、微妙に小皺があるように見えた。
だが、そう思う前に束は目を見開かせて口を開く。
「雪子叔母さん……。」
懐かしそうに女性に向かってそう言う。
「もしかして……、束ちゃん?」
女性も女性で、信じられないと言う表情で束を見ていた。
そんな中リリィだけは、首を傾げてその光景を見る。
「束ちゃんっ!!」
女性はそう言うと、束に近づき手を握る。
泣きそうな声で束の名を何回も呼び、嬉しそうに束を見た。
対する束は、どうしたらいいのか悩んでいる。
助けて欲しいのか時折リリィの方を見るが、リリィもどうしたらいいのか分からないため、どうする事も出来ないでいた。
少しして、女性が落ち着くとリリィは「誰?」と束に聞いた。
「私は近所に住んでる雪子って言うのよ。」

女性がリリィの言葉を聞いていたらしく、自己紹介を始めた。

リリィも「あ、ご丁寧に……。」と言って頭を下げる。

物腰が柔らかそうな女性、雪子は笑顔でリリィを見ていた。

自己紹介されたのなら、自己紹介しないといけないと言うのは礼儀。

リリィも簡潔に自己紹介をするため、口を開く。

「私は篠ノ之束の夫、篠ノ之リリィと申します。」

そう笑顔で言った。

もちろん、雪子は目を丸くして「え?」と聞き返す。

おそらく「夫」と言う単語と外見が一致しないのだろう。

リリィはいつも通りに、自身が男だと雪子に証明した。

２２５　思いではアルバムの中（後書き）

雪子叔母さん……。

脳内で容姿が４０代のくせして、何故か外見幼女……。

理由はもちろん「１１ｅｙｅｓ」の広原雪子が原因。

眼鏡を外すと危ない女の子。

雪子叔母さん登場した瞬間、脳内で「忘却の剣」が流れ始めたのは私だけかもしれない……。

なぜこうなった……ｏｒｚ

２２６　雪子叔母さん（前書き）

タイトルは適当ｗ

まぁ、今後出る可能性が低いモブキャラだし、名前を使っても問題が無いかな～っと……。

パターン３

226　雪子叔母さん

リリィと束は、雪子から色々な話を聞いた。

どうやら篠ノ之邸は、雪子さんみたいな親戚を始めとする人が管理しているらしく、お祭りなどで本部や救護施設になったりするそうだ。

そのため、定期的に掃除などで手入れをしているとの事。

束の部屋がそのままなのは、ＩＳ開発者の部屋に何があるか分からないと言う理由と、一部の優しい人たちが帰る場所を残してくれていたようだ。

「それにしても、束ちゃんが結婚したなんて。　びっくりしちゃったわ。」

雪子がそう言うと、束は少しだけ恥ずかしそうに俯いた。

どうやら雪子は束に興味が無いとは思われてないらしく、きつい態度はとっていない。

むしろ親子のように感じられた。

「いつ結婚したの？」

雪子が女子高的な感覚で、束に問い詰める。

しかし、束にとっては恥ずかしいのか「あぅあぅ」と言って少しだ

け混乱していた。

リリィはそんな束を見て、リリィは雪子に「先々週です」と答える。

八日にリリィが十八歳になり、九日には式場探し。

十日には挙式。

十一日にはプールでデート。

十二日にはアリーナでライブ。

三日後の一五日に新婚旅行。

二十一日に新婚旅行から帰ってきて、翌日には買い物。

二十三日には模擬戦闘と、かなりの事があった。

そのため祝福を言われたのは、挙式とライブの時ぐらいしかないのだ。

改めて他人に祝福されるのが恥ずかしいのだろう。

「あら、できたての新婚さんじゃない。」

雪子は自分の事のように喜んでいた。

「……所で、今何処にすんでるの??」

笑顔で心配をするあたり、年上と感じるリリィ。

束が今が何も喋る事が出来ないからか、またもリリィが口を開いた。

「ＩＳ学園です。　私達、そこの教員ですので……。」

別に話ても問題はない。

前国家や企業が、その事を知っているのだ。

今さら隠すようなことではない。

ＩＳ学園と言うと、雪子は「やっぱり」と言う様な顔をして安堵していた。

何年間も心配していたのだろう。

「ＩＳ学園と言うと……、束ちゃんが一番偉いのかな？」

「いえいえ。　開発者としても普通の教職員扱いですよ。」

雪子の言葉にリリィは苦笑しながら答えた。

その苦笑に、雪子もつられて苦笑する。

「……確かＩＳの開発者って、二人いるのよね？　束ちゃんと……。」

「私ですね。」

「あ、やっぱりそうだったのね。」

雪子はそう言って手を叩く。

そうやって、時間は過ぎて行った。

「そう言えば、もう篠ノ之神社のお盆祭りは終わってるはずだよね？　ど～して屋台とかあるのかな～。」

三人で家から出ると、神社の方に歩きだす。

「ええ……、普通だったら終わってるわ。　……けど今じゃ唯の夏祭りよ。　今年は雨のせいで神楽舞だけやって、お祭りは延期してたのよ。」

束の質問に雪子が答えると、納得したように屋台を眺めた。

子供はちらほら見つける事ができるが、時間が時間の為そんなにはいない。

屋台では中年男性達が、持ち前の技術を生かし食べ物などを作っている。

「……けど、神楽舞はもう一度やるんだけどね。」

雪子はそう言って笑った。

目の前を綿菓子を持った子供が走っていく。

お面をつけた少女が楽しそうにりんご飴を持ち、もう一方の手で母親の手を握る。

その様子をみて「今日がその日なんだ……。」と束が呟く。

昔を思い出しているのか、少しだけ目を瞑り剣術道場に歩いて行った。

「そう言えば、神楽舞って誰がやったの？」

束が首を傾げながら、雪子に聞いた。

コレでも篠ノ之の血筋。

一応そう言う事が気になるのかもしれない。

雪子はその言葉を聞くと「そうそう」と言って少しだけ驚いていた。

「今年は箒ちゃんがやったのよ。　凄かったわ。」

二人は箒の名前が出た事に、少しだけ目を丸くした。

どうやら新婚旅行中に、そんな事があったらしい。

束は「なんでそんな面白そうな事言ってくれなかったかな～。」と少しだけ機嫌が悪くなる。

リリィはそんな束を見ながら、剣術道場の戸を開けた。

２２６　雪子叔母さん（後書き）

お盆週の週末が、勢い余って書き過ぎて……過ぎていた……。

仕方なしに詰め詰めの状況で整理し、神楽舞だけをやらせお祭り自体は雨天延期で引き延ばす。

うん。

我ながら強引……。

……ま、仕方ないよね。

227　道場と写真と（前書き）

まぁ、めんどくさくなってきております。

夏バテかな？

動く気力も起きません。

227　道場と写真と

リリィが道場の戸を開け中に入ると、一人の女性が道場にいた。

束とリリィはそれが誰なのかすぐに分かる。

分からない方がおかしい。

箒だった。

壁に立てかけている道場生徒の名前を見て、寝を細めている。

リリィが来る以前は、そこに千冬と一夏、箒ぐらいしか名前の札が無かった場所だ。

静かに箒の後ろに近づく。

雪子が近付いたら、おそらく箒は振り向いていただろう。

それくらいに、箒の気配を読む力は成長していた。

しかし近づいたのは、リリィと束。

箒がけは尾を読む事ができるかと言えば、出来ない相手だ。

二人の接近に気付かづに箒は生徒手帳を取り出し、そこに挟んでいる写真を見る。

リリィは後ろからそれを覗き込む。

写真は束の部屋にあったアルバムと同じ、五人で映っている物だった。

だがリリィと束、千冬がいない。

写真の両端を折って、擬似的にツーショットに見えるようにしているのだ。

「……片思いはいつ両想いになるのかな？」

「ひゃうっ！？」

束が箒の後ろから囁くようにそう言うと、箒は驚きながら前に踏み出し振り返る。

少し距離を取られてことに、束は唖然とするが瞬間的にいつものようになった。

箒はリリィと束を見ると、目を見開き唖然とする。

「……姉さんに義兄さん……。　いつから……そこに……？」

恐る恐るそう言うと、箒は写真を胸に押し付け身をすくませていた。

「いつからって……、ついさっきだけど？」

笑いながら束はそう言った。

箒はそんな束を少し睨むと、写真を生徒手帳の中に入れ仕舞う。

「そ、それよりも、どうしてここにいるんですかっ！！」

話題をそらそうと、箒は焦りながらそう言う。

「色々あったんだよ。」

リリィがそう言うが、その言葉で通じるとは思わない。

軽く警戒を続ける箒。

「それにしても、懐かし～ね～☆」

その声に、箒は束を見た。

剣道場の中心で両手を大きく広げて見渡している。

「昔はいっくんが「今日は俺が勝つ」って言って、結局箒ちゃんに負けて「明日は俺が勝つ」なんてやり取りあったよね～。」

苦笑しながら束はそう話した。

箒は恥ずかしいのか、頬を染めると俯く。

そんな中雪子が近付き、箒に向かって口を開いた。

「今日は別に好きな男の子誘って、夏祭りを楽しめばいいのに……。
本当にいいの？」

「っ。　良いですっ……。」

さらに顔が赤くなる箒。

おそらく好きな男の子と言う言葉で、一夏を思い浮かべたのだろう。

流石恋する乙女、と言うべきなのかリリィは一瞬判断に困る。

「それじゃぁ、お言葉に甘えちゃうわね。……一応、今日も神楽舞をやる予定だから御風呂入ってきちゃってね。」

その言葉で、リリィはメーターが突然動きだした理由が分かった。

お風呂の為だけに、メーターを回し始めると言う意味が分からないが、リリィにとってはさほど気にする事でもない。

箒と一緒に、リリィ達は再度篠ノ之邸へと戻って行った。

「そう言えばココだっけね……。」

そう呟きながら、屋台でかかっているのと同じお面をつけて歩き出す。

長い髪を後ろで束ねて、ゆっくりと歩く。
お祭りとは対照的に、その者の内は黒い。
「今助けるよ……。」
その者はゆったりとした歩調で歩き始める。
憎悪を抱いて。
「兄さん……。」
少女はそう呟き、辿り着いた場所は屋台の列の端。
その目は暗く、生気がほとんど感じられない。
肩を下げ腰を猫背にしているためか、身体が重そうに見える。
「……何処にいるの……。」

当てもなく少女はさまよう。

少しづつ増えて行く祭りの人込みの中に、少女は消えて行った。

227　道場と写真と（後書き）

さて、原作と同時進行でオリジナルをまた入れます。

なんかね、原作とオリジナルを組み合わせるのが一番楽かなって……。

エンジェルダウン作戦の時みたいに書いて行く感じ。

さて、だるいため寝よう。

228　篠ノ之流（前書き）

……最近熱いですね。

扇風機だけじゃ、限界が来そうです。

と言う事でクーラーを使いました。

快適パターン3

228　篠ノ之流

「よし、と。　これで準備万端ね。」

箒は神楽舞を行うために、神社的な赤い袴に白い衣を纏っていた。

鏡で自身を見たのか、箒は少しばかり頬を染めている。

そこに映っているのは箒なのだが、いつもよりと大人びて見えた。

「箒ちゃん～。　口紅の塗り方は知ってるかな～。」

「う、うん。　昔良くしてたから知ってる。」

束が小皿に乗った口紅を差し出す。

箒はそれを受け取り、鏡の前の台に置く。

「あ、そう言えば昔からやってたんだっけ。　いや～、時が立つのは早いね～☆」

箒は無言で小指を小皿の紅を取り、唇に塗っていく。

今でもスティックルージュなどがあるが、昔のような塗り方をするのが篠ノ之神社のしきたりだったりもする。

鏡で上手く塗れたか顔を少し動かして確認を取る。

そして確認が取れたのか、箒は束の方を向いて口を開く。

「……逆に姉さんが塗れるのが理解できないんですけど……。」

束は箒が紅をつける前に、簡単に綺麗に濡れるやり方を説明したのだ。

箒にとってみれば「今まで口紅を塗った所を見た事が無い、なら姉は口紅を塗れないんじゃないのか」と言う、唯一姉より勝ってそうな部分を探したらしい。

「チッチッチ。　女は歳を取ると口紅を使わないといけない場面もあるのだよ～。　……特にデートとか、ね。」

「（今までデートに出かけるときに口紅と言うか化粧もした事のないんだけどね）」とそれを聞いていたリリィは思っていたりもした。

もちろん箒も思っていたらしく「でも、義兄さんとのデートに化粧は分かるとしても、姉さ

んが化粧をしたところを一度も見た事ない……。」と言った。

確かに教職員をしているのなら、化粧などはするべきだ。

ファンデーションくらいはするはずなのに、束はファンデーションを使用せずに授業を行っている。

現に真耶みたいな年下でも、肌が気になるためファンデーションは使用していた。

千冬は使用してなかったが、使用する女性は割かし多い。

束はその質問に苦笑した。

「だってリリィちゃん、化粧とか好きじゃないからね～。……まぁ、私くらいになれば化粧しなくても十分イケるんだよ～♪」

「……なんだこの胸のイラつきは。」

それを見てリリィと雪子は苦笑した。

雪子は祭壇から宝刀を持ってくる。

「ん？　あ、それ懐かし～。」

宝刀を見て束はそう言う。

「……そういえば、昔はこれを持てなくて扇だったわね。」

雪子は刀を見てから箒を見ると、懐かしそうに喋った。

その言葉を聞いた箒は頬を染め「い、今は持てます。」と言って雪子から宝刀を受け取り鞘から刀身を抜く。

右手に刀を持ち左手に扇と軽く持つが、箒は少しばかり緊張しているようだ。

一刀一扇（いっとういっせん）の構えは古くは一刀一閃に由来し、現在も篠ノ之流剣術の方の一つにある。

実戦に扇は使わないが左手の獲物で受け、流し、捌きと言う守りを

行い右手で斬り、断ち、貫きの攻撃をする。

いわゆる小太刀二刀流と呼ばれる型だ。

リリィと知り合うまでは千冬も篠ノ之流を習っており、今でもこの型がよく見受けられる。

しかし小太刀二刀流は、刃の特性を生かした流儀。

小太刀とは刀より刀身が短く攻撃にはそれほど使えないが、軽量で小回りが利く。

楯として使える、それが小太刀だ。

だが何故リリィと出会い、千冬は篠ノ之流を止めたのか。

答えは簡単。

白騎士に乗るのに、お遊びの篠ノ之流では死に繋がるからだ。

流派がある剣術は剣道よりは殺傷能力を持つ事ができる。

だが、それでも遊びなのだ。

だからこそ千冬は篠ノ之流を習うのを止め、リリィを師と敬い教えを扱いた。

もし篠ノ之流だけで戦場に出た場合、絶対防御があったとしても苦戦はしただろう。

篠ノ之流も悪くはないのだが、道場剣術は足を引っ張るだけ。

それが千冬が辞めた理由だった。

228　篠ノ之流（後書き）

まぁ、道場剣術が白騎士事件で役に立つかと言えば少しぐらいしか役に立ちませんね。

道場剣術は、素早い剣戟などがそれほどありませんし……。

戦争で相手に合わせる相手もいません。

そうなれば道場剣術は足を引っ張るだけです、はい。

……ややアンチ気味になってきた気がする……。

ま、いっか。

２２９　束のいたずら（前書き）

まぁ、めんどくさくなくやってみよう。

少しばかり、頭が痛いですが……。

パターン３

229　束のいたずら

「よっ！」

あれから箒は、お守りの販売を手伝っていた。

もちろん神楽舞の衣装から巫女服へと着替えている。

そんな時に、一夏が現れたのだ。

（くくく、計画通〜り♪）

束はその光景を見て苦笑していた。

箒は一夏が現れた事に驚き、束には気が付いていない。

気が付いていたのなら、一夏がいる原因が分かったのだろう。

今から数時間前。

箒がお風呂に入っている時間だ。

「もすもす、いっくん？」

束がレイジングハートの通信回線で、一夏に通信した。

『うわっ！　た、束さん？』

「うんうん、驚いてくれてなによりだよ。」

一夏の驚きを、予想通りと感じながら束は喋る。

『どうしたんですか……。　一応ＩＳを使用しての通信は……。』

一夏がそう言うが、束は聞く気はない。

「今から篠ノ之神社に来てね～。」

そう言って通信を切る。

満足そうな顔をしながら数度頷く。

だが瞬間的にレイジングハートに通信が来る。

どうせ一夏だろうと思いながらリリィは束を眺めた。

「もすもすひねもす～？」

束がそう茶化しながら通信を取ると、思ってもみない声が聞こえた。

『束。　ＩＳの学外使用……どういうい事か説明してくれるか？』

その声に束は頬をひきつらせた。

「や、やぁ、ち～ちゃん……。　どうしたの、かな……？」

一夏だと思った相手は千冬だった。

『一夏に通信が入ってきているのだが、これは気のせいかな？』

軽く人を殺せるのではないかと思う声で、千冬は喋る。

リリィは向こうの様子が手に取るように理解出来た。

一夏が束の通信を受け取る。

切られてすぐに、千冬に見つかる。

説明する。

千冬から束へ通信する。

実に簡単だった。

『さて、どういう用件かな？』

束は苦笑いしながらリリィを見た。

かくいうリリィは、肩をすくめるだけだけ。

仕方なしに束は離す事にした。

「ち～ちゃん。　篠ノ之神社のお祭りって覚えてる？」

『ん？　あのお盆祭りの事か？』

「そう、それ。」

千冬が不思議がってる中、束は平然と話を進めようとする。

「雨降ったから延期になって、今日あるんだけど……。」

『なるほど理解した。』

「話が早くて助かるよ～♪」

千冬が安堵したような声でそう言うが、「だがＩＳを使用しての通信はいただけないな。」と急に怒る。

別に急ではないのだが、怒っていた。

確かに束にも、普通携帯端末は持っている。

そちらを使えば問題はなかったのだが、使用したのはＩＳ。

怒られても仕方がない。

「じゃ、じゃ～ね～、ち～ちゃん。」

束はそう早口で言うと、通信を切る。

冷や汗を垂らしながら、束はリリィの方へ振り返った。

「ど、どうしよう……。」

その言葉に何も言えないリリィだった。

一夏と箒が甘々な空気を作り出しているのを見て、リリィは雪子の方に近づく。

「……雪子さん。　箒をそろそろ下がらせてやってくれませんか？」

その言葉に首を傾げ、雪子は箒を見ると納得したのか頷く。

ゆっくりと箒の方へ歩いて行った。

リリィはその後ろ姿を見ると、束の方へ振り替える。

「……じゃぁ、行こうか♪」

束も雪子と箒を見ていたのか、リリィの方へ振り向きざまそう言う。

そしてリリィの腕に自身の腕をからませ、くっ付く。

そのまま頭をリリィの方に乗せる。

身長はほぼ同じくらいのため、頭を型に乗せる事ができるのは当然だった。

しかしリリィの外見が女性に見える事もあり、周囲の目をかなり引いている。

束はその視線を無視しているが、リリィは少しばかりは恥ずかしがっていた。

「……うん。」

ゆっくりと二人はお祭りの人込みの中に消えて行った。

２２９　束のいたずら（後書き）

ちなみに束とリリィに浴衣を着せたかった……。

しかし、駄菓子菓子！！

雪子が束が帰ってきた事を知らない！！

来る事を知らない！！

束もお祭りの事を知らない、リリィも知らない！！

結果。

浴衣は装備されませんでした……。

……ｏｒｚ

装備させたかったな～。

２３０　蠢く悪意と意思（前書き）

まぁ、今回は主要がキャラ出ないです。

そんな感じのお話。

どんなっ！？

と言う感じにパターン３

230　蠢く悪意と意思

暗闇で通信する男の影があった。

「そうか、篠ノ之博士を捉える事ができるか……。」

「ええ、ですが片方には何もしないでくださいね。」

通信相手はまだ若い。

女性っぽい声をしており、誰もが女性と理解出来た。

「片方と言うと……。」

「篠ノ之束の方ですね。」

通信相手がそう言うと、男は少し眉をひそめた。

「理由を聞かせてもらえないか。」

男は眉をひそめたまま問いかける。

女性は少し笑うと、軽い口調でその問いに答え始めた。

「私の方の実験に付き合ってもらうためですよ。」

「……ふむ。」

女性の答えに男は微妙な気持ちになった。

本当なら両名とも男自身の手の内に置き、フリーダムと呼ばれる機体以上の兵器を開発しなければならない。

「篠ノ之リリィの方なら、殺したって人体実験してもかまいませんよ。　慰み者にだってしても良い。」

その言葉を聞いて、男は笑った。

公式発表で、篠ノ之リリィは男だと知られている。

その相手を慰み者にしても良いと。

「男相手に、誰がすると思う?」

率直的にその言葉に反論したくなった。

「いるんではないでしょうかね～。」

女性も軽い口調で適当な答えを返した。

「なんにせよ、篠ノ之束は私の方で実験材料とさせていただきます。」

男はため息をついて「篠ノ之リリィ博士とフリーダムはこちらが貰うぞ。」と言う。

女性は「別に構いませんよ。」と言って苦笑する。

何を考えているのか理解ができない。

そう思いながら男は通信機器をいじった。

「それにしても国際ＩＳ委員会に貴方みたいな人がいるとはね。」

女性はそう言うと苦笑を止めた。

「私と後数名、元委員会もメンバーもいる。」

「それはそれは……。　何とも過激派ぞろいな事で……。」

茶化したように女性は言う。

男は国際ＩＳ委員会のメンバー。

つまり、ＩＳに関しての決定権や警察の行動に関しても自由に行えると言う事だ。

「……その過激派のおかげで、襲撃できる事……。」

「別になくったって、良いんですよ。　正面から戦っても、今の篠ノ之リリィとフリーダムは簡単に破壊する事はできますから。」

男はその言葉に目を丸くした。

今や生ける伝説と言われる篠ノ之リリィを、簡単に破壊する事ができると言ったのだ。

「私は複数のＩＳと篠ノ之リリィ博士が戦っているところを見た覚えがあるのだが……。」

男は女性を信じる事が不安になってきた。

失敗したら男と女性の繋がりがばれ、委員会除籍や裁判を無視した銃殺刑が待っている可能性がある。

不安に駆られない方がおかしい。

しかし、女性はその不安をうすら笑いで飛ばす。

「確かに今現在、最強と言えば篠ノ之リリィでしょう。……しかし、今の篠ノ之リリィには穴がある。」

「……信じても良いんだな。」

確認と言う意味で、男はそう問いかける。

女性は「もちろん。」と言うだけで、余分な事は言わなかった。

「ですが、なるべく早めに実験を終わらせて、篠ノ之リリィを殺しておいてくださいね。」

女性はそう言って通信を切る。

少しの間男は呆然として、通信を切った。

「……何を考えているんだ……。」

男は誰もいない暗闇に向けてそう呟くと、篠ノ之リリィ捕獲後の事を考え始めた。

「まぁ、良い。」

男はそう言って通信機器をいじり、どこかにかける。

「はい。」

「……私だ。」

「どのような御用件でしょうか。」

通信相手とは、長い付き合いなのだろう。

一言二言言うだけで、お互い理解できるような関係らしい。

「……頑丈な牢を用意しておけ。　空調設備を完備……。」

「了解いたしました。」

そう相手が言うと、再度部屋に通信が切れる音が響いた。

２３０　蠢く悪意と意思（後書き）

なんか、予測が立てやすい気がします。
気にしたら負けなのでしょうね。

一応、国際ＩＳ委員会は不干渉を決定していますが、過激派と呼ばれるモノを作り干渉させます。

……いつ捕獲しましょうかね～。

四巻に詰めてみます？

詰めたらすごい事になりそうですけど……。

まぁ、夏休み中ですから適当に出来ますからね～。

うん……。

２３１　夏祭りと少女（前書き）

……甘いお話ってどう書くっけ？

どうやら、夏祭りは甘いお話成分が無くなりかけている気がした……。

と言うわけで……、まぁ、Ｐ３

231　夏祭りと少女

リリィ達は普通にお祭りを楽しんでいた。

束は人混みは好きではなかったが、リリィだけを見る事によって周りを無視し続けている。

腕を組み、片方の手には綿菓子を持っているところを見ると、束が子供っぽく見えた。

「リリィちゃん、リリィちゃん♪」

束がそう何度もリリィの名を呼ぶと、りんご飴の屋台を見る。

屋台の周りには、合成着色料を口に付けた子供が沢山いた。

おそらく「買って欲しい」と言っているのだろう。

二人は少し微笑むと、屋台に近づいた。

相変わらず周りの目が二人に突き刺さる。

「おじさ～ん、りんご飴一つ～。」

リリィがそう言うと、屋台の店主は「あいよっ！」と言い、完成されたりんご飴を渡す。

束が受け取ると、リリィは店主にお金を渡し店から離れた。

店から少し離れると束は食べるのを止め、喋り始める。

「……なんでお祭りの屋台って、高いんだろうね～。」

誰もが思っていた事を、束は口に出した。

しかし、その言葉はある意味禁句だ。

リリィは肩を少しだけ上げ「お祭りだからじゃない？」と言った。

下手な事を言って、身を滅ぼしたくはないのだろう。

色々あった土地だ。

その土地でまた問題を起こしたくはないと言うのが、リリィの心境。

「……。」

腕を組みながら話す内容としては微妙だった。

「……そう言えば、打ち上げ花火っていつからだっけ？」

その言葉にリリィは目を丸くし、安堵した。

お祭りらしい会話になったからだろう。

別に先の話も、お祭りと言えばお祭りなのだが性質が悪過ぎる話題だ。

「……後少しだと思うけどね。」

リリィはそう言うと、境内の方に顔を向けた。
束は花火が気になるのか、リリィの様子がおかしいと言う事に気が付かない。
（……見られている……。）
そう思いながら、あたりを軽く見渡す。
しかし、周りは夏祭りに来た人だらけ。
リリィ達を見る視線なら、近くにいる物珍しそうに見ている人でも同じ事だ。
だがリリィが感じている視線は、明らかに異質だった。
外部から、押しつぶされそうな何かを叩きつけられている。
そんな感覚が、リリィにあてられていた。
「……あ。」
そんな中、一人の少女が目にとまった。
少女と言う割には、年齢は箒達と同じぐらい。
そこそこ成長している身体。
女性の中では高いぐらいの美貌を持っている顔は、その身体を重そ

うにしながら歩いている時点で相殺されていた。
なにより暗い。
「久しぶり。」
リリィはそういいながら、少女に近づく。
首を傾げながら、束はリリィが歩く速度に付いて行く。
「……久しぶり？　……あ、そうだ……。　久しぶり……。」
言葉の合間を伸ばす、独特的な話し方をしながら少女はリリィを見る。
「……リリィちゃん？」
束がその少女の容姿を見て、そう呟いた。
確かに少女の容姿は、リリィに似ている。
銀の長髪に赤い目。
容姿だけ見れば瓜二つだろう。
しかし、髪の毛が整っておらず荒れている。
目にも光りが灯っていない。
そのせいで、良く見なければリリィ似とは思わないぐらいだ。

「お兄さんは見つかった？」

「……いいえ。」

リリィの質問に、少女は首を振って否定した。

いかにも残念という表情をしながら、少女は俯いた。

元から暗かったと言う事もあり、少女の周りに闇がうごめいている感じがする。

「……知り合い？」

束が不思議そうな顔をしながら、リリィに尋ねる。

その質問にリリィは「ほら、シャルロット達とお買い物しに行った日に出会ったんだよ。」

といって、答えを返した。

「……あの時は……ありがとう……。」

少女はそう言ってお辞儀をする。

根は礼儀正しいらしい。

２３１　夏祭りと少女（後書き）

当初は甘いお話を描こうとしたんだけど、徐々にどう書けばいいのか分からなくなり、シナリオを進める事に。

ちなみに、一夏は普通にお祭りを巡ってます……。

原作通り、箒と蘭と一緒に……。

その間、リリィはめんどくさい陰謀に巻き込まれます。

一応、夏休み中に終わらせる予定……。

夏休みって、大体９月５日で終わるよね？

と言うと……。

３１日まであると考えて……。

２４，２５，２６，２７，２８，２９，３０，３１，１，２，３，４，５

あと、１３日で終わり？

……つめてみるかな。

実質次話辺りで、原作４巻のシナリオはおしまい。

オリジナルの夏休み話に……。

夏休みめぇ……。

オリジナルが増える、フリーダムな話だなぁ～！

リリィ（フリーダム）だけに……。

……サーセン。

232　闇の胎動（前書き）

シナリオがgdgdしてきますが、一応こうやって邪魔な物を壊していかないと……。

結構、原作介入も入れて行くつもり。

サブタイが2回目の様な気がするけど、パターン3と言う事で無視。

……どういう事だか……。

232　闇の胎動

少女と出会い、花火が打ち上がる瞬間。

リリィの運命は転がり落ちる。

束が少女と花火を見ている間に、リリィは二人から離れた。

そして今、篠ノ之神社の境内にいる。

皆花火が見える場所に移動したのか、境内にはリリィしかいない。

しかし、リリィはそこに人がいるかのように口を開いた。

「……いるのでしょ……。」

その言葉に草木が揺れる。

そして現れたのは、無数のＩＳ。

ほとんど、ラファール・リヴァイヴノ用量産機だ。
色彩は夜間戦闘用なのか、薄暗い明細カラー。
数は十機。
「……熱烈なアピールで呼んでくれたパーティーにしては、しけてるね……。」
搭乗者の女性は、静かにリリィを見る。
「目的は何かな？　……まぁ、妻が待ってるんでね。」
リリィの言葉を待たずに、ＩＳがリリィに襲いかかる。
ショットガンやパイルバンカーなどを構え、攻撃を始めた。
ショットガンの弾がリリィに向かって襲い掛かる。
だが一瞬でフリーダムになりＰＳ装甲で無効化。
パイルバンカーを持って向かってくる女性に向かって、ビームサーベルを腰から引き抜き心臓を貫く。
貫く。
絶対防御を紙きれのように貫き、搭乗者の心臓を貫いたのだ。
「……何処の者か知らないけど、戦争（パーティ）は終わり。　……死にたい者からかかってきなさい。」

パイルバンカーを構えた女性は、首を力なく垂らしパイルバンカーを落とす。

リリィはビームサーベルを引き抜くと、女性は心臓部分から血を流し絶命した。

今のビーム出力は、手加減しない全力。

２０％の手加減を止め、１００％の殺意をまき散らす状態だった。

普通なら女性たちは怯えるだろう。

しかし、そんな気配はしない。

むしろ率先してリリィに襲いかかる。

「……んじゃぁ、死になさい。」

レールガンとビームサーベルを常時展開しながら、ＩＳを完全破壊していく。

女性の命もろともだ。

リリィは女性を無意識に殺していく。

絶対防御が紙の様に破壊され、弾が女性を殺す。

僅か数十秒。

たったそれだけの時間で、そこに十名の死体が出来上がった。

しかし、リリィはフリーダムから戻らない。

逆にフェニックスまで展開する。

「……さっさと出てきたら？」

「……流石。」

リリィがそう言うと、狐のお面をつけた女性が現れる。

「いや、雇った女性じゃ勝てないからトレースを女性の脳内に移植したんだけど、無駄だったね。」

その言葉に「やっぱり……。」と言って、ビームサーベルを強く握る。

トレース。

その単語は一部の者しか分からない。

シュヴァルツェア・レーゲンに搭載されていたＶａｌｋｙｒｉｅＴｒａｓｅ　Ｓｙｓｔｅｍの事だ。

だが、Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｓｅ　Ｓｙｓｔｅｍをトレースと呼ぶものはかなり限られている。

この場合、女性が言ったトレースとはＶａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｓｅ　Ｓｙｓｔｅｍの事でありそうではない。

「……トレースの遺伝子情報を、女性に植え付けたのか。」

静かな怒りをリリィはおらわす。

Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｓｅ　Ｓｙｓｔｅｍとは、災厄の中で一番過激と言われたトレース・ヴァルキリーの事でもある。

ＩＳ関係者には唯のシステムだと思われているが、リリィと同じ災厄である。

そして、前世で束を殺した殺人鬼。

ＩＳ学園でラウラを取り込もうとし、失敗した災厄。

つまりリリィの前にいる女性は、ＩＳ搭乗者の脳に災厄を植え付け戦闘技能を上昇させようとしたと言う事だ。

もちろん災厄は人としての器に収まるわけがない。

結果として、ある程度の命令を受ける戦闘人形となる。

「ＩＳに積めば良かったかな～？　あ、でもＩＳに積めば搭乗者の意思で鈍るから良いのか……。」

女性は研究者のように、状況を考察し始めた。

２３２　闇の胎動（後書き）

Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｓｅ　Ｓｙｓｔｅｍ

皆さんご存知、ＶＴシステム。

レーゲンに搭載されていたシステムですね。

そして軽くフリーダムが昔言った事ですが、トレース・ヴァルキリーと言う災厄です。

ええ。

災厄介入フラグですね。

まぁ、実質現存している災厄は６名もいません。

……４名も……いない……かな？

かなり少なくなっています。

まぁ、コノ話で今まで活躍しなかったキャラが活躍と……。

そんな感じで考えています。

はい。

２３３　闇の女性（前書き）

夏祭りは何処に行った……。

甘々な夏祭りは本当に何処に行った。

Ｐ３

Ｐって書いてもペルソナって意味でもないからねｗ

233　闇の女性

リリィは怒っていた。

狐のお面をつけて戦争に来た事に付いてだけでもふざけているのに、更に女性を自身の駒として扱う。

人として扱わない。

そして、特攻兵器として扱う。

人権を無視した戦闘方法をする人間。

いや、災厄。

「……お前、……何をやったのか理解してるのか？」

冷静にそう言う。

冷静なのだが、すぐにでも目の前の存在を殺したくてたまらない。

「ふむ、人を駒として扱った事か？　そんなものは分かっている。」

後ろに束ねた長い髪をいじりながらそう呟く。

狐の面が、女性の表情を隠しているせいかリリィには何を思っているのかはよく分からない。

「……だが、むしろそれを知って殺していくお前も……、何をやっ

たか理解しているのか？」

「……人殺しだね。　けど、後で贖罪はするよ……。　お前を殺してからねぇっ！！」

リリィはそう言うと、一足飛びに女性に向けてビームサーベルを振るう。

しかし、女性は横に跳ぶ事で避ける。

災厄としては当たり前の反発力。

女性の横を抜け、リリィは振りかえり頭部バルカンを起動させる。

「……なかなかいい判断。」

女性はそういいながら、バルカンを側転しながら避ける。

それほど余裕と言う事だろう。

確かにビーム見たく単発攻撃と言うより、バルカンを使った方が当たりやすい。

判断は間違っていない。

しかし、それを余裕で避けると言う事はリリィ以上の実力を持っていると言う事だ。

ましてリリィはフリーダムを完全展開状態。

だが、女性は生身。
実力は火を見るより明らかだった。
「おいで、殺してあげる。」
女性はそう言いながらリリィを挑発する。
しかし、そんな挑発にかかるリリィではない。
静かにビームサーベルを腰構えにし、女性を見る。
「……やっぱかからないか。」
女性はそう言うと、抜刀の構えを取る。
（……誰だ……。）
リリィは女性を見て、記憶にある災厄を思い出す。
だが、どの災厄にも当てはまらない。
慎重ににじり寄る。
「……慎重だね。　だけど、その行動が間違ってない分……こちらとしても慎重に行かないといけない。」
女性もリリィと同じように、にじり寄る。
「……。」

「……。」

お互い隙が無い。

そのまま何分も経ちそうだった。

この場合先の先を取った方が良いのだろうが、お互いしのぎ反撃する事ができると理解できる。

動く事ができない。

（……しかける？　……いや、誘ってるんかもしれない……。武器が分からないから、迂闊に動く事も出来ない……。）

リリィは初めての強敵に冷や汗をかいた気分になった。

（むしろ、私の考えを読まれている気がする……。）

ビームサーベルを持つ手が強張る。

一瞬「（恐怖……。）」だとリリィは思ったが、違うとすぐに気が付いた。

「……何を待っている。」

嫌な予感だ。

災厄として、自身が関連して起こそうとしている嫌な事。

それが近付いている気がするのだ。

「何も……。」

女性はそう言うが、確実に何かを狙っている。

（……ほぼ詰んだ……。　盤上をひっくり返すには、目の前の女性を圧倒的な力で排除するしかない……、けど……。）

それが難しいと言う事がよく分かる。

「……きなよ。」

女性が再度兆発まがいにそう言う。

（……仕方ない。　時間を取られて分が悪くなるよりは良いっ！！）

そう思いながらリリィは全スラスターを全開にする。

ビーム出力も全開。

完全に全力で殺しにかかる。

女性はその姿を見て、腰を更に低くした。

「リリィっ！？」

だが、女性に近づいている瞬間に誰かに呼ばれた。

聞きなれた男性の声。

そのせいで、一瞬だけリリィに隙ができた。

その隙を目の前の女性が見逃すはずがなかった。

瞬間的にフリーダムに近づき、腰からビームサーベルを引き抜きリリィの胴を狙う。

しかし、リリィも隙ができたとしも対処する事は造作もない。

空いている方の手で、ビームサーベルを引き抜く。

「はぁぁぁっ！！」

「やぁぁぁっ！！」

そして打ち上げられた花火の下、刃が交錯した。

233　闇の女性（後書き）

はぁ、雨がきつかった。

だるい。

絵を描きたい。

そんな今日。

ま、どうでもいいんだけどね。

２３４　捉えられた天使（前書き）

まぁ、残り１１日ほどでこの作品の夏休みは終了。

一夏のシナリオを無くさせ、リリィのシナリオを投入する。

した所で既に１冊５０話……越えてるんだけどね……。

Ｐ３

２３４　捉えられた天使

「起きろっ！！」

その声と水をかけられ、リリィは目を覚ました。

（……ココは。）

そう思い、目だけであたりを見る。

窓のない薄暗い部屋に、鉄格子。

誰がどう見ても、牢屋と言える場所だった。

（……捕まったのか……。）

冷静にリリィは状況を判断する。

あの女性の姿をした災厄は、おそらく私を捕まえる為に誰かが雇ったのだろう。

「（情けない……。）」と思いつつ、リリィは目の前にいる薄汚い笑みを浮かべている男を見た。

足は地面に、手は壁に固定され身動きが取れない状況。

「くくく、起きたか。」

男がタバコ臭い口を、リリィに近づける。

前髪を掴み、動く範囲でリリィの頭を引っ張る。

「お前は、今から俺達の家畜だ。　どうだぁ？　嬉しいだろぅ。」

腹の立つ言葉を聞き、リリィは男を見た。

その顔はリリィにとって、一番思い出したくない顔だった。

「……国際ＩＳ委員会の過激派が……。　何の真似だ……。」

その言葉に、男は少し眉を顰める。

瞬間的に、男の存在を理解された事に気が付いたのだろう。

男は苦笑すると、リリィの前髪を離す。

「家畜に言葉を喋る資格はない。　喋っていいのは、これを飲んでからだ。」

そう言って、男は一粒の丸い薬をリリィに見せる。

直感像資質で男の存在を覚えているリリィにとって、その薬を知らないと言う事はなかった。

「……自白剤。」

「そう、自白剤だ。　これで博士の研究全てをそのクチから吐いて貰う。」

リリィは「あっそう。」と言うと、ため息をつき目を閉じる。

男は少しだけ唖然とし、高笑いをする。

自白剤を使っても、リリィには意味を成さない。

既にこの世に存在する薬自体、災厄には効果が無いのだ。

男の薬を持った手が私の口に近づく。

高笑いをしながら、外見が女性に見える者の口に薬を入れようとする光景は、傍から見たらかなり危ないだろう。

まして、男はイケメンと言うよりダンディーと言うタイプで、リリィは男だ。

その光景を危ないといって、何が危ないのだろう。

「……さぁ、飲めぇっ！？」

男の言葉が五月蠅かったので、薬を持っていた親指と人差し指を噛みちぎる。

災厄の力で噛みちぎったのだ。

当たり前のように、男の親指と人差し指は第一関節から先が無くなっている。

「ぐぁぁっ！？」と男が叫ぶが、リリィの耳には邪魔な雑音と言う認識でしか男の言葉は届かない。

リリィは噛みちぎった指を薬と共に、地面に吐き出す。

「……ねぇ、なんで強引に薬を飲ますのに、そんな迂闊なことするかな？」

口に男の血をつけ、リリィはそう言う。

普通に考えれば、敵対している者に強引に何かを飲ませる際は、誰かがその者の口を開けた状態で維持させ、別の誰かが薬と共に水をその者の口の中に入れ、口を閉じさせ飲ませるのが主流だ。

しかし、男はそれを一人でやろうとした。

馬鹿と言うほか何もない。

「き、貴様っ！！」

男は怒ると、リリィの顔面を蹴る。

もちろん人間と同じように蹴られれば、痛みは感じる。

血が出ることだってある。

だが一瞬だ。

災厄としての身体が、身体を最高の状態に戻し続ける。

しかし、汚れは取れない。

靴の汚れと、男の血でリリィの顔は汚れていた。
男は荒い息を上げ、リリィを見下していた。
「……おじゃまかな？」
そんな中、誰かが男に声をかけた。
リリィは声の主を見て、さらに気分が悪くなる。
狐のお面をふざけて被っている災厄。
リリィを捕まえた者だ。
「……丁度いい所に……。　私は手当てを受けてくるから、そいつを見てろ。」
男は言いながらも、鉄格子の外に出てどこかへ行く。
それをリリィと災厄は眺めていた。
「……ぁん？　……また派手にやったな……。」
災厄はそう言って、男の指だった物を踏みつぶした。

２３４　捉えられた天使（後書き）

結局リリィは捕まりました。

しかし、捉えられても優位性が変わって無い気が……。

ＩＳ委員会哀れ……。

そんな気持ちになりますねｗ

うん。

何処に捉えられているかは、後々出てきます。

235　目的（前書き）

……久しぶりに、漢字2文字のタイトルになった。

しかも、かぶってないと言う……。

ダイエットに成功しますようにと言う祈りをしながら、P3

235　目的

災厄は私に近寄ると、顔面を蹴り始める。

何回も痛みを感じ、すぐに何も感じなくなる事が続く。

蹴りながら災厄は忍び笑いを漏らす。

おそらく仮面の下の顔は、かなり歪んでいるだろう。

「……お前、何が目的だ。」

蹴られながらも、リリィは災厄を見続けるそう質問する。

質問した理由については幾つかある。

その中でも一番おかしなところは、国際ＩＳ委員会過激派が災厄をリリィにぶつけたのに対し委員会が災厄についての知識がまるない。

そのことからリリィは目の前にいる災厄が、委員会にリリィを捕獲すると言いながら近づき、リリィを表舞台から引きずりおろし殺害する事だと予想した。

そうでなければ、出て行った男が言った言葉が意味が理解できない。

災厄と言う種族の中ではリリィは一番嫌われている。

同法殺しを何度もしたのだから。

「目的、ね……。」

災厄はそう言うと、蹴るのを止めお面の淵に手を当てる。

表情が隠されているせいで、何を考えているのか分からない。

微笑んでいるのか、眉をひそめて悩んでいるのか。

人にとって、表情とは相手が何を考えているのか知る一つの手段だ。

目線の位置、表情、唇の釣り上がり方。

そのどれをとっても、どんな事を考え、何をしようかと知るには一番の方法だ。

「教えて欲しい？」

狐の面で表情が見れないが、おそらくいやらしく笑っているのだろう。

リリィは「教えろ。」と、捕まった態度ではない口調で言い放つ。

狐の面が、その部屋の空気で笑っているように見える。

「……お前を殺すためだよ。」

「それは知ってる。」

そう答えると、災厄は肩をすくめた。

「……素っ気ないね～。」

「敵に愛想良くしても良い事はない、だろう。」

災厄がそう言って話を続けさせようとするが、リリィはその会話を切る。

リリィにとってこの場から脱出する事は、造作もない。

むしろＩＳを作るより簡単な事だ。

しかし脱出はしない。

止まる理由はある。

リリィの前にいる災厄と、過激派と呼ばれる委員の全貌を知るため。

そのためだけにリリィは掴まっていた。

「……それにしても、どれだけの人間がこの事を知ってるんだろうね。」

リリィはそう言って、話の基盤を作る。

もちろん愚直にも「誰が関与している。」など聞いている時点で、敵には警戒しか与える事はない。

しかしリリィはある程度下手な話を出す事によって、警戒と言う隙から情報を読みとろうとしていた。

「言って欲しいの？」

しかし、リリィの思惑は外れある意味成功という事態を導き出す。

災厄はリリィから離れると、牢の中を回りながら関与しているであろう者の名を言う。

その物の名を、リリィは唖然としながら聞いていた。

「……と言う感じかな？」

災厄がそう言うと、リリィは思っていた質問を災厄に向かって言った。

「……お前と過激派は仲間ではないのか？」

その言葉を言い終えた瞬間、災厄は肩を下ろした。

息は聞こえなかったが、呆れられたのだろう。

「委員会と私の目的。　そして起きる可能性を考慮してみたら分かると思うけど？」

リリィはいぶかしみながら考える。

最初から気がついていたはずなのに、リリィは忘れていた。

過激派は技術とフリーダムが欲しい。

災厄はリリィを殺したい。

技術を手に入れても、人の欲は収まる所を知らないのは当たり前の事。

そして用済みと言う理由でリリィを殺せたら、次に技術を手に入れる為に過激派の標的となる人物。

男が動かせる理由として言うのなら一夏だが、男が動かせる理由を開発者が知らないわけがない。

「……束……。」

つまり、リリィの次の標的は束だった。

２３５　目的（後書き）

基本的に作者は５０ｋｇをこさないほどの体重です。

なのにダイエット……。

やはり、水着は良い物を着たいしね～♪

と言う理由ですよｗｗｗ

ここ最近ね、少し前のやけ食いのせいか……少しばかり摘める程度に脂肪が……ね。

と言う事で、ダイエット宣言……。

おそらくダイエットせずに痩せて終わる可能性４０％

評価点ってなんだろうと思った今日。

236　血液反応（前書き）

サブタイトルが思いつかないと言う罠。

眠いです。

P3

236　血液反応

夏祭りから四日が立った。

ＩＳ学園では、普段と変わらず騒がしい日々が送られている。

しかし、その中に篠ノ之リリィと言う存在がいなくなっている事は五名しか知らない事だった。

束は心配して各国にハッキングするも見つからず、泣きそうな雰囲気を部屋に作り出している。

「……リリィちゃん。」

そう呟くが、リリィの情報を見つける事が出来ない。

束は目を瞑って、夏祭りの事を思い出す。

あの時リリィは「お手洗いに行ってくる。」と言って束から離れたのだ。

その間に何かがあったのだろう。

≪束、リリィは見つかったか？≫

突然、千冬の声が頭に響く。

「ち～ちゃん、ＩＳの通信は学内でも禁止されてるんじゃなかったっけ？」

≪そんな事はどうでもいい。　……今すぐ私がいる所に来い。≫

束が言った意地悪な言葉を千冬は無視して、いいたい事を言うと千冬は通信を切る。

首を傾げながら束は立ち上がり、部屋を出た。

現在リリィが行方不明と言う事を知っているのは、束と千冬、真耶にラウラ、それにシャルロットだった。

当初シャルロットに言うと、また変な風になると思いラウラが「行方不明を誤魔化した方が良い。」と言ったのだが、何故かシャルロットはリリィがいないと言う事に気が付いたのだ。

やはりというか、シャルロットは少しばかり精神が壊れた。

二日立てば元に戻ったが、以前リリィがいないと言う事でよそよそしい。

真耶は授業の相談に何度も部屋に訪れ、リリィが行方不明ではないかと束に聞いてきたのだ。

その時の真耶の目が真剣だったため、束はため息をつきながら肯定した。

純粋に心配しているが、リリィだから大丈夫としきりに束にあってはそう励ましていく。

千冬とラウラはいつも通りに見えるが、内面で凄く心配しているの

がよく分かる。

束は白騎士のピーコンを辿り、とあるドアを開く。

「やっは～、来たよ～♪」

何時も通りにそう言うが、声に元気がない。

千冬はそんな束を見ると「これを見ろ。」と言い、白騎士のモニターを展開させる。

リリィがいないだけで千冬が規則を破る事に少し驚きつつ、束は千冬に近づきモニターを見た。

「お前、篠ノ之神社の祭りの日に巫女が見つけたモノだ。　警察に届けられこちらに回されるはずだったのだが、いつのまにか行方不明……。」

「……だから？」

「そうだ。　境内にある木の影に落ちていたらしいぞ。」

その言葉に束は部屋を出て行った。

唯一の手掛かりを求めて。

「……ふぅ。」

千冬は息を吐き再度モニターを見る。

そこには、ラファール・リヴァイヴと思われる機体の破片が映っていた。

束は篠ノ之神社の境内まで、レイジングハートを起動させて飛んでく。

ＩＳの使用は束は何もしてはいないが、千冬が何とかしたのだろう。

「幼馴染と言う物は便利だね～。」

と呟きながらも、束は境内に降り立った。

そしてすぐさま境内をレイジングハートでスキャニングする。

誰もいないため、束を止める者はいなかった。

「……っ！？」

スキャニングをして、束は目を見開いた。

一変何の変哲もない様に見えるが、地面から大量の血液反応がでた。

もしここでルミノール反応が出たら、あたり一面が反応する。

それほどの血液反応を、レイジングハートは捉えたのだ。

レイジングハートは更にその血液を分析する。

血液から遺伝子情報を読みとり、その血液が誰の者かを知るのは造作もない。

ＩＳにそう言うシステムをつければ、どの機体でも出来るであろう。

束の前にモニターが一つ映し出される。

知らない女性の顔写真が十人。

そして、見知った顔が一人。

その顔を見た瞬間、束は崩れ落ちそうになる。

モニターには篠ノ之リリィと名前が出されていた。

236　血液反応（後書き）

まぁ、急展開と言う事は認めます。

が、寝不足なの。

……だからなんだってねｗ

まぁ、だるいんです。

本当に……。

237　リリィのいない学園（前書き）

サブタイがきついし、本当に今回の話は……gdgd……。

間が開きまくってるしね～。

P3

というか、今回はgdgdになったわけですが、次回は元に戻りますよ。

237　リリィのいない学園

束はモニターを見てから、再度境内を見渡す。

しかし、人がいる気配もない。

（……もしかしてっ！？）

頭の中で仮説が出来上がっていく。

真実に等しい仮説が、解説書があるパズルのように組み上がって行った。

そして徐々に顔色が悪くなっていく。

それはそうだ。

リリィがＩＳを複数運用できる物の手によって、捕縛させられたという事実が出来てしまったのだから。

顔色を悪くしながら、レイジングハートで境内全体に、スキャニングをかける。

ごく僅かな情報でもいい。

リリィが踏んだかもしれない場所でもいい。

だから、リリィにつながる手掛かりが欲しい。

その思いが、束を急がせた。

≪八時方向距離２０、熱源１≫

そしてレイジングハートが見つけた。

束はそのモニターを見た瞬間、その方向に向かって走り出す。

草木を分け、束は進む。

そして進んでいくと、束の視界に人の足が入った。

暗い表情が一瞬で明るくなる。

「リリィちゃ……っ！？」

倒れている人物は、銀の髪を長く伸ばしていた。

しかしそこにいたのはリリィではなく、夏祭りで出会ったリリィによく似た少女だった。

束はその少女を境内に寝かせ手掛かりを探すが見つからず、少女をＩＳ学園に連れて帰る。

少女は軽く衰弱しており、起きるのは明日以降だろうと思われていた。

しかし少女は、ベットに横になり数時間で目を覚ます。

もちろん「……ここは、どこ？　……私は……？」などとネタなのかどうか分からない事を言って、起きあがった。

その時束は別の部屋に各国の情報端末にハッキングをかけており、少女が起きた事には気が付かない。

少女は首を傾げながら部屋を見渡し、誰もいない為かベットに横になり再度寝る事にした。

「……お腹……すいた……な……。」

だが、空腹からか少女は寝る事ができない。

仕方なしに、少女は初めて見る場所で食事を求め歩き出す事にした。

束はハッキングをしていたため、少女には気が付かない。
が、レイジングハートは少女が起きた事に気が付いていた。
だがレイジングハートとはいえ、ＩＳのコアを使った機体。
製作者の行動の妨げをする様な事はしたくなかった。
束がハッキングに行き詰まり、頭を悩ませている時点で更に頭を悩ませるようなことはしたくない。
主思いの機体なのだが、それが悪手となった。
「篠ノ之博士っ！　あの子はどうしましたっ！？」
真耶がそう言って部屋に入り込んできたのだ。
そのおかげで、ようやくレイジングハートも話を切り出した。
レイジングハートが情報をそう言うと、束は「もっと早く言ってよ～！！」と言って学園内を走りだす。
真耶が知っていた理由としては、束が学園内に混乱を出したくないから見ててとお願いしたからなのだが、結果として脱走された。
今学園内にリリィ似の誰かが入り込めば、一瞬で話題の中心となり騒がしくなる。

千冬も真耶も走りながら学園内を探し、食堂でご飯を食べているところを見つけて捕獲した。

少女は美味しそうにご飯を食べており、束は一息つくとゆっくりと近づき少女の前の座る。

「……あ、どうも……。」

束に気が付いたのか、口に入れていたご飯を飲み込み軽くお辞儀をする。

リリィを探したい心が少女に八つ当たりさせようとするが何とか抑え、束は少女同様に食事を取る事にした。

千冬も束に続く。

真耶は「本当に似ていますね。」と言って、少女を見た後に食券を取りに向かう。

そんな大人三人を、少女は不思議そうに見つめた。

その日は結局詳しい事が聞けずに終わる。

だが少女は篠ノ之神社でリリィの身に起きた事を、束以上に知っていた。

2011

２３７　リリィのいない学園（後書き）

お腹が空いた。

本当は時間があれば、Ｐ２に以降したい。

だが無理。

ガンダムッ、ガンダムッ！　私がガンダム、私もガンダムッ！！

意味不明なため、作者が病院に運ばれました。

2012

２３８　少女が語る（前書き）

そろそろ回想を入れたいかな～？

でも、なんか回想がカットされそうな気が……（汗）

出たとこ勝負で行きましょうか……Ｐ３

２３８　少女が語る

食堂から束の部屋に少女を連れてくる。

束は少女の前に座り、語り始めた。

「……貴方はあそこで何をやっていたの。」

「……かたずけ……。」

意外にも少女は簡単に答えた。

分からないと言う不明慮な答えではなく、明確な答えが。

千冬は細い目を更に細め、束は少女の心を読もうと思考を張り巡らせた。

早くリリィの事を知りたい、だが焦れば失敗する。

それは束自身がよく知っている事だ。

「なんの後かたずけだ。」

束ではなく千冬が少女にそう聞く。

「……織斑一夏の記憶改竄（かいざん）……。」

少女の言葉に千冬は目を見開き、椅子から立ち上がった。

今にも掴みかかりそうな勢いで少女に手を伸ばす。

「……ちなみに、記憶を改竄した部分は……八月二十四日……、の夜七時から四時間だけ……。」

それを聞いた瞬間束は大体の事を理解出来た気がした。

しかし、束自身が考えている事が事実なら少女は束の手によって死ぬだろう。

八月二十四日。

それは、雨天延期されていた篠ノ之神社のお祭りの日。

束自身が一夏を呼んだ日だった。

そしてリリィが束の前から消えた日でもある。

千冬は伸ばした手を止め、下ろす。

「理由は？」

束は冷静な部分を動かし聞く。

「……織斑一夏は……見てはいけない物を見た。……そのための応急措置……。」

少女は淡々と喋る。

束と千冬の身体が強張った。

見てはいけない物。

それを一夏は見たと言う事だ。

それをリリィと繋ぐのには、時間を駆ける必要はない。

すぐに繋がった。

「……一夏が何を見たと言うんだ。」

千冬は恐る恐る、少女に聞く。

二人は聞きたいようで、聞きたくない言葉が言われる気がした。

リリィの血痕と、少女が倒れていた場所。

一夏が見た物。

それらが自動的にある答えを二人に囁きかけていた。

「……分からない……。」

しかし、少女は首を横に振り二人に囁きかけていたモノを否定した。

「分からない……の？」

束は唖然とした。

限定的な時間を記憶処置したのに、何を見たかさえ分からない。

それはおかしな事だ。

二人は意味が分からなくなり、顔を見合わせる。

そんな二人を見て少女は口を開いた。

「……私が境内で織斑一夏……を見たときは、既に狂乱状態……だった……。」

その言葉に二人は目を見開く。

「……精神崩壊の恐れがあったため、……急遽記憶を改竄した……。ただ……、それだけ……。」

信じられない言葉を聞き、二人は震える唇で口を動かす。

「……もしそれが本当なら、いっくんが……。」

「リリィの身に起きた事を見ていた……。」

二人とも言いながら自身の頭の中で考える。

一夏はエンジェルダウン作戦時のフリーダムを見て、狂乱状態にならなかったのだ。

それが精神崩壊を起こしそうになるまでの狂乱状態になったと言う事は、リリィがどういう事をされたのかは予測だが想像する事ができる。

一瞬だけ想像して、人体解剖学などの行きすぎたビデオを千冬は思い出し口を手で押さえた。

「……私は織斑一夏の記憶を覗き……、害となる部分を大まかに指定し……改竄した……。　織斑一夏にとって八月二十四日は……、楽しかった思い出となっている。」

そう言うと少女は目を瞑り「……もし、織斑一夏の記憶が……戻った場合……、精神崩壊を起こす可能性が大いにある……。」と付け加える。

千冬は唖然としながら少女を見るが、束は少しだけ疑問を持った。

「なぜ、そんな事ができるのか。」と。

聞こうかどうか悩んだが、少女の状態を思い出すと「記憶が無いから。」と言われるだろうと思い止めた。

嘘かもしれないが、少女の機嫌を損ねてリリィへの手掛かりを消したくは無い。

だからこそ、束は下手に聞くのを止めたのだった。

２３８　少女が語る（後書き）

いっくん精神崩壊フラグ！？

そんなカミーユじゃないんだから……。

ちなみに解剖学の行きすぎたビデオは、内臓などを人体から取り除いたり、心臓を血が付いたまま取り出したりと上げ出したらきりがありません。

普通の解剖学系でも、結構そう言うのはあるんですけどね……。

皮膚を剥いで筋肉の動きを見る為に、腕を動かしたり……。

緑色の表面に、黄色い油みたいなものが浮いて動いたり……。

ああいうのは、流石の私でも見るに堪えなかったり……。

結構繊細なんですよ……。

2019

239　クラリッサ・ハルフォーフ（前書き）

サブタイ通りにクラリッサ登場。

何故登場したか？

考えれば分かるよ、Ｐ３

239　クラリッサ・ハルフォーフ

リリィは数日間閉じ込められていた。

もちろん最初は拷問のように焼き鏝（ごて）など訳の分からない痛めつけをされたが、すぐに回復する。

過激派の前で回復して見せた為か、腕を切ったり内臓を取り出したりしようと最近頑張っているようだ。

無駄な事なのだが、認めたくないらしい。

「……暇なのかな……。」

リリィはそんな過激派を思い呟いた。

いつもの牢屋に両手両足を拘束され、身動きが取れない状況になっている。

「暇だと思うのに一票。」

リリィの前に座る誰かがそう言う。

「……残念、賭けは不成立だね。」

リリィはそう言って、目を瞑る。

少しため息をつき、だるそうに眼を開いた。

リリィの目には、髪を短くそろえた眼帯の女性が映っている。

クラリッサ・ハルフォーフ。

ラウラが非生きるドイツ軍特殊部隊シュヴァルツェア・ハーゼの副隊長である。

「……篠ノ之博士、日本の秋葉原にあるお勧めのお店と言うとやはりどこになりますか。」

そんな感じでリリィが捕まった翌日から、クラリッサがリリィを監視したり食事の配給をしに来たりしている。

もっぱら軍務を放棄して、漫画などの話を二人でしている事が多い。

出会った当初は、シュヴァルツェア・ハーゼの弱体化について恨んでいるような鋭い目でリリィを睨んでいたが、本人にしてみればリリィから漂う同類臭（オタク）を嗅ぎ取り目を細めていただけだったりもする。

「そうだね……、色々なとこがあるから実際に連れて行った方が良いかな～。」

「……ふむ。　ならその時にはお願いさせていただきます。」

クラリッサは基本リリィに敬語で話しかける。

上司の義理の親という事と、ＩＳの開発者という事で敬語で話すということらしい。

リリィにとってみれば、敬語というのは肩がこる喋り方という認識

だ。

喋っていても、聞いていても疲れる。

「それにしても、何時までここに居られるのですか？　隊長が心配していましたよ。」

リリィがいなくなってからラウラは、独自にリリィを探し始めたのだった。

まず最初に情報を得ようとし、連絡したのは副官の携帯端末。

見事に情報を知っているクラリッサだったが、リリィ自身が「私が何処にいるかは、秘密でお願い。」と言った為か、ラウラには嘘を言っていた。

どの方面からリリィがいる場所を得ようとしても、リリィ自身が口止めしたりしている為か情報が外に出ない。

結果、リリィが何処にいるかは知られていなかった。

「博士なら、御自身を縛っている鎖やこの牢屋を壊す事も簡単のはず……。」

クラリッサがそう言って、リリィを真面目に見た。

「……何を考えているのですか？」

こう何度もリリィを逃がそうと、クラリッサはリリィに話しかける。

（……なんで逃げてくれないんですか。）

一日に約二十回。

アニメの話をしながら、逃げるように促す。

何故必要に逃がそうとするのかは、簡単な理由があった。

リリィが非人道的な拷問を受けていたのを目撃した事が主な理由。

両手足と右目にに釘を刺され、腹部にはＩＳ専用の近接武器がめり込まれていたリリィを、眼帯をしていない目で見てしまったからだ。

普通なら死んでいる。

だがリリィは、その状態で無事な左目でクラリッサを確認し「あれ？　もうそんな時間？」と言って、平然としていた。

「（壊れている。）」と思いながら、クラリッサはリリィを何とかしても逃がしたい。

（……早く逃げないとあんな事になるのに……。）

隊長であるラウラの元に戻って欲しい。

幸せになって欲しい。

少女漫画を愛するクラリッサが、バットエンドではなくハッピーエンドになって欲しいがために言った事だった。

軍務に反する事だが、それは今のクラリッサにはどうでもいいと思えた。

何としても助けたい。

理由なんかなくて良い。

助けたいから助ける。

軍属のクラリッサが、初めて軍規に反したのだった。

2025

239　クラリッサ・ハルフォーフ（後書き）

はぃ、後半眠くてgdgdに……zzzzzz

なんか、クラリッサルートらしい物が見え隠れしている気が……。

当初、クラリッサがリリィに片思いし始めた事にしようかな～と思っていた私。

……原作ヒロインを総無視して、年上を狙った……。

流石リリィ、年上好きとはwww

まぁ、束という奥さんに……千冬というリリィを横取りしようと頑張る猫がいますから、さらにカオスな感じになりそうなため……一歩手前で止めましたけど。

ええ。

という事で、「少女漫画にグロはない」（コレ事実）という事で、「少女漫画を愛するクラリッサが、バットエンドではなくハッピーエンドになって欲しいがために言った事だった。」という文を入れてみたわけw

さて、そろそろ進めようかな。

「歌詞の無断転載に関するお知らせ」があったため、「１１０　束はアイドル」の話を修正しました。

もし今後、この作品内で歌詞の転用がありましたら、感想などでお知らせを願います。

２４０　起こりかけた学級崩壊（前書き）

正直なところ、書く気が起きない……。

実質予約投稿を5日分している為、休める状態……。

二日休んで少し読み直して書いたＰ３

もう、ゴールしても良いよね？

２４０　起こりかけた学級崩壊

ＩＳ学園が夏休みを終えた。

束がリリィを見つけることもなく、夏休みを終えたのだ。

「……。」

束は目を細めながら、ただ立ち尽くしていた。

その姿は誰が見ても、やつれている。

リリィが見つからず、さらに少女が追い込むような発言をしたため食欲が失せてきているのだ。

睡眠時間を削り、リリィを探す時間に充てる。

ハッキングしたり、情報から導き出した推論で夜な夜な外に出ていたりした理由(せい)だ。

もちろん束同様に、千冬もやつれていた。

そんな二人を見て、誰もが「大丈夫ですか?」としか言わない。

リリィの存在が二人の酷さによって気がつかれないのだ。

その状態を見て、二人は更に心苦しくなった。

「……ん、では……出席を取る。」

千冬は職務を全うしようと、出席を取ろうとする。

だが、その行動も心配される要因となった。

普段の千冬は出席を取るとは言わず、ただ見渡しているかいないかを確認するだけだ。

（……ん、……リリィがいない……？）

その原因を、一夏が気が付き始めた。

普段が微妙に抜けている為か、リリィがいない事にちゃんと気が付いていたのだ。

それが更に千冬を追い詰めていた事に気が付かずに。

もし何かのきっかけで、一夏が思い出したら第二回ＩＳ世界大会以上の危険が一夏を襲うのだ。

千冬達が必要以上にリリィの事を教えなかった理由でもある。

（……なんだ……。）

一夏が顔をしかめる。

疲労と寝不足のせいで、千冬達はそれに気が付かない。

（リリィ……。　……なんか……。）

しかし、それが裏目に出たのか一夏の脳内に何かが映る。

暗い闇の中に、オレンジ色と青い色が火花を散らす映像が。

少女が施した記憶改竄は、それほど強力な物ではなかった。

そのため、記憶が徐々に元に戻りだしてるとは知らない千冬。

「……一夏。　どうした……。」

千冬が一夏を下の名前で呼ぶ。

ホームルームとはいえ、学内で名前で呼ぶのは可笑し過ぎる。

「……リリィがいないけど、どうしたんだ?」

自然と口が動いた。

一夏の頭では「聞くな聞くな聞くな聞くな。」と何度も響いていたが、それを無視して千冬達に聞いた。

一夏がそう言うと、周りの生徒が気が付き始める。

声が騒音となり、教室が騒がしくなった。

それに同調するかのように、一夏の頭の中に知らない映像が増え始める。

「ぁ……。」

普段なら「静まれ、馬鹿ものっ！」と千冬が怒鳴りながら、静かにさせようとするが、一夏の言葉に千冬は唖然とした。

千冬は目を見開き、唇を震わせる。

その千冬の横で、束は肩を震わせ俯いていた。

「……リリィちゃんは……、風邪……だよ。」

束がそう言うが、誰も信じようとはしなかった。

誰かが「嘘だっ！！」と叫ぶと、全員がどれに同調する。

千冬も束も何も言えない状態だった。

唯一真耶だけが「（学級崩壊ってこういうのかな？）」と思いながらも静かにさせようとさせている。

千冬は少しだけ目を閉じると、震える口をひらく。

「……お前たちは……、知らなくても、良い事だ……。」

そう言って真耶に「後を頼む。」と言って教室を出て行った。

束もそれに続いて出て行く。

その行動が、完全にリリィに何かあった語っていた。

ラウラはそんな千冬達を見て、歯ぎしりし机を睨む。

今にもＩＳを纏い、誰かを殺しそうな目をしながら爪が食い込むほど握りしめていた。

（……私には……、どうする事もでき……？）

携帯端末が音をたてて鳴り響く。

その音で教室のざわめきが、少しだけおさまった。

本来ならば、授業中には音を消さなければならない。

過去に一度授業中に端末着信音が鳴り響き、千冬に反省文を何十枚か書かされた者もいる。

しかしラウラはそんな事は気にせずに、音が鳴るようにセットしていた。

ゆっくりと指が通話に伸びた。

「……私だ……。」

２４０　起こりかけた学級崩壊（後書き）

オリシナリオを……。

（→前書きからの続き）

という事で、もうｇｄｇｄでもいいから終わらせようと思い始めた。

正直疲れてるんです。

……というか、数話前の話順がおかしい事に気が付き始めた。

うん。

絶対おかしい。

戦闘→束→捕まる

の方がいいはず……。

なぜ？

ま、気にしないでおいておこう。

……紫のボディースーツがエロいです。

（魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳやＭｕｖ－Ｌｕｖの……。）

２４１　リリィが捉えられた場所（前書き）

そろそろ終わり。

終わりが近づき、ている。

書く事が無くなりかけてきた、Ｐ３

２４１　リリィが捉えられた場所

「ち～ちゃん、寝た方が良いんじゃない？」

束が千冬にそう言う。

流石に疲れている事には気が付いているようだ。

「……私より、お前が休め。」

しかし千冬も、束が付かれている事に気が付いている。

親友が休まず最愛の人を探しているのに、自分だけ休めないと言う事だけで二人は起きていた。

二週間近くリリィが見つかっていない。

つまり二人は、二週間近く眠っていないと言う事にもなる。

普通なら、二週間も正確に眠らないと言う事は誰にも出来ない。

しかし、天才という人種は出来ない事を簡単にやってのけたようだ。

「Ｅｉｎ　Ｌｅｈｒｅｒ！！（教官っ）」

二人はいつ倒れても可笑しくはない状況で、その声がした方を向く。

ドイツ語を喋るのは、ラウラしかいないと知りつつも「誰だ……。」と言って振り返る。

やはり千冬らしくない。

千冬達が振り返ると、ラウラが息を切らしてそこに立っていた。

ラウラは息を無理やり整えると、驚愕と嬉しさが混じったような表情で口を開く。

「Ｅｉｎｅ　Ｓｔｅｌｌｅ　ｚｕ　Ａｕｆｅｎｔｈａｌｔ　ｄｅｓ　Ｓｃｈｗｉｅｇｅｒｖａｔｅｒｓ　ｗｕｒｄｅ　ｋｌａｒ！！（お義父様の居場所が判明しましたっ）」

その言葉に千冬は目を見開き、束はラウラの方を両手で掴んだ。

「何処っ！！」

束が焦りながらそう喋ると、ラウラは申し訳なさそうな顔でこう言った。

「……Ｕｎｓｅｒ　Ｌａｎｄ……Ｅｓ　ｉｓｔ　Ｄｅｕｔｓｃｈｌａｎｄ．（……我が国、……ドイツです）」

クラリッサは携帯端末を切ると、壁にもたれかかる。

「……これで良い。」

そう呟きながら、眼帯を外す。

軍人としての本能が、クラリッサに眼帯を外させた。

「……すみません、篠ノ之博士。　私は軍規に……、貴方にそむきます。」

そう言って、壁から腰を離すとゆったりと歩き出す。

携帯端末をさらに動かし、自身が所属する部隊に連絡を取った。

「……私だ、至急隊長をＤ－Ｅ地区の研究所に……。」

『既に隊長は最新輸送ヘリで動いています、大尉！』

「ならば残った者達でＤ－Ｅ地区に対ＩＳ装備で突入、篠ノ之博士の救助を開始する。」

そう指示し、クラリッサは端末を切って歩きだす。

行き先はクラリッサがいる研究所の中央、国際ＩＳ委員会過激派が指令室として拠点を置く場所だ。　ドイツの委員が過激派だと知らなかったクラリッサは、初めて聞いた時には頭の中が真っ白になった。しかし、すぐに軍務に全うし始めた。

「……別に過激派に良い様に使われても良い。　軍人なのだから……。」

そう呟きながら携帯端末を、胸のポケットにしまう。

（……だが、博士の様な人を監禁すると言う事はいただけない……。）

しかし、リリィを見てクラリッサは変わった。

変わってしまった。

軍人ではなく、ただ一人の人間。

クラリッサ・ハリフォーフとして。

「……頼むぞ、シュヴァルツェア・ツヴァイク……。」

そう言って待機状態のＩＳを握り締めた。

「Ｆ?ｒ　ｅｉｎｅｎ　Ｋａｐｉｔ?ｎ　ｕｎｄ　ｅｉｎｅｎ　Ａｒｚｔ……（隊長と博士の為に……）」

しかし、彼女が先に進む事はなかった。

彼女の背後から桜色に光った光条が、振り下ろされていたのだから。

「……ここ……。」

そう言って一人の少女が、建物の前で立ち止まる。

少女は一人でいた。

「……レーダーに反応……。　数二十六……。」

そう言って物資搬入口が開いていた為、呑気に歩きながら建物に入った。

しかし瞬間的に少女が通った場所が、爆発を起こす。

設置型の爆弾が爆発した。

爆発の炎が少女を包み込んだ。

少女の頭上で、ＩＳを纏った女性がさらにアサルトライフルを撃ち始めた。

２４１　リリィが捉えられた場所（後書き）

書く気が起こらない……。

なんか、叫び過ぎてのどが痛いし……。

ああ、もぅ……。

ストレスがたまるなぁ……。

２４２　ラウラ・ボーデヴィッヒ（前書き）

ラウラ活躍。

そう言う話です。

そう言えば、ＩＳのお守り（グッズ）が書店に置いてあり……。

何故か鈴が一番売れていた。

Ｐ３

２４２　ラウラ・ボーデヴィッヒ

『隊長、まず私が言う事を慌てず騒がず聞いてください。』

最初にラウラが聞いたクラリッサの言葉だ。

『篠ノ之博士の所在を私は知っています。』

「なっ！？」

『落ち着いて下さい……。　博士自身が「内密に。」と言ったのです。』

教室の騒ぎが収まる。

『しかし、私は博士の言葉を無視し、あまつさえ軍務を放棄します。』

その言葉にラウラは唖然とし、理解できなかった。

『博士は現在ドイツ違法研究施設Ｄ－Ｅ地区に捉えられています。
……私の現在の任務は、博士の監視及び雑用です……。』

クラリッサの言葉にラウラは何も言えない。

『お願いします、隊長。　……博士の事をブリュンヒルデに伝えてください。』

その言葉にラウラは俯き、口を開いた。

「……首謀者は、……誰だ……。」

狂える声で、そう言う。

教室内はラウラの声で完全に静まり返っていた。

シャルロットはＩＳの集音機能を使い、ラウラ達の会話を聞いている。

『……ドイツ出身の国際ＩＳ委員会過激派です……。』

その言葉を聞くと、ラウラは目を釣り肩を震わせた。

端末を持つ手がＩＳを部分展開しそうな勢いで、力が入りこむ。

ラウラは顔を上げながら端末に向かい叫ぶ。

「Ｉｃｈ ｂｅｆｅｈｌｅ ｅｓ ｉｎ ｅｉｎｅｎ ｂａｔｔｌｅｆｒｏｎｔ!! ｓｃｈｗａｒｚｅｒ Ｈａｓｅ Ｉｃｈ ｂｅｗｅｇｅ ｍｉｌｉｔ?ｒｉｓｃｈｅｒ Ｅｉｎｈｅｉｔ ａｌｌｅ Ｍｉｔｇｌｉｅｄｅｒ, ｕｎｄ ｅｓ ｗｉｒｄ ｄｉｅ Ｐｅｒｓｏｎ ｖｅｒｈａｆｔｅｔ, ｄｉｅ ｅｓ ｎｅｂｅｎ ｄｅｍ Ｄ－Ｅ－Ｇｅｂｉｅｔ ｇｉｂｔ……Ｎｅｉｎ, ｉｃｈ ｒｏｔｔｅ ｅｓ ａｕｓ!!（私が前戦で指揮を執るっ シュヴァルツェ・ハーゼ部隊総員を動かしＤ－Ｅ地区にいる者を捕縛……、いや殲滅するぞっ）」

そう言って通信を切り、軍人として教室を出て行く。

一夏が唖然としながらラウラの名を呼ぶ。

立ち止まりはするが、ラウラは振り向こうとしない。

「……シャルロット……。　付いて来い、少佐命令だ……。」

ラウラはそう言うと、教室から去った。

シャルロットも走って教室から出て行く。

それが数十分前に教室で起きた出来事だった。

ドイツ軍シュヴァルツェ・ハーゼ専用の高速機動輸送ヘリに乗り四人は移動していた。

一時間ほどヘリに揺られるが、一向にドイツには付かない。

ヘリで移動した場合、四時間以上はかかる。

ジャンボジェットなどの航空機であれば、少しは早くなるかもしれない。

むしろ全員ＩＭＳを完全展開し移動した方が早い。

だが、ラウラは軍用ヘリを使用した。

日本にあるドイツ軍倉庫から、ラウラが勝手に持ってきたのだ。

操縦をしているのはラウラ本人。

その隣で補佐をしているのはシャルロット。

後ろの広い空間には、横になった束と千冬がいる。

ジャンボジェットより早く確保でき、仮眠ができるためラウラはＩＳでヘリを取りに行った。

「……というか、ラウラってヘリの操縦できたんだね。」

シャルロットはそう言って、ヘリに搭載された計器をを見る。

ラウラはヘリを操縦しながら、横目でシャルロットを見た。

「……ちなみに、勝手に持ってきたものだ。」

「うぇっ！？」

ラウラが変な事を行ったため、シャルロットが驚く。

「鍵が無い、動かない、ついでに許可もない。　……なら配線をいじり鍵の部分を排除すればいい。」

その言葉を聞いた瞬間、鍵を指す場所を見る。

するとラウラが言ったように、配線が弄られていた。

「……落ちないよね……？」

「……大丈夫だろう。」

２４２　ラウラ・ボーデヴィッヒ（後書き）

ヘリにカギが必要かは分からないけど、ハンビー（軍陸上車）とかには使うから別にいいかな？

配線弄って軍用機体が動くかは不明。

ラウラがおちゃめｗｗｗ

替え歌でアカウント消されるのもアレだから、真面目に書きなおした。

２４３　篠ノ之リリィ博士救出作戦開始（前書き）

サブタイトル通り作戦名は

篠ノ之リリィ博士救出作戦

です。

はい。

Ｐ３

２４３　篠ノ之リリィ博士救出作戦開始

「第二物資搬入口爆発っ！！　おそらく侵入者迎撃用の爆弾が爆発した模様！」

研究室は一斉に騒ぎ始める。

侵入者が入った事で、落ち着かなくなり始めたのだ。

研究員の前には、イエス・キリストの様に磔にされたリリィ。

両手には五寸の釘が打ち込まれ、全体重を支えさせられていた。

「落ち付けっ！！　監視班どうなってるっ！！」

首謀者の男がマイクに向かって叫ぶと、スピーカーからノイズが走った。

≪……監視班？　……ああ、この男の事……。≫

聞き慣れない声が、その場に響く。

少女のような声。

その声にリリィは反応した。

閉じていた目をゆっくりと開く。

（……思い出したの……？）

そう思いながらその声を聞く。

≪……爆弾はもう少し置いた方が良い……。　……ついでに……保険も……。≫

そう言うと、スピーカーからノイズが聞こえなくなった。

首謀者が大声で「全ＩＳを迎撃に向かわせろっ！！　そうだ二十六機全部……。」と叫ぶが、誰かが「既に二機撃墜！！」と叫んだため途中で何も言えなくなる。

「……くっ！　亡国機業（ファントム・タスク）にどういう言い訳をすればっ！！」

男の言葉にリリィは目を光らせた。

ラウラはヘリを運転しながらシャルロットに「Ｄ－Ｅ地点は何処だ。」と聞く。

シャルロットは、レーダーを見ながらドイツの街並みと見比べる。

「「あ……。」」

そして、二人の声が重なった。

ヘリの１１時方向にある建物から、黒煙が上がっていたのだ。

良く見ると、その周囲百ｍにはシュヴァルツェ・ハーゼ部隊が展開されたいた。

それを見たラウラはシャルロットに「起こしに行ってくれ。」と頼み、ＩＳの通信を部隊全員につなげる。

『隊長っ！！』

クラリッサではない隊員がそう叫んでいた。

「クラリッサはどうした。」

『……副隊長はおそらく……。』

そう言うと、ラウラは理解した。

クラリッサに命じられた命令は、篠ノ之リリィの監視。

おそらく内部にいるのだろう。

ラウラは少しだけ歯ぎしりして、口を開く。

「今からヘリを建物に突撃させる。　同時にＡ班とＣ班は建物内部へ、Ｂ班とＤ班、Ｅ班は建物周囲を包囲したまま待機っ！　射殺は

許可するっ！！」

その言葉に隊員は息をのむ。

射殺許可が出たのだ。

軍人としても息をのんでしまうのだろう。

「シュヴァルツェア・ツヴァイクのピーコンが発進されたら、すぐに私に連絡させるようにクラリッサに言っておけっ！」

そう言うと通信を一旦閉じた。

「なかなか大胆だな。」

後ろから千冬の声が聞こえた。

ラウラは口を釣り上げ「……まだまだ。」と言い、片方の腕を部分展開しドアを排除する。

ドアだった物が平地に落ち、ヘリの内部に風が入り込む。

銀と黒、薄紫に金の髪が風になびく。

ラウラはさらにレールカノンを部分展開し、建物に打ち込むと同時に「ＧＯ！！」と全員に通信をつなげ叫んだ。

その瞬間、千冬達は飛び降りＩＭＳを展開する。

白騎士とランチャーストライクがスラスターを吹かしながら地面に

降り立ち、束がレイジングハートを起動させ飛ぶ。

ラウラはそれを見ると、ヘリの内部でストライクノワールを展開した。

「総員作戦通りに動けっ！　第一目標は捕らわれた篠ノ之リリィ博士の救助。　第二目標は施設の占拠。　第三目標は情報の確保だ。」

ストライクノワールを纏ったラウラはヘリが建物にぶつかる瞬間に、ヘリから出る。

建物の一部にヘリがぶつかり、爆発した。

長距離を移動したせいか、エンジンが少なくなっており爆発の規模は少ない。

「以後本作戦の指令（ヘッド）は私だっ！　全員の健闘を祈る。」

『了解っ！』

かなりの人数の声がその建物周囲に響いた。

２４３　篠ノ之リリィ博士救出作戦開始（後書き）

男が仮面の災厄と手を結んでない状況が出た。

ＩＳの保有は境内時の十機が委員会としての動かせる範囲。

今回の二十六機が亡国企業が配備した機体です。

束がハッキングで研究施設を見つけられないのには簡単な理由があります。

表向きにはその研究施設は、中小企業向けの施設。

研究施設全てのＰＣなどがオンライン回線ではない事。

監視カメラがないと言う事。

こう言う系の建物はかなりあるため、束でも発見ができなかったという感じです。

２４４　シャルロットの救出作戦（前書き）

……タイトルが思いつかないと言う罠。

どうすればいい……。

Ｐ３

２４４　シャルロットの救出作戦

ストライクが地面に降り立つと、すぐにアグニを構えた。

狙うは、撃ち抜いた後に被害が出ない場所。

ロックをせずに引き金を引くと、高エネルギーが建物の一部を溶かし破壊していく。

そしてメインブースターを展開させ、飛び上がると建物の屋上に足をつける。

「……お義父さんが何処にいるか分からない……。」

そう思いながらアグニを撃ち貫く。

出撃前にラウラはシャルロットに「撃つなら一般人に被害が行かないように撃て。　お義父様は不老不死（アレ）だからな……。」と言われていた。

確かにリリィは不老不死だが、流石にリリィを巻き添えにはできない。

そのため、場所を慎重に選びながらアグニを撃っていた。

アグニを左手で構える。

思考補助誘導システムが左手を補助しながらアグニを動かし、引き金を引く。

「……っ！？」

はずだった。

撃とうとしたアグニは、何処からか放たれたレーザーによって重心を貫かれる。

シャルロットは信じられないと思いつつも、急いでランチャーストライカーをパージし、その場から退避した。

≪四時方向距離２４０　数３≫

シャルロットは急いでその方向を見る。

するとオレンジ色ではなく毒々しい濃い紫色をしたラファール・リヴァイヴが、ライフルを構えてストライクを見ていた。

それを見た瞬間、シャルロットは肩のウエポンもパージしエールストライカーパックを展開する。

敵機はそれを見るとレーザーを放つ。

「甘いよっ！！」

だが、そのレーザーはストライクに当たらず空を貫いた。

逆にお返しとばかりにビームライフルを向けて撃つが、別の機体がビームを防ぐ。

唖然としながらそれを見ていると、そのそばにいた機体が接近する。

（……なんで、ビームを防げるの！？）

そう思いながら後退しつつも、ビームライフルを撃つ。

レーザーがストライクを狙うが、後退しながら回避する。

≪二時方向下方から斬撃≫

それを見た瞬間足を曲げ、シールドをその方向に向ける。

すると、レーザーらしい光条がシールドにぶつかった。

（しまった、もうこんなに距離を詰められてたなんて……。）

焦りながらも三機中二機がレーザー攻撃用武装をし、一機が防御用の特殊シールドを持つ機体がシャルロット自身が担当する敵だと認識した。

「……だけど。」

そう言いながら、シールドで受け流すと敵機はストライクの横をすり抜けて行く。

「お義父さんには、まだまだ遠いよっ！！」

前転の要領で空中回転すると、ストライクはライフルを構え。

基本絶対防御を発動させ、貫くのでエネルギー消費と被弾が与えら

れる。

近接武装のラファール・リヴァイヴは、脚部を完全破壊、背部メインブースターを損傷させられ落ちて行く。

もがきながら、ストライクに向けてサーベルを振るうが届かない。

（……シュベルトゲーベルみたく、レーザーをサーベルの一部に展開させたんだ……。）

両刃にレーザーが展開している刃を見ながら、飛んでくるレーザーを回避する。

地面に近接武装の機体が落ちた瞬間に、シュヴァルツェ・ハーゼ部隊のＢ班が中距離から対重戦車ライフルを連続で撃ちこみ、ＩＳのエネルギーを完全になくした。

『こちらＢ班。　ストライクが被弾させたＩＳ一機をエンプティーにさせました。』

通信で状況が流れる。

その通信を皮切りに『白騎士が撃破』や『Ａ班第一物資搬入口を制圧。』などと聞えた。

それを聞きシャルロットは、エールストライカーの全スラスターを起動させ、レーザー砲撃を放つ機体に接近する。

瞬時加速に近い速度で移動し、飛んでくるレーザーをシールドを斜めに構える事で逸らす。

「はぁぁぁぁっ！！」

二機を間合いに入れ、サーベルで切りつける。

しかし、シールドを持った機体が前に出て防いだ。

２４４　シャルロットの救出作戦（後書き）

「シャルロットの救出作戦」って、なんかシャルを助け出すと言う感じに見えてくる……。

微妙だな……。

もう「その１」とかでもいい様な気がしてきた……。

けど、余計にめんどくさくなりそう……。

うん……。

２４５　誰かの救出作戦（前書き）

前回から引き続き、「〇〇の救出作戦」というタイトル。

シャルロットが前半を占め、後半あたりからラウラが占める。

そんな感じで構成、Ｐ３

２４５　誰かの救出作戦

ストライクのビームサーベルを何とか防いだ敵機を観察しつつも、飛んでくるレーザーを回避する。

レーザーとビームの場合、出力的にはビームの方が上だ。

しかし現在の状況を見る限り、それが疑わしい。

ビームライフルならともかく、零距離出力のビームサーベルを防いだエネルギー。

「……タネは何処かな？」

怪しさ満点のシールドを持つ機体の周りを移動しながら、観察した。

『こちらＢ班からストライク。　その範囲に大規模電力施設があるとの情報がヘッドから……。』

その言葉を聞いた瞬間に、シャルロットは二機が足場に使っている建物をビームライフルで撃ち抜いた。

「こちらストライク、たった今排除しました。」

少しストレスがたまりかけていた。

落ちた機体が持っている武装を見ると、エネルギー補給ケーブルが付いている。

（……なるほど、無理やりエネルギーを上げていたわけか……。）

ＰＳ装甲と同じような原理でシールドが展開されていた事を知り、シャルロットは関心と呆れが混じった息を吐く。

エネルギーケーブルが切れた為か、二機とも動かない。

「こちらストライク。　砲撃型と護衛型一機づつエンプティー。至急確保お願いします。」

千冬は束と共に、研究所内を飛んでいた。

目的はもちろん、リリィの捜索だ。

「……くっ、数ばかりごちゃごちゃとっ！！」

そう言いながら敵機を雪片で叩き伏せる。

敵機体の搭乗者の事を考える思考力がほぼないが、今のところ大きな被弾はなかった。

そして敵機を放置して、リリィを探す。

「Ｉｃｈ　ｂｉｎ　ｂｅｈｉｎｄｅｒｎｄ！！（邪魔だっ）」

ラウラが叫びながら、青空の下で二丁のビームライフルを使用し敵を撃つ。

だが、そのビームは簡単に回避される。

ほぼ出会った瞬間にビームライフルを撃って排除していたが、今では回避をし敵機を排除することしかできなかった。

（……数が多過ぎるっ！！）

ラウラが相手しているのは、ラファール・リヴァイヴ七機だ。

そのどれもが強くはないが、回避が飛びぬけて上手い。

シュヴァルツェ・ハーゼ部隊がヘリなどの残骸に隠れ、時たま援護射撃を行うが当たらない。

ビームライフルとレールガンを使い、撃ち続けるが一向に当たらないのだ。

さらにビームとは違いレールガンは実弾兵装。

弾の数が凄い勢いで減っていく。

（ちっ！　流石に不味すぎる……。）

ノワールのエネルギーは無くなる事はないが、七機を相手に出来るほどＩＳの戦闘経験はなかった。

モニターでレールガンの残量を見つつ撃つが、やはり当たらない。

敵機のレーザーを回避するが、一対七という状況がラウラを追いこんでいた。

「Ｓｃｈｎｉｔｔ　ｅｉｎｅ　Ｋｕｇｅｌ？（弾が切れたか）」

そしてついにレールガンの弾が無くなった。

バックパックには対艦刀が二本付いているが、接近することも難しい。

（……やれるか？）

ラウラは不安になりながらもノワールストライカーをパージし、別のバックパックを起動させる。

（……オルコットの様にできるか分からないが……。）

そう思いながらも、接続した瞬間に四基射出する。

白とオレンジの色したソレは、自由に飛び回ると砲門を展開し敵機を背後から撃つ。

それが瞬間的に敵機をオールレンジ攻撃で破壊し、別の敵機を破壊する。

ガンバレルストライカー。

ブルー・ティアーズやドラグーンの様に無線型ではなく有線型だが、れっきとした誘導兵器。

展開範囲と弱点露出を犠牲に、空間認識力が低い人間でも使えるように束が開発した物だ。

それがノワールを中心に飛びまわり、敵機のエネルギーをエンプティーしていく。

もちろん絶対防御を貫いてはいるが、一発の出力が低いせいで貫通までは威力が出せていない。

（行ける……。　これなら大丈夫だ。）

誘導兵器を対処できない敵機を見て、ラウラは何とか勝機を見出した。

２４５　誰かの救出作戦（後書き）

２５０部目ですね。

話数は違うけど。

なんか、良く連続投稿し続けてるなと思っていたりもするんですよね……。

やり過ぎな様な気もするけど……。

まぁ、アレデスアレ。

うん、アレ。

ガンバレルストライカーを使用させてみました。

前にノワールの説明で言ったように、ノワールにもストライカーパックを複数持たせています。

ですが、起動のタイムラグがあったはずなんですけどね……。

４分無防備になるはずなんですけどね……。

どうした事やら……。

改造？

思いの力？

不明な部分です。

いや、きっと機体が力をくれたんだよ（ドヤッ

２４６　束達の前に現れる者達（前書き）

今回は、何と言うかアレです。

うん。

あの機体が復活？

Ｐ３

２４６　束達の前に現れる者達

束と千冬は怪しげな雰囲気を醸し出す場所を見つけ、立ち止まっていた。

建物の構造上地下はないはずなのに、地下への階段がある。

さらに、ダンスホールの用に広い空間。

怪しい以外の何でもない。

「こちら織斑。　地下通路らしき入り口を発見。」

『了解。　ただちに隊長達以下数名を向かわせます。』

「頼む。」

連絡を入れ、千冬はゆっくりと近づく。

少しでも、現状把握をしなければならない。

そう思いながら、近づいた。

「よく来たね、助かったよ……。」

「っ！？」

突然、知っている声が響いく。

束は辺りを見渡し、何かを感じたように上を向いた。

「誰っ！！」

その掛け声と共に、アクセルシューターが複数声のする方向に放たれる。

しかし、攻撃が当たる前に声の主は現れた。

「やぁ。」

間の抜けた声が、階段から響いた。

（っ！？　上じゃないのっ！？）

束は驚きながら、階段を上ってくる人物を見た。

それと同時に、背後から大きなかざきり音が聞こえる。

「お義母様！！」

「お義母さんっ！！」

ラウラとシャルロットだった。

しかし、束は振り返る事はせずに階段を見つめ続けている。

そして顔が現れた。

「……リリィ……ちゃん？」

階段を上ってくるのはリリィだった。

「良かった……。」

全員リリィが生きていた事に安堵する。

だが、束だけは違う。

束だけは、鋭い目つきでリリィを睨んでいた。

「ありがと……。　帰ろうか……。　束、千冬、シャル、ラウラ……。」

その言葉で、シャルロットがリリィに向けて身構えた。

「貴方は……誰……。」

束はシャルロットの思いを、自身の思いと同時にぶつけた。

その言葉は、千冬とラウラには分からなかったようだ。

「何を言ってるんだ？　束？？」と千冬が言っている。

しかし、束はリリィに向かってさらに言う。

「貴方は誰なのっ！！」

そう言うと、リリィは悲しそうに眼を伏せる。

「ど、どうしたの？」

以前千冬とラウラは分かっていないようだが、束とシャルロットは誤魔化せなかった。

レイジングハートをリリィに向け、束は口を開く。

「……リリィちゃんは……、そんな目で私を見ない。」

「……お義父さんは、私をシャルって呼んでくれない。」

それはほんの些細な事。

リリィの目が不自然に感じる束と、呼び方が違いよく見ると似ているだけという感じに思えてくるシャルロット。

二人は武器を構え、リリィを睨みつける。

だが、リリィは驚き困惑した表情で束達を見た。

「どうしてこうなった……？」

そう言いながら、リリィは頬をかいた。

「……ソレは、貴方が異端だから……。」

さらにその場に別の声が響く。

リリィは頬をかくのを止め、束達は目を見開いた。

そして、その声は上から聞えている。

「……とぅ……。」

そう言いながら、少女は降りてきた。

束と千冬が知っている少女が、目の前に降りたのだ。

「……異端……ね？」

「……そう、異端……。」

そう言って、二人は見つめ合う。

「……階段を下りれば……、良いと思う……。」

そう束に向かって言うと、少女はリリィに向かって行く。

混乱しそうになりそうな状況。

しかし、少女は殺気を持ちながらリリィに近づく。

「……貴方がその形をしていても、私には……無意味……。」

「そうか……。　やっぱり運命なのかな？」

リリィはそう言って苦笑すると、少女を睨みつける。

少女もリリィを睨みつけた。

「篠ノ之リリィ……。」

「ローズ……。」

そう言うと、リリィはフリーダムを展開する。

その光景はどう見ても、リリィ本人だった。

フリーダムを使えるのは、リリィしかいない。

だが、束にとって目の前にいるリリィはリリィではなかった。

「フリーダム……。　……全力だね……、なら私も……。」

少女、ローズがそう言うと少女の身体が光り始める。

そして、次の光景は束達が驚く物だった。

「なっ！？」

少女の姿は消え、全身を鉄で覆われた機体になっていた。

その姿は過去に幾度も見た姿で、敵だと断言できる機体。

灰色の機体に、半円盤の大型スラスターを背部に付け、その周囲に突起状の誘導兵器ドラグーンを幾つもつけている。

プロヴィデンス。

ローズの姿は、プロヴィデンスになっていた。

２４６　束達の前に現れる者達（後書き）

という事で、少女の名前と機体が登場。

少女の名前は「ローズ」

百合（リリィ）の対の意味という事で「薔薇（ローズ）」という事になりました。

考えてくださった「たまご」様、ありがとうございます。

まぁ、プロヴィデンスが復活するのは、結構前に描いた覚えがあるので……、それほど少女と結び付けるのは難しくなかったかな？

というか、リリィ？

リリィ？？

という感じになっておりますが、気にせず行きましょう。

おそらく次話は、戦闘と回想……。

２４７　クラリッサの救出作戦（前書き）

〇〇の救出作戦を受け継いでみたｗ

というかそうさせないと、シャルロットだけに……。

Ｐ３

２４７　クラリッサの救出作戦

お互い、機体を纏う。

それは紛れもないフリーダムとプロヴィデンス。

千冬は雪片を、ラウラはガンバレルを何時でも展開できるように構えた。

しかし、動く事ができない。

フリーダムから放たれる闘気（とうき）が千冬達をその場に止めていた。

フリーダムがビームライフルを構え、プロヴィデンスが大型ライフルを構える。

「……ローズ、記憶は戻ったのかな？」

リリィがそう言うと、プロヴィデンスが引鉄を引く。

ビームが真っ直ぐ伸び、空を貫く。

フリーダムがスラスターで回避したためだ。

「……どうだろうね。」

そうローズと呼ばれる少女が言うと、フリーダムが引鉄を引く。

しかし、ビームはプロヴィデンスに当たる前に別方向から放たれら

ビームによってずらされる。

「……ドラグーン。」

千冬がそう呟くと、二機の速度が徐々に上がっていく。

プロヴィデンスが大型ビームライフルと複合シールドからビームを放ちながら、ドラグーンを背中にある五基を展開させる。

海を泳ぐようにドラグーンが飛び回ると、ビームをフリーダムに向けて放つ。

しかしフリーダムはビームライフルをマウントし、ビームサーベルを両腰から引き抜く。

「っ！！」

少し気合を入れ、フリーダムはビームを斬っていった。

「……。」

その光景に千冬は頭が混乱してくるのを感じた。

「……束。　アレはリリィではないのか??」

それもそうだ。

ビームを斬ると言う芸当はかなり技術がいる。

さらに言えば、目の前のフリーダムの動きは千冬が師と敬った者の

動きと同じなのだ。

「目の前のフリーダムはリリィである。」と言われれば、十人中十人が「Ｙｅｓ」と答えるだろう。

「うん。　違うよ……。」

しかし、束は目の前のフリーダムはリリィでは無いと言い切る。

何か根拠があるのだろうかと千冬は束を見るが、かなり真剣な表情をして答えそうにもない。

そして目の前の戦闘を見続け、地下への階段に入れるのを待った。

クラリッサはゆっくりと目を開けた。

「……こ、こは……。」

そう呟きながら、あたりを見る。

（……どく、ぼう？）

そう思いながら、目を擦り確認し直す。

すると鉄格子に壁と独房的な場所だが、細部が違う事に気が付いた。

もう一回辺りを見ると、壁と床に拘束具が付けられているのを見つけ「ああ、博士の……。」と言って、眠気を完全に吹き飛ばします。

「博士はっ！？」

そう思い立ち上がり、出ようとする。

だが、出入口にはカギが掛っており動かない。

爆音が遠くから聞こえ、クラリッサは何が起きているのかを理解した。

（……博士の救出が始まっているか。）

もう一度当たりを見ると、人がいない事を確認する。

ポケットに入れてあった自身の待機状態の愛機を確認し、少しだけ安堵した。

機体を没収するのを忘れたのか、ちゃんとクラリッサの手元にある。

少しだけシュヴァルツェア・ツヴァイクが手元にある理由を考えられるだけ考え、クラリッサは行動する事にした。

「……シュヴァルツェア・ツヴァイク……。」

そう呟くと、クラリッサの身体にＩＳが装着された。

しかし、展開されるはずの武器が無い。

「……やはり、外されてるか。」

そう思いながら、自身が機体を持って独房に入れられていた意味を理解する。

武器の無いＩＳがいた所で、脱出や救出は不可能という事。

普通なら装備を外し大人しくしているのだが、彼女は違った。

牢を破壊し、レーダーで一番近い機体の位置を確認する。

（……直線、距離４００。……こちらに向かってくるな。）

クラリッサがシュヴァルツェア・ツヴァイクを起動させたのか、取り押さえようとラファール・リヴァイヴが向かってきていた。

手にはアサルトライフルとロングライフルを持っている。

それを見るとクラリッサは瞬時加速の勢いのまま、ラファール・リヴァイヴの搭乗者にラリアっとをかます。

ラファール・リヴァイヴは銃を手放し、瞬時加速の加速を受け吹き飛んだ。

「……銃を借りるぞ。」

無ければ調達すればいい。

そうしてクラリッサは行動し始めた。

２４７　クラリッサの救出作戦（後書き）

久々に書いたｗ

何日コレ書かなかったんだろう……。

おそらく……四日？

長く休んだね～ｗ

よし、こっちも真面目にやろうっと！

２４８　最深部への救出作戦（前書き）

結構（書くのを）休んでいたけど、結局は別のを書いてたから休んでないんだよね……。

なのはを書くのがノリに乗らない……。

そんな日々、ｐ3

２４８　最深部への救出作戦

プロヴィネンスのサーベルが、フリーダムを階段入口から吹き飛ばす。

「っ！？」

「……行って！！」

ローズがそう叫び、ドラグーンを放ちながらフリーダムを牽制する。

束とシャルロットは言われた通りに走った。

だが、千冬とラウラだけは戦闘をするフリーダム見て、行っても良いのか悩んだ。

しかし、プロヴィデンスのドラグーンが彼女たちの足元へ放たれ、危険と分かったのか苦虫をかみつぶした表情で降りて行った。

「……行っちゃったか……。」

リリィの声が響く。

展開していたレールガンの砲身を戻す。

「……貴方が何を考えているか、分からない……。　……けど、これから先に何があるかは……、簡単に予想が付く。」

ローズがそう言って、ドラグーンを全基回収し着地する。

「……本当に行かせたくなかったら、……貴方はフェニックスを使うべきだった。」

その言葉にリリィはため息をついた。

「……確かにね……。」

フリーダムが光に包まれ、瞬間的にストライクフリーダム・フェニックスになった。

リリィとフリーダム。

これだけ考えれば、リリィ本人は目の前にいるだろう。

しかし、分かる人間には分かってしまうのだ。

「……確かに貴方は……、兄さんとは違い強い。……だからその慢心が、フェニックスを展開する事を拒んだ……。」

「耳が痛いね……。」

そう言うと、リリィはシフトをフリーダムに戻す。

「……私はただ……、束に選択を誤ってもらいたくないんだよ……。」

そう言ってフリーダムはライフルを構える。

その光景と同じように、プロヴィネンスも大型ライフルを構えた。

束達は慎重に進んで行った。

途中でＩＳが襲いかかって来たが、ビームの一撃で機能を停止する。

「……本当に、良かったのか？」

千冬が未だ不思議そうに束を見る。

しかし束は千冬を見ずに、先にある通路を見た。

≪ＩＳ一機接近≫

モニターにそう出た瞬間に、全員身構える。

（……この角からっ！？）

そう思い、今隠れている曲がり角を横目で見る。

そして束はレイジングハートを握り、敵の前に出た。

「っ！？」

「っ！！」

当たり前のように出たら、車にぶつかることと同じだ。

瞬間的に敵が束を避けて、曲がり角にぶつかる。

その相手を見て、ラウラは唖然とするしかなかった。

「……クラリッサ……、何を、やっているのだ……。」

そう呟くのがやっとで、他の全員はクラリッサが起きあがるまで何も言えない状態で居た。

「っ～……。」

クラリッサは展開したＩＳの膝に手を当てて、ゆっくりと立ち上がる。

打ちどころが悪かった、と言うのは絶対防御を発動していた為に無いのだが、脳を激しく揺さぶられているのか平衡感覚が保てないでいた。

瞑っていた目がラウラ達に向かい、開くと目を見開き「隊長っ！？」と言って驚く。

その光景に束達は、目を何度も閉じたり開いたりしていた。

そんなクラリッサを見てラウラは「……色々言いたいが、後回しに

しておこう。」と言って咳払いをする。

「……クラリッサ、お義父様は何処にいるか分かるか？」

そう言って、クラリッサを見る。

しかし外見がストライクノワールのため、ラウラと言う印象が無かった。

それでも、クラリッサはラウラだと気が付くようだが。

クラリッサはラウラの質問に姿勢を正し「おそらく、最深部の秘密研究区画にいると思われます。」と言って答えた。

束はそれを聞いた瞬間「案内してっ！！」とクラリッサのＩＳシュヴァルツェア・ツヴァイクを揺らす。

そのせいでか、落ち着いてきたクラリッサの脳が再度シェイクされ目が回り始める。

「……た、束？」

千冬が止めていなかったら、おそらくクラリッサは胃液などをリバースしていただろう。

それほどまでに、揺れが収まった時の表情は優れていない。

そして落ち着いたのか「こちらです。」と言って動き始めたのだった。

２４８　最深部への救出作戦（後書き）

というかこのリリィはリリィなのか？

それとも束が言うように、リリィではないのか。

まぁ、でもフリーダムの様なオーバーテクノロジーが何個もあってはたまらない状況ｗ

次話でようやく、考えていたシナリオが最終段階に入りそう♪

２４９　最深部への到達（前書き）

まぁ、タイトル通りに最深部へ到達しました。

しかし、何故か前話のあとがきを裏切るかのように、入らない……

ｏｒｚ

Ｐ３

２４９　最深部への到達

束達はクラリッサを先頭に地下を移動していた。

シュヴァルツェア・ツヴァイクの武装は全て手に持てる物、ラファール・リヴァイヴの主力装備である。

それを見てラウラはクラリッサの身に何が起きていたのか、大半が理解出来た。

しかし、言葉には出さない。

言う必要はない。

だからこそ、五人は静かに通路を移動していた。

「……ここです。」

そう言って、クラリッサは大きなドアの前に立つ。

「……ここ。」

束がそう言って、ドアに近づくが瞬間的に止まった。

全員が不思議がりながらも、束を見る。

「……ドアに侵入者感知用の絶対防御と電子ロックが掛ってる。」

束はそう言いながら辺りを見渡す。

クラリッサは近くにあるであろう、電子ロックのキーを探す。

しかし「……無くなってる……。」と言って驚愕した。

ノワールがビームライフルを放つが、絶対防御に使用されている面と使用エネルギーが多いせいか、貫いてもかなり軽減される。

さらに扉にも特殊な仕掛けが施してあるのか、ビームを当てても赤く発熱するだけだった。

それを見てラウラがシャルロットを見て「アグニで壊せるか？」と聞くが、シャルロットは「……ごめん、さっき壊されちゃった……。」と言ってランチャーストライカー無い事を言う。

仕方なしにラウラがガンバレルストライカーをパージし、ランチャーストライカーらしき装備を装備する。

アナザートライアルランチャーストライカー。

ノワール専用に作られた、ランチャーストライカーパックの後継装備である。

ノワールはストライクの発展形機体であり、両肩にサブスラスターの増設がされているため、通常のランチャーストライカーのコンボユニットが接続できない状態になっているのだ。

そのため、ノワール専用にリリィと束が考案し開発したのがアナザートライアルランチャーストライカーである。

コンボユニットの方への装備を変更し、背部バックパックから肩に伸びていた増設スラスターに対してコンボユニットの配置問題を解消した。

「……全員、私の後ろに退避しろ……。」

ノワールが左脇下からアグニを正面に向け、腰に構える。

全員が後方に退避した事を確認すると、ラウラは躊躇い無くトリガーを引いた。

瞬間的に砲身から高エネルギーが放たれ、絶対防御を破りドアにぶつかる。

「……。」

ドアが発熱し赤くなるが、アグニの威力が落ちはしない。

少しして発熱に耐えきれずに、ドアがどけた瞬間にそこからドアが壊れた。

クラリッサはそれを見て唖然とする。

「……情報では知っていましたが……、いざ実際の物を見ると……。」

そう言って心中を吐露した。

だがその言葉を受け止める者はおらず、帰ってくる言葉はない。

アグニの砲撃が止み、束は警戒しながら内部に入った。

「っ！？」

入った瞬間に、束は顔をしかめた。

そこはリリィらしき人物と会った空間並みに広く、目の前には十字が立っている。

奥に見える指令ブースには誰もおらず、ただの静かな空間だった。

「……誰も、いないね。」

シャルロットがそう言いながら、首を振り言った。

束がレイジングハートを持ち、十字架の元に溜まっていた血を検査する。

篠ノ之神社の時と同じように、血液検査は篠ノ之リリィと映し出す。

「……別の場所に移送された後かっ！？」

クラリッサがシュヴァルツェア・ツヴァイクで飛び、指令ブースの窓を叩き割り侵入。

丁寧に残していた「移送。」と言う文字を見つけた。

「……戻ろう。」

千冬がそう言って来た道を引き返して行った。

ラウラがそれに続き、シャルロットが再度周囲を見て続く。

クラリッサが指令ブースから下り、束と共に戻って行った。

２４９　最深部への到達（後書き）

リリィは一体何処へ？

やはり、あのリリィは本物だったのだろうか？

なら、あの移送の文字は？

さて、そんな感じになってるんじゃないかな？

まぁ、今度こそ……。

という意気込みで……。

２５０　運命から守る者（前書き）

ようやく、構想していた感じに入れた気がする。

文章的には微妙。

まぁ、文字の多さでカバーｗ

２５０話目ですよ～。

キリが良い感じで、Ｐ３

250　運命から守る者

プロヴィデンスとフリーダムは機体にとっては狭い空間で、かなりの高速戦闘をしていた。

フリーダムはバラエーナを放ちながら、ビームサーベルでドラグーンのビームを切り裂き回避する。

その反対にプロヴィネンスはドラグーンを落とされない限り、有利な状況を保っていた。

ローズは対フリーダム戦闘の最適パターンを災厄の力で構成している。

そのため機体の反応が追い付く限り、その通りに行動していた。

もちろんフリーダムも同様に、災厄としての力でプロヴィネンス対策パターンの戦闘を取っている。

災厄同士の戦闘は周囲の壁を撃ち抜きながらも、相手の機体にダメージを与えられない状況を永遠と繰り返していた。

しかもお互い機体の動力は核エンジン。

エネルギー切れが起きない。

さらに災厄として、疲れも感じない。

「……。」

そのせいで、何年も同じ事をやれる気がした。

「……やめた……。」

先に戦闘を放棄したのはローズだった。

ドラグーンが全基戻り、その足元にはローズが「やめた。」と言った瞬間に放った、フリーダムのレールガンが着弾する。

当たり前のようにフェイズシフト装甲が、砲弾や床の破片を無効化した。

それを見たフリーダムは、レールガンを閉じビームライフルを下ろす。

「……決着付かないね。」

リリィもそう言って、フリーダムの肩をすくめる。

プロヴィネンスが大型ライフルの銃口を地面にこすらせ、その身体を軽く寄りかからせた。

「……大体、なんで……こんな事を……？　……警告したい、……やらせたいのなら、災厄としての力を使って……、相互情報の交換でもすればいいのに……。」

ローズの言葉がリリィの耳に届く。

災厄以外が聞いたら、何を言っているのか分からない内容だろう。

「した所で無駄なんだよ。」

リリィはローズの言葉を否定する。

「……運命には抗えない。」

フリーダムを展開したままだが、リリィの表情が暗いのが良く分かった。

「どうあがこうとも、なんど回避方法を教えようにも……結局は何も変わらない。」

そう言って、ライフルを握り直す。

そしてゆっくりと持ちあげる。

「……こうでもしない限り、束を助ける事ができない。」

そう言って、瞬間的にライフルを撃つ。

ローズはその速度に対応できずに、頭部をビームで弾きとばされる。

プロヴィネンスの胴体から頭部が消滅した。

ＩＳとしてならそこは人の頭。

吹き飛ばされれば、人間は死ぬ。

だが、災厄としては死ぬ事はない。

ある一定の位置を越えた災厄には、再生能力も備わる。
もちろんローズもその一定値を超しているため、頭部が再生した。
「……まぁ、そう言うと……、思ってたけど……。」
ローズはそう言って、複合シールドの銃身をフリーダムに向け撃つ。
瞬間的に放たれたビームはライフルに突き刺さり、爆発をする。
だがライフルもフリーダムの一部。
爆散したのが嘘のように、フリーダムの手にはライフルが持ち直されていた。
「……どう手を打とうとも、束は死ぬ。」
そう言ってバラエーナプラズマビーム砲を展開した。
「私に関わったことで、必ず死んでしまう。」
クスフィアスレールガンも展開し、プロヴィネンスを狙う。
「どの世界の運命でも、必ず……。　束を生存させる為には簡単な事をすればいい。」
そう言ってビームライフルも、プロヴィネンスに向けた。
「束に私に関わると言う間違った選択を、与えなければいい。」

その言葉と同時に、フリーダムはビームライフルの引き金を引く。
バラエーナプラズマビーム砲も、クスフィアスレールガンも砲身が輝き砲弾を吐き出す。
ローズはそれを防ごうとはせずに、ただ眺めた。
一定値を超えた災厄に対してみれば、その攻撃は無駄な行為だ。
しかしそれを知らない者にとっては、その行為はかなり意味がある。
「だめっ！！」
束がプロヴィネンスの目の前に立ち、砲撃に立ちふさがるように。
何故束がそのような行動に出たのか、誰にも分からない。
砲撃を撃ったリリィだって、目の前に立たれて戸惑っているローズだって。
「束っ！？」
地下通路の入り口から、千冬がその光景を見て叫ぶ。
どうやらこの光景を見た束が、ローズの前に飛び出したようだ。
砲撃が束に迫る。
束の周囲に展開されているエネルギーフィールドで防いでも、おそ

らく防ぐ事が出来ないであろう。

結果的に束は死ぬ。

誰もがそう思っていた。

「っ！？」

しかし束の当たる直前に何者かが砲撃と束の前に現れ、攻撃を受け止める。

全員が防いだ者を見るが、ビームの奔流で正確な姿が見れない。

ビームが当たっては弾かれ、砲弾が当たって砕ける。

そしてようやく防いだ者の姿が見れるようになった時、リリィとローズ以外は目を見開いた。

フリーダムに向け白とダークブルー、中央に赤をアクセントとして塗装されたにシールドを構え、青い十枚の翼を広げて束の前に立つ姿。

白い装甲が、半壊した壁から入りこむ光によって反射する。

「リリィ……ちゃん……。」

そう言うと束を守った者はシールドを下ろし、床に降り立つ。

その姿は紛れもなく、目の前にいる天使と同じ姿をした天使。

フリーダムであった。

２５０　運命から守る者（後書き）

と言う事で……。

なぜか、フリーダムが二機ｗ

まぁ、これで全員が分かったはず。

束がどうしてあんな事を言っていたのか。

次話でネタ明かしと、回想……かな？

さて、今回の話で４０万文字を突破しました～♪

多いｗｗｗ

あはっはっはっはｗ

話数も文字数も多いｗｗｗ

そしていつ連続更新は、途切れるのだろうか……。

途切れたら、なんかアレだね……。

うん、アレ。

２５１　二人のリリィ（前書き）

まぁ、サブタイと前話で分かるように……。

二人のリリィが存在すると言うお話です。

まぁ、多少……Ｐ３

251　二人のリリィ

青き翼の天使が束の前に降り立つ、千冬とラウラ、クラリッサは唖然とした。

それはそうだ。

束に向かっていた攻撃を放ったのはフリーダム。

しかし、それを防いだのもフリーダムなのだから。

「……何時の間に……。」

攻撃をしたフリーダム側のリリィがそう言う。

「ついさっき、ローズの前に束が立った瞬間に。」

そう言って言葉を返すのも、束を守ったフリーダムだがリリィだ。

お互いの姿はフリーダム。

フリーダムが光りに包まれ、人の形を作り出す。

砲身を閉じたフリーダムがリリィの姿になるのと同じように、束の前に現れたフリーダムもリリィの形になる。

そこには二機のフリーダムが、二人のリリィになった空間だった。

「……リリィ……ちゃん。」

束がリリィの背を見て、泣きそうになる。

束に背を見せるリリィの姿は、あの時のお祭り出来ていた物と同じ。

所々破けたり血が滲んでいたりもするけれども、八月二十四日の姿と変わらなかった。

そんな束の声を聞き、背を向けていたリリィは振り返る。

そしてゆっくりと近づき、束を抱きしめた。

「……ごめん。」

ただ一言、そう言って背中に手を回し抱きしめる。

束もリリィの背に手を回し、抱きしめ合う。

その光景を、千冬達は唖然と見ていた。

少しの間抱き合い、リリィは束から離れ振り返る。

「……で、私自身が何の用かな?」

そう言って苦笑する。

「まぁ、何をしたいかは分かるんだけどね。」

「なら、聞かない方が賢明じゃないかな?」

リリィの声が響き合う。

千冬はどう動いたらいいのか分からず、その場に立ち尽くしている。

ラウラは一応プロヴィネンスを警戒していたが、展開を解除しローズに戻った事で少しだけ警戒を解く。

クラリッサに至っては、何が何だか分からずに混乱していた。

「……私が原因で、そう遠くない未来……、束が死ぬってことは分かってる。　それで、それを阻止するために、タイムマシン的な物を束が理論を機械を私が作て来たってのかな？　……あれ？　そう考えると、束も心配だったのかな？」

そうリリィが言うと、束が苦笑した。

しかし、対するリリィは肩を少しすくめて口を開く。

「少し違うかな。　私も今の私と同じように襲撃を受けて、その際に私から聞き出したんだよ。」

「……直感像資質？　それとも完全記憶能力？」

そう聞き返すと、リリィは頷く。

リリィも何かに納得したのか、首を軽く傾げた。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。」

しかし、千冬達にとっては未だ意味が分からないのか焦って喋る。

ラウラとクラリッサも独り言のように何か喋っているが、混乱している事は確実だろう。

二人のリリィの目が、千冬に向けられる。

一瞬だけその光景に怯むが、千冬は何かに覚悟して口を開いた。

「……私達にとって、なんでリリィが二人いるのか理解できないのだが……。」

そう言うと、束の前にいるリリィは少しだけ苦笑し、もう一人のリリィを見る。

相対するリリィは目を瞑り何も言わない。

そして同時にリリィの口が開いた。

「「私はリリィ。　だけどその存在は一つ。　災厄として一つの終期に集まり、無数に枝分かれをした世界を歩む者。　全ての自身は同じであり別の存在。　同じ記憶を持つ事は許されずとも、情報の交互はやり取る事は出来る。　しかし、私がここに存在する理由は全くを持って別の物である。」」

その言葉を聞き、さらに混乱する千冬。

ラウラに至っては、理解しようと頑張ったのか頭に手を当てて目を瞑っていた。

「……つまり？」

我慢できなくなったのか、クラリッサが聞く。

身体全体で何を言っているのか理解ができない感じを出したのか、少々似合わない。

束の前にいるリリィが口を開く。

「私が全員が知っているリリィ。」

対面しているリリィも口を開く。

「そして私が、これから先に起こる未来から来たリリィ。」

２５１　二人のリリィ（後書き）

今回は千冬達が少しだけ置いてけぼり食らっています。

基本……。

天才→リリィ（今）、リリィ（未来）、束

大体の事を知っている→ローズ

証書感ずいている→シャルロット

何も知らない→千冬、ラウラ、クラリッサ

それにしても、今回の話でシャルロットの影が見当たらないｗｗｗ

なぜだろうｗｗｗ

さて、まぁ。

リリィが未来からやってきたて感じですね。

少々書いていて「あれ？　死を回避するために、過去に戻るって……。　それってなんてシュタゲ？」と悩みましたが、続行。

まぁ、二人いる時点でおかしいですけどねｗｗｗ

アーチャー的なテンションで、今後戦闘しそうな勢いです。

さて、また明日に続きます。

ちゃお♪

※これから三日間（今回含めて）、戦闘なしのシナリオが続きます。

２５２　リリィの軌跡（前書き）

良し眠いっ！！

寝ようっ！！

Ｐ３

252　リリィの軌跡

時は八月二十二日にまで遡る。

フリーダムが大気圏外で行った、時間跳躍現象。

誰にも気がつかれることなくリリィは数年の時を遡り、束が生きていた時間にまで戻ってきた。

しかし、そこには既に自分（リリィ）がいる。

自分が愛する者の横に、既に自分がいるのだ。

「……束……。」

フリーダムはゆっくりと地球に近づき、シールドを掲げて大気圏に突入する。

何度も行った大気圏突入行為。

だが、今回だけは慎重に行動した。

八月二十四日は雨天延期した篠ノ之神社の祭りである事は、リリィにとってよく覚えていた。

既に何人もの自分（リリィ）が、今の自分（リリィ）に対して行っている行為。

それが、リリィの運命であるかのように繰り返されていく。

一種のターニングポイント。

束を守るために、行動する一番大切な場面だった。

「……おじさん。　その狐のお面～。」

リリィはそう言うと、屋台の店主に向かって手を伸ばす。

その手には、当たり前のようにお金が握られている。

店主は片手で金銭を受け取ると、リリィに狐のお面を渡す。

リリィはその狐のお面をしっかりと被り、後頭部に回した紐で軽く髪を纏める。

「嬢ちゃん。　……そんなに綺麗なのに、お面なんか被って……。」

店主はそう言って、狐のお面をかぶったリリィを見た。

「……お面を売っている俺が言うのは、なんだが……。　もしかしたら、このお祭りでイイ男を見つけられるかも知れんぞ？」

そう言った店主の顔は、かなりいい笑顔だ。

しかし、その笑顔が今のリリィにとっては痛いものだった。

少しだけ沈み込んだ気分で、狐のお面の口元で人差し指を立てて歩き始めた。

「……ウサミミのねーちゃんにも、良い出会いがあるように言っといてくれっ！」

そう後ろの方で店主が言った。

「……。」

リリィはその言葉を聞き、狐のお面の下で唇を釣り上げた。

店主の言葉は、束とリリィが近くにいるであろうと言う証言でもあったからだ。

ゆっくりと歩きながら、狐のお面の下で屋台やお祭りに来た子供を眺める。

「……みんな楽しそうだね……。」

そう呟くと、目頭が少しだけ熱くなった。

取り戻せない大切な物を思い浮かべ、涙が自然と溢れだしかけている。

リリィは上を向く事で、涙が流れる事を防いだ。

「……よし。」

涙が流れなくなった事を感じ、リリィはゆっくりとレーダーでローズの位置を確認した。

レーダーで自分自身の位置を確認してしまった場合、確実に自分に気が付かれる。

それだけは避けなければならない。

その点ローズならレーダーにロックされても、さほど気にしない性格だ。

今現在の時間は、花火があがるであろう時間に近い。

その時間なら、リリィのそばにローズはいる。

早めに行動しなければ、束が死に近づいてしまう。

そう思い、ローズをレーダーで捉えゆっくりとその方向に近づいて行った。

リリィは狐のお面を被り気配を消し、この時代のリリィの服に紙を入れ込んだ。

そして、誰もいなくなった篠ノ之神社境内に立つ。

「そう言えばココだっけね……。」

自分が刺された時を思い出し、その時指した自分がどのような気持ちで立っていたか思う。

どうあがいても、死ぬ運命にある束を守りたい。

自分を殺す結末になっても、束を守る。

そう思いながら、自分自身はその場に立っていたのだろう。

社に近づく。

今のリリィは、近くのアクセサリーを販売している屋台で髪留めを買い、髪を纏め直し狐のお面を被っている。

「……何か用？」

近くにＩＳの気配を感じ、リリィはその方向に問いかける。

国際ＩＳ委員会過激派。

そのありさまは、今のリリィにとって体よく使える者だった。

『今回、ＶＴシステムの改造が完成したのだよ。』

そう言って、十機のラファール・リヴァイヴが近づく。

搭乗者は全員顔色が悪く、人なのに人のような反応が無い。

『出来れば、実検してから捉えてくれないか？』

その言葉に、少しだけ吐き気がした。

通信が勝手に切れ、ＩＳは茂みに隠れる。

相手の都合などお構いなしのようだ。

それを見て、リリィは狐のお面の下で「今助けるよ……。」と月に向かって言うことしかできなかった。

ゆっくりと歩き、役者（リリィ）が来るまで隠れた。

２５２　リリィの軌跡（後書き）

今さらながら、サブタイトルが未来のリリィ視点と言う感じで書かれている事に、首を傾げている気が。

まぁ、サブタイなんて大半が意味を成さない物だし、良いかなと思っていたりｗｗｗ

それにしても、本当に眠いな～。

首も痛いし……。

さっさと寝よう……。

２５３　月夜と花火のその下で（前書き）

寝呆けって怖いね。

なに書いてるか分からないよ……。

首が痛い……Ｐ３

２５３　月夜と花火のその下で

災厄は一つの終期に収束する。

しかし、この言葉は正しくはない。

確かに収束はする。

だが、それは周期ではない。

どの世界にいる、一定値を超えた各個体は情報を共有化できると言う事だ。

簡潔に言えば、未来にいる災厄が過去にいる同じ災厄に、戦闘方法を情報で送る事が可能問う事。

記憶なども、一定の情報に直せば送る事が可能である。

オフィスにある複数のパソコンが、一つのハードから情報を読みとる事ができる。

そのような感じだ。

先ほどの戦闘で言うならば、プロヴィネンスのスペックはフリーダムとリリィの技能に勝てる事は出来ない。

しかし総合した情報（ハード）から勝利パターンを組み、自身（パソコン）に組み込めば負ける事の確率は低くなる。

災厄は誰にも解明する事が出来ない存在なのだろう。

「リリィっ！？」

一夏の声が響くが、篠ノ之神社境内で殺そうとしていたこの時代のリリィにとっては、隙を生む声でしかない。

お祭りの雑踏や花火の音で戦闘音が聞こえないなか、一夏がここに来られた事が理解できない。

リリィは愕然とし、狐のお面をかぶったリリィは面の下で唇を釣り上げた。

狐面のリリィはビームサーベルを引き抜く。

しかしリリィも隙ができたからと言い、対処ができないと言う訳ではない。

空いている方の手で、ビームサーベルを引き抜き斬りかかる。

「はぁぁぁっ！！」

「やぁぁぁっ！！」

花火の音と斬撃の音が重なる。

狐面のリリィは、フリーダムとの高さの差で左足の付け根を斬り落とす。

フリーダムを纏ったこの時代のリリィは、狐面の胴を切る落とそうとしてサーベルを振ったが、フリーダムのビームシールドで防がれる。

左足を失い倒れかけたリリィは、クスフィアスレールガンを伸ばし足代わりにしてバランスを取った。

少々前のめりになりながらも、左手で更にサーベルを引き抜く。

逆手持ちのビームサーベルは振り抜かれ、狐面のリリィは一瞬対処ができなかった。

振り抜かれた瞬間に、服と狐のお面が縦に切り裂かれる。

一夏はその光景に唖然とした。

フリーダムの前に、リリィがいる事に。

「流石っ！」

狐面のリリィはバックステップで下がり、フリーダムを展開する。

しかし、その時にはリリィは斬り裂かれた左足が再生し、狐面のフリーダムに対し接近した。

互いにビームライフルを攻撃方法から消し、ビームサーベルで武骨に斬りあう。

腕を切られれば腕を斬り返し、頭を薙ぎ払われれば薙ぎ払い返される。

機体内部に存在した液体が、血のように辺りにまき散らされた。

さらに地面には、リリィが切り殺した十人の女性の死体と血がまき散らされているのだ。

錯覚で飛び散る液体までもが、一夏の目には血に見えた。

「いい加減落ちろっ！！」

「落ちるかっ！！」

リリィの声が重なり、その場に響く。

ビームサーベルの軌跡が、光でしか分からない。

そして、狐面のリリィがビームサーベルを両方逆手持ちにすると、特殊空拳と併用して攻撃を始める。

一夏にはその行動が分からなかい。

だが、すぐに特殊空拳の意味が分かる事になった。

いくらリリィが災厄としてフリーダムになっていたとしても、同じリリィが攻略法を知らない訳ではない。

拳を数回受けると、リリィの動きは鈍くなった。

「……うぁぅ……。」

それを気に狐面のリリィはフリーダムを切り刻み、一部捕獲すると箱らしき者に入れ、他の部分をビームで破壊、消滅させる。

しかし、一部さえ残っていればそこから再生する。

完全に消滅すれば、時間が逆行したかのように復活する。

だが、箱の中にあるのはリリィの一部。

結果、一夏の目にはリリィが死んだように見たのだった。

２５３　月夜と花火のその下で（後書き）

まぁ、そんな感じでリリィが捕獲されたと……。

……意味分からないよっ！！

私でも意味が分からないけど……。

え？

ええ？

何書いてるの私っ！？

意味通じてないでしょ、これっ！！

２５４　フリーダムＶＳフリーダム（前書き）

サブタイ通りに戦闘話。

なんか、寝不足なのか……話がごっちゃごちゃに……。

Ｐ３

254　フリーダムVSフリーダム

「結果、私は捕まり束から完全に引き離す予定だった。」

リリィがそう言うと、軽く肩を上げる。

少し呆れているのか説明も大雑把だった。

「……早めに始末すればよかったね。　私なら完全に再生する災厄の滅ぼし方なんて分かったたんだろうに……。」

「そうだね……！」

対面する未来のリリィはそう言うと、束の前にいりリリィに向かって切りかかる。

瞬間的にビームサーベルを引き抜き、リリィを殺しにかかった。

しかし、その光条は斬ろうとしたリリィの腕から発生するビームシールドによって防がれる。

「だからこそ、今ここで私を始末する。」

そう言ってフェニックスの姿になる。

そのためスラスターやブースターなどを使われた為に、リリィはどんどん束に近づく形で押されていった。

「束を守るためにっ！！」

そう言う声はどこか諦めている様な感じで響き、リリィの顔をしかめさせた。

ビームサーベルの出力とビームシールドの出力が同じなのか、リリィが押される形ではあるが拮抗し、青白い火花が辺りに散る。

「……生き残ってね、……兄さん……。」

そんな状態を理解してか、ローズはプロヴィネンスを展開し束を抱えて千冬達に近づく。

ローズに兄さん発言を聞いた束は、少しだけ唖然としプロヴィネンスを見る。

兄さんと言う発言は誰に向かって言ったのか、と束の頭は考え始める。

だが、その相手はどう考えた所でリリィしかいない。

というかこの場に男性は二人いるが、どちらもリリィなのだ。

つまり束にとって、義理の妹に当たる存在。

束は少しだけ混乱すると、考えを放棄し戦闘を見入る事にした。

フェニックスがビームサーベルをアンビデクストラス・フォームにし、バトンのように上空に放り投げる。

リリィはその瞬間に、自身をフェニックスを展開しドラグーンを全

基パージした。

クルクル回るビームサーベルが下りてくる前に、フェニックスはレールガンから隠していた小型のビームサーベルを取りだし、そちらもアンビデクストラス・フォームにする。

その瞬間、上空から放り投げたビームサーベルが落ちてきて、開いている方の手に収まった。

「……それ、使いにくくない？」

そう思い、リリィは呟きながらビームサーベルをレールガンから引き抜く。

左手はビームシールドを展開し構える。

「慣れれば問題ないけど？」

そう言うと、お互いウイングの展開を閉じて後ろに跳ね上げる。

一瞬で距離を縮め、ビームサーベルを振るう。

自分を殺そうとするリリィは、アンビデクストラス・フォームになったビームサーベルで突きそのまま刃先を上に向けさせることで、後ろの刃を攻撃に転じさせる。

その間に、ビームサーベルが自身に当たる事は無かった。

今を生きようとするリリィは、左腕のシールドでその突きと袈裟斬りを防ぎきる。

「……まぁ、未来なんか知ったところで、私は殺されてやるわけにはいかないんだよね。」

リリィはそう先にいる自分に言うと、ビームシールを横薙ぎに振りビームサーベルで突く。

だが、自分自身のためか簡単にその剣筋は防がれ、二振りビームサーベルがリリィに迫った。

「……絶対に殺されてやる物ですか。」

だが、リリィはそれをドラグーンで攻撃することで防ぎきる。

「それが束を殺す要因だとしても?」

回転しながらドラグーンの射撃を避け、ビームサーベルを無造作に振る。

それをリリィは軽く飛ぶことで、ビームサーベルの軌道から避けた。

未来を知っている自分の言葉に、少しだけ考えたくない運命が過る。

だが、リリィの中で答えは決まっていた

「……束が受け止めてくれたんだ。　夫の私が救う為だからと言って、その結末を受け入れる事は出来ない。　……むしろその運命を私が捻じ曲げてあげるっ!!」

ドラグーンが全基戻ってきて、背部に接続するとシフトを変える。

速度を出し、なおかつトリッキーな行動をとれるストライクフリーダム。

ドラグーン数はフェニックスの半分だが、腕の攻撃可動範囲こちらの方が広い。

「覚悟は良い？　縛られた私……。」

２５４　フリーダムＶＳフリーダム（後書き）

お休みなさいｗ

お気に入り登録が、増えたり減ったりする最近。

いや、昔からかな？

嬉しい反面、悲しい事やら……。

と書いても三日後がどうなってるか分からないｗ

予約投稿ですのでｗ

※総合　ＰＶ・ユニークアクセス（約２時間遅れ）小説全体　ＰＶ　ユニーク

累計　３，００１，７６９　アクセス　１７２，６５７人

パソコン　１，１０４，６６３　アクセス　１１６，４１４人

携帯　１，８９７，１０６　アクセス　５６，２４３人

２５５　二人の違い（前書き）

やはり、リリィの立場はラスボスか裏ボスだと思うんだ。

主人公だけど、強さで見たら最終ボスクラス。

……Ｐ３

255　二人の違い

束を生かそうとし、自身をないがしろにする天使。

束を生かし、自身も生きようとする天使。

二機の願いは殆どが同じなのに、お互いを斬りあう。

ドラグーンが飛びビームを斬り愛する中に、雨のように振らせる。

戦国時代の合戦のように、雨の中で斬りあう姿。

それは美しくも、悲しい結末を知ってしまった者が引き起こした愛する者の行かす最後の劇だった。

「っ！？」

ストライクフリーダムはビームシールドを、突き立てられたビームサーベルの上に張らせ空中で回転する。

その姿をフェニックスが空いているビームサーベルで追撃した。

だが攻撃よりも回転速度が速く、その突きは回避される。

「散突っ！！」

さらにフェニックスが散突・細雪を放つ。

しかし同じ技を使う者同士、その技は見破られビームシールドを張

る事で回避された。

ストライクフリーダムはお返しとばかりに、後退しながら腰部レールガンを展開し放つ。

「甘いっ！！」

だけど同じリリィと言う事からか、レールガンの弾頭はビームサーベルによって斬り裂かれた。

フェニックスはストライクフリーダムに向かい、バラエーナの砲身を展開し構える。

その砲身を見た瞬間、後退していたフリーダムを守るようにドラグーンが、一斉に射撃を開始した。

その射撃をお構いなしに無視し、フェニックスはバラエーナプラズマ収束ビーム砲を放つ。

「ちっ！」

リリィは舌打ちをつき、ビームサーベルを持ったまま両手を交差させ、ビームシールドの出力を上昇させる。

収束ビームを空中で受け、ストライクフリーダムは僅かにバーニアの出力を上げた。

そしてビームを防ぎきると、拮抗していた部分が光り、辺りを真っ白に染め上げる。

（貴様はまだ見ていないから、そんな甘い戯言を言えるんだっ！！）

束の死を知っているリリィは、過去の自分が甘い事を悔んだ。

（目の前で死んでからでは遅いっ！！　それが何故分からないのっ！！）

そう届かない声をぶつけ、バラエーナの砲身を出したままカリドゥスの砲身を光らせる。

ストライクフリーダムが光から現れた瞬間に、フェニックスの腹部がビームを放つ。

それにストライクフリーダムは、自身も腹部のカリドゥスを放つ事で相殺した。

しかし発射が遅れ相殺地点がストライクフリーダムに近かった事もあり、少々バランスを崩す。

「束を生かすために、自身を殺さないと何故分からないっ！！」

フェニックスもストライクフリーダム同様に飛び立ち、連結したビームサーベルを片方捨ててアンビデクストラス・フォームを解除し二刀流にする。

「その甘い言葉が、なんで危険だと分からないのっ！！」

先ほど自身の内で葛藤した言葉を吐き出す。

ビームサーベルが触れ合い、斬りあった場所から稲妻のように電撃

を吐き出した。

ビームの出力口が、ビームの最大出力に今にも壊れそうなほどになりながらも、使用者の思いの為にビームを吐き続ける。

何度もビームサーベルが触れ合い、電流が迸った。

「なんで束を救う手段がこれしかないと、気が付いてくれないのっ！！」

未来のリリィが叫び、過去の自分に苛立つ。

しかし同じリリィであるにもかかわらず、過去のリリィは落ち着いていた。

もちろん、未来の自分の発言を信じていない訳ではない。

だが、その言葉を受け止めながらもリリィは冷静だった。

「……それがなに。」

その言葉を言い、斬りあった瞬間にレールガンを展開し放つ。

当たり前のように、フェニックスは肩に装備された三つのスラスターで射線軸から外れた。

「……決められた運命だから抗う？」

レールガンが外れても、ストライクフリーダムは追撃をしかける。

周囲にドラグーンを停滞させ、数機づつフェニックスに向かって行く。

「……変える事が出来ないから、自分を殺す？」

そう言って、ドラグーンを放つ中ストライクフリーダムはフェニックスに接近する。

「違うでしょっ！！」

そう叫ぶと同時に、ドラグーンの一斉射撃とビームサーベルがフェニックスに迫る。

瞬時に腕をクロスさせビームシールドで防いだが、出力の多さから後ろに弾きとばされた。

「運命は決められたものかもしれない、けどっ！！」

リリィはそう言ってサーベルを振り払い、ドラグーンを全基戻す。

「運命を知っているから抗うんじゃなくて、運命を知らないから掴みとるんでしょっ！！」

同じリリィなのに、違う思想。

時の差か、覚悟の差か。

それが二人の決定的な違いだった。

２５５　二人の違い（後書き）

未来のリリィは、幸せから一機に転落したために、少しだけ自分から運命を掴みとる行為ができません。

というか束がいないしねｗｗｗ

結局過去と未来と言っても、同じ人間はいないと言う事です。

同じ存在はいるけどねｗｗｗ

２５６　怒りと剣と戦場で（前書き）

サブタイトルが本当に適当になってきた。

もう、アチャ男さんで再生できる発言しかない気がする……。

Ｐ３

256　怒りと剣と戦場で

「私もそれと同じように進んだっ！　進み続けたっ！！」

しかしフェニックスはドラグーンを全基パージすると、一斉に射撃してくる。

「運命は変えられると、未来の私に豪語しっ！　挙句の果てに束を救えなかったっ！！」

正確な射撃がストライクフリーダムを狙う。

フェニックスのドラグーンが、同じように攻撃するストライクフリーダムのドラグーンを撃ち落とす。

しかし爆散はせず、回復し再度飛び続ける。

フェニックスのビームライフルが火を噴き、ストライクフリーダムに向かって飛ぶ。

それを一閃し切り捨て、ストライクフリーダムは一気にフェニックスの懐に入る。

ドラグーンが懐に入る事を拒ませ、ビームの雨を降らせた。

「未来は変えるっ！　変えてみせると思い束を守り続けたその結果が私だっ！！」

フェニックスのビームライフルが高く上げられ、その手は腰のビー

ムサーベルを引き抜く。

ビームサーベルがストライクフリーダムの肩を切り裂くが、動きは止まらずストライクフリーダムのビームサーベルを足に食らう。

「くぅっ！」

そのまま後ろにストライクフリーダムが抜けるかと思った動きは、フェニックスに体当たりする為の動きに変わる。

一閃・白鷺。

特殊な歩方を体当たりの為に使い、ストライクフリーダムはさらに攻撃を続ける事に専念する。

足を切ったビームサーベルを戻しざまに、腹部を切りつけようと動かす。

フェニックスもやられるだけではないのか、ドラグーンとカリドゥスで迎撃しようとするが、近接武器に遠距離武器の攻撃の遅さは致命的だった。

倒れる瞬間に、カリドゥスに溜めたビームが切り裂かれ爆発。

ストライクフリーダムはその部分を踏み、翼を広げ大きく飛んだ。

「っ！」

そして飛ぶと同時に、ストライクフリーダムはフェニックスのドラグーンをマルチロックオンし、一斉に撃ち落とす。

再生するが攻撃を防ぐためには、その攻撃場所を叩くしかなかった。

ドラグーンの八門、レールガンの二門、ビームライフルの二門、カリドゥスの砲塔が一斉に火を吹く。

ビームライフルの引き金が壊れそうなくらいに連続で引かれ、ドラグーンが撃ち落とされそうな火線に晒されながらもビームを吐き続ける。

「まだっ！」

その声が聞こえると同時に、ストライクフリーダムは後退した。

肩の回復を終えながら移動すると、先ほどまで居た場所をビームが貫く。

「っ！　しつこいっ！！」

ドラグーンにドラグーンを相手させ、ストライクフリーダムはフェニックスに機体を向ける。

足は修復され、切りあう前のフェニックスがバーニアとスラスターを使用して高速でストライクフリーダムに接近した。

手にはビームサーベルを持つ前に上空に投げたビームライフルが握られている。

ストライクフリーダムはビームライフルを片方だけマウントし、ビームサーベルを引き抜く。

「なぜ、真実を……、未来を知り生き残ろうとするッ！」

フェニックスがストライクフリーダムに近づいた瞬間、ビームライフルをストライクフリーダムに向けて投げた。

それを片方のビームライフルで撃ち抜き、爆散させる。

目暗ましだった。

爆炎で視界を遮られ、ストライクフリーダムはレーダーでフェニックスの場所を確認する。

（目の前っ！？）

爆炎の向こう側にフェニックスはいた。

ストライクフリーダムはレールガンを展開し迎撃をしようとする。

「自分が原因だとまだ気が付かないかっ！！」

だがレールガンは、フェニックスから響く叫びと共にビームサーベルで砲身を斬られた。

「その思い込みが、愚かで愛する者を殺してしまうと……。」

そして回転しながら、再度ビームサーベルをストライクフリーダムに向け振りかざす。

だが、そう何度も斬られる訳が無い。

剣線に腕を置き、ビームシールドを展開する。

「なんで理解できないっ！！」

ビームサーベルとビームシールドがぶつかり、激しく火花を散らした。

２５６　怒りと剣と戦場で（後書き）

というか、お互いが満足するまで戦闘が終わらないんじゃないかな……。

再生するし……。

フトフリＶＳフェニックス

こんなので良いのか？

いや、いいんだｂ

今までストフリ、そんなに出番なかったしねっ！！

257　己まで蝕むモノ（前書き）

分かってると思いますが、どちらのリリィか区別するために機体を変えています。

あれ？

コレ言ったっけ？

まぁいっか……P3

257　己まで蝕むモノ

激しく火花が散る。

火花と言うよりスパークだが、ビームシールドとビームサーベルとの間に閃光が奔る。

「ぐぅっ！！」

フェニックスの速度と、限界以上を出そうとする意思。

なによりも束を救おうとする思いが、ストライクフリーダムを押した。

カタログスペックに表せば、出力や速度調整用のスラスターなどはフェニックスの方が多い。

だが先ほどまでフェニックスは、ストライクフリーダムと同等の力しか出なかった。

なぜ、同等の差で戦闘になったかは分からない。

誰ひとり、知ることもない。

「束を守るために取った剣を、お前は奪う為の剣とする気かっ！！」

ビームサーベルをビームシールドと拮抗させたまま、フェニックスは小型のレールガンをサイドに押し出し、砲身を展開する。

ストライクフリーダムもフェニックスと同じようにレールガンを展開した。

砲身は既に回復しており、機能は十分に発揮できる状態らしい。

「私の存在が残った災厄を呼び、束を殺した事を……。　また私に見せるのかっ！！」

「っ！？」

お互いその言葉と同時にレールガンを放つ。

フェニックスの砲弾とストライクフリーダムの砲弾が交差し、多大の脚部に当たり距離を離す。

ＰＳ装甲が実体弾であるレールガンを無効化するが、事実ＰＳ装甲が合っても無効化しているだろう。

「原因が分かっているなら、何故対抗手段を取らないっ！！」

ストライクフリーダムが叫びながら、ドラグーンを全基回収する。

両手にはビームライフルを保持し、フェニックスに向かい撃つ。

しかしフェニックスも軸回転から上昇し、回転中にチャージしていたカリドゥスをストライクフリーダムに向かって放った。

それをビームシールドで受け流し、ストライクフリーダムもカリドゥスを放つ。

「取ったっ！！」

その叫びと共に、フェニックスはさらに上昇する。

天井スレスレでとまり、カリドゥスを回避した。

「取れる手段を全部取ったっ！！」

ドラグーンを全基回収する。

叫びが室内に響くと、ストライクフリーダムが撃ったカリドゥスで天井が崩壊する。

「不安要素を全て排除した。　災厄もローズを含めて全部、全部っ！！」

その言葉でフェニックスはドラグーンをパージする。

ローズの名が出た瞬間、ストライクフリーダムの動きは一瞬だけ止まった。

しかし、次の瞬間ストライクフリーダムはドラグーンをパージする。

フェニックスとストライクフリーダムのドラグーンはお互い打ち合う事無く、空中に停滞した。

「だが、災厄は束を殺したっ！！」

ドラグーンが落ちてくる天井を攻撃する。

束を守る様に、ビームを吐き出し砕いて行く。

ストライクフリーダムがビームライフルをマウントして、フェニックスに向かい飛び立つ。

「全て排除した、したはずなのに災厄は束の命を奪うために現れたっ！！」

ストライクフリーダムがビームサーベルを引き抜き、フェニックスがビームシールドを展開する。

今度は立場が逆だが、ビームサーベルとビームシールドが触れ合う。

フェニックスはブースターの出力を切り、ストライクフリーダムに押され天井に激突する。

そのためその部分の天井は壊れ、ストライクフリーダムとフェニックスは施設内から施設外に戦場を移動させた。

束に被害が追わないよう、お互いドラグーンを残して。

「だから私は自分自身を消し去り、ローズを始めとする災厄を滅ぼす。」

そう言って、フェニックスはビームサーベルを押しのけた。

「……そのための方法は、見つけてあるっ！！」

「……。」

フェニックスがビームシールドの展開を止め、ビームサーベルを引き抜く。

ドイツの空に、二機の天使が向かい合った。

257　已まで蝕むモノ（後書き）

え～っと、４月１７日がプロローグだから……。

４ヶ月だね。

よくよく考えると、４か月連続更新って、ナニ……？

ヒマ人？

ヒマ人？

ソレは無いｗｗｗ

本当にｗｗｗ

258　幸せとは（前書き）

そろそろ終わりにしよう……。

だけど、想像してたのと終わり方が変わりそうだけど……。

まぁ、あっちの方が良いかな？

P3

258　幸せとは

ドラグーンに守られ束は空を見上げた。

ストライクフリーダムに乗るリリィが、何を思って自分自身と戦っているのか知りたい。

そう思いながら、束はあの戦場に行こうとはしなかった。

「……リリィちゃん……。」

その言葉は、はるか上空でビームサーベルを振るい、束をどんな手でも守ろうとする天使の耳には聞こえなかった。

同じ目的を頂点に、その信念は交わる事が無い。

愛する者の意思を尊重する天使と、愛する者の命を尊重する天使。

一人は今を大事とし、もう一人は未来を大事とする。

同じ天使が全く別の事を考えるには、やはり篠ノ之束と言う存在があるからだろう。

「……束……。」

千冬の声が天井が無いその場に響く。

ラウラもシャルロットもクラリッサも、束にかける言葉が見つからない。

事実、束は死刑宣告を受けているのと同じなのだ。

束は千冬を見て、少しだけ苦笑した。

「大丈夫だよ～☆」

いつものように束は、笑顔で元気そうに言う。

その声に千冬達は唖然とした。

未来で死ぬと言われ、なぜ笑っていられるのか千冬達は理解ができなかった。

ドラグーンが完全に天井から落ちる物を撃ち払い、自身がある場所に戻っていく。

それを見ながら、束は目を閉じて一言つぶやいた。

「……ああ、幸せだなぁ。」と。

上空は危険な場所となった。

施設の関係者は捉えられるか死亡しているため、現空域にいるのはストライクフリーダムを纏ったリリィと、ストライクフリーダム・フェニックスを纏い自身を殺そうとするリリィだけだ。

その二機がシュヴァルツェ・ハーゼ部隊が驚愕し見守る中、空を飛びビームサーベルで斬りあう。

触れあえば離れ、斬りあっては撃ち合う。

そんな戦闘が繰り返し行われた。

「束の為だっ！」

ビームサーベルを振り首を斬り落とそうとする。

「大人しく、私の言う様にしろっ！！」

だがビームサーベルの進行と共に、ストライクフリーダムは機体を横に倒おす。

そのためビームサーベルは空を切り、ストライクフリーダムは一回転してフェニックスの隙を狙う。

ストライクフリーダムのビームライフルが、フェニックスの翼と腹部に向けられた。

しかし、ビームが放たれる前にビームライフルは、フェニックスのドラグーンによって排除される。

「ちっ！」

ストライクフリーダムは素早くビームライフルを手放し、ビームサーベルを引き抜く。

そして引き抜きざまにビームサーベルで攻撃したが、ビームライフルの爆発からビームサーベルを抜く間に体勢を整え、フェニックスはストライクフリーダムのビームサーベルを、片腕のビームシールドで受け止めた。

レールガンが自動で腰に回り、壊れたビームライフルを自動でマウントする。

そのせいか、ストライクフリーダムはレールガンを放つ事ができなかった。

だが逆に、ビームライフルを後ろ腰にマウントする設計のフェニックスは、レールガンが撃てる状態。

一瞬の判断で、ストライクフリーダムはフェニックスから離れた。

「束が嫌がるとしても、自分自身を殺したいか！！束を悲しませたいかっ！！」

ストライクフリーダムがそう言いながら、制動をかけ後退する勢いを削ぐ。

すでにビームサーベルは、フェニックスと距離が開いた時点でマウントしてビームライフルを持っている。

フェニックスも同様にビームライフルを持っていた。

「生きていれば、私達の事は忘れるっ！！」

フェニックスは翼を広げドラグーンを戻す。

「そこから幸せになってくれれば、私は……。私達はっ！！」

ビームライフルが撃たれ、フェニックスのカリドゥスもレールガンも全て展開され放たれる。

「っ！！」

ビームライフルを保持したまま、ストライクフリーダムは両手でビームシールドを展開。

全ての砲撃を防いだ。

だが砲撃のせいか、ストライクフリーダムはかなりの勢いで地面に吸い寄せられていった。

258　幸せとは（後書き）

さてさて、次話辺りで決着が付くかな？

おそらく付くね……。

多分、考えてもみない終わり方になりそう……。

だって、「アレ？　物理法則は？」って感じになりそうだし……。

ま、流れるよ～に♪

２５９　運命を認めない天使（前書き）

少々、セリフが使い回しっぽくなりました……。
だけど仕方が無い。
これしか浮かばなかったんだもんｗ

Ｐ３

ちなみに、投稿５時間前に気がついた事。

「……あれ？　これ（この話）２０日になってる……。　１９ないのに……。」

失敗したら、今日の話が無くなる所でした……ｗ

259　運命を認めない天使

ストライクフリーダムは地面に落ち、フェニックスは上空でその姿を見下ろしていた。

もちろん外傷や気絶と言う状態は無い。

だが、自分自身に対しての決め手が無かった。

「……。」

巣子だけ奥歯を噛み、ストライクフリーダムはフェニックスを見上げる。

しかし、見上げるだけで何の進展も無かった。

「……もう、諦めてくれない……。」

フェニックスの声が辺りに響く。

その声はリリィにはもちろん、束、千冬、ラウラ、シャルロット、クラリッサ、シュヴァルツェ・ハーゼの全員に聞こえた。

「私が消えれば束が生き残る。　そして、私を忘れ幸せになる……。」

その言葉に、束は目を細めた。

「束の幸せを願った私達には、それで良いでしょ……？」

その言葉に、千冬はフェニックスを睨む。

「……出来れば、私だって束のそばにいたかった……。」

その言葉に、シャルロットがフェニックスを悲しそうな瞳で見つめる。

「……だけど、私は……。　私達は……、束を助ける事さえできなかった。」

その言葉に、ラウラが歯ぎしりをする。

「……何をやっても、前世の様に……。　……また、災厄の手によって……。」

その言葉に、クラリッサは束を見た。

「だから、束を助けるにはこれしかないんだよ……。」

その言葉は本当に悲しそうで。

もし顔が見れたのなら、瞳からは涙が流れていただろう。

ストライクフリーダムは何も言わない。

全員が次の言葉を待っていた。

「……お願い……。」

全員、フェニックスを見て何とも言えない感情を抱いた。

天使と呼ばれ、愛する者を守れない。

不死鳥と言う名を持っていても、愛する者を生き返らせる事は出来ない。

人の人生が終わりをつげる形は、誰も知らない。

だが空に浮く天使はそれを知り、それでも愛する者を守ろうとした。

運命に抗った。

そのどれもが運命通りに事が運び、愛する者を死なせてしまっている。

その天使が、悲しくも美しかった。

「……分かった。」

ストライクフリーダムから、そう声が聞こえる。

その声を聞き、束達は驚愕した。

束が急いで空を飛び、ストライクフリーダムの元に降り立つ。

「リリィちゃんっ！！」

「……良く分かったよ……。　お前の馬鹿さ加減にっ！！」

ストライクフリーダムから聞こえる声が、周辺に響き渡った。

「「「「「「「「「「「「「「「え？」」」」」」」」」」」」」」」

全員がその言葉に唖然とする。

もちろんフェニックスも、唖然としていた。

「……本当に未来の私なの……？」

そう呟きながら、ストライクフリーダムはフェニックスから目をそらす。

「やれやれ。」と言った風に、肩は少しだけ上がる。

「な、に……、を……。」

フェニックスはストライクフリーダムが何を言っているか分からなかった。

「……私は災厄……。　何年、何十年、何百年、何千年生きる事ができる負の存在……。」

「だからっ！！」

「だからっ！　……だから、長い年月をかけても良い。　何千年かかろうとも良い。」

フェニックスの言葉を遮り、ストライクフリーダムは言葉を言う。

「……束と共にいる為に、長い時間をかけて方法を探すんでしょ……。」

そう言うと、唖然としたかの様にフェニックスは動かない。

「……災厄が人とは違い、朽ちる事が無い……。　理解できない奇跡を起こす……。　だから、そんな自分を消せば解決と言う早まった答えは……、全員が悲しむだけ……。」

ストライクフリーダムは束を見て、フェニックスに向き直る。

ゆっくりと片腕を上げ、その手に持つビームライフルを向けた。

「……私は諦めない。」

その言葉が力強く発せられる。

「……たとえ不可能だとしても、その運命を私は変える。」

ストライクフリーダムが翼を広げ、ドラグーンが飛び立った。

２５９　運命を認めない天使（後書き）

……あれ？

終わらなかった……。

なんでだろ？？

と言うか、宣言して失敗していつものパターンじゃん……。

……まぁ、いっか。

次こそは……。

２６０　変化の始まり（前書き）

ノクターンやＩＳ作品を読み「……あ、球体浸食よりこっちの方がエロいかな？」と言う事で、急遽変えた。

流されやすいのよね……。

でもまぁ……。

エロければ良いよね、Ｐ３

260　変化の始まり

フェニックスはストライクフリーダムの言葉を聞き、震えた。

「戯言を……。」

フェニックスが束を助ける為に使った年月は、ほぼ半世紀。

ストライクフリーダムが言うように、長い時間をかけているのだ。

そして自分を殺すと言う答えを導き出した。

しかしそれを、ストライクフリーダムは否定したのだ。

「……ふざけるな……。」

フェニックスのドラグーンが、ストライクフリーダムに向かってビームを放つ。

「ふざけるなっ！！」

ビームは真っ直ぐ、ストライクフリーダムに向かって飛んでいった。

だが、当たり前のようにビームシールドで防がれる。

「私が味わった苦痛は、どの私でも耐えきれるものじゃないっ！！」

再度ドラグーンがビームを放つ。

「誰も耐えきれず、運命を変えることさえできなかったっ！！」

ビームシールドを展開している手が保持しているビームライフルを撃ち抜かれ、一瞬だけ体勢を崩す。

そこを練らって、フェニックスのドラグーンはビームを放つ。

「それを、お前は否定するのかっ！！」

ビームがストライクフリーダムに近づく。

しかしそばにいた束が、ビームフィールドを展開しストライクフリーダムの前に立つ。

ドラグーンのビームはフィールドに当たり、弾かれる。

「……ならば、強引にでもここでお前を殺す。」

フェニックスがそう言い、全砲門が開く。

レールガンが四門展開され、バラエーナプラズマビーム砲が翼から回転し前に出る。

ドラグーンが飛び回り、フェニックスの周囲に集まる。

ビームライフルを構え、腹部のカリドゥスが光を集めた。

「……っ！？」

しかし、砲門から光線が放たれる事は無かった。

攻撃しない事に唖然とする中、ストライクフリーダムを見ている者はフェニックスと同じ事を考えていただろう。

束もストライクフリーダムを見て、驚愕としていた。

白い装甲を覆うように、黒い霧状の物がストライクフリーダムから溢れていたのだから。

ＶＴシステムの再現かと思うほどの、黒い霧。

全てを塗りつぶす色が、白い装甲を飲み込み青い翼を浸食した。

「……なら……。」

その霧がストライクフリーダムを完全に飲み込み、一種の球体を作る。

中の状況は見れない。

「……運命すら否定するよ……。」

黒い球体からリリィの声が響く。

それと同時に、黒い球体から黒く細長い物が伸びる。

まるで触手みたいな細さと長さ。

先端は至って普通の円柱で、それが大量に球体から伸びる。

「……リリィ……ちゃ、ん？」

束が唖然とし、リリィの名を呼ぶ。

その言葉に反応したのか、触手が止まり束の方に先端を向ける。

そしてゆっくりと束に近づき、腕や足に絡み始めた。

「……なに……を……。」

フェニックスが唖然としながら、その光景を眺める。

束の身体に触手が這い、腰に何重にも触手が巻かれるた。

束は触手に完全に固定され、ゆっくりとその身体を持ち上げられる。

「う～ん……。　一体何が始まるのか、な……？」

未だに唖然としているが、束は少しばかりおどけて見せる。

「……はっ！　もしかしてこの場でそう言うプレイっ！？」

確かに足を固定した触手は、付け根まで回されている。

確実に固定するためであって、腕も同じだ。

しかし束が軽口を言えることから、きつく固定されているのではないのだろう。

触手が球体に回収され、束の身体が球体に近づいて行く。

未だ、唖然としてフェニックスはその光景を見続ける。

そして束の身体が球体に飲み込まれるまで、誰も動けないでいた。

「……大丈夫？」

球体からリリィの声が響く。

「う～ん、大丈夫かな？　……うん、大丈夫～♪」

更に束の声も響いた。

それに答えるかのように、黒い球体が色を変える。

黒から紫へ。

紫から青へ。

青から白へ。

「「……さて、まずは目の前にいる馬鹿を倒そうか……。」」

その言葉がこの戦闘を終わらせる始まりだった。

２６０　変化の始まり（後書き）

おいおい……。

触手プレイとか、災厄はどれだけ自由なのよ……。

おっと。

これでノクターンのネタに一つ追加されたっと。

外部で触手プレイより、内部で触手プレイが好みの作者です。

※意味が分からなくっても、良い子はお父さんやお母さんに聞いちゃだめだよ？

※大きくなってから知ろうね？

２６１　束はリリィでリリィは束（前書き）

今回は束が取り込まれた、数秒間のお話です。

まぁ、一種の変革と言うか、何と言うか……。

気にしないで行きましょうかね……Ｐ３

２６１　束はリリィでリリィは束

黒い球体から伸びる触手に束は絡みつかれ、引きずり込まれる。

その時、束は恐怖にも似た気分を味わった。

別に今まで考えなかった訳が無い。

だがリリィの姿や存在が触手を出すと言う事が、一瞬の恐怖を心の底から感じでいた。

もしかしたら、未来のリリィが言った死亡宣告がこの事かもしれない。

だからこそ、飲み込まれた瞬間に恐怖で目を瞑ってしまった。

世界にＩＳと言う存在を作り出した天才が。

何時もおどけて、あまり恐怖を感じない科学者が。

死を思った瞬間、それをといた。

（……あれ……？）

しかし、痛みも感触も変わらない。

むしろリリィと肌を重ねているように、気持ちが良いと束は感じてしまう。

それが死と言うのなら、人間の死はどれだけ心地が良いのだろうか。

触手の感触が変化する。

絡みつくような状況から、束の身体を包むように変わっていった。

束は目を閉じているせいか、感触だけで実際は良く分からない。

だが、確実に変わっていった。

（……目を開けて……。）

（っ！？）

束の心にリリィの声が響く。

何故響くのか理解ができない。

気のせいか、それとも束自身が作り出したリリィの幻聴なのか。

だが、その考えは目を開ける事で否定された。

≪コード　０１１０１０００００１０１０１１０１０００１１１１００１１００１０≫

≪最終チェック　搭乗者確認≫

≪フリーダム　確認≫

≪内部　篠ノ之束　確認≫

≪意識レベル　オールグリーン≫

≪機体状況　オールグリーン≫

黒い空間に、その文字が浮かび上がる。

そのモニターの光りが、束の身体を照らしてくれた。

服が無く、裸の上に触手であった物が纏わりついている。

「……大丈夫？」

束が自分の身体を見ていると、リリィの声が聞こえた。

≪システム　オールクリア≫

≪再構成まで　あと十四秒≫

モニターとリリィの声で、束は状況の全てを理解した。

だからこそ、笑えた。

モニターに目を通し、確認すると口を開く。

「う～ん、大丈夫かな？　……うん、大丈夫～♪」

黒い空間が紫色に変わる。

腕にまとわりついていた触手が、完全な別の形を成す。

束にとって見慣れた形。

紫色の空間が青い色に変わっていく。

すると、さらに触手が纏わりつき、胸や腰にまとわりつき変化する。

（……大丈夫。）

形を成し、装甲の色が触手の黒から白やダークブルーに変わっていく。

更に触手が背中にまとわりつき、形を変える。

むしろ、ＩＳの様に瞬間的に背中に形を作った。

それは翼。

青い空間が、全てを洗い流すかのような白い色に変わった。

（……分かる……。）

束はそう思い、目を瞑る。

その瞬間、顔に触手が這い包み込んで変化した。

黒い色が落ち、白い装甲に頭部が変わる。

既にその空間には束の姿は無く、天使が立っていた。

（……行くよ、束。）

（……うん。）

頭に響くリリィの声が、心地よかった。

その心地よさに身を任せ、束の目は自然と開かれる。

髪の毛に似た瞳の色は、青に変わっていた。

「「……さて、まずは目の前にいる馬鹿を倒そうか……。」」

リリィの思いが、束に流れ込んでくる。

束の思いも、リリィへと流れ込む。

一心同体。

今の束とリリィに言える言葉だろう。

フリーダムのサードシフト。

それは機体強化でありながら、従来のＩＳとは違うシフト変化。

リリィと言うフリーダムに、束を取り込むことで完成する唯一の進化。

それは束がフリーダムを纏うと言う意味ではなく、完全な一体化。

文字通り、束の身体がフリーダムを纏いその身を変化させ、人間と

言うカテゴリーから離れる。

身体の神経や心臓、脳や血管がフリーダムと言う災厄に浸食され変えられていく。

人から上位種への変化。

災厄に最も近い人間に、束の身体は変えられていく。

フリーダムはリリィであり、束でもある。

同時に束はフリーダムでもあり、リリィでもあった。

２６１　束はリリィでリリィは束（後書き）

あ～、ヤッチャッタ……。

ついに、束が人外への領域に到達しちゃったよ……。

でもまぁ、災厄に近い人ってだけだし……、別にそれほど変わら…
…ら無くないか……。

身体が変化しちゃってるし……。

束も既に災厄じゃない？？

まぁ、そんなわけで今回は束の変化と、フリーダムのサードシフト
とでした。

サードシフトで機体が変わると言うのも、新しい機体を考えるのが
めんどくさ……じゃなくって、どう変化させれば良かったのか分か
らないため、性能強化だけにしておきました。

まぁ、性能強化どころの問題じゃなくなってるんですけどねｗｗｗ

次話辺りで♪

２６２　変わり始めた運命（前書き）

サブタイ通りｗ

フェニックスには理解ができない状況が起こります。

と言うか、チートだな……Ｐ３

あと少しで、お気に入り登録が８００件突破しそうです……。

２６２　変わり始めた運命

球体がガラスのように割れ、ストライクフリーダムは再度戦場に現れた。

フェニックスは驚きながらも、その姿を見入る。

「……なん、だ……。」

初めて見るのだろうか、明らかに動揺している。

「「……私は運命を認めない……。」」

束の姿がしないのに、束の声が響く事にフェニックスを始めとする全員が唖然とする。

フェニックスは動かないが、束を探しているのがリリィと束にはよく理解出来た。

（……凄い……。）

束は初めて知る感覚に驚いていた。

フリーダムになって初めて知る事。

それが数多くあり、束は目を見開いていた。

フリーダムは腕をビームサーベルをマウントしている腰に回す。

束の感情とリリィの感情が混ざり合い、その手はゆっくりとビームサーベルを引き抜いた。

「なに、それ……。」

フェニックスは唖然としながらストライクフリーダムを見つめる。

ビームサーベルが引き抜かれた事に、何も感じないのか無防備な姿を晒していた。

そしてようやく気が付いたのか、ピクリとその姿を動かす。

「……本当に……、……変えたと言うの……。」

フェニックスの驚愕する声が響いた。

（行くよ。）

（りょうか～い♪）

そんなフェニックスをよそに、リリィと束は話しあう。

思いは通じあっているため、話しあうという言葉は適切ではない。

いわば意思の確認。

ストライクフリーダムの足が曲がる。

フェニックスは唖然としながらその姿を眺め、そして一気に両足と片翼をもぎ取られた。

「っ！？」

ストライクフリーダムが移動したのが誰も理解できなかった。

移動の軌道が見えない。

地面から瞬間的にフェニックスの元に現れ、ビームサーベルを振り斬りさいて行く。

残った翼で姿勢制御を保つも、足が排除されたせいでスラスターが無く浮遊が困難になっていた。

むしろ浮く事が出来ない。

そのせいでフェニックスは地面に落ちて行く。

再生よりも早く、地面に落ちて行く。

「くっ！」

落下していくフェニックスはバラエーナプラズマビーム砲を放つが、ビームはストライクフリーダムに当たる直前に見えない壁にぶつかり弾かれる。

レイジングハートのエネルギーフィールド。

サードシフトの変化は、フリーダムにレイジングハートまでも取り込んだ結果を生み出したらしい。

「「……一つの結果に縛られ過ぎだよ。」」

リリィの声と束の声か被る。

フェニックスの手足が回復していく中、ストライクフリーダムはシフトを変えフェニックスになった。

ビームライフルは持ち手が左右に曲がり、並行連結させた状態で両手に握られている。

唯一フェニックスに搭載されているマルチフォームと呼ばれる連結機構。

並行連結したビームライフルは直列連結された一点突破の大火力ではなく、高範囲への高出力拡散ビーム砲へと変わる。

（ターゲットロック。　誤差０．７６？……。）

（誤差修正完了～☆）

だだし、今回のシフトチェンジで新たな機構が備わった。

銃口にビームが収束する。

「「カードリッジ、フルリロードッ！！」」

カードリッジシステムと、ビームの収束機能。

完全にレイジングハートの機能を取りこんでいた。

フェニックスは完全に回復したものの、今だ状況が飲み込めない。

理解ができない。

意味が分からない。

現状を認識する事ができなかった。

「「その殺す事にとらわれた思考から解放してあげる……。」」

ビームライフル底部から、レイジングハートと同様のカードリッジが吐き出される。

束が持っていた物を使用しているのだろう。

合計十二発の弾薬が吐き出され、ビームライフルの銃口に巨大な桜色の星を作り出す。

リリィと束の思いがすれ違った時のように、その場の状況が再現される。

ただし今回はフリーダムに対して星をぶつけるのは、同じフリーダムと言う事だ。

（ごめんね……。）

束が心の中で謝り、フェニックスを見る。

未だ何も行動出来ないフェニックスに対し、リリィと束は容赦なく引き金に指をかけた。

「「スターライト・ブレイカァァッ！！」」

２６２　変わり始めた運命（後書き）

最初は「ツインバスターライフル」的に「ツインスターライトブレイカー」と考えてたｗ

移動も、００みたく量子化とか考えていたけど、今じゃただの縮地以上の高速起動だし……。

基本的にフリーダムのスペックに、レイジングハートを合わせただけですね。

だから、アクセルシューターなどが撃てたり、ブラスターモードみたくドラグーンからもスターライトブレイカー撃てたり……。

今回はしなかったけど……。

基本性能はストライクフリーダム＋レイジングハート＋未定（大笑）

どうしよっかな……。

２６３　運命に抗った者の終わり（前書き）

サブタイの方が難産と言う罠……。

何と言う事だ……。

さて、Ｐ３

一応最後に、リリィのイラストを乗せました。

読者様が思っているリリィ像を壊す可能性があります。

もしそれが嫌でしたら、今のうちに押絵表示を切っておく事をお勧めします……。

……アレ？

あとがきのって、押絵表示で消えたっけ？

２６３　運命に抗った者の終わり

フェニックスは目の前の状況を、ただ見るしかできなかった。

初めて見る光景。

自身と同じ機体が搭載した覚えのないシステムを使用し、大きな桜色の星をビームライフルの前で作り出す。

愛する人の愛機レイジングハート。

その必殺と言っても良いほどの技。

天使がそれを作り、同じ天使に向ける。

（……知らない未来……。）

並行連結したビームライフルが、レイジングハートのカードリッジシステムを搭載しているのか、底部から薬莢を吐き出す。

その数十二。

薬莢がレイジングハートと同じだとしたら、膨大なエネルギーが星を作っている事になる。

ＩＳ四十八機分の起動エネルギー。

それは簡単に地表を穿ち、地形を変えるほどのエネルギーである。

「「スターライト・ブレイカァァッ！！」」

トリガーが引かれ、星がフェニックスに向けて放たれた。

それを防御せずに、フェニックスは受け止める。

身体が吹き飛びながらも再生し、星に身体を焼かれた。

（……辿り着いたんだ……。）

そう思い、未来のリリィは目を閉じた。

リリィと束は星が消え去るのを、上空で眺めていた。

（……大丈夫かな……。）

リリィが不安そうに飲み込まれた未来の自分を心配する。

もしかしたら自分も未来で、今自身が撃った物を受け止めるかもしれない。

そう思うと、心が急に冷える。

（でも、ああやって頭を冷やさないと、……リリィちゃん、ずーっと暴走しっぱなしだよね？）

束はリリィの思いが流れ込み、少しだけ苦笑しながらそうリリィに言った。

その言葉に、リリィは少し前の臨海学校で起きた事を思い出す。

あの時も束がリリィに向かって、スターライトブレイカーを放ち心を繋ぎ止めてくれた。

（……道を踏み外したら、元に戻すのは私の役目だよ～☆）

その声がリリィにとって、頼もしく聞こえた。

（そう言えばあの触手って、色々便利だよね♪）

（っ！？）

束がそう言うと、リリィに束の思いが流れ込んでくる。

（……今度、ヤッてくれる？）

束の顔は見れないが、束の声と思いが恥ずかしそうにリリィに伝わった。

リリィは少しばかり混乱しながら、少ない知識で「（そう言うのも良いかな。）」と思ってしまう。

問題は今現在、リリィの思考は束と共有していると言う事だ。

だからこそ、その思いは束に筒抜け。

（なら、帰ってたらヤろうか～♪）

束が卑猥な思考をし、リリィを混乱に陥れた。

そんな二人は、スターライトブレイカーの着弾地点が晴れて行く事に気が付き、考える事を止める。

そこは地面が抉れ研究所を飲まなかったが、広範囲にわたってクレーターができていた。

「「……。」」

そしてその中央。

スターライトブレイカーのターゲット、未来のリリィは直撃を受け立っていた。

災厄が時を戻したのか、やはり無傷でフェニックスが立っている。

「……。」

フェニックスは何を言わずに、背を向ける。

「……辿り着いた未来……。」

フェニックスから言葉が放たれる。

リリィと束は目を閉じ、未来のリリィの声を聞く。

「……間違わずに選択して行ける……、私……。」

リリィと束はゆっくりと地表に降り、機体展開を止める。

一瞬の発行で、ストライクフリーダム・フェニックスはリリィと束の姿に分かれた。

フェニックスの言葉に、リリィは閉じていた目を開き微笑んだ。

「間違うんじゃなくって、どれだけ束を幸せにできるか、じゃないの……。」

その言葉にフェニックスは苦笑した。

自分を殺す事を止めたのか、ビームライフルやビームサーベルは手には持っていない。

首だけを動かし、リリィと束を横目で見る。

「……生き残ってよ……束……リリィ……。」

フェニックスは足の方から量子となって行く。

おそらく元の時間軸に戻るのだろう。

機体が量子になり、風に流され消えて行く。

束は少しだけ悲しそうな顔をしてフェニックスを眺めた。

リリィに至っては、再度目を閉じている。

胸元まで量子になり、消えて行く。

「……ありがとう……。」

その言葉を最後に、フェニックスは完全に消えて行った。

２６３　運命に抗った者の終わり（後書き）

……え？

変態プレイ、だ……と。

まさか、本当にノクターンで……。

やれそうだね……。

……なんか間違った気が……。

……ｏｒｚ

リリィのイラスト二回目です。

ここに乗せた覚えが無かったので、ね……。

ちなみに、デュララのＥＤを思った人は、それがあながち間違ってなかったり……。

だって、昨日一気見したしね……。

＞ｉ２９６６０―３０４５＜

２６４　事の終末と帰る場所（前書き）

まぁ、オリジナルのお話の終わりですね。

次話から5巻に入る予定です。

ちなみに、サブタイトルは（半分以上）関係ありませんよＰ３

２６４　事の終末と帰る場所

消えて行ったフェニックスの粒子を見て、リリィはため息をついた。

（……聞きだしたヒント……ね。）

粒子は、未来のリリィがここに来た原因を示している。

フェニックスの瞬間圧倒的火力が、先の戦闘で出なかった理由。

おそらく時間軸を超える為に、一定のエネルギーを放出していたのろう。

最後の最後にスターライトブレイカーで、そのエネルギー放出機関に異常を出して、留まれなくなったのだろう。

未来のリリィが最後に、今のリリィに託した物。

それを消えるまでリリィと束は、何も喋らずに粒子を見つめ続けていた。

千冬達がリリィに近づいてくる。

ＩＭＳの展開はやめスーツや制服、軍服から量子変換されていたＩＳスーツを着た為か、ＩＳを解除したクラリッサは軍服だ。

その時には風に乗り、粒子は消えていた。

「……帰ろうか。」

束の声が響く。

その声にリリィは微笑み、空を見上げる。

「そうだね……。」

そう呟き、目を閉じる。

自然と涙が出たため、それを隠すために上を向いたのだ。

もし、未来にいるリリィに自分自身がなると思ったら、束の死を直面すると言う事。

そう覚悟すると、やはり胸が締め付けられ、同時に涙がこぼれる。

それを抑え込むのにかなり時間をかけ、リリィは目を開く。

青い空がリリィの目に映り、心を落ち着かせる。

「……よし、帰ろうか……。」

ラウラを手招きしながら、リリィはそう言った。

「ラウラ、クラリッサからこの場所を聞いたね……。」

そう言うと、ラウラが不思議そうな表情をする。

ラウラがリリィの考えをが分かれば、意味が分かったのだろう。

「無駄に戦力を投入するな～。」

リリィはラウラの頭を掴み、米神に拳を押し付け回し続ける。

「っ～！？」

痛がっているのか、ラウラは目を瞑って耐えていた。

実際報告したのはクラリッサなのだが、部下の失態は上官がする。

結果としてクラリッサに当たるではなく、ラウラに当たった。

「あ、クラリッサも同じことするから。」

いや、クラリッサも被害を食らうようだ。

ラウラの米神に拳をめり込ませながら、リリィはクラリッサにそう言い放った。

ドイツから離れるヘリが、上空を飛んでいた。

ヘリの中には操縦士と、リリィに指を噛みちぎられた過激派に属した男の姿だけしか無い。

過激派の男は、忌々しそうな表情で書類を睨みつけていた。

「くそっ！！」

敗残者が逃げる場所は無いと言うのに、ヘリはドイツから離れようと飛んでいる。

亡国企業に連絡しようにも、連絡手段が無い。

逃げたとしても、助けてくれる場所は有るのだろうか。

そんな事にも気が付かずに、男は逃げ続けた。

≪そこのヘリ、その場で停滞しなさいっ！！≫

その声が響いた瞬間、ヘリの前方にＩＳの姿が二機存在していた。

ラファール・リヴァイブ。

二機の両手にはサブマシンガンが握られており、ヘリに照準が向けられてる。

過激派の男は、ラファール・リヴァイヴのカラーを見て顔を青ざめた。

通常の量産色であるネイビーカラーではなく、天使を思い出す白い四肢と青い四枚の多方向加速推進翼。

国際ＩＳ委員会直属部隊、エンジェルズ。
各国の代表候補が望めばなれる部隊。
それゆえにＩＳの操縦に慣れている者が多い。
基本的に専用機の所持は認めていないが、量産型のＩＳをカスタムする事ができる。
おそらく現在のっている機体も、何らかの改造がされているのだろう。
「ど、どうしますか！」
ヘリの操縦者は、男を見て慌てた。
「ど、どうするもないだろっ！！　逃げるのだよっ！！」
もちろんＩＳにとって、男の声は遠くからも聞こえていた。
片方のラファール・リヴァイブがライフルを消し、掌にモニターを出しヘリに向ける。
≪貴方方には、国際法違反と横領の確認が取れています！≫
≪よって、この場で逮捕されると言う訳だ。　逃げられんと思うなよ？≫
そう言うと、二機はゆっくりとヘリに近づいた。

２６４　事の終末と帰る場所（後書き）

と言う訳で、何故か直属部隊。

一応警察の上位版。

権限としては、国家を跨いでの作戦や容疑者の確保ができることぐらい。

カスタムしたとしても、機体色は白と青オンリーｗ

大丈夫なのか、それ……。

と言う事で、もしかしたら5巻が始まる間も知れません。

違ったら、束と千冬が疲れで寝てリリィが全授業の代行するかも……。

それでもなかったら、一種のキンクリで5巻が開始ですね。

え？

最初と最後が同じ？

気にしないでｗｗｗｗ

さて、ここからがあとがきｗ

この話でオリシナリオがようやく終わりました。

色々腑に落ちない点がると思いますが、これでおしまいです。

未来のリリィに至っては、まだ出番はあります。

……ここではないけど……。

ま、まぁ、これからもオリシナリオは入ってくると思うのですが、一応の終わりですね。

オリジナルだけで、５０話以上。

一応、私が書く５０話と言うのがお分かりだと思うのですが、単行本１冊程度の感覚ですね。

ＩＳ１巻が５０話ほどで終わっていますしね。

２巻も５０話ほどでしたっけ？

３巻は無駄話で、５０話を埋めた気がします。

真面目に単行本を書く気でいけば、もっと長くなったのでしょうねｗｗｗ

やる気はないですけど。

それにしても、新規キャラクター「ローズ」の影が薄い。

最後にしてみたら、ローズの影さえ無い。

と思ったが最後、今後真面目に登場しますよ。

一応彼女の年齢……。

というか、今までローズの性別を暴露しましたっけ？

してないよね？

いや、したね。

うん、した。

一応彼女は災厄ですが、肉体年齢はリリィより下ですから１８歳以下。

作者脳内は、４月３日生まれの１６歳設定。

つまり、ＩＳ学園生徒として登場します。

キャラが増えたせいで、鈴並みに薄くなるキャラで無いと良いな。

……というか、鈴の登場回数を増やしたい。

感想で、シナリオとか妄想とか吐き出してくれる方募集ｗ

はっきり言えば、区切りですし「感想が欲しいな～」って奴ですね。

「前回のリリィの絵でイメージ崩れなかった、むしろおっけー！」

だったら、作者は夜眠る事ができずに構図書き続けて、新しくリリィ&束&千冬&ローズ&リリィ（未来）みたいな構図を作っちゃうかもしれませんｗ

むしろ、「デュララララのＥＤパロでも作るかっ！」的なテンションになりかねません。

千冬姉の一般同人ギャグ本を買って読んだら、ね……、若干千冬にｈｓｈｓしてるんだよｗ

ちなみにｆｅｍｉｎｉｓｍとｉｎ　ｔｈｅ　ｎａｍｅ　ｏｆ　ｊｕｓｔｉｃｅの事だよｗ

あとは、初恋予報というＰＣゲームを消化しようとプレイしていたら、バグが酷かった……。

さてさて、では……長くなりましたがここらで……。

また明日～。

本作品は「ＩＳ」作品と「フリーダム」登場作品、それに「束ヒロイン」作品を応援しています。

２６５　一夏達の授業（前書き）

……グダグダになった……。

けど、ようやく学園に戻ってこれたと言う事は５巻。

Ｐ３

２６５　一夏達の授業

篠ノ之リリィ博士救出作戦当日。

ＩＳ学園最終授業時間、開始前。

「……なぁ箒。」

一夏の声が、炎天下のグラウンドに響いた。

そばには箒だけではなく、セシリアや鈴の姿まである。

箒が暑そうにＩＳスーツを肌から離し、肌とスーツの間に風を送った。

スーツが伸び、伸ばしたスーツの下にある肌が晒される。

女性のＩＳスーツは一夏の上下分かれている物とは違い、スクール水着の様な感じで作られていた。

そのためスーツを伸ばす場所は限られ、見てしまおうとすれば一気に下の肌が丸見えにらるそうだ。

そんな時に一夏は箒に振り返りながら声をかけたのだ。

身長が高い一夏は、当たり前のようにスーツの下に隠されていた肌。

はっきり言ってしまえば女性の象徴、上胸を見てしまったのだ。

瞬間的に一夏は赤くなる。

胸の全体を見たと言う訳でもないのに、赤くなる一夏に箒は少し赤くなりながら呆れた。

セシリアと鈴に至っては、今にも人を呪い殺しそうなほど一夏を見ている。

「……で、なんだ。」

そんな中、顔が少し赤くなりながらも、箒は一夏の言葉に返答した。

「あ……、次の授業……、誰が来るの……かな、って……？」

その言葉で、鈴も一夏が何を言いたいのか理解できた。

「……そう言えば、何時も千冬さんだったわね。」

その千冬は、朝見ただけで行方知れず。

一夏は何が起きているのかと思いつつも、もし来なかった場合の先生の事を考えていた。

「……ということだから、多世界解釈は量子力学の観測問題。　ち～ちゃんには難しいんじゃないかな？」

一夏達が噂をしている頃、担当の先生はクラリッサが操縦する軍用ヘリで移動していた。

後ろでは、今回の事件について束が説明している。

題材としては、「なぜリリィが二人もいたのか。」と言う事だ。

「まぁ、シュレティンガーの猫って言った方が分かりやすいかもね～♪」

知っている人は知っているだろう。

エヴァレットの多世界解釈。

コペンハーゲン解釈。

シュレティンガーの猫。

誰もが一度は聞いた事がある単語だろう。

詳しい事は省くが今回の事件では、「束が生存し過去にリリィが来る事が無い世界」と「束が死亡し過去にリリィが来る事が有る世界」がある。

そのどちらも相対状態であり、観測者のリリィは後者の方を観測し

たと言う事だ。

「……難しい事は考えない方が良いよ～☆」

束はそう言って話と共に思考を切る。

未だリリィに拳を押し付けられた米神が痛かった。

ＩＳ学園に授業開始の合図が響き渡った。

しかし、一夏達の前に先生が現れる事がない。

セシリアだけが事を予想出来ていた為、セシリアが何とか全員を纏めていた。

「「「「「「「「「「っ！？」」」」」」」」」」

そんな時、アリーナのシールドバリアがガラスの様に砕かれる。

全員驚愕し、上を見ると黒い機体が降りてきた。

一夏達はそれを見て、瞬時にＩＳを起動させる。

その目は親の敵を見つけた様に、降りてくる機体を睨んでいた。

プロヴィネンス。

リリィを死の淵に追いやった機体が、一夏達の目の前に降り立った。

セシリアがすぐさま生徒を批難させ、一夏と箒が剣を構えてプロヴィネンスの前に立ちはだかる。

鈴も甲龍の衝撃砲を起動させ、狙いを定めた。

プロヴィネンスは何もせず、ただそこに立っている。

生徒が避難し終わりセシリアが戦列に加わったのを見て、プロヴィネンスはシールドからビームサーベルを展開した。

265　一夏達の授業（後書き）

9月3日に2学期最初の実戦訓練。

夏休み少し短い気がする。

けど、まぁいいや。

そう思いつつも、最後の方で授業。

ローズがアリーナのバリアを破壊し入るなど、やりたい放題。

一応、5巻の数分前設定。

結局、gdgdになった結果がこれですか……。

P2に変えた方が良いかな～。

gdgdになった話は、文字数でカバーｗ

ってねｗ

２６６　新しい災厄な転入生（前書き）

さて、５巻突入させましょう。

一応５巻の当たり何だろうけどね……。

Ｐ３

２６６　新しい災厄な転入生

プロヴィネンスはセシリアのブルー・ティアーズに対し、ドラグーンを使用。

大型一機だけでも厄介なドラグーンが全基放たれ、ブルー・ティアーズを迎撃した。

鈴に至っては特殊兵装が無い為、後方支援をするぐらいしかない。

「くっ！」

一夏は毒つきながらも、雪片を懸命に振るう。

しかし、そのどれもがプロヴィネンスの複合シールドに阻まれた。

雪片がシールドと拮抗し、周囲に甲高い音が響く。

その音が紅椿のスラスター音を消し、プロヴィネンスに接近を許した。

後方から空裂を構え、脚部スラスターで滑るようにプロヴィネンスの背後に回る。

「はぁっ！！」

しかし、振り上げる際に気合を入れる為声を上げたのがいけなかったのか、拮抗したいた雪片を受け流し、プロヴィネンスは箒に一夏をぶつけた。

セシリアはそれを見た瞬間、己の頭脳で流手で数え切れないほどの作戦を考えた。

だが良い手が無く歯噛みする。

そんな中、プロヴィネンスはドラグーンを始めとする攻撃オプションの展開を閉じた。

「はい、おつかれさま～。」

一夏達は混乱しながらプロヴィネンスを見て、声がした方を向く。

「いや～、ちょっと用事があって遅れちゃった。」

そこには髪を風になびかせながら、千冬とは別のスーツを着たリリィがいた。

一夏達がが唖然としながら、飄々と批難させた生徒を連れてアリーナに入る。

「ちょっ、リリィさんっ！？」

プロヴィネンスを気にしない事に、セシリアが声を上げた。

一夏も思っていたのか、プロヴィネンスを指差しリリィを見ている。

それらを無視し、リリィはプロヴィネンスの横に立つ。

「時間稼ぎありがとう。」

「……別に……。」

そのやり取りを見て、一夏達は唖然とした。

それもそうだ。

プロヴィネンスと言うえば、一夏達にとって宿敵と言える機体なのだ。

その機体とリリィは仲がよさそうに話した。

唖然としても仕方が無いだろう。

「それでも、十八分の合間は大きいよ？」

「……私が相手したのは、数分だけ……。」

「それでも十分なんだけどね～。」

そう言いながら、リリィは手を叩く。

整列と言う意味だ。

全員唖然としながら専用機持ちを残し整列する。

そんな一夏達を見て、リリィは早く並ぶように言う。

納得いかないのか、微妙な顔をして一夏達は並んだ。

「さて、この機体は一体なんでしょ～。」

リリィはそう言うと、全員の顔を見る。

一夏は敵と言い、別の生徒は発明品と言う。

一分ほど聞き、リリィは口を開いた。

「ふふふ、正解は……。」

某クイズ番組のように、間を置く喋り方をする。

一夏達の顔が真剣になっていく。

ここで「敵でした。」と言われた場合、被害が計り知れない。

しかし、リリィとの会話から、敵ではないと少しは思えていた。

「転校生ですね、はい。」

緊張し張りつめた空気を、入ってきた真耶が打ち壊す。

「「「「「「「え？」」」」」」」

「真耶……。」

少し恨めしそうに、真耶を見つめるリリィ。

その前にいつ入ってきたのか謎である。

真耶はプロヴィネンスを見て、少し顔を暗くさせたがすぐに戻った。
もちろん真耶もリリィの事を知っているため、プロヴィネンスの事を知っている。
エンジェルダウン作戦時も、本部オペレーターや補給船などを動かしてもいた。
知らないと言う事はないのだ。
「……転、入生……？」
鈴が唖然としながら、口に出す。
プロヴィネンスが展開を止め、ローズの姿に戻る。
リリィと似た容姿、髪の色瞳の色までリリィと同じだ。
その姿に全員さらに唖然とし、驚愕する。
「さて、真耶がばらしたけど紹介しようか。」
そうリリィが言うと、ローズは軽く会釈をした。
「……はじめまして、ローズと言います。」

２６６　新しい災厄な転入生（後書き）

私の中でリリィと言うキャラが、分裂し始めました。

色々な作品に飛びすぎ……ｏｒｚ

……そろそろ、新しいオリキャラ作って別の作品を……。

７，８作品目以降……。

２６７　二学期の転入生（前書き）

全話でも転入生絵きな状況でしたが、サブタイで再度転入生。

寝不足が祟っている気がする……。

目が痛い……。

前にも同じ事言ったね……Ｐ３

２６７　二学期の転入生

ロースが転入してきた翌日。

ラウラにシャルロットは寝不足で遅れての登校になった。

束と変な事を約束していたが、帰ってきたとき疲れていた為、束はベットに倒れ込んですぐに寝たのだ。

千冬も同じようで寝不足もたたってか、死んだように眠り続けていた。

おそらく今日は起きないだろう。

そのため、朝の教室には先生はリリィと真耶しかいない。

時はホームルーム。

全員着席しているも、一部の生徒は妙な顔をしている。

「はいはい、昨日は紹介だけだったから、今日はちゃんと紹介してもらうよ～。」

リリィが妙にテンションが高く、そう言うと廊下からローズが現れる。

その姿はリリィが初めて教室に現れた時と似ていた。

洗って無いかのようなボサボサの髪は整えられ、シャンプーやトリ

ートメント、リンスなどの薬品を使ったのか、リリィと似た髪形をしている。

若干垂れた目はリリィとの違いと言う事か、スーツさえ着せてしまえばリリィと何の変わりもない姿がそこにいた。

たった一日で、どのような魔法を使ったのだろう。

ローズでありながらも、数段と輝いている。

「……ども。」

しかし本人はやる気ない声を出し、ローズはリリィの隣に立った。

目はどこか適当な場所に向いており、何がしたいのか全く読めない。

黙っていれば美女だが、口から放たれるやる気無さがそれを相殺していた。

「……席は……？」

「その前に自己紹介ぐらいしようね。」

さっさと座りたいのか、ローズは席を訪ねる。

もちろんリリィは教えず、再度自己紹介をするよう命じた。

「……昨日、したじゃん……。」

そのことにローズはふてくされながらも、適当に教室の中心を見た。

「……ローズ……。　ファミリーネームは無し……。　兄さんの、妹です……。」

昨日よりやる気のない自己紹介。

ローズには外見と内面が比例する何かでもあるのか、と思わず聞きたくなるほどの言葉だった。

当たり前のように口調に付いて気になるのだろうが、全員はローズの発言が気になっているようだ。

誰も騒がない。

むしろ予想していたかのような顔をしていた。

「リリィさんの妹？」

誰かがそう呟くと、ローズは首を縦に振り肯定。

外見が似過ぎている事から、有る程度予想はついていたのだろう。

「そそ、前世からの妹～♪」

リリィの言葉に全員、首を傾げる。

理由を知らない者にとっては、前世と言うリリィの言葉は意味が分からないだろう。

「んじゃぁ、席は一番後ろのどっちか使ってね。」

そう言って、昔リリィと束が使用していた机を指す。

ラウラとシャルロットは二人が使っていない席を使ったため、残った席がそこしかなかった。

ローズは席に近づき適当に座る、と思ったが立ち止まる。

「……こっちから、兄さんの匂い……。」

そう呟くと、ローズはリリィが使っていた机に座る。

クラスの全員が唖然とする中、ローズは何事も無かったのように座った。

「犬ですわね……。」

セシリアがローズの行動を見て、唖然としながら呟く。

もちろん席も近いし災厄と言う存在の為、その言葉はローズの耳に入る。

しかし、気にしなかったのか聞き流しローズはリリィの方を見た。

リリィも聞こえたのか苦笑し、クラスを見渡し出欠席を取る。

「さて、二期からＩＳの訓練は武器使用訓練に入るから、全員ゆとりを持って授業に出るように。」

そう言うと開けていた出席簿を閉じ、リリィと真耶は教室から出て

行った。

一期の動作訓練は終わり、武器使用などの訓練に入らないといけない時期。

そのためか、武器使用訓練と言う言葉にクラスが少しだけ浮いた。

もちろん千冬が言ったら、浮かなかっただろう。

割と緩いリリィだからこそ起こる現象だ。

２６７　二学期の転入生（後書き）

さて、今回は何も言わないでおいておこう。

ｗ

目がァァァ、目がァァァｌ！！

ちなみに、予約投稿８日前の事です。

うん。

４回投稿に変えたらどうかなと思ってしまった……。

「やっぱり小学生は最高だぜ！」

２６８　授業と追加兵装（前書き）

さて、授業ですね……。

千冬と束はおらず。

リリィと真耶だけ、Ｐ３

２６８　授業と追加兵装

午前中の真耶の座学は武器使用訓練のためか、打鉄の近接ブレードからラファール・リヴァイブの射撃武器などの説明が多かった。

一期にあった学年別トーナメントでも武器は使用で来ていた者はいる一方、出来ていない者もいる。

学年別トーナメントは、教員がその武器の使用状態や判断能力を見る物だったりもする。

そのため、全員ができてない場所から順に教えて行くのだ。

午前中の最後の授業からラウラとシャルロットは授業に参加し始めており、午後の授業にもちゃんといる。

「……そこ、ちゃんと脇締めて撃たないと……、照準がずれる……。」

「そう、そこ。　うん、そのまま腰を落として……。」

「少し修正すべきだな。　右に寄っているから、的も右に当たるぞ。」

「射撃角下２０。修正してくださいな。」

「えっとね。　そう、こんな感じ。」

今現在、武器使用訓練の真っただ中である。

やっている事は、専用機持ちを中心にグループを組み、武器を使用する。

一期にもあった事と同じ事をしていた。

ローズとシャルロット、ラウラと鈴のグループは順調に進んでいる。

その一方で一夏、箒、セシリアのグループは微妙に難航していた。

教えが悪いと言う訳ではない。

ただ、一夏に至っては、雪羅になる前は雪片・弐型しかなかったため、遠距離射撃武器は苦手に等しいのだ。

以前シャルロットにアサルトライフルを撃たせてもらったが、なんとなくでしか分かっておらず、教えるのは難しい。

箒も紅椿の性能に頼っているため、斬撃を飛ばす事は出来てもライフルの射撃は専門外。

更に擬音で説明する分、教えを請う者達も混乱する。

セシリアに至っては教える事が出来ていても、専門的な用語が多過ぎる為か、話しに追いつけてない。

持ち前の知略はどうしたのかと聞きたくなってしまう。

そんな中、リリィと真耶はゆったりとしながら評価をつけていた。

そして所行終了間際、全員を整列させる。

「はい、今日の授業終了。」

そう言うと、全員盛大に息を吐いた。

銃を撃った時の反動や硝煙など色々あったからだろう。

最初に銃を撃った時を思い出し、リリィは苦笑した。

既に束に会う前、つまり十年以上も前の話だ、

一瞬だけ思った歳より臭いという言葉を頭の片隅に置き、リリィは全員を見る。

着替える為に更衣室に移動する気もないのか、その場でへたり込む者が多い。

「……あ、そうだ。」

そんな中リリィは思い出したかのように鈴を見た。

「強化装備出来たよ～。」

「ホントっ！！」

前々から「甲龍を使いこなせるようになったら、強化兵装作ってよねっ！」と言う言葉通り、リリィは鈴の戦闘にあうように武器を作ったのだ。

既に十分使いこなせる様になったから、渡しも良いだろうと想いリィは甲龍の使い兵装を作っていた。

リリィの言葉に鈴は目を輝かせ、近づいてくる。

代表候補生の為、体力は有り余っているようだ。

全員着替える事を忘れ、リリィ達を見ていた。

「……試験兵器だけどね……。」

そう言うと、リリィの手が光る。

「……ブルー・ティアーズの様に特殊兵装じゃないけど、十分甲龍には使える装備だよ。」

そして手に握られていたのは、長細い銃だった。

全員あっけにとられ、銃を見ていた。

「PS装甲に永久機関詰んでる機体には、足止めくらいだけどね……。」

そう言い、リリィは銃を見せる。

「ダメじゃん。」

そう言いながら鈴は、リリィが持った銃を見つめる。

鈴は知らないだろうが、その銃の名称はマスケットと呼ばれている

のだ

しかし鈴が、その事を知る楊氏はない。

ただ分かる事は、天才篠ノ之リリィが作った武器と言う事だ。

普通では考えられない装備が積んでいるのだろう。

そう思い、鈴はライフルに触れた。

２６８　授業と追加兵装（後書き）

当初イラストあったけど、凄いカッコ悪い武器だった。

適当に細長い銃を思っていて下さい。

ちなみに、ネタ武器ですので甲龍には正式採用はしませんｗ

失敗したら「マミる」ｗｗｗ

２６９　マスケット（前書き）

ネタ話です。

分かる人には分かると思う、話。

本当に……Ｐ３

269　マスケット

「ちなみに、扱いに失敗したら何かよく分からない者に頭食べられちゃうからね。」

「そんな物騒な物、渡そうとするんじゃないわよっ！！」

リリィのふざけた言葉に、鈴は触れていた銃を手放す。

長い砲身の先が地面に向かって落ち、突きささらずに浮く。

鈴はその光景を唖然と見ていた。

何故銃が浮いているのだろう。

全員がそう思い、リリィの顔を見た。

「……あ？」

当の本人は、銃が浮く事が当たり前のような顔をして、全員を見返していた。

「……なんで浮いてるの……。」

仕方なく鈴が思った事を口に出した。

その言葉でようやく気が付いたのか、リリィは銃を手に取りローズに投げる。

「あの銃はね、特殊性能を持たせてるんだよ。」

ローズがリリィがやろうとしている事を理解したのか、銃を上空に放り投げて待ち直す。

いや、持ち直すと言う言葉は正確なのだろうか。

銃は上空で分裂し、ローズの周囲に落ちた。

もちろん手には、落ちてきた銃が握られている。

「えっ!?」

全員唖然としながら、ローズが右手で構えた銃を見た。

もう一度言うが、銃の名称はマスケットである。

一発しか弾は装填出来ない、古き名がある銃だ。

しかし、片手で持つ事は困難な銃でもある。

それをローズは構えたのだ。

次の瞬間、ローズに向かって何かが飛んで行った。

当たり前のように、持っていた銃で正面から来る物体を撃ち抜き、反動で跳ねあがる習性を利用し、後ろから来る敵を叩く。

もちろん半回転したため撃つ体勢が悪い、元に戻ろうと回転しながらローキックで銃を二つ宙に浮かし、それを両手でつかみ取る。

そして回転しながら近づいてくる物体を殴りとばして、さらに近付く物体を撃ち抜いた。

銃を上空に投げ捨て、新しい銃を取り出しながら近づいてくる物体を蹴り飛ばす。

両手に銃をもった時、さらに近づいてくる物体をその銃で殴り飛ばした。

そして両手を左右に伸ばし、近づいてきた物体を零距離で撃ち抜く。

弾が無くなった銃を物体に向かって蹴り飛ばし、最後の二つの銃を蹴って両手に持つ。

構えることなく、ローズは銃を手に取った瞬間に物体を撃ち抜いた。

「……あんな感じで使うんだよ。」

マスケットのハンマーが下り、弾が放たれた事は理解出来た。

しかし、たった数秒間でローズがとった行動は唖然とするしかない。

ちなみに、ローズに向かって言った物体がなんなのかも、理解できなかった。

「……無理ね……。」

鈴は全てを纏めて、その言葉を言った。

自分には使いこなす事が出来ない。

自分にはローズの行動を理解する事が出来ない。

自分には物体の正体を知る事が出来ない。

それらをひっくるめて、鈴は無理と言った。

銃の特殊性は少なからず理解出来たが、甲龍の専用武器にするには少しピーキー過ぎる。

そんな思いで銃を見た。

「……というか、なんでマスケット銃ですの？」

呆れ半分、唖然半分でセシリアが訪ねてきた。

「……マスケット……銃……？」

聞いたことない単語に、一夏が首を傾げた。

セシリアは一夏達に対しマスケット銃の説明をしながら、時間を見る。

既に授業は終了し、日は傾いていた。

生徒が寮に帰った後、リリィは職員室の机で書類と格闘していた。

自分自身の大量に放置された書類と、束と千冬が本来やるべきだった書類だ。

「……。」

それを必死に処理していく。

その姿は教職員の中で誰よりも若く、誰よりも年を食っている気がした。

すでに時間は就寝時間の数十分前。

千冬がダウンしている分、リリィが見回りをしなくてはいけなかった。

「……え、っと。　これと、これだね。」

そう呟き、書類を持って確認する。

すぐさま処理できるものは処理し、出来ない物は寮に持ちかえる為、ファイルに入れた。

269　マスケット（後書き）

分かるね、この撃ち方。

分かるね、マスケット銃の使い手。

某魔法少女だよ。

皆で叫べば分かるんじゃないかな？

マミさんって。

そこ、「マミった人か（笑）」言うなやｗ

２７０　一夏の不安（前書き）

最近眠いんだ……。

おかげで、溜めが消える一方で生産がおこなわれてない。

……まったく、意味が分からないよ……Ｐ３

270　一夏の不安

束は疲れのせいか、未だに死んだように眠っていた。

机で書類を処理していたリリィは、時計を見て部屋から出て行く。

時計の針は、短針が八に届かんとしていた。

「……昨日は妙に騒がしかったな……。」

そう呟きながら寮長である千冬の代わりに深夜、寮を徘徊していた事を思い出す。

ローズが来た事でざわついていたのか妙に空気が騒がしく、夜遅くまで廊下を歩いていた事を思い出した。

なお、ローズは束が寝てるベットの下に布団を引いて、今なお寝ている。

そろそろ起きるだろうが、時間が時間だ。

起こした方が良かったと、リリィは少しだけ後悔した。

「リリィさん～、おっはよ～！」

「ああ、はいはい。　おはよ。」

食堂に近づくにつれ、生徒も多くなっていく。

その大半が、食事を終え教室に向かう者だ。

「おはようございます、リリィ先生。」

「あ、おっはよ～、先生！」

「おっは～。」

なんだか返事するのも大変になってきたため、リリィは苦笑しながらあいさつした子の顔を見て行った。

食堂に入ると、やはりと言っても良い姿がいる事にため息をつく。

一夏達だった。

他にもいるが、一夏達が時間があるからかゆっくりと食べているのだ。

「リリィ先生っ！？」

「やばっ、もうそんな時間！？」

リリィの姿を見た生徒が何時も千冬が言っている事を思い出してか、急いで食べ始める。

その姿を見て、思わずリリィは頬をひきつらせた。

そして心の中で千冬の事を考えながら、リリィは「……大丈夫だから。」といい、早食いを止めさせる。

「おばちゃ～ん、うぃだー一つ。」

「ここにゃないよ、購買行ってきなさい。」

「……真面目に返されると少しショック……。」

そう呟きながら、軽めの物を頼む。

ちなみに、先ほどリリィが頼んだ「うぃだー」とは、ゼリー状の飲み物らしきものだ。

作業中に飲む物として、リリィはかなり買っていた。

他にも「かろりー」と呼ばれる、携帯食料も同じように買っている。

とりあえず言える事は、真面目に説明すると「うぃだー」は「ウイダーｉｎゼリー」の事であり、もちろん「かろりー」は「カロリーメイト」の事であるということだ。

命名は、束。

どうでもいいことだが、リリィはカロリーメイトのとある味を食べると「うん、美味い！　もう一本っ！！」と言う時があるらしい。

本当にどうでもいいことだが、言っているのだ。

「あ、リリィ。」

そんな事を思っていると、一夏がリリィに声をかけた。

若干表情が暗い気がする。

リリィは受け取った皿を持ち、一夏の近くの席に座った。

一夏が座っている席は、既に箒やセシリアなどが座っている。

「……どうしたの、そんな浮かない顔して。」

そう言うと、リリィは頼んだ物を食べ始める。

そんなリリィを見て、一夏はため息をつきながら口を開いた。

「……いや、ローズって子……、プロヴィネンスだろ……。」

一夏がそう言うと、リリィは一夏が考えている事に思いついた。

内心で苦笑しながら、朝食を食べ続ける。

「……それに妹なんだろ？」

そう呟き、一夏はリリィを見た。

少ない量の為、食事を終えたリリィはお皿を持ち返しに行く。

「あ、一夏。」

「ん？」

「別に、プロヴィネンスは一体だけとは限らないよ。」

そう言い、リリィは食堂から出て行った。

「全員いるなっ！」

そしてホームルーム。

そこには昨日の様に、リリィの姿はいなかった。

教壇に立つのは、千冬と真耶だけだ。

「……よし、ちゃんといるな。」

そう見渡し、千冬は再度確認した。

「さて、昨日は私がいなかったから騒げただろうが、今日はその分もっと騒がしくしてやろう。」

そう言うと、教室を出て行った。

「……何やってんだろ、兄さん……。」

ローズがため息をつきながら、出て行った千冬を眺めた。

２７０　一夏の不安（後書き）

と言う訳で、部屋がタバコ臭くなっちゃった……ｏｒｚ

消臭剤も無くなっちゃって……。

仕方ない為、１００円ショップで消臭剤を購入。

１００円ショップの為、少々不安……。

本当に……。

271　二人の千冬がいる意味（前書き）

数話ほどネタ話に使おうｗ

寝ながらそう思った今日……じゃなくて昨日かｗ

天才誤字職人は今日も書く、Ｐ３

271　二人の千冬がいる意味

授業中にそれは起こった。

「……貴様、何者だ……。」

「……自分で考えたらどうだ？」

一夏達の前に千冬がいた。

普通なら、それが問題とは感じないだろう。

しかし、現に問題となっている。

原因は、千冬が二人いるという事だ。

ローズ以外唖然としながら、その光景を眺めていた。

少し時間を遡る。

昨日に引き続いて、リリィと束がいない授業を一夏達は過ごしていた。

そんな中、千冬が真耶を連れて教室に入ってくる。

「よし、一夏入るな。」

そう呟き、千冬は黒板横の低位置に座った。

真耶はそんな千冬を見て、少し首を傾げながら教壇に立つ。

「では、始めますね。」

そう言いながら、モニターを展開する。

モニターには重火器の歴史が、年表として載っていた。

一応、二基は重火器の専門知識を得る授業だから問題はない。

「重火器が登場したのは……。」

真耶が喋り始めると、教室の空気が静かになる。

そして歴史を言うにつれ、授業が終盤に差し掛かった。

「……で、十年前の事件。　俗に言う白騎士事件ですね。」

そう言った時に、教室のドアが開いた。

全員の目が、真耶からそちらに移る。

「すまないな、寝過ごした。」

「「「「「「「「「「「「「「「えっ！？」」」」」」」」」」」」」」」

そしてドアを開けた本人は言いながら教室に入ってくる。

織斑千冬と言う女性は。

もちろん千冬の定位置に座っているのも、千冬だ。

全員が千冬達を見比べる。

そして今に至る。

「そうか……。」

そう言うと入ってきた千冬は、座っている千冬に向かって飛ぶ。

白騎士の脚部スラスターと踏刀を展開し、襲いかかっる。

もちろん、座っている千冬も当たる訳もなく、踏刀は空を切った。

踏刀の間合いギリギリに、座っていた千冬は立っている。

しかし、その時点で全員気が付いた。

「……何やってるんだ、リリィ……。」

一夏はそう言いながら、避けた千冬に向かって言った。

最強と言われているブリュンヒルデの剣を楽々かわせるのは、リリィ以外いない。

さらに今の避け方は、完全にリリィの動きだった。

全員が憧れた動きだったのか、見間違う事はない。

「……何の事だ？」

だが、偽千冬はしらを切る。

「……私がリリィだと？　何を根拠、に……？」

「なら、毛先が少々銀っぽいのはなんでだろうな……。」

千冬が偽千冬に向かって、そう言うと偽千冬は無言で髪の毛を掴む。

そして無言で前に持って行き確認する。

千冬の斬撃をかわす際に、黒に変化していた髪が徐々にはがれて行

ったのだ。

そのせいで、元の銀髪が出てきたと言うところだろう。

「イメチェンだ。」

「「「「「「「「「「無茶があるっ！！」」」」」」」」」」

偽千冬と言う名のリリィの言葉に、全員がツッコミを入れた。

若干引き下がり、偽千冬はため息をついた。

「……しかたな～い、なっと。」

そう言うと、偽千冬は黒い霧で覆われ、次に現れた時はリリィだった。

ローズはため息をつき、千冬は呆れる。

教室は唖然となり、訳を知る者はため息をついていた。

「何をやってるんだ……。」

呆れながら、千冬は呟く。

「何って……、昨日ずーっと寝ていた人の代わりの仕事をしてたら、朝になってって、ついでだからこれぐらいしても良いと思っただけだけど？」

昨日から千冬の仕事をやっていたから、と言う言い訳。

千冬はその事に少し、頬を引き攣らせ後退した。

「あわよくば、ブラコン疑惑を促進させようと思ったのに。」

「なっ！？」

リリィの言葉に千冬は絶句した。

今も少々か保護だが、昔はもの凄いブラコンだったのだ。

それをリリィは穿り返そうとしたらしい。

「あ、昔の気絶した時の映像でも流す？」

そう言うと、フリーダムになりケーブルを教卓の差し込み口に刺す。

すると全員の机に映るモニターに、白騎士を纏い気絶した若い千冬が映った。

「のわぁぁっ！！」

恥ずかしそうな表情をし、必死に大声を出してケーブルを切る。

だが、そんな千冬を無視してリリィは笑顔で「今のは十年前、千冬が私の特訓で気絶した時だね～。」と言った。

そこでようやく千冬は悟った。

「……リリィ……さん……。　もしかして、……怒ってらっしゃい

ますか？」

千冬が誰にも見せた事のない弱気な声でリリィに尋ねる。

「うん？　ぜんぜ～ん！」

対するリリィは笑顔でそう言うも、誰がどう見ても完全に怒っていた。

271　二人の千冬がいる意味（後書き）

天才誤字職人って、ネトゲーでいつもタイピングすると二割でミスるというｗｗｗ

ほんと、最近チャットとかしに行ってないな～。

ま、ちゃんとやることやってるし別にいっかｗ

「闇色のスノードロップス」と言うゲームを消化し始めましたｗ

ＯＰ曲は本当に良かった。

２７２　仮面ライダー参上？（前書き）

ちなみにネタ話です。

ＩＳの世界にも、基本アニメや特撮はあります設定ｗ

伏字もめんどくさいので、そのままでＰ３

間違えて、３１日に一回投稿してしまいましたｗ

みちゃった方はもう一回♪

272　仮面ライダー参上？

「白式っ！！」

一夏が叫び、アリーナに白式を展開した一夏が現れた。

しかし、その姿は一夏でありながら一夏ではない。

お忘れかと思うが、以前束がお遊び感覚で白式に「五回に一回だけ、搭乗者の髪の毛を伸ばす。」と言うシステムを入れたのだ。

つまり、その当たり日を引いたと言う事だ。

一夏の髪の毛が長くなり、全員が「またか。」と言うような視線を送っていた。

ちなみに現在は授業中。

髪を切ると言う暇はない。

そのためか、一夏は髪が長いままで授業を受ける事になる。

「それでは、模擬戦闘で動作の確認をしてから練習を始めるぞ。対戦相手は……。」

「私が相手をして差し上げよ～う☆」

千冬が言ったその後、アリーナに束の声が響いた。

先ほどまで「寝てる。」と、リリィに聞かされていたからか、全員で辺りを見渡す。

すると、なぜかバイクのエンジン音が近づいてくるのに気が付いた。

「……なんか、少しだけ嫌な予感が……。」

リリィがそう呟き、アリーナの入り口を見る。

そして、訳が分からない光景が目に飛び込んできた。

アリーナに入り込んでくるバイクに跨った、ウサミミの天才博士。

「……何をやってるんだ……。」

千冬も呆れ、そう呟くことしかできない。

束がバイクに乗ってアリーナ中央に止まる。

全員の心は「なぜバイク？」と感じているだろう。

「うわ～、かっこいい～な～。」

一人だけ違うようだが。

束がリリィを見て飛び込んでくると思いきや、なぜか不敵そうな笑みを浮かべる。

「……今度は何作ったの……。」

リリィは束の笑みが理解出来た。

新しい物を作ったから、お披露目したいと言う目だ。

「み、皆さん。　下がってくださいね～。」

真耶だけが教師として冷静に動いていた。

しかし、セシリアや鈴までも固まっているのだ。

早々に、動く事は出来ないだろう。

「ふふふ、いっくん。　新しい発明品の相手になってもらうよ……。」

そう呟くと、束の周りにコウモリらしきものが飛んでくる。

コウモリと言っても、金色で生物と言うより機械だ。

束はそのコウモリを掴み、掴んだ手と反対の手に持って行く。

『ガブッ。』

そして束の手にコウモリの牙らしきものが、当たる。

刺さったのかどうかは分からないが、牙が手に触れたのだ。

するとコウモリから、どこかで聞いた事のあるような声が聞こえた。

束の頬に、教会のステンドグラスの様な色が浮かび上がり、腰に鎖

が巻き始める。

そしてその鎖は、何故かベルトになり固定された。

「変身♪」

そう束は言いながら、手に持っていたコウモリをベルトの中央に逆さにはめた。

その光景をリリィは呆れた目で見る。

束の身体が、灰色の何かに包まれ別の何かに変わった。

全身スーツで肌が見えず、コウモリの様なフルフェイスメットをかぶり、銀と赤の装飾を施された装甲を身にまとっている。

「……どこの日曜の朝から頑張っているライダーさんですか……。」

一夏も理解出来たのか、そう呟き呆れる。

理解できる者は理解し、理解できない者は理解できない光景だった。

日曜の早朝に特撮番組として、仮面ライダーという番組がある。

今の束は、完全に仮面ライダーだった。

「……私的には、……キバよりカブトの方が好み……。」

「え～、私はキバ派だよ～。」

「私は響鬼かな？」

「鍛えてますから！」

なぜか一部集団を作り、仮面ライダー談義が始まった。

「Wも良くない？　フィリッ○君とか！」

「○太郎君でしょ、そこはさぁ。」

「電王も良くない？」

「え～、そこはクウガでしょ。」

「G3は？」

「あれって、ライダー？」

「第3世代型強化外骨格および強化外筋システムじゃなかったっけ？」

女性として、その談義はいかがなものかと思ってしまう。

そう思いながらリリィは目を瞑った。

ちなみに、リリィは龍騎と555が好きだったりする。

272　仮面ライダー参上？（後書き）

ことごとく平成ライダーしかいなかったｗ

そしてアギトとかブレイド、ディケイド、オーズがいなかったという罠ｗ

ロケットくんは無視ｗ

リリィの好きなライダーは、私が好きなライダーを当てたと言うだけ。

ちなみにリリィ（私）が好きなライダーは龍騎、５５５、カブト、キバ、Ｗが好きな私。

他も良いんだけどね、やっぱコレｗ

そこ、中の人が好きなだけでしょとか言わない様にね。

配役間違えてるとかは、気にしない方でｗ

キバがローズで、イクサが束。

普通考えたらこうなるｗ

273　ダメだこいつ等（前書き）

前回に引き続き、ネタ話です。

キバじゃなくってカブトの方が良かったかな？

まぁ、千冬の件はワームの擬態能力で誤魔化せるしね～ｗ

Ｐ３

273　ダメだこいつ等

束が日曜朝方に放送している番組のヒーロとなった時、一夏は唖然とするのと同時に興奮していた。

ローズは呆れながら束に向かって歩き始める。

「……貴方には一度言っておかないといけない事がある……。」

そう言うと手に粒子が纏わる。

一夏の横を通り過ぎ束に近づいて行く。

「……この泥棒猫……。」

そう呟くと、手に纏わりついていた粒子が形を成す。

ナックルらしき物体が確認できると、腰にも粒子が纏わりつきベルトになる。

空いている手にナックルを押し付けると、ローズは口を開いた。

「……その命、神に反しなさい……。」

全員唖然としながらローズの言葉を聞く。

ナックルをベルトに到着させると、束同様にローズの姿も変わった。

白いアーマーが身体に纏わりつき、聖職者を思わせるようなシンプ

ルな姿に変わる。

「……今度はイクサって。」

「キバですね、分かります！」

誰も動じない為か、至って冷静な思考ができる一夏は、邪魔にならないようにその場から離れた。

アリーナは特撮ステージの様な空気が漂い始める。

千冬も唖然としながら、その光景を眺めた。

仮面ライダーが現れた事に、ＩＳに代わるスーツの登場かと思うが全く違う。

この惨状は、災厄として確定した身体を持たないからできる行為。

災厄だけができる事なのだ。

しかし、束は災厄に近い人間であって災厄ではない。

ならなぜ出来るのか。

その答えは実に簡単。

レイジングハートのコアを弄って、新しく装甲を作っただけだ。

つまり形だけと言う状態である。

はっきり言えば、ただ遊んでるだけ。

「……。」

もちろん、おふざけでやっているのはリリィにも分かっている。

しかし、今は授業中。

教師としては見過ごせない状況である。

リリィもゆっくりと二人に向かって歩きだす。

手には束のベルト中央にはめられている、コウモリの色違いが握られていた。

黒に近い色のコウモリを、開いている手に持って行き束と同じように牙を触れさせる。

「……いい加減にしなさいっ！！」

「……お祝儀です……。」

「わー、ありがとー。」

ローズと束が感情が無い口調でお祝儀袋の受け渡しをする。

もちろん横にリリィがいるから、棒読みなのだろうが。

「それにしても、妹が増えるなんてね～☆」

暗い表情を一転し、束は笑顔になる。

そもそも、二人は仲が悪いと言う事はない。

むしろ良い方なのだ。

そうでなければお祝儀を用意している訳が無い。

「ま、ともかく……。」

「……うん……。」

そう言うと、二人はリリィに背を向けた。

「逃げようっ！！」

次の瞬間、二人は風になった。

授業中に関係ない事をやっていたのだ。

リリィの事をよく知っている二人にとっては、少し先に怒る状況な

ど簡単に理解できる。

瞬間的に脚部スラスターを走りながら展開し、逃げ始めた。

対するリリィは両手にビームライフルを握り、正確な射撃を二人に
し始める。

それを二人は必死にかわし続けた。

「……あっちはほって置いておくとするか……。」

千冬はそう呟くと、生徒の方に向き直る。

一息つくと口を開いた。

「とりあえずグループを組んでおけ。」

そう言うと、千冬は雪片を展開する。

一夏に近づき、一閃。

長い髪を斬り、短くする。

それでもショートカットの女性ほどの長さは残る。

アリーナの悲惨な状況をよそに、千冬達は授業に戻ろうとしていた。

一部生徒は仮面ライダーは実在したと喜んでいたが、浮かれた状態
で授業に出ることとなる。

この後のヒーローショーで、ＩＳの技術を使った変身ヒーローが出たやら出なかったやら。

特撮モノは、この技術のおかげでかなり助かったやら、助からなかったやら。

273　ダメだこいつ等（後書き）

真面目に書きたくても、何故かかけないと言う状況……。

……力が出ないです……。

２７４　その人形はだめぇ！（前書き）

と言うタイトルと、数話前の状態で分かると思われるｗ

あの人形ｗ

かわいいよね～、Ｐ３

２７４　その人形はだめぇ！

白式の記録を提出しに、国際ＩＳ委員会本部へ行ったリリィ。

データ転送で済む話なのだが、データ流出を恐れている為、手渡し。

時刻はすでにお昼近くで、学園に戻っている途中だった。

「……ん？」

帰り道に会ったゲームセンターに目が行ったのだ。

特にクレーンゲームの中に入っている人形。

ピンク地の布の下に茶色の、マフラーの様に黒と赤の水玉模様の何かが巻かれている。

赤いマントが他の人形にかかっていた。

リリィはそれを見た瞬間、固まってしまう。

かわいい、と言う訳ではなく。

その人形全てに固まったのだ。

その人形の目も、リリィを見ていた。

「で、とってきたの～？」

束がそう言いながら、リリィの方に乗る人形を眺めた。

器用に肩に乗っている人形は、その手をリリィの首に当てている。

「……見たらわかるよね？」

リリィはそう言うと、人形を肩から頭の上に乗せ換えた。

気のせいか、人形の腕が勝手に動いた気がする。

束はあえてその事を無視して、立ちあがった。

「んじゃ、お昼を食べにいこっか～♪」

あくまで無視するらしい。

食堂に付くと、リリィを見た生徒は一瞬で頭の上の人形に目が行った。

それを避けながら、リリィは食券を買い席を確保しようとする。

「あ、義父さ～ん。」

そんななか、シャルロットの声が食堂に響いた。

知っている者は驚く事はないが、知らない者は色んな意味で驚く。

リリィは声のする方を向くと、丁度シャルロットが見えた。

ラウラも一夏もいる。

席も三席ほど空いていた。

リリィはお盆を持ち、束と共にその席に向かう。

頭に人形を乗せてお盆を持つ。

かなりシュールな光景だろう。

「えへへ、いらっしゃ～い。」

シャルロットが笑顔でそう言うと、リリィは苦笑しながら座った。

そして何故か頭の上を見る。

やはり気になるのだろう。

「かわいい～♪」

そう言うと、シャルロットは目を輝かせて人形を見つめた。

人形はそれに答えるかのように、片手を上げる。

一夏は唖然として見ると、すぐに何時もの事だと思いサバ味噌煮定食にお箸をつけた。

ラウラも何時もの事だと思っていたのか、シュニッツェル（仔牛のカツレツ）を口に入れる。

「かわいいでしょ。」

リリィはそう言うと、人形を両手で持ち上げ膝の上に置いた。

（……やっぱ、動いてるよね……。）

束は人形が動いた事に少しだけ疑問を感じながらも、お箸を手に取った。

リリィもお盆に乗っていたチーズを手に取り、人形に持って行く。

「「え？」」

ラウラと一夏には見えなかったのか、何も言わない。

だが、束とシャルロットはリリィの行動に唖然としていた。

人形はチーズに手を伸ばし手に取ると、嬉しそうに頬張り始める。

その光景に、束とシャルロットは完全に固まった。

人形がチーズを食べているのだ。

リリィはチーズを食べている人形を膝に、自身も頼んだモノを食べ始めた。

「……。」

一夏もようやく気が付いたのか、お箸が動かなくなる。

ラウラも同様に目が見開き、手が動かなくなった。

全員の目は、リリィの膝に座っている人形に注がれる。

そんな視線に、人形は気にした素振りを見せずにチーズを食べていた。

そして持っていたチーズを食べ終わったのか、両手を伸ばしチーズを欲しいと催促する。

「は～い。」

リリィは苦笑しながら、お盆に乗っていたチーズを手に取り人形に

渡す。

再度嬉しそうに、人形はチーズを頬張り始めた。

束達はその光景に唖然としながら、見続けることしかできない。

食べる事を忘れ、リリィと人形の食事を見ることしかできなかった。

２７４　その人形はだめぇ！（後書き）

さて、何故か登場したシャルロットならぬ、シャルロッ……（ｒｙ

面白おかしく、登場させたのが事の始まりｗ

言っておくが、子の人形に第２形態なんか存在しないっ！！！

この作品の中では絶対に存在しない。

マジでｗ

ある事をやっているのに、ＩＳオリ主人公達でデュララ！のＥＤパロを見てみたいと思ってしまった私は負け組。

275　お菓子の……（前書き）

今回もシャルロットｔ……登場ｗ

５巻の最初のお話辺りは、シャルロットｔが一番活躍できるじゃないか。

何せ、お菓子の魔女だからね、Ｐ３

275　お菓子の……

「あ、え～っと。」

シャルロットが適当な言葉を言い、ラウラの料理を見て言葉を纏めたのか一旦口を閉じる。

「ド、ドイツのお肉料理って、どれもおいしんだよね～。」

無理やりな会話だが、場の空気を元に戻すのにはちょうど良かった。

ラウラも「あ、ああ。」といい、話を続けようと口を開く。

「本国以外でここまで美味いシュニッツェルが食べられるとは思わなかった。」

そう言いながらラウラは、シュニッツェルを切り分け小皿に乗せる。

シャルロットにその小皿を差し出し、料理を進めた。

一言お礼を述べると、シャルロットは小皿の上に乗ったシュニッツェルを口に入れ食べる。

「ん～！　おいしね～。」

「ま、まあな。　……ジャガイモ料理もお勧めだぞ。」

会話が途切れて人形に意識が行きそうなのを抑えているのか、自国の事を褒められて嬉しいのか、ラウラの言葉はとぎれとぎれだった。

そんな様子を見ていた他の女子も、加わりたくなったのか近づいてくる。

料理談義しながら、人形を見て唖然としていたが。

「あ～、ドイツって何気においしいお菓子多いわよね？　バームクーヘンとか。」

近くにいた鈴がそう言うと、ラウラがそちらの方向を向き口を開く。

「そうか、なら今度部隊の者に言ってフランクフルタークランツを送ってもらうとしよう。」

ラウラはそう言うと、顎に指を当て「……今本国に誰が残っているのだったかな……。」と考え始めた。

ちなみに、ドイツは国際法などの問題を実行、隠蔽していたため、第三世代のトライアルから外された。

さらに、私的指示が可能の為かＩＳ配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼも解体。

所有していた三機のコアを回収される事になった。

そのため、シュヴァルツェ・ハーゼであった者に対し、部隊の者と言うのはおかしいと思うだろう。

しかし、これには理由がある。

リリィが仮名、旅団篠ノ之にシュヴァルツェ・ハーゼを吸収したのだ。

これにより、シュヴァルツェ・ハーゼは現在も残り、国際ＩＳ委員会から三機のコアの所有権を奪い取った。

ドイツ本国に思い入れもある者もいるが今回の事で、シュヴァルツェ・ハーゼは本部を移し、ドイツには数人しか部隊の者が残っていないのだ。

その結果、シュヴァルツェア・レーゲンやシュヴァルツェア・ツヴァイクなどはラウラやクラリッサの手に残る事となった。

ドイツに残っている者は、違法施設の破壊や撤去に動いている。

簡易的だが、束が開発した第二世代型量産機を保持させている為、命の危険性は少ない。

つまり何が言いたいのかと言うと、シュヴァルツェ・ハーゼの部隊員はドイツにいるか分からないと言う事だ。

ちなみにフランクフルタークランツとは、クルミを混ぜたカラメルで覆われたバターケーキの事である。

「ドイツのお菓子ですと私はアレが好きですわね、ベルリーナー・プファンクーヘン。」

セシリアがそう言うと、シャルロットが目を見開く。

「……セシリア……。　それ本気で言ってる？」

ベルリーナー・プファンクーヘンは、ジャムが入った揚げパンの事であり、更にバニラの衣が乗っている為、カロリーが凄く高い食べ物である。

シャルロットが何を言いたいかと言うと、「太りやすいもの食べて大丈夫？」と言う事だ。

知っている物は同意しつつも、シャルロットの言葉に眉をひそめていた。

知らない者は、セシリアとラウラにどんなものか聞き始める。

「……え～っと、丁度リリィさんが食べている物と似て……。」

そう言うと、目を閉じて再度リリィを見る。

リリィの手に、丸いパンらしきものが持たれていた。

人形も両手でパンを持っている。

リリィはそんな視線を受けて、全員を見た後にパンを見た。

「……うん、ベルリーナー・プファンクーヘンだね。」

そう言うと、リリィはベルリーナー・プファンクーヘンを食べた。

一体何処から取りだしたのか、セシリア達は唖然としながら思う。

そして、人形もなぜベルリーナー・プファンクーヘンを食べている

のか、突っ込みたかった。

275　お菓子の……（後書き）

とりあえず、ドイツのトライアルを除外します。

バックをドイツから篠ノ之に変更し、ラウラの代表候補生と言う扱いを排除しました。

これくらいしておかないとね～。

ちなみに、ラウラ達シュヴァルツェ・ハーゼの後ろを、ドイツからリリィ達に変更。

これによって、クラリッサの登場を増やそうと画策した結果だったりｗｗ

とりあえず人形の名前は、シャルロットではなく、シャルロッテと言っておくｗ

２７６　お菓子の魔女の名前は（前書き）

さてさて、ネタで入れたシャルロッテもそろそろ退場してもらいましょうか……。

え？

ずっといて欲しい？

Ｐ３

276　お菓子の魔女の名前は

リリィ達が去った事で一夏は、セカンドシフトした白式について考えていた。

シールドエネルギーを削る機体でありながら、セカンドシフトでその点を補うではなく、更に強化したのだ。

背部大型スラスターも大型化に伴い、エネルギーの消費量が大きくなった。

瞬時加速などの時間短縮などができたり、荷電粒子砲と言う射撃武器が増えた事などに喜びたいが、その両方はエネルギーを使う。

結局、燃費が悪くなっただけだ。

（……エネルギーがどうにかならないかな。）

以前箒が、紅椿と組めば万事解決と言っていたが、何時も二人でいる訳にはいかない。

確かに紅椿のワンオフアビリティー、絢爛舞踏は白式の零落白夜とは違い最小エネルギーを増大する能力だ。

さらに、触れただけでエネルギーを譲渡出来るため、その発案の意味は正しい。

（そう言えば千冬姉も言ってたっけ。　本来白式と紅椿は一対の存在で、用法を前提に設計されたとか……。）

そもそも何故、白式に紅椿を対に作ったのか意味が分からない。

白式の能力や攻撃威力に比べてみれば、紅椿の武装は威力が低い。

しかし、第三世代並みの威力は持っているのだ。

白式同様に燃費が悪いが、絢爛舞踏を使用すれば白式を上回る。

もし千冬が言った通り一対の存在と言う事なら、これらには意味があるのだろう。

最初に思っていた、抑止力と言う言葉を捨てる。

抑止力と言う事は「互いを停止させる為にキーとしての役割。」がある。

しかし一夏はどう考えても、抑止力として機能するとは思わなかった。

白式のエネルギー燃費は悪く、単体で回復する術が無い。

紅椿は白式同様にエネルギー燃費は悪いが、単体で回復する術がある。

更に言えば、白式の攻撃力はＩＭＳを除けば最強だが、紅椿の攻撃力は最弱と言う訳でもない。

どちらかと言うと、第三世代兵装と同じなのだ。

そう考えると、一対として作られた場合の意味が変わっていくのだ。
抑止力としての前提が成り立たない。
（……一体、どういう意味があるんだ……。）
一夏は愛機の事を考えながら、第四世代ＩＳと言う存在を考えていた。
リリィと束の部屋に、千冬とラウラ、シャルロット、セシリア、鈴は来ていた。
一夏と箒も呼んだが用事があるのか、この場にはいない。
呼んだ理由は、人形についてだ。
ちなみにローズは知っているのか、この場にはいない。
「……と言う事で、この人形はお菓子の魔女さんなのです。」
リリィがそう言うと、人形はリリィの頭の上で手からショートケー

キを出し、お菓子の魔女と言う事を証明した。

シャルロットは人形を見て、目を輝かせている。

ちなみに、人形の名前を教えた時の驚き方が、シャルロットだけ尋常ではなかった。

なんせ、シャルロッテと言う一字違いの名前なのだから。

シャルロッテは出したショートケーキを、口に運び食べ始める。

「つまりシャルロッテさんは、リリィさんとは違う負の象徴であり、色々な場所を巡っている魔女さんと言う認識でいいのですのよね？」

そのセシリアの言葉に、シャルロッテは身体ほどある頭を縦に振った。

そして手にドーナツを取り出し、セシリアに差し出す。

「正解したから御褒美。」と言う事だろう。

セシリアは唖然としながら、ドーナツを受け取った。

シャルロッテが歳より臭いが、よくよく考えたらセシリアより長く生きている。

もしかしたら精神年齢なら、リリィと同じぐらいかもしれない。

「お菓子を無限に出す事ができる魔女か……。」

千冬はそう呟き、シャルロッテを見る。

「便利だね～♪」

そう言うと、束はシャルロッテにチーズを渡した。

ちなみに、このシャルロッテの好物はチーズだ。

しかし自分の能力では出せないため、このように貰っている。

「……一家に一台？　一人？　は欲しいわね。」

鈴がシャルロッテを見ながら頬を染め、そう呟く。

確かにお菓子製造機として見れば、誰もが欲しいと思うだろう。

しかし、シャルロッテとて感情はある。

無償でお菓子を出す事はしないのだ。

シャルロッテは束から受け取ったチーズを両手で持ち、リリィの頭の上で食べ始めた。

276　お菓子の魔女の名前は（後書き）

シャルロッテはかわいいと思うんだ。

あのデフォルメ化された頭身、あのつぶらな瞳。

お菓子の魔女と言う事で生まれた設定。

どれもがかわいいと思うんだよ。

本当に。

ちなみに、シャルロッテは「魔法少女まどか☆マギカ」で登場する魔女（敵）の事です。

一種のトラウマキャラでありながら、人気が高いシャルロッテ。

トラウマの原因は、第二形態と「マミった」事だと思うんだよね。

第一形態は、ただの可愛いマスコットだよ！

……なんでマミシャルにならなかったのかな……。

……。

277　イタズラ生徒会長（前書き）

とりあえず、子の話でシャルロッテは退場。

原作を進めます。

P3

パソコンがご臨終されました。

予約投稿のストックが、なくなる可能性もあります。

ご了承ください。

277　イタズラ生徒会長

シャルロッテはダンボールいっぱいに詰めたチーズを嬉しそうに見ながら、そのダンボールをどこかに送った。

もちろん、リリィが帰り際に頼んでいた物だ。

軽くお財布の中が軽くなった気もしたが、気のせいだと信じたかった。

リリィは目を瞑り、誰にも気づかれないようにため息をつく。

シャルロッテがリリィの手を突き、リリィは目を開ける。

その瞬間、シャルロッテは片手を上げ消えて行った。

おそらく「バイバイ。」と言ったのだろう。

「……。」

全員唖然するも、リリィは至って普通。

そして時計を出すと、午後の授業時間が近付いている事に全員気が付く。

シャルロッテがなぜクレーンゲームの中に入っていたかは、不明のまま時間が過ぎるのだった。

「やっぱり無駄に広いもんだ……。」

一夏はそう呟き、ＩＳスーツに着替え始めた。

現在一夏がいるロッカールームは、既に男子専用と言ってもいいのだろう。

それゆえに、ただ一人の男である一夏専用ロッカールームと化しているのだ。

（やっぱ、雪羅に使用しているエネルギーが多いよな……。　……これ、もう少し抑えられないのか……？）

モニターを出し、それを見ながら一夏は考えた。

確かに雪羅に使用するエネルギーは、かなり多い。

それも両手でか増える程使用すれば、すぐにエネルギー切れが起こるほどだ。

（使用を抑えても、雪羅が無くなった時と変わんないし……。）

そう考えながら、ＩＳスーツを完全に着こむ。

すると、一夏の目に誰かの手が当てられ、両目の視界をふさがれた。

「だ～れだ。」

女性の声が更衣室に響く。

一夏は一瞬息をのむが、すぐに冷静になると考えうる人物を思い出した。

しかし一夏の知り合いに、大人びた声を出す知り合いは少ない。

さらに、その声に子供の様。

つまり悪戯っ子の様な喋りが入ると、誰もいない。

「ぶ～、分からない？　……だとすると、お姉さんちょっとショック……。」

（……ん？）

何か記憶の片隅に引っ掛かったのか、一夏は眉をひそめた。

水色の髪をした女性が、頭の中に出てくるが名前が思い出せない。

（……え～っと……、最近会ったよな……。）

そう思いながら、一夏は頭を捻った。

だが、数分たっても思い出せない。

むしろ手の感触と、首元にかけられる吐息がくすぐったくも気持ち良いと感じていた。

「あ、もうそろそろで授業開始じゃん。……と、言う事で時間切れ～♪」

そう女性が言うと、一夏の視界は急に開かれた。

一夏は急いで、手を当てた人物を確認する為に振り返る。

そこには、水色髪を外ハネにした女性が立っていた。

「……て、更識さんか。」

そう言うと、一夏は納得したかのように息を吐いた。

それを聞いた楯無は扇子を口元に押し付け、人差し指で一夏の額を突く。

「だめだめ、お姉さんの事は楯無って呼んでくれないと。」

そう言い、楯無は一夏にウインクした。

一応二人は接点がある。

ＩＳでフリーダムを落とす事ができるかという、国際ＩＳ委員会の委託模擬戦闘で顔を初めて合わせたのだ。

だからこそ、知らないと言う事はない。

（そういえば、あの時も同じことされたっけな～。）

そう思い返し、一夏は時計を見た。

「っ！？」

既に開始時間まで一分を切った状態だ。

その事に楯無も気が付いたのか、苦笑しながら口を開いた。

「お姉さんは生徒会長権限で遅れる事はおろか、休む事は出来るけど、一夏くんはどうかな～。」

一瞬「ずるいっ！」と叫びそうになったが、一夏は急いで更衣室から飛び出した。

楯無はその背中を見て、苦笑する。

「……今ここで、一夏くんの制服を新品のと取り替えて、持って帰っちゃおうかしら。」

何とも変質的な事を言って、楯無は更衣室から出て行った。

２７７　イタズラ生徒会長（後書き）

現在、デュノア社製第三世代機を構想中。

お忘れかもしれませんが、１００話ほどの時に、デュノア社は第三世代の基本構想を受け取っています。

シャルロットを犠牲に。

だからこそ、そろそろ出しても良いかな～って。

けど、詰んだｗ

本当に。

５日前の事ですｗ

２７８　新たな転入生の影（前書き）

サブタイは、こうしましたが……。

まぁ、まだ未定です。

名前とか……、Ｐ３

278　新たな転入生の影

リリィは手元にある資料を眺めていた。

「フランス政府……。」

そう呟き、資料を全て読み終える。

簡単に資料内容を言えば、三組への転入生がくると言うモノ。

しかし、詳しく語るとデュノア社の存在があった。

フランスはシャルロット・デュノアの代表候補生を取り下げ、新しい代表候補生を送ると言う事だ。

確かにシャルロットの代表候補生としての名は、今までフランスに帰属している。

もちろんシャルロット同様にラウラの名も、ドイツにあった。

だがフランス政府とデュノア社は、シャルロットを代表候補として価値が無くなった為、下ろしたのだ。

別にシャルロットの後ろは、既にデュノア社ではなく篠ノ之が存在するため、問題はない。

だが問題は、転入してくる者だった。

「……試作第三世代完成機……。」

乗り手も代表候補生並みの実力を持っており、性格は温和。

だが、機体システムが問題だった。

リリィと束が作り上げた第三世代理論。

光学兵器ではなく、ＡＩＣでもない。

フリーダム内に存在したコロイド粒子の技術転用。

完全強襲用ＩＳ。

通称、グレイプニール。

その機体が、ＩＳ学園に入ってくるのだ。

各国がデュノア社の成功に反応しない訳が無い。

必ずシャルロットの関係に気が付くはずだ。

（……最悪、戦争になりかねない……。）

完全強襲用ＩＳは、機体隠蔽や光学兵器偏向装甲をつけている。

もし、デュノア社とフランス政府の目的が、お披露目と名を売る事だとしたら、転入生が狙われたりもする可能性が無い訳ではない。

第四世代に一番近い第三世代機なのだ。

今でも、白式や紅椿の存在は各国が狙っていたりもする。

もちろん一夏と箒の所属は国ではなく、所属篠ノ之と言う無国家団体であるから、帰属国家に関しては表沙汰には問題になって無い。

必死に第四世代と言う機体を解明しているだろう。

最悪グレイプニールを使用し、第四世代機体を奪取するかもしれない。

そう思いながらも、リリィはアリーナを見ていた。

授業開始時間になり、生徒のざわめきが消える。

「……さて、午後の授業だ。」

そう呟く千冬の後ろに、リリィは立つ。

束とローズは二人で、アリーナの隅に正座していた。

もちろんアリーナに入ってきた瞬間に、リリィがそう命じたのだ。

午前中の罰だから仕方がない。

「……織斑はどうした？」

千冬が一夏がいない事に気が付き、辺りを見る。

全員それに気が付いたのか、首が一斉に動く。

そんななか、セシリアの顔の動きが止まる。
鈴はそれに気が付き、セシリアが見ている方向を見た。
「……遅刻の言い訳はあるか？」
千冬も気が付いたのか、そう言いながら手を叩く。
すると生徒全員が首を動かすのを止めた。
「……楯無さんに捕まってたん……です。」
そこには一夏がいた。
背を縮ませていたことから、どういう状態夏は気が付いているらしい。
しかし、そこはやはり千冬。
「……遅刻の言い訳は以上か？」
そこには慈悲の心など一片たりともない。
リリィが怒っていた事を思い出してか、いつも以上に頑張っているのだろう。
前以上の迫力が一夏を襲った。
「大体、アイツに会えばめんどくさい事は良く知っているだろう。」

「……いえ、全然……。」

さも当たり前のように千冬は言うが、一夏にとっては片手で数えるほどしか会った事無い女性だ。

知ってる事より、知らない事の方が多い。

「デュノア、ラビッド・スイッチの実演をしろ。　的はそこの馬鹿者で構わない。」

シャルロットは少しばかり困り顔で、千冬を見た。

一夏は一瞬救われたと思ったが、やはり千冬。

「やれ……。」

慈悲の心は持っていなかった。

２７８　新たな転入生の影（後書き）

とりあえず、新しいキャラの名前は未定。

おそらく適当になるかな？

一応、原作との違いははっきりさせようと思い、帰属国家を無くしました。

でもまぁ、リリィと束が出すこともできるし、一応三年間はデュノア社が出してるしね～。

ラウラもドイツから外されています。

ですが、実質黒ウサギ部隊は壊滅。

給料が数年は出せても、いずれ出せなくなる為……、群として機能はしないと思いますね。

そこら辺どうしよっかな……。

……国際ＩＳ委員会がらみにする？

279　教師クラリッサ（前書き）

……w

サブタイトルは……気にせずに……。

P3

279　教師クラリッサ

一夏達が頑張って教えてる頃、リリィは見て回りながらため息をついていた。

授業は既に終了時間に近づいており、六限目の終わりのせいか妙に騒がしい気がする。

「リリィ先生。」

リリィは呼ばれたからか、その方向を向く。

そこには、片方眼帯をした女性が立っていた。

「……あ、クラリッサじゃん、どうしたの？」

クラリッサである。

シュヴァルツェ・ハーゼの副隊長である彼女がなぜここにいるかと言うと、単に職を探して教員になっただけだ。

ドイツからシュヴァルツェ・ハーゼは無くなり、今あるシュヴァルツェ・ハーゼは旅団篠ノ之が吸収している形である。

しかし吸収しているだけで、給料などは出ない。

結果シュヴァルツェ・ハーゼ部隊全員は、割と融通がきくＩＳ関係の仕事に就いた。

そのうち半分以上が、束考案の量産型第三世代機を開発しＩＳメーカーとして名を上げるつもりだそうだ。

今のところは小規模なネジや機器を作り売ったりして、下積みをしている最中。

いずれリリィと束を中心に、全国トップのシェアにすると意気込むほどだ。

本人達に至ってはその気は無いのだが、なぜかシュヴァルツェ・ハーゼ部隊全員は真面目にやっていた。

いずれにせよ、シュヴァルツェ・ハーゼ部隊全員は日本で就職し、シュヴァルツェ・ハーゼとして活動していた。

各々がやっている事は、全く違うものでもあるが活動しているのだ。

なかには、ラウラとシャルロットが紹介した喫茶店で働いている者もいる。

「いえ、授業終了と同時に転入生の機体について聞こうと思いまして。」

そう言ったのを聞くと、リリィは千冬を見る。

千冬も気が付いているのか、リリィを見ていた。

「……もしかして、三組に入るの？」

「ええ。」

リリィがそう言うと、クラリッサは間髪いれずに返答した。

三組。

現在クラリッサが操縦授業を受け持っているクラスだ。

リリィが千冬から目を離し、クラリッサの方を向く。

なぜか唇に赤い液体を吹いた後があったが、リリィは気にしなかった。

「や～、ココがＩＳ学園ね～。」

そう言いながら、一人の女性がゲート前に立っていた。

短くそろえられた金の髪は風に靡き、割と高い身長のせいか風景に似合わない。

その身体に纏っているのはＩＳ学園の制服。

「……って、なんで私こんな事引き受けちゃったんだろぅ……。」

先ほどまでに元気は何処へ行ったのか、一瞬で弱々しい呟きをもらした。

肩も落としている為、落ち込んでいる事が良く分かる。

「……篠ノ之博士を監視しろとか……。　あわよくば籠絡しろとか……。」

そう呟いて行くと、女性はどんどん落ち込んでいく。

「……妻子持ちの、最強種を相手にそんなことできるかって……。」

ため息を吐き、女性は手にある待機状態の機体を見た。

それだけの為に渡させれた機体。

「利益の事しか見てない男って、ホント嫌いだわ……。」

そう呟きながら女性は立ち直る。

「……けど、最強種が負かすって言うのも面白そうだ。」

内心、無理だと理解しつつも、女性はその事に口を釣り上げた。

それは本望なのか。

女性は目の前にリリィがいるかのように、学園を睨みつけた。

獲物を見つけた猛獣のように、舌舐めずりをする。

「……さて、まずは事務受付で手続きして入寮、っと。」

金の髪を揺らしながら女性は歩き始めた。

「あの子だけど?」

その女性の姿を、リリィとクラリッサはアリーナ上空から見ていた。

フリーダムとシュヴァルツェア・ツヴァイクが静かに上空で停滞している。

「……。」

クラリッサは少しばかり唖然としている。

リリィは少しだけため息をつき、女性を見続けた。

「……年齢偽ってるのではないか?」

「……それは知らないよ……。」

クラリッサの発言に、リリィは苦笑しながらも答える。

結果として、フランスからの転入生は警戒すべき人物だと、クラリッサは判断した。

279　教師クラリッサ（後書き）

とりあえず、シュヴァルツェ・ハーゼはドイツからは無くなったため、給料を出してくれる仕事ではなくなりましたｗ

まぁ、委員会の方で出してくれればいい気がするんだけど……。

ちなみに、脳内では委員会の議長はチキンハートｗ

超小心者ですｗｗｗｗ

クラリッサは……。

副隊長ですし、教員ぐらい出来るでしょう。

うん……。

２８０　夢と天才の噂（前書き）

サブタイ適当過ぎるｗ

まぁ、頑張ってかこうジャマイカｗ

Ｐ３

280　夢と天才の噂

「……まぁ、いずれ知ってしまう時がくるよ……。」

「……それだけは避けたい気もするんだけど……。」

女性の声が響く。

聞きなれた女性の声。

それがリリィの耳に届いた。

「……けどまぁ、未来なんて分かる訳無い。」

その声と共に、何かが頬に触れた。

リリィは誰が喋っているのか気になり、目を開こうとする。

しかし、眼は開く事を拒んだ。

というよりも身体の言うこと自体が、きかない。

「……この子が生きるか死ぬかは分からないよ……。」

そう呟き、頬から何かが離れる。

「……本当の自分に辿り着くかもしれないし、辿り着かづに貫かれて死ぬかもしれない。」

女性の言葉を聞き、リリィは考え始めた。

「……私はたどり着いたけど、大きな失敗をしたしね……。」

その声はどこか寂しそうで、悲しそうだった。

「……その足……。」

「……大丈夫だから……。」

そして静寂が辺りを包む。

すると、なぜか視界がゆっくりと開いてきた。

「……あ、起きちゃった？」

女性がそう言うと、ぼやけた視界で女性を確認しようとする。

しかし、女性の姿を完全に確認する事はできなかった。

「……おはよう……、――……。」

「……ィちゃん。　リリィちゃん！」

「……？」

リリィは目を開き、耳に入った声の正体を確かめる。

もちろん、当たり前のように束だ。

ウサミミも付けづ、Ｙシャツ一枚でリリィを呼び続けている。

リリィはあくびをしながら、束を見たときに寝ていた事に気が付いた。

朝日がカーテンの端から差し込むことから、早朝なのだろう。

「……大丈夫？」

その言葉にリリィは固まった。

しかし、瞬間的に苦笑し「大丈夫だよ。」と返答する。

束は少し心配し、思い出したかのようにモニターを寄せた。

「……？」

少し眠たげな表情をし、リリィは寄せられたモニターを見た。

「……え～っと……、「……篠ノ之束を超えうる天才、フランス代表候補生として登場！」ぅ？」

リリィは目を擦りながら文字を呼んだ。

最後の方を読むにつれ、凄く適当になっていく。

「……怪しくない？」

束がウサミミカチューシャを頭に載せながら、リリィに聞いた。

モニターには、金髪を短く切りそろえた女性が映っている。

その女性をリリィは知っていた。

「……まぁ、フランスだしデュノア社の広告でしょ？」

冷めた言葉を吐きリリィは欠伸をした。

束は自身を超える天才という見出しに、少しばかり面白くなさそうだ。

「三組の転入生だし、暇になったら会いに行ったら？」

そう呟きながら、リリィはカーテンを開ける。

窓の外から誰かが見ていたら、ダミーとはいえリリィの胸が丸見えだっただろう。

そんな姿のまま、リリィは窓も開ける。

「リリィちゃん？」

束は首を傾げながらリリィの名前を呟いた。

そんな束の言葉に返事もせず、リリィはビームライフルを手に持つ。

そして展開した次の瞬間、窓の外に向けて引き金を引いた。

束は目を見開き、飛んで行ったビームを見る。

「……覗かれるのは好きじゃないんだけどね。」

リリィがそう言うと、５００ｍ進んだところでビームは不自然なほど上に曲がった。

束はそれを見た瞬間、リリィの行動とビームが曲がった理由を理解する。

なにせ光学兵器を曲げる事ができるのは、この世で唯一つの技術を使わないとならない。

リリィはその技術を第三世代ＩＳ理論と共に、数ヶ月前にとある企業に対し取引材料として渡したのだ。

つまり、今の光景の理由が完全に分かっていると言う事。

「……さて、何が出るのやら……。」

そう言うと、リリィはクローゼットからスーツを取り出した。

280　夢と天才の噂（後書き）

さて、生まれてこの方……ゲーム動画とかを撮った事が無い。

その私が、とってみようと思ってしまったｗ

その結果……。

めんどくさくて投げたｗ

／￣￣￣￣￣￣￣
｜

◎ミ　（　Д）＝3

２８１　転入生と第三世代機（前書き）

パソコンが壊れたことによる、始めてのＰＳ３とスマホでの投稿。

ＨＤＤも吹き飛んだ……。

貴重なデーターが、ｐ３

281　転入生と第三世代機

クラリッサは教壇で、三組の生徒を見渡していた。

一応、クラリッサは二期から三組の担任だ。

別に何もおかしくはない。

「……つまり、転入生が来たと言うことだ。」

なんとも面白くなさそうに、クラリッサはそう言った。

対照的に、三組の生徒目を輝かせている。

今まで転入生は、一組と二組が独占していたのだ。

入ってくる転入生は、ほぼ一組。

その内リリィは教員となったが、一組の担任。

束に至っては、リリィがいないと真面目に授業をしない教員。

居ても真面目には授業しないが、リリィのそばからは離れない。

つまり、リリィが一組の担任なら、束も一組の担任と言うことだ。

三組に授業をするときもあるが、その授業回数は一組と比べてかなり少ない。

転入生と言う様な話題は、三組には無いのだ。

「とりあえず、入ってこい。」

そうクラリッサが言うと、教室のドアが開く。

全員の目が、そのドアを開けた女性にいった。

金の髪を短く切り揃え、高校生とは思えない体つき。

そんな女性が、教室に入ってきた。

誰もが一瞬で目が奪われる。

代表候補生の容姿は、全員高いのだろうか。

はっきり言って、美人である。

女性はゆっくりとクラリッサの横に来ると、転入生らしく教壇横に立つ。

クラリッサは全員に転入生の名前がわかるように、モニターを展開する。

「初めまして、クローディヌ・サミナードと言います。」

そういうと女性は一礼した。

クラリッサは横目で女性を観察している。

彼女はＩＳ学園に着いたとき、命令で篠ノ之リリィに関して危険な発言をしていた。

上から命令を受けた感じから、おそらくデュノア社が命令を出したのだろう。

さらに束を越える天才という肩書きで出すことにより、篠ノ之夫婦の目を向かせ、情報収集と目をかけられているような噂を流し、デュノア社の名を上昇させるのが目的。

クラリッサは一晩で、そう考えていた。

可能性としては、ないわけではない。

むしろあり得るのだ。

（警戒しておくに越したことはないか……。）

クラリッサはそう思うと、口を開く。

「……とりあえず、クローディヌの席はあそこだ。」

そういうと、空いている席を指さす。

クローディヌはおもしろおかしく返事をすると、ゆっくりと席に近づく。

その姿に警戒しながら、クラリッサは時計を見た。

本日は全校集会があるのだ。

一限の半分まで使い、今月にある学園祭について話すことになっている。

クローディヌを不振な目で見ながら、クラリッサは移動するように命じた。

一組では。

「へ～、ＢＴ兵器って最大稼働時にはレーザーを曲げられるんだ。」

シャルロットとセシリアが、のんきに話していた。

ＢＴ兵器は最大稼働時にレーザーを曲げる事ができると、セシリアは説明を受けてる。

正確には曲げられるのではなく、自在に操れるのだが、意味はそれほど変わらないだろう。

机上の空論。

フリーダムでもビームを操ることはできない。

セシリアはその事に、レーザーを操ると言う行為があり得ないと決めつける。

セシリアは少し首をかしげたが、時間になったからか考えを放棄した。

「そう言えば、学園祭ってなにやるんだろうね？」

束はそう言い、リリィの横に立つ。

本来なら千冬がいるべき一組は、何故かリリィと束しか教員がいない。

真耶もいない事から、一組に関係しそうなことだと考えるのは容易い。

「いっくんがいるから、めんどくさい事になりそうだね～☆」

事実あり得そうなことを言って、束は笑う。

リリィは少し冷や汗をかき、一夏の無事を少しだけ祈った。

２８１　転入生と第三世代機（後書き）

スマホでの書き方のため、途中です。

いつパソコンが直るかは不明です。

よって、連続更新記録はおしまいでしょうかね。

ちなみに、ＰＳ３で書いてスマホで「・・・」の部分をなおしています。

とりあえず、フランス代表候補生の名はクローディヌ・サミナードに決まりました。

もちろん偽名だけどｗ

実はクローディヌは原作キャラクターを原作通りに動かさなかった結果だったりします。

そうなると、誰だか絞られる事に。

考えてみてね～♪

ＰＳ３にキーボードのＵＳＢをさすという荒技、すごいね～ｗｗｗ

とりあえず、パソコンが直るまで更新を停止します。

２８２　各部対抗織斑一夏争奪戦（前書き）

ＰＣは治ったけど、サウンドとグラフィックボードが死んだｗ

なんという虐めだろう……。

新しいの買おうかな……、Ｐ３

282　各部対抗織斑一夏争奪戦

「やぁ、みんなおはよう。」

全校集会で全員の前に立っているのは、楯無だ。

全員が楯無を見るのが初めてだったせいか、瞬間的にざわつき始める。

もちろん、楯無が出る前に「生徒会長から説明させていただきます。」

と言ったためか大体に生徒が、楯無を生徒会長と理解しただろう。

「さてさて、今年は色々と立て込んでいて……ちゃんとした挨拶がまだだったね。」

苦笑しつつも、楯無はそういいながら生徒を見渡す。

「私の名前は更職楯無。　君たち生徒の長よ。」

苦笑していた顔を微笑みに変え、楯無は自己紹介をする。

その顔は同姓も魅了するらしく、大半の生徒は惚けていた。

リリィはその顔を見て、嫌な予感を感じ取る。

束が言っていたように、一夏に何か起きる気がした。

「では、今月の一大イベント学園祭だけど……、今回に限り特別ルールを導入するわ。」

そう言うと楯無はリリィを見て、口を釣り上げた。

もちろん、それを見逃すリリィではない。

瞬間的に、一夏に関わりそうな事と結びつける。

「その内容というのは……。」

しかし、楯無はリリィの思考を途切れさせるかのように、言葉を続けった。

扇子を慣れた手つきで開き、モニターを浮かび上がらせる。

「『各部対抗織斑一夏争奪戦』！」

モニターに一夏の顔が出され、全員の目に止まる様に各部対抗織斑一夏争奪戦という文字が、映し出されていた。

リリィは少し唖然としたが、すぐに楯無の言葉を読み取る。

というか、思い出した。

「え……。」

一夏の声が静かな空間に響く。

「「「「「「「ええぇっ！？」」」」」」」

その声を皮切りに、辺りの生徒に感染していく。

その空間全体が震え、束のウサミミは下に垂れ下がり、本人は耳を塞ぐほどの騒音となったほどだ。

千冬でさえ平然と立ってはいるが、頬が引き攣っており耐えているのは明白。

そんな中、一夏は驚愕しながら全員の視線を一心に受けていた。

「静かに。」

そんな中、楯無だけが平然とマイクに向かって言う。

ある程度予測できていたのか、リリィには楯無の耳に耳栓が入れられているのが目に映った。

「学園祭では毎年各部活ごとの催し物を出し、それに対して投票を行い、上位組は部費に特別助成金が出る仕組みでした。」

楯無がわざとらしく言うと、扇子を閉じた。

一体何のために開いたのやら気になるが、それを感じさせない様に楯無は振舞う。

そして扇子で一夏を指す。

「しかし、それではつまらないと思い……。　織斑一夏を、一位の部活動に強制入部させましょう。」

その言葉に一瞬の静寂の後、一夏を除く生徒は雄叫びを上げた。
瞬間的に、同じ部活で陣を組んだり話し合ったりし始める。
「というか、俺の了承とかないぞ……。」
そう呟く一夏をよそに、楯無は「あはっ♪」と笑っていた。

「……やってくれたね……。」
リリィはそう呟き、歩く楯無を止める。
相変わらず楯無は扇子を広げ、苦笑していた。
「一夏君の部活動申請が、たくさん届いてたからね。　特に苦情の方が……。」
そう言うと、楯無は歩き去ろうとした。
「……これでも篠ノ之という組織も後ろにあるんだけど？」

「もちろん、私がわかってないとでも？」

リリィと楯無の目が重なる。

「……ラウラより聡いと思っていたんだけどね……。」

リリィはそう呟き、楯無の進行方向とは逆に歩き始める。

そんな姿を縦無は眺め、扇子を閉じた。

「別に大丈夫よ、リリィ先生♪」

もちろん、その声はリリィの耳に届いく。

「……私が手にすればいいんでしょ？」

そう言った楯無の顔は笑んでいて、それを聞くリリィの顔も笑んでいた。

２８２　各部対抗織斑一夏争奪戦（後書き）

しかも、最初の時より5世代落ちのＷｉｎ９８みたいな感じだし……。

だけど、ＸＰモデルのウインドウ……。

ナニコレ……。

誰か助けて～（´；ω；｀）

２８３　動き出す者（前書き）

……ＰＣ壊れて調子が出なくなった……。

……はやく、新しいＰＣ買わないと……。

Ｐ３

283　動き出す者

「……最近、私がしようとする事全部、失敗してる気がする……。」

束はそう呟き、ため息をついた。

学園祭での出し物を決めるのを、任せ千冬と共に教室から出たのだ。

学園祭には興味がないわけではないが、ここ最近立て続けに起きたことを整理したかった。

束がしようとする事に、災厄が現れる。

「……はぁ。」

束が用意していた物を壊し、災厄が現れるのだ。

一夏の為に作った物も遠隔操作に反応せず、その前に災厄が現れた。

もちろん、その後に見に行ったら跡形もなく壊されているのを発見。

シルバリオ・ゴスペルとて同じだ。

手を打とうとハッキングしてみれば、何故かしら暴走状態。

結局、それに便乗する形で手を打ったが、束にしてみれば面白くない事。

「まぁ、リリィちゃんの事が知れただけでも、良い事があったんだ

ろうね～♪」

そう言って、強風に靡く髪を押さえた。

「……という事……。　『はい』か『イエス』だけで答えて。」

端末を耳に当て、リリィは話していた。

「む、『は『いイエ』ス』とは、考えたね……。」

リリィは空いている手で、机の上に置いた髪の文字を書き込んでいく。

「……各国の尻拭いをしてるんだけど？」

一応職員室なのに、リリィは堂々と言い切る。

「……更識家？　……なんで？」

リリィはそう言いながら、ペン先を何度も机に叩く。

景気の良い音が職員室に響いた。

「……ああ、そういうこと？」

リリィはそう言うと、ペンを手放して背もたれに背中をあずける。

「更識楯無は、この話乗り気だけど？」

その言葉に電話相手が静まり返ったのか、数分間リリィは何もしゃべらなかった。

それに耐えられなかったのか、リリィは口を開く。

「時間がないから言うけど、私が言ったことは決定事項だから……。凍結処理考案中のシルバリオ・ゴスペル及び、ナターシャ・ファイルスをこっちで預かってもいいんだけど？　彼方さんや貴方方だって、扱いに困ってるでしょ？」

その言葉に職員室に残っていた教員が、目を見開く。

「……あんなものが世界中に現れてみたらどうなるかな？」

そう言いながら、リリィは通話相手を脅迫する。

「……たしかに、私がやろうとしている事自体が驚異的かもね。」

そう言うと、リリィは端末を机に置いた。

そして書いていた紙を持ち、職員室から出ていく。

「……ん？　どうしたのだ？」

入れ替わりに千冬が職員室に入って、他の職員の顔を見て唖然としていた。

一組ではラウラの発案で、メイド喫茶を学園祭でやることに決まった。

そのことを知った楯無は、少しだけ苦笑い。

（……一組みは美人ぞろいだからね～。）

そう思いながら、楯無は扇子を開く。

そこには「だが、死角なし！」の文字。

口元を隠し、少しだけ頬を緩ませた。

（それでも、メイド喫茶の問題点は回転率よね～。）

別に部活動対抗なので、クラスの催しは関係ない。

しかし、楯無はクラスの催しも視野にいれないといけないのだ。

クラスの催しが部活の催しと重なる場合、集客は当たり前のように減少する。

楯無も生徒会といえ、自身の言った言葉通りに行けば集客は悪い。

そもそも、楯無にとって学園祭の事はお遊び。

どうでもいいことなのだ。

別に縦無自身が手を打たなくても、手を既に打っている人物はいる。

（……とりあえず亡国企業が動き出したらしいし、正しく動かないと私も巻き添えになりそうだしね～。……まずは、何も知らない生徒らしく動かないとね。）

クラスメイトが縦無を見ているが、本人は気にしてないようだ。

（……ついでに、一夏君のハートも射止めてみようかしら？）

一応これでも、縦無家の当主。

だが、今頭の中で考えていることは、とてつもなくどうでもいいことが大半であった。

２８３　動き出す者（後書き）

今使ってるのを買ったときには、７も出てたけど、外付け使いたくってＸＰにした私。

今回は、このＸＰで外付けのデーターを出せたりするため、７を買ってみる。

ついでに、ＨＤＤも大きいの買っとかないとね。

うん。

束特性、シュヴァルツェ・ハーゼ専用量産型ＩＳが……。

機能が……、なぜか、仮面ライダー……。

それはまずいでしょ……。

最初思いついた機能……、「キャストオフ」ｗｗｗ

２８４　中立軍隊（前書き）

ということで、独立軍結成のお話。

テイルズオブエクリシア、プレイ中ｗ

Ｐ３

２８４　中立軍隊

生徒指導室。

リリィはラウラとクッリッサを呼び、話し合っていた。

「……本当にするのですか？」

クラリッサが唖然としながら尋ねる。

リリィは平然と頷き、肯定した。

「……。」

ラウラは少しだけ悩みながら、渡された紙を見続ける。

「昔、楯無がついでとばかりに貰ってきたのだからね。」

そう言いながら、リリィは苦笑。

しかし、その目はいたって真剣だった。

「国際ＩＳ委員会と契約した、初めての中立企業兼軍隊。」

「そ、だから給料とかも出るよ。」

クラリッサの言葉にリリィは言葉を続ける。

今までどの国家も、企業を立ち上げ最新のＩＳ開発に乗り出してき

た。

しかし、現存のＩＳでは急な問題の対処ができないことが、数か月前に判明したのだ。

エンジェルダウン作戦時に起きた、災厄の出現。

このことは全世界に流されており、知らないものはいない。

ただ、リリィと災厄について詳細な事を除いた報告だが。

世界中が知っている事と言えば、総数十万機の機体をＩＳの生みの親二人が全滅させたということだ。

本来ならば、二人を再度危険人物として見るべきなのだろう。

しかし、もし全滅させなかった場合、世界に対してどれほどの被害があったかわからない。

そういう点では、リリィと束は評価されているのだ。

恨まれもすれば、感謝もされている。

人として微妙な評価を受けていた。

さらにその後起きた篠ノ之リリィ博士誘拐事件。

世界の二人を見る目が、それにより二つに分かれた。

脱出できたのに脱出しなかったリリィを不審がる物と、同情するも

の。

なんにせよ、世界中の国家元首は二人に対し、慎重で行かなくてはならなくなった。

国際ＩＳ委員会も後ろめたさがあったのか、リリィに対し強く言えなくなっている。

そこに話を持ち込んだのが、中立企業兼軍隊。

一見してみれば、ただのＩＳ学園と同じように感じるだろう。

しかしこれは、各国に喧嘩を売っている行為と同じなのだ。

他国より先進的な技術を独占し、軍事力としても最高位。

誰がそのような危険な組織を見過ごすものか。

だがリリィは、抗議した諸国全て黙らせたのだ。

そして作り上げた。

たった一つ、守るものを守るために。

何が相手でも、絶対といえる守りをとるために。

「……シュヴァルツェ・ハーゼもまた？」

ラウラがそう呟きながら、リリィを見た。

その眼をリリィは真摯に受け止め、口を開く。

「そう……、シュヴァルツェ・ハーゼもまた、その軍隊の中に作られる。　部隊員はそのまま……。　もちろん、隊長はラウラだよ。」

そういうと、リリィは室内にあったホワイトボードに文字を書き込んでいく。

軍隊の階級だろう。

上から順に書いていく。

准将として、織斑千冬。

少佐から二階級特進、ラウラ・ボーデヴィッヒ大佐。

大尉から二階級特進、クラリッサ・ハルフォーフ中佐。

中尉枠としてシャルロット・デュノア。

准尉枠で織斑一夏と篠ノ之箒の名を書き込んだ。

「……守りたいものは守る。」

二人に背を向けながら、リリィは呟いた。

「どれだけ他人を汚そうが、どれだけ私の手が血に塗れようが……。」

もちろん二人にリリィの声は聞こえている。

リリィは首だけを動かし、二人を見ようとする。

「……ごめん。」

リリィはそう言うと、首を元に戻す。

ホワイトボードに触れている手が僅かに強張る。

「……お儀父様が守りたいものは、私も守りたいものです。」

ラウラはそう言うと、リリィに向かって敬礼する。

それを見てクラリッサも続く。

「元ドイツ軍ＩＳ配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼ所属、ラウラ・ボーデヴィッヒ少佐。」

「ならびにクラリッサ・ハルフォーフ大尉、現時刻を持って中立軍に着任します。」

２８４　中立軍隊（後書き）

大体の作品とかでは、千冬は一夏の存在のためか派手に動けない気がｗ

まぁ、本作品では束とリリィが適当に動いてるからね～。

……あれ？

なんか、作品として浅い気が……。

まぁ、別にいっか。

寝て起きたら、何を書こうとしていたか忘れる状況に……ｏｒｚ

年でもないんだけどな～。

２８５　リリィに死角なし（前書き）

サブタイ関係ないのはいつものこと……。

ちょっとばかし、この先を書く自信がないような……。

Ｐ３

285　リリィに死角なし

リリィが廊下を歩いていると、職員室の近くで一夏を見つけた。

しかも、縦無も一緒に。

周りには気絶した生徒。

一瞬でため息をつきたくなるような光景だった。

縦無が歩き始めると一夏もそれに続く。

おそらく生徒会室に向かったのだろう。

「……何をするのやら……。」

リリィはそう呟くと、ゆっくり近づいた。

そしてゆっくりと手を伸ばし、何もない空間に手を置く。

何も見えないが、リリィの手は何かに触れる。

「……。」

リリィではない何かが息を呑む。

「少し手伝ってもらうよ？」

そう言うとリリィの目は何もない空間を睨んだ。

「……フランス代表候補生、クローディヌ・サミナード……。」

「っ！？」

その言葉に誰かが息をのんだ。

廊下には、リリィ以外誰もいない。

しかしリリィ以外が息をのんだのだ。

「私にミラージュコロイドは通用しない、どういうことかわかるね？」

一種の脅迫。

「……了解し、た……。」

楯無と一夏が生徒会室に近づく。

その後ろに、ＩＳグレイプニールを起動させたクローディヌが付い

てきていた。

≪音は立てないようにね？≫

「理解はしてる……。」

プライベートチャンネルで二人で会話する。

リリィは、同じ天才である縦無の考えが正確に掴めないから。

クローディヌは脅迫で動いたが、一夏という監視対象に近い人物を見るため、動いていた。

クローディヌ・サミナード。

シャルロット・デュノアに代わる、フランスの代表候補生。

この情報は、大体の者が知っている。

しかしリリィはクローディヌに対し、それ以上に知っていた。

だからこそ、クローディヌはリリィに対し下手を打てないでいる。

その結果が、リリィの手伝いだ。

クローディヌはリリィに見つかった瞬間、展開してなかったパイルバンカーを使用する。

だが、リリィはクローディヌのことをよく知っていた。

飄々とした顔で人を騙し、冷静で視野が広く命令に忠実な人間だと。

リリィはクローディヌの攻撃が見えない状態で止め、取引を持ちかけたのだ。

フランス政府に、今朝がた行った行為を抗議しない。

その代わり、縦無の思考及び行動を観察してこいと命じた。

（……やはり一筋縄ではいかないか。）

クローディヌはそう思いながら、ドアが開いた生徒会室に移動する。

しかしＩＳで生徒会室のドアをくぐれるわけがなく、クローディヌは瞬間的にグレイプニールを待機状態にさせた。

（篠ノ之博士、今回は貴方の言うことに従いましょう。）

静かに一夏たちに近づく。

縦無は近づくクローディヌに気がつき、センスで口元を隠す。

（……だが、私は私が信じるように動く。）

「クロディーヌちゃん！」

縦無がそう言ってクロディーヌを呼び止める。

（……デュノア社同様に、利用して利用して……。　利用しつくす。）

内心で考えていることを表に出さないように作り笑顔をし、クロディーヌは書くる会釈をする。

（所詮世界は、他人を利用しつくしどう生き残るか考え、実行するだけ……。）

縦無がクロディーヌを手招きする。

もちろん、明るく振舞い近づく。

（どれだけ自分を売らずに、他人を動かす世界に生き残るために……。）

「今からお茶しない？」

縦無の言葉に「いいですね。」と返し、「聞きたいこともありましたし。」と付け加えてから、何食わぬ顔で生徒会室に入ろうと歩き始める。

そんな作り笑顔をしているクロディーヌを、一夏は見て会釈をした。

クロディーヌも微笑みながら、頭を下げる。

（泥水を啜ろうと、生き続けてやる……。）

縦無はクロディーヌの心境を知らず、生徒会室に招いた。

２８５　リリィに死角なし（後書き）

サブキャラの設定を忘れそう……。

頭痛いし、ＰＣからデーターなくなるし。

ローズの初期登場設定とかもあったのに……。

ちなみに……もし原案のままだったら、ローズの生徒入りは原作７巻からでしたｗ

なぜこうなった……ｏｒｚ

２８６　誰も知らない古き戦争（前書き）

原作より、おりシナリオを書くほうが楽だったりもするｗ

そして首が痛い。

Ｐ３

２８６　誰も知らない古き戦争

「行ったぞっ！！」

「ここで抑えるんだっ！！」

「王の御前だっ！　無様な姿を晒すなよっ！！」

災厄は群れることはない。

しかし、ココぞというときに群れをなすときがある。

「……戦争は悲しいな。」

戦争だ。

小規模な争いでは動かないが、大規模な争いになると動き出す。

「王直属部隊を先頭に陣を組むっ！！」

災厄は群れることもなければ国を持つこともない。

だが、国を持たないがために、度々襲撃を受ける。

そのために、抵抗する群れを作り出した。

一番強い災厄、王。

それを囲むように集った高位存在。

大戦になれば、必ず前線に出てきた存在だ。

「南方はどうしたっ！！」

長銀髪の女性が叫び左手に持つ、ライフルを構える。

その言葉に近くにいた男性が頭をたれ報告した。

「南方側は注意存在だけですが、以前戦列は崩れていません！」

それを聞いた女性は少しだけ顔を強ばらせ、ライフルの引き金を引き続ける。

「レーゲン様……。」

男性がそうつぶやき、女性レーゲンを見つめる。

レーゲンは銃を撃ち続け、やがて打つのをやめた。

トリガーを引くが、弾は出てこない。

弾切れだろう。

レーゲンは素早く銃を捨て囮になるかの様に走り始める。

「いたぞぉっ！！」

「撃てぇっ！！」

その怒声と共に、レーゲンに向けて無数の銃弾が飛ぶ。
普通なら誰もが恐るだろう。
しかしレーゲンはその銃弾を避ける。
避け続ける。
「……王が一番多い北方を請け負ってくれているのだ。」
レーゲンの体が変わっていく。
黒い装甲が体に表れ、レーゲンを包み込んで行った。
体を鉄で覆い囲んだ瞬間、レーゲンは動く。
背中辺からワイヤーを四本伸ばし、敵を絡み取り楯にする。
「……私もこれくらいはやらないとな……。」
そう呟きながら、大筒のような砲身を回転させる。
「あの方に申し訳が立たないっ！！」
大筒が光を灯し、放つ。
大規模な電気の塊が、大きな砲弾と共に飛んでいった。
レールガンである。

無論移動しながら撃ったためか、それほど被害を与えられなかった。

「はぁっ！！」

さらに敵を間合いに入れてしまうという失態。

「……。」

だが、レーゲンにとってそれほど驚異ではなかった。

向かってくるものにワイヤーで捕縛した者をぶつけ、気絶させる。

もちろん、全員が重そうな鎧を着ているせいか、強い衝撃で気絶するのは当たり前。

「……殺しますか？」

男性が近寄り、気絶した者に刃を向ける。

「王はなるべく被害を出すなと言っていた。……おそらく王自身が頭を潰すのだろう。」

レーゲンはワイヤーを自在に操り、敵を近づかせるどころか撃たせる暇も与えない。

男性は、そんなレーゲンを見て眉をひそめた。

「こういう集団は、頭が潰れれば瓦解するものだ。そうすれば集まった戦力も消えていく。」

そうレーゲンは言うと、再度レールガンを放つ。
砲弾は敵の真横を通り、大きな音を立てて爆発する。
「……戦争とは、どれだけ犠牲を出さずにトップを抑えるか考え戦う物だ……。」
その言葉に男性は唖然となり、「そういうものなのですか？」と聞き返す。
「我王の戦争とは、そういうものだ。」
レーゲンは男性の疑問に問い返す。
「……っ！？」
アリーナのベンチでラウラは目を覚ました。
リリィの話を聞き、数分前に中立軍に着任したせいか、疲労が溜まっていたのだろう。

うたた寝をしていたようだ。

「……なんだ、今の夢は……。」

少し呆然としながら、今見た夢を思い出す。

（……王……。）

夢の中で聞いた言葉を、頭の中で口ずさむ。

瞬間的に頭を振り、思いを振り払う。

しかいｓ、ラウラの表情に硬さは残った。

２８６　誰も知らない古き戦争（後書き）

テイルズオブエクシリアめ……。

私に書く時間を与えないというか……。

そして、エクシリアで何か書かせようというのか……。

だがやらせんっ！！

ＩＳよ、私に力をぉぉ！！

ま、もうクリアはしたんですけどね。

ミラだけｗ

２８７　ＩＳの無い戦い（前書き）

クローディヌが入ったせいか、なかなか原作キャラが出せない……。

まぁ、それほど気にしないけど。

……Ｐ３

287　ISの無い戦い

（……どうして、こうなった……。）

一夏はそう思いながら、畳道場に立つ二人を見た。

片や道着を着て立つ、更識楯無。

片や制服を着て立つ、クローディヌ・サミナード。

両名とも互いを見て、構えを取る。

「……一本勝負でいいかしら？」

縦無がそう言うと、クローディヌは頷く。

「じゃ、勝ったほうが一夏君のコーチとして……。」

そう言いながら、一夏を見る。

合図を促したのだ。

二人が戦うことに疑問を持つだろうが、二人とも理由は持っている。

縦無は束に亡国企業対策として頼まれ、クローディヌは監視対象に簡単に近づけるために。

そんな思いで、二人は構えていた。

一夏にしてみれば、お互いただの女性のため、こういう行為はして欲しくないと思っている。

しかし、他人の心を知る由などない。

ゆっくりと一夏が手を伸ばす。

「……はじめっ！！」

その言葉と共に、両者はゆっくりと踏み出した。

中立会社申請をしながら、リリィは職員室で仕事をしていた。

机の左側で国際ＩＳ委員会に贈る書類。

反対側で明日使用する授業の書類。

それに目を通しながら、リリィはペンを走らせた。

「リ、リィ～、ちゃ～ん♪」

そんな中、リリィの背中に束が抱きつく。

気配を感じていたためか、リリィはペンを書類から話していた。

リリィは内心苦笑しながら、首に回された束の手に触れる。

「……どうしたの？」

束の感じに安心しながら、リリィは問いかける。

「転入生がどこにいるか知らない？」

そう言いながら、束はリリィに頬刷りする。

妙にくすぐったかったが、リリィは微笑みながら受け入れた。

職員室中にため息が漏れるが、二人は気にしない。

リリィはペンを起き、その手を束の頬に持っていく。

「う～ん、さっきそこで会ったけど、居なかった？」

その言葉に、束は頷く。

リリィは生徒会室にいると言わず、束の体温を感じていた。

「……っ！？」

そんな中、リリィの体が何かを感じた。

何かが突き抜けるような感覚。

過去に感じたことのあるような感じだった。

束も感じたのか、リリィに回していた腕が緩んだ。

リリィは書類をまとめると、束と共に職員室から出ていった。

クローディヌは首を傾け、回し蹴りをかわす。

隙ができた楯無の足をめがけ、手を伸ばした。

だが楯無はその足を曲げることにより、バランスを崩しながらクローディぬから距離をとる。

どちらかというと、バランスを崩すというより倒れながらといったほうが正解だろう。

「……くっ。」

珍しく楯無が表情を崩したところを、一夏は見た気がした。

対するクローディヌは、平然とした表情で立っている。
縦無の方が不利なのは一目瞭然だった。
一夏が止めようとするが、縦無がそれを阻む。
「はぁっ！」
縦無が気合をいれ、拳を振るう。
もちろんクローディヌは構えを取る。
「っ！」
楯無の拳が胴体を狙って伸びる。
だが、クローディヌは拳を受け入れる気はない。
左手で楯無の拳を弾く。
そして逆にクローディヌは、楯無に向かって拳を振るう。
「な～んねて♪」
クローディヌの拳が楯無に入ろうとしたとき、楯無はそう言い笑う。
次の瞬間、クローディヌは宙を舞っていた。
そのまま背中で畳に落ちかけたが、クローディヌは片腕で畳を触れ

後天。

楯無から距離をとるかのように、着地した。

「……まさか。」

「あら？」

お互い驚きながら相手を見る。

「私脳震盪起こす気で叩いたんだけど？」

楯無はそう言い、構え直す。

「……あの体勢からどうやって……。」

対するクローディヌはそう呟き、同じように構えた。

２８７　ＩＳの無い戦い（後書き）

このまま行くと、セシリアだけが最強になりそう……。

ん？

強化案ですよ？

なぜか、セシリアだけしか思い浮かばなくて……ｏｒｚ

どうにも鈴の期待だけは、強化案が浮かばない……ｏｒｚ

他国に渡しても問題なさそうな、強化方法は……。

２８８　楯無とクローディヌ（前書き）

クローディヌを一夏ラバーズに参加させるか？

どっちでもいいんだけど、クローディヌの決定画が仕上がらない状態。

皆さんの、ご想像にお任せしようかな？

Ｐ３

288　楯無とクローディヌ

「はっ！！」

「ふっ！！」

二人が原始的な戦闘をし始め、一夏は目を丸くした。

ＩＳ同士の戦闘を見慣れているためか、一夏にとっては新鮮な感じがした。

体だけの格闘技。

楯無は柔道やカポエラなど、色々な柔術をつかい翻弄する。

だが、クローディヌは翻弄される気配がない。

すべてカウンターで攻撃し、縦無をあしらっているかのようにも見える。

しかし、クローディヌにとって縦無は強敵だった。

初めて会った強敵が、絶対勝てない相手。

世界最高峰の頭脳と技術、身体能力と自由をもった人間。

ターゲットであるリリィだったが、それを抜けば出会った中でライバルとも取れる感じの強敵だ。

対する楯無も同じ気分だった。

リリィと千冬、束やＩＭＳをもった者を抜けば、クローディヌは強敵。

はじめてだった。

ＩＳ学園生徒会長は、学園最強と呼ばれる。

そもそも、楯無自身が「生徒会長というのは最強であれ。」と公言しているのだ。

それだけの実力は持っていると、自覚はしているのだろう。

過去にフリーダムとの戦闘以外で、リリィと戦ったことがある。

もちろん、その時も楯無は負けた。

それと同時に、ＩＭＳとも戦闘をしたのだ。

結果は、ボロ負け。

千冬は白騎士をＩＳ状態で闘っていたが、ブリュンヒルデの称号は伊達ではない。

シャルロットとの戦闘は、完全にエネルギーとパワーパックに押され負け、ラウラはワイヤーを使用した移動をもとに、レールガン、ビームショーテルなどの細かい攻撃で押され、楯無は負けた。

そもそも、ＩＳの装備でＩＭＳと戦うこと自体、負け戦なのだ。

イギリスの第三世代機は光学兵装を使用しているため、
何とか戦えるだろうが、それ以外になるとＩＭＳは天敵である。
「そろそろ、降参したら？」
クローディヌが汗をぬぐいながら、縦なしに向かって言う。
だが楯無は、腰から扇子を抜き取り広げる。
そこには「だが断る。」という文字。
そのまま、汗を空いているほうの手でふき取り、扇子で扇ぐ。
その文字に、クローディヌは眉をひそめる。
そして徐に口を開いた。
「そう……、なら……。」
「ＩＳで決着つける？」
クローディヌの言葉をさえぎり、誰かが喋る。
一夏がその声のしたほうを見た。
そこには、楯無とクローディヌを見ているリリィと束。
「少しだけ見せてもらったよ～☆」

束がそう言いながら、一夏に近づく。

「……今日の相手は誰だっけかな～♪」

その言葉に、一夏は時計を見る。

すでに、放課後の練習開始時間を大幅に過ぎており、一夏は顔を青ざめた。

相手はラウラ。

軍人であるからこそ時間には厳しく、定時を過ぎた状態で現れれば、その日は鬼のような訓練が起きる。

千冬に憧れていただけあって、訓練なども千冬に近い感覚で行われるのだ。

リリィ、千冬の次に、真面目に怒らせてはいけない人物だった。

リリィは楯無を見ると、目を瞑り少し考える。

一夏は早く行こうと、道場を後にしようとするが、束に阻まれ動けない。

「……仕方ない。」

突然リリィが呟くと、楯無とクローディヌに近寄る。

そして二人の耳元で何かを話すと、二人は目を見開き「「それ（よ）

っ！」」と同時に叫んだ。

楯無は扇子を口元にあて、苦笑する。

「さすが、リリィ先生♪」

そう言うと、楯無は一夏の右腕を持つ。

「え？」

一夏は唖然として、楯無を見る。

「……成果は？」

「なし。」

リリィの問いかけに簡単に問い返すと、クローディヌも一夏に近づき左腕をもった。

「では～。」

「地獄に行きましょうか。」

二人の声とともに、一夏は動物園の猿のように連れられて行った。

もちろん、生暖かい目でリリィと束はそれを見続ける。

「……戻って書類を仕上げよ……。」

そう呟き、リリィと束は職員室に帰って行った。

たった一つの答えの欠片を手に。

２８８　楯無とクローディヌ（後書き）

ちょっと前に書いたリリィの説明文。

名前：篠ノ之リリィ

出典作品：世界とＩＳと名もなき者へ

原作：ＩＳ（インフィニット・ストラトス）

年齢：１８

性別：男

誕生日：８月８日

血液型：Ａ

・人物像

他人は他人というスタンスを取り、人嫌いという言葉が似合う。

しかし、それは幼い頃の出来事が原因であり、しっかり他人と向き合おうとすれば、性格の良い女性の様な対応をしてくれる。

学生時代が無く、あったとしてもＩＳ学園での数カ月。
その後、ＩＳ学院の教員として勤務する。
教員をできるほど頭は良く、運動神経も人知を超えている。
ＩＳの開発者として名は知られていなかったが、教員をし始めてから也を潜めていた名が出てきた。
天才中の天才で、学ぶのも教えるのも誰よりも上手い。
性格のせいか、かなりの苦労人であり、何でも自分で解決しようとしたり、背負い込む事がある。
戦闘も負ける事はなく最強と、かなりの才能を持っている。
人の上に立つ人物であるのだが、主婦と言う意味が分からない生活を送っている。

・生い立ち

生まれは一般家庭の出身。
当時から女性に思える顔立ちで、髪も切る事はあまりしなかった。
銀髪、紅目は父親譲り。
リリィ自身、幼い頃から天才だった為に、金に目がくらんだ親類が

売る為に目をつけていた。

品定めする親類の目を理解しながらも、５歳まで普通に生活する。

５歳の時に家に両親が死亡し、親類に頼ることしない為に失踪。

政府に捜索願が出るが、見つかる事はなかった。

自らの身体を売り非合法の仕事で生活、かなりの貯蓄を蓄えている。

・束との出会い

後の妻である篠ノ之束に出会ったのは、リリィが7歳、束が１４歳の時だ。

何を思ったか海ではしゃいでいる時、後の愛機であるフリーダムを見つけて展開してしまう。

その光景を、遠くから束が目撃していた事が始まりだ。

織斑千冬に連絡し、当時未発表だったマルチフォーマルスーツであるＩＳ白騎士を使用。

白騎士の性能実検と、自身より先に作られていたフリーダムの破壊と鹵獲を目論んだ。

しかし、当時の白騎士は未完成機体であり、装備は大型ブレードのみ。

対するリリィは、展開して間もない機体でありながらも完全に掌握し、白騎士の武装を破壊しただけで戦闘行動を取れなくさせる。

束の当初の目論見は、リリィによってことごとくかわされていく。

その後、何を思ったのかフリーダムを展開しているリリィに束は接触した。

・千冬との関係

千冬とリリィの出会いは偶然である。

白騎士とフリーダムとの戦闘が初めての邂逅であったのは、上記文で理解はできているだろう。

その後、リリィは織斑家で一時期生活しており、その時期の織斑家はリリィで生活が成り立っていた。

千冬自身の性格と弟である一夏の年齢のせいか、織斑家の家事をする人物がいなかった事が覗える。

そんな千冬とリリィの関係を見れば、仲の良い間柄と感じられるが、千冬からしてみれば敬愛、友愛、心愛という言葉で解決できるほど、リリィの事を思っている。

友愛はそのままの意味として、敬愛と心愛は師弟関係が関与してなった物だ。

当時の千冬は篠ノ之流剣術を習っており、リリィが白騎士と篠ノ之流剣術について指摘し、一から鍛え直された。

流派名はないが、数多くの戦闘技術を教え込まされた千冬は、何時しかリリィの事を師と敬い、心の底から「隣に立ちたい」と思い始めていたようだ。

結果として、千冬は戦場で隣に立つ事は出来ても、リリィが歩む道の隣にいる事はできなかった。

・剣技

リリィの戦闘能力の高さは、空間把握と速度、剣術による圧倒的な間合いの取り方にある。

他者からの観点からみれば不可能な間合いも、上記3点を合わせ一瞬で詰め寄るほどだ。

空間能力はＩＳを使う者にとって、敵機の位置を確認し時期の状態を理解する事に重要。

速度はＩＳのスラスターやブースターなどで、それらを複合させた時の剣術の間合いは最低でも５０ｍはある。

なお、空間把握と速度を合わせれば、白騎士に生身で戦い勝つこともできる。

現に、白騎士とブルー・ティアーズに勝利している。

・世界からの逃走

本作品では白騎士事件以降、束は義務教育や高校生活を放棄している。

理由としてリリィの存在が問題となっているため、瞬間的な逃走と言う風になった。

当初の白騎士事件ならば、それほど問題は無かったのだろう。

しかし、本作品の白騎士事件では白騎士以上のオーバースペックであるフリーダムが介入した事により、束の危険視や重要性がかなり高くなっている。

そのため、白騎士事件発生後に逃走を始めた。

逃走はしていても、数年間は織斑家と交流があった。

第一回モンド・グロッソで千冬が搭乗した暮桜や、織斑家が平和なのは二人の存在があるからだ。

しかし第二回モンド・グロッソでは、一夏の誘拐事件に気が付くのに時間が掛ってしっている。

そこから先は交流が減り、通話などの連絡を取るしか出来なくなった。

ちなみに、束の部屋である自室とプレハブ小屋は機密の塊であったため、プレハブ小屋は白騎士事件以前に撤去しており、自室は機密は完全な破壊をされている。

今では、束の自室はただの部屋だ。

・ＩＳとフリーダム

フリーダムとは機動戦士ガンダムＳＥＥＤに登場する、人型兵器の事である。

基本フリーダムは２０ｍ近い機体だが、本作品では２ｍサイズに収まっており、ＩＳとなんも変わりの無さそうな状態となっている。

ＩＳの動力とは違い、核エネルギーで動いている事はサイズが変わっても変わらない事項である。

本作品では初期機体、つまりプロトタイプとして白騎士と並ぶ機体として有名。

従来のＩＳとは違うのは当たり前だが、第一世代以前の機体で第三世代機体を凌駕する性能を持っている。

未だイギリスがレーザー兵器と特殊兵装を搭載させたブルー・ティアーズや、天使再現計画のもとアメリカとイスラエルが共同開発したシルバリオ・ゴスペルさえも、フリーダムには届かないほどの性能差がある。

やはり高スペックやビーム兵装、特殊システムの存在が関与しているだろう。

特殊システムや一部兵装に至っては、リリィと束の手によって意図的に各国が習得できるようにされていた。

しかし、システムやＩＳの処理速度から２つ以上搭載すると、オーバーヒートする事が判明している。

フリーダムはリリィと束によって解析されＩＳと言うカテゴリーではない事が判明した。

後に、その事に付いて解決する。

ＩＳはフリーダムの劣化コピー機体である事は、白騎士事件から１０年後に全世界に知れ渡った。

原初の機体でありながら、完成された唯一の機体である。

・災厄

古来日本の陰陽道にも、退魔する存在として認知されていた負の存在。

群れをつくる事はなく、ただ現れては負をまき散らす害悪である。

しかし、一部上位の災厄は負をまき散らす事は避けている。

王を始めとし、その直属部隊は全員、負を抑え込む事ができた。

災厄内で高位存在になると、元々の不老に再生能力が付き不老不死化する。

数百年前に王自身が、災厄と言う種を壊滅させている。

現在残っている災厄は、王であるリリィと妹のローズくらいだ。

潜在能力は不明。

その実、解明した能力の方が少ない。

なお本作品の設定では、ＩＳのコアに存在するであろう意識や機体名称は、殆どが災厄から来ている物だったりもする。

・災厄の王

前世の異名である。

リリィ自身、生まれ変わって人間であったが、エンジェルダウン作戦（本編参照）で重傷を負ったさい、前世のリリィであるフリーダムと接触。

前世と交わった事で、災厄の王としてリリィは戻った。

王の判定はそれほど難しくなく、災厄内での感覚で行われる。

不老不死であり、王として生きた時間は千を越える。

・名前

未だ本名は明かされず、リリィと言う束がつけた名でストーリーは進んでいる。

当初はリリィだけであったが、１８歳の誕生日を迎えると篠ノ之に籍を入れた為、名字に篠ノ之が付き篠ノ之リリィという名前になった。

・複数ある未来

数ある未来の大半は、最愛の妻の死亡を迎えている。

そのため、未来のリリィは自身の殺害を決行した。

だが、本編のリリィは運命に逆らい続け、未来を否定した。

今後どうなるかは、まったくもって未定。

未来のリリィは、色々な作品に飛んでしまう習性がある。

この説明のほかにも、コメントやイラストが入る。

ちなみに、非公開設定した作者オリキャラ設定的な物ｗ

２８９　皆の心に傷跡を（前書き）

普段登場が少ないキャラで話を作ろうとした結果……。

まったく、悲惨な結果だよ。

Ｐ３

289　皆の心に傷跡を

その日の放課後。

千冬にとって、忙しい時間だった。

「織斑先生～。」

そう言いながら、ほかの教員が千冬を呼ぶ。

千冬は忙しそうに髪を振り乱し、声のしたほうを振り向く。

真耶だった。

「これが篠ノ之先生の机に……。」

そう言って書類を回す。

数十枚纏めた書類は、以前千冬がやるべきだった書類だった物だ。

少しだけ溜息をつき、千冬は書類を受け取る。

一組全員の生徒情報から、授業内容。

テストや理解度が、その書類一枚一枚に書かれていた。

どの書類も記入漏れがなく、完璧な物になっている。

「……これで私たちより年下と……。」

そう言って真耶に書類を見せる。

真耶は書類を受け取ると、じっくりと書類を読んだ。

そして溜息。

「本当に、篠ノ之博士って万能ですね……。」

そう呟き項垂れる。

「もう、担任職を譲ったほうがいい気がするな。」

千冬もそう言い、黄昏た。

そしてリリィの仕上げた書類を見ていると、ある一枚で手を動かすのを止める。

「……。」

何度も読み返し、表情をこわばらせる。

真耶はそんな千冬を見て、首をかしげた。

「……本気か。」

「箒～。」

箒が食道で定食を食べている時、鈴が近づいてくる。

お盆にラーメンを載せ、箒の隣の席に座った。

箒は一回口に入れていた食事を飲み込み、一息つく。

「……どうしたのだ？」

そう言うと、箒は静かにお箸を置く。

かく言う鈴は、ラーメンを軽くほぐしスープを飲むと口を開いた。

「最近、私たちって影薄くない？」

鈴の言葉に箒は一瞬固まる。

だが、鈴は固まった箒をそのままに喋り出す。

「なんかさぁ、私たちの影って近場にいる人にとられてるよね～。
篠ノ之博士とかセシリアとか……。」

何が言いたいのか少しだけ理解し、箒は焦った。

「私なんか、最近いい思いなんかないわよ？　試作型のマスケット銃くらいよ。　あとは全部セシリアのおまけ……。」

重い溜息を吐いたあと、鈴はラーメンを一気に食べた。

そんな鈴を頬を引き攣らせて見る事しか、箒にはできない。

「というか、なんでこんな時間に？」

鈴はラーメンの食べながら、箒にそう聞いた。

対する箒は、行儀が悪いと注意しようとしたが、先ほどの言葉に重い何かがのしかかっているように、しゃべる気にはなれない。

箒は再度お箸を手に取り、お椀を反対の手に持つ。

「……姉さんが夕食は早めに食べておいてくれと言っていたのでな。」

そう言うと、箒はお箸で煮物を摘み口に運ぶ。

「……全員に多様な感じなのかしらね。」

鈴は食堂を見渡し、そう呟く。

それにつられるように箒もあたりを見渡した。

「さて、準備はいいな？」

クローディヌに向かってそう言うのは、クラリッサ。

ＩＳスーツを着た、ラウラの副官だった。

「……博士からの依頼でな、相手をしてやってくれと。」

楯無は少し唖然となりながらも、扇子で口元を隠し苦笑する。

だが、長くは続かない。

「……すみません。」

「二人で決着付けたいので……。」

そういうと、楯無とクローディヌはクラリッサの横を通り抜ける。

クラリッサの横を完全に通り抜けた二人は、互いにＩＳを展開した。

そんなクラリッサを一夏は苦笑して眺めるしかできなかい。

「一人は……寂しいもんな？」

クラリッサはそう呟くと、体育座りでのの字を書き始めた。

何とも悲惨な光景である。

「……んぁ？」

そんな声が響くと、アリーナ墨のベンチに座っていたら裏が起き上がる。

そしてアリーナの惨状を見て、唖然とした。

一夏は提示過ぎたことに、焦り始め言い訳を考えるが意味もなく、すぐに思考を放棄。

近づいてくるラウラを見た。

しかし、ラウラは一課が考えていた言葉とは違う言葉を言う。

「……一体、何が起きたんだ……。」と。

289　皆の心に傷跡を（後書き）

ざまぁw

というか、全話で5ヵ月連続更新という……。

正直やりずぎたかな～っと。

まぁ、困らなそうだしいっか。

２９０　グレイプニール（前書き）

とりあえず、原作をたまに書きながらオリジナル展開で書く。

というか、４缶の内容ちゃんとやった記憶がないぉｗ

（沙＊・ω・）Ｐ３

290　グレイプニール

楯無とクローディヌがアリーナで向かい合っている頃、とある室内では。

「んじゃぁ、テスト始めるよ～。」

リリィと束が教壇に立ち、箒とシャルロット、千冬などが椅子に座る。

本来ならラウラもいてもらいたかったが、彼女の書類はドイツのシュヴァルツェ・ハーゼ元本部からデーターをコピーした。

ラウラの軍人としての書類など、それだけでいい。

そう思いながら、ラウラの事を頭から少しだけはずし口を開く。

「今からやることは、簡単な心理テストだと思ってくれればいい。クイズマジックアカデミー的なノリで答えてくれればいいからね～。」

全員、リリィの言葉に首をかしげたが、くばられたモノを見て理解した。

「問一、家の前で犬が粗相をしていました。　さてその犬は蹴ってもいいでしょうか？」

シャルロットが唖然としながら呟く。

「いや、よくないだろう。」

その呟きに答えるかのように、箒が言う。

全員頷き、配られた物に書き込んでいく。

ただ、千冬だけが腕を組んで悩んでいた。

「家の前か……、確か赤い犬は旨いんだったな……。」

そう呟き、全員を唖然とさせた。

ミズテリアス・レイディが蒼流旋をふるい、クローディヌに向けて振るう。

それをバックステップで回避し、クローディヌは様子を見る。

フランス第三世代ＩＳ、名称グレイプニール。

機体構想は楯無には理解できないが、少々厄介な機体だと感じただろう。

グレイプニールは濃い黄色やグレーなどで機体をカラーリングしており、蜂のような毒々しさを醸し出していた。

なにより、背部アンロックウイングが開くことにより、背中に昆虫の羽があるように思える。

「……。」

ウイング上のポッドが開き、ミサイルが顔をのぞかせる。

それを見た瞬間、楯無は機体前方に霧を展開させた。

ミサイルがグレイプニールから一斉に吐き出される。

二十六連ミサイルが左右のポットから放たれ、合計五十二発のミサイルがミステリアス・レイディに向かって飛んでいく。

前段直撃ずれば、ＩＳのエネルギーは瞬間的になくなるだろう。

しかし、そこはさすが楯無と言うべきだろう。

ミサイルの進行方向直前で、クリア・パッションを使用し爆発を起こす。

クリア・パッションに巻き込まれ、ミサイルが爆発や誤爆していく。

だが、それをかいくぐったミサイルが、幾つかあった。

「ふっ！」

もちろん楯無にとって、数が減ったミサイルはそれほど脅威ではない。

蒼流旋や蹴り上げた土で迎撃する。

「……やっちゃったわね……。」

楯無は迎撃し終えると、ミサイルの爆炎や煙で視界がふさげれている状況に苦笑した。

クローディヌが、唯闇雲にミサイルを放った分ではないことを理解させられる。

さらに楯無はレーダーで確認し、蒼流旋のガトリングで攻撃しようと考えたが、何故かしらグレイプニールの反応がレーダーに映らなかった。

一瞬だけ楯無の顔が歪む。

そして煙が晴れるのを待った。

完全に後手に回ってしまうが仕方がない。

その思いをかみしめ、蒼流旋を腰に構えた。

しかし、その思いとは裏腹に、攻撃を受けることはなく、煙が晴れる。

不可解な感じが楯無の体を這いまわる気がした。

「っ！？」

そして煙が晴れた時、アリーナにはクローディヌの姿は見当たらなかった。

楯無はあたりを見渡すが、姿形がどこにもない。

アリーナの背景に紛れ込むこと自体、あの派手なカラーリングの機体には不可能なことだ。

そして次の瞬間、楯無は何もないはずの後ろから衝撃を受けた。

声も出ないでただ驚き、瞬間的に何かから避けるように横に跳んだ。

（なに、今の……。）

理解できない状況。

何もないはずの空間から攻撃を受け、シールドエネルギーを半分近く削られた。

290　グレイプニール（後書き）

し、しもうたぁぁぁぁっ！

リリィが捕まっていたのが長すぎたせいで、４巻の一夏脂肪料理フラグが書けなかった！？

……もういいや、別の日に使いまわそう……。

２９１　見えない機体（前書き）

クローディヌの機体は、そろそろ性能が理解できてくる頃だと思います。

完成系の機体スペックは、活動報告参照。

ネタバレ的なので、見ないほうがいいかも。

本編でゆっくりと、明かしていきます＝Ｐ３

２９１　見えない機体

楯無は考えた。

なぜ何もない空間から攻撃を受けたのか。

デュノア社製の第三世代機。

それがどんな性能を持っているかはわからない。

だが、デュノア社が作ったとなると、なぜこれ程までの技術があるのに第三世代のトライアルさえ参加できず、第二世代を売り続けているのか、楯無には理解できなかった。

そして考えついた一つの結論。

「……篠ノ之博士……。」

リリィと束の存在だった。

（……ＩＭＳ技術を転用した機体となると、私が不利よね……。）

そう考えながら当たりを見渡す。

以前クローディヌの姿は見当たらない。

だが、何かが近くにいることだけは、本能的に理解していた。

（姿が見えない……、光学迷彩？　いえ、もっと別の何か……かし

ら……。）

警戒しながら地面を見る。

光学迷彩の場合、相手に見つからないよう機体全体に背部映像を展開し迷彩とする。

だがその時、地面に映る影については迷彩されない。

つまり光学迷彩の場合、地面に映る影を見つければ居場所を捉えることができる。

だが、アリーナの地面には影すらなかった。

ゲームなどでは空間歪曲や光を浸透させることにより、姿を消す場合もあるが、それではデュノア社が第三世代と名乗るはずがない。

残る結果は、別の迷彩技術だと楯無は考えた。

しかしクローディヌの機体、グレイプニールの迷彩技術は光学迷彩の一種なのだ。

妙な心理になりながらも、楯無は周囲を警戒した。

（残り少し……、見えない敵を見つけるには……。）

そんな楯無を、ラウラとクラリッサは見ていた。

隣には一夏がいるが、遅れた罰としてラウラに折檻され、意識がない。

「隊長、クローディヌの姿は見えますか？」

「……いや。」

クラリッサの質問に、ラウラは簡単に返答する。

それを聞いたクラリッサは、眉を潜めてアリーナを見渡した。

「……だが、何となくでならわかる。」

ラウラはそう言いながら、楯無の後方上を指差す。

「……理由をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

クラリッサの目が、ラウラの眼帯をしている方の横顔を捉える。

つまり、ラウラはヴォーダン・オージェを使用してないということだ。

使用していたところで、見つかるとは考えられないが、

それでもラウラは、通常の人間と同じ状態でそういったのだ。

何か理由があると、クラリッサは考えつく。

しかし、帰っていた言葉は、クラリッサの予想を大きく裏切るようなものだった。

「……なぜだろうな。」

ラウラ自身、なぜクローディヌがそこにいるか分からないようだった。

（……感、ということですか。）

クラリッサはため息をつきかけたが、楯無の行動でため息が付けなくなった。

「っ！？」

「……ふむ。」

ミステリアス・レイディを中心に、広域に爆発を起こしたのだ。

爆発の威力はそれほど高くはないが、意味が分からない。

クラリッサは一瞬、自爆したと思った。

「やるな。」

しかしラウラの言葉で、その思いは頭かた消えた。

「み～つけた♪」

楯無はそういうと、蒼流旋のガトリングを肩越しに後ろへ放つ。

何もない空間への攻撃。

だがガトリングの弾は、何もない空間で大きな音を立て弾かれた。

さらにその中の数発がペイント用の弾だったのか、はじかれた弾とは別に弾は砕け、水色が空間に浮かび上がる。

ペイント弾を装填したのが、何時なのかわからない。

だが現に、何もない空間にペイント弾で付けられた色が浮かんでいるのだ。

「……。」

しかし、すぐさまペイントは空間に溶け込む。

それを見て、楯無は「あらら。」と言って、蒼流旋を構えるのだった。

２９１　見えない機体（後書き）

そろそろ、クローディヌの機体。

グレイプニールの特性は、理解できたでしょうか。

そろそろ、誰かが解説始めるかもしれませんね～。

この場合、ラウラが解説かな？

いや、楯無かも。

とりあえず、クローディヌの機体コンセプトは……。

……秘密ですｗ

……というか、秘密にする必要性あるのかな？

全員理解してそう……。

ちなみに、ミラージュコロイド展開時は、確かペイント弾が当たっても色は見えなかったはずです。

消えるのに時間がかかったのは……、まぁ、正確に完成してないということで。

２９２　有り得ない決着（前書き）

まぁ、亡国企業が来るまで正確な機体情報は伏せておきましょうか……。

それにしても、亡国企業は本当に来るのだろうか……。

来そうにない気がする……、Ｐ３

２９２　有り得ない決着

（爆発の煙で私を特定した……。）

クローディヌはそう思い、自身の迂闊さを呪った。

爆発は爆炎を作り出し、その爆炎をクローディヌにぶつけることで、空気の流れで位置を判断したのだろう。

恐るべき判断能力だった。

さらに、光学兵装の大半を破るために、実弾にペイント弾を混ぜて射撃。

状況判断と行動力が、果てしなく高い。

一瞬にして、楯無の評価レベルを引き上げる。

（さすが学園最強と、名乗るだけある……。）

そう思いつつも、クローディヌは両腕に持つ高攻防複合システム、ファントムを構える。

もし楯無がグレイプニールの姿を見ることができたのなら、ファントムのシールド部にペイントがついてるのを確認できただろう。

（……残りの時間で、これだけ強い相手と会えるのありがたい……。）

そう思いながら、痛む体を抑え機体を動かす。

見えない機体に対し、楯無は警戒する。

「っ！？」

次の瞬間、クローディヌは目を見開く。

クラリッサは唖然としながら戦闘を見ていた。

だが、今クラリッサが見ている光景は、それ以上に唖然とする光景だった。

「っ……、ぐぅ……。」

いきなり、何もない空間からクローディヌが現れたのだ。

いや、コレだけなら別に驚く必要はない。

問題は、クローディヌの状態だ。

口からは血を吐き、綺麗な金の髪は色が落ち銀の髪になっていた。

グレイプニールは解除され、待機状態になっている。

楯無もラウラも唖然とした。

うなだれてるせいで、銀の髪がクローディヌの顔を隠す。

「……っ！」

金の髪とは反対の銀の髪から、鋭い目が楯無を貫く。

その姿はクローディヌと言っていいのだろうか。

もはや、誰もが見た姿とは違っていた。

「……ぐっぅ。　……っぅ、うぐっ、……はぁ。」

痛みをこらえ、吐血を拭い立ち上がる。

既に痛々しい姿で立っているというのが、その場にいる全員の思いだ。

「ふ、ふ……。」

前髪が垂れ、目を隠す。

縦無が気味悪そうにクローディヌを見た。

「くく、ふぁ、あっはっははははは。」

突然笑いだし、クローディヌは倒れた。
唖然としている三人にとって、その光景はすぐに受け入れるものではなかった。

≪篠ノ之先生、篠ノ之先生。　至急第二アリーナへお越しください。繰り返します……。≫

簡易テストが終わりそうになったとき、学園内に放送が入った。
リリィは束と顔を見合わせ、首をかしげる。
ＩＳ学園に篠ノ之先生と呼ばれる人物は二人。
リリィと束だ。
これではどちらを呼んでいるのか、よく分からないだろう。
だがこの場合、二人とも呼んでいるのだ。

一応テスト終了まで少し時間が得るため、どちらかが先に行けばいいのだろう。

そう思いながら束と顔を見合わせると、束は指を下に向ける。

自身がここに残ると言っていた。

リリィは室内を見渡してから、ゆっくりと出ていく。

目指す場所は第二アリーナ。

一夏が訓練する場所としてリリィが放課後抑えた場所であり。

「何やってるのかな……。」

楯無とクローディヌ、クラリッサに行くように命じた場所であった。

そして一夏の訓練として、今日はラウラがいる。

（……楯無かクローディヌか……。）

そう思いながら、自然と足の進みが早くなった。

不安が消えない。

（……何か嫌な予感がする。）

災厄の王としての予感か。

次第に競歩のように歩きだし、そして走った。

現在の場所は学園の三階。

階段を下りていたら時間が掛かってしまう。

「……っ！」

リリィは時間短縮のため、窓の淵に飛び片足を窓枠にかける。

そして更に大きく飛び、フリーダムを展開してアリーナに向かった。

十枚の翼が広がり、ブースタを点火。

自身が教員であることを忘れ、第二アリーナに急いだ。

２９２　有り得ない決着（後書き）

はい、ということでクローディヌの地毛が金ではなく銀というお話でした。

いや～ねｗ

銀ばっかりだとバランス取れないしねｗ

金にしたほうが、いいかな～って……最初思いついてたんだよね～。

ちなみに、ここ最近ラウラが多く出てるな～と思っていた人。

間違ってないよ。

今回は、というか「も」かな？

ラウラにも関わるお話が始まりますｗｗｗ

「リリィサイコー、イエ～ァ！」

２９３　急な事件（前書き）

ということで、また事件です。

束とのイチャラブがかけない。

まぁ、思いつかないんだけど……。

293　急な事件

リリィはアリーナにつき、瞬間的に目に入ったモノは血。

それも、人一人が出した場合、危険なぐらいの量だった。

ビームサーベルを引き抜き、アリーナの遮断シールドを斬り抜ける。

すぐさまアリーナ全体に警報がなるが、近くにいたクラリッサが停止させた。

フリーダムを解除すると、クラリッサが近寄る。

「篠ノ之博士……。　クローディヌ・サミナードが……。」

その言葉にリリィの目は険しくなっていく。

アリーナの医務室。

そこにクローディヌはいた。

いたというより、寝かされている。

血液を失った分補充し、安静にしないといけない状態だった。

そのすぐ近くに、ラウラは座る。

「……。」

悲しそうな目で、同じ銀の髪を持つクローディヌを見ている。

手には一枚の紙。

それは、ラウラでも目を背きたくなるようなモノだった。

それが誰かに抜き取られる。

ラウラは気配もなく近づいてくる人物が、誰だか理解していた。

リリィだ。

「……。」

ラウラは顔を上げ、リリィを見る。

対するリリィは、瞬間的に紙に目を通す。

そして何を思ったのか、バイタルを取る機械を操作し始めた。

クラリッサが室内に入ってき、ラウラの横に椅子を置き座る。

真剣な顔をして、リリィはモニターを見た。

「……クラリッサ……、今ドイツにいる部隊は？」

手を動かしながらも、リリィはクラリッサに問いかける。

ラウラはなぜ隊長である自身に聞かないのか、一瞬怒りかけたが、最近の命令はクラリッサが出していたことを思い出す。

確かにラウラ自信、シュヴァルツェ・ハーゼが何をしているか把握しているが、発案や指示したクラリッサの方が詳しいのは当たり前。

瞬間的にラウラは頭を冷やす。

「現在、ドイツに残っているのはA、C、Eチーム。　違法で作られた軍事拠点、医療機関、研究施設の四割を、制圧、破壊しています。」

「即刻、破壊を中止。　制圧だけにして……。」

「はっ！」

クラリッサの報告を聞き、すぐに命令を出すところはリリィとしては当たり前なのだろう。

すぐさまクラリッサは端末をだし、耳に当てようとし手を止める。

「……？」

そして何かを考え込み、リリィを見た。

「……すみません、制圧だけですか？」

クラリッサが不安そうに聞き返す。

それにリリィは頷いた。

「特に遺伝子強化試験体などの研究施設は確実に……。」

その言葉にラウラが目を見開く。

遺伝子強化試験体。

人口子宮から生まれた、試験管ベイビー。

その研究、生産施設。

つまりラウラの生まれた場所、という事だ。

「……。」

少しばかりクラリッサは顔を顰め、通信端末で命令を出す。

「やっ～……。」

それと同時に束が室内に入ってきた。

大きな声を出そうとしていた為、すぐさまリリィに口を抑えられる。

口元に人差し指をあて、静かにと言うと束は頷く。

そして丁度、クラリッサは命令を出し終えたのか通信端末を置く。

「……理由を聞きたそうな目だね……。」

その言葉にクラリッサとラウラは頷く。

今来た束は、何がなんだかわからなかった。

リリィはそんな束に、先程取ったバイタルデータを見せる。

「……っ！？」

そして何か気がついたのか、データとクローディヌを見比べる。

ゆっくりクローディヌに近づき、顔を覗く。

「二人に簡単に説明すると……。」

そう言いながら、束に見せたバイタルデータを見せ、ある部分に赤丸を付ける。

もちろん赤丸を付けたところで、二人には理解できないだろう。

データに赤丸を幾つか付けていく。

「……このままだと、この子……死ぬよ。」

２９３　急な事件（後書き）

デートは……、できないし……。

学内デート？

そんなことしてたら、すぐにお二人さん……。

さて、どうしよっかな～。

２９４　クローディヌの身体（前書き）

クローディヌが、おちゃらけたキャラで出そうとして出したら……。

なぜか、最初からクライマックス……ｏｒｚ

どうしてこうなった……ｏｒｚ

294　クローディヌの身体

楯無はクローディヌが寝ている医務室の前にいた。

生徒会長のため、長時間いることはできないだろう。

『……クローディヌの身体は異常な速度で成長してる……。今もなお……。』

その言葉に楯無は訝しむ。

『本当なら、まだ中学生なんだろうね……。』

『え？』

室内の空気が変わったことが、外にいた楯無でも分かる。

無論、楯無自身も驚いているのだ。

『ど、どういうことですかっ！？』

ラウラの声が響く。

『こ、声が大きいです隊長……。』

クラリッサが声の大きさを指摘する。

すぐさま、唸るような声をだし静かになった。

『……人体成分が異常なまでの分裂と増殖を繰り返している。　それは普通の人間だったらありえないことなんだよ……。』

『さらに人体の筋組織が、断裂したり無理やり治された形跡もある……。　増殖と断裂面の時間からして、処置されたのは一年以内……。』

楯無は一瞬、リリィと束が何を言っているか理解できなかった。

『……簡単に言えば、クローディヌ・サミナード……。　彼女は無理やり体を成長させられ、ＩＳ学園に送り込まれた……。』

その言葉に、その場の空気が固まる。

『彼女の体は、何らかの形で成長を止めている。　だけど、その処置が出来ないと成長し続ける。』

楯無は唖然とした。

世の中には、暗部以上に腐った人間がいる事に。

『人間の急激な成長は、体の組織を壊す……。　筋肉の断裂や修復は……、この体にまで育った急いだと思う……。』

『で、では、あの吐血は……。』

クラリッサがアリーナに撒かれた、血について聞く。

『おそらく、バイタルと照らし合わせて、内蔵系に深刻な損傷……。　成長したせいで、損傷したと思う……。』

その言葉に楯無は呆然とした。

正々堂々とは言えないものの、自分以上の実力を持っているだろう人間のハンデ。

人としての人権無視。

それらが、許せなかった。

暗部である楯無自身、人権がない者がいることは理解している。

だが、理解しているのと、許せないという感情は別物だ。

『そして彼女のバイタルから出た薬品。……これはある特定の研究にしか使われない物……。』

そういうリリィの声はいたって真面目。

それほどまで深刻という事だろう。

『私たちが過去に見たデータに、該当するのが一つだけあるんだよ……。』

『それが、遺伝子強化試験体実験。』

その言葉を聞くと、楯無は静かに部屋から離れていった。

「……だから私は、これからドイツに行ってくる。」

リリィはそう言って、部屋を出てこうとした。

もちろん、簡単に行かせるような者はここにはいない。

束がリリィのスーツを掴む。

「また、勝手に行くのかな？」

その声は、ひどく恐ろしく、リリィは冷や汗をかいてしまう。

「せめて、休暇届と引継ぎをしていってください。」

クラリッサが教師として発言する。

教師歴としては、まだ新米だが、事実無断欠勤はいただけない。

「一人で行って、また前回のような状況にあったら……、お義父様はどうするつもりですか……。」

何故かリリィは壁際に追いやられ、三人の女性に迫られる。

その状態に、リリィは頬を引き攣らせた。

「……役割を決めませんか、お義母様？」

「そうだね～☆」

三人がリリィを囲み、話し合う。

「では、教師として……、篠ノ之博士達の書類と授業は、私が。」

「織斑一夏達と学園内の警戒や警備は、私とシュヴァルツェ・ハーゼが……。」

「リリィちゃんの監視が私という事で♪」

絶妙なコンビネーションとは、このことを言うのだろう。

瞬間的に新しい状況が生まれて行く。

「……。」

そんな状態を、リリィはただ唖然として見る事しかできなかった。

２９４　クローディヌの身体（後書き）

もうちょっと、クローディヌのシナリオが欲しかった。

……そろそろ、箒を多めに出したいな～。

ここだと、空気にもなれないからね～。

どっかのランク１の人「まぁ、空気で構わんがな……。」

ちなみに、皆さん、この一夏（笑）のヒロインは誰がいいでしょう？

私的には、箒なんですけど空気ですしね～……。

２９５　姉に対する箒の思い（前書き）

こんなサブタイにしたけど、内容に合ってるのだろうか……。

とりあえず、法規の出番を増やすｗ

（´∀｀）つＰ３

２９５　姉に対する箒の思い

「姉さん、居る？」

箒がそう言いながら、ドアのロックを解除していく。

そしてリリィ達の部屋に入る。

「……何してるんですか……。」

そんな箒が見たのは、錯乱した書類。

もちろん束が書類を生産できるわけもなく、生産しているのはリリィ。

そして、それに埋めつくされるような形で手が伸びている。

「あ、箒ちゃん♪」

箒の訪問に気がついたのか、書類に埋もれていた束が顔を出す。

当たり前のように、絶妙なバランスを保っていた書類が崩れ、再度束は書類に埋もれる。

「……うみゅ～……。」

少しだけ同情してしまいそうな状態に、箒はゆっくり束に近づく。

「一体、どうしてこんなことになってるんですか……。」

ため息混じりに呟くと、束はフラフラになりながら、書類も何もない場所ん倒れ込む。

ウサ耳は頭から外れかけ、いつもの服はシワだらけ。

女性としてはなりたくもない姿だった。

「束～。　大丈夫？」

リリィがそう言いながら書類を生産していく。

ずっと机に向かって手を動かす。

データだったら良かったんだろうが、生憎と紙。

うち直しができるデータではなく、直しが効きにくい紙だった。

「……あ、箒。　暇だったら書類整理してくれる？　束がやると、何故か書類が崩れるという放送事故……、もとい失敗が起きるからね。」

リリィは箒に言うと、横に置いてあるコップを手に取り飲み干す。

束が目を回しかけているせいか、仕方なく代わりをする箒。

何故こうなったのか、リリィにも束にも理解できないだろう。

そして書類を手に取ると、箒は目を通した。

（……シャルを左官にしてください？）

意味が分からない書類だったせいか、箒は真面目に理解しようと見通す。

（……中立部隊に関しての階級付け。　シャルロット・デュノア中尉。　テスト、オールグリーン。　行動パターン、オールグリーン。　備考、シャルを左官にしてください。　……なんだこれは……。）

真面目に読んでも、全く意味が理解できなかった。

箒は書類を集め、束ねていく。

山のように乗せられた書類を、一枚一枚丁寧に集める。

しかし、リリィの生産が早いせいか、全く整理した気がしない。

「……義兄さん。　なんでこんなに書類があるんですか？」

箒は何かが引っかかっている気分だったため、それを拭うためにリリィに問う。

「ん？　明日から私達休暇を取るから。」

「あ、そうなんですか。」

問いに満足したのか、箒は書類を拾っていく。

「え？」

はずだった。

「休暇？」

そう呟き、書類を拾う手を止める。

もちろん、ずっと机に向かっているリリィにとって、箒が手を止めたことを知るすべはない。

いや、何もしてなかったら、箒が手を止めたことぐらいすぐにわかっただろう。

「そ、休暇。　ちょっとドイツまでデートしに行ってくるんだよ。」

そう言いながら、書類を書く手を止めない。

一瞬羨ましくなり、未だ目を回している束を箒は見つめた。

（私も一夏と……。）

そう思いながらも、女としての幸せを掴んだ姉を見続ける。

もしＩＳが存在しなかったら、一夏と箒の仲はいつもどおりだっただろう。

しかし、ＩＳは発表され、姉束と義兄リリィは世界から逃げた。

そして、一夏と箒は離れ離れになる。

もちろんそのことに怒らなかったわけではない。

箒は束に向かって酷い言葉を、何度も何度も言った。

だが、束はその言葉を受け止め、箒と向き合ったのだ。そして、話し合う。

お互いを知るためには、一番大切なことをした。

そこで初めて姉の知らなかった心境を聞き、箒は束のしたことを許したのだ。

そして償いなのか、一夏との仲を取り持つように動いてもくれている。

だからこそ、恨みはすれども、幸せを掴んだ姉を憎みは出来なかった。

（……私も何時か、一夏とこんな風になれるだろうか……。）

だが、もしかしたらあったかもしれない幸せを、考えないわけではない。

箒は少し笑って、散らばった書類を整理し始めた。

２９５　姉に対する箒の思い（後書き）

こんな感じで、箒の出番を増やしてみた。

なんか、一夏を覗いた中だと、鈴と同じくらいの出番しかないからね～。

そう考えると、鈴も考えないといけないんだよね。

どないせいっちゅうねん（―＿―；）

次話は、一夏と鈴主体にでもしてみようかな？

たぶん、無理だと思うけど……。

たぶん、千冬＆クラリッサかな？

よくよく考えたら、これ３００部目でしたヽ（＊´∀｀）ノ

296　騒々しい朝（前書き）

ということで、リリィ以外にスポットライトを当ててみようｗ

第一段ｗ

Ｐ３

296　騒々しい朝

「織斑教導戦技官……。」

「ん？」

千冬は懐かしい呼び名に、振り返る。

そこには、懐かしい顔がいた。

「……お前、ハルフォーフか？」

そう言うと、クラリッサは頷いた。

数週間前に会ってはいたが、千冬はＩＳ学園で出会うとは思っていない。

眼帯で固めを隠した顔を、じっくりと見る。

だが、顔が変わるわけもなく、そこにはクラリッサがいるという変わらない結果があった。

「ブリュンヒルデの方が宜しかったですか？」

「……その称号は止めろといっただろう……。」

千冬はブリュンヒルデという単語に、顔を顰めた。

「……そういえばそうでしたね。　忘れてました。」

クラリッサはそう言うと、持っていた書類などを千冬の机に置く。

唖然としながら千冬は、置かれたものを見る。

「……なんだ、これは……。」

「篠ノ之博士の書類半分ですが、なにか？」

当たり前のようにクラリッサは問い返す。

「もしかして私がここの教員で、三組の担任になったことをお忘れに？」

そう言うと、千冬は無表情で書類に手を取る。

忘れていたのだろうか、書類をじっくり読み始めた。

「……いつ、リリィは休暇届を出した？」

「昨日の１８４１時ですが、なにか？」

それを聞き、千冬は深くため息をついた。

渋々書類を小さく分け、一つ纏めたものを出席簿に閉じる。

「なぜ、昨日出したのが受理されているんだ……。」

「ということで、篠ノ之博士から甲龍の強化案を受け取ってあります。」

眼帯の女性が鈴にそう言う。

「はぁ……。」

鈴としては、初めて会う相手が不振であって仕方がない。

さらに眼帯をしている時点で、ドイツ軍シュヴァルツェ・ハーゼ部隊ということを、示しているのだ。

ドイツがトライアルか外されたことを知らない鈴にとって、ドイツ軍が中国の技術を取ろうとしていると判断してしまう。

「では、放課後お待ちしております。」

女性は踵を返して二組の教室から離れていった。

鈴は微妙な顔をしながら、自分の席に戻る。

「鈴音～、さっきの人誰？」

クラスメイトに声をかけられ、鈴はそちらを向く。

「たぶん、ドイツのシュヴァルツェ・ハーゼ部隊の人じゃない？」

そう言うと、クラスメイトは目を見開く。

いい意味でも悪い意味でも、鈴は目立つようだ。

「鈴音……、何かしたの？」

「ないない。　私がそんな事するように見える？」

問いかけに、鈴は手を横に振りながら否定。

少しだけ呆れていた。

「で、なんだったの？」

クラスメイトは鈴の言葉を気にもせず、話を続ける。

「リリィ先生が新しい強化案を作っただって。」

そう言うと、先程より目を見開く。

そして鈴の肩をつかんだ。

「篠ノ之博士がっ！？」

「だったらなんで、ドイツ軍の人が？」

数人のクラスメイトが輪になり談義し始める。

「というか、専用機持ってるだけで篠ノ之博士にお近づきになれるんでしょ？　いいな～。」

「言っとくけど、良いことないわよ？」

そう言いながら、鈴は机に肘を乗っける。

「え～、そうなの？」

「でも、リリィ先生とマンツーマン……、キャッ。」

なんとも危ない思考をした生徒がいたものだ。

鈴はため息をつきながら口を開く。

「あんた、あの人既婚者よ？」

「え、そうなのっ！？」

「初めて聞いたんだけど。」

「でも、いつも束博士と一緒にいるしね～。」

「あ～あ～、残念～。」

たいていのクラスメイトがそう言って、肩を落とす。

呆れながらも、鈴音はクラスメイトを眺めた。

「ん、だったらなんで、なおさらドイツ軍人が言いに来るの？　篠ノ之博士がドイツに肩入れしてるわけでもないのに……。　そもそも、なんで校内に軍人がいるの？」

その言葉に、鈴は何も言えないでいた。

296　騒々しい朝（後書き）

千冬＆クラリッサ、鈴という状況ｗ

ゆっくりと準備でもしましょうかねｗ

ちなみに、今だリリィ達は自室にいますｗ

リリィが寝坊し、束を起こさないため……。

二人とも寝ていますｗｗｗ

おそらく、次話はそんな感じのお話（、ー、）／~ ~

２９７　悪巧みする二人（前書き）

とりあえず、尺に入りきらなかったため、自和に続くｗ

そんな感じで、お読みください。

Ｐ３

297　悪巧みする二人

「全員席につけっ！！」

千冬はそう言いながら、一組の教室に入る。

久々に早朝から千冬を見たためか、教室内は変な感じで沸き立つ。

懐かしいと思いながらも、千冬はため息混じりに口を開く。

一方で、篠ノ之夫妻に充てがわれた部屋。

「……。」

「……にゃ……。」

未だお二人とも、睡眠中。

クローディヌの為にドイツに行く、そんな感じで昨日話していたが、完全に爆睡していた。

そもそも、この二人。

クローディヌの為に、ドイツに行く気はさらさらない。

全員忘れていると思うが、リリィと束は他人に興味がない。

そして、それは周りから見れば人嫌いのようにも見える。

多少教員をし始めて、和らいできたと思う。

だが、会ったばかりのクローディヌに対してはどうだろう。

束にとっては、フランス政府とデュノア社が出した広告に、少しだけ興味があるだけ。

リリィにとっては、クローディヌの使用された薬と、使用した人物、団体に興味があったりする。

微妙にクローディヌの事を、心配しない状態だった。

だからこそ、寝ている。

理由はもちろん『検索終了。』、あるようだ。

電子音が鳴ると、二人は目をこすりながら起きた。

「……にゃ、……腰、が……。」

束は起き抜けにそう言いながら、シーツをベットの外に放り投げる。

どっちかというと、ベットから落とすといったほうが正しいだろう。
シーツが落ちると、何も着ていない二人の体があらわになる。
何も着ていないのは何時もの事だが、ややベットは濡れていた。
その上に寝ていたという事なら、どれだけ疲れることをしたのだろう。

「……モニター転送。」

リリィはそう呟くと、部屋にあるパソコンからフリーダムにデータを転送させる。

「……なんで、女より男の方が平気なのかな……。」

そう呟きながら、束はリリィの腕にもたれかかる。
お互い何も隠すものがない生まれたままの状態のため、少しだけリリィの頬が染まった。
見慣れているとはいえ、好きな女性の全てを見たら何時までも同じ反応をするだろう。

「リリィちゃん……。」

そんなリリィを理解できたのか、束は少し呆れた。

「さて、ドイツまで行きますか……。」

リリィは髪の毛を後ろで纏め、サングラスをかける。

いつものスーツから、ラフな服装に代わりリリィのようには見えない。

着ているものは女性服。

男としてどうかと思うが、言ったところで無駄だろう。

なにより、束がコーディネートした服だ。リリィが着ない訳がない。

「……で、なんでパスポート？」

束はいつもの服ではなく、白を基準とした落ち着いた服を着ていた。

「なにって、ドイツ行くからだけど？」

「……わざわざ、向こうの研究施設に「今から行きます。」って言うつもり？」

そう言って、束は呆れた。

確かに航空機で言った場合、何らかの情報が筒抜けになるだろう。

そして航空機という檻にいる間に、研究施設は何でも出来る。

逃げることでさえ。

「普通に飛んでいったほうがよくない？　リリィちゃんとなら、一時間もしないうちに着く思うけど……。」

束はそう言って、リリィに抱きつく。

確かに航空機で行くより、飛んでいったほうが良い場合がある。

しかし、問題があった。

レイジングハートの機動力が、航空機とほぼ同じなのだ。

現在の航空機は、ＩＳの登場により進歩している。

ああ見えて、航空機はかなり早い。

ＩＳと同じくらい、速度が出るのだ。

つまり、ＩＳで行くのと航空機で行くのは、自由性以外だいたい同じようなものなのだ。

そして、その速度で領土侵犯した場合、ＩＳと簡単に見つかる。

はっきり言えば、レイジングハートには超長距離移動はむいていないということだ。

297　悪巧みする二人（後書き）

……そういえば、結構長いことやってるよね……。

この作品……。

……5巻は50話で収める気ないのでｗｗｗｗ

今「束がヒロイン」作品探せば、結構あるのかな？

長いことやっていると、妙に……。

そうだっ！！

300万アクセスや800人もお気に入り登録してくれたから、ここらへんで感謝という意味でイベント起こそう……。

第一回、感謝イベント！

リリィ「……第一回って……。　二回目あるの？」

ローズ「……たぶん……、無い……。」

簡単にいえば、投票ですね。

自分が好きなキャラクターを選び、感想かメッセージを送ってください。

なんか、誰が1位になるか目に見えるし……。

キャラクター

０１：篠ノ之リリィ

０２：篠ノ之束

０３：織斑千冬

０４：織斑一夏

０５：篠ノ之箒

０６：セシリア・オルコット

０７：山田真耶

０８：更識楯無

０９：凰鈴音

１０：シャルロット・デュノア

１１：ラウラ・ボーデヴィッヒ

１２：ナターシャ・ファイルス

１３：フリーダム

１４：ローズ

１５：クラリッサ・ハルフォーフ

１６：篠ノ之リリィ（未来）

１７：クローディヌ・サミナード

とりあえず、セリフがあったキャラはこんなものかな？

ちなみに、これ一種の人気投票だったりもしますので……。

三名選んで、投票してくださいね～。

一人目に書かれたキャラに３０Ｐ
二人目に書かれたキャラに２０Ｐ
三人目に書かれたキャラに１０Ｐ

何があるかは、まぁ、ここでは秘密？
ということで。

前、言っちゃったけど……。

毎日投稿しているため、期限は今月末まで。
投票待ってるよ～ノシ

リリィ、ローズ、リリィ（未来）って、違いあるのかな……？

２９８　セシリアの憂鬱（前書き）

む、今日のパソコンは一味違うぞっ！！

一発で行の区切れ無しに、貼り付けることができた！

Ｐ３

298　セシリアの憂鬱

朝から一組は騒がしかった。

一時限目は真耶の座学だったが、セシリアをはじめとする生徒が学園祭の事で麻耶に、座学ではなくメイドについて講義すべきだと行った途端、真耶が折れ、一組の授業が妙に崩壊する。

なぜ、メイドなのかというと、事の発端は各部対抗織斑一夏争奪戦という、一夏自身の人権を無視したゲームで、決まったことだ。

全員が楯無の提案を聞き、学園祭に向けてやる気になったせいで、どう集客するか提案していたとき、埒があかないせいでラウラが口を開いた。

「メイド喫茶はどうだ。」

おもむろに発せられた言葉は、全員の度肝を抜くのには十分あった。

当たり前のように、ラウラの言葉でクラスが静まり返る。

そもそも軍人であるラウラが、メイド喫茶という俗なものを発言すること自体おかしいのだ。

日本を偏った感じで見た一種の男性が思い浮かぶ言葉を、なんのためらいもなく口に出すそのラウラは、普段のキレをまとった彼女とは違うふうに見れただろう。

「客受けはいいだろう。　それに飲食店は経費の回収が行える。確か、招待券制で外部からも入れるはずだ。　それなら、休憩所としての需要も少なからずあるはずだ。」

冷静に聴けば、集客効果を狙った上、一夏という餌を使用した喫茶店だと、誰でもわかる。

「さらに織斑一夏に執事をさせれば、それなりに集客はできるだろう。」

そう言うと、全員が賛成しは始める。

そして、クラスの出し物はメイド喫茶、と織斑君執事喫茶。

もとい、『ご奉仕喫茶』に決まった。

ネーミングセンスが寒いのは、仕方がない。

「メイド服どうするの？」

シャルロットがラウラに囁くように話しかける。

そのことに、ラウラは腕を組み考え始めた。

クラス全体に、シャルロットの言葉が聞こえたのか、ラウラに視線が集中する。

「……お義父様なら、一日でなんとかしてもらえうのだろうが、今回ばかりはお義父様を頼ってしまっては、何かがダメな気がするな……。」

そういうと、クラス全員が少しだけ目を伏せた。

全員が同じ思いなのだろう。

「……ふむ、ここはお前の出番だぞ、シャルロット……。」

「ふぇっ！？」

そう言って、ラウラはシャルロットに全て放り投げた。

（よくよく考えますと、各部対抗なだけで私達クラス出典が頑張る必要はないのでは？）

今更ながらセシリアはそう思い、クラスメイトを見る。

そう思ったのは、授業を中止して数十分後の事だ。

やるからには完璧を。

セシリアの主義である。

正確にはｎｏｂｌｅｓｓｅ　ｏｂｌｉｇｅ（ノブレス・オブリージュ）。

直訳すると「高貴さは義務を強制する」を意味し、日本語では「位高ければ徳高きを要す」などと訳されている。

セシリアの育ちは、昔リリィに吐露したように、親が死んだゆえに、セシリアは一人でオルコット家を支えなければなくなった。

そして、セシリアはノブレス・オブリージュという言葉をまっとうし始めた。

し始めなくては、いけなかった。

ノブレス・オブリージュは、一般的に財産、権力、社会的地位の保持には責任が伴うことを指す。

セシリアは初めてこの言葉を知ったとき、これを主義にし始めた。

そうでもしなければ、家族の全てを失ってしまう。

脅迫めいた自身の思いで、胸に掲げてしまったのだ。

結果、父親のような男性を全男性と思い、男性を見下し始めた。

だが反面に、彼女の意思を強もする。

だからこそ、セシリアは代表候補性という席に座ることができているのだ。

「……もうちょっと、腰は曲げたほうがいいですわね。」

しかし、その主義がここまで裏目に出るとは思わなかった。

言い出しっぺであるが故に、授業中止という暴挙をセシリアは補わなくてはならない。

本当に今更だが、授業を中止する必要はなかっただろう。

だが、中止してしまったのだ。

仕方なしに、幼馴染兼専属メイドのチェルシーを思い出しながら、指示を出す。

まさか、全く知らぬメイドの事を享受するなど、思っても見なかったのだ。

うろおぼえながらも、セシリアはメイドという形を作り上げていく。

はっきり言って、通常授業に戻してもらいたかったセシリアだった。

298　セシリアの憂鬱（後書き）

……ふむ、作者はとんでもないことを考え始めたようです。

このまま行くと、亡国企業が余りにも弱すぎるし、悲しすぎる……。

……なら、強化するしかないよね……？

……ｗ

ではノシ

２９９　学園祭に向けて（前書き）

サブタイトル詐欺ですが何かｗ

思いつかなかっただけですよｗ

Ｐ３

２９９　学園祭に向けて

「一組は織斑君がいるからいいよね～。」

そう話をしているのは、三組の生徒だった。

そしてその話し相手は。

「でも、世界で唯一の男だしね。」

クローディヌだった。

あのあと、クローディヌは医務室を抜け出し、自室のバックの中に入れてあるカプセルケースから薬を取り出し、飲むことで何時ものように戻ったのだ。

それまでは妙に苦しんでいたが、薬を飲んだ途端落ち着いた。

一種の精神安定剤なのだろう、と誰もが思うがこれこそリリィが言った「何らかの形で成長を止めている。」ものだったりもする。

薬に名前なんかない。

だが、名前を付けるとするなら、成長抑止剤だろう。

クローディヌの体は、高校生に見えるようになるまで成長させられ、ＩＳに馴染むようにチューニングされている。

だが、人をそんな簡単に成長させることはできない。

そこで思いついたのが、成長するのに必要なものを過剰に分泌させ、成長を早めようという動きだった。

「仕方ないと言えば、仕方ないかな。」

実験は成功し、クローディヌは高校三年といっても良いような姿になっていた。

誰もが、中学生ほどの年齢だとは感じないだろう。

しかし、実験で思わぬ副作用が出た。

過剰分泌させたものの増殖が、止まらないのだ。

誰もが困り、クローディヌの廃棄が決まった。

そのとき、一人の男が成長抑止剤を作り上げたのだ。

そのおかげで、クローディヌは何とか生きることができている。

生かされていた。

千冬は職員室で、必死にデータの打ち込みをしていた。

メイド喫茶とはいえ、飲食店だ。

「……今の女（ガキ）に、アレはできるのか……。」

書類には飲食物を取り扱うと書かれている。

なら、検便はしなければいけないだろう。

保健所へ送るデーターを作成しながら、ため息をついた。

学園祭のことを考えると、頭が痛くなっていく。

「……千冬、そこ間違ってる……。」

「む。」

その言葉に、千冬は打ち込んだデータを見直した。

確かに間違っている。

千冬はデータであることに感謝しつつも、修正した。

「……で、なんでここにいるローズ。」

データを打つ手を止め、千冬は後ろを振り向く。

そこには、リリィのスーツを着たローズがいた。

正直うらやましく感じるだろう。

千冬はローズではなく、リリィのスーツを見続けた。

「……兄さんの、代わり……？」

そういうと、やる気のない眼を閉じる。

そして髪の毛を少しだけ弄り、指で瞼をこねくり回し目を開けた。

「……っ！」

千冬は息をのんだ。

やる気のない眼は、リリィのように少しだけ吊り上っており、ローズの覇気が消え、リリィの覇気がまとわりつく。

「災厄だからできることだけどね。」

ローズの口調も変わり、そこにいるのは完全にリリィに思えた。

というより、災厄ではなく兄妹だからできる芸当ではないか。

（……確かに書類や事務仕事はできそうな気がするな。）

だがそんな気配があるだけで、ローズがリリィと同じように仕事ができるわけでもない。

千冬はそう思っていた。

「貸して。」

そういうと、ローズは千冬の処理しなければいけないデータを半分奪い、処理し始める。

その光景に千冬は唖然とした。

「……。」

ローズは無言で書類を処理し始める。

その速度はリリィには及ばないものの、処理速度は千冬以上だった。

千冬はそのデータを回してもらい、確認する。

ミスがない。

瞬間的に落ち込んだ。

あの兄にして、この妹というべきか。

兄が万能なら、妹も万能らしい。

「……はぁ。」

再度ため息をつき、自分の書類を片付け始めた。

ローズに半分押し付けたまま。

２９９　学園祭に向けて（後書き）

ローズのモノマネ

スマホに打ち込んだネタに、あった文字。

基本ローズの容姿は、リリィそっくりです。

目にハイライトがなく、タレ目というだけ。

そこを変えれば、ローズはリリィに……ｗ

まぁ、それは置いておきましょう。

まだまだ、表は受け付けてますよ。

キャラクター

０１：篠ノ之リリィ

０２：篠ノ之束

０３：織斑千冬

０４：織斑一夏

０５：篠ノ之箒

０６：セシリア・オルコット

０７：山田真耶

０８：更識楯無

０９：凰鈴音

１０：シャルロット・デュノア

１１：ラウラ・ボーデヴィッヒ

１２：ナターシャ・ファイルス

１３：フリーダム

１４：ローズ

１５：クラリッサ・ハルフォーフ

１６：篠ノ之リリィ（未来）

１７：クローディヌ・サミナード

一人目に書かれたキャラに３０Ｐ

二人目に書かれたキャラに２０Ｐ
三人目に書かれたキャラに１０Ｐ

ちょい役ばっかですけどねｗ

Ｑ：そもそも、リリィが二人居るんですが……。

Ａ：気にしないｗ

３００　守るためのルール（前書き）

後半のキャラ説明だけだけど、本作品に登場ｗ

布仏姉妹ｗ

Ｐ３

300　守るためのルール

「Mir tut es leid, da? ich mich frage, ob, wie hier zu gehen ist, Sie gehen sollten,（すみません、ここに行くにはどういけばいいでしょうか？）」

リリィが近くを通った女性に尋ねる。

その手にはドイツの地図が握られていた。

女性はその地図を見て、丁寧に答えてくれる。

「Danke.（ありがとう）」

リリィは振り返り、束と共にその場を後にした。

既に二人はドイツ国内。

予定通り、遺伝子強化試験体実験施設を回っていた。

石造りの坂道を歩く。

「……束。　本当に……。」

心配そうにリリィは束を見る。

その目は青く、普段の色とは違っていた。

フリーダムのサードシフト。

ＩＳ用語で言えば、そう片付けられる。

だがフリーダムはＩＳではなく、災厄だ。

束を取り込むとで、進化するこの行為。

実は束にとっては、かなり問題なのだ。

この行為は、束の体を変化させることにより、一時的に束も災厄と同じ能力を持つことができる。

もちろんリリィと一体化する為、思考共有、身体共有、処理能力増加などメリットはあるのだが、反対にデメリットもある。

束の体を一時的に作り替えるとはいえ、もとは人間。

災厄ではない。

そのため、体が人間から離れていくのだ。

数分程度ならそれほど問題はないだろう。

しかし、時間がたつにつれ、束は人ではなく災厄になっていく。

束にとっては、なんのデメリットでもないのだが、リリィにとってはデメリットだった。

束を守る。

人として、愛する女性として守っていたのだ。

つまり、リリィの中では束の災厄化は、彼女を守ったことに入らない。

このことは、束も理解している。

もちろんリリィは、束が災厄化してもいいということを理解していた。

「……。」

束は束なのだから、人でも災厄でも守ったことにはなるのだろう。

しかし、リリィの妙な思いが束を災厄化させることを拒んだ。

とは言っても、既にドイツに来るときに一時間強は災厄化していたが。

「あ……。」

束が店頭のガラスで、自分の目がもとに戻っていくのを確認していた。

一夏は困惑していた。

「おりむ～、おりむ～。　一緒にケーキ食べない？」

「こら、仕事中でしょ。　布仏家の常識が疑われるでしょ……。」

自身はどう動けば、最善の道を辿れるのか。

そんな壮大な思考が、一夏の頭の中によぎった。

方やケーキを持ち、一夏に話しかける少女。

方や眼鏡で三つ編みという、お堅く仕事ができるという感じの女性。

二人に挟まれるように、一夏は生徒会室の片隅に立っていた。

布仏本音という名前の少女は、一夏にケーキを差し出す。

一応、一夏と同じく、一年一組所属の生徒だ。

常に眼むたそうな雰囲気に、ゆったりとした行動。

そして、縁側で緑茶をすすっている老人見たく、のほほんとしている事から、一夏に「のほほんさん。」と呼ばれている。

もう一人の、出来る女性な感じの生徒は、布仏虚。

名字からわかるように、二人は姉妹だ。

どうしてこれほど対照的な性格なのか、リリィなら何か分かるかもしれなかったが、一夏に分かるはずもなく、一夏脳内七不思議の十五番目に記憶されている。

なぜ、七不思議なのに十五番目なのか、理解不明だが、一夏はそんな事を考える暇はなかった。

生徒会室には、現在生徒会長の楯無がいない。

唯一、この今にも虚が本音を拳骨で殴ろうとしている、この状態を止めれる可能性がないのだ。

「本音、私達が粗相をしてしまったら、更識家の名に泥を塗る行為と同じことなのよ。」

そう、二人の家系は楯無家に代々仕えてきた家系である。

それゆえに、楯無の発言力は二人に効果があるのだ。

もちろん、この今にも爆弾が爆発しそうな雰囲気を崩すことができる位に。

一夏は、本音に振り下ろされる拳骨を見て「早く帰ってきてくれ……。」と、心の中で叫んだ。

３００　守るためのルール（後書き）

ちなみに、まだ束は災厄化していません。

人間：＝☆＝＝＝＝＝＝＝＝：災厄

的な状況です。

もちろん、☆が今の束の存在状況ｗ

まだまだ、人間ですｗ

布仏って言いづらくない？

「のほとけ」……。

最初、読めませんでしたｗ

３０１　千冬とローズと書類（前書き）

壁に耳あり、障子にメアリー。

過去にこんな間違いをした漫画か何かを読んだ記憶が、私にもありましたｗ

（沙＊・ω・）Ｐ３

３０１　千冬とローズと書類

「千冬はさ、こういう仕事できないの？」

データ入力する手を止めず、リリィになりすましたローズが喋る。

職員室には、リリィの休暇が届いているのか、ローズを見ては「リリィ先生、休暇とったのでは？」と、問いかけてくる始末。

聞かれるたびに、ローズは否定していく。

しかし、否定されたところで、教員は「ああ～。」と言って納得するだけで、ローズに対して何も言わない。

どうやら、相当頭をやられているようだ。

千冬もその一人のようだが、どういうわけか至って普通である。

「ふむ、できないことはないな。　基本は山田くん任せだが……。」

他人まかせで、今まで仕事をしてきたと暴露。

ローズはそれが千冬だと、全自身が認識している事を思い出した。

どの時空をとっても千冬は頭が結構良い方だが、他人まかせにすることが多い。

これを知ってるのは、せいぜいローズぐらいだろう。

「……逆に聞くが、なぜお前はこういう事が出来るんだ？」

千冬は普通に誰もが思い浮かぶことを質問する。

だが、リリィのようにデータを打つ手を止めない。

奪い取った半分の情報を処理し続け、口を開いた。

「う～ん……、昔……似たような事、してたからかな……？」

「それ頂戴～♪」

束はそう言い、お金を払い物を受け取る。

リリィが上空で探索している間、束は地上でゆったりしていた。

と言いつつも、ちゃっかりレイジングハートのレーダは機能している分、遊んでいるわけではないようだ。

（……海外でも日本語が通じるのは、良かったのやら、悪かったのやら……。）

そう思いながら、束はドイツの街を歩き始めた。

ＩＳの普及により、日本語が英語に変わる国際共通語として認知されている。

理由ととても簡単。

束がＩＳを普及させる際、ＩＳの論文及び低開発等の言語を日本語で書いたからだ。

そのため、研究員たちはＩＳを作るために日本語を英語に直した。

しかし、英語に直したところで、翻訳には少しの誤差がでる。

その部分が最初ＩＳ、白騎士のパーツを解読し、作ろうとした人間の失敗。

正確性を持つため、研究員はＩＳを作る前に日本語を覚えねばならなくなった。

そして、年月が立ち国家ごとに送られるデータ。

それらも、全てが日本語。

結果、日本語ができるものは優遇されやすくなったのだ。

そのため、スクールでも日本語を教わる国が多くなり、日本語が国際共通語として認識されていった。

そもそも、ＩＳの生みの親である束にゴマを刷るため、日本語を使う国も早々に会ったぐらいだ。

日本語を国際共通語として認識するのは、早かった。

これは、束にとって想像がついていたことである。

むしろ確信犯だ。

だが、その結果。

海外で日本語を話すと視線を集め、身分がバレることはかなりあり、日本語なら気がつかれないと、研究の話を日常会話のように話して第二世代型の技術に取り入れられる。

そんな、厄介な事も引き起こしてしまったのだ。

日本語を扱う日本人は、良い意味でも悪い意味でも目立った。

『束、研究所を発見したよ。』

だからこそ通信端末など使えず、プライベートチャンネルだけで離さないといけなくなった。

『りょうか～い♪』

このことには、不満を垂らしたい束だった。

隣にいても、下手に話すことはできない。

その国の母国語を使ったところで、妙な鈍りから注目されることもある。

「壁に耳あり障子に目あり」ということわざがあるように、下手にしゃべることができなかった。

まぁ、意味は「かくしごとやないしょ話は、どこからともなくもれやすいので十分に注意する。」ということなので、少々意味は違う。

だからこそ、長年連れ添った夫婦のような感じで歩き、プライベートチャンネルで話す。

数年前から、変わらない事だ。

フリーダムと未完成で仮組みのレイジングハートで、誰にも気がつかれることなく話す。

（……それにしても、何か嫌な予感がする……。）

３０１　千冬とローズと書類（後書き）

デート、デート……。

何かあるかな……。

そういえば、最近ノクターンの方書いてないね……。

半月に一回は書いてたんだけどね～。

それより、ドイツデート……。

何かある？

まぁ、２４時間以内に考えるんだけど……。

まだまだ、表は受け付けてますよ。

キャラクター

０１：篠ノ之リリィ

０２：篠ノ之束

０３：織斑千冬

０４：織斑一夏

０５：篠ノ之箒

０６：セシリア・オルコット

０７：山田真耶

０８：更識楯無

０９：凰鈴音

１０：シャルロット・デュノア

１１：ラウラ・ボーデヴィッヒ

１２：ナターシャ・ファイルス

１３：フリーダム

１４：ローズ

１５：クラリッサ・ハルフォーフ

１６：篠ノ之リリィ（未来）

１７：クローディヌ・サミナード

一人目に書かれたキャラに３０Ｐ

二人目に書かれたキャラに２０Ｐ

三人目に書かれたキャラに１０Ｐ

たくさんの人が、参加してくれると嬉しいな～♪

一種の燃料催促じゃ……（；´Д｀）

ああ、知ってる人はいると思うけど。

この作品に荒らしが現れました。

作品を書いている方は、要注意です。

ちなみに、アカウントが消えていますが、新しく作ってまた荒らしているでしょう。

おきおつけくださいね。

３０２　ドイツでのデート（前書き）

ドイツは次書くと連続して、ドイツ編。

だから、次は学園編かな？

ということで（どういうことで……）、Ｐ３

３０２　ドイツでのデート

束とリリィはドイツの街並みを堪能すると、街から離れ景色の良い場所に腰を下ろす。

リリィが座り、その足の間に束が座る。

束の背をリリィは受け止め、抱きしめた。

その感覚に束も酔いしれたのか、数分間その状態が続く。

「……。」

腰に回ったリリィの腕。

頬に触れる束の手。

何も言わないでも、お互い同じことを考えてるのがわかる。

幸せな気持ちと、お腹すいたという気持ちだ。

ここまで来るのに、二人とも何も食べていない。

お腹が空くのは自然の摂理だった。

「はい、リリィちゃん～♪」

リリィの頬に触れている手の反対で、束は布に包まれた何かを差し出す。

しかしリリィはそれを受取らず、束を抱きしめ続けた。

束は少しだけ頬をほころばせ、リリィの頬から手を離す。

そしてその手は、反対側の手に握られた何かに持っていかれる。

ゆっくりとその布を解き、束は中からお弁当箱を出した。

箒に宣言した通り、二人は本当にデートしにドイツまで来たのだろう。

はたから見たら、カップルが近場でピクニックをしている光景に見える。

実際はその通りなのだが、すでに結婚もしているため正確には「ピクニックに来た夫婦。」か妥当だ。

「はい、あ～ん♪」

束はお弁当箱を開けると、お箸で卵焼きを取り、器用にリリィの口元に運ぶ。

妙に頬を染めながら、リリィは口を開き卵焼きを食べさせてもらう。

束の全てが、自身を満たしてくれる。

リリィはそう感じながら、束を抱きしめていた腕を離し、お弁当箱を束の手の上から触れる。

お弁当箱を持つのではなく、束の手に添えるように持つ。

そのことに、今度は束の頬が赤く染まる。

時間が止まったかのように、束の動きが無くなった。

その間に、リリィは何処からともなくお箸を取りだし、束がしてくれたように卵焼きを取り、束の口に近付ける。

お弁当は昨夜、リリィと束が二人で下ごしらえをしていたので、最高傑作といっても良い出来だった。

もちろん二人で食べるように考えていたため、お弁当箱の中の量はそこそこ多い。

「っ！　あ～ん～☆」

気がついたのか、リリィの取った卵焼きを束そう言いながら、口を開く。

そして束は卵焼きを食べて、さらに頬を赤く染めた。

「……ふふふ。」

そんな束を見て、リリィは苦笑を漏らしてしまった。

束はそのことに、少しだけ頬を膨らませる。

「……リリィちゃんだっけ、同じだったくせに。」

そう言うも、二人の雰囲気は決して悪いものではない。

むしろ同じと言う事に、お互いが嬉しくなっていた。

「はい、あ～ん♪」

更にリリィが束に、唐揚げを取り口元に運ぶ。

「……はむ……。」

少しだけむくれながらも、束は嬉しそうに唐揚げを食べさせてもらった。

そんな束を見て、リリィの頬が緩む。

やはり初々しい恋人同士にしか、見ることができない。

初めてこの光景を見た者の誰が、夫婦だと思うか。

「やぱり、束は可愛いね～。」

リリィはそう言いながら、束の頬に自身の頬をくっつけた。

ちょっと無理があるような体勢で、頬と頬同士が触れ合う。

リリィの髪が邪魔をするが、それでもリリィと束の頬は触れあった。

気持ちよさそうに、リリィは目を瞑る。

「……リリィちゃんだって……。」

そう呟き、束はゆっくりとお弁当箱とお箸を置いた。

暗い室内で肩までかかる髪を揺らし、その者はいた。

「……自らの存在を忘れた者が、まだ生きていたとはな。」

その言葉は毒々しく、憎しみを持っていた。

その者は一人モニターを見つづけ、やがて声も出さず、その口を釣り上げる。

「まったく、貴様は忌々しい存在だな。」

そう呟くと、その者はモニターに背を向ける。

「……厄介な奴だよ、貴様は……。」

３０２　ドイツでのデート（後書き）

２日も書くのに時間を要した……。

その間、何も書いてない。

仕事中にネタを考えるぐらい？

とりあえず、久々に書いたこういう話。

こうだったっけ？

知らんｗ

最後の方で、めんどくさい人登場ｗ

というか、誰だかわかる気が……。

……って、なんでこいつがここに……。

という感じですよね……。

言っておきますけど、本人じゃありませんよ。

あっちはあっちで、死んでますし……。

こうでもしないと、リリィの敵がいない……ｏｒｚ

３０３　気がつかれる状況（前書き）

今更ながら、どういう状態か整理したくなる……。

そういえば、ストライクのアグニも出力調整でリミッターかけていたね～。

Ｐ３

３０３　気がつかれる状況

放課後。

第四アリーナで練習しようとしていた一夏と箒は、以外にもクローディヌによって第三アリーナに移動していた。

そこにはシャルロットとセシリアがＩＳを装備し、話し合っている。

「ん？」

「一夏さん？」

近づいてくる一夏達に気がついたのか、二人は話すのを止め一夏達の方を向く。

「今日は第四アリーナで練習と聞いていましたけど？」

セシリアが一夏の予定を知っていたのか、そう問いかける。

なぜ理解してるのか問いたくなるが、箒も鈴も同じことができるのだ。

ひとえに愛がなせる技。

と言いたいが、シャルロットもラウラも覚えている。

理由は簡単だ。

全部リリィが考えて、一夏でもわかる簡単な時間割にしているのだから。

二人はＩＳの展開を止め、自身の足でアリーナに立った。

そして気がついたのか、傍らに立つクローディヌに目を向ける。

「……そちらの方は、何方ですの？」

同じように箒も気になっていたのか、セシリアの言葉に同調するように頷く。

セシリアは少しだけ眉間にシワを寄せて、一夏を見た。

当たり前のように、セシリアの表情の意味を理解していない。

「セ、セシリア……。　その……。」

「あ、いたいた～♪」

一夏がセシリアにクローディヌを紹介しようとしていたところ、誰かが遠くから口を挟んできた。

その声に一夏は、声がした方を向く。

「やっほ～一夏。」

そこには鈴と楯無がいた。

なぜか、ほぼ全員集合をしてしまっていた。

「で、どういう状態？」

鈴が箒に近寄り、そう尋ねる。

最近、二人の仲が良いのは一夏効果か、リリィのせいか。

「私もわからないのだが……。」

そう言いつつも、箒はクローディヌを見続けた。

「自己紹介でもしようとしてたんじゃないのかしら？」

そんな箒の視線を理解してか、楯無はそう言葉を放つ。

そのことに、一夏が頷き口を開く。

「え～っと……。」

「クローディヌ・サミナード。　よろしくね。」

クローディヌはそう言うと、セシリアに手を差し出す。

前時代的な挨拶と思い、握手を交わした。

「貴方でしたか、新しいフランス代表というのは。」

セシリアはそう言うと、手を離す。

情報に疎い、一夏と箒は唖然としてクローディヌを見たと、シャル

ロットを見た。

二人はシャルロットがフランス代表から外されてることを、知らされていない。

箒は少しは感づいていたようだが、やはり驚いてしまうだろう。

そもそも、ＩＳの生みの親である二人を親のように呼んでいるのだ。

フランスとの関係が最悪、もしくは無くなった考えるのが妥当である。

「そんな、どうして……。」

一夏だけが気がついていないようで、そう呟いていた。

（……そういえば、一夏は知らないのだったな。）

その言葉にシャルロットは苦笑いをした。

性別を明かして転入し直した時、一夏に軽く説明はしたが、デュノア社や身内のことはあまり喋らなかったのだ。

故に一夏はほぼ何も知らない。

もちろん、セシリアや鈴だって、詳しいことを知っているわけではない。

ただ世界中が手に入れれる情報は、シャルロット・デュノアはフランス代表候補生から外された、ただそれだけだった。

「シャルロットさん。　深くはお聞きしませんが……。」

セシリアの脳は、ある一つのことに気がついていた。

新しい代表候補生。

それと同時に、デュノア社の第三世代トライアル途中参加。

これだけでも、かなり大雑把なことは理解できる。

セシリアはシャルロットからゆっくり目を移動させ、クローディヌを見て、そしてシャルロットに視線を戻す。

そのことに鈴も気がついたのか、少しだけ表情が固くなった。

「……うん。　多分セシリアが考えてるとおりだと思うよ……。」

そう言って、シャルロットは笑った。

３０３　気がつかれる状況（後書き）

いや、本当に。

リリィ救出作戦の時、完璧に忘れてましたｗ

ストライクのアグニにかかってるリミッターｗｗｗ

うん。

本当に……。

まずいね～。

そして初期構想を見つけたとき、懐かしく感じました。

災厄という言葉は適当な言葉で埋まっており、それはＭＳならなんでも……。

つまり、災厄はファーストＭＳからＵＣＭＳまでいたということですね……。

それなんてカオス？

集計結果は、４００万アクセス時に公開しようかな～っと、考えて

います。

３０４　遺伝子強化試験体実験施設（前書き）

すごく、だるいです。

という感じで、書く気力が妙に失せていますｗ

Ｐ３

３０４　遺伝子強化試験体実験施設

日が傾きかけた時間に、リリィ達はとある建物の近くに立っていた。

「……システム構造把握。　ロック解除。」

そう呟き、リリィは建物の外に配置されていた配線からハッキングを行なった。

二人にとっては当たり前のような事だが、一般人にとってみれば考え難いことである。

「……束。」

「展開してあるよ～♪」

リリィの言葉に、束はすぐさまレイジングハートの展開を終了していると答え返す。

リリィも既にフリーダムになっている。

束だけなら別にいいだろう。

はたから見れば、ただのコスプレした人間だ。

しかし、リリィの場合は違う。

青い翼は、世界で知らない者がいないほどに有名だ。

これでは隠密という状態ではない。

「……ゲートオープン。」

そう呟き、ゲートを開かせる。

重く大きい扉が、地響きを立てて開いてゆく。

それと同時に、建物内部から閃光が走った。

もちろん、簡単に当たるほど不抜けてはいない。

お互いスラスターを更かし、横に飛ぶ。

「……今の熱量っ！？」

束が何かに気がついたのか、閃光を目で追う。

しかし、目で終えるほどの速度ではなく、振り返った瞬間には先行は見えないでいた。

リリィがフリーダムを展開し、隠密という状態を外した理由がこれだ。

「……てあらい歓迎、ありがとうってねっ！！」

そう言いながら、ビームライフルを連射すると、建物内部で大規模な爆発が起こる。

束は唖然としながら、その光景を見つめ続けた。

相手を確認せず、完全に殲滅する。

（というか、データーの閲覧、及び回収、破棄が目的じゃなかったっけ？）

そう思いながら、ゆっくりビームが貫いた残骸に近寄る。

既に原型はとどめていないが、台座らしきものは無事だった。

「……砲台？」

リリィに近づきながら、束は台座を見て思ったことを口に出す。

「……ふむ。　まぁ、あれで落ちるようなら王ではないか。」

モニターの前に、そのものは座ってキーボードを叩いていた。

複数あるモニターの一つは、リリィたちを捉えており、二人の行動が完全に筒抜けだ。

画面の向こうでは、二人が建物の中腹に侵入しかけている。

「さて、どう歓迎するべきかな。」

二人はリリィを先頭に通路を歩いていた。

先程から対侵入者用なのか、レーザー兵器が起動することがある。

それだけでも、この建物には見られたくない何かがあるとわかるが、問題はレーザー兵器よりビーム兵器の方が多いということだ。

ビーム兵器理論は十年前に束が、リリィとフリーダムの力をもってようやく完全な完成を遂げた。

だが、その技術はＩＳにも日常にも普及させるように、使用した覚えがない。

ビーム技術はリリィと束にしか、理解ができないし、使用も、作成も出来る訳がない。

ＩＳの登場から十年たった今でも、ビーム兵器はこの二人にしか作

ることはできないのだ。

だが、この遺伝子強化試験体実験施設には、ビーム兵器が対侵入者用に設置されている。

「……クリア。」

リリィはそう呟き、束と共に歩く。

（……どう考えても、この施設……。　普通じゃないね……。）

束は警戒しながらも、考え続ける。

前を歩くリリィは死ぬということがないからか、平然と歩き束より目立つ。

「リリィちゃん。　……今どこらへん？」

不安そうに束は呟いた。

だが、リリィは束を見ることはしない。

「……リリィちゃん？」

再度、束が呼びかけるがやはりリリィは反応しなかった。

「……。」

真剣そのものの表情で、リリィは通路の先を見続ける。

束もリリィに習うように、通路の先を見た。

すると通路の終わりなのか、壁が見ることができる。

壁にはドアがあり、いかにもという感じの雰囲気が漂っていた。

３０４　遺伝子強化試験体実験施設（後書き）

さて、どうしよっかな～。

簡単に終わらせるのもアレだし、一日で数話というのも……。

……そもそも、ドイツに何しにきたｗ

ああ、見直せばいいかｗ

３０５　聞こえる声（前書き）

とりあえず、研究所に潜入ｗ

というか侵入ｗ

Ｐ３

３０５　聞こえる声

リリィは束を少し下がらせ、ビームサーベルの出力を戻す。
いつも使用している出力は２０％。
それでも、現存の機体はどれもフリーダムに追いつけない。
そのフリーダムが、出力を完全にしたのだ。
いつものビームサーベルが、離れているだけでも肌を切り飛ばせると束は錯覚した。

「ふふふ……、ここまで来てくれるとはね……、嬉しい限りだよ。
篠ノ之リリィ。　いや、災厄王フリーダム。」

その声に束は背筋が凍るような感じを受けた。
ビームサーベルが扉を切り裂いた瞬間、通路の反対側から声が聞こえたのだ。
束はいつもの調子が出ないのか、リリィに近づく。

「まさか、兎までご一緒とは……。　相変わらず仲睦まじいようで何より……。」

その声はあざ笑うかのように、二人に言葉を投げかける。
リリィは相変わらずビームサーベルを持ったまま、扉の向こうを見

ている。

「……久しぶりの再開を喜びたいが、時間でね……。　……そう遠くない未来に、パーティーでも開こうではないか。」

そう言うと、足音が遠ざかる音が聞こえた。

「大きなのをな……。」

リリィはフリーダムを解除し、片腕で束を抱き寄せる。

心配ないと言っているかのように、リリィの行動は束を安心させた。

「数百年ぶりの大きな会場を作っておいてやる。　それまで生きていたら、そのうち招待状が届くだろう……。」

扉の開く音がする。

「では、な。」

その言葉を最後に、静かになる。

一分近く束は動けずにリリィにしがみついていたが、もう声の主が居ないことに気がつくと、深い息と共に、その場に座り込む。

反対にリリィは、無表情で切り裂いた扉の先を見ていた。

「……行こうか？」

束はそんなリリィを見て、心が痛む気がした。

ゆったりと二人は、切り裂いた部分から奥に入る。

まだ少しだけ、束は怖いのだろう。

リリィの手を握っていた。

昔のような、破天荒な姿は既に見受けられない。

もちろん、リリィの存在が束を変えたのだ。

世界なんてどうでもいい。

リリィさえいれば、ほかは何も要らない。

その事が束を落ち着かせていった。

もしリリィがいなければ、少し驚く程度だったのだろう。

「……リリィちゃん。」

束は歩きながら、リリィを呼ぶ。

先程まで反応しなかったが、今度は「ん?」と言って束を見た。

なぜ、フリーダムを展開していた時は反応せずに、解除したら反応するのだろう。

隣に愛する人がいるというのに、フリーダムで音楽を聴いていた、という事はないはずだ。

少しだけそう思いながら、束は言葉を続ける。

「さっきの声。　リリィちゃんの知り合いだよね……。」

その言葉は、確実に先程の声の主を誰か聞いていた。

リリィは少しだけ、困った顔をして目を瞑る。

これでも束は、リリィの災厄時代のことは何も知らないのだ。

サードシフトの思考共有は、記憶を見ることはできる。

だが、互いに記憶を見ようとするとノイズが走るのだ。

理由は簡単。

リリィの前世、フリーダムが邪魔をしているのだ。

お忘れだろうが、前世としてのフリーダムはリリィの心に存在している。

別人格と言っても過言ではないだろう。

そのフリーダムが、抑えているのだ。

「……。」

もちろん、記憶だけの共有を抑えるだけで、他は共有することができる。

それ故に、束は先程の声の主がわからないでいた。

「……いいよ。」

少し考え、リリィはそう言った。

その間も、二人は歩き続ける。

本当ならリリィは話したくはない。

だが、今の内に話しておかないと、束が危険に晒される可能性もあるのだ。

なら、話してしまったほうが良い。

「……クルーゼ。」

束はその名を聞いた瞬間、頭の中で変態仮面と思い浮かんだ。

とりあえず、気のせいと思いリリィの言葉を待つ。

「災厄の中で、一番災厄という存在を体現している災厄だよ……。」

３０５　聞こえる声（後書き）

ということで、変態仮面ことラウの登場です。

ちなみに、ＳＥＥＤのラウじゃないよｗ

……あっちはあっちで死んだｗ

こっちはこっちで、別存在ｗ

でも、外見は同じでいいんじゃないかな？

とりあえず、世界を引っ掻き回すような奴はこいつでいいかなとｗ

というか、クルーゼは（　・∀・）イイ！！ラスボスｗ

なんか、間違えた気が……。

名前変えたほうがいいかな？

でもね～。

……あ、名前をラウだけにすればいいのかｗ

じゃぁ、クルーゼは？

畏怖の愛称？

まぁ、そんな感じで良いかな？

３０６　ローズの罪（前書き）

ぶっちゃけ、クルーゼという名前にしたのは間違いだった気が……。

とりあえず、６巻に入る前にご退場してもらいましょうｗ

（沙＊・ω・）Ｐ３

306　ローズの罪

ローズは千冬と話して、過去を思い出していた。

クルーゼ。

災厄の中で、特に破壊へ導こうとしている者の愛称の様なものだ。

過去に呼ばれた者は一人しかおらず、そしてその者はローズがよく知っていた。

災厄がまだ王に滅ぼされず、健在だった頃。

ローズは一人の災厄を作ったのだ。

最初は何も考えていなかった。

ただ、作り上げたかっただけ。

しかし、やがて兎が兄である王と共にいるとこを見て、ローズは嫉妬してしまった。

そこから、ローズは兎を追い詰めるようになる。

兄の隣は、兎じゃない。

そしてある時、ローズは作り上げた災厄を完成させた。

ローズの全てを受け継ぎ、プロヴィデンスと言うローズをコピーし

て兎を追い詰めるため。

しかし、予想外のことは起こるものだ。

ローズの全てを受け継いだ災厄は、ローズから殆どを奪っていったのだ。

プロヴィデンスとしての力、記憶、憎悪。

残ったのは、プロヴィデンスとしての自分と兄への思い。

それが、悲劇を生んだ。

作られた災厄は、憎悪だけを持ち破壊するだけの存在となりはてた。

そして、ローズが一番憎んでいた兎を。

王の目の前で殺した。

それこそ、災厄が滅びる引き金。

群れることのない存在が、国をつくり安定を求めた時代。

仮初だった災厄と人間の平和は、これで完全に崩れた。

王は災厄の、およそ七割を滅ぼす。

そして、作られた災厄は、王のように同族を殺し、人を殺した。

ローズは少しだけ溜息を付き、ふらっと何処かに歩き始める。

「……。」

クルーゼという災厄を作り出したこと。

これこそが、ローズの罪。

クルーゼを滅ぼさなければ、奪われた全てを取り戻すことはできない。

実を言うと、ローズの記憶喪失や感情不足はクルーゼが原因である。

クルーゼがローズから、大半の物を奪ったために起きた現象。

それはローズ自身だけではなく、世界すら毒牙にかけた。

「その災厄、これから何するつもりなんだろう？」

束がそう呟き、暗い通路を見渡す。

電気が通ってはいるが通路の電気は全滅しており、暗い中での歩行

になってしまっていた。

「ＶＴ（トレース・ヴァルキリー）システムと言い、クルーゼと言い。　なんで破滅思考を持つかな……。　……やっぱ、災厄という存在が問題かな……。」

リリィはブツブツ呟き、妙に鬱になったかと思えるほど覇気がなくなっていた。

というか、しおれていた。

「……ん？」

そんなリリィをよそに、束は何か引っかかったのか首をかしげる。

そして、気がついたのか目を見開きリリィを見た。

「じゃぁ、なんであの時、十万機も災厄が現れたのっ！？」

それはエンジェルダウン作戦時に起きた、原因不明の不明器襲来事件。

あれはリリィのデータで、全機が災厄と確認された。

だが、今の話を聞く限り十万機も存在があるには思えない。

さらに、存在が群れるはずもない災厄が群れをなして現れた、不可解な点が多過ぎる。

束にとっても文字通り、原因不明事件なのだ。

「……クルーゼは、ほぼローズの遺伝子配列を元に作り出されている。　さらにローズから、何かを奪っていった。」

リリィはそう言うと、ビームライフルだけを展開し、通路の先に向けて撃つ。

何かにあたり、通路の先で爆発が起こった。

「ローズは昔、災厄や人について研究していた。　もちろんクルーゼのような災厄が作られたんだ、クルーゼが災厄を作っても可笑しくはないよ。」

つまり、エンジェルダウン作戦時の十万機は、クルーゼがコツコツ作っていたということだ。

「まぁ、憶測だけどね……。」

そう言うと、リリィは壁にあるパネルを操作して、近くのドアを開けた。

３０６　ローズの罪（後書き）

ラウ・ル・クルーゼという名前は、詰まった私が「なんか、この名前だけで、何かが暗躍している気配があるような……。」から、登場が決定ｗ

でも、書き続けていると、何か違うということに気がつき出ては消える、ラスボスクラスなのにＲＰＧの中ボス的立場ｗ

原因は、フリーダムの強化ｗ

おそらく、まだ強化されるｗ

一応、送の代名詞として束（前世）を殺した的に書きましたが、まぁ、いいかｗ

どうせ、そこらへんちゃんと決めてなかったしｗ

クルーゼは、意外と好きなキャラ♪

３０７　出生記録（前書き）

う～ん、一気に１０人近くお気に入り解除するとは思ってもみなかったな～。

いきなり、過ぎたか～。

Ｐ３

307　出生記録

リリィが開いたドアの先には、数台のコンピューターが置かれていた。

施設の消灯がつかない割には、コンピューターの電源はついている。

リリィは束より先に入り、危険がないことを確認した。

「……大丈夫そうだね……。」

そう呟くと、リリィは真っ直ぐ電源がついているコンピューターに手を付けた。

その後ろを、ゆっくりと束が近づく。

そして、電源のついてないパソコンの電源を入れる。

「……ぁ、付いた……。」

電源がつかない、もしくは壊れていると思ったのか、束はそう口に出してしまった。

リリィは横目で束を見て、自分が手を付けているコンピューターを解析し続ける。

≪Ｅｉｎｅ　Ｇｅｂｕｒｔｓａｕｆｚｅｉｃｈｎｕｎｇ≫

コンピュータの文字はドイツ語だが、リリィが読めないということ

はない。

ここに来るまでに、簡単にドイツ語会話もしたのだ。

「……出生記録。」

そう読むと、自然と手がキーを叩き始めた。

少しして、画面に最新の出生記録が映し出される。

「……検体番号Ｙ－５０７７、名前無し……。　公式記録、抹消……。　ＤＮＡレベルでの異常、ＩＳに対し拒絶反応を示す程度。遺伝子配列は、イギリス人……。　備考、生体ＣＰＵの最終非検体。」

モニターには顔写真と共に、そう書かれていた。

さらに一つ前の記録を見る。

「……検体番号Ｙ－５０７６、名前無し……。　公式記録、この子も抹消……。　ＤＮＡレベルの異常は無し。　遺伝子配列はロシア……。」

一人呟きながら、リリィは読み続ける。

そして、Ｙ－０００１まで読むと、キーボードから手を離す。

「……全員パイロットじゃなくて、部品扱い……。」

つまり、人という存在ではなく、機械を動かす部品として書かれて

いた。

「リリィちゃん！！」

妙な感傷に浸っていたとき、束がリリィを呼んだ。

リリィは声がした方へ向くと、束はモニターを見てはおらず、その先にあるドアの先を見ていた。

ケーブルをさして、データーをフリーダムに転送する。

そして、動ける範囲で束に近づいた。

ドアの向こうにあるものを見て、束は固まっている。

束でも固まるようなものなのか、と思いつつリリィはドアの向こうをのぞき込む。

「……あ～。」

妙に納得してしまったのか、リリィはそんな声をだした。

そこには、人が入りそうな培養基が部屋を埋め尽くすかのように置かれている。

部屋自体が大きいのか、培養基もかなり置かれていた。

とりあえず、リリィは束の目を両手でふさいだ。

そして、ゆっくりドアを閉めた。

「……って、そういえばココ遺伝子強化試験体実験施設だから、あってもおかしくはないよね～☆」

そう束は言うと、リリィの手を外した。

「いや～、失敗失敗♪」

立ち直りが早すぎる気がするが、それが束だ。

リリィは束から手を離し、先程見ていたデーターを見る。

大容量のデーターを転送中の為、妙にコンピュータの起動が遅い。

そんな中、リリィは名前があるデーターを見つけた。

検体番号Ｃ－００３７。

リリィは目を細め、その書類データーを開く。

「検体番号Ｃ－００３７、名前……ラウラ・ボーデヴィッヒ。」

ラウラだった。

「公式記録、無し。　備考、ドイツ軍隊専用にチューニング完了。バトルチャイルド……か。」

どんどんデーターを開いていく。

すると、ＤＮＡ情報でリリィはキーボードを打つ手を止めた。

驚愕したのか、その目はどんどん開いていく。

「……なん、で……。」

そんなリリィに気がついたのか、束は近づいてくる。

「あ、やっぱりあったん、だ……ね……。」

束も開いているデーターを見て、唖然とした。

その姿はリリィと同じように、目が開いていく。

≪Ｅｉｎ　ＤＮＡ－Ｎｉｖｅａｕ，　ｅｉｎ　Ｊａｐａｎｅｒ.≫

モニターには、そう書かれている。

「ＤＮＡレベル、日本人。」と。

307　出生記録（後書き）

いやはや、この作品の趣旨にクルーゼはいらないということだね……。

失敗、失敗ｗｗｗｗ

そして同時に、テンションダウンｗ

まぁ、とりあえず言えることは……。

ラウラに何があったｗｗｗｗｗ

日本人？

どういうこと？

って感じだろうね。

まぁ、次話でノシ

３０８　サイクロプス（前書き）

前話はもう少し後で……。

とりあえず、書く気力が出なかった。

gd gd文でＰ３

３０８　サイクロプス

「……日本、人？」

驚愕しつつも、ラウラのＤＮＡマップの詳細を出す。

そこで、リリィは再度驚愕した。

ＤＮＡの塩基配列パターンを目にした瞬間、そのデーターを消す。

束が心配そうにリリィを見ている。

（……どういう事！？）

両手で顔を抑え、リリィは考え始める。

ＤＮＡ。

正式名称デオキシリボ核酸は、人間の遺伝子情報の事を指し、人体の血液・唾液・髪の毛・汗など全てに含まれる。

そしてその情報は全ての人間が異なっている。

全く同じという事は起きはしない。

（……あの配列パターン……。）

ラウラから抽出されたと思われるＤＮＡの塩基配列パターンを、頭の中で思い返す。

（……いや、実質不可能。　有り得ない……。）

頭の中では確認しては否定する事を繰り返していた。

何度も、何度も繰り返す。

「……。」

しかし何度やっても、答えは同じだった。

リリィは手を下ろし、天井を見上げる。

「「っ！？」」

そう考えている間に、建物が物凄い揺れを発する。

気のせいか、少しだけ耳障りな音が混っていた。

「……束……。」

そう束の名を呼び、瞬間的に身体から触手を出してサードシフトを展開する。

そして次の瞬間。

部屋はマイクロ波と炎に焼かれた。

「ぐはっ！？」

クルーゼはマイクロ波が充満する建物内にまだいた。

「……で、出口が……。　見当たらない……。」

知的そうな雰囲気が一気に崩れ落ちた。

そして災厄でありながら、その身を焼かれて逝くことになる。

なにげにリリィに強く言葉を発したクルーゼだが、結局はお粗末な終わり方だった。

ちなみに、出口はクルーゼの進行方向と逆だったりもする。

マイクロ波が建物全体を包み込み、爆発する中。
フェニックスは瞬間的に、爆発の外に飛び出た。
「束！　無事！？」
リリィが心配なのか、あせった声で束に問いかけた。
サードシフトだから、束の事はリリィも理解できているのだが、あせっているせいだろう。
口に出して問いかけていた。
「う、うん。　大丈夫だけど……。」
そんなリリィの言葉に、少しだけ束はたじろいだ。
「共有している。」とリリィに言うと、リリィは思い出したかのように調べ始め、安心したのか息を吐いた。
「そ、それより、今の……。」
「……サイクロプスだね。」
束が爆発を見ながら呟くと、間髪いれずにリリィが返答した。
切り替えが早いのか、いたってリリィの声は普通だ。
「……なに、それ……。　ギリシャ神話に登場する一つ目の巨人？

それとも、某有名カードゲームのモンスターカード？」

「カードゲームも元イラストって、前者じゃない？　しかも、今じゃあんまり見かけないし……。」

「……私達もやった事ないしね……。」

そう話し合うと、少しため息を付く。

「……で、どうしてこんな話になったんだっけ？」

束がそう呟くと、リリィが思い出したかのように話し始めた。

「サイクロプスっていう兵器を、束が古い遊〇王に出てくるモンスターの名前だと言ったからじゃなかったっけ？」

「ああ～☆」

ちなみに、リリィが言おうとしていたサイクロプスという兵器は、電子レンジなどに使われているマイクロ波を放射し、更にマイクロ波の強度を増加させ、周囲一帯にマイクロ波加熱を生じさせるというものである。

特に大抵の生物は、身体構造の６０％が水だ。

効果範囲内にいる生物は、体内水分が急激に加熱や沸騰して、水蒸気が皮膚を突き破って爆発、破裂死する。

ようするに、超巨大電子レンジの事だ。

今だ効果範囲を広げるサイクロプスを、二人は上空から見続けていた。

幸いなことに、施設周囲に村や街などはない。

マイクロ波はゆっくりと施設全体を飲み込み、爆発していった。

３０８　サイクロプス（後書き）

ということで、一応クルーゼさんは退場ｗ

なんか、クルーゼが出た瞬間に一気にお気に入りを解除したという……（，；ω；、）

とりあえず、出したことが失敗だった。

ということで、ご退場ｗ

あっさりｗｗｗ

３０９　エンジェルズ（前書き）

ということで、今回はどうでもいいようなお話。

まぁ、閑話？

そんな感じＰ３

309　エンジェルズ

とある格納庫に白と黒、赤の色でカラーリングされた機体が数機立っていた。

「こいつはぁ、盾か？」

「背部ウイングも高機動型特化のために大きくなってるわね。」

その機体を取り囲むように、数人の女性が立っていた。

機体はＩＳなのか、所々に装甲がない。

「Ｖアンテナとは、フリーダムのようだな。」

男勝りな言葉を発し、女性は機体の周りを歩き始めた。

「……ん、こいつビームサーベルも持ってんのか？」

そして、腰に刺さっているビームサーベルのような柄を見て、そうつぶやいた。

その言葉に反応したのか、数人がそれを見るために移動する。

「いえ、一応ビームは使用上危険ということでレーザーということらしいわ。」

しかし、冷静な女性がカタログスペックを見ながらそう言うと、全員が納得したのか頷いた。

そして全員、機体を見るために歩き始める。

「……って、レーザーかよっ！？」

そんな中、男勝りな女性がそう声を荒らげた。

レーザー兵器は、確認されているだけでもイギリスの専売特許のような兵器だ。

ブルー・ティアーズが良い例である。

表向きには、レーザー使用兵器はイギリスだけであろう。

逆に言えば、裏では他にも居るということだ。

ドイツで亡国企業と思われる団体が、レーザー兵器を使用するＩＳを使用していた事が確認されている。

されにレーザーかよく分からないが、アメリカとイスラエルが共同開発して、現在凍結処分考案されているシルバリオ・ゴズペルも、含まれているだろう。

「ええ、レーザーね。」

女性が冷静に問い返すと、再度その柄に目が向けられた。

「エネルギー大丈夫な……。」

「カタログスペックだと、機体エネルギーが従来と同じと書いてあ

るわね……。　あ、エネルギー放射計の機材が見たこともない物だわ……。　新規開発かしら……？　もしかしたら、この機材でエネルギー調整してるのかしら。　だとしたら、無駄撃ちは出来ないわね……。」

「……お～い、聞いてますか～？」

冷静な口調の女性が、ブツブツと呟き始めほかの女性達の顔が若干引き攣る。

「……えっ？　あ、ええ。　大丈夫よ。」

そして瞬間的に引き戻された。

「で、大丈夫なんだろうな？」

サングラスをかけた女性がそう言うと、カタログスペックを見直し頷く。

「一応、各自チューニングしたラファール・リヴァイブより性能が上ね。　ほとんどフリーダムを模倣した火器みたいだし、デザインも一流。　流石天才篠ノ之夫妻ね。」

「開発は元ドイツ所属の軍隊だがな……。」

そう言いながら、全員がそこに立つ機体を見た。

新規第二世代、開発元篠ノ之。

機体名称、ムラサメ。

国際ＩＳ委員会に委託され初めて作られた、篠ノ之製の機体である。

元々はムラサメという機体は、災厄である【ＭＶＦ－Ｍ１１Ｃ　ムラサメ】を模倣され作られたものだ。

リリィが機体動力とビームをレーザーに変えるため、内部構造を束と共に考え、シュヴァルツェ・ハーゼが作り上げた機体である。

既に機体兵装から、第三世代機と渡り合えるほどの火力を有していた。

そう、彼女達は国際ＩＳ委員会直属部隊、エンジェルズ。

そして目の前にある機体は、そんな彼女達に渡された機体だった。

「……ふむ、性能は折り紙つきだな。」

そう呟き、全員を見る。

「数週間前に篠ノ之博士が誘拐された事件があったな？　その時に、このプロトタイプが実戦投入されていたようだ。　被弾なし、エネルギーも問題はないそうだ。」

「まじか？」

「まじだ。」

再度、全員がムラサメを見る。

「とりあえず、全員分あるというわけではないからな……。今から数人ずつで訓練する。」

そう言うと、全員返事をしてロッカールームに歩き始めた。

しかし、冷静な女性だけはムラサメを見続けている。

その目は、先程とは違い険しかった。

３０９　エンジェルズ（後書き）

とりあえず、シュヴァルツェ・ハーゼ……というか、所属篠ノ之が作り上げた最初の量産機はムラサメでした。

変形はできませんよ？

人が乗ってますから。

Ｍ１でも良かった気がするけど、今回はムラサメｗ

所々装甲がない、ＩＳムラサメでしたｗ

全員分ないのは、コストが掛かりすぎるからです（え。

ちなみに、束はリリィがやるからやっただけですｗｗｗ

さてさて、名無しの女性たちに名前を付けるのがめんどくさい。

名無しで行くか？

そもそも、一発キャラだったし……。

そしてこの作品が、微妙な形で完結した場合を構想していたら恐ろしいことが起きたよ。

ループ物になりかけた。

ローズだけが記憶喪失なしで、この作品の記憶持っていることにもなって……一瞬「それ、どこのカ○ル君？」と夜中につぶやいてしまったよ。

どうせ人が生きれない場所で、「また兎なんだね……。　変わらないな……、兄さんは。」とか言いそうで、ほんとマジ困った。

最初は新訳の構想を考えていたのに……ｏｒｚ

何時かこの作品、ループ物に変わりそうで怖い……。

ん、そうするとこの作品の終わり方は、バットエンドっ！？

……これはひどい……。

３１０　災厄の戦闘は雪景色の中で（前書き）

貯めるために、戦闘を入れてみた。

妙なテンションｗ

Ｐ３

注意：サードシフトについて。

サードシフトは束との一体化ということであり、フェニックス固定ということではありません。

機体はフリーダムやストライクフリーダムなどにもサードシフト状態で移行できます。

３１０　災厄の戦闘は雪景色の中で

リリィと束は、ドイツ国内にいるシュヴァルツェ・ハーゼに撤退を言い帰ろうとした。

だが、そう簡単に返してくれそうもない。

冬に近いせいか、雪が積もったノイシュバンシュタイン城の上空を高速で、フリーダムは通過した。

その後ろに、フルスキンの機体が数百機ついてくる。

上空だけで、大量の鉄の塊で覆われた光景は、一種の檻のようにも見えた。

「「くっ！　しつこい……。」」

フリーダムが山を超えるために、上昇すると後ろの機体も上昇する。

雪景色で一面白く、機体が何処にいるかよく理解できた。

「っ！　リリィちゃんっ！！」

束が叫ぶと同時に、フリーダムが加速する。

元々離れていた後機との距離が、一気に離れた。

しかし、加速理由はそれではない。

さきほどいた場所に、無数とも言える数のビームが通過したのだ。
フリーダムの後部カメラは、直ぐ様ビームが来た方を捉える。
そこには、腹部に砲身を持つモノアイの機体が数機停滞していた。
≪ＡＭＡ－９５３　バビ≫
二人の頭のなかに、情報が展開される。
さらに、ミサイルが地上から撃たれた。
もちろん、速度をそのままに回避する。
≪ＴＭＦ／Ａ－８０２　バクゥ≫
≪ＡＭＦ－１０１　ディン≫
完全に災厄が、フリーダムを落とそうとしていた。
少し離したところで、フリーダムは反転する。
「全機ロック！」
翼からバラエーナプラズマビーム砲が回転し、折りたたまれていたクスフィアスレールガンが伸びる。
右手もビームライフルを保持し、マルチロックオンシステムで災厄を全機捉えた。

バクゥと呼ばれる四足歩行の機体が、レールガンを放つ隊とミサイルを撃つ部隊と別れる。

山脈を利用し盾にしながら、バクゥは４５０ｍｍ二連装レールガンや４００ｍｍ十三連装ミサイルポッドをフリーダムに向けて打ち続けた。

しかし、どれもフリーダムには当たらず、逆にフルバーストの餌食となっていく。

バクゥの頭が潰れ、黒い霧となって消え去る。

低級の災厄なのか、被弾すればすぐに消えていく。

そのため、一度撃ち始めたら大半が消え去るまで止めなかった。

「……くっ！」

しかし、全機落ちるというわけにはいかない。

残った機体が、一斉にフリーダムに向けてビームやマシンガン、ミサイルやレールガンを撃ってきた。

あたったところで問題はないが、現在はサードシフト。

再生した分、束の災厄化の進行は急激に進む。

リリィにとっては完全に回避しなければいけなかった。

そもそも、サードシフトになったのは、すぐに日本に帰るためだ。

戦闘までサードシフトになっている必要はないだろう。

「さらに増援っ！？」

束が驚き声を荒らげた。

その間も火線は伸びフリーダムを襲うが、フリーダムは華麗に良け続けフルバーストで落としていく。

「束、二手に分かれたほうが……。」

「ダメっ！！」

リリィは一人で全機落としたほうが早く終わる気がした。

だが、束はそんなリリィが無茶しないとは思わない。

必ず、全員を心配させるような事を起こすのだ。

だからこそ、サードシフトの解除を束は拒んだ。

必ず目を付けてないと、リリィはダメなのだ。

夜遊びする夫を見張る妻のような感じだろう。

「私はここにいる……。」

そう言い、リリィに自分の意思を示す。

その間も、フリーダムは半回転しながらビームを避ける。

「……今度は一人にさせないよ。」

「……。」

ミサイルがフリーダムに当たろうとするが、シールドで防ぎ、覗き穴から頭部機関砲を放ち迎撃していく。

さらにミサイルだけでなく、ビームまでシールドに当たる始末。

いつの間にか、フリーダムが追い込まれていた。

「……十六分……。　最大十六分だけだよっ！！」

苦々しくリリィは叫び、急上昇し始めた。

３１０　災厄の戦闘は雪景色の中で（後書き）

ドイツから日本へ期間中の出来事です。

人間：＝＝☆＝＝＝＝＝＝：災厄

頭痛い……ｏｒｚ

そういえば、キーボードを新しく買いました。

新しくて気持ちがいいキーボードです♪

中サイズから大サイズへｗ

３１１　過去から襲来する復讐鬼（前書き）

貯めのため、貯めのため……。

ラウラのＤＮＡはこの戦闘が終了して、落ち着いたところで。

Ｐ３

３１１　過去から襲来する復讐鬼

マルチロックオンシステムを常時起動させておき、フルバーストをし続ける。

そうすると、基本近づいてくる機体が居なくなる。

それだけ撃っていれば、災厄が居なくなると思うだろう。

しかし、災厄はどんどん増えていった。

フリーダムを落とすために。

いや、フリーダムの中にいる、束を殺すために増えて行くのだ。

「残り、七分……。」

そうリリィが呟きながら、背後を取ったバビの胴体を、ビームサーベルで切り裂いていく。

「敵も何処からともなく～、って感じだから数がね……。」

バラエーナプラズマ収束ビーム砲が光り輝き、雪景色の上を突き進んでいく。

その光条に飲み込まれ、バビやディンが火花を上げて散っていった。

後退しつつも、フルバーストで殲滅しているため、フリーダムに被弾は見受けられない。

「殲滅砲撃で、片付ける？」

束がそう言いながら、フリーダムのビームライフルを掲げる。

「アレは体への反動が大きすぎるし、危険なうえに束の災厄化が進む。　却下。」

リリィがそう返答すると、クスフィアスレールガンと共にビームライフルを撃った。

そんなフリーダムの真下から、バクゥがミサイルは放つ。

ビームライフルを向け迎撃をしようと、二人は考えるが間に合うわけもなく、緊急回避。

ミサイルの着弾寸前で後退したため、フリーダムの目の前を通過していった。

しかし、その後続のミサイルはフリーダムが回避したことにより、向きを変えて追尾してくる。

迎撃しようにも、ビームライフルの銃口は上をむいており、後退速度と迎撃速度を合わせると、少しだけ被弾してしまう。

そのため、下降気味の急速後退でミサイルを全弾回避した。

「あ～、本当にしつこいね～☆」

回転気味で、バラエーナプラズマ収束ビームを撃ちながら、バクゥ

を撃ち抜いていく。

さらに撃ちながら移動しているためか、近くにいるバクゥも巻き込まれ、爆散していった。

「うん、特にしつこいねぇっ！！」

頭を地面に向け、回転気味に移動しバラエーナプラズマ収束ビーム砲を撃っていた状態から、戻りビームライフルを振り向きざま、接近するディンの頭部に向け引き金を引く。

銃口から伸びる光条が、ディンの高機動移動専用のヘルメットにあたり、競り合うが少ししして爆散した。

しかし、ただで死ぬような事はしなかった。

地面に落ち行く瞬間に、胸部両脇のブロックに搭載されていた六連装多目的ランチャーを放つ。

だが、照準をつけていなかったのかミサイル同士がぶつかり合い、爆発していった。

そのうち一発がフリーダムの頭部にめがけて、飛んでいく。

「っ！」

束は息を呑むが、リリィは冷静だった。

リリィにとってみれば、危険でもなんでもないのだから。

ミサイルが頭部に着弾する瞬間、フリーダムは首を横に傾けた。

そのまま、ミサイルは頭部のあった場所を通過し、後ろに流れフリーダムの背後をとっていたバビに着弾する。

「束……、本当に不味い。」

「え？」

その言葉とともに、雪が空から降り始める。

フリーダムはその雪に向かうように、バーニアを全開にし飛んだ。

次の瞬間、バビのビームではない高エネルギー砲が、空を切り裂いた。

「未だ復讐を求める奴もいるということだよ。」

その言葉とともに、レーダーに高速で接近する機体が引っかかる。

レーダーが熱量で機体を判断し、二人の頭の中にデーターを送り込む。

束にとっては初めて見る機体だが、リリィにとってはプロヴィデンスのように切っても切れない縁を感じるほどの機体だった。

「……おいで、殺してあげる……。」

リリィはそう言うと、その熱門に向かい加速した。

≪ＺＧＭＦ－Ｘ５６Ｓ　インパルス≫

それが接近する機体の名称だった。

３１１　過去から襲来する復讐鬼（後書き）

ということで、ＳＥＥＤシリーズ本編的な状態が増えてきました。

リリィが災厄化してから、既に１００話以上立ってます。

いや～、３巻の終了間際に災厄化、その時１６９話かな？

あの喧嘩がどの巻に入るかで、更に変わるけど。

今だ5巻途中なのに、倍近く続いてる……（－＿－；）

すごいな～。

私の無節操さが……（~ω~；）））

３１２　フリーダムＶＳインパルス（前書き）

今回の話は先頭です。

った、前回も先頭だったね……。

（沙＊・ω・）Ｐ３

初めてＴｗｉｔｔｅｒでお話したよ～♪

初めて役に立った、（＊´∀｀）ノ

お相手は「ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉Ｖｅｒｗｅｉｌｅ　ｄｏｃｈ，ｄｕ　ｂｉｓｔ　ｓｏ　ｓｃｈｏｅｎ」のシート様♪

これから、Ｔｗｉｔｔｅｒの使用頻度を上げようっと♪

３１２　フリーダムＶＳインパルス

フリーダムとインパルスが互いにビームサーベルを引き抜き、移動しながら構える。

束にとって、初めて知る感覚。

災厄同士の高機動近接格闘戦。

ＩＳやＩＭＳでは見ることができない、機動でインパルスは接近しつつ胸部機関砲を放ちビームサーベルを振るう。

対するフリーダムはインパルス以外から撃たれる砲撃を避けながら、ビームサーベルをインパルスに向け振るために、進行方向に軸回転し始める。

そしてお互い交差し、横を通り抜けた。

「かわらないね。」

そう言いながら、配転のごとくインパルスの方を向き、後ろ向きのバラエーナプラズマ収束ビーム砲を展開した。

しかし、インパルスも同じようにフリーダムの方を向いている。

手にはカラフルなシールドを持ち、ビームを防ぐ準備を終えていた。

（……スペックは……、そこそこある。）

完全にリリィだけが、戦闘を行なっていた。

空にいくつもの光条が伸び、雪を溶かしていく。

次第に雪は溶かされまいと、量が多くなり視界が悪くなる。

既に吹雪といってもいいような程、雪が降り出していた。

積もった雪を、バクゥのキャタピラが踏み潰し水になり、大地に帰る。

ディンやバビの羽に積もった雪は、スラスターの噴射熱によって溶けたり、風に舞って行く。

その中で、フリーダムとインパルスはお互いを切り合っていた。

どちらかと言えば、インパルスが一方的に切り裂かれている。

リリィにとって、一撃を受けることは別に構いはしない。

しかし、サードシフト中の今ではかなり問題だった。

攻撃を受ければ、その分回復する。

だが、その分束の災厄化が進む。

今のリリィには制限時間に、無被弾と言う制限があった。

「残り四分！」

その間にも、束の体が蝕まれていく。

リリィは冷静でありながら、あせっていた。

目でインパルスを追う。

しかし、吹雪で視界が悪い。

レーダーにはインパルスの熱量が写るが、目視では見当たらない。

「……ん。」

そう思っていた瞬間、遠い地表から四条の光が向かって来た。

瞬間的に背を地面に向け、重力に惹かれるように落下し、それを回避する。

光条が発する熱で雪が溶け、一瞬だけインパルスの姿が露わになった。

トリコロールだった機体色ではなく、全体的に暗い色で構成されたカラーリングで、両腰に大型の砲塔を構えている姿。

インパルスは、ストライクのようにバックパックを換装することにより、局地戦闘に応じた先頭方法をとることができる。

ストライクで言うストライカーパックだが、インパルスの場合はシルエットシステムと呼ばれている。

違いがあれとすれば、パワーパックという概念で作られてはいないという事だろう。

ストライクは各バックパックに、追加エネルギーパックが存在するが、インパルスのバックパックには追加エネルギーパックがないのだ。

インパルスのバックパックは、エネルギー補充ではなく完全に局地専用に考えられたものだった。

そう考えると、インパルスよりストライクの方が優秀に思える。

しかし、機体のカタログスペック上では、インパルスの方が上であった。

インパルスはバックパックをパージすると、さきほど付けていたエールストライカーと同じ目的のバックパック、フォースシルエットを装備する。

インパルスのバックパックはストライク同様に、遠距離用バックパック、中距離用バックパック、近距離用バックパックの三つがある。

先程の砲撃は、遠距離用のバックパックであるブラストシルエットを使用した攻撃だ。

「……雪で視界が悪くなったところで、遠距離砲撃……。　確かに予備動作が見えない分、有効な手だね……。」

リリィがそう言うと、束は納得した。

そして体勢を立て直した瞬間、フリーダムはビームライフルをインパルスに向けて撃った。

３１２　フリーダムＶＳインパルス（後書き）

さて、今回の問題はシルエットシステムです。

本当にシルエットシステムには、エネルギーパックが搭載されてないのか。

ストライカーパックと同構想上であれば付いているものですが、私的見解では付いていません。

アーモリーワンでのセカンドステージ機体強奪事件。

あの時、ソードシルエットで当初出撃しました。

そしてフォースシルエットに換装しましたね？

ビームを数発、ビームサーベルを数回振っただけで、オペレーターのメイリン・ホークに「インパルスのパワー、危険域ですっ！　最大であと３００！」と言われました。

もし回復するのであれば、どれだけエネルギーを使用するのやら……。

まぁ、この時点でパワーパックに回復用のバックパックがないのではないかという考えに、簡単に至ります。

次に「デュートリオンビーム送電システム」です。

何度でも戦場でエネルギーを回復できるというもので、これにより、セカンドステージの機体はエネルギーだけ、艦に帰還しなくても回復できるようになりました。

おそらく、デュートリオンビーム送電システムの存在のため、回復などの思想が外されたのだと思われます。

そもそも、戦闘に合う様にバックパックを使ってるのに。回復のためにパージするのも、ね……。

よって、シルエットシステムには回復という概念がないと思われます。

さて、本作品ではそういう形で書いているため、ストライクの様にエネルギーが回復しません。

ストライク同様に換装はできますがね……。

３１３　カウントダウン（前書き）

さてまぁ、書いてみたｗ

戦闘終了編。

Ｐ３

313　カウントダウン

（リリィちゃん……。）

そう思いながら、束はフリーダムの中からその戦闘を見ていた。

防戦一方のインパルス。

普通に見れば、束は何もしなくても十分だろう。

しかし、問題はあった。

タイムリミットだ。

リリィは束の災厄化を防ぐために、時間制限を自身の中で設けた。

それがリリィを危険にされしている。

（残り、五十七秒……。）

既に一分を切っていたのだ。

時間のことを気にしなくてもいいのに、リリィは束を守ろうとする。

だからこそ先程まで余裕があった回避が、紙一重の回避に変わっていた。

当初リリィが言っていたように、二手に分かれていた方が、リリィを

危険に巻き込まなかったかもしれない。

十六分経てば束が災厄化すると言う事が止まるはずもなく、更にリリィが危険になる。

既に、災厄が包囲網を作っているのか、レーダーがほぼ赤い。

既にカタログスペック上インパルスは、エネルギー切れが起きるはずだろう。

フリーダムはインパルスともつれあうように飛び続ける。

お互い螺旋状に回転移動しながら斬り合う。

フリーダムは移動に不規則な起動を混ぜているためか、インパルスのビームサーベルは当たらない。

同じように被弾が多く見えるインパルスも、斬り合うにつれフリーダムの剣撃を簡単に避け始めた。

（残り四十二秒……。）

リリィの焦りが束に感染したかのように、束も焦り始める。

空中で切り合いながら移動し、フリーダムは時間のためか一気に離脱しようと加速した。

しかし、インパルスは執拗にフリーダムに食らいつき、攻撃を仕掛ける。

二機は山に向かって加速し、手前で上昇するのかと思いきや、フリーダムがバラエーナプラズマ収束ビーム砲を山に向かって放った。

そして両機共々、ビームが着弾した場所に入っていく。

どうやら洞窟だったのか、広いとも言えないほどの場所だが通れるようだ。

奥に光が見えることから、トンネルのような洞窟だと言う事がわかる。

お互い並行飛行しながら、斬り合う。

（残り三十秒……。）

インパルスが上を向きフリーダムを切り裂こうと腕を振るうが、狭い場所でお互い近いせいか、その腕はフリーダムのシールドに阻まれ押し返された。

そのまま頭部バルカンでインパルスを撃つが、ＰＳ装甲と同じＶＰＳ装甲が期待の損傷を防ぐ。

失速しつつも、インパルスはバルカンを避け切る。

そのままの勢いで、フリーダムは加速し洞窟の先にある光に向かった。

インパルスもフリーダムを追うように、速度を上げた。

（残り十九秒……。）

出口である光まで、まだ距離がある。

インパルスがダメ元でビームライフルを放つが、フリーダムはそれを避ける。

逆に洞窟がビームで崩れ、インパルスが落石に巻き込まれた。

（残り十一秒……。）

（了解……。）

束とリリィは軽く言葉を交わし、出口に向かう。

インパルスとの距離は、落石と失速のせいでかなり空いた。

（残り七秒……。）

カウントが十を切った。

フリーダムがかなりの速度のまま、洞窟を抜ける。

流石に山が高いせいか、ババやディンは居なかった。

（三、二……。）

インパルスがようやく洞窟を抜けようとしていた。

（一……。）

そして、フリーダムに向けてビームライフルを構え、飛び出た瞬間。

（ばいばい～♪）

インパルスに上下左右から、桜色の大規模砲撃が襲った。

加速しようにも、落石でフォースシルエットがダメージを受けたのか速度が出ない。

なすすべもなく、インパルスは桜色の砲撃に飲み込まれていった。

砲撃に飲み込まれ、装甲を焼かれ、インパルスは黒い霧になっていく。

それとともに、洞窟が追撃を防ぐかのように崩れ落ちた。

３１３　カウントダウン（後書き）

さて、ラウラのことをいつ入れようかな。

次話はおそらく変な解説が入りそうだし、まだまだ先かな？

おやすみなっさ～いいいいいい～！

寝るテンションじゃないね～。

パセリうめぇぇぇぇぇっっ！！

これも違うね。

さて、リリィ三部作ｗ

と言うなの、自分の作品を考えてみた。

本作「世界とＩＳと名もなき者へ」

元シナリオ？

別作「転生者がネギまの世界に入り込んだようです。」

ギャグ重視？

別作「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　無くした鎖と繋がる鎖」

シリアス？

なのはだけ、少しばかり真面目なのかな？

これの「２６３　運命に抗った者の終わり」↓「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　無くした鎖と繋がる鎖」という感じ。

今更ながら、やりすぎでしょう……（；´Д｀）

※私のマイページからＴｗｉｔｔｅｒに飛べます。

３１４　教員達の悩み（前書き）

本日はＰ２でございます。

ん？

１２時間後に♪

３１４　教員達の悩み

洞窟が崩れるなかフリーダムが光り、束を外に出した。

「……十五分。　残り一分♪」

そう呟き、束はフリーダムの腕の中に収まった。

残り一分。

それは、二人がサードシフト展開前に決めたタイムリミットだった。

なら束が数えていたのは、なんなのか。

束の周りに、ブラスタービットが四つ集まってくる。

そして一定距離で停滞すると、ブラスタービットは消えた。

実は、束が数えていた時間はブラスタービットの砲撃タイムである。

二人はＩＳ学園に着く前に、世界中を回っていた時期だあった。

ＩＳ開発者として追われる束。

それを守るように行動するリリィ。

そんな二人は、最悪の自体を考え世界中をめぐりながら、地形や追ってを撒くポイントを知っていたのだ。

その中の一つが、この洞窟だった。

過去に洞窟で撒く方法に、ドラグーンの先行での不意打ちがあり、今回はそれに則った形の撃墜方法だ。

サードシフト状態で、なぜレイジングハートのブラスタービットが使えるのか理解できないが、インパルスはブラスタービットから放たれる砲撃で落ちたのは事実。

そして、砲撃によって洞窟は崩れ落ち高い山を超えるほどの機体はいない。

災厄を撒いたようだ。

「……はぁ。」

リリィがその事実を確認すると、周囲を警戒しながらため息をついた。

どうやら、周囲に災厄などの機影は見つからなかったらしい。

「……んじゃぁ、帰ろっか束。」

「うん！」

元気よく束が返事した。

そのことにリリィの表情が緩む。

自然と束をお姫様だっこし、日本に向けてフリーダムは移動し始め

た。

クラリッサは悩んでいた。

学園祭があと数実後に控えた中、生徒は何時も通りだろうが、教師達は頭を抱える。

職員室は、千冬も含み混沌としていた。

「……学園祭、我々はどう動く。　そこのタバコ吸ってる桜庭先生っ！！」

金の髪を後ろでまとめた女性が、急に立ち上がり桜庭と呼ばれる白衣を着た女性に指を指す。

「……何時も通りでいいだろ～。」

やる気のなさそうに手を動かし、副流煙を吐き出す。

「よくないやろっ！！　あと校内全面禁煙やっ！！」

金髪の女性がそう言うと、桜庭はタバコを携帯灰皿で消した。
教員は学園祭当日、校内巡回という仕事がある。
だが、それとは別の仕事もあった。
「まぁ、一応学園祭では教員も何かやらないといけませんしね。」
「せや、だからこそ生徒も驚く何かをやりたいんや！」
千冬は呆れながら、同じ教員の熱弁を眺めていた。
「けどな黒井センセ。　まず私らがやれる上に、生徒を超えるものはあると思うか？」
金髪の女性教師、黒井に向かって桜庭がそういう。
タバコが吸えないせいか、横にいる教員からチュッパチャプスを受け取り口に入れる。
「……新入りは、何か案あるか？」
「即売か……。」
「却下や。」
黒井がクラリッサに向かって案を聞くが、聞いた相手が悪かったのか、最後まで言葉を言わせずに終わらせる。
クラリッサのテンションが、少しばかり下がった。

（いま、確実に「即売会。」言おうとしたな……。）

桜庭はそう思いながら、クラリッサを横目で見た。

「つか、こんなところで即売会したら、ＩＳ学園がなんて思われるか……。　つか、確実に給料削減やっ！！　同人誌売り出して、給与に当てるか？　在庫残ったら大変やでっ！」

そう黒井は言い、椅子に座った。

そして、黒井の目は千冬を捉える。

何か考えるかのように、顎に手を当て天井を見て、再度千冬を見た。

その表情は、面白いものを見つけた子供のように、微笑んでいる。

「……せや、なんで思いつかなかったんやろうな～。」

そう言うと、黒井は席を立ちゆっくりと千冬に近づく。

当の千冬は黒いが近づくにつれ、かなり冷や汗を流していた。

そして黒井の手が千冬の肩をつかむ。

「……ウチらは、白騎士事件を撮影するで！」

その言葉に、千冬の頬がひきつったのは言うまでもない。

３１４　教員達の悩み（後書き）

まぁ、そんなわけで、今回は正午にもう一回、ね。

キャラクター人気投票の結果だけど……。

それをあげます。

腰が痛い……。（´。＿。）。

ちなみに、教員の名前は某アニメから。

一一5　色々な記念（前書き）

少し前にしたアンケート結果です。
1位から3位はイラストがあります。
下位から発表させていただきます。

一一5　色々な記念

01：篠ノ之リリィ
02：篠ノ之束
03：織斑千冬
04：織斑一夏
05：篠ノ之箒
06：セシリア・オルコット
07：山田真耶
08：更識楯無
09：凰鈴音
10：シャルロット・デュノア
11：ラウラ・ボーデヴィッヒ
12：ナターシャ・ファイルス
13：フリーダム
14：ローズ

１５：クラリッサ・ハルフォーフ
１６：篠ノ之リリィ（未来）
１７：クローディヌ・サミナード
他１名

【第十六位】

・クローディヌ・サミナード
各得ポイント：０

クローディヌ「うはっ！？　新入りの風当たりが酷いっ！！　……

けどまぁ、納得。」

・更識楯無

獲得ポイント：0

楯無「……私結構出てるわよね、出ているはずよね？　……泣いてもいいかしら。」

・篠ノ之リリィ（未来）

獲得ポイント：0

リリィ（未来）「敵役だったし仕方ないね。　うん。」

【第九位】

・織斑一夏

獲得ポイント：１０

一夏「……まぁ、０よりはマシか……。」

楯無「喧嘩か売ってるわよね、一夏くん？」

・更識簪

獲得ポイント：１０

簪「初めて……初めて……、楯無……姉さんに勝った……。」

楯無「簪ちゃん？　喧嘩売ってるわよね？」

簪「そんなこと……ない……。　……誰も……喋ってないのに……ポイントを貰えた……。　これだけで……勝ったなんて、……言ってないよ。」

楯無「オ～ケ～。　お姉さんと全面戦争したいわけね？」

クローディヌ「そもそも、選択肢外だったしな。」

一夏「というか、喋るの初めてじゃない？」

・篠ノ之箒

獲得ポイント：１０

箒「……一夏と同じ……。　一夏と同じ……。　（＊´∀`＊）♪」

・セシリア・オルコット

獲得ポイント：１０

セシリア「……低いのは許せませんが、一夏さんと同じポイントなのでいいとしましょう♪」

箒「（＊´∀`＊）♪」

・ナターシャ・ファイルス

獲得ポイント：１０

ナターシャ「私にも入ってるの？　……ありがとうね♪」

・凰鈴音

獲得ポイント：１０

鈴「ないよりは良いわね。　本当に。」

一夏「だよな～。」

・山田真耶

獲得ポイント：１０

真耶「え、ええっ！？　私にも入ってるんですかっ！！　い、入れてくださった方、ありがとうございま……。」

楯無「……壁|＿＝））」

真耶「ひっ！？」

【第七位】

・織斑千冬

獲得ポイント：２０

千冬「ふむ、あいつに負けるのはアレだが……。　喜んでおくとしよう。」

・ラウラ・ボーデヴィッヒ

獲得ポイント：２０

ラウラ「ふむ、悪くない順位だ。」

【第六位】

・フリーダム

獲得ポイント：３０

フリーダム「うん、なかなか♪　基本喋らないけど、出ていることには出てるしね～。　ありがと♪」

【第四位】

・クラリッサ・ハルフォーフ

獲得ポイント：４０

クラリッサ「すいません隊長、ブリュンヒルデ……。これほど来ると は思ってもみませんでした……。」

千冬「別に謝る事ではないだろう。」

ラウラ「もっと胸を張っていいぞ。」

・シャルロット・デュノア

獲得ポイント：４０

シャルロット「えへへへへ♪　最近出番少なかったけど、上位にはいってるよ～。　入れてくれた人、ありがとうございます。　……えへへへへ♪」

【第三位】

・ローズ

獲得ポイント：５０

＞ｉ３２７１８―３０４５＜

ローズ「……兄さんだと思った？　残念……。　……私でした～。」

リリィ「似てるけどね。」

束「というか、それリリィちゃんの制服……。」

【第二位】

・篠ノ之束

獲得ポイント：１２０

【第一位】

・篠ノ之リリィ

獲得ポイント：１９０

＞ｉ３２７１７―３０４５＜

リリィ「おめでとう、束♪」

束「リリィちゃんこそ、おめでとう～♪」

千冬「というか、この二人がトップなのはすぐ分かる気が……。」

一夏「それ言ったら、負けだよ……。　千冬姉……（―＿―；）」

―5　色々な記念（後書き）

ということで、こんな感じの結果に収まりました。

イラスト書いていたから、発表が遅れたことはご了承を……。

ローズのイラストは、過去に書いたリリィの失敗作をちょっと改造しただけですので、リリィに似ているのは仕方がない。

もっとタレ目でもよかったのに……。

では、また十二時間後にノシ

３１５　帰ってきたらすぐ出発（前書き）

そろそろ、一夏（笑）と獲得投票数０の楯無でも登場させようかな。

というか、クローディヌことくーちゃんも、もっと出したい！

ま、そんなわけでＰ３

３１５　帰ってきたらすぐ出発

「……あ、クローディヌのこと忘れてた。」

ＩＳ学園についた途端、リリィは思い出したかのように呟いた。

束に至っては、「誰それ。」的な顔をしている。

少しだけ妙な気分になり、リリィと束はＩＳ学園の敷居を跨いだ。

「ま、今はラウラの事が気になるし、どうでもいいよね。」

リリィがそう言うと、束のウサミミが伸びた。

その事に、リリィは溜息を付く。

少しだけ束の前に出て、腰を落として構えを取る。

次の瞬間、遠くから土煙が上がり始めた。

その光景に束は頬をひきつらせながら、後ずさる。

土煙を上げていたのは、ＩＳ学園の教職員一同だった。

そして場所は篠ノ之神社に近い海。

リリィと束が初めて会った場所へと来ていた。

「私達がいない間に、一体何があったの……。」

「本当に……。」

束の言葉にリリィが同意し、千冬を追い詰める。

バツが悪いのか、肩がいつもより下がっていた。

ここにいるのは、リリィと束、千冬やクラリッサ。

他数人の教職員だ。

車の中から、本格的なカメラや集音マイクなどを取り出し、組み立てる。

教員なのに、本職の人みたく簡単に組み上げてしまうせいで、リリィは「本当に教員なの？」と聞いてしまったぐらいだ。

そのくらい、その場は撮影場に変わってしまった。

「……あ～、そのだな。　学園祭で教員が出すモノがなくてだな……。」

「で？」

歯切れが悪い話し方をする千冬。

束が急かすせいか、千冬の口が回らなくなっている。

初めて見た混乱する千冬に、クラリッサは唖然としていた。

「……まさか。」

束がそう言いながら、海岸を見渡す。

千冬は束を見ると、ため息を付きながら口を開いた。

「そうだ、白騎士事……。」

「リリィちゃんが主役で、ヒロイン私のノンフィクション映画を撮るんだね！！」

その言葉に、千冬の言葉は途中で消された。

流石に予想外の言葉なだけに、その場にいる全員の目が束に向けられる。

微妙に間違ってないからか、千冬が唸りながら訂正箇所を探す。

しかし、白騎士事件とリリィと束のラブストーリーに違いがあるのだろうかと思うが、千冬は溜息を付き考えるのを放棄した。

そもそも白騎士事件はどう考えても、リリィと束のラブストーリ的なシナリオだろう。

戦闘やＩＳの生まれ方、当時の束や千冬。

それら全てを纏め大雑把に言ってしまえば、白騎士事件はリリィと束が夫婦になる始まりだ。

千冬は学校へ通っただけで、面白い事など起こしてはいない。

基本的な撮影内容は、完全にリリィと束の二人に集中してしまう。

つまり白騎士事件を撮るイコール、リリィと束のラブストーリーを撮るということにもなる。

「オラ、ワクワクしてきだぞ～☆」

束が古い漫画のセリフを言いながら、その場で一回転しリリィの方へ向いた。

そんな束を見て、リリィは苦笑する。

「台本はどうするんだ？」

「……ナシで良いってさ。」

車の中で、話し合いをする教師陣。

話の内容は、白騎士事件の台本だった。

「まぁ、当時を知ってるの織斑先生と篠ノ之博士両名だからな～。」

そう言うと、さきほどカメラをセッティングしていた教員が、ペットボトルのお茶を飲み干した。

「真相は三人の中、ってな。」

「……今明かされる白騎士事件の真相、か？」

変なキャッチコピーらしきものを口にすると、全員車外を見る。

そこには、日が沈みそうな太陽を背に、リリィが束と共に歩いている姿だった。

何処からどう見ても、完全に女友達にしか見えない。

「……俺、この撮影が終わったら告白するんだ。　リリィ先生に……。」

「どの部分で、死亡フラグ立てたくなったっ！」

いきなり訳の分からない言葉を言ったせいで、車内は一種の混乱に陥った。

ちなみに死亡フラグをたてた人物は、ネタで言ったつもりだったそうだ。

３１５　帰ってきたらすぐ出発（後書き）

Ｔｗｉｔｔｅｒ　は昔何が良いのかよくわからなかった。

今でも、わからないｗ

とりあえず、呟いてみる。

洗濯物がヤバイ、とｗ

懐かしいバグ画像ｗ

＞ｉ３２８８５―３０４５＜

死んでますが、動いてますｗ

「馬鹿な再起動だとっ！？」

マイクに向かって叫びましたよｗ

喋っていた相手、迷惑だっただろうな～。

３１６　宿泊は旧篠ノ之家（前書き）

祝５０万文字達成っ！！

毎回毎回短い文で、ようやくたどり着いたよ５０万！

Ｐ３

316　宿泊は旧篠ノ之家

夕方になったため、撮影時間に向かず翌日撮影する事になった。
近くのホテルに宿泊する組みと、学園に帰り仕事をする組みと別れる事となる。

リリィ達四人は、今は誰も住んでいない旧篠ノ之家に泊まることにした。

当初は電気や最近まで使われていたこともあってか、近くの織斑家で寝泊まりしようかと思っていたが、束が無理を言って旧篠ノ之家にしてもらったのだ。

途中、千冬が家に戻ったりもしたが、問題も無く旧篠ノ之家にたどり着く事ができた。

道行く人に指さされたり、サイン求められたり、写真撮られたりもしたが、一応何事もない。

「流石ち～ちゃん～☆　一番多く写真撮られてたね～♪」

束がそう言いながら、玄関に腰を下ろす千冬を見た。

その姿は海岸から歩いた程度で、何故かボロボロになっている。

「まさか、久々に歩いたらこうなるとは……。」

千冬も有り得ない物を見たかのように呟いていた。

当たり前のことだが、千冬は有名人だ。

良い意味でも、悪い意味でも。

そのため、気がつかれるだけで砂糖に群がる蟻のような状態になることは、結構ある。

ドイツやらＩＳ学園やらで、このような対応をしたことがなかったのだろう。

「それだけ民衆がブリュンヒ……、……織斑教導官を慕っているという事ですね。」

「お前、今ブリュンヒルデと言おうとしたな？」

クラリッサの訂正しかけた言葉に千冬が反応した。

「いえ、言ってませんよ。」

だが、クラリッサはしらを切る。

しかし、半分以上言ってしまった言葉を取り消すことは、ほぼ不可能に等しい。

本人が気にしている言葉なら、なおさらだ。

「……まぁ、いい。」

そう言うと、千冬は膝に手をついて立ち上がる。
ちなみに、全員写真を撮られていた。

夕飯を食べ、リリィは束と共に眠りについたはずだった。
しかし寝たような感覚はせず、耳には声が聞こえる。

「……ふぅ。」

疲れたような声が響く。
目を閉じているせいか、誰が言葉を放ったのか理解はできない。
しかし、聞こえる声が近いことだけは理解できた。

「どうしたの？」

別の声がさらに聞こえた。
左右から聞こえることから、リリィは声の人物たちに挟まれた場所

にいると理解する。

「……いや、仕事が大変なだけだよ……。」

そう言うと、床がきしむ音がする。

「……そう、だね……。」

「仕方ないとはいえ、もっと簡単なのはなかったのかな……。」

二人の声が同じ場所から聞こえるようになったため、片方が移動したのだと理解する。

先程の足音は、その時のだろう。

「まぁ、た……。」

そこまで言い、話し声が途切れた。

少し何かをあさる音が聞こえ、それに文字を書くような音が聞こえる。

誰かに聞かれているのか、リリィの耳にはペンを動かす音しか聞こえなかった。

「……ま、これでいいんじゃない？」

そう言うと、横に何か置かれたのか風が顔を包んだ。

「とりあえず、私は家からあまり動けないから、収入は全部……。」

「大丈夫、……――の分は私が稼ぐから。」

なんとも微笑ましいような光景なのだろうが、状況がよく飲み込めない。

そのため、リリィは眉を潜めた。

「あ、うるさかった、かな……？」

そう言うと、再度静かになる。

「あと、二年か～。」

そう言う声は、寂しそうで悲しそうだった。

何を言っているのか理解ができない。

リリィはあらゆる可能性を考えるが、雲を掴むかの如く理解ができないでいた。

「二年たって、また二年……。」

「……長いね……。」

「人の出会いや成長は、何時も長いものばかりだよ……。　……そうだよね、――……。」

その言葉を最後に、リリィは意識を手放した。

３１６　宿泊は旧篠ノ之家（後書き）

書く事なし、しいていえば「お米食べろっ！！」。

違うね。

この間、私の車の後輪付近にＧがペースト状で死んでいた。

……踏んだな、私（の車）……。

とりあえず、ホースのストレート……水圧で敷地内から押し出した。

Ｇは嫌いです！

ええ。

大嫌いです。

３１７　海と過去（前書き）

一夏と楯無のシナリオを入れたいけど、どうせ原作と同じになりそうだしカットｗ

どんどん進めます。

Ｐ３

317　海と過去

「さて、まさかこんなことになるとは思わなかったな～。」

そういったのは、リリィらしき小さな子供。

「……束と千冬はいいよね……。　十年前とはいえ、そのままでも服を変えればなんとかごまかせれるくらいだしね……。」

「……そういうお前は、完全に十年前に戻っている気がするのだが……？」

リリィらしき小さな子供。

実は本人である。

作品を撮るにあたり、なるべく若く見せようとした結果、千冬は当時の服、束は若く見えるように撮影後処理。

そしてリリィは、なぜか小さくなることを選んだ。

「はうぁ～♪」

災厄の力で片付けられるからこそ、タチが悪い気がする。

千冬に姿を変えられるなら、小さい頃に姿を変えることもできるのだが、何故か違う気が千冬はした。

「懐かしすぎて、私、もう……♪」

束がそう言いながら、リリィに飛びつく。

飛びつき方が、やや某怪盗のダイブの気がしたが、誰もそのことにツッコミを入れるものはいなかった。

「……薬が……。」

そう呟き、クローディヌはうなだれていた。

手の中にあるカプセルケースには、薬が少ししか残っていない。

「いつもなら、匿名配達で来るはずなんだけど……。」

おかしいと思いつつ、目に映る薬を見た。

「……ここで生産……、ということもできないよね……。」

もし生産してしまったら、クローディヌの状態を知るという名目で解剖される可能性もある。

実験材料になる気は、クローディヌにはもうないのだ。

「……篠ノ之博士達を利用できないかな～？」

現段階で、篠ノ之博士両名を超える研究者はいない。

そもそも、最高位の研究社だからこそクローディヌに命令が下ったのだ。

そう思いながら、カプセルケースを放り投げてベットに仰向けで倒れ込んだ。

胸が痛むが、クローディヌは深く息を吐き吸い込むことで誤魔化した。

「最悪、私の自由を保証させて、コイツを売り飛ばし作らせるしかないかな……。」

そう言い、手に持つ指輪を見つめる。

それは待機形態のグレイプニール。

各国が開発した第三世代ＩＳ中、最高位の技術を集結させているであろう機体だった。

もちろん、その理由は篠ノ之博士が作り上げた技術を使っているからである。

そもそも、グレイプニールにはＩＳではなくＩＭＳの技術が組み込まれていのだ。

どの国も一番欲する技術。
十分取引材料になる物だ。

「……それでもダメなら、昔に戻るしかないね。」

右手で前髪を上げて、天井に向けて銃の形をとった左手を掲げた。
そして上げるのが疲れたのか、左手は重力に惹かれベットに落ちる。
指先はクローディヌが学園到着の翌日に送られてきた、ギターケースに向けられていた。
指先を見たつもりが、クローディヌの目はギターケースを捉えている。

長い時間見つめ、クローディヌは立ち上がりギターケースに近寄った。

「……まぁ、長い間入れっぱなしというのもアレだしね……。」

そう呟くと、ギターケースを空いているベットの上に置く。
厳重にかけられた鍵を外し、ギターケースの蓋を開ける。

「懐かしいな～。」

ギターケースの中にあるものを手に取り、クローディヌの口はそう言葉を発した。

手には一丁の拳銃。

名称は【シグ　Ｐ２１０】と呼ばれている。

その銃を見つめ、クローディヌは目を細めた。

他にもギターケース内には、ソビエト連邦が開発したセミオート狙撃銃【ドラグノフ狙撃銃】が収まっている。

何故クローディヌが持っているのかは、誰にもわからない。

薬莢をマガジンに詰め、素早く部屋の片隅にシグを向ける。

そして引き金を引いた。

しかし、弾は銃口から出てはいない。

「……やっぱ、忘れてないね。」

そう言うと、クローディヌはベットに落としたマガジンを拾い、シグに入れ込んだ。

先程引き金を引いたとき、マガジンは装填されていなかった。

弾が出ないのは当たり前だ。

「また、世話になる。」

シグのセフティーをかけ、ギターケースから取り出したホルダーを、

制服のスカートに隠れるような場所に付け、シグを収めた。

３１７　海と過去（後書き）

できれば、次話は学園祭をやりたいな～。

だけどｍ、毎回宣言すると失敗するで願望ということでｗ

クローディヌが物騒なもの持ってる。

けど、箒も持っているため何も言わない。

言われないｗ

最後あたり、シグＰ２１０を略してシグにしてしまったｗ

ちなみに、ドラグノフ狙撃銃はモデルガンでもっていたりもします。

買ったときお財布の中から、諭吉さんが沢山消えていったことを覚えてます……（一＿一；）

実は、私狙撃銃マニアｗ

マニアというか、好きなだけ。

ゲームでも基本狙撃銃です。

３１８　学園祭と一夏とデートを賭けた戦い（前書き）

祝半年間連続更新！

つまり、６ヶ月間ノンストップ更新を続けていましたｗ

Ｐ３

３１８　学園祭と一夏とデートを賭けた戦い

学園祭当日。

生徒たちが騒ぎ、招待された学園外の人間が珍しそうに学園内を歩く。

一組で一夏の接客を受けれると騒げば、一組は大忙し。

なのだが、一組の横にある二組も大忙しだった。

別も意味でだが。

鈴がクローディヌをはじめとする一夏を狙う専用機持ちに、声をかけてその場は珍しい光景を作っていた。

鈴、セシリア、箒、クローディヌ。

その四人が特殊なテーブルを囲むように座る。

「……いくら天才といえど、一夏は渡さないわよ……。」

鈴がそう言いながら、テーブルの中央にあるボタンを押した。

二組は一組に対抗したのか、中華喫茶をしている。

教室内はかなりお客が入っているが、この四人のせいで出ていくお客がいない。

「一荘、赤なし、食いタンなしの一発勝負。　負けたら今日一日一夏に近寄らないことっ！！」

言い終わると、四人が囲んだ机から何かがせり出してきた。

実はこの中華喫茶、もう一つ別の顔がある。

麻雀喫茶。

鈴が勝負事するために、押し込んだモノだ。

そう、四人が囲んでいるのは自動麻雀卓。

麻雀をする気なのだ。

発祥が中国のため、簡単に通ったが学園側として容認していいのだろうか。

誰もが思うが、着々と鈴達は準備を進めていった。

麻雀とは、プレイヤーがテーブルを囲み百三十六ある牌を引いて役を揃え、他面子（プレイヤー）から点数を奪い得点を重ねてゆくゲームである。

役は複数あり、組み合わせることで高い点数を出すことができ、かなり頭を使うテーブルゲームの代表である。

そして終局時に一番多く点数を所持していた者の勝ちという、ありふれたゲームでもある。

鈴は一夏とデートするために、これを押し込んだのだ。

自分の得意なゲームを。

そのことに全員が気がついているが、何も言わない。

勝てば一夏を手に入れることができるのだから。

クローディヌだけは、少し違うが勝つ気でいた。

「箒、ルールはわかるわよね？」

「ふっ、バカにするなよ。　これでも義兄さんに、叩き込まれたのだからな。」

鈴が箒を心配するが、別に問題なかったようだ。

「ちなみに、どのくらいの期間教えてもらいました？」

セシリアが少し嫌な笑をして、訪ねてきた。

「……五日間程度……。」

その言葉に、全員法規の見る目が優しくなった。

「し、仕方ないだろっ！　麻雀なんかやるとは思ってもみなかったのだからっ！！」

「箒、五千点棒を受け取れ。」

なぜかクローディヌが、五千点棒を箒に差し出した。

完全に哀れみを受けていた。

「大体、鈴が言うのが遅かったのがいけないだろうっ！！」

そう言いながらも、クローディヌが差し出す五千点棒を返す。

「だがまぁ、やるからには本気でやる。」

全員ハンカチで涙を拭い、杯に手を付け始めた。

「一年の教室は、意外と騒がしいね。」

リリィはそう言いながら、階段を上がり一年のフロアに出る。

「箒ちゃんが、いっくんのために頑張ってるんだよ～♪」

そう言いながら、束が二組みの教室を覗いた。

しかしギャラリーが多く、何が起こっているのか理解できない。

中の様子を見たいが、見れない。

その事に束は、レイジングハートを胸から取り出した。

「まてぇぃっ!?」

もちろん当たり前のように、リリィは止めた。

レイジングハートを取り上げ、束の肩をつかむ。

「今何しようとした?」

冷や汗が流れながら、リリィは束に問いかけた。

流石に非常識な考えは、最近なかったためリリィは驚く。

しかし、二人は非常識な事を最近したのだ。

リリィはそのことを忘れている。

束は唸りながら、箒がいるであろう教室内を眺めた。

３１８　学園祭と一夏とデートを賭けた戦い（後書き）

結構前から、鈴とクローディヌの出番を増やそうとして考えていた事。

麻雀的な物も書きたかったから、やっちゃった。

そういえば、最近麻雀打ってないな～。

麻雀と言えばアカギ。

咲というと思っていた？

残念、アカギ派でした～☆

文章評価とストーリー評価　が５：５で保たれているからホッとしていたり……（笑）

いつコノ均衡が崩れるか……（（（（（　；　。д　。）））））アワワワワ

３１９　麻雀（前書き）

とりあえず、長いことやるとアレのなので一局だけ……。

萬子は漢数字　↓　一～九

筒子は○数字　↓　？～？

索子は英数字　↓　？～？

そんな感じでＰ３

319　麻雀

「で、貸してくれない？」

「……ふ～ん。」

ローズの目の前には、メイド服を持ち自身にあてて、そう言う楯無がいた。

メイド服を貸して欲しいといっているのだが、ローズは貸す気になれないでいる。

「お願い～。」

そんなことを永遠としていた。

「リーチ。」

そう言ったのは、口の橋を釣り上げたセシリアだ。

その言葉に鈴は歯噛みし、手牌を見た。

牌には萬子、筒子、索子、字牌と四種類あり、一種四枚存在する。

それらを手配で、三、三、三、三、二という形をつくり上がるのが、麻雀だ。

ちなみに、字牌以外は全部一から九までの数字か数で構成された牌である。

三牌は一、二、三というように、連続して続く牌を順子(しゅんつ)をつくるか、同じ牌三牌で作った刻子(こーつ)を作るしかない。

順子は一、二、三だけでなく、二、三、四や六、七、八とか七、八、九のようにも作ることができる。

ただ、同じ牌を使用して二組作ることや、一と九を組み合わせることはできない。

他にも、四牌を一組とした槓子(かんつ)がある。

基本手牌には十三牌しか所持できず、役がある状態で山から引き、それであがりの状態をツモと言い、ほかの人が捨てた牌であがりの場合ロンという。

役はかなり数があるので割愛するが、セシリアが宣言したリーチも役の一つである。

リーチの宣言は河(ホー)と呼ばれる捨て牌を置く場所に、宣言した

ときに捨てた牌を横にしておき、千点棒を払うことで一役作ることだ。

この時、鳴きと呼ばれる行為をしていると、リーチの宣言は出来ない。

（セシリアの河は……。）

手牌からセシリアの捨てた牌をみて、鈴は目を細めた。

鈴の手配は【？？？？？？？？？中中中】とかなり出来上がった状態である。

＞ｉ３２８８６―３０４５＜

それに対し、セシリアの河にある牌は【一九？西？南？東三六〔三〕】と言う状態。

鈴の手牌は、？か？が牌った瞬間に？を捨てれば、リーチがかけられる状態だが、セシリアのリーチ宣言の後に？を捨てることはできなかった。

河に捨てられた牌を見て、相手の手配がどういうのか理解するのは麻雀をするに対し一般的な事だ。

不要牌を捨てるということは、捨てられてない牌が危険という事。

つまり、鈴の?はセシリアの河に捨てられておらず、さらに筒子が無いという状態は、?は危険牌と言う事だ。

鈴から見れば?を捨てるだけで、簡単に高い役を作ることができる。

「ふむ……。」

クローディヌはそう呟き、手を顎に当てると?を河に出した。

なんの躊躇いもなく、筒子を捨てたのだ。

一瞬セシリアの上がりを、頭の中で考えた。

しかし、セシリアは?でロンと言わない。

箒が「親リーチか……。」とつぶやきながら、山から牌を引く。

親とはそれぞれの局に、プレイヤー一人が担当する。

親の場合、何かと有利な事もあり点数が普通に上がるより高く上がれるのだ。

少し考え、箒は安全な九を捨てた。

九が安全な理由は、上がる時、河に上がり牌などが一牌でもあれば上がれないと言うルールがある。

つまり、セシリアが捨てた牌は不要牌であり、一番安全に河に出す

ことができる牌という事だ。

妥当な判断に鈴は少し心の中で拍手をし、山から牌を引いた。

南。

（……ふぅ、安全牌で良かった……。）

そう思いつつ、南を河に捨てた。

そしてリーチを宣言したセシリアの番。

ちなみに、リーチを宣言して一巡（セシリアに順番が戻るまで）するまでに上がれば、一発と言う役も付く。

期待しているのか、山に伸びる手が早い。

「……。」

そして引いた牌を見て、セシリアは溜息を付いた。

「まぁ、そう簡単にくるはずもありませんわよね……。」

そう言いながら、セシリアは河に?を捨てた。

リーチ宣言以降、手配を変える事はできない。

つまり、不要牌は捨てなければならないのだ。

鈴はその捨てられた牌を見て、唇を釣り上げた。

319　麻雀（後書き）

当初「鈴の活躍を書こう！」

と思っていたんですけどね……。

鈴＝中国＝美鈴　↓×

鈴＝中国＝麻雀　↓？

まぁ、良いかなという思いで、麻雀開始ｗ

話先頭にローズが出てきたのは、出番が少なかったからｗ

というか、どういうシナリオがいいか……。

320　あっさり終わる麻雀（前書き）

さて、次話あたりから普通の学園祭。

つまり原作に戻るとしましょう。

P3

320　あっさり終わる麻雀

『これは白き騎士が、この世界の運命を変えたお話。』

大きなホールに、声が響いた。

数実で撮影し編集仕上げた、白騎士事件の上映をしているのだ。

『物語のキーとなるのは、この三人。』

スクリーンには、小学生にも満たない子供と、中学に入ったばかりくらいの黒髪と紫髪の少女が写っていた。

もちろん、リリィと千冬それに束だ。

「ありがとう、ロン。」

セシリアが捨てた?牌を、クローディヌはロンと言った。

鈴は唖然としてクローディヌを見ていた。

クローディヌは既に鳴いており、場に一、一、一と?、?、?が出ている。

鳴きとは、ポンやチー、カン等の事を言い、他家が捨てた牌を貰うことを言う。

ポンは自身が同じ牌を二牌持っている場合、他家がその牌を捨てた瞬間ポンと言い自身の所持している同じ牌をオープンし、捨てられた牌と共に横に置くことで、刻子を一組作ることだ。

この場合、クローディヌのオープンしている一の三牌と、?の三牌がそれにあたる。

他にもチーと呼ばれる順子を作る鳴きもあるが、ポンとは違い上家（カミチャ）と呼ばれる自身の前にいるプレイヤーが捨てた牌しか取ることができない。

ただ、鳴きにはデメリットもある。

早く役が作ることができるが、鳴くとリーチをかけることができなくなる。

そのため、鳴きはリーチ以外の役を作るのに、考えなければいけない。

「まさか、これが当たり牌だなんて……。」

セシリアはそういうと、唖然としながらクローディヌの河を見た。

河には【東南中五？？？六白？？】という、なんとも不規則で分かりにくい捨て牌が存在している。

しかしポンしており、六牌オープンしていることから役は想像がつく。

それだけ見れば、三色同刻（サンショクドウコウ）という、萬子、筒子、索子を全て同じ数字で刻子三組作る役や、全て刻子で構成されている対々和（トイトイホウ）などがある。

また、混全帯公九（ホンチャンタイヤオチュウホンロウトウ）や混老頭などの役もあった。

「なっ！？」

「「っ！？」」

しかし、クローディヌがオープンした手牌は驚愕のモノだった。

【九、九、九、？、？、？、？、？】

これに鳴いた牌を加えると【九、九、九、九、？、？、？、？／一、一、一、？、？、？】となる。

＞ｉ３２８８７―３０４５＜

この役を一見見れば対々和に見えるかもしれない。

しかし、これは別の役として存在していた。

清老頭（チンロウトウ）。

約満（ヤクマン）と呼ばれる高得点役だった。

「一局で飛んだな。」

セシリアは持ち点の２５．０００点が、子の役満３２．０００で一気に無くなり、クローディヌの勝ちでゲームは終了した。

スクリーンは小さなリリィが、生身で白騎士を圧倒した場面で、休憩をいれた。

意外に盛況のため、映画化しないかというオファーや写真集を取りたいので、モデルになって貰えないだろうかと、三人に話をする人が多くなる。

御手洗（トイレ）休憩なのだが、なぜそういう話がくるのかリリィ達にはよくわからなかった。

とりあえず、写真集は所属篠ノ之が作ろうという考案が出ているため、リリィが断ったが。

「……リリィちゃん、お腹空かない？」

束がリリィの肩をつかんで、上目遣いでそう言った。

「そうだね。」

「……あ、待て……。」

そう言いながら、二人は千冬を置いて歩き始める。

もちろん千冬も、付いてきた。

「何食べたい？」

しかし、リリィは千冬を無視して束に問いかけた。

「お前も説教したほうがいいのか？」

千冬がそう言うが、リリィは無視し続けた。

こういう時に、二人の世界外に居る人間は寂しい。

「……ドンマイです、織斑教導官。」

いつの間にかいた、クラリッサがそう言って千冬をなだめた。

320　あっさり終わる麻雀（後書き）

ＢＧＭ　は無敵曲ｗ

聴きながら書いていたけど、空耳やばいｗ

ソメーンソーメンエビ天

って、これはひどい。

ローズも何かさせようかな～。

……そもそも、一夏どうするｗ

どうせ、麻雀なんか入れても面白くないでしょ？

ということで、セシリアのぶっ飛びでおしまい

321　よみがえる白き魔王（前書き）

サブタイでわかるかな？

ふふふｗ

Ｐ３

３２１　よみがえる白き魔王

四人は歩きながら、屋台を見回った。

あと数分で上映を再開するため、抜けるタイミングがない。

途中でお腹すいても困るため、屋台を見回っているということだ。

「……なんか、妙に視線が……。」

そう言いながら、束は頬をかく。

「……というか、またこの視線か。」

千冬は溜息とともに弱音を吐き、歩く。

それはそうだろう。

クラリッサは違えども、リリィや束、千冬はＩＳの事でまず最初に知る人物だ。

十年前からＩＳの生みの親として名を馳せた束。

そのＩＳを使用し、第一回ＩＳ世界大会モンド・グロッソを優勝した千冬。

そしてＩＳ登場の十年後に公に公表された、もう一人の開発者。

メディアはその事に、「白騎士事件の。」という風に、三人を取り

上げている。

それは半年近く立った今でも、同じことだ。

最初は白騎士事件は犯罪であると、沸き立つものもいた。

しかし、そこはリリィ。

国際ＩＳ委員会に掛け合い情報統制などし、架空の裁判を起こし保釈金を払ったことになっている。

その分、ＩＳムラサメなど作らされる原因にもなるのだが、リリィにとっては痛くも痒くもない。

そもそも、リリィと束の犯罪はそれほど多くないのだ。

白騎士事件でのテロ紛いな行為。

密入国的な入国。

逃走など、思っていたより多くはないのだ。

それでも、一般人にしてみれば多いのだが。

世界の情勢を変え、これだけで済むのはリリィがいたからこそだろう。

「おじさん、焼きそば四つ。」

リリィはそう言いながら、近くの屋台で焼きそばを買った。

屋台の店主はリリィと束を見た瞬間、目を丸くしたがすぐに戻り「はいよっ！」と渡す。

「……というか、なんで屋台があるでしょうか。」

「今更な質問だね、クラリ～☆」

「ク、クラリィ～？」

クラリッサの質問に、束が答えようとした。

もちろん、変な愛称をつけて。

「気にするな。　……束は相性でしか呼ばん。」

そんなクラリッサに千冬は話しかけ、説明する。

しかし、そんな時でも束の口がふさがることはない。

「……の屋台は、最初は存在しなかったんだよね～☆　だけど、それじゃぁ面白くないから、この束さんが入れてあげたのだよっ♪　お祭りだからね！　もち……。」

「……でも、篠ノ之博士……。　篠ノ之リリィ博士の方は、ちゃんと名前で呼んでますが？」

束を無視して、二人は話し続ける。

「ん？　そういえばそうだな。　十年前からあいつ、リリィを愛称

で呼ばないな……。　いつも「リリィちゃん。」だ……。」

「……もしかして、防衛戦張っているつもりですか？　……ブリュンヒルデ？」

千冬の言葉にクラリッサは目を細める。

お互い誰にも聞こえない声で、言い合いながら視線をぶつけた。

「当たり前だ。　パッとでのお前に、リリィを取らせるとでも？」

そう言って、千冬の目も細くなる。

そんな千冬を前に、クラリッサは唇を釣り上げた。

「ふふふ、略奪愛の知識なら、ブリュンヒルデよりは上ですよ？」

もちろん、漫画やアニメ等から知識を蓄えただけだ。

二人は睨み合い、目を閉じる。

「その前に……。」

「ええ……。」

お互い目を開き、同時に口を開いた。

「「束（篠ノ之束博士）をどうにかしないとっ！！」」

そして、呟いているはずの束を見た。

「……。」

「ぁ……。」

「……た、束……？」

しかし振り返った時、束は二人のすぐ近くにいた。

クラリッサの額から汗が流れる。

「……ずいぶん、面白いお話してるね……？」

その言葉は、先程の会話を聞かれていたということだ。

束の雰囲気はいつもより冷たく、辺り一面凍ったような感じを受けるほどだった。

千冬は初めて見た、束の雰囲気に飲まれ動けない。

逆にクラリッサは、軍人として危険だと感じていた。

「……二人とも。　……少し、頭冷やそうか……。」

「……何やってんだろう？」

そんな中、焼きそばを買ってきたリリィだけが、取り残されていた。

３２１　よみがえる白き魔王（後書き）

本当は、ローズが出てくるはずだった話。

だけど出てこない。

大量に入れすぎると、ダメだっていうことだね。

全員使い切れてない……ｏｒｚ

一夏も……。

あれ？

箒以上に空気じゃない？

……（ー＿ー；）

一夏なんかいなかった。

そう、居なかったんだ……（ー＿ー；）

ストライクフリーダム・フェニックスを、ちょっとだけ書き直してみた。

＞ｉ３３１８３ー３０４５＜

後ろの方に伸びているはずの羽が、めんどくさくなって適当に……

（―_―；）

３２２　学園祭にはハプニングがつき物（前書き）

リリィ達大人組（？）を除く、候補生は今！？

的な感じ。

Ｐ３

322　学園祭にはハプニングがつき物

箒は教室に帰ってくると、ありえないものを見た。

「……なんで居るんですか……。」

メイド服を着て、一夏に給仕をさせている楯無がそこにいた。

そもそも、そのメイド服は一組が使用するメイド服だ。

「ん？　あら、箒ちゃんじゃない。　やっほ～。」

当の楯無は、そう言って紅茶を持つ手を少し上げる。

「ん、帰ってきたか。」

そんな楯無の横で、一夏がトレイを持って立っていた。

その光景に、箒は頭を痛める。

「……あ、おかえり……、箒。　それに、セシリアも……。」

ローズが男性に囲まれながら、教室のドアの方を向きそう声をかけた。

その声と同時に、セシリアが教室に入ってくる。

「あらら？　一体どうしたの、そんな御通夜のような顔しちゃって。」

楯無がそう言うと、更に二人の表情が沈んだ。

そんなところに、クローディヌがやってきた。

「ん？　クローディヌちゃん～、いらっしゃ～い。」

楯無がそう言うと、二人は驚きゆっくりと振り返る。

あたかも自身のクラスのように、縦無が行動している事に誰も口を出さない。

それが、楯無の行動を大きくさせた。

その結果が、今現在の一夏と楯無の状況だ。

「……ん、時間です。」

ローズはそう言うと、男性を立ち上がらせ笑顔で見送る。

「ありがとう、ございました……。」

元々の容姿が高くリリィに似ていることもあり、ローズはクラスで一番人気があった。

もちろん、リリィに間違えられることもある。

だがそこは、丁寧に妹であることを説明した。

「……で、あなたは何やってるの？　……営業妨害、って言って教

師呼んで欲しいの……？」

「残念。　私は教員より……。」

「兄さん。」

「うっ……。」

楯無が「私に敵うもの無し！」と言う文字が書かれた扇子を開いた瞬間、ローズがリリィの存在を指した。

のらりくらりと今まで避けてきた楯無だったが、リリィには弱い様だ。

「はいはい。」と言って席を立つ。

背伸びし、教室を見渡す。

「……でも、生徒会も意外と暇なのよね……。」

そう呟き、何か閃いたのかローズに人差し指を立て口を開く。

「お客と言う事じゃ、ダ……。」

「そう……。　既に時間が過ぎておりますゆえに、……延長料込みで、……７．６００円となります。」

しかし、楯無の案はローズにとって無意味なものだった。

さらにローズの言葉で、楯無の表情が固まる。

代表候補生とはいえ、そこらへんのお財布事情は、一般生徒と変わらないようだ。

「……そういえば、クローディヌさんで……、いいのかな？」

ローズと楯無をよそに、一夏はクローディヌに話しかける。

そのことに、箒とセシリアの表情がこわばった。

完全に一組は、おかしな空気が流れている。

「ああ、呼び捨てで構わないが。」

「んじゃ、そうするよ。　で、何か用事？」

一夏の言葉に、クローディヌは口を釣り上げて箒たちを見た。

「……ふ、負けたのが悔しいか？　篠ノ之箒、セシリア・オルコット。」

全員不思議がり、クローディヌたちを見た。

もちろん、箒とセシリアは睨んでいる。

「安心しろ。　別に凰鈴音のルールに私は乗っかったつもりはない。」

二人の眉が、動く。

「……祭りに制限をかけ、楽しめなくなる様な事をしたいか？」

「おい、レモンティーができたと言っているだ、ろ……。」

クローディヌが等たちに話をしている間に、ラウラが厨房から顔を出す。

教室でありながらも、厨房が増設できるのは流石ＩＳ学園なのだろう。

「ラウラ～、どうした……、の？」

そこにシャルロットも加わる。

二人が、教室内の空気がおかしい事に首をかしげる。

そんな中、クローディヌは教室を出ようと振り返った。

「せいぜい近づいて楽しめよ？」

そう言うと、クローディヌは出ていった。

３２２　学園祭にはハプニングがつき物（後書き）

もちろん、クローディヌが言った言葉を訳せば「別に、一夏に近づいてもいいぞ？」的なこと。

もともと、監視目的ですしねｗ

必要なときに近づければいいだけ。

そんな感じで、学園祭はまだまだ続きます。

ちなみに、楯無の７．６００円は以下の通り。

チャージ料（居酒屋じゃないんだから……。）
延長料
紅茶を頼んだ回数
一夏を指名し独占したまま延長したため、倍プッシュ！

最後、どこぞのアカギが入ったけど、そんな感じ。

とりあえず適当に色を付けてみた

＞ｉ３３２９２―３０４５＜

めんどくさいから、簡単に省略したｗ

323　学園祭に現れる女性（前書き）

……サブキャラですが、オリキャラです。

リリィ関係の女性登場。

P3

323　学園祭に現れる女性

あれから一組のご奉仕喫茶は問題なく再開。

廊下に長蛇の列を並ばせるほどとなった。

基本的には一夏目当ての生徒などが多いが、今だローズの存在を知らないものにとっては、リリィがメイドをしているというふうに捉えられ、ローズを選ぶ人もいる。

もちろんリリィではないとローズが否定すれば、そのつど教室内に驚愕の声が響く。

そんな中、厨房の方が先に手が回らなくなり混乱していた。

厨房とはいえ、教室内に増設したものだ。

だから厨房の広さも、そこにある素材にも限りがある。

フロアの方ならどうとでもなるが、限りある物資を主に使う厨房は混乱するに決まっていた。

一時はラウラとシャルロットが持たせてはいたが、すぐに混乱し始める。

そんな時に、ラウラは静かに口を開いた。

「フロア班、材料調達に半分行け。　厨房班、私達が出る。　戻ってくるまで壊れるなよ……。」

そう言うと、シャルロットのメイド服を掴み、ラウラは厨房からフロアである場所に移動した。

厨房は今や物資が切れかけているため、ほぼ機能しない。

なら、フロアに出た方が得策であるとラウラは思っただけだ。

「お帰りなさいませ、お嬢様。」

シャルロットはラウラに引っ張られてことに混乱しながらも、直ぐ様フロアに適応し笑顔で動き始めた。

ローズとラウラはフロア内を静かに行ったり来たりしながら、調達に出た班が帰ってくるまで動き続ける。

一夏は相変わらず指名が多く、セシリアや箒達もなんとか動いていた。

「……へぇ、ここが噂の学園か。　いいところだな、スカーレット……。」

そんな時、変な人間が教室に入ってきた。

金の髪を後ろで纏めポニーテールにし、スーツを着た女性。

教師よりも厳しそうな顔立ちをしながら、それほど長くないポニーテールのせいで感じられる女性としての雰囲気。

そんな女性がローズに向かって、スカーレットと呼んだ。

教室内にいる全員が不思議に思いながら、ローズ達を見る。

「会いたかったぞ……。」

女性がそう言い、さらにその場を混乱させた。

「……あ、あ～。　兄さんと……、私を見間違えてるわけ……。」

しかしローズは冷静に状況を判断し、女性がローズとリリィを見間違えている事に気がついた。

全員その言葉に、納得しながら「またリリィ先生絡みの厄介事か。」と思っただろう。

女性はローズの言葉を聞いていなかったのか、その雰囲気が崩れる様子がない。

「まったく、十年以上を探したんだぞ……。」

「……あの、人違……。」

「しかも、あの篠ノ之束と共にＩＳを開発したことになっている。」

女性の勘違いにローズは訂正しようと思ったが、女性は話を聞かずどんどん喋り始める。

当たり前だが、箒やシャルロットは興味津々に女性の話を聞き、ラウラやセシリアは少し耳を傾けながら接客を続けた。

もちろん一夏も、唖然としながら女性を見ていた。

「一体どうしたと言うんだ？」

女性はそう言うと、ローズの肩に触れる。

そして宙を舞った。

「「「「「「「「「「「「え？」」」」」」」」」」」」

全員その光景に唖然となった。

女性がローズの肩に触れた瞬間、舞っていたのだ。

唖然とするのも仕方がない。

「相変わらず、良い動きだっ！」

女性はそう言うと、何事もなかったように着地した。

「しかし、昔よりキレが……。」

「だから……、人違いだと言ってるでしょ……。」

ローズはため息を付きながら、呆れたような目で女性を見た。

ようやくローズの言葉が届いたのか、女性の動きが止まりローズを観察し始める。

「……たしかに、スカーレットほど惹かれないな……。」

その言葉に、教室内にいる生徒は「……クラリッサ先生の同類……。」と思い、通常業務に戻った。

323　学園祭に現れる女性（後書き）

ちなみに、最後全員が思ったクラリッサの同類という意味は、「リリィを狙う」という意味です。

その点で言えば、千冬の同類……と書いても良かった気がします。

とりあえず、過去編に関わりそうなキャラ登場。

未だ、前世災厄編（仮）や過去編（リリィ5～7歳）を書いてませんからね～。

5巻ラストから、それに繋げようかと考えていますが、詰めすぎかな？

リリィ＝スカーレットはわかる人が少し入るともいますが、一応補足。

別作品で束は子供を産んでいます。

その子供にスカーレットは、受け継がれています。

子供がなんの思いつきもなく、スカーレットと付けると思う？

……ん？

意味が分からない？

大丈夫、別作品読んでいる人しかわからないから。

オリサブキャラの金髪ポニテ女性については、次話でｗ

では、２４時間後にまた……ノシ

３２４　メイド喫茶と映画（前書き）

ここ最近、オメガモン（デジモン）がよく脳裏にちらつきます。

……天才篠ノ之束ＶＳデジタルモンスター！？（どうやってその結論に至ったんだろう、……私。）

……ボツ、……Ｐ３

324　メイド喫茶と映画

ローズは適当に女性を席に案内し、椅子に座らせた。

そして厨房に入り、ティーポットとティーカップを載せたトレイを左手に持ち、椅子を汚くない感じで右手に持ち、女性の元に戻る。

それでも二つ一辺にこなそうとするのは、メイドとしては失格だろう。

椅子を女性と向き合うようテーブルの反対側に置き、トレイをテーブルに置く。

「……で、あなたは……？」

そう言いながら、ローズはティーカップに紅茶を注ぐ。

無駄一つない動きで、紅茶が綺麗にポットからカップに注がれた。

もちろん災厄として、これくらいは簡単あことである。

女性はローズを見ながら、未だに不思議そうな顔をしていた。

「……名前は？」

その状態にローズは肩を落としながらも、名前を聞いた。

既に紅茶は入れ終わり、ソーサーと共にカップを女性の前に置く。

「ん、……本当にスカーレットじゃないんだな？」

女性は再度聞き、ローズはそれに頷いた。

ローズ自身、スカーレットが何を指すのか理解してるが、ローズには全く関係が無い事だ。

疑い深く女性はローズを何度も見て、ソーサーとカップに手を伸ばす。

「……人違いだった、か……。」

そう言うと、静かにティーカップを口に近づける。

一口飲み、反対の手に持つソーサーの上にカップを置いた。

何処かのテレビでやっていそうな感じだが、見よう見まねでやっている感がある。

ローズやセシリア以外には、様になっているように見えるだろう。

シャルロットは僅かに違和感を感じる程度だ。

教室は女性のその動きに、一瞬で飲まれた。

「……セシル・ユリア。」

「「「「「「「「「「「「へ？」」」」」」」」」」」」

女性がそう言うと、教室内にいる大半が変な声をだす。

その言葉に、女性は教室を見渡し「名前よ。」と補足するかのように言った。

「……まぁ、偽名だけど。」

そう呟き、セシルは苦笑する。

その言葉はローズ以外には聞こえなく、全員がセシルを横目で見ながらその場にいた。

『「……行ってきます、束。」』

モニターの向こうで、ストライクフリーダム・フェニックスが束にそう告げた。

もちろん、言葉を発したのはリリィだ。

白騎士事件のはじまりは、見ているものにとって唖然とするしかなかっただろう。

理由が「奪われ続けているから。」という、全く意味が分からない事なのだから。

たったそれだけの理由で、ＩＳを作り上げた。

常人には理解できるはずもない。

モニターの向こうで、フェニックスがフェイズシフト装甲を展開し翼を広げた。

『「リリィ、ストライクフリーダム・フェニックス出る！！」』

リリィの言葉とともに、フェニックスは大空へ飛翔した。

その速度が早すぎるため、モニターには瞬間的にフェニックスの部分だけ切り取ったかのような感じになる。

『「……。」』

ほぼノンフィクションのこの映画。

評判なのか、長蛇の列が出来ていた。

リリィたちがいるのは一回目の上映なのでいるだけで、二回目からはいなくなる。

白騎士事件の真相を知っているのは、これの撮影にあたった三人だけだから、この映像が本当のことかは知るすべもない。

嘘が混っていても、真実になってしまうのだ。

この作品のほとんどは真実で出来ている。

だがその真実の中に、嘘を一つ混ぜることにより嘘が真実になってしまう。

リリィと束は、それを実行した。

とても小さな嘘。

フリーダムをリリィが独自開発したという事と、リリィの名前を束がつけなかったという、くだらない嘘がモニターの映像では真実だった。

大きな嘘は真実の中に紛れ込んでも、嘘にしか見えない。

しかし、小さな嘘ほど紛れ込んだら真実になるものだ。

もちろん、フリーダムを独自開発したという嘘をつく理由は幾つかある。

だが、それを知る者はリリィ達三人しかいなかった。

３２４　メイド喫茶と映画（後書き）

さて、まずは……。

私自身わからなくなりそうだから、整理。

・この映画には、リリィ５歳の事件が簡単に説明されている。

・名前を束が付けた事になると、現在の篠ノ之リリィという人間の戸籍が消えるため、最初からリリィという名前。
「ぶっちゃけ、公文書偽造じゃね？」ということになりかねないため。

・もし拾ったことになると、世界中で探し始める馬鹿が続出。
それを利用しようとする、災厄の可能性。

・災厄から引き離すため。

・ぶっちゃけ、リリィちゃん最強がいいんじゃない？
と、束が言ったため。

他多数。

とりあえず、お腹すいた。

ＩＳ×デジモン

と言う、どう考えてもデータの海を漂ってる奴相手に、データを使う機械が戦うようなシナリオ。

どう考えても、白騎士事件が不発にしか終わらない。

むしろ、白騎士が暴走する姿しか思い浮かばない……（；´Д｀）

ただ、夜中に思いついただけです。

オメガモンが好きだから～！

……フリーダムと同じような感じで、好きですよ。

オメガモン。

ちなみに、無印からテイマーズ当たりまでしか認めない。

若干、０２とテイマーズも認めたくないけど……。

オメガモンは初期でなければならない。

反論は許す。

３２５　学園祭で交じわる影（前書き）

ちょっとばかし、この話の構想が上手く出来なかった。

とりあえず、書けるには書けるんだけど……。

そろそろ、あらすじ変更しようかな・・・・、Ｐ３

325　学園祭で交じわる影

上映中の白騎士事件を、クローディヌは呆然として見ていた。

画面に映る映像全てが、驚愕するべき事実であり、同時にクローディヌを苦しめる。

誰にも気がつかれることなく拳を震わせ、画面に映る篠ノ之夫妻を見た。

「……。」

そして静かにその場から離れるのだった。

セシルとローズは未だ、一組にいた。

あのあと少しだけ騒動が起きたが、直ぐに沈静化される。

「……よくよく考えたら、セシルもユリアも……、両方名前だよね……。」

メイドが紅茶を飲んでいる姿は、ご奉仕喫茶では異端だっただろう。

「基本この名前知ってる人少ないし、コードネームだしね。」

「……理解。」

セシルが紅茶を飲みながら、ローズと話し続ける。

妙に回転率が悪いのは、セシルが居座っているからだろう。

「一夏さん、ほら行きましょう！」

「まてっ！　一夏、私と行くよな？」

セシリアと箒が、一夏を取り合っているせいでもあるが、いつもの事なので誰も気にしない。

むしろ「はぁ……、一夏。　両方と行くなんていうことは言わないでね？」とシャルロットが助言すると言う名の参戦をしたため、教室内はご奉仕喫茶という名の割に騒がしかった。

もちろんラウラはいたって真面目で、フロアを動き誰よりも働いている。

一番うるさい元凶の一夏を、少し睨みラウラは厨房に入っていく。

騒ぐならよそでやれという、無言の訴えだった。

その視線に、一夏達は教室の外に出る。

おそらく、メイドらしいメイドをしているのはラウラだろう。

「……シュヴァルツェ・ハーゼの隊長がメイドしている光景も、凄いものだと思うけどね。」

セシルが教室内を見渡し、そう呟いた。

ソーサーとカップを同時に置き、すべての机に置かれているベルを手に取る。

なぜかメイドをベルで呼ぶ、と言う訳の分からないことを一夏が言ったため実行されたベルシステム。

ファミリーレストランなどにあるボタンの代わりである。

それを鳴らすと、ラウラが渋々厨房からフロアに出てきた。

「……なんでしょうか？」

スカートの裾を摘み、ラウラはセシルにおじぎをした。

「あ、そうだ。」

箒とセシリア後者の外に出て、一夏は思い出したかのように口を開いた。

この学園祭には一夏の友人の、弾もくることを思い出したのだ。

そのために、チケットを渡している。

「お～い、友人を迎え、に……。」

そう言い一夏は箒達を見るが、妙に歪み合い一夏の言葉が届きそうにもなかった。

過去にリリィが「女の揉め事に、男が入っちゃいけない。」と言っていたため、一夏は何も言わずにその場を離れる。

その足は人気のない場所を踏み、ゆっくりとゲート前に向かう。

学園関係者以外立ち入り禁止区域。

学園祭中、広大な敷地で起こるトラブルを防ぐ為に、立ち入り禁止区域を作ったのだ。

もちろん生徒は入ることができる。

そのため、一夏は人気のない道を歩いていた。

ひとりの男がラフな格好で、木の上にいた。

もちろん、ＩＳ学園内にだ。

「へ、ザルな警備だな。」

男はそう言うと、目を細める。

目の先には、一夏がいた。

「あいつのＩＳを回収すれば、俺の仕事は終わり。」

そう言いながら、木から降りる。

一夏の背中を見ながら、ナイフを取り出す。

しかし、男は動かなかった。

「……気がついた？」

「誰だ、てめぇ……。」

声が響き男は身構えようとするが、後頭部に硬いものを押し付けられ動けなくなった。

拳銃だ。

「知らなくていいよ……。」

男は響いた女の声に、目を細めながら対処を考えた。

「ばいばい、亡国企業（ファントム・タスク）。……私のエモノに手を伸ばそうとした、意地汚い亡霊……。」

「ま、まてっ！！」

しかし、声の主は男に考える暇を与えなかった。

青空の下、銃声が響く。

325　学園祭で交じわる影（後書き）

とりあえず、一気にシンデレラまで進めようかな……。

一夏サイドいる？

と聞いたところで、答えが返ってきたときには決定していると言う罠。

おそらく、現作の話は端折るんだろうな～、と思っていたり。

実際そのとおりだと思うけど……（ー＿ー；）

おそらく、５巻終了後に災厄編か過去編に入るのかな？

災厄→過去という感じで、ちょっとばかし考えていたり……。

というか、オリ話が多いせいか５巻が５０話越してる気が……。

意外とＴｗｉｔｔｅｒで作品状況呟こうにも、フォローされてる人の中に読んでいる人が半数もいないという罠。

つぶやこうにも、つぶやいていいのやら……。

３２６　ラウラの誤ち（前書き）

今回は、歴史捏造（嘘）です。

そういうことで、学園祭戦闘（？）に入ります。

祝４００万アクセス達成！

さらに、『サキちん@ささみ』様が書いてくださった、『お子様には見せられないリリィ×束』の小説が【うpろだ】に上がりました。

もしよろしければ、読んでください。

［ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ１．ａｘｆｃ．ｎｅｔ／ｕｐｌｏａｄｅｒ／Ｓｃ／ｓｏ／２８６５５７］

「リリ×束イチャラブものお子様お断り、パスは【葵　束】様の作品より、あの主人公の名前でしてよ！」

※上記のアドレスから【うpろだ】へ飛び、パスワードを入れてダウンロードしてください。

テキストファイルを圧縮している為、解凍ツールが必要になります。

解凍後、テキストファイルを開けば読めます。

Ｐ３

326　ラウラの誤ち

一夏が弾のところに向かってる間に、企業の女性らしき人物に装備の提供を提案され断っている頃、一組では。

「……要件はなん……でしょうか？」

ラウラが頭を上げ、セシルを見た。

何時も通りの喋り方をしようとし、なんとか踏みとどまった為、言葉が変なふうに空く。

そのことに苦笑しながらも、セシルは持っていたベルを机に置いた。

「ふふ、ほんと面白いわね。」

そう言いながら、セシルはラウラを見た。

しかしセシルの目は、ラウラを面白いと思っているようには見えない。

むしろ敵を見るかのように鋭く、睨んでいるようにも見えた。

「……で、要件はなんでしょうか？　コードネーム、ユリア。」

「わかってるでしょ？」

ラウラがそう言い、セシルが苦笑しながら立ち上がると、お互い瞬間的にスカートに手を伸ばし、腿につけていたバインダーから銃を

引き抜いた。

そして、そのままお互いに銃口を突きつける。

そんな光景をローズは黙ってみていた。

「……な、にしてる……、の？」

シャルロットをはじめとする、一組の教室内にいる者は唖然としているが、それが普通の反応だ。

教室内の空気が、二人の行動で一瞬で止まった。

ただローズだけが、動じないでいる。

「……ラウラ・ボーデヴィッヒ。　私は貴様を許しはしない……。」

ラウラの構えたグロック１９を見据え、セシルもベレッタＭ９２を構える。

お互い愛用の銃なのか、構えと銃が妙に似合っていた。

「……。」

険悪な雰囲気の中、セシルが口を開いた。

「二年前のドイツ国境防衛戦の時の事は、今でも覚えているさ。ラウラ・ボーデヴィッヒ、……当時大尉殿。」

皮肉げに言ったセシルの言葉は、二人が過去に出会ったと言う言葉

だった。

ドイツ国境戦線。

当時、南ドイツアルプス前縁地帯経由で国外へ逃亡を果たそうとしていた、国内の重要機密を握り逃げた人物を追い、ラウラはＩＳ特殊部隊として動いていた。

既に千冬がドイツを去ったあとであり、ラウラの実力はかなり高くなっていた。

そのために、ドイツ上層部はＩＳ特殊部隊を動かしたのだ。

ラウラが自らの地位を上げるために努力したことを知って、利用した。

「あの時ほど、私は悔しいと思ったことはない。」

「……。」

男が盗んだ機密は、ドイツの存在を揺るがすようなことだった。

だからこそ、男が国境を越え逃げ切ろうとしたところ、ラウラ達に射殺許可がドイツ軍上層部から降りたのだ。

その許可に、ラウラは当時実装されて間もない第二世代機で、試作型新兵装の大型レールカノン砲を使用した。

「貴様が放った攻撃で、散った仲間の恨み……。　……晴らさせてもらう。」

レールカノンは男に直撃したが、同時に国境を越えセシルの仲間も巻き添えにした。

その結果が、ラウラを恨むように見つめるセシルを生んだ。

セシルがそう言うと、ラウラも口を開く。

「たしかに、あの時貴様達は国境超えてきてはいなかった。……その者達を、……その者達に向け私は引き金を引いてしまった。何もしていない者達に……。」

その言葉は、教室の空気を更に固まらせた。

「弁解する気もなければ、隠す気もない。……あの戦いは本来ならば、起きるはずも無く私達が男を確保して終わるはずだった。……だが、私が引き金を引いた。」

ラウラの目が細まる。

「その結果、貴様に憎まれることになってもだ。」

その言葉にセシルの唇がゆがむ。

お互いの目が交わリ、殺気を散らす。

一組の教室は、数分で戦場となった。

「……なら、殺してやるよ。」

そう言い、セシルは指に力を込める。

「Ｉｃｈ ｂｉｎ ｓｃｈｌｅｃｈｔ……Ｅｓ ｉｓｔ ｉｎ ｄｅｍ， ｄａｓ ｉｃｈ ｆ?ｈｉｇ ｓｅｉｎ ｍｕ?， ｐｏｐｕｌ?ｒ ｚｕ ｓｅｉｎ．（悪いが……、私にはやらねばならないことができたのでな）」

ラウラも感情が高ぶっているのか、日本語からドイツ語へと言葉を変え、指に力を込める。

お互いの言葉を聞き、同時に引き金を引いた。

326　ラウラの誤ち（後書き）

とりあえず、またも私の整理のためにネタバレらしく書きます。

「前回ネタバレした？」と思っても、きにしないで行きましょう。

ちなみに、「新訳」という形でリメイク予定（？）ですので、その時にここらへんを詳しく本編に書こうと思います。

【1】

セシル・ユリアという名前は、偽名でありどちらもコードネームです。

仲間内からはコードネームは「セシル」、敵からは「ユリア」と呼ばれています。

そのため、二つ合わせた物を名前として使っています。

【2】

セシル・ユリアは雇われの傭兵のような職業をしております。

その道ではかなり有名な、人物です。

【3】

ドイツ国境戦線。

その場しのぎで作った、ラウラとセシルを繋ぐような小規模な戦いのことです。

当時セシルは任務もなく、仲間内と基礎訓練を含め南ドイツアルプス前縁地帯付近を登山中でした。

その時に、ドイツから逃げてきた人物を狙った砲撃が、セシルの仲間を殺しドイツと傭兵との小規模な戦いになり、結果としてはＩＳがあるドイツが有利。

そのため、セシルは仲間に国境越えの撤退を命令。

領土侵犯ということもあり、国境を超えることはラウラ達ドイツ軍にはできません。

そのため、セシルたちを逃がしてしまいました。

無論ラウラは処罰を受けましたが、情報漏洩を防いだために軽い処罰になりました。

という設定ｗ

次話で、この言葉に意味がわかるかもｗｗｗ

ま、あとはおいおい。

327　動く影の企業（前書き）

祝４００万アクセス達成！

さらに、『サキちん@ささみ』様が書いてくださった、『お子様には見せられないリリィ×束』の小説が【うpろだ】に上がりました。

もしよろしければ、読んでください。

［ｈｔｔｐ：／／ｗｗ１．ａｘｆｃ．ｎｅｔ／ｕｐｌｏａｄｅｒ／Ｓｃ／ｓｏ／２８６５５７］

「リリ×束イチャラブものお子様お断り、パスは【葵　束】様の作品より、あの主人公の名前でしてよ！」

※上記のアドレスから【うpろだ】へ飛び、パスワードを入れてダウンロードしてください。

テキストファイルを圧縮している為、解凍ツールが必要になります。

解凍後、テキストファイルを開けば読めます。

Ｐ３

327　動く影の企業

「じゃじゃん～。　楯無お姉さんの登場です。」

「……。」

弾と分かれ、一夏は箒達に連れ回され学園祭を見て回った。

そんな時、一夏の前に縦無が現れたのだ。

「……職場放棄人間が現れた。　コマンドは逃げるのみ……。」

箒とセシリアが呟く一夏を見て、面を食らっていたが言っている意味が分かり、逃げようと楯無と反対方向を向く。

「だが、逃げられない。」

しかし、楯無は一夏達の服を掴み逃がさなかった。

三人とも嫌そうな顔をし、仕方なく縦無しを見る。

セシリア的には一夏にこれ以上女性が近づいてもらいたくはなく、箒的には直感で敵だと感じていた。

もしこの場に鈴がいたら、箒と同じ思いで楯無に噛みついていただろう。

そんな三人を見て、楯無は苦笑し口を開いた。

「まぁまぁ、そう言わずに。……教室手伝ってあげたんだから、生徒会の出し物にも協力しなさい。」

そうはっきりと言った。

しかし、その言葉に一夏は眉をひそめる。

「……邪魔した、の間違いじゃなくって？」

「そもそも、代金も払ってないな。」

「生徒会長という者が、食い逃げとはおかしいんじゃありませんの？」

一夏が口を開けば、箒が続きセシリアも続く。

もちろん、その言葉に楯無は顔をひきつらせる。

だが、すぐに元の表情を作り上げると、再度口を開いた。

一組の教室に、銃声が響きわたった。

もちろんラウラの持つグロック19とセシルの持つベレッタ92の銃口から、硝煙が出ている。

だが、お互い撃たれた形跡はない。

「残りは？」

『教室内にはいません。』

ラウラがそう言うと、モニターが浮かび上がりシュヴァルツェ・ハーゼの隊服を着た女性がそう報告した。

その言葉にラウラは横に向けたグロック19を下ろした。

セシルに向けたのではなく、横に向けている。

セシルもラウラが向けている方向に、銃口を向けていた。

つまり、お互いを撃つということはしなかったようだ。

セシルの銃口の先には、倒れている男が二人いた。

血が流れてないことから、何があったのか整理がつかないのだろう。

誰も騒ぐことはしなかった。

ラウラがゆっくり男に近づき脈を取ったあと、男の懐を物色する。

「……あったな。」

ラウラはそう言うと男から離れ、セシルに男から手に入れた何かを投げ渡した。

セシルはそれを空いている方の手で受け取り、軽くめくる。

「……なるほどな。」

そう呟くと、男を見た。

死んではいないのか、腹を大きく膨らませたリへこませたりしている。

シャルロットが少し不思議に思い、ゆっくり近づいた。

「寝てる……。」

その言葉に全員が安堵した。

ローズは男を見て目を瞑る。

『既に十五名確保しています。』

「……分かった。　引き続き頼むぞ。」

そう言うと、モニターが消える。

そのすぐあとに、教室内に私服を着た眼帯女性達が入って、男たちを連れていった。

「では。」

その中の一人が敬礼すると、教室を出ていく。

「……。」

そして戻ってき、携帯のカメラでラウラを撮って再度消えた。

ラウラはそのことに溜息を付き、教室を見渡す。

「今起きたことは誰にも喋るなよ。」

そう言うとセシルと共に、教室を出ていった。

上映が終了し、リリィ達は外にいた。

「これで三人目……。」

リリィはそう言うと、一見普通に見える女性を気絶させた。

人通りが少ないため、堂々と女性を寝かす。

すこし、服をあさると手帳が出てくる。

束はリリィに近づき、手帳を受け取ると中身を確認した。

「……やっぱり動くんだ。」

そう呟き、手帳をリリィに返す。

「亡国企業（ファントム・タスク）……。」

327　動く影の企業（後書き）

はい、とりあえず全然書けなかったからここで暴露します。

ラウラとセシルが言っていたドイツ国境戦線ですが、そんな戦い存在していません。

ええ、そういう設定で2人は話していました。

ぶっちゃけ、セシルが厨二病（？）というわけですｗｗｗ

そういうことです。

最近スランプなのか、書く気が起きないんですよね。

でも一日一話の為、書き続けています。

どうしてこうなった……ｏｒｚ

３２８　本当の学園祭の始まりを（前書き）

……スランプです。

と書きながら、書き続ける。

ネタが浮かばない日もあるんだよ……（；´Д｀）

祝４００万アクセス達成！

さらに、『サキちん@ささみ』様が書いてくださった、『お子様には見せられないリリィ×束』の小説が【うpろだ】に上がりました。

もしよろしければ、読んでください。

［ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ１．ａｘｆｃ．ｎｅｔ／ｕｐｌｏａｄｅｒ／Ｓｃ／ｓｏ／２８６５５７］

「リリ×束イチャラブものお子様お断り、パスは【葵　束】様の作品より、あの主人公の名前でしてよ！」

※上記のアドレスから【うpろだ】へ飛び、パスワードを入れてダウンロードしてください。

テキストファイルを圧縮している為、解凍ツールが必要になります。

解凍後、テキストファイルを開けば読めます。

Ｐ３

328　本当の学園祭の始まりを

一夏は唖然とし、王冠を持っていた。

「意味がわからん……。」

「安心しろ、私も意味が分からない。」

そう一夏の言葉に返答するのは、リリィだった。

カーテンが降りている舞台の向こうで、どれくらいの生徒がいるのかわからない。

それが妙な雰囲気を出し、カーテン越しに伝わっているのだ。

お互い遠い目をしながら、自分が着ている服を見る。

一夏はどこぞの王子様のような格好をしており、リリィに至っては純白のドレスを着ていた。

「どうしてこんなことに……。」

隣が束でないという不満を抑え、原因を思い返す。

リリィと束は、不審人物を見つけ気絶させるという作業を繰り返していた。

もちろん気絶させている相手は、亡国企業の工作員だ。

すでにリリィと束の手によって、工作員の顔はＩＳ学園内にいる所属篠ノ之とほか数名に知らされていた。

何故かしらこの工作員は全員同じ手帳を持っており、その中に命令が書かれている。

そのことから、工作員はお金で雇われた者であるとリリィたちは確信していた。

「……これで、七人。　合計三十一名……。」

「い、意外に多いね……。」

リリィの言葉に束は唖然としながら、そう呟いた。

ほかを捕まえたのは、シュヴァルツェ・ハーゼの部隊員と千冬達だ。

「それにしても命令が、織斑一夏のＩＳを奪取せよ、とまぁ……。簡単なお仕事のように言ってくれてるけど、何を考えてるんだか……。」

そう言い、溜息を付くリリィ。

「まぁ、陽動とか別の目的があるんじゃない？」

そんなリリィを見て苦笑しながら束は言う。

釣られるようにリリィも笑みを浮かべ、連絡を取った。

数分もせずに私服を着たシュヴァルツェ・ハーゼ隊員が到着し、女を連れていく。

「可能性はあるけど、向こうも私の事はよく知っているはず……。」

そう言いながら、隊員の後ろ姿を見た。

人目がつかないように、迅速に人を抱えて走る姿は不審者でしかない。

心の中でそう思いながら、リリィは束の方へと振り返った。

「お二人さ～ん。　楽しんでる？」

リリィは振り返れば、最初に目に入るのは束だと思っていた。

しかしリリィの目には、凄い笑顔でリリィの近くにいる楯無が映ったのだ。

一瞬思考を放棄し、リリィは硬直してしまう。

後ろにいきなり現れ、気が付いた時点で硬直してしまうのは、人と

して普通だ。

それが気配に敏感な、リリィであっても同じだろう。

「あ、固まっちゃった？」

「……今、たっちゃんが凄い事したって自分で気がついてる？」

束が呆れながら楯無にそう言った。

今までリリィの後ろを取った人間なんて、それほどいない。

昔の人間として生きていたリリィならともかく、災厄となったリリィなら、なおさらの事だ。

「まぁ、いいや。」

当の楯無は束の言葉を無視し、リリィから離れ口を開いた。

「お二人さん、今回の事件の為にご協力願いたいんだけど。」

その言葉に、リリィは我に帰った。

「生徒会の劇を餌にするけど、餌が一夏君だけじゃ足りないから、協力してくれない？」

楯無の言葉を了承し、詳細と打ち合わせをしていたら束までもが乗り気になってしまったという状態。

二人を止めなかったせいで、今のリリィがいた。

純白のドレス。

「……リリィさ、その……。」

一夏が何か言おうと、頬をかきながらリリィを見ていた。

一瞬、お感に襲われリリィは口を開く。

「……「似合ってる。」やら「綺麗だよ。」とか言ったら、エンジェルダウン作戦ならぬ、鈍感ダウン作戦するから、……言葉は選んでね？」

その言葉に一夏は身震いした。

そんな中、ブザーが会場に鳴り響く。

３２８　本当の学園祭の始まりを（後書き）

さてさて、何を書いたらいいのやら。

ネタが浮かばなく、貯まりもしません。

いっそのこと、気分転換にリリィシリーズ第２弾かリリィシリーズ第３弾でも書こうかな？

……まぁ、第３弾ネタしか浮かばないけどね。

浮かんでも……。

いや、気分転換に書こう！！

ちなみに第三弾の主人公は２６４話で消えた、未来のリリィｗ

少し宣伝はしないとね。

329　始まりの灰被り姫（前書き）

ということで、ようやくシンデレラ。

やとここまで来た。

P3

329　始まりの灰被り姫

照明が落ち、幕が上がる。

二人とも楯無から、「観客参加型演劇、シンデレラをやるから。」としか聞かされていない。

更に演劇という割には台本が渡されておらず、リリィはともかく一夏は不安でいっぱいだった。

アリーナのライトがリリィ達を照らす。

『むかしむかしあるところに、シンデレラという少女がいました……。』

普通の出だしに、一夏は安心していた。

しかしリリィだけは、額に汗を垂らしその場の不穏な空気を感じ取る。

リリィに向けられる、嫉妬の視線と殺気の視線が混わり、空気を重くさせていた。

（……そもそも、なんでシンデレラが一緒に出てるの。）

そう思いながら、自身が纏っている純白のドレスを目を動かすだけで見た。

番上には、すでにシンデレラと王子役が出ているのだ。

既に物語が崩壊しており、リリィは楯無の行動に溜息が付きたくなってくる。

リリィと一夏はゆっくりと、番上の舞踏会エリアへ足を向けた。

『否、それはもはや名前ではない！！』

「へっ！？」

突然語りだしが変わったことに、一夏はすっとんきょんな声を上げた。

予想通りな語りに、リリィは頭を抑えたくなる。

『幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵をなぎ倒し、灰燼を纏うことさえいとわぬ地上最強の兵士たち……。　彼女達を呼ぶにふさわしい称号……。　それが灰被り姫（シンデレラ）っ！！』

その言葉とともに、青系の色を基本色とした生徒達が現れる。

その内数人は、箒達だった。

一夏は一歩引きながらその光景を見続け、リリィは呆れながら一夏の前に立つ。

どこに亡国企業が隠れているかわからない状況で、一夏の前に立たない状況はない。

リリィは目を細め、周囲を見渡す。

しかし、生徒達が武器を持っているせいか、簡単に見つからないでいた。

（厄介な事をっ！）

そう思いながら歯ぎしりし、ドレスの胸元から【ＳＯＣＯＭ（ソーコム）　Ｍｋ２３】を抜く。

『今宵もまた、血に飢えたシンデレラたちの夜が始まる……。』

その言葉とともに、躙り寄る生徒たち。

フライング気味に手裏剣がリリィめがけて飛んでくる。

しかし、リリィは冷静に銃身で叩き落とした。

『王子の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い……、そして王女のドレスに眠る秘宝をめぐり、舞踏会という名の死地に少女達が舞い踊る！』

（……あ、これシンデレラじゃなくって王女という設定だったの？）

自分のドレスを見て、リリィは何かに納得した。

しかし、納得している暇は無い。

「一夏っ！」

「え？　っ、ぐっ……。」

直ぐ様気配を感じ、一夏を回し蹴りで舞台後方に蹴り飛ばす。

一夏が転がりながら、舞台に倒れる。

「何すんだ……。」

一夏がリリィに抗議の声を上ケようとしたが、目に写った光景に口があかなくなる。

リリィのドレスから伸びる足が、先程まで一夏がいた場所に無く、そこには鈴がクナイを舞台に突き刺していた。

一夏は自身がリリィに蹴られてなかったらと思うと、顔色を青くする。

そして一夏を蹴ったリリィは、そんな鈴を相手しながらＳＯＣＯＭの銃身で箒の日本刀を捌きながら、一夏の前方に向け発砲した。

一夏は驚きながらも、目を瞑る。

すると、一夏の前方で何かがぶつかる音がした。

目を開けて確認すると、赤い線が一夏を狙っている事に気がつく。

（ス、スナイパーライフルっ！？）

その事を理解すると、一夏は舞台後方に後退した。

「くっ、流石はリリィさんですわっ！」

セシリアはそう言いながら、イギリス軍で正式採用されている狙撃銃【Ｌ９６Ａ１】のスコープから目を離す。

狙撃銃でセシリアは、一夏の頭の王冠を狙っていた。

しかしセシリアの放った銃弾は、リリィの放った銃弾により射線から弾かれたのだ。

苦々しく唇を噛み、セシリアは次の狙撃地点に向かった。

329　始まりの灰被り姫（後書き）

リリィの愛銃は【ＳＯＣＯＭ（ソーコム）　Ｍｋ２３】と、モデルガンではかなり安い位置にある物です。

胸から取り出すのは、もはやお約束だと思うんだよ。

だから、胸から取り出した。

大丈夫、リリィ（なのは）だとスナイパーライフル取り出したからｗ

束が死んだ方のリリィ壁紙（１３６６×７６８）完成。

ちょっと雑だから、見せられないやｗ

落書き程度で書き始めたものだし……（－＿－；）

作業中のＢＧＭは、営業のテーマｗｗｗ

３３０　王子を守るものは王女（前書き）

何とも締まらないサブタイトルｗ

さて、シンデレラが始まるということは、５巻もそろそろ……。

Ｐ３

３３０　王子を守るものは王女

一夏は安全だと思われる、セットの物陰に隠れた。

しかし、数秒後にはセシリアの狙撃とリリィの射撃が、一夏の目の前でぶつかる。

そして再度、物語の主役の一夏が舞台に出た。

「……は、はは。　どうも……。」

律儀に挨拶すると、その隙を逃さないという風にセシリアの狙撃が一夏を狙う。

しかし、もちろんリリィのＳＯＣＯＭから放たれた銃弾に弾かれる。

「一夏はできるだけ狙われないように動いてっ！」

リリィはそう叫ぶと大きく後ろへ飛び、ＳＯＣＯＭそマガジンを落とす。

そして何処からともなくマガジンを出し、着地しながらＳＯＣＯＭに装填した。

この劇は、女子にしか教えられてない秘密の景品がある。

それは『一夏の王冠をゲットした子に、同質同居の権利を与える。』というものだった。

もちろん、リリィの方にもある。

『篠ノ之製三第世代型ＩＳの譲渡。』だ。

これについては、束が提案したことでもある。

リリィをも標的にすることにより、一夏を狙う存在を出すためだ。

さらに現在リリィによって一夏に近づけなく、狙う存在は遠距離からの狙撃か射撃を行う者だけである。

これだけで、かなり絞られた。

あとはラウラ主導で動いているシュヴァルツェ・ハーゼの部隊員が、各狙撃位置で張っており、不振な動きを見つけた瞬間に行動する手はずになっている。

張った網に気がつく事もなく、一夏を狙う亡国企業は釣れるだろう。

「やぁっ！」

箒が刀を振るい立ちはだかるリリィを振り切ろうとするが、リリィはバレエの様に回転しながら避ける。

（やはりかわされるか……。）

箒はそう思いながら、自身が持つ刀を持ち直す。

再度リリィに向かい踏み込もうとした瞬間、箒は踏みとどまった。

「一夏動かないでよっ！！」

そうリリィが叫び止まると、一つしかなかったＳＯＣＯＭがいつの間にか二つになっており、両手に一つづつ持っていた。

一夏に背を向け瞬間的にＳＯＣＯＭを、何もない空間に向け引き金を引く。

動きながらＳＯＣＯＭの引き金を引き、銃口から弾を放つ。

それらが、何もない空間で音を立てて軌道を変える。

群がる生徒を相手にしながら、純白のドレスを着たリリィは一夏を狙う狙撃を全て撃ち落としていた。

それに気がついているのは、この場ではセシリアぐらいだろう。

「くっ！」

鈴が毒付きながら、クナイを振るう。

そんな中、リリィは正確に一夏に迫る弾を撃ち落としていく。

スナイパーライフルとハンドガンの弾速は違いがあり、同じライフルを使用しても撃ち落とすのは難しい。

しかし、リリィは簡単に撃ち落としていった。

生徒の攻撃を避けマガジンを排除し、回避行動とともに再度新しいマガジンを入れる。

「はっ！」

「っ！」

鈴のクナイを左手にもったＳＯＣＯＭで防ぐ。

そんな中、リリィは空いた方のＳＯＣＯＭで一夏に迫る銃弾を防ぎ、排除したマガジンを蹴り上げ、遠くにいたセシリアの狙撃を邪魔する。

『さぁ、ただいまからフリーエントリー組の参加です！』

（なっ！？）

舞台に響いた言葉に、リリィは目を丸くした。

更に問題を増やすというのだ。

何を考えているのか分からずに、リリィはドレスをはためかせ一夏の前に立つ。

一斉に舞台に数十人が現れる。

（……。）

流石に相手が生身のせいか、リリィが本気を出すと怪我をさせてしまう。

後ろにいる一夏をどうするか考えながらも、リリィは目を閉じた。

「さて、一体どれくらいが捕まったかな～☆」

そう呟きながら、一番安全な場所で束は舞台を見ている。

リリィが華麗に動き一夏を守る姿は、どう見ても王子と王女が逆の存在だった。

『お義母様。』

ラウラがモニター越しに、束を呼ぶ。

『現在織斑一夏を狙撃しようとした者達を全員捕縛しました。』

その言葉に束は少し満足そうに微笑んだ。

しかし、完全に満足はしなかった。

「なら、あとは私が仕上げるから一箇所に集めておいてね～♪」

そう言うと、束はこれから先に起こるであろう事を想像し、密かに

苦笑した。

３３０　王子を守るものは王女（後書き）

さて、ここからは戦闘が続くのかな？

どうでもいいかな。

そうだね～。

……。

ゆっくり、一夏サイドかけばよかったのかもね。

……うん。

少しばかり、まだスランプが抜けきっていなかったりｗ

３３１　闇と学園が交わる日（前書き）

眠く頭が痛い中書いたせいで、何時ものように文字が安定していません。

あいたたた。

Ｐ３

331　闇と学園が交わる日

リリィのＳＯＣＯＭが一夏に迫る銃弾を撃ち落としている中、一夏は何者かに足を引っ張られセットから落ちた。

それに気がつかないリリィではない。

全員から距離を離し、横目で一夏が落ちた場所を見た。

（……動いた。）

そう思いながら、知らないふりをする。

一夏は女性に誘導されるままセットの下をくぐり抜け、更衣室へとやって来た。

もちろん一夏が着替えた更衣室であり、制服などがロッカーに仕舞われてる。

「大丈夫でしたか？」

そういって、目の前の女性は一夏に問いかけた。

一夏は今まで見なかった誘導した人物を、改めて見る。

女性は微笑みながら一夏を見ており、その顔は一夏に装備を提供させて欲しいと言った女性の顔だった。

唖然としながら一夏は女性を見つめる。

「あ、あれ？　どうしてあなたが……？」

当たり前のことを思い、一夏は問いかける。

もちろん更衣室も立ち入り禁止区域であり、学校関係者ではない者が入って良い場所ではない。

しかし、一夏の前にいる女性は更衣室にいる。

そもそも、なぜセットの下にいたかさえ不明なのだ。

「はい、それはですね……。」

『白式が欲しいんでしょ？』

女性が一夏の問いに答えようと、喋っている途中に誰かが言葉を放つ。

その言葉に二人とも唖然とし、声の主を探す。

一夏は聞いたことがある声な為、焦る気配はないが、女性は見えないということにかなり焦っていた。

『……その作った口調も気持ち悪いし、素に戻ることをオススメするよ。』

未だ見えない相手に対し、女性は舌打ちしながら更衣室を見渡す。

リリィは未だ生徒を相手に、ＳＯＣＯＭを持って舞台上を舞っていた。

ＳＯＣＯＭをトンファーのように構え、打撃武器として使用する。

もちろん狙撃が止んでいるから出来ることだ。

おそらくセシリアだけが一夏が居ないことに気がついたのか、狙撃が止めたのだろう。

少しだけ一夏の心配をしながら、リリィは舞台の上に立つ。

舞台には気絶した生徒もいれば、刃物をリリィに向ける生徒もいる。

教職員として、なるべく手荒な事はしたくないのだが、気絶でもさせなければ舞台は閉じず、永遠と続いてしまう。

「っ！」

しかし次の瞬間、リリィの四方から膨大な熱量が観測される。

リリィは少しだけ目を見開き、周りに生徒がいないことを確かめＳＯＣＯＭを投げ捨てた。

全員唖然としながらその光景を見ていたが、次の瞬間に唖然は驚愕に変わる。

リリィに一瞬で無数の光条が伸びたのだ。

全員、自身が考えられる範囲を超えた為に固まる。

全ての光条がリリィを捉え、貫き舞台を穿つ。

そのせいで土煙が舞台を覆った。

「……ふむ、奇襲で落ちるはずもないか。」

聞き慣れない声が舞台に響き、土煙から光条が伸びた。

光条は下に誰もいない屋根を貫き、空へ登る。

全員がその光条が登った先を見て、凍りついた表情になった。

「……ロー、ズ？」

鈴が唖然としながら、その表情の先にあるモノの名を呟いた。

「……呼んだ？」

しかし、鈴の下辺りからローズの声が響き、鈴の視線は上から下に向けられる。

「……やっほ。」

そこには、セットから顔をのぞかせるローズがいた。

全員が唖然とする中、ローズは舞台に立ち手を叩く。

「……はい、全員避難……。」

そう言うが、誰も動きはしない。

驚愕のしすぎで、身体が言うことが効かないのだろう。

「ローズ、あれを外に押し出せば被害は薄くなるけど。」

土煙からリリィの声が響き、ローズは「……そうだね。」と言いドラグーンを展開し攻撃をする。

リリィの姿が土煙の中から現れると、ローズのドラグーンは一斉に火線を伸ばした。

箒達はローズを見ながら、火線の先にいる存在を見て口を開く。

「……プロ……、ヴィネン、ス……、だと。」と。

３３１　闇と学園が交わる日（後書き）

投稿したら、私、寝るんだ……。

そんな気分です。

頭痛がする。

眠い。

仕事の量が増えたせいで、だるい。

……実は徹夜すことが、多々あったり……（―＿―；）

あ、パトラッシュ……。

私は、もうだめだよ……パタリ

３３２　それぞれの悪夢（前書き）

少しばかり、スランプ？

解消してる気がするけど、まだまだ……（ー＿ー；）

Ｐ３

３３２　それぞれの悪夢

鈴はプロヴィネンスを見てから、ローズを見る。

その光景は、夢のように不思議な光景だった。

プロヴィネンスはかつて何度もＩＳ学園を襲撃し、リリィを死に至らしめた機体だ。

そのプロヴィネンスはエンジェルダウン作戦時に、千冬の手によって消されたのだ。

しかし、再度プロヴィネンスはＩＳ学園に現れ、ローズとして過ごしていた。

箒や鈴の解釈では、ローズが改心し過ごしているという感覚なのだ。

しかし今の箒達の目には、ローズとプロヴィネンスが同時に映っている。

「……返してもらうよ。」

ローズがそう言うと、ドラグーンを使いプロヴィネンスを翻弄していく。

しかし、プロヴィネンスは少し翻弄されただけで、すぐに体制を立て直した。

プロヴィネンスが反撃とばかりに、複合シールドでビームをローズに

向け放つが、ローズは同じ複合シールドを展開し防いだ。

ローズは複合シールドを構えながら、反対側の手に大型ビームライフルを展開。

ドラグーンを呼び戻し、大型ビームライフルを構え同時に放った。

「とりあえず、避難しないと死んじゃうよ～☆　死んでも束さんは責任取らないからね？」

ローズが放ったビームを、プロヴィネンスは回避する。

その為、避けられたビームが天井を壊した。

もちろん破壊しただけあって、破片は落ちる。

それらをリリィや束は壊そうとしない。

下に人がいても、壊そうとしなかった。

「糞がっ！　何処にいやがるっ！！」

一夏は豹変した女性に目を丸くした。

先程の声の主の言葉も合わさり、一夏は女性に危機感を抱く。

少しづつ後ずさりしながら、一夏は更衣室のドアに近寄る。

「出てきやがれっ！」

女性はそういうと、スーツを突き破り背中から出る蜘蛛のような爪を周囲に伸ばす。

「蜘蛛のように醜い存在……。」

「ああ”！！」

室内から聞こえる声に、女性は苛立ちを声に出しつづける。

その声が止む頃には、女性はＩＳを展開していた。

言葉通り、蜘蛛のように八本ある装甲脚を伸ばし、毒々しい黒と黄色でカラーリングされた機体。

唖然としながら、一夏は女性を見つめた。

「その装甲脚……。」

何処からともなく聞こえる声に、女性の唇がゆがむ。

「オラッ！　相手してやるから、さっさと出てきやがれっ！！」

女性はそう言うと、装甲脚についた砲門で更衣室全体を攻撃する。

唖然としていた一夏は、その行動で我に帰り白式を展開させた。

「なんなんだよ、アンタはっ！？」

その言葉に、女性は一夏の方へ振り向く。

「ああ、そういえば、私の目的はこのガキだったな。」

このとき一夏は、一番最悪な一手を打ってしまった。

もし、何も喋らずに更衣室から逃げていれば、何事も無く終わっていたのだろう。

しかし、一夏は声を上げてしまった。

その声を聞き、女性は姿が見えない敵から一夏に標的を変えたのだ。

普通に考えれば一夏の白式が目当てと言ったのだから、逃げて誰かと合流したほうが得策である。

一夏のように未熟な者なら、それ以外方法はない。

「アンタは一体何なんだっ！？」

一夏はそう叫びながら、雪片を構えた。

遠くの爆発に、千冬とクラリッサは目を細めた。

二人は薄暗い室内で、お財布を持ちながら座っている。

本来なら、爆発に対し教員として行くべきなのだろう。

しかし、二人は動こうとしなかった。

「それでは、次の出品に参ります……。」

生徒がマイクに向かい、そう言いながら手元の紙を見る。

薄暗い室内の一箇所にライトが当てられた。

そこには、黒いストッキングが置かれている。

「こちらは、篠ノ之リリィ先生使用済みのストッキングです。」

その言葉に、室内にいる全員が声を上げる。

「備考としてですが、こちらは篠ノ之リリィ先生がくださったもので、決して盗品された物ではありません……。　では、五千円から参ります。」

どうやら、二人は非公式なオークション会場にいるようだ。

何故そんなところにいるかは、何時か知るときが来るだろう。

３３２　それぞれの悪夢（後書き）

……今回はリリィ、ローズ、クローディヌと言う3人が別行動をとっているため、かなり長くなると思います。

ああ、疲れたよ。

パトラッシュ？

なんで「リリなの」作品作っちゃったんだろうね？

あ、「リリなの」の意味は「リリィｉｎなのは」ということだからね。

ＳｔＳのせいか、妙に頭使うことになっちゃたし……。

どうしてこうなっちゃったんだろうね？

333　ローズの殺意（前書き）

戦闘って書きやすいよね？

こんな戦闘の書き方で、読んでる人は理解できるか不安だけど……

（；・∀・）

P3

３３３　ローズの殺意

「Ｇｅｂｅｎ　Ｓｉｅ　Ｚｕｆｌｕｃｈｔ　Ｐｒｉｏｒｉｔ?ｔ！（避難を優先させろっ）」

「全く、こんなことになるんでしたら、先に言ってくだされば良いものを……。」

その言葉が舞台に響くと、小さな緑色の光条と青白い光条が無数に伸び、ドラグーンによって落ちてくる天井を撃ち抜いていった。

ストライクノワールとブルー・ティアーズだ。

ラウラの声がノワールから響き、私服姿のシュヴァルツェ・ハーゼ部隊員が会場にいた生徒達などを避難させる。

「……ふっ、レーゲンか。」

停滞していたプロヴィネンスがそう呟き、ノワールを見た。

落ちてくる天井を打ちながらも、ノワールは手にもっていたビームライフルショーティーをプロヴィネンスに向けて放つ。

しかしショーティーから放たれたビームは、通常のビームライフルより収束率が低く、ＰＳ装甲を貫くことはできない。

さらに、ビームの収束や誘導制御に大きな役割を果たしている銃口を切り詰めているため、有効射程が通常のビームライフルより１５％短いという始末。

結果だけ言えば、ビームライフルショーティーはＰＳ装甲をもつ機体に対して、有効な武器ではない。

事実、ショーティーのビームをプロヴィネンスは受けたが、ダメージにはなっていなかった。

「Ｎａｃｈｄｅｍ　ａｌｌｅｓ　ａｒｂｅｉｔｅｎ　Ｓｉｅ　ｎｉｃｈｔ？……（やはり効かないか……。）」

そう忌々しく呟き、プロヴィネンスを攻撃しながら落ちてくる天井をショーティーで撃ち落とし続けた。

セシリアもスターライトｍｋＩＩＩをプロヴィネンスに向け放ち、誘導兵器で天井を壊していく。

「本当に厄介ですわね、ローズさん以外のプロヴィネンスはっ！」

その言葉に、箒と鈴は唖然とした。

自身が思っていた答えとは別の答えを、セシリアがもっている。

「ふふ、レーゲン……。　貴様とは決着を付けたいと思っていたところだ。　……きたまえ、引導を渡してくれるよ。　……この私がなっ！」

「Ｗａｒｔｅｎ　Ｓｉｅ！（待てっ）」

プロヴィネンスがそう呟き、壊れた天井から出ていく。

その間にも、ローズがドラグーンで攻撃していたが、プロヴィネンスも同型のドラグーンを使い、相殺やドラグーンを潰していった。

ラウラがプロヴィネンスを追おうと、ノワールストライカーのウイングを広げる。

「ラウラ……。」

そんなラウラを、ローズは止める。

振り返りラウラはローズを見ると、ローズは何時もよりキツイ目をしていた。

「……あれは私の敵。　私が殺る。」

その言葉にラウラはローズを凝視した。

いつものように、とぎれとぎれな言葉ではなく、しっかりとした意思を感じ入る言葉。

言葉の向こうに殺意が見える。

そんなローズに、ラウラは一瞬怯んでしまった。

「……だけど、今の私じゃ決め手がない。　……だから、それまでの間お願いできる？」

その言葉に、ラウラは頷く。

そのままプロヴィネンスを追って、ノワールは天井から外に出た。

プロヴィネンスが消えたことにより、セシリアはスターライトｍｋＩＩＩを落下する天井の破壊作業に使用しはじめる。

「箒さんも鈴さんも、見ていないで手伝ってくださいな……。」

手を休めずセシリアは生徒達の避難の為、箒達にも声をかけた。

直ぐ様紅椿と甲龍を纏い、二人は舞台から飛び立つ。

「リリィさん、も……？」

そのままリリィにも声をかけたが、その時にはリリィと束は舞台から姿を消していた。

３３３　ローズの殺意（後書き）

とりあえず、３組ほど別々に動いてますね。

どうしよう。

最初はラウラＶＳプロヴィネンスという形をとりましょうか。

ようやく、ラウラの伏線回収ができる……。

知らぬまに放置してしまった伏線ありそうで、怖いけど……（―｜―；）

Ｔｗｉｔｔｅｒで構想とかネタとか、つぶやきすぎな気がするｗｗｗ

３３４　プロヴィネンスＶＳストライクノワール（前書き）

ちょっとだけ妙な考察。

ＰＳ装甲は本当にどうなっているのだろうか。

Ｐ３

３３４　プロヴィネンスＶＳストライクノワール

ラウラはプロヴィネンスを追い、学園上空まで移動した。

プロヴィネンスは無防備に、ラウラを待ち構える。

「来たか。」

そう言ってプロヴィネンスは、大型ビームライフルをノワールに向けた。

もちろんラウラは急制動をかけ、射線から外れようとスラスターを吹かす。

「ふっ……。」

しかしプロヴィネンスは、それを狙っていたかのようにビームライフルを保持したまま後退し、ドラグーンを展開した。

「・！（っ）」

ラウラはドラグーンを見ると、更にスラスターを吹かし速度を上げた。

次の瞬間、ラウラがいた場所にドラグーンが放ったビームが通り過ぎる。

さらにプロヴィネンスは、ドラグーンだけでなく撃とうとしていた大型ビームライフルも撃ち始めた。

「……そういえば、レーゲン。　貴様は今ラウラ・ボーデヴィッヒと言うただの子供に使われるだけの機械だったな。」

語りかけるかのように、プロヴィネンスは言葉を発した。

その間にも、複合シールドや大型ビームライフルからビームが放たれ、ドラグーンがノワールの回避場所を穿つ。

しかし、ラウラは何かに突き動かされるかのように機体を動かし、その全てを回避する。

「ふ、やはり貴様は弱くなった。」

プロヴィネンスは射撃を止めない。

むしろネズミをいたぶるかのように、攻撃を続けた。

「……以前より面白みが見受けられない。」

ノワールは上昇しながら、ショーティーを腰から引き抜きドラグーンに向かい放つ。

ドラグーン対策はセシリアと共にローズから、嫌というほど受けていた。

ノワールストライカーを大きく広げ、風の抵抗を受け減速しスラスターでターン。

振り向きざまにドラグーンを一機、ショーティーのビームを連続で

当て破壊した。

普通にドラグーンにもＰＳ装甲が搭載されており、ショーティーのビームではドラグーンは破壊できない。

しかし、ドラグーンの大きさが機体の質量より小さいためか、ドラグーンのＰＳ装甲と機体にかかるＰＳ装甲が同じではなく、ショーティーのビーム数発で破壊できた。

小さく小回りが効くドラグーンの、唯一の弱点だろう。

しかし、流石災厄というべきだろう。

ラウラが破壊したドラグーンは黒い霧状の粒子となり、プロヴィネンスに集まり再度形を成す。

（ドラグーン対策を受けたはいいが、お義父様タイプの災厄対策も受けていれば……。）

ラウラは歯噛みすると、ショーティーで再度ドラグーンを撃ち落とした。

セシルは一組で、優雅にティータイムをしていた。

そんなセシルを、シャルロットが苦笑いで対応する。

小さな爆発音が聞こえるが、学園祭は平常通り進んでいた。

「……それにしても、義理の娘か……。」

セシルはそう言いながら、シャルロットを見た。

箒とセシリアが消え、さらにラウラとローズまでも消えた教室内は、慌ただしく休む暇などない。

「十年以上も経てば、人は変わるもんだな……。」

そう呟きながら、セシルは窓の外を眺めた。

いく条もの光が飛び交い、爆炎が学園の敷地内から上がる。

かなり遠くで起きているためか、セシル以外気がつくものはそれ程いない。

「……あの、……セシル、さん……？」

シャルロットが不安げにセシルを呼んだ。

その表情は妙に硬い。

「ドイツ国境戦線。　……あれ、嘘ですよね？」

「そうだが？」

シャルロットの言葉を、セシルは直ぐ様返答する。

その事に、シャルロットは「やっぱり……。」と言って溜息を付いた。

聞き耳を立てていた一組生徒も、溜息を付き仕事を再開する。

そんな生徒達をよそにセシルは席を立ち、お会計を頼んだ。

「……1，５００円になります。」

妙に安い事に首を傾げながら、セシルはお金を払い教室を出ていった。

３３４　プロヴィネンスＶＳストライクノワール（後書き）

……あれ？

ショーティーの出力低くない？

スターゲイザー見直して、そう思った……（－＿－；）

いや、むしろこれが普通だと思う。

あの小ささで、通常ライフルの火力とか……。

……ショーティーどうした……（－＿－；）

直さないとね……（；　・、Д・′）

３３５　現れる亡国企業の一人（前書き）

ゆかりんボイスを聴きながら書いてると、テンション上がるね～。

一気に二話ほど書きたいけど『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　無くした鎖と繋がる鎖』も書いてるから、一日一話が精一杯かな？

Ｐ３

３３５　現れる亡国企業の一人

プロヴィネンスが学園で戦闘を行なっているのに対し、リリィと束は学園外にいた。

ＩＳ学園は、周囲を海で囲まれた島なのだ。

つまり、二人は海上にいると言った方がいいのだろう。

「……そろそろかな？」

束はレイジングハートを持ち、白いバリアジャケットを纏っている。

セカンドシフトのエクシードモード。

束は最初から、自身の放出するエネルギーを倍にして停滞していた。

「たぶんね。」

十枚の翼を広げ、フリーダムは束の隣で停滞する。

「あ、そうだ。」

束はそう言うと、フリーダムに近づく。

不思議そうにフリーダムのデュアルアイは束を見る。

「リリィちゃん、髪の毛を二つに縛ってくれない？」

そう言いながら束は、後ろに流している髪の毛を後頭部付近で左右に分ける。

リリィはそれを見て「ツインテール？」と思いながら、フリーダムの腕部分を解除した。

今のリリィならば、フリーダム化しなくても滞空や飛行ができる。

それらはもちろん災厄だからこそ、出来ることだ。

ちなみに、ＩＳの部分展開もフリーダムの展開方法から発展した物である。

「～♪」

束はリリィに髪の毛を触れられているため、嬉しそうに微笑む。

リリィもフリーダムという顔であるが、束同様に微笑みながら髪の毛を纏め、ゴムで縛っていく。

そんな中、遠くで黒い霧が集まり始めた。

「……来たね～☆」

束はそれに気がつくと、そう言ってリリィに報告する。

もちろんリリィも気がついていたが、束の髪の毛を縛っているため動けない。

「うん。　……一応、形づくまでは待ってあげようね。」

リリィは束の髪を縛り上げると、椀部装甲を展開し直し束と共に黒い霧を見続けた。

「オラッ！」

女性が蜘蛛のような足を使い、接近する一夏を攻撃する。

しかしその攻撃を、一夏は紙一重で避けた。

「チッ！　……なかなかやるじゃねぇか。」

そう言うと、再度女性は一夏に接近し白式の腕めがけて足を伸ばす。

だが、やはり避けられる。

一夏は混乱しながらも、女性を睨みつけた。

「なんなんだよ、アンタは!?」

「あぁ？」

一夏の叫びを、女性は怪訝そうな顔で聞く。

その間にも、一夏は白式の雪羅のクローを女性に向け突き出す。

女性は怪訝そうな表情のまま、雪羅のクローを避ける。

そのまま、空いている足で白式を蹴り飛ばした。

一夏は飛ばされながらも、体勢を立て直し壁に足を付ける。

「一体、アンタはなんなんだよっ！！」

衝撃に耐え、再度一夏は女性に向かって叫ぶ。

女性は呆れたのか、あざ笑うかのような笑で口を開いた。

「はっ、知らねぇのか！　悪の組織の一人だって言えばいいかぁ？」

その言葉に一夏は「ふざけるなっ！」と叫び、壁から足を離しクローを伸ばす。

しかし、その攻撃は雪羅を足で横にそらされ外れた。

「ふざけてねえっつの！　ガキがっ！！」

その勢いに任せ、一夏は女性から距離を離す。

しかし、女性は一夏をただで離すことはしなかった。

装甲脚の砲門を、全部一夏に向ける。

「秘密結社っ、亡国企業が一人、オータム様って言えば分かるかぁっ！！」

そう言うと、女性オータムは装甲脚から火線を伸ばす。

「っ！」

一夏は瞬間的に射線上から離れる。

次の瞬間、実弾とレーザーが一夏のいた場所を通り抜け、更衣室に大きな穴を開けた。

「はっ、まだまだぁ！」

そういうと、オータムは八本ある装甲脚の砲門半分を、一夏に向け砲撃した。

（くぅっ！　……雪羅じゃこの状態は。）

一夏はそう思いながらオータムの放った砲撃を回避し、展開していた雪羅のクローを停止し、雪片を展開した。

次の瞬間もう半分の装甲脚が、一夏に向けて砲撃する。

「くっ！」

一夏は部屋の角に追い詰められたせいか、回避場所が制限された。

その為、砲撃を見極めながら回避。

レーザーは雪片のアンチビームコーティングで防ぎ、なんとか避けきった。

３３５　現れる亡国企業の一人（後書き）

しょっぱなから宣伝とか、（　。ω＾　）ゝ　乙であります！

と言えば、許されるわけもなく……。

ま、とりあえずアラクネに追加兵装としてレーザー兵器を搭載させました。

もちろん、災厄のせいですねｗ

というか、出来なくはない……。

亡国企業にレーザー兵器という事は、篠ノ之リリィ博士救出作戦の時から気がついてる人もいるでしょう。

レーザーだけですよ？

今更ですが、原作って展開装甲とかレーザーを、ビームで一括りにして可笑しいですよね。

ビームはまだ未知の領域ｗｗｗ

ＢＴ兵器最大化同時はビーム自体を自在に操れる……、とセシリアも言っていますが、ＩＳの世界ってビームあったっけ？

そもそも、セシリアの機体はレーザー主体でビーム兵器自体搭載さ

れてないよ……（；　・、д・´）

ついでに展開装甲はビームという扱いでいいの？

違うよねェ……。

原作しゃぁ、何トチ狂ってんの？

３３６　悪意の言葉と真実の言葉（前書き）

一気にプロヴィネンスの戦闘を終わらせるか、それとも一夏の方にもスポットを当てるか……。

今回はどう書いたらいいか、少し悩むなぁ……（ー＿ー；）

Ｐ３

※作品のあらすじを変えてみました。

今更という感じもありますが、ね……。

３３６　悪意の言葉と真実の言葉

ノワールの脇の下を、ドラグーンから放たれたビームは通過する。

「ふむ、流石王の血が混ざるだけはあるな。」

そう言いながら、プロヴィネンスは大型ビームライフルの引き金を引く。

ラウラはその言葉に、一瞬耳を傾けてしまいビームがショーティーを貫かせてしまう。

「Ｓｃｈｅｉ？ｅｎ　Ｓｉｅ！（クソッ）」

そう苦々しく言い放ち、ショーティーを捨てる。

ドラグーンがビームを放つ中、ノワールは回避しつつもショーテルの爆発を避けた。

（……ん、王の血？）

横に側転みたく回転しドラグーンをよけながら、ラウラは考える。

その間にも、ドラグーンへの対策を忘れない。

すぐに５．７ｍｍ高エネルギービームライフルを展開した。

「あってはならない存在だというのに。」

その言葉に、ラウラの思考は一瞬で怒りに覆われる。

「知れば誰もが望むだろう……、ラウラ・ボーデヴィッヒ……。」

大半のドラグーンを戻し、プロヴィネンスは後退しつつ複合シールドでノワールを狙う。

上昇し射撃を避け、ラウラはプロヴィネンスを睨む。

「Ａｕｆ　ｄｅｒ　Ｅｒｄｅ　ｂｉｎ　ｉｃｈ，　ｄａｓ　ｚｕ　ｓｅｉｎ　ｗａｓ！　Ｔａｋａｓｈｉ　ｓａｇｔ　ｗａｓ！！（私が一体何だというのだっ　貴様は何を言っているっ）」

叫ぶと同時に、残ったノワールのショーティーが連続してビームを放つ。

放たれたビームは二基編隊で滞空していたドラグーンを、同時に落とす。

その為プロヴィネンスの攻撃は止み、ラウラはこれを気に背部ウイングに搭載されている二門のレールガンを展開し、プロヴィネンスに向けて放つ。

ＰＳ装甲を持つ相手に実体弾という悪手だが、ローズが来るまでの時間稼ぎをしているのだ。

実体弾とは言え、実体弾中最高威力を誇るレールガンはＰＳ装甲相手にも十分役に立つ。

当たれば無効化されるが、体勢を崩させる事は可能なのだ。

「……罪だな。　君が知らないというのは。」

そう呟き、プロヴィネンスはノワールから放たれたレールガンを、横にずれることで避ける。

破壊されたドラグーンも修復され、プロヴィネンスは横に移動しつつも全ドラグーンを展開した。

「ドイツ軍所属ラウラ・ボーデヴィッヒ。　……日本人。」

「！（っ）」

その言葉にラウラは目を最大にまで見開いた。

「君は自分のことをどれだけ知っているかな。」

その言葉と共にラウラは何かを感じ、直ぐ様精密なスラスター制御をし始める。

次の瞬間、ノワールをかする様にビームが飛び交う。

もし、ラウラがスラスター制御をせずにいたら、今頃ビームはノワールの胴体を貫いていた。

その事に、ラウラは冷や汗を流す。

「……いや、知るはずがない。　知る事さえできないのだからな。」

ラウラはドラグーンの射撃体制に気が付けなかったため、後退しプ

ロヴィネンスにビームライフルを向ける。

ショーティーも有効射程外に出てしまったため、収納し5．7mm高エネルギービームライフルをもう一つ取り出した。

「Ａｌｂｅｒｎｅ　Ｒｅｄｅ……（戯言を……）」

そう呟きながら、ビームライフルを引く。

「……ふっ、ならば聞きたまえ。　クルーゼの名と共に手向けの花として送ってやろう！」

ドラグーンが一斉にプロヴィネンスの周囲に集まり、ノワールへ向け加速した。

その光景にラウラはプロヴィネンスを一瞬だけ睨み、二丁のビームライフルで正確にドラグーンを落として行く。

学園の一角で、緑の光条が多数交差した。

３３６　悪意の言葉と真実の言葉（後書き）

……考えてる途中で、友人から電話が来るとか。

（クウキヨメテネーヨ…）○０ｏ。（ ´ ー｀ ）♂＝空気＝

●Д ｡ ｡ ｡ ）＜カラケ

……パソコンを買ったそうですが、おそらくそれのことでしょう。

まぁ、別にいいんですけどねｗ

Ｔｗｉｔｔｅｒで結構つぶやいています。

というか、私は４日先の予約投稿が多い為、Ｔｗｉｔｔｅｒで聞いたほうがここできよりタイムリー？

できればでいいんですが、私が迷ったときにつぶやく言葉に助言をしていただければ……。

……いえ、なんでもないです。

忘れてね～☆

３３７　犠牲の果てに生まれた者達（前書き）

ちょっとばかし、頑張ったｗ

前話書いた日の、数時間後。

Ｐ３

337　犠牲の果てに生まれた者達

ビームライフルが正確にドラグーンを撃ち落とす中、プロヴィネンスはストライクノワールに向け大型ビームライフルを放ちながら喋る。

「君は神を気取った者達の願いの下……。」

その言葉を聞きながら、ラウラはドラグーンにビームライフルを放つ。

しかし意識が少しだけそれているためか、ビームはドラグーンをかするだけだった。

「自国の為にと、自らの利権をかたくなに手放そうとしない愚か者達の元、君達は作られた……。」

（……達？）

不可思議に思いながらも、ラウラはドラグーンを回避しながら迎撃する。

「自国の為、保身の為と欲望と得た栄光を手放したくもなく……。自身が有能だと主張するために……。」

「・！（クッ）」

言葉を切ると、プロヴィネンスは大型ビームライフルを、ノワールの回避先に向け放つ。

しかしラウラは足からアンカーを射出し、地面に突き刺して無理矢理ビームを回避する。

一気に傾き、ビームは空を切った。

「遺伝子強化試験体実験。　彼らは自国の民が出した税を使い、この実験を進めた……。」

ラウラはアンカーを回収し、再度飛び立つ。

ドラグーンが追う様に飛ぶが、ノワールが振り向きざまに一基撃ち落とす。

「あまたの犠牲を払い、彼らは数多くの利益を得た。　……知っているかな？　物心ついたときに行なっていた行為は、自身の普通になると。」

ラウラはその言葉に妙に納得した。

事実、ラウラは物心ついた時から軍人だったのだ。

軍人であることを誇りと思っていた。

「その結果が君であり、同じ戦場で散っていった君の兄妹だ。」

その言葉に、ラウラは唖然とした。

しかし直ぐ様何かに突き動かされ、急速に後退する。

「……Ｗａｎｎ　ｅｓ　ｉｓｔ　ｅｉｎ　Ｂｒｕｄｅｒ？（兄弟だと）」

後退したことによりドラグーンが放ったビームを避け、ラウラはプロヴィネンスに向かって叫ぶ。

プロヴィネンスは大型ビームライフルを構えたまま、その言葉に答える。

「ふ、無理もない。　……君達はとある女性の子宮を解析し、作り上げた人口子宮で、たった一人の女性……、その卵子のクローンから作り上げた……。」

その言葉に、ラウラは違和感を覚える。

ドラグーンを驚異的な制御で回避し、撃ち落とす。

しかしリリィと同様に再生するためか、永遠に終わることがない。

「Ｄａｓ　ｗａｓ！（なにをっ）」

ラウラは叫ぶ。

だが、プロヴィネンスの小馬鹿にしたような喋りは止まらない。

「君達はたった一人の女性の子宮、卵子を元に……。　多くの精子で大量に作られた人形。」

構えていた大型ビームライフルからビームが伸び、ノワールの肩アーマーを削っていく。

ビームが肩で拮抗し、一瞬で肩アーマーを破壊していった。

「一人の女性から生み出された君達を、兄妹と言わずに何と言う。」

肩下の装甲が露わになるが、ラウラは気にせずビームライフルをプロヴィネンスに向け放つ。

「人間は己の欲の為、この私を……。　このクルーゼを利用したのだからな……。」

「……長くない？」

束はそう言いながら、目の前に集まる黒い霧を見続けた。

先程から見ているが、霧は一定以上集まっては飛散していく。

形を作ることはない。

「リリィちゃん、何か知らないの……。」

束がそう言いながら、リリィの方を振り向く。

しかしリリィは、首を横に降って知らないと意思表示する。

海上には黒い霧が大量に集まり、異質な空間を作り出していた。

「……いっくん達、大丈夫かなぁ。」

暇なのか、束はリリィに抱きついたり学園の方を見たりしていた。

今だ黒い霧は固まることなく、周囲を漂っている。

災厄の霧は、いつまで立っても霧のままだった。

３３７　犠牲の果てに生まれた者達（後書き）

あ～、っと。

前話で友人に呼ばれたのですが、ＰＣを組み立てるの手伝って欲しいということでした。

Ｔｗｉｔｔｅｒで見た人もいるでしょうね。

……まさか、まだ何もしてないとは……（―＿―；）

私が付いたときには、箱から出しただけ……。

基本私が作ってました。

３時間かけて……。

もう一話かけたよ、その時間で。

そんな日でした。

３３８　果てなき欲望の果ての真理（前書き）

サブタイ無理やりｗｗｗｗｗ

今回はセリフが……、ラウさんです（；´Д｀）

どうしてこうなった……、Ｐ３

３３８　果てなき欲望の果ての真理

「私は人間の……、その果てにある欲望を叶えた……。」

プロヴィネンスは全ドラグーンを戻し、ノワールとの距離を詰める。

「……己が正しいと信じ、悪に手を染める。　全く、いつまでたっても人間は愚かしい。」

ラウラはその言葉を聴きながら、ビームライフルの銃口下に装備されているグレネードを、同時に撃つ。

しかし、プロヴィネンスは複合シールドの先端に、ビームサーベルを展開し、迫るグレネードを切り落とした。

「知りたがり……、欲しがり……、やがてそれが何のためだったかも忘れ……、命を大事と言いながら弄び。　殺し合う！」

そのままプロヴィネンスはノワールに迫る。

肩のアーマーが破壊されたことにより、微調整用のスラスターが欠落しているノワールは、間一髪のところでプロヴィネンスのビームサーベルを避けた。

「君も幾つもの兄妹をその手に染めた……。」

その言葉に、ラウラは目を見開いた。

ビームライフルを収納し空いた手でアンカーを放ち、再び地面に自

身を引き寄せる。

「何を知ったとて、何を手にしたとて変わらない……。」

ノワールの行動に、プロヴィネンスは大型ビームライフルを向ける。

「最高だな、ヒトは……。」

「Ｉｃｈ　ｗｉｌｌ　ｍｉｒ　ｗａｓ　ｎｏｃｈ　ｓａｇｅｎ！　Ｄａｓ，ｗａｓ　Ｔａｋａｓｈｉ　ｓａｇｅｎ　ｗｉｌｌ！！（だからといって、私に何を言いたいっ　貴様は何が言いたいんだっ）」

ラウラが叫び、ウイングから対艦刀を引き抜く。

ノワールにはビームサーベルのような物はなく、唯一ある近接格闘武器は対艦刀だけだ。

ストライクのシュベルトゲーベルのように、刃にビーム発生装置がついており、ＰＳ装甲搭載機に有効な武器でもある。

ノワールが後退しつつも対艦刀を振った。

「……君は唯一のイレギュラー。　私の手が届かぬ操作で生み出された唯一の存在。」

プロヴィネンスはそう言いながら、対艦刀を簡単に避ける。

「君は知らないだろう。　本当の親が誰であるかを……。」

「！（っ）」

その言葉に、ラウラは一瞬だけ気を緩めてしまう。

それをプロヴィネンスが見逃すはずも無く、一気に距離を詰めノワールの胴体を蹴り飛ばす。

その間にプロヴィネンスはドラグーンを再度展開させる。

体制を崩した瞬間に放たれたドラグーンは、正確にノワールの足を貫く。

「Ｏｏｐｓ！（しまった）」

ビームがノワールの脚部を貫き、爆散する。

しかしビームが貫いたのはラウラの足元。

機体に損傷ができても、ラウラにダメージはなかった。

だが若干ラウラの足が、装甲下から見えてしまう。

靴を履いているからいいものの、ＰＳ装甲に覆われてない部分はＩＭＳの通常起動だけでも損傷が酷い事になる。

「殺しはしないさ……。」

その言葉にラウラは自身の敗北を悟る。

だが死ぬ気はなく、必死に周囲を見渡し逃げる算段を立て始めた。

「……真実を知ってもらうまではな。」

そう言うと、再度ノワールに向けドラグーンが放たれた。

相変わらず何かに突き動かされるかのようにラウラは機体を制御し、ビームの直撃から機体を逃がす。

しかし、肩と足のスラスターが一基ずつ破壊されたことにより、完全に回避することはできなかった。

持っていた対艦刀を弾かれる。

それと同時に、ノワールストライカーのウイングも片翼だけ撃ち抜かれ半壊。

レールガンの砲身だけが、撃たれたウイングから伸びていた。

（万事休す……。）

ウイングにもスラスターが搭載されていたのだ。

ここまで被弾してしまえば、ノワールにプロヴィネンスと戦闘をするほどの状況でもない。

はっきり言ってしまえば、撤退も不可能だった。

展開を解除してしまえば、満足に動けるかもしれない。

しかし何も装備していない人間が、プロヴィネンスから逃げれる可

能性は無いのだ。

奇跡でも起きない限り死ぬ。

冷や汗を流しながら、ラウラは打開策を考えはじめた。

３３８　果てなき欲望の果ての真理（後書き）

クルーゼ……（；´Д｀）

クルーゼ、死んだんじゃなかったの？

そう思う人もいるでしょうね～。

はぃ、まぁ、クルーゼには秘密があるということで。

それにしても、ラウラが大ピンチです。

そもそもプロヴィネンスとストライクノワールじゃ、カタログスペックから違いますしね……。

ラウラどうなる？

次話は……、またラウラかな？

339　プロヴィネンスの言葉（前書き）

シュヴァルツェ・ハーゼ部隊員の募集をします。

ＩＭＳ搭乗者やＣＩＣなど……、とりあえず名前が思い浮かばないだけです。

詳しくは活動報告にて。

と書いても、誰も見ないだろうな～。

とりあえず、二人ほど出来ましたがパイロットがいません。

そのため募集します。

Ｐ３

339　プロヴィネンスの言葉

ノワールは残った足で着地すると、距離をとるために大きく飛ぶ。

ストライクノワールから、シュヴァルツェア・レーゲンに変えようかとラウラは思ったが、無防備になる時間をプロヴィネンスが与えるはずもない。

瞬間的に、現状での離脱を考え始めた。

最大出力でスラスターを更かし、ラウラは離脱を試みる。

「君は知らないだろうが、伝子強化試験体はＩＳの生体ＣＰＵ……。つまり部品扱いなのだよ……。」

その言葉にラウラは気を散らせ、ドラグーンのビームを避けるのが遅れる。

「……考えたことはないかね？　女が使えるＩＳを、男が使えるようにするためにはどうしたらいいか。」

プロヴィネンスはそう言いながら、大型ビームライフルを構える。

ドラグーンがビームを放つ中、ラウラは回避に気を取られ、プロヴィネンスの行動に気が付けなかった。

「考えたことないだろう、考えるということもしなかっただろう……。」

気がついたときには、プロヴィンネンスは喋りながら引き金を引いていた。

ラウラは瞬間的に射線軸から外れる。

ビームはノワールの装甲をかすり、後ろに飛んで行く。

「物は金で買える。　人も金で買える。　そんな思い上がった者達がたどり着いたという答えは、一体何を導き出したと思う？」

ラウラは歯噛みしながら、後退し続ける。

「……ＩＳは女しか扱える者はいない。　ならば男が扱う術はあるか？」

そう言いながら、大型ビームライフルを放ち続ける。

ラウラはドラグーンを迎撃しながら、大型ビームライフルから放たれるビームを避け続けた。

「いや、ない……。　だからこそ、愚か者共は考えた……。」

ドラグーンを数機、自機の周りに戻し大型ビームライフルと共に放つ。

ほぼ一点から攻撃を放たれたため、ラウラにとって避けやすいものだった。

「ＩＳが使えないのならば、それを使う女を操ればいいと。」

「！（っ）」

プロヴィネンスから発せられた言葉に、ラウラは目を大きく見開いた。

「一部は女を犯し隷属させ、一部は女を買いＩＳに乗れるようにさせる。　……そして伝子強化試験体を使うことを考えた者達もいた。　君の妹達の事だよ、ラウラ・ボーデヴッヒ！」

その言葉に驚愕しすぎたのか、ノワールの動きが止まる。

「フ……。」

それを見逃すことはせず、プロヴィネンスは正確にノワールの手だけを撃ち抜いていく。

「安心したまえ。　検体番号Ｇ－５０００以降が生体ＣＰＵとして作られたのが駆らね。」

ラウラの検体番号はＣ－００３７であるため、生体ＣＰＵとして作られていない。

妙な安堵感を覚えながら、ラウラはビームを避け続ける。

いろいろな場所を欠落したノワールは、火花を散らせながらその身を動かす。

「しかし、君は他のとは違う……。」

「……。」

その言葉に、ラウラは眉をひそめる。

「君は普通に作られ、ただ生まれるはずだった……。」

そう言うと、プロヴィネンスはドラグーンを全基マウントし、上昇する。

その行動にラウラは不思議に思った。

しかし、その思いはすぐに打ち消される事になる。

瞬間的に一条のビームが、プロヴィネンスがいた場所を通過した。

「クルーゼッ！！」

その声が響くと、どこからともなくストライクがプロヴィネンスに迫る。

シャルロットが救援に来たようだ。

ラウラはその事に、少しだけ安心した。

「ククク、まさか来るとは思ってみなかったよ……。」

「貴様はっ、貴様だけはっ！！」

エールストライカーを最大限に吹かし、ストライクはプロヴィネンスに迫る。

エンジェルダウン作戦のせいか、シャルロットはプロヴィネンスを見ると、コンバット・ストレス・リアクションとは別に殺意を表に出すように若干性格が変わってしまうようになった。

ストライクがエールストライカーに装備されているビームサーベルを引き抜き、プロヴィネンスに切りかかる。

対するプロヴィネンスも、複合シールドからビームサーベルを展開し対抗するかのように向かう。

「貴様とも決着を付けたいと思っていたところだ、ストライク。」

その言葉と共に、ストライクとプロヴィネンスはぶつかった。

339　プロヴィネンスの言葉（後書き）

さきほどＴｗｉｔｔｅｒで、オフ会してみてはという発言があったのでとりあえず聞いてみます。

必要ある？

皆さん、いろんなところに住んでるでしょ？

学生さんとかもいるでしょうし……。

え？

学生とか関係無い？

サーセンｗ

そんな一日でした。

３４０　ストライクＶＳプロヴィネンス（前書き）

とりあえず、前回のだと訳が分からないはず。

書き直し。

これからシュヴァルツェ・ハーゼの部隊員が活躍しそうだから……。

名前とかを募集していますということです、はい。

マジで、使うからね？

Ｐ３

３４０　ストライクＶＳプロヴィネンス

ストライクはビームサーベルを抜く動作から、そのままプロヴィネンスに斬りかかる。

対するプロヴィネンスは、ストライクのビームサーベルと打ち合うためか、振り払うように複合シールドを振る。

ストライクのビームサーベルが、プロヴィネンスのシールド部に当たり、激しい光を放つ。

そして、移動した速度のまま横を抜ける。

だが、それで終わらない。

プロヴィネンスは振り上げた複合シールドを持った腕を大きく回し、再度同じ態勢で振る。

しかし、ストライクも振り下ろした状態から、プロヴィネンス同様に振り払うかのようにビームサーベルを振った。

再度、プロヴィネンスのシールド部とストライクのビームサーベルが、強い光を放つ。

「だが、今の貴様の相手をする気はないのでな。」

「黙れっ！」

プロヴィネンスの言葉にシャルロットは叫ぶ。

怒気が孕んだ声は、誰が聞いても殺意に駆られているようにしか聞こえない。

二機が拮抗し、プロヴィネンスがラウラのことを一瞬だけ無防備にした。

ラウラはその隙を見逃さず、中破したストライクノワールの収納し、シュヴァルツェア・レーゲンの装甲を展開する。

中破したノワールより、シュヴァルツェア・レーゲンの方が機動性は高い。

その分、プロヴィネンスとの戦闘は圧倒的に不利になる。

「王……。　いや、篠ノ之リリィが生み出した混乱は、その後どれだけの闇を広げたと思う。」

リリィの名を出されたことに、シャルロットは競り合いながら、シールドを保持した手で、もう一本のビームサーベルを引き抜く。

そのままストライクがビームサーベルを引き抜き、プロヴィネンスを斬ろうとしたとき、プロヴィネンスは複合シールドをストライクに向けて強く押し、ストライクを後退させた。

リリィがつば競り合いの中、相手を蹴り距離を離す方法と同じだ。

「あれから人は、一体何を始めてしまったか知っているのかね？」

「黙れぇっ！！」

「私という災厄を生み出し、果て無き欲望を世界にばらまかせ、犠牲の果てに生まれた者を生み出した……。」

プロヴィネンスの言葉が、周囲に響く。

シャルロットの叫びをも無視して、プロヴィネンスの言葉は響きわたった。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ。　君は人口子宮ではなく、そのオリジナル。　……解析の為に取り出された子宮で作り出された、唯一の存在。」

プロヴィネンスはストライクを離したのを良い事に、ドラグーンを全基放つ。

その殆どはストライクに向う。

「その君が、兎と王……、二人の娘となったのだ。　思わず笑ってしまったよ……。」

その言葉は、ラウラの何かに触れた。

ドラグーンが撃つビームを避けながら、ラウラは叫んだ。

「Ｄａｓ，　ｗａｓ　ｌｕｓｔｉｇ　ｉｓｔ！（何がおかしいっ）」

ストライクがプロヴィネンスに向かい加速し、ドラグーンのビームを避けながら近づく。

急制動をかけ、再度加速し、少し横にずれビームを回避し、一瞬だけ後退し、再加速する。

そして再度ストライクは、プロヴィネンスを間合いに入れた。

「はぁぁっ！！」

シャルロットは叫びながら、プロヴィネンスに向かいビームサーベルを振り下ろす。

しかしプロヴィネンスは、簡単に複合シールドで受け止めた。

「君は人口子宮が誰のものを模倣して作られたと思う……。」

そう言いながらドラグーンを操作し、ストライクを狙うようにビームを放つ。

もちろん、ストライクはビームが来る前に後退した。

「くっ！」

シャルロットは毒付きながら、ドラグーンを避けた。

迎撃しないのは、再生するため迎撃するメリットがないのだ。

プロヴィネンスは無限に等しいが、ＩＭＳはエネルギーが有限である。

迎撃し続ければ、不利になっていくのだ。

それを理解しているからこそ、シャルロットはドラグーンを迎撃しようとは思わなかった。

３４０　ストライクＶＳプロヴィネンス（後書き）

ふぅ、疲れるな～。

さむいな～。

考えるだけの力が出ない。

このまま続き書こうかな？

とりあえず、この作品は書き直しますよ？

別作品で。

……完結してから（－＿－；）

いつになるかな～。

その時には、もう見る人いなくなってそうだな～。

怖いな～（笑）

とりあえず、プロヴィネンスの言葉でなにか思いついた人いるかな？

２４時間後には、種明かしみたいに答えが出てくるよ～。

３４１　出生の真実（前書き）

ラウラの書きたことは書けた気がした。

そんな話。

まさかというようなお話、Ｐ３

３４１　出生の真実

「……災厄。」

プロヴィネンスが呟きながら、大型ビームライフルを向ける。

「……女性。」

ラウラはドラグーンを避けながらも、プロヴィネンスの言葉を聞き続ける。

シュヴァルツェア・レーゲンでドラグーンを避け続けることに、ラウラは疲れたのか額から汗を流しはじめた。

「……王。」

「はぁっ！」

プロヴィネンスが喋る中、シャルロットはビームサーベルを戻し、ビームライフルを撃ち始める。

もちろんプロヴィネンスが当たるはずも無く、上昇し回避された。

「……災厄が滅びる原因。」

ドラグーンを全基マウントし直し、ストライクが放ったビームを複合シールドで受け止める。

そんな中、プロヴィネンスは決定的な言葉を口にした。

「……兎。」

その言葉に、ラウラは目を見開いた。

「M？ｇｌｉｃｈｅｒｗｅｉｓｅ……（まさか……）」

気がついたのか、ラウラは驚愕しプロヴィネンスを見る。

「そうだ、君は王が唯一愛した女性、兎の子宮……。　つまり、今の篠ノ之束から生まれたも同然なのだよっ！」

事実、兎と束は別人である。

しかし生まれ変わりであるが故に、兎は束であり、束は兎なのだ。

どういうふうに、死んだ女性の子宮を使用したか理解できない部分が多いが、その事実はラウラを驚愕させるに十分だった。

「ラウラッ！」

シャルロットがラウラの名前を呼びながら、シュヴァルツェア・レーゲンに高速で近づき地面に押し倒す。

その瞬間、シュヴァルツェア・レーゲンがいた場所にビームが通過した。

プロヴィネンスが構えていた大型ビームライフルを撃ったのだ。

もしシャルロットがラウラを押し倒さなかったら、今頃ビームはラ

ウラを貫通していただろう。

「君は唯一、試験的にオリジナルを使い実験した結果……。　様々な機材に繋ぎ、生前同様にした兎の子宮から生まれた、唯一の成功作。」

シャルロットはシュヴァルツェア・レーゲンの強制停止を外部からかける。

今のラウラは、プロヴィネンスの良い的だ。

ラウラをシールドで守りながら、離脱したほうが良い。

そう思ったシャルロットは急いで外部から、シュヴァルツェア・レーゲンのモニターを展開しようとする。

しかし権限はリリィと束、搭乗者であるラウラにしかない。

すぐさまエラーが出る。

（フ、敵に背を向けるとは……。）

そう言いながら、プロヴィネンスは大型ビームライフルをストライクに向け放った。

「くっ！」

直ぐ様シャルロットは反転し、シールドでビームを防ぐ。

「王は同族殺しをする間、兎の死体をそのままにしていてな……。

簡単に手に入れることができた。」

そう言いながら、大型ビームライフルの引き金を引くのをやめる。

「ついでだ……。　面白い事を教えてやろう……。　冥土の土産として聞いておきたまえ。」

シャルロットはプロヴィネンスの方を向き、ビームライフルを構える。

プロヴィネンスが言った言葉に、今だラウラは放心状態だった。

「……君を作り出した子宮と卵子は、理解できたな？　……なら思うはずだ、精子は誰のものを使ったのかを……。」

そんななか、プロヴィネンスは言葉を続ける。

その言葉に、ラウラは少しだけ顔を上げた。

視線の先には大型ビームライフルを構え、ストライクのビームライフルから放たれるビームを避ける、プロヴィネンスが映る。

「……子宮に付着していたものを使ったのさ。」

「・・！（っ）」

「っ！？」

プロヴィネンスの言葉に、ラウラとシャルロットが絶句する。

兎は王と恋仲であった。

リリィが過去に、そう言っていた言葉を思い出す。

そんな兎の子宮に付着していたモノとしたら、それは確実に一人を示していた。

「王のモノさ……。」

二人が導き出した結論を、プロヴィネンスは言葉にする。

それはつまり、ラウラが王と兎の子であることを指していた。

「て言うことは……。」

「君の義理の親は、本当の親という事だ……。　ラウラ・ボーデヴィッヒ……。」

二人が驚愕している中、プロヴィネンスはそう言葉にした。

３４１　出生の真実（後書き）

最近、子宮とか卵子とか精子とか出すぎな気がする。

これでもしこの作品が消されたら、笑ってあげるｗｗｗ

だって、データー吹き飛んだんだよ？

修復できないってｗｗｗ

さて、ラウラの親の事が出てきましたね。

ｗ

最初から、予定してましたｗｗｗ

こういうふうにすると。

というか、それって試験管ベイビー？

違うよね？

……つじつま合わせが必要だ！！

作者、思いつきで兎の子宮という新規設定入れましたｗｗｗ

３４２　一夏は常に決め手に欠ける（前書き）

気が乗らない。

セッシー達に出番を上げようとしたけど、うまくいかない。

ラウラから少し離れてみましょう、Ｐ３

３４２　一夏は常に決め手に欠ける

セシリアは一般生徒がいなくなった舞台の上で、汗を拭っていた。

ローズが撃ったビームのせいで、一般人が危険にさらされる。

それは本来あってはいけないことなのだが、プロヴィネンスはそうしても仕方がない相手だった。

鈴がローズに向い、なぜ撃ったのか問い詰めようとしたが、箒が抑える。

エンジェルダウン作戦時にリリィを、その後に一夏を負傷させたことに思うことがあるのだろうか。

普通なら鈴を止めずに、箒自身も聞くだろう。

しかし、その箒が鈴を止めているのだ。

不思議がっても仕方がない。

「……。」

当のビームを撃った本人は、目を頭ながら何かを呟いていた。

邪魔をしないように一夏を探しに行こうとしたセシリアだが、そう簡単に行くように世界は作られてない。

「っ！？」

崩れた天井から、ビームが曲がりながらセシリアを狙う。

ブルー・ティアーズを装備していたセシリアにとって、そのビームはあまり驚異ではない。

瞬間的にスラスターを更かし、ビームの射線上から外れる。

全員の視線が、そのビームに注がれた。

「一体何なんですのっ！」

そう叫びながら、セシリアはビームを撃った機体を探した。

一夏はオータム相手に善戦していた。

放たれるレーザーを避け、懐に潜り込み展開した雪片を振るう。

しかしオータムが使用するＩＳアラクネは、装甲脚を巧みに利用し二脚ではできない軌道で避け続けた。

「ハハ、やっるじゃねーかよ、ガキ！」

そう言いながら、オータムは装甲脚の銃口を白式に向ける。

もちろん一夏は射線から外れるが、アラクネの銃口からは何も放たれなかった。

その代わり、別の銃口が白式を撃つ。

「っ！？」

その射撃を一夏は驚きながら見る。

室内だからこそ無理な急速回避もできず、白式の機体に砲弾が着弾した。

シールドバリアによって大半の射撃は相殺できるが、レーザーは貫通し絶対防御に阻まれる。

もともと白式のエネルギーは悪いのに、そこに更に絶対防御を使用すれば、エネルギー切れを早く起こしてしまう。

一夏にとって被弾は、死と同義なのだ。

（くそっ！　エネルギーが……。）

そう思いながら、一夏は半分以下になったエネルギーゲージを見る。

以前レーザーや実弾が飛んでくるが、リリィの基礎回避訓練や楯無が教えた細かなマニュアル操作を駆使して避け続けた。

そして徐々に接近し、アラクネを雪片の間合いに入れる。

「うおぉぉっ！！」

一夏は咆哮を上げ、雪片でアラクネを薙ぎ払うかのように斬る。

しかし、雪片はアラクネを捉えることなく振らてた。

「はっ！　あぶねぇあぶねぇ……。」

アラクネは背中から伸びた装甲脚が、それぞれ独立したＰＩＣを展開し、どのＩＳよりも複雑でしなやかな起動をしていた。

その為、一夏はいくら雪片を振るっても当てることができずにいる。

もし千冬がいたのなら、一閃白鷺で追撃するだろう。

だが一夏が振るう雪片の剣筋は、そのどれもが雪片の圧倒的な性能のため一撃必殺。

悪く言えば、単調で見切りやすい一撃なのだ。

剣道でも一撃では上手く決まらない。

面を打っても、防がれれば終わり。

小手を打っても、決まらなければ意味がない。

胴を薙いでも、腕が上がっていなければ打てない。

だから剣道では、小手から面。

面から鍔競り合い、相手の竹刀を競り合いながらもち上げ後方へ下がり胴。

相手の竹刀を自身の竹刀を使い、円を書きながら上空に跳ね上げ空いた胴に打ち込むなどの二段で決め手を作る。

常に一段ではなく、二段構えなのだ。

「甘ぇんだよっ！」

しかし、一夏は長い間剣道から離れていたせいか、常に一段なのだ。

オータムに見切られても仕方がない。

そのことに気がつかず、一夏は隙ができるのを待った。

３４２　一夏は常に決め手に欠ける（後書き）

そんなわけで、元剣道部員の私が通りますよｗｗｗ

あ、事実です。

中学だけですけど……。

高校は忙しく、部活動に構っている暇は、ありませんでした。

そういえば、中学の剣道って突き禁止されてたな～。

危ないからって……。

上の先輩がふざけてやってきたけどｗｗｗ

懐かしい思い出ｗｗｗｗ

ま、どうでもいいけどね。

ネタがないから、何を書けばいいのか……。

最近よく腹痛になります？

とか？

うええぇん。(。,Д,。)。

話題がないよぅ〜。

３４３　一夏の怒りと亡国企業（前書き）

……まさか、一夏（笑）に出番があるなんて……。

シンジラレナーイ。

そんな話です、Ｐ３

３４３　一夏の怒りと亡国企業

（くっ、こいつの動きを予測して瞬時加速をっ……！？）

「ガキが、戦場で考え事とは百年はえぇんだよぉっ！」

一夏が考える暇を与える訳もなく、オータムは装甲脚から火線を伸ばし続ける。

雨のように降り注ぐ砲撃を、一夏は間一髪のところで避け続けた。

「クッ！」

自身に迫るレーザーも、雪片のアンチビームコーティングで防ぐ。

できる限り回避し続けるが、回避しきれないものは雪片で防ぎ続ける。

シールドエネルギーを使わない分、アンチビームコーティングは白式にとって唯一の救いだった。

（落ち着け。　……落ち着いてタイミングを待つ。）

雪片を振りながら、白式はアラクネの死角に回り込むように移動し始める。

しかし装甲脚が多いというのは、一夏が思っている以上に厄介な物だった。

「ちょこまか動くなぁ。　それで死角をとったつもりか。」

白式の移動先に、装甲脚の銃口が向く。

基本的に多脚は、機体を安定させる為に使用されることが多い。

多脚は人型とは違い、多数の足で機体を支えるからバランスが取りやすい。

ほぼ円のように足を広げバランスをとるため、一番崩れにくいのだ。

さらに一つほど足が破壊されても、さほど機体の安定に影響は出ない。

つまり、足を一つぐらい浮かせても問題が無いという事。

死角に行った敵に向け、砲身が付いた足を向ける事などたやすいという事だ。

「オラよっ！！」

オータムが叫びながら、一夏に向けレーザーを放つ。

（死角なしかっ！）

一夏はそう思いながら、白式のスラスターを最大にしレーザーを避けた。

すぐに更衣室の壁が近づき、反転し足を付ける。

「そうだ……。　教えておかないとなぁ。」

オータムがそう言いながら、一夏の方を向く。

「第二回モンドグロッソでお前を拉致したのは、うちの組織だ……。
感動のご対面だなぁ。」

「っ！！」

相手を挑発するかのような喋りで言われた言葉は、一夏の理性を一瞬にして消した。

全てが目の前にいるオータムへ向けての、怒りと憎悪、殺意に思考が侵食される。

「……そうか、そうかよ……。」

「あぁ？」

一夏が呟く。

無防備だが、オータムは攻撃をしない。

現状を楽しんでいるのだろう。

「ガキはガキらしく、しっかり喋れよなぁっ！」

その言葉に一夏は雪片を握りしめ、大き口を開き叫んだ。

「だったら、あの時の借りを返してやらぁ！！」

言いきると一夏は白式のブースタとスラスターを完全展開させ、オータムが乗るアラクネに雪片の刃先を向け、特攻を仕掛けた。

「上等だぁ！　ガキが真正面から突っ込んで借りが返せるのか見せてみろよぉっ！！」

オータムは指先で何かを弄り、一夏に目掛け投げる。

一瞬だけ反応が遅れたが、雪片を突きの構えで持っていたのが良かったのか、すぐさま零落白夜を展開し、オータムが投げたものを切り払う。

「チッ！」

オータムは切り払われると予測していなかったのか、舌打ちしながら装甲脚を数本動かす。

その間にも、白式は速度を上げ迫る。

「はあぁぁっ！！」

気合一閃。

怒気を孕んだ咆哮が更衣室に響く。

「うらアァッ！！」

対するオータムも叫びながら、数本の装甲脚を一夏に向ける。

しかし一夏の方が早く、アラクネの装甲脚が三本、雪片に切られ宙を舞う。

だがオータムは残った装甲脚を使い、白式を押し倒す。

「ぐっ！」

押し倒された事に、一夏の口から苦しそうな声が漏れた。

切り飛ばされた装甲脚が落ちると同時に、一夏の四肢をアラクネの残った装甲脚が踏み抑える。

もちろん雪片や雪羅を使うことも、足で蹴ることもできない。完全に王手をかけられていた。

「っ……、はっ！　手間かけさせてくれんじゃねぇよ……。」

額から汗を少しばかり流し、オータムは一夏を見下ろした。

３４３　一夏の怒りと亡国企業（後書き）

少々原作とは違う形になりましたね。

原作より戦闘能力が上がっているだと！？

そんな気分です。

さて、このまま一夏でもいいけどあれだしね～。

次は別の人にしようかな。

そしてアラクネが、ＡＲＭＯＲＥＤ　ＣＯＲＥ　ｆｏｒ　Ａｎｓｗｅｒのレッドラムにしか思い浮かばない……。

読み始めた当初から、蜘蛛のような多脚という文字で、レッドラムしか浮かばない……。

ということは、オータムはシャミア・ラヴィラヴィ？

オータム「素敵な風穴よ、アナタ……。」

ということか！？

シャミアお姉さまじゃまいか＋（０。・∀・）　＋　ワクテカ　＋

３４４　白騎士に襲いかかる人面鳥（前書き）

……とりあえず、説明してなかった気がするから前半説明。

あ、シルバリオ・ゴスペルでもまた出す？

バックアップ全話終了……。、Ｐ３

３４４　白騎士に襲いかかる人面鳥

千冬とクラリッサは薄暗い教室から出ると、ＩＳにエマージェンシーコールが届く。

その事に二人は表情をこわばらせた。

出典をしている教室から離れているため、すぐさまＩＳのモニターを展開する。

ＩＳ学園内はＩＳの使用は禁止なのだが、二人は使用した。

これにはちゃんと理由がある。

国際ＩＳ委員会と所属篠ノ之との間で、契約があったのだ。

契約しなくても良かったのだが、リリィは渋々契約した。

内容は、簡単にいえばＩＳ学園の警護だ。

ＩＳ学園は世界最候補と言ってもいいほど、技術が進んでいる。

そんなところを警護する必要があるか、と誰もが疑問に思うだろう。

しかし、ここで災厄の存在が問題となった。

はっきり言えば、災厄対策として契約したに過ぎないのだ。

所属篠ノ之は、建物や基地を持たない会社と軍隊のようなもの。

その所属篠ノ之が、どうして纏まっていられるか。

当然のように、災厄対策を押し付けられ纏められたに過ぎない。

当初は何処かの国家に所属させようと望んでいたのだろうが、篠ノ之夫妻を国家に所属させることは、リスクを負う。

それならと白羽の矢が立ったのが、ＩＳ学院なのだ。

結果としてＩＳ学園付近の海底に、所属篠ノ之の建物ができた。

海底に出来たのだから、建物ではない気もする。

だが、出来たのだ。

もちろん海底に作ったのにも理由はある。

攻撃のほとんどを受けないからだ。

ミサイルを撃ったとしても、海底に入った瞬間ただの鉄の塊となる。

レーザーやビームとて水中で拡散してしまう特性があるため、届かない。

唯一届くとしたら、魚雷だろう。

だが建物にシールドエネルギーや絶対防御を張っているため無効。

結局、ほとんどの攻撃を無効化してしまう要塞となっていた。

『隊長っ、……いえ、ラウラ・ボーデヴィッヒ大佐より、エマージェンシーコールですっっ！』

モニターから、シュヴァルツェ・ハーゼの部隊員が二人に説明する。

眼帯をつけた女性が、焦りながら口を開く。

『学園エリアＤ－Ｆ０６でプロヴィネンスを発見との事……。』

その言葉に二人の表情が固まる。

千冬にとっては、プロヴィネンスは宿敵。

リリィを陥れたエンジェルダウン作戦の元凶なのだ。

もちろんこの事はクラリッサも知っている。

さらに言えばローズがプロヴィネンス化しても、ラウラが報告することはない。

つまり、確実にローズとは別のプロヴィネンスと言うことになる。

だからこそ、二人の表情が固まったのだ。

『現在ラウラ・ボーデヴィッヒ隊ち……、大佐が交戦中。　ストライクノワールに被弾アリ！』

「なんだとっ！？」

クラリッサが目を見開き、部隊員に叫ぶ。

『お、落ち着いてください……。　今、シャルロット・デュノア中尉がストライクで援護に向かっています。』

その言葉に千冬は焦った。

シャルロットがプロヴィネンスに抱いている感情は、殺意や憎悪だけ。

まともに戦闘ができるとは思えなかったのだ。

千冬は白騎士を展開し、ラウラがいる場所に向かおうとした。

「っ！」

だが、千冬は動かない。

動けなかった。

『なお、敷地内に災厄の反応多数！！』

その報告と共に千冬に目が捉えていた、上空に飛んでいる鳥のような黒い物体が、千冬に向かって飛来した。

かなり速い速度で、白騎士に向かって特攻を仕掛ける。

「ブリュンヒルデッ！！」

風切り音が大きく響き、クラリッサも気がつく。

大きな翼を広げ顔のような物を覗かせる物体は、爪を広げ白騎士を狙う。

その姿はまるで、人面鳥（ハーピィ）のように見える。

「くっ！」

千冬は腰から雷刀・桜を引き抜き、すれ違いざまに振り下ろした。

３４４　白騎士に襲いかかる人面鳥（後書き）

とりあえず、どんどん災厄が介入してきます。

リメイクでは、介入を早くしたいな～。

な～んてｗ

まだ終わってないから、リメイクもないけどねｗｗｗ

もし追いついたら、押絵でも書こうかな？

……押絵を書いてくれる絵師、募集中です（笑）

３４５　起動するクラリッサの剣（前書き）

ということで、サブタイトル通りクラリッサが戦線に参加します。

使用機体は……。

ブログ制作考案中、Ｐ３

３４５　起動するクラリッサの剣

人面鳥の爪と白騎士の雷刀・桜が交差する。

「っ！」

人面鳥は爪から小型のビームサーベルを形成し、対抗する。

その為、人面鳥に対し有効的なダメージを与えることができなかった。

白騎士は再度雷刀・桜の刃を返し斬りかかる。

しかし人面鳥は斬られる前に大きく上昇し、白騎士の攻撃を回避していた。

「なんなんだっ！」

クラリッサが人面鳥を見て、叫びを上げる。

巻き起こした風によって髪の毛が乱れるが、クラリッサは必死に人面鳥を見続けた。

『機種特定っ！　ＧＡＴ－Ｘ３７０……、災厄ですっ！』

別のモニターが開き、辺りに声を響かせた。

それと同時に、カタログスペックまで送られる。

≪ＧＡＴ－Ｘ３７０　レイダー≫

可変型の機体で、大気圏航行のために大きな翼を持つ。

クラリッサは軽く目を通すと、白騎士がいた場所に目を向ける。

しかし、そこには白騎士はいない。

まさかと思いレイダーがいるであろう上空を見る。

「はぁっ！」

クラリッサの予想通りに、レイダーに斬りかかる白騎士がいた。

雷刀・桜と光刀・暁を持ち、翼を切り飛ばすかのように同時に降り下ろす。

しかし、レイダーはその斬撃を高度を下げることで避けた。

そのまま半回転しつつ、レイダーは人型に変形しながら腕を白騎士に向ける。

その腕には、盾から二つの砲門が伸びていた。

「……。」

千冬はそれを見た瞬間に、加速し砲門の射線軸から外れた。

その瞬間には砲門から緑色の光条が伸び、白騎士を捉えられずに地面を焼く。

（ビーム兵器かっ！）

千冬はそう思いながら、空中でターンしレイダーに再度斬りかかる。

逆にレイダーは白騎士から距離を離す。

そのまま飛行形態に変形し、白騎士には出せないほどの速度で上昇した。

「ちっ！」

舌打ちをしつつ、千冬はレイダーを目で追う。

しかし目の端に光が映ったため、瞬時に後退しその場から離れた。

少しして白騎士がいた場所を、三条の光が通り過ぎる。

その光の先には、ダークブルーカラーの機体が砲身伸ばし白騎士を狙っていた。

再度光が放たれ空を切り裂く。

「くっ！」

千冬は苦々しくその光を見て、紙一重のところで後退し避ける。

しかし避けた瞬間上空から、レイダーが飛来し白騎士に爪を伸ばす。

「っ、舐めるなっ！！」

だが、やはり千冬。

足に装備された踏刀を展開し、宙返りの要領で速度の出たレイダーを蹴る。

後退して生み出された運動エネルギーをも使用したことにより、レイダーはかなり飛ばされた。

『クラリッサ副隊長。　九時方向距離８００に機影１……。』

もちろんクラリッサも上空を見ていたため、三条の光を見ていた。

『機種特定……、ＧＡＴ－Ｘ１３１　カラミティです。』

（災厄が二体……。）

情報解析をしている女性の声を聞きながら、クラリッサは目を細める。

その手にはシュヴァルツェア・ツヴァイクが、待機状態で握られていた。

「……私も出る。」

『『『了解。』』』

クラリッサの声に、シュヴァルツェ・ハーゼの隊員は通信越しに敬礼をする。

モニターが途切れ、カラミティの情報が展開された。

（……やはり砲撃型か。）

クラリッサ自身が使う機体を思い返し、状況を考える。

（飛べない分、砲撃型は私がやるべきだろう……。）

そう思うと、クラリッサは機体を展開する。

一瞬光に包まれ、次に現れたときには灰色の全身装甲機体となっていた。

もちろんクラリッサが使用する機体は、ＩＳとは別に追加装甲が加えられＩＭＳとなったのだ。

機体に色が付き始める。

全身が青と白で覆われ、更にその上から水色とオレンジでカラーリングされたアーマーが装着された。

右肩にシールドとレールガンか装備され、椀部アーマー内には小型のライフルが見える。

足にはビームサーベルの様な突起が伸びており、ラウラのストライクノワールやシャルロットのストライクに近い造形だ。

鈍重そうにアーマーをつけているが、各部に配置されたスラスターがカバーしており、機動力が高い。

更にアーマーが追加しているからか、防御面も高いのだ。

その実、ＰＳ装甲も搭載しているため、実体兵器は無効化される。

クラリッサが展開した機体のデュアルアイが緑色に輝く。

「では、クラリッサ・ハルフォーフ……。　デュエル、出る。」

３４５　起動するクラリッサの剣（後書き）

ということで、デュエルです。

当初はバスターやソードカラミティと、基礎機体が遠距離砲撃型でしたが、シュヴァルツェア・ツヴァイクがどういう武器を搭載されているか不明のため、提案された機体に一番近い中距離機体を選ばせていただきました。

ただし、このデュエルは普通ではありません。

ＧＡＴ－Ｘ１０２とＧＡＴ－Ｘ１０２の装甲を両方使用できます。

デュエルなのかブルデュエルなのか、分からない機体でねｗ

ちなみに、この機体についてはまた次話で……。

書いている時間が、夜遅いので、ね。

３４６　デュエルの装甲（前書き）

なんか、ダル。

あ～と、デュエルの説明ね……。

とりあえず……、Ｐ３

３４６　デュエルの装甲

白騎士がレイダーと上空で交戦する中、クラリッサはデュエルを操り地上にいるカラミティに向かう。

その姿は完全に、群青色の鎧を纏った騎士のようにも見えた。

形式番号はＧＡＴ－Ｘ１０２と名称デュエルなのだが、その姿はＧＡＴ－Ｘ１０２２であるブルデュエル。

似ているようで似ていない、二つの機体。

それがクラリッサのデュエルだった。

メインスラスターを吹かしながら瞬時加速のように、カラミティの方向へ移動する。

手にはストライクノワールと同様の武器、５．７ｍｍ高エネルギービームライフルを保持していた。

本来のブルデュエルであれば、５．７ｍｍ高エネルギービームライフルを保持していることはない。

ではなぜ装備しているか。

簡単にいえば、デュエル系統の機体は基本的にＧＡＴ－Ｘ１０２を基礎として外部装甲をつけているに過ぎないのだ。

正確にはブルデュエルの装甲は機体にボルトオンされているため、

カタログスペック上着脱不可能。

しかしリリィはその点を変更させ、デュエルの追加装甲であるアサルトシュラウド同様に、ブルデュエルのフォルテストラを着脱可能状態にしたのだ。

これにより機体はデュエルのまま、装甲の変更でブルデュエルとしても稼働するようになった。

なお、束が更にデュエルの追加装甲と武装パックを制作しており、開発コードはレーゲン。

よって、基本的にクラリッサの機体は装甲なしのデュエル、アサルトシュラウド、フォルテストラ、レーゲンとなり、ストライク同様に換装することができる。

つまり、なぜ5．7mm高エネルギービームライフルを持っているかは簡単に説明がつく。

5．7mm高エネルギービームライフル、正式名称17mmグレネードランチャー装備5．7mm高エネルギービームライフルは、デュエルが初期から持っている武器なのだ。

「……っ！」

デュエルはそれを構え、カラミティーの熱量に向ける。

木で視界が悪いが、熱門を誤魔化せる訳もない。

クラリッサは冷静に照準を合わせる。

（ん、気がついたか？）

カラミティの熱門が動いたかのように変化する。

僅かの変化だが、クラリッサには十分理解できた。

すぐさま、５．７ｍｍ高エネルギービームライフルの引き金を引く。

銃口から光が伸び、木を焼き払いながらカラミティまで進む。

しかしカラミティはジャンプして、ビームを避けた。

「……リリィちゃん。」

「言わないで、束……。」

未だ黒い霧が固定されず、二人は見続けるだけだった。

何十分も変わらない。

つまり、二人何十分もその場にいるのだ。
ストレスがたまっても仕方がない。
「もう……。」
「ダメだからね……。」
束が痺れを切らし、レイジングハートを噛める。
ブラスタービットを完全展開していることから、セカンドシフトからサードシフトのブラスターモードに移行したようだ。
若干、ブラスタービットに桜色の粒子が纏始めいるのは気のせいだろう。
「……流石に粒子状態の災厄に撃っても、無駄なだけだよ……。」
リリィはそんな束をなだめながら、ビームライフルを構える。
「……言ってることとやってることが合ってないよ、リリィちゃん。」
少し呆れかけたかのような目で、フリーダムが持つビームライフルを見つめた。
銃口の先は、黒い霧。
そこへ向け、引き金を引くフリーダム。

完全に言っている事とやっている事が、噛みあっていない。

銃口から伸びた光条が、黒い霧を貫くが通過しただけ。

「ちっ……。」

（し、舌打ち……。）

リリィが小さく舌打ちした事に、束は気が付き唖然とする。

どうやらリリィも限界のようだ。

何度もビームライフルから光条が伸び、空に線を刻み続けた。

３４６　デュエルの装甲（後書き）

とまぁ、こんな感じ。

デュエルの基本は、Ｘ１０２だからね……。

とりあえず、フォルテストラを着脱式にしてみた。

結果、ＭＷＳの様になりました、とさ……。

あ～、首が痛いな～。

３４７　水中に潜むもの（前書き）

とりあえず、サブキャラ枠はまだ必要だと感じた。

そんな日。

Ｐ３

３４７　水中に潜むもの

「各機、対ＩＭＳ戦闘用意ですわっ！」

セシリアはそう言い構える。

箒と鈴はその言葉に、自機の武器を展開した。

目を閉じているローズに向かい、ビームが再度建物を貫きながら進む。

「ローズッ！」

鈴の叫ぶこえば響くが、ローズは動かない。

唖然としながら鈴は、青龍刀を構えローズに接近しようとする。

「……私より、貴方が危ない……。」

「へ？」

しかし、ローズの言葉に鈴は踏みとどまる。

「鈴さんっ！！」

「っ！？」

更にセシリアの叫びが建物内に響く。

その言葉に、鈴は気がついた。

ビームが弧を描き、鈴の甲龍に向かってきている。

焦りながらも、鈴はアンチビームコーティングされた青龍刀で防ぐ。

刃に手を添えながら、そのビームを受け止めた。

ビームの威力で甲龍が少し押されるが、ビームを防ぎきる。

（……場所が悪いですわね。）

セシリアはそう考え、ブルー・ティアーズの全スラスターを使用し移動し始める。

「セシリアッ！？」

鈴がその行動に驚愕し叫ぶ。

箒も若干目を見開き、セシリアを凝視する。

「ここでは私たちに不利ですわ。」

そう言うと、セシリアはローズが開けた天井の穴から外に出ていった。

シュヴァルツェ・ハーゼが新しく構える海底の建物内で、隊員は各々の仕事をしていた。

全ＩＳとＩＭＳを出撃管理する管制官、シェナス・ノア准尉もそのうちの一人だ。

ＩＳ学園に存在する隊員に、的確な指示を出しながら避難状況を報告し続ける。

「Ｂ小隊は終了後０９ゲートから撤退。　別名あるまで待機……。」

そのままキーを叩き、ゲートを開く。

少しばかり、近くにいる同僚の姿をシェナスは見た。

「……。」

唖然としながら、この状況の中でコーヒーを飲む女性を見る。

「ん？　シェナスも飲む？」

そう言いながら、自身がもっているコーヒーを上げる。

クリス・エヴァシュテル。

シェナスより年下だが、気さくな隊員だ。

実は先程からコーヒーを作っては飲み、飲み終わっては作る事を繰り返しているまでの、コーヒー中毒者である。

それを見て、唖然としない者はいない。

「……せめて仕事はしねて？」

そう言うと、シェナスは再度モニターに体を向ける。

「あ、水中から来た……。」

コーヒーから口を離し、クリスが喋る。

シェナスは訝しみながら、コーヒーを持つシェナスへ振り向く。

「……三、いや四機来てる。」

しかしシェナスは先ほどとは変わり、真剣な表情でモニターを見ていた。

コーヒーカップは横に置いてあるのを見て、シェナスは自身のモニターに向き直る。

コーヒーカップを持っていると大人しそうな女性の隊員なのだが、コーヒーカップ持っていないと冷静になる。

裏表が激しい隊員であった。

その為コーヒーカップを持っているかいないかで、信用度が変わるのだ。

「機種特定、ＵＭＦ－４Ａ。　グーン……、です……。」

クリスが妙にな口調になりながら報告する。

不思議に思い、シェナスは再度クリスの方へ向く。

「……っ。」

クリスが見ていたモニターを見て、シェナスは理解した。

基本的に人型で固定しているのが普通の機体だが、イカみたいな機体が目に入ってしまえば笑ってしまうだろう。

人型だと思っていたのが、蓋を開けてみたらイカ型。

そんな、想像の斜め上のフォルムに笑ってしまったのだ。

「ぷっ……。」

シェナスは再度自身が見ていたモニターへ向き、笑いをこらえる。

少し落ち着いたところで、シェナスは深呼吸した。

（……よし。）

冷静になったところで、キーを叩きはじめる。

「フラウ・ハルトマン大尉、発進準備願います。」

３４７　水中に潜むもの（後書き）

サブキャラ登場。

シュヴァルツェ・ハーゼ隊員の名前がないため、仕方なくオリキャラ使用。

どれだけ出るか不明。

だけど、出ないことには面白みがない。

というか、隊員Ａと話してる感じは嫌でしょ？

とりあえず、容姿は未定のため脳内補完ということで。

リメイクまでには、ラフは作っておきたいかな？

３４８　セシリアに襲いかかる死神の鎌（前書き）

書き終わってから、ここ書くけど……。

今回の話、ある系統のＭＳだけ……、な気が……。

Ｐ３

３４８　セシリアに襲いかかる死神の鎌

シェナスの声を聞きながら、シュヴァルツェ・ハーゼの軍服を着た女性が背伸びをする。

疲れたのか首を回し、続いて肩も回す。

『ハルトマン大尉、海底ゲート一番の使用です。』

「……了解。」

そう言い、室内から廊下に出る。

廊下と言っても行ける場所が格納庫と出撃ゲートだけのため、出撃以外には通らない。

実質的に、その廊下は既に出撃ゲートと同じ意味を持っていた。

フラウ・ハルトマン大尉。

シュヴァルツェ・ハーゼの中で、クラリッサに続く軍人らしい軍人だ。

その性格は、少女漫画を読んでいないクラリッサと言った方が理解しやすい。

ドアが自動的に開き、誰もいない広い空間に出る。

フラウは持っていた待機状態のＩＭＳを展開し、一番ゲートに向か

い歩く。

全体的に濃い青とグレーで構成された色分けは、あたかも水中専用機体に思える。

背部には甲羅を背負い、両サイドに爪が付いた楯のようなモノを装備していた。

「……テストを開始する。」

『了解しました。』

一番ゲートの扉が開き、その奥に更に扉が見える。

その扉に向かい進むと、開いていた扉が上下左右と二重で締まった。

海水侵入防止のためだ。

前後ドアを閉じられ、一種の密室となった。

『海水注水します。』

クリスの声と共に、密室に海水が流れ込む。

フラウの機体は、背部に装備されていた甲羅を頭に被せ、トライデントを展開し手に持つ。

海水が機体を超える。

『……９０、１００。　海水注入終了しました。』

『最終ロック解除。　一番ゲート完全開放。』

クリスとシェナスの声が交互に情報を与える。

スラスターが起動し、海水を光らせた。

機体が前に倒れがながら、徐々に進み始める。

『フラウ・ハルトマン大尉。　フォビドゥンブルー、発進どうぞ。』

「了解。　発進する。」

シェナスの声に、フラウが駆るフォビドゥンブルーが加速した。

セシリアは周囲を警戒しながら上昇する。

遠くでは緑色の光条が、雨のように地表に振り注いでいた。

（あれは、プロヴィネンスですわね……。）

セシリアはそう思いながら、スターライトｍｋＩＩＩを展開する。
敵機が何処にいるかわからない状態で、主兵装を出さないという訳はない。
セシリアが周囲を警戒しながら、首を動かす。
「っ！」
モニターからロックオンアラートが響き、セシリアはすぐさま移動する。
その瞬間に上空から何かが飛来し、セシリアがいた場所を薙いでいった。
冷や汗を流しながら、セシリアは飛来したものを見る。
甲羅を頭の上にのせ、死神のような鎌を持つ機体。
少しだけ嫌悪感を抱くような、濃い緑色のカラーリングはセシリアに圧迫感を与えていた。
フリーダムのようなシールドが、セシリアにレーザーの無効を語っている気がしたからだ。
（……まさか、ＰＳ装甲も付いてるわけありませんわよね？）
そう思いながら、セシリアはスターライトｍｋＩＩＩを向ける。
無効化されると理解しながら牽制気味に引き金を引く。

しかしセシリアの思惑は回避という行動で、打ち壊された。

ブルー・ティアーズのデーター上には、セシリアの目に映る機体のデータはない。

それは極秘裏に開発されたＩＳか、災厄である事を物語っていた。

「……っ。」

セシリアは瞬時に敵機を撮影し、撮影データを鈴に転送する。

≪鈴さんっ！≫

≪わかってる。　ラウラの部下が私のところに来て、写真をシュヴァルツェ・ハーゼの本部に送っていったわ。　……どうせわからないでしょうけど。≫

どうやら鈴はセシリアが贈った画像ファイルで、セシリア何をして欲しいかわかったらしい。

その間にも敵機はセシリアに接近し、鎌を振るう。

≪私はローズに聞くから！≫

鎌を避けながら、プライベート・チャンネルで話し合う。

降下しながら後退し、セシリアは距離をとる。

「あら？」

そんな中、ブルー・ティアーズに何かのデータが届く。

送信元はシュヴァルツェ・ハーゼ。

セシリアは唖然としながら、敵機の行動を見ながらデータを開く。

そこにはＧＡＴ－Ｘ２５２と書かれた敵機の情報が、モニターに映し出されていた。

３４８　セシリアに襲いかかる死神の鎌（後書き）

うん。

Ｘ２５５とＸ２５２。

フォビドゥンだね……。

少し悩みながら、書いてるんだけど。

本当にどうしたら。

あ、これで連合の三馬鹿……ｗ

フラウ・ハルトマンはＩＳ様からいただきました。

３４９　ブルー・ティアーズＶＳフォビドゥン（前書き）

戦闘場面が多い、セッシーにも出番を……。

おじさんおじさん、７ヶ月連続更新達成したよ～。

嘘だと言ってくれ、Ｐ３

３４９　ブルー・ティアーズＶＳフォビドゥン

セシリアはＧＡＴ－Ｘ２５２という識別の機体と、入れ替わるように飛び続ける。

お互い交互に砲撃しては接近し、すぐに離れる事を繰り返す。

≪ＧＡＴ－Ｘ２５２　フォビドゥン≫

セシリアに送られてきたデータに、書かれていた敵機の名称だ。

機体装甲には白騎士と同様の装甲システム、ＴＰ（トランスフェイズ）装甲を使用。

ビームを偏向させる兵装ゲシュマイディッヒ・パンツァー搭載することで、無敵に近いほどの防御力を手に入れている。

ゲシュマイディッヒ・パンツァーのシステムを軽く見たセシリアは、少しだけ目を細める。

甲羅に見えるバックパックの左右に付属される装甲楯に、ビームの粒子を歪曲させる磁場を発生させることで、ビームの進行を曲げるというものだ。

それは地場の発生の仕方では、レーザーさえ曲げることが出来るという事でもある。

ＴＰ装甲にゲシュマイディッヒ・パンツァーは、完全にセシリアのブルー・ティアーズにとって天敵だった。

「っ！」

さらにセシリアにはビームを防げる装備はなく、フォビドゥンにはビーム兵器が搭載されている。

天敵以外に言葉が見つからない状態なのだ。

フォビドゥンが巨大な鎌、重刎首鎌（じゅうふんしゅれん）ニーズヘグを構え、セリシアに接近する。

それに対しセシリアは、後退するという判断より接近するという手を取った。

考えれば分かることだが、ゲシュマイディッヒ・パンツァーの存在により遠距離攻撃は基本的に無効化される。

ミサイルとて、ＴＰ装甲により無効化される。

ならばどうすればいいのか。

ブルー・ティアーズとフォビドゥンの距離が縮まる。

大きな鎌を振り上げ、フォビドゥンは減速し狙いを定めた。

（……ここですわっ！）

しかしセシリアは一瞬だけ瞬時加速で加速し、フォビドゥンの鎌をくぐり抜け後ろを取る。

フォビドゥンは鎌を振った時には、セシリアが既に後方へ抜けた後。

妙に焦ったように、後ろに振り返ろうとする。

だがその時には、ブルー・ティアーズがスターライトｍｋＩＩＩを構えて初めていた。

「くっ！！」

瞬時加速から急停止、そしてターンという荒業をしたせいか、体にＧによって軋む。

加速に伴う空気抵抗や圧力により、瞬時加速中は起動を変えることはできない。

それを変えるということは、空気抵抗や圧力。

いわゆるＧが、体にかかってしまうということだ。

瞬時加速の急停止としても、前に進む力を無理やり押さえ込んでいる。

ブルー・ティアーズはＩＳであり、Ｇを完全に打ち消すことができるＩＭＳではない。

だからこそ、Ｇがセシリアを襲っていた。

「うぅっ！」

歯を噛みして、Ｇに耐えながらフォビドゥンが行動するより早くスターライトｍｋＩＩＩを向ける。

フォビドゥンも鎌を構え下降気味に、スターライトｍｋＩＩＩの射線から外れた。

だが、スターライトｍｋＩＩＩはフォビドゥンの回避より早く向けられ、セシリアの指は引き金を引く。

装甲楯も間に合わずに、フォビドゥンはスターライトｍｋＩＩＩから放たれるレーザーを受けた。

「そんなっ！？」

しかし、セシリアの目には想像と違う光景が映っていた。

スターライトｍｋＩＩＩから放たれたレーザーが、甲羅と拮抗しフォビドゥンが後退する。

貫通せずに拮抗したのだ。

だが、少しして横から伸びた装甲楯により防がれる。

「くっ！！」

セシリアは後退しながら、フォビドゥンを見た。

レーザーが当たった場所は焼け焦げ、破損していう場所は破損している。

（……ダメージには、なっているようですわね……。）

もともとフリーダムが出力をＩＳに合わせるため、２０％に制限し

ているように、災厄とＩＳの間には出力の違いがある。

ＩＳに対しブルー・ティアーズのレーザーは驚異的だが、災厄に関してみればビームマシンガン一発と変わりない。

耐熱装甲とＴＰシステムには、レーザーは大きなダメージにはならないのだ。

「……行きますわよ。」

しかしセシリアにとって、その事実はあまり気にならなかった。

現に、フォビドゥンを被弾させる事ができたのだ。

根気良くダメージを当てていけば撃破できる。

そう考えていた。

３４９　ブルー・ティアーズＶＳフォビドゥン（後書き）

さて、次は誰にスポットライト当てよう～？

ちーちゃん？

リリィちゃん？

ラウラちゃん？

いっくん？

さて、誰にしよっかな？

世界とＩＳと名もなき者は、所属篠ノ之の提供でお送りいたしました～☆

引き続き、世界とＩＳと名もなき者へをお楽しみください♪

一次小説書いてみたところで、二次小説のように見られることはないのです。

そう実感しました……。

ええ。

もしよろしければ、一次小説もよろしくお願いします＞（｜　｜）

＜

３５０　白騎士ＶＳレイダー（前書き）

なかなか、リリィの出番はこない。

というか、今まで絶対強者としていたからね～。

出番が少なくて仕方がない……。

一次小説のせいで、ＩＳの執筆状況ヤバスｗｗｗ

Ｐ３

３５０　白騎士ＶＳレイダー

「散突っ！」

白騎士の光刀・暁が、レイダーに刃先を向け何ども襲いかかる。

しかしレイダーは後退しつつも、左手に持つシールドで防ぐ。

千冬は苦虫を噛み潰したような表情で、レイダーを睨み光刀・暁を振り切りシールドを蹴って距離を離した。

（一筋縄ではいかないようだな……。）

そう思いながら、光刀・暁と雷刀・桜のジョイント部分を連結させ、アンビデクストラス・フォームにする。

レイダーは飛行形態を取らず、口元から１０ｍｍエネルギー砲ツォーンを撃った。

ビームが真っ直ぐ白騎士に飛んで行くが、横にずれることで簡単に避ける。

そのまま加速しレイダーと距離を詰めるが、下方から三条の火線が伸びレイダーに近づけない。

「くっ！」

千冬はその光条を見て、舌打ちをしながらその光条の根元を見る。

カラミティが砲塔を白騎士に向けていた。

再度砲身を白騎士に向け、カラミティーは引き金を引く。

しかしその前に白騎士はその射線から離れた為、カラミティーが放った砲撃は空を貫くだけだった。

千冬は二機の機体を相手にどう戦おうか悩む。

遠くの空ではビームが雨のように地表に降り注いでいたり、ビームが曲がりながら建物に入って行く。

（他にもいるのかっ！）

そう思いながら、再度放たれたカラミティの砲撃を避ける。

しかし余所見がいけなかったのか、レイダーが白騎士の後ろに移動していることに気がつかなかった。

「っ！？」

千冬はレイダーに気がつくが、既にレイダーは破砕球を白騎士に向け投げたあと。

白騎士の行動より、破砕球が白騎士に当たるほうが早かった。

「がぅっ！」

破砕球が白騎士の背部にあたり、白騎士を吹き飛ばす。

白騎士自体、ＴＰ装甲がついているため基本的には無事ではある。
だが破砕球がもたらした衝撃は、千冬に直接伝わった。
「ぅ、っ！」
機体の体制を立て直し、レイダーから距離をとる。
流石に破砕球によって、千冬自身のダメージが大きくなったらしい。
しかし、千冬は頭を振り目を覚ます。
『ブリュンヒルデ、聞こえますか？』
そんな時、白騎士のモニターが展開しクラリッサの声が響く。
「……どうした？」
破砕球のダメージが抜けきってないのか、重々しく聞いてしまう。
レイダーが破砕球を回収し、飛行形態に変形して千冬に迫る。
爪を伸ばして白騎士を捕まえようとするが、アンビデクストラス・フォームにしたサーベルで逆に斬り返す。
しかしレイダーは咄嗟に左肩に装着したシールドによって、白騎士の斬撃を防いだ。
そのままレイダーは、白騎士の後方に飛んでいく。

『地上にいるカラミティは私が対応します。』

モニターには≪ｓｏｕｎｄ　ｏｎｌｙ≫と書かれており、クラリッサの状況が分からない。

千冬は痛みで鈍る頭で考える。

「そうか、なら頼む……。」

『了解しました。』

だが、考えることを諦めた。

レイダーの後ろ姿を見て、千冬は大きく息を吐く。

下方からの砲撃がなくなったことにより、千冬は自身と同等かそれ以上の実量を持つ災厄に専念できる。

カラミティとレイダーは同時に相手することはできないが、片方ならば相手することができるのだ。

アンビデクストラス・フォームを解除し、二つのサーベルを収納。

後腰から雪片・真打を手に取り、刃先をレイダーに向ける。

レイダーは飛行形態のため、白騎士の方を向くために旋回し始めた。

（一撃で切り落とす……。）

集中し千冬は白式とよく似た単一仕様能力、零落白夜・零を起動す

る。

雪片・真打の刃が左右に割れ、刃を変形させながら隠れていたエネルギー発生部分を表に出す。

現在の白騎士はビーム兵装を搭載しており、雪片・真打もビームサーベルと同じことができる。

（……束みたいに理論を組み立てることはできないが、おそらくコレでいけるはずだ……。）

エネルギー発生機器が、刀のようなビームサーベルをの形を創る。

レイダーが千冬の方を向き接近し始めた。

それを千冬は確認すると、瞬時加速で間合いを詰める。

３５０　白騎士ＶＳレイダー（後書き）

リリィの出番を作りたい。

だが、出番がない。

だってプロさんでも、瞬間的に死んじゃうよ？

それでも、一応居るんだけどね。

でもまだ出せない。

どうしよっかな～。

３５１　白式と剥離剤（前書き）

一次小説「『死人』と呼ばれる彼女は小説家志望」……、ごく普通に学園モノを書いています……。

が、おかげでＩＳが書けない！！

ＴＰＰを気に、書き始めたのが行けなかったのだろうか？

Ｐ３

351　白式と剥離剤

多脚の様々な機材分、他のＩＳより重いアラクネ。

上に乗ってしまえば、下にいるものは身動き取るのも一苦労。

その為、一分近く白式の上でオータムは荒い息を吐いていた。

「ふぅ……。」

呼吸を整え、オータムは気味の悪い表情を一夏に向ける。

いつの間にか、手には四本脚の装置を持っていた。

反対の手で装置を弄り、駆動音を室内に響かせはじめる。

一夏はその装置を見て、本能的に危機感を感じ始めた。

「……クソッ！」

なんとか抜け出そうと白式を動かそうとするが、アラクネが踏んでいる部分が的確すぎるせいで動かない。

両方の装甲椀、一夏の両膝。

そのどれもが、押さえつけられたら動かすことが出来なくなる。

膝を押さえつけられ、人は足を動かすことができるかと聞かれたら、誰もができないと答えるはずだ。

「んじゃ、お別れの挨拶はすんだかぁ？」

「……なんのだよ。」

オータムの言葉に、一夏は睨みながら聞き返す。

その間にも、オータムがもっていた装置が一夏の胸部と接触する。

その瞬間、装置の足が閉じ一夏の体に固定された。

「決まってるだろ？　てめぇのＩＳの事だよ。」

その言葉に一夏の目が見開く。

「どういっ！？」

「どういう事だ！」と言おうとした瞬間、装置から電流が流れた。

一夏の叫びが室内に木霊する中、オータムは笑う。

それが一夏の神経を逆なでた。

「ぎゃはっははは、は……。」

電流が止み始める。

それとともに、オータムの笑い声も止む。

一夏を見下しながら、オータムは唖然としていた。

「……テメェ、何をした……。」

「がっ、……ご、ごほっ。」

オータムが一夏に問うが、一夏は答えられない。

答えられる状況ではない。

そんな一夏に四肢を抑えていない装甲脚を向け、オータムは叫んだ。

「なんでテメェのＩＳは、剥離剤（リムーバー）を受けて強制解除されねぇっ！！」

落ち着いた一夏は眉を潜め、オータムを見た。装甲脚の銃口が一夏の額にあたる。

流石に零距離から放たれてしまえば、シールドバリアどころか絶対防御は起動しない。

「何を、言ってる……。」

少しだけ落ち着いたのか、少しだけ噎せながら一夏は聞き返す。

その事にオータムは目を見開き、装甲脚の銃口で一夏の額を強く押した。

「っ！　剥離剤ってのわ……。」

『ＩＳの強制解除をさせる兵器で。　一度ＩＳ使用させると、そのＩＳには体制がついてしまい、二度と使用できなくなる欠陥兵器。』

「「っ！？」」

オータムの言葉に、別の声が被さる。

その声は、一夏とオータムが戦い始める前に聞いた声だった。

唇を歪ませ、オータムは周囲を見る。

『簡単にいえば、敵からＩＳを奪う事もできる兵器というべきかな？』

その言葉に一夏は、オータムが何をしたかったのか理解した。

「コソコソ隠れてんじゃぇ！」

「はぁっ！」

その声とともに、フォビドゥンブルーはグーンにトライデントを突き刺す。

そして爆発に巻き込まれないよう、トライデントを引き抜くためグーンを蹴っりとばした。

既に四機いたグーンは三機水中で爆発し、最後の一機もフォビドゥンブルーのトライデントにより、火花を散らしながら水中を漂っている。

『ソナー、及びレーダーに反応なし。』

シェナスの声が、グーンの爆発と共に聞こえる。

『任務終了。　……お疲れ様です、帰還してください。』

「了解。　直ちに帰還する。」

そう言うと、フォビドゥンブルーは反転し学園の方を向く。

そして何かに気がついたのか、水面を見た。

「……熱門はまだ上にあるが、友軍機か？」

モニターには、上空に熱門があることを示していた。

『はい。　機体識別はＺＧＭＦ－Ｘ１０ＡとＩＭＳ－００です。』

フラウはその言葉に、目を見開いた。

『私達のトップに立っている御方ですね。　あと、隊長のご両親です。』

３５１　白式と剥離剤（後書き）

とりあえず、原作と違い剥離剤は白式には効かないようにしました。

ＩＳ学園内に束がいる時点で、アレですがブレイクｗ

もちろん、剥離剤が効かない原因も束。

あと、ＩＭＳの形式番号を決めました。

ＩＭＳ－００　レイジングハート
ＩＭＳ－０１　白騎士
ＩＭＳ－０２　ＧＡＴ－Ｘ１０５　ストライク
ＩＭＳ－０３　ＧＡＴ－Ｘ１０５Ｅ　ストライクノワール
ＩＭＳ－０４　ＧＡＴ－Ｘ１０２（２）　デュエル

なんか、形式番号が二つあっても気のせい。

ＩＭＳとしては前の方なんだけど、本来は後者の方。

フリーダムやプロヴィネンスはＩＭＳではないため、この形式番号にはとらわれていません。

ついでにムラサメもありましたが、ＩＳのため形式番号にＩＭＳはつきません。

という感じで、きまった～ｗ

もしかしたら、前にも似たようなこと言ったかもねｗｗｗ

３５２　声の主は余裕そうに微笑む（前書き）

一夏編も中盤あたり。

援軍が来ますよ～。

Ｐ３

352　声の主は余裕そうに微笑む

『なら出てきてあげる。』

オータムの言葉に返答すように声が響く。

しかし、声の主が姿が現れることはなかった。

「ちっ！」

舌打ちし、オータムは周囲を見る。

だが、誰もいない。

アラクネのレーダーを使用し確認するが、一夏の白式とオータムのアラクネの反応しか出なかった。

声は至近距離から聞こえる。

音声機器を使用したのではなく、確実に生の声だった。

しかし、周囲には誰もいない。

オータムはその事に焦る。

≪警告≫

周囲を見ていたオータムは、アラクネが表示したその文字に目を見開いた。

≪エネルギーが漏出中≫

「っ！？」

その文字にオータムは動揺し、装甲脚の数本を白式から踏み外す。

そのチャンスを逃さず、一夏はアラクネを押し拘束から脱出した。

（一体、どうなってるんだ……？）

そう思いながら、一夏はオータムを見る。

白式に押されたことにより、アラクネは若干バランスを崩す。

三本を白式に斬られ、数本を白式の上に乗っけていたのだ。

バランスを崩さない訳がない。

「一夏君っ！」

そんな中、楯無が更衣室に辿り着く。

少しだけ息を切らし、楯無は更衣室の中の状況を見る。

「……どういう事？」

そして一言、楯無はそう言って呆然とした。

想像していたシナリオと違ったのか、楯無は妙に間抜けな顔をして

いる。

今来たばかりの楯無の目には、敵であるオータムが中破し意味不明な事が起きているとしか理解できない。

「ぐおらっぁぁっ！！」

そんな中、オータムはそう叫びながら自暴自棄にも見えるような砲撃を開始した。

ターゲットロックしておらず、砲弾やレーザーが更衣室にまき散らさせる。

『まるで駄々っ子ね……。』

そう言いながら、オータムをあざ笑う。

楯無はその声に、聞き覚えがあった。

≪エネルギー漏出停止≫

アラクネがそうモニターで報告する。

エネルギーが露出したせいで、アラクネはエンプティー近くまで消耗させられた。

その事にオータムは目を釣り上げ、周囲を再度見る。

『じゃ、顔合わせしようか……。』

そう言うと、一夏とオータムの中間辺の空間が歪む。

そしてそこから、蜂のようなカラーをした機体が現れる。

「なっ、そこに熱源はなかったぞっ！！」

オータムは現れた機体を見て、目を見開きレーダーを見る。

しかしレーダは、先ほどとは違い確実に機体の熱源を捉えていた。

その事に、オータムは目を見開く。

「……クロー、ディヌ……、サミナード……。」

楯無が唖然とし、現れたＩＳに乗っている人物の名を呟いた。

全員が目を見開き、クローディヌとＩＳグレイプニールを見る。

グレイプニールのウイングの先端が曲がり、脇下から前方に出ている。

更にそのウイングから、片刃のブレードが突き出ていた。

「……後部大型ブレード、マガノイクタチ収納……。」

その声が響くと、グレイプニールのウイングから伸びる刃がウイングに収納され、ウイング本体が回転し本来あるべき位置に止まる。

クローディヌ意外、唖然とし声も出せないでいた。

「では改めて……。」

そう言うと、スカートはないがスカートを摘むような仕草をし会釈をする。

その姿はドレスを着ていれば、かなり様になっていただろう。

しかし纏っているものは、無骨な大きな装甲。

ドレスのような優雅さは無い。

「フランス代表候補性シャルル・デュノアに代わり、代表候補制となったクローディヌ・サミナード……。　よろしく、亡国企業さん。」

そう言ってクローディヌは、染めた金の髪を揺らしオータムを見る。

会釈を終え、クローディヌは余裕そうな微笑みをオータムに見せた。

３５２　声の主は余裕そうに微笑む（後書き）

ということで、クローディヌ登場。

今まで何処にいたのかって？

結構出た気もしますけどね～ｗｗｗ

さて、クローディヌはどう出るかな？

３５３　クローディヌの言葉と亡国企業（前書き）

サブタイトルよ。

どうしよう。

Ｐ３

353　クローディヌの言葉と亡国企業

「ちっ！」

オータムは舌打ちし、残った装甲脚でクローディヌを狙う。

しかし、クローディヌは焦らない。

涼しい顔でオータムを見続ける。

クローディヌが乗る機体、グレイプニールの手には高攻防複合システム、ファントムが握られていた。

だが、クローディヌはファントムを構えない。

「……落ち着いてくれない？」

そう言いながら、クローディヌは微笑む。

「出方次第では、私は貴方の味方に付くかもしれないんだから。」

「なっ！」

クローディヌの言葉は、オータムに衝撃を与えた。

一夏と楯無は少しばかり混乱しているのか、理解できてない。

そんな中、クローディヌは口を開く。

「今の貴方は、籠の中の鳥と同じ……。　逃げるために飛ぼうにも、籠が邪魔して飛べない状況と同じ……。」

事実、アラクネが撃ったレーザーで更衣室は半壊しているが、外に出れるような道はない。

更に装甲脚三本を白式に斬られて、若干機動性が落ちている。

そしてオータムの前には第三世代機と、その登場者が三人いた。

「だから、取引しない？」

「取引だとぉ？」

オータムは訝しげにクローディヌを見る。

「ちょ、何言ってるのっ！？」

それとは逆に、楯無は焦っていた。

しかし、クローディヌは楯無を無視し喋り続ける。

「……私の想像が間違ってなかったら、亡国企業は老化防止に関する薬作ってる……。　違う？」

オータムは少し考え、思い出したのか苦笑する。

そのまま少しばかり、クローディヌを観察し口を開く。

「く、くっくっく、あっはっはっは！　ああ、あるぜっ！！」

その言葉に、クローディヌは目を細める。

「それとココからの離脱。　どう、悪い取引じゃないとは思うけど？」

その言葉に、一夏と楯無は驚愕した。

プロヴィネンスの大型ビームライフルが、ラウラの頭を狙う。

それを阻止するため、シャルロットは急いで最善な方法を考える。

「当たれっ！！」

そして思いついたのか、すぐさまプロヴィネンスに向かってビームライフルを撃つ。

しかし、プロヴィネンスが当たるわけもなく、横に逸れることで回避した。

（ドラグーンを使う暇を与えないっ！！）

ストライクは、回避したプロヴィネンスをも狙い打つ。

狙って撃ってはいないが、ストライクが放ったビームはプロヴィネンスへまっすぐ伸びていく。

プロヴィネンスは、自身に迫るビームを複合シールドで防いだ。

しかし、ストライクの攻撃は止まらない。

もう一回ビームライフルを撃ち、プロヴィネンスに向けバーニアとスラスターを最大展開し、かなりの速度で接近する。

プロヴィネンスはドラグーンを展開しようとするが、その前にストライクが再度ビームライフルを撃つ。

「くっ！」

流石にビームを受けながらドラグーンを展開することはできず、仕方なしにプロヴィネンスは複合シールドで防ぎながら後退した。

だが、ストライクはビームライフルを構えながらも、距離を話すことはしない。

むしろ、距離を詰めていた。

「はぁぁっ！！」

「くっ！」

ストライクの猛攻にプロヴィネンスは、大型ビームライフルを撃とうとする。

しかし撃とうとした瞬間、ビームライフルにストライクのビームライフルから放たれたビームが貫通した。

すぐさま手放し爆発から逃れ、手に再び戻そうとする。

「まだまだっ！！」

だが、ストライクの攻撃は止まない。

右手に持っていたビームライフルを、シールドを装備している左手に持ち替え、ビームサーベルで近接格闘を仕掛ける。

プロヴィネンスは、振り下ろしたビームサーベルを複合シールドで防ごうとするが、その前に複合シールドをもった左腕を切り落とされた。

３５３　クローディヌの言葉と亡国企業（後書き）

あ～。

予約投稿で９日ほどずれているので、今更な感じですが……。

常に本作品は平常運転で、更新いたします。

９日後がどうなってるかわからないけど……（－＿－；）

ＴＰＰで少しばかりかく気が削がれていますが、平常運転ですｗｗｗ

この作品だけは、平常運転ですっ！！

何があっても、書き続けてやるｗｗｗ

……暇だな～。

３５４　フェイズシフトダウン（前書き）

少し疲れてきたぉｗ

一次小説でも書こうかな～。

そう思ったこの日、Ｐ３

３５４　フェイズシフトダウン

ストライクはそのまま、プロヴィネンスを斬り続ける。

しかし、シャルロットは気が付いてはいなかった。

ビームサーベルの刀身が消えかけていることに。

「しまったっ！？」

プロヴィネンスに向けてビームサーベルを振り、ようやくシャルロットは気がついた。

機体の色が、灰色に変わっていることに。

「フッ……。」

ＰＳ装甲に回している電力が切れたのだ。

その為、ビーム兵器に使用しているエネルギーも切れた。

ビームライフルを連射し、ビームサーベルを展開し続けたのだ。

エネルギー切れを起こしても仕方がない。

そのストライクに向け、プロヴィネンスは大型ビームライフルを向ける。

「さようならだ、ストライク……。」

そう言い、プロヴィネンスは引き金にかける指へ力を込める。

シャルロットは目を見開き、その銃口に光が集まる光景をただ見ていた。

「ぐぅっ！？」

「っ！？」

しかし引き金が引かれる前に、銃口がシャルロットから外れた。

シャルロットはプロヴィネンスを見る。

ドラグーンをマウントしている背部装甲が、煙を出していた。

訳が分からず、ストライカーパックの変更をせずに、その光景を見つめ続ける。

「……死ぬのは貴様だけだ、プロヴィネンス。」

声が響き、プロヴィネンスは声がした方を向く。

しかし、その瞬間にプロヴィネンスに何かが巻き付いた。

唖然としながら、シャルロットはその光景を見つめる。

「くっ！　貴様レーゲンかっ！！」

その言葉に、プロヴィネンスの背後に黒い何かが現れた。

「答える気はないなっ！」

そういった機体は手からワイヤーを伸ばし、そのワイヤーが意志をもったようにプロヴィネンスに絡みつく。

足先や背中からもワイヤーが伸びている。

シャルロットは、その機体を見て唖然とした。

ストライクと同様のデュアルアイに、角のようなV字アンテナ。

羽のようなバックパック。

その姿を、シャルロットは知っていた。

「……ストラ、イク……、ノワー、ル……。」

その機体は、ラウラが搭乗するストライクノワールだった。

シャルロットは、ラウラがいた場所を見る為に振り返る。

しかし、そこにはシュヴァルツェア・レーゲンを纏ったラウラの姿はいなかった。

再度、プロヴィネンスの方を見る。

プロヴィネンスはノワールのワイヤーを振りほどこうとするが、振りほどけない。

腰のドラグーンをワイヤーで縛り、背部のドラグーンさえ雁字搦めに絡ませ使用を不可能にしていた。

腕や足もワイヤーで纏めている。

蛇のようにワイヤーが動き、プロヴィネンスを固定した。

「これで、貴様の攻撃オプションはあらかた封じたぞ……。」

そう言って、ノワールはプロヴィネンスの背部大型バックパックに膝を付く。

「やはり貴様、レーゲンッ！！」

プロヴィネンスは後頭部に付いている、モニターでノワールの姿を確認した。

「ストライクの登場者。　今のうちに換装しておけ。」

「へっ？」

その言葉に、シャルロットは唖然とし状況を把握する。

灰色の胸部と腕を見て、ＰＳダウンしたことに気がついた。

「わっ、わわっ！！」

その瞬間、エールストライカーにエネルギーが完全に回らなくなり、ストライクは地表に落ちる。

先程まで残ったエネルギーで、なんとかスラスターを吹かし浮遊できていた状態なのだ。

落ちても仕方がない。

シャルロットは瞬間的にソードストライカーを展開し、ＰＳ装甲に電力を供給する。

機体に色が付き始めた。

それと同時に、シャルロットはバーニアで姿勢制御を直し、地表に着地する。

「……ふぅ。」

小さな安堵の息を漏らし、ストライクは立ち上がった。

３５４　フェイズシフトダウン（後書き）

仕事で疲れて、毎日書く日々。

どうにかして欲しい。

そんな私です。

とりあえず、ＰＳ装甲がダウンしても少しは動くから、エールストライカーに少しは回せるでしょｗ

という感じ（´・Д・）＝３

３５５　鈴と箒の前に中尉（前書き）

意味わからん……。

サブタイトル、どうしてこうなった。

Ｐ３

３５５　鈴と箒の前に中尉

セシリアはフォビドゥンと、空でダンスをしていた。

その言葉が正しいとは思わないが、セシリア的には戦闘と書いてワルツと読むだろう。

フォビドゥンがビームを放ち、セシリアが回避する。

セシリアがレーザーを撃てば、フォビドゥンが回避。

それを永遠に続けていた。

曲がるビームを先読みし、回避しながら反撃する。

おそらく、代表候補性の中でもセシリアしかできないことだろう。

「っ！」

フォビドゥンの方へ反転しながら、セシリアはスターライトｍｋＩＩＩを構える。

対するフォビドゥンも、反転しながら鎌を構えた。

そして互いに接近し、構えている武器に力を込める。

「はぁぁっ！！」

叫びながらも、セシリアは鎌を避けスターライトｍｋＩＩＩをフォ

ビドゥンに向けて引き金を引く。

しかし、流石に同じことを繰り返しているせいか、フォビドゥンは簡単にスターライトｍｋＩＩＩから放たれる射撃を回避した。

鈴は焦っていた。

ローズは一向に動こうとしない。

しかし、戦況は徐々に拡大していく。

何もできない状況に、鈴は焦っていたのだ。

もちろん箒も同じ気持ちである。

一夏のことが気になっているせいで、妙に落ち着いていない。

今にも駆け出しそうな雰囲気だが、ローズがそれを抑えていた。

「……。」

歯を噛み締めながら、鈴はローズを見ていた。

そんな時、建物の入口からメタルブラックの機体が入って来る。

鈴と箒は唖然としながら、その機体を見つめた。

その機体に乗っている少女は、二人を見付け近づいてくる。

「シュヴァルツェ・ハーゼ所属、フィアネ・A（アマハラ）・ペルーシャ中尉です。」

機体に乗りながらも、敬礼し名乗る少女。

箒は唖然となりながらも、鈴だけは違った。

「中国代表候補性、凰鈴音です。」

敬礼しながら、名乗り返す。

鈴が中国にいた頃の事だが、軍隊に対する応答の仕方や目上の者に対する応じ方を教えこまされていた。

だからこそ、敬礼し返答したのだ。

箒は唖然としながら、その光景を見ていた。

「……で、なんのようでしょうか？」

丁寧に話す鈴に、箒は一瞬だけ笑いそうになる。

だが、フィアネはそんな鈴を手で制し、箒を見た。

「篠ノ之箒准尉。　自分だけ名乗らないのは、どういうことですか？」

「……へっ？」

箒は自分が言われたことに、唖然としていた。

「え、准……、尉？」

唖然としながら、フィアネに言われた事をを聞き返す。

その言葉に、フィアネは頷く。

鈴は眉を曲げながら、フィアネに問うために口を開いた。

「ドイツ軍は第四世代を手に入れるために、箒の事をそう言うのかしら？」

皮肉を込めた言葉は、フィアネを唖然とさせた。

世界の情報として、所属篠ノ之の成立とドイツ軍の解体は表立っていない。

つまり鈴は、シュヴァルツェ・ハーゼに所属しているフィアネが言った言葉が、ドイツ軍の独断行動。

強引にでも第四世代を奪おうとしている行為だと思っていた。

「……あ、そういう事ですか。」

フィアネは納得したのか、再度姿勢を正し敬礼をする。

「中立軍篠ノ之、シュヴァルツェ・ハーゼ部隊所属。　フィアネ・A・ペルーシャ中尉です。」

その言葉に、鈴と箒は目を点にした。

「……と言えば、良かったですか？」

少し怒りながらも、フィアネはそう言った。

唖然としながらも、鈴はフィアネの言葉を整理する。

そして、理解したのか表情が変わった。

「……もしかして、シュヴァルツェ・ハーゼはドイツ軍から、篠ノ之博士達の下に移動した……、とか？」

その言葉に、箒は不思議そうな顔をした。

どうやら、箒は意味を理解してないようだ。

フィアネは「はい、そのとおりです。」と言って、肯定した。

３５５　鈴と箒の前に中尉（後書き）

とりあえず、サブキャラ～。

オリジナルのね……。

気分悪く、何も書く気が起きない……。

ストレスが貯まる……。

そん日々です。

３５６　災厄の霧は大きな巨人へ（前書き）

すみません。

一次小説を書いていたら、こちらを書く気が消えてきて……。

もう、何を書いているかでたらめです、Ｐ３

３５６　災厄の霧は大きな巨人へ

「どういうことだ？」

箒がそう言いうと、鈴は呆れたのかキレたのか分からない顔をする。

「いい。　シュヴァルツェ・ハーゼはドイツ軍の特殊部隊。　アラスカ条約に引っかかる間際のギリギリなラインを保っている、ドイツのＩＳ部隊なの。　それ故に、ドイツはＩＳ以外の軍備が十分ではないのは分かるわね？」

事実アラスカ条約、正式名称ＩＳ運用協定で軍事転用が可能になったＩＳを規制する動きがあった。

今現在ＩＳは競技用として有名だが、競技用になる前には軍備増強路線の項目に入っていたのだ。

シールドバリアという、エネルギーが切れない限り展開し続けるシールド。

それに、戦車以上の武器を搭載することができる火力。

これらを満たすものが、軍隊に取り入れられる可能性がないと思うだろうか。

だからこそ、ＩＳを軍用にすることに制限をかけた。

自国の戦力が大きければ多いほど、ＩＳを国家戦力に加える事はで

きない。

なら、ＩＳを国家戦力に加えるためにはどうすればいいか。

答えは簡単だ。

自国の戦力を減らしてしまえばいい。

男達を解雇し自国の戦力を減らし、ＩＳが使える女達を投入する。

これが、女尊男卑の始まりだっただろう。

「だけどもし、自国を守っているＩＳが消えたらどうなると思う？」

「っ。」

箒が鈴の言葉に息を飲んだ。

「……防衛手段が、大幅に消える……。」

「そういうこと……。　私が驚いていた意味わかった？」

「ああ……。」

「さらに言うと、シュヴァルツェ・ハーゼが篠ノ之博士の下についた為、世界情勢がどう動くかわからないほど不安定になったのよ……。」

事実、篠ノ之夫妻が軍を取り込んだ時点で、世界は篠ノ之夫妻が世界支配を企んでいると勘違いされてしまう。

鈴の説明と事実が合っていたり合ってなかったりし、フィアネは苦笑してしまった。

「……とりあえず、現状を説明しますがよろしいですね？」

苦笑しつつも、すぐにＩＳのモニターを起動させる。

そこには、ＩＳ学園全体のマップが映し出されていた。

「現在、災厄が学園各所に出現……。　海中、上空などにも出現しており、所属篠ノ之の元……、シュヴァルツェ・ハーゼ部隊がこれの殲滅作戦を行なっています。」

黒い霧がようやく形を作り始めた。

「長かったね……。」

溜息を付きながら、リリィはそれを見た。

空一面を覆いそうな黒い霧が、一箇所に集まる。

（ちょっと、まずいかな……？）

霧の多さは災厄の機体の大きさを指す為に、リリィは束が安全かどうか悩んだ。

リリィは当初、辺り一面を漂う霧が多くの災厄を作ると思っていた。

それならば、まだ対処の仕様がある。

だが大きい災厄とうことは、今までの災厄とは違うということになる。

「……。」

「リリィちゃん？」

束がリリィを呼ぶ。

しかし、リリィは考え込んだまま返事をしない。

「お～い、リリィ、ちゃ～ん～？」

少しばかり気を引こうと、言葉をおかしくしてみたが効果なし。

リリィが反応しないことに、束は頬を膨らませる。

その間にも、災厄は形を作っていく。

フリーダムよりも何倍も大きな影。

人の形をした６ｍを超える巨人。

だが頭には、大きな円形上の何かを被っている。

そこから伸びる、四つの砲身らしきものがＩＳ学園がある島に向けられた。

「……なるほど、これはリリィちゃんが黙っちゃうほど危険なんだね……。」

その言葉に、リリィは反応しなかった。

「……レイジングハート。　災厄化するから、サポートよろしくね～☆」

そう言いながらフリーダムに抱きつき、束はその身をフリーダムに溶け込ませていく。

「……え？」

束の行動に気がついたのか、リリィは唖然としたような声をだした。

３５６　災厄の霧は大きな巨人へ（後書き）

もう適当にも、程がある……。

いや～、久々に書いたら「……何考えて書いてたんだっけ？」でしたからｗｗｗ

もうｗ

めんどくさい事この上ないｗｗｗ

そろそろ、連続更新が切れるのかな？

（´ー、）フゥー・・・

まぁ、それでもいいかな？

３５７　破壊に特化した巨大な災厄（前書き）

肩が痛いｗ

そういう日なのかな？

全く違います、Ｐ３

３５７　破壊に特化した巨大な災厄

束がフリーダムに溶け込んだのに気がつき、リリィは焦る。

これ以上、束が災厄化することは危険。

本当に災厄化してしまう、と言う危機感からかリリィは取り乱し始めた。

「リリィちゃん、来るよ！」

「っ！！」

束の言葉に、リリィは意識を災厄に向ける。

巨大なその姿は、フリーダムを押し潰してしまいそうな威圧感を持っていた。

黒い霧が固定化し、形をあらわにする。

灰色のような黒系でカラーリングされた機体が、フリーダムの前に現れた。

「……デストロイ。」

≪ＧＦＡＳ－Ｘ１　デストロイ≫

通常の災厄より大きく、フリーダム以上の火力を有している機体だ。

災厄としてはクルーゼと同等の危険なモノで、大国を一夜にして完全に火の海に変えるほど。

それが、ＩＳ学園海上に存在していた。

（厄介なものをっ！！）

そう思いながらフリーダムは、ビームライフルで牽制射撃を始める。

しかしビームはデストロイに当たる前に、光の楯に阻まれ四散した。

「陽電子リフレクター……。」

苦虫を噛み潰したような声で、束は呟いた。

「あの砲身が、ＩＳ学園に撃たれたらおしまい……。　束、全力で行く……。」

「了解！！」

不安を抱きながら、リリィは覚悟を決める。

その不安を束にも伝わり、束は静かに言葉を続けた。

「……私が災厄化しないで、皆を守る方法はないよ……。」

「束……。」

「たしかに、リリィちゃんだけでも勝てるかもしれない。　だけど、それは絶対じゃない……。　勝てても砲撃を撃たれたら、後悔して

しまう……。　……これは、時間との勝負なんだよ。」

リリィは束の言葉に悲しくなる。

カタログスペックとリリィの思考を読んでか、束はデストロイの驚異を知った。

事実、束が言っていることは正しい。

「私はリリィちゃんと同じ存在になっても良い。　……あそこには、私達に大切な存在がいるんだから……。」

その言葉とともに、千冬や箒、一夏、ラウラ、シャルロットの顔が二人の頭に浮かんだ。

「……。」

「だから、リリィちゃん。」

「……分かった、よ。」

束を災厄化させない為に、今まで考えて動いてきた。

束を死なせないために、リリィは動いてきた。

しかし結局は守る為に、束をも巻き込んでしまった事に、リリィは悔やむ。

デストロイが、円盤周囲を光らせ始める。

「……無茶かもしれない、……でも。」

そう言って、フリーダムが上昇し始めた。

ビームライフルの引き金を引き、デストロイに陽電子リフレクターを張らせた状態を維持させる。

「付き合ってくれっ！！」

「何処までもっ！！」

その言葉と共に、ビームライフルを大きく上に投げデストロイに、急加速した。

「とりあえず、篠ノ之博士からこちらを預かっております。」

フィアネがそう言って、小さな大剣のネックレスを箒と鈴に渡した。

不思議そうに、二人は受け取る。

大剣の形は基本同じだが、カラーは違う。

箒は赤で、鈴は青だった。

ＩＳの手の上で、大剣は存在を誇示している。

「これ、は？」

箒が唖然となりながらも、フィアネに聞く。

「こちらは、対ＰＳ装甲機体戦闘用に開発された武器です。」

その言葉に、鈴は唖然とした。

「……え、対ＰＳ装甲機体用？」

「はい。」

平然と答えるが、事実それは凄いことだ。

ＰＳ装甲は物理攻撃を無効化するということは、既に国際ＩＳ委員会も知っているらしく、災厄同様に各国に広まっている。

自国の防衛のために対兵器も開発されているが、難航しているようだ。

二人はネックレスのような大剣を見て、唖然とした。

「名称はタクティカルアームズですので、忘れないように……。」

フィアネはそう言って、武器の名前を言った。

「……タクティカル。」

「アームズ……。」

それを二人は反復した。

３５７　破壊に特化した巨大な災厄（後書き）

本当はプロヴィデンス撃破後に、デストロイを出す予定でした。

ですが、リリィと束が空気になってきたため、仕方なく登場。

災厄編まで、かけるといいな～。

３５８　零落日夜・零（前書き）

ユッキー選んで！　私を選んで「生き延びる」か、６ｔｈを選んで「死ぬ」か……。

ということで、未来日記を視聴中。

Ｐ３

３５８　零落白夜・零

白騎士とレイダーが交差する。

「……。」

千冬は眉を潜めながら、雪片・真打を持つ手を見つける。

何処も異常がないことを理解しているのか、ゆっくりと立ち上がり単一仕様能力を解除した。

発生させられたビームサーベルが消え、左右に展開していた雪片が元に戻っていく。

左右に分かれた刃が音を立て閉じた瞬間に、白騎士の後方に抜けたレイダーが音を立てて崩れていった。

雪片が刃を合わせたのに対し、レイダーはその逆。

左右にその体を裂かれた。

「上手く行ったか……。」

千冬がそう言いながら、モニターでレイダーを確認した。

丁度黒い霧となって、消えていくレイダーが画面に映る。

零落白夜は全ＩＳの能力中、特殊すぎる能力だ。

エネルギー刃が生み出す破壊力に、対象のエネルギーを全て消滅させる。

千冬自身過去に使っていた、暮桜にも同じ能力が搭載されていた。

だがこの白騎士の単一仕様能力は、零落白夜・零。

零落白夜と似ているようで、全く違う能力だった。

「……しかし、全くわからないな……。」

そう言いながら、刃が閉じた雪片を後腰にマウントした。

白騎士の能力を千冬は知らない。

知っているのは、開発者であるリリィと束だけだ。

千冬が「全くわからない。」と言っても、おかしくはない。

白騎士の単一仕様能力は、フリーダムとレイジングハートの天敵に近いのだ。

零落白夜の能力がエネルギーの消滅だが、零落白夜・零の能力は触れた部分の完全消滅である。

それが、どんな絶対防御だろうが、ダイヤモンドのような鉱石だろうが、完全に完全に消滅させる。

それは、雪片以上に危険な能力だ。

もちろん一部災厄には効かないだろうが、リリィが災厄になる前にＰＳ装甲対策として作り上げた。

実験で現存している破壊に手間がかかる物質を、一瞬で完全消滅させた事がある。

全てを無に帰してしまう零落白夜。

だから、零落白夜・零。

零落白夜を超えた、零落白夜が白騎士の単一仕様能力だった。

レイダーが完全消滅したことを確認すると、白騎士は一夏がいるであろう場所に向かいはじめる。

ホバリングのように、デュエルは地面を滑る。

それを追う様に、地面が爆発していく。

もちろんそれは、カラミティーがバズーカーを撃っているため起きている現象だ。

木々を盾にしたり、スラスターを吹かし避け続ける。

「せやっ！！」

爆発を回避しきり、ディエルの右手が左肩のアーマーに伸ばされる。

アーマーが開き、そこに装備されていたＭｋ３１５スティレット投擲噴進対装甲貫入弾を取り、カラミティーに投げつけた。

当たり前のように飛ぶことで爆発を回避し、バズーカーをデュエルへ向ける。

しかしバズーカーを向けた瞬間、椀部から伸びるバレル先に付いているＭ７Ｇ２リトラクタブルビームガンから放たれたビームによって、バズーカーは貫かれた。

カラミティーがバズーカーを捨てようとするが、それより先にバズーカーに装填されていた弾頭が爆発し、ストックされていた弾頭に誘爆する。

空中でカラミティーは、自身がもっていだ武器により大爆発を起こした。

「結構扱いやすい……。」

クラリッサはそう言いながら、デュエルを動かす。

機体各所に装備されたアーマーが重そうに見えるが、動きはアーマー各部に配置されたスラスターでカバーしている。

アーマーを装備してないより、起動性能は上がっているだろう。

「ん……。」

何かに気がつき、すぐさまその場から離れる。

次の瞬間には、爆炎から三条の火線が伸びた。

それとともに、カラミティーが爆炎の外に出てくる。

無傷とは言わないが、戦闘続行できる程度だ。

「仕方ないか……。」

クラリッサは呟くと、再度スラスターを吹かした。

358　零落日夜・零（後書き）

ヤンデレがいないね……。

仕方ない、作るかｗｗｗｗｗ

もち冗談だけどねｗ

我妻由乃が忘れられない……。

インパクト強杉ｗｗｗｗｗｗ

３５９　デュエルＶＳカラミティ（前書き）

適当にかけるって、もう投げやり？

そんな日です。

それよりも少年っ！！

３５９話目だが、３６５部目でもあるんだっ！！

これだけで、一年戦えるぞっ！！

そんなこんなで、Ｐ３

359　デュエルVSカラミティ

カラミティが着地すると同時に、背部の12．5mm2連装高エネルギー長射程ビーム砲シュラークが火線を伸ばす。

二つの光条がデュエルに伸びるが、右肩アーマ部に装備されたシールドが遮る。

楯で防ぎながらも、左手でビームガンを撃つ。

照準を付けてないからか、カラミティには当たらないが、砲撃を中断させることには成功した。

「っ！！」

すぐさまデュエルはカラミティに詰め寄る。

右スネのアーマー部からビームサーベルを引き抜き、斬りかかった。

しかしカラミティには、防御用にシールドも装備されている。

簡単に斬撃は受け流された。

バーニアを吹かし、カラミティは大きく後退する。

自身が得意とする距離まで、逃げようとしたのだ。

「甘いっ！」

だがクラリッサは、脚部スラスターを使いさらに距離を詰める。

ビームガンを手放し、残るビームサーベルを引き抜く。

距離が近いせいで、カラミティはシュラークを撃つことができない。

「はぁぁっ！」

単調に振られたビームサーベルだが、カラミティのシールドを保持している左腕を根元から斬り裂いていく。

それでもカラミティは、デュエルから距離を離そうとする。

胸部に装備される５８ｍｍ複列位相エネルギー砲スキュラを溜め、デュエルに砲身を向けた。

砲身に光が集まる。

「っぁ！！」

だがその砲身に、ビームサーベルが突き刺さった。

もちろんデュエルのものだ。

更に砲身内部に溜められていたエネルギーが、発射直前だったために爆発となる。

結果カラミティは、大爆発を起こして散った。

「……ここは？」

ラウラは真っ暗な周囲を見渡す。

ストライクやプロヴィネンスの姿が見えず、暗闇にラウラだけしかいない。

通常なら、このような状況では取り乱すだろう。

だが、ラウラは取り乱さなかった。

冷静に周りを見渡す。

「気がついたか、王と兎の血を引く者よ……。」

「っ！？」

その言葉に、ラウラは目を見開く。

声はラウラを包み込むように発せられ、声の主が何処にいるかわからない。

周囲を何度も見るが、ラウラの目には暗闇しか映らなかった。

「まぁ、落ち着け……。　別に取って食うわけでも、敵になるわけでもない……。」

その言葉に、ラウラは眉をひそめる。

「なら、姿を隠すな……。」

「……すまん、無理。」

ラウラの言葉を、声の主は即答した。

それも、無理と。

「私の体は当の昔に滅びた……。　お前と話せるのは、ここがお前の精神世界だからだ……。」

胡散臭そうな話だが、ラウラは静かに聞いた。

「ありがとう、と先に言わせてもらうぞ……。　王と共にまた戦わせてくれて……。」

その言葉にラウラは一瞬だけ、声の主が誰だかわかった気がした。

暗闇の向こうから、足音が聞こえる。

そしてラウラの目に、ラウラと似た女性の姿が映った。

だが小さくない。

成熟した女性だった。

「私がお前と巡り合ったのは、運命だったのかもしれないな。」

そう言うと、女性は苦笑した。

ラウラは唖然としながら、女性に向かい問いかける。

「お前……、シュヴァルツェア・レーゲンなの、か？」

「……そうだ。」

まさかの肯定にラウラは驚愕するどころか、さらに唖然とした。

自身の愛機と話しているのは、不思議な気分だろう。

しかしコアの深層には独自の意識があると、確認されているのだ。

なんの不思議もない。

現にリリィのフリーダムが、エンジェルダウン作戦時に言葉を発したのだ。

なんのおかしな部分はない。

「災厄であり、王に仕えていたシュヴァルツェア・レーゲン……。

と言っても、もはや過去だがな……。」

「……。」

「さて、そろそろストライクのパイロットのところに戻ってやれ…
…。」

359　デュエルVSカラミティ（後書き）

最近、1時辺に寝て、3時に起きてすぐ寝て、6時に起きる。

そんな毎日。

おかげで、くまができてますｗｗｗ

本当だよ。

いや、まじ、本当だってｗｗｗ

３６０　タクティカルアームズ（前書き）

ラウラから箒&鈴です。

空気から脱出かっ！？

Ｐ３

360　タクティカルアームズ

ラウラが気がついたときには、プロヴィネンスにワイヤーを絡ませて捕獲している時だった。

雁字搦めにしていたの為、少し驚いたとしても外れはしない。

「くっ！」

毒付きながらも、なんとか脱出しようとしているらしいが、逆に余計ワイヤーに絡まっていく。

（……どういう状態だ。）

唖然としながらも、状況を確認する。

まずはプロヴィネンスが有利な戦闘状況が一転し、ラウラ達が優勢になっていた。

さらにシュヴァルツェア・レーゲンから、ストライクノワールに機体が変更されている。

破損した箇所が見当たらず、戦闘前と同じ状態になっていた。

このことに、ラウラは驚愕してしまう。

当たり前だ。

気がついたら、訳の分からない状況に放り投げ出されたのだ。

驚愕してしまうのが普通だろう。

なぜこの状況になったのか、不思議でしょうがないはずだ。

プロヴィネンスの背に足をつけながら、ラウラは何もしゃべらずにいた。

紅椿に乗った箒がそう呟き、フィアネから受け取ったタクティカルアームズを展開する。

アクセサリーが光リを放ち、紅椿を超えるほどの大きさを持つ赤い大剣が手に収まっていた。

唖然としながらも、それを見る。

鈴も展開してのか、同じような青い大剣を持っていた。

「……たしか、射撃形態を取れるんだったな。」

そう言うと、大剣が刃を大きく開き形を変えていく。

どうやら射撃形態という言葉で、形状を変えたようだ。

左右の刃が半分に折りたたまれ、弓の様な形状を取る。

アローフォームと呼ばれる形状だ。

（……なるほどな。）

弓のような形状だが、引き金がついている。

鈴も唖然としながら、箒の姿を見た。

「では、行かせてもらう。」

変形したタクティカルアームズを持ち上げ、セシリアと交錯するフォビドゥンを狙う。

紅椿を作ったのがリリィと束の為か、箒の反応より早くフォビドゥンの予測移動場所をロックする。

弓の中心に、ビーム状の矢が生まれた。

「っ！！」

息を吐く声と共に、トリガーを引く。

ビームの矢がセシリアの真横を通り、フォビドゥンの鎌に当たる。

流石ビーム兵器というべきか、持ち手を破戒しニーズヘグの使用を

不可能にさせた。

それを鈴は見た瞬間、青いタクティカルアームズを見て口を開く。

「対ＰＳ装甲兵器、起動！」

実際にはＴＰ装甲なのだが、基本的には同じことだ。

箒の持つタクティカルアームズ同様に、刀身が左右に分かれる。

そしてそのまま、持ち手のジョイントから完全に分裂した。

唖然としながらも、刃が無くなりガトリングが剥き出しになったタクティカルアームズを背中にマウントする。

分裂した刃から何かが出た。

トンファーのようにも見えるが、後ろに長いのではなく前に長い。

刀身が前に出ていれば、そうなるだろう。

「これは……！」

鈴が驚きながら、刃を見る。

刃とは反対側、もう片方の刃と結合したところから、突然ビーム刃が展開されていたのだ。

普通に驚いてしまうだろう。

ただの大剣が変形し、ビームを放っているのだから。

ソードアームと呼ばれる、青いタクティカルアームズの形状だ。

対ＰＳ装甲機体用兵器とは、このことなのだとい事とに、鈴は理解した。

「行くわよ！」

そう言うと、フォビドゥンに向け鈴は甲龍を飛翔させた。

ソードアームを振りかざし、フォビドゥンに近づく。

しかしフォビドゥンは、鈴が持つ武器が危険だと理解しており後退する。

「鈴さんっ！？」

セシリアが驚きながらも、鈴を見る。

どちらかというと、鈴が使用しているタクティカルアームズを見ている、というのが正確だろう。

「お待たせ～！」

そう言いながらも、鈴はフォビドゥンを追った。

３６０　タクティカルアームズ（後書き）

本編よりアストレイやＭＳＶの武器が有能すぎる。

本当に。

セッシーにも、何か作ってあげないとね。

本当に、何か作ってあげないと……。

本作品は、一体（。Д。≡。Д。）ドコドコ？に向かっているんだろう。

３６１　薬の取引成立（前書き）

ＩＳは終了したという噂。

確かにそんな感じがするけど、アニメ化して未完で終わる……。

今までそんなのあったっけ？

そんな感じの日、Ｐ３

361　薬の取引成立

クローディヌはオータムを見ながら口を開く。

「交渉は成立したと受け取ってもいいのかな？」

淡々に言うが、これでもクローディヌはかなり無理をしている。

長期服用を押え節約し、カプセルを開いて長く持つ様に調整をしたのだ。

その分効き目が薄れており、外見は何時もの通りだが、内部では成長が少しづつ進行していた。

顔に出さず交渉する分、流石というべきなのだろう。

「だが、足りねぇな！」

「……。」

オータムがそう言い、クローディヌをおちょくるように言葉を続ける。

「取引したとして、薬は有限だァ。　無限じゃねェ！」

確かにそのとおりだろう。

薬というものは、泉のように湧いて出る物ではない。

作られなければ消費していく物だ。

「……何が望み？」

眉を潜めながら、クローディヌはオータムに聞く。

内心の怒りを見せず、冷静に言う様は営業に向いているだろう。

相変わらず一夏と楯無は、クローディヌの後ろ姿を見続けるしかできない。

「なかなか分かるじゃねえか。　……お前の後ろにいるヤツの機体だ。」

「なっ！！」

そう言いながら、オータムは一夏を指した。

正確には一夏の白式をだ。

「目的は、世界初の男が操縦するＩＳの強奪だぁ。　だが残念なことに、私の機体はこの有様……。」

「だから、かわりに私がやれと？」

「頭がいい奴は好きだぜぇ。」

「ふっ。」

言葉を交わし、クローディヌが目を閉じ笑う。

そして再度クローディヌが口を開き言い放った言葉に、一夏は驚愕した。

「……交渉成立。」

その言葉と共に、腕に兵装していたファントムから対戦闘用プラズマブレード、アルカディアスを展開し一夏に向けた。

もちろんそれとは別に、プラズマブレード下に装備されていた高威力重機関砲、デザート・スカイが火線を伸ばす。

流石、高攻防複合システムと呼ばれるだけはある。

一瞬にして、一夏達を追い込む。

「……くく、くあっはっはっは！！」

その光景を見てオータムは少し唖然としたが、すぐに高笑いをし始めた。

銃弾を避けようにも不意討ちに等しかったからか、白式はシールドバリアを展開した。

楯無はその体を貫かれていくが、撃ち抜かれすぐに形を崩す。

「はっはっは、なんだよっお前。　アイツらに恨みがあったのかぁっ？」

心底愉快だというように笑いながら、オータムはクローディヌに話

しかけた。

白騎士はセシリア達をよそに、建物内に入っていく。

（……無事でいろよ、一夏。）

優先順位としては生徒が先だろうが、今は所属篠ノ之として動いているためか、それとも血の繋がったものとしての情か、千冬は白式の反応を追って一夏のところに向かった。

無限に等しいエネルギーを生み出しているためか、白騎士の動きに衰えは見えない。

フォビドゥンに攻撃され破壊された建物を軽く見たあと、千冬はローズを見つけた。

「……一夏なら、更衣室だよ……。」

「助かる。」

意外とは思わないが、あっさり千冬が思っていたことを答えた。

「……よし、終わった。」

ローズはそう言うと、プロヴィネンスとなる。

もちろんローズが何をやっていたか知らない千冬は、ローズをよそに更衣室へ向かった。

光刀・暁でフォビドゥンの破壊した場所を切り裂き、通路に入る。

そのまま、スラスターで滑りながら廊下を移動した。

「え、白騎士？　え、声がブリュンヒルデ？　え、プロヴィネンス？　え、どういう事？」

どうやらシュヴァルツェ・ハーゼ内でも、情報を知っているものは限られているようだ。

それとも、フィアネだけ知らなかったのだろうか。

ともかく何も分かっていないフィアネをその場に残して、白騎士とプロヴィネンスは戦場に移動した。

３６１　薬の取引成立（後書き）

ちょくちょく出るローズ。

クローディヌ編（？）開始ｗ

楯無に出番はあるのか？

多分、あると思うんだけどね……。

どうしてこうなったんだろう……（―＿―；）

３６２　続く戦闘という名の歯車（前書き）

（、ぅω・、）ネムイ

ああ、そういえば、まだラウラが終わってなかった……。

Ｐ３

362　続く戦闘という名の歯車

「くっ！」

「一夏君下がってっ！！」

毒付く一夏に、楯無は叫ぶ。

もちろん意味が分からなくも、楯無の言葉に一夏は従った。

大きな背部バックパックが、白式を後退させる。

「……オータム。　来い……。」

「呼び捨てすんなっ！」

「死にたいの？」

一夏とオータムが戦っている間、オータムは自分の名前を言ったのだ。

ミラージュココロイドを使用し近くにいたクローディヌにとって、オータムが話した事は全て理解していた。

「……湿度が高くなってる。　……クリア・パッション。」

「ああ”？」

「アラクネのエネルギーだと、耐え切れない攻撃がくる。」

同等に戦ったからか、楯無の手は理解している。

オータムに注意を促すが、オータムが行動する前に更衣室は爆発した。

「っ！？　なんだ……。」

更衣室内部を完全に破壊するほどの揺れは、同じ建物内にいた千冬も感じ取る事ができた。

むしろ、感じなかった者は居ないだろう。

「……何が起きている。」

そう呟き、白騎士のバーニアとスラスターを完全展開させた。

嫌な予感が千冬を突き動かす。

建物内部には一夏がいる事が、千冬に嫌な予感を感じさせているのだろう。

壁に足を付け、スケートをするかのように移動する。

曲がるときも速度を落とさず、高機動のまま壁を蹴りまがりロスを減らす。

「邪魔だっ！」

何故か内部にいた、機体が白騎士に向けライフルを構える。

≪ＧＡＴ－０４　ウインダム≫

災厄だ。

それを確認し、千冬は瞬間的に雷刀・桜を手に取る。

そして撃たれるより先に、白騎士の雷刀・桜がライフルだけを切り裂いた。

一瞬で戦闘能力だけを奪い、後ろ腰にマウントしている雪片・真打の中距離射撃モードをオートで起動させる。

攻撃オプションが消えた災厄は一瞬だけ動きを止めたため、雪片・真打から放たれる砲撃に飲み込まれ消えて逝く。

その間、白騎士はウインダムへ振り返ることはしなかった。

白式の反応がある場所に向かうため、さらに速度を上げる。

デストロイが手を分離飛行させ、フリーダムに襲いかかる。

「くっ！」

手というよりも腕が飛んでおり、指先からはビームが放たれる。

バラエーナプラズマ収束ビーム砲並みの太さのビームが、空を切り裂きフリーダムに迫った。

しかし重力を感じさせない動きで、フリーダムは空中を動きビームを避け、バラエーナプラズマ収束ビームをデストロイに撃つ。

しかし陽電子リフレクター、シュナイドシュッツＳＸ１０２１によって阻まれた。

上昇しつつもレールガンも起動しフルバーストするが、それさえも陽電子リフレクターによって阻まれる結果になる。

「接近しようにも、この腕が……！」

束がそう呟き、フリーダムは右手に持ったビームライフルをデストロイの腕に向ける撃つ。

しかし腕にも陽電子リフレクターがついており、ルプスビームライイフルから放たれたビームを弾く。

「主要火器は封じたい、ねっ！」

リリィの叫びとともに、再度フルバーストが放たれた。

しかし結果は先ほどと同じで、陽電子リフレクターによって阻まれる。

相変わらずカブトガニのようなした形で、高エネルギー砲アウフプラール・ドライツェンは学園に向いていた。

「リリィちゃんなら、概念存在くらい簡単に消せると思うんだけど？」

「できなくはないけど、私はまだ完全に能力を取り戻したわけじゃないって……。」

そう言いながらも、デストロイの腕から伸びるビームを回避し続ける。

仕舞いには円盤周囲に設置されている砲門、熱プラズマ複合砲ネフェルティム５０３まで撃ち、周囲の海水を蒸発させていった。

362　続く戦闘という名の歯車（後書き）

たまに思うんだけど、本当にこんなので良いのか不安になってくる……（ー＿ー；）

あと、貯金がやばい。

完全にやばいということではなく、将来的にヤバイという状況。

職を増やすべきか、別の高収入の仕事に転職するか……。

最近、結構頭を使います……。

３６３　爆発の向こうから（前書き）

とりあえず、一夏を終わらせてから、セシリアを終わらせ、千冬で一夏共々終わらせ……。

ラウラでリリィ。

こんな感じで進むかな、Ｐ３

３６３　爆発の向こうから

「……。」

唖然としながら一夏は、爆発し煙と炎が充満する更衣室を見た。

「大丈夫っ！？」

楯無が近づいてくる。

ミステリアス・レイディを装備しているところを見て、ようやく一夏は爆発の正体がクリア・パッションだということに気がついた。

「気を付けてね。　……亡国企業が他にもいるかもしれないから。」

一瞬だけ、なぜクローディヌをも巻き込んだのか怒りたかったが、亡国企業という名を言った楯無の顔を見て言えなくなる。

≪≪危険　危険≫≫

周囲を警戒していた時、二人の機体にアラートが表示される。

一夏はそれを見た瞬間、本能的に危険を感じていた。

≪エネルギー漏出中　残量５２４≫

≪エネルギー漏出中　残りエネルギー１０２≫

突如として漏出し始めたことに、二人は驚いた。

ミステリアス・レイディの方が戦闘をしてないため、ほぼエネルギーは残ってるが、白式は完全にエンプティーに等しい。

徐々にエネルギーが減っていく。

ミステリアス・レイディの残量は３５９。

それに対し白式は、２１。

どうやら同じ量を漏出しているわけではないようだ。

おそらく、コップにはったヒビが上にあるために、漏れないのと同じ理屈だろう。

「何が起こってるのっ！？」

楯無が混乱し始める。

「戦場で混乱とはぁ、水分余裕だなぁ……。」

「「っ！？」」

爆発が起こる更衣室から、大きな人影が向かってくる。

八つある装甲脚を、一夏によって五つにまで減らされたアラクネ。

弱者を見下す様に笑み、オータムは爆発の中から出てきた。

「じゃぁ、先に死ぬのはどっちだぁ？」

そう言いながら装甲脚の二つを、一夏と楯無に向ける。

白式のエネルギーは２１で停滞し、シールドバリアが起動するかどうかさえ危うい。

更に絶対防御もエネルギーを使用して動くものであり、エネルギーがなければ絶対防御さえ起動しない。

絶対防御とは、競技中に誤ってシールドを貫通した攻撃を防ぐためにあるものなのだから。

だが今は競技中ではない、実戦だ。

「んじゃぁ、死にな。」

その言葉と共に、一夏に向けレーザーが放たれる。

「っ！！」

一条の光が、一夏に向かう。

いや、一条だけではない。

続けて光を放った銃口が、再度光り出した。

（……死ぬ、のか？）

一夏には自身に迫り来る光が、スローモーションビデオで再生されたように見て取れた。

徐々に近づく光が、目に焼き付く。

それと共に、光を遮るように動く水色の影も。

「くぅっ！」

直撃コースにあった光を影、楯無は防いだ。

つまり一夏を庇ったのだ。

「はっ、おもしれぇ光景だな。」

ミステリアス・レイディのシールドエネルギーは、以前減っている。

そんな中、アラクネのレーザーを防いだのだ。

残量がさらに減っていく。

「おもしれぇ、おもしれぇほど滑稽だなぁ！」

再度アラクネから、光が放たれる。

それを楯無は、ミステリアス・レイディのシールドエネルギーを使って、一夏をレーザーから庇う。

「楯無さんっ！！」

「っ、一夏君は……。　逃げなさい。」

妙に辛そうな声をだし、楯無は喋る。

既にミステリアス・レイディのエネルギーは９８。

つまり、エンプティー間際のレットゾーンなのだ。

はっきり言えば、レーザーをあと一回防げるかどうかのエネルギー。

ミステリアス・レイディが動けなくなる前に、楯無は機体を動かし一夏を守るようにした。

「逃げなさいっ！！」

「逃がすと思う？」

楯無の叫びに、一夏の後ろから声が届く。

目を見開きながら二人は後ろを見た。

「……逃がすわけないでしょ。」

何もない空間から、クローディヌが殺意を孕んだ視線で二人を見ていた。

３６３　爆発の向こうから（後書き）

原作かっこいいではかっこいい出番も、クローディヌにかかれば崩壊ｗ

もう完全にクローディヌは悪役です。

ですが、まァ……。

あ、あの機体出すの忘れてた……ｏｒｚ

まぁ、いっか。

３６４　無くなるエネルギー（前書き）

サブタイに悩むｗ

まぁ、そうときもあるさ。

Ｐ３

３６４　無くなるエネルギー

クローディヌの乗るグレイプニールの脚が、白式を蹴り上げる。

本来それだけなら問題なかっただろう。

だが、今の白式は移動するだけでも、エネルギー切れを起こす程の残量しかない。

そこに蹴りを受けたらどうなるだろう。

「ぐぁっ！」

「一夏君っ！？」

答えは簡単だ。

エネルギーを消費して登場者を守る。

それはつまり、一夏を守ろのと同時に、白式の起動停止を意味していた。

壁に白式ごと一夏が叩きつけられる。

機能停止した白式は、腕を重力に従わせ動かなくなった。

それだけでは止まらず、クローディヌは回し蹴りの容量で楯無をも蹴り飛ばす。

白式同様にエネルギーの残量が少なかった為、蹴り飛ばされエネルギーが切れた。

「……これじゃぁ、白式が運びにくいね。」

そう言いながら、クローディヌは壁に叩きつけられた一夏に歩み寄る。

そして、手にもっているファントムを一夏に向けた。

銃口が一夏を捉える。

「さようなら。」

冷酷にも、そう告げた。

現在の白式には、エネルギーが残っていない。

拳銃でも登場者の一夏を殺せる状態だ。

「待ちなさ……。」

楯無が叫ぶが、それを聞くクローディヌではない。

静かに、引き金を引く指に力をいれる。

「させるかっ！！」

その叫びがクローディヌの耳に届いた瞬間、グレイプニールのスラスターを最大に吹かし、オータムがいる場所に後退する。

次の瞬間には、クローディヌがいた場所にマシンガンのような、小さな光条が幾つも通過した。

「……。」

「なんだぁ？」

オータムは訝しみ、砲撃の向きから撃った人物のいる方向を見る。

楯無しも蹴り飛ばされた衝撃で、意識が朦朧としながらも声の主を見た。

同じように一夏もだ。

ＩＳが起動していない一夏と楯無は、肉眼でしか見ることしかできない。

目を細め必死に見ようとする。

「……オータム、作戦失敗。」

「あぁ？」

ただクローディヌだけは目も向けずに、静かにそう言った。

意味も分からず、オータムはクローディヌを見る。

「これ以上は私達が不利になる。　……この先の区画にＩＳの補給できるスペースがあるから、そこでエネルギーを補給。　そして離脱……。」

そう言うと、クローディヌは両手にファントムを持ち、声のした方に銃口を向けた。

後部ウイングポッド内蔵２６連ミサイルも撃つ気なのか、ミサイルが顔をのぞかせる。

「どういうことだよ？」

オータムは先程のクローディヌの行動で、クローディヌを気に入ったため、邪険に扱わず理由を聞いた。

その言葉に、クローディヌはファントムに内蔵されているデザート・スカイの引き金を引く。

銃口から弾が吐き出され、薬莢が足元に落ちる。

「やっぱ、効かないか……。」

そう言いながら、後部ウイングポッド内蔵２６連ミサイル、クラウ

ディーを撃ち始めた。

大半のミサイルは一夏たちの頭上にある天井に当たり、天井を崩していく。

当たり前のように天井が崩れれば、天井が落ちてくる。

真下にいる一夏たちに、まっすぐと落下していくのだ。

それを防ぐためか、遠くからクローディヌを狙った攻撃と同じ攻撃が、落下していく物を撃ち抜いていく。

同時に、ミサイルも撃ち落としていった。

「おい、どういうことだァ？」

「……白騎士。　織斑千冬がきた。」

「……マジか。」

どうやらアラクネのスコープは、千冬が動かす白騎士を捉えることができなかったようだ。

通路が半分ほどが、ミサイルによって変形した。

「補給終了後に離脱する。」

「へっ、了解だァ。」

その言葉を最後に、オータムはこの場から消えた。

それを確認し、クローディヌは後部ウイングポッド内蔵撹乱ミサイルを天井にぶつけ使用する。

はっきり言えば、レーダー攪乱のためだ。

おかげで、グレイプニールをレーダーで捉えられなくなる。

粒子が降り注ぐ中、グレイプニールはミラージュコロイドでその場に溶け込んだ。

３６４　無くなるエネルギー（後書き）

長く続いたね～。

クローディヌが、次話で戦闘するのが見えているｗｗｗ

だが、その前にセッシーだね。

クローディヌの口調が安定しない……ｏｒｚ

ま、いっか。

365　フォビドゥンを貫く光（前書き）

この話でサブ的なシナリオは終わり。

あと何話で終わるかな？

P3

365　フォビドゥンを貫く光

鈴のタクティカルアームズを、フォビドゥンは難なく交わす。

だが、フォビドゥンが攻撃に移ることはない。

「……！」

地上でアローフォームとなったタクティカルアームズを、箒が構えているからだ。

鈴の攻撃がかわされた瞬間に、箒はタクティカルアームズのトリガーを引く。

その瞬間、セシリアのブルー・ティアーズ以上の光条がフォビドゥンに向かう。

対するフォビドゥンは、ゲシュマイディッヒ・パンツァーを掲げ何とか、飛来するビームの矢を曲げる。

「私を忘れてるんじゃないの？」

しかし、先程まで戦闘をしていた鈴の事を忘れていたのだろう。

完全にフォビドゥンの間合いに入いっていた。

「災厄っていっても、リリィの様にはいかないわけね……。」

その言葉と共に、両手にもったソードアームがフォビドゥンの装甲

楯を切り裂く。

ゲシュマイディッヒ・パンツァーも、零距離から発生させられたビームを曲げることはできない。

そのため、装甲楯にクロスした斬った跡が残る。

もしフォビドゥンに感情があるのなら、確実に驚愕と怒りをその身にもっただろう。

「ま、あの人に勝てるのは、篠ノ之博士ぐらいだもんね？」

そう言いながら、アンロックユニットのスラスターを片方だけ吹かす。

機体が横に移動する。

「ほぼ、泣き落しという方法だけですけど……。」

そして甲龍の後ろから、ガトリングの砲身が剥き出しとなったタクティカルアームズを持つセシリアが現れた。

その周囲にはブルー・ティアーズが、砲身から青白い光を大きくさせる。

フォビドゥンは抵抗しようにも、鎌が折られた状態。

近接格闘武器が無い。

「チェックメイト。」

そう言いながら、躊躇いもなくガトリングの引き金を引いた。

誘導兵器からもレーザーが伸び、フォビドゥンに全弾着弾していく。

先程まで貫けなかったレーザーが、ビームと共に撃たれることにより、ＴＰ装甲と耐熱装甲の限界地を超え、レーザーが破損した装甲下を貫いた。

装甲下が脆いうということは、機械全般に共通することなのだろう。

「……フィナーレですわ。」

後退しつつもセシリアは引き金を引き続け、そしてある程度後退した瞬間、鈴に向けガトリングを投げた。

それを受け取り、鈴はソードフォームの刀身をガトリングに接続する。

セシリアが持っていたガトリングは、元は鈴が持っていたタクティカルアームズの物だったようだ。

「んじゃ、これでおしまい！」

「ふっ！！」

鈴がそう言った瞬間、箒がフォビドゥンに向けタクティカルアームズの引き金を引く。

同じように、鈴もガトリングフォームの引き金を引いた。

セシリアもブルー・ティアーズ四基にミサイルの二基を追加し、スターライトｍｋＩＩＩと共に引き金を引く。

何処にも逃げ場がなく、ゲシュマイディッヒ・パンツァーも正常に起動しなくなった為、その全ての有効攻撃はフォビドゥンを貫いた。

プロヴィネンスは未だ、ワイヤーから抜け出そうと躍起になっていた。

エネルギー消費を抑えるために、仕方なく地表に降りる。

「全く、どういう状況だ？」

溜息混じりに、ラウラはそう呟いた。

地面にプロヴィデンスを押し付け、その上にノワールが重りのように座る。

「大丈夫、ラウラ……？」

その呟きを聞いたのか、シャルロットがノワールではなくラウラだと気がついたようだ。

安否を聞いた。

「ん、ああ。　私は無事だな。」

「……良かった。」

顔が見えないが、シャルロットは心底安心したようだ。

「ノワールが消えたか……。」

心底楽しそうに、プロヴィネンスは呟く。

ラウラ達には聞こえなかったその言葉が、戦況をひっくり返す物だと気がつけないでいた。

３６５　フォビドゥンを貫く光（後書き）

さて、クローディヌ無双が次話から始まるかな？

その前に、またシナリオが入るかな？

書く事ないため、２４時間後に……。

それにしても、よく続くな～。

これ。

366　木々の闇に潜む（前書き）

首がイタス。

（，ぅω・、）ネムイ

P3

366　木々の闇に潜む

「っ！？」

ストライクノワールの胴体に何かあたり爆発する。

砲撃だ。

ＰＳ装甲の為か、爆発によるダメージは殆どない。

エネルギーが減ったぐらいだが、問題はないだろう。

「シャルロットっ！」

「周囲に反応なしっ！　ラウラ、何処から来たのっ！？」

シャルロットが手を離せないラウラにかわり、周囲のレーダー反応を確認する。

しかし見つからなかったのか、ラウラに砲撃の方角を尋ねた。

「十一時だっ！！」

必死に確認しようとするが、レーダーには何も映らない。

目視で確認しようにも、木々が邪魔をして視界が悪すぎる。

「ダメ、何もっ！？」

レーダーに何も映らなかいことを言おうとした瞬間、シャルロットは目を見開いた。

シャルロットに一番近い場所から、熱門が出たのだ。

その熱門がレーダーに掛かり、アラートを鳴らす。

熱門を確認し、その速度にシャルロットは一瞬だけ唖然とした。

（この速さは……、ミサイルっ！？）

レーダーの中央に映るストライクの熱門に、高速で何かが飛来する。

シャルロットが思ったように、ミサイルだ。

大型ではなく、ＩＳにも積み込めるサイズ。

「くっ！」

ミサイルの着弾から逃れる為に、ストライクは大きく飛び上がる。

ストライクが立っていた場所にミサイルが通過した。

そのまま飛んで行き、進行方向上の木々に着弾し木々を燃やし始める。

「ステルス、ステルスシステム！」

気がついたのか、シャルロットはラウラに向かって叫ぶ。

「ラウラッ！　敵はステルスで隠れてるんだよっ！！」

ソードストライカー装備のために、空中で滞空することができず、ストライクは地表に着地する。

その瞬間レーダーに熱門が掛かり、シャルロットはその方向に向け左肩にマウントされているビームブーメラン、マイダスメッサーを引き抜き、熱門が一番最初に感知された場所に向け投げた。

木々を切り裂きながら、マイダスメッサーが突き進む。

やがて小規模の爆発の後に、その後方で大きな爆発が起きた。

ミサイルを切り裂き、そのミサイルを撃った機体を、ビームブーメランが切り裂いた事を示した爆発だ。

マイダスメッサーが大きく孤を描き、木々を薙ぎ倒しながら手元に戻ってくる。

「ミサイル発射時には、熱門がミサイルから出るから、そこに向けて砲撃してっ！」

「了解した！」

冷静なシャルロットの判断に、ラウラはノワールストライカーのレールガンを展開させた。

プロヴィネンスを手足のワイヤーで抑えているためか、動けない。

そのためレールガンを起動をした。

ノワールのレールガンは、角度の調整がかなり効く。
ミサイルの熱門を待ちながらも、ラウラはプロヴィネンスを見下ろした。

≪フリーダム　エネルギー　オールフリー≫

フリーダムのエネルギーが、完全に解除されたことをモニターが告げる。

「火器管制システムはっ！？」

通信傍受をしているレイランド・オルソン曹長は、全員に聞こえるように叫ぶ。

シュヴァルツェ・ハーゼ部隊の作戦司令室は、リリィと束が契約のもと作った、ＩＳ学園島全土の至るところに設置させた防衛兵器のコントロールルームも兼ねていた。

作られて間もないので、まだ火器管制が完全に有るわけでもない。

だがレイランドは、叫ばずに入られなかった。

「まだ完成してないし、座る人もいないからね！」

シェナスが落ち着けという風に言うが、言葉が少々荒い。

デストロイを見て、落ち着けという方が無理なのだろう。

「……でもゴットフリートＭｋ．７１は、一番から十五番。７５ｍｍ対空自動バルカン砲塔システムも、ほぼ全門完成してなかったけ？」

コーヒーを飲みながら、クリスはシェナス達にそう告げた。

妙に呑気なのは、コーヒーを飲んでいるからだろう。

「……ゴットフリートの一番から十五番は、どのエリアに配備されているんだっけ？」

そう呟き、クリスはコーヒーを飲んだ。

レイラントはクリスの言葉に、ゴットフリートの設置完了場所を思い出す。

「ゴットフリート五番、六番を起動させる！　シェナス、クラリッサ副隊長に連絡を！！」

３６６　木々の闇に潜む（後書き）

アークエンジェルを出そうか悩んだけど、出してもクルーが居ない罠ｗ

結局、武装だけ。

特になし。

そういえば、スライムの肉まんが……。

ＺＺＺ

はっ！！

ネ申のお告げじゃぁ！

ものども、感想を書けぇぃ……ＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺ

妙に眠くて、聞いた言葉がおかしく聞こえてしまう最近です（笑）

３６７　デュエルを援護する機体（前書き）

ＩＭＳ－０５が登場。

０５はフォビドゥンブルーかな、と思っていたけど、フォビドゥンブルーより、こっちの製造が先。

じゃ、フォビドゥンブルーは０６かな？

Ｐ３

３６７　デュエルを援護する機体

クラリッサの目に爆発が映る。

進行方向先の為、爆発の原因がすぐに理解できた。

（隊長っ！）

焦りながらも、近くにいる災厄を切り裂いていく。

≪ＧＡＴ－０２Ｌ２　ダークダガーＬ≫

モニターに機体名称が表示されるが、それより先にデュエルのビームサーベルが、もう一機のダークダガーＬの腹部を切り裂いた。

ＡＱＭ／Ｅ－Ｍ１１ドッペルホルン連装無反動砲に装填されていたミサイルが、ダークダガーＬの爆発を大きく見せる。

『クラリッサ副隊長！』

モニターが突然起動し、シェナスの声がクラリッサの耳に届いた。

不思議そうに耳を傾けながらも、レーダーでストライクノワールの方向へ向かう。

その間にもＭ４４３　スコルピオン機動レールガンで、ディエルを狙う機体を撃ち抜いていく。

『実用テストしていませんが、ゴットフリートの使用許可を！』

「っ！？」

シェナスの言葉に、一瞬だけデュエルの動きが鈍った。

「どういうことだっ！　試験運用中の大型ビーム砲塔を……。」

『モニターに、学園の監視カメラの映像を送ります！』

周囲を警戒しつつ、クラリッサは送られてきた画像を見た。

何も言えないのか、無言でその映像を見続ける。

モニターには巨大なカブトガニのような機械に挑む、フリーダムの姿。

今現在、世界最強と言われているフリーダムのフルバーストを、陽電子リフレクターで防ぎ反撃するデストロイの姿は、クラリッサに驚愕を与えた。

そしてシェナスが、ゴットフリートＭｋ．７１の使用許可を得ようとした理由を、クラリッサは気がつく。

「……シェナス・ノア准尉。　試験運用中の大型ビーム砲塔だが、２２５ｃｍ２連装高エネルギー収束火線砲ゴットフリートＭｋ．７１の使用を許可する。」

そう言うとモニターの向こうで、シェナスが敬礼し『ありがとうございます！』と言い、モニターを切った。

「っ！」

デストロイに驚いていたせいか、接近する機影に気がつかなかった。

ダークダガーがビームサーベルを持ち、デュエルを突き刺そうと特攻する。

（間に合わないっ！！）

既にデュエルの間合いの為、反撃やビームシールドを掲げようにも間に合わない。

いくらか、ＩＳの絶対防御で防げるかもしれないが、突き刺すという行為は、切るという行為よりも予想ができないことがある。

絶対防御が貫き、ビームサーベルが機体を貫く可能性もあるのだ。

しかしビームサーベルが届く前に、ダークダガーＬは横からの砲撃で消え去った。

ストライクのアグニのような光条が、クラリッサの目に焼き付く。

「おぅ、大将。　無事か？」

この場には似合わない声が、クラリッサの耳に届く。

その方向を見ると、見慣れぬ機体が長い砲身を向けていた。

「……セシル・フラドール中尉、か？」

「おぅ、さ。」

Ｍ９００９Ｂ複合バヨネット装備型ビームライフルを腰に戻し、緑をベースにカラーリングされた機体がデュエルに近づく。

所々に朱色が使われており、鈍重そうな機体を更に重く見せる。

手にもっていたライフル以外にも、肩上部から左右別々の銃身が伸びていた。

≪ＩＭＳ－０５　ＧＡＴ－Ｘ１０３ＡＰ　ヴェルデバスター≫

ラウラの使用するＩＭＳ－０３　ＧＡＴ－Ｘ１０５Ｅ　ストライクノワールと、クラリッサの使用しているＩＭＳ－０４　ＧＡＴ－Ｘ１０２（２）　デュエルの後方支援の為にと作られた、砲撃戦主体のＩＭＳだ。

「今まで何処にいた……。」

「ん？　亡国企業狩りだな。　ついでに隊長のメイド服コス、写真撮ってきたぞ。」

「……後でクレ。」

「あいよ。」

そう言いながら、クラリッサはレーダーでストライクノワールの位置を確認する。

「……というか、大将……。　……囲まれてんぜ？」

周囲にバクゥやダークダガーLなどが、砲身を二機に向けていた。

「……なんとかしろ、セシル。」

「そりゃ無理だな。」

「……いいから、やれ。」

「横暴だぜ、そりゃ……。」

そう言いながら二機はスラスターを使用し、移動し始めた。

３６７　デュエルを援護する機体（後書き）

ちなみにですが、ゴットフリートのサイズは変わっていません。
機体は１／１０なのに、ゴットフリートは１／１とは、デストロイ吹き飛ぶんじゃない？
ただでさえ、デストロイの陽電子リフレクターと同サイズだったのに……。

さて今思ったけど、昔僚機に「ソードカラミティー」を上げられたことを思い出し……。
鈴にシュベルトゲーベル二本持たせた姿を想像して慕いました（笑）
少し苦笑ｗ

さて、ヴェルデバスター登場。
使用者はセシル・フラドール。
おぃ、名前ｗｗｗ
という感じの、キャラクター登場しました。

ちなみに……。

ユリア・セシル（偽名）
セシル・フラドール（本名）

同一人物です……。

３６８　誰にも気が付かれない殺意の影（前書き）

戦闘長いな～。

全員にスポットを当てようとした結果だからね～。

仕方ない、Ｐ３

３６８　誰にも気が付かれない殺意の影

「ゴットフリート五番、六番起動！」

火器管制がいないなか、クリスが火器を立ち上げていく。

ＩＳ学園の湾岸で地面がせり上がり、そこから二門の砲身が伸びていった。

それが二つ。

合計四門の砲身が、海上に向けられる。

「フリーダムが後退した時を狙え！」

ビームライフルを撃ちながら、重力を感じさせない動きでフリーダムはデストロイを翻弄していく。

しかしながら、デストロイは陽電子リフレクターを展開したままビームを防ぎ続ける。

フリーダム同様にエネルギー切れがないのか、ビームやリフレクターの出力低下は見受けられない。

「デストロイのスペックって、不明な部分が多いね……。」

束の言葉に内心同意しながら、リリィは飛んでくる椀部を避けながらデストロイ本体に接近する。

回避行動をしながらもフリーダムはデストロイに近づき、すれ違いざまにビームサーベルで斬っていくが、それすらも陽電子リフレクターによって阻まれることになった。

「……艦対級砲撃？」

警告も何もなかったが、リリィは遠距離からの砲撃の予感を感じていた。

束には感じられなかったが、リリィとの思考共有によってなんとなくは理解する。

翼からバラエーナプラズマ収束ビーム砲を起動し、デストロイから離れながらも撃つ。

腰のレールガンも起動し、撃ち続ける。

「……あっ！」

レーダーに行き成り感知された大型エネルギーを、束は驚きながら探す。

しかし探す前に、デストロイに大きな光条が迫る。

「……ゴットフリートを起動したのか。」

何か納得しながらも、リリィはその光景を見続けた。

白騎士が一夏の横に止まる。

「無事か、お前らっ！」

クローディヌによって気絶させられたのか、二人に意識はなかった。

ミラージュコロイド展開後に気絶させたことを、土煙で視界を封じられた千冬は知るすべもない。

「……クローディヌめ。」

少しばかり忌々しそうに呟く。

そして千冬は何か感じたのか光刀・暁を引き抜き、機体の横で刃を立てる。

次の瞬間、光刀・暁に何かをぶつけられたよな衝撃が走った。

何もない空間で、光刀・暁が何かと競り合う。

もしミラージュコロイドを使用していなかったら、そこにはグレイプニールの主兵装であるファントムが見れたはずだ。

ファントムは白式の雪片同様に、アンチビームコーティングがされている。

もしアンチビームコーティングが兵装されていなかったら、今頃ファントムの破壊によって光刀・暁が自由になり、そのままクローディヌを斬り飛ばすだろう。

しかしそれが不可能だったために、白騎士は後ろ蹴りしながら、足先端に装備されている踏刀を展開した。

「ちっ！」

だが、千冬より早い反応で回避しダメージを負わすことができなかったようだ。

「……ぅ。」

微かに一夏が呻く。

大きくない音、それに踏刀の光と熱線に当てられたのだろう。

一夏がうっすらと目を開けた。

それに千冬は気が付き、一瞬だけ意識を逸らしてしまう。

「はぁぁっ！！」

その瞬間を見逃すクローディヌではなかった。

踏刀を避け、白騎士の胴体に蹴りを入れる。

未だミラージュコロイドを展開したままなので、千冬は反応できずに蹴り飛ばされた。

前のめり倒れかけるが、スラスターを起動し体制を立て直す。

それに追撃をかけるようにクローディヌは、ファントムのデザート・スカイを白騎士に向けて撃つ。

「くっ、そこにいるかっ！！」

ＴＰ装甲の為に装甲表面にはダメージになるが、装甲内部は無傷だ。

白騎士が銃弾を避けるためか大きく後退し、両手に光刀・暁と雷刀・桜を持ち銃弾の中を突き進む。

数多くの銃弾が白騎士の装甲に当たり、辺に落ちていく。

３６８　誰にも気が付かれない殺意の影（後書き）

……デストロイって、ＭＡじゃないとホバリングできないよね……。

ＭＳ形態にさせるためには、地表に降りなければいけないというわけで……。

これは、ＩＳ学園にデストロイの到達フラグなのかっ！？

最近、クローディヌに肩入れしている私です。

……原作キャラの別の姿とはいえ、ほぼオリキャラだけどね……。

３６９　恨みの刃が騎士を追い詰める（前書き）

ビームサーベルの原理を、正確に戻したい……。

これじゃぁ全ビームサーベルが、コロイド粒子を使用しないヴァジュラビームサーベルに……。

さて、リメイク時には直すかな……。

３６９　恨みの刃が騎士を追い詰める

「はぁっ！！」

白騎士が光刀・暁を振りかぶり、何も見えない空間に向け降り下ろす。

デザート・スカイの銃弾までミラージュコロイドで隠せるわけももなく、そこからクローディヌの居場所を判断したのだろう。

反対の手にもった雷刀・桜は二撃目に繋げるような持ちかたをしていないことから、降り下ろされた剣線が単調に見えた。

「っ！？」

しかし、雷刀・桜は何も当たることもなくファントムの横を通り抜けた。

あざ笑うかのように、ファントムのミラージュコロイドが解除される。

そこにファントムは廃材で作られた三脚らしき物に縛られ、自動で砲撃していた。

（罠っ！！）

その答えにたどり着くまでに、数秒間千冬は無防備になった。

「……。」

「っ！？」

上空に気配を感じ、すぐに上を振り向くと天井が揺らぐ。

クローディヌがミラージュコロイドの展開を止めたのだ。

（不味いっ！！）

グレイプニールの機体が、ほぼ見えるようになった瞬間、千冬はその姿に恐怖を感じた。

天井に膝を立て、もう一つのファントムをクローディヌは白騎士に向け構えている。

デザート・スカイ上部に装備されている、対戦闘用プラズマブレードが光を微かに放ち始めた。

白騎士のスラスターを完全開放し、千冬はその光から離れようとする。

「甘い！」

しかし、対戦闘用プラズマブレードが展開されるのは、千冬の想像よりかなり早い。

クローディヌの叫びと共に下ろされた光は、白騎士の頭部をセンサー類と腹部装甲を剥いで行った。

「ぐぅぅっ！？」

千冬は悲鳴か叫びかわからない声を上げ後退した。

頭部センサーは半壊し、千冬の顔が半壊したところから覗く。

胸部装甲は基本的に無事だが、ＴＰ装甲が起動しているとは思えないほど腹部の白い装甲が剥げ、その下の装甲板が見えていた。

自身の被弾が信じられなかったのか、目の前にいるクローディヌをみて驚愕する。

「……お前。」

グレイプニールを使用しただけで、特に何もおかしな所のないクローディヌ。

ファントムのプラズマブレードが廊下を刺し、廊下にヒビが入る。

（おかしい……。）

千冬は束に見せてもらった、グレイプニールの機体スペックを思い出す。

グレイプニールの基本スペックは実体系装備とプラズマブレード。

そして開発構想は、電磁波と特殊ガスによる強襲。

それに対しＩＭＳ－０１である白騎士はＴＰ装甲機体。

実体系武器主兵装のグレイプニールにとっては、白騎士に傷を負わ

せることはできないはずだ。

千冬はそう思っていた。

しかし現に白騎士は、頭部が半壊し千冬の顔が覗いていたり、腹部装甲板が剥がされている。

「……丁度いいか。　ここで、ブリュンヒルデの首も狩っておこう。」

明らかに千冬を挑発している。

情報が完全に不足している千冬は、どう動いたらいいのかわからなかった。

しかし、一つだけ理解できる事はある。

フランス代表候補クローディヌ・サミナードが、敵であるという事だけは確実だった。

「死ね、白騎士……。　織斑千冬っ！」

瞬時加速を使用し、ものすごい速度でグレイプニールが白騎士に迫る。

配置されていたファントムを回収したため、グレイプニールの両腕にはファントムが二つ装備されていた。

リリィにも劣らない殺気をまき散らしながら、クローディヌはファントムを振り下ろす。

訳が分からなくなりながらも、千冬は両手にもっていた光刀・暁と雷刀・桜を横に持ち、斬撃を防ぐ。

ファントムから出る刃が、白騎士の持つビームサーベルと拮抗する。

「くっ……。」

流石に考えごとしながらの接近戦は危険極まりないと判断し、千冬は白騎士の踏刀を、再度起動させグレイプニールを蹴り上げようとする。

しかしやはりと言うべきか、クローディヌは踏刀を回避しきった。

３６９　恨みの刃が騎士を追い詰める（後書き）

デュノア社製第三世代機

名称：グレイプニール

開発構想：電磁波と特殊ガスによる強襲型ＩＳ

武装

・後部大型ブレード「マガノイクタチ」　×２
・後部ウイングポッド内蔵２６連ミサイル「クラウディー」　×２
・後部ウイングポッド内蔵撹乱ミサイル　×２
・椀部内蔵型連装射撃兵装「レイン・オブ・サタデイ」　×２
・椀部近接格闘用ブレード「ブレッド・スライサー」　×２
・高攻防複合システム「ファントム」
・高威力重機関砲「デザート・スカイ」
・対戦闘用プラズマブレード「アルカディアス」
・６９口径パイルバンカー「シールド・ピアース」
・対光学兵器偏向装甲「ゲシュマイディッヒ・パンツァー」

特殊兵装

・ミラージュコロイド
・ゲシュマイディッヒ・パンツァー

高攻防複合システム「ファントム」はアンロックユニット同様に浮くので、持たなくてもかまわない。

コロイド粒子を特殊兵装に使うことに前提を置いた機体。

機体の内部設計は、リリィの手によるもの。

なおこの武装の為か、グレイプニールの消費エネルギーはとてつもなく早い。

燃費が悪い以上の問題であり、雪片と同等かそれ以上。

その点を改善さえすれば、グレイプニールは世界最強のＩＳと言っても良いだろう。

完成後に搭乗者自らの手で、武装とエネルギー伝達系統が改修されている。

３７０　殺意の咆哮（前書き）

少し混乱中。

何を書いてるのやら。

Ｐ３

３７０　殺意の咆哮

クローディヌは距離を置きつつも、白騎士に銃撃をし続けた。

「……ぅ。」

その音で、一夏は目を覚ます。

千冬はそれに気がつきながらも、先ほどと同じ失態を繰り返さないよう、クローディヌに接近する。

二刀もったままクローディヌに斬りかかるが、その二刀をファントムのアンチビームコーティングで防ぐ。

ＩＳに装備したからと言い、エネルギーなどに左右されるビーム兵器とは違う点、アンチビームコーティングは機体に左右されない優秀な兵装だ。

「……サミナード、自分がしている事を理解しているんだな？」

教師として、千冬は生徒に聞く。

「ならば貴様は、貴様自身がした事について理解していたんだな！」

しかし、クローディヌに問いかけた言葉は、思わぬ問いとして千冬に帰ってきた。

ファントムで二刀を防ぎながらも、クローディヌは千冬を睨みつける。

鬼のような形相という言葉が似合いそうなほど、クローディヌの表情は憤怒しか見られない。

「どういうことだ……。」

冷静を装い地つつも、千冬はクローディヌに問いかける。

その千冬の言葉は、更にクローディヌを怒らせた。

「何もわかってないのかっ！」

薬が切れかけているのか、クローディヌの言葉が荒くなっていく。

クローディヌの大きな声は、当たり前のように壁に寄りかかっていた一夏の目を覚まさせた。

（……千冬、姉……？）

微かに開いた目から、一夏は白い騎士の姿を捉える。

「白騎士事件を起こしたことだっ！！」

「っ！？」

白騎士事件という言葉に千冬は、刀に込める力を緩めてしまう。

クローディヌは雷刀・桜と光刀・暁をシールドで跳ね上げ、一番危険な兵装である踏刀を、反対の手にもっているファントムで破壊していく。

ブリュンヒルデと呼ばれる千冬が、ひとりの代表候補性に、それも機体のスペックで完全に優劣が決まっている状態で、さらに被弾した。

「なぜ貴様は、白騎士となり世界を混乱に陥れた……。」

クローディヌの言葉に千冬は何も言えない。

普段した足でなんとかクローディヌから距離を離しつつも、廊下に着地する。

「なぜ、その先にある結末を考えない……。」

「っ！」

しかしクローディヌは、白騎士が着地した時には千冬の眼前にいたファントムがサーベル状の光条を展開し、振りかぶる。

グレイプニールは機体の特質上、コロイド粒子を使用してミラージュコロイドなどの特殊兵装を使用する機体だ。

そして、機体のある点に気がついたクローディヌは、独自に開発、改修しグレイプニールを強化した。

それが、ファントムから出るサーベルだ。

ビームサーベルの元は、ミラージュコロイド用の磁場形成理論の応用技術によって、ビームを刃状に固定したもの。

一応、フリーダムのビームサーベルに使用されている。
それ相応のエネルギーと磁場形成理論の応用技術があれば、ビームサーベルの使用は、それほど難しくはない。

「なぜ考えなかった！」

叫びながら、ファントムのビームサーベルと雷刀・桜がぶつかり、激しく火花を散らす。

ＩＳでありながら、グレイプニールはビームサーベルを使用できる。
クローディヌが改修した、グレイプニールの強化兵装だ。

「貴様達がしたことで、どれだけの人間が苦しみ、どれだけの人間が死んで逝ったか、なぜ……。　なぜ考えなかったぁぁっ！！」

獣じみた叫びに千冬は動けなかった。
白騎士の手から、雷刀・桜が弾かれる。
宙を舞い、エネルギーが伝達されなくなったために、ビーム刃が消え去り楯無の横に落下した。

「なぜ、私のような存在を作り出したっ！！」

その言葉と共に、ファントムのビームサーベルが斜めに白騎士を凪いだ。

３７０　殺意の咆哮（後書き）

「なぜ」連呼しすぎｗｗｗ

結構、適当ながらも、クローディヌの過去が少しづつ出来上がってきます。

一応ビームサーベルは『ミラージュコロイド用の磁場形成理論の応用技術によってビームを刃状に固定』ということで、エネルギーを解決すれば「あれ、コレビームサーベル使えるじゃん」というお話。

こうなると、グレイプニールの世代がおかしい。

条件付き第５世代機？

３７１　勝者と敗者の差（前書き）

アンチ的なお話がようやく始まる？

まぁ、クローディヌのいままでが見え隠れしてきました……。

Ｐ３

371　勝者と敗者の差

一夏はその光景をぼんやりと見つめながら、状況を把握していく。

そして理解していくにつれ、目に映る惨状が理解できた。

無傷のクローディヌに、ボロボロとなり胸部装甲部からオイルで血のように染まった白騎士。

「……、っ！？」

その光景を正確に理解したか、一夏は目を大きく見開いた。

「千冬姉っ！！」

「……ん。」

一夏の声に気がついたのか、クローディヌが振り返る。

「お目覚めか、織斑一夏……。」

唖然とする一夏に向け、クローディヌは言う。

軽蔑するかの如く、一夏達を見る。

「……そうだな。」

白騎士を一旦見た後に、クローディヌは一夏を見直す。

「それが良い……。」

「なに、がぁっ!?」

そう言うとエネルギーが切れた白式ごと、一夏の首根っこをつかみ壁に押し付ける。

壁に強く押し付けたせいで、一夏の頭部が強く揺さぶられた。

背部にあるアンロックユニットがあるため、頭部が壁に叩きつけられることはない。

「何……、を。」

息ができないながらも、一夏はクローディヌに訴えかける。

その様子を見て、クローディヌの表情が歪んだ。

他人の苦痛を見て優越と快楽に浸る、それが今のクローディヌに一番当てはまる言葉だろう。

「……ああ、それだ。　あの織斑に、その表情をさせたかった……。」

一夏に顔を向けながらも、その瞳は白騎士を見ていた。

半壊した頭部から、千冬が怒りと悲しみが混じった目で、クローディヌを睨む。

「私の人生を狂わせた死神に、ようやく復讐できる。」

「やめろ……。」

「ようやく、死神を同じ目に合わすことができる。」

千冬の言葉を流し、クローディヌは一夏の首を締め付ける。

ＩＳの手は人間以上に強靭で、一度操作した力は操作し直さなければ解除されない。

もし千冬がアクションを起こしたら、確実に一夏の首を絞める手は強まり、最低でも首の骨は折れるだろう。

それは一夏の死を意味している。

たった一人の家族を失うことに、千冬は怯えた。

「やめろぉぉっ！！」

千冬が叫ぶが、言葉は状況によって意味を持たない。

圧倒的な不利な状況で、「やめろという言葉が届くか？」と聞かれれば、「届かない。」という答えになる。

有利に立っているならともかく不利なものの言葉は、ただの慈悲を乞いていることと同じだ。

「……さて、肉親が死んでいくさまを、その目に焼き付けて置くんだね。」

そう言うと、クローディヌは一夏に目を向ける。

「遺言の時間は欲しいか？　まぁ、特別に上げるけど……。」

クローディヌにとってみれば、直ぐ様殺したかっただろう。

しかし、死の時間を延ばすことにより、千冬に精神的なダメージを与えられる。

そのために、遺言という時間を設けたのだ。

グレイプニールの手が、少しだけ緩まる。

「っ、はぁ……、はぁ……。」

器官を止められていたため息する事ができなかった一夏は、荒い息を吐いた。

白式はエネルギーが切れているため、今はただの物凄く重いガラクタだ。

反撃することも、この状況から脱出することもできない。

「……なんで、こんなことを……。」

「……それが遺言とは、なんとも味気ないね？　もっと「助けてくれっ！！」とか、「殺さないでくれっ！」とか言うと思ってたんだけど……。」

「っ！」

一夏の問いかけに、クローディヌは茶化すように返答する。

それと同時に、再度一夏の首がグレイプニールの手によって締め付けられた。

そもそも遺言を聞いたのであって、質問する時間を与えたわけではない。

真面目な返答が無くても当然だ。

刻々と一夏の死が近づき、千冬は震え続ける。

それを見てクローディヌは、心底嬉しそうに歪んだ笑みを浮かべた。

３７１　勝者と敗者の差（後書き）

一夏死亡？

それとも、千冬死亡？

それとも、織斑兄弟死亡？

というか、楯無空気すぎてワロタｗｗｗ

数話ほど、クローディヌのお話が続きます。

ＡＣｆａ×なのはを一旦、非公開にして、無印だけ完結させた作品にしようかな……？

Ａ'ｓで絶賛停滞中だし……（一＿一；）

３７２　クローディヌの過去（前書き）

クローディヌ編、中盤。

クローディヌの詳細は、数実前まで固まんなかったですｗ

Ｐ３

372　クローディヌの過去

「でもまぁ、冥土の土産として話してあげようか。」

一夏の首を絞めている手の力が、若干弱まる。

満足できるほどの呼吸ができるわけではないが、一夏にとっては助かっただろう。

「こんなことする理由？　生きるための延長線上に、貴様が立っていただけだからだ……。」

「「っ！？」」

「殺意を抱く相手を殺さずにいようと思ったけど、私の目的の延長線上に貴様が立ち塞がった。　シンプルでしょ？」

クローディヌがそう言いながら、一夏を見る。

その一夏の顔を目を細めて見姿は、これから壊すものを見収めるような者の目だった。

「本当は織斑千冬に、私が味わった絶望と苦痛を与えたいだけなんだけどね。」

そう言うと、グレイプニールの手の力が強まる。

「やめろっ！　一夏が何をしたと言うんだ！」

千冬が叫ぶとともに、グレイプニールの手が強まる。

（……ああ、本当は気がつきたくないだけか。）

クローディヌは冷静に判断した。

おそらく千冬はクローディヌの言葉を正確に理解している。

だからこそ、一夏の名前を出したのだろう。

クローディヌは唇の端を釣り上げる。

「……織斑一夏が何をしたか？　簡単なことだね……、織斑千冬。
貴様の唯一の肉親だからだ。」

その言葉に千冬は、あまり顔色を変えなかった。

予想が当たっていたということだろう。

「……ぅ。」

一夏の呻き声が聞こえ、クローディヌは口を開いた。

「追加の土産だ。　私の家族は白騎士事件によって、殺された……。
貴様の肉親が殺したも同然のことだ。」

その言葉に一夏は苦しみながらも、目を少しだけ見開いた。

千冬に至っては、否定したいだろうが何も言えずにいる。

「白騎士事件。　各国のミサイルをハッキングし、世にＩＳを知らしめた事件。　あれが何を起こしたと思う？」

「……。」

「日本を射程圏内とする各国のミサイルを起動したんだよ。　……もちろんその中には、開発途中や完成してもほぼ不良品とされたミサイルもあった。　そららが、一斉に発射された……。」

正式記録として２，３４１発のミサイルが、白騎士事件時にハッキングを受けたこととなっていた。

しかしそのミサイルは、正式に使用できるミサイルしかカウントされていない。

不発弾などはカウントされていないのだ。

不特定多数の不発弾があっても、おかしくはない。

「私の母は、当時宇宙に出るためのロケット開発構想のために、スイスの軍事基地にいた。」

未だ更衣室が燃え盛る音をＢＧＭに、クローディヌは喋り続ける。

「その時にミサイルが外部アクセスを受けた。　篠ノ之束のハッキングだ……。　ミサイルが日本に向けて放たれる中、基地にあった新型弾頭……。　それも、不発弾までもが発射された……。　基地内部に向かってな！」

「っ！？」

「母はミサイルの爆発に巻き込まれ死亡し、保険金を受け取り少しの間生活していた。　……だが、世界情勢が変わり、女性が優遇される社会になっていくうちに、父の会社はＩＳ企業により倒産したっ！」

その言葉が、千冬の胸を貫いていく。

「女性優遇社会になった世界で、この状況がわかるか？　父は男だからという理由で、再就職先も見つけられず、生活保護も最低額しか受けられなくなった。」

それは人として認められているか怪しいライン。

本当にそれを人と呼んでいいのか、分からない。

「そんななかでも、父は私を育ててくれようとした。　だが、悲劇は続くんだよ。　女性優遇化社会になったことにより、女性が男を見下し、何をして良いと判断し始めた！　詐欺をしても、罪を被せることを、悪だと感じなくなった……。」

その言葉で千冬はクローディヌの父が、どのような目にあったか理解する。

「貴様に分かるか！　日に日に窶れていき、己の弱さを忘れるために酒に溺れ、死にたいと嘆く父の後ろ姿をっ！！」

「……。」

「だから、私は貴様たちを殺す。　ＩＳを作り上げた篠ノ之を、Ｉ

Sと呼ばれるガラクタを……。

全て、この世から消し去る……。

何をしても、だ。」

３７２　クローディヌの過去（後書き）

不発のミサイルは、当日に実験し不発と分かったものです。

処理している途中で、束のハッキングに合い、制式採用のミサイルと誤認作動しました。

そういう感じ。

だから多分、作動すると思う……。

知らないけど……。

「貴様に分かるか！　日に日に窶れていき、己の弱さを忘れるために酒に溺れ、死にたいと嘆く父の後ろ姿をっ！！」

ちょっとだけ、真面目に書いた言葉。

３７３　四つは一つに（前書き）

リリィ回です。

毎度のことながら、コロコロと場面が変わるね～。

Ｐ３

373　四つは一つに

ゴットフリートがデストロイに迫った瞬間、陽電子リフレクターが展開された。

激しい光を放ち、ゴットフリートと拮抗する。

そして火線の大きさから、デストロイが光に飲み込まれた。

ビームがリフレクターによって弾け、海面に落ち海水を蒸発させる。

蒸発した海水が煙となり、デストロイの周囲を包み込んでいく。

誰もがデストロイの撃破を思っただろう。

「「……来る。」」

しかしリリィと束だけは、それとは反対の思いだった。

ゴットフリートのビームが減衰する。

それと同時に、海水の煙の中から黒い影が濃くなっていった。

その影を見ながら、フリーダムはバラエーナプラズマ収束ビーム砲を展開していく。

煙の中から、徐々にデストロイが現れる。

損傷箇所は見当たらない。

それを確認した瞬間、フリーダムはデストロイに急降下しながらバラエーナプラズマ収束ビームを放つ。

だが、当然のように陽電子リフレクターがビームを曲げた。

何事もなかったかのように、デストロイは長い砲身を学園に向け移動する。

デストロイが学園に近づいてく。

「くっ！！」

リリィはそのことに焦りながらも、冷静にデストロイの足を止めるために攻撃し続ける。

デストロイは懐に入り込めば脆いように見えるが、接近の際に陽電子リフレクターを起動させられたら、接近しようにも接近できない。

ビームサーベルを引き抜きながらも、バラエーナプラズマ収束ビームを撃ち続けるが、決定的なダメージどころか、掠り傷一つ負わせられない。

防いだあとのリフレクター解除を狙うが、それを阻むようにデストロイの腕が邪魔をする。

仕方なしに再度上昇すると、デストロイはリフレクターを解除し、砲身外側についているマーク６２　６連装多目的ミサイルランチャーからミサイルを吐き出す。

ミサイルを連続して撃っているのか、数が多く空を埋め尽くしていた。

それらミサイルをフリーダムはマルチロックオンし、フルバーストで撃ち落とす。

そのままバラエーナプラズマ収束ビームをデストロイに当てるが、やはりと言ってもいいほど陽電子リフレクターが邪魔をする。

「優秀だね、アレは……。」

束の声がビームと共に、風に流される。

「「っ！！」」

ビームを回避した瞬間、レーダーに接近する熱源を捉えた。

数は四。

ものすごい速度で、フリーダムとデストロイの戦闘宙域に迫る。

（……まさか。）

リリィの記憶に、よく似た状況が思い出される。

その考えが束にも伝わり、本能が二人に危険を知らせ続けた。

レーダーに先頭の熱源に向かい、後続の三つの熱源が集まっていく。

（また、貴様は悲劇を起こすのかっ！）

そう思いながら、デストロイに向け砲撃し続ける。

四つの熱源が一つになった瞬間、フリーダムは翼のスラスターを動かし上昇した。

高速で、フリーダムに飛来する影。

「またお前かっ！」

≪ＺＧＭＦ－Ｘ５６Ｓ　インパルス≫

ドイツの洞窟で破壊した機体が、フリーダムに向けビームライフルを構えていた。

それに対し、フリーダムの行動は早かった。

ビームライフルを向けられた瞬間には、すでにフリーダムはルプスビームライフルの引き金を引く。

銃口から光条が伸び、インパルスはシールドを掲げビームを防いだ。

『やらせない……。』

インパルスから低い声が聞こえる。

それがインパルスの声だということに、束は少しして気がついた。

『貴様にデストロイを、やらせるものかぁ！！』

「ふざけるなっ！」

インパルスの言葉に、リリィは叫ぶ。

ビームライフルを腰にマウントし、ビームサーベルを引き抜き迫る。

「また悲劇を繰り返すのかっ！　貴様の思いで、一体どれだけの犠牲が出ると思ってるっ！！」

インパルスは再度シールドを掲げ、ビームサーベルを受け止めた。

373　四つは一つに（後書き）

最初はインパルスがデストロイを呼ぶとき、「ステラ」と書こうとしてしまった……。

意外とキャラも出そう……。

だが出さない。

ちなみに、インパルスはフォースシルエット装備です。

ベルリンみたく、学園が火の海になるのだろうか？

３７４　過去の悲劇（前書き）

はぁ、何を書いているのかさっぱり……。

ま、どうでもいいか。

Ｐ３

３７４　過去の悲劇

千年以上前に、デストロイが村と街を滅ぼした。

なんの罪もなく、平和に暮らしていただけの人間を。

王はそのことに対し、デストロイの抹消命令を出し自らも戦場に出た。

部下に避難誘導をまかし、フリーダムはデストロイを破壊するために戦闘をする。

そこで討てていれば、被害は出なかっただろう。

だが討てなかった。

インパルスがデストロイを守る為に、フリーダムの前に立ったからだ。

圧倒的な性能を持つフリーダムでも、デストロイの陽電子リフレクターは破壊できない。

その上にインパルスという敵が増えたのだ。

デストロイを破壊することは、その場では不可能だった。

結果、更に村や街を焼き付くし破壊を続ける。

人間から言われた言葉は、フリーダムの記憶としてリリィは鮮明に

思い出せた。

『貴様らがいるからっ！！』

『返してっ！　あの子を返してっ！！』

『ここからいなくなれ、化け物！』

様々な悪意を受けながらも、フリーダムはデストロイを殺した。

それで世界が平和になるわけでもなく、災厄をこの世から完全に排除するために、古くから対策を練っていた陰陽術師を中心に人間と災厄との戦争が起きてしまう。

『青き清浄なる世界のために！』

その言葉と共に、無謀とも思える差を数で埋めようとした。

しかし当時は機械も何もなく、精々刀剣などがあるくらいなだけ。

それに対し災厄は機械であり特殊装甲などを持つ。

戦争は一方的な虐殺がほとんどだった。

「むやみに人を殺し、またお前はあの時と同じことを繰り返させる気かっ！！」

インパルスに向け、リリィは叫ぶ。

シールドでフリーダムのビームサーベルを受け止めながらも、イン

パルスは背部ユニットからビームサーベルを引き抜こうとする。

「あの数年で、人の命がどれだけ消えていったかわかっているのかっ！！」

『黙れっ！』

ビームサーベルを抜き、フリーダムに斬りかかる。

しかしフリーダムはビームシールドで、斬撃を防いだ。

その間にも、デストロイが学園に向かい続ける。

焦りながらも引き離そうと、フリーダムはインパルスの腹部を蹴り飛ばした。

それと同時にデストロイの椀部が、フリーダムに向けビームを放つ。

「っ！！」

リリィは舌打ちをしながらも、インパルスにビームライフルを撃ち続ける。

（束……。）

（何？）

（ここからは別行動だ……。）

（……わかったよ、リリィちゃん。）

一対二では不が悪すぎる。

学園からもゴットフリートでデストロイに応戦するが、陽電子リフレクターの前では無力も同然。

ならば瞬間最大火力がフリーダムより高い、束のレイジングハートが応戦するべきなのだろう。

元々、サードシフトの状態で撃てばよかったものの、何かがリリィにセカンドシフト、ファーストシフトの使用を封じさせた。

結果、初期状態のフリーダムで戦闘を続けることになってしまったのだ。

束を取り込みサードシフトとして機能を果たしているはずなのに、レイジングハートの機能さえ起動しない。

サードシフトの状態で、スターライトブレイカーが撃てないのだ。

シフト変化前は正常に機能していたレイジングハートが、シフト変化後に不良を起こした。

「……気を付けてね。」

そう言うと、瞬間的に束はフリーダムの背後に現れ、デストロイを追うように飛んで行った。

どうやらレイジングハート単体なら、使用可能なようだ。

「束こそ、気を付けて……。」

そう返事をし、リリィはインパルスを見る。

スラスターで体制を立て直し、ビームサーベルをマウントした。

『あんた達が居るからぁぁっ！！』

そう言いながら、何処からともなく対艦刀を取り出す。

それを片手で構え、インパルスはフリーダムに突撃した。

３７４　過去の悲劇（後書き）

レイジングハートの不調は、無理やり。

デストロイＶＳフリーダムをさせたかっただけ……。

何を書いていいのかわからない……。

……。

あ、リリィをＳＥＥＤの世界に放り込んでみたいｗ

あ、ムウさんをＩＳの世界に放り込んでみたいｗ

……思いついただけだからね？

３７５　白き翼の援軍（前書き）

インパルスＶＳフリーダム的なサブタイトルは、前に使用した為、後半登場する機体をサブタイに。

考えれば、すぐわかると思う。

Ｐ３

３７５　白き翼の援軍

対艦刀の攻撃力は高い。

突き刺すのはもちろん、普通に斬るのにも大きさや重さなどで威力が上がる。

インパルスのもつＭＭＩ－７１０　エクスカリバーレーザー対艦刀を、フリーダムはギリギリで避け続けた。

「あのままデストロイが動き続けたら、あの島にいる人間は死ぬっ！」

『それがどうしたっ！　あんただって自分の為に俺たち殺していったくせに！　今更善人ぶるなっ！』

「ちっ！」

エクスカリバーをビームシールドで軌道をそらし、右手に持つビームサーベルで逆回転しながらインパルスの東部を斬り付けようと振るう。

しかし、インパルスは斬撃を予測していたのか、ビームサーベルの間合いから離れていた。

『俺はアンタを殺す！』

そう言いインパルスはフリーダムに向けビームシールドを投げた。

（甘いっ！）

リリィはインパルスの行動にすぐ気がつき、インパルスのビームライフルがシールドに向けられるより先に、シールドを撃ち弾いたビームでインパルスのビームライフルを撃ち抜いた。

自身がしようとしていたことを先にやられ、インパルスは呆然としてしまう。

その隙を見逃すリリィではない。

簡単に懐に入りビームサーベルを一閃、インパルスの腕と背部ユニットの翼を斬り裂いていく。

続けてシールドの先端に開いた隙間で、残った椀部の付け根を挟む。

これによりインパルスの、椀部稼働が制限したどころか、肘から先以外動かなくなった。

流石に無理矢理ねじ込んだためか、インパルスの接続箇所が火花を散らし始める。

『くっ！』

インパルスが舌打ちしながら、バックパックをパージしコアスプレンダーが飛び出す。

「……使い物にならないと思ったら、ポイって……。」

少しばかり呆れながら、動かなくなった機体を見る。

（……ま、その内戻ってくるでしょ……。）

束はデストロイのミサイルを避けながら、応戦していた。

（ミサイルの数が多い……。　これじゃぁ、スターライトブレイカーを撃とうにも撃てない……。）

スターライトブレイカーを撃つためには、周囲に拡散したビーム粒子を収束しなくてはいけない。

それは、束を守っているフィールドも含んでいる。

（……チャージは１２秒で終わるけど、それまで何もしないとは思わない……。　ゴットフリートでデストロイを抑えても、腕は自由……。）

どう動いても、確実に相討ちしかなかった。

（やっぱ、リリィちゃんがいてくれないと……。）

流石にフリーダムを抑えたような、捕獲はデストロイの大きさには使用できないだろう。

だからこそ、束は必殺の一撃を使えずにいた。

（……大口を叩いておいて、何もできないんじゃ……。）

悔しそうに唇を噛み、デストロイに収束砲を放つ。

バラエーナプラズマ収束ビームとサイズ同様のビームが、デストロイに向け放たれた。

しかし、当たり前のように陽電子リフレクターが砲撃を防いだ。

『篠ノ之博士。』

束は聞き覚えのない声に呼ばれ、モニターを見る。

通信をされているようだ。

仕方なしに、束は通信をオープンにする。

だが、応答するということはしない。

レイジングハートに通信をつなげれる相手は限られており、あまり聞かない声ということはシュヴァルツェ・ハーゼの誰かということだ。

『ＩＳ学園に高速で飛来する機体があります。　数は不明、先頭の機体は恐らく第三世代機。』

その言葉に、束は眉を潜めた。

『戦闘中域への到達予測時間は、残り１８秒。』

敵か味方かわからない状態で、余計な不安事項が増えることは束は苛立った。

最悪ハッキングし、機能を不完全でも停止させようと考える。

不完全な停止は基本的にバグとして認められ、ＩＳは緊急停止し海に落ちるだろう。

束は砲撃を続けながらも、そのＩＳの姿を探した。

『うち一機の機種特定。　……これは！』

その言葉より前に束の目は白い機体を捉えていた。

白い機体が砲撃し、ミサイルを撃ち落としていく。

『アメリカ軍所属、シルバリオ・ゴスペル……。』

375　白き翼の援軍（後書き）

これ、真面目にリリィ以外のキャラを書いたら、もっと凄い文字数になると思うんだ……。

なぜに、シルバリオ・ゴスペルがきた……。

まぁ、少し前に「引き取ろうか？」的な発言、リリィがしちゃったからね……。

いや、多分全く違うと思うけど。

災厄のことを公表し……、やば、ありえそう……（ー＿ー；）

どうしよっかな？

あ、アークエンジェルとかいる？

そろそろ登場する機体はあるけどね。

フリーダム、プロヴィデンスがいるのに、なぜジャスティスがいないの？

……出すか。

まぁ、ジャスティスの伏線っぽいのは、少し書いてたけど……。

＞ｉ３７０６７―３０４５＜

ということで、7時間近くちょくちょくとMGインフィニットジャスティスを……。

そろそろ登場だよ～☆

376　ナターシャとエンジェルズ（前書き）

少し時間を戻します。

とは言っても、束がシルバリオ・ゴスペルを見つける数分前くらいですが……。

P3

376　ナターシャとエンジェルズ

シルバリオ・ゴスペルはＩＳ学園付近に設立された、所属篠ノ之配属シュヴァルツェ・ハーゼ部隊に連絡を取ろうとするが、距離が離れすぎ
ているためか通信がうまくつながらない。
だが、どちらかというと電磁妨害を受けている形跡があり、遠距離通信ができない方が、ナターシャにとっては納得できた。
「……これは近づかないと、通信ができそうにないわね。」
そう呟きながら、さらに速度を上げた。
軍属用のＩＳとして作られたシルバリオ・ゴスペルは、エンジェルダウン作戦より前から膨大なエネルギーを持っている。
ほんの少しの加速で、エネルギーが無くなるということはない。
（電磁妨害と言ったら、奇襲とかの基本行動だけど……。　一体何が。）
『そこのＩＳ、止まりなさい！』
ナターシャが電磁妨害について考えていると、後方から大きな声が聞こえる。
機械で拡声された声だ。

シルバリオ・ゴスペルは、モニターで後方を映し出す。

そこには白を基本とし、所々グレーや朱色で構成されたＩＳが三機編隊でシルバリオ・ゴスペルに近づいていた。

ナターシャはその機体に見覚えがなかったため、無視しようかと思ったが、全機体の肩アーマーに見覚えがあるエンブレムを見つける。

仕方なく減速し、追ってくる三機がシルバリオ・ゴスペルに並走する形をとった。

『こちら国際ＩＳ委員会直属、特殊ＩＳ部隊エンジェルズのバルサ・テルクミウス中佐です。』

『同じく、カリス・テルラハ少佐だ。』

『水無月瀬津子（みなつきせつこ）少佐です。』

「……シルバリオ・ゴスペル操縦者、ナターシャ・ファイルスです。」

突然の事態に、ナターシャは一瞬唖然としてしまった。

『この空域でのＩＳ飛行は、国際法で違法です。』

バルサと名乗った女性がそう言うが、ナターシャは気にしない。

『これは重罪ですよ、ナターシャ・ファイルス……。』

「こちらはアメリカと日本、それとＩＳ学園の許可は貰ってでの上で長距離移動しています。　国際法の問題には抵触しないはずですが？」

少しばかり皮肉をいれ、ナターシャは返答した。

『だから言ったじゃねぇか……。』

カリスが呆れた様に呟く。

「……それはいいんだけど、そっちからＩＳ学園に通信できるかしら？」

『どうしたってんだ？』

「……長距離通信がつながらない。　おそらく、学園微弱ながら電磁……、通信妨害を受けていると思うの。」

『『『っ！？』』』

ナターシャの言葉に三人は驚き、通信をつなげる。

しかし繋がらないのか、バルサは首を横に振った。

「予想だけど、恐らく災厄関連……。」

『……なんというか、アレだな。　篠ノ之博士を狙ってるんじゃないのか？』

『ありえそう……。』

「ともかく、私はＩＳ学園に急ぐから……。」

そう言って加速しようとした瞬間、シルバリオ・ゴスペルのモニターにノイズが走る。

ナターシャはモニターのキーを触れ少しばかり弄ると、モニターのノイズが少しだけ薄れた。

『……ルツェ・ハーゼ。　シルバリオ・ゴスペル、聞こえますか。繰り返します、こちらシュヴァルツェ・ハーゼ。　シルバリオ・ゴスペル、聞こえますか。』

「こちらシルバリオ・ゴスペル、聞こています。」

ナターシャが返答する。

どうやら、通信可能圏域まで到達したらしい。

全員少しだけ安堵した。

「ＩＳ学園が電磁妨害を受けたのか、通信がつながりにくかったけど、どうかしたの？」

『……今現在、学園は襲撃を受けています。』

その言葉に、再度ナターシャ以外の三人が凍りつく。

『敵の数は不明ですが、内一機はアメリカから奪取された、第二世代のＩＳアラクネと判明。　他は災厄です。』

「……了解。　ここから一番近い戦闘区域は何処かしら？」

『戦闘する気ですか！？』

「援護だけよ。」

『……二時方向、距離２．３００。　篠ノ之博士が戦闘している空域です。』

その言葉を聞くやいなや、ナターシャは進路を聞かされた方角に向ける。

『私たちも行くわよ。』

『『了解。』』

バルサの言葉に二人は返事し、シルバリオ・ゴスペルの後について行った。

376　ナターシャとエンジェルズ（後書き）

ちなみに、適当ｗ

Ｗｉｋｉから

アラスカ条約
正式名称は、「ＩＳ運用協定」。ＩＳ条約とも呼ばれる。
軍事転用が可能になったＩＳの取引などを規制すると同時に、ＩＳの技術を独占的に保有していた日本への情報開示とその共有を定めた協定。ＩＳ学園もこの協定に基づいて設置されている。

軍事転用に可能となった……。

ついでに、ＩＳをスポーツとして……。

これは普通に考えて、軍隊がＩＳ持つこと自体違法になるんじゃ……。

んじゃぁ、シュヴァルツェ・ハーゼは？

とまぁ、こんなことを少し前に話していましたね。

アラスカ条約の詳しいことがわからない分、何も言えないけど……。

お腹すいた……（´・ω・`）

Ｔｗｉｔｔｅｒでプラモデルや、新規リリィイラスト等の写真やスクリーンショットを載せています。

興味があったら、覗いてみてね？

ついでに、フォローもしてね（笑）

お正月用（１／１）に、イラストやシナリオ（二次の二次だから、三次創作に当たるかな？）とか書いてくれる人いませんかね？

載せて、お正月用というふうにしたいんですけど……。

はっきり言えば、お正月用がかけるとは思えないための苦し紛れの提案。

もちろん、新年早々の話に載せます。

もしよろしかったら、お願い致します。

３７７　抑える者達（前書き）

ナターシャ＆シルバリオ・ゴスペル登場。

なぜ登場したかって？

サブキャラで強いからだよ！

お正月用（１／１）に、イラストやシナリオ（二次の二次だから、三次創作に当たるかな？）とか書いてくれる人いませんかね？

載せて、お正月用というふうにしたいんですけど……。

はっきり言えば、お正月用がかけるとは思えないための苦し紛れの提案。

もちろん、新年早々の話に載せます。

もしよろしかったら、お願い致します。

３７７　抑える者達

戦闘中域の半分というところで、ナターシャの目にデストロイの姿が映った。

学園に向け、少しずつ移動している。

それを止めるため戦っているのは、束のみ。

フリーダムは遠くでインパルスと戦闘している。

「……シュヴァルツェ・ハーゼ、こちらシルバリオ・ゴスペル。機体識別コードを送る。」

『了解。　受け取り後、全機に味方識別として送らせていただきます。』

「お願いね……。」

ナターシャは識別コードの転送後、束を見る。

明らかにミサイルの多さが、デストロイへの攻撃を妨げていた。

『うぉ、本物のフリーダムだっ！』

後ろでカリスが、遠くにいるフリーダムを見てはしゃぐ。

気のせいでなければ、ＩＳのカメラを使用してフリーダムを撮影しているだろう。

うるさそうにカリスの行動を見るバルサと瀬津子を放置し、ナターシャはデストロイが放ったミサイルを確認する。

徐々に戦闘中域に近づくために、確実に確認できた。

（……できるわよね。）

そうナターシャは心の中で、シルバリオ・ゴスペルに問いかけた。

それに応じるかのように頭部フェイスが光る。

翼を大きく広げ、シルバリオ・ゴスペルは翼の中心でエネルギー体を作り、ミサイルに向け放った。

ＰＳ装甲とは違いミサイルは通常弾頭なため、エネルギー砲撃で消滅する。

デストロイがシルバリオ・ゴスペルを確認すると、ミサイルとともに円盤周囲の砲門を撃ち始めた。

『うわっ！？』

『あ、危ないわね……。』

『危険……。』

シルバリオ・ゴスペルの後方にいた三人は、回避したビームに当たりそうになる。

「こちらシルバリオ・ゴスペル、ナターシャ・ファイルス。　援護します篠ノ之博士。」

ミサイルがシルバリオ・ゴスペルに向け放たれ続けた。

そのミサイル全てをフリーダムみたくマルチロックオンの様に補足し、翼から無数のエネルギー弾を撃ち出し迎撃する。

エンジェルダウン作戦時のような無差別砲撃ではなく、確実にミサイルだけを狙った乱れ撃ちだ。

『……分かった。　１７秒……。　発射と位置取り、チャージ含めて１７秒持たせてっ！』

フリーダムと同等とは言えないが、開発目的はフリーダムの再現。

それ故に束は、シルバリオ・ゴスペルの援護に頼る事にした。

『スターライトブレイカーで、陽電子リフレクターごとデストロイを貫く！』

そう言うと、迫り来るミサイルを回避しながらレイジングハートをサードシフトに移行する。

バリアジャケットと言うなのＩＭＳが形を変え、周囲に散布する粒子を増大させた。

「……デストロイは。」

フリーダムが周囲のレーダーを確認しながら、デストロイを探す。

インパルスとの戦闘でデストロイから引き離されたのか、それともデストロイがかなり移動したのか、結構距離が開いていた。

レイジングハートの識別信号を頼りに、フリーダムはブーストを最大展開し移動する。

「……いた。　他はシルバリオ・ゴスペルとムラサメ、って何でムラサメがいるの？」

少しばかりムラサメがいたことに、リリィは疑問を覚えた。

束に迫り来るミサイルを、シルバリオ・ゴスペルがエネルギー弾で撃ち落としていく。

円盤周囲のビーム砲塔も危険だが、陽電子リフレクターが起動している状態では砲撃できない。

そのためムラサメ3機は、できる限りデストロイにレーザーライフルを撃ち続ける。

「カードリッジフルリロード、オートパージ……。」

そう言いながら、束の前方とブラスタービットにエネルギーを供給していく。

薬莢が吐き出され、空になった弾倉が海に落ちる。

拾う暇などない。

束はすぐに腰から、追加の弾倉をレイジングハートに装填する。

「フルリロード！」

更に薬莢が吐き出される。

（……ターゲットロックオン。）

ブラスタービットの射撃角度を修正しながら、最終調整をする。

その間にも腕などが飛んでくるが、シルバリオ・ゴスペルの圧倒的な火力は腕の火力を上回っており、砲撃さえさせないほど抑えてい

た。

ブラスタービットもデストロイの砲撃をムラサメが押さえ込んでいるため、時間がない中での最高の状態を保っている。

レイジングハートの弾倉を反動に備えるため持ち、束は杖を振り上げた。

３７７　抑える者達（後書き）

デストロイ終わるんじゃね？

そういう思いで、胸が……。

学園に到達せずに、ＭＳにもならずに終わるのか……。

というか、インパルスとデストロイをもうちょっと伸ばしたかったかな？

流石にリリィ相手だと、ほぼ瞬殺って……（－＿－；）

ダメだ、バランスが……ｏｒｚ

Ｔｗｉｔｔｅｒで、一応イラストを描き終えました？

さて、他にもイラスト描いてくれそうな人いないかな～？

それか、シナリオ……。

378　スターライトブレイカー（前書き）

デストロイ涙目w

だが、陽電子リフレクターは……。

P3

378　スターライトブレイカー

チャージは四機の支援があったため、直ぐに終わった。

振り上げた杖を、束は目の前にある球体状の光球に向け振り下ろす。

「スターライト……、ブレイカー！！」

その叫びとともに、シルバリオ・ゴスペルとムラサメは瞬時加速でデストロイから距離を離す。

シルバリオ・ゴスペルに押さえ込まれていた腕が、自由になり束に向かう。

しかしその軌道は、スターライトブレイカーの射線上。

溜められたビームがデストロイに向かうのと同時に、陽電子リフレクターを展開するまでもなく腕は破壊されていく。

デストロイを囲むかのように設置されたブラスタービットが、束が放つのと遅れてスターライトブレイカーの砲撃を開始した。

「っ……！」

第規模なビームの本流を感じ、デストロイは陽電子リフレクターを展開しスターライトブレイカーを防ぐ。

スターライトブレイカーと陽電子リフレクターが拮抗し、スターライトブレイカーのビームの奔流が海を焼き、海水を蒸発させながら、

衝撃波の様な風を起こす。

津波のような感じに海が荒れ、スターライトブレイカーの威力と陽電子リフレクターの防御性能を表している。

『うぉっ！？』

『っ！？』

『これは……。』

ナターシャは一度見ているから驚いてはいないものの、１２カートリッジ使用のスターライトブレイカーに、呆れを隠せないようだ。

エンジェルダウン作戦時は６カートリッジだけのスターライトブレイカーであり、今回のように１２もない。

そのため威力が、倍近くまで上昇しているのだ。

呆れても仕方がない。

「……まだ、足りないの。」

『『『『っ！？』』』』

既に普通のＩＳだったら、シールドエネルギーを突き抜け絶対防御がガラスのように崩れ、登場者ごと一瞬で灰燼となす威力だ。

それでも束は、まだ足りないといった。

「……姿勢制御が。　でも、やるしかない……。」

そう呟き、束はレイジングハートからマガジンを引き抜く。

スターライトブレイカーを放っている最中に、マガジンを取り替えようとしているのだ。

姿勢制御が少しばかり乱れるが、束はスカートから新しいマガジンを取り出すと、レイジングハートに差し込む。

「オールカードリッジ、リロード！」

その言葉にレイジングハートが薬莢を吐き出し、同時に多くのビーム粒子をスターライトブレイカーに転送する。

これで合計１８発のカードリッジを使用したことになり、スターライトブレイカーに込められたエネルギーは、レイジングハートの核動力に加えＩＳ７２機相当が足された事になった。

「っ！」

そしてようやく陽電子リフレクターが切れたのか、スターライトブレイカーがデストロイに直撃した。

桜色の奔流が、デストロイを焼く。

誰もが終わったと感じた。

「まさか……。」

『『『そんなっ！？』』』

だが、デストロイはスターライトブレイカーの直撃を受けながらも、破壊されず動いていた。

「……そうか、捨てたんだね……。」

そこには、人型の巨人がいた。

デストロイは可変機であり、甲羅を捨てることによりスターライトブレイカーを防ぎきったようだ。

だが、それでも無理やりな回避方法であったためか、デストロイの巨体から火花が散り、海に落ちていく。

装甲が厚ければビームの貫通力も少なからず変わるのは当然のこと、大型であればなおさらだ。

流石にスターライトブレイカーには、完全に耐えきることはできなかったが、人型の形だけは保てたらしい。

流石に陽電子リフレクターは発生装置もホバリングのためにブースターも、スターライトブレイカーにより完破したようだが。

「トドメ行っておく？」

「……くるのが遅いよ、リリィちゃん……。」

水没するデストロイから、束はようやく来たフリーダムに目を移した。

378　スターライトブレイカー（後書き）

最後の最後で、デストロイを完全消滅させなかったのは……。

まぁ、いっか。

なぜか、スターライトブレイカーで完全貫通しなかったという状況。

気まぐれで高威力にしたのに、破損箇所は背部ユニットと機体各所のみ……。

あと腕。

ちょっと、ご都合過ぎた？

どうでもいいんだけどね。

３７９　砲撃が拮抗した時の衝撃波（前書き）

詰まったｏｒｚ

だが、これで少しなんとかなった。

Ｐ３

379　砲撃が拮抗した時の衝撃波

デストロイの陽電子リフレクターと束のスターライトブレイカーが拮抗した影響は、ラウラ達にも襲いかかった。

「っ！？」

「何っ！？」

必死にバーニアを作動させ、姿勢制御を取る。

衝撃波という暴風のおかげか、ステルスを張っていた機体も姿勢制御を取るためにバーニアを更かしたことにより、熱門が引っかかった。

そんな中、ラウラはプロヴィデンスから引き離される。

（不味いっ！）

姿勢制御がままならない状態で、プロヴィネンスを押さえ込むのは無理があったようだ。

ワイヤーで固定しているが、ノワールパックの羽が衝撃波を直に受け、プロヴィネンスから引き離されそうになる。

ノワールとプロヴィネンスの機体が、少しづつ離れていく。

（流石に動力差は補ってないようだな。）

クルーゼはノワールが徐々に衝撃波で離れていく中、背部バックパックのブースターを最大に展開する。

「くっ！　貴様っ！！」

頑丈なワイヤーが、衝撃波によって痛み弛む。

そして何の偶然か、プロヴィネンスの大型ビームライフルの銃口がノワールを捉える。

「っ！？」

ラウラは目を見開き、ワイヤーをパージした。

ワイヤーでプロヴィネンスから、離れられないためだ。

すぐさま衝撃波に乗るように、ノワールストライカーの翼を大きく広げ風を受ける。

そのまま大型ビームライフルの射線から外れようとするが、それよりも先にプロヴィネンスは引き金を引いた。

崩壊してもおかしくない建物に、衝撃波が伝わる。

だが、それでもクローディヌは一夏の首を締め付けたままだった。

（……っ、一夏を助け出す方法は……。）

少し焦りながらも、千冬は考え続ける。

先程のクローディヌの言葉が、一夏を助け出すための思考を邪魔をし続け、千冬は考えをまとめることができない。

『なぜ貴様は、白騎士となり世界を混乱に陥れた……。』

数分前に聞いた言葉が、千冬の耳にこびりつき再度千冬に問いかけた。

（私が白騎士に乗った理由……。）

一夏が苦しむのを助け出す方法を考えながら、千冬は思い返す。

（……最初はアイツの頼みだった。　それを私は何も考えず……。
……いや、アイツのせいじゃない。　私自身が、そう望んだからだ。）

残った光刀・暁を握り直す。

もちろんクローディヌは、千冬が武器を握り直したことに気がついていた。

（私達姉弟を捨てた、両親（アイツら）を見返したかった。　こんな世界なら壊してやりたいとも感じた……。）

膝に手をつき、ゆっくりと立ち上がる。

（……その結果が白騎士に乗り、世界を混乱させた……。　結局、私は親に捨てられた逆恨みを世界に住む関係の無い人間に晴らしたにすぎない……。）

クローディヌは、一夏の首を締め付けるのをやめる。

千冬の目は絶望だけではなく、別の遠い場所を見ているような雰囲気を纏っていた。

そんな千冬に、肉親の苦しむ姿は効果があまりないだろう。

だがクローディヌは締め付ける強さを止めただけで、結局一夏の首を絞めている手が緩んだわけではない。

『貴様達がしたことで、どれだけの人間が苦しみ、どれだけの人間が死んで逝ったか、なぜ……。　なぜ考えなかったぁぁっ！！』

（何も考えてなかったわけじゃない。　……ただ、私達だけが不幸になることが許せなかった。）

足取りが危うくも、白騎士は立つ。

（その先に何かが起こり、何かが変わると期待しながら、私は乗ったんじゃないか……。）

「……。」

千冬の行動が不明なため、クローディヌは下手に動くことができない。

ただ、千冬の姿を眺めるだけだ。

（その結果が、今（コレ）だ……。　世界に散蒔いた不幸の一部を、仕返しされてるだけだ……。　私が嘆く理由にもならない……。）

３７９　砲撃が拮抗した時の衝撃波（後書き）

今回は何も考えてなかった。

お腹すいた動けない↓Ｔｗｉｔｔｅｒで「お腹すいた。」↓Ｂｏｔに心配される（流石Ｂｏｔ、と思う私）↓作る気力もない、外食に行こう↓注文する↓構想まとめ↓注文したのが来た↓ゴハンダニャー～（＝＾・・＾）へ　＜。）））彡↓食後に頭が回転し始める↓再度構想まとめ↓結果、ｇｄｇｄでもいいから一話埋めると言う。

こんな感じで、適当に書いた話です。

（´ー、）フゥー・・・

次話は恐らく、待っていた人がいるかもしれない事が……。

というか、これ何ヶ月目？

４月１７日からだから……。

５，６，７，８，９，１０，１１，１２……。

８ヶ月目……。

380　戦争という真理（前書き）

寒いですね。

やってられないよ……。

P3

380　戦争という真理

立った白騎士を見て、クローディヌは目を細める。

「もうやめなさい、クローディヌ・サミナード。」

突如、クローディヌの後ろで楯無はそう言う。

ミステリアス・レイディが動かないため、強制パージしたらしく、楯無は動かなくなったミステリアス・レイディの前に立ち、クローディヌを見つめる。

「あなたがしようとしている事は、ただの逆恨みよ……。」

「……。」

「……それじゃぁ、貴方と同じ人を作り出すだけ。」

ＩＳが動かないとすれば、残る手段は己の身体を使った方法だけだ。

そして離れていても行えることは、銃撃か話すことしかない。

楯無は言葉でクローディヌを止めようとしたのだ。

「確かに貴方は、篠ノ之博士達と織斑千冬によって奪われた。　けど、それをよく知っている貴方が……。」

「綺麗事ばかり並べるな……。」

楯無の言葉に、クローディヌは振り返る。

「貴様とて他人の不幸を足蹴にし、その上で幸せを貪っているだけだ……。　いくら綺麗事を言っても、不幸を撒き散らした者を生かしておくほど、私の怒りは抑えられない。」

「それでも……。」

「なら聞こう。　貴様は今まで、どれだけの男性スパイを捕まえてきた。」

「……え？」

今にも椀部にアンロックユニットとしてマウントされている、ファントムが楯無に向けられうちそうな空気が漂う。

「……どれだけ職を失った男性をこき使い、スパイとして捕まえられても切り捨てることができる人間を、捕まえてきたのかって聞いてるの……。」

その言葉に楯無は愕然となる。

楯無自身理解していたつもりだが、クローディヌの過去を聞いたあとでは、感じる重みが違う。

圧倒的な社会的地位を無くした男性を、女性は奴隷のように扱った。

それの延長線上に、職を無くした男達のスパイ活動がある。

「「もうやめろ。」「そんなことをしても意味はない。」と言い、

この社会情勢で止められると思う？」

その言葉で楯無は何も言えなくなる、

「戦いは愚かしいから止めろと言っても、既に戦火は引かれた。白騎士事件という、今もなお続く世界情勢を大きく変化させた戦争がっ！」

「っ！」

クローディヌの言葉に、楯無は気圧される。

「もうやめようと言い、誰がやめる。「はい、やめます。」と言い背を見せれば直ぐ様撃たれる戦場で、言葉などか通じるか？」

一夏から手を離し、一夏は重力によって落ちる。

「戦争には制限時間も特典もない……。スポーツやゲームみたいには、ね。」

そう言い、一夏の首を持っていた手にファントムが握られる。

「なら、どうやって勝ち負けを決める？　何処で終わりにすればいい？」

一歩ずつクローディヌが、楯無に近づく。

無防備ながらも、一夏から縦無にターゲットを変えたのだろう。

千冬を見ていない。

「敵である者を、すべて滅ぼして……、かね？」

その言葉と共に、楯無の胸にファントムのデザート・スカイを突きつける。

楯無の胸の膨らみに、ファントムの先端が押し込み形を変えた。

「互いの主張がぶつかり合い分かり合えない、共存できない世界での終わりなんかは、どちらかの主張を無くす以外方法はない。」

「……。」

「ならば戦うしかなかろう、互いが敵である限り……。」

そう言うと、クローディヌはファントムを瞬間的に横に構える。

一瞬で懐に飛び込んだ白騎士が光刀・暁を振り下ろし、グレイプニールのファントムがそれを防ぐ。

「どちらかが滅びるまでなっ！」

≪システムロック解除≫

≪機体装甲板の破損状況確認≫

≪エネルギー伝達系統システム再調整≫

≪起動≫

静かにＩＳのコアが、機体情報を追加して行く。

本来あるべき姿に戻るように。

３８０　戦争という真理（後書き）

予定通りクローディヌに、「戦争には制限時間も特典もない……。スポーツやゲームみたいには、ね。　なら、どうやって勝ち負けを決める？　何処で終わりにすればいい？　敵である者を、すべて滅ぼして……、かね？」という、虎のセリフ言わせれた～♪

Ｔｗｉｔｔｅｒでも呟いたけど、その時にこの話を書いていたというｗ

新年早々にも投稿できるかな？

３８１　白騎士と言う存在（前書き）

ふぅ。

書き終わったのが、深夜という時間帯。

Ｐ３

381　白騎士と言う存在

白騎士がグレイプニールに瞬時加速で接近し、光刀・暁を振り下ろすのを見て、楯無は一夏に駆け寄る。

グレイプニールがファントムを掲げ、アンチビームシールドで防ぐ。

しかし千冬は光刀・暁を振り下ろし、直ぐ様肩アーマーでグレイプニールにタックルを与える。

「ちっ！」

流石にショルダータックルは、アンチビームシールドで防ぐとことできても、吹き飛ばされる事は防ぐととは出来ない。

結果として、クローディヌはスラスターで倒れ込まないよう調整しながら、バーニアで姿勢制御を取り、白騎士から離れた。

そのため一夏から離れることになる。

「……楯無、機体を置いて逃げろ……。」

「っ！」

「ち、ふゆ……。　姉……。」

「早く行けっ！　今のクローディヌは、恐らく昔の私と同等か、それ以上だ……。」

その言葉に、楯無は目を見開く。

そして二人に背を向け、千冬は弾き飛ばされた雷刀・桜を拾う。

（……死ぬ気で行くしかないな。）

半壊した頭部が煩わしいく感じるほど、千冬は焦っていた。

一夏の死は一応逃れたが、戦闘で巻き込まない自身が千冬にはない。

「……アルカディアスのパージ。　エネルギーを機体接触伝導システムに変更。」

そう言うとファントムのビームサーベルを展開していたアルカディアスの、固定ロックが解除されグレイプニールの手に筒丈の武装が握られる。

アルカディアスは取り外しができる事に、千冬は毒づく。

複合兵装は弱点がないように見えるが、接近戦での使用しづらいのは目に見えている。

いくらアンロックユニットなどで、重量などを軽減したとはいえ大きさだけはどうにもならない。

だからこそ、千冬は振り回しやすい二刀で高速近接格闘を仕掛けようとした。

だがファントムから取り外された武装は、千冬の想像を裏切る。

（踏刀は両方使えない、二刀もそろそろ、オーバーロードする可能性があるな……。　だからといって雪片を使えば、速さで負け隙を生み出してしまう……。）

歯ぎしりしそうなほど、歯を噛み締める。

（なら、私が行くけど？）

「っ！？」

突如聞こえた声に、千冬は驚き当たりを見渡す。

流石に不可思議な行動を起こされ、クローディヌは千冬の隙を攻撃しなかった。

（落ち着きなさい。　探しても見当たらないよ！）

リリィに似た口調だ、千冬は感じる。

（そりゃね。　似てるのは仕方がない……。）

（思考が読まれてるっ！？）

なるべく顔に出さないように、千冬は驚く。

（……さて、驚かせてばっかしじゃダメだね。　では改めまして、戦友。　私の名前は白騎士。）

その事に、千冬は目を見開いた。

今度こそ完全に顔に出してしまう。

「……。」

そのせいか、クローディヌは摺足で少し前進する。

（さて、戦闘中に話し合いはいけないよね。）

白騎士の言葉と共に、千冬の意思とは関係なく構えを取る。

勝手に動いたことに千冬は混乱しつつも、冷静になろうと努力した。

しかし混乱の方が大きいのか、なかなか冷静になれない。

二刀をアンビデクストラス・フォームにし、一気に踏み込む。

（おまっ！？）

（まぁ、見てなって。）

クローディヌは白騎士の早い行動に、遅れて接近する。

互いに武器を振りかぶるが、白騎士はクローディヌの振り下ろすビームサーベルをくいかがり、クローディヌの横を抜けるとともに、腹部に蹴りを食らわせた。

「ちっ！」

シールドバリアが防ぐが、白騎士は気にしない。

そのまま抜け、後ろを取るかと思えば距離を離す。

流石にこの行動は、千冬もクローディヌも理解できなかった。

だが白騎士は二人を無視し、雪片をパージし振り向きざまクローディヌに向け蹴り飛ばす。

流石に突然の攻撃方法変化に、クローディヌは下手に対処ができない。

しかしそれでもクローディヌは、回避し続け反撃の糸口を見つけようとした。

３８１　白騎士と言う存在（後書き）

白騎士登場。

この戦闘で、白騎士がどうなるか……。

まぁ、分かりそうだけどね……。

白騎士の設定は、未だ調整中。

３８２　白き騎士は赤き騎士へ（前書き）

さて、そろそろクローディヌ編も終盤。

白騎士が変化する。

Ｐ３

382　白き騎士は赤き騎士へ

ファントムからパージしたビームサーベルを振りかざし、クローディヌは接近戦に持ち込もうとする。

それ以外、クローディヌに有効な攻撃手段がない。

しかしそれを白騎士は簡単に避け、特殊空拳みたくカウンターを決め込んでいく。

その光景を千冬は、ただ見ているしか出来なかった。

「……どういうこと。」

流石にクローディヌは、この光景の意味が分からなかった。

千冬とは思えない戦闘方法なのに、千冬と戦っている。

その不可思議差が、クローディヌを一時的に弱体化させていた。

（もともと私は、フリーダムの兄弟機として製造されていたんだよね……。）

（兄弟機だと？）

一旦、クローディヌと白騎士は互いに後退し、手にもっているサーベルを構え直す。

（私は形式番号上、フリーダムの兄なのかな？　それにあたるけど、

実際にはフリーダムの方が兄なんだよね～。）

（はぁ？？）

白騎士の言葉に、千冬は眉を潜める。

お互いイグニッションブーストで、辻斬りのように斬り合う。

斬り抜けたら足で急制動をかけて直ぐ様、イグニッションブーストで斬りにかかる。

白騎士はＴＰ装甲を使っているが被弾しているため、千冬の安全確保のために最大ではない。

クローディヌはシールドエネルギーと絶対防御を最大展開にしているのか、ＰＳ装甲並みに無茶苦茶な起動と速度を出している。

だが流石にブースターとスラスターがもたないのか、速度を落とした。

結果、互いの速度は同等のまま、斬り合う事になる。

再度、ビームサーベル同士がぶつかり合う。

（ＩＭＳ－０１という形式番号は、一応ＩＳとしてのコアだね。ちゃんと、私にも形式番号があるよ。）

そう言いながらビームサーベルをずらし、開いたクローディヌの腹部に蹴りを決め込む。

これだけの戦闘をしているのに、いまだグレイプニールのエネルギー切れが見えない。

むしろフリーダム同様に、エネルギー切れという概念がないのではと、千冬は思い始めた。

しかしそんな些細なことより、千冬は白騎士の言葉が気になる。

（騎士って、王に忠誠を誓った存在だよね？）

突如そう言い、白騎士は床に刺さっていた雪片を拾う。

（王の行動が正義だと信じ、己を剣として動かす……。）

雪片を後ろ越しではなく、背部のアンロックユニットの間にマウントした。

雪片が形を変え、アンロックユニットと共に変形していく。

（見せてあげるよ、私の本当の姿を……。）

（本当の姿、だと……？）

廊下の端で一夏と楯無は、変形していく白騎士の姿を黙ってみた。

（じゃぁ、行こうか。　千冬……。　ＺＧＭＦ－Ｘ１９Ａの最終調整を終了し、起動……。）

白騎士の言葉とともに、白騎士が千冬ごと光に包まれる。

≪不完全の半永久機関を、完全修正し半永久機関として再登録≫

≪脚部踏刀を、ＭＲ－Ｑ１５Ａグリフォンビームブレードへの修正完了≫

≪光刀・暁と雷刀・桜を、ＭＡ－Ｍ０２Ｇシュペールラケルタビームサーベル≫

≪雪片・真打とアンロックユニットの変化終了≫

≪ファトゥム０１として、名称と使用方法を変更≫

千冬の頭の中に、様々な情報が入る。

そして光が収まったとき、白騎士は全く別の機体になっていた。

フリーダムに似たデュアルアイの頭部や、装甲の構成がＩＳから完全にフリーダムに近づいている。

白かった装甲も、完全に赤系が占めている状態だ。

≪ＺＧＭＦ－Ｘ１９Ａ　インフィニットジャスティス≫

≪正式機体形式番号変更≫

≪ＩＭＳ－０１－０１　ＺＧＭＦ－Ｘ１９Ａ　インフィニットジャスティス≫

「……。」

「……新規、装甲……。」

千冬とクローディヌは、白騎士の変化した機体に唖然としていた。

背中に付いているリフターも、既にアンロックユニットとしての形は無い。

全くの別機体だ。

「じゃ、行きましょうか。」

そう白騎士が言うと、ビームサーベルをアンビデクストラス・ハルバードにする。

「インフィニットジャスティス、敵の殲滅に出る……。」

382　白き騎士は赤き騎士へ（後書き）

ということで、インフィニットジャスティスの登場。

え、別のキャラじゃないのって？

武装を、ほぼ格闘戦使用にしたのや、踏刀、小型の半永久機関、アンビデクストラス・ハルバードモードとか、完全にインフィニットジャスティスを連想して、白騎士登場時から来てましたが？

踏刀は、どっちかというとイージスですけどｗｗｗｗ

まぁ、結構前からジャスティスは形が違うだけで、登場してましたとさ♪

３８３　見透かす者（前書き）

実はプロット作りの為のコノ作品です、と言ったらどう思う？

事実、それに一番近いんだけど……。

Ｐ３

３８３　見透かす者

フリーダムより一回り大きなビームサーベルが、反った刃を形成する。

一目見ただけで、その刃を形成しているビームが高出力だとわかるだろう。

「っ、貴様……。」

クローディヌは咄嗟にファントムを再展開し、ビームサーベルを受け止める。

なんとかビームサーベルの斬撃を防いだが、斬撃の重たさにシールドが弾き落とされた。

アンロックユニットだからこそ、直ぐ様クローディヌの手に戻ってくるが、その隙は白騎士（インフィニットジャスティス）にとって大きい。

顔の両側から、フリーダムのバラエーナプラズマ収束ビーム砲のごとく覗かせる砲塔、ＭＡ－６Ｊハイパーフォルティスビーム砲がクローディヌに向けビームを放つ。

それをしゃがみこむことで、クローディヌはグレイプニールへの大きな被弾を避けるが、背部ポッドが貫かれ破損した。

ミサイルは全弾使用した後だったため、誘爆はなく小規模な爆発を起こすだけだ。

流石に降りおろされたビームサーベルの状態が、アンビデクストラス・ハルバード状態だったため、グレイプニールの全スラスターを最大展開し、クローディヌは強引に後退した。

普通に攻撃しに前進したら、もう一方の刃に斬り飛ばされていただろう。

「……貴様、織斑千冬じゃないな。」

後退し、クローディヌは確信をもったような口調で問いかけた。

その問いに、白騎士は苦笑を漏らす。

「正解だ……。」

その言葉に、クローディヌは千冬の攻撃方法が急激に変化したのを理解した。

今までの千冬は機体性能と自分自身の技能を過信し、通常装備の武器しか使っていない。

だが白騎士に変わると、武器だけではなく機体装甲を使用した格闘をも混ぜた、攻撃方法に変わったのだ。

インフィニットジャスティスになる前の白騎士時に、踏刀を破壊していなければ、どれほどの被害がグレイプニールに出たかわからないだろう。

「私は貴方が憎んでやまない、千冬の剣。　……と言えば、わかるよね？」

「……白騎士。」

コアに意識が獲得されていることは、クローディぬは理解はしているが、初めてコアと話したのだ。

一瞬ばかり呆然としてしまう。

千冬に至っては、フリーダムという前例があるからこそ驚きはしないが、少しづつ疑問が出てくる。

フリーダムはリリィの前世であるとともに、ＩＳではなく災厄だ。

災厄はＩＳではないため、ＩＳの前提は当てはまらない。

そうなると白騎士もＩＳではなく、災厄なのではないかという疑問がでるのだ。

今現在ＩＳの意識を確実に確認した事例はなく、現状で意識をもっている理由を「白騎士は災厄である。」という結論に変えたほうが、納得がいく。

「でも今はインフィニットジャスティスって、言った方が良いかな？」

「……ほざけ。」

赤い装甲を睨み、クローディヌは吐き捨てるように呟いた。

流石に無限の正義と言われれば、クローディヌは怒りがこみ上げて

くるだろう。

「ここで捕らえたいところだけど、後ろの怖いお姉さんが補給ケーブルを繋いだまま、私をレーザーで撃ち抜こうとしてるんだよね……。」

その言葉に通路の曲がり角からアラクネの装甲脚だけを覗かせて狙っていたオータムが、舌打ちと共に現れる。

ご丁寧に、ケーブルを出てきた瞬間にパージした。

「撤退だぁ、いいな？」

「……了解。」

アラクネの補給が終了したのか、オータムはそう言う。

「……さっさと行ったら？」

（何を言って……！？）

「上から、そういう風にしろってオーダーが来てるから……。いまなら、ミラージュコロイドで完全に、離脱できるけど？」

「追跡する可能性がある分「はい、そうですか。」と言えない……。」

白騎士の言葉に、クローディヌは警戒する。

「まぁ、どうでもいいけどね。　……あ、離脱するなら、さっきか

らエネルギーをその機体に補給し続けてる、マガクイノタチを回収しといてね？」

心底どうでもいいように、白騎士は呟いた。

その言葉にクローディヌは目を見開く。

流石に先の戦闘は、普通だったらエネルギーが切れる。

だがクローディヌは、マガクイノタチで永続的にエネルギーを補給しながら戦闘していたのだ。

つまりＩＳのエネルギーで戦闘していたのではなく、他の外部エネルギーで戦闘していたことになる。

すべて見透かされていた事にクローディヌは歯噛みし、白騎士の言うとおり離脱していった。

３８３　見透かす者（後書き）

上から……。

つまり、リリィか束からということ……。

書く事なし。

本当に新年どうしよう……（－＿－；）

あ、そうそう。

６０万文字達成～♪

ありがと～。

プロットでこれって（まだ言うかｗｗｗｗ

３８４　終わり始める戦場（前書き）

なんか、書いてることがめちゃくちゃ。

でも、そろそろ終わり。

Ｐ３

384　終わり始める戦場

「……お疲れ様。」

ノワールに迫ったビームは、その言葉と共に遮られる。

衝撃波の中、プロヴィネンスの砲撃を止めたのは、同じプロヴィネンスだった。

「ちぃっ！」

その光景に、衝撃波の中を撃ったプロヴィネンスは舌打ちする。

「……ローズ、か？」

ラウラは唖然としながら、自身を守ったプロヴィネンスを見る。

「……私以外が、ココに来て援護すると思う……？」

「あ、まぁ。　そうだな……。」

衝撃波が止んでいく中で、ローズは相変わらずの口調で答える。

プロヴィネンスが二機いる自体、ローズではないプロヴィネンスの可能性も考えていたラウラだが、どうやら考えすぎのようだ。

「んじゃ、死ね。　……亡霊。」

その言葉とともに、プロヴィネンスが貫かれる。

それも、四方からのビームでだ。

「……ドラグーン。」

シャルロットが唖然としながら、その光景を眺め続けた。

衝撃波が吹き荒れる中、ローズのドラグーンは性格にプロヴィネンスを撃ち貫く。

先程まで苦戦していた相手が、一瞬で撃たれる姿を呆然と見る二人。

「……というかＰＳ装甲持ってるんだから、多少の無茶しても……、これくらいの衝撃波は、無効化できるでしょ……。」

そう言いながら、複合シールドと大型ビームライフルもプロヴィネンスに向け撃ち始める

「再生できないように、仕込んであるから放置してもいいけど。万が一のこともあるしね……。」

そう言いながら、容赦なくプロヴィネンスを蜂の巣にしていく。

その参上に、ラウラとシャルロットは何も言えなかった。

再生能力をもっているプロヴィネンスの形が崩壊していく。

「く、私が消えても、まだ……、第二、第三の私が……。」

「何処の魔王……？　さっさと消えて……。」

その言葉を最後に、ローズは容赦なプロヴィネンスを消し去った。

「……セシル、まだいけるか？」

デュエルの装甲に傷らしい傷はないが、疲労にはクラリッサは勝てないらしい。

「まぁ、あと少しならな。　……それにしても、何機居るんだ？」

「最低で残り９機、最高で２４機だ……。」

「それは結構なことで……。」

同様にセシルも疲れているのか、周囲を見て呆れていた。

目に見える範囲には、バクゥがミサイルポッドをヴェルデバスターに向けていたり、ストライクダガーがビームライフルを構えている。

「最悪、犬の餌になりかねねえぞ……。」

セシルが茶化しながら、バヨネット装備型ビームライフルを撃つ。
しかし簡単に避けられ、ビームは地面を穿つだけだった。
「エネルギーも、心もとないしな……。」
「……その時は、逃げるしかないだろう。」
「逃げも兵法の一手、てか？」
フォルテストラの実弾武器兵装が、ほぼ無くなった事にクラリッサは歯噛みし、直ぐ様パージしてアサルトシュラウドに変更する。
「その時は、エネルギーが残ってる私が殿だ……。」
そう言いながら、近ずいてくるバクゥをビールサーベルで斬り飛ばす。
ヴェルデバスターは、その斬り飛ばされた残骸を避けるため飛び上がる。
「ま、そうならないよう、頑張りますか……。」
右肩上部の３５０ｍｍガンランチャーを撃ち、ダークダガーＬの装甲に穴を開けていく。
そして撃破を確認しないまま、スラスターで別方向を向き肩アーマに内蔵されているミサイルをばらまいた。
もちろんロックしてないため、敵機に当たる事もなく地面にあたり、

土煙を作り上げていく。

「……なら、精々頑張ってくれ。」

その土煙にまぎれデュエルはストライクダガーに接近し、ビームサーベルを胸部に突き立てた。

すぐさま引き抜き、横蹴りで別のストライクダガーにぶつけ、爆発に巻き込む。

「……だが、その前に援軍だ。」

セシルはそう言いながら遠くを見る。

その言葉にクラリッサは確認をした。

機体各部から人の肌が見える、ＩＭＳに似た機体を。

３８４　終わり始める戦場（後書き）

４００話までには、災厄編に突入したいですね～。

内容としては、リリィ（フリーダム）の災厄時代のことですね。

とりあえず、ここを真面目に書かないと、後々おかしくなりそうだし……。

ん、既におかしいかｗ

さて、今回は皆様に質問があります。

あまり設定をつける気もありませんが、聞かせていただきます。

皆さんリリィの声……、誰で再生されてますか？

「０２７（？）話ぐらいまで、ゆかりんで再生されてた～」なんて、昔の感想にありましたが、本当に今更思うとリリィの声優は、誰がいいんでしょうね？

私的にはＰＣゲーム「Ｇ線上の魔王」の宇佐美ハル的な声で、数ヶ月前まで再生されていましたから、かわしまりの……。

ドラマCDやラジオでのハル役、瑞沢渓ですねw

そうです、クラリッサの声優です。

もし「この人なんかいいんじゃない？」ていう人いましたら、感想にお願いしますね。

近々「篠ノ之リリィの声優は、誰がいいかランキング～w」的なのを、やると思いますしw

３８５　終わる人始まる過去の扉（前書き）

ちょっと無理やりですが、これで戦闘終了。

次話辺りから……。

Ｐ３

385　終わる人始まる過去の扉

「……終わったかな？」

そう呟きながら、リリィは周囲を見る。

学園祭ということ除けば、意外と静かだ。

更に騒ぎが起こったことも感知されていないらしい。

校舎になるべく離れて戦闘していたために、殆どの者が気がつかなかったのだろう。

しかし流石に演劇で使っていた建物は壊れ、内部にいた一般生徒や一般人などが巻き込まれた。

それでも騒ぎにならないということは、ＩＳ学園とアクシデントが一体化されているからなのだろう。

確かに過去、何度も災厄が生徒達の前に現れ生徒に対処させていたことから、学園はアクシデントにをなるべく生徒に対処してもらいたい、自身は無関係であるという体裁を保っているようにしか見えない。

なんとも言えない気持ちになりながらも、リリィはデストロイが沈んだ場所を見た。

『はい、学園内部から防衛圏内に敵影ありません。』

リリィの言葉にシェナスは反応し、確認したのか返答する。

「そう……。」

そう呟くと、フリーダムはシルバリオ・ゴスペルの方を向く。

よくよく見ればシルバリオ・ゴスペルも、全身装甲に近いほど肌の露出部分が少ない。

『うぉぉっ！！　フリーダムとフリーダムを模倣して作られた天使再現計画の機体が一緒にぃぃっ！！』

カリスがフリーダムとシルバリオ・ゴスペルを同時に見て、発狂しかけていた。

似ても似つかない二機だが、分かる人にとってみればわかるようだ。

エンジェルズという国際ＩＳ委員会と言う地位を使っての、情報収集の御陰かもしれないが、リリィとナターシャにとってはどうでもいいことだろう。

「所属篠ノ之は貴君を歓迎しよう。　ナターシャ・ファイルズ……。」

「……その口調は似合わないよ、リリィちゃん……。」

「生きているか～。」

セシルはそう言いながら、デュエルの胸部装甲を叩く。

それに反応するかのように、デュエルが消え中からクラリッサが現れる。

「……これはこれは、お疲れさん。」

「セシル、貴様絶対楽しんでいたな……。」

「なんのことやら～。」

セシルは今まで諜報やスパイ活動をしていた人間だ。

呼吸の乱れからスパイと気がつかれないために、息切れしてもすぐに通常の呼吸に戻すことができるだけである。

近くに来たシュヴァルツェ・ハーゼの隊員を見て、セシルは手をたたき呼び寄せる。

「よし、今からイギリスと中国、ロシアと所属篠ノ之の専用機持ちを回収作業に入るぞ～。　真摯に対応しろよ？」

その言葉と共に、上空を高エネルギーが通過した。

リリィ達は目を見開き、その光景を見つめた。

学園上空を四条の光が通過したのだ。

学園に直撃しなかっただけでもよかったものの、一同その光景に肝を冷やした。

「そんな……。」

束が唖然とし、その光条の根元を見る。

その先は海面下から放たれていた。

その場所が徐々に黒くなっていき、海水を押し上げ始める。

「これでっ！」

リリィはそう叫び、海水を押し上げ出てくるデストロイに向かう。

まだ動けるらしく、後ろに付いている円盤状のバックパックを排除

したため、重さもダメージも軽減したらしい。

『やらせるかぁっ！！』

ビームサーベルを引き抜き、半壊しかけているデストロイに向けフリーダムが迫るが、それを妨げるようにインパルスが上空から再来した。

しかしそれより先にフリーダムがデストロイの胸部砲門に、ビームサーベルを突き立てる。

そしてすぐさまデストロイから離れた。

インパルスが直ぐ様、それを追う様に軌道を変えフリーダムに迫る。

『あんたは終わるんだ！　今日、ここでぇっ！！』

シフトチェンジでエンジェルダウン作戦と同様のことが起きることを懸念し、リリィはフリーダムのまま戦闘を続けた。

後退しながらもクスフィアスレールガンを展開し、ビームライフルと共に放つ。

それを受けながらもインパルスは驚異的な加速を見せる。

エクスカリバーを展開し、フリーダムに切っ先を向けた。

「っ！」

レールガンが着弾するが、装甲が無効化する。

さらに着弾したというふうに感じさせない速度で、そのままフリーダムにエクスカリバーを突き刺した。

文字通り串刺しだ。

フリーダムの腹部を、インパルスが持つエクスカリバーが貫通する。

『これで……。』

「お前の死は確定した……。」

リリィはインパルスに向け、残っていたビームサーベルをインパルスに突き立てる。

その刃がまっすぐインパルスを貫き、コアスプレンダーさえ破壊した。

『……いや、あんたも一緒に来てもらう。』

インパルスがそう言うと、二機を中心に大きな爆発が起こった。

「……あ～、やばいかも？」

爆発によりインパルスが消え、その場にはエクスカリバーが刺されたフリーダムだけが残る。

その光景を、ナターシャをはじめ全員が目を見開いてみていた。

ただ、束だけは冷静だ。

「束～、あと宜しくね。」

「……分かったよ。」

フリーダムが徐々に薄れていく。

「じゃ、数日内に戻ってくるよ……。」

その言葉を最後に、フリーダムは消えた。

３８５　終わる人始まる過去の扉（後書き）

長かった……ｏｒｚ

疲れたな～。

これでようやく、災厄編が始まる。

疲れたぬ～。

386　王よ再び（前書き）

ということで、災厄編始まります。

はっきり言えば、過去話……。

P3

386　王よ再び

「じゃぁ、帰って箒ちゃん達の安否確認しないと～☆」

リリィが消えたのを目の前に、束はそう言い学園に進路を向ける。

流石にナターシャ達は、束の言葉に唖然とした。

目の前でフリーダムが消えたのだ。

エンジェルズに至っては、串刺しにされたフリーダムが信じられないのだろう。

「ちーちゃん、聞こえる～？」

『……どうした、束？』

何かを考えていたようだが、千冬は何時もの様に返事をした。

「リリィちゃんが出かけちゃったから、……なんて言うんだろ？カリスマ？　統率性？　まぁ、リリィちゃんの代役頼めるかな？」

レイジングハートの脚部から出るビームの羽が、その言葉と共に羽ばたく。

『……ローズに頼め。　それより、今度は何処に行ったんだ。』

少し溜息を吐きつつ、千冬は束に問いかけた。

その問いに束は、少し悩む。

「わかんにゃい♪」

そして思いつかなかったのか、そう言った。

「でも、だいたいの場所ならわかるよ？」

そこで一旦言葉を止め、その大体の場所を束は口にした。

「……っ！　王っ！！」

その言葉でリリィは目を覚ました。

聞き覚えがある声だが、生で聴くのははじめてのような声。

その声にリリィは多少驚く。

ゆっくりと目を開ける。

「ようやく起きましたか……。」

「……レーゲン、か。」

そして自然と私は、目に入った女性の名をつぶやいた。

「……まだ寝ぼけてるのですか？」

そう言って、レーゲンは呆れる。

そこにはＩＳになる前の、シュヴァルツェア・レーゲンがリリィを見下ろしていた。

その姿は、ラウラの姉と紹介されれば素直に姉だと思うだろう。また成長したラウラにも見える。

千冬ほどではないが、それなりのスタイルであるのは服の上からでもわかるだろう。

レーゲンの外見は、ラウラと千冬を足して割ったような感じだ。

その姿をリリィは知っているはずなのに、じっくり見てしまう。

少しして、リリィは自分がしていることに気がつき、咳払いと共に目を背けた。

「……すまん、どうやら惚けていたようだ。」

リリィはそう言い、静かに立ち上がる。

薄暗い夕暮れなのか、辺り一面が暗い。

だが、かろうじて周囲が草原であることを理解できた。

（……薄暗い草原って、かなり記憶の中にあるんだけど……。）

自分が置かれてる状況を半分は理解したが、時期が分からない。

直観像素質と言う名の、フリーダムのデータバンクを見るが、似たような光景が沢山あった。

「……ここは何処だ？」

仕方なく、寝惚けた振りでレーゲンに聞いた。

「……寝惚けすぎです。」

当たり前のように、レーゲンから冷たい目とともに言葉を受ける。

「ここは中共の紛争地域から、北に１２０ｋｍ離れた場所です。」

「まて、中共の紛争地域といったか？」

「はい、言いましたが？」

レーゲンの言葉に、リリィは唖然とした。

（中共の紛争地域付近にいた時期は、まだ束……。　兎と会う前で、しかも国を作ってない時期っ！）

唖然としてしまい、顔に出してしまう。

「……なに呆然としてるんですか？」

そう言うとレーゲンは、リリィに背を向け歩き始める。

「王としての初仕事ですよ……。　もっとしっかりしてください。」

レーゲンはそのまま、体の周囲に装甲を展開し戦闘状態を作り出す。

装甲や武器はＩＳと変わらないが、完全に身体を装甲が覆っている。

「戦乱を収め、それを気に国を作り上げるんでしょ……。　王として、同族を守る為に……。」

その言葉で、リリィは自分がいる現状を完全に理解した。

（……これは確実に、過去に戻ってるね。）

リリィは仕方なくフリーダムとなり、大空に飛翔した。

386　王よ再び（後書き）

ちなみに災厄編では、ヒロインが束から兎に変わります。

とはいえ兎も束ですから、変わっていませんが……。

さて、災厄の名前がレーゲンしか決まってないという状況……。

いったいどうすれば……（－＿－；）

なるようになれって？

３８７　災厄と兎を測る天秤（前書き）

災厄編。

とりあえず、次話か数話後に何年か飛びます。

Ｐ３

３８７　災厄と兎を測る天秤

災厄。

その存在は古くからあったものの、人々に大きく注目されたのは西暦７００年頃のことだ。

当時の災厄は、王がいても纏まって行動する習性を持っていなかった。

持っていたのは当時の王に使えた、王直属部隊と呼ばれる上位存在だけである。

ほかの災厄は自らの安息を求め、各地に散らばっていた。

自らがいることにより、厄を振りまくことを理解していながら人々の波に消え去ろうとする。

しかし、いくら災厄が人間と同様の姿を取れるからと言い、いずれは災厄であることが露見してしまう。

そこに災厄の安息はない。

だからこそ当時の王であるフリーダムは考えた。

安息を求められる場所を作ってしまえばいい、と。

そう考えた王は、受け入れられなかった災厄の国を作ることを考案した。

そのために何をすればいいか悩んだ結果、出た答えは名を売ること。

まずは戦乱が続く場所で、第三勢力として戦乱の集結。

これにより被害を出しても出さなくても、徐々に人々に認知されていく。

それを繰り返すことで人々の興味を引きつけていき、やがて戦乱に介入する目的を噂にして広める。

その噂で各地に散らばっていた災厄を集め、国の建国を表明。

表明後に何度も災厄と人との間で、戦争になったがそのどれもが災厄側の勝利として終わる。

その勢いのまま王は終戦を提示し、戦わぬことの意思を示す。

ただ静かに暮らしていたい。

その思いとともに王は交渉をし、何とか国の建国にこぎつけた。

それが西暦７３２年の事だ。

（また、繰り返すというのか……。）

リリィは過去を思い出しながら、歯噛みした。

西暦７３２年に建国された国は、その５４年後の西暦７８６年に崩壊する。

誰でもない、王自身の手によって。

兎の殺害により引き起こされた事件。

王の手により、七割以上の災厄が命を散らす。

それが永遠の恨みとなり、また束を殺すのだ。

「……レーゲン。」

「はい？」

「……。」

リリィはレーゲンを呼ぶが、何も言えなくなった。

愛する人のため、何をすればいいか聞いてしまいそうだった。

だが王として、愛する人のために国民をないがしろにすることはできない。

たとえ既にその手を国民の血で染めてしまっていても、今のリリィは王と呼ばれる存在なのだ。

過去を変えることは、決してしてはいけない。

だが過去を変えなければ、兎（たばね）は永遠に死の無限回廊を歩み続けなくてはいけないのだ。

どちらかを選べと言われれば、間違いなく兎を取るだろう。

しかしその先で、また同族を殺すことに躊躇いがあった。

（……束を守る為に、他者を犠牲にするっていったのに、ね……。）

ラウラとクラリッサに言った言葉を思い出す。

（……未来のリリィ（わたし）も、こんな気持ちだったんだろうね。）

自分自身を殺そうとした未来のリリィを、リリィはふと思い出した。

何度も束を助け出そうとし、その結果が自分を殺すこと。

その結末を、リリィは認めたくなかった。

しかしリリィは、その始まりに足をつけようとしている。

繰り返す、兎を助けるための一歩目を。

王としての人生を、また歩み始めようとしていた。

「……いや、なんでもない。」

結局、呼ぶだけ呼んで、リリィはレーゲンに何も言わかなかった。

ローズは何も言わずに、ただ立っていた。

プロヴィネンスを消滅させたのに、何一つ感情に変化がない。

「……やっぱ、コピーを使っていた……。」

そう呟き、ローズはプロヴィネンスの装甲を解除した。

ラウラとシャルロットは、その姿を見て何も言えない。

そしてシュヴァルツェ・ハーゼが来るまで、三人の空気はそのままだった。

３８７　災厄と兎を測る天秤（後書き）

災厄編では、過去も未来も同時に進みます。

が、過去の方が流れが早いです。

未来が１日だとすると、過去は１年ぐらい？

結構進んでいます。

そうすると簪の話は、リリィがいない状態で進むのかな……？

どうなるんだろ？

真面目に１ヶ月も、待っていそうにないね……。

予定を早めて、１０日でリリィを帰還させようかな？

別に同時進行っていうだけで、時間の流れは同じっていうわけじゃないし……。

３８８　離れゆく者達（前書き）

首痛い。

真夜中に書き終わる。

現在０：３１です、Ｐ３

３８８　離れゆく者達

「……無駄に殺すのも良くないよね。」

リリィはそう呟きながら、１８基のドラグーンを展開する。

リリィは束の事を考えた。

国を作る作らない以前に、災厄と人間という種族が違うのだ。

出会えたのも、ほぼ偶然に近い。

戦乱という状況がリリィを、フリーダムを兎と出会わせた。

だからこそ、リリィは過去と同じ進み方をする。

「なんだあれはっ！！」

「鳥、なのか……？」

地上からフリーダムを見た者達が、声を上げる。

その間にもマルチロックオンシステムで、戦場に立つものの武器を狙う。

手と足があっても戦うことができるが、そこばかりはレーゲン達を使って牽制する。

「私は災厄と呼ばれている者の王、フリーダム。　直ちに戦闘の終

了を願う。」

スピーカーを使い、広範囲に声を響かせる。

その言葉に、両軍唖然となった。

「再度……、と言っても、言葉で通じたら戦争にならないよね～。」

学園に束は近づく中、何かを感じたのか止まる。

「出てきたら、私は何もしないよ……。」

そう言い、停滞する。

シルバリオ・ゴスペルは未だ後方にいるため、束一人がその場にいた。

しかし何も起きない。

「……。　気のせいかな～☆」

そう言うと、再度移動を開始した。

その後、その場をシルバリオ・ゴスペルとムラサメ3機が通過する。

「……。」

ミラージュココロイドを解き、クローディヌは束が向かった方を向く。

「……もぅ、いいかぁ？」

オータムがそう言い、グレイプニールから伸びるアラクネの増設タンクに繋がったケーブルを引っ張る。

脱出するため、安全圏まではミラージュココロイドを展開しないといけない。

だがグレイプニール単体では、ミラージュココロイドで安全圏までは脱出できないのだ。

ならば両機のエネルギーをも、使う以外方法がない。

元々アラクネには、レーザー兵器は搭載れているわけもなく、第二世代と言う名の通り、実弾系兵装しか使用できなかった。

だが亡国企業はイギリスからＢＴ兵器搭載型ＩＳの2号機、第三世代サイレント・ゼフィルスを強奪しており、レーザー兵器の理論は実質解明している。

そして何処から送られたか分からない匿名のデータ内に、レーザー兵器を賄えるエネルギータンクの設計資料を見つけ、試験的にアラ

クネに実装したのだ。

結果は成功。

一機のＩＳが、２機から3機分のエネルギーを使用できる出来るようになった。

それをグレイプニールが使えば、ミラージュコロイドで安全圏外まで簡単に脱出することができる。

「ミラージュコロイドの解除最低時間も、そろそろ過ぎるぞぉ。」

「……分かった。」

そう言い、クローディヌは再度ミラージュコロイドを展開した。

グレイプニールとアラクネが、その場に溶け込む。

（……ミラージュコロイドに気がついてた。　それも、レーダも何も使わずに……。）

リリィと同様に、何も使わずにミラージュコロイドを見破った。

それはファントムの、最大の武器を失ったことと同義だ。

この世で一番、クローディヌが殺したいほど恨む相手に、最大の武器が使えない。

忌々しそうに束が向かった方角を見た後、２機は静かに移動し始めた。

（しかし篠ノ之束を殺すには、篠ノ之リリィと織斑千冬という最大の難所をどうにかしないといけない……、か。　織斑千冬の方はなんとかなるだろう……。　おそらく実力は、私の方が上だ。）

思い上がりではなく、クローディヌの確かな感覚がそう告げていた。

織斑千冬はクローディヌ・サミナードより、弱いと。

（だが白騎士が出てくると、おそらく互角だ……。　機体性能が上がったせい……。）

二機は海上に出て、ホバーで移動する。

このときアラクネはエネルギー使用を控えるため、グレイプニールに捕まりスラスターを使わないでいた。

（篠ノ之リリィは無理だ……。　だから、ヤツの隙を付き殺す。）

確かな殺意を胸にクローディヌは、ＩＳ学園を去った。

３８８　離れゆく者達（後書き）

次話をどうしようかな？

すっごい、大変になってきた。

戦闘書くのが一番楽。

ネタが切れるまでは、ね。

おそらく次話は、リリィの方は３０年過ぎます。

国が建国したあとですね。

そうでもしないと、兎は出てこない。

レーゲンシナリオ？

そこらへんは、全部リメイクで！

389　新しいステージ（前書き）

またも深夜に終わった。

（；￣д￣）

P3

389　新しいステージ

『地上2番ゲートに篠ノ之束、レイジングハート着艦。』

その声と同時に、地上に開いたゲートから束が降りてくる。

『地上一番ゲート。　シルバリオ・ゴスペル、ナターシャ・ファイルスの着艦を許可します。　生体信号と機体識別を確認。　以後当基地内のロック解除キーとして、生体信号を登録します。』

シルバリオ・ゴスペルも束同様に、翼の展開をやめ降りてくる。

翼の展開を閉じても、ＩＳであるが故に滞空はできるらしい。

レイジングハートの横に降り立つ。

「ＩＳは解除しておいてね～。　展開していいのは、格納庫とゲートだけだから～☆」

「了解しました。」

そう言うと束より大きなシルバリオ・ゴスペルは粒子となり、中からナターシャ・ファイルスが現れる。

レイジングハートは服のようなため、ＩＳのような大きさは持たない。

相変わらず不思議な機体だと思い、ナターシャはゲートから離れ場所を開けた。

『続いてムラサメ着艦。』

三機がゆっくり降りてくる。

バルサとカリスが先に入り、瀬津子が最後に入った。

「……なんで来てるの？」

その光景を見て、束は冷たい言葉を投げかける。

「私はなーちゃんだけ許可したんだけど？」

「な、なーちゃん！？」

束につけられた愛称に、ナターシャは目を見開き驚愕した。

そもそもナターシャは、愛称を付けられた事がない。

子供の頃にはすでに大人びた印象を醸し出し、周囲からはお母さん的な立場だった。

だからこそ、ＩＳを我が子のように接したのだろう。

「ですが、私達は事情を聞き報告書を書かなければなりません。」

「なら、災厄が来た。　はい、これで終わり……。」

バルサの言葉に、相変わらず束は冷たくあしらう。

本来ならリリィの事で、さらに冷たく言いたいのだ。
だが流石に抑えることができた。
もしかしたら、三人を利用する気でいるのかもしれない。
だがそれを知ることができるのは、束だけだった。
『篠ノ之博士。　イギリス代表候補生と中国代表候補生が、所属篠ノ之にコンタクトを取ってきましたが、どうしますか？』
「繋いで。」
シェナスの問いに、束はすぐ返答する。
モニターが起動し、壁に映し出された。
「……やっほ～♪」
『やっほー。　じゃ、ありませんわ！』
束の挨拶に、最初からセシリアはキレ気味だ。
後ろにいる鈴や箒も、タクティカルアームズを地面に突き立て、画面の向こう側にいる束を見ていた。
「まぁまぁ、落ち着いて～☆　何を言いたいかはわかるよ～♪」
『……。』

束の言葉にセシリアは、直ぐ様冷静になる。

既に束の思考からは、後ろの４人のことは消え去っているのだろうほどの、無視の仕方だった。

「セシリアちゃんにも、もちろん箒ちゃんや鈴ちゃんにも、ＩＭＳ機体構想はあるよ……。　でも、箒ちゃんの機体はまだ少し、無理なんだよね……。」

その言葉に箒は目を見開いた。

「ま、歓迎してあげるから、指定ポイントにおいで。」

そう言うと束は通信を切る。

西暦７３２年。

リリィは束の歳を超えてもなお、以前の姿を保っていた。

３０年にも及ぶ争乱を再度駆け抜け、リリィは王国の建国にこぎつける。

傍らには常にレーゲンが控え、王という雰囲気を醸し出す。

「ではココに、国の建国を宣言ずるっ！！」

大衆の前で、リリィは叫んだ。

戦乱に身を置きながらも、変える術を探し続ける。

だが未だに方法は見つけられないでいた。

（束……、心配してるだろうな。）

そう思いながらも心の片隅では、兎が何処にいるのか考える。

「この国は誰も否定しない！　よって人間も歓迎しよう！！」

もちろん過去に同じことをしている。

兎の為でもあり、リリィ自身のためでもあるのだ。

ほとんどのものは、リリィの言葉に否定的ではなかった。

３８９　新しいステージ（後書き）

一応、災厄編は主な部分以外は駆け足。

長くなりそうだからね～。

同時進行で、束の方も進んでるんだけど……。

向こうは同日なのに、リリィは３０年過ぎたｗｗｗｗｗ

（笑）

最近Ｔｗｉｔｔｅｒで、読者様のフォローが増えてきてます♪

ありがとうございます～。

３９０　戦場の傷跡（前書き）

最近書く気が起きない……。

どうしてだろう……。

Ｐ３

３９０　戦場の傷跡

リリィの瞳に、戦果の炎が映し出される。

人間と災厄との戦争。

圧倒的な戦力差はあるが、災厄が負けることは無い。

だが戦争は起きる。

「青い正常なる世界のために。」

それが人間側の主張だった。

もちろん主要各国の人間も同調はしているが、災厄の国を無視している国もある。

建国をしたとはいえ、人間たちの間に災厄が国を作ったことにはなっていないだろう。

決して相容れない存在を異物だと思い、消し去りたいと思うのは人の常だ。

現にリリィも人間であった頃に、束に害をなすモノを消し去りたいと思っていた。

今でも思っているが、人間であった頃よりは強くはない。

それは自身が災厄となり、束を守れる唯一無二の存在となったから

だろう。

「仕方ないか……。」

「何がですか？」

リリィの呟きを、レーゲンは聞いていた。

「……気にしないでおいといて。」

そう言うと、リリィは直ぐ様フリーダムとなり空に上がる。

そして振り返り、声高らかに命令を下した。

「これより敵危険勢力の無力化を行う！　第二第三防衛ラインを強固に、迎撃部隊は敵の兵装だけを奪える程度の、エネルギー使用で応戦！」

殺さずに、あくまで戦闘不能。

腕などを奪わずに、武器だけを奪うこと。

それがリリィの戦い方だった。

（……おそらく、この後に……。　ようやく会える……。）

そう思い大きな翼を翻し、フリーダムが戦場に躍り出た。

「……シェナス、地上搬入６番ゲートから入るぞ。」

『了解しました、クラリッサ副隊長。』

「私もだ。」

『帰れ。』

「酷っ！？」

クラリッサの言葉にシェナスは何時もの様に返答するが、セシルの言葉には辛辣な言葉で返す。

『冗談です。　早く戻ってきてください。』

「……了解。」

同僚の冗談に不貞腐れながらも、セシルはクラリッサと共に帰還する。

ややシェナスの声が優しかったが、セシルは気のせいだと思い歩く。

なにせ数年ぶりの帰還なのだ。

声に早く会いたいという思いが出ても仕方ないだろう。
先程の冗談は、シェナスなりの照れ隠しだったのかもしれない。

「ローズ……、教えてくれ。」

「……。」

ラウラが重い声で、ローズに言葉をかける。
シャルロットはそんなラウラを、静かに見つめていた。

「奴の言葉は、本当のことか？」

「……さっきの？」

「……私の遺伝子が、父様と母様のを使われているという……。」

先程の言葉はローズがいなかったときに言われたので、ローズが知らないのも無理はない。

ラウラは少し俯きながらも、ローズの言葉を待つ。

「……わからない。　……一目見ただけでわかるなんて、まずありえない……。」

しかし帰ってきた答えは、ラウラの望んだ答えではなかった。

「……義姉さんに聞いたほうが、わかるかも……。」

その言葉にラウラは、直ぐ様通信を束につなげる

早く真実を知りたいのだろう。

しかし繋がらない。

ラウラはノワールのバーニアを更かし、所属篠ノ之専用機のゲートへ走った。

「くっ……。」

インフィニットジャスティスが片膝を付け、地面に手をつく。

白騎士の生体再生能力が起動し千冬を癒していくが、初めて味わうGを無視した機体戦闘に千冬は驚く以前に苦しんでいた。

流石に白騎士時にＴＰ装甲を使用していたとはいえ、半壊していたのだ。

軽減していたとはいえ、生身の人間にはきつかっただろう。

千冬だからこそ、なんとか耐えられた程度だ。

「まったく、なんていう機動で動いてくれる……。」

「コレが、リリィの見ている世界だけどね。」

毒付きながらも、千冬は機体の展開を止めた。

３９０　戦場の傷跡（後書き）

次話で兎？

多分出てきたら、束の方は進まなくなるとおもう。

まぁ、束から兎にチェンジするだけだし……。

基本束出し……。

まぁ、仕方ないよね？

３９１　王と兎の出会い（前書き）

後半に行くにつれ、めちゃくちゃです。

書いたのは、Ｔｗｉｔｔｅｒで犬アリアをモフモフしていた日です
よ～♪

Ｐ３

３９１　王と兎の出会い

結果として人間側の撤退で戦火は閉じた。

それに伴い、リリィは人間が拠点としていた村に入る。

やはりと言ってもいいほどに、戦争から逃げ出しているため人気がない。

「……やっぱり、人は誰もいないか。」

そう呟きながら、広場らしき場所に向かう。

そこには破られ散乱した女性ものの衣類。

そして少量の血。

おそらく統制が取れない兵を、上の者が女を差し出し落ち着かせたのだろう。

破られた服からして軍人ではなく村の娘だとうと、リリィは判断する。

微妙な顔をしながらも、リリィは広場を抜けた。

レンガらしきもので街は作られており、西暦７００年代とは思いがたい光景。

リリィはそんな中を歩き、やがて足を止めた。

「……。」

そしてリリィは紫髪を靡かせた女性を見つけた。

ようやく見つけたすの姿に、リリィは頬を緩ませそうになる。

そんなリリィに気がついたのか、女性もリリィを見た。

不思議そうに女性はリリィを見つめる。

意味が分からない服を着ており、この村の人間なのか軍人だったのかわからないだろう。

しかしリリィは、そのどちらでもないと理解していた。

「……なんで、私を見てるの？」

女性はそういう。

そんな女性に、リリィは少しだけ頬を緩めた。

「この状態じゃ、見るなという方が無理だと思うけど？」

「そう。」

「そうなの。」

そう言いながら、リリィは女性に近づいた。

対する女性は顔色人使えることもなく、リリィが近づくのをただ見ている。

「……ま、どうしてこんなところにいるかは、聞いておきたいかな？」

リリィはそう言うと、近くにあったレンガに腰掛ける。

「私が何処にいたって、貴方には関係ないでしょ。」

そう冷たく突き放される。

「別にいいじゃん。　私は聞きたいな～？」

しかしリリィは、そう言って問い続ける。

「……。」

「私は貴方に興味があるんだよ……。」

そう言うと、女性はリリィを半眼で睨む。

リリィは苦笑しながら口を開くが、強風により横髪が開いた口に入る。

喋る事が大変なため、リリィは根元から髪の毛を横に流し口から髪の毛を剥がした。

「……口説いてるつもり？」

「……さぁ。」

そう言いながらも、村に災厄が数人入った。

少しばかり村が騒がしくなる。

「とりあえず名前を教えてくれるかな？　私は篠ノ……、フリーダム。　災厄の王だよ……。」

「……兎とだけ、名乗っておくよ。」

理解していた名前にリリィは嬉しくなる。

ウサミミは付けていないがリリィと話している相手は、紛れも無くこの時代の束だった。

セシリアは近づいてくる機体を唖然とした表情で見ていた。

ＩＳのようでＩＭＳにも見える機体。

セシリアたちが知ってる中で、ストライクに一番似ているだろう。

≪ＧＡＴ－０４　ウインダム≫

その災厄を元にＩＳにした機体が、セシリアの前に着地した。

「こちらシュヴァルツェ・ハーゼです。　ミス・オルコットでよろしいですね？」

その言葉にセシリアは頷いた。

「束博士からエスコートを頼まれてきました。」

「……それならば、機体を解除するのが礼儀ではなくって？」

「……そうですね。」

そう言うと機体が粒子に帰り、女性が降り立つ。

シュヴァルツェ・ハーゼの眼帯が、その目にかけられていた。

スーツも新規品か、従来のスーツとは違うタイプだ。

その姿にセシリアはもちろん、箒や鈴も目を奪われる。

しかしその視線を感じ、女性は一歩引き下がった。

「……すみません、ジロジロ見てしまって。」

セシリアはそう言って謝罪する。

「ではエスコート、よろしくお願いしますわね。」

その言葉を皮切りに、セシリア達はその場からはなれた。

３９１　王と兎の出会い（後書き）

犬アリアとは……。

「魔法少女リリカルなのは　純白の騎士姫」でお馴染み、「キャビア伯爵」がＴｗｉｔｔｅｒで「幼児わんこ」になったことを指す。

１２月２１日の事だった……。

私は犬アリアを３４５円で買った（笑）

そこから、私と犬アリアの奇妙なツイートが始まった。

私が飼い主、犬アリアが犬（ライカンスロープ）ｗ

基本的にその日の犬アリアツイートは「わん（解釈」というものだった。

道中黒化したりしたが最終的にはもどり、全部ひらがなだけど喋っていた。

このとき会話に参加していたのは、以下の人物。

「ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉Ｖｅｒｗｅｉｌｅ　ｄｏｃｈ，ｄｕ　ｂｉｓｔ　ｓｏ　ｓｃｈｏｅｎ」の「弟くん（シート）」。

「ＩＳ－Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｓｅｎｔｉｎｅｌ－」の「ばーぐらんと」。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　光と闇と真実を求める者」の「タカシ」。

「Ｍｕｖ－Ｌｕｖ　Ａｌｔｅｒｎａｔｉｖｅ　―地獄に降り立つ狙撃手―」の「アーチャー【狼】」。

「ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　－くらげんｄａｙｓ－」の「貴仁辺人」。

ほかＴｗｉｔｔｅｒのみなさまでした。

３９２　村と兎と王様（前書き）

少々適当ｗ

そして、Ｔｗｉｔｔｅｒでアリアが犬化したままｗ

Ｐ３

392　村と兎と王様

兎が興味なさそうに空を見上げる。

リリィも釣られて見上げた。

「……いつまでいるつもり？」

見上げながら兎は言った。

その問いにリリィはないも言えない。

はっきり言えば、リリィはこのまま兎が死なないよう、遠くに連れ去りたいぐらいだった。

しかしリリィは何もしないし、何も言わない。

「王！」

しかしそんな時、遠くからレーゲンがリリィを呼ぶ。

機体化しておらず、走って近づいてくる。

そしてリリィの横にいる兎を見て、少し警戒し始めた。

「……そんなに警戒しないで良いよ。」

「しかし……。」

リリィがそう言うが、レーゲンは納得できないようだ。

そんなリリィを横目で見て、兎は離れていく。

帰るのだろうとリリィは思い、リリィも兎に背を向けた。

今ここで行動を起こしても、兎にしてみればおかしな人として見られない。

そう考え、リリィは背を向けた。

「……誰ですか？」

「……。」

レーゲンがそう聞くが、リリィはないも言わなかった。

通り過ぎるリリィを見て、そのあとを付いていく。

リリィの内情を知らないレーゲンにとって、それしか出来ることはなかった。

「では、そういうことで……。」

少しばかり薄暗い空間に、複数の男たちがロウソクの火を中心にして座っていた。

「あの王は馬鹿だ……。　確実にこれで無力化できるだろう。」

そう言いながら、一人の男が唇を歪めた。

「だが、我らが巫女を差し出すのは……。」

「なに。　アヤツを殺したあとに、取り返せれば良い。」

「……所詮、巫女は人ではなく、象徴と言うなの道具だ。」

そう言うと、その場にいた全員が納得したかのように頷く。

「では……。」

「ああ、栄光と幸運の姫を……。」

その言葉で男達は、何処からともなくお酒の入った器を出す。

「白騎士の名と共に……。」

そしてロウソクに向け、お酒の入った器を傾ける。

もちろん器からお酒がこぼれ落ち、ロウソクの火を消していった。

小さい炎が大量のお酒というなの液体により消え、周囲を照らしていた光が消える。

「「「「「蒼き正常なる世界のために！！」」」」」

「やっほ。」

兎と出会った翌日、リリィはまた兎と会った。

昨夜のうちに災厄の軍勢を戻したため、村はいたって平穏なのだが、戦後のせいか人一人いない。

災厄も居なければ、兎以外の人もいない。

「……。」

そんな死んだ村に、リリィは再度足を運んだ。

「……ああ、またきたの。」

兎は昨日リリィがしていたように、レンガに腰掛け空を眺めていた。

リリィも同様に兎に近づいて、レンガに腰掛空を眺める。
空は曇っており、青空さえ見えない。
「何か見える？」
リリィはそう聞き、空から兎に顔を向ける。
しかし、兎は相変わらず何も答えなかった。
「……ねぇ、たば……。　……兎。　ご飯食べた？」
一瞬、兎のことを束と言いそうになる。
だが兎は何も答えなかった。
「……。」
しかし、そんな兎でもお腹の虫は正直なようだ。
無言を貫いたあとに、少し可愛らしい音が聞こえた。
少しばかり苦笑し、リリィは懐からサンドイッチを出す。
「朝作ってきたやつだけど、食べる？」
そう言ってリリィはサンドイッチが入った箱を、兎の横に置く。
あと少しで日が真上に上る時、兎はようやくサンドイッチに手を付

けた。

「……。」

そして小さな口を開け、食べ始めた。

それを見てリリィは再度空を見上げる。

（……兎を守って、共に生きることが私のすべきこと……？　いや、違うよね……。）

そう思いつつも、雲の切れ間から見える青空を眺めた。

３９２　村と兎と王様（後書き）

兎は原作束みたいな感じかな？

そんな感じかな？

そして深夜。

何故かＴｗｉｔｔｅｒでアチャ子とリリィが戦うって……（―＿―；）

３９３　王と白騎士の結婚話（前書き）

思ったようにかけません。

コラボ企画進行中。

総勢七名、Ｐ３

393　王と白騎士の結婚話

「……結婚？」

とある日、レーゲンはリリィにそう報告した。

リリィは自室で国内の処理事務を行なっており、国に荒事が起きない為の義務だ。

王としての責務を果たしながらも、リリィは兎のところに通い続ける。

もはや王として逸脱しているだろう。

「はい……。　かくいう私も今日初めて知りました。」

レーゲンも頬をかきながら、リリィに報告する。

災厄は決して群れることがないが、リリィは纏め国を作った。

だからこそ、本来起こるはずもないアクシデントも起こるのだ

リリィは残っている書類をまとめ、机の上に置く。

「……いったい誰が仕組んだの。」

呆れながらもリリィはレーゲンとともに、部屋から出る。

「それがトレース・ヴァルキリーを筆頭とした、フォーレ、ヴェル

ディ、チェルニー、マルタン、グノーの過激派です。」

その名を聞いただけで、リリィは頭を痛めた。

災厄の中でも最上位クラスの存在であり、危険人物達だ。

王として、必ず目に付く存在である。

特にトレースは過激であるが故に、人のことなど考えていない。

人が滅びれば、災厄は静かに暮らせると明言したほどだ。

確かに人間が滅びれば静かになるだろうが、それは災厄しかいないからであり静かというわけでもない。

「……兄さん？」

考え事していると、近くのテラスからリリィと瓜二つの女性がリリィを呼んだ。

当たり前のようにローズだ。

「……またそこに居たのか、ローズ。」

「うん……。」

容姿は変わらず一目でわかる。

「……どうしたの？」

テラスから窓を飛び越え廊下に入る。

リリィの妹ということは、一応王族であるのだが品位がない。

基本リリィも品位があるかと言われれば、たまにないだろう。

「どうやら結婚を仕組まれていてね。　初めて聞いて驚いてるんだよ……。」

そう言いながら、肩をすくめる。

「……そう。」

そう言うとローズはリリィが来た方に歩いていく。

「……兎も大事にしないといけないよ、白騎士よりも……。」

「……。」

ローズの言葉に、リリィは何も言わないでいた。

「……どちらか一方ってことはないんだから、早めに兎を捕まえて……。」

徐々に離れていく。

「……でないと、束と千冬みたいになっちゃうよ？」

その言葉を最後にローズはリリィの視界から消えた。

（……余計なお世話だよ。）

束と千冬の事を脳裏に浮かべ、リリィは歩き始めた。

少し大きな部屋で、黒髪の女性が座りリリィを待っていた。

白いドレスにも見える大きな鎧を着て、女性は怖じけずに座っている。

そこ部屋のドアが開き、リリィが入室した。

「待たせてしまってすまないね。」

王として口調を作り、待ち人に声をかける。

腰を卸座っていた女性は王と見ると、鋭い目付きを投げかけた。

後ろにいたレーゲンは警戒し、椀部からプラズマブレードを出そうとしているほどだ。

それを王は止めさせる。

「……少々立てこもっていてね、時間が遅れてしまった。……ご了承ください、お姫様。」

茶化すようにリリィの口は、女性に言葉を投げかけた。

その言葉に女性は眉を潜め立ち上がる。

騎士甲冑が音を立て、室内に金属音を響かせた。

「まさか貴方のような……。　それも祭り上げられるほどのお姫様が、私の結婚相手として候補が上がるとは……。」

「……私もだな。」

そう言うと女性は腰に下げていた剣を引き抜き、リリィに剣先を向けた。

「……そちらから先に、この縁談を持ちかけたと聞いたが？」

「家臣が私を思ってくれて極秘裏にしてくれたんでしょ……。」

何も知らないリリィにとっては、それが精一杯言えることだった。

流石に災厄を悪い印象ばかり付けられても困る。

そう思ったためのフォローだった。

「では、ご要件を聞きましょうか。　……あなた自身の、ね。」

３９３　王と白騎士の結婚話（後書き）

さて、これが本年度最後のお話となります。

というか、忙しくって結局ＡＣｆａ×なのはもリリなの（リリィｉｎなのは）も、一次創作も広敷広げたままかけてない気が……。

……ま、まぁ、これだけは書き続けたから良いか、な？

時間が欲しいです。

私は、まだまだやりたいことがある……。

だから時間が欲しい。

……だが、歳にはかなわないがな……。

……はぁ。

では本年度最後を、充実した一日で過ごせますよう……。

―6　新年の挨拶

新年あけましておめでとうございます。

本日はシナリオを上げませんが、新年ということで年賀状を上げます。

＞i37736―3045＜

必要であれば、何も書いてない年賀状にプリントしてくれても構いません。

それにしても新年ですね～。

この作品の第一文は「更新不定期です」……。

それがいつのまにか、連続更新でしたから……。

驚きですよ……。

当初の予定では、束がヒロインになることはなかったんですよね。

ですがいつの間にかメインヒロイン。

サブヒロインとして千冬やクラリッサ……、果てはナターシャまでもがヒロイン入りですよ？

サブキャラクターがこの作品ではヒロインって、なんという下克上？

もはやどうしてこうなったのか、私にもよくわかりません。

フリーダム最強、傲慢なセシリアを……。

それが今では、お気に入り９５０件越えの作品ですよ……。

そして本日の話で４００部目という、おめでたい日にキリの良い部数です。

みなさまから見て、本作品は不格好で変な作品かもしれません。

ですがこれからも、≪世界とＩＳと名もなき者へ≫と篠ノ之リリィをよろしくお願いします。

実は複数の作者様と、悪巧みをしております（笑）

それが実行されるのはいつになることやら……。

ではまた明日……。

葵

束

―6　新年の挨拶（後書き）

わがままですみませんが、一応感想という形で返事ください。

一応、読者様との繋がりは必要だと思っていますから。

あ、普通に挨拶だけで良いですので……。

おねがいします。

３９４　この空の果てにあるもの（前書き）

さて、新年最初のＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩです。

あ、変換（笑）

だけど書いてるのは正月前、Ｐ３

３９４　この空の果てにあるもの

リリィの言葉に女性は少しだけ表情を変えた。

「……違うかな？」

そう言い、リリィは苦笑する。

この先のことを知っているリリィにとって、聞く必要はないだろう。

「私を利用したいんだよね？　本当は、さ。」

その言葉にリリィに向けられていた剣先が揺らぐ。

レーゲンもリリィの言葉に唖然としていた。

「ここには私達しかいない……。　結婚は無理だけど、要件の方は聞くよ……。」

女性は先程より強くリリィを睨み、剣を鞘に戻す。

「……その翌日に、私に合いに来るとか。　馬鹿なの？」

兎はそう言いながらリリィを見下した。

手には焼きたてのパンらしきモノを持っている。

もちろんリリィが持ってきたものだ。

「そうは言ってもね……。」

「いやだからって、そんな話を私に聞かせに来る？」

そう呟き、パンをかじる。

「まぁ、聞かせなよね……。」

苦笑しながらリリィは空を見上げた。

毎日と言ってもいいほどリリィは、兎に会いに国と村との間を移動している。

もちろん誰にも知られずにだ。

リリィは王として謁見などをしていない。

その時間を使って、兎に会いに行く。

もちろん食事を持って会いに行いき、兎に食事を与える。

村のライフラインが、既に戦争で切れているからだ。

兎以外誰も住んでいない村に、食力があるはずがない。

あったところで腐っていく。

いすれ兎は死に追い詰められるだけだ。

そんなことをリリィが許すわけもなく、毎日食事を作って持ってきていた。

「……。」

当初は警戒していたが、流石に毎日続くと警戒心が薄れるようだ。

今ではリリィがもってきたものを、兎は普通に食べていた。

「……まぁ、結婚はする気はないんだけどね～。」

「偽装結婚？」

「そうそう……。　おかげで表では妻持ちだよ……。」

そう言うと軽く溜息を付いた。

「最近妹は「なんで兎を連れてこなかったの」しか、言ってないし……。　いったいどうしろって言うの……。」

本当はローズが何を言っているか、ちゃんと理解していた。

だが言えるはずもない。

未だ兎はリリィに心を開いてないのだから。

そんな状態で言っても、あしらわれて会い辛くなるだけだ。

「……まぁ、私はどうでもいいけど……。」

そう言うと兎はパンを全て食べ終え、何時もの様に空を見上げた。

リリィも何時もの様に釣られて空を見上げる。

「……。」

「……ねぇ？」

相変わらず空を見上げたまま、兎はリリィを呼ぶ。

そして返答も待たずに喋り続けた。

「空に……。　人がいけない空の向こうに……、一体何があるのかな？」

そう言いながら、片手を伸ばす。

届きそうに見えて届かない空に、兎は必死に手を伸ばす。

しかし届くはずもない。

人の手では届くはずもないのだ。

「……ねぇ。　貴方は空の上を見たことはある？」

そう言って、兎はリリィを見た。

初めて兎から話題を振られた事に、リリィが驚くことは無い。

知っていた事項に驚く者がいるはずがない。

「……真っ暗な暗闇だったよ。」

静かに兎の問いに答える。

「……でも人間は、いずれ空の向こうにある空間に行ける。」

「……。」

「何年かかろうが、何千年かかろうが……。　人は必ず宇宙（そら）に行ける。」

そう言うとリリィは立ち上がる。

「それを実行できるかは、束次第（うさぎ）かもね……。」

そう言いながら、兎に背を向ける。

長時間村にいると、国が大騒ぎになる可能性があった。

そのためフリーダムになり、リリィは帰ろうと翼を広げる。

「……。」

その姿を兎は見るしか出来なかった。

「じゃぁ、また明日。」

その言葉と共に、フリーダムは飛んでいく。

リリィの言葉とその姿を、兎は忘れないように心に刻みつけた。

そしてリリィがいなくなった場所に向い、兎は呟く。

「……うん、……またね。」

３９４　この空の果てにあるもの（後書き）

最後は少々ＩＳっぽかったですかね？

宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツがＩＳですから……。

とりあえず、束は何時出そう……。

ま、次話で良いかな？

３９５　作られ生まれるＩＭＳ（前書き）

Ｔｗｉｔｔｅｒガクガク（（（ｎ；‘Д‘）））ηナンダカコワイワァ

一日で一番話してる気がする。

Ｐ３

３９５　作られ生まれるＩＭＳ

「……え～っと、点検は終わったから次は分解だね～☆」

そう呟きながら束は、ブルーティアーズに接続したコードから情報を読み取っていた。

その横には鈴の甲龍が鎮座しており、完全に国家の手から離れた形をとっている。

このことは帰属している国家に話はされていた。

ＩＳの改造を合法的に行われているのだ。

多少は揉めたが、束を上手く丸め込める人間はそうそういない。

リリィ以外を上げるとしたら、それは千冬しかいないくらいに、束を口で負かせる者はいないのだ。

「……イギリスは何をしてるのかな？　規格外な止め方、初めて見たよ……。」

そう呟きながら、レイジングハートでブルーティアーズの装甲を排除していく。

背部の誘導兵器は基本アンロックユニットに接続されている為、現状では改造場所ではない。

本体の装甲を排除し装甲を横に置く。

「さてと……。　まずは機体装甲の追加数を上げるために、中の整理からだね♪」

そう言いながら、束は一人でブルーティアーズを完全分解しはじめた。

「……ん、帰ってきたか。」

そう言いながら、黒髪の女性はリリィを見る。

当初来たときは騎士甲冑やドレスを着ていたが、今では邪魔にしかならないと言って、災厄の国で市販されている服を着ていた。

「……なんでいるの？」

「一応妻となったのだからな。　夫の帰りを待つのは役目だろう？」

真顔で言いながら、立ち上がりリリィに近づく。

「それは間違いだと言いたいがな。　白騎士……。」

「……その名前は好きじゃないと言っただろう。」

リリィの言葉に白騎士は睨む。

人間でありながらも、逸脱した者として崇められた白騎士。

人としての扱いを受けぬまま育ち、信仰の対象として見つめられる日々。

そこに災厄の王との縁談が持ち上がり、白騎士はチャンスだと思ったのだ。

流石に信仰の対象とされていても世の情勢は理解しているらしく、結婚すればここらか脱出でき、災厄の国に逃げる事ができるという思い出、当時の白騎士はいっぱいだった。

白騎士がリリィを利用したかったのは、自身が置かれてる現状から逃げ出したかったのだ。

だがリリィは結婚はしない。

すぐに戦争が起きるのだ、結婚しなくても白騎士の自由は確保できる。

「……ではなんと呼べば良いの？」

そう問いかけると白騎士は黙ってしまった。

何も考えてなかったのだろう。

「……何か良い名前はないか？」

困った顔をしながら、白騎士はリリィを見つめる。

本当に何も浮かばないようだ。

「……。」

かくいうリリィも何も浮かばない。

そして仕方なく、思いついた単語を並べた。

「インフィニット・ジャスティス……。」

「……インフィニット、……ジャスティス。」

ＩＳの正式名称の一部に、正義という意味を持たせただけだった。

特に考えたわけでもない。

リリィのデータベースに、同名の機体があっただけだ。

ＩＭＳ白騎士に武器などのアイディアをもたらした、機体名でもある。

「……インフィニット・ジャスティスか。」

そうしみじみと呟くと、白騎士は頷く。

「……うん、いいな。」

「王！！」

白騎士が頷くと同時に、部屋のドアが開かれた。

通常なら不敬罪にあたる行為も、リリィにとってはどうでもいい事。

「どうした？」

直ぐ様、要件を聞く。

「東の方角に不振な集団が！」

「なんだとっ！？」

その言葉にリリィは目を見開いた。

「現在、廃村の向こう側です。」

その言葉にリリィは焦る。

「第一と第二防衛ラインを貼れ！　直属部隊はその前方に！　私が先人を切る！！」

そう言うとリリィは窓から外に出て、フリーダムを展開し直ぐ様飛び立った。

目指すは東の廃村。

兎がいる村だった。

３９５　作られ生まれるＩＭＳ（後書き）

ほどほどにしておけばよかったのに、Ｔｗｉｔｔｅｒで書く時間減少（笑）

そして右手が冷たい。

寒いでしょね、正月明けは……。

現在１２／２８　０：１６

３９６　平穏のための罠（前書き）

お腹すいた。

お腹すいた～。

Ｐ３

396　平穏のための罠

「行ったか……。」

「いったな。」

そう言い合いながら、数名がフリーダムを見ていた。

「王がいない今だから出来ることだ。」

その言葉と共に唇が歪む。

同時に部屋がノックされた。

礼儀正しく、部屋の戸を叩かれたのだ。

「……入れ。」

低い声が室内に響き扉が開かれた。

そしてレーゲンが入室する。

一礼して口を開く。

「現在東の廃村付近で、不振な集団をする軍団があります。王から第一、第二防衛ラインを……。」

「構わん、無視しろ。」

「……は？」

「無視しろといったのだ。」

レーゲンはその言葉に唖然とした。

話している相手は、国の軍隊を率いる指揮官。

軍隊を動かす権限を持つ、国唯一の人物だ。

王が命令したとしても、実質的な行動権は指揮官がもっている。

そのものが王の命令を拒んだのだ。

「……何を言ってるんだ。」

レーゲンは唖然としながら、聞き返した。

現状で軍を出さないのはおかしいことだ。

リリィの発言は間違ってはいない。

「わかってるのか……。　反逆行為だぞ……。」

レーゲンの低い声に、その場にいるものが気味の悪い笑みを浮かべる。

「いいかね？　これからは私たちが統治する。」

「っ！？」

その言葉にレーゲンは目を見開いた。

「今の王は生温い……。　私達が導くことが、正しいのだよ……。」

「……貴様たち！」

「捕らえろ……。　反逆者としてな。」

レーゲンを囲むように災厄が集まる。

「王は死に、災厄は滅ぼそうとするものを殺す。　コレが国民の総意なのだよ。」

「王は最近、汚らわしい廃村の村娘にご執着だからな……。　いやはや、汚らしいもの同士お似合いだな。」

その言葉と共にレーゲンの首筋に、手が下ろされる。

「……王は人間によって消耗させられ、同族によって消えていくのだよ。　……これが、決定事項だ。」

その言葉を最後に、レーゲンは意識を手放した。

「ミーティア、リフトオフッ！！」

そう叫びながら、フリーダムは移動中にドッキングする。

最大速度は一応、ミーティアを使用したほうが高い。

一瞬だけ速度を落とし、ミーティアに接続する。

持ち手をつかみ、腰の部分のロックをされない状況で引っ張り移動し始めた。

（間に合うか……。）

そう思ってる間に、腰の固定アームがフリーダムを固定する。

ミーティアのエンジンが起動した瞬間、フリーダムは最高速度で移動し始めた。

速度が早すぎるためか、あと少しで村につく。

「……。」

そして村につく。

だがそこには、リリィが思ってもみなかった光景が広がっていた。

廃村が半分ほど燃えていたのは予想内だ。

しかし変な機械が消化している光景は、想像していなかった。

唖然としながらリリィは村に降り立つ。

「……なんだこれは。」

呆然と機会を見つめ、フリーダムを解除する。

せわしなく動く機械が、そこらの井戸から水を汲み上げ火にかけ続けた。

その光景は、まるで消防車のようだ。

しかしながら、この時代に消防車はない。

「……ん。　あ、来たんだ。」

リリィは呆然としてると、後ろから兎に声をかけられる。

兎は何事もなかったかのように、何時もの場所に座って空を見上げた。

まるで村が燃えてないようだ。

「……。」

「……どうかしたの？」

リリィは思考を停止し、呆然としていた。

「……。」

「……。」

「……なに、あれ？」

ようやく言えた言葉は、それだけだった。

しかし兎は何も答えない。

静かに空を見上げるだけだ。

しかしリリィは、不振な集団がいることを忘れていた。

不審な者達をどうにかするために、リリィは来たのだ。

「……。」

しかしリリィは何もせず、火が消され続ける中、何も喋らずその場にいた。

３９６　平穏のための罠（後書き）

おなかすいた～。

意味がわかる人は、Ｔｗｉｔｔｅｒを見ている人だけ。

とりあえず、おでんを食べよう。

……いただきます。

397　天才という種（前書き）

ウボワァァァｗ

コミケヒドスｗ

Ｐ３

３９７　天才という種

唖然としているリリィを連れ、兎は自身が住んでいると思われる住居に案内した。

質素というわけではないが、室内は西暦７００と思えるような物はない。

どう見たところで数世紀ほど先行した技術が、室内に錯乱している。

（……忘れてた。）

そう思いながらリリィは納得していく。

この時代の天才科学者と言えば、リリィが知る中ではローズだ。

だが、それ以外にも天才と呼ばれる者たちはいる。

幸運を纏い周囲から崇められる白騎士も、騎士甲冑を巫山戯で付けているわけではない。

何もできない状況でありながらも、有事の際に動けれるよう常時白騎士は鍛錬している。

そして誰にも気がつかれることなく白騎士は、リリィを追い詰めるほどまでに才能を開花させていた。

人間でありながらも最強と名高いリリィを追い詰める手腕は、既に人を逸脱している気もするが、天才ゆえの技能だろう。

誰にも気がつかれずに剣を振り続け、剣術書を幽閉に等しい祀られた状況で、暇潰しとばかりに読み続けた結果だ。

リリィの傍で共に戦場を駆け抜けたレーゲンも天才だろう。

様々な戦場を見続け、常に最善と言われるリリィの戦術を見続けた目は、もはやリリィに等しい戦術眼だ。

立てる戦術も一流であれば、リリィの傍に居続け戦ってきた技能も一流。

特に大型のレールカノンを持っていながら、椀部のプラズマブレードで近接格闘をする様は、フリーダム同様に重力を感じさせない動きだ。

王直属舞台の中でリーダ角とされているだけはある。

そしてローズ。

リリィの妹でありプロヴィネンスでもあるがゆえに、空間認識能力が異様に高い。

災厄の中にも空間認識能力が無いものが多いが、ローズはその中でもリリィに匹敵するほどだ。

（そういえば、兎は……。）

そしてローズは、自身のデットコピーを作り上げた。

しかしその技術は半分はローズが作ったものだが、もう半分は兎の手によって作られているのだ。

兎も独自で災厄に等しいモノが作れる、天才の部類に入る人物。

間違いなく人間代表でも天才であり、戦闘能力はないが技術開発などを災厄のメンバーと競わせたら、恐らく五分五分だろう。

開発の天才。

兎とは、そういう人間なのだ。

今はまだ災厄との技術競争は出来ないが、災厄を知っていけば余裕でたどり着ける。

それが束となり、ＩＳを作り上げるのだ。

「はぁ……。」

リリィは溜息を着くと、静かに民家の椅子に腰をかけた。

「……内部構造と基本フレームはこれでいいかな？」

そう言いながら、束は改修したブルーティアーズを叩いた。

改修し終えたブルーティアーズは、ＩＭＳ同様に拡張領域が増えている。

まだ新規装甲は搭載されてないが、確実に従来のＩＳではなくなった。

「さて誘導型自立兵器なら、これが一番だよね。　防御面でも有効だし♪」

そう呟きながら、そばに置いていた装甲を手に取る。

「ＧＡＴシリーズ同様にＭＷＳ（マルチ・ウエポン・システム）だけど、別にいっか～☆」

手元にモニターを起動させ、ブルーティアーズに新規システムをインストールする。

「……さて、後は……。」

束はインストールしながら振り返り、その場に似つかわしくない輝きを放つ装甲を手に取った。

金色に輝く装甲は、いかにも高級感あふれる。

その実、金色に輝く装甲には鏡面装甲と呼ばれる、対遠距離光学兵

器に対しての万全な防御を備えていた。

これならばセシリアの様な誘導兵器に気を取られるような者であっても、死亡確立を減らせる。

だが問題もあった。

近接系の光学兵器には、全くの効果がないということだ。

その上特殊なために大量生産ができない。

試験的にブルーティアーズに使用するのが精一杯だった。

「……上手く行くと良いね。　……ブルーティアーズ。」

３９７　天才という種（後書き）

友人の誘いを蹴り、というか嘘をついて回避。

どうせ弄られるのわかってたし……。

私が向こうで泊まることもね……。

ということで、リリウム（仮）と戦場へ（笑）

もう帰ってきたけど。

３９８　回り続ける歯車の結末を知る者達（前書き）

風邪は引いてないけど、喉が痛いかな？

はぁ……。

Ｐ３

３９８　回り続ける歯車の結末を知る者達

城から少し離れた場所にある家にローズは座っていた。

ティーカップに紅茶を注ぎ、近くに座る者を眺める。

その光景を見たものは、最初に鏡に映った人間を見ていると思うだろう。

銀髪と赤目は災厄の中でも希少種に等しい。

更に同じ容姿をしている災厄は、例外を除き存在しないに等しいのだ。

だが今現在、確実にローズの目の前にいるのは容姿が似すぎていた。

「……それにしても、どうしてここまで来たの……？」

そう呟くと、目の前にいる者は苦笑した。

「そんなものは私が知りたいね……。　どういう経緯で私はここにいるのか……。」

そう言いながら溜息を吐いた。

銀の長い髪に赤い目。

その言葉を発したのは、何処からどう見てもリリィだった。

「……アナタも大変だね。」

「……ローズほどじゃないさ。」

しかしローズは、リリィの事を兄さんではなくアナタと呼んだ。

「……まさか別の世界に行くだなんてね。　誰にも考えられないことだよ……。」

その言葉にリリィは再度苦笑し、ローズから受け取った紅茶を口に含む。

そして何処か遠くを見ると、リリィは目を細めた。

「別に理論はできてたよ。　……でも束が死んで、自分を殺そうとして……。」

「……次元移動じゃなくって、時空間と他世界移動と言う手を使った……。」

「そういうわけだよ……。　それでも、自分自身は殺せなかったよ……。」

その言葉を言うリリィは一人しかいない。

「……それで、束のためじゃなくて……、嫉妬で行動したの……？　他世界の自分に……。」

ローズはそう言ってリリィを見た。

その言葉にリリィは何も言わない。

言えなかった。

束が死んだ自分の世界と、束が生きている自分じゃない自分がいる世界。

束が生きている状況が、羨ましかったのだ。

ローズの前にいるリリィは、そういうリリィだった。

自分自身を殺すためにドイツの国際ＩＳ委員会を利用した、篠ノ之リリィという存在。

そのリリィが、ローズの前にいた。

「……嫉妬、だね。」

「……そう。」

「それにしても、よく来たね？」

兎はそう言って、リリィを見た。

「ん、何が？」

未だ室内を見続けるリリィは、兎を見ずに問い返す。

リリィの言葉に兎は呆れ、説明するかのように口を開く。

「……何も知らないんだ。　この村を燃やした害虫が呟いていたけど、貴方誘き出されたんだよ？」

その言葉にリリィは何も答えない。

何時も通りに振る舞い、兎の方へ振り返る。

「多分貴方と私が頻繁に出会うことを知った災厄が、チャンスとばかりにクーデターを起こして王に成り代わり、人間を滅ぼす算段でも立てたと思うけど？」

「……ふぅん。」

兎の推察を聞きながら、リリィは近くの椅子に座る。

「残念だけど、七割正解。」

「……なら、残りの三割は……。」

「……保身に走った醜い存在だよ。」

そのまま説明しようとした瞬間、爆発音が外から聞こえた。

しかし二人は慌てない。

「……今まで自衛できた？」

リリィはそう問うと、兎は首を振り否定。

どうやら出来てないようだ。

リリィは座ったばっかりの椅子から立ち上がり外に出ていく。

「……見つけたかっ！？」

「いや！！」

「探せっ！　必ずいるはずだ！！」

そう叫びながら村を走り回る兵士を見かける。

その状況にリリィは溜息しか出なかった。

「……何をするの？」

兎が座ったまま聞く。

そんな兎にリリィは優しい笑を見せ、フリーダムになる。

「……。」

「……そこに居て。」

そう言うとフリーダムは瞬間的にストライクフリーダム・フェニックスになり、１８基のドラグーンを展開させた。

「……必ず。　必ず守るから……。」

３９８　回り続ける歯車の結末を知る者達（後書き）

ま、こういうこともあるよね？

年末年始は妙にダウナー気味になります。

あい、わな、び～、いぇ～（笑）

怠すぎる！！！！

あ～、もう。

マウス変えようかな？

３９９　暗闇の中に居続けるもの（前書き）

新年初ですね。

書いたのは……。

Ｐ３

399　暗闇の中に居続けるもの

「……で、いったい誰が命令した。」

フリーダムのビールサーベルが、男の喉元付近に置かれた。

リリィの顔は分からないはずなのに、男の表情はフリーダムの頭部を見て完全に恐れている。

「……答えろ。　頭と身体が離れたくないでしょう？」

「……。」

だが男は何も言わなかった。

恐怖で口が動かないのだ。

「ま、大体はわかるからいいんだけどね……。」

そう言いながら、フリーダムはビームサーベルを首筋から離す。

その事に男は安堵する。

しかしリリィはその安堵した瞬間に、ビームサーベルを振りかざし首を斬り飛ばした。

男が気がつくより先にビームサーベルを振るい、瞬間的に男を絶命させる。

「……だが、兎を殺そうとしたのを許せるほど、心優しくはない……。」

鎧の意味はビームサーベルの前には無意味で、どう足掻いても男は死ぬ運命だった。

男の体が傾き地に倒れる。

首からは血が湯水のごとく、溢れ出していた。

フリーダムの周囲はいたって普通だが、村の外れに行けばドラグーンのビームによって心臓が貫かれた死体が大量に転がっている。

兎が死ねば、これ以上の惨事が起きてしまう。

そう思えばこの惨状はましな部類だ。

「……戦争が始まる。」

そう言いながらフリーダムのカメラアイは、空を見つめた。

レーゲンは白の地下牢に入れられた。

気絶から目が覚めたのは独房に入れられてからだったため、周囲には誰もいない。

「……ちっ！」

頑丈ということでもないが、脱出後に起こることを考えレーゲンは近くのベッドに腰を下ろした。

綺麗でも汚いというわけでもないが、牢屋の中は酷く質素な場所だ。寝るための簡易的なベッドに、簡易トイレと生活に必要最低限の物しかない。

そのベッドに座り、レーゲンは誰もいない天井を見上げた。

軍旗を乱したものを入れる独房という役割もあるのか、天井にカビやシミを無い。

きれいに清掃されているようだ。

（……人間によって王は消耗させられ、同族の手によって死ぬだと？）

気絶する前に聞いた言葉を思い出し、レーゲンは冷静に分析する。

そして落ち着き、ベッドに横になった。

（……無理だな。　というか不可能だ。）

冷静に判断した結果、レーゲンはリリィが死ぬことがありえないと判断した。

誰よりも王を知っているから、レーゲンはリリィが死ねないことをよく知っている。

文字通りの不老不死を、知っているのだ。

今現在リリィを殺すことは、完全に不可能である。

剣で斬ってもＰＳ装甲に阻まれ、ビームで撃っても再生し、爆発しても再生。

人間と戦ってきた災厄に、不老不死殺しができるはずもない。

そしてリリィが再生した所を見たものはいないのだ。

つまり不老不死は、今現在レーゲンしか知らない事。

リリィの消耗を望んでも、結局は無駄なのだ。

「……。」

そうレーゲンが思っていると、視線を感じ起き上がる。

レーダーに生体反応があり、レーゲンは薄暗いなか目を細めた。

向かいの独房だ。

「……誰だ。」

「……。」

レーゲンの言葉に、相手は答えない。

まるで死んいるように静かだ。

「……おい、返事をしろ。」

仕方なくシュヴァルツェア・レーゲンを起動し、光を生体反応がある方に向けた。

「おい……。」

そして光に映し出されたのは、金髪の少女みたいな外見をした女性だった。

服は少し埃を被っており、ほぼ動いてない事を理解することができる。

そして服の上からわかるほど、女性は痩せ細っていた。

「……。」

生気の無い瞳が、レーゲンに向けられる。

レーゲンは唖然としながら女性を見続けた。

３９９　暗闇の中に居続けるもの（後書き）

Ｔｗｉｔｔｅｒ怖い。

書く時間が消えていく。

恐らくＡＣ?発売で、更に削れる気が……。

ガクガク（（（ｎ;‘Д‘）））ηナンダカコワイワァ

４００　暗闇と血のペンキ（前書き）

どうでもいいサブタイトル。

新年早々にテンションダウン。

P

400　暗闇と血のペンキ

「お前は……。」

レーゲンは唖然としながら、女性をよく見た。

腰までかかる金の髪、アメジストの瞳。

それらの特徴を、災厄国内にいる者全員と照らし合わせる。

しかしデータライブラリーに、合致する者はいなかった。

（……まさか、何処かから連れてこられたのか？）

結果的に目の前にいる女性が、人間であり何処からか連れてこられた人間の可能性がある。

そうレーゲンは判断した。

「……。」

そして換気されているが、妙に生臭さも感じた。

眉を潜め、レーゲンは鉄格子の向こうにあるドアを睨んだ。

（奴らめ、ここまで腐っていたのかっ！）

憤りのない怒りがこみ上げ、レーゲンは鉄格子を思いっきり叩いた。

鉄格子が大きな音を立てて歪み、そしてそのまま壊れる。
災厄を鉄格子に閉じ込める事ができないのは、当たり前のようなものだ。
「……。」
だが誰も来ない。
大きな音を響かせたのに、反応がないのはおかしいだろう。
レーゲンはドアを警戒しながら、女性を捉えている鉄格子を壊した。
そしてゆっくりと女性に近寄り、声をかける。
「無事か？」
「……。」
しかし女性は反応することもなく、永遠に何もない空間を見続けていた。
薄い服はすぐにでも女性から脱がせそうな、そして寒さをしのげる事ができない程の作りだ。
軽く女性の頬を触れると、レーゲンは自身が纏っていた服を脱ぎ女性に被せる。
空調は効いているためさほど女性の体は冷えてはいない。

しかし、かすかに震えている。
レーゲンは心配しながら少女を見続けた。

「そろそろだな。」
そう言って、未来のリリィは立ち上がった。
ローズは静かに、その後ろ姿を眺め続けている。

「……お前は動かないのか？」

「……私が動く理由、あると思うの……？」

「……。」

その言葉に肩をすくめ、未来のリリィは室内から外に出たいたって平穏に見えるだろ言うが、未来のリリィが見る先は騒がしい。
視線の先には、少し大きな白のような建物が見える。

「……ふん、そう簡単に私を殺せるものか……。」

そう吐き捨てるように言うと、静かに近くの木々に入っていった。

奥に向かって進むと、木々によって徐々に光が通らなくなってくる。

既に国内とは思えない場所を未来のリリィは歩き続けた。

血を浴びた装甲を消し、リリィは兎の元に戻った。

爆発の影響で村の地面は抉れ、住居は半壊している。

その現状を自分のせいだと理解しながら、リリィは自分の目に焼き付けていった。

誰もいないが、兎の故郷を壊したのは紛れも無くリリィだ。

リリィが兎と関わったからこそ、このような結果を生み出した。

（分かっていたとはいえ、……やっぱりアレだね。）

そう思いながら、兎と先程まで話していた住居に戻る。
しかし人の気配はない。
不自然に思いながらも、戸を開けた。
「……兎？」
室内を見ると、そこには誰もいない。
レーダーで生体反応を探るが、やはり兎はいない。
（……まさかっ！）
そう思い振り返る。
（私がいない間にさらわれた……！？）
だが瞬間的にリリィは、その考えを捨てた。
すでに知った道であるが故に、兎が攫われてないと知っている。
住居から出て、リリィは村の中央にまで足を運ぶ。
「……。」
ドラグーンで四肢を飛ばしていたためか、住居の壁に血が付いたり、
屋根の上に飛ばした四肢が乗っている。
少しばかり良い眺めではなく、リリィは溜息と共に目を逸らした。

「……あ、いた。」

そしてリリィは兎を見つけた。

少し大きめな袋を持って空を見上げている。

「……はぁ。」

そして兎は、静かに溜息を付いた。

４００　暗闇と血のペンキ（後書き）

お尻が痛いです。

え。

どうでもいい？

そだよね～。

４０１　ブルー・ティアーズＶＳストライク（前書き）

ずるいずるいずるい～！！

ち～ちゃんばっかり、二次創作で優遇されてずるい～！

Ｐ３

４０１　ブルー・ティアーズＶＳストライク

ＩＳ学園に災厄が襲撃してから数日後。

２日ほど休みだったが、授業は通常通りに再開。

ほぼすべての生徒が、事件に気がつかなかったために平常通りに進めたのだ。

その授業終了後のアリーナに、束はいた。

「じゃぁ、機体が完全に認識するまで動かしてて。」

「わかりましたわ。」

そうセシリアに言うと、束はアリーナの端までレイジングハートで移動する。

それを見届けて、セシリアはブルー・ティアーズを起動させた。

何時も通りにストライクフリーダムを模倣した、青いデザインの装甲が展開される。

そしてゆっくりと、主兵装のスターライトｍｋＩＩＩを構えた。

「こっちはいいよ、セシリア。」

シャルロットがそう言い、ストライクのビームシールドを正面に突き出させた。

軽い模擬戦の相手を、シャルロットのストライクが請け負うという状況だ。

「では、お言葉に甘えさせてもらいまして……。」

そう言うとイグニッションブーストを使用し、一瞬でストライクの間合いに入る。

「えっ……。」

遠距離兵装のブルー・ティアーズが、近距離主体の間合いに、自ら入ってきたのだ。

驚かない者はいないだろう。

エールストライカー装備のため、ストライクはブルー・ティアーズに向けシールドを向けた。

しかしセシリアは一瞬だけ、バーニアの出力を落とし脚部スラスターを最大展開する。

改修後初となる起動で、セシリアは大きく負荷の掛かる動きをしたのだ。

技術者は必ず泣く操作だろう。

脚部が先に出て、ストライクのシールドを蹴った。

「っ！？」

ブルー・ティアーズの加速が、ストライクに伝わる。

セシリアはすかさず、ストライクのシールドを足場に飛び上がった。

ストライクは蹴り飛ばされる形となり、大きく後ろに飛ばされるが、エールストライカーのブースターを起動させ、なんとか姿勢制御を保つ。

その間にセシリアは空中で臨戦態勢を整えていた。

「先手はいただきましてよ。」

そう言いながら上昇と共に半回転し、スターライトｍｋＩＩＩの銃口をストライクに向けた。

しかし向けた銃口から光が放たれる前に、ストライクのビームライフルの方が先に光を放つ。

「そうそうあたりませんわよ。」

「わかってるよ……。」

だがブルー・ティアーズは、横に移動することで回避する。

もちろんシャルロットも回避されることは理解していたのだろう。

直ぐ様バーニアを吹かし、機体を上昇させた。

そのままビームライフルを向ける。

互いを銃口の先に捉え、空中で起動し始めた。

「……そこですわ！」

先に撃ったのはセシリアだった。

青白いレーザーがアリーナの空を焼くが、ストライクのシールドによって進行を止められる。

そしてくるくる回りながら、お互いを撃ち合い始めた。

「ち～ちゃん♪　ブリュンヒルデとして、二人をどう評価する？」

束は戦闘から視線を千冬に向ける。

しかし当の千冬は、眉を潜めたまま何か考えているようだ。

質問に答える気配がない。

「ち～ちゃん？　お～い、ち～い～ちゃ～ん～☆」

耳元で少し大きな声で呼ぶが、千冬は反応しなかった。

少し呆れながらも、束は千冬を呼ぶことをやめる。

（ま、白騎士の事だろうね……。）

束は千冬が何を考えているか理解していた。

白騎士と千冬を回収し終えた後、メンテナンスのために束は白騎士を整備していたときに気がついたのだ。

搭載した覚えがないデータと、束が知る事がない女性の顔。

疲れているのかと思った束は、何度も確認する。

そしてデーターが、白騎士の正確なデーターであることに気がついた。

（……一体何があったんだろうね。）

そう思いながら、束は再度空を見上げた。

４０１　ブルー・ティアーズＶＳストライク（後書き）

なんでなんでなんで！

なんでこの束さんより、ち～ちゃんがヒロインの二次創作が多いのかな！？

グッズだって確認してないけど、あるよ絶対！！

それなのに、私は無いってどういうこと！？

同人誌だって、私よりち～ちゃんの方が多いってっ！！

はいっ、そこの君！

今同人誌という言葉で反応したけど、別にエッチな薄い本のことじゃないからねっ！

普通の本でだからね！

とりあえず！

この束さん作品よ、もっと多く作られろぉぉっ！！

４０２　甲龍の変化（前書き）

甲龍もＩＭＳ化。

一応、甲龍っぽいと思うかな？

Ｐ３

４０２　甲龍の変化

ローズが肩を回してから鈴を見る。

甲龍を纏い、既にＩＭＳの初期設定のモニターが出ている。

ストライク同様に「ＯＫ？」としか書かれていないモニター。

「これを押せばいいのね。」

「そうだ。」

鈴の問いに答えはのはラウラ。

ラウラもまたシャルロット同様に、甲龍の改修後のテストとして戦闘した。

今鈴がいるアリーナには、ローズとラウラの他に箒とクラリッサがいる程度だ。

一応教員はいた方が良いという結論により、セシリアの方には束と千冬、鈴の方にはクラリッサがいる状態だ。

「じゃ、押すわよ……。」

鈴が震えながらも、ラウラを見る。

「……。」

何も言わずに頷いたのを見て、鈴は目を細めながらもモニターに手を触れた。

その瞬間に甲龍は光に包まれる。

そして一瞬のうちに甲龍がいた場所には、白をメインとし青をサブにしたカラーの機体が、そこに立っていた。

背中には以前フォビドゥン相手に使用した大剣、タクティカルアームズが変形された状態でマウントされている。

≪ＩＭＳ－１０　ＭＢＦ－Ｐ０３　ｓｅｃｏｎｄ　Ｌ≫

束が作り上げているＩＭＳ－ＭＢＦ－Ｐシリーズの３号機。

１号機はリリィが巫山戯た場所に保管したため、束は知らない上に手元にはない。

２号機は使用するＩＳと新規システムの調整等で、現在解体凍結中。

そしてその３号機目が、甲龍に搭載されたＩＭＳとしての機体。

「……機体識別、ＭＢＦ－Ｐ０３……。　名称、アストレイブルーフレームセカンドリバイ。」

クラリッサがそう言うと、鈴はブルーフレームの腕を何度も動かした。

「これが……、ＩＭＳ……。」

「そうだ、ＩＳを超える技術が詰め込まれた新機体だ。」

鈴の呟きに、ラウラが誇らしそうに返答する。

喋り方は何時もと変わらないが、少しばかり声色が高い。

「それがお父様とお母様の作った、最高傑作の機体だ。」

そう言うと、ストライクノワールを起動させる。

「その機体は、ＭＣＦシリーズのオプション装備のスペック検証機という役割がある。　その分、武器は豊富だ。一応局地戦仕様機だから、甲龍同様の戦闘は可能だろう。」

「……陽電子破城砲、ってコレ！？」

鈴は機体スペックを見て唖然とした。

陽電子破城砲。

陽電子は電子と反応すると、ガンマ線を発し対消滅という形で消滅する。

それをローエングリンは放つのだ。

地形を変えてしまうことが簡単なぐらいの威力を誇っている。

だが逆に有害なガンマ線を発し、生物の生殖細胞を破壊するうえに、ＤＮＡを破壊し細胞のガン化を促す、環境汚染以上の兵器だ。

撃った後、射程範囲で生活することは不可能なほど、陽電子破城砲は危険である。

実をいえば、ＩＳ学園の防衛システムに陽電子破城砲の建造が項目に入っていた。

しかし建造は常識的な判断により、取り消されている。

サイズは大型で、アリーナ１つ分の面積で１基製造できる程度。

だが束はそれを、ＩＳサイズまでグレートダウンさせたのだ。

危険度は変わらないが、それほど危険な兵器を代表候補性とはいえ学生に持たせることが信じられない。

鈴はそう思っていた。

「……ああ、私もどうかとは思ってはいる。」

ラウラは鈴が見ていた陽電子破城砲のスペックを見て、そう言葉にした。

しかしラウラは、さほど心配していない。

少しばかり眉を曲げ、鈴はラウラを見る。

「だが、その陽電子破城砲には欠点がある。」

「……欠点？」

自慢げなラウラの表情に、鈴は余計に混乱した。

「欠点て、何……？」

鈴はラウラに問いかける。

自分の親が作ったものが誇らしいのか、少し浮かれて解説している気もするが、気のせいだろう。

そんなラウラが間を持たせ、鈴の問いに答えるために口を開いた。

「……エネルギーが足りないことだ。」

４０２　甲龍の変化（後書き）

一応、タクティカルアームズは２つに分けて、使えるしね。

丁度いいんじゃないかな？

あと、実弾兵装以外も入った。

種類も豊富。

鈴のお望みどりの期待が出来上がりました、とさ。

４０３　アストレイブルーフレーム（前書き）

そろそろ連続更新が止まりそう。

……生産しないと。

Ｐ３

４０３　アストレイブルーフレーム

鈴はラウラの言葉に唖然としていた。

「……え、足りないの？」

「ああ、足りない。」

「……。」

アストレイブルーフレームを収納し、鈴は再度モニターを見直した。

陽電子破城砲、ローエングリンランチャー。

その火力を最低でも出す場合の使用エネルギーと、機体エネルギーを比べる。

数分ほど確認し鈴は溜息をついた。

「……足りてないわね。」

モニターではアストレイブルーフレームのエネルギーを、ローエングリーンランチャーが完全に上回っていた。

これではローエングリーンランチャーにエネルギーを溜めても、先にアストレイブルーフレームの方がエネルギー切れを起こしてしまう。

大出力なのにエネルギーをすべて回しても足りない、矛盾をはらん

だ兵器。

鈴は一瞬、束の頭が大丈夫か心配した。

「……これ、必要ある？」

ローエングリーンランチャーのモニターを指さし、鈴はラウラに問いかけた。

だがストライクノワールで顔が見えないとはいえ、ラウラは不敵に笑み答えるために口を開く。

「何が言いたいのかよくわかるが、これについては解決策がある。」

その言葉と共に、ノワールのモニターが展開された。

1機のカタログスペックが、そこには書かれている。

「……紅椿？」

そこには鈴もよく知る、箒の愛機が事細かい詳細だけで表示されていた。

「そうだ。　ローエングリーンランチャーの使用は、紅椿との使用を前提に考案された武器だ。」

「ワンオフ、アビリティー……。」

絢爛舞踏（けんらんぶとう）。

フリーダムの動力を模倣した、エネルギー増幅能力。

その能力はエネルギーを生み出し、自身や他者に壌土することができる。

だが未だ一回しか成功はしておらず、絢爛舞踏は自由に使えるわけではない。

絢爛舞踏のエネルギー供給を前提に考えているが、当の絢爛舞踏が使用できない状況では、ローエングリーンランチャーを持つ意味はないのだ。

なぜ必要なのか、鈴は考え始める。

「これは保険だ。」

鈴はいろいろと考えるが、ラウラが先に答えを言う。

「大規模な殲滅戦闘行為をされた場合に、陽電子破城砲を使用できたほうが良いだろう。……そういうことだ。」

「……つまり私に、移動型対艦隊主砲になれっていう事……。」

「……そうだ。だが、その武器だけしか使うなとは言ってないだろう……。」

そもそもアストレイは、基本格闘戦試用だ。

その機体が後方で戦うのは最善ではない。

前線で戦闘することが最善だ。

「……戦況に応じて、装備を変更しろってことね。　ストライクみたいに……。」

そう言うと機体の一部を展開し、折り畳み式の砲身を持っている大型ビームライフルらしきものを展開した。

スナイパーパックの専用武器だ。

長距離射撃用兵装のため、アストレイブルーフレームに苦手な距離はないだろう。

タクティカルアームズは近距離から中距離まで、更にビームライフルやビームサーベルなども、アストレイブルーフレームには収納されている。

完全に全距離対応の機体だ。

「お前が望んでいたとおり、対ＰＳ装甲機対策はされているだろう。……あとは、お前がどう動くかだな。」

その言葉を残し、ラウラはストライクノワールのブースターを吹かし後方へ飛ぶ。

手には対艦刀を持ち、切っ先を鈴に向ける。

それを見て、鈴は再度アストレイブルーフレームを展開させた。

「……お手柔らかに。」

そう言いながら、タクティカルアームズを構えた。

「慣らしだが、本気で来い。」

「わかってるわよ。」

その言葉を言い切ると、2機はバーニアを更かし接近する。

イグニッションブースト以上の速度を出し、アストレイブルーフレームとストライクノワールは、アリーナ中央でぶつかった。

４０３　アストレイブルーフレーム（後書き）

特になし。

深夜になると、アリアが冷たいです……。

（´；ω；｀）

篠ノ之リリィ：立ち絵

＞ｉ３８６３０―３０４５＜

公式リリィイラストにしようかな……。

というかこれだけ画風が変わると、本当に私が書いたのか疑わしくなってしまう……。

でも私。

恐らく目のハイライト消せば、ローズに……。

＞ｉ３８７９１―３０４５＜

なったね。

このイラストにいくら出す？

４０４　傷つくことは誰のせいでもない（前書き）

肩がこる……。

書く気失せる。

Ｐ３

４０４　傷つくことは誰のせいでもない

城付近の木々の中、複数の人影がいる。

未来のリリィは気配を隠しながら、その集団を眺めた。

銀の髪を短く揃えた女性を中心に、多くの女性がその場に集まっている。

服装は災厄の中で、王に使える者達のみが着ることを許されている、王直属部隊専用の服装だ。

つまり木々に隠れるように集まっているものは、リリィの部下である。

（懐かしい顔ぶれだな……。）

そう思いながら、未来のリリィは全員を見た。

気がつかれてないのか、全員の表情は固く若干くらいままだ。

「……ツヴァイク副隊長。　我々はいったいどう……。」

「……。」

一人の女性が、銀の髪を短く揃えた女性に尋ねる。

その容姿は眼帯をしていないが、紛れも無くクラリッサだ。

シュヴァルツェア・レーゲンがレーゲンとしているのだから、シュヴァルツェア・ツヴァイクがツヴァイグと呼ばれいてもおかしくはない。

全員静かにツヴァイクを見る。

（……そう言えば、ここで何かあったことしか知らないんだよな……。　別の私の記憶とはいえ、もうちょっと鮮明に記憶していて欲しいよ。）

気がつかれないように木に隠れ、様子を見る。

「副隊長！」

ツヴァイクに数人が押し寄せる。

だがツヴァイクは動じず、冷静に口を開いた。

「……今はまだ動けん。」

その場にいる全員が唖然とした。

「これだけの事をしたのだ……。　何らかのアクションを起こすはずだ。」

その言葉は事実に一番近く、説得力があった。

「……アクションをおこした瞬間、私たちも行動する。　王が戻ってきてもそうだ……。」

全員が納得し、落ち着いていった。

この点を見ればツヴァイクは優秀だろう。

しかし災厄とはいえ、ツヴァイクには欠点はある。

妙に偏った思考をしていることだ。

兎は空を見上げたまま、リリィに問いかけた。

「……ねぇ、貴方はなんで、……そんなに傷付くの？」

その言葉をリリィは知っていた。

災厄になる前、人間だった頃に夢の中で聞いた言葉だ。

周囲のレンガと兎しか見ることができなかった夢。

（……そうか、あの夢は私の記憶だったんだ。）

リリィはその場にして、ようやく気がついた。

空を見ていた兎は、その視線をリリィに移す。

「貴方は、私がいるから傷ついてるんでしょ？」

そう言いって、寂しそうに微笑んだ。

「貴方は偉い立場にいるのけど、やっぱ似合わないよ？」

事実リリィは一国の王であるが、対する兎は村娘だ。

兎の言うとおり、立場上に合わないだろう。

「私の事は、忘れなさい。」

兎は大きな袋を持ってリリィに背を向けた。

「それが、貴方のため……、私の為でもあるんだから。」

「……。」

「だから……、さようなら……。」

そして兎は、リリィから離れた。

ゆっくりと村の外に向かっていく。

しかし、リリィが兎と別れるはずがない。

脚部スラスターを一瞬展開、起動させ兎を後ろから抱きしめる。

「っ！？」

もちろん兎は目を白黒させて驚いた。

後ろから抱きつかれた衝撃か、兎は持っていた袋を落とす。

しかし兎は気にしなかった。

リリィが抱きついてきたことに驚愕し、気にする余裕がなかったのだ。

「……私がいつ傷ついた。」

兎が唖然とする中、リリィはそう呟いた。

「……。」

「勝手に思い込むのは自由だよ、だけど思い込みすぎ……。」

兎の耳元でリリィは呟く。

独り言のように、ただ言葉を言い続けた。

「兎が何者かはどうでもいい、コレだけは言わせてもらうよ……。」

次第に兎を抱きしめる腕の力が強くなる。

「私は兎を愛している……。」

誰もいない村に、リリィの声が響いた。

４０４　傷つくことは誰のせいでもない（後書き）

未来のリリィは、何処に行っていたかって？

リリィＶＳリリィ↓元の時間軸に戻る↓ミッドチルダ（なのは）↓飛ばされる↓過去に戻る（今ここ

別作品で未来のリリィの活躍が読めるよ。

なのはＳｔＳだけど……。

そろそろ、更新しないとな……。

どういうふうに進めようか。

４０５　城の中（前書き）

５００万アクセスありがとう～♪

本当にありがと～う！！

Ｐ３

４０５　城の中

白騎士も城内が騒がしいことに気がついていた。

自分でも気がつかないくらいに、城内の気配に敏感になっていたのか、愛剣を保持し部屋の死角になる場所へ移動する。

部屋とはいえ王の自室。

やや広い程度で、死角になる場所などさほどない。

だが白騎士はドア付近に移動し、身を潜ませた。

「……っ！　……！！」

ドアの近くに移動したため、部屋の外から聞こえる声が白騎士に大きく聞こえる。

だが聞こえるだけで、何を言っているかは理解できない。

それでも何かに焦っている感じは理解できた。

「……一体何が。」

リリィがレーゲンの言葉によって、白騎士がいる部屋から飛び出した数十分後に、このような異変が起こり始めたのだ。

リリィが関わってる事は、安易に想像できる。

白騎士は愛剣を腰構えにし、殺気を抑え続けた。

足音が白騎士に近づいてくる。

「……。」

そしてドアの前で止まると、低い金属音が壁越しに響く。

剣を握り直し、ドアが開かれるのを待つ。

そして勢い良くドアが開いた瞬間、２機の機体が流れ込んできた。

≪ＺＧＭＦ－１０００　ザクウォーリア≫

≪ＺＧＭＦ－６０１Ｒ　ゲイツＲ≫

両機とも近接戦闘用武器を保持し、入ってきた。

しかし、最初から持っていたのが問題だっただろう。

白騎士は敵と判断し、押さえつけていた殺気を放つ。

「っ！？」

「誰……。」

そういった瞬間に白騎士の刃は、ゲイツＲの胸部に突き刺されていた。

特殊装甲の搭載されてない災厄でも、流石に剣激は無効化できる。

しかし突きになると、特殊装甲を搭載していても無理なのだ。

白騎士はそれを知らずに、災厄に刃を突き立てた。

刃が貫通し、装甲を壊す。

「……ぎ、さま……。」

死にかけているゲイツRは、そう言うと突き立てられた刃を抜かれ、床に崩れ落ちる。

ザクウォーリアが動揺している隙に、白騎士は刃を翻し突き刺す。

（……あっけないモノだな。）

そう思いながら、室内に置いてあった大剣と甲冑を付ける。

「無事ですわね。」

レーゲンの耳に声が響く。

少女のような女性から目を離し振り返る。
そこには、如何にもというようなお嬢様がいた。
青い装甲を腕に纏い、牢屋の鉄格子を強引に広げる。
「……リリウムか。」
「ええ。」
レーゲンの問いに、リリウムは短く返した。
自ら広げた鉄格子に身を通し、レーゲンに歩み寄る。
「外は大変なことに……、あら？」
リリウムがレーゲンに説明していたが、レーゲンの後ろにいた女性に気がついたようだ。
不思議そうに女性を見つめる。
レーゲンの服を被せられ、虚ろな目で虚空を見続ける女性をみて、リリウム唖然とした。
「どうしてここに……。」
考えても理解できず、リリウムはレーゲンに聞く。
「……わからん。」

レーゲンはそう言うと、再度女性を見た。

「だが私が把握してないことだ……。　恐らく組織的な犯行だな。」

「……そうなると、この参上は……。」

「恐らく、関係があるだろうな。」

そして同時に天井を見る。

「まずは脱出が先だ。　リリウム、王直属部隊が何処にいるか知っているな？」

「……いいえ。」

「……。」

リリウムの答えに、レーゲンは米神を引く付かせる。

知ってるとばかり思って聞いたレーゲンだが、そもそも王直属部隊でもないリリウムが知っている訳がない。

「……はぁ。」

溜息を漏らし、レーゲンは女性を抱き上げた。

お姫様の様に抱き上げると、レーゲンが思っていた以上に軽かったのか、すんなり浮く。

（……満足に食事も与えてないのか。）

心で葛藤しながら、リリウムが広げた場所から出た。

４０５　城の中（後書き）

という訳で、リリウム……。

わかる人は理解できだろうね。

これが、ＩＳでなんの機体か。

……喋り方が違うのは、一応作品がＩＳだから。

あの一人称がリリウムのほうがよかった？

あのリリウム・ウォルコットのほうがよかった？

ＡＣ？が出るまでＡＣｆａで肩慣らし中。

相変わらず弱いのは、仕方がないこと……。

４０６　共に歩むと言う告白（前書き）

鬱ってる。

そういう状態です。

Ｐ３

４０６　共に歩むと言う告白

白騎士は部屋のドアを閉め、テラスに移動する。

そこから国内を見渡すと、騒がしいのは城内だけのようだ。

これならば、外に出たほうが安全だろう。

「……。」

白騎士は地面に目を向ける。

５０ｍ程の高さだ。

普通なら誰もが、テラスから降りるという方法は取らないだろう。

だが白騎士は腰に大剣を保持させ、愛剣を使い柔軟体操をした後、手に愛剣を持ったままテラスから飛び降りた。

数十分前にリリィが飛び出たように、白騎士もテラスから飛び出る。

問題は白騎士が人間であるということだ。

リリィは災厄でありフリーダムであるからこそ、大気圏内航行が可能だが、白騎士はただの人間。

幸運に恵まれただけの人間なのだ。

その白騎士が５０ｍの高さから飛び降りるのは、自殺行為以外ない。

白騎士の身体が地面に向かて落ちていく。

「……ふっ！」

しかし白騎士は大剣に軽く手を当てることで、大剣の重さを利用し空中で体勢を立てる。

そしてそのまま地面に片膝を立て着地、威力を殺すために地面を転がった。

大剣は利用した後空中で外したのか、転がるのに邪魔ではなく、白騎士が着地した場所から少し離れた場所に突き刺さっている。

「……気がつかれてないな。」

そう呟き、大剣を引き抜く。

「雪片・真打に傷は……、無いな。」

白騎士はそう言うと、後腰に大剣を収める。

実を言うと、白騎士のもつ剣は災厄に天敵に等しい。

雪片。

それが白騎士が持つ剣の名前だ。

大きな大剣が雪片・真打と呼ばれ、刀のような片刃の剣は雪片と呼ばれる。

それがＩＳの中でどれだけ特殊な武器になるかは、今の白騎士は知らないだろう。

「……さて、とりあえず逃げるか。」

そう呟きながら、白騎士は木々の中に身を隠していった。

リリィの告白に、兎は何も言えないでいた。

ただ抱きしめられ続ける。

柔らかな兎の肌に、リリィの腕が触れ続けた。

痕が付くのではないかと思えるほど、リリィは強く兎を抱きしめる。

遠くには血で赤く彩りをつけられた民家があるのに、リリィと兎の周囲だけ空気が違う。

残酷な光景をよそに、リリィは束を抱きしめ続けた。

「……。」

「……お願いだから、さようならって言わないで……。」

本当に悲しそうな声でリリィは言う。

愛する人に言われて悲しくならない者はいない。

兎を抱きしめてはいるが、その顔はほぼ俯いている。

「私は、兎と離れたくない……。」

リリィの頬をつたい、兎の方に涙がこぼれ落ちる。

兎の手が、ゆっくりとリリィの頬に触れた。

「……泣いてくれるんだ。」

兎はそう言うと、目を閉じた。

「……私は嫌われ者だよ。」

「……。」

「いや、嫌われたいんだよ……。　愛されること、触れられること……。　そして近くにいる人が離れていくことが……。」

「……。」

「近くにいればいるほど、きっと別れの時が辛い……。」

その言葉は子供っぽい理屈ではあったが、兎の思いをはっきりとリリィに言っていた。

「……貴方は私から、離れていかないんだね……。」

「……うん。」

兎はリリィの問いを聞くと、少しだけ嬉しそうに微笑んだ。

首を傾け、リリィの頬と兎の頬が触れ合う。

リリィの抱きしめる腕が緩まる。

「なら、私と一緒にいてくれるの……？」

「うん。　……うん。」

リリィは何度も頷く。

頬を触れていた手を離し、兎は抱かれながらも振り返る。

そしてリリィを正面から抱きしめた。

「……本当に。　本当に一緒にいてくれる……？」

そう言いながら、兎もリリィの腰に手を回す。

「……うん。　兎が死ぬまでずっと……、ずっと一緒に居てあげる……。」

そのリリィの言葉に、兎は少しだけ涙を流す。

嬉し泣きだ。

お互い頬を少しだけ濡らしながら、抱き合い続けた。

４０６　共に歩むと言う告白（後書き）

特になし。

ＡＣ？はまだか……。

鬱が続く……。

４０７　亡国企業で（前書き）

クローディヌの口調が定まらない今日。

少し頭いたいかな？

Ｐ３

４０７　亡国企業で

とある施設にオータムのアラクネと、クローディヌのグレイプニールは着地した。

亡国企業だからこそ、その施設がアジトだと思うかもしれないが全く違う。

本拠地ではないが、降り立った施設は亡国企業が所有する物だ。

「ん、帰ってきたのか。」

そこに近づく影があった。

「……スコール。」

オータムがそう言うと、二人のうち一人が少しだけ微笑む。

「お疲れ様、オータム。」

「あ、ああ……。」

オータムは歯切れが悪く返答する。

その間にもエムはクローディヌを警戒しいていた。

もちろんクローディヌは気にしない。

「……で、貴方がクローディヌ・サミナードね。」

スコールがそう言うと、クローディヌは頷く。

「ならば取引内容は分かっているわね。」

「ああ……。」

相互理解の会話ではなく、事務的な会話。

スコールにとってクローディヌは、都合の良い人間なのだろう。

もちろんクローディヌにも、それは当てはまる。

薬とＩＳ技術。

等価交換かどうかはわからないが、お互いの利害が一致している。

「薬を先に渡せ、すぐ使う……。」

「……落ち着きなさい。　ほら、これでしょ。」

クローディヌはスコールを急かし薬を受け取る。

水を飲まずに、クローディヌは胃に流し込む。

さらにクローディヌは、唾液で錠剤を流し込んだ。

「……。」

少し立ち、クローディヌは一息つく。

「……ふぅ。　なら整備場に案内してもらおうか、さっさと改修作業がしたい。」

しかしスコールはクローディヌに銃を向ける。

全員何も喋らない。

「……魂胆はわかるけど、止めたほうが得策だ。」

「そう思う理由が知りたいな。」

スコールはそう言うと銃口を軽くそらす。

説明を急かしてるのだ。

クローディヌは少しだけ唇を歪め、答えるために口を開いた。

「……簡単なこと。　私の心肺停止、それに準ずる全器官の負傷に対し、グレイプニールのコアは連動してる。」

「っ！？」

「……。」

「私の器官や、意識が確認されないとグレイプニールは世界共通エマージェンシーコールをコアネットワークに流し、自爆する。　意味わかるかな？」

エマージェンシーコールとは遭難信号という事だ。

これぱかりは全世界共通なものが多く、ＩＳに関してはエマージェンシーコールを起動すると、一般の回線とは別にＩＳ自身がコアネットワークに位置情報を流す。

搭乗者はそれを知らず、別のＩＳ搭乗者は通常回線から届いたエマージェンシーコールだと思い受け取る。

だがこれは搭乗者とＩＳの相性が、そこそこなくては起きない現象だ。

さらにクローディヌの言っていることは、その相性が最高位の高さを持っていないと出来ない事。

ついでに言ってしまえば、そのことはリリィと束だけしか知らない。

クローディヌが知る事はありえないのだ。

「これでもフランスの天才代表候補生、と言われるぐらいだからな……。」

「愛機の改造もちゃんとしてる、と……。」

「……そういうことだ。」

スコールは銃口を、更にクローディヌに近づけた。

「嘘ということもあるわ。」

「……ＩＭＳが作れると言ったら、お前は私を殺せない。」

「っ！」

世界でＩＳを１から製造できるのは２人であり、その２人しか作れないものがＩＭＳだ。

それをクローディヌは作れると言ったのだ。

驚愕しないものはいない。

「……で、引き金は弾けるか？」

「……。」

クローディヌの言葉に、スコールは何も言えない。

オータムも、エムもただ見るしかできなかった。

そんな中で、クローディヌだけ優位に立ったことを確信し、口元を歪める。

「どうする？　最高の兵器を欲するために私を利用するか、今私を撃ち全て無くすか……。」

「……ちっ！」

舌打ちすると、スコールは背を向け離れていく。

あっけにとられながらも、オータムとエムはそれを眺めていた。

４０７　亡国企業で（後書き）

最近同じことしか言ってない気がする。

歳かな？

まぁいい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5475s/

世界とISと名もなき者へ

2012年1月15日01時05分発行